日本戲曲全集
第三十八卷

現代篇第六輯

東京
春陽堂版



「金色夜叉」 貫一・花柳章太郎



「金色夜叉」
貫一・花柳章太郎
お宮・水谷八重子



「金色夜叉」 二葉のお宮・澤田の荒尾



「乳姉妹」花柳の君江



「琵琶歌」伊井蓉峰の武田眞次・喜多村緑郎の里野



「婦系圖の内」湯島の境内　伊井蓉峰の早瀬主税・喜多村緑郎のお蔦



「想　夫　憐」藤澤淺次郎の岩崎一彦・小織桂一郎の小泉修三



「不如歸」 伊井の武雄・喜多村の浪子



「戀ごころも」 花柳の美代子



「戀ごころも」 喜多村の松子

日本戯曲全集　第卅八巻　目次

新派脚本集

表紙文字執筆（三村竹清）
箱文字執筆（恩地孝四郎）

新派脚本集

己が罪 （三幕七場）

菊池幽芳原作

序幕

第一場　東京會館結婚披露會

櫻戸子爵家結婚披露會。東京會館の大ホール、華美を極めたる裝置。そちこちの置物、植木などの一つ一つにも、かうした社交界特有のあるものが見える。幕あく。

（と、舞臺暫く空虚。と、一人の眞新しい櫻戸家と染出した半纏を着た男が、下手から間誤〳〵しながら出て來る、そしてあちこちと覗き廻つて居るが、どうも分らないと云ふこなし。）

男　どうもこいつは弱つちまつたな。何處が入口だか、出口だか分りやしねえ。呼んで見ようかな。待てよ、だが誰か人が居さうなもんだが、然しまア滅多に大聲をあげていゝもんだか、何んだか、（と傍のクッションに坐つて見るがどうも氣が落着かない、何もウロ〳〵する）弱つちまつたなア。（と又坐り直して腰の煙草を出して、あわてゝ藏つてしまふ）不自由なもんだね。どうも此れ丈の世帶を張つてやがツて誰も通られえなんて。

（此時上手奥から急霰の如き拍手が起る。と、大勢の貴顯紳士、今日を晴れと着飾つた淑女、さては洋裝の令嬢と思ひ〳〵の粧を凝した一團が、どつと出て來ると、そちこちのソファなどに集ふ。以前の男はそれ等の人の中を縫つて居たが、やがて素晴らしい洋裝の婦人の處へ行つて。）

男　あの、眞に申しかねましたが――。

（と、云ふと洋裝の婦人はプイと横を向いて仕舞ふ。男は本意なげにそのむかふに居た紳士の處へ行くと、その紳士もプイとよこを向いて仕舞ふ。男はまつたく途方に暮れて居ると、それを見兼ねた紋付の老人が來て。）

紋付の老人　君、何かね。

男　へい、眞に申兼ねましたが、旦那は何處に居りませう。
紋付の老人　旦那。
男　へい、手前の旦那です。
紋付の老人　君は一體何しに來たんかね。
男　へい、旦那を探しに。
紋付の老人　どうも分らん。おい、ボーイ〳〵。
（ボーイが出て來る。）
ボーイ　何か御用で。
紋付の老人　うん、どうも、樣子が少し變だ。あちらでよく聞いてくれ。
ボーイ　は。さ君、あつちへ來てくれ給へ。
男　ありがたう存じます。助かりましたよ。へい。
（男とボーイは上手へ去る。）
（そちこちのはなし。）
老紳士　全く暫くお會ひいたしませんでしたな。いつぞや申酉倶樂部でお會ひしたきりでしたな。
中老紳士　さうなりますかな、一年そちこちですな。
老紳士　さうなりませう。そして、やはり、例の方は。
中老紳士　イヤハヤ、どうも相變らず細々とやつとりますわい、どちらかへお旅行でしたか。
老紳士　え、、ちよつと北海道の方迄行つとりましたが、あちらの方は、何と云つても本場だけに違ひますな。市にも活氣がありますし。
中老紳士　さうでせう、何か大きなものでも立ちますか。
老紳士　イヤ、大したものでもありませんが、一つ纏めようかと思ひましてハ、、マア、どうかその節はよろしくお願ひ申しますぢやハ、、。
中老紳士　いや、私こそ——。
老紳士　なか〳〵今日は盛會のやうですな、貴婦人連が、山川侯爵の夫人なんかも見えられとるやうですな。
中老紳士　さやうでした。なか〳〵美々しく斉飾つて綺羅星の如くですかな、——時に最近大分艶聞を伺ひましたが——。
老紳士　いやハ、、とんでもない。ありや、どうも新聞屋が惡いんぢやでハ、。
中老紳士　さうでもございますまい、あなたのお腕前ぢや。
老紳士　お腕前は弱りましたなハ、、。
（兩人笑ふ。）

洋裝と紋付の貴婦人

洋裝の女　いつぞやは、あの帝劇でお目にかゝりましたが大變に失禮をいたしました。皆樣、おさはりもゐらつしやいませんでございますか。御無沙汰をいたして居ります。

紋付の貴婦人　(輕く)　は、あの、本當に失禮をいたしました。

洋裝の女　奧樣あの、眞に無躾ではございますが、來週の木曜日はお差支でゐらつしやいますでせうか。

紋付の貴婦人　(考へて)　木曜日と、午後七時頃からならばよろしうございますが。

洋裝の女　左樣でゐらつしやいましたか。ではあの恐れ入りますが、六時半から音樂會を私の方の主催で開きますので、是非一ツお出まし下さいまして、御批評を戴きたう存じますので、いかゞでございませうか。

紋付の貴婦人　左樣でゐらつしやいますか、どんな方がお出遊ばすのでございますか。あなた樣も。

洋裝の女　はい、末席を汚して居ります。

紋付の貴婦人　左樣でゐらつしやいますか。それは、およろしうございます。あの差支の生じませんかぎり、是非伺ひたいと存じます。

洋裝の女　ではあの、――どうぞ早速御承諾下さいまして。切符は明日にでもお送りいたしますが、どうぞ――。

紋付の貴婦人　は。

洋裝の女　失禮をいたしました。

紋付の貴婦人　御めん遊ばせ。(と、洋裝の女をやり過ごしてから)　あの失禮でございますが、日本音樂協會の方でゐらつしやいましたか。

洋裝の女　いえ、東洋交響樂協會の山本と申します。

紋付の貴婦人　あ、どうもお見外れいたしまして失禮をいたしました。(と向うへ行く)

洋裝の女　(明らかな侮辱と云ふこなし)

(そこへ、又一人の洋裝が來て。)

別の洋裝　あら山本さん、どうかなさつて。

洋裝の女　いえ、えゝ。ねえ双葉さん、あの山川侯爵の夫人て隨分ツンとした方ね、私尠からず氣持を惡くしてよ。

別の洋裝　まア、どうして、そんなに怒つてゐらつしやるのよう。あの女はあゝ云ふ人なんですもの、何枚おツつけて?

洋裝の女　え?　何枚て、あんた。

別の洋裝　あら、ぢや何にもならないぢやないの。あんな人は澤山お金があるんですもの二十枚や三十枚買はせても平氣な事よ。あなた、しつかりなさいよ。

洋裝の女　さうねえ。だけどわたし――何だか、今度あなた行つて下さいな。お願ひよ。

別の洋裝　あら、ごらんなさい、私未だこの通り、そツくりしてるのよ。

洋裝の女　まア、仕樣がないわねえ。

別の洋裝　本當にねえ。

脊の低い男と高い男

脊の低い男　（煙草を出して）恐れ入りますが、ちよつと火を。

脊の高い男　（うるささうに）どうぞ。

脊の低い男　（會釋して）なか〳〵どうも立派な建物でございますなア、どうも。

脊の高い男　さうですな！

脊の低い男　お恥づかしい話ですが、始めて參りまして實に驚きました。實に立派なものですなア――恐れ入りましたが便所は何處でございませうか。

脊の高い男　…………。

脊の低い男　眞に恐れ入りますが。

脊の高い男　ボーイに聞いたらいゝでせう。

脊の低い男　ボーイに、あんたは知らないんですかい。

脊の高い男　なに、だからボーイに聞いたらいゝんだと云つてるぢやないか、分らん男だな。

脊の低い男　もし〳〵も少し何とか口の聞きやうはありませんかね。だから、あんたは知つてるのか、知らんのかと聞いてるんですよ。

脊の高い男　うるさい！

（と、ツカ〳〵と行かうとする。）

脊の低い男　（その手を捉へ）もし〳〵、さう薄情な事を仰有るもんぢやありませんよ。知つてるなら、うるさいと云つた口で敎へたつて損は行きやしますまい。大體あんたは、さつきから生意氣だよ。人に對するには人に對する道がある。

（いつの間にか大勢が皆を圍んで居る。中の紳士が。）

紳士　あ、どうしたんです〳〵、こんな所へ來て。喧嘩などをされると、お互の顏に係はります。どうか、お靜まり下さい。一體どうしたのです？

（大勢居るのに驚いて、高い男にこそ／＼と逃げる。）

脊の低い男　いえ、どうも今の人があんまり不親切なもんで。實に近頃の人間は不親切ですな。

紳士　あんたの仰有る通りぢや。既に日本と云ふ國も變つて來ますな。

脊の低い男　全くです。がいたんに堪へません――あのこの便所はどちらでせうな。

紳士　あゝ、便所かね、あ、お安い事ぢや。さア一緒に被來い、私も行くから……。

脊の低い男　ありがたうございます。お願ひいたします。

友人達

友人A　櫻戸君は一體どうした。さつぱり姿を見せんぢやないか。

友人B　さうさな、一緒に出て來たと思つたが、さうぢやなかつたのか。

友人C　迎へに行かんか、誰か。困るな、どうも何をしてるのか、少し現はれなきや。

友人A　まア、さう云ふな、彼にも用はあるんぢや。

友人C　そりや用は、あらうさ。だが、少し位現はれなきや失敬だよ、我々は何しに來たか分りやせん。

友人A　まア、さう云ふな。然し、なか／＼別嬪ぢやな。

友人B　それ／＼今、僕も云はうかと思つとつたんぢや。どうして、なか／＼の奧さんぢやよ。

友人C　彼には少し勿體ないかな。

友人B　どうだ、君が貰つたらハヽヽ。

友人C　（流石に赤い顏をして）バカなハヽヽ。

（一同笑ふ）

友人A　然し櫻戸の奴も無妻主義を通して來たんぢやが、あの男も變つとるなア少し――。

友人C　さう／＼我々の仲間ぢや、あいつ一人だらう。

友人A　さうさ。いづれも美人揃ひぢやでなハヽ。（Cに）君とこのと、どうぢや。

友人C　そりや、どうして――。

友人A　うん、なんだそれからハヽ、後は云はん方がいゝかなハヽ、處で今後は我々惡友は、當分敬遠されるかも知らんなア。

友人B　そんな事は、かまはんよ。どし／＼行くさ。

友人A　君みたいのに逢つちや、全くかなはんなハヽヽ、然し櫻戸のさつきの挨拶は、ちよつと、うまかつたなア。

友人B　うん、なか〳〵堂に入つたもんだつたな、奴、やり乍ら、俺の顔を見たか、流石に氣がさしたと見えるな。

友人A　さうか、君のも見たか。

友人C　僕のも見たよ。

（此の時、一同が奥を見て居るので、A、B、Cの三人もつり込まれて見ると、そこへ櫻戸隆弘と、環が會釋をふりまきながら出て來る。櫻戸は洋服、環は型の如き儀服を着す。）

友人A　よう、櫻戸君、どうした、何しろ目出度いな。

櫻戸　イヤ、ありがたう。

友人B　さつきから君を待つとつたんぢや、何をして居たんだ。

櫻戸　いや申譯ありません、そちこち引つぱられて居りましたもので。

友人B　なんだ、イヤに改まつてるぢやないか。

櫻戸　まアさう云ふな、今に普通にするからハヽヽ。

友人B　ハヽヽ。

（そこへ一人のボーイが來て。）

ボーイ　只今、かう云ふ方が御面會でございます。

櫻戸　大正毎日新聞、……ぢや、こゝでお會ひいたしませう、どうぞお通しして下さい。

（ボーイは去る。間もなく新聞記者と寫眞班を案内して來て去る。）

新聞記者　初めまして、私大正毎日の××と申します。實は本夕、社長なりが伺ひまして御祝辭を申上げる筈でございましたが、生憎、旅行いたして居りますので、代理に上りました、甚だ恐れ入りますが、お寫眞を一ツ戴かして――。

櫻戸　御丁寧に恐れ入ります、然し、私共――。

記者　イヤ〳〵、どうか社長の命令でございますので、さう仰有らずと。

櫻戸　さうですか、ではどうぞ。

新聞記者　奥様も一ツ、お並び願ひまして。

環　でも、わたくし――そんな。

友人A　まア〳〵そんな事を云はれず。

（環は隆弘に並ぶ、一同沈默。撮し終る。）

新聞記者　どうもありがたう存じました。失禮します。

（と、新聞記者、寫眞班は去る。）

（この間に大半は下手奥のダンス場へ行く、この時ダンスが始まつたと見えて、賑かな樂の音、足音などが

聞えて來る。）

友人Ｂ　櫻戸君、少し、あつちで踊らんか。

櫻戸　いや、どうぞ、今後から參ります。

友人Ｃ　ぢや待つてるからね。

（と、一同は兩人を殘して去る。）

（間。）

隆弘　環さん、疲れたかね。

環　いゝえ、別に、あなたこそ、お疲れになりましたでせう。

隆弘　いや、私はそんな事はないが、あんた少し熱でも出たか、火熱つてるやうぢや。

環　いゝえ、そんな事はございません、皆樣は本當に御親切な方ばかりでございますね、私本當に嬉しうございますわ。

隆弘　いやハヽヽ、時にお父さんは、どうなさつたのか。

環　さき程、お邸の方と話して居りましたが。

隆弘　あ、さう、それからね環さん、明日の晩あたりから湯河原の方へ少し行かうと思ふが――。

環　は。

隆弘　あつちの方は、氣候もよし、氣が進まないかね。

環　いゝえ、結構でございます。

隆弘　ぢや、さう云ふ事にしませう。

（此の時、若い男と女が上手から下手へ、ひそかに忍ぶやうに出て來て、櫻戸とちよつと顏を合せると、その若い男は非常に驚いたやうに、そゝくさと下手へ歩み去る。）

環　まアあの方々は、どうなさつたのでせう。

隆弘　仕方のない人達ですよ。

環　さう仰有いますのは。

隆弘　イヤ、ハヽ、環さん、そりや聞かん方がいゝ。

環　えゝ、でも何んでございますか、あなたの御存じの方でゐらつしやいますやうでしたが、お顏を見ると、隨分お驚きになつたやうでしたが――。

隆弘　いや、驚く譯があるのですよ。

環　まアそして、どんな譯でございます。

隆弘　いや、ねえ、話しませうか。

環　えゝ。

隆弘　いや、やめませう。

環　でも――。

隆弘　さうですか、あの男はね、丁度私の遠緣に當る者な

んですがね、少し性癖が悪くて道ならぬ事をして家出をしたんですが、どうして今夜こゝへ來ましたのか、或は外の用で來たのかも知れん、私とは眞面に顔は合はされない男なんですよ。

環　まア、さうでございますか、お氣の毒でございますこと。

隆弘　そりや、あゝして大手を振つても歩けない所を見ると可哀さうは可哀さうですが、――私は別に何とも思つちやゐませんがやはり向ふは身が退けると見えるねえ、環さん、人間なんてものは祕密を持つちや、おしまひだねえ。

環　(胸を突かれたが如く)　さうでございますわねえ。

隆弘　ハヽ、馬鹿に話が、しめッぽくなつてしまつた。どうした、環さん、氣持でもわるいか、顔色がよくない、え？

環　いえ、大丈夫でございます。別に何ともございません。

隆弘　さうかね、それならいゝけど。

環　そして、その方は、どんな事をなさいましたのですか。

隆弘　おや、未だその續きかなハヽ。

環　えゝ、でも――。

隆弘　まア、古くさい言葉で云へば、不義とでも云ひますかな。

環　まア。

隆弘　ハヽ、私は物事の祕密と云ふ事は大嫌ひで、過去もこの主義で通して來たし、これからもこの主義で行きたいと思ふ。ねえ、環さん、祕密と云ふ事さへなければお互の心と心がピッタリと摺り合ふ譯だ、それで物事は充分だと思ふ。それ以上を望むから、過ちが起る。こんな風だから私のやうな人間は、ともすると少し馬鹿になる事もあるし、實際馬鹿かも知らんが――まア馬鹿は馬鹿なり考へてもゐるし、まアそれでいゝ譯だ。ねえ、あなたはたゞ、私と云ふものを信頼して戴きたい、それだけを考へて居て下さつたら私は、それで結構です。いづれいつか、一度ゆつくりこの事は云ひたい話したいと思つて居ますが、何だか變な事から云つて仕舞ひました。環さん、おや泣いてるのかね、え、どうした、どこか氣持でもわるいかね、それとも私の云つた事が氣にでも障つたのかね。

環　は、はい、――。

隆弘　え、どうした？　氣に障つたのかね。

環　いえ、とんでもございません、あんまり勿體なうございます――。

隆弘　アハヽ、なアーんだ、勿體ないなぞ、夫婦ぢやないか、そんな他人行儀な事は、よしにして、さ、さう氣が滅入つちや困る、少し隣へ行つて踊つて來よう、さ、少し賑かな空氣に入ると、又氣持を取返すかも知れん、さ行かう、行きませう。

環　え、でも、あなたどうぞお先へお出で遊ばして、私、も少し此處に靜かに居たうございますから。

隆弘　さうかね、それなら強ひて云はないが。

環　どうぞ、お先へ。

隆弘　ぢやよくなつたら、直ぐにゐらつしやい。待つてゐますよ。（行きかける）

環　はい、――あの、あなた。

隆弘　なにか用かね。

環　いえ、あの……どうぞ。

隆弘　ハヽヽ。（と笑つて行かうとする）

環　あの、旦那さま。

隆弘　（戻つて來て）ハヽヽ、どうしたと云ふの――。

環　は、い私――お後から參りますから。

（隆弘今度は行きかけて、自分から振り返り環と目を合はし、微笑んで去る。環ひそかにあるものに悶え、目頭を拭く。）

（傳三これ以前より出て居たが、隆弘の後を見送りつつ出て來る。）

環　（父の姿を見て）お父さん！

傳三　環、ど、どうした、このお目出度い時に涙など出して、え、どうした。

環　は、はい、お父さま、私はどうしたらいゝのでせう。（と、泣く）

傳三　これ〳〵、何んだかサッパリ分らない、どうしたと云ふのだ。

環　わたし、ねえ、お父さん、苦しくて〳〵仕方がありませんのよ、何もかもみんな。

傳三　環、環、何を云ひ出すのだ、これ、滅多な事を云ひ出すでない、お前が若しもの事を云ひ出したら、この場はどうなります。どうなると思ふのだ、よく後先の事を考へて物事は云つたり、したりしなければいかんよ。これ、よく考へてくれなければ、大變な事が起るのだよ、分つてるだらうね、分るだらうね。

環　それは分りますわ、けれどね、お父様、旦那様はあんなに、お優しい方ですし、私、どんなに苦しい思ひをこれからするのかと思ふと、一その事、今の内にみんなお話して、お許しを戴いて置いた方がいゝと思ひますわ。私何もかも打明けたいと思ひます。ね、後生ですから、ね、お父さま。

傳三　これ、環、お前は何と云ふ解らん事を云ふ子になつたのだ、それを云つたら、どうなると思ふのだ、それを云つたらそれこそ、お前はどんな事になる、後生だから云はないで居てくれ。

環　いゝえ、それは、お父さんあんまりと云ふものですわそれはあんまりです。

傳三　イヤ、それは、あんまりかも知れん、あんまりな事だ――が、このお父さんが、あんまりとまで承知で、かうして頼むのだ、よく／＼の事だよ、な、こゝには大ぜいのお客さまが見えてる、いゝかね、大ぜいのお客様がお前が泣いてると聞いたら、一體櫻戸さんはどんな氣持になると思ふ。何事もこゝは默つて歸つておくれ、そして、それは、これからの事にしておくれ、このお父さんを助けると思つてさうしておくれ、ね、分つたな。

環　では、お父さんは私はどうなつてもいゝと仰有るんですか、私に死ねと仰有るんですか。

傳三　なに、誰が自分の子供に死ねなどと云ふものがあるかい、さう駄々をこねるもんぢやない、こゝはどうかお父さんの云ふ事を聞いておくれ、頼む、頼むよ。

環　でもお父さん、それでは本當に御無理と云ふもんですわ……。

傳三　わかつてる／＼それは分り過ぎる程、分つてはゐるぞ！

環　お父さん！

傳三　環！　お前は、では、どうしてもこのお父さんの云ふ事を聞いてはくれないのか。

環　…………。

傳三　よし、では、もう頼まん。

環　あの、お父さん。

傳三　いや、もういゝ、お前がさうこのお父さんの言葉を聞いてくれられないと云ふなら、どうにでもお前の勝手にしなさい！　馬鹿な！

環　あゝ、お父さん！

（と、云ふと、そこへパッタリと倒れる。傳三、氣付

いて驚き、まご〳〵する。）

傳三　環！　しつかりして、しつかり、お父さんが悪かつた！　お父さんがわるかつたよ、た、大變だ！　皆さん大變ですよ！

（と、うろ〳〵する。隣室のダンスの足音、樂の音いよ〳〵はげし。）

（傳三、環を、抱いて周章狼狽。）

——暗轉——

第二場　櫻戸邸内環の部屋

櫻戸邸内環の部屋、小綺麗なる庭に面した一室、下手廻り廊下にて奥に通じ、上手に床の間、押入あり、庭に草花咲き亂る。部屋に立てかけられた屏風、蒲團など、さては置物など、調度一切には何れも眞新しさがある。前場より數時間の後。

暗轉から明るくなると、環はスヤ〳〵と寢て居る。傍に傳三と隆弘が心配相な顔をして坐つて居る。

隆弘　お父さん、どうか、落着いて居りますやうですし、あとは私が見て居りますから夜も更けます、おやすみになつて下さい、どうぞ。

傳三　イヤ、私より、あんたは疲れて居なさる、私にかまはず、やすんで下さい、お醫者もあゝ云つて下さる事だしもう大した事もありますまい。

隆弘　はアいや、全く私の不注意からでして何んとも申譯もございません、あの時私が連れて參ればよかつたものを。

傳三　イヤ、その事でしたら私がおわびしなければなりません、傍に居ながら……どうも。

（此時環昏睡からさめたる如く。）

傳三　おゝ環、氣が付いてくれたか。

環　あ、お父さん、あ、あなた。

隆弘　環さん、わたしだよ、わかるかね。

環　わかりますとも、まア私、どういたしましたのでせう、もう大丈夫でございます。お父様とたしか、お話をして居りましたのね。（起き直る）

傳三　そんな無理をしちやいかん。

環　いえ、もう何ともございません、そしてお客樣方はどう遊ばしましたのでせう。

隆弘　お客は、もうみんなおかへりになつたよ。

環　まア私、ろくに御挨拶もいたしませんで、あの旦那樣、

私もう何ともございませんですから、どうぞお休み遊ばして下さいまし。

隆弘　さうかね、本當に大丈夫だね。

環　大丈夫でございます。

傳三　隆弘さん、どうか私には御遠慮なく――。

隆弘　さうですか、それでは。

（と云ふ所へ女中が出て。）

女中　あのう、只今立花さんがお見えでございます。

隆弘　立花さん、ぢや、こゝへお通しゝておくれ。

（間もなく立花夫妻がやつて來る。）

立花　どうも、飛んだ事でした、お加減はいかゞですか。

隆弘　いや、もう殆んど恢復しました、全く一時は驚かされましたが――。

立花　さうですか、それは何よりです、奥さん、いかゞですか。

環　おさわがせをいたしまして、もう氣分も、ずつとよろしうございます、どうも恐れ入りました。

立花夫人　いゝえ、私共、ちよつとお知合の方とお茶を戴いて居りましたもので、今の今迄、存じませんでしたが、どうも失禮をいたしました。箕輪さん、大變失禮をいたしました。

傳三　いえ／＼飛んでもございません。もう大分よろしうございます。どうも御丁寧に恐れ入ります。

隆弘　叔父さん、病人も落着いて居りますから、あちらでお茶でも召上つて下さい、小母さんも。

立花　いやもう夜も遲いし失禮しよう。

隆弘　さう仰有らず、お父さんも。

傳三　イヤ私は、こゝに居りますから、どうぞあんた。

隆弘　さうですか、それでは御免を蒙ります。

（立花夫妻も會釋をして去る。）

（沈默。）

傳三　環、もう本當に大丈夫かね。

環　えゝ、未だ胸の處が少し變ですけれど、氣分は何ともございませんわ。

傳三　さうか、そりや何にしてもいゝ、お前がハキ／＼してくれないと、どうもお父さんまで氣が滅入つて來ていかんよ。

環　ねえ、お父さん。

傳三　なんだよ、あゝわかつた／＼。

環　なにが、お分りになつたんですか。

傳三　えッ。

環　ねえ、お父さん、私、お父さんに、改めて、伺ひたい事があるんですの。

傳三　何だな、まア、そして、それは、どんな事なのだ。

環　お父さんは、私と云ふ子供を可愛いと思召すのですか、それとも憎いと思召すのでございますか。

傳三　何だか、混み入つた事になつて來たが、どうして自分の娘を憎いと思ふ親が、どこの世界にあるものかな、お前もずゐ分、極り切つた事を云ふもんだなハヽヽ。さ、そんな事を云つてる暇に、ようく、ぐつすりと眠りなさい。

環　お父さん。

傳三　なんだと云ふの。

環　お父さんは、では私を可愛いと思召すのですね。

傳三　あゝ、さうだよ、可愛いからこそ、かうして。

環　さうですか、私を本當にお父さんが可愛いと思召すんでしたら私に、今夜かぎり御離縁を戴いて下さいまし。

傳三　又、それを云ふ、お前は今夜は、どうかして居るのだ、又、さつきみたいに變になつちまつたら、このお父さんは一體どうしたらいゝか分りやしない、一切は、もうあしたのことにして……今夜は頼むから、寢ておくれきつと、どうかして居るのだから。

環　いゝえ、わたし、どうもいたしません、何ともございませんわ、私、今夜こそ本當の、お父さんのお心持を伺ひたいのですわ、ねえ、お父さん、お父さんは、何もかも盲目になれと仰有いましたわねえ。何事も、わしの云ふ通りになつて居ろと仰有いましたわねえ、私は、お父樣の仰有つた通り、盲目になつて馬鹿になつて、此處まで來たのです、此處まで、ぢつと我慢して來たのですわ。それもみんな、あの事の爲なのです、あの事があつた許りに私は、お父樣に御心配をかけた私は、本當に申譯ないと思つて、かうして云ひなりになつて來たのですわ、けれ共ね、お父さん、さつき、ホテルで旦那樣が世の中に祕密を持つた人位、不幸な者はない、祕密を持つちや人間もおしまひだねえと、仰有いましたが、その時の私の心持は、どんなだつたでせう、お父さん私本當に苦しうございましたわ、それはね、丁度旦那樣の御縁家の方で旦那樣にはお會ひ出來ない祕密を持つてゐらした方とお會ひになつたのですわ、私ね、お父さん、それで本當に決心をきめたのです。このまゝ默つてお別れをするか、

でなければ、今迄の一切をお話しして、……譯をお話しすれば、きつと分つて下さると思ひます。きつと、許して下さると思ひます。許して下さるやうな氣がいたしますわ、かうして普通ならばお目出たいと云つてゐる最中に、私のやうな汚れた、涙を見せた女は、一生不幸に終るに極つて居ます。私不幸に終る位の事は何とも思つては居りませんのよ、けれども何にも知らずにゐらつしやる旦那樣こそ、本當にお氣の毒でなりませんわ、私ね、お父さん、自分で安心が出來ません、私自分の心に濟まないやうな氣がしてなりませんのよ。お父さん、私もう涙も出ませんわ、私この通り落着いて居るのです。この通り、どうもしてやしませんわ、ね、お父さん、どうぞお父樣のお考へを聞かして下さいまし。

傳三　………。

環　お父さん、どうして御返事をして下さらないんですの、ね、お父さん、ね。

傳三　今、考へてるんだ。

環　私ね、お父さん、こんなに苦しい思ひをする位ならあの坊やを守つて一生を送りますわ。その方がどんなに幸福だか知れません、例へ父親が……えゝ、立派に女の手一つで育てゝ世の中の人々を、それ見ろと云はぬ許りに立派に育てゝ見せますわ。私を捨てた、あの塚口！……私は立派にあの子を育て上げて、見返して見せます、ええ見せますとも、お父さん、坊やは大きくなつたでせうねえ。

傳三　これ〳〵聲が大きい、環！

環　お父さん、聲が大きいと仰有るの？

傳三　滅多に大きな聲を出しては大變な事が起きるんだよ。

環　いゝえ、かまひませんわ、こゝは私の部室なんです。

傳三　それ、その通りお前は分らない、一體こんな話がこのお邸の人にでも洩れたら、どんな事になると思ふ、お前はその通りのわからずやなんだ、さ、だからお父さんの云ひなりになつておいでと云ふのだよ、分つたか。

環　いゝえ、わかりません。

傳三　困つた奴だ、環、お父さんも、お前と同じやうに苦しいのだよ、お父さんは今迄苦しいなどとは云はなかつた、こればかりも云はなかつたよ、お父さんが、かうして苦しい思ひをするのも誰の爲だと思ふのだ、みんなお前の幸福を願へばこそなんだよ、お前が萬一、萬一だよ、

こゝの家を出ると云ふやうな事にでもなつたら、櫻戸さんはどうなる、イヤ立花さんはどうなる、そして、このお父さんは、どうなると思ふ。それより、お前はどうして暮らして行くのだ、一生獨りでは居られないのだよ、今聞いて居れば、あの子供を育てるとか云つたやうだがさう云ふ事は、なか／＼出來る事ぢやないんだよ、そんな事の出來た例しは昔からないんだ、第一世間體と云ふものがある。こんな事は私がくど／＼と云はなくてもお前の方が、ようく知つて居る筈ぢやないか、もう一足なんだよ、もう一足もう少しお前が辛抱してくれたら、三方四方何事もなく納まるんだ、お前も苦しからうが、辛抱と云ふ事はして置いて惡い事はないよ、お父さんも、こんなに辛抱して居るんだ、お前も、も少し辛抱してくれてもよくはないか……小さいからお父さんの手一つで育つたお前なんだ、お前を一番この世の中で頼りに思つて居るわたしなんだよ、折角からうやつて華族――。

環　お父さん――華族さんが何ですか、それはお父さんの御自分勝手と云ふものです。華族だとか、そんな事をきつとお父さんはお考へになつて居らつしやるから、も少しの辛抱だとか、そんな事を仰有るのです、それは、あんまりです、御自分勝手と云ふもんですわ、私などはどうなつてもいゝのでせう。

傳三　環、お前はどうして、さう物事が分らないんだ！このお父さんの云ふ事が、どうしても分らないのか。

環　（ふと耳をすまして）あ、誰か來ます、お父さん、誰かゞ來ます。

（此の時、女中が出る。）

女中　あの、只今、和田さんと仰有る方が、奧樣にお目にかゝりたいとお出でございますが。

傳三　和田？

女中　あの、房州の方ださうで、漁をなさる。

傳三　あ、作兵衞さんか。

女中　えゝ、さうでございます。その作兵衞さんとか――

環　では、こちらへお通ししておくれ。

（女中去る）

傳三　作兵衞が何しに來たのかな。

環　さア、いづれあの子の事でございませうねえ、何か間違ひでも起つたのではないでせうか。

（と云ふ所へ、房州の漁師作兵衞が出て來る。）

作兵衞　こりや旦那さま、えらく御無沙汰をいたしました

だ、夜分おそくに伺ひまして。

傳三　御無沙汰は私の方で、おわびをしなければならん處です。

作兵衛　とんでもねえ、環さアどうかなさつたゞかね。

環　作兵衛さん、その後は本當に何とも申譯ありません、いゝえ、少し風邪を引いたもんですから、もうよろしいんです。

作兵衛　さうだかね、そりや、よかつたゞな。

環　そして作兵衛さん、あの皆さんはお達者ですか。

作兵衛　ありがたうごぜえますだ、お蔭といゝのは體ばかりでごぜえますよ、アハヽヽ。

環　そして、あの坊やも達者でございませうか。

作兵衛　おゝ、その坊やも達者でな、この頃は、ヨチ〳〵歩き出すやうになりましたゞよ、乳もいゝあんべいに離れやすし、貰ひに行く世話はなくなるし、あの子の事は環さア、決して御心配は要らねえだから、安心してくらつせえよ、この作兵衛が一旦あゝやつて引受けたからにや、是が非でも、立派に育てあげますだで、しんぺいは無用でごぜいますだよ。

傳三　作兵衛さん、あのも少し小さな聲で……

作兵衛　さうでごぜいましたな、こりやわりい事をしたゞ。

傳三　イヤ何もそんな譯ではありませんが、そして、今日は東京へ？

作兵衛　なアに、今日はね、濱の漁師と網元に少しゴタゴタが起つたでね、そんなこんなの用で東京へ來ましたゞが、ちよつくら寄つぺいと思つてね、そつちの用がえらく暇取れたでこんなに遲くなつちめいましたゞよ。

傳三　あ、さうでしたか、それぢや今夜は、こつちへ泊つて行つてもいゝでせう。

作兵衛　め、めつさうもねえ、こんなお邸へ寢て見なせえ、それこそ體が、變挺古になつて明日から仕事が出來ましねえだよハヽ。しかし何にしてもえらく立派な、お屋敷だアな。

環　あの作兵衛さん、そして坊やの名前は何と云ふのでございますか。

作兵衛　名前かね、さう〳〵名前は、いろ〳〵と考へただが、なか〳〵うめいのがなかつたで、たうとう濱の學校の先生樣の處へ行きやしてな、いろ〳〵相談をしましただ、そこでな、玉太郎とつけましたゞよ、いゝ名前でごぜえませう。

傳三　おゝさうですか――

環　あの、玉太郎、まア、どんな子でございませう、可愛らしい子でございませうか。

作兵衛　可愛いにも何んにも、お前さま、見る人〳〵が、あんて可愛い子だんべいと云はねえ者はねえだよ、お蔭さまと育て甲斐があると云ふ譯でごわすよ、だから環さア今も云ふ通りあの子は、きつと丈夫に育てゝ見せるだで、お前樣も立派な華族さまの奥さまになつたゞ、な安心して、何にも昔の事なんぞ、考へねえで、そんな事を苦にするとな、又惡い病氣にとつつかれるだで、今度はお父つあんを安心さして上げるだよ、な、お前も、さうお父つあんにやあんまりよくねえだ、お父つさまにやえらく苦勞をかけたゞから、今度は樂をさして上げにやなんねえだよ、ハ、、。あの子の事はくでいやうだが、必ず〳〵この作兵衛が引受けたで、心配は要らねえだからな、心配ねえだからな、ハ、、、分つたゞか、あに泣く事あるもんかな、ハ、、。

傳三　作兵衛さん、今も實はその事で一もめして居た處なんですよ。

作兵衛　あ、さうだつたかね、ぢや、あしが來てよかつただかね。

傳三　來て下さつたので全く私も助かつたと云ふ譯ですよ。

作兵衛　さうかね、さ、環さア、もう泣くでねえ、みつともねえでねえか、このわし等が云つた事が、そんなにも分つてくれたゞかね。

環　よく分りましたわ。

作兵衛　さうかね、そりや全く有難いだ、よく分つてくれたゞなア、おらア全くうれしいだよ。

環　わたしも、うれしうございますわ。

傳三　さうか、わかつてくれたのか、そりや、わしも何だか、うれしくなつて來たよ。

（と、此の時作兵衛は、改めて坐り直して。）

作兵衛　そこで旦那さま、わし今夜、ちよつくら、お願えがあつて參りましたゞが――

傳三　おゝ、これはどうしたと云ふんです、改まつて。

作兵衛　いや、大した事でもねえだが。

傳三　さ、ですから、どうか私共とあなたとの間柄です、どうか御遠慮などなさらず、何なりと仰有つて下さい。

作兵衛　實ア、どうも少し云ひ難い事だでなア。

環　作兵衞さん、どうか、御遠慮など、なさらずに。

作兵衞　ぢや、——

（この間に傳三何か心にうなづきはて財布を出して、かなり澤山の紙幣を無言のまゝ出す。）

作兵衞　（ぢつと見て）旦那樣これは一體何でごぜいますだ。

傳三　いや、僅少で本當に失禮ですが、どうか汽車賃がはりに取つて下さい。

作兵衞　旦那樣、そりやあんまりと云ふもんだ、あんまりひとを見下したと云ふもんでがすぞえ。

傳三　えつ。

作兵衞　旦那樣、わしや何もゆすりや、かたりに來たんぢやねえだよ、金を貰ひたさに來たぢやねえだよ、やせてもかれてもこの作兵衞は漁師仲間ぢや代表とされてるだ、假りにも人に親切を加へようと云ふからにや、そんな目くされ金に目をくれてるやうぢや親切は出來ねえでおすぞ！　あんまりひとを見下すもんでねえ、え、あんまりそりや情ねえ、仕打ぢやねえだか——わしやこんなでけえ聲を立てたかねえだ、誰が好んで、この夜中、でけえ聲を立てる間抜があるだ。そりや旦那あんまりでがすぞ。

傳三　そりや、どうも何とも申譯もございません、私が考へ違ひをして居りましたので。

作兵衞　これからもある事氣を付けるといゝだ、金はな、この間の時のが澤山あるだ。旦那樣、わしは一こくだで、どうか氣を悪くしねえで下さいよ、わしや曲つた事は大きれいだで。こんな事は他所へは聞えねえからいゝやうなもんだが、若しも聞えたとしたらあゝ作兵衞の奴は東京行くたんびに金をせびつて來ると云はれるだ、わしや、そんな事を云はれるのが辛れいだよ、又お前さんもわしもイヤな思をしなきや、なんねえだ。そんな事なら一そこの事、こんな親切はかけねえ方がいゝちゆもんだ。旦那樣、今でこそ云ふだがわしにも一人の娘があつたゞよ、が、その娘を東京のあるお屋敷に女中に出して置いたゞ、すると、世間にざらにあるやつだでそこの若旦那といゝ仲になりやがつたが、とう／＼二人して心中してしまやがつたゞよ。いゝ親の面汚しだ、わしもその時どんなにか辛え思ひをしたゞか分りやしねえ、そりや實せえ辛え事だよ。わしやな、お恥づかしい事だが、そんな目に會つてるだで、そ云つちやわりいだが丁度同じやうなお

前樣の心が思はれてならねえだよ。他人事ながら、氣の毒だと思つたで、かうしてお世話をしてるだ。かう云ふからッてなにも恩に被せる譯でねえだよ、感違えしちや困るだ。

傳三　よく分ります。恐れ入ります。

作兵衞　な、さう云ふ譯だで、人の弱味に附け込むちうやうな惡黨ぢやねえつもりだで、まアこんな事を云つたゞ、まアかんべんして下せえ。

傳三　いえ、それは私の方からおわびしなければなりません。

環　あの作兵衞さん、どうか氣を惡くなさらないで、私もおわびをいたします。

作兵衞　あに、おわびもくそもねえだ、もう何ともねえだよ。旦那、その金を早く藏つて下せえ、きしよく惡くて仕樣がねえだ。

傳三　あ、どうも濟みませんです。(と、そゝくさと藏ひながら)そして作兵衞さん、あんたのお話と云ふのは。

作兵衞　話かね、なに、ていした事でもねえだがの、實あ、玉太郎のことでがすだが、どうでがせう、わしの孫にもれいていと思ひますだが、どんなもんでがせう――さうすれば、お前さんの方も後くされもなし、わしの方も子供もねえ事だし、丁度好都合と云ふもんだが、わしも何だか初め見た時から妙になつかれたでね、可愛いくて可愛いくて仕方がねえだよ、深いわけとてねえだが、一つお貰え申していと思ひますが、いかゞでごぜいませう、それで今夜はやつて來ましたゞが。

傳三　あ、さうですか、そりや。

環　お父さん、――

作兵衞　そりや、お前さまの方がイヤだとありや、それまでだが、なるべくならさうして貰ひていだ、イヤだからと云つて、これから育てねえと云ふぢやねえだよ、感違ひしねいで下せえよ、そんな薄情な男でねえつもりだで――

傳三　いや、よく分りました。

環　ね、お父さん、さうお願ひ出來れば、さうして戴いた方がいゝでせう。

傳三　あゝ、お前のいゝ樣におし。

環　それでは、作兵衞さん、私の方からお願ひいたしたい位でございます。どうぞ、さうしてやつて下さいまし、さうすれば、あの子もどんなに幸福になるか分りません。

私もうすつかり決心がつきました。どうぞお願ひいたします。あなたのやうな御親切な方に育てられたら、どんなにか、いゝ子になる事でせう、あの子は、きつと幸になれます・私、もう何もかも忘れて、改めて今から櫻戸の家の人となります。さうして、さうして、一生を送りますわ、玉太郎や、お前はきつと丈夫に、強く男らしく生きておくれ……この世の中の人の誰にも負けないやうに生きておくれ、このお母さんの頼みはこれだけです。作兵衛さん、どうか玉太郎が大きくなりましたら、この母親がさう云つて居たと仰有つて下さいまし、私はぢつとあの子の成長を待つて居ります、ぢつと見守つて居ります。お父さん、色々御心配をかけましたが、私只今から櫻戸の妻となりましてよ。

傳三　さうか、よく云つてくれた、お父さんは嬉しいよ。

環　そして作兵衛さん、私たゞ一つおねがひがありますのよ。

作兵衛　なんでごぜえますだ。

環　あの、……

作兵衛　ふん。

環　あの、恐れ入りますが、玉太郎が大きくなりましたら、一度でよろしうございますから、會はせて戴きたいのです。

作兵衛　そんな事かね、ようごぜいますとも、いつでもお出で下さいますといゝだ。あい、わしも今夜は、本當にいい心持になりましたゞよ。あゝ早く歸つて玉坊を見てやりますべえ、首を長くして待つてるだ。もうごめんを蒙りますだ。

傳三　まだ、そんなに遲くもありますまい、まア。

（此の時、下手の襖があいて隆弘が出る。）

環　（晴れやかな顔をして）あ、あなたでゐらつしやいましたか。

隆弘　大分いゝやうだね。

環　えゝ、もう、すつかりよろしうございます。

隆弘　お客様のやうだね。

環　はい、私の家の知己の方で、房州にゐらつしやいます方ですの。

隆弘　あさうかね、私は櫻戸です、どうかよろしく。

作兵衛　（飛下つて）も、勿體ねい、作兵衛と申しますだ、よろしくおねげえ申します。

（と、一同晴れやかな顔をするが、矛盾した感情の錯

雛が、各自の面に漂ふのは是非もない。犬の遠吠。）

――急に幕――

二幕目

第一場　房州養命館の一室

離室とも云ふ可き數寄をこらしたる茶室めいた一室であるが、床の間の軸、香爐、或は火鉢、衣桁などいづれも不趣味に飾られてある。秋の初め、下手は廊下傳ひに母家に通じる心。庭には卓子、籐椅子などを置く。未だ海水浴の殘り客が居る頃である。前幕より約七年經過。

幕あく。

（と、環が一心に編物をして居る。その傍で乳母のおはまがそこら片付けて居る。）

おはま（覗いて）奥様、もう直きでございますわね。

環　あゝ、ね、もう一時間もやつたら出來てしまひますわ、今日は、むし／＼しないから、隨分はかが行つたこと。

おはま　さうでございませう、旦那様は何處まで、お出になりましたのでせう、ずゐ分長うございますこと。

環　さうねえ、あそこの何とか云ふお宮さんへでも行つたんでせう。

おはま　そんな事かも知れませんね、でも奥様やはり、こちらの方は空氣がよろしいと見えますことね。

環　そりや、お前どうしても、海岸だもの。

おはま　坊ちやまのお顔など、この少しの間につや／＼して參りましたし、お體も隨分お肥りになりました、あれで、のどがもう、お治りになれば。

環　さう、やつぱり違ふわねえ。（と氣が無さゝう）

おはま　本當に旦那様は何處へゐらしたのでせう。（と傍の雜誌を擴げて見て）あの奥様、この方は、いつぞやお出でなさいましたと思ひますが――

環（一寸見て）あゝ、杉平さんだらう、その方は今、聲樂家としてなか／＼いゝ位置においでになる人だよ。

おはま　さうでゐらつしやいますか、本當におきれいな方ですこと、このお目、お口元、まるで人形と云つても分りませんですねえ。

環　あゝ、本當におきれいだねえ。私も何とかしてあやかりたいもんだ。

おはま　まア、奥樣御冗談を仰せ遊ばして。
環　あら、どうして。
おはま　でも奥樣ホヽヽ。
（兩人笑ふ）
環　お前今の内に、お湯に這入つて來たら？
おはま　いゝえ、奥さま、とんでもございません、未だこれから行つて來なければなりませんもの。
環　行くつて何處へ？
おはま　昨日のお醫者さまの所へです。
環　あ。
おはま　やはり奥さま、同じお醫者樣でも昨日の樣なあゝ云ふ方になりますと、何處となく人格と云ふものが、つくのでございませうか、園田さんなんかとは、何處となく違ひますやうですね。診察の仕方から違ひますもの。
環　さうかも知れないね。
おはま　園田さんも隨分へい／＼してゐらしたやうでございます。何んでも東京では一流とか二流とか旦那樣とお話してゐらつしやいましたが。
環　そを――
おはま　塚口さんとか仰有いましたが――

環　……あの、ね、おはま、お前あのお醫者さんを何と思ふ。
おはま　何と思ふと仰有いますと、
環　いゝえ、あのお醫者さんの樣子、應對にね、何か變つた事はなかつたかいと云ふの。
おはま　樣子にでございますか。
環　あゝ。
おはま　さあ、（と考へて）別段變つた事もないやうにも思ひましたが、何か不可いんでございますか、人は見かけによらないものですから、どんな事をするかも知れません。それ共あの僞醫者でゞもあるんでございますか。
環　さうぢやないのよ、私の聞いてるのは、ね、馬鹿に容容しいやうな處はなかつたかと聞いてるのよ。
おはま　さア、そんな所へは氣が付きませんでしたが。
環　そを――そんならいゝの。
おはま　さうでございますか、でも奥樣、何でございますか、私、これからお迎へに參るんでございますから、何か氣味の惡い事なんでございますか。
環　いゝのよう、何でもないんですよ、そしてお前、迎へに行くのかい。

おはま　えゝ、先程旦那さまの、お云ひ付けでございました。

環　旦那様のお云ひ付けなら仕方がないけど、私なんだか蟲がすかないよ、旦那様が仰有つたんでなければお斷りしたいんだけど……。

おはま　さうでございますね、私も何ですか蟲が好きませんです。

環　あらお前さつきいゝと云つたぢやないか。

おはま　さつきのは奧さまホヽヽ。

環　お前も本當にお上手になつたわねえ。

おはま　恐れ入ります。

（そこへ正弘を先に傳三と隆弘が歸つて來る。）

おはま　おかへりなさいまし。

環　おかへり遊ばせ。

正弘　あゝ、くたびれた。

隆弘　草臥れたらう、お父さんもくたびれたよ、おぢいさんは如何です。

傳三　イヤ御同様くたびれましたよハヽヽ。

環　何處までお出で遊ばしたんです。

隆弘　今日はね、隨分遠くへ行つてね、ボートで行つたんだよ、ホラ、何とか云ふお宮だよ。（おはまに）あ、あのお醫者へ行つて來てくれないか、どうも今日は正弘より私の方が、のどをいためたよ、も少し經つてからな。

おはま　はい、かしこまりました。

（傳三と環は顏見合はせる。）

傳三　あ、ちよつと、隆弘さん、あの醫者は駄目ですな、外のにしたらどうです、わしや、どうも蟲が好かんよ。

隆弘　さうですか、――然し、どうせ、あしたは立つんですから、いゝぢやありませんか、最後に一回、どうせ見させたものですから。

傳三　さうですか、それなら。

隆弘　（おはまに）あの直ぐにね。

（おはまは去る。正弘は庭に出て籐椅子に倚る。）

隆弘　お父さん、お風呂へゐらしたらいかゞです。

傳三　さうですな、それでは一風呂行つて來ますかな。

隆弘　さア〳〵。

（傳三は去る。）

環　あなた、のどは如何でゐらつしやいます。

隆弘　なに、大した事はないんだよ。でね、あした又伊香保の方へでも行かうと云ふ事にお父さんと相談がなつた

んだがね、お父さんは、何でも房州はイヤになつたと仰有るんだよ、ハヽヽ。老人の一徹かなんて御自分でも笑はれて居たがね。僕はいゝと思ふがなア、まアお父さんもあゝ云ふ御氣象だし、お父さんの云ひなりになつて居た方が。今度の旅行はお父さんの爲なんだから、御希望通りさうして上げようと思ふんだ、環さんはどうだい？

環　はア本當に結構でございます。

正弘　お父さん、僕も少しあとで濱の方へ行つてもいゝでせう。

隆弘　あゝ、いゝともお醫者さんが來てからね。

正弘　僕そしたら玉坊と遊ぶんだ。

環　なんです、その玉坊と云ふのは。

隆弘　ハヽヽ、さつきも逢つたんだが、濱の漁師の子なんだよ、なか／＼こゝら邊には勿體ない位、ひなに稀なるかね、快活な子でね、わしも驚いたんだよ。

環　まア、さうでございますか。

隆弘　正弘、だが、もうあしたの晩又他所へ行くんですから、玉坊とは遊べないよ。

正弘　つまんないなア、僕もつと居たいなア、お父さん、若し行くんなら玉坊も一緒に連れてつて下さいな。

隆弘　ハヽヽ、さうは行かんて、さうは、な、又向うへ行つたら玉坊よりもつと仲よくなる人が居るかも知れない、だから、お醫者様が來たら、今日はゆつくり遊んでおいで、分つたね。

正弘　えゝ。

隆弘　あゝ、よく分るな、ねえお母さん、よく正弘は分りますね。

環　えゝ。

隆弘　おい、環さん、かう云ふ時には、なるたけ賞めなければいかんよ。

環　さうでございましたわ、本當に。

隆弘　本當に、よく正弘は分るね。

環　えゝ、よく分りますこと、お利口ですわ。
（と兩人顏見合せて喜笑する。）

隆弘　正弘、ちよつと此處へゐらつしやい。

正弘　はい。（と傍へ行く）

隆弘　正弘は、今年いくつになつたんでしたね。

正弘　僕七つですよ。

隆弘　さう、さうすると來年から學校ですね。

正弘　さうです。

隆弘　そして、お前は大きくなつてから何になるつもりだね。
正弘　僕、——分らないやア。
隆弘　分らない！　そんな事はありません、ねえ、お母さん。
環　えゝ。（何事か考へて居る）
隆弘　（ちよつと環を見てから）分らないなんて、もう學校へ行く人がそれぢや困りますよ。
正弘　おやねえ。
隆弘　ぢやつて考へるのかい！
正弘　（首をふつて）僕ね、先から思つてるの、お父さんみたいになるんだ。
隆弘　ハ、、お父さんみたいに。
正弘　うん。
隆弘　そりや、いかん、正弘そりやいかんよ。
正弘　どうして？
隆弘　どうしてつて、お母さんみたいにもならなくちやいけないよ、お母さんのやうに優しい心にもならなくちやいけない。
正弘　さう、ぢや、さうなるんだ。

隆弘　ハ、、さうか、本當によく正弘は分るなア、よく分る——そして、お父さんなんかは、もう駄目なんだから、お父さんよりも、もつと十倍も二十倍も百倍も、えらい人になつてくれなきやいけない、いゝかね、なつておくれよ、きつとなつておくれよ、學校へ行つたらばよく先生の云ふ事を肯いて、分つたね、分つたね。
正弘　うん、分つたの。
隆弘　あ、さうかい。（あかるい氣持になつて）ハ、、さ、ぢや御ほーび、お母さん何かやつて下さい。
環　さうですね、何をあげませうか。
正弘　僕、何にも要りません、早くお醫者さんが來ればいいなア。
隆弘　ハ、、遊びに行かうと云ふんだね、子供と云ふものは本當にいゝものだねえ。
環　さうでございますわねえ。
（そこへ、おはまと、その後から醫學博士の塚口虔三がやつて來る。）
おはま　旦那樣、あの先生がお見えでございます。
隆弘　あ、こりや、どうもわざ／＼、昨日はどうも。
塚口　いや私こそ失禮をいたしました。奧さん、昨日は失

禮いたしました。

環　（心ならずも）失禮をいたしました。

正弘　先生、いらつしやい。

塚口　あ、坊ちやん、今日は、今日はどうです、具合は。（と、診察にかゝる。）

隆弘　あ、正弘の方は、お蔭様でもう殆んど、よござんすな、今度は私の方がやられましてなハヽヽ。

塚口　そりや〳〵もう坊ちやんの方はよござんすなア。（と何かを入れる）も少しうがひでもなされば、大した事はありません。（隆弘に）どう痛みますか。

隆弘　イヤ痛むと云ふ程でもありませんが。（塚口は色々と診察して。）

塚口　いかゞです、もう何ともありませんでせう。

隆弘　……成程、こりや直りました、はゝア不思議ですなア。

塚口　ハツヽヽヽもう何ともありません。

隆弘　成程、……こりやどうも不思議な位ですなア。

塚口　イヤ、ハヽ、坊ちやん、もういゝでせう、お口をあけて下さい。（正弘は口をあける）もういゝ〳〵もう何ともありません、何ともないでせう。

（傳三これ以前より出て居たが、環と顏を見合せてはハラ〳〵して居る。）

塚口　（この時、傳三に氣付いて）あ、これはお父さまでしたか、昨日は失禮をいたしました。

傳三　や――。（と不愉快氣に挨拶をする）

隆弘　お父さん、塚口さんのおかげでもうすつかりよくなりました、お父さんもお咳の出るのを一つ見て戴いたらいかゞですか。

塚口　拜見しませうか。

傳三　いや〳〵もう私は結構で――。（塚口は失望する。）

正弘　お父さん僕遊びに行つてもいゝでせう。

隆弘　あゝ、いゝとも行つてらつしやい。

正弘　先生、ぢやさいなら。

塚口　さようなら。（と、正弘の行きかけるを）あ、坊ちやん。（と、環、傳三と顏を見合せて狼狽）行つてゐらつしやい〳〵。（正弘は去る。おはまは手拭を持つて來る。塚口は手を洗つたりする。）

隆弘　先生、そこで、あしたの晩あたり又伊香保の方へ行

く事になりましたが、いかゞでせう。

塚口　あ、さうですか、あちらもいゝでせう、然し房州の方が健康上にはいゝと思ひますが……。

隆弘　さうでせうなア、然し老人がやはり伊香保の方がいいと申しますものでハ、、。

塚口　ハ、、御老人はさうかも知れませんな。

隆弘　東京へは、いつお歸りですか、學校もそろ／＼始まるでせうし。

塚口　あしたの晩あたりにしやうかと思つとります。

（環と傳三は驚く。）

隆弘　あ、さうですか、そりや好都合です、若しなるたけなら、御一緒の汽車で參りませう、又、私も來月に這入りますれば東京へ歸るつもりで居ります、どうか少しお暇の折には――。

塚口　は、ありがたう存じます。（時計を見て）今夜又、隣町で講演をやる事になつて居りますので失禮をいたしませう。

隆弘　さうですか、そりやどうも、ではいづれ東京でお目にかゝれると思ひます。

塚口　では奥さん、お父さん失禮をいたします。

環　（怯えたやうに）失禮いたしました。

（傳三は無言。おはまは塚口を送つて去る。）

傳三　隆弘さん、どうも私は、あの男は蟲が好かん、今晩發たうぢやありませんか、な、環。

環　えゝ、本當に妙な方ですわね。

隆弘　さうかなア、そんな事は私はないと思ふが、でもまアよろしいぢやありませんか、今夜と云つても汽車の都合も何ですから、まアあしたでも。

傳三　イヤ全く蟲が好かんですなア。

隆弘　ハ、、そりや、お父樣、何かお考へ違ひでもしてゐらつしやるんですよ。沈着いた、見るからに、學者らしい人ぢやありませんか。

傳三　イヤ、隆弘さん、なか／＼近頃の人は分らんもんです、どんなに立派な態度でも、卑しい心の人間が多い世の中ですから。

隆弘　それは、まアさうですが、私はあの男に限つて、そんなまア、卑しいとか云ふやうな事はないと思ひますがなア。

傳三　イヤ、それが分らんですよ。

隆弘　それは全くお父さまの仰有る通り一がいには云ひ切

れませんが、親切などことなく親しめさうないゝ人だと思ひますが――。

傳三　親切にするのは、此頃の惡い奴の術ですよ、私はどうも、あの男は昨日來た時から迂散臭い、見たゞけでも、ぞつとして居りますんぢや。隆弘さん、あなたは、どうも皆さんに親切過ぎるから、いかんのですよ。あんな者は、東京へ歸つたからとて邸へは寄せつけない方がいゝです。

隆弘　(少しむつとして)しかし、お父さん、お父さんのやうにさう、バタ／＼と極端に片付けてお仕舞ひになるのもいかゞでせうか。

環　あの、あなた――。

隆弘　あゝ、分つてるよ／＼ハヽヽ。馬鹿にお父さまは、塚口君を攻撃なさるんですなアハヽヽ。何ですか、目の仇のやうですなアハヽヽヽヽ。

傳三　(ドキッとして)イヤ、そんな譯ぢやありませんが、どうもなア、環――。

環　えゝ?

隆弘　環さんも、お父さん組かい。

環　い、いゝえ、飛んでもございません。

隆弘　ハヽヽ、さて、風呂にでも這入つて來ませうか。

環　それが、よろしうございます。

傳三　どれ、わしも、も一遍入つて來ようか、どうもくしやくしやする。

隆弘　あ、それがよござんす、お背中でも流しませう。

(と、兩人は去る。環は獨りとなると、何事か考へて居る。間、ところへ宿の女中が出て。)

女中　あの、只今奥樣にお使でございます。(と手紙を出す)

環　え?　あ、さう。

女中　御返事は要りませんさうでございます。

環　御苦勞さま。(と、裏を返して驚く)

(女中は危しみながら去る。)

(環、その手紙を讀んで行く。と、下手で「玉坊おいでよ」と正弘の聲がする。環、驚いて手紙をたゝみにかゝる。)

――しらせなしに道具廻る――

第二場　養命館の奧庭

舞臺一面の芝生、下手に建物の宿の一部が見え、そら

こちらに植込があり、正面に紺碧の房總の海を見る。庭の中央に卓子、椅子などを置く。

道具とまると、舞臺暫く空虚。暫くすると、下手から貴婦人風の女が何事をか案じ顏に、うつむきながら出る。と、その後から塚口虔三が出て來る。塚口はその貴婦人風の女に言葉をかけようと云ふこなしで居る時貴婦人風の女がちよつと振返る。塚口はその顏を見ると、ある失望を感じてそゝくさと植込の方へ這入つて行く。貴婦人風の女はぢつと見送つて居たが、憤然として上手へ去る。

やゝ間

そこへ環が靜かに出て來る。と、向うの植込から塚口がいそ〳〵と出て來る。

塚口　あ、環さん、よく來て下さいましたね、今迄おいでがないので、もう駄目かと思つて居ましたが、本當によく來て下さいました、お禮を申し上げます、どうぞ、そこへおかけになつて――。

環　いゝえ、これで結構でございます。

塚口　どうかさう仰有らず。

環　いゝえ、本當に結構でございます、そして御用件と云ふお手紙でございましたが、何でございますか。

塚口　先程は失禮をいたしました。

環　失禮をいたしました。

塚口　環さん、よくあなたは無事でゐて下さいましたねえ、本當によくたつ者でゐて下さいましたねえ、私はこんな嬉しい事はありません、昨日あなたのお姿を偶然とは云へ、見た時、この私はどんなだつたでせう、本當によくお達者で居てくれましたねえ。

環　塚口さん、私は御用件を伺ひに參つたのです、餘計な事を伺ふ必要はありません。さつさと御用件を仰有つて下さい。

塚口　環さん、わ、私はあなたに少しお願ひがあつてわざわざ來て戴いたのです。

環　えゝ。

塚口　環さん！（と手を取る）

環　何をなさるんです！

塚口　環さん、そんな冷たい事を仰有らずにどうか少しの間、私の云ふ事を聞いて下さいませんか、おいやですか、おいやなんですか、環さん、私がかうして人妻である、あなたを、お呼び出して、こんなお話をすると云ふのは

實に言語道斷な奴だとお思ひになるでせうねえ、そりや無理もありません、さうお思ひになるのが當然です、が、例へ思はれてもかまはないと思ふのです。私は、かうして恥も忘れ、外聞も他所にして昨夜一晩中考へあかしてあなたにお願ひすると迄私の考へを漕ぎ付けたのです、私はね、環さん、隨分苦しみましたよ、この七年の間、私は、只一度だけ會つてあなたにおわびをしたいと思つて居たのです。私の爲めに、私と云ふ者の爲にあやまらせて仕舞つたあなたです。どうか過ぎ去つた事は一切を水に流して下さいませんか、私はね、只一目會つて、あなたから許すと云ふ言葉を聞きたかつたのです。ね、環さん、どうか水に流して、今迄通り淸い交際をして戴きたいのです。

環　塚口さん！

塚口　なんですか。

環　あなたは、よくも、さうして私の前に立つてゐられますことね、あなたは立派な男ぢやありませんか、男なら男らしくもつと正面からおいでになつたら、いかゞですか、人の家の裏口から這入つて來るやうな、そんな卑怯な事をなさるのは大嫌ひです。あなたは大體私をお捨てになつたんぢやありませんか、私をお捨てになつたあなたが、その私に對してその有樣は何事ですか、許してくれ！　それでもあなたは男なのですか。

塚口　環さん、さう云はれると、私は實際穴でもあれば這入りたい思ひです。私はね、あなたに、そんなに迄云はれてもこの場を去る事の出來ない弱い男なのです、ですからどうか、今も云ふ通り、一切の事は水に流して戴きたいのです、許すと一言云つて戴きたいのです。私はその一言を聞けば、私のこの七年間の胸の苦しみも取れます、私は喜んで、直ちにこの場を去らうと思ひます、さうしてもう一生お目にもかゝらない意りです。私は安心して一生を送る事が出來るのです。ね、環さん私はこの事の爲に夜もろく／＼眠れないで居るのです。

環　相變らずお上手ですこと。

塚口　では、あなたは、これ程に頼んでも許しては下さらないんですか。

環　許さなかつたらどうなさるんですか、塚口さん、あなたはたゞ許せ／＼と私をお攻めなさいますが、それは、あんまり御自分勝手と云ふものですわ、そりやあなたお一人の考へで外の者は、どうでもいゝと言ふお考へで

す。

塚口　…………。

環　あなたは、この七年の間、お苦しみになつたと仰有いましたが、あなたがお苦しみになつたなら、この環は一體どうしたらよかつたのでせう、それこそ死ぬよりも辛い思ひをして來たと云つても足りない、狂人にもなつたのですわ、えゝ、私は氣狂にもなつたのですわ、あなたのやうな方を信じて居た私は本當に馬鹿者だつたのです、それからの私は一體どんな事になつたと思つてゐらつしやるんです、私は世間にどんな面をして歩けたと思ふのです、お父さんに、親類に……その私の思ひも知らず只、許せ／＼と仰有るのはそりやあんまりぢやありませんか、一時は私自殺しようと、幾度川の淵に行つたか分りません、がどうしても死ねなかつたのですわ、どうしても死ぬ事が出來なかつたのですわ、私は子供の爲に自分の子供の爲に死ねなかつたのですわ……塚口さん、そりや、あんまり御自分勝手と云ふものです！　御自分勝手と云ふものです。（と泣く）

塚口　（目をしばたたいて）　そりや何と云つても私が惡いのです！

環　いゝえ、私はこんな所で、もうお話してはゐられないんです。失禮します。

塚口　環さん、も少し待つて下さい、さうですか、あなたはどうしても許しては下さらないと仰有るならば、もうこれ以上お願ひもしますまい、が一つ、たつた一つです聞いて下さい、どうかあの時の子供を私に下さい、いやあの正弘を私に返して下さい。

環　え？

塚口　これも、イヤだと仰有るのですか、環さん、これも聞いては下さらないのですか。

環　塚口さん、あなたは誤解してゐらつしやるのです、正弘は櫻戸の子供です、立派な櫻戸と私との子供です。

塚口　そんな事を仰有らずに、環さん。

環　塚口さん、あなたは本當にお考へ違ひをして居るのです。あの時の子は、あの時の子は何處に居りますことか、私にも分らないんですわ。

塚口　え？　では、その子供は行方が知れないと云ふのですか。

環　…………。

塚口　環さん、それは本當ですか。

環　本當ですわ。

塚口　環さん、あなたは何故その子供を育てあげては下さらなかつたのです、何故育て上げようとはしなかつたのです、それが——

環　義務だと仰有るのですか、それこそやはりあなたの御自分勝手と云ふものです。あなたはそんな事を仰有る資格がおありだと思つてらつしやるんですか。

塚口　そりやないとは知つて居ます。分つて居ます。けれ共かうなつてしまつてはあなたにもなくなつて仕舞つてるぢやありませんか。

環　…………。

塚口　無くてもいゝと思つたんですか、かまはないと思つたんですか、そりや、あなたはさうして幸福な生活をしてゐるから何ともお思ひにはならないのでせう、がそれでは餘り無情と云ふものです、自分勝手と云ふのはあなたの事です。

環　いゝえ、それはあなたの事ですわ、みんな何もかもあなたが惡いからこんな事になつたのです、あなたの故意です。

塚口　いゝや、環さん、あんたはそんな事を云つて逃げようと云ふんだ、凡てはあんたの心持が惡いからだ。

環　いゝえ、あなたです。

塚口　いゝや、あんただ

環　あなたです。

塚口　あんただと云ふのに！

環　何と仰有つてもあなたですわ——。

（と競爭的に云つて泣く、塚口も泣く。）

（間。）

塚口　環さん、二人がかうしていくら云ひ募つて見た所が、結局はお互が惡いからなのですよ。お互に傷付いた二人なのです。環さん、あなたは此處でよくお考へにならなくてはなりませんよ、よござんすか。あなたはあなたの心をしつかりと決めなければ、覺悟をしなければならない時が來たのですよ。

環　え？

塚口　環さん、あなたは、あの何にも知らない櫻戸さんを今日迄欺し通して來て何とも思つてはゐないのですか、あんた自分の心に恥づかしいと思つた事はありませんか、苦しいと思つた事はありませんかな。

環　私は、櫻戸の妻です。もう何にも仰有らないで下さ

い。

塚口　まア、お待ちなさい、環さん、あんたは本當の幸と云ふものを得たいと思つた事はありませんか。そんな、人を欺した、人の目をくらまして居るやうな、苦しい生活をなさらずと、もつと、本當に幸を得たいと考へる事はありませんか。さぞ苦しい事でせうねえ、その苦しさを一日も早く取り除きたい、樂々とした生活を送りたいと考へた事はありませんか。ハヽヽ、環さん、私の覺悟と云ふのは此處の處なのですよ。恐らくは、もうお分りになつたでせうが……。

環　（あやしく溜息をつく）

塚口　環さん、それは私と結婚することです、それであなたは苦しみから逃れる事が出來るのですよ。

環　（暫くしてから）塚口さん、――塚口さん、あなたは何と云ふ事を仰有るのです。あなたは地位も名譽も立派に得られた今日でも心はやはり昔のやうに恐ろしい方なのですね。あなたはあれ程私の體を責めさいなんでおきながら、未だその上にも私を苦しめようとなさるんですか、あなたは惡魔です、犬畜生にも劣つた方です、私ばかりか、あなたには、お島さんと云ふ立派な奥さんがあるぢやありませんか、そのお島さんはどんな思をなさるとお思ひですか、あなたと云ふ人は……。

塚口　イヤ、あんなものはかまひません、どうかこの塚口の頼む事を聞いて下さい、環さん。私は一生懸命に頼んで居るんですよ、環さん。

環　いゝえ、それはいけません、私もうこれ以上お話しをする事は出來ません、そんなお答へは出來ません、お歸り下さい、お歸り下さい、あなたがお歸りにならなければ私から歸ります。（と行きかける）

塚口　環、待て、では、この塚口の云ふ事が何一つ聞き入れられないと云ふのだな。

環　はい――。

塚口　よし、では、もう頼まん、もう最後の方法を取るより仕方がない。環さん、あなたもこれから先子爵夫人として生きて行かれる上に、イヤ大きな秘密を押し通して行かれる上に、極めて險呑なこの塚口が居る間は、あなたは苦しまなければなりませんよ。

環　それは罪のむくいです、致し方がございません。

塚口　どうしても安全な所へ行くお心はないのですね、私の云ふ事は肯かれないと云ふのですね。

環　勿論の事です。でも、さうだつたら、あなたはどうなさらうと仰有るのですか。

塚口　…………。

環　櫻戸に私の事をお話しなさらうと云ふのでせう。

塚口　若し、さうだつたら、どうします。

環　さうですか、ようございます。あなたが、さう云ふお考へならば私の方にも考へがあります、あなたの地位も名譽も何もかも目茶々々にして仕舞ふ事があるんですから。

塚口　なに。

環　いゝえ、も一遍云ひませう、あなたの地位も名譽も何もかも目茶々々になつて仕舞ふ事があると云ふのです。

塚口　馬鹿な、そ、そんなバカな事があるものか、例へあつたとせよ、そんな事は何でもないのだ。

環　さうですか、塚口さん、御要心遊ばした方がようございますよ。

塚口　そりやこつちで云ふ事だ、あなたが今に私の手に戻つて來る樣が目に見えるやうだ。環さん、あなたこそ要心した方がよござんすぞ。

環　塚口さん、私、最後に申しますが、私の一切の事は、いつでも櫻戸に話せる覺悟で居るんです。櫻戸の前に、いつなんどきでも例へ地から湧れて來ないにしても、私の口から夫の前に懺悔する日を待つて居るのですから…

塚口　なにッ。覺えて居れ！

（と、荒々しく去る。）

環　（ぢつと見送つて）あゝ、私は、とう／＼あの人に勝つ事が出來たんだわ。

（と淋しく笑ふ。が、だん／＼泣きに入る。薄暮せまる。環は、ぢつと目をうるませて立ちつくす。）

――幕――

三　幕　目

第一場　作兵衞の家

背景に海を見たる濱邊の小家、家の周圍は一帶の砂地、前幕の翌日、午近き頃の事、幕あく。

（と、近所の娘お町が手仕事をして居る、そこへ同じく近所の娘のお袖が出て。）

お袖　おめえ、やつぱり此處へ來て居たゞな。未だ支度を

しねえだかよ。

お町　だつてお袖ちやん、未だ晝飯食つた許りぢやねえか、踊りの初まるのは夜でねえか、まだゆつくりだ。

お袖　おらなんだか、今夜は東京のえれい宮樣の前で踊つて見せると云ふだから、なんだか胸がさわいでなんねえだよ、お町ちやん、お前は騒がねえか。

お町　おらもやつぱりさわいでなんねいだよ、今にをぢさんが歸つて來たら、直ぐに家へ歸つて支度をするだ。

お袖　そりやさうとお町ちやん、お前この間から、濱の養命館さ來てなさる奥樣見たゞか、そりやまア、何て云ふやさしいお方か、ちよつと、おら達にや眞似も出來ねえだよ。昨日の晝間なアあの濱で逢つたゞよ、するとな、おら何んだか急にお辭儀をして仕舞つたゞ。とな、かうやつて、（と眞似を色々して見せる）

お町　ハ、、。

お袖　幾度も／＼お辭儀をしてくれたゞ。おら、何だか急に嬉しくなつたゞよ。ほんとに東京の人はいゝだなア。あの奥樣、今夜見に來てくれるだかなア。

お町　どうだかなア。

（間。）

お袖　お町ちやん、お前東京に住みていと思つた事ねえだか。

お町　そりや、住みていだよ。

お袖　おらも、ほんとに住みていだよ。

お町　だけんど、やつぱりいけねえだ。

お袖　どうしてだ。

お町　だつて、作兵衛の小父さんは、東京なんて處は、若え者によくねえ處だつて云つたゞ。

お袖　さうかなア。

お町　それにな、お袖ちやん、今作兵衛の小父さんが居ねえからよかつたゞよ。小父さんの前で若しも東京がいゝなんて云つて見ろ、それこさ、ひでい目に逢ふだよ。小父さんは東京の奴くれい薄情なものはねえツて、えらく怒つてるだからな。

お袖　どうしてだよ。

お町　どうしてかそりや知らねえだ。

お袖　さうだか、だけんどあの奥樣は別物だアよ。

お町　どうだか、分るもんでねえだ。

お袖　それもさうよなア、さ、ぢやもう行つて支度するだ、おめえも後から來るだよ。

お町　あゝ、あとから行くだ、小父さんが歸つて來たら直ぐ行くだ――(獨白)だけんど東京は本當にいゝだなア。

(此の時漁師三四人登場。)

漁師甲　誰だ、東京がいゝなんて云ふ奴は。

お町　あ、いやだアな、小父さんの聲色なんか使つて、びつくりしたゞよ。

漁師乙　そんなに怖えたか。

漁師甲　お町ちやんよ、未だ小父さんはけえらねえだか。

(と、又三四人、反對の側から出て來る。)

お町　あゝ、未だけえらねえだよ。

漁師丙　どうしたちうもんだ、網元の野郎慾かわいてやがるから、話はまとまらねえだな、本當に癪に障るだな。

漁師丁　ほんとだなア、よつぽど極道に出來てやがるだ。みんな、もうかまふ事ねえだから向うの返事の次第ぢや仕事になぞ、出るにや及ばねえだ。おら達は沖へ出て命がけの仕事をしてるだ。いざとなりや、こんな處にや居ねえだ、天道樣と米の飯は何處へ行つたつてついて廻るだから。

漁師丙　さうだとも／＼。

漁師甲　そけえ行くと先の山田の旦那はえらかつたゞな、よく話は分つたゞ。

漁師乙　さうよ、お前の云ふ通りだ、何を云つてもちやんと聞いてくれたゞからなア。

漁師戊　だけんど、皆、あんな人は、あんまりあるもんでねえだよ。

漁師甲　それもさうだ、えれい人は早く居なくなるしよ、イヤな野郎が幅利かしてるだ。つく／＼おら世の中がイヤになつたゞよ。

漁師丙　さうだか、ぢや早く死んじまふがいゝだ。

漁師甲　バカ云ふでねえだ、おら、死んで見ろ、おつかアや子供が日干しになるだ。

漁師丙　あんな、おッかアが、そんなに可愛いゝだか。

(一同笑ふ。)

漁師甲　そんなバカ云つてる場合でねえだ、それだからいけねえだよ。それよりや一體作兵衛は何してるだな、氣の長え話だア。

お町　おらも、小父さんが歸らねえと、困るだよ。

漁師甲　さうだ、お前踊りに行くだな、そんだら、おら達が居るから、けえッてもいゝだよ。

お町　いゝだよ。

漁師乙　お町坊、いゝだよ、けえッても。遠慮する事はねえだ、作兵衛がけえッたらさう云つておくだからな。

お町　さうだか、それぢや、すまねえが、お願しますだ。

漁師甲　いゝとも〳〵早く行つて支度するだ。

（お町は、いそ〳〵と去る。）

漁師乙　お町もいゝあまッ子になつたゞな。

漁師丙　さうだ、この間までは、青ッぱなたらして居たゞが、早えもんだ、もう十七にもなるだ。

漁師乙　お前馬鹿にくはしいだな。

漁師丙　そりやあたりめえだ、何にしても、もうそろ〳〵いゝだ。

漁師戊　なにが、そろ〳〵いゝだ。

漁師丙　そろ〳〵いゝつて云つたら分りさうなもんでねえだか。

漁師戊　馬鹿野郎！　馬鹿こくのもいゝかげんにするがいいだ。手前みたいな奴が居るだから、網元の旦那に、漁師がなめられちまふだぞ！　作兵衛どんは今、何してると思つてるだ。網元の旦那へ手をついて、かけあひに行つてるだぞ。ちつとは作兵衛どんの身にもなつてやるがいいだ、馬鹿野郎奴。

漁師甲　かんべんしてやつてくれろ。（丙に）お前がわりいだ、あやまるだ。

漁師丙　さうだか、そりや済まなかつただ。そんな譯で云つたぢやねえだ、氣を惡くしねえでくんろ。

漁師戊　おら氣を惡くするだよ。

（と、云つてる所へ作兵衛が悄々と出て來る。）

漁師甲　あ、とつさん、御苦勞だつたな。

漁師乙　何んとかいゝ話になつたゞかね。

漁師丙　網元は何んと云ふだね。

漁師丁　承知したゞかね。

漁師甲　とつさん、どんなあんべえだよ。

作兵衛　おら、色々云つて見たゞ。

漁師戊　ウム、それで……。

作兵衛　願つても見たゞ――この濱一帶の生き死にもかゝはる事だで、よく考へてくれッて云つたゞ、だけど、

漁師乙　駄目か。

作兵衛　どうも思ふやうになんねえだ。

漁師丁　思ふやうになんねえか。

漁師丙　それでも、おら達の云ふ事は網元はわかつてくれたゞね。

作兵衞　…………。

漁師甲　不當な云ひ分ぢやねえ事だけは分つてくれたよねエ。

作兵衞　分らねえ。

漁師丙　分らねえだと？。

作兵衞　ウム、何もかも云つちまふだ、網元はおら達の事をユスリと云ふだ。

漁師丙　なに、ユスリだ、そんぢや何一ツ分らねえだな、よし——ぢや、やつゝけやう。

漁師乙　さうだやれ〳〵。なアに向うがさう出りや、こつちもおとなしくしてゐられねえだ。網元だつて漁師だつて同じ人間だ、同じものを食つて生きてろだ。網を持つてるから錢を持つてるからつて、仕事をするなアおら達だ。網を下ろして魚取るなア、おら達だ、生命がけの仕事をして一家がやつて行けねえで、網元一人が贅澤する法はねえだ。

漁師乙　さうだ、やれ〳〵。

漁師甲　みんなで網元の處へおしかけべい、それで分らなかつたら、縣廳へ行つて知事樣に願ふだ。

（と、口々に罵り合つて氣勢をあげる）

作兵衞　待て、お前達は皆んなして俺に任せたと云つたでねえか、それとも任せられねえのか。（とキッとなる）俺はな、今度の事に就いちや、此の濱一帶の生き死にかはる事だと思へばこそ出來る丈けの事をして働いて居るだ。なる程網元にや金もある、が、さうだからと云つて、本當に働く人間が金の爲に人間らしい暮しも出來ねえなんてことは、どうしても我慢して居られねえ事なんだ。だからこの事ア何十年何百年かゝつた處でキチンと極めておかなきや孫子の代迄金持の玩具にならなくちやならねえだ。俺達の相手は今の網元一人ぢやねえ、例へ今の新井の旦那をへこましたからつて、又次の網元が出て來りや又同じいさかいをしなくちやならねえ。俺の考は目先の事にアクセクしてるぢやねえだ。新井樣と俺との話は今夜の十時にきめる約束になつてるだ、それ迄お前達が待てなきや、勝手にするがいゝだ。俺に手を引けと云ふなら、いつでも引くだ。

（一同が沈默して居るとそこへ漁師の傳吉がイツ〳〵と登場。）

傳吉　おゝ、とつさん、えれい事になつたぞ、とつさんとこの玉坊はすばらしい者になつたぞ。

漁師甲　玉坊がどうしたゞ。

傳吉　何、こんどな濱へ來なさる、宮樣をよ、學校の生徒がみんなでお出迎ひする事になつたゞ。さうして生徒の中で一番えれい者がその宮樣の前で言葉ア讀むだとよ。それがア學校中の百八十人の内で誰にすべいかと校長さんも色々心配したあげく、先づ五人丈けえらばれたゞ。

漁師乙　ウム、誰が選ばれたゞ。

傳吉　村長樣とこの坊ちやまにな、新家のお常坊に校長さんとこの子だ――だがこりやみんな、おべつかにした事で、本當の處は網元の新井樣とこの坊ちやまと家の玉坊と二人ださうだ。

漁師甲　ウム〱。

（作兵衞は何故か沈んで居る。）

傳吉　そして揚句の果にや、とう〱玉坊が言葉讀む事になつて今、殘されて稽古してるだよ。

漁師乙　傳の字、そりや本當だらうな、いつもの手前のホラぢやあんめえな。

傳吉　馬鹿云ふでねえだ、冗談も時と場合に依るだ、本當にも何も今おら見て來たゞよ。かうナ、（と紙を持ち）紙持つてな先生の前さ、玉坊靜かに歩いて行くだ、さうして、かうお辭儀して何か云つたゞ、おら、それ見たらあんまり立派なんでびつくりしたゞよ。

漁師戊　さうかい、玉坊もえらくなつたゞな。

漁師丙　何しろ相手は網元だ、それまかしただけでも、おらア胸がすくだよ。新井の旦那は今頃どんな面をしてるだか見てやりていもんだ。とつさんお前嬉しかんべえな。俺達もうれしいだよ。

作兵衞　そりや、俺も嬉しいにや嬉しいだがな。

漁師甲　嬉しいだがツて、どうしたゞ。さう云や、さつきから浮かねえ顏をしてるだが、こんなに目出度いと云ふのにどうかしたゞか。

作兵衞　まアよすべい。

漁師甲　なんだな、一ていどうしたゞ、譯を話してくんろよ。

作兵衞　まアよすべいよ。

漁師丙　何んだか、さつぱり分らねえでねえか、どうしたと云ふだ、何かあるなら打あけてくんろよ。

作兵衞　さうか、そんなに云ふだら云ふだがな、おらもその話は今新井の旦那とこで聞いて來たゞよ。

漁師乙　ウム、嬉しかつたんべい。

作兵衛　ところが、嬉しかねえだ。

漁師甲　なに、嬉しかねえ？。

作兵衛　皆よく聞いてくんろよ。おらアなさつきも云ふ通り色々と頼んだゞよ。だん／＼と物は高くなつて、とても今迄通りの金では中々食べる事は出來ねえ、一ト月の内でも雨も降れば風も吹く、三百六十五日働く譯にも行かねえで、今のやうぢや安心して命がけの仕事も出來ねえだ、稼ぎ人が死ねば殘つた者は乞食をするより仕方がねえと云ふ事や、口をすつぱくして頼んだゞよ。するとな、新井の旦那の云ふにや、お前達の云ふのは給金の外に、魚の取れ高についてそれ／＼の配當をくれと云ふのと、それから漁に出て死んだり怪我した者の面倒を見てくれと云ふのだなと云ふだから、おら、その通りでごぜいますと云ふとな、少し考へて居たゞが、お前達の云ふ事は不當だとは思ふが肯いてやらうと云つたゞ。おら、夢かと許りに喜んで何遍も／＼お辭儀をして歸らうとするとな、ちよつと待てと云ふだ。はて何だらうと思ふとな、お前達の云ふ事はそれで通してやつたが、その代り此方にも肯いて貰ひたい事があると云ふだ。皆んな、何んだと思つたらな、お前とこの玉坊を十日許り學校を休ませろと云ふだ。いゝか宮樣の前で言葉讀むのを家の伜に讓つて貰ひていと云ふだよ――若しそれがイヤだと云ふなら話はおしめえだと云ふだよ、ようく考へて今夜の十時迄に返事しろと云ふだよ。おら、それ聞いたら口惜しくて口惜しくてなんねえだよ。

漁師甲　そりや、もつともだ。

漁師丙　何て癪に障る畜生だらうな。

（一同深き思ひに沈む。そこへ、學校がへりと覺しく玉太郎が正弘を伴ひて登場。）

玉太郎　ちよつと待つてゝね。

正弘　あゝ玉坊、早く來てね、こゝに居るよ。

玉太郎　おぢいさん只今。

作兵衛　おゝ歸つて來たか、暑かつたろ、玉坊、玉坊はえらくなつたゞな。

玉太郎　おぢいさん、僕に讀めるかね。

作兵衛　あゝ、讀めるとも／＼。

傳吉　讀めなくつてよ、玉坊はこの濱で一番えらい者になつたゞも、讀めなくつてどうなるだ。

玉太郎　おぢいさん大丈夫かね。

作兵衛　あゝ、大丈夫だらう。

漁師甲　さうだ、おら達も加勢に行くから、新井のがきたんぞに負けちやなんねえぞ。

作兵衛　そして、あの人は何處の坊ちやんだ。

玉太郎　おぢいさん知らないのかい、養命館へ來てる華族樣の坊ちやんだよ、僕少し遊んで來てもいゝ。

作兵衛　あゝ、いゝとも。（と行きかけるのを）玉坊、あのな、お前に少し話したい事があるがな、玉坊、お前は宮樣の前へ出て言葉ア讀みていだか。

玉太郎　あゝ、讀みたいよ。

作兵衛　さうか、そこでなこのおぢいさんがお前に賴みがあるだがね。

玉太郎　なアに。

作兵衛　それがな……。

（この間に漁師の一同は一人減り二人減りしてこそこそと退場して仕舞ふ。）

玉太郎　おぢいさん、どうしたのよう。

作兵衛　なアに、どうもしねえだ、まアいゝ遊んで來るがいゝだ、後で云ふだから。

玉太郎　なにさ。

作兵衛　まアいゝよ、遊んで來うよ。

玉太郎　そを、……あ、それからね、おぢいさん、先生がネ後で行くから、おぢいさんにさう云つて戸籍を探しといて貰へと云つたゞよ。

作兵衛　えッ、（と驚く）なんだツてそんなものが要るだ。

玉太郎　あのネ、宮樣の前へ出る者はちやんと誰の子ッて事をお屆けするんだつてさ、だからさう云つて置きなさいて云ッたの、どうしたの、おぢいさん、泣いてなんか。

作兵衛　泣いてるんぢやねえ、あんまり嬉しいからだよ。

正弘　玉坊何してるの。

玉太郎　あゝ、おぢいさん、ぢやちよつと行つて來るよ。

（と、正弘と手をつなぎ、イソイソと去る。作兵衛ぢつと見送つてる目に涙が光る。そこへ訓導宇井喬松が元氣さうにやつて來て）

宇井　作兵衛さん、何ぼんやりしてるんだね。（と肩をたたく）

作兵衛　あ、こりや先生樣でございましたか、何卒お上り下さいまし。實は私が今、あがらうと思つてましたゞ。

宇井　なアに、只聞きさへすりや好いんだから何でもないさ。然し自分の受持から今度のやうな名譽ある生徒を出した事は、私としてこんな嬉しい事はないよ。我々教員

の隨一の喜びは、成績のいゝ生徒を出す事だが、イヤ家の子は全校の生徒百八十名の内で總ての點に就て一番なんだから僕も鼻が高い譯さ。おぢいさんも嬉しいだらう。

作兵衞　みんな先生樣のおかげで全く御禮の言葉もありましねえだ。

宇井　なに、やはり當人の頭一つさ。いくら教へたッてまろで物にならないのもあるし放つておいても出來る子もあるし色々なもんだよ。氏より育ちなんて云ふが子供のいゝ惡いはどうも兩親にあるやうだよ。玉太郎君のお父樣もキット頭のいゝ人だつたらうと思ふよ、お母樣もさうだつたと思ふよ，その本を尋ねりやお爺樣の君がえらいと云ふ事になるのかねハ、、、。何しろ高貴の前で奉迎の文を讀むなんて學校の名譽は勿論、お前樣の家に取つちやこの上もない目出たい事だよ。

（と、此の間に作兵衞は奥の戸棚から絽の紋付の羽織を出して來て宇井の前に置き。）

作兵衞　先生樣、こりやお禮と云ふ譯では決してねえでがすが、こんなものが俺の家にあつても何にも役に立たねえものでがす。いやでなかつたら先生樣に着て貰ふべいと實ア此の間から思つてましたゞよ。

宇井　お爺さん、そんな事は困るよ。

作兵衞　いえ、どうで貧乏な船頭だから、とても物なんぞ買つてあげるやうな事ア出來ねえ、又したからつて先生樣が受けて下さる譯もねえだが、これや家に置けば、このまゝ蟲に食はして仕舞ふだ、先生樣が着て下さりや、これも生きるつてもんでがす　玉坊が大變な役をする心祝でがす、堅い事を仰有らずに一寸着て見ておくんなさい。

（と、宇井に着せる。）

宇井　困るよ／＼。（と、云ひながら袖を通して）すばらしい羽織ぢやないか、まるで華族樣の紋のやうだね。

作兵衞　先生樣、着て下さるだかね。

宇井　弱つたね、どうも——それより要件をきめよう。只作兵衞の孫とばかりで、お互に六ケ敷い事も考へて居なかつたのがウカツ千萬な話さ。いくら田舍たつて今時親の名も分らないで、入學させたのも不思議だし、氣がつかずに居たのも隨分滑稽な話サ。それと云ふのもお爺樣に人望があるからだよ。濱で作兵衞と云へば知らない者もないし、又あの子がお前の孫だつて事は知らない者

もないんだからねハヽヽ。然し今度の事は極めて公の事だから記錄を作る上に於ても又お屆けする上に於ても、戸籍上の問題は明らかにして置かなくちやならないし、それにとに角高貴の前なんだからつまらない人間の子は出せないし、そんな事でもあつて見りや學校の失態は勿論、僕のこれが飛ぶからね、ハヽヽ。實はね、今でこそ云ふがね、新井の息子に讀ませるか、家の子に讀ませるかと云ふ問題になつたんだがね、新井は金もあるし、身元もいゝ。まア此の際ではあれの右に出る者はないんだが、學校の成績の上に於ては家の子と違ふんでね、實ア僕があく迄がんばつて、さう定めさしたんだよ。理窟を云へばそれが當然だが、世の中はさう許り云へないからね、……それ丈に僕の責任は重いだらう、ねえハヽヽ。マアマア目出度いんだ、恩に被て貰つてよし、又僕からも恩に被せてもいゝ位に思つてるよ。然しあの子が出來る事はたしかなんだよ、ハヽ、お爺さん謄本があれば結構だが恐らくあるまい、一體玉太郎君は誰の子でどう云ふ籍になつてゐるんだね？ 確か八つだつたね三月とか云つたがまア四日生れと、それでいゝだらう。八年前の三月四日生れ、（と、帳面に記して） 今度はかんじんの兩親の名だ、なんて人だね。

作兵衛　先生樣、それだけはどうか、かんべん願ひますだ。

宇井　どうしてさ。

作兵衛　先生樣、實はあの子の一身につきましては云ふに云はれねえ事がありますだ。

宇井　おぢいさん、誤解しちや困るよ。イヤそんな六ケしい問題ぢやないんだ。つまりあの子が誰の子か分ればいいんだよ。事情なんてどうだつていゝんだよ。分らないかネ、つまり事情はどうでも、そんな事は書くんでもなんでもないんだ。只、男親が誰で、女親が誰ッて事が分ればいゝんだよ。今時まさか、無籍者もあるまいし、そうだつたら法律で、罪にもなるしね、ハヽヽ。

作兵衛　先生樣、實は玉太郎は無籍者でございますだよ。

宇井　え。

作兵衛　先生樣、どうか、かんべんして下され、皆私が惡いでがす。あの子が無籍者になつてるに就いちや可哀想な話がありますだ。

宇井　イヤ、おぢいさん、その話なら又ゆつくり聞く事にしよう。

作兵衛　ま、暫く聞いて下さい。あの子が無籍者となつて

るのは。かう云ふ譯だ。實はね、あの子のお袋と云ふのは今ぢや名前は云へねえだが、子爵さまの奧樣になつてるだ、その子爵樣へ嫁に行かねえ前に若氣の至りと云ふのか、親に内密で若い男といゝ仲になつて身重になつた處が、その男に捨てられて、思ひつめた揚句死なうと決心してこの濱へ身を投げようとしましたのを、危く助けて可哀さうだと家へ連れて來て產み落したのがあの子でございますだ。それから、その親御にも逢つて、わしも子供もない事だし、わしが育てゝ立派な者にしますべいと引受けましたゞよ。その時その親御の云ふにや、籍の方は決して心配は要らねえから、どうか育てゝやつてくれろと云つて子爵樣へお嫁に行つたゞ。わしも心やすだてから、大した氣にもかけずに居りましたゞが、まさかこんな事にならうとは思はなかつたゞ。子爵樣へ嫁に行つてからと云ふもの、その娘から又親からも手紙一本、葉書一本も來た試しはねえだ。人間て奴は自分さへよくなりや今迄の事なぞ忘れやがるのかと、わしやつく〴〵うらめしく思つてますだよ、東京の奴は恨めしいだよ。それにつけてもあの子は必ず石にかじりついても立派なものにしておかにやなるめいと、苦勞をして居りましただが、あゝこんな事になるとはおらァ夢にも思はなかつたゞ。先生樣、あの子は天にも昇る氣で喜んで居ますだ、何にも知らねえで喜んで居りますだ。どうか、がつかりさせねえでやつて下さい。お願ひでございます！　先生樣！　お願ひでございますだ。

宇井　事情はよく分つたよ、それで何を願ふと云ふんだね。

作兵衛　あの子に讀ましてやつて下さい。

宇井　だから、それについては。

作兵衛　だから願つて居ますだ、先生樣、お助け下さい。わしはなあの子の爲にこんなイヤな事を知らせないやうに、又冷めたい世間の風にあてたくねえと思つて、この體をたてにして、ふせぎ通して來ましたゞ。どうせ一度は知れる時もあるだらうが、未だ骨もかたまらねえ奴に背負ひきれねえ苦勞をさしたくねえと思つて今まで骨を折りましたゞ。こんな目出度い時に一度に惡い事を聞かしたら、あいつがどんなになるだらうと思つて、わしは我慢出來ねえだ。わしの命を捨てろと云はれるなら、わしいつでも死にますだ。先生樣、人を助けろと云ふ事はキツといゝ報いがあるだよ。これから先一生をわし先生の爲につくすだ、お願ひでございます。

（と、さめ〴〵と泣く。と、此の間に宇井は、着せられた羽織をぬぎ、ソツと傍に置き立上らうとする。）

作兵衛　先生様、それぢや、駄目だかね。

宇井　まア落着いてくれ。何とかいゝ方法もあるだらう。まア考へて又來よう。僕一人の考へにもいかんからねえ。

作兵衛　先生様一人の考へで濟む事だア、あの子に取つちや死ぬか生きるかの大事の時でございますだ。

宇井　よく分つて居る。まア出來るだけいゝやうに考へて來よう。まア案じない方がいゝよ。

作兵衛　そんなら願ひを肯いて下さりますだか。

宇井　まア〳〵――ともかく――後で來る事にしよう。

作兵衛　お待ち申して居りますだ。（間）先生様、何故羽織ぬいで行かつしやるだよ、どうしてぬいで行かつしやるだよ。

（と、着せようとする。）

宇井　（作兵衛を斥けて）折角だがね、總て教導職に當る者は、生徒の父兄から一切の贈り物を受けない規則になつて居るし、又その筋からきびしい傳達も受けて居る事だから志だけは有難く受けておかうよ。

作兵衛　先生様、そりや他人行儀と云ふもんでがすだ。わしも家中をすつかり洗ひざらひ話した仲でねえか、どうか着て行つて下さい。それでねえと、わしの志は通らねえだ。

宇井　だから志だけは受けるよ。

作兵衛　だけどよ。

宇井　爺さん、くどく云ふと正式に斷わらなけりあならないよ。

作兵衛　先生様……。

（と、思はず立上る。宇井ぢつと作兵衛の顏を見てソツケなく退場。作兵衛ぢつと羽織を手に持つて思ひ入れ。）

作兵衛　一體、おら、どうしたらいゝだ。

（遠く娘達の唄ふ、踊りの唄。）

――道具廻る――

第一場　濱邊の甲岩

正面遠く沖を見渡したる濱邊。上手に松の立木あり。下手に大なる岩あり。其他波打際より海の中に大小色色の岩あり。濱に引上げられたる船一艘。道具とまる。

（と、下手から正弘と玉太郎出て來て貝拾ひなどをす

る。）

正弘　玉坊、これ、何？　海月だらう。

玉太郎　どれ、海月ぢやないよ。それは海月みたいだけど海牛つて云ふんだよ。

正弘　ふん。僕、角があるのかと思つたよ。

玉太郎　そりや水牛の事ぢやないか。

正弘　さうかい、おやつまらないや。

玉太郎　つまらなかないよ、それは、さうやつてゝも生きてるんだよ、海の中へ入れて突つくと海の水が直ぐに紫色になるよ。

正弘　ふむ、おや、やつて見ようか。

（とやつて見る。）

玉太郎　ほら、ほらね。

正弘　あ、本當だ、きれいな色になつたねえ、面白いなア。

（そこへ、環と、隆弘、傳三、おはまが出て來る。）

おはま　あ、あんな所にゐらつしやいました。

環　まア。

正弘　あ、お母さんが來た、お母さん、僕もう少し遊んでてもいゝでせう。

隆弘　危い所へ行つてはいけませんよ。

正弘　はい。

玉太郎　磯巾着があつたよ、知つてる？

正弘　え、知らない。

隆弘　環さん、あれが玉坊と云ふ子だよ。

環　まア、さうでございますか。

隆弘　なか／＼利口さうな顔をしてるね。

環　さうでございますわねえ、正弘さん、もう少し遊んだら行くんですから、もう直きに迎へに來ますよ。

正弘　はい――。

隆弘　お父さん、房州もいよ／＼お別れですな。

傳三　さうですな、それはさうと、今夜は何時ので行きますかな。

隆弘　七時何分とかのが都合がいゝやうですが――塚口君も、それで行きたいとか云つとりましたよ。

傳三　あの塚口もですか。

隆弘　ハヽ、又お父さんの攻撃が始まりましたな、ハヽ、それぢやも少し後のにしませうか。

傳三　それがいゝです、わたしは、どうもあの男が、くどいやうですが、きらひですよ。

（この時、作兵衛が風呂敷包を持つて、沈みながら登

場。）

（環、傳三は、かすかに驚く。隆弘は不思議さうに見る。作兵衛も不思議さうに見る。双方、氣味合。）

おはま　坊ちやん、もうぢきお迎へに參りますよ。

正弘　いゝよ。

傳三　隆弘さん、行きませう。

（これにて双方、思ひ入れあつて、作兵衛を殘して一同は去る。作兵衛、呆然と考へ込んで立つ。と、そこへ塚口虔三が出て來る。）

塚口　君、（と肩をたゝき）學校は、どの邊かね、知つて居たら敎へてください。

作兵衛　知らねえだよ。

（塚口は、作兵衛の顏をぢつと見て不思議さうに去る。作兵衛思はず風呂敷包を取り落す。と、それを拾つて退場。）

正弘　玉坊、此處にこんなきれいなものがあつたよ。

玉太郎　そんなものはつまらねえや。

正弘　でも、これ珊瑚樹だろ。

玉太郎　あ。

正弘　お母樣に持つてツてあげよう。

玉太郎　そんなちつちやいの、つまらないや。あたいの家へ行きや、もつと大きいのがあるよ。

正弘　もつと大きいの――どの位？　この位？

玉太郎　もつとだよ、この位だよ。

正弘　うむ、おくれよ。

玉太郎　あ、ぢやこれから直ぐ行つて持つて來てやらう。

正弘　あ。

玉太郎　ぢや、直ぐ來るから待つてゝね。

正弘　あ、早く來てね。

玉太郎　直ぐ來るよ。

（と、玉太郎は去る。正弘は一人殘されて寂しさうに歌など歌ひながら、岩を出たり入つたりして居る。と、かうした海岸にはよくあり勝ちな、突發的な潮の激變から見る〱裡に砂地は沈められて行くのも知らずに岩の上に居る。漸く汐の高くなるのを知つた正弘は、只、狼狽と恐怖の爲に聲も出ない位ゐに驚いて立さわぐ。）

正弘　（氣をもんで走り廻り泣きながら）玉坊、玉坊、早く來ておくれ――早く――

（此時玉太郎珊瑚樹の大きいのを抱いて出て來る。そ

の有様を見ると、これも正氣のやうに呼びながら。）

玉太郎　早く、誰か來てよ、助けてくれよ、坊ちやんを助けてくれよ、早く〳〵。

正弘　玉坊、早くよ。

玉太郎　坊ちやん、動かねえでおいでよ、動くと辷り落ちるだからね、今、誰か來てくれるから。

正弘　玉坊、早く――。

（と、泣き喚く。玉太郎も泣きながら、かけ廻つて居たが、既に波が正弘の足を洗ふ迄になつたと見るや、堪へ切れなくなつて手早く着物を脱ぎ捨てゝ、ざんぶと飛び込む。暫く浮きつ、沈みつして居たがやつと岩に達して、正弘を直ちに背負つて立つ。そして、再び激浪めがけて飛込む。波愈々高し。二人は互に抱き合つて救ひを求めて居たが、とゞその聲も細かれ、たゞ汐のうなりだけが不吉な音を立てる。）

――つなぎ――

第三場　再び作兵衛の家

幕あくと、舞臺暫く空虚。と間もなく家の裏手の方から漁師の四五人が玉太郎と正弘の死體を乘せ多くの漁師の男女と共に出て來る。作兵衛はそれ等の人々の中に交つて氣を失つたものゝやうになつて出て來る。いづれも、咳一つだにするものもない。かうした靜寂の裡に漁師達は二人の屍體を座敷に運ぶ。布團を敷くもの、屏風を立てるもの、線香を立てるもの、水を持つて來るもの、と、かうした村人らしい無遠慮の中にも特有のある温さがある。作兵衛は、ぢつと、そこに置かれた玉太郎の死體を見つめて。）

作兵衛　これ、玉坊、何故、お前は死んだゞ、今の今迄笑つて居たゞに、なんだつてそんな姿になツちまつたゞよう。

（人々、貰ひ泣きして泣く。）

漁師甲　とつさん、そりや尤もだ、無理もねえだ。

漁師甲の妻　本當だアよ、小せい生れ落ちるから育てあげた子だ、お前さまもえらい力落しをしたゞな。

漁師乙　それもお前玉坊一人だら、泳ぎが達者だから何でもあんめえが、あんな子供を負つてちや無理もねえだよ。

漁師丙　ありや何處の子だアよ。

漁師乙　養命館へ來てる華族の子だとよ。

漁師丙　なんだつて又玉坊は、そんなのと一緒に遊んだゞ

かなア。
漁師丁　さうよなア、おらな、それよりも癪にさはつてなんねい事があるだよ。
漁師丙　なんだ、一てい。
漁師丁　おめえ、玉坊が死んぢまつたゞから、宮樣の前へ出て言葉讀むなア誰になると思ふだ、あの網元の倅になるでねえだか。おら、それ思ふと、ほんとに腹が立つてなんねいだよ。
漁師丙　さうだ、あの新井の倅になるだなア。いめ／＼しいだなア。
作兵衞（この時顏をあげて）ありがてい／＼。お前樣方にさう云はれると、おら、悲しくて／＼居ても立つても居られね位に思ふだ。死んだ玉坊は可哀想には可哀想だ、だがな、おらア嬉しいと思ふ事があるだよ。（人々作兵衞の顏を見る）いゝか、玉坊が死んだおかげで、今誰かが云つたゞ、網元の旦那とこの倅が、宮樣のとこへ出て言葉讀むとなりや、讀むとなりや——みんな、この濱の者は救はれるだ、お前達は樂な生活になれるだ。おら、それを思ふと、玉坊は可哀想にや違えねえだが、却つていゝ事をしたゞと思つてるだよ。い、いゝ事をしたゞと思つて、せめて、おらア賞めてやりていと思つてるだよ。（と、泣く）
漁師甲　とつさん、お前そりや正氣で云つてるだか。
作兵衞　正氣だとも、こんなに正氣でねえだか。それにな、この玉坊には、誰にも云へねえ事だが、云ふに云はれねえ可哀想な事があるだ。いつか一度は云はにやなるめいと思つて居たゞが、今夜はどうしても云ふべいと思つて居たゞ。それを云ふなア俺にや本當に辛え事だつたが、それを聞かずに死んだなア、せめてもの幸せと云つてもいゝだ。玉坊お前は幸せ者だアな。そればかりぢやねえ、濱の者は皆、助かつたゞよ。濱の者はお前を恩に被るだよ。
漁師丙　そりや、とつさん、いけねえだ。おら達は玉坊がそんなになつて迄も、おら達は助かりたかねえだよ、助かりたかねえだよ。
漁師乙　さうだ、救はれたかねえだ、なア皆、誰が助かりていだな。
（皆々「さうだとも／＼」と口々に云ふ。）
漁師甲　とつさん、もう、そんなにくよ／＼しねえ方がいいだよ、くよ／＼して體でも惡くしちや何にもなんねい

だ。葬式萬端の事は、おら達で相談して心配するだから、な決してくよ／＼するでねえだよ。何事も成行だと諦めおかんじんだで、何を考へねえ方がいゝだよ、のんきにしてる方がいゝだよ、分つたゞかね。

作兵衛　分つてるだよ、分つちや居るだが、これが考へずに居られるだか。

（一同おつと押しだまる。中には泣いて居るものもある。そこへ以前の宇井訓導が慌てゝやつて來る。）

作兵衛　おゝ先生樣、玉坊は、こんな姿になりましたゞ。

宇井　大變な事になりましたね、お爺さん、さつきは本當に失禮しましたよ。あんたや、子供の心を考へず自分の事許り考へてそつけなくしたのは本當に濟みませんでした、實はそのおわび旁々やつて來たのですが、一體どうしたと云ふのです、何か私の云つた事が原因にでもなつたのではないのですか。

作兵衛　先生樣、そんな事がやありましねえだから御安心下さいまし、もう先生樣にお願する事もなくなりましたゞ。どうか線香の一本もあげてやつて下せえまし。

宇井　（傍へ寄つて正弘の覆を取り間違へたと云ふこなしで玉太郎のを取り除いて見て――此の場合正弘のを見ると云ふはかうした場合に於けるある滑稽として可ならんと思ふが故である――）玉太郎君、あんなに元氣な、頭のいゝ快活な子だつたが、惜しい事をして仕舞つたな。（と、涙にくれる。と、そこへ環が、姿を亂して驅けつける。）

環　（しどろもどろに）御免下さい。

作兵衛　（つと見て）おゝ、やつぱりお前樣は環さアだつたゞな、（死體をさして）見てやつて下せえ、見てやつて下せえ。

（環はかけ寄つて、二人を抱き、聲を限りに兩人を呼びて泣く。）

環　玉太郎――正弘――玉太郎――正弘――あゝ、お前達二人は、親の罪を背負つて行つたんだわねえ。

作兵衛　奧樣、死んでも二人は抱き合つて居ましたゞよ、二人は兄弟だつて事も知らずに死んだゞ――奧樣、わたしや何も云ひたかねえだが、何故この玉太郎に一度でも逢ひに來てやつては下さらなかつたゞ、わしや、それだけがうらめしいだよ。何にも知らねえで見なせえ、何にも知らねえで死んだなんて可哀想で可哀想で、おら我慢出來やしねえだ。壽命だと思へば、それまでだが、おら

どうしてもそれが可哀想でなんねえだよ。わしや、お前さまに會つたら先づ第一にそれを云ひていと思つて居ただよ。奥様、お前様はな、自分だけいゝ子になつちまつたゞもんで昔の事を忘れたと見えるだね。そいつは、極道と云ふもんでがすぞ。それぢや世の中は通るもんぢやねえでがすぞ。さつきも濱で會つた時、おら直ぐにお前様と知つたゞ。お前様とは知つたものゝ、直ぐに言葉かけべいと思つたゞが、そりや、さう云ふもんでねえ、どんな事になつてるだかも分らねえと思つて止めたゞ。それと、も一つはな、お前様だつて、人間だ、人間であつて見りや、おらの顔も忘れやしめえ、人間並の血が通つてるだから、今に追つかけてもやつて來るだかといくら振返つたゞか分りやしねえだ。家へけえつたらと思つて見たゞが、やつぱり來やしねえだ。それになんだ、お前様の子供――おやねえ、自分勝手の時にべい來るなんてそりや、お前少し道が違やしねえだか。おらア、本當にうらめしいだよ、うらめしくてなんねいだよ。

環　はい、申譯もございません。

作兵衛　おら、何も謝つて貰ひますべいと思つて云ふぢやねえだよ、――幸と、玉坊はな、村ぢやお前様みていな薄情者にや似ずと孝行の評判だつたし、學校の成績も一番で、今夜、宮様の前へ出て、言葉讀む事になつて居ただよ。おう、尤もそりや父親や、母親の名前が分らねえので駄目な事になつたゞがな。その時、玉坊が、一體、おら、誰の子だと聞かれた時にや、おら、何と答へていいだか途方にくれたゞ。それもお前がわりいからだぞ。イヤおら、お前許りとは云はねえだ、お前のとつさんがわりいからだア。だがな、例へおら、途方にくれても、生きて居てせいくれりや何とも思はねえだが、死んぢまつちやなんにもなんねえだ。おら、ほんとに恨めしいだよ、泣いても泣ききんねえだよ、泣き切んねえだよ。

環　私は、何と申し上げてよいのか、分りません、玉太郎や、正弘や、このお母さんはお前達に本當に濟まない事をしてゐたのです。かんにんして下さいよ、その代り、その代りにね、お母さんはキッと近い内にお前達の傍へ行きます。お前達の傍へ、キッと／＼行きますよ。そして……そして……。

作兵衛　今更、いくらあやまつた所で何にもなんねえ事だ、おら、他の人なら生かして返せと云ひてえだ……。

（兩人よゝと泣く。一同も泣く。）

（そこへ隆弘と傳三とおはまが馳けつける。）

（三人は驚きに言葉もなく死體を見てから。）

隆弘　お丶あなたは、いつかの。

作兵衛　あ、これは御前様だかね。（傳三を見て）やつぱりお前さまも。

傳三　作兵衛さん、私です、御無沙汰をしました。

隆弘　自分共の子供はともかくとして、あなたの御子さんをかう云ふ事にして仕舞つては何とも申譯がありません。

作兵衛　おら、何と云はれたツて、どうしやうもねえだよ。

（此時、塚口が忍びやかに出て来て、様子を窺ふつと、これまでぢつとして居た環は唐突に衣紋を正して隆弘の前に両手をつき。）

環　あなた、私はこの二人の子供の前であなたにお詫びしなければならない事がございます、い丶え、懺悔しなければならない事がございます。

隆弘　なに、懺悔？

傳三　環、そのお詫びなら私からする。

環　い丶え、お父さん、私にさして下さいまし。

傳三　イヤ私にさしておくれ。

環　お父さん、どうか〱、私にさして下さいまし。

隆弘　環！　お父さんもどうなさつたと云ふのです。

環　あなた！

隆弘　何かね。

環　子供は死んで此の母に凡てを告白しろと教へてくれたのでございます、早く安心の地を求めろと教へてくれたのでございます。

隆弘　環、お前はどうしたと云ふのだ。

環　い丶え、どうもいたしません、私は初め二つの死體を見ました時、私は直ぐに死んでおわび申し上げやうと存じましたが、それは却つて卑怯な事だと氣が付きましたのでございます。私は凡ての事をあなたに申し上げて子供達の後を追ひたいと存じます。

隆弘　私には、さつぱり分らん、一體それはどう云ふ事なのだ。

環　（暫くしてからハツキリと）此の玉太郎の生みの母親と云ふのはこの私でございました。

隆弘　えツ。

（と、失心せん許りに驚く。傳三、作兵衛を除く一同も今まで次から次と起る事柄に驚いて居たが、この事

環　（と聞くと、全く驚いて仕舞ふ。）私は自分の汚れた體を僞つて、あなたに嫁いだのでございました、私は今の今まであなたを欺いて居りましたのです。さぞお憎しみ遊ばすでございませう、私はあなたに嫁がない前にある男と結婚いたしました。でも私は、その男に欺かれたのでございます、私は、その苦しさ、恥づかしさから自殺しやうといたしましたのを、いろいろとこの作兵衞さんのお世話を受けまして、その時、こんな情ない壽命を持つて生れたのが玉太郎なのでございます。お邸に上りましてからと云ふもの、今日までその事の爲に日夜苦しまない日とてはございませんでした。披露會の晩に倒れましたのも、その心配の爲でございました。いつか一度お打明けして、お許しを得やうとは思つて居りましたのでございましたが、私は、こんな恐ろしい過去を持つた女だつたのでございます、あなた、お許しは下さいませんでせうねえ。

隆弘　……さうだつたか、イヤよく打明けてくれた、さう云へば、思ひ當るふしもある、――そしてその夫と云ふのは誰方でした。

環　はい、――あの塚口虔三でございました。

隆弘　ナニ、あの塚口？

環　さうです、一昨日も昨日も來て正弘を見てくれました、あの塚口なのでございます。私、もう何もかも申しあげたのでございます。どうぞ、私からなりましたからには、お許しを戴かうとは決して存じませんです、あなたの仰せの通りにいたす覺悟で居ります。

隆弘　環、イヤよく話してくれた、懺悔してくれました…（と傳三を見て）お父さん、あなたも、この事は御存じなのでせうねえ。

傳三　はい、隆弘さん、何と申してよいか、わたしはあんたに申譯ない事をしました。

隆弘　イヤ私は、今になつてあなたや、環を責めるのではありません、又責めたくもありません、只、何故もう少し早く、せめて二人の子供の生きてる前に。その氣にならなかつたか、――然し今、それを云つた處で返へらぬ繰言と云ふものです。私としてはこの場合、何も云ふ必要はあるまいと思ふ。つまり、環、私はやはり、私の信念する道を行けばよかつたのだ、それでよかつたのだ、お前も辛からう、がこの私も辛い、私は七年の間、お前と云ふものを信じ切つて來たのだ、その信じて居たお前

かそんな人だつたとは私には、どうしても考へられないのだ、考へたくないのだ、だが凡ては、もう終りだ、お前にも覺悟はある事だらうね。

環　はい、覺悟はして居ります。

（と、此の時、今迄表に居た塚口虔三がツカ〳〵と入つて來る。）

虔三　ごめん下さい。

（一同は又新しい闖入者に驚く。）

隆弘　あなたは塚口さん。

虔三　さうです、その塚口です、昨日は失禮をいたしました。

隆弘　イヤ、そして、どう云ふ御用件でお出でになりました。

虔三　以前奥さんを欺いた塚口が奥さんの爲に立場を明らかにしてあげたいと思つて上りました、同時にも一度御一考を願ひたいと思つて上りました。

隆弘　御親切はありがたいが、此の事に就てあなたからのお口添は甚だ心苦しい次第です、それよりあなたは、御自分の御子さんの回向でもなさつたらいかゞです。

虔三　御尤もです、然し私は恥を忍んで自分の罪をさらけ出して、一つには私の懺悔と云ふ意味で、せめて奥さんが清い心で、潔白だと云ふ事を申し上げたいのです。どうぞ暫くお聞き下さい。つまり私と奥さんとの結婚が正當であり、私が正直な人間であつたならば、當然永續して居たに違ひありません、夫は決してやましいものではなかつた筈です。所が私と云ふ惡人は、これを裏切つたのです、唯それだけです。奥さんに取つては決して罪でも何でもありません、むしろ、最も憐むべき人なのです。要するに奥さんの罪と云ふのは、その事を今日までかくして居られたと云ふだけです。櫻戸さん、私は古い言葉ではありますが、ある偶然な機會から、本當にこの世の中では、身の幸よりも心の幸が大切だと云ふ事を知つたのです。私は、實に情ない程、冷酷な妻を持つた私は、本當に愛する者が欲しくなつたのです。そして私は一昨日久しぶりで奥さんにお目にかゝつてからと云ふもの、矢もたても堪らなくなつて昨日奥さんに、も一度結婚してくれと迫るやうな醜い事迄してしまつたのです。けれ共、奥さんが、どうしても肯き入れず、私は、以前の秘密を打ちまけて、ぶちこはしをしやうと云ひました時それはいつでも打明ける覺悟だと聞きましたが、私はそ

の時、何故か濟まないやうな氣がしてなりませんでした。今日は何とかしておわびをしたいと考へて居た所へこの出來事です。私がかうして、この場へ來合せたと云ふ事も、死んだ子供がさうさせてくれたのではないでせうか、私に奥さんの潔白を立てろと教へてくれたのではないでせうか、子爵、どうか、もう一度お考へになつては下さいませんか、この通りお願ひいたします。環さん私を、おにくしみになるでせうね。(傳三に) お父さん――(同じく)――櫻戸さん――(と云ひかけるのを)

隆弘　イヤ、折角のお言葉ではありますが、私には私として生きなければならない信念があります。私は只二人の子供が死んだ代りに、美しいあなた方が生れた事を心嬉しい事と思ふだけです。もう何にも仰有つて下さるな。

傳三　では、あの。

環　塚口さん、もう何にも仰有らないで下さい。誰の罪でもありません、みんな、私達が悪いのです!

(と、云ふと、イキなり何事をか決心して飛出さんとする。)

隆弘　環、お待ち！　何處へ行く！　まさか死なうと云ふのぢやあるまいナ。

環　はい。(とふり返る)

隆弘　私は、お前を許す、默つて許しますよ。

環　では、あの私を……。

(と、泣き伏す。一同も愁眉を開く。と、この時、背中に不祝儀の花輪を背負つた男が自轉車を降りて立つ。)

男　作兵衞さんと云ふのはこちらですか。

漁師丙　あ、さうだ。

男　新井さんからです……。

作兵衞　なに、新井の旦那だ。

(漁師の一人がその花輪を受取る。それには「新井」と認めてある。男は直ぐに去る。)

作兵衞　(たまらなくなつて) 玉坊は、やつぱり、えれいだア、この濱の者は皆助かつたゞ。やつぱり一番えらかつたゞよ、えらかつたゞ……お前は、えらかつたゞ……

(と、新しく涙になる。一同思ひ〱に涙にくれる。)

――極めて靜かに幕――

(三・四・二〇)

乳姉妹（五幕九場）

菊地幽芳原作

序幕

登場人名

高濱勇
山口新之丞　小學校長
高林清直　松平家々令
政子　縣知事の夫人
綾子　同令孃
平田久馬　松平家々扶
武田孝　探偵
六浦剛一　醫師
田川君江
田川房江
田川母お濱
女房お高
同お初
同お仙
生徒大勢

和歌山小學校運動場

和歌山なる某小學校運動場の場面。豫てあつらへおりこゝ爰に小學校生徒大勢。中に縣知事の子、綾子・健も居る。房江女教師として今運動場にて唱歌の稽古ある體にて生徒列を正し、君ケ代を唱ふ……幕明く……

唱歌　君ケ代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで。

房江　皆さんもう一度。

唱歌　君ケ代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで。（とこの末に學校の奧にて號鐘なる）

房江　今日はこれでよろしう厶いますよ、皆さんお遊びなさい。

生徒　ワツ〳〵〳〵。（とちり〳〵ばら〳〵におちこちに遊び方々へ入る。房江はこの生徒の間を縫うて捨ぜりふにて皆々所事あり。其間に生徒入る後に房江一人ぶ

ら〳〵して居る處へ綾子出で來り）

綾子　先生。

房江　オヤ綾さんでしたか、毎日よく勉強をなさいますね、お母樣は御機嫌ですか。

綾子　エヽ先生、あたし毎日學校へまゐるたんびに内のお母樣が先生によろしくッて申してをりますよ。

房江　さうですか、お歸りになつたら私からも宜敷くつてね。仰有て下さいまし明日は日曜ですから、又御邸へ參りますよ。

綾子　アノね先生、先生がこの間の日曜に内へ居らしつたでせう。アノ時そら、内へ來て居た鈴木さんのね、アノ子のお母樣が、をかしい事をおつしやるのよ、バラットホームですつてステーションのプラットホームの事を仰有るのよ、バラットホーム、バラットホームですつて、だけども私では直して上げられないから、何時も〳〵高くプラットホームつてお話をしましたの、それでもお氣が付かなくつてバラット、オホ〳〵おゝをかしい。

房江　綾子さん貴女は私が、何時も御話申して居る事をよく御存知ですね。

綾子　エヽ、知つてゐます。

房江　ソレでは綾子さん、貴女はこれから大きくなつて何にならうと思召します。

綾子　淑女、淑女にならうと思ひます。

房江　淑女になるには何うしてなります。

綾子　人に不愉快になる事を言つたり、したりしない事です。

房江　ソレでは綾子さん、今貴女が仰有つたやうに、外の人の間違ひを吹聽するために自分が知つた振りをするのは、外の人に愉快を與へますか、與へませんか、エヽどうです。

綾子　先生與へません

房江　綾子さん、物を知つて居ると云ふのは、渫のいゝと云ふのとは違ひますよ、たしなみが女の第一で物しりと云ふ事は左樣女の身にとつて寶ではありません。眞の淑女と云ふものは物を知らなくつても、物事に行き屆いて思ひやりが能くなければならないのです。ようござんすか。貴女はね、外の方とお話しをしていらつしやる時はよく其の方の事を思ひやつて決して自分の偉い事や何かを考へてはいけません。さうすれば、淑女のたしなみと云ふものは求めずとも、貴女の身に備はるのです、殊に

人の上に立つてゐるもの程、自分を忘れなければいけません、自分の地位が上だからつて自分が其人達よりえらいとか、賢いとかいふ事、忘れても思つてもなりませんよ分りましたか。

綾子　わかりました、先生私の申した事が惡うございました。

房江　さう、よくまア、すぐ聞入れて下さる自分のあやまちを悟りましたね、綾子さん、私は本當に嬉しく思ひます。貴女の御母様に頼まれました甲斐があると云ふものです。うれしく思ひますよ。

綾子　先生、私は先生の言ふ事ならきつと守ります、お母様もさう仰有たし、第一先生私は先生が大好きなんですもの。

房江　綾子さん、私も貴女が大好きですよ。（と互に手を取りあふ事あり、爰へ當校の校長山口新之丞一人にて出で來り）

山口　田川さん、爰においでゝしたか、方々探しましたよ。

房江　オヤ校長さん、ソレは御迷惑でしたらう、何か御用でございますか。

山口　用と云ふ事はないが其……嬢さんも御出でか、縣知事夫人が御出でになつて……御母様が、御出でになつてをります。

房江　縣知事の奥様が。

山口　貴女にお會ひ申したいと云ふ事で、事務室に待たれてございます。すぐお出でなさいお嬢様、御母様が御出でになつて居ます。

綾子　先生お母様が學校へお出でなすつたのですか。

房江　さうでございます。綾子さん一緒に參りませう。

山口　早くお出でなさい、オヽ、あれへ若様がお出でぢや田川さんは爰にをります。（これと同時に縣知事小野田賢通氏夫人、一子健を伴ひ出で來る）

綾子　お母様……

政子　オヽ綾もお出でか、田川さん今日は。

房江　今日は御機嫌よろしく、今日は天氣もうらゝかでございますので學校へ參觀にでも。若様今日は。

健　………。

政子　イヽエ、參觀と云ふ事もありませんが、少し貴女に御相談申したい事もございますし明日は日曜ですから、濱寺あたりへでも御誘を申さうと思ひまして參りますと、放課時間でお見えにならないから校長に探して貰つた處

です。

房江　左樣でございましたか、どうも恐れ入りました。

山口　イヤ、縣知事夫人なぞが、わざ〳〵我學校へ御越しになると云ふは學校始て以來ない事でございまして、實に此上もない名譽で御座います。これも畢竟は田川さんが、貴女樣に見出されて家庭教師に上つてをるからで、やア唯今も茲へ探ねて參りますと御孃樣に何か女のつとめに就て御教訓をなすつてゐる處で、やアこの田川さんは學校中の尤も押出の好い方で、實に生徒が好くなづくので生徒等もやさしい姉を持つたやうで、實に仕合に感じて居るので御座います。

政子　さうです、私處の子供達、いくら仕合か知れません。時に山口校長今も田川さんに一寸相談申した事は貴方にも一應承諾を得なければならない事で、實は夫、知事の內意もあります事で。

山口　ハ、ア、知事閣下の御意と御座いますれば、どのやうな事でも。

政子　イ、エ、別に嚴な事ではないので、實は夫君は北海道廳長官に任命の內意が有りまして、多分來月初旬辭令も發表されるでせう、と思ひます。さうすれば私達この二人の子も北海道へ伴れなければならないので、それに就てゞすね、この田川房江さんを二人の子の家庭教師として御同伴を願ひたい考へですが、貴方の方のこの學校の都合は別に惡い事御座いますまいね。田川さん御相談と云ふのは此の事で御座いますよ。

山口　ハ、ア、北海道廳長官に、イヤそれはどうも、それで御家族一同御引遊ばすに就て田川さんも御同伴、なるほど、それは至極よい御考へで御子樣達も充分これまで馴染でゐられる事でもあり、至極結構で田川さんの爲めにもかゝる處の小學校などに居るより、縣知事公の御邸內で生活をして、御引立を蒙れば行末もこの上の仕合はあるまいと思ひます……いやさう云ふ、思召であればナーニ學校の方はどの樣にも私が處理いたします。なア田川さん貴女にだつてこれ程有難い思召はない、早速御承知をなさいよ。田川さん……どうも奧樣ありがたい思召で、隨て私の名譽で御座います。

政子　學校の方さへ都合がよければ、田川さんは無論御承知をなすつて下さるだらうと思ひます、田川さん貴方は北海道はおいやですか、北海道でも和歌山なぞより開けてをりますよ。

房江　奥様、何とお禮を申しませう、いつも〳〵、厚い思召を蒙りましてありがたう御座います、貴方様も御同伴なれば、たとへ知らぬ北海道でも少しも、いとふ事は御座いません。

政子　御承諾で御座いますか。

房江　私だけは、直ぐ御承諾申上げたいので御座いますが岸和田には母も姉も居ります、殊に母は先日から少々病氣の樣に申して參つて居りますから、一應母や姉にも、相談をいたしませんと、私一存では御返答申し兼ます、母が何と申しますか和歌山へ參る時ですら容易に承諾をしなかつた位で御座いますから、奥様、私は充分參りたいので御座いますが。

政子　なる程、それも御尤もで御座いますね。

山口　イヤ、御尤もの話ぢや、奥様孝心感じ入るばかりです、實に感心だ、奥様私は全く心から田川房江さんを推薦します。

政子　ホヽヽ、貴方は田川さんをたいさう推薦なさる事ね。然し、マア、お内の方とも御相談の上、是非、急に御相談なすつて下さいな。綾子や、健や先生にね、是非にいつて下さいつて、お願申し。

綾子　先生、是非一處にいらしつて頂戴。

健　一處に行つて頂戴。

房江　オホヽ、有難たう、母や姉と相談してお供致しますよ、本當に奥樣御一緒に御伴致したいと思ひます。

山口　ソレア、御伴をするがいゝです。（と語る所へ小使一人電報を持ち來り）

小使　田川さん、電報です。

房江　電報……母が惡いのでは有りませんかしら。（と開封して見てヂット思入れ）

政子　田川さん、何か心配な事ではないんですか。

山口　何所から、何う云うてきたのですか。

房江　校長さん、私御暇が頂きたいのですが、母が危篤だと言つて來たから早く歸つて來いと云ふ姉の君江から電報です。

政子　アノ、御母樣が、マアソレは〳〵。

山口　さうですか、實に御愁傷です、早速に行ておいでなさい。

房江　どうぞ御暇を下さいますやうに。……奥樣心せきで御座いますから失禮ながら歸ります。いろ〳〵支度も御座いますし、汽車の都合もありますから……

政子　サア／＼、御遠慮なしに、さぞ御心配の事でせう。御便りをして下さい、そして其北海道行の話もね。

房江　母や姉とも相談いたします、奥様、校長さま御免下さいまし。（と急ぎ上手へ入る後を皆々見送り居る、やがて知事夫人顔見合せ）

山口　實に寒心感じ入るですなア。（と云ふた木の頭）

政子　本當に、ゆかしい方ですね。

[illegible]子　お母様、あちらへ參りませう。

健　お姉様行かう。（とこの模様よろしく）

——道具廻る——

岸和田お濱宅裏手

お濱宅舞臺上手に納屋（出入口有る）あるべし。道具止まると爰へ近所の女房お初先きにスタ／＼歩いて來る後からお高、お仙出で來り。

お高　お初さん／＼、先きから呼んでるのに返事もしないでサア。

お仙　急に、つんぼになつたと云ふ譯でも有るまいにサア。

お初　何だね、ちつとも聞えなかつたのだよ。

お高　どうだね、お濱さんの病氣はよ。

お初　どうもよくねえよ、今度はむづかしいね。

お仙　さうかへ、今これから見舞に行かうと思つてる所だよ。

お初　さうかへ、おや一緒に行かうよ。（と三人連れ立つて納屋口へ入る爰へ洋服姿の高濱勇出で來り納屋へ來り口笛を吹くと納屋口より君江手に聖書をもち出で來り）

君江　高濱さんですか御待遠樣でした。

勇　ナーニ、少しも待ちやしません。

君江　いよ／＼米國へいらつしやるんですか。

勇　明後日神戸出帆のつもりです、いよ／＼今日がお別になりました。

君江　さうすれば、これからあちらで何うなさるんです。

勇　無論彼方でお話した通り、今度歸れば今迄の主人に頼らかの地面を分けて貰つて、獨立に小作人を使つてやつて行けるのですから、二三年もたてば五千や一萬の金を造らへて、日本へ歸て來るのは譯もない事です。實際米國で富を作るのは日本でするよりは、いくら無造作だか知れません。若し、若し私にして一かどの富豪となる事が出來たら、あらゆる榮華は貴女の足下に捧げます。私は

必らず貴女を幸福にします、貴女の年来の望みを満足させるのです、其代りに何時迄も私を愛して……何時迄も愛して居ると云ふ事を保有て下さい。

君江　ハイ貴方を愛します。

勇　君江さん貴女は固く誓ての約束を守つて下さるでせうね、私の身は全く貴女の爲めに生きてゐるのですから。

君江　ハイ約束を守りませう。

勇　ソレでは、貴女と結婚の約束をした記念にこれを差し上げます。（と函の指輪を出す）これはダイヤモンドの指輪です。

君江　エヽ、ダイヤモンドの指輪ですつて　まア立派だこと勇さん、これア本物でせうね、私本當のダイヤモンドを持たうとは夢にも思はなんだでした。

勇　この指輪を貴女に上げる代りに誓て貴女も約束してある、貴女の方から何か頂戴しませう。

君江　私のは、つまらない物ですよ、これ……と誓書を出す）

勇　誓書ですね、うむ、つまり貴女が神に誓うて云ふ事ですね。

君江　はい、さうです。

勇　有難う、納めます。

君江　餘り長く居ると人にあやしまれますからね。

勇　私が此の國に居るのも僅かに二日です、二日でも今日貴女に別れるのですが、何だか私の留守中に貴女が心變りでもしまいかと私は氣が氣ぢやないんです、君江さんもう一度誓て下さい。

君江　はい、決して心變りはしません。（同時に奥にてお初の聲として）

お初　君江さん。

君江　はい……それぢやどうぞ御機嫌よろしく。（と行かうとする）

勇　もし、一寸貴女は私を欺したりなんかなさらないでせうね。もし假りにもさう云ふ事が有つたら、どんな恐しい結果になるかも知れませんよ、私が善人になるも惡人になるも貴女の信不信一つですから、君江さんお忘れなすつちやいけませんよ、私は貴女に欺れたらおそらく發狂するでせう。發狂する前に死でしまひます、死ぬといつても私一人ぢや死にません。貴女がどんな闇にかくれて居ても屹度、屹度探し出して思ふさま復讐しますよ……いゝですか、其の上で私は死ぬのですよ。

君江　あら、勇さん何だつて、そんな恐ろしい事は云はないで下さい、氣味がわるいぢやありませんか。

勇　私は、情に鋭い男ですから、餘計な想像の爲に眞實をつくして下されば、私はどんな男にも負けずに貴女を愛します。そんなら君江さん貴女は如何なる事情が有つても、私の外には夫を持たんと誓つて下さるのですね。

君江　はい。

お初　君江さん。

君江　はい、今行きますよ。

勇　それでよろしい、私の心底が、分ればそれでいゝです、先刻から、しきりに呼んどる、入らしやい。

君江　はい。（と云ひ乍ら、高濱を見てじぎをする時、納屋の口よりお初顔を出し）

お初　君江さん、お母アさんが、たいそうわるいんですよ早く入らつしやい。

君江　はい唯今……（と云ひ乍ら高濱を見て又もじぎをして納屋へ。お初は高濱を不審さうに見て入る。高濱納屋まで行き一寸立留り思入ありて、高濱去る）

――道具廻る――

同宅お濱の臨終

道具止ると、お濱宅の二重家體にて上手障子、家體の内にお濱横臥、其下に君江、お高、お仙坐し居る。お初は臺所掃除のつもりにて家體奥に居る心。

お高　本當さね、こんなに急に惡くならうとは思ひませんでしたにね。

君江　どうも、不意に起つたんですから困つてしまひますの。

お仙　何ですか、房江さんには知らしておあげなすつたんですか。

君江　えゝ、先刻電報をかけて置きましたから、おそく共今日中には和歌山から着くだらうと思つてますの。

お高　何しろ貴女ばかりでは心細いから、せめて房江さんでも早くきてくれなくつちや困りますね。

君江　本當に心細くつて仕樣がありませんよ。

お濱　お初や、先刻先生からお藥を頂戴して來てあるかやお初や／＼。（と此の内お初藥びんを携へ出で來り）

お初　先刻頂戴して參りました。時間も丁度好いでせうから御上げなすつて。

君江　さうしませう。（と藥びんを受取りて、お濱のそばに進み）もし／＼お母さん御藥を召し上れ。（と起す、お濱起き上りて）

お濱　おう、お藥かえ、頂きませう。

お高　お濱さん、おかげんは如何ですかえ、私たちも心配しましてね、今見舞に上つたですの。

お仙　急におわるくなつて、お困りでしやうね。

お濱　どうも、年の加減で仕方がありません、今度は私はとても駄目だらうと思つてゐますよ。

君江　お母さん、そんな心細い事を仰有ると私は悲しくなつて仕樣がありません。

お高　なアにね、お醫者もついてゐるし、今日なんかはそんなに顏色も惡い事はないんですからもう直きに治りますよ。

お仙　御病人なんて者は、さう苦になさらなくても好いのですよ。何でも他たまかせにして置かなければいけません。

お濱　皆さんまでに色々心配して頂きまして、誠にすみません。君江や、房江の所へ直ぐ來る樣に言つてやつたかえ。

君江　はい先刻電報を學校まで、かけておきましたから、もう直に來るだらうと思つてをりますの。房江だつてあんなやさしい人ですもの直ぐ何事を置いても來てくれるに違ひありませんよ。

お濱　私も、もう今日か明日かと思つて居るから、早く房江に言ひ殘したい事があるのだが。

君江　今日か、明日かなんて仰有らなくつてもいゝぢやありませんか、もう今日の內には房江さんも來るに違ひありませんよ。

お濱　早く歸つて來てくれゝばいゝのう。

お高　そんなに、心配をなさらない樣にしておいでなさいましよ。

お仙　君江さん、あなたからよく／＼仰有つて、やき／＼お思ひなさらぬ樣にしてお上げなさいよ。

君江　それは、言つてゐるんですけれども本當に困つてしまひますわ。（と云ふ內、お濱少し苦しむこなしにて）

お濱　君江、房江さんは、いえ房江はまだ來る時分ではないかえ。

君江　さうですね。まだ仲々來ますまいよ。

お濱　早く來てくれると好いがね……。

君江　そんなにせかなくても、晩方までには、乾度歸つて來ますよ。

お濱　もし、房江が早く歸られないとすれば、あの子には私の死ぬ前に言うて置かねば、すまない事があるのだから、お前に內々で話して置くから、お前から房江によく話して聞かしておくれ。

君江　何ですね、遺言みたいな、縁起でもない。

お濱　いや〳〵、さうでない、死ぬ前に一言あの子に言ふ事が有るんだから、それをお前にたのむで置くのだよ。

お高　君江さん、私達は又後程參ります。

お仙　お濱さん、折角お大事になさいましよ。（と兩人は辭して入る）

お濱　君江、お高さんや、お仙さんはおかへりなすつたかえ、お初は何所に居ます。

君江　臺所に居ます。

お濱　其所には誰れも居ませんか。

君江　はい、だれも居りません。

お濱　君江や、房江にあつて打明けねばならぬと云ふは、あの子の身の上の事だがね、とても今夜房江が歸つて來ても話しする事も出來ないと思ふから、お前に今打明けるのだよ。お前も乾度、お前だけの祕密にして、房江に傳へておくれよ。君江、小簞笥の中に鍵があるから、戸棚の中を開けて其中から、小さい箱を出して來ておくれ、ねえ、君江。（と君江其の通りにする。お濱開けて取出す。眞珠の指環、髮の毛、守袋、二三通の手紙）これはみんな……これはみんな房江の物だから、お前から房江にやつておくれ、そしてお前よく聞いておくれ、お母さんが十六年この方胸に包んで置いた祕密を打明けるからようくね、聞いておくれ、君江や、あのう、房江はね私の子ではないのだよ。

君江　えゝ、お母さん、それは……それは本當ですか。

お濱　お母さんは、死際に何でうそを云ひませう、私の子と云ふのは、實はお前一人つきりないのだよ。

君江　それでは、房江さんは誰の子なの。

お濱　それを、今から話すのだよ、もし息のある內に房江に逢へなんだら、お母さんからお前に云うた通りを房江に話しておくれ。元東京にね、眞野順造と云ふお金持があつてね、あるひいきで、私が十二三の時行儀見習の爲小間使に上つてゐたのだよ、私は三年ばかり奉公してから暇を取つて、お前のお父さんの所へ縁付いたので、亡なつ

た兒さんを生むと、間もなく眞野樣でもお孃樣がお生れ遊したの、けれども、乳がないと云ふ事なので、乳母に上つたの、そのお孃樣が御成人遊ばしてから、秘密の結婚を遊ばして一人の御孃樣をお生み遊ばしたけれ共、其孃樣の秘密の結婚遊した方と云ふのは、假名を淺野海軍大尉と仰有つて、臺灣で御病氣におなり遊したものだから、其孃樣はお子樣を私の所へお預けなすつて、臺灣へお出でになる途中で難船してお亡なり遊ばしたの。其私の預かつたお子樣と云ふのが、今の房江……いや房江さんだよ。然しこの事は、私の外は誰も知つてゐる者はないのだから、房江さんに、さう言つて聞かしておくれ、そしてこの小箱の中の髮の毛、指輪、手紙を乾度房江さんに渡しておくれ。それで私の今いつた通り、房江さんに話しておくれ。房さんのお父さんは淺野と云ふのだよ。海軍大尉で假名だよ、本當の名は何と云つたか、私も知らないけれ共、何でも日本でも名高い、立派な華族樣が伯父御に、あらつしやると云ふから、これもよく房江さんに話しておくれ。

君江　へい、それでは房さんは華族の御孃樣でせうか……まア房江さんは仕合せね。（とぢつと思ひ入れ）

お濱　君江や、私は最後に言ひ殘して置くが、お前は、どうも派手好きで、いつも身分不相應の慾を持て居るが、それを愼まなければ、どんな不幸な事になるかもしれませんよ。お母樣は追付墓場の土と成つてしまふのだが、お前も遂には其の通りになるのだよ、榮耀榮華をして暮しても、それが何時迄も身についてゐるものでは、決してないものだよ、百姓でも、漁師でも正直に身分相應に暮して行けば、神樣が護つて下さるから、お前は決して由ない心を起しておくれでないよ。これからは何事も好く房江さんと相談して力を借りるやうにすれば、房江さんは、たとへ自分の素性が知れたからとて、お前にうとくするやうな子ではないから、實は勿體ない乍ら姉妹の積りで仲好く一生幸福に暮しておくれ。あゝ、苦しい、これだけは殊にお前に言つておくよ。あゝ、君江、薬を一つ飮ましておくれ。（とだん／＼苦んでくるこなし）

君江　お母樣。お母樣何うなすつて。あれ、あれお初や早く來ておくれ。お初や／＼。（と大聲、お初入り來り）

お初　何んでございます？　おや、お袋樣が、どう致しませう。

君江　はや、早く御醫者を呼んで來ておくれよ、早くさ。

（とお初、早足にお醫者を迎ひに往く）お母様、しつかりして下さいよ、お母様〳〵。（と君江うろ〳〵する事あり、其内そこへ置きたる小桶に氣がつき、これを戸棚へかくす事あり。爰へ醫者を先きにお高、お仙、お初入り來り、捨ぜりふにて、醫者診察する事あり。）

大浦　これは、到底駄目です。絶命です、手のつけ樣がありません。

君江　もういけませんでせうか、注射でもしたら如何でせう。

大浦　いや死體でもあり、注射をしたら一時回復はしますが、先づこれで絶命と言つて差支はありませんなア。

お高　本當に御氣の毒な事ですね。

お仙　お可愛相にねえ。（と君江は其所につゝ伏してよゝと泣く。時に向うより車にて房江出で來り家内へ入りて。）

房江　姉様、唯今、御母様は……。

君江　房さん、お母様は、たつた今お亡くなりなすつたの。

房江　えゝ、お母様は、た、唯今、お母様〳〵〳〵。（と泣く事あり）姉様お母様はさぞ、私を尋ねてお出でしたらうに。

君江　えゝ、もう房江〳〵つて二度も、三度もおたづねなすつたのよ。

房江　さうでしたか、會ひたうございましたねえ。あなたにばかり心配さしてすみませんでしたねえ。

君江　本當にお母様は房江さんに會ひたがつてよ。

大浦　何にしろ、なげいても仕方ない、御年が御年ぢやから御斷念が、かんじんです、いづれ診斷書は後から持たして、よこしますが、何でも後の始末が肝心ですから、いづれ又後程。

お高　これぢや私共も宿へ歸つて皆なに知らせます。

お仙　君江さん、房江さん又後程お手傳に參ります。とも角玆の所へ屏風か何んかで圍ひませう、お高さん一寸手を貸して下さい。（とお高、お仙の兩人にて世話をし屏風を立てなどして去る、大浦も去る、後に姉妹さし向ひ）

房江　姉さん、これから二人、どうしたらいゝでせうね。

君江　さあ、私だつて途方に暮てゐるのだよ。

房江　私は、和歌山の知事さんが、今度北海道へ入らつしやるので是非私に家庭教師に來てくれつて仰有るんですから、お母様がかう云ふ事に成つた上は私はまア、其方へ參るとしても姉さん、貴女どうなさいます。

君江　あたし、だつて何うして好いか、分らないけれども、房さん、私ね房さんに今だから云つて置く事があるの。

房江　姉さん、何んな事なの。

君江　あのね、それは私の身の上の祕密よ。誰も知つてる者のない祕密よ、當人の私さへ、今迄知らなかつたんですもの、あのね、房さん、私は亡なつたお母樣の子ではないんですと。

房江　お母樣の子ではないつて、本當ですか。

君江　うそではなくつてよ、今しがたお亡くなりになつた、お母樣が仰有つたの。それに立派な證據の品なんかもあるんですのねえ、房江さん、私とお前さんとは眞實の姉妹ではないんだけれども、何日迄も姉妹で居ませうね。これ迄通り仲好くお互に、力になる事にしませうね。

房江　えゝ、姉さんと私と本當の姉妹でないのは悲しい話ですね、けれども外にたよる人もないんですから、矢張り姉妹だと思つて下さいなねえ。

君江　お母さんも、お亡くなりになり、房さんが北海道へ行くやうになれば、私も何とか、身の振り方を付けなければならないが、それは、まア、お母樣のお葬式でも濟んでからの事にして、今日は、まア、お母樣にお線香でも立てませう。

房江　本當に斯うお亡くなりに成つて後で考へると、お母樣のない、此後が心細くつてなりませんよ。（と兩人立上り佛壇に線香など點す。上手家體の內へ入る。此時下手より、家令高林、家扶平田、探偵武田三人打連れ來り）

武田　高林老人、茲が令孃の御住居になられる所です。

平田　私が案內を乞ひませう。（と入り口にて）　賴まう賴まう。（とお初、奧より出で來る）

お初　どなた樣で、どちらから。

平田　私どもは、こちらのお濱殿に、ちとお尋ね申したい事があつて、東京から、わざ／＼出て參つたのですが、唯今御近所で承れば、お濱どのは今しがたとか、お亡くなりに成つたさうで、就ては、そのお娘か、お出と聞きましたから、もし御在宅ならば、御面會を願ひたいと心得て參りました者、どうぞお取次を願ひたいのです。

お初　おや、さうでございますか、一寸お待ち下さいまし。（と內に入り大聲にて）　君江さん／＼。（と呼ぶ、君江は立ち出で）

君江　何だね、初は、大きな聲を出してさア

お初　一寸大變ですよ、お前さんに、何か尋ね事があると云つて、三人の立派な方が尋ねて、お出でになりましたよ。

君江　三人立派な方が、私に尋ねたい事があつて、さう、それでは直ぐお目にかゝります、と云つて、此に御遠慮申して、私は一寸奥へ行つて來ますから。（とお初心得、君江一たん奥へ入る）

お初　唯今、お目にかゝりますから、どうぞこちらへ。

（ト三人は中に入る。君江、奥より出て、あいさつあり）

高林　私共は、東京芝高輪に居られまする、松平侯爵家の者で、今般當所へ罷越し、御當家へ訪れましたは、當主侯爵様が御壯年の頃、設けられたる御姫様を、御當家のお濱どのゝ所に、御養育下されて居る由、これなる武田探偵殿によつて、侯爵の思召を受けて、吾々が御迎ひに參つたのですが、貴女が其お亡くなりなされた、お濱どのの御娘御でございますか。

君江　はい、私が其娘でございます。

高林　御名は、何んと仰有います。

君江　君……眞野君江と申ます。

高林　お濱殿は、田川お濱殿と承りましたが、何故、眞野とお名乗りなさいますか。

君江　母方の姓を名乗るのでございます、實は遂ひ今しがた、乳母が亡くなります迄、私は何にも知らずに、お濱の子とばかり思つて居たのですが、今しがた、其話を聞きまして始めて、私の素性を明してくれました。其上に亡母の記念迄渡してくれましたのでございます。一寸仔細が、ありまして、父の名は存じませんが、父の方では多分、私の事は忘れて了つたものと存じます。

高林　成程、いや私共の貴女にお尋ね申したいと申すのも實はその話でございます。就てはお濱殿からお聞き取りに成つたと云ふ、その詳しい御話しを伺ひ、又記念の品も拜見したいものでございます。

君江　はい畏りました、其記念の品は唯今取つて參ります。何卒、暫く御待ち下さいまし。（と奥へ入り、品物を持ち出で來り、そこへ置き）一寸伺ひますが、この品品は、いはゞ私に取りましては、親子の間の結び綱でございまして、容易に人に見せる事の出來ないものでございますが、この品をお調べになる、貴君方、及び貴君方に仰せ傳へに成つた方の、御身分、御姓名を伺ひたいものでございます。

高林　はゝ、成程、私共は先刻も一寸申上げました通り、東京芝高輪に住居遊ばされる侯爵松平照定様の家令、私が高林銀之進。

平田　私が、家扶平田卓馬。こちらが事件に付て盡力せらるゝ刑事武田信一君でございます。

君江　左様でございますか、それでは其松平様は私の父上で、さうして私を引取らう爲に貴君方は、御越しになつたのでございますか。

平田　左様でございます、貴女と云ふ、立派な令孃の存せらるゝ事を御聞き遊ばしたら侯爵様も、さぞかし、御喜びでございませう。

高林　いや、篤と、令孃の御話を承り、證據の品も拜見いたしませう。

君江　御話しと、申した所で至つて短かう御座います、お濱は母の乳母もいたして居りましたのださうで、母が成長いたしまして、何日頃かは存じませんが、私の父と秘密結婚を致ましたと云ふのですが、乳母は私の父が、淺野海軍大尉と云ふ假名の外は何も知りませんとやら、乳母の話では、父上の身の上に就ては、何の手がゝりもないさうです。處が或る年、私の未だ、物心もつきません頃に、臺灣で病氣に罹り母は看病に、おちおちく爲めに私を乳母のお濱に預けて出發致しましたさうしました處が、不仕合にも母を乘せた船が、難船致しまして、母は死んでしまひましたさうでございます。その時から今日迄、父からも、又母の友達からも何の便りもありませんので、私は全く世に忘れられた身の上と成つてしまつたので、死際まで、その事を私に秘密にして居りましたものと思ひます。

高林　御話しは逐一分りました、して、記念の品と仰有るのは。

君江　はい、これでございます、父が母に與へましたと云ふ、此手紙がございます。（三人にて眞珠の指輪、髪の毛、等を持ち見る事あり）斯樣な記念を與へて置き乍ら、父が今日迄私を等閑に附してお置きになつたとは、實におうらみがましい事と存じ升が、父と申しますのは、其松平照定とか仰有る方なのでございますか。

高林　左樣で御座います、今は少しも疑ふべき處もございません。貴女の父上が母上と婚禮なされた頃は、單に海軍大尉松平照定と云ふ、無爵の軍人でありましたが、今日では侯爵閣下と仰せらるゝ世にもかくれもない方で、

貴女こそ、侯爵の一人娘で入らしやるのです。

君江　それでは、私が松平侯爵の……左樣でございますか。（とがつくと思入れ泣く）

高林　斯く事實判明致ます上は、何卒か一日も早く、御上京あつてお父上侯爵樣に御對面遊ばすやう。お父上は貴方ばかりでなく、貴女の母上をどれ位、深く愛して入られましたか、一日千秋で待つておいで遊ばすのでございますから、直ぐ明日にでも、あちらへ、お越しを願たいと存じまするが。

君江　はい、私も未だ見ぬ父に早く會ひたいとは思ひますが。何分乳母が死んだ間際でも御座いますし、永年養育をうけました事故、相當の葬儀を營んでやりたうございますから。

高林　いや、お情深い御言で、これは然るべき事と存じます。侯爵樣へは私から、電報を以て、此由申上げまして葬儀には私共も共に御手傳ひ申します考へで。

君江　何うぞ、よろしく願ひます。

高林　其上に日を定めて、御上京の件を仕ります。今日は御取込中でもあり、我々は一と先づ旅館へ立歸りまして、又明日か今晩、御通夜に伺ひます。然らば御免下さいますやう。（と三人は辭儀して捨ぜりふよろしく入る。後に君江は、茫然として考へて居る、處へお初出で來り）

お初　君江さん、まア、驚きましたわねえ。貴女は華族樣のお孃樣ですつて、えらい出世ですねえ。

君江　まア、何んだつて大きな聲を……房さんは……。

お初　奧にお出でゞすよ。この事をお聞きに成つたら、さぞ、びつくりなさいませう、呼んでまゐりませう。（と行きかけるを呼止めるを木の頭）

君江　一寸お待ち、いよ〳〵今私が往つて話をするから。（と上手家體、思入あり。野心勃乎として、押へがたき科にて）

――幕――

二幕目

登場人物

松平照定　侯爵

松平照信

綾小路公任　大尉

三室滋

戸田氏廣　男爵
松平君江　令孃
田川房江
華守百合子　男爵夫人
其他來賓大勢

高輪御殿觀楓會

上手に東家あり、下手一面の紅葉ある高輪御殿觀楓會の場、爰に紳士戸田男爵、松井子爵、花園伯爵、杉山男爵、松尾中尉、狹川外交官、東條中尉、其他の若紳士等、東家の中に、貴夫人令孃、甲乙丙丁等、下手紅葉の下に各々談話中、爰に松平照信は妹君江を連れ、向うより出で來るを女子連の者見付け。

甲　おや、照信樣に君江樣、今日は、わざ〳〵御招待下さいまして有難う御座いました。

君江　いえ、皆樣お揃ひで、よくこそお越し下さいました、何の風情も厶いませんけれ共、せめて天然の美色をお樂み下さいますやうに。

乙　えゝ、先刻から、お庭の景色を樂しむでをりました。

丙　然し、私達よりは貴女こそお樂しみね。

君江　それは、皆樣が斯うして來て下さるから。

丙　あら、さうだや、ないんですよ貴女はね。（と照信を指して）お一緒で、嘸かしお樂しみ。おほゝゝゝ失禮、皆さん入らしやいよ。（と笑ひ作ら入る）

君江　厭な方だわね。本當に。（と照信は平然として、又も兩人にて上手の方へ往かんとする時東家の内より先の若紳士の一連出で來り）

戸田　おい、松平君、御夫婦お揃ひで歸らん顏の素通りは罪だぜ。

照信　おゝ、誰かと思つたら戸田君か冗談にしても、そんな事を言はれちや困るぜ。

戸田　何が冗談ぢや、皆な評判をしてゐるぜ。なア、君、かくしたつて駄目だぜ、松平照信君と、松平君江さんとは隱然夫婦的關係が、あると云ふ事は公然の祕密だからね。あんまり見せつけるはひどいぜ。

松井　今日の招待は觀楓會ではなくつて、君等二人の濃艶なる色合を見せる積りなんだらう。

照信　おい〳〵、君等は直ぐ、そんな卑劣な眼で人を見るから困る、僕が妹をつれて居るのが、君等には何と見える

のだ。君等も社會の上流に居たから、まさか紳士淑女を侮辱するやうな言葉を吐て快しとする譯でもあるまい。

戸田　いや、さう何もむきになつて怒らなくつてもいゝ。いや、僕は全く悪るかつた。氣にされちや困る。失敬失敬。おい、彼方へ往かう。怒るな〳〵、冗談ぢや往かう往かう

照信　失敬な。

君江　見慣れぬ方ばかりですね。

照信　どうも、實に無作法な人間ばかりで困りますね。さぞお迷惑でしたらうね。

君江　いゝえ、私は、ちつとも、何とも思ひません。今日は、貴方と二人ですから、あんな事を言はれると、私一人の時などは友達などが、色々な事を申しますの、それも尤だと思ふのですよ。

照信　なぜ、尤もですか。

君江　だつて、お邸の者でも皆な、色々の事を申して居りますもの。そして父様や、祖母さまはそれをご存じでもお叱りはなさらないので厶いますよ。

照信　えゝ、邸の者が、皆噂をして居る、父上も・祖母上も、それを聞遁して居らつしやる、ははあア、全體どう云ふ事を云つてるのです。

君江　はい、あの、それは何ですの唯今戸田さんや、何かが仰有つたやうな事を。

照信　戸田などの云うたやうな事、戸田などの云うたやうな、それでは貴女と私との間に不潔な事でもあるやうに。

君江　いゝえ、さう云ふ事は申さないやうで厶ますけれ共、あの、私が貴方の夫人になるやうな事を……。

照信　貴女が私の妻になると云ふ事を申すんですか。さう云ふ事を邸の者までが・噂をして居るのですか。むう……それあア、實に困りましたね。何とかしてさう云ふ噂などは禁じて了はなければなら。邸の女などが云つて居る位なれば未だしも、これが世間へ擴がる事にもなれば互の將來に餘程、面白くない結果を來します。第一貴女の身を定める爲に非常な妨害になるぢやありませんか。

君江　もう、世間でも皆さんが、さう思つていらつしやいますわ。

照信　皆、世間でもさう思つて居りますつて、本當にさうですか、君江さん私は貴女に對してなすべき事をして居るのですから、一點のやましい所もなかつたのです、併

しそれが世間の噂に上ると云ふ事なれば、お互に迷惑しなければなりません。私はこれから注意する積りですから、此際貴女も注意して下さらなけりやア困ります。貴女が既にそんな噂を聞いておいでになりながら、今日まで、それを等閑に附してると云ふ事はない筈ですが、いやそれは、それとして君江さんお互に誤解をして居るやうな事があると、將來で面白くありませんから、よく私の意中を打明けて置きますかね。私は今も云つた通り、どこまでも貴女を妹として愛し貴女の幸福を謀るためには及ばず乍ら、出來るだけの事をします、妹としてです、よろしいか、貴女もどうか、私を不足ながら、貴女の兄として愛して下さい、貴女と私と嚴重に、この區別を守れば今まで斯うして我々が虚心平氣で歩いてゐても、他から見て、別種な意味が有るとすれば、互に相並んで散歩する事も出來ん譯です。君江さん私は先へ別れて邸へ入ります。（と突然として入る、君江後を見送り、うらめしさうにして居る。やがて袖をもち顔をおさへて泣く。この時侯爵物蔭より出で來り、君江の肩をうちて）

侯爵　こりや、君江々々。

君江　おゝ、お父樣。

侯爵　そちや、何を泣いてるのぢや。こりや泣くには及ばぬ。ふらちな奴ぢや、其方程の女子、しかも利發な其方が、泣くとはよく／＼思込んでゐるのであらう、よし、わしがよう得心のゆくやうにしてやる、幸ひ、照信と話はしてやる、少しも心配する事はないぞ。

君江　お父樣、どうぞ宜敷、私は本當に情けないと思ひますわ。

侯爵　わしとても、全體照信と、それと一緒にせようと思つて居たのに、なぜ照信は、あゝ申すのか、思ふに米國へ往つて來たせゐぢやらう、心配せずともいゝぞ。

君江　はい、有難う厶います。（と爰へ綾小路大尉出で來り）

綾小路　おゝ老侯爵も君江さんも茲にお出でゝしたか。

侯爵　綾小路さんか、今日は遠路をお出で下すつて有難う。

綾小路　いや、わざ／＼お招待下すつて、かゝる好風景に接するの榮を得まして實に嬉しく思ひます。君江さん實に見事な紅葉ではありませんか、春の花の妖艶はなくとも實に淸楚たる氣に滿ちて居りますなア。秋の風物は好きですが、殊に紅葉は大好です、私は今日この滿座の紅葉の中で貴女方と御話の出來るのは實に光榮です。

君江　御ほめで却つて恐れ入ります、紅葉も大分美しくなりましたが、これで水の清い流れでも有りましたら結構ですけれ共。

綾小路　いや水はなくとも結構です。

侯爵　綾小路さんは、佛國の公使館付であつたから、外國の風物の美しいのも大分御見物なすつたらう。佛國あたりでは、こんな紅葉は賞美しませんか。

綾小路　賞美せんと云ふ事は有りませんが、餘り顧は受けませんやうです。よし有りましても砂糖を作る位に留めて紅葉の美しさを知らんやうです。多分水蒸氣の加減で紅葉の仕方がちがふと見えますなア。（と語り居る時小間使一人出で來り）

小間使　御前様、先刻お申付の事、出來いたしましたと、高林様が申上げてくれと申してをりました。

侯爵　左様か、今參る、綾小路さん一寸失禮、君江、お相手をなさい。（と言ひ、侍女と共に入る）

綾小路　君江さん、近頃どうですか、暫くお目にかゝらんでしたが、伺へば貴女は照信さんと御結婚なさるやうに決したさうですが、本當ですか。

君江　いえ、未だ決した事は御座いません。

綾小路　專ら、世間では、さう云ふ噂ですが、實際さうでは有りませんですか。

君江　決定しない事はないんですけれ共、未だ發表にならないのです。

綾小路　決定しては居るが、發表はならん。君江さん、それア、事實ですか。君江さん貴女は何う云ふ、冷酷な方です、私が貴女を慕ひをる事は、貴女もとうに御承知でおいでになる、私が再々申上げて有る事、今更、くどく云ふのも赤面の至りだが、今日まア、貴女に愛を囁く事が出來んとすれば、全く失戀の人と成つてしまふ、貴女は私をあはれと思はんですか。鬼をもひしぐ軍人が、一婦人の爲に心をなやめると云ふ事は、あまり聞えのよくない話だが、私は貴女を、どれ程慕うてをるか、君江さん、くどくは言はんが、照信さんとの間は未だ發表にならんとすれば、取返しの付く話ぢや。今一應思ひ返して下さらんか、君江さん、どうです、私の眞情がわかりませんか。

君江　私のやうな者をそれ程に、思召して下さるは實に有難う厶いますが、照信さんと、私との結婚は私の意志によつて曲られません。えゝ父上の思召しで厶いますから。

綾小路　けれ共、結婚は強請的には出來んものですから。

君江　いえ、父の意許でも厶いません。私も同意して居るので。

綾小路　貴女も好んで結婚をなさるの……

君江　貴方が私をそれ程、御慕ひ下さると同じやうに、私は見照信を心から、戀慕うて居りますので。

綾小路　えゝ何んと仰有いますか。

君江　貴方と私とは、到底結婚すると云ふ譯には參りません。

綾小路　君江さん實に失意の人となりました。私は今は日本に居る勇氣もありません、私は斷じて外國へ赴きます。

君江　えゝ、外國へお出でになります。

綾小路　失意の人と成つて外國で餘生を送ります。然し君江さん、私が貴女の爲めに戀を斥けられたからと云うて、私は貴女に對して敵意は持ちません。貴女は一旦は私の意中の人、意中の人に向つては、私は命を捧げて盡します。（と云ひ放して入る。君江不快の色を以て見送る、ふと見れば人來るけはひす、木蔭に身をかくす。爰へ葉守夫人、三室繁の兩人來る、東家へ入り）

三室　さア、百合子さん、いや夫人今御願申した事は一體どうして下さいます。

百合子　だつてそれは、あんまりひどいでは御座いませんか、私には良人に内證でそんな金は出來る譯はないでは厶いませんか、もし貴方今頃そんな事を仰しやるのは、そりや、あんまりで厶います。貴方も立派な紳士ではありませんか、そんな脅迫を遊ばすとは、まさか本氣で仰るのでは厶いますまいね。（三室は泰然として、何か手にせる。數通の手紙やうの物を百合子に示しながら）

三室　夫人貴方は此手紙が御入用ではありませんか、御返事をなさい、御入用ならば賣つて上げようと申す迄、丁度私も金のいる事がありますから、その御相談をするのです、どうです夫人。

百合子　だつて、五百圓といふ金が、私の手で、私はどうしても出來ません。

三室　出來ないと仰しやれば、私の方に考へが有ります。

百合子　どう、遊ばすつもりです。

三室　どうするも有りません、貴女が買はんと仰しやれば、葉守男爵に買つて頂きます。男爵は定めて御入用だらうし、萬一男爵が御不用とあれば、男爵の母堂に買つて頂くまでの事です。

百合子　そりやア、あんまり、あんまりで厶います、貴方がそんな恐しい方とは今が今迄は、存じませんでした。娘の無分別に書いて上たものを種にして、そんな脅迫を遊ばすとは、貴方はあんまりです、そんな手紙が有りましたとて良人は許して異れますけれど、姑にそれを見せられては私は生きては居られません。私貴方に是程迄を受ける覚えは厶いません、そんな、残酷な事をなさらずとも……

三室　残酷か、どうかそんな事は私は知りません、唯手紙を買つて上げるか、どうですと云ふだけの話です。

百合子　けれ共、私は今更に左様なお金は才覚してはをりませんから。

三室　それなら、お邸へ上つてもいゝですよ。

百合子　邸へお出でになります、貴方はまあ、づう／＼しい。

三室　づう／＼しい、どちらがづう／＼しいですな、約束した男を振り捨て、他の栄華に迷うて嫁付く女ほどづうづうしくないです、よろしい、それは兎に角お買ひなさるでせう。現金でなくてもよろしい。今貴女がはめておいでになる、その指輪と金時計とで、まけて上げませう否やなら敢て賣りますまい。

百合子　一寸待つて下さい……それではこれを差上げます。

三室　さう、潔よく、お出しになれば、私も屹度これを他言するやうな事は致しません。（と品物を受取り）これが手紙三通、確にお賣り申ます。一寸御待ち下さい、まだ一言他の事で貴女に云ふ事があります。けれ共先刻こた所へ、帽子を忘れに来ましたから、誰かに取つて往かれると困りますから一寸取つて来る間お待ちなさい、逃げるとお為めになりませんよ、よろしいか、暫くお待ちなさい。（と入る。後に夫人悄然として立つてゐる所へ、君江突然現はれて）

君江　奥様、ひどい目に御合ひでしたね。

百合子　おゝ、貴方は君江さん、まア、聞いて入らしやつて。

君江　はい、私はすつかりお聞き申しました。谷の後ろに休んで居りましたが、貴方がたお二人が、おいでになつたから、どうする事も出来なくなつて了つたのです、けれ共奥様此の事は私が誓つて祕密に致ますから、決して御心配遊ばさずにね、それればかりか私は貴女をお助け申す

積りで御座います、もう〱お泣き遊ばさずと、安心して暫く茲にお待ち遊ばせ、今又、爰に来ると申しましたね。時計と指輪を取り返してお上げ致します、その上その手紙は焼いてお了ひなされば、最早貴女は少しもお心配なさる所はないでは厶いませんか。

百合子　はい其の思召は有難う厶いますが、三室は残忍な男で御座いますから、貴女が何と仰でも、あの品は決して渡してはくれません。全く餘計なお勞力をさせるやうなものですから、どうぞ、もうお置き遊ばせ、皆な私の捗ない所からで厶いますから私一人が罪を受ければよろしいので厶います。

君江　いゝえ、そんな弱い事を仰しやるものでは厶いません。どうぞ私にお任せ遊ばせ。（と云ひ居る所へ三室入り来る。葉守夫人と見ることなし）貴方は三室さんで厶いますわ。

三室　三室は私ですが、あゝ貴女は當家の令嬢。

君江　はい、松平君江で厶います。

三室　何か私に御用で。

君江　はい、貴君はたつた今此所で女持の、時計と金剛石入りの指輪を、お拾ひになりましたでせう。多分貴方は其持主を尋ねて、お出でなさるので厶いませう、三室さん持主を探してお出でになつてた所なんでせう。

三室　貴女は何か誤解をなすつて居らつしやると見える。

君江　いゝえ、私は誤解して居るやうには思ひません。持主が貴君のお拾ひになつた、指輪と時計を失して大變に心配をして居りますから、私から返して上げたいと思ひます、どうぞ私にお預け下さいまし。

三室　重ねて申しますが、貴君は何か誤解をしてお出でになるのです。

君江　私の申上た事がお解りにならないでまだ其やうに仰しやるのなら、打つけに申上ませう、貴君は私どうして、貴君の手に指輪と時計があるか、それを知つての事です。その二品は葉守男爵夫人の物を貴君が御取りになつたのです。

三室　ふゝむ、貴女は、ぬすみ聞きしてお出になつたのですな。

君江　はい、百合子さんは私の友達ですし、如何にもお氣の毒ですから、私はどうしても、其指輪と時計とを、取かへして上げなければ、氣が濟ないので厶います、それに百合子さんにも直ぐ取返して上げると約束したばかり

なのですから。

三室　貴女が、百合子さんに約束したのは、貴女のお勝手ですが、然しこの二品はお氣の毒ながら、貴女に差上げる譯には參りません。

君江　それでは法律上の罪人におなり遊ばしても、構はない思召なので厶いますか。

三室　法律上の罪人、はゝゝゝ、そんな事で脅かされるやうな三室ぢやありません、全體貴女なぞの口をきく所ぢやありませんから、引込んでおいでなさい。

君江　確かに法律上の罪人ですから、罪人だと申したのです。

三室　二品は男爵夫人から貰つたのです。何が罪人です、

君江　脅迫してお取りに成つたのです、脅迫してお取りに成つたのなら、罪人ぢやありませんか。

三室　そんな事を糺すのは、貴女の役目ではありません。

君江　はい、役目では厶いません。法律の事はちつとも存じませんから、貴方が時計と指輪とをお返し下さらないと仰しやるなら、私はその事が罪になるか、ならないか貴君の伯父さんは、檢事正、中森樣に窺つて見る積りで厶います。さア、如何で厶います、中森さんとは兄も父もお心易くいたして居りますから、私は明朝御面會を願ひます、私の訊いてをりました通りを打明申ます。御職業柄の事なり、貴方の叔父さんの事なのですから、よもやその儘にはなさりますまいと存じます。

三室　君江さん、貴女は偉い方だ、さア、品物は返します。(と渡し)　其の代り君江さん、此の復讐は必ず致しますから覺えてお出でなさい。(と憤然として入る君江思入れ有り、夫人を呼び)　もし奧樣お待遠でいらしたでしやう。(と夫人に品物を渡し)　もう二度とこの指輪の取返されぬやうに、私がはめて差し上げます。(と夫人の手にはめる其手を取り)

百合子　君江さん、このお禮は、どう致して申上ませう。

君江　なんの、貴女御禮なぞと、女は相見互で厶います。又何時、私が貴女のお世話になる事があるか分らないので厶いますもの。

百合子　私は、全く貴女のお蔭で恐ろしい災難を、のがれたので厶います、この御恩は一生忘れは致しません、私の恥を申上げます、どうぞお訊き下さいまし。學校を出ましたばかりに若氣の無分別から、三室に欺されまして妻にならうと云ふやうた、約束を致しましたので厶いま

す、それから四五度手紙の遣り取りなど致したので厶います。未身を汚しません内に或る人から三室の恐しい男だと云ふ事を聞きまして、それからは一切三室に會ないと約束は取消して仕舞つたので厶います。その内三室は妻を貰ひました。直ぐ離縁にはなりましたけれども、私も安心して葉守家へ縁付きましたので厶います。今日迄二年の間、何の事もないので厶いましたが、今夜久々で會ひますと、三室が話があると云ふ事なので、來て見るとあんな譯なので厶います。私本當にもう世の中に顔出しが出來なくなるかと、全く絶望して了つたので厶いますのに、全く貴女の御恩なので厶います。

君江　未だ、しみ〴〵、お馴染でもないに、克くそれだけの事を仰つて下さいました。私の名譽にかけても今度の事は誰にも決して申しませんから、どうぞ、御安心遊ばして。本當に三室さんの、憎らしい事で御座いますねえ。私あんな人が一番いやで厶います。それは、そうと奥さん皆さんが探してお出でゞせう・御一緒に彼方へまゐらうでは厶いませんか。

百合子　本當に君江さん、御禮の申やうは厶いません。

（と語り居る所へ高林、先きに侯爵出で來り）

高林　お姫様、房江様が北海道からお越しになりました。

侯爵　君江、妹の房江が參つたよ。高林、早くこれへ呼べ〳〵。（と云ふ内、房江出で來る）

房江　おゝ、姉様……。

君江　房さん……（と互に抱きつくのを、木の頭）房さん克く來てくれました、この方がお父様で厶います、御挨拶を申上てれ。（と侯爵に向ひ）

房江　侯爵で厶いますか……。

君江　これが房江で厶います。（と侯爵茫然として房江を見て居る。君江がお父様〳〵と呼ぶのに氣が付きたるこなし、妹の房江で厶いますと房江禮をする）

侯爵　おゝ、よう參つたなう……（と充分思入れ、君江は葉守夫人に紹介し）

君江　奥さん、妹に當ります房江と申ます者、どうぞ宜敷く（とこの模様、侯爵は昔の戀人の面影に見とるゝこなし、宜敷く）

——幕——

三幕目

登場人物

松平照定　侯爵
松平照信
戸田兵庫　男爵
東條中尉
杉田伯爵
杉山男爵
村尾中尉
久米金一郎　畫伯
清水清泉　同助手
濱川安　新聞記者
吉澤靖三　同
松谷鐵哉　同
松平君江
田川房江
葉守百合子
高濱勇
三室滋
乙川篤彦　紳士
荻野五郎　同
種良仲致　紳士
甲田六太郎　同
杉浦徳三郎　同
令嬢　春子
同　喜代子
小使

葉守男爵門前の場

麹町平河町、淋しき片側町なる葉守男爵邸門前、市中及同邸も天長節にて國旗を交叉し晴やかに見ゆ。松平君江車を急がし爰に進げ来り邸内に入る。直ぐ後より高濱勇、和服姿にて追ひかけ出で来り、門前を見込み思入れあり、とゞ、下手へ隠れる。向うより戸田男爵と三室滋ともなひ出で来り、戸田酔ひたるこなしにて。

戸田　おい、三室貴様は一體、自分の體を何う思つて居るのだ、假にも、華族だらう、然るに此頃の噂では、貴様は惡德新聞記者の列に入つて、恐喝などを試みて居ると言ふ事だ、實に怪しからんではないか。

三室　いや、僕は、決して、そんな事はして居ない全く誤聞だらう、僕は新聞記者はして居る事はして居るが、決して君のいふ樣な事はして居ない。

戸田　いや、仲々そいらは言はさぬぞ、現に何だと言ふぢやないか、茲の葉守男爵の夫人と貴樣とは學生時代にエンゲーヂしてをつて、其後に互に別れたが、其時分に取換したる手紙を種にして貴樣は先日夫人から、五百圓と云ふものを、ゆすり取つたと云ふ事だぞ。

三室　いや／＼そんな事はない、決してない。

戸田　乾度、ないか、そんなら茲の内へ入つて夫人に訊て見よう。

三室　いや、無いから、もうそんな事はよせ。

戸田　いや、貴樣が、そう云ふなら證據立てられぬ事は有るまい。

三室　いや、證據立てる事は容易だが、まアそんな事を言はんでも、いゝだらう、僕もこれから、慈善會へ祉用で出かけるのだから僕が悪るかつた、以後は謹愼するからもう勘辨してくれ。

戸田　さうか、君子あやまつて改むるに憚る事勿れか。往から、往かう。

（と兩人、連立ちて上手へ入る。と直ぐ門内より君江の變裝、其儘の葉守男爵夫人車にて出で來る。其前より窺ひ居たる。高濱、走り出で來り車を止めて）

勇　君江さん。（と言つて引き離して見れば、君江にあらずして夫人であるので高濱はびつくり）

百合子　貴方は、何をなさるのですか。

勇　いや、全く人違ひ、どうか御勘辨を願ひます。

百合子　貴方は、何と思つて私の車へ亂暴をなさるのですか、先刻も四辻で私の車を追かけなすつたのは貴方ですね。

勇　はい全く人違ひで、あまり貴女が私の尋ねる婦人に似て居らつしやるものですから。

百合子　貴方のお尋ねになる婦人と仰るのは、貴方に取してどう云ふ、御關係のある方ですか。

勇　私と結婚の約束をした女です、けれ共以前居つた所に居らず、何所へか行つて終つたのですから、多分この東京に居る事と心得て、長らく探して居つたのです。

百合子　貴方と結婚の約束をしながら、其約束を履行しない位の女ならおあきらめに、成つた方がいゝでせう。

勇　いや、私は、其女を人手に渡したり、あきらめたりす

る位なら、私は其女を殺してからにします、どうも失禮。（と云ひ捨て、入る。夫人百合子驚いて見てる、爰へ君江出で來り、厚く禮を云ふ件にて）

——道具廻る——

高輪御殿庭園

本舞臺は松平家高輪御殿の離亭にて、今日開設さるべき、上野の慈善會へ、君江、房江兩人の出席を誘ふべく貴婦人三人來り房江に話して歸る。後へ照信入り來り、房江が讀みさしの聖書を繙き、中にありし野菊を取りて其菊の由來を訊き、之をくれといひしに房江之を與へる。

照信　房さん、私が此の野菊の花を頂戴すると、貴女と私と結婚した意味になりますよ、よう厶いますか。

房江　はい……。

照信　屹度ですね。

房江　はい……。

照信　それぢや、私は有難う頂戴します。（と色模樣よろしくある、所へ君江入り來る）

君江　兄樣、お父樣がお呼びで厶いますよ。（と照信は入る。後に君江は房江に照信との關係を疑ひ言を費して斷念せしむ。房江も侯爵家の爲めと君江の爲めに照信と斷つべき決心をする。玆へ侯爵、先きに照信は畫伯久米金一郎、助手清水と來り、老侯は君江が亡き母、君江の肖像を久米に依頼したるなれば、久米は其出來したる肖像を齎したるなり。皆々にて其出來榮えを賞讃する事などあり、房江は以心的に母の肖像に感じ入る件などあり。久米はかへる。後にて老侯は、照信、君江、房江三人に向て、照信と君江と娶す由を宣言し、照信の承引もなきに、無理極めにする。やがて老侯と君江去つた後。照信は君江と愛のなき結婚は出來ぬといふ。房江は無理に君江と結婚する事をすゝめる）

房江　若し、貴方が姉樣と結婚遊ばさなくても、私は義理づく、貴方の奥樣にはなりません。（と斷る。照信も其義に感じ斷念し）

照信　房さん、世の中の義理といふものは、實につらいものですなア。（とこの件にて）

——道具廻る——

上野公園慈善會

舞臺凡べて貴婦人慈善會場内煙草店の體。賑なる鳴物。主人として君江、手傳として春子、喜代子など居る。大勢の紳士を相手に頻りに煙草を賣り居る。紳士等は色々の店にて賣り付けられたる物品を携へ滑稽なる態をなして云ひ言をなし居る。

乙川　もう、とても此の上は御免です。此の通り、もう持ち切れません。

春子　そんな事を仰しやるものでは厶いません外でそんなに、澤山お買ひ遊ばして、此所で買へないと云ふ譯はありません。

萩野　おい、君、もういゝ加減に逃げ出さう、たまらんぜ。

喜代子　おや、そんな卑怯な事が、厶いますか、さア、お買ひ遊ばせ。

萩野　この、ピーコックは幾らです。

君江　それは一圓で厶います。

種良　えつ、一圓……。

君江　餘り、お安う厶いますか。

中田　おい、君、如何に貴夫人の、御商賣でも五錢の物が一圓は驚くね。

杉浦　だから、いゝ加減に御免蒙らんと終には着物までもむかれるかも知れんぞ。

春子　まア、ひどい事を仰しやるワ。

喜代子　どうせ、さう見られたのですから、惡黨買つて頂きませう。

君江　さア、皆さん、お買ひ遊ばせ。（と又、外へ別組の紳士來る。此の紳士は滑稽あり、これもよき客に入る）

春子　まア、此れで少しお客が切れたやうで厶いますね。

喜代子　併し、君江さんは定めしお疲れで厶いませう。

（と茲へ下手より藥守夫人と房江出でくる）

房江　御姉様、貴方のお店は如何で厶います。

君江　おゝ、房江さん、まアいそがしかつたわ。

百合子　さうで厶いませうとも、今日は貴女のお噂で、持ち切つて居りますもの。

君江　あら、百合子さん、お人が悪いわ、こんな忙しい思をするのも、皆んな貴女の爲めだわ、覺えてお出で遊ばせ。

百合子　まア、たいさうな御怨みですこと。

房江　それでも姉様は、何所へいらしつても忙がしい思を

するわ同じで厶いますわねえ。

春子　そうで厶います共、今日のお客樣は品物を買ひに來るのではムいません。皆んな君江さんを見に來るので厶いますもの。

君江　あら、あんな事を。

喜代子　ほんとうで厶いますよ。

百合子　お器量のおよろしいのはお德で厶いますね。

君江　あら、そんな事を仰しやると、もう、私は歸りますよ。

房江　姉樣、それでも私は貴女の御評判が、よろしいので何んだか、嬉しくてたまりませんわ。

君江　もう〳〵、貴女方はそんな事ばかり、私は知りませんわ。

百合子　それは、そうと君江さん今鳥渡、お店もおすきのやうですから、私共と御一緒にお出で遊ばせな、外の店の景氣を見て參りませう。

房江　姉樣、御一緒に見て參りませうよ。

君江　はア、それではお供しませう。では、春子さん、喜代子さん鳥渡店をお願申ますよ。

春子　はい、よろしう厶います。

喜代子　御ゆつくり、往つておいで遊ばせ。

百合子　それでは參りませう。（と三人は上手へ入る。玆へ花道より、新聞記者三人出で來り）

淺川　どうです、非常な盛會ですな。

吉澤　實に盛んだよ、一つは天氣のせゐだねえ。

松谷　なあに、そうばかりでもない、今度の慈善會は美人揃ひだからよ。

吉澤　さう云はれると、美人が餘程多いやうだね。

松谷　多いと云つて、斯う美人の揃つた慈善會と云ふものはないよ。

淺川　併し、向うの煙草店の令嬢は誰です。

松谷　あの店かへ、あの店の令孃を君は、未だ見んのかへ、ありや、有名な高輪の松平侯爵の令嬢さ。東京に美人多しと雖も、一寸あれだけの尤物はないね。無論今日の秀逸さ。

吉澤　どうも、君等の目の早いには驚くな、松平の令嬢も來て居るのか。

松谷　來て居る處ぢやない。あの煙草店の、混雜と云つたら無いぜ、世の中は矢張り助平が多いな。（とこの話の中三人は舞臺に來り、淺川は一足先きになり。店を覗き

て小戻りなし）

淺川　君、うそをつき給へ、そんな美人は居らんぞ。そして、至極閑靜ぢやないか。

松谷　いや、そんな筈はない、僕は現に今少し先、この卷煙草を賣り付けられてきたんだ。それぢや、用達に行つたのだらう。

吉澤　こいつ、鼻の下の長い奴だぞ。

松谷　それでも、僕なんぞは短い方で、例の好色伯なんか、これと同じシガーの百本入を三十圓に賣付けられて居たぜ。（と茲へ上手より三室滋出で來る）

淺川　おい、三室君、少し話し給へ。

三室　やア……。

吉澤　おゝ、貴方は慥か三室伯の。（とこれにて、三室は不審さうに吉澤を見て）

三室　うむ、君は伯父の所に世話になつて居た人だね。

吉澤　さうです。此頃は新聞屋の方の厄介になつて居ます。

三室　さうかね、僕も實は親父の所を勘當されてね。そつち、こつちを流浪した末、此頃ぢや東京へ舞戻つて來て矢張り君等と同じ商賣をやつてるナ

吉澤　はゝア、さうですか、こりやア、始めて伺ひました。新聞はどこにお出でになるので。

三室　なアに、何新聞と云つて、名乘りを上げるやうな、香しい新聞ぢやないよ例の端さ。

吉澤　あゝ、さうですか、併し貴方も隨分落ちぶれやうだ酷いですなア。

淺川　君等、舊識のなかゝ、こりやア、妙だ。

三室　何、妙でもないサ。

松谷　僕は晩餐しめしに一寸コーヒー店へ往つて來る、失敬するよ。

淺川　いや、コーヒー店は、怪しからん僕は先刻も君の目尻を下げて、コーヒー店から、出るのを見たぞ、怪しからん。

松谷　はゝ、充分野暮を云つてるな、一緒に來給へ、非常な尤物が居るから。

淺川　併し、餘興が始まつて居るらしい。

松谷　餘興は餘興、コーヒーはコーヒー、さア、來給へ。

三室　君方は、さう一つ所ばかり歩いて、克く全體の觀察が出來るね。

吉澤　なアに、原稿は通信社の方で、廻るからいゝです、ぢやア、失敬します。

三室　やア、失敬ツ。(と記者三人は下手へ入る。三室は傍の木の根に腰を下す、こゝへ上手より君江出で來る)

春子　おや、君江さん、お歸りですか。

君江　どうも、すみませんでした。お忙しいでしたらう。

喜代子　いえ、貴女がお出でなさらないと、少しもお客様が厶いません。

君江　そんな事も、厶いますまいか、今どこも人がすいてるやうです貴女方もこの間に方々見てお出でなさいな。

春子　さうですね、では、さう願つて鳥渡外を見て來ませうかねえ、喜代子さん。

喜代子　それぢや、往つて見ませう。では、君江さん鳥渡どうぞ。

君江　御ゆつくり。(とこれにて春子、喜代子は入る。玆へ下手より女の小使手紙を持ち出で來り君江に向ひ)

小使　松平様、貴女にこの手紙を渡してくれと云つて、若い男が參りました。

君江　おゝ、さうですか。(と手紙を受取り、差出人の名を見て驚き)その男は待つて居りますか。

小使　いや、置いて直ぐ參りました。

君江　あゝ、さうですか、それでは確に受取りました。

小使　別に御用は厶いませんか。

君江　はア、御苦勞でした。

小使　御免下さいまし。(と小使は入る。この時三室は手帳へ景況を書留め居り、立ち上りて君江の擧動に注意する。君江は手紙を開き讀み、驚愕の餘り氣絶する。これにて三室は、かけより急ぎ君江の持たる手紙を奪ひ一應讀み下して、君江を眺め、ニッコリ笑つて、ポッケットに納め、更に君江を介抱する。玆へ春子、喜代子出で來り、この態に驚く)

春子　あら、君江さんが、どう遊ばして。

喜代子　まア、どうなすつたので厶います。(と二人かけよる)

三室　何か、知りませんが、今僕が來ると氣絶して居られるやうですから、御介抱申て居るのです。

春子　さうで厶いますか。

喜代子　しかし、春子さん、私は彼方へ往つてお醫者を呼んで參ります。

春子　では、恐れ入りますが、どうぞ。(とこれにて、喜代子は急ぎ花道へ入る。後に三室と春子は、いろ／＼君

江を介抱する。君江は氣付き、更に三室を見てきつとする)

三室　如何です、御氣が付きましたか。

藤子　君江さん、確かりなさいまし、一體、どうなさいましたので厶います。

君江　は、はい有難う。(と自己の身の廻りを見廻し)　あの手紙は……。

藤子　手紙、そのやうな物は存じませんか。(と三室の顏を見る。君江も三室を見て)

君江　三室さん、貴方あの手紙を御存じでは―

三室　えゝ、手紙は貴女のお持ちになつた、高濱と云ふ者から來た。

君江　はア、さうで厶います。(と君江は不安のやう)

三室　それは、私が確にお預り申して有ります。

君江　えつ、貴方が。

三室　はア、何れ先日の御禮かた〴〵、改めてお返し致しませう。まア、お氣が付いて、よろしい、折角、御用心なさいまし。(とつと離れて丁寧に會釋する。花道へ行く、この時花道より照信急き足にて出で來り、よき所にて三室と出會する。三室は前に向ひ丁寧に一禮する、照信は一寸會釋し急ぎ、往かんとする。三室は引止め此の件よろしく)

――幕――

四幕目

登場人名

松平照信
高濱勇
松平君江
田川房江

平磯海岸の場

舞臺凡べて常陸平磯海岸の體、浪音・千鳥の聲などの鳴りもの。茲へ花道より君江、房江相竝びて出で來り

房江　姉樣、こゝは大層好い景色の所で厶いますね。

君江　ほんとうに、好い景色ですね。

房江　併し、姉樣はこゝへ來てから、お顏の色がすつかり好くお成りのやうで厶います。

君江　はア、静な所へ來たせゐか、氣分はすつかりよくなりましたわ。

房江　それで、私もすつかり安心をしました、これなら、もう東京へ歸つて御婚禮を遊ばしてもよろしう厶いますね。

君江　私は、もう東京へ歸るのは、いやでたまりませんのよ。

房江　それでは、姉樣は兄さんと、御婚禮遊ばすのがおいや。

君江　あら、そんな事は。

房江　さうで厶いませう。そんなら、なぜ東京へおかへり遊ばすのがおいやなの。

君江　いやと、云ふ譯でもないのですけれ共、何んだか、東京は騷しいので體に障るやうな氣がして。

房江　それは、姉樣が今交際社會の中心に、お立ちですから、毎日夜會だの舞踏だのと、しきりなしに體を、おつかひなさるから、それでお勞れなさるのですよ。

君江　そんな事もありますまいが、併し私が今度兄樣と結婚をするやうな事に成つたのも、皆んな房江さんのおかげですね。

房江　あら、そんな事は、御座いませんワ。

君江　併し、あなたに、お氣の毒ね、ほんとにすまないと、思つてゐるのですわ。

房江　あら、そんな事は厶いませんわ、貴女私をそんな者だと思つておいでて。

君江　さうぢや、ないのですが、只すまないと思つて居るのですわ。

房江　もう、そんな事を仰しやらないで下さい、併し兄樣はもうおいでになりさうな事ですね。

君江　昨日の、お手紙には婚禮の準備も、あらかた調つたから、今日か明日に往くと云つてよした。

房江　それなら、今日あたりは、確かにおいでゝすよ。

君江　さうね。（と兩人舞臺に來り大岩の下に立ち）

房江　まア。姉樣この岩は大きな岩です事、この上へ登つたら、定めし見晴しがよろしう厶いませうね。

君江　そんなら、登つて見ませうか。

房江　さうですね。（と兩人上手の方へ參り）

君江　おゝ、此處から、登れますわ。

房江　姉さん、登りませう。（と兩人よろしく岩の上へ上る）まア、姉さん、好い景色です事ね。

君江　ほんとに、晴れ〳〵した、何んと云ふ好い景色でせう。

房江　姉さん、こゝへおかけ遊ばせや。（と房江は手布にて岩の上を拂ふ）

君江　房さんも、おかけなさいな。（と兩人、たのしく佇ひ、海面を眺望する。茲へ花道より照信出で來り、直に舞臺に往き、岩の下に立ち、仲好く語らふ兩人を眺めて立つ、この時房江は後ろむきて）

房江　あら兄さん。

照信　危いですよ、よう、そんな處へ登りましたね。

房江　いゝえ、そちらから、登つてくれれば、何んでもありませんわ。

照信　あゝ、さうですか。（と照信も上手より、岩の上へ登りし）なる程、この岩の上は眺めがよろしい。

房江　兄さま、今おつきでしたの。

照信　あゝ、たつた今別莊へ往つたら、貴女方が海岸の方へ、散歩に出たと云ふ話しだから、探しに來たのです。

房江　まア、さうで厶いますか。

照信　あゝ、お父樣は此頃大分、およろしい方で、ふせつてはおいでだが、婚禮の指示を色々なすつて、おいでぢや。

房江　そんなに、およろしいので厶いますか。

照信　さうです、すつかり忘れてた、お父樣から房江さんに、お手紙を頼まれて來て鞄の中へおいて來ました。

房江　あの、お父樣から私へ、それぢや直ぐ往つて拜見を致しますわ、姉樣直きに歸りますわ。

君江　はア、私も後から直きに歸ります。

房江　では、兄樣、姉樣をお頼み申します。（と房江は兩人に會釋して岩を下りて下手へ入る、兩人は後を見送る、この時、上手より高濱勇出で來り、君江、照信を見て、又上手へかくれる。照信は君江を見て）

照信　大層血色が好くなりましたね、其の調子なら、いゝんでせう。

君江　はい、大分よろしう厶います。

照信　貴女の顏を見てから、始めて安心致しました。（と照信はポッケットから、指輪の箱を取り出し）君江さん私は今日婚禮の指輪を持つて來ましたからね。貴女の指にはめさして下さい

君江　えゝ、本當で厶いませうね。

照信　そのかはり、私のはめてあげた、指輪を決して離してはいけませんよ。

君江　はい、いつまでも／＼決して離しは致しません。（とこれにて照信は指輪を取り出し君江の指にはめる）

照信　お氣に入らん事は有りませんか。

君江　いゝえ。（と莞爾して）私の持つて居る、どの寶石よりも大事に致します。

照信　長く此の指輪と別れないやうにして下さいよ。

君江　死んでも、別れは致しません。（と君江は指輪を見て余念なく見惚れる、照信は君江を見惚る、この内照信は、ふと心付きたる思入れ）

照信　おゝ、すつかり忘れて居ました、着いたら直ぐ電報をうつ筈でした、君江さん一緒に、かへりますか、それとも私が迎ひに來ませうか。

君江　おや、そうで厶いますか、私は暫く斯うして居たう厶います。

照信　ぢやア、ぶら／＼自分で郵便局へ行て來ますから。

（と照信は立ち上り岩を下りて花道の方へ入る。君江は後を見送り、茫然と見惚れるこの時上手より、高濱勇出で來り、照信の後影を見送り。更に君江を見思入れあり。岩を登りて、つと君江の前に立つ。君江も高濱を見て非常に驚く）

勇　君江さん、たうとう見付けましたぞ、もうかくれても駄目だ。

君江　えゝ、どうして此處に居る事を。

勇　はゝ、僕を欺さうと考へるのは間違ひだ、僕は貴女が此處に居る事を三室滋にきいたんです。

君江　えゝ、三室に。

勇　驚きましたか、先日僕は貴婦人慈善會へ手紙を出して、貴女にお返事を伺つたのですが、それから、貴女は御病氣ださうで、何所へか姿をかくしたので、いろ／＼工風を考へて居る際、あの三室が、何所で訊き込んだか、貴女と僕の關係を悟つて、僕の所へ樣子を調べに來たのを幸ひ、松平家の別莊を調べて貰つたです。京都と箱根を探ねて、今日此處へ來ました、然し此處でお目にかゝる事が出來たのは非常な僥倖でした。ゆる／＼お話しがありますから、まア、おかけなさい。（と兩人よろしく構へ、君江は苦悶の體にて）

君江　高濱さん、どうぞ、私を憐んで下さいまし。

勇　憐れんで下さい、よろしい、憐みませう。貴女は僕の

妻になればいゝのです。

君江　え、……。

勇　それが、高濱の憐みを得る、唯一の道です。

君江　けれ共、私は昔の君江ではないのですから、そ、それを考へて、どうぞ斷念遊ばして。

勇　何に、斷念しろ。むう……さうですか、侯爵家の令孃だから、身分が違ふと云ふんですか。

君江　どうぞ、私の身を憐れと思召して、全く、私の自由にはならないんですから。

勇　併し、約束は約束です、三年前に貴女はどう云ふ事情があるとも決してこの約束には、そむかぬと固く誓つた事を、忘れやアしますまい。

君江　ですけれ共、侯爵家の事情が、許さないのですから。

勇　むゝ、それぢや、あの若い侯爵と結婚するから、私の妻にはなれないと云ふのですか。

君江　えゝ。

勇　君江さん。僕は侯爵家で結婚の準備をして居る事も、知つてますぞ。（と君江は絶望の餘り、勇を皷して）

君江　それまで、御存じなら仕方が、有りません、私は、ちやんと申上げます。貴方との約束は私から破棄致します、私はあんな愛のない約束は、破棄しても罪とは思ひません。（と高濱は激したる思入れ）

勇　なんです、愛のない約束、愛のないとは何んです、貴女は心より僕を愛すると誓つたでは、有りませんか。三年前私が亜米利加へ立つ前夜貴女と僕との間に、どんな話しが、有つたか思出して、御らんなさい。

君江　もう／＼、三年前の事なぞ、思ひ出すのもいやでムいます、私は貴方に迷はされて居たのですから。

勇　何に、何に迷はされた。

君江　だつて、私には愛と云ふ物は全くなかつたのですもの、小さなダイヤモンド一つで、貴方は何んにも知らぬ私に、あんな約束をさせのたです。全く愛のない約束ですもの、欺されたのではありませんか。私の愛は今の侯爵に對する愛より外に、後にも先にもないのでムいます。（と高濱は激怒の思入れ）

勇　それぢや、どうしても侯爵夫人になりすますつもりなんだなア。

君江　そんなに、御立腹なさらないでも、貴方も男なら立派に諦めて下さい。たつて私の邪魔をなさるなら、私の方には侯爵始め、いくらでも味方に成つて與れる人がム

勇　いますから。君江さん、思ひ違ひをしてはいけませんぞ、侯爵は決して貴女の味方ではない、貴女の眞實の味方と云ふのは此の世の中に只、此の高濱一人あるのみですぞ、貴女の名譽の爲、貴女の利益の爲、貴女の安全の爲、もう一度、私の妻になる事を考へて、御らんなさい。

君江　貴方が味方か、侯爵が味方か、そんな事は伺ふ必要がありません、私は愛のない結婚は致さないのでムいます。

勇　むゝ、よく仰有た、では、貴方は侯爵の前へ往つて、ある淑女の名と權利を奪つて大膽にも、侯爵令孃になりすました、逐一を話して御らんなさい。

君江　えつ。（と大に愕く、高濱は冷然として）

勇　僕は貴女の大詐僞の顛末を知つてるのです。

君江　貴方の御存じの事を仰有い。

勇　聞きたければ、話して上げよう、併し貴女のいやがる三年前の事から說かねばなりません。

君江　いゝから、先を仰しやい。

勇　僕が洋行の前夜、貴女と約束の印に取り替した、あの聖書の中に、貴女が欺騙の證據になるべき物が、あつたのです。其の證據を世の中へ持ち出せば、貴女が如何に大膽でも、生きちやア居られん筈です。

君江　は、早く仰有て下さい。

勇　君江さん、あの中には貴女がお濱の子にしてしまつたあの房江さんこそ、全くの松平侯爵の嫡子だと云ふ事を、證據立てる品が、入つて居たのです。念の爲めに見せて上げましよう。（と高濱はポケットより、古びたる聖書と寫眞を取り出して）これが貴女の詐欺の第一の證據になる品です、御らんなさい。（と寫眞を示し、裏をかへして、記しある房江の、生年月日など讀み）どうです、これが貴女の寫眞ですか。（君江うつむく）貴女にも、良心が、あるでせう、貴女の寫眞だと云へますまい併し萬一の爲にもう一つ、貴女と房江さんで、小さい時並んで寫したのを、岸和田の寫眞屋から探し出して來たのです。（と又一枚寫眞を取り出して）これです。此の房江さんの寫眞と前の寫眞と、比較して同じ人だと云ふ事は、立派に證據立てる事が出來ます。併し、これだけでは、或は貴女の今日の地位を動かすのは、未だ薄弱かも知れぬ、處で、第二の證據があります、これは前の小兒の寫眞に添へた手紙で、筆蹟は寫眞の裏面にある文字

も同じです。即ち、房江さんの母たる眞野君江と云ふ人の手です、一つ讀んで聞かせますから、よくお訊きなさい、大變に情が籠つた優しい手紙です。（と高濱手紙をとり出し讀む、この間君江は身をふるはして、うつむき居る）どうです。これだけの證據があれば、房江さんが侯爵令嬢で、貴女は田川君江であると云ふ事は明らかでしよう。

君江　しかし、房江さんには、黒子がない。黒子はありません。

勇　はゝ、房江さんに黒子がない。それが、どうしたのです。黒子などは取れば、取れるものです、第一房江さんに聞けば、直ぐ分る事です。それでも、尚貴女が强情を張れば、生れた時の戸籍謄本を調べれば直ぐ分ります。それでも貴女は、かたりでないと云ひますか、貴女の假面を剝いで行かうとするには、一時間とかゝりませんぞ。併し君江さん貴女の運命は、全く私に握られて居るのだ。併し僕は貴女を、無益に苦しめるものぢやない、貴女の祕密を保ち、名譽を保ち地位を保つために、僕の妻にお成りなさい、もし、いやだと云へば、この事を侯爵に打明けます。不而已、三室を利用して新聞を以て、社會に發表します、どうです、君江さん、よく熟考してごらんなさい。貴女は自分の罪悪によつて、無論その懲罰を受けねばならぬ。それが僕の妻になるだけで、處罰がすめば結構ではありませんか。

君江　そ、それは、とても私は貴方の妻にはなれませんよ。そんな事をするより、一層死んだが、ましで厶います。

勇　なに、何に死んだ方がました……むゝその覺悟は殊勝な覺悟だ。（と高濱はつと、立上り、君江を睨みつめる。君江は僅に顔を上げて、この體を見て身ぶるひなし）

君江　貴方には少しも、憐みのお心と云ふものはないので厶いますか。貴方にもお情けが、おありなさるならば。

勇　もはや、多く言ふに及ばん、高濱の取るべき道は、只二つです、貴女を妻にするか、罪悪を曝露するか、これだけなんです。どちらでも明確に、御返答をなさい。

君江　私、私には、もう、御返答する氣力も厶いません、どうぞ憐んで下さい。

勇　僕には、もう、一點の憐みもありません。

君江　それでは、どうぞ、もう二三日考へさして下さいまし、お願ひで厶います。

勇　むう、考へさしてくれ、それは考へさしてもよろしい。では最後の決答を聞くまでに、五日間の猶豫を、貴

へてあげませう。それ以上はどんな事情が、あつても許しません。

君江　五日の中には、屹度、御返事を致します。

勇　それでは、僕の居所を知らしておきませう。（と高濱は手帳を、さきて、鉛筆にて書く）では、君江さん、この次ぎにお目にかゝる時が、貴女の運命の決する時ですぞ。（と手を差し出すを君江は首を振りて）

君江　早く入らつしやい。（と高濱は君江を尻目にかけ、岩を下り花道へ行く、君江は泣き伏す。この時花道より以前の照信、歸り來り、高濱とすれちがひ相方思入あつて高濱は入る、照信は急ぎ舞臺に來り、君江の倒れ居るに驚き、かけよつて抱き起し）

照信　君江さん〳〵、しつかりなさい、どうしたのです。（と色々介抱する、君江は、はつと心づき、照信を見て其の手へ確とすがり付く）おゝ氣が付きましたか、あゝ、どんなに驚いたか知れない。一體、どうしたのです、何んに驚ろかされたのです、私は今そこで、恐ろしい權幕の男に會ひましたが、あの男にでも、どうかされたのぢやありませんか。（とこれにて君江に下をむき）

君江　いゝえ、さう云ふ事はありません。餘り長く日光に曝されて居ましたから、それで倒れたので厶います。

照信　だつて、三十分前までは、少しも、そんな風は見えなかつたやうでしたが、君江さん、屹度、何かあつたのでせう。あの男に何うかされたのでは有りませんか、私はどうも、あの男がこの岩から下りて來たやうに思ひますが。

君江　それは、貴方の思ひ違ひで厶いませう。兄樣そんな事を仰しやらずに、家へ連れて歸つて下さいまし、大層疲れましたから。

照信　それでは、私の手へおすがりなさい。（と照信は手を差し出す、君江はこれにすがりて兩人立ち上り）君江さん、私は急に、東京へ歸らうと思ひますが、貴女も歸つてはどうです。

君江　はい、私もお一緒に歸りたう厶います。

照信　それでは、さうしませう。（と歩きかける）併し君江さん、貴女、私と結婚するのが、いやなのでは有りませんか。（と君江は、ちつと佇み）

君江　兄樣……（と更にすがるのが木の頭）私は、貴方と結婚を致しますれば死んでも、本望で厶います。（と云ふ、よろしく）

――幕――

大詰

登場人名

松平照定
松平照信
綾小路公任
高濱勇
三室滋
高林清直　家令
松平君江
田川房江
お花　小間使

高輪御殿君江居間の場

舞臺總て、松平侯爵邸君江居間の體、誂への鳴物。玆に君江居机にもたれ、今日高濱との出會日を苦み氣づかふ體、玆へ家令出で來り君江は急ぎ書置きを手匣へかくす、よろしく構へ。

高林　姫樣、唯今霞ヶ關のお邸から、お祝物が參りました。それに御親戚樣方も、ぼつ〳〵、お見えになりました、そろ〳〵、お支度をなすつては如何で厶います。

君江　あゝ、併し式は夕刻からでしやう。

高林　はい、左樣で厶いますが、今日は御將軍の御前が、御危篤の御模樣で御座いますから、萬一を慮りまして精々時間を繰上げます筈で厶います。（と玆へ小間使お花出で來り）

お花　あの、お姫樣、唯今新聞社の方だと云つて、此の方がお姫樣にお目にかゝりたいと仰有てゞ厶います。（と名刺を差出す）

高林　何に、新聞社・姫樣に直々御面會が、したいと云ふのか。

お花　はい。

高林　怪しからん、今日は御姫樣の御婚禮の當日で取込んで居るから、お目にかゝれんと、お斷りなさい。

お花　さう申したら、御姫樣の、御利益とかで御目にかゝりたいと仰しやつてお出で厶います。

高林　何に御利益、（と家令は名刺を手に取り）雷新聞社三室滋、あゝ、あ、ありやあ、三室さんのお次男で名代

の、無頼漢だ、こんな者に何んでお姫様が、お會になる者か、怪しからん、よろしい私が往つて追ひかへします。（と立ちあがる）

君江　あゝ、鳥渡、お待ちなさい。

高林　はい。

君江　どう云ふ事か、分りませんから一寸會ひませう。

高林　えゝ、それは、お姫様がお會ひにならん方が、よろしう厶います。然しろくな事ではありますまいが、三室が姫様にお目にかゝりたいと云ふ事情も、よく聞き取つて、御報告致します。

君江　それでも、折角、私に逢ひに來て下すつたのですから、それに三室さんは、知り合でもありますから一寸會ひます、お花、お前此處へ御案内申しておくれ。（とお花は入る）

高林　では、已むを得ませんが、充分御注意遊ばせ。

君江　それは、承知しました。しかし、御心配なさるといけませんから、兄様にも、房江さんにも三室さんの、來た事は云はないで下さいよ。

高林　は、よろしう厶います。（と家令は一禮して入る。引き違つて、お花三室を案内して、出で來り、三室よろしく一禮して）

三室　やつア。暫くでしたよく御面會下さいました。（とお花、座蒲團、手あぶりなどを、すゝめる、君江よろしく會釋して）

君江　さア、三室さん、どうぞ、お敷き下さいまし。（と兩人よろしく構へ）

君江　お花、お前あちらへ往つておいで。

お花　はい。（とお花は入る）

君江　今日は、少々取り込んで居りますので、どう云ふ御用事か存じませんが、御用だけを簡單に仰しやつて下さいまし。

三室　や、其事は唯今、お玄關で伺ひましたで。では、至極簡單に申上げます。實は貴女と貴女の許嫁の良人たる高濱勇君との間柄の祕密を、先日お預りの手紙と御一緒に、お賣り申したいのですが。

君江　それだけの事で厶いますか。

三室　それだけの事。はゝ、では事實を公表しても、かまはんと仰有るのですか。

君江　いゝえ、決して、さう云ふ積りで申し上げたのでは厶いません。

三室　はゝ、さうですか。
君江　然し、どれ位差し上げれば、よろしいので厶います。
三室　はい、これから、時々お邪魔に上りますから、今度は先づ五百圓だけ頂戴致しませう。
君江　五百圓。
三室　五百圓位はお手許に、厶いませう、非常にお安いでせう、貴女の指輪一つの價も有りません、然しそれから缺けると、御相談は出來ませんぞ。
君江　よろしう厶います、確か其位は厶いますでせう。（と傍の手箱より五百圓の紙幣を取り出し三室の前におき）三室さん、この後どう云ふ事が有つても、決して新聞におかきなさるやうな事は厶いますまいねえ。
三室　無論です。（と紙幣の數を讀み乍ら）それのみか、私はこの御禮として、貴女の爲めに御盡力して見ようと考へてる事が厶います。
君江　えゝ、それは、どう云ふ事で厶いますか。
三室　實は、私は高濱君にあつて、貴女の本日最後の決答を與へる筈になつて居る事を、聞いたのです、高濱の口振によつて考へると、あの男は多分、今度こそは貴方が妻になる、承諾を與へるだらうと信じて居るらしいです。私は大に高濱を憐みましたけれ共、貴女が決して高濱の妻になるべき者でないと云ふ事を、彼には語りません、貴女が今日、どんな返事を彼に御與へになるかは存じませんが、御返事の次第によつては、高濱は決して、貴女と侯爵の結婚式を無事に終らせる樣な事はせんと私は斷言します。貴女に高濱を籠絡する名案がおありなさるなら格別、さもなければ、私が御盡力申して、貴女が結婚式を無事にお濟しになるまで、うまく高濱を遠ざけて上げようと考へてるです。
君江　で、高濱をどう遊ばす、お積りで厶います。
三室　兎も角、貴女は無事に結婚式をおすましになれば、御本望なのでせう。
君江　はい。
三室　それなら、高濱は私が甘く籠絡して四五日、延期させませう。
君江　しかし、さう往きませうか。
三室　それは、私が充分、彼の信用を得て居りますから、大丈夫です、しかし成功の上は御報酬をくださるでせうな。
君江　はい、それは差上げますが、どの位で厶います。

三室　先づ、千圓ですね。

君江　よろしう厶います。其代り式は無事に濟みました上の事ですよ。

三室　無論の事です。（と茲へ房江出て來る、これにて三人顏見合せ一寸意外の思入れある、三室は氣をかへ）やア、それでは、失禮いたします。

君江　どうも、失禮致しました。（と三室立ち上つて入る房江は後を見送り）

房江　姉樣、私吃驚しましたわ、あの方は何んにおいでなすつたのです。

君江　あの方は、新聞社の方で、婚禮の模樣を聞きにおいでなのよ。

房江　あゝ、さうですか、併し姉樣もうお支度を遊ばせ、お父樣が、大層お急ぎ遊ばしておいでゝすから、兄樣は今支度をなすつて、お父樣の座敷にお出ですよ。それにあの、綾小路樣がお出で遊ばして、姉樣に再びお目にかからん積りでしたが、今日御婚禮と承はつて、淸國へお立の、おいとまごひながら、お祝に上つたと仰有て姉樣に後で、是非々々お目にかゝりたいとお傳言でした。

君江　綾小路樣が、まア、あの方は淸國へ未だお立ちにならないのですかね。

房江　あの方は、姉樣を大層お慕ひ遊ばしてお出でなのでしたね。

君江　ほんとに、今日は色々の人の來る日ね。

房江　併し姉樣、お父樣がお待ち遊ばしておいでゝせうからお早くお支度を遊ばせ。

君江　はア、直き參ります。（と房江は入る、君江も立上らんとする時、此處へ庭先より、高濱勇いで來り）

高濱　君江さん、お待ちなさい。

君江　あらア。高濱さん、貴方はどうして此處へ。

高濱　取り込んで居るを幸に、これまで忍んできました。

君江　えゝ、忍んで。（と君江は已むなく振り睨む、立ちたる高濱に）まア。お坐りなさいな。（と高濱は無言にて座す）早く御用を仰有つて下さいまし。

高濱　そ、その用事は、貴女の決答を訊きに來たのです。

君江　その御返事は、唯今三室さんへ、お言付申しましたから、三室さんからお聞きとり下さいまし。

高濱　三室、三室ですか、彼とは門前で行違つたですが、僕は三室などに、用事はありませんから、先方の氣の付かぬを幸ひ、やり過したです。

君江　それでも、三室さんへ御返事を致して置きましたから。

高濱　何を貴女は云つてお出でなさる、三室にすべき返事ではありません、又僕も貴女の決答を三室から訊くべき理由がありません。さア、どうです、今日こそ貴女の決答を得なければ立ち去りません。併し貴女の決答の如何に係らず、今夜の結婚式は行はれぬものと、お思ひなさい、貴女がこの高濱勇の妻にならんと云へば早速、侯爵に秘密を打明けます。妻になると云へば、この邸から貴女を連れ出します、さア、きつぱりとした返事を承はりませう。

君江　はい、私は誓つて貴方の妻にはなりません。

高濱　え、そ、それが最後の決答ですか。

君江　はい。

高濱　此の家からも、社會からも擯斥されても、かまはん、秘密を暴露せよと云ふのですか。

君江　貴方の妻になるより、その恥辱を忍ぶ方がましです。

高濱　よ、よく云つた。

君江　然し、高濱さん。貴方が私を斷念して下されば、どれ程の報酬でも差上げます。

高濱　そ、そんな事を、聞く必要は有りません、高濱勇は貴女を妻にすると言つたら必らず、妻にしなければ承知せんのだ。

君江　私は死んでも、貴方の妻にはなりません。

高濱　き、乾度ですか。

君江　はい、もう、死ぬ事も恐れません、さア、侯爵の所へお出でなさい、私も一緒に參ります、その席で最後の勝利を得るのは、私で御座います。

高濱　貴女に、斷じて勝利は得させせん、そ、その前に貴女を殺すのだ。（と高濱は共に立上りて君江の手を捉へる）

君江　高濱さん、貴方は私を本當に殺す氣ですか。

高濱　僕の妻にならんと云へば、活かしてはおかんのだ。

（とかくしより洋刀を取り出す）

君江　貴方は、卑怯な眞似をなさいますね。殺されるなら、私は立派に殺されます、そこをお放しなさい。

高濱　未練な事を云はずに、覺悟をなさい。（とナイフを振り上げる、この時下手より、綾小路大尉出で來り、この態を見て驚き）

綾小路　曲者ッ……（と馳けより高濱の手を押へ）さア、君江さんお遁げなさい。

君江　おゝ、綾小路様……。

高濱　何にッ……（と三人からみ合ひの立廻りとなり、いろいろありて、高濱は終に君江を殺害する、綾小路は高濱を取り押さへる件にて）

――道具廻る――

老侯爵病室の場

舞臺總て松平老侯爵病室西洋間、誂への鳴物、寢臺に老侯爵横臥し居り傍に照信、房江は侍し居る。

照定　房江、君江は何をして居るのぢや。

房江　はい、もうおいでになります、今お支度をなすつてお出でゝせうから。

照定　わしは、今日こそ君江の母に逢うて安心をさせる事が出來るのぢや。

照信　お父様、何ですそんなお氣の弱い事を云ふものぢやありません。

房江　お父様、お氣を確かりお持ち遊ばして下さいまし。

照定　いや〳〵、わしは今日君江と照信と結婚をするのを見て死ぬ事が、出來れば本望ぢや。（と茲へ下手より家令高林、あわたゞしく走り出で一禮して）

高林　御前、一大事が出來致しました。

照信　えゝ。

房江　えゝ。

照定　どう致した。

照信　な、何んぢや。

高林　は、はい、お、お姫様が唯今、ある者の爲に御殺害せられました。

照定　え……。

照信　え……。

房江　え……。

照信　なに、君江さんが。（と立ち上る）

高林　まア、先づ暫く若様お待ち下さい。

照信　何んぢや。

高林　これには、驚くべき、祕密が伏在して居りますで。

照信　しかし、その暴漢はどう致した。

高林　それは、綾小路様が、お押さへ下すつて、唯今これへお伴ひなされきす。

房江　え、此處へ。

照信　え、何に此處へ。

高林　いや、お驚き遊ばさず、その者のざんげは是非共、お聞き遊ばされねばなりません。（と茲へ綾小路先に、高濱勇出で來り、高濱は遙かに離れて立つたる儘一禮する）

綾小路　只今お訊きでせう、あの男が君江さんを殺害した本人で厶います。

照信　何に奴か。（と照信、激怒のあまり、つかみかゝらんとする、綾小路は静かに止めて）

綾小路　まア、お待ちなさい、君江さんは驚くべき祕密の爲めに死んだのです。

照信　え、祕密ッ。

綾小路　さア、高濱君、事情をお話しなさい。

高濱　はい、祕密と云ふのは：君江さんが、かつて岸和田に居られた時、この高濱勇と密に結婚の約束をせられたのです、然し乍らそれも畢竟は、君江さんが最もプライドに強いからで、其心を滿足させる爲には、如何なる物も犧牲に供するをいとはん故に、君江さんの實母お濱と云ふ者が臨終の際に、房江孃が不在の爲め、君江さんに、房江孃はある華族の落胤なる事を遺言して、證據の品々を渡して死んだのです。それを君江さんは、富貴を得たい野心に驅られて、この祕密を自分のものとしてをつたのです、それから私が君江さんを苦しめた事實は云ふに忍びませんから、餘は御想像を願ひませう、唯自分の義務として、そこに居られる、房江孃の權利と名譽を、君江さんが奪つた、證據を差し上げて、私は自分の行つた罪惡の報酬に服します。（とかくしより、寫眞及び房江、母の手紙を取り出して家令に差出す、家令は受取りて照信に渡す。照信は、手紙を讀み寫眞を見て老侯に向ひ）

照信　お父樣、貴方の實の子は此の房江さんです。

照定　何にッ。この房江が全くの、わしの子か。

照信　さうです、これを御覽なさい。（と老侯に寫眞手紙を渡す）

照定　おゝ、これは、わしの妻の自筆に違ひない。（と手紙を見、又寫眞を見て更に茫然たる房江に向ひ）房江：：（と房江、はつと氣付き）

房江　お父樣……（と取りすがる、老侯も房江を引き寄せて）

照定　おゝ、房江、お前こそ、わしの子ぢや。（と兩人よろしく泣く、これにて一同愁然たり、高濱は氣なかへて）

高濱　では、皆樣、私は侯爵の戀人たる、君江さんを殺害

致したので御座いますから、せめて照信様のお手で縛せられて罪に服したいと考へます、それが貴方に對する私のざんげです。

照信　いや、高濱君そのざんげには及びません。私は決して君江さんに戀して居つたのではありません、事のついでゝすからお話を致しますが、實はこの房江さんと、互に相愛して、居つたのです、唯、お父様に御安心をさせたい爲めに、互に自己を制して、君江さんと、結婚することにして居たのです。

照定　え、それでは、この房江と照信とは既に戀して居つたのか。

房江　申譯がありません。

照定　いや、申譯のない事はない、それこそ、丁度幸ひぢや、二人一緒になつてくれ。（と照信と房江の手を握り合はして、）これで、わしも滿足ぢや。然し罪を憎んで人を憎まずぢや、君江も可愛相な者ぢやな。

綾小路　全く君江さんも、お氣の毒です。

高林　あんな事を、なさらんでも同じやうな、地位におなれ遊ばしたですに。

高濱　憐れんでやつて下さい、私は君江さんの爲に泣きます。（と一同愁然たる件にて宜敷く）

――幕――

（大團圓）

想夫憐（五幕十場）

渡邊　霞亭原作

序　幕　北野天神社の境内
二幕目第一場　岩崎子爵邸の奥座敷
　第二場　下加茂小泉修三宅
　第三場　再び岩崎邸奥座敷
　第四場　岩崎家雅子の部室
三幕目　夜の荒神橋附近
四幕目第一場　再び小泉修三の宅
　第二場　同じく奥座敷
大詰　第一場　都ホテル喫茶室
　第二場　嵐山附近の紅葉

序　幕

北野天神社の境内

幕あく。

（と、幕末時代の風俗をせる若き侍が胡蝶の如き舞妓澤山と鬼ごつこをして無邪氣に遊び戯れて居る。と、茶店の仲居は息せき走り來りて侍に何事か告げると、侍はキツとなつて後を振返へる。そこへ白刃を下げたる覆面の浪人三名走り來りて、若き侍に斬つてかゝると、舞妓と仲居は隅の方に寄つて慄へて居る。若き侍は奮闘して浪人共を斬つて捨てる。やつと安心をして舞妓と仲居は捨臺詞にて喜んで去る。と、キネマ會社のカメラマンと助手二人來りて憩ふ。死人となりし浪人も起き上る。若き侍と舞妓も仲居と戻り來りてカメラマンと結果を語る。見物の群衆も寄り來りて他の場所へ去る。（注意、絶對に最初はカメラマンと助手は姿を見せざること）群衆の中にまじはりて音樂家本庄光一と友人聲樂家の黒澤明、ダンサー野口桃代來る。この三人だけ殘つてベンチに腰を下す。）

本庄　久しぶりだつたねえ、遊びに來たのか。

黑澤　うむ、少し體が暇になつたので、桃ちやんと一緒に遊びに來たんだ。
本庄　東京の結果はどうだつたい。
黑澤　うむ、鎌倉の方はよかつたけれど――まア物質的には不印の方だつたよ。
本庄　さうだつたかい、――桃ちやん、桃ちやんの人氣は大したもんだつて、そら六甲倶樂部の石垣が云つてたつけ。
桃代　あら、人氣倒れの形なの、駄目よ。
黑澤　君は此頃やつぱり三條のダンスホールへ通つて居るのかい。
本庄　あゝ、あすこもつまらんからやめたよ。
黑澤　しかし、物質的には惠まれんでも素的に美人が出入してゐるつて噂が東京まで聞こえて居るから、その方で慰められるぢやないか。
桃代　本庄さん、近頃いゝのが出來たつて專らの評判よ。ほんと？
本庄　人の噂は何を云ふか解りませんよ。
桃代　でも皆さんは本庄さんの腕なら……あら御免なさいよ。あなたなら右に菖蒲左に燕子花だつて……？

本庄　アハヽヽ、それだと迚も素的だけれどもね。
（此時、子爵岩崎一彥の許嫁たりし井原家の令孃濱子小走りに來る。その後より友人の淑子、紀子追うて來る。）
淑子　濱子さん、隨分ねえ、あんなに呼んで居るのに。
濱子　あなたゞつたの、誰か呼んだ樣に思つたんですけれども――御免なさい。
（と、本庄は濱子を見て嬉しさうに寄り來り。）
本庄　濱子さん、御散歩でしたか。
濱子　あら、（と故意と誇大の表情をして）貴方も……意外でしたわね。
紀子　本庄さん、先日は失禮しました。
本庄　いや、私こそ。
淑子　濱子さん、きつと貴女本庄さんと、お逢ひになるお約束をなすつたんぢやありませんか。
濱子　まア、あんな事を仰有つて……私は毎日お詣りに來るんぢやございませんか。
本庄　淑子さんは至つて神經質だからね。
黑澤　（桃代と囁いてから）本庄君、俺達は失敬しよう。
本庄　さうか、又ぢや逢はう。

桃代　皆さん、御免なさい。（と、黒澤と、桃代は會釋をして去る。）
濱子　今のどなた？
本庄　そら、ホワイト歌劇團に入つて居る、ソローの黒澤ですよ。女の方はスターとして近頃賣出した野口桃代です。
濱子　さう。私もさうだと思ひましたの、あの人達は面白いでせうね、定めし。
本庄　さ、そりや趣味に生きる點では……然し物質的には到底滿足を得られないでせう。
淑子　けれども純な藝術家程、物質的には惠まれないものよ。
濱子　さうでせうかしら、それは、、、なまら半熟な藝術家ではないでせうか、一家を成しとげた人は物質的にも豐かですわ。
本庄　私も同感です。只、それ迄の道程が骨なのですから。
紀子　議論は止めませうよ、濱子さん、貴女岡崎公園の展覽會へいらつしやらない。
濱子　さう、勸脩寺の倭文子さんが御當選なすつたのですつてね、どんな繪なんです。
淑子　そら歷史にあるでせう、淸少納言が石山寺で簾を捲いて居る繪からヒントを得たんですッて。
濱子　構想が古いわね。（折から岩崎一彥と、妻の雅子が靜かに來る。）
岩崎　あゝ（と雅子に）濱さんも居る。
雅子　あら、ようこざんしたわね。
濱子　皆さんと御一緒？
岩崎　（素早く見付けて）一彥樣。（と寄る）
濱子　お目にかゝつたんですの、偶然に――（淑子、紀子は丁寧に會釋する。一彥も會釋する。）
岩崎　高倉さん、片山さん、先日は大變失禮をしました。
紀子
淑子　いゝえ。
岩崎　また、近い內に春季の歌合せ會を催さうと思つて居ますから、どうかお越しを願ひます。
淑子　ありがたうございます。是非よせて戴きます。
濱子　（本庄に）本庄樣、御一緒に散步したいんですか。私、一彥さんに少しお話があるんですから――甚だ失禮ですけれどもね――。

本庄　（無理に不快なかくして）さうですか、では私は一足お先に、――高倉さん、片山さんも御一緒に、いらつしやいませんか。

紀子　お伴をしませう。

本庄　失禮します。

（と、本庄と淑子と紀子は會釋をして去る。）

濱子　一彦樣、そら名高いピアニストなの、御承知でせう。本庄光一ツて人ですわ。

岩崎　思ひ出しました。いつか貴女と三條の青年會館で慈善演奏會へ行つた時、ロシアのグロモフ夫人の彈奏をやツた人でせう。

濱子　えゝ、さうなんです。私も教へて頂いて居るんですわ。

岩崎　ぢや、雅さんに紹介して貰ふんだつたね。

濱子　あら、私うつかりして居ました。雅子さん御免なさい。

雅子　いゝえ、私などは迚も……。

岩崎　や、雅さんは馬鹿に謙遜したね、何だな、雅さんくらゐピアノが堪能だつたら、もうアマチュアとしては一人前だよ、ね、濱子さん、あんたもさう思はんかね。

濱子　えゝ。（と氣のない返事）

雅子　あなた、お玉はどうして居るんでせう、小牧先生のお宅が解らないんぢやございませんかしら？

岩崎　さ、或はさうかも知れんね、先生のお宅は、路次を入つた解り難い處だから。

雅子　私、鳥渡行つて見て參りますわ。

岩崎　さう、ぢや雅さん氣の毒だけれどもさうしておくれ。

雅子　濱子さん、御免あそばせ。

（と、雅子は靜かに會釋をして去る。）

濱子　一彦さん、お玉ツて、そら雅子さんの御氣に入りの女中ですか。

岩崎　えゝ今日一緒に連れて來たんですが、小牧先生を、お誘ひしようと思つてやつたのさ。

濱子　今日はお詣りだけぢやないんですか、何處へいらつしやるの。

岩崎　何、歸りに薄墨亭へ寄らうと思つてね、丁度今日畫會があるさうだから。

濱子　さうですか。（と俯向いて悲しさうな顏をする）

岩崎　（上手を見て）濱さん、ほら御覽、今日も撮影をし

て居るんだね、しかし何んだかあんな所を見せつけられるとキネマも見る氣はしないね。濱さん、あんたはどうだい？

（濱子、それには答へずベンチに腰を下ろして考へ込んで居る。）

岩崎　（稍不快さうに）濱さん、どうしたんだね、何を考へて居るんです。

濱子　いゝえ、別に――。

岩崎　濱さんは此頃、非常に陰鬱になつたぢやないか、皆がさう云つて居るがね。

濱子　一彦さん、私ね、今日もお宅へ寄つて來た時、伯母さんに愚痴を聞いて來たんですの。

岩崎　愚痴を――。お母さんの？

濱子　えゝ、私が馬鹿だから、折角纒まつて居た話も――もう伯母さんは私の顏さへ見れば、その事ばかりなんですもの。

岩崎　そりや、だけど氣にしない方がいゝでせう、お母さんは何處までも舊式の思想と感情に支配されて居るんですからね。つまり今日の時勢を知らない人です。人情風俗を知らない人です。ですから、さう云ふお母さんがお互が子供の時、双方の兩親が、その時の思想なり、感情なりで決めた事を飽く迄も盾に取つて、未だにその夢を辿つて行かうとして居るんです。そりや古い思想や感情が皆、悪いと云ふのぢやありませんよ。然しね、今日の樣に醫學が進歩した時代に立證された血族間の結婚を私は不可ないと云ふのです。成程、貴女と私は幼い時には許嫁であつた。けれ共、双方の親達は、その頃、血族間の結婚が子孫に悪い血統を殘すと云ふ醫學上の立證を知らなかつたのです。何しろお母さんは未だに肺病や、癩病が遺傳病だと信じ切つて居る位の人なんですからねえ。こんな事は私が今更云ふ迄もない事で、あなたよつてよく御承知でせう。で、まア雅さんと結婚したと云ふ譯で――その點は濱子さん。貴女もよく御理解下すつて居る筈ぢやありませんか、ねえ濱子さん――。

濱子　えゝ、そりや解つて居ます。ですから私、別に不平は申しませんけれど、伯母さんが貴方に嫌はれるやうな缺點が……そんな事を仰有るんですもの、私、本當に苦しうございますわ。

岩崎　それはよく察して居ます。しかし、老人の云ふ事は餘り氣に止めんやうにして、お互に仲よく兄妹のやうに

して行つたらいゝぢやありませんか。

濱子 でもね、貴方のお心持が、こんな事を云ふと變ですけれど、この頃、私からすつかり離れて雅子さんの方にばつかり傾いて行くのを見て居ると、何ですか――私、一彥樣、私は矢つぱり貴方を離れては生きて行かれない女だらうと思へてならないんですわ。

岩崎 然しねえ濱子さん、私が今更云ふ迄もなく、愛情には、夫婦、兄弟、友人の愛といろ〳〵あるが、お互に愛し合ふと云ふ點に於ては、どの愛情にだつて變りは無いと思ふのです。ですから私が貴女に對して、兄が妹に對する愛情を續けて行つたらば、貴女は滿足して下さるだらうと思ふがどうでせう。

濱子 一彥さん！（と、思はず取縋つてぢつと顏を見て俯向く。）

岩崎 濱子さん、どうか、私を兄以上の愛情でお互に交はつて行く事だけは諦めて下さい。ね、ね、後生ですからその事はね。

濱子 えゝ――（と、微かに云つて横を向いて烈しく悶える。此時以前の雜子と、召使お玉と捨臺詞にて來る。）

岩崎 おゝ雅さん、先生はお宅だつたかね。

雅子 嵯峨へいらしたとかでお留守でございました。

岩崎 さうか、それは殘念だつたね、ぢや濱さんと、お前さんと三人で薄墨亭へ行かう。とに角、お詣りをして行きませう。

濱子 一彥さん、私すぐに、お後から參りますから、どうかお先に――。

岩崎 どなたか。

濱子 いゝえ、お友達とお約束をしましたから、鳥渡お待ちして居ようと思つて居ますの。

岩崎 さう、ぢや雅さん、先へ行つて紙屋川端の茶店で待つて居よう――。

雅子 濱子さん、御めん下さいまし。（と、一彥と雅子はお玉を伴うて靜かに去る。濱子は見送つて口惜しき容子ありて、よろ〳〵とベンチに腰を下ろして微かに泣き出す。ふたゝび一彥等と入違ひに高倉淑子と片山紀子きたりて濱子を見て指さして笑ふ。）

濱子 （二人を見て）あら、もうお歸り。

淑子 濱子さん、そんなに悲觀なすツちや、いけないわ。

濱子　私、別に悲觀なんか、しやしませんわ。

紀子　噓よ。今あなた、ヒスッて居らしたでせう？　そりや御無理がないわ。近い將來の良人と信じて居らした方が御結婚なすつたんですものね。

濱子　それは…あなた方の邪推よ。

淑子　駄目々々。貴女のお顏にちやんと口惜しいと書いてある事よ。そりや私達も御同情してよ。

紀子　濱子さん、つまりは貴女の御力が弱いからなのよ。餘り引込思案をなさるからいけないんだわ。もつと〱強い心で居なくちや、若し私なら奪はれたものは、きつと奪ひ返して見せるわ。

濱子　（獨言の様に）奪はれたものを――？

淑子　レベンヂよ。その位の強い心で戰はなくつちや駄目ぢやありませんか。

紀子　えゝ、さうよ、私なら屹つと復讐するわ。

濱子　（強く肯く）さう、復讐！

淑子　えゝ、復讐をなさいよ。及ばずながら、私達も御力を貸しますわ。ね、紀子さま。

紀子　えゝ、しますとも、若い女の惱みなんか、私達でなきや解らないんですもの。

（此時、以前の音樂家、本庄光一は、黑澤と野口榮代とを連れ立ちて捨臺詞にて出る。）

濱子　（逸早く見て）あッ、本庄樣。

本庄　濱子さん、まだ此處に――？

濱子　私、あなたにお話が――いゝえ、あの何ですの、私あなたの歸つていらつしやるのを待つて居たんですのよ。

本庄　さうですか。（と握手して、手の甲にキッスをする）ありがたう。

黑澤　本庄君、どうする？　ホテルへ行くのかい？

本庄　行かう、濱子さん、今黑澤君とホテルへ食事に行く約束をしたんですがね、貴女如何です？

濱子　お伴をさせて戴きますわ。

本庄　高倉さん、片山さん、あなた方もいらつしやるでせう？

淑子　お邪魔になりませんか。

濱子　あら、大丈夫よ。

本庄　大勢の方が面白いから、これから揃つて出かけませう。

（と、一同去る。參詣の男女三人ばかり去ると、入違つて以前の雅子と休職陸軍步兵少佐、小泉修三來る。）

小泉　丁度、此處がいゝ。まア休まうかね。
（と、ベンチに腰を下ろす。雅子も靜かに腰を下ろす。）
雅子　御無沙汰ばかりして居りました。お母樣も、お變りはございませんか。
小泉　うむ、別に變りはないが、あんたの方はどんな具合だ。婆さんとの折合は、その後――。
雅子　はい、どうも私が行き屆きませんもんですから、何ですか、御母樣の御機嫌が――。
小泉　相變らず困つた婆さんだな。朝から晩まで、嫁いびりに憂身をやつして居る。尤もそんな事でもせん事にや用もあるまいからな。まア／＼もう少しの辛抱ぢや。永い事もあるまいから――何しろ、家の中を歩くにさへあの始末なんだから、先づせい／＼今年の末か、――來年は參つて仕舞ふさ、ハヽヽヽ。
雅子　まさか――そして、あのどんな御用事でございますか。
小泉　用か、實はな、あんたに折入つて賴まんけりやならん事があるんだ。毎度の事で、甚だ申兼ねたがな、一彥さんに内分で金を少々用立てゝくれまいか。
雅子　又、お金？

小泉　さうだ、又金だ。いやか？
雅子　………。
小泉　いや、そりや無理もない、が毎度恐縮だが、今日中に是非金が無いと私は非常な恥辱を受けなければならないのだ。
雅子　けれども――もう私には――。
小泉　いや、今度は大した事ではない。鳥渡三百圓もあればいゝのだ。
雅子　誠にお言葉を返しては濟みませんが、私にはもう五十圓ものお金も手許には――。
小泉　そんな事を云つて焦らすものではない。古川に水は絕えずさ。無いと云つたツて私共の樣に貧乏人とは違つて、あんたは子爵家の御令室ぢや。いくらでも都合が出來るのだから是非賴む／＼。それでないと私は刑事上の罪人とならんければならないからな。
雅子　どうか今日は御勘辨を願ひます。全く私にはもう。
小泉　ぢや、かうしてくれないか、金と云つてなかつたらば、何か品物があるだらう、あんたにはいくらでも高價な品物がある筈だ。一つ品物で融通してくれ。
（雅子は俯向いて默して居る。修三は、すりよつて。）

小泉　黙つて居ないで一つ何とか返事をしてくれ、私の様な者でも假に親と云ふ名があるのだから、あんたが都合をつけてくれると云ふ意志さへあれば、どんな故障を押し退けても都合をしてくれるのが人情と云ふものぢやないか、どうだね。

（お玉、雅子を迎へに來りて、躊躇して木蔭に佇む。）

雅子　（思ひ切つた態度で）實はもう品物も……指輪も時計も、お父樣の爲めに手放してしまつたのですから。

小泉　さ、そんな事は云はんものだ。未だ外にあるだらう。

雅子　全く、何もございません。

小泉　いゝやある筈だ――（と雅子の指を見て）そこに光つて居るものがあるぢやないか。

雅子　（ハッとかくす）

小泉　さ、そんなに隱さんでもいゝ。現にその通りちやんと持つて居るぢやないか、それでも結構だ。な、今私の體には火が付かうとして居るも同樣なのぢや、僅かの金で私の名譽は臺なしになりかゝつて居るんだ、雅さん、考へてごらん、假りにも、あんたの親許の私が、三百圓の金で家資分散をしたとか、差押へを喰つたとか、云はれたらば、あんたの肩身はどうぢや。延いては良人の一彥さん、かう云ふ方面からも考へんけりやいかん。成程そりや今日まで私は、あんたから澤山の金や、指輪、時計を借りては居る。が、そこは貧乏人の私ぢやから察してくれなくちや困る。ま、例へばぢや、な例へば、縱しあんたの手許になくとも、生れた家は千萬長者と云はれて居る大金持ぢや、なア雅さん、どうぢや、その指輪を一時貸してはくれまいか、どうだね？

雅子　（オロ〳〵して）お父樣、お父樣の仰有る事はよく分つては居ります。が、この品許りは御勘辨下さいましこれは一彥から最初に贈られました――。

（お玉は出るに出られず遂に引返へす。）

小泉　雅さん。では、どうしてもならんと云ふんぢやね。

雅子　は、はい。

小泉　どうしてもか。

雅子　………。

小泉　（間を措いてから）よしッ、では、要らん、要らんと云ふたら絶對、要らん！（と強く云ふ）

雅子　あの、どうか御立腹だけは……。

小泉　いや、私は何も立腹などはせん、唯、憤慨しとるの

みだ！　私は今も云ふ通り、これ迄も隨分いろ／＼の心配をかけて居る。これ以上いかな私も、厚顔しくて頼めはせんのだ。わしもかうやつてあんたの處を尋ねるにはよく／＼の事でなければならん、辛い事なのだ。その辛さをもこらへて貴女に又の融通を頼む私の氣持も察せず頭から拒絶するとは一體どつちが無理だ、斷る方が無理か、頼みに來る方が無理か、よく考へて見なさい！　私も大きな聲をしてこんな事は云ひたかアない。が、あんたが云はせる樣に仕向けるんぢや、まア聞きなさい！　あんたは、咽喉元過ぎれば熱さを忘る――と云ふ事を知つとるか、全體、あんたは誰のお庇で華族、子爵の奧樣になれた。あんたの生れた家と、今嫁入つて居る家と家柄をよく比べてごらん！　云ふ迄もない事だが、あんたの生みのお父さんは、現在の兄ぢや、つまり、あんたの兄さんの罪を引被つて非國民扱ひにされて居るんぢやないか、一體あんたの兄樣はどんな事をしたか、どう云ふ行をしたか、彼の日露戰爭の際に日本の軍人でありながら露國の爲に買收されて、我國の軍事の秘密を洩らしたがため、其の地點の慘敗を招いたんぢやぞ！　忠勇な何千の兵士を殺したのぢや！　それが爲に銃殺されたんぢやぞ！　その時の軍法會議に列した私だ。何千萬の富を持つて居るあんたの生家中野家は、それから世間からどんな扱ひをされたか、あんた忘れはせんぢやらう。それをこの私が、一生埋れ木に果てさすのは不憫な者と、色々奔走して私の娘雅子として岩崎家へ嫁入りと迄なつたのぢやないか！　あんた、それを忘れたと見えるな、さうぢや、忘れんけりや、この私の苦しい立場に同情されるのが當り前ぢや！　――何故默つて居る。よし／＼之程恩義のある私の要求を斥ける樣なら、私にも考へがある。工風があるよ。いや別にあんたを苦しめると云ふ譯ではない。そりや何と云つても假そめにも親だ。しかし私はな、あんたも知つての通り酒が好きだ、酒と云ふ奴は、狂ひ水と云つてな、あれを飮むと人間と云ふ奴は何を饒舌り出すか、常識などを忘れちまふものと見えるでな。萬一、萬一ぢやよ、この私があの、やかましやの婆さんの前で、つまらん事をしやべらんものでもない。そこら邊は、よく心懸けておいてくれ！　まア、嫌はれぬ内に私は御免を蒙らうか。（と立上る）

雅子　あツ、お父樣、どうぞお待ち下さいまし。（と止める）

小泉　放しなさい。放しなさいと云ふに、もう、お前には賴まんのだ！　えい、放せ！

雅子　お父樣、お待ち下さいまし、この指輪は、お持歸り下さいまし！

小泉　ほう、ぢや何だね、その指輪よりも私の名譽の方が大事なんだね、義理人情の方が大事なんだね、さうか、さう云ふ譯ならば、斷りたい所だが、背に腹はかへられない。拜借するとしよう！　えゝと、期限を決めて置かう、永ひくといかん、來月の十日の夜とね、それでよからう。

雅子　は、はい。（と渡す）

小泉　（受取りながら、悦に入る）

雅子　（その樣を見て不安氣に）では來月の十日には、お間違ひなく――。

小泉　う？　何が――、あゝあ十日〱。

（と、指輪をしまひ乍ら、立上り上手を見て。）

小泉　おゝ、一彥さんが來た。

（雅子も見る。一彥はお玉と再び來る。）

岩崎　お父樣、もうお話は、お濟でしたか。

小泉　濟んだ〱いや奧樣を拜借して誠に恐縮ぢや。そのやつぱり親子の間柄には內所事もあるでなア、、、。

（と、極めて鷹揚に笑ふ。）

岩崎　御尤もですとも。ぢや、これから御一緒にどこかで御食事でもしませうか。

小泉　いや、鳥渡、用事もあるし、まア若い者に老人は水に油でな、邪魔者は早速引下る事だ！　どうか御隱居によろしく御つたへ下さい！　ぢや御免！

（と、修三は倉皇として去る。一彥はお玉と共に見送つてから雅子を見る。雅子は俯向いたまゝである。）

岩崎　雅さん、どうしたんだい？

（雅子はハツとして顏を上げ急に態度をかへる。）

雅子　お待たせをして濟みません。

岩崎　ぢや、今度は金閣寺の方へでも遊びに行かうか。

――幕――

二　幕　目

第一場　岩崎子爵邸の奧座敷

幕あく。

（と、隅の方に緞子の座蒲團が積み重ねられてある。）

その下に立派な桐の丸胴の火鉢が四つばかり並べられてある。上女中のお駒とお菊は座敷の掃除が終りし心。下の方に下女中二人が箒と采配を持つて立つて居る。老家扶の頭に白い鬚のある吉川庫之助は床の花を活けて居る。)

お駒　(下女中の方を向いて)　御苦勞さん、もう、よござんす。

(と、下女中二人は會釋して去る。)

お菊　吉川樣、お花の方は未だですか、大變に暇が要りますねえ。

吉川　今日は念に念を入れて活けて居るんでね、どうだ見なさいよ。この水仙と梅の枝振りを……。

お駒　又自慢ですか、けれどね、吉川樣は本當に器用だわ。

吉川　そりや昔取つた杵柄ぢや、ハヽヽヽ、しかし月に一回決まつてお開きになる歌合せの會も御本人たちは面白いか知れないが、俺れたちには面白くもないわなア。

お駒　全くねえ。

お菊　ね、鳥渡。(と頓狂に笑ふ)

お駒　あら・どうしたの?

お菊　私にどうしても一つのみ込めない事があるのよ。

お駒　何が――?

お菊　一體御前さまは濱子さまを御好き遊ばして居らつしやるのか、それとも御隱居さまの手前、わざと濱子さまがいらつしやると馴れ〳〵しくなさるのかしら!

お駒　やつぱり御隱居さまの手前かも知れないわ。なにしろ、お許嫁だつたのが、到頭御前樣は奧樣をお迎へ遊ばしたんだからね、お好きでないことは間違ひないわね。

お駒　愼しんではゐらつしやるけれ共、――女ツてものは誰でもさうだからこの頃また一層御前樣は濱子樣に御親切に遊ばす樣ね、大變近頃目立つて來たわ。

お菊　全くよ、きつと御前樣は御隱居さまに、何んとか云はれたのぢやないかしら。

吉川　いや〳〵それは御前樣が御悧巧なのぢや、濱子樣は口にこそ出しては云はないが、心の底では奧樣を敵の樣に思つて居る。そこで始終出入をして奧樣の缺點ばかり見附けて御隱居樣の御耳へ入れる。さうなると、奧樣は御隱居さまに呼びつけられて叱られるので御前樣は濱子樣の御機嫌を損じない樣にお氣をつけ遊ばしてゐらつしやるんだ、やつぱり可愛い妻の爲にお氣をお配りなさるのさ。

お駒　さうかも知れないわねえ。
（と、この時自動車のサイレン聞える。）
お菊　あら、お客様がいらつしやつたんぢやないかしら。
お駒　あたし行つて見るわ。座蒲團と火鉢をたのみましたよ。
（と、お駒は去る。吉川は漸く花を活け終り、花瓶を床の間に運ぶ。お菊は座蒲團と火鉢を位置よく並べる。吉川は油紙や鋏や木屑などをまとめて去る。入違ひにお駒は後室の褥を二枚折にして携へ來りて布く。）
お菊　どなた？　お客は？
お駒　濱子さまがゐらつしたのよ。御隱居さまが今此處へ入らつしやるんですと。
お菊　まア。
（と、小走りに去る。お駒も反對の方に去ると間もなく後室貞子は濱子とお駒に扶けられて朱塗りの杖をついて出て來る。）
貞子　（坐つて）駒や、一彦はどうして居なさる。もう濱さんも來たのに、まだ寢て居なさるのかい？
お駒　只今、お菊さんが見にいらつしやいましたから、此方へいらつしやいませう。

貞子　何にしろ奧樣があの通り行き屆かない七月のお腹と來て居るのだから、一彦の風儀も惡くなる許りぢやよ。
お駒　私、お迎へに行つて參ります。（と去る）
貞子　濱さん、本當にお前は、いつも早いよ、私はいつもお前さんの顏を見る度にどうしてお前を……と今更ら愚痴を云つても初まらないが、一彦にも困つたものぢや、あんな行儀作法も碌に知らないものを、大事の嫁に迎へるなんて、第一に家柄が違ふ、華族と士族とは主從の間柄も同じ間柄だから、のう濱さん。
濱子　けれども伯母さん、雅子さんのお父さまは、やつぱり藩の御家老筋だつたんぢやございませんか。
貞子　そりやさうだが、お前さんのお父さんは家來筋でも一萬石の大身、小泉は二千石の小身だもの、それだけ格が違ひますよ。
濱子　しかし只今の世の中では成べく身分の上下を云はない樣にして居るんですからね。
貞子　いや〳〵それがいけません。家柄や身分の事を何んとも思はんと云ふ事は、昔から傳はつて居る禮儀を破るものでよくない事ぢや。やつぱり華族のものは華族から嫁を迎へる、士族は士族から、平民は平民からと、ちや

んと區別がしてあるので、物の順序と云ふものが立つて行きますのぢや。それに一彥は禮儀や順序を破つて幼い時から許嫁であつたお前さんを血族結婚がどうのかうのと云うてあんな者を迎へた氣が知れない。私は死切れない程口惜しい氣がしてなりませんのぢや！

濱子　伯母さん、もう其の事は仰有らない方が、ようございますわ。私はもう、すつかり諦めて居るんですから。

貞子　そんなだから一彥は、いゝ氣になつて馬鹿にするのぢや、私は飽く迄も諦められません。第一あんたのお父樣にあんなに堅く約束をして置きながら何と顏が合はされます。定めし隆義どんが、草葉の蔭で立腹をしてゐる事と思ひます。

濱子　でもね伯母さん、今更ら、貴女がいくらお氣をお揉みになつても、どうにもならないのぢやございませんか。

貞子　お前さんが可哀想ぢやよ。私は此の事に就ては考へて居る事もあります。待てば海路の日和、私でもお前でも其の事さへ考へて居りやア、いつか時節が來ますと云ふものぢや。

濱子　けれども、肝腎な一彥さんに愛が……。私にはどうしても一彥さんが、私を愛して下さる眞心がないものと思ひ切つて居るんですから――。

貞子　さ、そこが、お前さんの執着の弱い所ぢや。私に云はせると一彥は心の底では今でも何とか思つて居ます。けれども、お前さんの方が餘り諦めやうが早過ぎるからいゝ氣になつて居るのだと思つて居るんです。濱さん、お前はどう思ひなさる？

濱子　さあ、どうでせう。

（と、故意に大きな表情で考へる容子。此の時、下手より靜かに雅子來りて兩手をつき。）

雅子　お早うございます。

濱子　雅子さん、又早くからお邪魔にまゐりましたわ。

雅子　いゝえ、主人も皆樣の入らつしやるのを待ち兼ねて居ります。それに今日は大變にお天氣が、ようございますから、きつと皆樣がいつもよりも、大勢お揃ひで入らつしやるだらうと喜んで居りました。

貞子　雅さんや。

雅子　はい。

貞子　お前は何にかい、今日のお天氣の好いのを、今頃心づきなさつたのかい？

雅子　いゝえ、さうと申上げたのでは御座いませんけれど

も……。

貞子　それならば、なにも際立つて、そんな事を云はんでもよいぢやないか。一彦はね、私が躾けた兒ぢや。皆さんは天氣がいゝから入らつしやるの、悪いから入らつしやらないのと、そんな無作法な方ではありません。何れも立派なお家柄の、お歴々許りがお集りぢや。誰かの樣に士族の娘ではないのぢやよ、なア濱さん——。

濱子　伯母さん、まさか、雅子さんがそんな事を勝手に仰有るやうな事はないでせう。ですから、やつぱり一彦さんが仰有つたのでせう。

貞子　いや、一彦はそんな事を云ひさうな事はない。きつと誰かゞ今頃、眼を覺ましたから、お日樣の出て居る事に氣が付いたのでせう。一彦は以前は到つて早起きぢやつたが雅子さんが來てからと云ふもの大變寢坊になりましたよ。そりやどうしたつて連れ添ふ者が習慣が悪いと男も悪くなるのも無理ないものぢやよ。しかし雅さんの朝寢も考へれば無理はない。お父樣の小泉さんは、名代の寢坊でのう、なんでも酒を飲んで、その日の晩から、翌々日の朝まで、寢つゞけたと云ふ方ぢやもの。

濱子　でも伯母さん、雅子さん一人が悪いのぢやなくて、一彦さんにも罪はありますわ。ね雅子さん。

貞子　ま、お前お聞きなさい。小泉さんは、そんな方ぢやもの寢坊も遺傳で治らんものと見えますよオホ、、、。

（と、雅子居堪らず立たんとする時、主人岩崎一彦靜かに來る。）

岩崎　あゝ濱さん、大變に早かつたね。

濱子　でも、もう九時半ですわ。

岩崎　さうかね、しかし九時半なら早い方さ。そりや迚もお母さんのやうに夜の明け方から若い者は眼は明きませんからね。

貞子　あれ、あんな負惜しみを云つて居る。朝起きは大變に藥ぢやよ。寢坊をする位、毒なものはありません。

岩崎　そんな愚にもつかん話は止しませう。どうです、濱さん、御自慢のマンドリンは——まだ皆さんが來るにも間があるから一つ聞かせて頂かうか。

濱子　駄目よ。それよりも貴方のお好きなピアノの方がようございますわ。

岩崎　いや結構、なにしろ毎日の樣に朝早くから聞かされて居るんだからね。

貞子　朝早くつて誰にだい？

岩崎　こゝに居る人に。

濱子　雅子さんにですか。

岩崎　それも未だ、客が明け切らない內からです。なにしろ雅さんには少しの缺點もないが、朝の早い事が玉に疵かね。それも默つて香でも焚いてくれるのだといゝが、朝起きをした時に限つて必ず音樂だ。好い具合に寢て居る隣の部室で、ピアノを彈かれるので、寢坊の私も起きん譯には行かんさハ、、、、。

（と、呵々と大笑する。此の時又自動車の警笛ひゞく。お菊靜かに出る。）

お菊　御前樣、かぎ屋からプリンと紅茶が屆きましてございます。

岩崎　さうか、それぢや今にお客樣が見えたらそれを出しておくれ。

お菊　はい。

（と、去る。そこへお駒が出て。）

お駒　御前樣、高倉樣と片山樣のお姫樣が御揃ひでいらつしやいました。

岩崎　淑子さんと紀子さんが——今日は都合で御出席がないと御通知があつたが——いや大層結構だ。早速此方へお通しなさい。

お駒　はい。

（と、去る。そこへ家扶の吉川が出る。）

吉川　御前樣、只今大宮樣、花園樣、山の井樣御三方がお揃ひでお越しになりましてございます。

岩崎　あ、さうか、ぢや直に此方へ——。

吉川　はい〳〵。（と去る）

（と、入違ひにお駒は淑子と紀子を伴つて來る。濱子は立上つて。）

濱子　まア、よくいらつしやいましたわね。

淑子　お邪魔に參りました。

岩崎　御出席がないと云ふので落膽をして居たのですが、よくお出で下すつた。さアどうぞ、此方へ……。

紀子　御隱居さま、先日は失禮をいたしました。

貞子　いゝえ、私こそ、よく御越し下さいました。

（と、淑子と紀子捨臺詞にて席につく。吉川は歌人、大宮胤賴、子爵花園公麿、男爵山の井重文を案內して來る。）

岩崎　おゝ、お揃ひで、ようこそ——。

（と、三人の客は捨臺詞にて席につく。濱子、貞子、

雅子は會釋して出迎へる。お菊はプリンと紅茶を運んで來る。）

大宮　御後室、貴女はいつも御壯健で私などは、お羨しくつてなりません。

貞子　いや／＼もう、かう年が寄ると、思ふ樣に體の自由が利きませんので、お宅のおでい樣は、やつぱりお達者で……？

大宮　はい。例に依つて朝から晩まで謡ひつゞけて居ります。

貞子　それは何より結構で——おゝ花園樣、お宅のおしう樣は東京へお越しぢやさうな。

花園　はい、弟の顏が見たいと申しまして、それに弟は此度、雲井の方のお伴をして歐洲へ旅行をしますので、見送り旁々、妻と一緒に參りましたので。

貞子　オーシウと云ふと——？

岩崎　お母さま、あなたの大嫌ひな外國ですよ。

貞子　あゝ異人の國かい。どうしてまたあんな處へ！

岩崎　詮方がありませんよ。宮内省へお勤めして居る以上お伴を命ぜられるのは、寧ろ名譽ですからな。

貞子　私は外國の事を聞いても、ぞッとします。……外國の音樂を聞いても、刃物を眼の先へ、突きつけられる樣な氣がしますよ。

濱子　隨分伯母さんは保守主義ですわね。けれども伯母さん、もう保守主義は、お捨てになつてもようござんすわ。

山の井　時に岩崎君、先日の會で奥樣が、お詠みになつた歌を二三日前に拜見しましたが、實に結構なものですね。近頃の傑作だと思ひます。

岩崎　ありがたう。雅さん、名譽だね、當代和歌では紫吟流の泰斗と云はれる山の井君からあんなに讃辭を呈せられるのは光榮だよ。

花園　全く秀逸でした。殊に三十一文字を通して、一句一字にも無駄がなく、然も新しさが溢れてゐる所などは、いや我々の企て及ばん所です。

大宮　私共には解らなかつたが、近頃の若い人には、大變に評判がよかつたですよ。

雅子　そんなに仰有られますと、私、お恥しうございます。

濱子　雅子さん、全く御名譽ね。

淑子　濱子さん、奥樣の歌ね、あれは、私何處かで見た事がある——やうに思ふのですわ。

濱子　あら。（と誇大な表情にて）見たと仰有つて、何方

淑子　かの歌に似たのがあると云ふ意味なんですか？
濱子　えゝ、奥樣の前で甚だ失禮ですけれども、あんまり似通ツてるんですもの。
雅子　まア。（と吃驚して）それは何方のお詠み遊ばしたお歌なので御座います。（と膝を進める）
淑子　あのね、紀子さん、さうですわね。
紀子　えゝ、ねえ、濱子さん、全く似てるんですもの。
雅子　ですから、何方のお歌に似て居るのでございます。
淑子　奥樣のお歌はたしか、日の光めぐまれし野は、笑顔して、殘る雪ふみ草の芽を踏む――と云ふのでございませう？
濱子　えゝえ、さうです。
淑子　處が、それは日の光、ぬくきがいとゞ、うれしくて殘る雪ふむ、草の芽をふむ、――と云ふのに殆んど、そツくりなんですもの。
雅子　まア。
貞子　成程、そツくりぢや、とんでもない事でございます。やつぱり和歌の盗人ぢや。
岩崎　高倉さん、もう一度仰有つて見て下さい。
淑子　日の光、ぬくきがいとゞ嬉しくて、殘る雪ふむ、草の芽をふむ――と云ふのでございます。
岩崎　成程、そしてその和歌の詠み人は誰方ですか？
淑子　あの――それは何でございます――あの。（と躊躇）
濱子　（故意と誇大に）あ、私思ひ出しました、たしか淑子さん、夫木集にあつたでせう。
淑子　えゝ、さうです。夫木集でございます。
紀子　きつと何でせう、奥樣のお詠みになつた御意味と夫木集の歌の意味と偶然符合をしたのでせうけれども。
貞子　いえ、それは正しく雅さんが自分の腕の未熟さをかくすために古い和歌を盗んだものに違ひございません。
雅子　お母樣、それは餘りでございます。私はあの歌は丁度、十五六の時分に、奈良の郊外に體を惡くして養生して居ました頃、その時の實感を、そのまゝ詠みましたので人樣の和歌から取つたものではございません。
貞子　いや、そんなに、お前さんが胡魔化さうとしても駄目ぢや、いくら暗合でも、さう似るものではありません。皆さま、いかゞでございませう。
大宮　これは困つた問題ですな。よく和歌の會ではヤレ誰それの歌は上の句が古今集の誰れの句に似て居るとか、ヤレ下の句が貫之集の何の句に似てるとか云ふ事は、ま

まある事ですか、全部・上も下も似通ッて居ると云ふことは、餘りない事でしたね。

貞子　雅さん、何故お前は皆樣の前で立派に盗みましたと仰有らないのぢや。

雅子　お母樣、それは御無理と云ふものでございます。

貞子　無理？　何が無理です。これもう一度云つてごらん自分の不屆きを棚に上げて置いて母と名のつく私に向つて無理とは何事ぢや、さう云ふ不埒な料簡おやから、人樣の和歌を盗んで、我物顔にしたのぢや。私は呆れて口もきけません。

雅子　いゝえ、それはお母樣の御考へ違ひと云ふものです。違ひます／＼。私は決してそんな卑怯な行はいたしません。

岩崎　雅さん、注意をなさい。お母樣に向つて口が過ぎやしないか。

雅子　あなた、それでは、あなた迄が人樣の和歌を剽竊したと仰有るのでございますか。

岩崎　何故、お前さんは強情を張る。さ、おかさんの前で誠に濟みませんでしたと謝つてくれ、な、おい雅子、謝つてくれ、分つたか、分つたのか、いゝか！

雅子　は、はい――。

（と、猶も躊躇して居る。此時、お玉來りて坐る。）

お玉　御前樣、一寸御待ち遊ばして下さいまし。私、高倉のお孃樣に伺ひたい事がございますから。

貞子　お玉、此の席にお前は用がありません。あまり失禮ではないか、お下り／＼。

お玉　御隱居さま、さつきから貴女樣は奥樣に、人樣の和歌を盗んだと仰有いますけれども、何と云ふお方の、お歌を盗んだのか、お調べ遊ばしてから奥樣を、お責め遊ばして居るんですか。

岩崎　お玉、お前、お母さんに向つて何と云ふ事を云ふのだ。用はない。下つてゐなさい！

お玉　私、お言葉を返しては誠に濟みませんが、奥樣のお盗み遊ばした、お歌と云ふのを委しくお調べも遊ばさずに無暗に奥樣に罪をお被せなさるのは、餘り、お可哀想ではございませんか、高倉のお孃樣、あなた、奥樣のお詠み遊ばしたお歌は夫木集にあると仰有いましたが、夫木の何處にあるのでございます。それを皆樣の前で、はつきりと仰有つていたゞきます。

雅子　お玉、お前この席で、そんな事を云ふものではあり

ません――私さへ……。(と忍び泣く)

お玉　奥様、貴女そんな弱いお心では、いつも理のある事でも無理に押されて負ける許りではございませんか、さ私、奥様に代つて夫木集の誰方のお歌ですか、お伺ひし度うございます。その上で夫木集を調べてから、奥様がお盗み遊ばしたのならば、御隠居様や、皆様の前で、おわびをして頂く事にいたしませう。

岩崎　お玉、お前が雅さんの爲に、皆様の前へ出て、そんな事を云ふ心の裡は、よく解つては居るが、今それを洗ひ立てゝは、はてしがつかないのだ。この場の納りがつかないのだ。何事も云はずに、お前の部屋へ下つて居なさい。え、分つたか、え、さ、ぐづ／＼せずと――。

お玉　御前様、私からお願ひいたします。どうか奥様を、御信じ遊ばして下さいまし、決して奥様は人様の歌をお盗み遊ばすやうな心の曲つた御方ではございません。

雅子　お玉、私からも頼みます。どうか、もう何も云はずに下つておくれ、ほんとうにお前が私の身を思つてくれるのならば、彼方へ行つておくれと云ふに――。

お玉　はい。奥様がさう仰有るんでしたらば、私もう何も云ひません。けれども奥様、何方が何と仰有らうとも盗まないものは盗まないでお通し遊ばさないと、此の後もある事でございます。お氣を付けなさいませんと、いけませんよ。

岩崎　お玉、早く彼方へ行きなさい。

お玉　皆さま、失禮をいたしましてございます。

(と、靜かに去る。)

貞子　呆れたものぢや、主が主なら家來まで何と云ふ圖々しいのぢやらう。皆様、私からお願ひいたします。どうぞ岩崎の家門の爲に、今日の不始末は御内分にお願ひ申します。

(此時、家扶吉川一通の手紙を持つて出る。)

吉川　御前さま、只今小泉さまからお使が參りました。

(と、手紙を出す。)

岩崎　(受取り)使が――おゝ雅さん、お母様が御病氣だと云つて來たよ。

雅子　あの、お母様が?

岩崎　この手紙に依ると、手が足りないので、お前さんに手傳ひ旁々介抱に來てくれる様にと小泉さまから頼んでよこしたのだが、折惡しく今日は、こりや弱つたなア。

雅子　どうしたものでございませう。

岩崎　お前だけは、とにかく直ぐに行つた方がよからう。お母樣の御病氣をお見舞もせずに居られないからね。

雅子　それでは、お母樣、誠に濟みませんが、これから一寸やらせて頂きます。

貞子　さア〳〵行つておいでなさい。生れた家の親御は大事なものぢやよ。

岩崎　雅さん、かうしやう。お前さん許り遣つては又私が小泉さんに對して餘り冷たい樣に思はれても心苦しい、お母樣、私も一緒にお見舞に行つて來ますから其間、あなたお客樣のお相手をして頂きたうございます。

貞子　なに、お前も一緒にお出かけか、まアお客樣がゐらつしやるのに――。

岩崎　皆樣、甚だ勝手を申上げて恐れ入りますが、私が行つて來る間、お集りの方だけで例會をお披き願ひます、直ぐに戻つて參りますから。

大宮　さ、どうぞ――。

岩崎　それぢや失禮をいたします。

（と、雅子を伴つて靜かに去る。）

貞子　（見送つて）困つたものぢや、雅さんの事と云ふと自分から進んでも一緒に行きたがる。どれ濱さん、皆さんを御案内して二階へ行きませう、さ、先生、花岡さん山の井さん、どうぞ二階へお出で下さいまし、お駒！お駒！

（と呼ぶ。お駒來りて、貞子を扶け先に立ちて去る。）

一同濱子、淑子、紀子を殘して去る。）

濱子　（見送り）ありがたう、濱子さん、紀子さん、本當にありがたう。

淑子　いゝえ、けれども濱子さん、第一の復讐は、どうやら無事に行きましたわね。

濱子　えゝ、でもあたし、お玉が出て來て、夫木集の何方の歌ですと云はれた時には、何と云はうかと、全くの所ヒヤ〳〵させられましたわ。

紀子　私達だつて、夫木集と云ふ事を、あなたから聞いて居なかつたでせう。隨分間誤つきましたわ。

淑子　あの替歌の方は、本當に夫木集にあるんですか。

濱子　いゝえ、私が雅子さんの歌から氣がついて、好い加減に文字を二つ三つ替へて見たんですよ。

淑子　まあさオ、けれども皆樣が氣が付かずに、到頭雅子さんの剽竊になつたのですから、成功ですわ。

濱子　本當ね。

雅子　そして濱子さん、第二の復讐は？

濱子　さア。

（と、考へる。誰か來る跫音に濱子、氣付いて二人を制す。）

――道具一轉――

二幕目

第一場　下加茂小泉修三の宅

道具納まる。

（と、小泉修三は獨酌で酒を飲んで居る。下手の方に雅子の實父、中野清助が控へて居る。上手の室には、清助の妻、お富が床に横たはつて居る。假名子は頻りに看護して居る。）

中野　小泉さま、いろ〳〵とお世話になりまして誠に相濟みません。何しろ家内が是非雅子に會ひたいと申しますので醫者が汽車などにゆられては不可んと云ふので、釣臺でやつとの事で參りました樣な譯で……どうぞ、お察しを願ひます。

小泉　しかし、君が病人を、唐突に擔ぎ込んだのには、吃驚したよ。

（お富は苦しげに俯向いて胸を抑へる。清助は心配氣に見やる。）

中野　あの、お願ひをしました醫者は未だ仲々參りませんでせうか、あの、それから娘も――。

小泉　いや、雅さんも、もう直きに來られるだらう。實はね、お富さんが病氣だと云ふ事を知らす譯には行かんだらう。だからこの假名子が病氣と云つてやつたのだよ。

中野　さうでございましたか、いや、いろ〳〵と御配慮を願つて眞に濟みません。奥樣、重ね〴〵御迷惑をかけまして何ともはや……。

假名子　いゝえ、どういたしまして――何ですよ雅子さんは、それは〳〵見違へる程立派な奥樣に、なつて居ますよ。

（お富又もや咽び入る。）

中野　（その方を氣にしながら）あの、醫者は未だ參りますまいか。

小泉　もう直ぐに來るよ。しかし、それに就いては約束の方はどうしたかね？　肝腎な約束の件は――？

中野　お約束と申しますと――？
小泉　忘れつぽくちや困るな。そら雅さんに逢はせたら、ハヽヽなア解つたらう。これさ。（と五本の指を出す）
中野　あれですか、いや、とんだ失念をいたして居りました。
小泉　それが最も大事の事ぢやないか、一つ雅さんが來ない内に是非願ひたいね。
中野　只今、差上げますので――？
小泉　ハヽヽ寸善尺魔と云ふ事もあるからな、善い事は早い方がいゝてハヽヽヽ。
中野　はい〳〵承知をいたしました。
（と、懷中から紙入を出して小切手を取出し、小泉の前へ差出して。）
中野　では、これを、どうぞ――。
小泉　ありがたう、では確かに――（と受取り）これこれ早川、醫者を呼びにやつたか、澤渡の奴は一體何をして居るんぢや！　假名、お前、早川が行つたか行かんか見て來てくれ！（と云ふ）
假名子　はい〳〵。
（と、去らんとする。そこへ書生の早川一出で來る。）

早川　先生、何ですか。
假名子　何ですかぢやありませんよ。澤渡さんはどうしたのさ。
早川　あのヨタリストですか、もう來るでせう。きつと途中で又カフヱーへでも寄つて女給でもからかつて居るんでせう。
小泉　これ、それ處ぢやないんだ。重病人を控へて居るんだから、も一度迎へに行つて來いよ。
早川　はい〳〵弱つちまふなア。竹庵は竹庵らしく病家を後生大事にすりや、いゝんだ。
（と、呟き乍ら去らんとする時、倉皇として小泉の友人なる醫師、澤渡元順來る。）
早川　（吃驚して口に手をあてゝ）や、いらつしやい。遲うございましたね。
澤渡　うむ、車屋と自動車の運轉手の喧嘩を見て到頭仲裁に入つたもんだから遲くなつた。
小泉　暢氣な醫者もあつたもんだ。まア一杯どうだ。
澤渡　相變らずだね、早速頂かうか。（と杯を取る）
小泉　西の宮の友人から送つて來たのぢや。どうぢや、うまからう。

澤渡　うまい。かけつけ三杯だ！

小泉　（酌をし作ら）しかし昨夜は失敬したよ。

澤渡　君は馬鹿に早く引揚げたぢやないか。いつも尻の長いくせに――。

小泉　實は何さ。少し資本が缺乏をしたものだからね。やつぱりあんな場所は、三百と、まとまつて居ないと可かんよ。君はどうだつた。

澤渡　二百圓ばかりやられちやつた。

小泉　さうか、そりやひどかつたなア。

澤渡　どうも運の神樣は不公平で不可んよ。俺のやうな貧乏人を痛めつけないで、君のやうな無盡藏の財源を持つて居る不良老年を徹底的にやつつけてくれるといゝんだ。

小泉　冗談を云つては不可ん。俺こそ、此頃は冬枯の田圃に突立つた案山子さ。しかし、今夜も行かうか。

澤渡　うむ、よからう。何しろ昨夜の恢復をしないと、山の神の御機嫌、頗るつきなんだからなア。今夜は向う鉢卷で敵討をやるよ。

小泉　どうだか。崇禪寺馬場の仇討の口だらう。大體貴公は下手で不可んな。

澤渡　お手許拜見。誰かこそ下手の横好きと云ふのぢやないか。

（此間清助は、ハラ／＼して口を挾まんとして居る。假名子は見かねて、修三の袖を引く。）

小泉　何ぢや／＼。今作戰の眞最中ぢやないか。

假名子　御病人が苦しんでいらつしやるんですよ。

小泉　病人？　ハ、、、成程。これはどうも失念をした。澤渡君、いかんよ。君がつまらん事を云ひ出したので、――早速ぢやが病人を診てくれ！

澤渡　失敬々々。商賣の方が肝腎だつたね。（と稍々眞面目になつて）御病人は？

中野　あちらに居ります、私の家内で、――はい。

澤渡　あゝ、さうですか、一寸容體を拜見しませう。

（と、上手に行き、お富を診察する科ある。假名子は盥に水を汲んで來て置く）

小泉　どんな具合かな？

澤渡　（手を洗つて）うむ、大分動かしたな。

中野　はい、實は大阪から船と、釣臺でつれて參りましたので……はい。

澤渡　さうでせう、餘程心臟が惡いやうだ。こりや安靜にして餘り心配事などをさせない方がよろしいね。

中野　急には癒りませんでせうか。

深渡　まア氣永く御養生をなさらんと、いけませんね、何ですか、大阪では何方に、おかゝりでしたか。

中野　あの、佐藤博士の御診斷を、うけて居りましたので……はい。

深渡　はゝア成程、小泉君、君の御親類かね。

小泉　まア〳〵さうぢや。其處でな、實は病人に是非會はせなければならん人があるんぢやが、それまで何んとか苦痛を止める方法はないか。

深渡　ぢや、應急手段として注射をして置かうかな。

小泉　是非一つ頼む。

深渡　よし〳〵。

（と、深渡は注射器を取出して、お富に注射する。小泉と深渡は下手の室へ來る。清助と假名子は、お富の看護をする。）

小泉　御苦勞ぢやつた。まア一杯やれ。（と杯をさす）

深渡　（一口飲んで）しかし小泉君、今夜本當に行くかい。

小泉　無論、鳥渡、資本の都合がついたからな、所謂捲土重來の勢で今夜こそ引返つて仕舞ふさ。ハヽヽヽ。

深渡　ハヽヽヽ。あて事と越中は何とやら、まアしつかりやつてくれ！

（書生の早川急ぎ登場。）

早川　先生、來ましたよ。

小泉　誰が？　まさか裁判所？

早川　岩崎子爵の奥樣が來たんです。

小泉　雅が來た！　中野さん、雅さんが來たさうぢや。

早川　お二人でいらしたんです。

小泉　誰だ、もう一人は？

早川　子爵です。岩崎さんです。

小泉　そりや、いかん、早川玄關で待つて居て貰へ！　今取散らして居るからと云つて、俺が迎へに行くまで待つて居て貰ふんだぞ！

早川　は、は、承知しました。

（と、早川は慌てゝ去る。小泉は清助を押して上手の室へ押やる。そして捨臺詞にて清助とお富を無理に床より起して押入へ入れる。そしてうろ〳〵して居る假名子を無理に床に入れる。）

（清助は不審氣に、押入より出る。）

小泉　いかん〳〵中野さん、一彦も一緒に來たんぢや。出てはいかん。（と無理に押入に入れ、後又、假名子をも

床の中へ押入れる。この科に面白きあるべし）假名、お前が、お富さんに代つて、暫く病人になつて居るんだ。起きるんぢやない。いゝか、中野さん、出てはいかんぞいゝか。

（と、下手の室に來る。澤渡は、とつ追ひつしてうろうろして居る。）

澤渡　小泉君、私は、もう歸つてもよからう。

小泉　いや、鳥渡都合がある。君も居てくれ、俺れは迎へに行つて來る。

（と、去る。澤渡は再び病人の傍に到りて澄まして坐つて居る。そこへ修三の案内にて岩崎一彥と雅子が出て來る。）

岩崎　御手紙で實は驚いて急いで參りましたが、どうも飛んだ事ですね。

小泉　何しろ、私が外出先から歸ると、假名が急に惡くなつてね、此通り寢んで居る始末で……。

岩崎　眠つていらつしやるんですか？

小泉　今、注射をした處でね、よく眠つて居るんだが、口を利いてはよくないと思ふが――なア澤渡君。

澤渡　いけませんなア、なるべく安靜にして置かないと。

小泉　あゝ、一彥さん、これは私の友人で醫學士の澤渡元順と云ふのです。假名の病氣を聞いて早速馳けつけて應急の手當をしてくれたのぢやが、よくお禮を云つて下さい。おい、澤渡君、私の婿ぢや、よろしく賴む。

澤渡　私、この近所に開業して居ります澤渡です。どうぞよろしく。

岩崎　岩崎一彥です。どうぞよろしく。

澤渡　は、ア、すると貴方が御評判の岩崎さんの……。

小泉　子爵家の御當主ぢや。

澤渡　さうですか、いや一向に存じませず失禮をいたしました。（と丁寧に辭儀をして）直ぐ一町ばかり隔つた處に小つぽけな私立醫院を營んで居ります。皆樣のお庇で非常にその何です、まア繁昌いたして居りますので……目下京都醫大の方へ肺ヂストマに關する多年研究の論文を提出して居ります。何れ博士の學位を授けられると思つて居るんです。何ですな、此節は醫師も餘程考へなければならない時代になりまして、私など、率先して診察料無料を叫んで居るんです。どうかまア何分御眤懇に―

岩崎　私こそ。何でせうか、お母樣の御病氣は入院させんでも好いのですか。

小泉　澤渡君、大丈夫ぢやらう。

澤渡　動かしては、不可んからね。

小泉　車や籠で運ぶ事も出來ないし、それに腦が悪いんだから、そら君、さつき俺が云つたやうな原因だからな。

（不圖一彦は枕元の薬瓶を手に取る。慌てゝ修三は取返して。）

小泉　いや、之れは古い薬瓶で臨時に用ゐたので……實は一彦さん、今日女中が暇を取つて歸つたもんだから、假名が勝手元で用事をして居たんぢや。すると非常な物音がしたので驚いて馳けつけて見ると、假名がそこに倒れて居ますのぢや。私も全く驚いてた、段々介抱の結果、其内に蘇生しましたので、様子を聞いて見ると、棚の上の物が頭の上へ落ちたと云ふらしいですよ。

雅子　まア、飛んだ事でございますわね。それが御病氣の元なのでございますか。

小泉　うむ、さうらしい。澤渡君、さうだね、さうだらうやはり頭が原因だらう。

澤渡　うむ、ま、そ、さうだらうね、しかしまア大した事はないよ。

小泉　直きに癒るかな。

澤渡　うむ、治るだらう、いや治して見せる。

小泉　さうか、雅子、今聞く通りだ。大した事はないらしいから餘り心配はせん方がいゝよ。

雅子　けれど、折角お見舞に參つたのでございますから、先生、お母様とお話をしては、いけませんでせうか？

小泉　いかんだらう、澤渡君、いかんな。ね、いかんだらう？

澤渡　まア、いかんな。注射の加減で眠つて居られる位だから……。

岩崎　もう注射をしてから一時間位は經ちますんぢやございませんか。

小泉　いや、その何ぢや、まだ三十分位にもなるまい。なア澤渡君。

澤渡　小泉君、私はこれで失禮しよう、直に藥を取りに、寄越してくれ給へ、食前食後三十分に服んで貰へばいゝんだ。

小泉　よし〳〵解つた、ぢや、こゝで御免蒙る。澤渡君のお歸りだよ。

澤渡　岩崎さん、失禮します。

（と、澤渡は會釋をして去る。）

小泉　（見送つて直に）そこでな一彦さん、假名に寢つかれると、實は女手が無くつて困るんぢや、尤も今、女中を探しにはやつてあるが、それが直ぐにあるかどうかも分らんし、女中が來るまで、二三時間雅さんを貸して貰へんかね。

岩崎　えゝ、そりやもう兒が親の病氣を看護するのは、當り前ですから一向差支へは御座いません。

小泉　さうか、いや有難う、それで助かつた。

岩崎　かうしませう。實は今日宅で一寸歌の會を催す事になつて大勢の客來がありますから、それを見捨てゝ、雅がこのまゝ歸らんと云ふ事も具合が惡う御座いますから今夕にも會が濟みますと、直ぐに差上げる事にしたいと思ひますが――。

小泉　はゝア、成程、このまゝ置いて行つて貰ふ事は出來んかね、それぢや仕方がない。御隱居の首尾を惡くしても雅さんが可哀想だからな。

雅子　私、御用が濟み次第、直ぐに參りますから、どうかお母さんが、お眼をおさまし遊ばしましたらば、よろしく仰有つて下さいまし。

小泉　あゝ、よろしい承知ぢや。

岩崎　ぢや、雅さん、お客を待たせてある事だから、これで、お暇をしようかね。

雅子　えゝ。

岩崎　ぢや、お父さん、これで失禮をします。どうぞ、お母樣にくれ〴〵もよろしく――。

（と、一彦と雅子は捨臺詞にて殘念さうに修三に見送られて去り行く。假名子は蒲團を出て汗を拭く。押入から清助出で來り、ツカ〳〵と下手へ到りて雅子を見る。雅子も不圖振返つて、呀つと互に口をきかんとして修三に立塞がれて清助は躊躇。雅子、氣を殘して去る。お富も這ひ出て下手へ行く。）

――道具一轉――

第三場　再び岩崎邸の奥座敷

道具納まる。

（と、後室の貞子は上手の褥に坐つて脇息に凭れかゝつて居る。下手の方に並んで彼の高倉淑子と片山紀子すつと離れて吉川家扶も控へて居る。）

淑子　私達はいつも寄ると、さはると濱子さんの事ばかり

で持切つて居るんでございますよ。全くお氣の毒でゐらつしやるんですもの。

貞子　どんなに濱さんもあなた方のやうな味方があつて心強いか知れませんのぢや。何しろ一彦は血族結婚とか何とか云つて居りますが、あれに體裁をつくろつて、あんな事を云つて居るので眞にあの時は困りましたものぢや。

紀子　でも體裁など、そんな事はございますまいが、つまり、私も淑子さんと、いつも濱子さんに口を揃へて申すんですの、要するに、貴女の愛の力が足りないとね。

淑子　全く、濱子さんは引込思案なんですもの、お可哀想だわ。そのくせ、隨分一彦様を慕つてはゐらつしやるのよ。內心ね。そら紀子さん、いつかこんな事があつたでせう。濱子さんと、あなたと私と三人で石山へ遊びに行つた時、ちやうど日の暮れ方よ。琵琶湖が繪に描いた樣に赤く染つて帆掛舟がだん／＼に黑くなつて行く景色を讚めて私は詩のやうだと云つたら、濱子さんは急に泣き出したんですのよ。私も紀子さんも吃驚して理由を聞きますとね、瀨田川へ飛込んで死にたいと、かう仰有るんですもの、ねえ、紀子さん、あの時は、本當に驚きましたわねえ。

紀子　えゝ、ほんとにね。

貞子　まア／＼何と云ふ事を云ひますのぢや。それからどうしました。ちつとも私には、そんな事を申しませんよ。

紀子　えゝ、それから、いくら聞いても只もう泣いて許り居ますんでせう。でもだん／＼聞いて見ますとね、ある望みを失つたから、と仰有るんぢやありませんか、よくある事ですわ。思ひつめた事なんですわ。

淑子　濱子さんの樣に、常に華かに見せて居る人程、心の裡には強い惱みに悶えてゐらつしやるのよ、きつと。あの時はね、三人して泣きましたのよ、同情して。

貞子　皆、あの一彦が不可ないのです。あれさへ濱さんと親と親が約束した通り婚禮をしてくれた事なら、そんな心を濱さんに起させずに濟むと云ふものです。あゝ、私は濱さんに、いや濱さんの親御に申譯ありません。

紀子　何とか、ならないものでせうか。

淑子　そりや、紀子さん、今更、どうもならないわ。もう立派な奧樣が、おあんなさるんですもの。

紀子　私が、若し一彦さんだつたら？

淑子　あら、どうなさるの？

紀子　心の底で泣いて暮して居る哀れな熱情の人を救つてあげるわ。

貞子　一つ、あなたから一彦に、みつちりと云つてやつて下さい。もつとは眼を覺ますかも知れませんからね。

淑子　折が御座いましたら、どうか私共も濱子さんのクラスメートとしてお願ひいたしますから、もし機會が御座いましたら、濱子さんを……ね、紀子さん。

紀子　えゝ、ね、小母さまの御心任せになるんですから。

貞子　實は私も、その折の來るのを待つて居るんですよ。きつと今に何とかして見せます。

紀子　淑子樣、今日はお暇をしませう、あんまり長居をしてはお邪魔になりますから。

淑子　えゝ、さうしませう、では小母樣、今日は、いろいろと御厄介になりました。これで御暇をいたします。

貞子　さうですか。どうか又遊びに來て下さい。

紀子　では御免下さいまし。御主人によろしく仰有つて。

淑子　左樣なら。

（と、兩人會釋して去る。そこへ、顏色を變へて、お駒とお菊來る。その後よりお玉も靜かに來る。）

貞子　お駒ありましたかな、どうぢや。

お駒　御隱居さま、私は口惜しくつて……私とお菊さんと一緒に奥樣のお部室を探さうとしましたら、お玉さんが來て邪魔をして、どうしても探させないのでございます。

貞子　なに、お玉が邪魔を……それは飛んでもない事ぢやお玉、何故お前は、お駒やお菊の邪魔をするのぢや。

お玉　御隱居樣に申上げますが、日頃の御言葉には、雅子づきだから雅子の許しを受けない内は、無暗に人を部室に入れたり、氣儘な事をさせてはならぬと、堅い御申附でございました。それで今日お駒さんや、お菊さんが奥樣の御部室へ來て方々を探して取散らして居るので、私はお言葉を守つて勝手な事をしない樣にいたしました。

貞子　お前はさう云ふが時と場合があります。一應、お駒やお菊に何故、委しく譯を聞いてから止めません。私が云付けたのならば、お前に止めるだけの譯があるまいがの。

お玉　御隱居樣が勝手に、そんな無作法な事を、お云付け遊ばしたとは存じませんし、お駒さんも何も申しませんから。

貞子　理窟を云ふには及ばない。今日のは私が立派に云付けましたのぢや。

お玉　誠に相濟みません。
貞子　これから氣をつけなさい。
お玉　はい。
貞子　さつき方と云ひ、今また、お前は餘計な處へ許り出しやばつて仕方がありません。よく氣をおつけ。
お玉　はい、申譯も御座いません。（と立つて去らんとす）
貞子　お玉、お待ち。
お玉　はい。
貞子　お前に聞きたい事がありますのぢや。
お玉　あの、どう云ふ事でございます。
貞子　お駒や、お菊に聞くと雅さんは一彦が婚禮の時に贈つたあの大事の指輪を、はめて居ないと云ふ事ぢやが、お前は朝夕、雅さんの用事をして居るから何事も承知の筈、雅さんは、あの指輪を、はめて居ますかな。
お玉　奥樣は、たしかに、おはめ遊ばしていらつしやる樣に思つて居ります。
お駒　まあ、いくら奥樣付のお前さんでもそんな嘘を御隱居樣の前で申上げるもんぢやありませんよ。
お玉　お默りなさい。お前さんこそ奥樣の目くじりを拾つて、ある事、ない事御隱居樣の前で申上げると云ふ法がありますか、お前さんは御隱居樣の御身の廻りの事さへ氣を付けて居れば、いゝのぢやございませんか、奥樣の事などは餘計の事です。
お駒　御隱居樣、あんな事を申します。まあ、何と云ふ事を云ふのだらう。（と泣いて見せる）
貞子　お玉、お駒の云つて居る事は、お主の私や一彦の身の爲めを考へて云つて居る事ぢや、それにお前は雅さんの事ばかり考へて私や一彦の事は考へなさらんのか、此處の家は一體誰が御主人ぢやと思つて居なさる。
お玉　私は何もさう云ふ譯でお駒さんに申したのではございません。それに奥樣にしました處で、さう云ふ大事なものを、どう遊ばす譯もございませんし、第一御前樣と御一緒でなければ一度だつて御邸から外へお出ましになつた事も御座いませんから、もし此頃、奥樣がおはめ遊ばして居らつしやらないのならば、きつと何處かに大事にお藏ひ遊ばしてゐらつしやるに違ひございません。
貞子　いや／＼私はお前に聞くのは、そんな事ではない。お前が雅さんの傍を離れずに毎日用を足して居るのぢやから、きつとあの指輪を雅さんが、誰れかにやりはしないか、お前ならば必ず承知だらうと思つて聞いて見たの

ぢや。

お玉　もし御隱居樣、何と仰有います。それでは貴女は奥樣に何か不都合な事でもあるやうに思召してゐらつしやるのでございますか。

貞子　お前は主思ひの優しい心から雅さんの不行跡を隱さうとして居るが、私の眼にはさうも見えません。年は取つて居ても、私の目や耳は人一倍に敏いのぢや。いろいろの事が、目にもつく〱し、耳にも入つて來る。きつと雅さんはあの指輪を人手に渡したものに違ひありません。

お玉　まあ、(と膝を揺りよせて)とんでもない事を仰有います。奥樣に限つて決してそんな淫らな事のあらう筈はございません、そんな事を仰有いますのは、御難題と云ふものでございます。

お駒　お玉さん、お前さん何を云ふのです、大事の御主樣の前で餘り口が過ぎませんか、御難題とは何の云草です禮儀も何も、知らないにも程がある――。

お玉　いゝえ、私は默つては居られません。奉公人の私などは何と仰有らうと、又何とお叱りをうけても構ひませんが、あのおとなしい奥樣の御身の上に係はるやうな大事を、おつき申して居る私が默つて聞いてはゐられません。

お駒　お前さんは、そんな事を云ふけれど、蟲も殺さないおとなしい顔をして居る人程、蔭では、こそ〱と大それた事をして居るものです。奥樣だつて、あんなお優しい顔こそして居るが、どう云ふ事をして居るか、知れたもんですか。

お玉　お駒さん、お前さんこそ餘り口が過ぎやしませんか奥樣だつて私達には大事な御主樣ですよ、その御主樣に向つて何と云ふ失禮な事を云ふのです。きつとそんな事を云ふお前さんこそ、かう云ふ騷ぎの種を蒔いて居るんぢやありませんか。奥樣の御身に少しだつて暗い事があれば、それはお附き申して居る私がよく知つて居ます。奥樣に限つて、決して道に反いた事を遊ばさないと云ふ事は、私が確かな證人でございます。

貞子　もう何にもお前には聞きません。お下り〱。主を主とも思はないで何を勝手な事ばかり云ひなさるのぢや！　私は、自分で雅さんに聞くからよろしい。勝手に部屋を探しませう。

お玉　お隱居樣、私からお願いたしますから、どうか奥樣の御留守の時は、さう云ふ事を遊ばさないで頂きます。

もし奥樣の御部屋に御用の折は、奥樣のゐらつしやる時に遊ばして下さいまし。これは私から幾重にも御願ひ申します。

（この時、外に自動車の音、聞こえる。お玉、氣付きて腰を浮し。）

お玉　あ、どうやら御前樣が、お歸り遊ばしました樣でございます。私、御免を蒙ります。（と小走りに去る）

貞子　お駒、今度は私が行つて探しませう、お前達一緒に來ておくれ。

お駒　はい。

（と、お駒はお菊と共に貞子を扶けて去る。吉川家扶來りてキョロ〳〵と見廻して不審さう。）

吉川　はてな、御隱居樣は何方へ、お越しになつたのだらう。もし御隱居樣、御前樣がお歸りになりましてございます。

（そこへ一彦、雅子、お玉出て來る。）

岩崎　吉川、もうお客樣はお歸りになつたのか。

吉川　はい〳〵皆樣は御遠慮を遊ばして、歌合せの會は御延期になりましたのでございます。

岩崎　さうか、それぢや雅さん、もつとゆつくりしてお母樣にお目にかゝつて來ればよかつたね、惜しい事をした、吉川、それならば一寸使を何故よこさなかつたのだ。行つてる先が解つて居るんぢやないか。

吉川　は、どうも、うつかりいたしまして……申譯ございません。

岩崎　まア仕方がない。玉、お母樣は何處へかいらしたのか。

お玉　只今迄、此處にゐらつしやいましたのですが――。

岩崎　吉川、お前は知らんか。

吉川　はい、お庭の方へでも御散歩ではございますまいか。

お玉　私、お庭の方を見て參りませう。（と行きかけて）あの奥樣、お召替へ遊ばしますか。

雅子　えゝ、お母樣に御挨拶を申上げてからにします。

（お玉會釋して去る。入違ひに反對の方から貞子は、再びお駒、お菊、と濱子に介けられて出る。）

岩崎　お母樣、今歸つて來ました。

濱子　一彦さん、雅子さん、お歸んなさいまし。

岩崎　皆さんが歸つたさうですね。

貞子　當り前ぢやないか、お客樣を置き去りにして、嫁の里へ行く人が何處にあるものか。よしどんな事情があつ

てもさ。

岩崎　しかし、皆さんに能く事情を打明けて行つたのですからね、殊に外の事と違つて雅さんのお母さんが急病なんぢやありませんか。

濱子　雅子さん、お母様の御病氣は如何でして、私蔭ながら案じて居りましたわ。

雅子　ありがたうございます。丁度注射をした處だつたので、よく眠つて居りましたので……。

濱子　さうですか、いけませんのね、まア御大事になさるやうに。

貞子　一彦、そんな事はどうでもいゝ。私はお前に聞きますが、それ、お前が雅さんに婚禮の時、結納品と一緒にあげた指輪――あれは御先代が、やんごとない御方樣よりの下され物で、當家に取つては大事の品ぢや。あれはお前が雅さんから預かつて居るやうな事はあるまいの。

岩崎　あれですか、雅さんに贈つたのですから、雅さんが持つて居ります。

貞子　でも雅さんの指には、はまツて居ないやうぢやないか。

岩崎　雅さん、どうした、あゝ分つた、大事の品だから文庫の中に藏つてあるんだらう、さうだらう。

雅子　えゝ、さうでございます。

貞子　オホヽヽ、濱さん、手文庫の中にあるんぢやさうな、ありますかな。

お駒　たしか、四五日前までは奥樣が、おはめ遊ばして居らつしやいました。ね、お菊さん。

お菊　えゝ、御前樣と御一緒に北野の天神樣へお詣りに入らつしやる時も、おはめ遊ばしてゐらつしやいました。

濱子　默つてゐらつしやい。お前さん方は奉公人ぢやありませんか、御主人樣の事に口を出しては失禮ですよ。

貞子　いや／＼駒も菊も御主人の爲を思へばこそ云つて居るのぢや。駒は私づきぢやし、菊は一彦づき、皆主思ひの心から私に注意してくれますのぢや、のう二人共。

岩崎　お母さん！　あなたは何事にも雅さんを目の敵にして物事を仰有るやうに私には思へてなりませんか、果して雅さんが、あの指輪をどうかしたと仰有るのですか！

貞子　お前も血のめぐりの悪い人ぢやの、あの指輪が雅さんの指にも、何處にもないから、私は、てつきりと何處かへ、やつたものと思つて云つて居るのぢや。

岩崎　ぢや、貴女は雅さんについて訊き糺して見たのです

か。いや雅さんの部室でもお探しになつた上で仰有るのでございますか。

貞子　探したか、どうだか、お前さんが探してから云ふが好い。私はめつたに探してもあるものを、無いと云ふやうな悪人ではないつもりぢや。

岩崎　雅さん、たしかに文庫の中に蔵つてあるのだらうね何處へもやるやうな事はないだらうね。

雅子　そんな事はございません。

岩崎　あの通り、たしかにあると云つて居るのぢや、ございませんか。

貞子　それが腹黒い人の强情と云ふものぢや、一彦、私や駒と菊に聞いたから變ぢやと思つて、さつきから一度ならず二度も皆と一緒に雅さんの部室へ行つて隅から隅まで探したのぢや。あの指輪は何處にもありません、雅さん、お前は何故、母や良人の前で嘘をつきなさる。何故無いものをあると云ひなさるのぢや、嘘は盗人の初まりと昔の諺にもあるのを御存じぢやらうが。

岩崎　お母さん！　ぢや、あなたは雅さんの部室を、お探しなすつたのですか。

貞子　えゝ、怪しいところがあるから探しました。何ですその顔は、それが悪いとお云ひなのか、探したのが悪ければ幾重にもあやまります。しかし指輪のないのは、どうするつもりぢやの。

岩崎　雅さん、お母さんの仰有る事にも無理はない。成程あの指輪は粗末ではあるが、亡くなられたお父様からの筐の印に下すつたものだつた。それを私から、お前さんにあげたのだから、若しも紛失でもするやうな事があつては、第一お母様がお父様に對して申譯がない次第だ。お年寄りは氣が短いから、いら〳〵なさるのも御尤もだ。お前さんを疑ふのではないが、あんたに迄仰有るんだから、はつきりと正直にお母様の前で云つておくれ。どうならうとも隠す事はない。人に盗られたら、盗られた、落としたのなら落としたと云つておくれ！

（雅子は、唯、うつむいて泣くのみ。お玉來りて入らんとして、躊躇して居る。貞子は一層いら立つて來る。）

貞子　これ、雅さん、何故黙つて居なさる。あの指輪は何處へやりました！　きつとお前には隠し男でもあつて、その男にでもやつたのではないか？

岩崎　お母様、（と悲しげに）そりや、餘りのお言葉です。いくら何でも、それぢや可哀さうです。

貞子　それならば、私の眼の前に持たせてごらんなさい。手許にあるならば見せて貰ひませう。

岩崎　雅さん、躊躇する場合ではない！　早くはつきりと云つておくれ！　お前さんが云へないのならば、玉を呼んで、文庫を取りにやらうか、玉、玉。（と呼ぶ）

雅子　あなた、玉を呼ぶには及びません、私がちやんと、人の知れない處にしまつてございますから、これから取つて參ります！

（と、涙を拂つて立つ。お玉はこれより先に靜かに去る。）

――道具木なしに廻る――

第四場　岩崎邸内雅子の部屋

道具納まる。

（と、部屋の中には到る處に手文庫や鏡臺の抽斗や、机の抽斗など散ばつて散々に探されし跡が歷々と見えて居る。やがて、お玉小走りに來りて、散ばつて居る有様を見て、呀つと吃驚して、先づ胸を銳き刃物にて抉ぐられし心地にて呆然として居る。近所の檢校なにかしの家にて奏でる琴と、地唄の三味線の音色及び、地唄「雪」（他何にてもよし）を歌つて居るのが聞こえる。）

（お玉は漸く我に返りて、その邊を片づけて後、雅子の硯箱を取出して手紙を認める。地唄の合奏と唄の音は纏綿として響く。やがて、お玉は手紙を書き終る。）

（と、誰か來る氣勢にお玉は、手紙を机の上の硯箱の下に忍ばせる。そこへ、雅子悄然として來る。お玉は會釋して俯向いて居る。）

お玉　（思ひ切つて）奥様、私、折入つてお願ひがございます。

雅子　玉、だしぬけに何を、お云ひです。一體願ひと云ふのは――？

お玉　都合がございますから、お暇を戴きたうございます。

雅子　え？　何ですツて？

お玉　奥様、私は貴女のお心が恐ろしくなりました。私はお邸に行儀作法を見習に參つたのですから、貴女のやうな事をなさるお方の傍に居ては、どんな恐ろしい心になるか、分りません。なが〳〵お世話になりましたが、今日限り宿へ下らせていただきます。（と去らうとする）

雅子　（驚きて止めんとする）玉、お待ち、それでは、お前まで私が道ならぬ事をして居るとお思ひか。
お玉　もう何にも仰有つて下さいますな。お暇を頂きましたらば、最早他人。お言葉を交すのも厭になりましてございます。
（と、お玉は去らんとする。雅子は、抑へるのを力強く振切つて去る。雅子は縁より足を踏み外して危く縁へ腰を下ろす。）
（お玉は、柴折門の彼方へ走り去る。雅子は追はんとして躊躇せしが、又悄然と机の前に坐りて凭れる。此の拍子に机の上の硯箱は辷つて下の手紙現はれる。雅子は手紙を見て、吃驚して封を切り讀んで一層吃驚する。）
雅子　おゝ、玉は私の代りに……玉や、私は一生恩に被ますよ。
（お玉は、柴折門の蔭にて感極まつてよゝと泣く。）
（雅子感附きて手紙を携へて行かんとする時、貞子は濱子とお駒に扶けられて来る。）
貞子　雅さん、指輪はありましたか、あつたら拝見をしませうかの。

（雅子は、ハツとして手紙を隠す。逸早く、お駒は、手紙を見つけて貞子の耳にさゝやく。）
貞子　手紙、雅さん、何處へやる手紙ぢやの？
雅子　はい、あの――。
貞子　何、かくすには及びません。一つも曲つた事の無いお前さんぢやもの、どんな手紙であらうと差支はない筈さア私にも見せてお呉れ、お駒、雅さんのを取つておくれな。
お駒　はい。
（と、雅子に寄りて取らんとして躊躇。）
貞子　えゝ、何をぐづ／＼なさる。お前が取るのではありません、私が見るのぢや。
お駒　奥様、どうぞ――。
（と、手紙を受取り貞子に渡す。貞子は受取つたが見えぬ容子。）
貞子　眼鏡が無うては私に讀めない。濱さん、一つお前さん讀んでおくれ。
（と、手紙を渡す時、一彦はお客を連れて来る。）
濱子　一彦さん、この手紙、あなたに讀んで戴きます。
岩崎　誰の手紙ですか。

貞子　雅さんが誰からか受取つた手紙のやうぢや。お前高い聲で讀上げておくれ！

（一彥は讀み上げる、一同顏を見合せる。）

岩崎　お母さん、あの指輪はお玉が盜み取つたのでした。えい、憎い奴は、お玉だ。未だ遠くへは行かんだらう！吉川を呼べ！　吉川を！

貞子　いや／＼一彥待ちなさい。後を追つかけさせた處でその手紙の容子では今日や昨日盜んだのではないやうぢや。殊に親の爲とある。孝行を知らない兒を持つた私は、嘘にも孝行をつくさうとして、盜みまでする者が羨しく思はれます。連れ戾つて警察へ、突き出した處で、盜られた物が直ぐに戾るものでもあるまい。盜む者よりも、盜まれる者に油斷があるから、起ること、餘程、盜られた者の方が、阿呆ぢや、世間の人に當家の者の愚かな事を知らせるやうなものぢやから、このまゝにして置きませう。——

雅子　全く私が惡うございました、馬鹿でございました。どうぞ、御めん下さいまし。

岩崎　しかし、此のまゝに打遣ッて置いては雅さんの越度にばかりなる。お玉を、おさへて取調べて見たらば、又どんな事實が現はれようとも限らない。よし、私が警察へ告訴してやらう！（と去らんとす）

雅子　もし貴方！（と止めて）私の油斷からでございます。これから先は氣を付けますから、どうか、玉を警察へ出す事だけはお許し下さいまし。玉を、お憎しみ遊ばす代りに私の油斷をお憎み下さいまし。私はどんな御處分を、受けてもよろしうございます。

岩崎　お前さんが、それ程までに云ふのならば、この儘にして置かう。決して罪はお前さんには無い。立派に玉にあるのだからね。

貞子　呆れ返つたものぢや。妻の不埒を處分も出來ない氣力の無い不孝者を兒に持つた私は——濱さん、私の心の裡の切なさを察して、おくれ！　あゝ誰かは幸せな事ぢや！

（と、濱子、お駒、お菊と共に去る。お玉は柴折門の蔭で合掌して居る。一彥と雅子は互に顏を見合はせて愁然となる。）

（地唄の絃と、唄、悲しく響く。日、暮れて來る。）

——幕——

三　幕　目

夜の荒神橋附近

幕あく。

（と、音樂演奏會の歸途と云ふ身裝の若き音樂家及び趣味の男女大勢、捨臺詞にて橋を渡つて行く。之等の人に連れて、彼の音樂家なる本庄光一は來りて橋の袂にて時計を出したりして人待顏である。朗らかな月は光を斜めに投げて附近稍々明るくなる。この時、ハーモニカの吹奏する音、次第に近づきて二人の青年出で來り、去らんとして本庄を見て立止る。本庄は横を向いて顏を隱す樣に去る。）

青年甲　たしかに本庄だらう。

青年乙　さうらしい、彼奴、やつぱり此方に隱れて居るんだな。

青年甲　何處かへ入り込んで居るんだらう、何しろ女を操縱する術に於ては、非凡な腕を持つて居るんだからな。

青年乙　又神戸の時みたいに、成金のレデーでも抱き込んだんぢやないか。

青年甲　そんなこつたらう、彼奴の口先にかゝつちや、少し新しがりやの虛榮心の高い女は、直ぐだからねえ。

青年乙　何が直ぐだ。

青年甲　馬鹿！　そんな事を訊く奴があるかハヽヽヽ。

（兩人笑ふ。此の時、人を探す心にて井原濱子來り、青年を見て失望して橋を渡つて行く。二人の青年は、さゝやき合つて笑ひ乍ら又、ハーモニカになつて去る。濱子間もなく戻り來りて、橋上に佇む時、高倉淑子と出逢ふ。）

淑子　あら、濱子さんぢやない。

濱子　高倉さん、貴女、今夜の演奏會へ、入らしたの？

淑子　えゝ、今歸るの、どうして貴女は入らつしやらなかつたの。プロには貴女の名前も出て居たぢやありませんか。

濱子　一彥さんに誘はれて急に宇治まで行つたもんですから……面白かつて？

淑子　盛會でしたわ。期待した程、面白いものは無かつたんですけれど……。

濱子　さう、紀子さんは、どうなさつて？

淑子　一昨日、急に東京へ入らしたのよ。お兄樣が御結婚

なさるんですつて――。

濱子　まア、よござんすわねえ。

淑子　濱子さん、一彥さんは此頃大變あなたと仲がいゝんですつてね、そら、山の井様が云つてらしてよ――。

濱子　そんなこと、いゝえ、以前と少しも變らない事よ平凡だわ。

淑子　やつぱりね、そして今日の宇治行は奧樣も御一緒に。

濱子　いゝえ、伯母さんと一彥さんとお駒つて女中と、一緒なんです。でも年寄が一緒で本當につまりませんわ。それに、あの伯母さんと來ては、過去も過去、ねえ、迚も眞面目に相手になんか、なつて居られやしませんよ。

淑子　でも、あの方の前では、貴女まるで見違へる樣に從順にして居らつしやるんですもの、私は、お氣が合ふのかと思つて居ましたわ。

濱子　何が合ふものですか、私は努めて馬鹿になつて、つき合つて居るんです。仕方なしにね。

淑子　そら、例の問題の事でね……。

濱子　貴女の御想像に任せるわ。

淑子　けれども、雅子さんと云ふ方も隨分辛抱強い人ね。私、あの人に神經と云ふものがあるかないかを疑ひたい位よ。

濱子　古い言葉で云へば、さア何と云つたらいゝでせう。血の氣のない人形だわね。けれども今に、私は……。
（と、何ものかに憬れるが如き面持。）

淑子　さうして、あなた、一彥さんの心を、しつかり摑んだこと、それとも未だ？

濱子　えゝ、いづれ近い内に面白いシナリオを御報告するわ。それは〳〵フエアバンクス以上のトリツクなのよ。

淑子　さう、ぢや、それを樂しみにして居るわ。あら、誰か、あの電柱の蔭に――。

濱子　何かの影でせう。

淑子　（呑込んで）さうかも知れないわ。ぢや濱子さん、これで、お別れするわ、御めんなさい。（と去りかけて小戻りし）濱子さん、第三日曜のホテルの演奏會へいらつしやる！

濱子　オチヨハ夫人のソナタ、今から大した評判ね、是非行きますわ。

淑子　では、その時、お目にかゝりませうね。なるべくだつたら、一彥さんと御一緒にね……。

濱子　えゝ。

濱子　御免なさい。

（と、會釋して去る。濱子見送つて居る處へ、本庄急いで出て來る。）

本庄　濱子さん、隨分待ちましたよ。

濱子　すみません。

本庄　然し、今日は、お樂しみでしたね。誰かと御一緒に宇治行で……。

濱子　あら、（と故意に睨んで見せて）あなた、隨分だわ。總て、何事も私を知つて居て下さるのに。

（と、此時、キネマ男優と女優喃々と語らひつゝ寄り添うて通り行く。本庄は、いかにも羨ましさうに見送り。）

本庄　あんなのを見せつけられると、全く僕は、もう我慢が出來なくなる。

濱子　又結婚禮讃と來るのでせうホヽヽ、そんな事は、お止し遊ばせな。直ぐに幻滅が來るわ。それより青春の男女が唯、屈托なく華かに戀を追うて居た方が面白いんですもの……。

本庄　けれども、戀愛の極致は結婚だからね。それが無かつたら夢を辿つて居る樣でつまりませんよ。

濱子　では、どうなさるの、もう私とも交際をなさらないお意りですか。

本庄　あなたの樣に、氣が早くても困りますね、何でせう今、貴女は自己の復讐をなさる爲、最も必要な相談相手を私と極めてあるぢやありませんか、つまり、僕は貴女の爲に必要な人間でせう、それだけに又、僕も貴女に依つて生きて居るんですからね。

濱子　だから、貴方だつて、さうあせらずに待つて居て下さいよ。私の望みが遂げたら又私だつて何時までも獨身では居られませんし、良人と云ふ人を……やつぱり貴方と結婚するんですわ。

本庄　解りました。無論、さうなければならん譯です。處で一昨日お約束した手紙ね、あれを書いて來ました。

（と、ポケツトより取出す。）

濱子　さう、ありがたう、見せて頂戴。（と月に照らして見せ）まア、隨分思ひ切つた、甘つたるい文章ね。

本庄　なか〳〵苦心したんです。うまいでせう。

濱子　うまいわ。これなら一彥さんだつて雅子さんが、愛人と密會をして居るものと信じますわ。

本庄　さう、それでよかつたら、貴女から、契約書を僕に

下さい。約束通りにね。

濱子　私も、ちやんと持つて居ます。（と、オペラバックの中から取出して）さ、これでいゝでせう。

本庄　（嬉しげに肯きつゝ）いや、これで僕は大いに安心をしました。まさかこれだけの契約書がありや。貴女から捨てられる事もないだらうハ、、、、。

（と、聲高く笑ふ。折から、聲樂家黒澤明、泥醉し、野口桃代の腕に靠れて頽廢せる外國小唄を唄ひつゝ出る。）

本庄　おゝ。黒澤！

（と、本庄は濱子から離れて内側のポケットから紙入を取出して、それをポケットに戻さんとして落したるに氣づかず。）

桃代　あら、本庄さんぢやありませんか。

本庄　やア相變らず二人連れだね、羨しいことだ。

黒澤　ハ、、おい本庄、どうだい例の方は成功したか、多分、君の手腕を以てしたら、今頃完全に征服したことだらうなア。

（桃代は去り行く濱子の姿を見て、黒澤の腕を引いて知らせる。）

黒澤　なんだな。うるさいな。

（桃代は眼にて濱子の去りし方を示す。黒澤は朧氣に見る。）

黒澤　はゝア成程、さうか、いや流石は本庄だ、今夜は月が暗いな。うむ、こいつは面白いシーンだつたらう。おい本庄、おごれ〳〵。

本庄　未だ、その時に達して居ないよ。何れホテルへでも招待するよ。然し、君は此の春から何處へも行かずに、京都に居たのか？

黒澤　うむ、お前に通知をするのを忘れて居たつけ。俺はね到頭、音樂界をやめたよ。

本庄　さうか、商賣替か、一體何をして居るんだい？

黒澤　金の儲かる方へ鞍替だ。そら京都へ越して來た、大和キネマのスターに早替りをしたんだ。

桃代　私も一緒によ。

本庄　ふゝむ、それは、お芽出たいなア、何だ、うんと甘い所をスクーリンの上で見せつけるんだな。

黒澤　ハ、、、その通りさ。まア、ファンなんてものは馬鹿なもんだからねハ、、、。（とよろ〳〵する）

桃代　（それを抑へて）危ないわよ〳〵。しつかりなさい

よ。だから飲めもしない酒など、お止し下さいと云つたぢやないの。

黒澤　はい〳〵、カメラの前ぢや、マネージヤーの叱言を食ひ、酒を飲んではマイラバーに監督される。俺の生活もなか〳〵多事だハヽヽ。（と轉ぶ）

桃代　みつともないわね、お起きなさいよ。

（と、起こさうとする。）

黒澤　我が愛する桃ちやん、一つ號令をかけてくれー

桃代　面倒くさいわね、ワンツースリー！

黒澤　オーライ。（と起上る）おい、本庄、これから何處かへ行かう、此頃、出町橋の際に頗る感じのいゝカフエーが出來たから一緒に行かう、其處のスペシヤルは實にうまいんだ、さア行かう。

本庄　今日は失敬するよ。又行かう。

黒澤　そんな、つき合ひ氣のない事を言ふなよ。さ、行かうツたら――。

（と、無理に兩人の手を取り轉び乍ら、黒澤は又小唄を歌ひつゝ去る。此れと摺違つて、お玉來たりて、不圖足に、躓くものを拾ふ。本庄の落し行きし紙入である。お玉は、紙入の間に挾める契約書の散りしを、又拾つて眺めて驚く。）

（此時、岩崎家へ出入する老植木屋仙藏來りて、お玉と摺違ひ後を双方より見て。）

仙藏　お玉さんぢやねえか。

お玉　おや、仙さん、今、お邸の歸りですか。

仙藏　うむ、今日はな、仕事が濟んでから三太夫さんの御馳走で今まで一緒に世間噺をしながら、チビリ〳〵やつて居たのさ。何かい、お前さん、今日はさつぱり顏を見せないと思つたら、何處かへお使ひに行つて居たのかい？

お玉　あの、奧樣はいらつしやいましたか。

仙藏　今日は、お邸にいらつしやつたぜ。何だな、あんな好い奧樣は、ちよいとねえな。華族の奧樣なんて云ふとイヤに、かうツン〳〵してお高く留つて居やがるもんだが、あの奧樣には、そんな所は微塵もねえ。實際えれえもんだ。それに引かへて、あの婆はどうだい！　まア、俺ア全く、しやツ面、憎いつたつてありやしねえ、それと、第一あの女中のお駒つて野郎――あいつが喰はせ者だて、そこへ行くと、お前を前に置いて云ふのも變だが、やつぱり奧樣附だけに、見よう見まねと云ふやつよ。人間が出來てらあな。豪勢なもんだ、今日もな俺らすつか

り聞いたせ。

お玉　聞いたつて私の事を――？

仙蔵　いや、お前の事ぢやねえ、奥様の事だアな。

お玉　奥様のこと、そして、それは、どんなこと？

仙蔵　今日俺がな、お庭の松の木へ上つて仕事をして居ると、誰だか、ベチヤ／＼しやべつて居る奴があるんだ、よく見るとその悪いお駒と云ふ奴と、もう一人の奴なんだ。誰の事を云つてやがるかと思つて耳を澄まして居ると、奥様のことらしいんだ。それに、こんな事も云つてたぜ！　きつと、お玉さんもぐるになつて居るんだらうとか何とか、俺は腹が、ぐら／＼して來たから鉄を叩きつけてやらうかと思つた位なんだ。

お玉　さうですか。困つた人達ですわね。お邸の人達は御隠居様へおべッかする爲に、鵜の目鷹の目で奥様のアラ許り探して難くせをつけたがつて居るんですもの。全く奥様が、お氣の毒でなりませんわ。

仙蔵　さうか、お可哀想だな、お前さんは奥様附きだから一つ、うんと力瘤を入れて奥様の味方となつて上げねえよ。何だ、おらこんな人間でも曲つた事は大嫌ひだ。お前の手に若しも負へねえ事があつたら打明けて相談をしてくんな。事と品に依つちや、あの婆だつて女中だつて叩き擲つてやらあ。なに、お邸の一軒ぐらゐ、しくじつたつて構ふものかな。

お玉　ありがたう。けれどもね、もう私は。（と急に涙ぐむ）

仙蔵　どうしたんだ。お前も意地の悪いお駒ッて阿魔にいぢめられて居るんぢやねえのか。

（お玉、シク／＼泣き出す。仙蔵は怪しんで寄る。）

仙蔵　おい、どうしたんだよ。何か込み入つた事でもあるんぢやねえか。俺のやうなもんでも云つて見てくんねえ。よう、お玉さん。

（と、お玉を覗き込む。此時、以前の本庄光一は落とし物をしたと云ふ様子にて出て來る。お玉とつきあたる。お玉は急に泣顔をかくす。）

本庄　おい、此邊に紙入が落ちて居なかつたね、なめし革のだ。

お玉　いゝえ、一向に――。

本庄　もしや君達が拾つたんだつたら、落し主は僕なんだから返して貰へんかね。

仙蔵　おや、こん畜生！　あんまり人を馬鹿にするねえ。

拾つたんなら還してくれたア、何てい事を吐すんだ。やい！　此方等はな、職人こそしてゐるが人様の物を拾つて猫婆をきめ込む樣な、さもしい根性は持つちやゐねえんだ！　見損なふない！　この野郎！

（と、かつとなつて本庄に食つてかゝる。お玉はそれを止めて。）

お玉　仙さん、お止しなさい。きつと、この方の云ひ違ひなんでせうから、もつと靜かに云つても解ることですから——。

仙藏　だつて餘り物の云ひやうを知らねえ野郎だ、さア、物の間違ひなら間違ひだと立派にあやまれ！　何故默つてゐやがるんだ。あやまらねえか。

（と、寄つて行く。）

本庄　いや、僕が惡かつた。怒るな〳〵、君達が拾つたとハツキリ云つちや居ないんだ。まア勘辨してくれ、拾はんもんならそれで好いんだ。（とよろ〳〵と見て）どうも不思議だな。何處へ落としたらうなあ。（と去らんとする）

お玉　本庄さん。（と故意と呼んで見る）

本庄　（振返り）何んだい。

お玉　いえ、私、本所へ行かうつてお話して居たんでございますよ。

本庄　何の事だ。

（と、本庄は小首をかしげながら去る。お玉は尾行して行く。と、仙藏怪しんで。）

仙藏　おい、お玉さん、お玉さん。

（と、呼止めんとして居る時、お玉と擦違つて郵便集配人出て來る。）

仙藏　おい〳〵待ちねえよ。

（集配人、吃驚して振向いて立止る。）

集配人　何か用かね？

仙藏　なに、こつちの事さ。はゝア成程、若い女ツて者はノツペリした男さへ見りや猫に鰹節だ。あの具合ぢやきつと、お駒ツて女中の話も、滿更、嘘ぢやねえかも知れねえ。何だか分らなくなつて來やがつたい。

（と、仙藏は去る。）

集配人　キ印らしいハ、、、。

（と、集配人はポストの前へ來て中を開いて郵便物を取出し鞄に入れる。）

（そこへ雅子小走りに出て來る。）

雅子　あの鳥渡、待つて下さい。

集配人　(振返り)　何ですか。

雅子　あの誠に済みませんが、(と袂から手紙を出して)これをおついでに持つて行つて頂けませんかしら、足を留めて申譯ありませんわね。

集配人　えゝ、どういたしまして――ようございます。何方も、一刻も早くお便りを出したいのが人情ですからねえへ、、、、。

(と、郵便を受取り去る。そこへ雅子を尾行して來た濱子靜かに寄る。)

濱子　雅子さんぢや、ありませんの。

(と、雅子は、びつくりして後、痛く恐怖する。)

雅子　濱子さんでしたか。

濱子　やつぱり貴女でしたのね。私、只今お宅へ行つてお庭の方を歩いて居ると、誰かしら裏門から出た方があるんでせう、どうやらよく見るとあなたのやうですから私も後から參つたんですわ。何ですか、あなた郵便を入れにいらしたのね……。

雅子　えゝ。

濱子　何方へお出しなすつたんです。

雅子　お友達の處へ……貴女、定めし不審にお思召しでせうけれども……私が學校に居た時のお友達の所へ出したのです――。

濱子　さうですか、そりやね、誰にだつて、内證のお友達がございますわ。又誰れにだつて秘密があるんですもの私は別に不審とも何とも思つてやしません。

雅子　あなた、私のやうな者でもお友達と思つて下さいませうね。

濱子　えゝ、お友達どころか、貴女は親類ぢやありませんか、まだ〳〵お友達よりも深い間柄ですもの。

雅子　ありがたうございます。私、こんな嬉しい事はありません。私、その御親切に甘へてお願ひ申したい事がありますが……。

濱子　どんな事でも私、身にしみて聞きますわ。

雅子　外の事では、ございませんけれども、今夜私が郵便を出した事は、どうか御内分に願はれますまいでせうか、若しお母様のお耳へでも入つては生涯の大事になりますからどうかお願ひ申します。

濱子　そんな事ですか、雅子さん、御心配なさらなくつても大丈夫ですよ。貴女が仰有らなくつても、お互の秘密

を守るのは、お互につくすべき務めですもの、私、この口が裂けても云ふ氣遣ひはありません。私の事だけは御安心遊ばせ。しかし御要心なさらないとね、そら、お駒が貴女の出るのを見て居たかも知れませんよ。あれは伯母さんの犬ですからね。餘程御注意遊ばさないと、とんでもない事になりますよ。

雅子　お駒が見つけましたのでせうか。

濱子　それは私、ハッキリと分らないんです。

雅子　濱子さん、私それでは、お先に御免を蒙ります。

（と、去らんとする。）

濱子　あら、雅子さん、一寸――。

雅子　はい。（と立留る）

濱子　雅子さん、あの變な事をですけれど、一彦さん、ね此頃あなたに對して何か態度にでも變つた所はありませんか。

雅子　え丶、別に――。

濱子　それならば、ようございますけど、私は、お宅の或る人から聞いた事なんです。此頃大變に水臭くおなりなすつたと云ふぢやございませんか。今日一彦さんは伯母さんと御一緒に何處かへいらつしやりはしませんか。

雅子　え丶、宇治とか用達がありまして。

濱子　さうでせう、貴女、一彦さんと一緒に宇治へ入らした方、御存じですの？

雅子　い丶え、私は、あなたと御一緒とばかり思つて居りました。

濱子　とんでもない。大間違ひですわ。もし私と一緒と何方か云つたんでしたらば、それは全く貴女を胡麻化した嘘なんです。私の聞いたには何んでも御同族の勘解由小路様の御妹御様と御一緒だと思つて居るんです。きつと間違ひはありませんの、伯母さんは一彦さんをやかましく說いて、勘解由小路國子さんと……さうした企みをして居ると云ふ事ですわ。油斷も隙も御座いませんわね。きつと何とか、あなたに難癖をつけてお里の方へ歸さうとして居るんぢやないでせうか。どうしても私にはさうとしきや、思ひませんの、何か貴女にさうした豫感がございませんか。

雅子　濱子さん、それはあなたの御想像ですか、それとも何方からか、お聞き遊ばしたので……？

濱子　いろ／＼の事を綜合して考へて見た事なんです。伯母さんはね、いつか私にこんな事を仰有いました。私は

どうしても雅子と一緒に居るのが嫌ひだから、キッと里の方へ歸してやるから、お前さん一彦と婚禮をしてくれとね、けれども私は一彦さんとは從兄弟になつて居るんですから從つて血族間の結婚はいけないと云ふ理由で婚禮をしなかつたのですし、私も貴女とお親しくして居てどうして今更友情のない破倫な事が出來るもんですか。ですから、キッパリと斷りました。それから伯母さんは私に諦めをつけて勘解由小路の國子さんに眼をつけたんですよ。

雅子　旦那樣もお心がお動きなすつたのでせうか。

濱子　それは私にお聞きなさるよりも、あなたのお心にある事と思ひますの、一彦さんの此頃の態度から御想像なすッてね。雅子さん、どう――?

雅子　さう御有られますと一彦は此頃……。（と痛く悶える）

濱子　冷たくなつたでせう。

雅子　そは〳〵して居る樣に思へてなりませんが……。

濱子　御要心なさらないといけませんよ。貴女が餘り御自重なすつてゐらつしやると却つて、飛んだ目に會はされて仕舞ひますからね。

雅子　ありがたう御座います。

濱子　私は貴女の御身の上が、御氣の毒でならないんですもう私ならば、つまらない汚名を被せられない裡に、潔く暇を取つて此の身を護りますわ。女は嫁いだ處から追ひ出されて實家へ歸される位、生涯の屈辱はないんですから、その前にその身を護るのが、利巧な道だと思ふのですもの。

雅子　考へて見ます。

濱子　お考へなさいましよ。ぢや餘り暇取るといけませんから私は先に歸ります。かうなさいまし、私が先に歸つて裏門から入れるやうにして置きますから、ようござんすか。

雅子　濟みません。

濱子　では御免なさい。

（と、濱子靜かに去る。雅子は見送つて橋の欄干に凭れてうつとりと考へて居る。此の時、橋を渡つてバタバタと走つて職人幸吉來ると、微醉の職人常松と勇藏に出合ふ。）

常松　おゝ幸印、どうしたんだ。べら棒に慌てゝ居るぢやねえか。

幸吉　常と松か、身投げだ、身投げだよ。そらこの向ふの疏水だ。

勇藏　あんな淺い所で死ねるものか、よせやい、そりやきつと狂言だぜ。よくある奴だ。

幸吉　さうぢやねえよ。本當に水を飲んで半死半生でいんだ。まだあれで若いやな。

常松　男か女か。

幸吉　男だ。

常松　おや、つまらねえや。

勇藏　馬鹿野郞！　だけどまア何だつて身投げなんぞする氣になりやがつたんだい。

幸吉　つまりまア、切つぱつまつたんだな。其の男つてな養子らしいんだな、顏附が、しかし姑と折合が惡くつて始終ごてて居たらしいんだ。とゞのつまり姑は誰かの尻押しで他から養子を迎へようとしたのを、赫つとなつて姑と大喧嘩よ、それでぶんなぐつて怪我をさせたんだが考へて見ると繩と名の付く奴をと申譯ねえと云ふので死ぬ氣になつたんだとよ、まア此頃の野郞にしちや、珍しく氣の小せい野郞だが、考へりや可哀想でもあるしよ。

常松　うむ、もし己れだつたら、その姑なんか叩き殺したかも知れねえや。

幸吉　へん、手前は、いつも口ばかりだ。宮川町の女を人に取られてさへ死ぬと吐したなア一昨日ぢやねえか、なア勇的！

勇藏　さう〳〵。そこで、どうした、その死に損ひは。

幸吉　なアに、未だお巡りさんが來ねえてんで、ゴロ〳〵してらア。

常松　見に行かうぢやねえか。

勇藏　ブル〳〵、いやなこつた。それでせい酒がさめちやつたい。折角いゝ氣持が幸田のお蔭でフイになつちまつたよ。どうでもう一ぺん飲み直さうぢやねえか。

幸吉　行かう〳〵あそこのうどん屋がいゝぢやねえか。

（と三人は捨臺詞にて去る。雅子その身につまされてよゝと許りに泣いてから、靜かに顏を上げ行きつ、戻りつして居る。遠く義太夫の流して行く感傷的な音色が聞えて來る。）

（と、中野清助沈み勝ちに出て來て橋を渡らんとして雅子の姿を見て注意して居る。）

（雅子は、遂に意を決してツカ〳〵と橋桁へ行きて下を覗く時、清助慌てゝ走り寄り止める。）

中野　あゝ、もし危い。何をなさるのだ、まア待ちなさい。
雅子　どうか、お離し下さいまし。離して〳〵。
（と、悶掻く。）
中野　いや、お待ちなさい。まア〳〵お待ちなさい。そんな短氣な事をなすつてはいけません。
（と、無理に止めて、互に顔を見合せる。）
雅子　あ、お父様。
中野　雅ちやないか。一體まアどうしたのだ。あゝ好かつた。私が通り合さなかつたら大變な所だつた。
（と、雅子は感極まつて泣きくづれる。清助は周圍を見廻して後。）
中野　これ雅子、此處は、お邸の近くではないか。泣いては不可ん。お前の聲を人に聞かれてはよくない。どうして又、死なうなんと淺薄な心を出してくれたんだ。
雅子　お父様、もう私は生きて居る空はしないんですもの。いつそ死んだ方が、ましだと思つて……。
中野　お前の苦しみと云つて、どんな心配があるのだ？
さア私に、くはしく話をしておくれ、なア雅子。
雅子　私は、私はね、お父様、お邸で邪魔者にされて居るんです。何時お暇になるか解らないんですから。

中野　何だと、一體誰がお前を……まさか岩崎さんではあるまいな。
雅子　お母様なのでございます。どう云ふものか私を――それに奉公をして居る女中共までが、お母様にへつらふために私の事を何やかと告げ口をして居るんですし、今夜も私がお父様の處へ內所に手紙を出しに來た處、お母様附の女中に見つかつたやうに思ふし、もしも手紙を何處へ出したと嚴しく調べられた時には、もう私云ひぬける道はないんですから。
中野　さうか、私の所へ出したとは云へないと云ふのだね、云へない！　云へないのが當然なのか……雅子。
雅子　お父様。
中野　何と云ふ情ない事だらう。雅子、どうか勘辨してくれ！　なまじ私が小泉さんに煽てられて身分の違ふ處へお前を嫁にやつたのが悪かつた。非國民は非國民らしくして居ればよかつたのだ。さうすりや、こんな悲しい目にも合はず、私も亦之れまで心を痛めて、お前に逢はうともせずに濟んだのだつた。濟まない〳〵。
雅子　お父様、お願ひですから、どうか私をこのまゝつれて歸つて下さいまし。離緣にならない內に私の方からお

暇を頂いた方がこれ以上苦しまずに濟みますからねえ。
中野　いや／＼お互に、どんなに苦しんでも、そんな勝手な眞似をしては人間の道に反く。私は蔭の人。お前には表向小泉さんと云ふお父樣があるのだからな。
雅子　けれども、そのお父さんの小泉さんが、無理な事ばかり云つて來て私をいぢめるんです。まるで私は內と外から板挾みになつて命を削られるやうな苦しみをして居るのでございます。
中野　何、それぢや、小泉さんは、お前までも？　一體どんな無理を云ふのだ。
雅子　とても一口には云ひつくせません。いつもお金を貸せと云つて來るんですわ。今日まで數へ切れない程私はお金を取られて居るんです。そればかりか、お金のない時は頭の飾り物から、時計や指輪まで持つて行つて、もう手許には何にも殘つてございません。しかも、たつた一ツ大事に殘して置いた旦那樣から頂いた筐の指輪まで無理に持つて行つたので、お母樣は嚴しく御詮議をなすつたんです。私は何とも返事に困つて居ると見るに見かねた女中のお玉と云ふのが、自分が親のために盜んだと云つてその罪を被て家出をしてくれました。私の窮場を救つてくれました。到頭お玉は盜人となつて仕舞つたのですよ。お父樣！
中野　あゝ、お氣の毒な事をした。何と云ふ優しい心の方だらうな。他人でさへそんなに親切な方があるのに假りにも親と名のつく小泉さんが、そんなにまでしてお前をいぢめるとは人間の皮を冠つた鬼の仕業だ。雅子、私はよく察します。私の身にも覺えがあるんだ。きつと小泉さんはお金を出さなかつたら、非國民の兄の事を御隱居樣の前で云ふと脅かすのだらう。勘辨しておくれ。私は小泉さんにすつかり欺かれたんだ。
雅子　きつと明日にも又、お金の事で訪ねて來るに違ひございません。今朝もやかましく云つて來たのですから、それで私はもう途方にくれてお父樣の處へ、御手紙を出したんでございます。
中野　さうか、大抵想像が出來た。そして又その手紙の事から、お前が苦しまなければならないとは何處までもお前は……けれどもな雅子、いつまで私やお前が、今日のやうに苦しむ譯のものではない。必ずその裏が廻つて來るものだよ。神樣は、いつまでも善人を虐げさせてはお置きなさらん。お互の誠が通じれば、苦しめ拔いた人も

いつか考へてくれる時があるだらう。も少しの辛抱だ。どうか、我慢をしてくれ。丁度、此處にお金は小切手で二千圓ばかり持つて居るから、お前に渡しておく。小泉さんから無心を云はれた度に銀行から引出して渡してやるがいゝ。解つたか。

雅子　だつていつまで私は苦しみ通すか分りませんから、いつそ死ぬか、お父樣のお傍へ歸つた方が、どんなに氣樂になれるか分りませんわ。

中野　さ、それがいけない。そんな辛抱氣のない事では何事にも成就はしない。いゝか、辛抱してくれ、お父さんが可哀想だと思つたら辛抱してくれ、も少しなのだからな。せめてお前だけでも立派な家庭の人として置きたいのだからな。いゝか、このお父さんの云ふ心持が分つたか、分つてくれたか、頼む、この通り頼むぞ！

（と、手を合せる。）

雅子　はい――けれどもお父樣、私はいくら考へてもお玉を盜人にして置く譯には出來ませんが、何か好い工風はございませんでせうか。

中野　義理堅いお前の事だから、さう思ふのも無理はない。では、かうしやう、何事もお金で濟む世だ。小泉さんに頼んでお玉さんの明しは立てゝ貰ひませう。だから、もう何事も考へずにな。お邸へ歸つて辛抱するのだよ。お前の心得違ひから却つて素性が明かになつて、岩崎さんの不名譽にでも係はつてはいけない。それこそ申譯がないではないか。好いか、雅子。

雅子　えゝ、――私、それぢや、心を取り直して辛抱して見ませう。死んだ氣になつてね――。

中野　さうだ。死んだ氣で居りや、どんな苦心も辛抱が出來るもんだ。さあ人に見つかつては、いけないから早く歸んなさい。

雅子　あ、私、忘れて居りましたが、お母さんの御病氣はどんなでございます？

中野　なに、心配は要らない。もう癒つた〳〵さ、お歸りお歸り――。

雅子　私、お母樣のお傍で御全快なさるまで御介抱したいんですが、それも思ふ樣に出來ない身の上ですから、お父さまにお願ひして置きます。現在のお母樣の御看病も出來ないとは、何と云ふ情ない事でせう。

中野　も、もうそんな事を云つて此の上、泣かせてくれるな。決して氣を弱くしてはいけないよ。お金の要る時は

いくらでも送つてやる方法は、執るから――な、さ、お歸り、見つかつてはいけない。私もこれで別れませう。

雅子　では、そこまでお送りしますわ。

中野　いや、そんな事をしてはいけない。それぢや、くれぐれも自重しなさいよ。

（と、清助は思ひを殘して振返り〳〵靜かに去る。雅子は見送つて橋のまん中まで行く。折から、彼の貞子は、お駒に扶けられて一彦と共に來る。一彦は、先づ顏色を變へて出る。）

岩崎　雅！（と烈しく叫ぶ）

雅子　（ふり返り）あッ貴君。（と寄る）

岩崎　お前こんな所で何をして居たのだ。そして、今、向ふへ行つた男は何者だ？

雅子　はい――あの――。（と躊躇）

貞子　一彦、お前さん、そんな事を聞きなさるだけが却つておろかな事ぢや。人目を忍んで餘所の男と媾曳をする樣な女ぢやよ。あゝ云へばかう云ふ。かう云へばあゝ云ふ。云ひ拔けくらゐの道は考へて居る筈。あつたら口に風を引かすものではない。のうお駒！

お駒　えゝ、全くでございます。

岩崎　雅、お前はお母さんに、あんなにまで云はれて口惜しいとは思はんのか。さア立派に返事をしておくれ！　さ、お前の、自分の明しを立てゝおくれ、私も妻のお前が、媾曳――？　をしたと云はれては、良人としての面目が立たない。辯解をしておくれ、さ、早く云つておくれ！

雅子　はい――。

岩崎　さ、さア早く――それともお前は、その辯解の言葉が無いのか！

貞子　どうして云譯が出來るものかね。その通り出來ないから默つて居る。もう不義をして居た事は明らかな事ぢや。一彦、お前はこれまで顏へ泥を塗られても未だ不貞の妻に未練がありますか。一度ならず二度までも生きた證據を見せつけられて、お前の口から去ると云ふ言葉が出ませんのか。

岩崎　雅子、えい、何故默つて居る。お前は不義をして居たと云はれても好いのか、お前一人の恥ではないのだぞ私と云ふ者も考へておくれ、又小泉さんの不名譽にもなる事だ。何故ハッキリと返事をしないんだ。さア云つてくれ！　云つてくれ！　そ、そんなにぐづ〳〵して居る

場合ではないのだぞ！

（雅子は唯シク〳〵と泣くのみ。貞子とお駒は互に顔を見合せる。）

貞子　一彦、お前には去ると云ふキッパリした事が云へませんね。あんなに雅さんの手文庫の中から隠し男の手紙までも出たのに、良人に隠して男と文通をしたり、隠れ忍んで媾曳をしたりする様な女は岩崎家に一刻も置く譯には參りません。今日只今去ります。離縁をします。

雅子　あの御離縁！　そ、それは違ひます。それはあんまりでございます。

貞子　何があんまりだ。それなら。

岩崎　お母さん、待つて下さい。雅、お母様の仰有る事にも無理は無いぞ、そら、此の手紙を見ろ、これは一體何だ。私にかくれて俳優と文通をしたり、不義密會をする……口にするのも淺猿しい言葉だぞ。もう駄目だ、もうそんな妻は家に置く事が出來ると思ふか、考へて見ろ！　そ、それともお前は此の疑ひを解く道はあるか、此處で會つた男は何處の何と云ふ人だと云ふ事を、立派に證明出來るか。

貞子　一彦、何時まで、そんな手ぬるい事を云つて居なさるのおや！　お前は不服でも私は、今度と云ふ今度は承知出來ません。雅子は立派に離縁をしましたぞ。

雅子　（狂氣の様に手紙を見て）もしあなた、私はそんな手紙などは覺えがございません。又決して不義などは致しません。神様にお誓ひして汚れた行はいたして居りません。私はもう、あなたに縋るより外、只一人の縋る人もないのです。私を、お信じ下さいまし。ど、どうか私を信じて下さい、信じて……。（と口がきけなくなる）

岩崎　ど、どうした！（と介抱する）

雅子　あなた！

岩崎　だ、だから、今の男の素性と、此の手紙の人とを云ひなさい。それを云ふ事が出來ないならば、不義をしたと云はれても、仕方がないぢアないか！

（雅子、そこへ泣伏す。）

貞子　一彦、これ、その通りぢや、分つたかの、夢が覺めましたかの。

（間。）

岩崎　雅、今日限り離縁だぞ！

（と、云ひ放つて欄干に凭れて泣く　雅子は俄然と起きて寄らうとする。それを、お駒さへぎる。雅子再び

泣き崩れる。貞子は會心の笑を洩す。忍びやかに濱子木蔭に來りて微笑して居る。）

――幕――

四　幕　目

第一場　再び小泉修三の宅

幕あく。

（と、修三は例に依りどてら姿で獨酌をやつて居る。下手より今外出より歸りし心にて中野清助おど／＼して控へて居る。）

中野　只今、歸りましてございます。

小泉　おゝ、お歸りか、大層早かつたね。

中野　途中まで參りましたが、何となく病人の事が氣になりましたので、そのまゝ引返して參りましたが、別に病人に變りはございませんか。

小泉　うむ、病人には更に變りはない。まア安心するがいい。

中野　さうでございますか。いろ／＼と御迷惑をかけまして何共相濟みません。しかし今日は好い御機嫌でございますね。

小泉　うむ、今日はね家内が書生を連れて新京極の方へ遊びに行つたから己れが留守番をして居るのだ。此の通りメートルを上げて居る。どうだね、一つやらんか。

中野　ありがたうございます。どうも私は無調法でして。

小泉　まあいゝ。飲め！

中野　小泉さん、あなたも御承知の通り全く酒は頂けんのですから、はい。

小泉　さうだつたかね、おやまア止さう。（と杯を置く）然し中野君、此間は見事に計畫が齟齬したが、ありや俺の作戰が拙かつたんぢやない。一彥の奴が一緒に來たんだから全く面喰つたよ。けれ共、あの儘に止めるのも甚だ遺憾だから、明日改めて雅に會はせると云ふ事にしよう。まア安心をするさ。處で何んだ。此間の報酬として五百圓は正に頂戴したが、ありや俺の失敗でないから判然と有效のものだ。先づ裁判官に宣告させても、罪は一彥にある譯さ。で明日改めて會はせるとなると當然又五百圓の追加豫算が議會おつと、此處に提言される譯だらう。それは勿論承知だらうな。

中野　はい。しかし、それは……。（と躊躇して居る）
小泉　それさへ承知ならそれでいゝ。
中野　あの小泉さん、實は私、雅に會ひます事は止めようと思ひまして……。
小泉　何、止める？
中野　止めようと存じます。
小泉　いや、そんなに遠慮はせんでもいゝよ。
中野　いゝえ、遠慮はいたしませんが、餘り御手數をかけては相濟みませんから、もう思ひ切らうと思つて居るんです。
小泉　はゝア、ぢや都合でやめると云ふのかね。
中野　はい。
小泉　うむ、それならば、何方でも好い。俺が會ひたい譯ではない、貴公が會ひたいと云ふのぢや。その會ひたい御本人がやめると云ふなら何方でもよい。しかしもう明日會はせると云ふだけの手續は出來て居るのだから、今日となつて止めるとなつた處で、別に己れの勢力が減ずる譯でもないから、止める、止めんに關はらず、やつぱり五百圓は申受けるからよろしいか。
中野　はい、あの、それは……。

小泉　いや、これさ御承知ならそれで好いハ、、、。
中野　小泉さん、私、實は雅に會ひました。
小泉　なに、雅に會つたと！　それは何日？
中野　はい。今晩――。
小泉　何處で？
中野　荒神橋と申します處で……。
小泉　雅に荒神橋で會つた！　會つて何か聞いたか！
中野　いゝえ、何も聞きません。
小泉　いや、何か聞いたらう。
中野　全く何も聞きません。はい――。
小泉　うむ、さうか、それならそれでいゝ。成程、雅に今晩、直接會つたから、もう會はんでもいゝのか。從つて五百圓も出さんと云ふのか。うむ、よろしい、よく解つた！　おい！　中野、貴樣約束を無視したな！
中野　いゝえ、決してお約束に反きはいたしません。
小泉　何、反かん、いや立派に約束違反ぢやないか。そもそも雅を岩崎家へ嫁入らせる當時、貴公と俺との間にごんな約束を締結した！　一度親子の緣を切つて先方へ遣つた以上は今後は如何なる場合と雖も、あれに直接會ふやうな事は致しません。萬一會はんならん場合には貴方

を仲に入れなければ決して會ひませんと、あれ程堅く約束したぢやないか。それに今晩、直接會つて來た？　立派な契約違反だ！　よろしい、貴公に於て約束を破れば又、俺の方にも決心がある。うむ、よし／＼ハヽヽヽ。

中野　小泉さん、さう御立腹なすつては私迷惑いたしますからどうか御許しを願ひます。

小泉　何が立腹だ！　馬鹿な事を云ふな！　俺は陸軍の軍人ぢやぞ！　貴公の樣な御用商人、いや國家の機密を外國に賣るやうな賣國奴の家族を相手に腹を立てるやうな度量の狹い人間ぢやない。何が立腹ぢやハヽヽ。（と故意に大笑して）　いやもうよろしい／＼、考へて見りや俺が淺薄だつた。貴公等の樣な、賣國奴、非國民の家庭になど約束をしたのが馬鹿だつたのぢや。非國民の家族は人間ぢやないよ。いや改めて謝罪をする。どうか許してくれ！

中野　さう仰有られましては、私は御返事に困りますからどうぞ私こそ、御許しを願ひます。

小泉　いや、よろしい。それで、かうしやう。貴公と俺も今日限り斷然交際を止めやう！　今後つき合ひをしなけりや別段怒る事も笑ふ事もない。さア奧の病人を連れて即刻お立退きが願ひたい！　どうぞおかへり／＼！

中野　若し、小泉さん、さう御立腹なさらずに、どうしていゝか全く私は此場の處置に困りますから、どうぞお腹立のない樣に――もし小泉さん。

小泉　貴公から、あやまられる譯はないよ。俺は賣國奴の親爺は嫌ひぢや！　非國民の家族は厭になつた。こら貴公達は人間面をして、外を歩けんのだぞ、貴公の倅の賣國的行爲から我が忠勇な兵士何千人は露國の砲火のために全滅したんだ。貴樣達は國民に會はせる顏があるか！　座敷の上では往生出來ん奴等ぢや！

（と、修三は赫となつて清助を蹴る。反跳にて自分も倒れる。清助は我慢して起き上り無念として居る。）

（物音に奧より雅子の弟　潤吉走り來る。）

潤吉　お父さん、どうしたの？

中野　潤吉、私は今小泉さんの御機嫌を損じたのだ。どうか、お前からあやまつておくれ、御立腹なさらんやうに賴んでおくれ！

小泉　（起上り）こら中野、貴樣己れに抵抗したな。よし面白い！　さあ抵抗して見ろ！　抵抗するならいくらでもせい！　さア打つとも蹴るとも殺すとも勝手にしろ！

えッ殺せ／＼。（と再び清助を蹴る）

潤吉　小父さん、お父さんをどうするのです。お父さんが可哀想だもの……。

小泉　貴樣も……馬鹿！

潤吉　お酒を飲んで亂暴するなんて小父さんの方が馬鹿だい！

小泉　なに、馬鹿者奴！　賣國奴！

潤吉　兄さんが勝手にしたんだ、お父さんも姉さんも僕も知らない事だい！

小泉　なに、この餓鬼奴！

（と、蹴らんとして又反跳にて仰向けに倒れる。）

潤吉　やアい。小父さんは人間ぢやない。鬼だい！

小泉　さア、どうともしろ！　親子で俺を殺せ！　殺せ！今日まで貴樣達親子につくしてやつた恩を忘れやがつて畜生奴！　さ殺せ／＼！

中野　（毅然として坐り直し）　小泉さん、あなたは、それ程までに理不盡な事ばかり仰有つて私共をお苦しめなさらなければ、お氣が濟まないものですか。

（修三は、ふんぞりかへつて居る。）

中野　（にじり寄つて）　そりや成程　私共は賣國奴の親兄弟に違ひございません。けれ共賣國奴の行をしましたのは伜で私共は一向に存じない事です。しかし伜のした行でも國民に對して申譯がないと思ひますればこそ、一切隣賣もやめ、交際も公職も辭して片田舍に引つ込んだのです。世捨人同樣にして伜や兄弟の罪を自分達まで引冠つて謹愼をして居たのでございます。それをあなたが偶然に御出でになつて、私の親類同樣にして居る華族が嫁を探して居るからと縒て居る兒を起すやうにして、無理矢理に雅を岩崎家へ嫁にやつたのではありませんか。もし、小泉さま、あなたは紳士と云はれる立派な御身分の方ですが、果してあなたがなすつてゐらつしやる事は義理や人情に缺けて居ないものでせうか。そりや成程、私は雅に直き／＼會つて來ました。貴方から堅く止められて居たお約束を破つたのは重々申譯がございませんが然し、これも私から求めて會ひに行つたのではありません。實は今夜、私一寸氣になる事があつたので荒神橋の邊まで參りますと、橋の上から身を投げやうとする女があるではございませんか。私は、喫驚して抱き止めて顏を見ますと、その死なうとして居るのが娘の雅ではありませんか。

潤吉　ねえさんが？――お父さん、そしてどうしたの？

中野　やうやくの事で抱き止めて命だけは拾つたが、段々話を聞いて見ると……小泉さん、あなたと云ふ人は――いつも御出でになる度毎に、お金が要ると云つてはお持ちかへりになる。その果は品物まで手を、おつけになつて、到頭御前様から頂いた大切な指輪まで持つてお歸りなすつたさうだ！　これを又運悪く御隠居様の目に止つていろ／＼と嚴しく問ひ糺されたけれども、あからさまには打明ける事が出來ず、どんなに苦しんだか知れないさうです。しかもその事から離縁話にまでもならうとしたので、女中のお玉と云ふのが見るに見かねて、何んとやさしい心掛ではございませんか、自分が盗んだと云ふ置手紙をして、お邸を出てしまつたさうです。雅は……雅は……そのお玉と云ふ女中の爲に救はれたのでございますよ！

小泉　（俄破と起き）何、雅の難儀を、お玉が救つた？

中野　はい、私はそれを聞いた時には、思はず泣かされました。たとへ主從の間柄とは云ひ條、云はゞ昨日今日の奉公人です。それがあなた、外の事でもある事か、いかに、主人の難儀を見かねたからと云つて進んで盗人の汚名を被て他人を救ふとは何と云ふ優しい心持の女でせう！　容易な事ではありません！　私はそのお玉と云ふ女中に一度も會つた事はありません。が、心の底から手を合せて拜みました。小泉さん、一期半期の奉公人でさへもこんなに義理を立てゝくれます。それに雅あればこそ假りにも親子となつて居る間柄で、そんなに苦しめなさらずともいゝではありませんか！　隨分これまでに私の方から貴方に差上げたお金は少い高ではありません　しかし私は一度だつて御無心をお斷りした事がございましたか？　私はこれまでも度々何と云つて御願ひいたしました。雅を責める事だけは御勘辨なすつて下さいまし、その代りに御入用の事がありましたら私に仰有つて下さいまし。たとへ幾度の御無心でも、出來る限りは、どの樣にも御用立いたしますと、どれ程申上げたか知れません。それに雅をお責めなすつた許りに、雅は御隠居樣にお調べを受けても、有りのまゝを申上げる事は出來ず、他の奉公人などから、妙な疑ひを受けて到頭思案に餘つて身投げをしようとまで、決心をしたもので御座います。小泉さん、私の一生の御願でございます。どうぞ雅を苦しめる事だけは御勘辨なすつて下さいまし。（修三は仰

向けの儘、返事なし。清助は一層すり寄り）小泉さん、寝ないで、どうか聞いて下さい。雅は今夜私の處へ、相談の手紙を出しました。それを岩崎家の人達が、密夫の所へでも出した様に疑つて居るらしいのです。その濡れ衣を干して戴くのは貴方より外にございません。又お玉さんの罪の明しを證明して下さるのも、貴方より外にはありません。どうかあなたから御隠居様に、その理由を仰有つて下さいませんか。その代り私も必ずあなたにお約束いたします。たとへ今後どんなに雅に會ひたくとも、決して會ひません。又お金が御入用でございましたら私から如何程でも差上げます。たとへ中野の身代を殘らずよこせと仰有つても娘の幸福の爲だつたら躊躇はいたしません。惜しいとは思ひませんから雅だけは、何日までも岩崎家の奥様で居られるやうにお取計ひを願ひます。さア此處にまさかの用意にと、取つてあつた千圓がございます。どうかこれを御隨意にお使ひ下さいまし——。

（と、ゆり起す、が修三は高鼾である。）

潤吉　お父さん、駄目だよ。鬼がもう寝てらア。

中野　もし小泉さん、小泉さん、もうお寝みでございますか。どうぞお願ひでございます。（とつく／″＼見すまして失望）あゝ駄目か。

（と、潤吉と顔見合せて悄然と立上る。そして去らんとして又立上り、修三の寝て居る上に一旦脱げる褞袍をかけてやる。）

（微かに悲哀な尺八の音が聞える。遠く寺の鐘がひゞく。）

——道具靜かに廻る——

第二場　同奥座敷

道具納まる。

（と、奥座敷にて、清助の妻お富は病床に伏して居る。と靜かに清助と潤吉が這入つて來る。緣の下や、庭前に哀れな蟲の聲。清助は、妻の寝顔を見て、潤吉に何かさゝやく。お富氣付いて起上らんとする。）

お富　あなた、おかへりなさい。

中野　あゝ、起きてはいかん。成るべく動かんやうに、其儘に寝て居なさい。

潤吉　お母さん、もう、お藥を飲む時間だよ。

お富　潤吉、すまないが、ついでおくれ。

（潤吉は無言にうなづきて、薬をつぎて出す。お富は飲み遣る。）

お富　あなた、いかゞでした。雅子に逢はれましたか。

中野　まア安心なさい。雅は無事だつたよ。

お富　お邸へ行つて雅子に會つて來たのですか。

中野　いや、さう云ふ譯には行かんから、どうしようかと思つて迷つて居るとな。折よく雅子と荒神橋と云ふ處でパッタリ出會つたんだ。

お富　さうですか。都合がようございましたわね。

中野　それがな、お前立派になつて、實に見上げたものだ押しも押されもしない子爵様の奥様の姿でな。

お富　まア奥様の姿で――頭は丸髷でございましたか、それとも束髪で――？

中野　その何だ。丸髷だ。しかも定紋のついた自動車に乗つて居たよ。

お富　まあ〱自動車に乗つて――。

中野　うむ、きつと子爵様と一緒に何處かへ出かける處だつたらしいよ。

お富　さうですか、それで私もやつと安心をいたしました。

中野　私もこんなに嬉しい事はない。雅もいかにも嬉しさうな顔をして居たよ。私はもうしみ〲と立派な姿を見たからもう思ひ殘す事はない。もう大阪へ歸つてもいゝよ。

潤吉　僕だつて見たいなア。

お富　さうですとも、……私だつて、私だつて、このまゝ雅子に逢はずに歸つては迚も死に切れません。

中野　そりや尤もだ。この間のやうな手違ひもあつた事だから一層逢ひたいのは無理もないが、私が現に立派に達者で居る姿を見て話をしてやりや、それで逢つたも同様おや！　なまなか、無理な事をして、此方の身許が岩崎家へ解らうものなら、それこそ大變ぢやないか。雅の身の破滅になるからな。お前も定めし、逢ひたからうが、娘の身が可愛かつたら、私が頼むから我慢をして大阪へかへつておくれ！　それが眞實の親の慈悲だよ。

潤吉　お母さん、お父さんがあんなに云ふんだから、姉さんに逢ふのは止めやうよ。

お富　さうだね。なまじ無理をしては、折角出世をして居る雅子の身に係はるかも知れない。いつそ諦めて歸る事にしませう。

中野　あゝ、それがいゝ。此處に居て氣兼をしたり、遠慮

をしたりしてゐては、却つてお前體の毒だ。一日も早く歸つて馴れた我が家で養生をするのが、何より藥だからなア。

（と、蟲の聲ハタと止み、バタ〳〵と雅子走つて來る。逸早くこれを、お富と潤吉に見つけて立上り。）

潤吉　あ、姉さんだ。

お富　おゝ雅子！（と緣へ走る）

中野　何、雅が！……おゝ……

（と、びつくりして、お富と潤吉を無理に座敷へ入れて障子を締め切る。三人の影法師が映る。雅子ハツと胸をつかれて躊躇。）

お富の聲　あなた、あの通り雅子が來ました。何故あなたは逢はせないのです。もし、あなた！

中野　いや、お前は何を云ふのだ。雅はこんな處へ來る譯はない。

潤吉の聲　姉さんだよ、お父さん、姉さんだよ！

中野　違ふ〳〵。お前達の見違ひだ。や、決して雅ではないあつたな事は云ふものではないぞ！

（と潤吉、障子をあけん〳〵するを、清助とめる。）

中野　何をする！　此の障子をあける事はなりません。ならないのだぞ！

お富　あなた、そんな邪險な事を云はないで、折角會ひに來たのでせうから、どうか、この障子をあけてやつて下さい、もし――あなた。

中野　いけません。あける事はなりません。成程、雅らしい女が來たやうだつたけれ共、それは、お前達の氣のせゐだ。よしんば、眞實の雅にしろその雅子は最早私の娘ではありません。一旦緣を切つて他所へやつたんだ。立派な家庭の主婦になつた。私の娘ではない。そんな人が何んで今時分こんな所へ尋ねて來るものか。これそこの女さつきの誰かゞ、云つた事が分らんか。

雅子　よく〳〵解つて居ります。けれ共、私は一目、お目にかゝつてお話ししたい事があつて參りました。どうか、逢はせて下さいまし。

中野　これ何と云ふ事を云ひなさる。そんな不心得な事を云ふから人樣に疑はれるやうな事が出來るのだ。一旦親子の緣を切つた上は、たとへどんな事があつても良人に大事に仕へさへすれば、好いのだ。それに何でこの夜更けを供も連れずに、お邸を出て來なすつた。やつぱり無分別な心を改めないのか、生みの親の眞の恩愛が、會得

雅子　けれ共、そこにお母さんも、弟も居るんぢやありませんか。もう私は心の底できめて來て居る事があるんですから顏を見るだけでよろしうございます。どうか逢はせて下さいまし。お父さま！

中野　いや、二人を逢はせては私の心に濟まない事があるのだ。良人が大事ならば何故さつさと歸らん。どつちが大切なのだ。さ、私の娘にはそれが解らないやうなそんな馬鹿者は無かつた筈だぞ！

お富　けれ共、雅子が今何とか云ひました。何か心に決した事があると申して居ます。一度逢はせてしつくりと話をさせて下さいまし。

潤吉　お父さん！

中野　駄目だ、駄目だと云つたら駄目だと云ふに、それでは私が小泉さんとお約束した事が立たん。一層小泉さんを怒らせる許りだ。雅の身に不利益になる許りだ。娘の身を思ふなら逢はうなどとは心得違ひだぞ。

雅子　あゝ私は……（といたく悶えて）お父さん、私はもう歸ります。もう歸ります。このまゝ歸ります。どうか皆さん、お體を大切に遊ばして下さいまし。私は……私は、もう一生お目にかゝりませんから……

（と、泣く。お富も潤吉も聲をあげて泣く。その有樣が障子に映る。）

中野　さうか、よく得心してくれた。一生中野の家の者とは逢はん決心で居てくれ！　さア歸るがよい。しかし決して無分別な事をするでないぞ！

雅子　はい。お達者で――左樣なら。

（と悄然と去らんとす。蟲の音哀れに響く。此の時、小泉修三來りて、いきなり障子を開ける。）

雅子　おゝ小泉さま！

（と雅子は行きかけて躊躇。お富と潤吉は縁へ出でんとするを清助は止める。修三は縁へ腰を下ろして憮然。）

――幕――

大詰

第一場　都ホテル喫茶室

幕あく。

（と、卓を圍んで、外國人の女連れ三組ばかり日本人女連れ二組茶を飲んで雜談をして居る。隣室のダンス場には合唱の聲と共に、入亂れたるダンスの跫音がひゞいて來る。喫茶室にはティーガールがお客の間に紅茶やケーキを運んで居る。先づ外國人は笑ひながら奈良名物の鹿と紙張子の吊されし笹を振りつゝ去る。）

（これと入違ひに聲樂家黑澤明を先に高倉淑子とが來るティガールは注文を聞いて去る。）

黑澤　わざ〳〵來て頂いたりして誠に濟みません。實は一度貴方に是非お目にかゝつて、お伺ひしたい事があつたのですがね、丁度此處で會つたのは何よりでした。

淑子　まア左樣でございましたか。大和キネマに入らつしやると云ふ事を本庄さんから伺つて居ましたが、何かキネマにでも關係した御用だつたんですか。

黑澤　いえ、まるで見當違ひのお話なんですが、實は本庄から頼まれて居る事がありましてね、多分あなたか、片山さんなら、よく御承知だらうと云ふ事でした。

（ティーガール紅茶とケーキを運び來りて去る。ダンスの跫音やみて、美しき獨唱が聞える。）

淑子　さうですか。何でせう。あの濱子さんの事についてでせう？　ぢや。

黑澤　えゝ、本庄は此頃まるで自分のビヂネスを投げやつて濱子さんの事にばかり熱中して居ますが……一體濱子さんには實際に本庄に愛を持つて居るんですかね。もし本庄が濱子さんの傀儡になつて何かの手段にでも使はれて居るやうな事があると、氣の毒ですし、たゞ徒らに本庄の天分を腐らして仕舞ふやうなものです。本庄は兎角人格的に非難もありませうが、音樂家としては非凡な天才を有つて居るんですからな。自分の職分を捨てゝ、ただブラ〳〵遊ばせておくのは實に惜しいんです。

淑子　どうなつて居るんですかね。私にもはつきり解らないんですの。それに私共は此頃、濱子さんにあんまりお目にかゝらないもんですからね。

黑澤　僕は妙な噂も聞いて居るんです。もしそれが眞實だとすると、本庄は欺かれて居る譯ですからな。可哀想ですよ。

淑子　きつと何でせう。濱子さんが岩崎さんと御結婚なさると云ふ事ぢやありませんか。

黑澤　さうです。さうです。あなたに、その間の消息は解りませんか。

淑子　何でも此頃は岩崎さんは、しきりと濱下さんと、お仲がよくなつた樣ですから、それに奧樣の御離緣問題から一層お二人の間が接近したやうに思はれるんです。

黑澤　本庄は欺かれて居るに違ひない。僕にこんな事を云つて自慢をして居た事があつたんです。濱子さんが、ある奴に强烈な復讐をする。その作戰は、皆、僕がやつて居るなんてね。だから本庄は、只その手先に使はれて居るんで濱子さんのレベンヂーが濟むと、潰れた玩具のやうに顧みられなくなるんぢやないでせうか。

淑子　どうですか。

（外國人の女連れ又笑つて去り行く。日本人紳士と藝者及び仲居らしきもの一組來りて卓につく。テイーガール茶を汲んで來りて去る。）

黑澤　（卓を叩いて）よし、本庄に注意してやらう。どう考へても彼奴は欺かれて居るんだ。

（此時紀子靜かに來りて人を探す樣子）

紀子　あら淑子さま。こんな處に居たんですか。探しましたわ。ずゐ分——

淑子　さう。私黑澤さんとお話して居たんです。

黑澤　や、その後は御無沙汰して居ります。

紀子　いゝえ、私こそ、——淑子さま、今岩崎さんと、濱子さんとゐらしたわ。

淑子　さう何處にゐらつしやるの。

紀子　そら、昨日東京から入らした佐土原伯爵樣の御部室を訪ねて行つたの、私達も、お訪ねしませうよ。

淑子　えゝ、ぢや黑澤さん御免遊ばせ。（と去らんとす）

黑澤　あの片山さん。

紀子　私？（と振返る）

黑澤　もしか、あちらに本庄が見えませんでせうか。今日人を訪ねて來る事になつて居るんですが——

紀子　一向に存じませんが——尤も私が此處へ來た時、そら京都青年會館の人達が二三人本庄さんを訪ねてゐらつしやいましたわ。

黑澤　青年會館の連中が？　變だな？　ぢや、やつぱり例の一件は事實なんだな。

紀子　どうなすつたんです、本庄さんが。

黑澤　いや何でもないんです。只この間、岡崎公園の音樂大會の時、會費を……よくある奴ですが、大した事はないんですよハヽヽ、きつと——

紀子　さうですか。ぢや鳥渡失禮いたします。

（と、淑子と紀子は去る。黒澤は腕をくみ何事か考へて居る。と、反對の側より本庄光一醉つぱらつて來る。）

黒澤（素早く見つけて）おゝ、君を探して居たんだ。

（本庄は黒澤をチラと見て不愉快な顏をして空き卓に靠れる）

黒澤　しつかりしろよ。何だい日頃の元氣がないぢやないか。どうしたんだ。濱子さんとのエンゲーヂはどうなつたんだよ。

本庄　貴樣まで、ひやかすのか。

（と、卓を叩く。紳士と藝者と仲居は可笑しさうに本庄を見る。）

黒澤（高く笑つて）幻滅が來たのか。あんまり早いぢやないか。さう／＼今日此處へ岩崎子爵と濱子さんが一緒に來たんだらう。

本庄　大丈夫だよ。

黒澤　そんなら何もガッカリして居なくてもいゝだらう。そんなに結婚に自信があるならばね。

本庄　自信はあるさ。しかし我が愛する女が他の男と一緒に仲よく客を訪問したり、ダンスをやつたりして居るのを見て、愉快な心持で居られるか。もし、それを見て愉快だと云ふ奴があつたら、其男は人間ぢやないよ。人形だよ。血が通つて居ないんだ。

黒澤　けれども、其仲をよく見せて居る先方の男が、女のトリックにかゝつて居ると云ふなら、君が何も悶々しなくてもいゝ譯だよ。

本庄　餘りいゝ心持はしないよ。貴樣が假に俺の位置に立つて見ろ、どんな氣持だか。

黒澤（又高く笑つて）解つたよ。君は胸の裡の不平を無理に抑へて居るんだらう。恐らく君の胸の底の方には強い自信を裏切る。あるショックがあると俺は想像する。どうだい、當つたらう。君は悶えて居るんだよ。ある疑ひのために惱みつゞけて居るんぢやないか。

本庄　黒澤！（と云はんとして躊躇）

黒澤　友達甲斐に、ハッキリ云へよ。それを聞いた上は俺も君に注意する事があるんだ。

本庄　貴樣は好きな女と毎日一緒にカメラの前に立つて踊つて居るんだ。全く幸福だよ。

黒澤　何を云つて居るんだい。おい、果して濱子さんは復讐してから、君と結婚するのか？

本庄　そりや、たしかだと思つて居る。

黒澤　君一流の自惚と違ふんぢやないか。

本庄　馬鹿な！

黒澤　しかし、いろ／＼と探つて見ると、日一日と濱子さんの態度は、違つて來ると云ふぢやないか。

本庄　何、さう、故意に見せて居るんだよ。

黒澤　そんなら何遍云つても同じだが、悶えたりなんかしなくとも好いやうなもんだよ。

本庄　もう云ふなよ。

黒澤　（又高く笑つて）とう／＼馬脚を現はしたぞ！　おい！　濱子つて女は油斷はならんよ。きつと君を手段に使つて居るんだぜ。氣を付けないと熱湯を飲まされるぞ。

本庄　貴樣もさう思ふか。

黒澤　思はれるから親しい貴樣の爲に注意をして居るんだ君のやうな情熱家は戀を失ひでもすると何をするか、分らんからなア

本庄　一ツ思ひ切つて今日は——いや／＼もう少し自重をして置かう。今、底を割ると今日まで隱忍して來た事がフイになつちまふ。なにもう少しだ。

黒澤　（又々高く笑つて）弱き者、汝の名は本庄光一と云ひたいなア、そんなに濱子さんは、チヤーミングがあると思はんか、妙だな。緣があると云ふのかな。

本庄　見て居ろ、默つて見て居ろ！　俺は最後の勝利を博してやるから！

黒澤　戀のリーグ戰か。面白い、まア興味を以て拜見しよう。しかし轉ばぬ先の杖が肝腎だぞ！

（此時、青年會館の幹事、甲・乙、丙の三人來りて本庄を發見して寄る。）

甲　本庄君。君を探して居たんだ。

本庄　おゝ（と稍々不安な樣子）

乙　君、早速だが、此の間の會費問題だが、もう金は集まつたらうね。

本庄　うむ。まだ集まらん處があつてね。それで未だに計算をして居ないんだ。

乙　さうか、で一體君の手許にいくら會費が集まつて居るんだい。

本庄　二三十圓だよ。

甲　ふむ、しかし君の持つた分は大部分なんだからね。少くとも三百圓くらゐはある筈だ。それに二三十圓は餘り少いぢやないか。貧乏な學生や、サラリーマンぢやない

んだ。金持や華族の夫人や令孃が多いんだからね。
本庄　ところがね、なか〳〵よこさないんだ。金のある奴ほど出し澁るもんでね。
甲　ねえ本庄君、僕達は君を疑ふ譯ぢやないが、君は飽くまで集めて居ないのか！
本庄　妙な事を云ふぢやないか。それぢや何かい、君達は僕が集めて費ひ込みでもしたと思つて居るのか。
丙　實はさう思つて居るんだ。君の生活、君の行動が僕達にさう云ふ疑を起させるんだ。
本庄　勝手にさう思つてろがいゝよ。今に解るよ。
甲　本庄君、君は我々をそんなに欺かうとしても駄目だよ。我々はね帳簿から見て會員を片ッ端から訪問して見たんだ。君は皆、集めて居るぢやないか。我々三人は、どんな氣まりの惡い思をしたと思つてる。三人は何しろ後始末をしなければならないのだから、今集めた金を我々の手へ渡してくれ給へ。
本庄　集めて居ないよ。
乙　さ、もう嘘を云ふなよ。いくら隱しても駄目だ。我々は調べ上げてあるんだ、君が我々の手へ出さんと云ふのならこつちでも考へがあるよ。
本庄　何だ變な事を云ふな。俺を脅迫するのか。
乙　脅迫ぢやない。
本庄　いや立派な脅迫だ！　立派な。まア何でもいゝさ。君達にや、からかつて居られないんだよ。
甲　本庄君。僕達がこんなに紳士的に扱つてやつても未だ何とか、かんとか云つてるのか、ぢや君はどうしても不正な事をして居ないと云ふんかね。
本庄　不正？　何だ不正とは！
甲　さうか、それなら、それ程云ふなら我々と一緒に來てくれ！
本庄　何處へ！
甲　警察へ行つてくれ。
本庄　馬鹿を云つちや、いかん、そんな處へ行く必要はない！
甲　何でもいゝから來い！（と手を引張る）
本庄　何をする！　餘り亂暴ぢやないか。
乙　亂暴もくそもあるもんか。君は立派に背任罪を犯して居るんだ。さア來い！
（と。三人は本庄を引立てんとする。烈しいダンスの音。本庄それを振切つて遁れんとするを、やらじと捨臺

詞にて爭ふ。遂に三人は本庄を倒して蹴つたり踏んだりする。)

(此の時、ティーガールになれる、お玉來りて、これを見て三人をかきわける。)

お玉　もし、お待ち下さいまし。

(三人は捨セリフにてお玉を押しのける。ダンスの跫音に奏樂にて、此處の物音は聞こえぬ心。お玉は懸命になつて三人を押しのけ本庄を庇ふ。)

お玉　どうか手荒な事をなさらないで下さいまし。御らんの通り今日は外國人のお客様も大ぜいゐらつしやいますから、かう云ふ處を見られやしては此の都ホテルの名前に障りますから、どうかお靜かにお願ひいたします。

甲　本庄！　貴樣はいくら胡麿化しても駄目だぞ！　皆カフエー入りに遣つちまつた事は、ちやんと解つて居るんだ。もし今日我々にこんな目に會つたのが口惜しかつたら、今日中に耳を揃へて持つて來い！　告訴だけは明日まで待つてやらう。

乙　呆れ返つた奴だ！　歸らう。

(と三人は去る。お玉は本庄の額を見て深くうなづく)

お玉　もし、あなた、お怪我はございませんでしたか。

(と介抱して腰かけさせる。)

本庄　騷がせてすまんね。

お玉　いゝえ、どういたしまして――あの、つかぬ事をお尋ねしますが、あなた本庄さんと仰有るんでございませう？

本庄　(額を見て)僕は本庄だが。

お玉　あなた、それでは、いつか大事なものを、お落としにはなりませんでしたか。

本庄　大事なもの――うむ、落とした。どうして君はそれを知つて居るんだい。

お玉　實は、私がお拾ひして居たんです。

本庄　思ひ出した！　あゝ君はあの時、荒神橋に居た方でしたね。やつぱり拾つてゝくれたのか。いや、ありがたう／＼あの中にはね、僕の最も大切な物が這入つて居るんだ。ぢや早速返して貰へんかね。

お玉　えゝ、私が持つて居ても何もなりませんから、お返し申します。ですけれど只今、此處には持つて居りませんから、かういたしませうか。今晩何處かでお目にかゝつてお渡ししませう。

本庄　今夜――
お玉　あんまり人目のつかない處で――私お渡ししながら貴方にお聞き申したい事が御座いますから。
本庄　さうか、よし。
お玉　何處がよろしうございませうね。（と考へる）あ、あそこがよろしうございます。岡崎公園の動物園の横の空地が――
本庄　（少し氣味惡くなりながら）まア君が拾つてくれたんだから君の都合の好い所で受取らうか。
お玉　では堅くお約束いたしましたよ。
本庄　承知した。
（ティーガール此の時來りてお玉に何事かさゝやく）
お玉　承知いたしました
（と、そのティーガールと一緒に去る。本庄は不審さうに見送つて椅子にかける。此時、岩崎一彥と濱子、兩人共、洋裝にて出る。本庄は濱子の方を見て、いきなり立上る。濱子意外に驚く。）
本庄　あ、濱子さん――（と寄らんとしてためらふ）
濱子　（眼で知らせて）一彥さん、そら音樂家の本庄さんでゐらつしやいますわ。

岩崎　さうでしたか、何處かで御見受けしたやうに思ひました。何ですか、相變らず音樂界の事業に努力して居られるんで――
本庄　は、はい――
濱子　本庄さん、本當にお久しぶりでございましたわね。丁度、この春以來ですものね。
本庄　さうなりますかな。
岩崎　今日は誰方かお尋ねでしたか。
本庄　は、鳥渡、面會したい人がありまして――
濱子　さう／＼、黑澤さんでしたら、ダンスホールに居らつしやいましたわ。
本庄　おや、僕は失敬します。
（と跫音も荒々しく去る。）
岩崎　濱さん、お茶でも飲みませうか。
濱子　えゝ。
（と、一彥は卓上の鈴を鳴らす。ティーガール來る。）
岩崎　未だ茶が出來るかね。もし出來なかつたら何でもいい。カクテルでも持つて來てくれ。
（ティーガール去る。）
濱子　一彥さん、佐土原さんは本當にダンスがお上手でゐ

らつしやいますわね。

岩崎　あの人は外交官としてパリに三年も居たから、つまり交際社會の檜舞臺を踏んで來たと云ふ譯ですよ。

濱子　奥樣はどちらからお出で遊ばしたのですの。あなた御存じですか。

岩崎　たしか高津伯爵のお妹さんですよ。ほら派手好きで評判の高いね、いつか花岡君が噂をして居た事があつたでせう。

濱子　あの、高津さんと仰有いますと、同族でゐらつしやいますわね。

岩崎　え？　えゝさうでせう。

濱子　あの指輪巴里でお求めになつたのでせうか、紫ダイヤですのよ。

岩崎　紫ダイヤ？　さう〳〵モウパツサンの小説で見た事がありました。ある戀する男が、對手の女の心を疑つて何か強烈な戀を象の上に表はしたものを證據として要求した時には女の方から、アフリカのナイル河の上流から採取した紫ダイヤを贈つて來たさうです。同時に、紙片に短い文章で、斯う云ふ事を認めてあつたさうですよ。ナイル河の上流には毒蛇が多く棲んで居る。其處の沿岸に産する紫ダイヤには必ず毒蛇の息がかゝつて居るから私があなたに贈る此のダイヤは毒蛇の息のやうな強烈な刺戟が毒と違つて甘い戀の印となつてこほつて居るでせうとね。濱さん、鳥渡面白い引例ぢやありませんか。

濱子　毒蛇のやうに強烈な戀――一彦さん、戀は毒蛇のやうに強い執着がなくては樂しみはございませんのね。

岩崎　さうですとも。――執着の淡い戀は果物を味はふやうなもので何の刺戟もありませんね。一つ私も紫ダイヤを濱さんに贈りますかハ、、、。

濱子　あら、本當に、

岩崎　えゝ、本當に。

（ティーガールはカクテルを運び來りて去る。）

濱子　好い色ですこと。

岩崎　緑の濃いのですね。緑の色は物の新しく芽生える強烈な色をシンボライズしたものだから、愉快な色です。

濱子　私も大好きなんです。

岩崎　（飲みながら卓に置かんとして）濱さん、あなた飲まないんですか。

濱子　こんなに澤山は――あ、あなたの召上つた殘りを少し頂きますわ。

岩崎　これをですか。濱さん、これを飲んで下さるか。
濱子　えゝ、それでも多いくらゐなんですもの。
岩崎　それぢや上げませう。
濱子　ありがたう。（と飲む）
岩崎　甘いでせう。
濱子　えゝ――ねえ一彦さん。
岩崎　何です。
濱子　戀と云ふものは物の味に例へたらば、丁度このお酒のやうに――あまくて強い刺戟があつて――あなた、どう思召して？
岩崎　同感ですね。
濱子　これを皆飲むと酔つてしまひさうですわ。
岩崎　大丈夫ですよ。
濱子　あなた、もう半分召上つて下さいまし。その殘りを私、いたゞきますから。
岩崎　さうしませう。（と半分飲んで濱子へさす）
濱子　でも、私酔つたら、どうしませう。
岩崎　酔つたつていゝぢやありませんか。
濱子　でも。――
岩崎　私が介抱しますよ。だから安心して。
濱子　ほんとに。
岩崎　えゝ本當に、まア酔つて見るのも面白いでせう。貴女の解釋通り、丁度戀に酔つて居るやうな心持になる事が出來るからね。
濱子　私、この上、（と秋波にて一彦を見やり）このお酒にも酔うたら大變ですわ。（と云ひながら飲む）
岩崎　飲みましたね、えらいね。
濱子　でも私、酔つても私の罪ぢやございませんのよ。あなたがお悪いんですから。
岩崎　（聲高く笑つて）濱さん、卑怯だね。今から防禦線を張ッてるハ、、、。
濱子　ホ、、、。（と故意に笑ふ）
岩崎　ハ、、、愉快だな。
濱子　あら一彦さん、肩の處に何かついて居ますよ。（と立上つて一彦に寄添ひ、花びらをつまむ。）
岩崎　ダンスをした時のほこりでせう。
濱子　いゝえ、花びらよ（と見せる）
岩崎　何の花びらでせう。
濱子　そら、きつとヒヤシンスでせう。ダンスホールの隅にありましたもの。

岩崎　ヒヤシンスね、フランスでは、この花で戀の占をするさうですね。その花びらが私の肩について居たと云ふ事は、何だか非常に嬉しいやうな氣がしてならない。

濱子　あら私が今云はうと思つて居た事を、本當にね。率直に云へば、戀のチヤンピオンよ。

岩崎　誰か――?

濱子　誰ですか。解りませんわ。

岩崎　さ、誰だらう。

濱子　一彦さん、あさつてでしたわね、嵯峨の御別莊の棟上げは。

岩崎　えゝさうです。

（此の時、衝立の蔭に、お玉來りて窺ふ。）

濱子　棟上を見にゐらつしやいませんの。

岩崎　あなたも一緒に行つて下さるか。私は無論行く意りです。

濱子　おや、どうか連れて行つて下さいな。私だつて拜見したいんですもの。

岩崎　一緒に行きませう。何れはあの別莊に（と濱子を見て）ハ、、、ねえ濱さん。

（人の來る跫音に、お玉は去る。以前の淑子と紀子來りて、いさゝか躊躇。濱子は少し離れて）

淑子　濱子さん、お邪魔ではありませんの。

濱子　あら、こちらへ入らつしやいませな。

紀子　只今、淑子さんと佐土原さんのダンスを拜見して來ましたの、お上手で居らつしやいますわね。

岩崎　まだ皆、やつて居るんですか。なか／＼熱心ですね。

濱子　一彦さん。又踊つて來ませうか。私、何だか踊りたくなりましたわ。

岩崎　さうですねえ、どうですか、あなた方は?

淑子　お後から參ります。

岩崎　おや濱さん、行きませう。

（と、再び一彦と濱子は腕を組んで去る。兩人見送り）

紀子　隨分ね。

淑子　私、何だか解らなくなつたわ。濱子さん、きつと岩崎さんと結婚をなさる、おつもりかも知れませんよ。

紀子　全くね。

（再び本庄光一興奮して出て來る。）

本庄　高倉さん、あなたに伺ひますが、率直に云つて見て下さいませんか。

淑子　何をでございます。

本庄　淑子の心持をです。

淑子　だつて私達には解りませんもの、そんな事を御有つても無理ですわ。

本庄　何だか譯が分らなくなつて來た！

（と、本庄は椅子にヤケに腰を下ろす。紀子は淑子の袖を引いて急いで去る。入違ひに黒澤少し興奮して出る。）

黒澤　（本庄の肩を叩き）おい、本庄、何をぼんやりして居るんだ。

本庄　さうだ今夜あれを受取れるんだ。あれさへありや、いゝんだ。さうだ、大丈夫だ。（と、卓を叩く）

黒澤　お芽出度い男だな。ダンスホールへ行つて見て來いよ。おい、見て來たらどうだ、二人の有様を――

（本庄、去らんとして躊躇。急にカラ〳〵と笑ふ。）

（兩人の心持は正反對に動く。）

（ダンスの音。合唱など。）

――幕――

第二場　嵐山附近の紅葉

幕あく。

（と、小原女三人上手に寄り辨當をひらいて居る。紅葉見物の群集は、老若男女それ〳〵に相伴つて來るもの去るものあり。此の間を風船を賣る男など交つて居る。又小原女四名黒木を頭にのせて來り捨臺詞にて食事せるのを誘つて去る。紅葉見物の醉ひたる男女は小原女にからかつて戯れるのもあり、やがて岩崎一彥と濱子は話し乍ら出て來る）

岩崎　濱さん、この邊は人ごみがしなくて好いですね。

濱子　えゝ、少し休みませんか。（とベンチの塵をはらつて）さアおかけなさいまし。

岩崎　さア、あなたから。

濱子　いけませんわ。どうぞ、あなたからでないと、禮儀に反きますもの。

岩崎　ハヽヽ、濱さん、にも似合はない。あく迄も日本式に出られましたね。

濱子　こりや私は伯母さんの御薫陶を享けて居ますから禮儀だけは因襲を歩いて參ります。

岩崎　成程（と、ベンチに腰を下ろして）どうです。皆何ものにか醉はされて居るやうぢやありませんか。老人も若い人も全く狂的ですな。（と葉卷をつけようとする

が、風の傷につかざる科二度許りあり。）

濱子　あ、私がつけてあげますわ。（と、濱子はオペラバックを擴げてその中でマッチをする。）

濱子　そら、御らんなさいまし。つきましたでせう。

岩崎　いや敬服しました。（と火をつける）

濱子　あそこでせう、御別莊は――

岩崎　さうです。もう一月位は手間取るでせう。しかし紅葉の嵐山は何度見ても繪の樣ですな。そら、御らんなさい。あそこの色合などは全く何と云つていゝのか、詩そのものですね。

濱子　自然が、かう云ふ景色を見せてくれるもんですから面白うござんすわ。文章だの、和歌だのに燃えるやうなと云ふ字句を使ひますわねえ。全く何かゞ燃えて居る樣な強い色彩ですわ。

岩崎　さう／＼さうして、しかもそれは希望の色ぢやありませんか。

濱子　何の希望でせう。

岩崎　さア（と考へて見せて）丁度、私の胸の裡に燃えて居る或る望みの色も、あの色と同じやうだと思つて居るんです。

濱子　それは、あなた許りでは。（と顏見合せてほゝゑみ）けれ共、一彦さん、お互の胸の裡は例へ紅葉のやうに強烈でも――そらあの紅葉の間に鈍い色を見せて居る松や檜の翠が邪魔をして居るやうに、何かゞ燃えて居る色を打消して居るものがありやしませんかしら。

岩崎　邪魔をね、さア何でせう。

濱子　たしかにある筈ですもの。

岩崎　――わかりました。

濱子　お解りになつて？

岩崎　そらあなたの御心配なさるのは離緣をした雅の籍の事でせう。

濱子　あなたの御想像にお任せしますわ。けれ共伯母さんだつて御心配なすつてゐらつしやいましたよ。一彦は雅の籍をどうするつもりかなんて。

岩崎　實はね、私もその事に就いては内々心配もして居るんです。形の上では立派に離緣した事になつて居ても籍が岩崎家にあつては何もなりませんからね。しかし、雅は邸から出たきり實家へも歸らずに行方不明になつて居るんです。親の小泉さんからも、しきりと云つて來て居

ますが、本人の姿が判然しない内は如何ともする事が出來ないのですからね。私もひそかに人を探させて居るんです。そして一日も早く完全に離縁をして籍を小泉家へ歸さうと思つて居ります。

濱子　さうなると、伯母さんも大そう御喜び遊ばしますわ。いゝえ、伯母さん許りではございません。皆が……そらお駒やお菊それから……あの全體が……

岩崎　それはね濱さん、近い將來に實現しますけれども、これは形の上の事で……あなたと私の親善關係には餘り價値のない事ぢやありませんか。つまり精神的にはね。

濱子　一彥さん、あそこの別莊が落成したらば、伯母さんがお引越しなさいますんですか。

岩崎　さ、どうしようかと思つて居ります。お母さんは、あんな人でありながら淋しがりやでしてね。歌の會などもつまりは、そんな處から私の宅で催すことになつたのですが、私は考へて居るんですよ。あそこは私が住まうかと思つて。

濱子　二人だけの世界を造るには、かう云ふ閑靜な景色の好い處がようございますわ。きつと——

岩崎　二人の世界誰と誰です。

濱子　雅子さんの御行方が分つたら、お話合でどうもなるんですもの。

岩崎　いや斷じてそんな事はありません。あれは不義をして離縁になつたのぢやありませんか。そりや濱さん、あんまり僕を疑り過ぎて居ますよ。

濱子　でもね——あゝ私、どうして岩崎家と血つゞきでない家に生れなかつたのでせう。

岩崎　あゝ、さうか成程、それですか、濱子さんもなかなか神經質だね。私は曾つて皆の前で血族結婚の非を云ひましたが、ありや、あの時の——何ですよ。私も、血族結婚の弊害論にかぶれて、さう信じて居たのですが、此頃私は親しいある博士について訊いて見ると、その可否必ずしも學問上から否認されて居るのではない。と云ふ事ですよ。ですから、あんな事でしたら、少しも氣にかけないで下さいね。濱さん。

（と、一彥思はず濱子の手を取らんとする時、濱子早くその手をあげて彼方を指して立上る）

濱子　まアごらん遊ばせ。あんなに大勢の人が踊つて居ますわ。本當に自分を忘れた樣に醉つて——

岩崎　さうです。自分を忘れる所に、すべての物の無我が

現はれるんです。戀なども。

濱子　一彦さん、少し歩きませう。

一彦　ねえ、濱さん。

濱子　何でございます。

一彦　わたしは今日、思ひ切つて――

濱子　私に――

岩崎　非常に眞面目にお話があるんです。それは、私の將來を左右するやうな大きな問題で、むしろ、御相談のしたい重大な事が――

濱子　あなたが眞面目なら、それだけ私だつて眞面目ですわ。

岩崎　（喜んで）それぢや、あなたは聞いて下さるか。ありがたう、實は――

（と、一彦口を開かんとする時、彼のお玉小原女の姿にて突如として現はれる。）

お玉　御前樣、お待ち下さいまし。

岩崎　おゝ、お玉。

お玉　あなたさま、うつかり御相談を遊ばしては、とんでもないことになります。

岩崎　だしぬけにお前は何と云ふ事を云ふのだ。お前は何の爲に、何の據り所があつてそんな事を云ふのだ。

お玉　濱子樣は、あなた樣を欺かうとなすつて居らつしやるのですよ。御自分の御結婚の叶はなかつた復讐に――

岩崎　なに、復讐！

濱子　お玉、お前は何と云ふ事を、氣でも狂つたのではないのかい。だしぬけに何處から出て來て何を云ふのです。一體お前は一彦さんの前へ出て來られた身體ではないぢやないか。

お玉　えゝ、それはよく分つて居ります。けれども御前樣の面目を思ひますと、そんな事を思つては居られませんから厚顏しうございますが、かうして參つたのでございます。

濱子　いゝえ、お前のやうな厚顏しい女は、きつと何か企んで云ひがゝりを云つて居るんです。一彦さん、そんな者の云ふ事はお取上げ遊ばしては、それこそ大變でございますよ。

お玉　お孃樣、それではあなた、御前樣があなたと假に婚禮なさると仰有つたらば貴女は、きつと、その通りになさいますか？

濱子　えゝ、私の望みです。立派に一彦さんと結婚して見

せます。

お玉　あなた、そんな事を仰有つて、御前様と婚禮遊ばしては申譯のない方がございませんか？

濱子　そんな事を云ふのが狂人の證據です。私には何處にも申譯ない人などありません。

お玉　よろしうございます。貴女がそんなに仰有るんでしたらば、私、あなたにお目にかけるものがございます。

（と、帶の間から彼の契約書を取出す。濱子驚いて寄ると、お玉は隠す。）

お玉　さ、この書付はどうしたのでございます。どなたとどなたが、お約束遊ばしたのでございますか？　御前様これを御らん下さいまし――

岩崎　おゝ――。おや濱子さん、あなたは本庄君と約束を。

お玉　御前様、御わかりでございますか。それを御らんになれば、何も彼もお分りでございませう。奥様の御身の疑ひもおとけになりましてございませう。濱子さんは、今日と云ふ今日こそ、貴方に復讐をなさる、お企みだつたのでございますよ。

岩崎　さうか――濱さん、あなたと云ふ人は。

（と口惜しきこなし。）

濱子　私は存じません。出した覺えもございません。それこそ、きつと何者かから私が復讐されて居るのでございます。

お玉　まア、あんな事を――それでは電話をかけて本庄さんと云ふ生きた證據をお呼び申しませうか。

濱子　なんですツて。

お玉　ですから。

岩崎　お玉、もういゝ。明らかに事の眞相は解つた様な氣がする――

濱子　一彦さん、私は飽く迄も此れには覺えのない事ですから私は、あなたのお裁きを受ける事は出來ません。私は、あなたに、あく迄も抗議します。

（と、堪へ得ざるが如く小走りに去る。兩人見送りて後。）

お玉　御前様、どうか私からお願ひいたします。あの罪も咎もない奥様をお邸へお戻し下さいますやう――

岩崎　いや、それは出來ない。雅を邸へ呼戻すには阿母様や親類の了解を得なければならない。殊に聞くとあれの行方が分らんと云ふ事ぢやないか。

お玉　御前様、あの奥様は私の宅にお出なのでございます。

岩崎　なに、雅がお前の處に？
お玉　はい。先頃はからず、奥樣が、あの疏水の處から身を投げようと遊ばす所を。
岩崎　えッ？
お玉　神樣のお助けとでも申すのでございませうか。私が通りかゝつてお助けいたしましたので、まア本當にお危い所でございました。只、濱子さまのこの事の手證を押へた上でと今日までおかくしして居りました。濱子さまは御前樣と御結婚の出來ないのを、あく迄根に持つて居らしつて御前樣の御心をすつかり引つけた上で、見事突き放して御自分がおうけなすつた痛手の復讐を遊ばさうとなすつたので御座いました。
岩崎　さうだつたのか。いや雅子は、その犧牲になつたと云ふのだね。
（此の以前より修三と雅子出て來りて木蔭に居る。修三この時、進み出て。）
修三　どうです。君も目が覺めたかね。
岩崎　あゝ、小泉さん、
修三　いや君ばかりぢやない。この小泉もすつかり今までの事は目がさめたのさ、處で私から改めて一彥さん、あんたに告白いや、お話をせんけりやならん事がある。
岩崎　告白？
小泉　實は雅さんの居所を發見した上で、一緒に行つて色色と私の懺悔をしようと心を定めて雅の行方を極力、探して居たんだが、どうしても解らんので私は益々良心の苛責にさいなまれて、苦しみ抜いて居たのぢや。すると昨日の朝お玉から電報で知らせて來たので早速馳けつけて雅さんとも會ひ、又お玉から委しく總ての消息を承知して雀躍して今日を待つてお玉と手筈を定めてさつきから待つて居たんぢや。
岩崎　そしてあなたは只今、懺悔と仰有いましたが、それはどう云ふ事なのですか
小泉　一彥さん、私はあんたを欺いて居た。又それにも懼らずして雅さんを苦しめて居た。つまり岩崎家に一大波瀾を起さしたのは實に私なのぢや。雅さんを今日のやうな悲しい運命に落し入れたのも皆私一人の罪なのぢや。
岩崎　解りました。しかしそればかりでは未だ、はつきり會得が行きません。具體的に其の理由を云つて頂きます。
小泉　先づ第一にあんたにお話する事は、あなたが結婚の當時、雅さんにやつた指輪の事ぢや、あの指輪は實は茲

に居る、お玉が盗んだとあるが、ありや實際は此の私が雅さんを脅迫して奪つたのぢや。雅さんはお父さんに差上げたと云へばそれで濟む譯であるが、それを云ふ事が出來なかつたのは、つまり一つの祕密があるからぢや。即ち大きな弱點がある。私は雅さんの弱點を握つて居る所から、それにつけ入つて實に人間にもあるまじき强盗にも等しい所業を以て屢々雅さんを苦しめて居たんだ。それを、お玉が見るに見かねて自分がその罪を被て岩崎家を去つたのぢや。私は今日に至り一婦人の美しい心に對しても實に恥入らんければならん事である。第二には雅さんが荒神橋の附近である男と會つて居たと云ふ事であるが、これが最もあんたを疑ふ原因となつて居るやうぢやが、成程、その當夜雅さんはある者と會つて居た。それは事實ぢやが、ありや密夫でも何でもない。云ふ迄もなく雅さんには、實父もあれば、實母もある。故あつて雅はその實父と會合して居たのぢや。尤もあの折には夜でもあつたし、或は何者かと見誤りもあるかも知れん。尤も雅が實の父親に會つたと云へば、それも濟む譯ではあるがこれにも云ふに云はれぬ弱點がある爲ぢや。雅は、その弱點の爲に御隱居には疑はれ、又最も賴りに思ふあんたにまで疑はれたのぢや。雅も思案に餘つて死を決しようとまでしたり、今自分が死ねば、祕密は餘計あらはれる樣になり、あなたの御名前にも關はる事と云ふので死を思ひ止つて見たり、死ぬに死ねぬ思をして田中村の百姓家にかくれて居たが、心の狹い女心から發作的に死なうとしたのを、お玉に救はれたと云ふ譯ぢや。

岩崎　そ、そしてその弱點と云ふのは？　どんな事なのですか。

小泉　さ、その弱點ぢや、それをお話しする前にあんたにきいて置きたいのは如何なる弱點であつても、又雅は如何なる運命の下に支配されて居る者でも、人妻として、いや、あんたの妻として一點の恥づる行がなかつたらば今まで通りあんたの妻としてくれるか、どうか、それを確めて置きたいのぢやが――

岩崎　そりや無論雅の行に一點やましい行のなかつた事が立證されゝば、私として考へ直さなければなりません。

小泉　さうですか、わかつた。もし雅の實父が立派な財産家であつても、その兄弟に不屆至極な者があつて、それが原因で親や他の兄弟が世間へ顔出しの出來ないやうな身の上たつたらばあんた、どうなさるかな。

岩崎　あなたの云ふやうに雅さんの家族一同が一人の不良分子のために世間から入れられないと云ふ様な場合は實に同情に耐へないものであるし、さう云ふ者ならば、私は良人として、唯一の慰安者となつてやりませう。

小泉　さうですか。……一彦さん、あんたは彼の日露戰爭の時に我軍隊の秘密を敵に賣した、中野某を御記憶ですか。

岩崎　覺えて居ます。

小泉　その中野某は、即ち雅さんの兄に當る人なのぢや！

岩崎　えッ、ではあの……

小泉　さうぢや。一彦さん、雅はそう云ふ境遇の女なのぢや。

岩崎　小泉さん。

小泉　いや一彦さん、我から改めて頼む、どうか雅を元通り妻として戴きたいのぢやが、この通り凡てをお話ししたのぢや。秘密と云ふ秘密を凡て、打明け、心から、心のありのまゝ、あるまゝを見せたらば、あなたもきつと以前の事は、お許し下さる事と思うて居ります。私の方から云へば隨分勝手な話ではあるが、御承知下さるでせうな。

岩崎　……

小泉　一彦さん。

岩崎　……

小泉　一彦さん、では。あなたは不承知だと仰有るのですか、御許しは下さらんと云はれるかな。

岩崎　御返事はし兼ねます。

小泉　ど、どうしても。

岩崎　いや、もつとあからさまに云へば、貴方の娘の雅子は、斷然離別しませう。

小泉　えゝ？

（と、暫く考へてから深く意を決したものゝ如く、去らんとす。）

雅子　もし、お父様。（と縋つて）あなた、どうかそんな御短氣を遊ばさないで下さいまし。私はもう何事も諦めて居るのですから――

小泉　雅さん、お前にさう云はれると、私は一層この身を斬られるよりも辛いのぢや。放せ！　放してくれ！　もう死んで謝罪するより他に道は無いのだ。

（と雅子を振り切つて去らんとす。）

岩崎　小泉さん、待つて下さい。

小泉　それぢや一彦さん、私の要求を入れて下さるか。

岩崎　それを答へる前に、私からも要求する事があります。

小泉　ど、どんな事ですか。

岩崎　どうか今日限り、あなたは雅子と縁を切つて下さい。

小泉　よろしい。立派に切りませう。立派に他人となりませう。

岩崎　それでは改めて、私は雅さんを再び妻として迎へませう。私の妻として以前通りになりませう。

小泉　おゝ、では承知をしてくれましたか。ありがたう。ありがたう／＼（と泣きつゝ）雅さん、一彦さんは再びお前さんを家庭に入れる事にして下さつた。承知をして下さつた。これでやつと私の罪も償はれたやうぢや。どうか、これだけでは済むまいが、私の不始末は許して下さい！

（と、雅子の手を取る。雅子は修三の膝に縋り、よゝと泣く。お玉も感激して泣く。）

小泉　雅さん、何を泣く。

雅子　はい――

小泉　さうだ、一彦さん、あんたに逢はせる人がある。又是非逢つて貰ひたい人がある。鳥渡待つて下さい。

（と逸散に走り去り、間もなく中野清助の手を取つて出て来る。）

小泉　おい、そんなに尻込みをしなくとも好い、あそこに居るのが一彦さんぢや。岩崎子爵ぢや。そんなに逃げんでも好い。それよりも私の言ふ事を、よく聞きなさい。今、私は何事も一彦さんの前で打明けたのぢや。そして小泉修三の娘雅子は離縁されたのぢや。

中野　では、あの、やつぱり御離縁――

小泉　まア後を聞け！　修三の娘雅子は離縁をされたが、中野清助の娘、雅子は改めて一彦さんの妻ぢや。一彦さん、これが雅さんの實父です。どうか會つてやつて下さい！

（と、清助を押してやる。清助は、おど／＼して恐縮する。）

岩崎　お父様、どうぞ、よろしく――（と頭を下げる）

中野　あゝ、勿體ない。

（と、清助は地面へ手をつく。修三は清助の肩を叩いて。）

小泉　おいしつかりせんか！

（と、清助は起上り、お玉の前へ行き。）

中野　お玉さん、私は何と云つて、あんたにお禮を云つていゝか、一生私共親子の者はあんたの御恩は忘れませんありがたうございます。

お玉　いゝえ、奥様、これで私の御恩返しは無事に濟みました。皆様、御身體をお大切に、これでお別れをいたします――

（と靜かに去る。）

――幕――

増補訂正

渦巻（五幕八場）

渡邊霞亭原作

序幕

東大路數江の居間

登場人物

東大路高昌
數江　夫人
お辰　同人乳母
金杉哲夫　顧問
早苗子　同妻
政子　高昌妾
東大路眞造　高昌從弟
早川泰彦　お辰弟
お兼　喜美子ノ乳母
お靜　上女中
お玉　同
お時　同
彌作　下男
お菊　女中

時　晩春夕暮近き頃

場所　京都七條

古き舊家、錆のある上品な建物常脚二重舞臺の數寄屋の座敷を中心として、上手の方へ折曲げて本縁つゞきの廻り縁となり、此れを傳うて母屋へ行く、上手の方には稍々緑の色濃くなれる蔦にて覆はれたる古き母屋の横手が見える、前側より下手一體は前栽、下手位置よく冠木風の柴折門を設けあり。

幕明く。

ト、蓄音機のレコード長唄『鶴亀』がかゝつて居る。上女中お靜お時はレコードを取り替へるべく控へてゐる。下手の方に下男彌作爺は竹箒を携へて、うつとりとレコードを聞いて居る。上手の縁に離れて上女中お玉

は內證に手紙を讀んで居る。レコードを取り替へんとして不圖お時は上手の緣を見て、お玉の手紙讀むを發見してお靜の袖を引く。

彌作　(關係なしに感歎して) 不思議なものだ、どうしてまア人間の聲がそんな板に喰込むかな、長命すると珍らしい事ばかり聞いたり見たりするもんだ。

(お靜立上つて、お玉の方を見る。)

お靜　お玉さん、何處から來たお手紙？

お玉　(吃驚して隱す) あの、阿母さんのところから來たんだわ。

お時　あら、(と頓狂に叫んで) いつか阿母さんは死んで五十六の阿父さんが伏見にゐるつて云つてゐたぢやアないの。

お玉　それは義理の阿母さんのことよ。生みの阿母さんは牧方にゐるんだわ。

お靜　さう。お玉さんの云ふ事は、時々かはるんだもの妙ね。

お玉　えゝ、どうせさうよ。私は誰かのやうに、噓つきだから。

お靜　オヤ、誰かつて……誰の事、私はまだあなたに噓を云つた事はありませんからね。

お玉　私はお前さんだとはつきり云ひましたか、隨分嫉り氣ね。

(ト、お玉は中腹の體にて去らんとする、彌作はつかつかと五六歩、追ふ。)

彌作　お玉さん、鳥渡待つておくれ。俺はお前さんに聞かうと思つてゐた事があつたつけ。

お玉　どんな事……？

彌作　お前さんだつて奧樣が御心配をなすつてゐらつしやる事を知つてゐなさるだらう。そら眞葛ヶ原にゐるお手掛の一件をさ、能く知つてゐる筈だ、それだのにどうしてお前さんは彼處のお女中と仲を善くしてゐるんだ、俺は變に思はれてならねえんだよ。

お玉　何を云つてゐるんだよ、私はそんな人は知らないよ。何か勘違ひをしてゐるんだわ。

彌作　そんな事があるもんか、今日もお前さんは門の前で、眞葛ヶ原のお手掛の家にゐる年增の女中とヒソ〳〵と內證話をしてゐたんぢやねえか、俺ら丁と見て居たよ。

お玉　まあ、あんな事を云つて、……隨分ね、だから奧樣してゐるなんて云はれるんだわ。(と又去らんとする)

お時　お玉さん用があるのよ。
お玉　何さ。(佛頂面)
お時　さつき、お前さん上の二千七百二十番を呼び出して
ゐたわね、上の二千七百二十番、あれは何處の電話番號。
お玉　御幸町の悉皆ぢやないの。
お時　さう、おみよさんと云ふのは、悉皆屋のお内儀さん
なの。
お玉　妙な事ばかり聞くのね、私だつて悉皆屋くらゐの親
類は持つてゐますよ。
(靜かに寄りて、お玉の油斷を見澄してゐたるお靜は
行成りお玉の袂をおさへて以前隱せる手紙をとらんと
する。お玉は驚きてとらせじと爭ふをお時もお靜に手
傳つて遂に手紙を奪ふ。お玉は奪ひ返さんとするをお
時はお玉をおさへる。)
(上手の母屋より東大路夫人數江の乳母なるお辰來り
て止める。)
お辰　何をしてゐるんですよ。そんな大きな聲を出して…
…お前さん方は奥樣がお留守だと直ぐにいさかひばつか
りしてゐるのね、困つた人達だ。
(お玉は故意に聲を上げて泣く。お靜とお時は顏を見
合せて會釋する。)
お時　ねえお靜さん、あれなんだもの。
(譯の解らぬ目の暗示。)
お靜　ねえ、お時さん、これが何よりの證據だわ。
(ト手紙を示す。)
お辰　その手紙は何です。誰の手紙なんですの。
お靜　婆やさん、此手紙を内證に貴女が御覽になつたら私
達がどうしてゐたか、しつかり解るんです、ねえお時さ
ん。
お時　ねえお靜さん。
お辰　變な事ばつかり云つて……。(手紙を受けとらんと
する)
(お玉は顏を上げて、手紙を奪ひ返さんとする。)
お辰　お玉さん、お前さんの手紙ですか。(と隱して爭は
せず)
お玉　返して下さい、牧方の阿母さんの處から來た内證の
手紙ですから。
お辰　解りました、私は此手紙は見ないでお前さんに返し
ませう。けれども私には解つて居ますよ、此手紙を見た
ら定めし、お前さんは奥さんに申譯がないでせうから返

します、しかし、お前さん此家に居る奉公人は皆馬鹿ばかりと思ふと、大變な間違ひですよ、やつぱりお前さんのやうに眼も耳もあるんですからね、たゞ愼んで居るだけの事です、御存じのないのは奧樣ぐらゐのものなんですからね。（と手紙を返す）

お玉　皆、私ばつかり、いぢめて……？

（トお玉は半ば泣いて小走りに去る。）

（一同顏を見合せる。）

彌作　彼奴は眞葛ヶ原の廻し者ですよ。俺はとつくからさう睨んで居たんだ。

お靜　えゝ、さうですとも……私達の隙さへ見りや、眞葛ヶ原の御妾宅の方へ電話ばつかりかけてゐるんですよ。

お時　あんな憎らしい、人つたらありやアしないわ。媼やさん一日も早くお暇を出すやうに奧樣に仰しやつたらどう。

お辰　そりやア解つて居ます、けれども暇を出すと云つても奧樣の手前、譯がなくてはあの人を暇出すことも出來ないぢやありませんか。しかし、今日此頃の奧樣のお心の裡を知つてゐる私には、どうして其の譯が奧樣に云へるもんですか、どんなに奧樣のお心を痛めるか、私は此上に奧樣のお心を狂はさせ申す事は、迚も出來ませんからね。（トホロリとなる）

彌作　（至極同感の體）全く其通りでございますな。どうして又旦那樣はあんな立派な奧樣をお嫌ひなすつて、お手掛け狂ひなどをなすつてゐらつしやるのか、俺ら旦那樣のお心がさつぱり解らねえ。

（お靜、お時も同情の涙に咽ぶ。）

（折から外に自動車の轢る音と喇叭の音。）

お辰　おや、奧樣がお歸り遊ばしたに違ひありません。

（トお辰、お靜、お時の三人は緣を廻つて母屋へ。彌作は下手の門の外へ去る。）

（間もなく母屋よりお辰小走りに來りて、片をつけて座蒲團を敷く。東大路夫人數江先きに從弟の東大路眞造來る。眞造は緣に立つて庭前の風致を見る。）

眞造　（獨語の如く）別に變つた處はないが……やつぱり此處は懷かしいな。

お辰　さ、おあて下さいまし。

眞造　媼や、お前さんも別條がなくつて何よりだ、今も數江さんと自動車の中で、お前の噂をして喜んでゐた處だつた。

お辰　有難う厶います、貴所樣もお變りもございませんで何よりでございます、それにおふとり遊ばしました事、ね奥樣。

數江　眞實ね、私、停車場で見違ひした位だつたもの。

眞造　（浩然と笑つて）憎まれ者、何とやらでな、とに角病氣までが俺に愛想をつかしてゐるんで、却つて喜んで居る、何しろ一貫目位ゐは肥つたかね。

數江　しかし、奥樣、私、貴所がこんなに早く歸つていらつしやるとは、夢のやうですわ。

（母屋より以前のお靜と、お時は紅茶を運んで來て靜かに去る。）

眞造　爺や、お前は何時見ても若いが、幾つになつたつけね。

お辰　もう貴所、五十でございますよ、駄目でございますわね。

眞造　なか／＼どうして……人間の働き盛りは五十越してからさ、これからだよ、ね、數江さん。

數江　ね、眞樣。

眞造　馬鹿に放まつたね。

數江　神戸から直に此方へいらつしやつたんですか。

眞造　何處へ寄り道なんかするもんか、何しろ懷かしい數さんの顏が見たいんでね。

數江　私も貴所のお歸りが、何だか待遠しかつたんですよ。

眞造　そんなに待ち遠しかつたんですか、まるで僕が高昌君の位置にあるやうだな。（と笑ふ）

數江　でも……私は惡い夢ばつかり見て居たんですから。

眞造　不思議だね、僕も外國にゐる時から、數さんの事をよく夢に見たよ。さう／＼殊に不思議なのは、神戸へ來る船の中で見た夢だ。山も島も何にも見えない、太平洋の眞中で、數さんがやまのやうに、くづれて來る浪の間に浮きつ沈みつしてゐるぢやアないか。

數江　まア私が……（と膝を進める）

眞造　そして流れて來る板に縋らうとするを恐ろしいぢやアないか、數さんの後から繪にあるやうな惡魔が眼を光らせて、數さんの襟をとつて渦卷く荒浪の中へ沈めようとして居るんだ、僕は船のデッキの上からそれを見てゐて、此れは大變だと思つて、我身を忘れて渦卷く浪の中へざんぶとばかり飛び込んで見たんだ、しかし其時は最う遲かつた、數さんの姿は浪の間へ沈んで見えなくなつて居た、僕はしまつたと思つて、あらん限りの聲を振り

絞つて呼んだが、眼が覺めたんだ、妙な夢ぢや、ないか。

數江　眞實ですわね。（ト内面明かに聞える）

眞造　れ數江さん、僕はそれから考へたんだ、こりやア何か數さんの身に變つた事でもあるんぢやアないかと思つて實は心配して來たんだ、それが凶事でなく、而も吉事だつたから意外だね、いや數さんが高岩君と結婚をして、幸福の家庭をつくつてゐられると云ふ事は、僕としてこんなに喜ばしい事はないんだ、改めて僕はお祝ひを述べよう、いやお芽出たう。しかも阿母さまになられて、こんな芽出たい事はないね。

數江　まア、眞樣はいつも陽氣で……？

眞造　いや、數さんだつて隨分以前は、陽氣……いや、寧ろお轉婆に近かつたからな、そら覺えてゐるだらう、確かに嬢やも一緒だつた、岡崎公園で、市立各學校の陸上競技があつた時、學校へ行くのを忘れて、到頭一日、陸上競技を見てしまつて、一緒に家へ歸ると、門前でワツと泣き出した事があつた。僕はびつくらして、どうしたんですと聞いたら、無斷で學校を休んでしまつたから、キツとお父さまに叱られると云つて、どうしても家へ入らないぢやアないか、その時僕は嘘を云つて、小父さんを胡麻化してしまつた事があつたつけ、あの時僕は何とか云つたね、數さんは最う忘れたらうね。

數江　忘れませんわ、覺えてますとも……？

眞造　覺えてゐるもんか、忘れましたと、その通り顔に書いてあるぢやアないか。

數江　いゝえ、覺えてゐます、私、此事は一生忘れません、と云ひましたもの。

眞造　偉いね、矢つ張り覺えて居たねえ、而し忘れて居る事がある、最う一つ大變な事を忘れて居る。

數江　あら、何でございます。

眞造　さ、何だらう、嬢や、お前は知つて居るかい。

お辰　何でございましたらうね。あゝ解りました解りました、そら眞樣と奥樣と、摘み草にいらつしやる時に、奥樣が長蟲を御覽なすつて、お逃げ遊ばしました、その時に眞樣が面白半分に、その長蟲をステツキで打ち殺して奥樣を目蒐けて、ポンとお投げ遊はすと、折惡しく長蟲は、奥樣のお顔へ……奥樣は、ワツとお泣き遊ばして、小石を拾つて眞樣に投げつけるやら、草を摘んで投げつけるやら、まるで狂人の沙汰でございました。そして一番お終ひに奥樣のお投げ遊ばした小石が、眞樣のおつむ

にポカンと打突かつたもんですから、眞様は又ワッとお泣き遊ばして、目茶くちやに奥様を目蒐けて、武者振りつきますと、お二人とも到頭重ね餅になつて、お轉び遊ばした事もございました。あの時の事はまだ私の目の底に殘つて居りますんですよ。

眞造　（又浩然と笑って）面白かつたね、何しろ二人共に腕白盛りでしたから……しかし、媼や、最う一つ面白い事があつた。そら數さんとお前と僕とね、裏の鞦韆で遊んで居ると、繩が切れて二人共に落こつた事があつた、あの時に數さんは吃驚して氣絶をしてしまつた。それを僕はお前と一緒に、いつも來る醫者の家へ連れて行つて、應急な手當をして貰つて、數さんの家へは歸らないで、數さんと二人で僕の家へ三日も隱れてゐると、醫者が何にも知らないで、數さんの家へ見舞に行つて、すつかり事がばれて仕舞つて、僕がうんと叱られた事があつたつけ。さうしたら數さんは、眞赤になつて怒り出して、眞樣を叱るならば、最う學校へは行かないつて、駄々をこねて呉れたんで、僕が叱られずに濟んだ事があつた。あんな時の事を思ふと、隨分僕も亂暴だつたよ、數さんもお轉婆だつた。

數江　全くですわね。

眞造　又、あんな腕白な時が來ると面白いんだがな。

數江　私もあの時のことを思ひ出すと……無暗に懷かしいやうな氣がします。

（ト、互に顏を見合せて、胸の裡の或物を表示する。直に眞造は胡麻化してカラ〳〵と笑ふ。お辰は横を向いて悲痛な心持ある。彼方に乳呑兒の泣く聲。數江は立つて行くと、母屋より女中お菊は乳呑兒喜美子を抱いて來る。）

お菊　そら〳〵お孃樣、阿母さまでいらつしやいますよ。

（數江は捨臺詞にて、喜美子を受取つて、宥め賺す。お辰は紅茶の冷たくなれるを見る。）

お辰　お菊さん、お客樣に……別に紅茶を持つて來て上げて下さい。

（お菊は肯いて、紅茶の茶碗を運んで去る、數江は子守唄を微かに口吟んで縁を靜かに歩いてゐると、眞造は其後から、喜美子の顏を覗きつゝ。）

眞造　おゝ、好い兒だ〳〵ばあ。

數江　あら、最う眠つてしまひましたわ。眞實に子供の間は神樣のやうだと申しますが、全くですわね。

眞造　能く似て居るね、僕は數さんの赤ン坊の時の寫眞を見た事があつたつけ、ちやうど、其時の寫眞にそつくりだね。

數江　喜美子さん、此小父さんがね、私とお前さんと、そつくりですつて。……あら、眞樣、御覽なさい、寢ながらニコ／＼笑つてゐますわ、今のことが解つたのかしら。

（眞造は捨臺詞に、數江の手より喜美子を受取つて、いろ／＼と可愛がる仕打。）

數江　眞樣、そんなに手荒になさると、眼をさましますから。

眞造　大丈夫だ／＼、全く可愛いよ、孃さん貴女のお名前は何と云ふのです。

數江　喜美子と申します。

眞造　好い名ですね、喜美子さん、貴女は大きくなつたらば、どんな人の奧樣にお成りですか。

數江　小父さんのやうな立派な方のお嫁樣になりますわね。

眞造　いや、こんなやくざ者などは、眞平御免ですね、それこそ、國家有益な樞要人物の奧樣になるんですよ。品行の方正な、純愛を以つて妻を待つて吳れる、飽までも家庭的な紳士、宜うござんすか、解りましたか、おゝ笑つてゐる／＼。數さん御覽、喜美子さんは、解りましたと云つてゐる、ハ、、、、。

（ト、聲高く笑ふ、數江はお辰と顏を見合せて横を向いて、ホロリとなる。）

眞造　（素早く見付ける）數さん、どうしたんです、貴女お泣きなすつたね。

數江　いゝえ、何でもございません、私、どうして泣いたりするもんですか、貴所が芽出たく御歸朝なすつた日ですもの、ね、孃や。

眞造　さうですか、喜美子さん、阿母さんは妙ですね。

（ト、眞造は靜かに座敷を歩く。）

（…………………………）

（此時、母屋より東大路家の顧問役なる金杉哲夫來りて立つて、凝乎と見る。）

お辰　（金杉を見て）あ、金杉樣。

（ト、眞造は金杉を見て、喜美子を數江へ渡す、金杉は丁寧に會釋をして、下手の方へ行きて坐る、お辰は座蒲團を宛てがふ。）

金杉　いや、お構ひなく、お邪魔でございませんでしたら

うか。

數江　いゝえ、金杉樣、貴所も擧てお聞きでしたらう、御本家の眞造樣でゐらつしやるんですよ。

金杉　さうでございましたか、これは存じませんもんでしたから、失禮を致しました。私は金杉哲夫です、どうぞよろしく。

眞造　さうですか、僕こそねつから存ぜんもんだから失禮をしました、やつと今日歸朝をしてね、懷かしかつた御當家を、訪問したんですよ。

數江　眞樣、宅の顧問をしてゐらつしやる方なんですよ。

金杉　御消息は得度奥樣や媼やからも伺つて居りました。いや私共も一日千秋の思ひで、貴所の御歸朝をお待ち申してゐましたので、……何しろ內地にゐるものは外國御留學の方に、お土產噺を伺つて新知識を獲るのを樂みに致して居りますから。

眞造　いや、我々のやうな、凡庸は駄目です、唯もう外國の風土に接して來たといふに過ぎないのですからね。

數江　あの、金杉さん、何か御用ではなかつたんですか。

金杉　はい、少し奥樣に御相談があつて……何です、御內密に、はい。

眞造　や、僕は馬鹿ですね、ぢや數さん僕は御遠慮をしませう。金杉さん、どうぞ御緩り。

金杉　失禮を致します。

（眞造は會釋をして去る。）

（お辰もつゞいて、喜美子を受取つて去る。）

（數江は膝を進める。）

數江　金杉さん、內密につて……どんな事なのでございます。

金杉　實に困り切つてしまひました。どうして御主人はあんなに、無理解に……いや何ですよ、あんな事を仰しやる方ではなかつたんですが、仍且嫉妬が手傳つてゐるのでせう。

數江　えッ、嫉妬……？

金杉　まるで言語道斷です、私は貴女に申し上げる丈けの勇氣もない位ゐです、ですから此際何事も申上げずに御當家から手を引きたいと思ひまして、御相談に參つたのです。

數江　では貴所が、顧問役と支配をおやめなさると仰しやるのでございますか。

金杉　さうするより外に詮方がありますまい。到底私には

御主人の御吩咐に服從して、御當家の支配は出來ないのですからね。

數江　けれどもそんな事になりましたらば、當家はどうなるのでございます。あの通り旦那樣は御不在勝ですし、關係の會社、銀行の事などは一切あなたが代つてお裁きなすつていらつしやるんですもの。どうか、私からお願ひ申しますから、最う暫く御辛抱下さいませんか、いつまでも旦那樣は、家を明けてばつかりは、ゐらつしやいますまい、キッと其内には、目が醒める時が參りませうから、ね、金杉さん。

金杉　奧樣、貴女は全く貞淑でゐらつしやる。御主人はどうして、こんな立派な方を……私は貴方のお身がお痛はしい、御主人が、あんなお心持ではお氣の毒でなりませんよ。

（ト、ホロ〳〵と泣く。）

數江　金杉樣、一體旦那樣はどんな事を云つてゐらつしやるんで厶います。

金杉　奧樣、御主人は貴女の貞操を疑つてゐらつしやるんですよ。

數江　えッ、それは一體どうしてなのでございます。

金杉　私は貴女に申し上げるのさへ、馬鹿〳〵しいのですが、併しそれが御主人の眞面目なお言葉なのですから、寧ろ反感が手傳つて參ります。どうでせう、貴女の貞操を疑ふ餘り、あのお孃さまゝで、疑つてゐらつしやる、喜美子は自分の子ではない、あれは東大路眞造と數江の間に生れた不義の結晶だと仰しやるに至つては、驚くの外はないぢやありませんか。

（數江は愕然。）

（お辰は座敷に入らんとして躊躇して再び、母屋へ小走りに去る。）

數江　（堰き上げる涙を拭いて）　金杉さん、旦那樣は眞實にそんな事を仰有つたんですか。

金杉　だから私は御主人に向つて無理解だ、沒常識だと無禮な事を申し上げてゐるんです。貴女のお身持には一點やましい所はありません、萬人それを認めてゐる、それに御主人のみが、さういふ非常識極まる事を仰有るのは、要するに嫉妬です、東大路眞造さんに對する嫉妬の蔭影です。御主人は一例を引いて斯う云ふ事を云はれました眞造の外國へ行つたは去年の春であるから、其時には數江の腹に既に眞造の因果の種が宿つてゐた、不埒極まる

數江は、その祕密を包んで俺と結婚をしたんだとね、私は決して信じませんよ。しかし御主人が然う仰有るのですから、私としては、どうする事も出來ないのです、どうか御主人の非常識なお言葉をお傳へする私の苦痛をお賢察願ひます。

（數江は感極まつて、ワッとばかり泣く。）

（母屋より以前の眞造とお辰來る。）

眞造　金杉樣、只今私は嫗やから聞きましたが……高昌君は僕と數江さんの間を曲解してゐるらしい容子だ、それは事實ですか。

金杉　事實でございます。

眞造　何、事實……好し、何處に高昌君がゐるんです、どうやら、嫗やに聞くと此頃は、眞葛ヶ原の妾宅へ沒頭してゐるさうだ、妾宅に居るんですか。

金杉　はい、御妾宅に居られます、而し此際貴所がお出でになつては、却つて御主人の感情を惡化するばかりで、奧樣のお身には一層御損です。どうか貴所は御主人の無禮をおとがめなく、飽までも御自重を願はしうございます。

眞造　しかし、徒に自重をしては、數さんの品性に拭ふべからざる汚點を貼すばかりぢやありませんか。いや、高昌君が僕と數さんの仲を曲解してゐるならば、それを辯解して釋然たらしめるのが、我々の立場として最も必要な事です。（立ち去らんとす）

數江　もし、眞樣。（と慌てゝ止める）

眞造　數さん、止めないで下さい。貴女はお互ひの淸淨な潔白な間柄を疑はれて心外だとは思ひませんか。二人の間に何處にやましい點がありますか、僕は飽くまでも、高昌君の誤解をといて、貴女を幸福な地位に置かなければ成りません。

金杉　新宅樣、お言葉の中ですが……御主人は嫉妬のために、頭腦が混亂してゐらつしやいます。然う云ふ時に貴所が、千萬言を費されるとも、却つて興奮の結果、嫉妬に嫉妬を重ねるばかりです、忌憚なく御主人を評すれば嫉妬のために常識を逸して、ゐられるのですから、其非常識の人に向つて、貴所が何を仰有つても、唯徒勞に終るのみで、何等の效果はございませんですぞ。

眞造　それぢやアどうすればいゝのですか、餘りに數さんが可愛さうぢやありませんか。

金杉　遺憾ながら御主人の自覺を待つより外に、最善の工

夫はございません。

眞造　それぢやア何時までも我々は、不義の汚名を着て、甘んじてゐなければならないのですか。

金杉　いや、必ず解ける時が參ります。不肖私の力でもきつと近い將來に於いて御主人に、誤解であつたと云ふ意志の表示をさせて、お目に掛けませう。それは私をお信じ願ひたいのです、誓つて私は其方法を講じます。

眞造　數さん、貴女はどうなさるんです。

數江　詮方がありません、私は金杉さんを信じて、私の身の振り方を、御相談いたします。

眞造　嬢や、やつぱり船の中で見た夢は正夢だつた。

お辰　私は……私は奧樣のお身の上がお痛はしくつて……

（とさめ〴〵と泣く）

金杉　奧樣、私は實は、一策を考へて參りました。御相談はそれなのですが、……如何でせう、御主人の方から恁うしろと命令的に、貴女に向つて仰有る以前に、貴女の方から病氣靜養と云ふ名義を以て、大津の御新邸へ、お越しをなすつたらばね、所謂孫呉の兵法で云ふと背水の陣を布くので、此方が御主人に何事かを考へさせないかと思はれますがな。

數江　貴所がさうした方が、私の身の爲めだと仰有るならば、私は大津の宅へ移つても、宜うございますが、此家へは桔梗ケ原の方が……？

金杉　さ、其邊までは御主人の心もはかりかねますが、併し物事に御熱中なさる御性格として、必ず醒める時もお早いと思ひますから、その時こそは貴女の最後の勝利ですよ。

數江　眞樣、どうしたものでせう。

眞造　僕として此際一言も貴女に申し上げたくはありません。お互ひは不義の汚名を被せられてゐる身です、唯いまわしは疑を解くことに努力をすれば好いのです。

數江　嬢や、私は此家を……此家を出て行くのは……？

お辰　お察し申します。定めし御心外でございませう　私だつて……私だつて妾風情に入り込まれては、口惜しくつて〳〵。

（ト、お辰も一緒に泣く。此時、母屋より女中お玉の案内にて、東大路高昌、酒氣を帶びて來り。）

金杉　おう、お歸り。

高昌　うむ、やつぱり眞造君が來てゐるな。俺の想像通りだつた、畜生。

（ト、高昌は嚇として數江の傍へ行きて、襟際を取つて引倒して打たんとする。お辰と眞造は吃驚して止める。）

（高昌は數江を打つ。）

（眞造は其手に取り縋る。）

眞造　高昌君、何をするんだ。君は何を以て僕と數さんの間を疑ふのだ、幼友達と云ふ丈で、微塵も汚はしい事のない事は解つてゐる筈だ。

高昌　離せ〳〵、今更そんな辯解を聞くものか。既に歸朝早々、何處へも寄らず、此處へ來てゐるのが何よりの證據だ、姦夫。

眞造　數さんがわざ〳〵停車場まで迎へに來て吳れたから一緒に寄つたんだ、それさへ疑ふ君の頭腦は、酒の爲めに混亂してゐるんだぞ。

高昌　馬鹿、俺は冷靜に判斷してゐるんだ、邪魔をするな、いたづら者を懲らしてやるんだ。

（ト、高昌は力任せに眞造を掻き退ける、數江を散々に打つ、お辰は捨臺詞にて止める。金杉も捨臺詞にて止める。）

眞造　高昌君、今に後悔するなよ、キツト謝罪をする時が來るぞ。

高昌　後悔も謝罪もあるか、もう今日限り此家へ出入をしてくれるな、絶交だ。

眞造　好し、きつとあやまらせてやるから、好く覺えて居たまへ。金杉さん、數さんの身は賴みます、どうか、味方になつてやつて下さいよ。

金杉　承知しました。

（眞造去る。お玉も續いて去り行く。高昌は眞造の去りしを見て又數江を踏み且つ蹴る。お辰は必死となつて止める。金杉も高昌を掻退ける。）

金杉　御主人、そんな手荒な事をなすつては可けません。奧樣のお身にお怪我でもあつたらば、どうなさるんですか。

高昌　金杉君、數江は離緣する。俺は一日でもこんな奴と此家にゐて、顏を見合はせて居る事は厭なのだ。

數江　私を御離緣……？

金杉　いや奧樣、御心配なさる事はありません。貴女は御當家の家附の娘、御主人は御養子、到底離緣なんて出來るものではありません。ですから私の申上げた通り、當分大津の御別莊の方へお出でなさい。

數江　は、はい。
（母屋の方より女中お静は乳呑子の喜美子の泣くのを宥めながら小走りに來る。數江はお静より喜美子を受取る。）
高昌（一層不快の顔をして）汚はしい、もうそんな兒の面を見るのも厭だ、やつぱり俺を慰めて呉れるのは政子だ、政子ばつかりだ……。
（と立上り去らんとす。）
數江　もし貴所、しばらく……。
（ト數江は高昌に取り縋るを高昌は強く振り切つて、跫音荒く去る。數江は追はんとして……躊躇。）
金杉　奥様、御主人の御近狀は全く愛情がつきるばつかりです、あんな方ではないのですが、仍且妖魔の爲めに、お心が亂れてゐるのでせう。それかと云つて、高昌さんを、御當家から離縁すると云ふ事も、訴訟を起さんければ出來ません。而しさうなると暗闇の恥を明るみへ出すやうなもので、御當家の內情が暴露します。而しそれは私としては絶對に出來ない事であるし、あなたもお好みではございますまい。唯此際貴女が何事も犠牲になるお積りで、我慢をなさるより外に、詮方がございません。

數江　犠牲……と仰有ると私は……？
金杉　只今申上げた通り、大津の御別莊へ御移りなさるのです。最う一つ、其處にお出での喜美子さんを私の手許へお渡し下さる事なのです。
數江　えッ、喜美子を……私、大津へ行つて居ろと仰有れば、生れた家のために參ります。けれども、また乳離れもしない此子を貴所のお手許へ預けて參る事は、餘りに慘酷ではございませんか。
金杉　成程、さうお思ひなさるのも御尤もです。而し奥様、御主人はお孃さまを、飽くまでも不義の結晶と信じて居らつしやるんです。そのお孃さんが、貴女のお手許にある間は、到底御主人の疑は解けませんよ。お孃さんさへ、貴女の身から離れて私の手へ移ればよし御主人は不義の兒と信じてゐても、貴女の愛がお孃さんから離れて行くものとお思ひなさるんです。其處に御主人と貴女と、再び御融和なさる、一道の光が輝いて參ります。殊に御主人は物事に熱中なさる御性格ですから、恁ういふ個性の持主は、必ず醒め易いものです。キット近い將來に於いて、御寵愛の政子さんから離れて、再び貴方に愛が復活して參ります。私は其時までお孃さんをお預りをして立

派に御養育いたします。既に私は生みの子を亡くした乳のある、適當な乳母も物色して、探當てゝゐるのです。決して其點は御心配は要りません、如何です、爾うなさいましては。

數江　それでは、私、此家も追はれ、又、可愛い喜美子とも別れなければならないのでございますか。

金杉　定めし、お辛いでせう、御苦痛でせう。而し犠牲的精神の美しい點はさう云ふ處にあるのです。何事も御生家の爲めと御觀念下すつて、切に御願ひ致します。

數江　喜美子。（と凝乎顔を見て）お前も私もどうして恁う、不幸せなのでせうね。

お辰　奥樣、私はまるで此胸がつぶれさうでございます。何といふことでございませう。（とさめ〴〵と泣く）

數江　爺や、もう何事も平和に納まるのですから、さうするより外に詮方がありません。犠牲と云ふものは自分の感情や、氣持をおさへて無事を望む心の影なのですからね、私は生れた家のために、可愛い喜美子のなめに、金杉さんのお言葉に隨ひませう。

金杉　奥樣、よく御決心下すつた。では私、早速乳母を連れて參りますから、お待ち下さい。

（ト、金杉哲夫は去る。此時、下手の庭前より私かにお辰の弟なる、早川泰彦來る。）

泰彦　姉さん。

お辰　おゝ泰彦、まアだしぬけにこんな處に入つて來て、どうしたのです。餘り失禮ぢやありませんか。

泰彦　その點は幾重にもお詫びします。しかし、私は一大事を聞き込んで來たので、無禮も忘れて參つたのです。

お辰　どんな事です、一大事つて……？

泰彦　お宅の御支配人は確かに金杉さんと仰しやるのぢやございませんか。

お辰　えゝ、さうですが、金杉さんがどうしたのです。

泰彦　やつぱりさうですか、畜生ッ、ありやア大惡黨ですよ。彼奴の女房は、御主人の妾になつてゐる、藝妓上りの政子の妹なんです。

お辰　えつ、金杉さんの奥さんが、お妾の妹……まあ。

數江　それは眞實ですか。

泰彦　奥樣、御挨拶は後に致します。私は姉からお聞きでせうが、レストラントのボーイをして居りますが、今日計らずも私の働いてゐる、萬養亭の談話室で、御主人と支配人の金杉と妾と、金杉の女房が、ヒソ〳〵と相談を

してゐるを、私の朋輩のボーイが聞いて、私に教へて呉れたのですよ。

お辰　まア、それぢや金杉さんも、其相談に預かつて……奥様、やつぱり金杉さんは、貴女のお味方でなく、お妾の組だつたのですわね。

數江　嫗や、私は欺かれました。（と悲痛な思入れ）

泰彦　奥様、決して金杉をお信じなすつては可けませんよ。どうやら相談の要領では、金杉が主謀者となつて、貴女を巧みに欺いて、御當家から追拂ふ、計略らしいのです。

數江　どうしよう、私はもう金杉の云ふ通りになる事を承知したのだけれども……？

泰彦　構ひませんから破約なさるのです。最う恁うなれば、私はボーイをやめて姉さんと御一緒に、奥様の御味方となつて働きます。

お辰　泰彦、どうかさうしておくれ、奥様のお味方は私とお前ばかり、後の人は皆敵なのですからね。

泰彦　承知しました、及ばずながらも、努力しませう。姉さん、私はこれから、立命館大學の法律の先生の處へ行つて、法律上の知識を借りて來ます。そして奥様をお救ひ申し上げる事を相談して來ませう。

お辰　どうか、さうしておくれ。

泰彦　奥様、御免下さい。

（ト、泰彦は小走りに去る。）

（再び金杉哲夫は乳母お兼を伴ひ來る。お兼は椽の端に坐る。）

金杉　奥様、乳母を連れて來ました。

數江　金杉さん、私はもう大津の別莊へも參りません、喜美子も貴所のお手許へはお渡し申しません。

金杉　それは又何故ですか。

お辰　金杉さん、今私の弟が來て貴方が萬養亭の二階で旦那様や、お妾と御一緒に惡い御相談をなすつた事を聞きました。貴所は奥様のお味方ではなく、お妾の味方だつたのです。

金杉　はゝあ、成程、それでお約束を破ると仰しやるのか、成程、しかし私は御當家の支配人ですぞ、顧問役ですぞ。その支配人が一旦奥様とお約束した事は、無暗に破られては、私の職分が立ちません。私は木偶ではありません、生きてゐる人間だ、奥様貴女は人間の私を愚弄なさるのか、それならばそれで私の方にも相當の工夫がありますぞ。

數江　御工夫と云つて貴所は……？

金杉　貴女と眞造さんと不義をしてゐると云ふ事を世間に暴露します。訴訟を起しても貴女を當家の籍から除くのです。貴女は東大路家の醜體が、世間へ赤裸々に暴露をしても、私とお鬪ひなさるのか、どうだ。

お辰　奧樣、私、弟の後を追かけて行つてつれて參ります。お待ち下さいまし。（と立上る）

數江　綱や、お待ち。（とおさへる）

お辰　奧樣、こんな時にお心が弱くつては不可ませんよ、しつかり遊ばせ。

數江　私は……私……やつぱり金杉さんのお言葉に隨ひませう。

お辰　まア、奧樣貴女は……？

數江　一旦決心した事です。私は血で血を洗ふやうな爭ひ事を裁判所でする事は好みません。生れた家の內情を暗から明るみへさらけ出して、系圖の正しい東大路の家へ汚れを貽す事は出來ません。これが私の持つて生れた運命でせう。

お辰　奧樣、何と云ふお美しいお心でせう。もう私は……私……（とさめ〲と泣く）

金杉　それぢや奧樣、さつきのお約束を御履行下さるんですね。

數江　犧牲でございました。

金杉　いや、それでこそ、家附のお孃御と云はれるのです。お兼とやら奧樣へ御挨拶をなさい……おいそんな處に居ないで此方へ入ひんなさい。（と云ひ捨てゝ下手へ去る）

お兼　はい。お初にお目にかゝりますが、どうか宜敷お願ひ申します。

（數江はお兼の顏を見てお辰と顏を見合せる。）

（金杉哲夫去る。）

お辰　お前さん、金杉さんの何に當つてゐるんだい。やつぱり惡い人の仲間なのでせう。

お兼　私は桂庵の方から、金杉さんのお邸の方へ伺ふやうにと云ふので、伺ひましたのです。さう致しまするとこ此方のお孃樣の乳母に上るやうにとお話しがございましたので上りましたのでございます。私、先頃子を亡くしましたので、乳が出ますものですから……？

數江　お前さん、兒を亡くしたと云ふのは眞實ですか。

お兼　はい。つい先頃兒に死なれまして乳が張つてなりませんので……？

數江　そして乳母さんは、どこなのです。

お粂　大和でございます。

お辰　大和はどこですか。

お粂　下市と云ふ處でございます。

數江　下市と云ふのは……。

お粂　吉野山のつい側で、千石橋といふ橋のある處でございます。

お辰　奥樣、どうやら惡人の仲間でもないやうですね。お前それぢや、金杉さんから、此方の事情を聞いて來たのですか。

お粂　はい。餘り委しい事は承りませんが、暫く奥樣が、お留守になるからお前がお預りをして、お育て申せと仰有いました丈でございます。

お辰　一口に云へばまアそんなもんですが、これには深い譯があるんだから、能く奥樣のお心をお腹の中へ入れて呉れなきやア、不可ませんよ。お孃樣がお前さんのお世話になるのも前世の因縁だと思ふから、他人と思つては可けませんよ。

お粂　はい。私は東京へ嫁入りしまして、暫くして連れ合ひに亡くなられまして、續いて子供に死別れましたので、もう何をする氣にもなれませんので、國元へでも歸らうと思つて、此邊へ參りましたのが、恁うして何はれましたのは、これも何かの御緣でございますから、お孃さんを死んだ兒のつもりで、一生懸命に大事に、命にかけても、お育て申しますから、御安心下さいまし。

お辰　どうかお願ひ致しますよ。世間には不幸なお方はあるけれども、お孃樣ほど不幸な方はありません。此兒はお前さん一人がお力ですからね。奥樣は此家の家附で居らつしやるし、お孃樣は旦那樣と奥樣との間に生れ遊ばした、御總領でゐらつしやるけれども、其處には話すにも噺されない深い譯があつてね。今日限り暫くお別れ遊ばす事になるんです。奥樣もお孃樣も水晶のやうに清麗な潔白なお方なんですよ。神樣のやうなお美しいお心だけれども、惡い人達のために、お生れ遊ばしたお家を、お出で遊ばすのですからね。お前さん何處までも、お孃樣のお力になつて、行末永くお世話をして下さいよ。此家のお世繼は、お孃樣より外にはないんですから、宜うございますか、奥樣に代つて私から、くれぐれも頼みましたよ。

お粂　はい、能く解りました。私の身で及ぶ丈けのお守は、

屹度致します。どうか御心配下さいませんやうに？
數江　（静かに頭を上げて）乳母さん。それぢやア此子をお願ひしましたよ。
お兼　奥様、キッと私がお引受け致しました。
お辰　奥様、どんな乳母かと思つて心配いたしましたが、こんないゝ人が來てくれたのは、矢つ張り神樣のお助けでございますよ。
お兼　お嬢様におちかづきを、させて頂きます。
數江　（子供を渡して）さあこれからは、此乳母が、お乳をお上げだからね、おとなしく可愛がつて貰ふんですよ。……阿母さんと思つてね……。
（お兼は抱いて凝乎と顏を見る。）
お兼　さう云つては勿體なうございます。そのお言葉だけでも、粗末にしては罰が當ります。さあ／＼今日からは、貴女のお味方の乳母でございますよ。まアお可愛いこと、笑つて居らつしやいますね。……人見知り遊ばさないで笑つて下さいますの。恁うしてお嬢さまを、拜見いたして居りますにつけても、つい亡くなりました者の事を、思ひ出しまして、……ホゝゝ、御免遊ばせ、私ついお嬢さまが可愛いもんですから、とんでもない事を申し上げまして、濟みません。
數江　乳母さん、どうか今夜だけ私に貸して下さい。どうかどうか。
お兼　はい。（お兼は喜美子を數江に渡す）
（數江再び、喜美子に頰摺りして後。）
數江　喜美子、阿母樣はね、こんな悲しい目を見るならば、いつそ／＼死んだ方がましだけれども、お前がお祖父樣の跡をつぐまではどうしても生きて居ますから、早く大きくなつておくれよ。阿母さまはね、何處へ行つても喜美ちやんの幸福を祈つてゐますよ。どんな遠い處に別れてゐても、きつと／＼魂は喜美ちやんの傍に居りますよ。だからいつまでも、いつまでも私を忘れないでお吳れよ。たとひ何年逢はないでも私は、喜美ちやんの阿母さんですよ。能く此顏を見覺えて居ておくれ、好いかい、忘れては厭ですよ。
（此時、再び、金杉哲夫來りて、數江より喜美子を無理に受取つてお兼に渡す。お兼見かねて取做すを捨ぜりふにて制する。）
（丁度此時、庭前の下手より、高円は愛妾政子と、金杉の妻早苗子を伴ひ來る。女中二人は、各自に乳呑兒

を抱いて來る。)

高昌　金杉君、まだ不義者がゐるぢやアないか、何故早く追ひ出さんのだ。

金杉　奥樣、自動車が玄關に廻つてゐます。さ、早くお支度をなさい。

高昌　不義者、今日から此家の主が變るんだ。さあお前達は、足許の明るい内に出て行け、不埒な奴だ。(と緣へ腰を下す)

政子　奥樣、私は眞葛ヶ原の新宅に居りました政でございます。今日からは、私が此お座敷に入るんですから、どうか、惡からずね、早苗さん廣くつて錆があつて、眞實に住心地のいゝお邸だわね。

(ト、お辰は口惜しげに政子の方に寄らんとするを數江捨の詞にておさへる。お辰と數江は顏を見合せて泣き頽れる。)

早苗　姉さん、定めし御滿足でせうね。

政子　今日から私のものと思ふと、何だか無暗にうれしいんだわ、金杉さん、いろ／＼とお骨折りで有難う。

金杉　お芽出たう。

(ト葉卷に火をつける、此時電燈ともる。)

(風なきに庭前の櫻の花は散る。)

(夕鴉の聲、喧しく。)

——幕——

第二幕

吉野口下市村々外れ

登場人物

作兵衞	茶店の爺
お花	同娘
窪田五郎市	村の世話役
數江	東大路夫人
喜美子	同娘
お兼	喜美子の乳母
早川泰彦	
お時	同女房
友造	馬子
巡廻の官吏	
權十	車夫
奥山	銃獵紳士

谷　浦　銃獵紳士
巡禮母
同　娘
百姓　男
同　女
土木請負師
小間物行商人
郵便配達夫
大山詣の客大勢

時

秋。前幕より七年經過の後。午後

場所

大和國吉野下市村

道具。平舞臺。向うは吉野の山及び附近の丘が紅葉してゐる。奥深く上手より中央に板橋を見せてある。橋の袂に千石橋と假名で書いてある。ずつと上手には掛茶店ありて其前に床几を並べて置く。雞の籠が納屋の前に置いて雌雄の雞を飼つてある。その附近に熟せる柿の木立つ。中央より稍下手に寄りて太き松の神木ありて七五三繩を張つて置く。

幕明く。

と、茶店の老爺作兵衛は娘のお花と共に客をあしらつてゐる。床几に腰を下して土木請負師らしきもの小間物の行商人又巡廻の官吏或は一様の身装をせる大山詣りの一行大ぜい立掛つてゐる。それ／＼捨臺詞にて官吏先づ去りつゞいて行商人去り請負師去り大山詣の連中も茶代を拂つて去る。作兵衛親子は捨臺詞にて世辭を並べて見送る。

作兵衛　やれ／＼やつと手がすいた／＼。今日は朝から馬鹿に急しい日だのう。此工合でお客様が休んで行つて下さりやお前の嫁入着物も心配がねえだ。はゝ、どりや、一服やらうかな。

ト、作兵衛は床几に腰を下ろして莨を吸ふ。此時、橋を渡つて村の世話役窪田五郎市來る。

五郎市　や。作兵衛さん相變らず精が出るのう。
作兵衛　五郎市どんかい。何處へ行つたゞね。
五郎市　そらお兼ばうの家まで行つて來たゞ、何か知らねえが今朝呼びに來たゞでな。又親子喧嘩でも押初めたんだと思て行つて見ると案の定又喧嘩が持上つてゐたゞ。

それでの、到頭お兼ばうが大阪へ行く事に極つてな。今まで其世話をして來たゞ。

作兵衛　何。お兼ばうが大阪へ行くだつて……そりやまあ名殘惜しいこつたな。どうして又あんなに親子仲が惡いだか困つた事だのう。

五郎市　そら、子供の事からだらうよ。お兼ばうは可愛いから何處までも育てゝ行かうと云ふとお富どんは邪魔になるで返してしまへと云ふだ。まあ〳〵どつちも何方だの。

お花　けんども五郎市小父さん餘りお富婆さんが慾が深いからだよ。お富婆さんだつて自分の孫でねえか。可愛がつたら好いにな。

五郎市　處がお富どんの眞正の孫でねえらしいだて。やつぱりお富どんにして見ると血のかゝらねえ兒は可愛くはねえものと見えるだあ。

作兵衛　うむ。成程。すると何かね、あの兒はお兼ばうの兒ぢやねえだか。もらひ兒だな。

五郎市　預り兒だとよ。まあお兼ばうもあの兒をつれて大阪へ行くと云ふから親子喧嘩は當分あんめいよ。ははあ。

作兵衛　それもさうだけんどお兼ばうも女一人であんな小さい兒を抱へて大阪へ行つたら定めし困るこつたらう。が。どうして又つれあひを拵へねえだかな。

五郎市　それがな。つれあひが出來て又兒でも生れるとあの兒が可愛さうだと云ふだ。そんで女一人で我慢してるだが餘程あの兒が可愛と見えるだよ。

作兵衛　辛抱強いこつたの。やつぱり男拵へるよりも育てた兒の方が可愛いかの。感心なもんだてや。

（ト、郵便配達人深山の新聞や郵便を携へて走り來り作兵衛の家へ郵便と叫んで信書を渡して去る。）

お花　阿父さん姉やから郵便が來たゞよ。

作兵衛　どれ〳〵何を云うて來たゞよ。又無心手紙と違ふか。（と眼をこすつて封を切て讀む）

お花　阿父さん。姉やから何を云うて來たゞね。別に變りはねえだかよ。

作兵衛（讀めぬ仕打）はてな。馬鹿に四角な字ばかり書いて遣しくさつたわい。五郎市どんお前は村での物知りだ。ちよつくら讀んで下つせよ。

五郎市　どれ〳〵見せなさい。（と受取つて又讀めぬ仕打しきりに首を捻る）

作兵衛　何を書きくさつたのかね。

五郎市　うむ。私にもわかんねえが大方こりや横文字だべい。お花ばうお前は學校へ上つてゐたから讀めるだらう。讀んで見て呉れ。

お花　（受取つて讀む）横文字ぢやねんだよ。きつと姉や人に書いて貰つたゞよ。あゝ解つた。姉やお客様に書いて貰つたゞね。

作兵衛　そんな事だんべい。又誰か來たら讀んで貰ふべい。

（ト、お花より手紙を受取る。馬子友造は駄馬に菰包の荷物をつんで來る。）

友造　ど、ど、ど、畜生。何を道草喰ふでい。ど、ど、どつ。

作兵衛　友造どんかい。今日は何處へ行くだい。

友造　停車場前の通運會社まで行くだ。

作兵衛　引越しの荷物かな。

友造　そら。お富婆さんとこのお兼ばうがよ。

作兵衛　お兼ばうとこの荷物かい。まあ大切に行つて來るが好いだ。

友造　歸りがけに寄せて貰ふべいよ。ぢや、行つて來るだよ。ど、ど、ど、畜生歩かねか。今日は道草ばかり喰つてゐやがる。ど、ど、ど、ど。

（と、彼方へ小唄をうたうて去る。）

五郎市　どりや俺も歸るべい。友造よ。その邊まで一緒に行くべいよ。

（ト、五郎市も友造の後からつゞいて去る。）

（ト、此時橋を渡つてお兼の母親お富先に立つてつゞいて半病人のお兼は喜美子に扶けられて來る。）

お富　どうだいお兼お前はそんなに強情を張るけれ共其體で停車場まで歩けるかい。

お兼　大丈夫です。我慢をして行くから宜うござんす。

（ト、作兵衛はお兼の方を見て寄る。）

作兵衛　お兼さん。大變に苦しさうだが、此處へ來て休んで行くがいゝだ。ちつとも遠慮はいらねえだから。

お兼　難有う。

喜美子　ばアや、痛いの。

お兼　いゝえ。何でもございません。（と我慢してゐる）

お富　この兒だつてあんなに云つてゐるでねえか。大分惡さうだから家へ戻つて出直したら好いだよ。

喜美子　あの。ばアや。うちへ歸らうよ。

お兼　お孃樣濟みません、乳母はすぐ好くなりますからね最うちつと御辛抱なさいましよ。

お富　困つたもんだ。
作兵衛　どうしたゞね。なあお富さん。
お富　いくら云つても大阪へ行くと云つて聞かねえで詮方がねえだ。
作兵衛　餘り喧嘩をすると可けねえだ。お兼ばうはお前さんのためには孝行者ではねえかよ。
お富　何にね。作兵衛さん恁うなんだよ。私はお兼とは血を分けた親子だからお兼が奉公先から歸つて來て居喰をしてゐても煩らはれても構はねえだが何も他人の娘まで引張つて來て育てる事もねえと思ふだ。そんで預つた人に返してしまへとやかましく云つてゐるだよ。
作兵衛　成程、どうだねお兼さんお富さんの云ふ通りその兒は預り人に返してお前は家でゆつくり養生をしたら。その方が好いことないか。
お兼　お孃樣を手離すくらゐなら私は死んでしまひます。
お花　うむ。お兼姉さんの云ふ方が尤もだよ。誰の兒だつて自分が育てれば、我兒のやうに思ふだよ。死んだうちのお母さんだつてさう云つてゐたゞ。
作兵衛　どつちにも理窟はあるだ。とにかく大變に苦しさうだから家へ入つてしばらく休んで行くが好いだ。

お花（喜美子をつく〴〵見て）なあ。阿父樣、ほんたうに好い兒でねえかよ。
作兵衛　全くだ。何かいお兼ばうお前の奉公先の兒かな。
お兼　えゝ。御主人樣の……お氣の毒なお身の上なんですから。（と涙含む）
お花　可愛い孃樣だね。孃樣こつちへいらつしやいよ。
喜美子　何あに。
お花　孃樣。いくつになつたゞね。
喜美子　七つ。
お花　今日から孃樣私のとこにいらつしやいね。えかよ。仲善く遊ぶだによ。
喜美子　ばやもゐるならゐるわ。
お花　阿父樣。この孃樣私の妹に貰つておくれよ。
作兵衛　馬鹿なことこくでねえ、お兼ばうの大切な御主人樣だといふでねえか。
お花　お兼さん。私の家へ貰えねかね。
お兼　とんでもない。奥樣からお預り申してゐる大切なお孃樣ですからさういふ譯には行かないんです。
作兵衛　それ見ろ。だから云はねえことぢやねえだ。
お富　お兼や。そんなこと云はねえで、いつそお花ばうの

妹にやつてしまつたら好いでねえか。
お兼　お母さんがそんな事をいふから、私は大阪へ行くんです。最う何にも云つてお呉んなさるな。さあ、お孃樣參りませう。
（ト、お兼は立掛り眩暈してよろ／＼となる。）
お富　強情だね。私は最う何にも云はねえだよ。
（ト、お兼一層苦しき容子。作兵衞心配して倚る。）
作兵衞　こりや可けねえだ。お兼ばうそんな樣子ぢや迚も停車場まで歩いちや行けやしねえだ。俺が家の中で休んで行くが好いよ。まだ／＼日脚が高いからな。
お兼　濟いませんがそれでは鳥渡……？
お富　さうするが好いだよ。命が何より大切でねえか。
（ト、お富、作兵衞、お花の三人はお兼を扶けて家の中へ入る喜美子もついて行く。）
（やがて銃獵の紳士奥田力三。谷浦謹一走り來りて橋を渡つて去る。摺違つて百姓夫婦は小さい荷車に米と秋大根をつんで輓き來りて向うより來る彼の早川泰彦と摺違ふ。）
泰彦　おい／＼鳥渡待つて呉れ。少々聞きたい事があるんだ。（百姓夫婦は知らぬ顏に行く）おい待たんか。千石橋と云ふのは何處だい。
百姓男　これ田舍者だと思つて餘り馬鹿にするでねえだ。人に物を聞くにそんな横柄な口の利きやうがあるだか。どうも都會の奴らは行儀を知らねえで困るだ。（と行きかゝる。）
泰彦　いや。僕が惡かつた濟まん／＼さあ怒らんで呉れ。ぢや改めてお尋ねしますがね。此邊に千石橋と云ふのがありませんか。
百姓男　千石橋なら彼處の橋だよ。
泰彦　成程、いや難有う。
（ト、泰彦は舞臺の方へ歩いて來て橋の袂に書いてある名を見て肯く。）
百姓女　をかしな人ぢやねえだかよ。
百姓男　氣が狂うてゐるのかも知んねえ。
（ト、百姓夫婦は車を輓いて彼方へ去る。泰彦は橋の前まで來る。お富は作兵衞の家より出て來る。）
泰彦　これが千石橋ですね。これが……。（とお富に向つて聞く）
お富　さうだよ。
泰彦　鳥渡物をお尋ねしたいんですがね。

お富　私は鳥渡お醫師樣まで行つて來るだから……。
泰彦　まあ待つて下さい。此村のお方とお見受けしますが何とか云つたな。はてな。
お富　此先に駐在所があるだから其處で聞くが好いだ。
泰彦　さう〳〵、釣瓶鮓と云ふのはどの邊でせうね。貴女は御存じではございませんか。
（ト、泰彦はお富の行手に立塞つて聞くお富は薄氣味惡く泰彦を見て戻る。）
泰彦　（又追つて）貴女、白川かねと云ふ方を御存じではございませんか。
お富　白川かね。
泰彦　京都に乳母奉公してゐた人なんですが、確か三四年前に此方へ引越して參つた筈なんですが御承知でございませんか。
お富　お前さんは一體何者だね。（と猜忌の眼にて見る）
泰彦　京都から參つたものですが實はもう七年ばかり前に私の姉が白川かねと云ふ人に大切なお孃樣を預けた事があるんです。
お富　お孃樣と云ふと幾つぐらゐの……。
泰彦　御承知ですか。

お富　私は其お兼の母親だあよ。
泰彦　えつ。貴女は其かねさんの阿母樣ですか。さうですか。いや實に奇遇です。お孃樣は相變らずお達者でせうね
お富　喜美子樣かね。
泰彦　さうです。
お富　あの、達者だよ、餘り達者過ぎてほんたうに厄介で詮方がねえんだ。
泰彦　厄介ですつて……？
お富　お前さん、あのお孃樣つれにお出でだかね。
泰彦　さうですがお孃樣の阿母樣と女房の三人掛りでお探し申しに參つたのですよ。
お富　お兼が孃樣をお預り申したお前の姉さんと云ふ人はどうしたゞ。なぜ其人がつれに來ねんだ。
泰彦　姉ですか、實は姉のお良は一昨年到頭病氣でなくなつてしまつたのです。それで私が姉の代りにお孃樣をおつれ申しに參つたのですから、早速ですがどうかお兼さんにお逢はせ下さいませんか。いろ〳〵とお禮を申し上げて其上お孃樣をお引取申し上げて行きたいのです。どうでせう。
お富　あつ、願つたり叶つたりだよ。いつでもつれて行つ

てお呉れ、うちぢやあんな邪魔者があつて手が掛つてなんねーんだよ。

泰彦　お嬢様は何處にいらつしやるんですか。

お富　ちやうど此家に遊んでゐるんだから奥様さへつれて來たら渡して上げるだよ。

泰彦　さうですか、それぢや早速奥様をお見せ申しますから、まさか其時に當つて御異存などはございますまいね。

お富　異存があるものかね、此方が大助かりだよ。

泰彦　解りました。ぢや早速奥様と御一緒に參ります。（と、向うへ去る）

狂喜して引返し）難有い〳〵神様の御加護だ。

（お富は見送つて後、作兵衛の家へ首を突込んで。）

お富　嬢様、嬢様、鳥渡此處へ來るが好いだ。用があるだよ。

（ト、床几に腰を下す、喜美子走り來る。）

喜美子　お婆さん、なあに。

お富　大變に好いことが出來たゞよ。

喜美子　どんな事。

お富　嬢様の阿母様からお迎が來たゞ。お前様をつれに來たゞよ。

喜美子　嘘だよ。お母様は死んでしまつたの。

お富　それが嘘なんです。嬢様の阿母様はちやんと生きてゐるだよ。

喜美子　ほんたう。

お富　嘘を云ふものかね。だから嬢様を今阿母様が此處へ迎へに來るだから一緒に歸るだよ。

喜美子　ばやも一緒に阿母様のとこへ行くの。

お富　嬢様一人だよ。

喜美子　私、一人なら厭、ばやも一緒なら行くわ。

お富　えツ、困つた餓鬼だね。

（此時、お兼はお花に扶けられて來る。）

お花　ほんとにお兼姉さん最う大丈夫だかね。

お兼　おきみに、さあお嬢様參りませう。

（喜美子はお兼に走り寄つて取縋る。）

喜美子　ねえばや、私、お母様の處へ行くんだつて……？

お兼　誰がそんな事を申しました。

喜美子　お婆さんが云つたの、阿母様が生きてゐるんだつて……ほんたうにお母様が生きてゐるの。

お兼　阿母様、そんな事をなぜお嬢様に云ふんです。

お富　だつてお前今奥様からお使の人が嬢様を迎へに來た

んだよ。

お兼　あの奥樣から……お使が……？

お富　あゝ。

お兼　どんな人でした。

お富　若い男の人で奥樣をつれて來ると云つて行つたよ。

お兼　それでお母樣はお孃樣が此處にいらつしやると云つたんですね。

お富　こんな幸ひな事はないでねえか。お前も助かるし私だつてどんなに助かるか知れないからの。

お兼　それぢや大變、いよ〳〵恁うしてはゐられません。

（トおろ〳〵する）

お富　ではお前やつぱり此兒を大阪へつれて行くのかい、奥樣から迎へが來てゐるのに……？

お兼　それはきつと嘘ですよ、悪い人達の拵へ事でございます。（と焦々して）此處に居る事が解つたんでつれをつれに行つたんです。

作兵衛　あれまあ、人攫りかね、とんでもねえ事だ。

お花　お孃樣を恐ろしい處へつれて行くだつてね。

お兼　えゝ、全く奥樣からのお迎ならば、御手紙が來る筈です、唯迎へに來るなんてそれは最う悪い人の仕業です。奥樣だからなんて好い加減な事を云つて確かにあのお妾のする事に違ひございません。最う恁うして落着いてはゐられません。

（ト、風呂敷包みや傘を持ち直して去らんとする支度。……折から田舎車夫權十は車へ大きな包物をのせて來る……お兼は車を見て走るやうに車の處へ行きて轅をおさへる。）

お兼　權十さん濟ないがのせて貰へませんか。

權十　お兼さんかい、どうしたゞ、馬鹿に息きつて……？

お兼　急く事が出來たんでね。

權十　困つたな、荷物を頼まれたゞ、作藏の處へ屆けなきやなんねーでな。

お兼　でも大變な事が出來たんだから、お金はいくらでも上げるから荷物は後にして乘せておくれよ。

權十　（落着いて）えらい又急いでゐるだな、何處へ行くだね。

お兼　停車場へ行くんだよ、好いだらう。（と車へ乘らんとする）

權十　まあ〳〵好いだ、お兼さんの事だ、荷物は後にして乘せてやるべい。

お兼　難有う〳〵々々。（と床几の處へ戻りて）さあ、お嬢様早く參りませう。

喜美子　えッ。

作兵衛　おやお兼ばう。どうでも大阪へ行くだか。

お富　だがお兼、あんなにまで云つて近への人が來てゐるのにどうしても此兒をつれて行くだかよ。

お兼　そんなものに逢つたら大變ですよ。（と喜美子の着物を着せ直して）小父様、誠に濟みませんが今私やお嬢樣を尋ねて來たものが有たら、それは今も話をして居たそれは〳〵ひどい恐ろしい人でお嬢樣を取らうとして居る惡い奴の仲間ですから、私達は何處へ行つたか判らないと云つて下さい。後生ですから、お願ひですよ。

作兵衛　さうかね、やれ〳〵氣の毒な事だ好いとも好いとも大丈夫だ。何んで眞正の事を云ふもんか、嘘をついて欺してやるから安心して行くが好いよ。

お兼　難有う、お嬢樣、今日からはね、どんな人が私の名を聞いても白川きみ子と仰有るんぢやありませんよ。さう〳〵花井……花井はる子と仰有いましよ。

喜美子　花井はる子。（と肯いて見せる）

お兼　さうです〳〵忘れないやうにね。

喜美子　花井はる子。

お兼　さうですよ。さあ、（と俥に乘らんとすれば權十は莨を吹かしてのんきに荷物も下さずにゐるに焦躁つて）あら權十さん、何をして居るんですよ。早くして下さい、急いでゐるんだから。

權十　あゝ好し〳〵。（と荷物を下す）

お富　お兼や、行くんなら詮方がないけれども、大阪へ行つたら氣をつけて體を好くして呉れなくちや困るだよ。

お兼　えゝ、解つてゐます。阿母さんも餘りお酒を飲まないやうにね。

（此間作兵衛は柿の樹から熟せる柿の實をちぎつて喜美子の前へ寄る。）

作兵衛　さあ、これはお土産だ、持つて行かつせいよ。

喜美子　（受取らんとしてお兼に向く）お爺さんが……？

お兼　頂いてゐらつしやいまし、小父さん、難有う。

喜美子　難有う。（とおとなしく辭儀する）

（作兵衛喜美子のエプロンに入れてやる。お兼は此れを他の風呂敷へ入れる。車の支度出來てお兼は焦々せる心持にて車に乘る。）

（お花又來る。）

お花　あれ、もう行つてしまふだかね。
お兼　いろ／＼お世話様でした。
お花　ちや孃樣最う大阪へ行くだかね。名殘惜しいだよ。
（喜美子うなづく）お兼姉さん大阪の何處へ行くだよ。
お兼　何處へ行くか、まだ決めてゐないんですよ。
作兵衛　では恁うするが好いだ。お花の姉が南の中筋つて處で奉公をして居るだから、なか／＼世話ずきだから尋ねて行つて相談をするが好いだ、梶田つて家にゐるでな。
お兼　え〻、難有う。
お富　ちや向うへ行つたら居所を賴むだよ。
お兼　端書で知らせます。
作兵衛　停車場へは一本道だから、さうだ此方、（と上手を指して）權本の方を廻つて行くが好い、さうすりや逢はねえ。
お兼　あ〻、さう、權十さん逢はないやうに道をかへて行つておくれ。
權十　大丈夫だ急いで行くでな。
お富　からだを大事にの。好いだか。
お兼　え〻、お母樣も……左樣なら。
（ト、双方離別の言葉を殘して權十はお兼と喜美子をのせて上手へ去る。お富は見送つて後。）
お富　どりや私も家へ歸ろべい、家が空つぽうだからね。作兵衛どん大きにお世話になりましたゞ。
作兵衛　又いまに出て來さつせい。
お富　御免よ。
（ト、お富去る。）
（やがて再び橋を渡つて以前の銃獵紳士奥田と谷浦來る。捨臺詞にて床几に腰を下して休むお花は茶を汲んで來る。）
お花　お客樣、大阪の方から鐵砲打ちにござらしやつたゞかね。
奥田　さうだ、朝から今まで山と云はず谷と云はず、沼と云はず驅ずり廻つて勿驚やつと此通りさ。（トサックを見せる）
お花　まあ、たつた一羽。
谷浦　俺の方は此通りゼロさ。骨折損のくたびれ儲けとは此事だ。
お花　汽車賃が損でございますだね、ホヽヽヽ、つまんなねえ。
作兵衛　何せ、此頃は毎日何十人とたく鐵砲打ちにござら

つしやるで鳥の方でもたつ瀬がねえから山奧に逃げ込んでしまつてゐるでね。

奧田　おい御陵の池に居た鴨、あれを、どんと打放したかつたな。

お花　そんな事をしたら大變でございますだ手が後ろへ廻りますだよ。阿父樣、何ならさつき貰つたツムギと雉子を賣つて上げたらどうだね、袋の中が空つぽぢやわざわざ大阪から來て見つともなくつて歸られねえだよ。なあ、お客樣。

谷浦　その通り〱全くだ。

作兵衞　さうだの、貰へるのはいつでも貰へるだ、待たつせいよ。（と家の中へ入つてツムギと雉子と五六羽下げて來る）

奧田　や、好いぞ〱それ賣つて吳れるのか。

作兵衞　ちつと高いかも知んねえが、まあ體裁つくるには今朝打つたばかりの鳥だ、ちやうど誂へ向きだがね。

谷浦　一羽平均一圓どうだい。

作兵衞　一羽で一圓五羽あるだから五圓、ほう大儲けだ、賣りますべいよ。

奧田　有難い、五圓の散財で大阪へ歸つて大きな面をして適れ銃獵家の資格が保てるからな。

（ト五圓札を渡して受取つて分ける。）

谷浦　（空を見上げて）大分日が落ちて來た、阿父さん、大阪へ歸るには何方の停車場へ行つた方が好いかね。

作兵衞　そりや吉野口の方へ行つた方が近いだよ。橋本の方は汽車が餘りたんと出ないでよ。

奧田　吉野口の方に行かう、ぢや茶代はまけて貰ふぜ。

お花　これを御緣に又ござらつせいよ、又鳥を貰つて置くでね。

（ト、二人は哄然と笑ひながら捨臺詞にて去る……これと摺違つて、早川泰彥を先に、彼の數江と女房のお時の三人來る。）

泰彥　（虛呂々々見廻して）はてな、何處に行つたらう。

（トお花と作兵衞は互にさゝやき合つて家の中へ入る。）

數江　泰彥さん何處なんですか。

泰彥　はい、此處で確かに約束をしたんですが……鳥渡聞いて見ますからお待ち下さい。おい〱、茶店の爺さんさつき此處に居たお婆さんは何處に行つたのかね。

作兵衞　（縄暖簾から首だけ出して）もう歸つたゞよ。

泰彦　家へ歸つたのかね。

作兵衛　いや、家ぢやねえだ、奈良の方へ行つてしまつただよ。

泰彦　何、奈良、そりやほんとかい。

作兵衛　ほんたうだとも、今此處を出たばかりだ。

泰彦　どつちへ行つた、どつちへ？

作兵衛　（橋の方を指して）あつちへ行つた。

（ト、泰彦は追はんとする。）

數江　泰彦さんお待ち下さい。

泰彦　奥樣、一ト足おくれたばつかりに實に殘念な事をいたしました。此から私が駈足で追蒐けますからどうぞ此處でお待ち下さいまし。

お時　ほんたうにお前さん、ぼんやりだね。しつかりしなくちや、わざ〳〵奥樣の御伴をして來た甲斐がありますか。何をしてゐるんですよ、生きて居るんですか、死んで居るんですか。

泰彦　やかましい、貴樣がそんな生意氣な事を云うても、先方だつてやつぱり生きてゐるんだ。土で拵へた人形ぢやあるまいし、いつまでも此處にぢつとしてゐるものか。

お時　さうと思つたら何故その時に無理にでもお嬢樣を、おつれ申さないんですよ。お前さんが、ぼんやりしてゐるから、きつと腹に一物のある乳母が何處かへつれて行つてしまつたのぢやありませんか。

泰彦　それならば何故貴樣も俺と一緒に來ないんだ。亭主一人ぢや難かしいと思つたら女房が一緒に來るのがつれ添ふ者の氣轉なり働きといふもんだ。

數江　泰彦さんまあ待つて下さい、そんな事を今更云ひ爭つたつて詮方が御座いません。それよりも奈良は何處に行つたか、それを聞いて下さいまし。

お時　えゝ、さうで御座いますとも……そんな處に氣がつかないだけ、ぼんやりしてゐるのでございますよ。

泰彦　えッ、貴樣は默つてゐろ、旅先で亭主をやり込めて名譽にも體裁にもなるか、おい〳〵お爺さん、奈良は何處だか解らんかね。

作兵衛　さあ、それがね、餘り親しい仲でもねえだて。奈良とは云つて行つたが確かに奈良へ行つたかどうだか解んねえよ、なあお花。

お花　さうだよ、きつと十津川に親類があると云つてゐたから十津川の方かも知んねえだよ

數江　十津川？

作兵衛　さうで。

泰彦　一體何分ばかりに行つたんだ、まさか三十分も前ぢやあるまい。

作兵衛　お花、お富さんが出て行つたのは何分ばかり前だ。

お花　三十分くらゐになるだよ。

泰彦　三十分、それぢや最も追蒐けても迚も間に合はんな。あんなに堅く約束して置きながら、どうして、そんな事をしたんだらう。お爺さん七ツ位なお孃樣も一緒に行つたかい。

作兵衛　一緒に行つたゞ。

泰彦　十津川の何と云ふ處に行つたか、それも解らんかね。

作兵衛　解らねえだよ。何せ借金で動きがとれねえで、夜逃げ同樣にして立退いて行つたゞから、めつたに、眞正の行先は云つては行くめいよ。

泰彦　えらい失策をしてしまつた。

（ト數江は泰彦に取縋る。）

數江　泰彦さん、わざ／＼此處まで來たのも何の益にも立ちませんでしたね。

泰彦　誠に濟みません、何とも申譯がございません、どうぞ御勘辨を願ひます。

お時　鳥渡、（と泰彦の手を取つて）申譯がございませんで濟むと思つて居るの、ほんたうに此の人は、何と云ふ鈍智だらうね、一體これからどうするのさ。

泰彦　どうすると云つて……一生懸命になつて、お探し申上げるより詮方が無い、飛行機に乘れると上の方から見りや、逃げて行く方が、はつきりと解るだらうが……亭主の失策はお前にも責任がある、此れから夫婦で探さう。

お時　そんな氣の永い事が云つて居られるものかね、奧樣どういたしませうね。

數江　もし茶店のお爺さん、まさかお前さんは私達に嘘を云ふのぢやありますまいね。七ツになる女の兒は私の腹を痛めた眞實の兒なんですから、それを引き取りに來たんですけれども……？

作兵衛　へい、別に意趣も意恨もねえだから、そんな事はねえだけんども……此の橋を渡るとお富婆さんの家があるで、其處へ行つて見て來ると、好いだ。

數江　あゝ、やつぱり私はあの兒には緣がないのかね。

お時　奧樣。

數江　お時さん。

（ト數江はお時と泰彦と顏を見合せてホロリとなる。此時、橋を渡つて親子の巡禮は御詠歌をうたつて來る
そして數江の姿を見て前に行きて報謝を乞ふ、數江は巡禮の娘に若干の錢を與へる。）

巡禮母　有難う御座ります。

同娘　有難う。

（ト親子は去らんとする。）

數江　あゝ、鳥渡待つて下さい。（ト巡禮を止めて）そのお兒は、いくつです。

巡禮母　七ツになりましたので……？

數江　それでは喜美子とちやうど此の娘さんくらゐなのね。あゝ何處に行つて、しまつたんだらう。

巡禮母　それでは奥樣お孃樣とお別れたさいましたのでございますか。

數江　いろ／＼と深い譯があつて別れてゐるんですが、一時間も前には此處に居たのに、私が此處に來る間にゐなくなつてしまつたんです。親子の緣が薄いのですわね。

（ト泰彦は感極まつて地に手を突いて平伏す。）

泰彦　奥樣、どうぞ私を御存分に遊ばして下さい皆私の粗忽で御座いました。此の體が八裂になりましても厭ひません、私の……私の生涯の越度で御座いました。

數江　決してお前さんの越度ではありません。私の因果、喜美子の不幸なのでせう。（トお時の携へ來たる風呂敷包を受取つて）もし巡禮さん私の兒に着せようと思つて拵らへて來たんですが最う益に立たなくなりました。年もちやうど同じですから此娘さんに着られませう。何年先に逢はれるか解りませんから、その娘さんに上げませう。どうか着せてやつて下さい。

お時　奥樣、何と云ふ事を遊ばすので御座いますどつさり腰上げもしてございますし、又袖丈もございますから、二年經つても三年經つても、お孃樣のお行方が解らない時まで御待ち遊ばせ。決して御短氣な事を遊ばしては可けません、もし奥樣。

數江　私の心任せにして置いて下さい。手許にあつては却つて私の涙の種になりますからね。丁度喜美子の行方が解らなくなつた折も折、同じ年頃の娘さんに出會つたのは、神樣が此娘さんに德を御授け下さつたのでせう。

お時　まあ、何と云ふ美しいお心でせう私はお心の裡をお察し申し上げると泣くまいと思つても泣かずには……

數江　さ、これを上げますから持つて行つて下さい。
巡禮母　ほんたうでございますか。
數江　何で噓を云ひませう。
巡禮母　難有うございます〳〵これ松や奧樣にお禮を申し上げるんだよ。
巡禮娘　奧樣有難う御座います。阿母樣綺麗なべゞだね。
巡禮母　國へ歸るによいお土產が出來ました。奧樣有難う御座います。
（ト巡禮親子は幾度も禮を述べて嬉しさうに去る。此姿を數江は見送つて泣く。作兵衛は默然として話を聞いて感激して泰彥の方に進む。）
作兵衛　もし御客樣、私只今のお話を伺つて思はず淚が滴れました。どうやらお孃樣の眞正の阿母樣のやうでござらつしやるから、私ほんたうの事を申しますだが、とんでもねえ噓を申しまして誠にはや申譯次第もございましねえだ。
泰彥　何、（と稍々慴いて）噓それぢやさつき云つたのはやつぱり奧樣初め俺達を欺してゐたのか。
作兵衛　さうでございますだ。實はお尋ねなさるお孃樣はね、乳母のお兼ばうと一緒に最う大阪の方へ立退きましたゞ。
（ト泰彥は思はず、作兵衛の胸倉をグツト引寄せて〳〵る。作兵衛は苦しむ。）
泰彥　えつ、なぜさつきそれを云つてくれないんだ。今頃云つても益に立つか、馬鹿。
作兵衛　痛い〳〵痛い。それは貴所方を惡人と思つたのでお兼ばうに賴まれた通り申しましたので……此度は眞正でございます。
泰彥　大阪といつたな、大阪は何處だ。
作兵衛　さ、それは解りましねえだが、大阪といふ事はうそではございましねえだ。これ丈は私お誓ひ申しますだ。
泰彥　奧樣、後を追蒐けませう、お爺さんどつちの道だ。
作兵衛　（上手を指して）此道を眞直に參りました。
（ト泰彥、數江、お時の三人は追はんとするお花は家より出來る。）
お花　あゝ、もし、お客樣、もう駄目でございますだよ。
（ト數江、泰彥、お時は戾る）四時半の汽車が最う出てしまつたでなあ。
數江　汽車が出てしまつた……？
泰彥　あとの汽車迄は何分間があるんだね。

作兵衛　次の汽車迄には最う二時間半待たなけりやなんねえだ。
數江　二時間半。
お時　奧樣。
數江　お時。やつぱり私はあの兒とは……？
（ト三人よゝとばかり泣く作兵衛もお花も顏を見合はせて同情の涙に咽ぶ。日沒の鐘、紅葉ハラ〳〵と散つて來る。）

――幕――

三幕目ノ一

骨屋町お粂の侘住居

登場人物

お粂　喜美子の乳母
喜美子
お富　お粂の母
作兵衛
お花　作兵衛の娘
藤吉　下家の亭主
お菊　女中
光子

時

初春正月の二日。夜の明けきらぬ間。

場所

東區骨屋町の菓子屋の二階。
道具、中高の二重舞臺を巧みに二階の居間に見せる。周圍は他の家の屋根や廂を見せ電燈柱や電話の柱の尖端が見えてゐる。二階には低い欄間がある。居間の上手には下に降りる梯子段が見える。押入や半間床が半ば破れて居る。外側の障子の外には雨戸が閉つてゐる。居間には雜多な世帶道具がいろ〳〵と並べてありお針道具なども置いてある。破れし低い二枚折の屏風もある。
幕明く。
暗黑。鷄の聲。遠近に聞える。稍夜明けて來る心にてほんのりと明るくなる鳥の啼く聲。
お粂は二階の雨戸を繰明けて外を見る。瞼ははれて徹夜せし顏色、漸く夜は明け放れて來る。……雀啼きし

きる。お兼は少時頭を冷たい風に吹かせてのぼせをさましてゐる。やがて戸を明け終る。喜美子の寝姿愛らしくその傍にお兼の徹夜して縫上げし着物あり。

電燈の光淡く夜明けの室を照らす。お兼は寒さを覚えて額をおさへて居しが喜美子の起きぬ間にと雑煮の支度、火鉢の火をカンテキに移して雑煮の鍋をかける。そして其邊を片附けて喜美子を起す。

お兼下へ降りる。

外の表通りを初荷が通る音、囃子の聲。車のひゞき。少時聞える。喜美子は眼をさまして鳥渡四方を見てお兼の居らざるに。

喜美子　ばや。ばや。（と呼ぶ）

（お兼下から上り来る。）

お兼　お嬢様、もうお目がさめましたか。

喜美子　うちにゐたの。

お兼　へい。何處へも参りやしませんよ。

喜美子　あたし何處かい行つたかと思つたのよ。

（ト、枕元のおもちやを床の中にて腹這にて弄ぶ、お兼下より携へ来りし網と餅をよき處に置く。）

お兼　今朝はお寒うございますよ。

喜美子　さう。

お兼　さあ、早くお起きなすつてお雑煮をお祝ひなさいまし。

喜美子　はい。

（ト、喜美子は起きて行成お兼の胸へ抱きついて首へ両手を廻はして甘える時。お兼も抱締めて頬ずりをなす。）

お兼　さあ〳〵お寒うございますから早くお召物をおめし遊ばせ。

喜美子　はい。

（お兼は床の後の方に入れてある行火より平生着を出して着せてやる。）

喜美子　（着せて貰ひながら）　ばや、あんばいは好いの。

お兼　へい。ひどい事はございませんの。私のおあんばいなどはどうでもお嬢様のお顔のつやさへお宜しければもう〳〵それが何より嬉しうございます　（と着せ終りて）さあお顔を洗つて参りませう。

（ト、お兼は洗面器を持つて喜美子と共に下へ降りる。再び初荷の通る音。）

（お兼の母親お富下手の別室より寝巻姿にて寝起の顔

にて來り火鉢の處へ來て鍋の沸え立つてゐるを見る。）

お富　おや〳〵大變だ。

（ト、吃音を言ひながら鍋を下ろして網に餅をのせてあるのを火にかける。そして莨をスパ〳〵と吹かす。お兼は喜美子をつれて上り來る。）

お兼　あゝ阿母樣。お早うございましたな。

お富　稻荷の音がガヤ〳〵騷がしいので眼がさめてしまつたのさ。

喜美子　お婆さん。お早う。（と手拭をお兼に渡す）

お富　お早う。お兼や、今鍋が吹いてゐたからおろしておいたよ。

お兼　難有う。阿母さん。鳥渡餅を見て居て下さいよ。

（ト、床を上げにかゝる。）

お富　仕事をあげてしまつたのかい。

お兼　やつと縫ひ上げましたよ。

お富　そんな無理な事をして體が悪くなると困るよ。

喜美子　お話。

お兼　さ。お孃樣、お雜煮を召上れ。私は後からゆつくり頂きますから。

喜美子　ばやは喰はないの。

お富　まだ顏も洗はないんだよ。

お兼　召上れ。はたに氣兼などをしないで召上れよ。そんな事に氣をおつかひなさるんぢやありませんよ。此家では貴女が一番にお偉い方なのですからね。（と雜煮を喰べさせる）

お富　お前見たいに甘いことばかり云つてゐると子供の躾は出來ないよ。どれお湯にでも行つて來よう。

（お富は手拭を下げて下へ降りて行く。）

お兼　（雜煮の給仕をしながら）お孃樣どうぞ召上り物や何かは家のものに遠慮などは遊ばさないで下さいよ。何でも貴女は大樣にお育て申さないと乳母は申譯がございませんからね。

喜美子　（うなづきながら）おいしいわ。

お兼　さうですか、どつさりと召上りましよ。

喜美子　最う澤山。ぶゝ頂戴。

お兼　最うお宜しいんですか。

喜美子　えゝ。

（お兼は茶を汲んでやる喜美子は飲む。此時羽子窓より飛んで入る。）

蔭の聲　喜美ちやん、喜美ちやん、羽子を投げて頂戴。

(喜美子は窓の處へ行きて下をのぞく。)

喜美子　投げてよ。

蔭の聲　難有う。喜美ちやんも出てお遊び。

喜美子　私、今日は遊びには出ないのよ。

(お兼はハツとして涙組む。喜美子はお兼の膝へ靠れる。)

喜美子　ばや。今日もお正月、ばや、今日もお正月。

お兼　(涙のまゝ)今日もお正月ですよ、けれどもお嬢樣のお正月は明日でないと參りませんの、最う一日我慢して頂戴よ。

喜美子　なぜ。

お兼　お召物がないでせう。乳母は此れから船場へ行つてどつさりお金を頂いて歸りに美しいお召物を買つて參りますからおとなしくお留守居をしてゐて下さいよ。

喜美子　私も行くわ。ばや。つれて行つておくれ。

お兼　だつてお嬢樣こんな汚ないお召物をめしては出られませんからね。

喜美子　いゝわ/\。

お兼　それでも世間の子供衆がみんな好い衣裳を着てゐますから。その中へお嬢樣ばかりそんなおみなりをしていらしつては……?

喜美子　いゝわ。今日は私のお正月ぢやないんだもの。

お兼　まあ。(と抱締めて泣く)

喜美子　私。一人ではさびしいわ。

お兼　けれども今お婆ちやんも歸りますから、直に乳母は行つて參りますからね。鳥渡の間です。待つてゐて下さいましよ。早く行つてお嬢樣のお衣裳を買つて來ないと遲くなりますからね。

喜美子　うむ。(と肯きて)ばや直に歸つておくれよ。

お兼　すぐに歸ります、おとなしく家で遊んでいらつしやいよ。

喜美子　あゝ。

お兼　では行つて參ります。

(ト、お兼は風呂敷を携へて下りて行く。喜美子は後の窓の處へ行きて下を見る。)

喜美子　早く歸つておくれよ。ばや。

蔭のおかね　すぐに歸りますからね。

(喜美子少時して座敷へ戻りておもちやを取出して弄ぶ。……外に羽子をつく音。)

(通り神樂の音次第に近づいて來る。喜美子は又窓の

下へ行きて表な見る。お富は湯屋より歸り來る。）

お富　おや〳〵、そこら中をひつくりかへして、厄介な餓鬼だね、足もふんごめやしない。あゝ〳〵正月も何にもあつたもんぢやない。おや〳〵まだ掃除もしないんだね。

（喜美子窓の許より來りて又おもちや箱の前に遊ぶ。お富は莨をスパ〳〵。）

お富　遊ぶんなら、さうひつちらかしちや可けないよ。汚ならしくつて詮方がありやしない。（喜美子は温くおもちやを片附ける、お富は其の方た見て肯く）どりや、私もお雜煮を祝ふかね。嬢樣。

喜美子　なあに。

お富　お前樣、好い兒だから、お婆さんのお使に行つて來ておくれよ。

喜美子　私、行けないの。

お富　なぜ行けないだよ。

喜美子　ばやが出ては可けないつて云つたの。

お富　それぢや婆やが歸つて來たら私がお詫をして上げるから、行つて來ておくんなさい。お駄賃をやるからね。

喜美子　いや。

お富　まあ。此兒は強情な餓鬼だね。何故云ふ事を聞かねえだよ。（と煙管をとつて投げつける）

（喜美子は指を舐めずつてゐる。）

お富　だからおとなしく行つて來ておくれ。お前お婆さんの云ふ事を聞かねえと叩き出して仕舞ふよ。

喜美子　お婆ちやん。行つて來るから堪忍して頂戴。

お富　それなら行つて來ておくれ。（と財布より錢を取出して）これを持つて行つてお酒屋へ行つてお屠蘇を買つて來るんだよ。

喜美子　ではお醫者樣へ行つて來るの。

お富　えつ。お酒屋へ行くんぢやないか。そらお醫者樣のお隣にあるだらう綺麗な樽が澤山に積重ねてある處だよ。

喜美子　お酒屋だね。

お富　さうだよ。お屠蘇と云ふだよ。解つたゞかね。

喜美子　お屠蘇。

お富　それ〳〵解つたらう。

（ト、お富は德利と錢を喜美子に渡して出して遣る。お富は掃除にかゝる。やがて下にて家主の聲。）

蔭の聲　お兼さんの阿母樣。お家かね。

お富　はい〳〵ゐるだが何か用かね。

蔭の聲　お客樣ですよ。

お富　さうかね。誰か來たゞか。朝つぱらから？

（下市村の作兵衛爺と姪のお花來る。）

作兵衛　お富さん。私だよ。

お富　はあれまあ。作兵衛さんの聲のやうだが、まあ〳〵作兵衛さん、さあ上つて下つせよ。

（二人二階へ來る。）

作兵衛　珍しかんべいな、昨日此方へ來たゞでな、早速尋ねて來たゞよ、お花がやかましく姉やの顔が見ていと云ふだからの、そらお前様と堅く約束をした事もあるだで、好い都合だつたからお花と二人で來たゞよ。

お富　能くまあ來て呉れたゞね。

お花　お婆さん。お正月で大阪は賑やかだね。おつ魂消えたよ。大阪の人は皆好い着物を着て綺麗に髪結うてほんとに繪のやうだよ。

お富　お花はう。お前は大阪初めてだか。

お花　二度目だよ。

お富　さうか、そんぢや珍らしいだの。

作兵衛　お富さん、お兼ばうは見えねえやうだが、何處へ行つたかね。

お富　ちよつくら使に行つたゞよ。

作兵衛　さうかな。早速だがお富さんそら約束の金を持つて來たゞよ。

お富　それはまあ、忝けねえだ。ちやうど後金が三百圓殘つてゐた筈だつたから。

作兵衛　さうだよ、定めしお前さんも金の要ることだと思つたゞ。さあ三百圓あるから勘定して受取つて下せいよ。

（ト、作兵衛は懐中より金包める袱紗を取出して前へ差出す。お富は受取つて檢める。）

お富　確かにあるだよ。難有う。

作兵衛　やれ〳〵私も此れで肩の重荷が下りたよ、お前さんの家を買取つてもな、金をそつくら拂はねえと私の物でねえやうな氣がしてなんねえだ、此度彼處を手入をして人に貸すべいと思つてゐるだよ。

お富　それが何よりだよ。下市もだん〳〵開けるでね。

お花　阿父様。用が濟んだら姉やの處へ行くでねえか。姉や首長くして待つてゐるだからよ。

作兵衛　さうだけんども折角來たんだからお兼ばうにも逢つて行くべいでねえか。

お花　では又お晝過ぎてから來たら好いでねえか。そしてお婆さんと一緒に道頓堀の芝居見るべいよ。

作兵衛　成程。それもさうだな。そんぢやお富さん又出直して來るだ。

お富　まあ／＼待たつせいよ。お兼が歸つて來るでお正月だからお屠蘇でも祝つて行くが好いだ。

作兵衛　いや、用事濟ましてゆつくら來るだよ、姉の方が待つてゐるでな。それから又御馳走樣になるべよ。お兼ばうによろしく云つておくれ。

お富　さうかね、ぢや待つてゐるだで。きつと來てお奧んなさいよ。

（二人捨臺詞にて下へ降りて行く時お兼急いで出で來る。）

お兼　おゝ作兵衛さん。

作兵衛　お兼ばうか。好い處へ歸つて來たゞな。お邪魔をしてゐただよ。

お花　お兼姉さん。うちの姉やよろしく云つてゐたゞよ。いつも織物して貰つて難有うと云つてよ。禮を云つてゐたゞ。

お兼　いゝえ。私こそいろ／＼とお世話になつて……？

作兵衛　めまひでもするやうだて……？

お兼　いゝえ。酷い事もございません。

作兵衛　ぢやまあお大事に……お富さん鳥渡行つて來るだよ。

（ト、作兵衛とお花は捨臺詞にて去る。お富も捨臺詞にて下を見送つてゐる。）

お兼　（不圖喜美子のゐぬに心附く）阿母さん。お嬢様は……。

お富　あの……（云ひ澁つて後）今お醫者様まで行つて貰つたよ。

お兼　まあ。お嬢様に使をさせては厭ですよ。

お富　おい／＼八つにもなつてゐるんだよ。使くらゐさせるのはあの兒のためだよ。それも遠い處といふぢやないしさ。

お兼　私の藥をとりにお嬢様に……て。

お富　それくらゐ當り前ぢやないか、古いお芝居ぢやあるまいし厄介者をお主扱ひにして使にもやらないやうなものが今時の世にあるものかね。

お兼　いゝえ。私――お嬢様にとつて來て頂いた藥で好くならうとは思ひませんから。

お富　お主様は使つて可けなくつて親は粉になるまで使へば好いんだらう。

お粂　阿母さん御苦勞をかけて濟みませんが堪忍して下さい。私のためには天にも地にも替られない大事のお嬢さんなんですから。

（梯子段を踏む跫音……お粂は喜美子と知る。）

お粂　お嬢樣ですか。

（ト、お粂は立たんとして又躊躇して坐る。お富は稍心配の容子。喜美子藥瓶と酒の德利を携へて來る。）

お粂　お嬢樣。

喜美子　ばや。（と藥瓶と酒の德利を置いて飛びつく）

お富　これだから遣り切れない。

喜美子　もう歸つて來たの。

お粂　へい。今歸りましたがお嬢樣はお藥をとりに行つて下すつたのですつてね。まあ勿體ない。（お粂は藥瓶と酒の德利を見る）おや、あの德利は？

喜美子　お酒を買つて來たの。

お粂　えつ、お酒。貴女が……？

喜美子　えゝ。

お富　（冠せて）今ついでだから鳥渡頼んだのだよ。（と酒の支度にかゝる）

お粂　まあ。（とあきれて半ば泣きつ）阿母さん。どうか最うこれからそんな事だけは決してしないで下さいよ。さう賤しくはお育て申さないんですから、そんな事をおさせ申しては、私奧樣に申譯ございませんから。お嬢樣（とおもちやを並べてゐるに向つて）これからは誰か何と云つてもお使なんぞにいらつしやるんぢやございませんよ。

お富　お粂、甘やかすのも好い加減にしてお置き。始終でも使ひやしまいし。鳥渡使にやつたくらゐが何だい。

お粂　でも間違でもあつたら大變ぢやありませんか。

お富　もう八ツになつたんだよ。子供なんてものは、甘やかすとつけ上るもんだ、そんな事を云つてゐるから幾歳になつたつて赤兒だよ。痛い目の一つも見せてみし／＼叱らなけや一人前の女に仕立てられるもんかい。傍で見てゐても齒痒くつて詮方がない。

お粂　私は御主樣を折檻する手は持ちません。

お富　さうさ。お前はお嬢樣さへありや親なんぞは轉ばうがのめらうが構はないんだらうよ。何にも大阪下りまで來て質屋のお使がしたいんぢやないや。

喜美子　（お富の顏を見て）堪忍して頂戴お婆さん。私はね、お婆さんのね。あのね、あの……。

お富　私しや、親を親とも思はない處にゐるよりも大和へ歸つて食客でもしてゐる方が氣樂だよ。達者で働いてりや何處でも置いて異れるからね。（と立ちかゝる）

喜美子　お婆さん。堪忍してよ。（と取縋る）

お富　うるさいよ。（と振拂ふ）あゝ／＼正月だつて酒の一と口だつて碌々飲めないのは何と云ふ因果だ、面白くもない。

（ト、お富はつぶやきながら降りて行く。喜美子は心配さうに下り口へ行きて下を見てからお兼の方を見る。お兼は心づかれの體にて胸をおさへて俯向いてゐる。）

喜美子　ばや。又痛いの。

お兼　（急に氣を變へて）いゝえ、ひどい事はございません。

喜美子　早く好くなつてお異れよ。私、ばやがね。おあんばいが惡くなると……。（と涙をこぼして泣く）

お兼　お孃樣に御苦勞をかけますね、お藥をせい／＼のんで早く癒りますから安心なすつていらつしやいよ。乳母はね。お孃樣が十五にお成んなさるまでには立派に學校もお卒業をさせ申して眞正の阿母樣にお渡し申さなければ私は死んでも死切れませんからね。どうぞそれまではおつらくても乳母の云ふ事を聞いて御辛抱なさるんですよ。

（喜美子肯く。）

お兼　そして貴女が御勉強なすつてお立派になつて阿母樣にお逢なすつたら御孝行をしてお上げなさるんですよ。

喜美子　阿母樣、何處にゐて。

お兼　何處にいらつしやるんだか解りませんの。御本宅には惡い奴ばつかりなもんですから此頃阿母樣は餘所へいらつしつて御難儀を遊ばしていらつしやるんですからお可哀さうでございます。（と涙に掻きくれる）

喜美子　私、阿父樣はなくつて……？

お兼　ございますとも……立派な阿父樣がお有んなさるんですが鬼みたいなものがついてゐますのでね。

喜美子　私、阿父樣見たいわ。

お兼　お見せ申しますとも、私の一心でも屹度お見せ申します、ですからそれを樂しみに御勉強をなさいましよ。阿父樣阿母樣にお逢ひなすつた時に何にもお出來なさらないと乳母が申譯がございませんからね。

喜美子　勉強するとお目にかゝれるの。

お兼　えゝ。お目にかゝれますとも。

喜美子　私、勉強するわ。
（此時、下家の亭主藤吉上り來る。）
藤吉　さつき大層顔の色が惡かつたが最う好いかね。
お兼　お陰樣で落着きました。急いで歩いたもんですから。
藤吉　そんなら好いが――お前さんが又寢ついた日にはそれこそお孃樣がお可哀さうだからな。
お兼　難有うございます。いろ／＼と御親切にして頂いて御厄介ばかりかけて誠に濟みません。
藤吉　そんな遠慮は入らないがね、お前さんの耳に鳥渡入れて置きたい事があるんだ。
（喜美子はおもちやを袖に入れて片附ける。）
お兼　はあ。（と不安の容子）
藤吉　阿母さんは又ぼやいてゐなすつたね。
お兼　毎度おやかましうございませう。濟みません。
藤吉　そんな事は好いやな。お前さん何にも知るまいね。
お兼　どんな事ですの。
藤吉　阿母さんの蔭口を利くやうで惡いがね、お前さんの眼の屆かない處では喜美ちやんを酷い事をするよ。
お兼　まあ。（と膝を進める。）
藤吉　嘘は云はない。使にも出すし、たまには、打擲る事もあるんだ。けれども喜美子さんは利巧だから、そんな事はおくびにも出さないでお婆さん／＼と氣を廻してゐなさるんだ。うちの奴も話をして感心をしてゐるんだよ。さすが生れが好いから一度だつて告げ口をした事はない。だからお前さんは知らないんだ。私や嬶はいつも見てゐて泣かされてゐるんだよ。
（お兼は悲げに鳥渡俯向いてゐる。）
藤吉　（言葉をつゞけて）それよりはもつと云つて置かなけりやならない事は阿母さんはとんでもない事を考へてゐるらしい。
お兼　えつ。どんな事でございます。
藤吉　お富さんはね、お孃樣をその向うの何とか云つたよ。それ京都の本宅さ。其處へ渡さうとしてゐるんだよ。
お兼　えつ、阿母さんがお孃さんを……誰か參つたんですか。
藤吉　さうぢやない。誰も來たのぢやないがね、阿母さんの氣ぢやお孃さんがゐるのでお前さんとも折合がつかず面白くないんださうだ。まあ老人の心にして見りや無理もないさ。それでね、此頃しきりに私に京都の本宅と云ふのは何處だつて聞くのさ。私は名前も所も解らないと

云つたのでね。一度京都へ行つて百萬長者と云つて調べれば直ぐ知れようからなんて云つてゐたから油斷をしちや可けないよ、お前さんからいろ／＼聞いてもゐるしお前さんの忠義には感心をしてゐるからお知らせをする譯なんだよ。

お粂　眞正に能くお知らせ下さいました。お孃樣にお別れ申すのは私の體が冷たくなるよりないと思つてゐるのですもの。私は覺悟がございます。

藤吉　まあ、穩やかに……私達が出來る事なら何でも御相談に乘るからね。（此時。下にてお富と藤吉の女房の話合ふ聲高く聞える）おゝお富さんが歸つて來たやうだから。（と立上つて）まあ阿母樣に云つてやるのもよからう、私が話をしたと云つてね。（藤吉は下手へ去る）

お粂　お孃樣。

喜美子　はい。

お粂　これからもしどんな事があつて人が聞いても怪我にも白川喜美子とおつしやるんではございませんよ、必ず花井春子といふことはお忘れなすつては可けませんよ。

喜美子　あゝ。さう云つてゐるのよ。

（お富は稍酒氣を帶びて來る。）

お富　（お粂を見て）お前まだ顏色が惡いよ、寢ないと可けないだ、又ひどく熱でも出ると困るぢやないか。

お粂　阿母さん。

お富　何だい。

お粂　阿母さん、さつき歸ると云つてゞしたね。私もその方が好いと思ひますから、どうぞ阿母さん大和へ歸つて下さい。別れてゐる方がお互のためになるでせうから。

お富　お前は私が鳥渡何か云ふとそれを邪推にとるんだね。どうせ私は退け者だからの。病氣で働けないからと、呼寄せてそれ好くなつたから最う出て行けば好いと云ふんだらう。

お粂　阿母さんを振捨るんぢやありませんが、お孃樣にお別れ申すくらゐならば、私は死ぬ方が增しですもの。

お富　お前は病氣から餘計どうかしてゐるだよ。誰もお孃樣と別れろとも何とも云つてやしねいぢやねいだか。

お粂　それでも阿母さんは私に隱して京都の御本宅を探してお孃樣を先へ渡さうとしてゐるぢやありませんか。

お富　とんでもねえ、そんな事があるもんかね。

お粂　いゝえ、阿母樣はお孃樣を私の手から離すのが、私のため幸はせだと思つてゐるんでせう、けれども阿母さ

んが私のためを思つて下さるのは難有うございますが、何故お嬢様にさう辛くして下さるんです、貴女のしてゐる事は私ちやんと解つてゐますよ。

お富　けれども悪かれと思つてしてゐるんぢやなし、私しや何にもお嬢様が憎くつてするのぢやねえだよ、私にして見りやお前が可愛いからね、だん／＼物はなくなつてしまふわ、お前は病氣になるわ、その日／＼にも追はれるくるしさ、親の身となりや心配せずにゐられるだか、お嬢さんだつてこんな汚ない二階住居をしなさるよりも、阿父さんの傍へ歸りや百萬長者の嬢さんになれるんだ。

お粂　いゝえ、いゝえ。（と打消すやうにして）それは駄目です。それではお嬢様の命は一日と持ちやしません。御本宅へお返ししてお身が立つ程ならこんなにまで苦勞をしやしません。いつかも打明けて咄をした通り東大路家のお家は鬼や悪魔の住んでゐる處です。奥様もそれがために難儀をなすつていらつしやるんですよ。初めて私がお邸へ上つた時、今でもあれを思ふとたまらなくなります、お嬢様の乳母とお思召せばこそ奥様は手を合はせるやうにしてしみ／＼とお頼みなすつた事が私忘られません。その時節の奥様のお顔を今でもちやんと覺えてゐます、お嬢様が邪魔になるので御飯の中へ毒を入れてあつたことさへあるんです。私はそれからお嬢様をおつれ申してお邸を出たんですよ、お返しすれば殺されてしまひます、私の肉をそいでも骨を削つても今御本宅へお返ししてはこれまでの苦勞が水の泡になります。第一お嬢様の一生はめちや／＼になつて仕舞ひます、たとへ喰ふに事かいても誠があれば望みが遂げられます、阿母さんも私が眞正に可愛いのなら私を人間にさせて下さい、私と同じ心になつてお嬢様を育てる氣になつて下さいよ、阿母さんさへ其氣になつて下されば私は死んでも構ひません、どんな目にあつても構やしませんから。（お富は俯向いて黙然としてゐる）それとも阿母さんどうしても私の頼みを聞いて下さらないのなら、私生きてゐる甲斐がありませんから、お嬢様を抱いて命の亡くなるのを待ちます。お嬢様にその譯をお話して一緒に死んで頂きます。

お富　お粂、勘辨しておくれ、どうぞ勘辨しておくれ、私は好い年をして馬鹿だつた。今目がさめました、これからはお嬢さまをお大事にするからな。

お粂　（意外の面色にて）阿母さん、ほんたうですか。

お富　嘘ではねえだ、私、生れ變つてお嬢様のお味方にな

ゐた、お嬢様今までの事は勘辨しておくんなさいよ。
お粂　阿母さん、難有う〳〵。
（ト、お粂は嬉し泣きに咽ぶ。）
（此時學友の金杉光子の聲下より聞える。）
蔭の光子　花井さん、お遊び。
喜美子　光子さん、どちらへ。
（喜美子は窓の許へ行きて表を見下す。）
蔭の光子　私ね、住吉へお參りに行くの、貴女もいらつしやい。
喜美子　でも私、まだお正月は來ないの、あしたよ。
蔭の光子　何故々々。
喜美子　お入んなさい。
蔭の光子　入つてもいゝの。
喜美子　えゝ。
（お富は溜り兼ねて懐中より三百圓の金をお粂の前へ出す。）
お富　お粂や。さつき作兵衞さんが殘りの金を持つて來て呉たから、このお金でお前の入院料も仕拂ふし、差詰めお嬢樣のお正月の着物を買つて來て上げるが好いだ、あお前に行けなけりや、お嬢様をおつれ申して買つて來るだよ、いくらでも背丈の合つたものがあるだらうから、それをお着せ申して遊びに出して上げると好いだ。
（お粂はお富の手を握つて凝乎顔を見る。）
お粂　阿母様、何にも申しません、難有うございます。
（此時、光子は女中お菊と共に一緒に入り來る。）
お菊　御免下さいまし、お邪魔をいたします。
（喜美子は光子と相抱いて喜ぶ。）
光子　遊びに行きませう。
喜美子　でも行けないの、光子さんのお衣裳は好いわね。
光子　貴女のもあるの。
喜美子　明日、だから今日は何處へも行かないの。
お粂　いゝえ、お嬢様、今日爺やがお遊びにいらつしやるやうにして上げますよ。
喜美子　ばや、ほんたう。
お粂　えゝ、ほんたうでございます。
喜美子　では光子さん、今日一緒に遊びに參りませう。
光子　さう、嬉しいわ、お菊、いつ住吉へ行くの。
お菊　お晝過ぎにいらつしやるんですから、それまで何處かへ遊びに參りませう。
お富　それではお女中さん、誠に濟みましねえだが、又い

らつしやる時にお立寄り下さいましな。
お菊　えゝ、宜しうございます、それではお嬢様それまで弘様のお邸へ行つて參りませうね。
光子　花井さん又來るわね、小母さん御免なさい
お兼　失禮いたします。
（トお菊と光子は去る、喜美子は窓の許へ行きて又下の表を見る。）
喜美子　光子さん、きつと寄つて頂戴よ。
蔭の光子　きつとよ。
（ト喜美子はお兼に抱き縋る。）
喜美子　ばや、今日ほんたうに好いおべゝ着られるの。
お兼　お着せ申しますよ。
（お兼とお富は顔を見合はせて暗涙に咽ぶ。）
（往來には萬歳の鼓の音面白く聞える。）

——道具一轉——

三幕目の二

住吉公園内の松林

登場人物

村雨うた子　キネマ女優
押川ちよ子　同
春野咲子　同
浪花みさ子　同
醉客
幇間
住吉藝者六せい
助手
政子　高畠の妾
弘　政子ノ子
お秋　小間使
早苗子　金杉の妻
お菊
光子　金杉の娘
喜美子　數江の娘
花井金之助　辯護士
谷村格　小學校長
東大路眞造
金杉哲夫　顧問
早川泰彦

席貸女中

時　前場所と同じ日の午後

場　所　南海沿線住吉公園の内部

平舞臺、正月の松の内の公園のうち、高燈籠の方に寄りたる松林の心。花壇又は池等を見たる處。稍上手に寄りて白ペンキ塗鞦韆を設けたり。ベンチ位置よろしくあしらふ。

幕明く。

（ト、キネマ女優村雨うた子、押川ちよ子、春野咲子浪花みを子などぶらんこをして遊んで居る、やがてポテ鬘を冠り羽織を裏返しに着て紙片を後に下げ忠臣藏七段目の由良之助に假裝せる醉客は幇間又は住吉藝妓數名と共に走り來りて鬼ごつこの體。遂に鞦韆の周圍をグル〳〵と廻りて村雨うた子をおさへる。）

醉客　〆た〳〵到頭お轉をおさへたぞ、お前は今夜こそ俺の物だ。（と眼かくしをとる）

（幇間又藝妓は手を打つて笑ふ。うた子佛頂面。）

うた子　隨分失禮ね。

醉客　これは失敬々々。面倒くさいから此度は眼かくしなしだよ。

（ト醉客は幇間と藝妓を追廻して去る、キネマ女優は何れも見送る。）

ちよ子　愚劣だわね、恐らく私達のファンにはあんな舊式な人は一人もないでせうね。

うた子　あるもんですか、あんな人は時代遲れの安來節ファンなのよ。

咲子　今の藝妓は何處かしら、まさか大阪ぢやないでせう、ローカルカラーがスタイルに表はれてゐるぢやないの。

みを子　堺か住吉の藝妓でせう、或る意味に於て堺や住吉は大阪の遊治郎の情的避難所になつてゐるんですもの。

うた子　みを子さんは委しいわね、しかし私は思ふわ、藝妓その物が既に時代遲れぢやなくつて。

ちよ子　全くだわ、どうせ今に藝妓がエプロンかけてウエターに早替りする時が來るんだわ。

（此時、撮影助手走り來る。）

助手　何だ、こんな處にゐるのか、皆反橋の前で待つてゐるんだ。さあ撮影の支度をして下さいよ。

（一同操縦者口にて助手と共に去る。摺違つて東大路高昌の後妻政子は弘の手を引いて、小間使お秋と共に來る。）

弘　阿母樣、僕、ぶらんこに乘るよ。（と鞦韆にのる）

政子　弘さん、お前はほんたうにお茶目さんだね、もつとおとなしくしなくつちや可けませんよ、そんな事をして落ちたらどうするんです。

弘　落ちやしないよ、阿母さんものつて御覽。

政子　女はそんな事をするもんぢやありませんから、阿母樣は御免。

弘　でも金杉の光子さんはいつも僕と一緒にのるよ。僕おつことしてやつたら泣いたの、ほんたうに泣蟲だね。

政子　お茶目さんには困るわね、光子さんと云へばお秋や早苗さんは來る筈なのにどうしてゐるんだらう。

お秋　遲くいらつしやいますのね。（と下手を見て）あ、いらつしやいました。

（妹の早苗子小走りに來る。）

早苗　あゝ苦しい。隨分姉樣は早いのね、あんなに後から呼んでゐるのに知らん顏をしてズン／＼來てしまふのだもの隨分だわ。

政子　だつて私はちつとも知らなかつたんだもの、何處でだつたのさ。

早苗　丸太格子の邊で……？

政子　では勘辨して下さい、此通りあやまりますから。（と頭を心持下げる）

早苗　あら、嬉しい。初めて姉さんにあやまらして上げたわ、胸がスーッとした。

政子　まあ、人の惡い人、どうして私があやまるのがそんなに嬉しいの。

早苗　だつて……餘り此頃姉さんは威張つて許りゐるんですもの。全で私を女中か何かの樣に思つてゐるんですわ。

政子　ほんたうにお前さんウコンの鉢卷ね、しかし光子はどうして……？

早苗　姉さん。（と佛頂面）

政子　何ですよ、そんな恐い顏をして……？

早苗　私の娘ですよ、いくら金杉は東大路家の支配人でも妹の兒なら光ちやんと位呼んで下すつても好いでせう。

政子　はい／＼、金杉さんの奥樣の御權威は偉いものね、それでは改めてお孃樣はどう遊ばしました。

早苗　何にもそんな御丁寧に云はなくつても好いわ。

政子　面倒くさい。もう勝手におしよ。

（ト此時、弘はうつかり政子と早苗のいさかひに氣をとられて鞦韆の綱を放せば轉落してワッと泣く。お秋は走り寄つて抱き起す。）

政子　それ御覽なさい、だからそんな危ない事をするもんぢやありませんと云ふに……何處も怪我をしませんか。

（弘はぶらんこの綱をヤケに叩いて泣く。）

弘　ぶらんこの馬鹿野郎。お尻が痛いや。

（お秋は尻をなでゝ遣る。）

お秋　ほんたうに、ぶらんこは可けませんわね。

政子　弘さん、見つともないから泣くのぢやありません。そら〳〵お前さんのお好きなチヨコレートが殘つてゐますよ、男の子は泣くのぢやありません。

（小間使お菊に伴はれて早苗の娘光子と彼の喜美子「新調の友染を着て」來る。）

光子　あゝ、小母さん。（と馳寄る）

政子　光子さん、今日は綺麗なおべゞを着て好いわね。

光子　えゝ、春子さんも好いおべゞよ。

政子　あの孃さん。

光子　春子さんと云ふのよ。

政子　まあ、（と驚きの表情して）光子さんに能く似てゐること、まるで姉妹のやうね。

早苗　全くね。

（ト喜美子は政子の方へ寄りて頭を下げる。）

喜美子　小母さん、今日は。

政子　まあ〳〵、お行儀のいゝこと、おいくつ。

喜美子　八つ。

政子　さう。ではうちの弘さんや光子さんと同じ年だわね、どうか仲善く遊んで下さいよ。弘さんお前さんも一緒にお遊びなさい。

弘　いやだい、女なんか嫌ひだ、何か喰べたいな、あゝ、阿母さんお芋が喰べたいよ。

早苗　ほんたうに弘さんは喰ひしんぼうね、お前私と一緒にいらつしやい、又お芋を買つて上げるから。

弘　うむ、ほう〳〵と煙の立つてゐるのをどつさり買つて頂戴よ。

早苗　宜うござんすとも……光ちやんお菊と遊んでいらつしやいよ。

光子　えゝ、私、春子さんと遊んでゐてよ。

早苗　姉さん。遊んで來ますわ、弘さんとね。

政子　早苗さん、ほんたうに爭はれないものね、人情は……？
早苗　姉さん。貴女だつてさうでせう。
（ト早苗は弘の手を引いて去る。政子見送る。神樂の音。）
光子　あら。何の音、
喜美子　お神樂よ、ね小母樣、
光子　ほんたうに利巧な兒ね。
光子　小母さんお神樂を見に行きませう、春子さんも一緒にね。
喜美子　えゝ。
政子　ぢや、私が一緒に行きませうね。
（ト政子は光子、喜美子を伴ひ行かんとする時、上手より辯護士花井金之介來る。）
花井　あゝ、鳥渡、お待ち下さいませんか。
（政子振返つて稍驚き。）
政子　貴所は……？
花井　花井金之介です、以前は能く一つ座敷で顏を合はせましたな、はゝゝゝ。いや今日では地位が變つてゐられるから先づ初對面として御挨拶をします、高昌さんとも能くお目にかゝつてゐます、それに私は競馬好きでね、鳴尾ではちよい〳〵とお目にかゝつてゐるんですよ。
政子　さうでございますか。
花井　それで何です、實はお宅の方へ伺はうと思つてゐたのですが丁度貴女のお姿を見たものですから走つて來たやうな譯で……少し貴女に御相談があるんですがね。
政子　は、どんな事でいらしやいますか。（とお菊にさゝやいて光子喜美子お菊を去らせる）
花井　實は何ですよ、私は辯護士と云ふ職責上人樣の家庭の風波の起つてゐるのを見且つ聞いて甚だ面白くなく思つてゐるんです、それに東大路眞造君とは學友であつた關係もあり又高昌さんとも實業上や訴訟上のお取引もあり、お二人が互に意地を持つて睨合つてゐると云ふ事は東大路家のために甚だ宜しくない事と思ふのです。眞造君に聞くと高昌さんの方から絶交を宣言されたさうですね、最う七八年になるさうだ、眞造君は學識と云ひ才能と云ひ品性と云ひ當代稀なる俊才です、その人を高昌さんが友としないと云ふ事は東大路家の盛衰の上に於いて多大の損失だらうと思ふのです、貴女は今日東大路家のクヰーンでいらつしやるさうだがつまり貴女の梶のとりやうで高昌さんが利巧にもなれば馬鹿にもなるんです

ね、どうです一つ貴女も東大路家のために愼造君と高昌さんの間を調停して衰運の兆がある東大路家の財政を立直して以前にも優る資本家になさるお心はありませんか、愼造君は財政家としては若いに似合はん非凡な手腕を持つてゐられるから此際高昌さんが愼造君を片腕として和合の努力して行く事が焦眉の急だらうと私共は信じますがね、東大路家を潰すのも倒すのも貴女一人のお心持にある事だと思ひますが、どうでせう。

政子　そのお話でございますか、けれども一向私はさういふ方には權利もございませんから私の手でどうすると云ふ事も出來ません、それならば支配人の金杉さんの方に御相談をお願ひいたします。

花井　金杉君。成程、しかし貴女に伺ひますが、御支配人の金杉君はどう云ふ人物であられるか貴女の御感想を參考までに伺つて置きたいのですが。

政子　どう申上げて好いのか、私の妹婿ですから……唯主人が二とないもののやうに信用をして居りますから、東大路家にとつてはなくてはならない必要な人だらうと思ひます。

花井　はゝあ、成程、私は都合あつて金杉君の人となりは知つてますがね、そりや物の解釋のしやうでせうが、貴の人は大事を托して置く事の出來ない人物のやうに思はれますね、貴女のお妹婿でゐられるが……もし貴女に東大路家を思ふ御誠があれば……つまり眞實があつたらお妹婿でも野心滿々な危險な人を御使用なすつていらつしやるよりも心の底から東大路家を心配してゐる愼造君と御融和なすつて倒れかゝつた……いや甚だ失禮な云ひ分だが頽れんとする瀾を頽さずに起したいと考へるのです、貴女に其御誠意はございませんか。

政子　愼造樣は主人の奧樣と不義をしたお方です、私はあんなお身持の惡い人に東大路の家に出入をして頂く事は恐ろしい獸物を飼つて置くのも同じですから御斷りいたします、御免下さいまし。（とさつさと去る）

花井　（三四歩追うて）御寵愛、もし御寵愛、まあ待つて下さい。

（上手の樹蔭より小學校長谷村椿靜かに來る。）

谷村　案の定、大失敗だつたね。

花井　うむ、駄目だ、やつぱり愼造君の言ふ通り彼奴は毒婦型の女だ。

（靜かに上手より東大路愼造來る。）

眞造　花井君、だから云はん事ぢやないよ、あの妖婦に人間らしい心の閃きがあるもんか。

花井　あつたら口に風を引かせた、法廷であれだけしやべると最う千圓の價値は充分あるんだがあんな無智な男の顏色を窺つて甘える事ばつかり知つてる奴には糠に釘だ。

眞造　何しろ、高畠君の咽喉笛に喰ひついてゐるんだから恐ろしい、東大路高畠を不肖の兒たらしめるものは彼女だ、高畠君の近狀は唯彼の妖婦が吹く笛につれて他愛もなく躍つてゐるに過ぎない、そのいたましい犧牲になつて不幸に泣いてゐる淑女こそ同情すべきものだ。

谷村　數江さんと云ふ前夫人ですね。

眞造　さうです、氣の毒だよ、此頃はどうしてゐられるか、定めし不自由な生活をして居ると思つて若干の幇助をしようとしたら不義の汚名を着せられてゐる其相手の人から保護をうけては却つて疑はれるばかりと云つて突返して來た、あんな谷間の百合の花の如く美しい心の數江さんを疑ふ高畠君の頭腦は……唯自覺を待つのみだ。

花井　先づ駄目だ、高畠君は一種の中毒作用にかゝつてゐるんだよ、いよ／＼君が馬を陣頭に進めて正義の旗印の下に妖婦と惡漢を敵として一戰を試みたくつちや駄目だ。

眞造　花井君、それよりもいつか君に依賴した數江さんの兒の事だ、僕もいろ／＼骨を折つてゐるんだが解らんので弱りきつてゐるんだ。目下の數江さんとしては生みの兒を探し出して供に暮らして行くのが何よりの慰安なのだからね、それを考へると一日でも一時間でも等閑にして置く事は出來ないんだ。

花井　尤もだ、其處で俺は舊友の校長先生に賴んだのだが……なあ谷村君、一つ校長先生最う少し眞面目になつて努力をして呉れ。

谷村　努力をしてゐるよ、何しろ、大阪附近の小學校兒童に白川喜美子と云ふ女生徒はいくら聞き合せてもないんだ。

花井　郡部の方はどうだ。

谷村　無論郡部の方へも手を廻はしてゐる。目下近縣即ち奈良兵庫和歌山の方へも照會中なのさ。

眞造　此近縣に白川喜美子と云ふ兒童の名がないとすると東京方面へ行つたかな、乳母と云ふ女は東京へ嫁入をした事がある女ださうだから。

（此時、悠々乎として彼の金杉哲夫來りて眞造と顔を見合せる。）

眞造　おゝ。（と不快の顔）

金杉　これは〳〵お珍らしうございますね、ます〳〵御健在で結構で……私も此通り達者です、どうも憎まれ兒何とやらでな……。

（眞造は花井と谷村を手にて誘つて去らんとする。）

金杉　まあ、お待ち下さい。貴所に御報告をして喜んで頂く事があるんです、どうですか、何處かへ御一緒に食事にでもお伴をしませうか。

眞造　報告とは何ですか。

金杉　東大路家の事業の件です、世間では非常に悲觀説を唱へてゐる者もあるさうです、私のやうな人物がゐるので百萬長者が五十萬長者になつたと云ふやうな噂もあるらしいのですがね、事實は大に反對で今日の東大路家は三百萬長者と云つても好いでせう。殊に先月は私の計畫が圖に當つて賣る株で五十萬圓と云ふ純益が有りましたからまあ〳〵安心をして下さい。

花井　先月五十萬圓儲けて今月百萬圓損をしたら何にもならん譯だ、はゝゝゝ谷村君さうだらう。

金杉　眞造さん、いろ〳〵御相談がございますから、此邊の席貸屋へでもお伴をしませうか、久振で食事でもしながらお話でも伺ひませうか。

眞造　金杉君、僕はね、君のやうな僞善者と同席する事は好まんのです、悪からず。

金杉　はゝあ、どういふ點が僞善ですかまあ立話も出來ませんから遠慮のない處で寛ろいでお話をしませう。

眞造　貴所のやうな方と口を利くのさへも不快なのです。

金杉　何か誤解をしていらつしやるんですね、……眞造さん貴所確か喜美子云々と云ふお話をしていらつしやいましたね、何ですか喜美子のお行方がお解りですか。

眞造　君は眞面目で云つてゐるのか、それとも醉うて云つてゐるのか、別に酒を飲んでもゐないやうだが、大膽君は廉恥と云ふ事を知つてゐるのか。

金杉　はゝゝゝ大層御立腹のやうだ、貴所はお若いですね、實業家は人に向つて怒の色を見せては可けません、腹を立つても相手に不快の色を見せたり大きな聲を立てたりするのは實業家の人格を壞すものです、前途のある貴所にも似合はしからんぢやありませんか。

眞造　僕は近代人のつもりでゐるんだ、詐僞、陰謀、

そんな時代遲れの手段方法を以て實業界に飛躍しようとは思はん、日く眞實。これは僕のモットーだよ。御待遠さん、行かう。

（ト、眞造は花井と谷村と倶に足音荒く下手へ去る―折から上手より席貸の女中らしいのが卷莨入を携へて來る。金杉を見て會釋。）

女中　つかん事を伺ひますが只今此處を辯護士の花井先生がお通りになりませんでしたらうか。

金杉　花井辯護士。あゝ、今あつちへ行つたよ。（と下手を指す）

女中　さうでございますか、有難うございます、お忘れ物をなすつたもんですから。（ト下手へ小走りに行く）

泰彥　（獨語の如く）辯護士の花井……。

（ト金杉哲夫は立去らんとする。泰彥は追駈ける。）

泰彥　あ、鳥渡お待ち下さいませんか。

金杉　私かな。

泰彥　誠に恐縮ですが只今貴所とお話をしてお出なすつた方は花井と云ふ辯護士と最う二人何と云ふ方でしたらう。お差支へございませんでしたらばお敎へ願はれませんか。

金杉　（泰彥を凝視して）君は何故そんな事を聞くのだい、その人物を尋ねてどうするんだ。

泰彥　へい。何でございます、實は其何で……鳥渡私の耳へ子供を探してゐる云々と云ふ事が聞くともなく入りましたので……へい少し氣になる事がございましたのでお伺ひしたので。

金杉　はゝあ、すると君も何かい、子供を探してゐるのかね。

泰彥　へい、左樣でございます。

金杉　失禮だが君の名は……？

泰彥　早川泰彥と申します。

金杉　早川泰彥。さうか、確か數江さんの使つてゐる婆やの姓は早川だつたが若しや？

泰彥　へい。其婆やの弟に當つてゐる泰彥でございます。

金杉　さうか、ぢや何だね、君の探してゐる子供と云ふのは數江さんの生んだ兒、あの喜美子さんを探してゐるんぢやないかね。

泰彥　へい、全く其通りで……？

金杉　不思議だね、實は僕も君と同樣その喜美子さんを探してゐるんだ、そして一日も早く淋しく涙の生活を送つてゐられる數江さんを慰めて上げたいと心を碎いてゐる

んだよ。

泰彥　解りました、失禮ですが貴所は御新宅樣ではいらつしやいませんか、眞造樣と仰有りはしませんですか。

金杉　さうだ、その眞造だ。

泰彥　天恩です、私の眞心が神樣に通じて同じ心のお味方を得ましたのはどんなに幸福でせう。最う恁うなれば一日も早くお孃樣のお行方を探して完全に奥樣のお手にお渡ししなければなりません。

金杉　無論だ、處が玆に最も大きな障碍は高昌君のお妾の政子が支配人の金杉と共謀して喜美子さんを探して東大路家の財產を喜美子さんの名義に書替へ高昌君を準禁治產者にして了つて自分達で東大路家を自由にしようと企んでゐるんだ。其處で其法律上の手續やら訴訟が起つた場合の準備に名高い民事專門の辯護士花井金之介と仲善くしてゐるのさ、今日も此住吉で酒を飲んでゐたらしい。

泰彥　畜生め。太い事を企む野郎だ、ぢや今花井辯護士と一緒に行つた若い奴が金杉晋夫と云ふ惡黨ですね。

金杉　さうだ、君は決してあの男に油斷をしては可けないよ。

泰彥　大丈夫です、面を能く見て置きましたからめつたに忘れる事ぢやございません。

金杉　一つみつちりとやつて呉れ、そして君の姉さんは亡られたさうだね、氣の毒をしたね、住所が解つてゐると親しかつた媼やだから悔みに行くんだつたが實に殘念な事をした。さう／＼（と懷中物を取出して）甚だ粗末であるが香奠代りだこれを納めて置いて呉給へ、（と五圓札を取出して差出す）

泰彥　いゝえ、最うどうかさう云ふ事はなさらんで下さい、最う／＼姉は貴方のお言葉だけで定めし地下で喜んで居りませうから、どうかお構ひなく。

金杉　まあ／＼好いさ、まさか恁うして出した物を引込ませる事も出來ない、恥を搔かせては可けないね、さあどうか。

泰彥　さうでございますか、それぢや折角ですから頂戴をして置きます、難有うございます。

金杉　そして今數江さんと君とは一緒にゐるのかね。

泰彥　へい、姉の遺言もございましたので私共夫婦で奥樣のお世話を申上げてゐるのでございます。

金杉　いや、難有う、僕からもお禮を云ひます、能く數江さんにつくして上げて呉たね、で目下の住所は。

泰彥　高津三番町三十番地に居ります。

金杉　さう、何に私も一度お訪ねをして數江さんを心ゆくまで慰めて上げたいのだが……君も承知の通り高井君からいまはしい疑をうけてゐるのでね、どうか君から僕の心持を數江さんに取次いで呉給へ、一日でも半時でも僕は數江さんの事を思出して心の裡に泣かない時はないのだよ。

泰彥　御尤もでございます、お察し申します、しかし斯うして御緣があつてお目にかゝつたのですからお力を拜借して一時も早くお孃樣のお行方をお探し申しませう。

金杉　それが目下の急務さ、また相談したい事もあるから、僕と一緒に其邊まで來て呉ないかね。

泰彥　へい、お伴をいたします。

（ト、金杉に伴なはれて泰彥は上手へ去る。お菊に伴はれて再び喜美子と光子來りて鞦韆の方へ寄る。）

光子　春子さん、ぶらんこに乗りませう。

喜美子　危ないからやめませう。

光子　大丈夫よ、乗りませう。

喜美子　さう、では私ものるわ。

（ト、喜美子と光子はぶらんこに腰を下す。お菊は靜かに搖る。）

お菊　あら、お孃樣、私忘れ物をして參りましたから取りに行つて參ります、何處へもいらつしやらないで此處で待つてゐて下さいよ。

（光子はうなづく。お菊は小走りに去る、彼の眞造再び來りて喜美子の姿を見て考へながら次第に寄りて凝と顏を見る、再び早川泰彥來りて此れを窺ふ。眞造は喜美子の前へ寄る。）

眞造　此方のお孃さん鳥渡此方へいらつしやい。

喜美子　私。

眞造　さうです〳〵、さあ此方へいらつしやい。

（ト、眞造は下手の切株へ腰を下す、喜美子は寄る。）

喜美子　何あに。

眞造　（獨語の如く）他人の空似かな。數江さんそつくりだ。

喜美子　小父さん、御用。

眞造　小父さんだね、鳥渡お前さんに尋ねたい事があるんだが……お前さんの阿母さんは……。

喜美子　阿母樣……あの阿母樣はゐないの。

眞造　阿父樣は……？

喜美子　私、阿父様もないの。

眞造　阿父様も阿母様もない。をかしいね、ぢや誰の兒だね。

喜美子　私は、ばやの兒。

眞造　何、ばやの兒……ぢや貴女は喜美子さんと云ふのでせう。

喜美子　いゝえ、（と頭を振つて）さうぢやないの。

光子　（寄り來りて）春子さん遊びませう。

喜美子　えゝ。

（ト、喜美子は光子の傍へ走り行く。）

眞造　孃さん〳〵、まだ小父さんはお話がある、さ、これを上げませう（と銀貨を取出して）家へ歸る時のお土産を買つて行くのですよ。

（喜美子は眞造の前へ行きて銀貨を貰ひうけしが又眞造の手へ戻す。）

喜美子　小父さん、私、いらないの、ばやに叱られるから、小父さんは何處の小父さん。

眞造　感心だな、なか〳〵能く育てゝある、恁うと數さんの兒は……喜美子さん。

喜美子　なあに小父さん。（と、うつかり云つて口に手をあてる。）

眞造　やつぱり喜美子さんでせう。

喜美子　私は花井春子。

眞造　いや、白川喜美子でせう。

（ト、眞造は喜美子を引寄せんとする時早くツカ〳〵と泰彦來りて眞造の前へ突立つて睨む。喜美子は光子の方へ行く。泰彦は喜美子の前へ行く。）

泰彦　お孃さん、リボン買ひませんか。リボン〳〵。

眞造　あゝ、君、リボンなら僕が買はう。

泰彦　貴所には賣りません、あのお孃さん貴女は喜美子さんと仰有るんでせう。

喜美子　いゝえ。（と頭を振る）

泰彦　貴女は以前大和の吉野山と云つて櫻の木のどつさりある處で千石橋と云ふ長い橋のある處にいらしつたでせう。

喜美子、知らないの。

眞造　あゝ、孃さん此方へいらつしやい、小父さんが用がありますからね。（と喜美子の手を取つて下手へ行く）

喜美子　小父さん、何御用。

眞造　孃さんはね、阿父様や阿母様がほしくはありません

か、小父さんは、嬢さんの阿父様も阿母様も能く知つてゐるんですよ。

（泰彦、来りて喜美子の手を取つて上手の方へ行く。）

泰彦　お嬢さん、さ此リボン皆上げますよ、だから私の名は喜美子だとほんたうの事を仰有いね。

喜美子　違ふの。

（又眞造来りて喜美子の手を取つて下手へつれ行かんとするを泰彦は追つて眞造の手より喜美子を拂ひのける。眞造は又泰彦の手より喜美子を奪はんとする。と金杉哲夫来りて眞造を見る。喜美子は眞造の手を振拂つて光子と共にぶらんこにのつて靜かに搖る。三人は喜美子に手を出し得ずして睨合つたまゝグル〳〵とぶらんこの周圍を渦巻く。喜美子と光子は無邪氣に遊ぶ。）

——幕——

第四幕

高津神社の境内

登場人物

東大路高昌

數江　同夫人

喜美子　同嬢

お兼　同乳母

東大路眞造

吉富收二　同執事

早川泰彦

お時　同妻

金杉哲夫　顧問

浪子　活花弟子

すゞめ　舞妓

豆蝶　同

藝妓　甲

同　乙

藝妓仲居大ぜい

時

春四月櫻咲く頃の夜、宵の口

場所

高津神社の境内、額堂の前

道具、平舞臺。舞臺の稍上手より下手にかけて建物は古けれど莊厳なる繪馬堂前より後ろの方になるに從つ

て稍高くなつて居る。向うは高臺より遠く南大阪一帶の夜の市街を瞰したる光景中央に櫻の太き樹立ちに花開き居る。上手よりに高き大きな奉納の燈籠ありて灯入りゐる、その上手寄りに小さき祠ある。ずつと下手にも櫻の木有り、繪馬堂の内部には廣告のベンチ二つ三つ据ゑてある。

幕明く。

（東大路眞造は繪馬堂の欄干にもたれて夜の市街を見下してゐる。傍に執事の吉富牧二はステッキを携へて控へて居る。）

眞造　どうだ吉富向うを見ろ、夜の南大阪一帶の景色、繪にも描けないよ。

吉富　御意にござります。あの電燈の輝いてゐるありさまは何とも申されません。はゝあ、あれが樂天地でございますな。

眞造　王冠のやうな怪物、此頃鉢卷のやうに周圍を卷いて居た電燈が消えてゐるので折角の美しさも減殺されてゐるのは惜しい。

吉富　はい。萬事緊縮方針を執つて居ります時代でございますから……しかし何と云つても歡樂の巷は當今大阪に及ぶものはございませんな。

眞造　十年後の東京と大阪と比較して大阪の進歩發達は到底東京が及ばないと云つてゐる人が多い、最うグレート大阪の輪廓も出來たし、三十四間道路の工事はいよ〳〵開始されるだらう。

吉富　私などは見られますかな。

眞造　心細い事を云ふなよ。まだ六十ぢやないか、一つ理想だけは早稻田侯のやうな百二十歳論を持つてゐないと駄目だよ。

吉富　御意にござります。

（眞造は卷煙草を飮まんとして煙草入を探してなきに氣づく。）

眞造　しまつた。吉富、卷煙草入を忘れて來た。湯豆腐屋でなければ上本町の加藤さんの處だ、御苦勞だが取つて來てくれないか。

吉富　はい〳〵御不自由でございませう搆うござりますが、其間私の飲代を召上りましては……？

眞造　貰はう。（と朝日を一本つまむ）

吉富　（マッチを擂つて）では若松町迄行つて參ります。

（吉富牧二去る、眞造は謠曲を口吟んでゐると絃入り

の鳴物賑かに聞える。やがて、舞妓すゞめ、豆蝶の二人は走り來りて手拍子をとる。）

二人　此處までお出で甘酒進上。

（東大島高昌數多の藝妓と仲間に取卷かれて、蹣歩、蹣跚として來る。）

高昌　おい／＼待たんか、雀めは名の如く早く豆蝶は豆の如くとろ／＼と走るか、私の手を取らんと今年の誓文拂には何も買つてやらんぞ。

すゞめ　いやだんが／＼いやゝわ、とう走りまへんよつて誓文に買うておくんなはれな、なあ豆さん。

豆蝶　ほんまやわ、旦那はんほんまに意地悪やわ、あんたはんの足が遲うおまんねや。

高昌　馬鹿云へタクシーに乘つたら、なか／＼お前達には負けないぞ、此度俺の方が此處までお出で甘酒上げよだ、はゝゝゝゝ。

藝妓甲　自動車に乘つて中之島廻りまほうな、なあ皆。よろしいて中之島。

高昌　中之島、何で中之島が好いんだ、その理由が判明せんな、はゝあ判つた、中之島の稻荷さんに好きな男と一緒になれるやうに願をかけたな。

藝妓乙　逢ひまんがな、外國氣分に浸るためだんねやわ、難波橋からホテルの前を通つて市役所の前へ出て廻つて見なはれ、伊太利ゼノアへ行つたやうだんがな。

高昌　生意氣云つてらあ、松竹座仕込みの外國氣分か、ゼノアと來たね俺はもう自動車は懲々だ、堺筋で夜中にお婆さんをひいて損害賠償一萬圓さ、つゝと示談で五千圓にして貰つたが眞平々々。

藝妓甲　では此れから俥で新世界へ行きまほう。廣田屋の豆御飯おいしうおまつせ。

高昌　呆れた。お前は何處までも住吉產である事を白白してゐる、低うしやう。此れから、ぶら／＼歩いて朝日座のキネマ見物はどうだ。

藝妓乙　わてい贊成。宜しいで、そら淸水の次郎長に永久への旅。

すゞめ　行きまほ。旦那はん、わていと豆さんと腰巾着になつて行きまつせ。

高昌　好からう。おい歌をうたつて行かう、そら鈴蘭の唄をな。

（皆小唄を歌つて去らんとする時眞造はつか／＼と高昌の方へ來る。）

眞造　高昌君ぢやないか、おゝやつぱりさうだ。僕だ眞造だ。

（高昌は眞造を見る、藝妓仲居舞妓は高昌の傍を離れる。）

高昌　やア、とんでもない處を見附かつたね、君は何處へ……？

眞造　今まで好きな謠曲の會があつて湯豆腐屋に居たんだ、餘り醉うたから醉醒しに此處に來たんだ。しかし好い處で逢つた是非一度逢ひたい〳〵と思つて居たんだが、君の家へは僕の大嫌ひな金杉と云ふ奴が入込んでゐるから遂に行きそびれてゐた處だつた。全く好い處で會つたよ。

高昌　何か用でもあるのか、僕の方には何にも君と口を利く用はない筈だ。失敬をする。（と立去らんとする）

眞造　まあ、待ち給へ。成程君から絶交を宣告されて居るから僕の方から口を利くのはいけない事だらう。しかし僕も東大路姓を名乘つてゐる以上、本家分家の差別なく同族非難攻撃されてゐるのを默視してゐる事は出來ない。それで僕の方から君に御相談があるんだ。

高昌　誰れが非難してゐるんだ。攻撃して居るんだ。僕の目や耳には少しもそんな文字や聲は入つて來ないよ。

眞造　諺に燈臺元暗しと云ふ事があるね、すべて自己の事は自己の目や耳に入り難いものさ、だから僕は君に注意もし又御相談をして東大路の家名に傷をつけまいと思つて居るんだ。

すゞめ　旦那はんどないしまんね。

高昌　待て〳〵、お前達は湯豆腐屋へでも行つて待つて居ろ。

豆藏　贊成、旦那はんすぐにおいなはれや、きつとだつせ。

高昌　好し〳〵。

（此れにて藝妓、舞妓、仲居は捨臺詞にて去る、高昌はよろ〳〵と腰を下す。）

高昌　一體君は何を注意するんだ、何を相談するんだ。あの通りつれが大勢あるんだから簡單明瞭に頼むよ。

眞造　藝妓や舞妓を相手に遊蕩に耽ける時間があつたら、君の身のためだ、一つ腰を据ゑて眞面目に聞いて貰ひたいんだ。

高昌　君は醉で僕をからかつてゐるのか。

眞造　冗談を云つては困る、僕は酒を飲んでも心までは、めつたに醉はない。眞面目に君に話をして居るんだよ。

高昌　解つたよ〳〵。諄いな。どう云ふ事なんだ、簡單々々。
眞造　何かい、君は今でも僕と數さんの間を疑つてゐるかね、最うとつくに八年前の疑はとけてゐると思ふが……
……？
高昌　解けるもんか、とけないから君の出入を許さんのだ、口を利くのも不愉快なのさ。
眞造　さうか、すると君は飽までも數さんや僕を不義者にして置くのだね、まあ其の問題は好い、君の眼に數さんや僕の近状が入らんのなら、僕は世間の人々と倶に君の迂遠を笑ふばかりだ。しかし玆に等閑に附して置く事の出來ない大きな問題があるんだ。大體數さんは東大路家の何に當つてゐるんだね、同時に君の身の上は何になつて居るか、その點を能く考へて貰ひたいんだよ。今更問ふ迄もなく、君は東大路家へ養子に來たと云ふ事を、忘れはしまいな、さすれば數さんの貞操問題は二段として義理と云ふ事も、承知してゐるだらう。君の養父は君の叔父であり、君の財産は僕の叔父の殘して行つた財産だ。けれども濡衣を着せられて家を追はれ嗣ぐべき兒は奪はれ、見る影もなく儚なく暮してゐる人の生活を思ふ時、君は一滴の愛憐の涙は濺れんか、いや逝つた君の叔父、僕の叔父、又數さんの阿父樣の墓前に直面して何等恥る處はないかね、僕はそれを聞きたい。
高昌　養父には濟まんと思つてゐる。しかし數江は自己の罪を愧ぢて、消息を絶つて居るものと信じて居る。だからさういふ者に對しては何等の同情も愛憐もないよ。
高昌　隨分勝手な暴論だね。一體君は自信が有つて僕と數さんの間を疑つたか、又他動的に僕と數さんを疑つたか、一つ冷靜に判斷して見給へ。恐らく君自身の發動ではあるまい。他人の教唆、他人の煽動が主なる原因と思ふ。もし君が自身から僕と數さんの間を疑つてゐるものとしたらば、それは君と數さんの結婚以前の僕と數さんの交際を以て、さうだと信ずるのだらう。君が結婚する以前に僕は外國留學に赴いた、さうすると君は、數さんと僕の間を疑ひながら東大路家へ養子に來た事になるんだよ、それならば何故その時に數江は眞造と恁ういふ疑ひがあるから結婚はしない、養子には行かないと拒まなかつた。それを承知の上で養子になつたは、君が唯百萬長者の財産をほしいからと、世間の人から疑はれても詮方があるまい。どうだね。
高昌　君は、僕を罵倒し侮辱するのか。

眞造　イヤ、侮辱もしない、罵倒もしない。君の心持を聞いてゐるんだ。高昌君、數さんは神の如く潔く弱い人だから茲に何等の問題は起らんのだよ。若し數さんが近代人がかぶれた性格の女性であつたらば、血で血を洗ふやうな訴訟が起つてくる。その勝敗は別としてさういふ忌はしい問題を起さずに、君に冷遇され虐待されたまゝに泣き暮してゐる處に日本婦人の典型とも云ふべき數さんの美しい清らかさがあるんぢやないか、これをしも疑ふ君の頭腦が或る中毒に懸つて痲痺してゐると云はれても一言なからう、現に君の家の現狀はどうだ、棄れてゐないと思つてゐるのは恐らく君一人、世間の人、誰一人として笑つてゐないものがあるか、僕は直言するよ、君を低能者扱ひにしてゐるものさへあるんだ。まあ落着いて聞き給へ。そりや恁う云つたらば君は立腹するだらう。しかしそれが僞はらざる世間の聲であつて見れば致方はないのだ。果して今日の東大路高昌君の家庭は圓滿で事業は發展してゐるかね。藝妓や舞妓を相手に酒を飮む暇にそれを能く考へて見たらばどうだ。

高昌　僕は馬鹿ぢやないよ。考へてゐるよ。何事も默つて見てゐて呉れたら好いのだ。

眞造　さうか。おや僕は君を信じて以後の行動を見てゐよう。

(高昌は立つてふら／＼去らんとする、眞造はおさへる。)

眞造　まあ、待ち給へ。最う一つ君の反省を得たい事があるんだ。甚だ面白くない話で氣の毒だが……數さんはね、どんなに君を懷つてゐるか知れないのだよ。今僕の口から數さんの事は云ひたくない、しかし今云つて置かんければ、時がないから云ふのだ。數さんはね、一人さびしく貞操を守つてゐる。一體思想の堅實な人だから、いくら貧乏してゐても多くの子弟を集めて裁縫、生花、琴曲などの指南をして暮らしてゐられる。しかも其の傍ら行方の知れなくなつた、喜美子さんを探してゐる。僕はね、餘りに數さんの生活が悲慘だから若干の保護をしようと思つて家從の吉富を使にやつた。すると數さんの返し言葉には貴所との間を良人に疑はれて恁うしてゐるのですから良人の許可をうけないうちは、口も利きませんし、又紙一枚受ける事は出來ないと云つて斷つて來た位だよ。高昌君、數さんは今でも君を良人と信じて居る。世間の人に云はせれば、冷酷無慘な事をされてゐても、君を怨

んではゐない、唯運命と思つて君の疑の晴れる日を侘しく待つて居る。考へて見給へ。兩親が娘の幸福のためと思つて、遺した財産を養子に自由にされるばかりか、得體の解らん男女が入り込んで、唯譯もなく浪費して居る。それさへも知らぬ顏をして毎日君の寫眞へ影膳を据ゑて、無事息災を祈つて居る心のいぢらしさ神々しさ、その美しい清らかな心には僕は……恐らく誰だつて泣かぬものはなからう。もし泣かぬ奴は人間ぢやアない、獸物のやうな心の醜い奴なんだ。おい高昌君、これでも君は數さんを疑ふか、……どうか信じてくれ、反省してくれ。

高昌　解つたよ／＼最う何にも云つてくれ給ふな。頭が痛くなつて來た。

（高昌は兩手で頭をおさへる。此時以前の舞妓すゞめと、豆蝶と仲居小走りに來る。）

すゞめ　旦那はん、何してはりまんね。皆欠伸して待つてまんがな、早うおいんなはれな。

豆蝶　綱つけて引つ張つて行きまほ。なアすゞめはん。

すゞめ　さあ、おいんなはれ。（と手を取る）

高昌　好し／＼一緒に行く。眞造君、失敬するぞ。

眞造　今の事は能く考へて呉れ給へ。僕の絶交は好い、數さんだけは救つてやつて呉れ、賴む。

（高昌は、すゞめと豆蝶と仲居に伴はれて去る。眞造これを見送る時。高昌の入りし反對の方より數江と泰彥の女房お時と共に來る。不圖眞造と數江は顏を見合せる。）

數江　おゝ、眞樣。

眞造　あゝ。（と互ひにヂッと見合つて淚組む）

お時　奧樣、御本家の若樣でいらつしやいませんか。

數江　え、さうです。

お時　まあ、若樣、……お初にお目にかゝります。私は泰彥の家内でございます。どうぞ宜敷。

眞造　さうですか、蔭ながら聞いて居ました。孃やが亡くなつてから御夫婦で數さんの爲に、つくしてゐられるさうですが、其段は私からも、あつくお禮を云ひます。數さんを尋ねて行つて、何とか御相談もしたいのですが、僕と數さんは忌はしい疑をうけてゐるので、其疑がとけるまでは、親しく口を利く事も出來ないのです。數さんが難澁をしてゐる事も聞いてゐるのですけれども、そんな譯ですから、お前さんに賴んで置きます。……さうだ。（と紙入を取り出して紙幣を數多出し）　これはね、僕

から數さんへ差上げるのではありませんよ、貴所方忠實な御夫婦に進呈をするんですから、どうか生活上の不自由を補つて行つて下さい。僕の寸志です。

お時　は、はい。奥樣、どう致したものでせうね。

數江　私から何とも云ふ事は出來ませんが、……お前さんの隨意に……？

お時　もし若樣、誠に濟みませんが、折角のお志を無にして甚だ申譯がございませんが、其お金はお納め遊ばして下さいまし。私共が奥樣の御面倒を見て居りませんければ、遠慮なく頂戴いたしますが、奥樣のお體をお預りしてゐる間は、貴所樣からお金を頂きましては、又どんな御迷惑が奥樣にかゝつて參らんとも限りませんから、どうか惡しからずお思召して……。

眞造　數江さんへお送りすれば返して遣されるし、貴女へ上げると云へば斷わられる。しかし此上は、さう云ふ意味の金ではないんですから、どうか受取つて下さい。さうでないと誠に私の寢覺めが惡いのだからね。

お時　いゝえ、どうかさう云ふ事は、なさらないで下さいまし。一應泰彦へ相談しなければ、頂戴が出來ませんから。

眞造　さうですか、それぢやアどうも致し方はありません。

（數江とお時は會釋をして立去らんとする眞造は二三步追ふ。）

眞造　あゝ、數さん。鳥渡待つて下さい。貴女に是非お話しをして置かなければ、ならない事があります。

數江　眞樣。お互に不義の疑をうけてゐる身の上でございます。高畠のゆるしを得ないうちに貴所とお話をするのも心苦しうございますから。

眞造　あゝ、此一言を高畠君の耳に入れてやりたい。最う一足早いと此處に高畠君がゐたんだが……何と云ふ潔白なお心だらう。

お時　あの。旦那樣は何處へいらつしやいましてございます。

眞造　さうです。此下の湯豆腐屋にゐるでせう。

お時　奥樣。恁う遊ばしましたらば如何でございます。日頃貴女は旦那樣にお目にかゝりたいと云つてゐらつしやるんですから湯豆腐屋の門まで參りませう。せめて旦那樣のお聲でも伺つてお氣をお慰め遊ばしては……？

數江　お時さん。つれて行つて下さい。

（と數江はお時と共に眞造に會釋して足早に去る。眞

造は一歩遅れて後から追ひ行かんとする時以前の家從吉富牧二來る。

吉富　あら若様。何處へ。

友造　卷莨入はあつたか。

吉富　ちやうど小山様のお宅にございました。持參いたしました。（と卷莨入を渡す）

眞造　吉富。又用を吩咐けて濟まんがな。お前これから湯豆腐屋の前へ行つて、そら分家の數江さんが女づれでゐるから何處に住んでゐられるか見失はんやうに後をつけて行つてくれないか。私はどんな工夫を用ゐても數さんを貧苦の中から救つて生活の不如意を救はんと此儘に安閑として居られない。家さへ突とめて置けば又何とか救ふ手段もあるだらう。好いか。私は散歩してゐる。此邊を……。

吉富　はい／＼。承知をいたしました。御免を……。

（ト會釋して去る。眞造はうなづいて去る。やがて反對の方より喜美子出來りて社殿の方を振返りて手を合せ伏拜み振返つては伏拜みつゝ上手寄の小さき祠の前へ到りて柏手を打つて又拜んでゐると、數江とお時引返して來る。）

お時　（喜美子を見て）奥様。御覽遊ばせ。可愛い娘さんではございませんか。何やら一生懸命に拜んでゐますよ。

數江　ほんたうにね。一生懸命に神様を拜んでゐるんだよ。感心な子だね。

お時　誰もついてゐない處を見ると此御近所の娘さんですわね。

數江　さうらしいのね。いくつかしら。

お時　きつと行方の知れないお孃様ぐらゐでございますよ。

數江　さうね。まさか喜美子ではあるまい。

（ト此時。活花の弟子なる浪子は花を紙に包めるのを携へて來る。）

浪子　あら。お師匠様ぢやございませんか。

數江　おう浪子さん。私の處へいらつしやるの。

浪子　いつも近道は此處を拔けて參りますの……。

數江　それではちやうど好いから御一緒に參りませう。

（と數江お時浪子の三人は、捨臺詞にて下手へ去る。と、金杉哲夫吉富牧二は見えがくれに尾行して行く。金杉來りて靜かに喜美子の傍へ到る。）

金杉　お孃さん。

喜美子　御用。
金杉　貴女。何を拜んでゐるんですか。
喜美子　私、ばあやのあんばいが好くなるやうに拜んでゐるのよ。
金杉　さうですか。感心ですね。貴女の一心で乳母の病氣も癒りますよ。お孃樣は阿母樣がないんですね。確か喜美子さんと云ふのでせう。
喜美子　違つてよ。私、花井春子。
金杉　それはうその名で。ほんたうは白川喜美子と云ふのでせう。そら住吉公園で他の小父さんに云つたでせう。もしもお孃さんが白川喜美子さんなら此小父さんは阿母さんに會せて上げますよ。
喜美子　阿母さんは死んでしまつたの。
金杉　處が生きてゐるんですから。ほんたうの名前を云つて御覽、小父さんが直ぐに阿母さんの處へつれて行つて上げますよ。
喜美子　ばあやに聞いて來るわ、（と行きかける）
金杉　いや、小父さんは今乳母からお前さんを阿母さんに會はせて下さいと賴まれて來たんです。
喜美子　ほんたう。
金杉　えゝ。眞正。此小父さんの處へ行くと阿母さんもゐるし。お前さんの仲の好いお友達もゐますよ。
喜美子　お友達つて誰？
金杉　そら、御一緒に學校にゐた金杉光子。
喜美子　さう。では小父さんの處へ行きませう、だけども今日は行けないの。明日。
金杉　ぢや喜美子さんに違ひないね。
喜美子　ほんたうは喜美子、
金杉　利巧だ／＼、それぢや其處まで小父さんと一緒に行きませう。小父さんの手を引いて下さい。
（と金杉は喜美子の手を引いて去らんとする、引違ひ來れる眞造はこれを發見して吃驚なし二人を押退けて互ひに顏を見合せる。）
金杉　何をなさるか。
眞造　どうもしない。永い間、探しぬいた子供が知れたからつれて歸るんだ。
金杉　其兒は私が必要あるんだ。
眞造　何の必要がある。
金杉　お孃さん何處へも行くんぢやありませんよ。待つてゐらつしやいよ。（と眞造に向つて鋭く詰寄る）私は貴

所に話がある。（と眞造の手を取つて下手へ行きて）どうも貴所は眞面目過ぎて可けませんね。本來なればあの兒は數江さんの處へつれて行くのが至當ですがね。實は私はあの兒について年來の目的を解決したい事があるんです。それは私の浮沈に係はる一大事です。此際私は貴所に向つて低頭平身をしてお願ひします。二三日間私に貸して下さらんか。懸案の問題が解決すれば私は貴所に此報酬をいたします。報酬と云つても物質ではありません。貴所の御精神の最大慰安。それ貴所と數江さんの不義の疑を立派に解いて上げます。これは私が貴所の前で誓ひませう。そしてあの兒の必要が濟めば貴所の方へつれて參ります。先方が何と云つても、私は誓つて貴所にお返しします。どうでせうね。

眞造　さうすれば君の御都合が好からうが僕の方の都合が惡い。又不義の汚名は君の如き虛僞の生活をモツトーにしてゐる人に解いて貰はんでも僕の誠實と淸廉を以て、解いて見せる。お氣の毒だが此兒を渡す事は出來ない。

金杉　そんな意地の惡い事を云ふもんぢやありませんよ。お互の都合の好いやうにしやうぢやないですか。ね眞造さん。

眞造　僕は不正の利慾を獲る其お先棒には使はれるのは眞平御免蒙る。

金杉　お馴染甲斐にお願ひしてゐるんぢやありませんか。後生ですから。儲けさせて下さい。

眞造　諄いよ。

金杉　何つ。（と大喝する）

眞造　何だと。

金杉　青二才め。穩やかに濟まさうと思つて下手になつて賴んでゐるんだ。最う賴まん。腕ッ節にかけてもつれて行つて見せるぞ。

眞造　面白い。俺の方もつれて行かれん樣に抵抗をしよう。相手をしよう。

金杉　好し。

（と二人は同時に喜美子の許へ寄らんとすれば喜美子は姿をかくして居らざるに二人は吃驚して下手の方を見て先づ眞造は呀つと叫んで走り行く。金杉も追つて去る。）

（と喜美子は繪馬堂の床几の蔭より出來りて上手へ去らんとする時早くお兼來る。）

お篠　おうお嬢様。

喜美子　ばや。（と取縋る）

お篠　貴女は何處へ行つていらつしやるかと思つて、乳母はどんなに心配をしたか知れませんよ。およつていらつしやると思ふといらつしやらないんですもの。どんなにびつくりしましたらう。それから方々探し申してやつと彼處のお菓子屋で今表をこつちの方へ行つたお嬢様があると聞いてそして此處へ參りましたの。日が暮れてからこんな處へいらつしつては可けませんよ。貴女には怖い怖い人が後ろについてゐるんですからね。それでせんのお家も引越して此方へ來たのでせう。ね、ですからこんな處まで遊びになんぞいらつしやるんぢやございませんよ。まして夜になつてから……どうしてこんな處へいらつしやつたんです。

喜美子　私。遊びに來たのぢやないのよ。

お篠　では何しにいらつしやつしつたの。

喜美子　お參に來たの。

お篠　お詣りに。

喜美子　いつもひるま來るんだけれども今日は來なかつたの。

お篠　毎日お詣りにいらつしやるの。

喜美子　でもばやが早く癒つてくれないと、私かなしいんだもの。

お篠　えつ。おや乳母の病氣の癒るやうにお詣りをして下さるんですね。

喜美子　えゝ。

お篠　お嬢様。（と犇と抱きつきて泣く）

喜美子　ばや。だまつて來てはわるかつたわ。かんべんして頂戴。

お篠　勿體ない。勿體なうございます。乳母に罰が當ります。さうして下さるのは貴女ばかりですよ。そのお志でも乳母の病氣は癒ります。難有うございます。けれどもけれどもお嬢様が神様へ御願ひ下さいますなら乳母なんその事よりも阿母様の御難儀が一日も早くお幸せになるやうにお願ひ遊ばして下さいまし。

（トお篠は喜美子を抱いて泣く。再び貞造は下手より戻り來りて喜美子を發見する。）

貞造　おう。

（ト喜美子の方へ寄らんとするお篠は喜美子を覆ふ。金杉哲夫又來る。喜美子を發見して寄らんとするを貞

造は遮る。捨臺詞の爭論。お兼は喜美子をつれて去らんとするを金杉哲夫は追蒐けて喜美子を奪はんとしてお兼を擲退ける。お兼は金杉を擲退けんとするを金杉はお兼を突いて喜美子を抱いて走らんとする。眞造は見て金杉の手より喜美子を奪はんとする。お兼も寄つて喜美子を奪はんとして三人爭つて遂に金杉はお兼を力任せに突倒せばお兼はよろ〳〵となつて繪馬堂の柱にしたゝか頭を打つてよろ〳〵となる。金杉は喜美子を奪つて去らうとするを眞造はおさへる早川泰彦來りて眞造を惡人と信じて眞造の妨害をして遂に金杉哲夫に喜美子をつれて走る。眞造は泰彦を突退けて追ふ。泰彦も追はんとするをお兼に泰彦をおさへるを泰彦は夢中にお兼を振拂へばお兼は又石燈籠に打突かつて倒れる。泰彦も追うて去る。お兼はふら〳〵と起上つて虚呂々〳〵して逆上の氣味。月光斜めに照して櫻の花はお兼の上に降つて來る。

――幕――

大詰

産湯稲荷附近の往來

登場人物

下市村　作兵衞
お　花　妹娘
お す み　姉娘
並川健一　マラソン選手
弘　政子ノ子
政　子　高昌ノ愛妾
倉田お絹　助産婦
早川泰彦
女房お時
東大路數江
お　兼　乳母
金杉哲夫　顧問
光　子　金杉ノ娘
喜美子　數江ノ娘
東大路高昌
執事安田甫

東大路眞造

時　初夏。五月上旬。正午頃。

場所　新しく開ける產湯附近の街路。

道具　平舞臺。向うにこんもりと茂つた產湯稻荷の森と其界隈の邸宅。舞臺は空地の心にて電車工事用の材料品がいろ／＼と積んである。……幕明く……

（此日市靑年團員の商店訪問の短縮十哩マラソンの催あるので選手の知己と緣者は通行の往來に立つて旗を振りつゝ應援の體。彼方より何々商店選手と書きたる襷をかけたるユニホーム姿の選手は相當の間を置いて通る。此群集の間に彼の下市村作兵衞も娘のお花も姉娘のおすみに交つて聲援して居る。すべての選手は通過して其聲援の知己や緣者は後よりわい／＼と叫んで去る。と、作兵衞親子三人は居殘つて顏を見合せる。）

おすみ　まあ。どうしたんだらう。うちの人は通らないわ。

作兵衞　きつと眞先に行つたのと違ふかな。何でも今日は一等賞とるだつて鼻高くしてゐたゞで。

お花　姉や、きつとさうだよ。此次の通る處へ行つて見べいよ。

おすみ　さうね。しかしうちの人は補缺とか何とか云つて臨時に出たんだから迚も眞先に行くやうな事はないもの。

作兵衞　大丈夫だ／＼此次の關所へ行つて斯う／＼いふものが通らなかつたかと聞いて見よう。

お花　（彼方を見て）姉や。來た／＼健一さんが來たよ。

おすみ　あら。ほんたうに……足を痛めてゐるね。

（彼方より足を引き摺つて選手韮川健一來る。）

韮川　や、御苦勞さん。

作兵衞　一等賞かね。しつかりしなくつちや可けねえだよ。

韮川　此通り足を痛めて落伍しさうです。まあ駄目です。

おすみ　意氣地なしね。さあ私が手を引いて上げるから思入お駈けなさいよ。

韮川　迚も見込はないよ。

作兵衞　しつかり／＼。お花と私とは後押していゝ。花婿に敗けさせては下市へ歸つても面白かねえだ。

お花　後押しべいよ。

（三人は健一を押して去ると揃つて取子の兒の弘はわい／＼と泣いて來る。群集に押されて轉びし心にて

政子　一面に泥だらけの容子。折から弘を探して彼の政子は来りて逢ふ。）

政子　まあ。弘さんどうしたんです。一人で何處へ行つたんです。お菊に逢はなかつたの。

弘　逢はないや。馬鹿野郎。僕をつき倒して行きやがつた。畜生。

政子　だから一人で走りつくらなんぞ見に出るもんぢやありませんよ。光子さんを呼びにやつて一緒に遊んで居れば一番無事なんです。

弘　だつて光子さんは此頃僕と遊ばないんだ。そら金杉の小父さんがつれて來た春子とばかり遊んで居るんだ。

政子　お前さんが光子を嫌ふからですよ。もつと仲を善くしないと可けませんよ。

弘　うむ、仲善くするから光子をお嫁さんに貰つてくれるんだね。

政子　えゝ、宜うございますとも……さあお家へ歸りませう。

（政子は弘をつれて去らんとする時。助産婦倉田お紺來りて擦違つて政子を見て、不審の容子。）

お紺　あゝ。もし少々お待ち下さいまし。

政子　私。

お紺　へい。間違つたら御免下さいまし。もしや貴女樣は京都の眞葛ヶ原にお出になつた東大路樣の……政子樣と仰有いました方ではございませんでしたらうか。

政子　政ですが。

お紺　やつぱりさうでいらつしやいますか。私、あの時お兒樣を取上げました助産婦の倉田こんでございますよ。

政子　産婆さんですか。まあ、さうでしたか。隨分久し振ですわね。

お紺　全くお久しうございます。まあ〳〵お達者で何よりも結構でございます。

弘　阿母樣。何處の小母樣。

政子　お前は默つて居らつしやい。無暗に口を出すもんぢやありませんよ。

お紺　（ます〳〵不審さうに）奥樣、お坊ちやんのやうですが……あの時のお兒樣は確か女のお兒樣のやうでしたが……？

政子　あの……何ですか。お前さんに取上げて貰つた兒は女でしたが病氣で間もなく死んだのでね。同じ年に生れた兒を他所から……それが此兒なんですよ。

お紺　まあ。さうでいらつしやいますかけれどもちやうど

あの時お妹様のお腹からお生れなすつたお兄様は男のお兄様でいらつしやいましたがあのお兄様はお達者でいらつしやいませうか。

政子　あの兄。妹の兄は達者です。

お紺　左様でございますか。そして近頃は大阪の方にお住居で……？

政子　えゝ。すぐ此近くでね。赤十字病院へ行く道なんですよ。

お紺　まあ。私は毎日赤十字病院へは此頃助産婦の講習會がございまして通つて居りますんですよ。

政子　さうですか。ではお暇には一度寄つて下さい。

お紺　難有うございます。是非一度寄せて頂きます。

政子　あの。それからね、いゝえ。一度寄つて下さいな。私からお前さんにお願ひをして置きたい事があるんだからね。

お紺　はい。宜しうございます。お妹様によろしく仰有つて下さいまし。

政子　ぢや。御免下さい。

（政子は弘の手を引いて去る。お紺は見送つて去らんとする時再び作兵衛とお花來りてお紺と顔を見合はせる。）

作兵衛　やあ。お紺さんぢやねえだか。

お紺　まあ／＼作兵衛さんでしたね。何ですか。大阪へ來てゐるんですか。

作兵衛　お花の姉の方が此度大阪の方へ片附いたんでね。それに電車の便利も好くなつたしちよく／＼やつてくるだよ。お前さんは京都で産婆をしてゐるつて事を聞いたけんど此頃は大阪にゐるだかね。

お紺　えゝ。何に又京都へ歸るんです。しかしまあ今日は珍らしい方にばかり逢ふこと。東大路のお手掛と云ひお前さんと云ひね。

お花　東大路……阿父さん。そらいつか下市で噓をついたんでお孃さんを到頭見附け出せなかつた奥様は東大路と云つたね。

作兵衛　うむ。あのお可哀想な奥様のお身の上をお附きの人に聞いた時に、確かにさう云つたつけな。

お紺　おや御離縁になつてゐる御本妻様の方でせう。何しろ彼處のお邸は、亂暴なんですからね。今私が此處で逢つたお手掛と云ふのが藝妓上りで、したゝか者なんだから。

作兵衛　はゝあ。其古狸めが旦那様の鼻毛をよんでおとなしい奥様を叩き出したんだね。ひどい奴だ。

お紺　處で不思議な事があるんだよ。そのお手掛の事についてね。

作兵衛　耳よりの話だがどんな事だね。

お紺　八年前に私が取上げた時には女の兒だつたが今日見ると男の兒になつてゐるんぢやないか。どうしたんですと聞くと其時の女の兒は死んで其代りに同じ年の男の兒を貰つたと云ふのだけれどもね。その折ちやうど妹さんがお產をして其方は男の兒を生んだけれども、……これは私のあて推量だが妹さんの兒と自分の兒と何かの都合で取替へ兒をしたのぢやないかと思ふんですよ。

作兵衛　はゝあ、成程。そんな事はよく昔から御家騒動にはある事だ。女の子では家督相續させる事が出來ねえので、他所の男の兒とすり替へたのだらう。お手掛のしさうな事だ。

お花　阿父さん。そらあの時のお附きの人にそんな事なら敎へてあげたらどうだね。

作兵衛　さうだの。何かの又手掛りになるべい。お紺さん。そりや謎ぢやなからうな。

お紺　嘘なもんかね。ほんたうの事だよ。

作兵衛　好し〳〵。

（此時。上手より胸に吊せし太鼓を叩いてせめん菓子賣になれる早川泰彦來る。）

お花　あつ。（と作兵衛の袖を引いて注意）

作兵衛　（泰彦の顏を覗いて）さうだ。やつぱりあの時のお附きの人だ。こりやちやうど好い。

泰彦　天王寺石の鳥居△△のせめん菓子。お子達のお土產には何よりの品でございます。

作兵衛　もし最うお忘れでございますかね。下市の茶店の親爺でがすだが……？

泰彦　下市の……（と作兵衛とお花を見て）あゝ成程。あの時のお爺さんですか。いやこれは珍らしいな。

作兵衛　まあ。御機嫌能くつて何よりでございますよ。何ですかね。あの時のお孃さんはお見附かりになりまして……？

泰彦　いろ〳〵とあの節は難有う。實はね。やつと見つかつたんですが又惡人共のために……それで又私は此通り子供用の御菓子賣になつて探してゐるんです。

作兵衛　其れはまあ御心配な事で……しかしよく〳〵惡人

の祟られたお嬢様でごぜえますな。おゝさうだ今も娘とお前様の事を噂してゐたんだけれども確か貴所のお仕へ申上げてゐる奥様と云ふのは東大路様と云ふのでごぜえましたゞね

泰彦　東大路家の御分家のお嬢様にお生れなすつたのが、御主人が悪人共のために好い加減に胡麻化されてゐるのでね。罪もない奥様に難癖をつけて追出した形になつてゐるんです。しかし家附きのお嬢様だから裁判の訴訟を起して立派に勝たなければ廢嫡は出來ません。それで奥様は御主人の或る疑がとけて迎へにいらつしやるのを身持正しく待つていらつしやるんですよ。考へて見るとお氣の毒なもんです。

作兵衛　もし妙な事を聞きましたがね。何でも東大路家のお手掛と云ふのが女の兒を生んだのだがそれが今日では男の兒になつてゐると云ふこんだ。何でも女の兒は死んだので同じ年の男の兒を貰つたと云つてゐるさうだが妙でごぜえましねえかな。

泰彦　そりや眞正ですか。

作兵衛　ほんたうの事だと云ふので……茲にゐるのが其時の産婆でやつぱり下市生れの人でがすよ。

泰彦　實際ですね。決して嘘ではありませんでせうな。

お紺　えゝ。きつと私の考へますには其時一緒に妹さんに男のお兒さんがお生れなすつたからそのお兒とね。

泰彦　取替へたな。そして其の男の兒と云ふのは支配人の金杉貞夫と云ふ大悪黨の兒に違ひない。金杉は自分の兒を東大路家の跡目相續人にして横領を企んでゐるんだ。さうだ。恁うしちやゐられない。

（泰彦は走つて行く。作兵衛はお花と共に呼びながら追ふ。）

作兵衛　到頭とんで行つてしまつたゞ。けんどお花、これで嘘をついた時の埋合せが出來たといふものだて。

お花　全くさうだね。

お紺　私しうつかりとんでもない事を云つてしまつたが若し私の云つた事から騒動が起つたらば私は……？

お花　構ふ事がねえだよ。うちの阿父様も味方になるんだから。なあ阿父様。

作兵衛　さうだとも〳〵。何でもお天道様は曲つた事はきつと懲らして下さるだ。邪な事をした奴に勝つた試しがあるものか。

お紺　作兵衛様、ぢや又逢ひませう。

作兵衛　私はね、まだ二三日此方に逗留してゐるだから。家は谷町九丁目で瀧川商店と聞けば解るだ。暇だつたら訪ねて來て下せいよ。

お紺　難有う。ぢや御免なさいよ。

（お紺は會釋して去る。作兵衛とお花は見送る。）

作兵衛　歸るべいか。走りつくらに力瘤入れたんで肩が凝つて來た。

お花　兄樣があの工合ぢや敗けるだね、つまんねえな。

（親子は捨臺詞にて彼方へ去る、と泰彦の去りし方より彼の數江は再び泰彦と女房お時と話しをしながら來る。）

泰彦　奥樣。最うゐなくなりました。しかし大丈夫です。あれ丈の話を聞けば金杉に會つて大談判をしてやりますからね。

數江　けれども餘り荒立てない方が宜うござんすよ。これと云ふ確かな證據もない事ですから……？

（先を急ぐ心にて彼のお兼は來りて通り拔ける。）

數江　（素早く見附けて）おや。あれはお兼ぢやないかしら。あ、さうだ媼やです。喜美子の乳母です。

お時　え。乳母さん。

數江　鳥渡。乳母。あ。鳥渡呼んで頂戴。

泰彦　ちよいと／＼もし。

（泰彦は追駈けて入ると。）

數江　あの人には此れまでのお禮を云はなければならないのだからね。

お時　左樣でございますとも？

（泰彦はお兼を無理につれ戻る。）

泰彦　いや、僕は知るまいけれども來て呉れゝば解るんだよ。

お兼　今、急いで行かないとお孃樣が解らなくなつてしまふんですから。

泰彦　だから今云つた通り此方にいらつしやるんだから、委しい話をしますよ。

數江　（走り寄つて）乳母。久振りだつたね。お前さんには子供の事で永い間苦勞をかけて濟まなかつたね、私、あつくお禮を云ひますよ。（と頭を下げる）

（お兼も無意識に頭を下げて去らんとする。泰彦はお兼をおさへる。）

泰彦　まあ、お待なさい。

お兼　私はね。大事なお孃樣を探しに行くのだからね。外

に用なんどは聞いて居られないんですよ。内證だけれどもね。毒がお汁の中に入れてあるんですよ。毒が……。

數江　毒。（と呟く）

お兼　お嬢樣は惡い奴がさらつて行つたんですよ。だから此れから行つておつれ申してくるんですから放して下さい。早く行かないと大變ですから。（と袂を振切つて去らんとする）

泰彦　いや。お嬢樣は惡い奴の處にいらつしやるんぢやありません。あれは御本家の若樣なんだからね。

お兼　いゝえ。金杉と云ふ奴がつれて行つたんです。（と考へて）私一人ぢや可けない。又ひどい目に逢ふから……お前さん一緒に行つて下さい。

泰彦　いや、さうぢやない。

お時　ちよいと〳〵又どうかして金杉にとられたのに違ひない。お前樣。

數江　そんな事があつては大變だわね。

泰彦　少々變だな。奥樣に御挨拶も申上げないで……？

數江　一度逢つたきりだし八年になるからね。

お兼　お嬢樣は奥樣からお預りをしたんだからね。私からお嬢樣を奥樣へお渡しをしないと濟まないんですから。お嬢樣をとられてしまつては奥樣に顏が合はされない。

數江　いゝえ。そんな遠慮はいらないよ。お前には苦勞ばつかりかけますね。けれども喜美子は眞澄樣の處にゐると云ふんだから。どうか安心をして下さい。（と手を取る）

お兼　（手を振りもぎらうとして）早く行かないと遲くなります。お汁の中に毒を入れるんですからね。放して下さい。早くおつれ申さないと奥樣に申譯がありませんから。

お時　全く變ですわね。奥樣。

數江　乳母や。私ですよ。私も大分變つたからお見忘れたらうが數江ですよ。喜美子を頼みました喜美子の母ですよ。

お兼　（凝乎見て）奥樣。

數江　あ。やつぱり解りましたか。

お兼　奥樣。すみません〳〵申譯がございません。

數江　どうしたか知れませんが……喜美子は私共の知つて居る家に居ると云ふんですから。

お兼　お嬢樣は大きくお成り遊ばしましたよ。うちにいらつしやいますよ。うちでおとなしく遊んでいらつしやい

ますから、奥様の處へおつれ申さうとすると。金杉や手掛がとりに參りますからね。お孃樣は十五におなんなさいますと學校を立派にお卒業をおさせ申してお渡しを申します。悪黨が寄つてたかつて毒をお汁に入れますから油斷がなりません。

（数江は涙に暮れる）

泰彦　いよ／＼變だ。キ印の本物だ。

お篠　あゝ、それ／＼それ／＼聞えるでせう。ね、ぼたりぼたりあれはおつけの中へ毒を入れる音ですよ。

泰彦　奥様、いつまで係り合つてゐても氣狂ひでは詮方がありませんから私はとりあへず談判に行つて參ります。

お篠　あゝ。お孃樣が泣いていらつしやる。はら／＼ばやばやつて、大變だ。金杉が土の牢へ入れるんだ。さあ早く早く一緒に行つて下さい。

数江　（泣きながら）最う直きに喜美子は歸つて來るんだからね。氣を靜めてね。

泰彦　兎に角、奥様私は、行つて參ります。

お篠　あゝ。お前さん。行つてくれるんですか。ありがたう。私がお孃樣のいらつしやる處は知つてますからね。

泰彦　さうぢやないんだ。（と小走りに去る）

お篠　えゝ。難有う。貴所が行けば大丈夫です。私が知つてゐるから、私がちやんと知つてゐるから。

（お篠もさつさと去る。数江とお時は見送つて互ひに顔を見合せて悲歎の容子。附近の教會堂の鐘。）

――道具一轉――

東大路の洋室

時　前場と同じ日。午後

場所　東區石ヶ辻町附近の閑靜地

政子は金杉と相對して談話してゐる。光子と喜美子は離れて安樂椅子の處にて遊んでゐる。政子はいろ／＼の不平やら不快やらにてウヰスキーを呷つてゐる。

金杉　政子様、御覧なさい。あの通り仲よく遊んでゐる。爭はれないもんですね。併し高昌さんはお留守ですか。

政子　又きつと南邊でせうよ。どうせ私はあんな人に惚れて來てゐるんぢやないんですから。

金杉　成程。東大路家の財産を愛人として來ていらつしやるのかな。

政子（呷とウヰスキーを飲んで）こんなでもなかつたのですけれども……あの人の極道ともう一つ誰かの……云ひますまいよ。

金杉　處で政子さん。早速ですが豫てお約束の賣物の件ですね。今日は拜參してゐるんですが手を打つて頂きたいね。

政子　拜見をしませう　何ですたつけね。此頃は忘れぽくつて……？（又注ぐ）

金杉（喜美子を指して）あれです。彼處へつれて來てゐる數江さんの生んだ兒です。貴女に買つて頂かうと思つてどんなに苦勞をしたか知れません。

政子　金杉さん。いくら私に必要な品でも人間の賣り買ひが出來ますか。そのくらゐの事は私だつて知つてますよ。

金杉　賣買は公然と出來ますまい。しかし日本には公娼制度が設けてあつてね。やつぱり金の力でよりどり見どりどんな女でも手に入れる事が出來ます。現に貴女だつて金の力によつて東大路高昌第二號夫人に買はれて來たのぢや有りませんか。その程度の賣買で一つ買つて頂きたいのです。

政子　最う好い加減にして下さい。今日まで隨分私は貴所にいぢめられてゐますよ。あれくらゐいぢめたら澤山ぢやありませんか。

（光子と喜美子はいつか安樂椅子に二人喰附て眠らんとしてゐる。）

金杉　ぢあ何ですか。折角私が苦心をしてつれて來た賣物だが不必要だと云ふのですね。必要がなければ詮方がないから他所へ持つて行つて賣るばかりです。（と立かゝる）

政子　金杉さん。貴所はあの兒を數江さんに……ぢや私に反いて敵のお味方をなさるんですか。

金杉　貴方の方から裏切れと仕向けてゐるんですから詮方がない。どうか惡からず。

政子　隨分水臭い御料簡ね。それぢや餘り勝手過ぎやしませんか。貴所は私の妹のつれあひですよ。云はゞ兄弟ぢやありませんか。

金杉　しかし當世は黃金のために骨肉相爭ふ例は毎日の新聞を見ても澤山あるんです。私は好まんが世間が此れを敎へて呉れる。時代の力と云ふか感化と云はうか、さうなくつちや生きて行けないのだからね。

政子　解りました。では貴所、今日限り東大路家を見捨て

ておしまひなさるんですね。それをはつきり伺つて置きませう。

金杉　なか／＼どうしてそんな事はありません。死ぬまで私は當家の支配人であり顧問役で終る決心です。

政子　だつて貴所は大切な兒を數江さんの方へやると仰有つたぢやありませんか。何れ數江さんは當家の籍から除かれる人ですからね。

金杉　けれどもそれも貴女一人の力ぢや出來ませんよ。私の力にある事だ。いくら高昌さんが貴女に惚れて居ても家附の娘を籍から除く事は出來ない。しかしそれは私がある手段を用ゐれば出來るんだ。その時に最も必要なのはあの兒です。喜美子です。それを貴方は必要ないと云ふのだから必要のある方へ賣るんです。そして數江さんが此處へ復活して貴方が元の御座へ直つても私は依然として支配人兼顧問。私の地位は泰山の如しですからね。ははゝゝゝ

政子　貴所は何處まで惡黨でせう。底が知れない。呆れてしまつた。（とウヰスキーを注いで飲む）

金杉　餘りに自棄に飲むと可けませんよ。醉はない中にお取引をしませう。

政子　勝手になさい。いつも私が女と思つて甘く見てゐらつしやる。私にだつて法律の片つ端くらゐ解つてゐます。いくら數江さんにあの兒を渡しても女の兒では家督の相續が出來るもんですか。

金杉　はゝあ。貴方には弘と云ふ男の兒がありますかね。しかし弘は一體誰の兒です。弘は私の兒ですよ。光子と取替へた兒です。殊に庶子籍になつてゐるから駄目ですよ。

政子　庶子……？

金杉　どつちに轉んでも此戰は貴女には勝目はありません。そも／＼事の初めから私が勝利を獲られるやうにプランをつくつて道具立にかゝつた仕事だ。勝てますかね。どんな法律學者が來ても駄目です。

政子　畜生。（とコップを叩きつける）口惜しい。

金杉　口惜しいと云つても大體が私が此芝居を仕組んで貴女におやんなさいとお勸めしたのですからね。唯貴女は舞臺で踊つた丈の事さ。まあ／＼口を利く人形だね。どうしますかね。（と又立上つて安樂椅子の方へ行く）御返事がないとあの兒は數江さんの方へつれて行きますよ。（光子と喜美子をゆり起す。二人は吃驚して眼をさま

す。」

金杉　仲善く眠つてゐたね。さ阿父様と一緒に歸らう。此度は喜美子さんの逢ひたがつてゐる阿母様の處へ行きませう。

喜美子　ほんたう。小父さん。

金杉　ほんたうだよ。嬉しいかい。

喜美子　うれしいわ。

政子　（ヒステリックに）金杉さん。待つて下さい。貴所餘り短氣ぢやありませんか。

金杉　要らんと仰有るのを無理押に賣つけても御迷惑でせうからね。

政子　貴所がそんな事をしたら私の體がどうなるんです。少しは考へて見て下さいよ。

金杉　貴女は當家から投り出されるばかりです。それがお望みなのだから詮方がない。

政子　（決心して）買ひますよ。

金杉　買ひますね。いくらです。

政子　一萬圓。

金杉　駄目です。

政子　二萬圓。

金杉　駄目です。

政子　いくらなら賣つて下さるんです。

金杉　十萬圓。

政子　えつ。

金杉　別に驚く事はありません。東大路家は世間では百萬長者と云つてゐるがすべての財産を合はせて千萬圓はある。貴女はこの家を我が物に出來るんぢやありませんか。十萬圓はお安いものです。

政子　詮方がありません。承知しませう。

金杉　御承知か。

光子　阿父様、喜美子さんとお庭へ行つて遊んで來ても好いでせう。

金杉　好いよ。外へ行くんぢやないよ。

光子　えゝ。喜美子さん行きませう。

（光子と喜美子は手をとつて走り去る。政子は何考へてゐる。金杉は勝手に酒をついで飲む。）

金杉　御馳走になりますよ。おや政子さん。一つ現金取引でなくとも好い。小切手で結構ですから頂かうぢやありませんか。

政子　その代り金杉さん最うこれつきりですよ。

金杉　宜しい。これつきり。指切をしませうかね。（と小指を出して）はゝゝゝ。

（政子は立つて行きて小切手を書いてゐる。庭前の方から光子と喜美子の唱歌が聞える。金杉は勝手にウキスキーを飮む。政子寄る。）

政子　さ。これが最後のものでございますからね。そのおつもりで。

金杉　十萬圓。たしかに―いや難有う。しかし政子さん。これはお話だがね、今日まで貴女から報酬をして頂いた金子。貯蓄をしてゐるんですが、此十萬圓を合はせると約三十萬圓ぐらゐになりますかな。お蔭で私も相當の資産が出來ましたよ。どうです仲直りに御一緒に飮みませうか―　さア（とコップを與へて酌をする）

政子（呷と飮んで）御返杯。

金杉　難有う。

（此時。稍醉うて高昌來る。高昌二人の容子を凝乎見てよろ／＼と安樂椅子に行きてどつかと腰を下す。）

金杉　お歸り。今日は南でしたか。北でしたか。

高昌は無言。）

政子　いゝえ。金杉さん。此頃はね。又何處かへ引かして置いてあるんですよ。家にあるものは看板、他所にゐるのが可愛いものでせう。

金杉　御主人、こんな貞淑な方が孤閨を守つてゐらつしやるのに餘り浮氣をなすつては可けませんよ。

政子　金杉さん、そら私の籍の事を今日は是非とも決めて貰つて下さいよ。あの人の籍を除く事もね、一緒に。

金杉　承知しました。御主人、此間から懸案になつてゐる政子さんの籍の件です。どうでせう。早速手續きをなすつたらね。それでないと見つともないのですからな。

高昌　政の籍をどうしようと云ふのか。

金杉　御本妻としてお入れ下されば好いのです。最う八年ですからね。氣も心もお解りになつてゐるんですから。

高昌　數江の籍はどうなるんだ。

金杉　どうせ居らん人ですから當然除籍をするのです。その後へ政子さんの籍を入れなさるんです。

高昌　そりや出來ないよ。

政子　えゝ。何故出來ないのです。貴所は今更嘘を仰有るんですか。數江さんに未練がお有んなさるのですか。

高昌　僕は少し考へた事がある。數江は東大路の娘だから籍から除くと云ふ事は法律上出來ない。俺は眞造君と相

談して來た。其場には有名な民法專門の辯護士花井金之助君も立會つてゐた。すべて聞いて來た。好し數江の籍を除かんでも二重結婚にはならん。斷じてならんさうだ。

政子　金杉さん、どうしたら好いのです。しつかり掛合つて下さいよ。

金杉　いや、私は最う手を引きます。私と云ふ當家の法律顧問役があり、支配人があるのに他の辯護士や敵と思ふ人と御相談なさるやうな御主人を頂いてゐる事は出來ない。今日限り辭職をします。

高昌　辭職。宜しい。

金杉　御承知　イヤ結構です。

政子　金杉さん。貴所がそんな腰の弱い事では私の行末はどうなるんですよ。隨分貴所も自分勝手ぢやありませんか。

金杉　貴女の地位は大丈夫です。高昌さんはどうして貴女を捨てるものですか。聞いて御覽なさい。數江さんも籍を除く事は出來ない。貴女にも未練がある。大丈夫。貴女一人が頑張つてゐれば磐石です。

高昌　金杉君。いよ／＼君は辭職して吳れるんだね。

金杉　待つて下さい。辭職する前に解決をする事があります。更に僕、十年以上勤續したのですから相當の解雇手當はございませうね。職工でさへ解雇される時は千、二千の手當があるのですからな。

高昌　望むのなら出しませう。いくら手當を吳れと云ふのだ。

金杉　左樣、先づ支配人と、顧問役の解雇手當ですから。五萬圓は相當でせう。五萬圓頂きたい。

高昌　宜しい。出しませう。

金杉　難有う。いつ頂戴出來ますね。今日只今なら結構ですがね。

高昌　小切手を書かう。

（高昌は立つてデスクの處へ行き小切手を書きて紙入より實印を取出して捺印して金杉の前へ來りて差出す。）

金杉　確かに。ついでに高昌さん此方の小切手にも御捺印を願ひます。（と十萬圓の小切手を取出す。）

高昌　十萬圓。これは何だ。

金杉　政子さんから頂戴したのです。能く御覽なさい。政子さんの手でせう。

高昌　政、此十萬圓は何のために金杉にやる金なのだ。

政子　あの。それは……？

金杉　不審のある金ではありません。此れまでちよい〳〵と頂戴したお金をお預けして置いたので。その總額十萬を改めて小切手にして頂いた丈ですよ。

高昌　政。お前は私に相談しないで勝手にこんな事をしてよいと思つてゐるのか。

金杉　今更政子さんをお責めなすつた處で詮方がありません。貴方が素直にお拂ひ下されば好いのですから。

高昌　拂ふ理由はない。拂はん。

金杉　お預けした金ですよ。政子さん貴女は其事をはつきり仰有つて下さい。

政子　預りました。

金杉　それ御覽なさい。あの通りです。預けた物を拂はんと云ふ事になると政子さんが法律上の罪人になりますよ。貴所は政子さんを罪人としても好いのか。どうですか。

高昌　金杉。貴樣は……（と拳を固めて口惜しきこなし）

金杉　高昌さん。貴所が今。私に向つて反抗的のお態度をお執りになるとどんな損失が貴下の身に湧いて來るか解つてますか。私の手には完全に貴下の名譽と地位を掌握してゐるんだ。その地位と名譽を捨てる事が出來ますか。捨てられますまい、捨てられますか。捨てられるなら捨てゝ見ろ。（と大喝する）捺印なさい。捺印を……十萬圓位ゐ何だ。私のために今日までどんなに氣儘が出來たか。その報酬としても安直なものだ。何を躊躇するのだ。

高昌　好し。

（高昌は決心して小切手に再び捺印して二葉を金杉に渡す。金杉は受取つて懷中へ納める。此時、執事安田市老人と爭ひながら彼の早川泰彦來る。）

安田　こら。そんな亂暴をするな。交番所へ引渡すぞ。

泰彦　邪魔するな。

（泰彦は安田老人を力任せに突倒して侵入。高昌驚く。）

高昌　お前は何者だ。何用あつて來んだ。

泰彦　貴所は御主人でいらつしやいますか。私は以前乳母をして居りました早川辰の弟の泰彦です。御寵愛は……おゝ貴女は御寵愛の政子と云ふ人ですか。

政子　私が政子ですが。私がどうしたのです。

泰彦　最う駄目だぞ。貴樣のやうな狐はもう今日限り此家にはゐられないぞ。御主人私は今日此狐の陰謀を發見し

一寸參つたのです。

高昌　何、陰謀？

（金杉は素知らぬ顔をして立去らんとする。泰彦は見附ける。）

泰彦　あつ、御本家の若様。どうか貴所もお聞きなすつて下さい。大變な事を私は聞き込んで來たのです。

高昌　おい。若様とは誰だ。それは當家の支配人、金杉晉夫だ。

泰彦　えつ。それぢや此人は金杉……あの大悪黨の金杉。

金杉　はゝゝゝ。いや。その節はいろ／＼と御苦勞だつた。お蔭で儲けさせて貰つたよ。

泰彦　畜生。俺を欺しやがつたな。うぬ。（と金杉に向つて飛掛らんとする）

高昌　待て、待て。さつぱり容子が解らんが一體どうしたのだ。何用あつて來たのだ。何を發見したのか。

泰彦　さうでした。それからお話をいたしませう。此奴です。茲にゐる狐が悪いのです。此奴は取替へ兒をしてゐやがつたのです。

高昌　何、取替へ兒。

（金杉は又去らんとする。）

高昌　金杉、君も待て。此處一歩も去る事を許さんぞ。安田。其處で誰も外へ出ない樣に頑張つてゐろ。

政子　貴所。此人はどうやら狂人のやうですから何事を云つても眞正になすつては可けませんよ。

泰彦　馬鹿を云ふな。御主人。お宅の弘さんと云ふお兒樣は茲にゐる金杉の兒に違ひございません。そして金杉の兒になつてゐるお孃さんがお宅のお孃樣でございますよ。此事は私が神佛に誓つて申上げます。

政子　これ何を云ふのです。そんな事はありません。それは私を陷さうとする拵へ事です。知りません／＼。

泰彦　駄目だ／＼。最うちやんと其時の取上げ婆さんに何も彼も聞いて來たのだ。もし俺までも嘘だと強情を張るのなら其婆さんをつれて來ようか。どうだ。

高昌　君。それは事實だな。

泰彦　太鼓のやうな判でも押します。全くでございます。

高昌　政。貴様は……？

（高昌は行成政子の傍へ到りて、襟際をとつて引倒して打たんとするを金杉は寄つて止める。）

金杉　何をなさる。今更そんな手荒な事をしたつて詮方がないぢやありませんか。政子さんが悪いのぢやない。皆

私がした事だ。御立腹なさるのならば私をお打なさい。しかしいくら私を打つても戸籍役場を欺いた届出の本人は誰ですか。東大路高昌と云ふ名義で届け出でゝある。差詰貴所自身が僞籍の罪に問はれるばかりだ。それさへ御承知ならば問題にして御覽なさい。

高昌　あゝ俺の不明からだつた。

（高昌は頭を抱いてよろ／＼と安樂椅子に倒れる。泰彥は決心して金杉に斬つて蒐るを金杉は潛り拔ける。泰彥は飽までも斬つて行くのを高昌は見て立上つて泰彥の腕を摑へる。）

高昌　待て。待つてくれ。何をするのだ。

泰彥　どうかお離し下さい。最う我慢が出來ません。あんな奴が生きてゐては何處まで貴所を苦しめるか解りません。殺してしまつた方が世の中のためです。離して下さい／＼。

高昌　そりや可かん。どうか短氣な事をして吳れるな。私のために同情してくれる君の心は感謝するがそんな事をしては却つて當家の秘密を世間へ暴露するやうなものだ。それは養子となつた僕としては祖先に對して申譯がない。耐へてくれ。僕でさへぢつと我慢してゐるんだよ。

泰彥　それぢや殺す事も出來ないのですか。殘念だ。

（泰彥は短刀を捨てゝどつかと坐る。弘は走り來りて椅子に取縋る。）

弘　阿母樣。お腹が減つたよ、何か喰べたいよ。

（高昌は弘を見て嫌惡の情、又安樂椅子の處へ行きて悶える。再び安田老人來る。）

安田　御主人、只今御本家の若樣がお越しになりましてございます。

高昌　眞造君が……此方へ通してくれ。

（安田去らんとする時、眞造は數江を伴つて來る。）

高昌　眞造君、さつきは失禮した。

眞造　今、安田から電話で此有樣を承知をして駈けつけたんだ。すると君、ちやうど裏門の處で數江さんに會つたもんだから君とも諒解を得たし絶交も取消した顚末をのべて無理につれて來たんだ。數さん高昌君に御挨拶をなさい。

數江　貴所。御變りもございませんで……私、こんな嬉しい事はございません。

高昌　數さん。誠に濟まん、何と云つてお前さんに詫をして好いか私は其言葉がない。淸淨潔白なお前を疑つて私

は生涯の過失だつた。此通り私はあやまるから此れまでの事は許して下さい。

眞造　あゝ僕はこんな嬉しい事はない。當家の上に冠つてゐた暗黒い雲はこれで吹拂はれるんだ。

（政子は懊惱してゐたらしいが猛烈なる嫉妬より落散る短刀を拾つて數江に斬つて蒐る。眞造は其手をおさへて捻伏せる。）

眞造　血迷つて何をなさる。

數江　政子さん。私、此處へ参つたのは何の意味もございません。最う私は八年前に諦めて居ります。どうか貴女は私に代りて旦那様におつくし下さいまし。私は喜美子さへ見附かりましたらば一生二人で暮すのが何よりの樂しみでございますから、どうか誤解遊ばさないやうにお願ひいたします。私はすぐにお暇いたしますからね。

（と去らんとする。）

泰彦　奥様、貴女は何と云ふ事を仰有るんです。これぢや私共が今日までの苦勞が何の役に立たなくなります。皆貴女を御當家にお戻し申したいから喰ふものも喰はず眠りもせずに骨を折つてゐたのでございます。御短氣な事をなすつては可けませんよ。

數江　けれどもそれでは私が政子さんに濟みません。餘りお氣の毒でなりません。私は此家にゐられない運命に生れて來たんです。私がおつくし申すのも政子さんがおつくし申すのも同じ事ですからね。

眞造　何と云ふ美しいお心だらう。政子さん貴方は今のお言葉を何とお聞きなすつた。あの通り數さんは貴女に對して何等の反感も持つてゐない。又恨みとか嫉みとかさうした物を打捨てゝ自己の運命に服從しようとしてゐられる。女の心は斯くありたいものですね。どうか貴女も數さんのやうな心になつて頂きたい。

（政子はシク／＼と泣き出す。數江は再び去らんとする。）

眞造　數さんまあ待つて下さい。政子さんも貴女も子のある體です。今僕が此處へ來る時に花壇で二人の子が母親の心も知らないで仲善く姉妹のやうに遊んで居ました。僕は貴女方もあの兒のやうに睦じく、いつまでも永久につきあつて頂きたいと思ふのです、さうされば當家にとつて最大幸福、數さんも貴女には無論御異存はないでせうね。

數江　何の異存などはあらう筈は……けれども政子さんは

……？

眞造　さうですか。玫子さん、數さんの心は最うお解りでせう。貴女も打解けて仲善くしてやつて下さい。どうですか。

玫子　奥樣。濟みません〳〵どうぞ今日までの事は御勘辨下さいまし。

泰彦　あゝこれで私も安心をしました。しかし御本家の若樣、私の馬鹿から貴所を金杉と許り思つて失禮をしましたが、どうぞお許しを願ひます。

眞造　なあに、君の努力に比べればそんな事は問題ぢやないよ。

（金杉はめそ〳〵泣いて居る弘の傍に到りて手を取る。）

金杉　弘さん。今日からは小父さんの家の兒になつたのだ。さあ家へ歸らう。

弘　うむ、小父さんとこの小母さんの方が僕を可愛がつてくれるから其方が好いや、阿村樣行つても好いね。

金杉　さあ行かう。何事も解決を告げておめでたいですね。私も凱歌を奏して引上げようか。はゝゝゝ。

眞造　金杉君、君は偉い人だ實に感心したよ。しかし僕は君を眞の惡黨とは思はんのだ。君のは唯金が欲しい丈の惡黨だ。金が欲しいから惡黨の面を冠つてゐるんだらう。人間は自分によつて相當の煩悶がある。君は不自然な金を儲けたために却つて今日まで何の悶えも何等の苦しみもなかつたのが非常に不安に非常に苦痛に感ずる日が近き將來に來るだらう。今凱旋將軍の君に一言はなむけしよう。

金杉　御忠言難有う。やつぱり私は金と云ふ厄介な物を抱いて苦勞をして見たい人間なのでしよう。左樣なら。

（金杉は弘の手を引いて悠々と去る。窓の外より喜美子と光子の唱歌が聞える。一同顏を見合せる。）

―― 道具一轉 ――

東大路邸内の花壇

時

前場と同じ日の午後。暮れ近い刻限。

場　所

道具　洋館の裏になりゐる花壇の一部

平舞臺。華麗なる洋館の裏手にある花壇の心。

種々和洋の草花は美しく咲きて絢爛、その周圍にはひ

よろ〳〵と高きポプラ五六本立つてゐる。風雅なるベンチ二ツ三ツ、道具納まる。
（喜美子と光子は、手をとつてぐる〳〵と花壇を廻りて唱歌を歌つてゐる。）
喜美子　光子さんやすみませう
光子　えゝ、やすみませう。
（二人は並んでベンチに腰を下す。）
喜美子　光子さんは阿父様も阿母様もあつて好いわね。
光子　でも私、阿父様も阿母様も嫌ひなの。
喜美子　なぜ。
光子　でも可愛がつて呉れないんだもの、阿母様はね弘さんの方を可愛がつてよ。私此處の阿母様が可愛がつて下さるから好きだわ
喜美子　私、阿母様が好きだわ。
光子　喜美子さんの阿母様は何處にゐるの。
喜美子　解らないの私十五にならないと、阿母様の處へ行かれないんですつて……。
光子　喜美子さん、可哀さうね。
喜美子　けれども私、ばやが阿母様より可愛がつて呉れるから好いわ。
光子　好いばやね。
喜美子　ばやは私の阿母様よ。
光子　だからさびしくないわね。私と喜美子さんと御姉妹になりませう。
喜美子　えゝ、どつちが姉さんになるの。
光子　私八ツ。
喜美子　私も八つ。
光子　では脊の高い方が姉さんになりませう。
喜美子　えゝ。
（二人は並ぶ。）
光子　同じくらゐね。
喜美子　ではヂヤンケンをしませう。敗けた方が妹よ。
（ヂヤンケンをして三度目に喜美子勝つ。）
光子　喜美子さん姉さんよ。
（蝶一羽、ヒラ〳〵と飛び来りて二人の頭上を廻る。）
喜美子　綺麗な蝶々。
光子　とりませうか。
喜美子　私姉様だからとつてくるわ。
（と喜美子は蝶を追うて去る。光子唯一人。此時。お寺の鐘の聲聞える。）

お兼　お嬢様、お嬢様。
(お兼ふら／＼と来る。光子は呼ばれてお兼の方へ寄る。)
光子　なあに。
お兼　お嬢様（と凝乎見て）違つてゐる／＼。
光子　喜美子さんを探しに来たんぢやないの。
お兼　エ、喜美子様、お嬢様々々々。
(喜美子はお兼を見附けし心にて走り来て抱きつく。)
喜美子　ばや。
お兼　(無意識に振拂つて)お嬢様は／＼何處にいらつしやるんです。早くしないと又つれて行かれますよ。(と花壇をくろ／＼と廻る)
(喜美子はお兼をおさへる。)
喜美子　あら、ばや。どうしたの、私は喜美子よ。ばやの處へ歸らなかつたからおこつてゐるの、でもお家が解らなくなつてしまつたのだもの、私かなしかつたの。
(お兼は又喜美子を振拂つてグル／＼と花場を廻る。喜美子は追廻してお兼をおさへて取縋る。)
喜美子　ね、ばや、おこらないでね、堪忍しておくれよ、ねばや、ばや・堪忍しておくれよ、ばや。

(お兼は凝乎喜美子を見る。)
お兼　あ、お嬢様だ／＼、お嬢様だ。
喜美子　では堪忍してくれるの。
お兼　お嬢様だ／＼、難有い／＼、難有い。
(お兼は喜美子をしつかりと抱き締めて泣く。光子は無言見詰てゐる。上手より金杉哲夫は弘の手を引いて無言にさつさと去り行く。)
(此れを洋館の窓より高畠と眞造、別の窓より數江と政子は見送る。ハモニカの吹奏面白く聞える。)

――幕――

不如歸（八幕十場）

德富蘆花原作

序幕

伊香保郊外の採蕨

伊香保より水澤觀音に至る途中、上手に爪尖あがりの坂道、左右は一面の草原にして野燒に黑める土より若草萌出でゝ毛氈を敷きたる如く、錢巻、蕨、其處此處に生立ちたり。遙に赤城より上毛の平原を見渡したる背景、時は五月中旬の午後、春の日麗に照す。薄き山颪の合方に雲雀笛をあしらひ幕明く。

山木兵造（五十四五歳、羽織着流し半外套を手に持つ）妻お隅（四十位、信玄袋を持つ）娘お豐（十八九歳、華美な着附）連立ちて下手より出來る。お豐疲れたる體にて、

お豐　お父さん何處まで行くの、妾もう足勞れて歩けないわ。

兵造　然うじぶくるものおや無いといふのに、まあ此景色を見な。まるで油繪に描いたやうだ。なあお隅。

お隅　好い景色だんな。こんな處に一月もゐたら、ほんに壽命も延るやらうと思ひますせ。

お豐　可厭な事、景色なんか見たくも無いわ。武男さんが來てゐるといふから妾來たんだけれど……お父さん武男さんは何處へいらしつたのですよ、何時までも探してゐるのは待遠しいわ。

兵造　いや困つた小濱御寮だ　お宿へ行けば蕨採にいつたといふ　力彌さん……おや無かつた武男さんは此近所に遊んでゐるだらうよ。最う少し行つて見な、若し解らなかつたら觀音樣へでも參つて歸らう、其時分には武男さんも大方宿へ歸つてゐるだらうから。

お豐　お父さんは眞實に不熱心だから困るわ、妾がこんなに懊惱してゐるのを少しも察して下さらないんですもの。

兵造　懊惱だか穠腦だか知らないが、兎に角此お父樣もお前にはてこずる。子にひかされて觀音參り、さすがの山木兵造も子故の闇だ。

（ト、夫婦は種々お豐を慰めて上手に入る。）

（川島浪子の乳母お幾、千明の女中お友、花道より出で來る。お友は毛布と小荷物、お幾は籠を持ちたり。）

お友　此邊は思つたより少うございますね。

お幾　でも見晴しがいゝし、草が軟かさうだから、お敷物を敷いて下さい。

（女中心得て毛布を草の上に敷く。）

（川島武男（二十五歳、縞の春廣中折帽子）妻浪子（十九歳、九齒華美なる被布、千代田草履を穿きたり）花道より登場、捨ぜりふあつて舞臺に來る）

武男　あゝ是は適當な場所だ。眺望が頗るいゝな。浪さんさあお坐り

浪子　貴方もお坐り遊ばせ

（武男諾して座に着く。）

マア軟い事、勿體ない樣でございますね、オ、暑い。（ト半巾にて煽ぐ）

お幾　マアお嬢様、アラ御免遊ばせ、奥様の好いお色にお成り遊ばしました事。

浪子　でも旦那樣が餘り疾くお歩きになるものだから、妾もう骨が折れて……。

武男　骨が折れたつて？　然ういふけれど骨の折れるやうな處を歩くので好い景色も見られるのだ。女だつて是ばかりの事に然う凹んぢや困るね。僕が一昨日登つた相馬ケ嶽なんぞは隨分難儀も爲たがね、其代り實に絶景だつたよ。浪さんに見せたい位だ、一方は茫々たる平原に、利根の長流が流れて、一方は所謂遠山波濤の如しさ、其上から富士がチョッポリ覗いてゐるなんぞは頗る妙だ、歌でも詠めたら一つ人麿と腕比べを爲てやる處だつた。アッハヽヽ。

浪子　そんなに景色がようございますの？　行つて見たう御座います事。

武男　コンナ平坦な處でさへ閉口するのだもの……萬一浪さんが登れたらそれこそ金鵄勳章を上るよ。其は隨分嶮しい山だ、鐵鎖が十本も下つて、それを傳つて登るんだからね。僕なんぞ江田島で鍛えあげた體で、今でもスハと云へばマストでも綱へでもぶら下る男だから、何でも無くやつゝけたがね、浪さんなんぞは體育なんぞ少しも……迚も駄目だ。

浪子　彼樣な事を有仰つて、是でも學校では體操もいたし

ましたし。

武男 體操、アハ、華族女學校の體操ぢや爲方が無い。然う〳〵何時だつけ參觀に行つたら、琴だか何だかコロンコロン鳴つてゝ、一方ぢや地球の上に國といふ國はゞとか何とか歌ふと、皆が扇を持つて起つたりしやがんだり、堂々めぐりをして居るぢやないか、僕は踊の温習かと思つたら、あれが體操だとサ、ハ、、、。

浪子 マア、あんなお口の惡い事を。

武男 浪さんが、彼の時山木の娘と並んでお垂髪に結つて、何でも葡萄色の袴を穿いて、まご〳〵して踊つてゐたッけね。隨分可笑しかつたよ。

浪子 山木の娘？

お幾 （笑ひながら）お孃……奥樣、貴方もお負け遊ばさずと、澤山旦那樣の惡口を云つておあげ遊ばせ。

浪子 でも旦那樣には叶やしないんだもの。

武男 然うとも！ 何だつて僕に叶ふものか。蕨だつて僕が一番だ、何うだね、僕の手際には驚いたらう。

お幾 アラ、旦那樣のお探り遊ばしたのは杪欏が澤山まじつて居りますよ。

お友 オホ、、、左樣でございますね。

武男 馬鹿云へ、そんな物は一本だつてまじつてゐるものか、皆負惜みを云ふんだ。

お幾 いゝえ負惜みぢやございません、ねえ奥樣。

浪子 いゝわ、旦那樣が然うおつしやるなら、旦那樣の分だけ出して御覽に入れたがいゝ。

武男 いゝとも、お見せ、サア見せ給へ。

（お幾と女中とは武男の分だけ出して示す。）

オイ何處へヘゴがある？

お幾 ハイ是も！ 是も！ ヘゴで御座います。

お友 ソレカラ此方も……

武男 さうか、是は蕨ぢやないのか。

浪子 ホ、、、大分澤山ございますことね。

お幾 ざつと半分より上はございます。

武男 ヤ、失敗々々、こいつは僕の方が負けたハ、、、

浪子 降參でございますか。

（皆々盛に笑ふ。）

武男 然し浪さん、今日は實に愉快だね、第一天氣が好くつて。

浪子 本當に綺麗な空です事、碧々して、小袖にしたいやうで御座いますね。

武男　（空に雲雀の聲聞ゆ。）夫よりか、水兵の服には猶よからう。
浪子　何んとなく香ばしい好い香がするでは御座いませんか、草花の香でせうか、アラ雲雀が鳴いてゐますよ。
武男　蝶が……浪さん蝶々が飛んでゐる。
（お幾は女中に命ひ。）
お幾　何うですねお友さん、私達はモウ一稼ぎして來ませうか、府へお土産にする分を！
お友　ハア、さう致しませう。
お幾　それでは奥様、暫く此處で休んでゐらつしやいまし、私共はもう少し採つて參りますから。
浪子　さう、大層御勉強ね。
武男　オイ、僕の採る分を少し殘して置け。
お幾　はい、旦那様の分はヘゴを殘して置きます。
武男　馬鹿を言つちや可かん。
（お幾、お友は上手へ入る。）
武男　（見送りて）然し仲々まめな感心な婆やだね。
浪子　私の稚い時から居りますので、誠に親切にして呉れますし、父も彼女が附いて行けば安心してゐられると、然う申しましたツ、

武男　ヤ、全く彼の婆やは感心な者だ、併し浪さんは年の行かん内からお母さんが違つてゐたんだから、苦勞も大抵ではなからうけれども、お父様がゐるから好いサ。浪さんのお父さんは全く好い仁だよ。何となくやさしい中に一種犯す可からざる威權をもつてゐられるからね。大體軍人なぞは、只所謂軍人氣質の難しい人が多いけれども、浪さんのお父様はさうでない、僕は實に浪さんのお父さんには敬服してゐたんだ。それが僕のお父様に成つたのだもの、僕は友人や皆なに誇つて居るんだ。
浪子　さう――
武男　（立上りて）ア、實にいゝ景色だナア……。何だね浪さん、僕は海軍だから、軍艦に乘つて遠洋航海などすると隨分好い景色を見るが、然しこんな高い處の見晴しは又別だね。實にセイ〳〵するよ。ソラ左の方に白い壁が閃々するだらう？　あれが來がけに浪さんと晝飯を食つた澁川さ、其からモ少し此方に碧いリボンの樣なのが利根川、名に負ふ阪東太郎とは見えないだらう。其から赤城のからずつと東とゐ、あの下の方に何だかウヂヤ〳〵してるね、彼が前橋さ。
浪子　其から、彼の光の方に細く光つて銀の針のやうに見

えゝすのは？

武男　彼か、彼はやつぱり利根の流さ、其の先……あゝもう先は霞んで見えない。兩眼鏡でも持つて來ると好かつたね。

浪子　貴方、何時迄もかうして居たう御座いますね。

武男　では何時迄もゆつくりして行くさ。

（此時半に千々岩安彦（二十七八歳、歩兵中尉の軍服、鞄を肩にかけ、ゲートルを穿く）出來り木蔭より窺ひ見て嫉ましき樣なりしが、軈て束々と近づきて）

安彦　武男君！　武男君！

武男　（驚きて振返り）ヤア千々岩君か、何うして來たんだ。

（千々岩、浪子に一寸會釋して進み寄り。）

安彦　唐突で驚いたらう。實はね、昨日用が有つて高崎に泊つて今朝澁川迄來たんだが、伊香保は一足と聞いたから一寸來たのさ。夫れに至急君に頼みたい事もあるんだ、今宿へ行くと君達はお揃ひで蕨狩の御遊と聞いたから、路を教はつて來たんだ。

武男　然うか、其れは好く來てくれた。まあ悠くり逗留して行きたまへ。

安彦　何、明日は歸らなけりやならん、又御邪魔に成ると可かんからな。

武男　馬鹿な！　而して至急頼みたい事とは何かね。

安彦　（一寸浪子を見て）イヤ此處では少し工合が惡い。

武男　（頷いて）時に君其後宅へ行つて呉れたかい。

安彦　昨日來がけに一寸寄つて來た。叔母さんも相變らず元氣だよ。が新婚旅行が餘り長過ぎる、最う好い加減に歸りさうなものだと頻りに滾して居られたつけ。夫から（浪子に向つて）赤坂のお邸の方へも一寸伺ひましたがお變りもありませんでした。

（浪子無言にて挨拶する。）

（以前のお幾、お友、歸り來り。）

お幾　オヤ、千々岩樣、何うしていらつしやいました。

武男　おれが先刻電報で加勢に呼んだのだ。援兵が到着したから最早貴樣達には負けんぞ、陸海軍一致の行動を取れば、娘子軍百萬たりとも恐るゝに足らずだ。

安彦　非常な勢だネ、一體何うしたんだ。

武男　何ね、先刻此御婦人達が吾輩一人を窘めるから、大いにあしらひ兼ねてゐた處だ。

安彦　よし、それぢや明日僕が歸るまでは安心してゐ給へ。

お幾　へえ、千々岩樣は明日お歸りで御座いますか。歸ると申せば、ねえ奧樣！　御夕飯の支度も御座いますから、妾共はお先へ歸りますで御座いますよ。

浪子　私も、一緒にお先へ歸りませう。

武男　浪さんも歸る？　マア居るが好いさ、味方がなくなるから逃げるのか、大丈夫もう窘めやせんよ。

お幾　それではお友さん、毛布や何かはお先へ持つて參りませう。御免遊ばせ、千々岩樣お先へ。

武男　千々岩君と二人で大に食ふから澤山御馳走を拵へて置け！

お幾　はい〳〵畏りました。

（お幾お友捨臺詞にて歸り去る。）

安彥　（四邊を見廻し）僕は初めて來たが、廣々として好い處だね、大分名勝が有るだらう。

武男　有るとも。歸りがけに僕が案内してやるよ。さあ浪さん徐々出かけようかね。エヽト洋杖、浪さん、婆やは洋杖を持つて行つたかね。

浪子　いゝえ、持つては參りませんでした。

武男　しまつた、先刻休んだ處へ忘れて來たんだ。君待つて呉れ、一走行つて來るから。

安彥　洋杖位好いぢや無いか。

浪子　（心許なきコナシにて）取りにいらつしやるなら、私も御一所に參ります。

武男　何有、待つてお居でよ、全速力で行つて來る。高梨が洋行土產に呉れたのだから、失しては義理が惡い、直に歸るよ。

（ト、元來し道に走り去る。）

（浪子、安彥其後を見送り、少時ありて。）

安彥　浪子さん。

浪子　……

安彥　浪子さん！

浪子　……。（頭を掉ぐる）

安彥　お目出度う。

浪子　……

安彥　お目出度う、イヤ實にお目出度う。然しお目出度く無い奴も、何處かに居るですからね、へゝゝ。

浪子　……

安彥　浪子さん！

浪子　（屹として）何で御座います？

安彥　男爵に金、は好いものですよ、へゝゝ、いやお目出

度う！

浪子　何とおつしやるのですか？

安彦　へ、、、華族で金があれば馬鹿でも嫁に行く、金が無ければ何んなに慕つて居ても唾もひッかけん、ね、是が今の姫御前です。へ、、、浪子さん、貴方なぞはそんな事は無いですがね。

浪子　（唇を噛みキッと睨つめて）何と仰有るんです、失敬なことを！　今一度武男の前で仰しやつて御覽なさい、失禮千萬な、男らしく父に御相談も爲さらずに。艶書なぞをお送りなすつて……ソウこれからは容赦致しません。

安彦　ナ、何です?!

（ト一足進み出る途端、荷車を曳きたる農夫、妻に車の後を押させて來かゝり、突然大聲に、）

農夫　ハイ〳〵〳〵、お邪魔でがアすよ。

（ト不審げに二人の容子を見返りつゝ過ぎ行く。千々岩は是に氣を拔かれしが、更に冷笑を浮べ）

安彦　フン、御迷惑なら御返しなさい。

浪子　何をです。

安彦　何にが何をですか、お嫌なものを、其手紙をです。

浪子　ありません。

安彦　無い？　武男に渡したですか。

浪子　いゝえ。

安彦　ではお父樣……中將閣下にですか。

浪子　いゝえ、あんな汚しい物燒いてすてました。

安彦　では別に見た者は無いですな。

浪子　ございません。

安彦　乾度無いですな。

浪子　私はあんな物を他に見せる事を恥ぢます。

安彦　（忿然とせしが）浪子さん、浪子さん、一言いつておくが、其のお考へなら其迄です。然し祕密、何事も祕密ですぞ。武男君にも、御兩親にも、……萬一貴方が……でなけりや後悔しますぞ。

浪子　……

安彦　まあ、樂しくお暮しなさい。

（ト冷笑する處へ、武男洋杖を持ちて息急き歸來る。）

武男　失敬々々、ア苦しい、走りづめだつたからな。然し有つたよステッキは！　浪さん何うか爲たかい、ひどく顏色が惡いぞ。

安彦　何、浪子さんはネ、君が餘り暇取つたものだから、

迷子になつたんだらうつて、ひどく心配の體さハ、、、ハ。

武男　ハ、、、然うか、氣分が悪けりや手を引いて上げやうかね、君徐々歸らう。

（一同行かんとする處へ）

（川島家々扶田崎（年齢五十五六、洋服折鞄を持つ）宿の番頭金藏に導かれて出來る。）

金藏　ア、此處にいらツしやいました。

浪子　マア、貴方！　田崎さんが見えましたよ。

武男　おゝ田崎！

（ト驚き。）

今日は又種々な人が來る日だな。

田崎　是はお揃ひで御機嫌よろしう。

武男　何うして來たのだ、何か急用でも……

田崎　はい、實は早急に御目にかゝりまして、御相談を……

（ト千々岩の居るに心着き、意外なる面色。）

武男　何だ急用とは。

田崎　些と秘密を要しまするので……

武男　では宿で聞かうか。

田崎　（一考して）　願はくば何で御座いまする、一寸御顏拝借致しまして一應申上げて置きたいと存じまするが、實は御遊山と伺ひまして宿に御待受け致すのも心が急きまするので……

武男　然し此處といつても困るな。では斯うしよう、千々岩君と浪さんは、一所に先へ歸つて貰はう。

（浪子、千々岩。共に迷惑して。）

浪子　アノ妾は……

安彦　僕も後で君に話したい事があるからね。それぢや斯うしよう。僕は一人で其處等を散歩して來る。

武男　然うか、では浪さんは宿の人と一所に行くか。

浪子　はい一足お先へ參ります。

武男　（金藏に）　君頼むよ。（浪子に）　直に後から歸るからね。

浪子　何うぞお早くお歸り遊ばせ、田崎さん後刻に悠り。

（金藏捨臺詞ありて浪子を誘ひ歸り去る。）

安彦　僕も歩いて來る。君用が濟んだら待つてゝ呉れ、是非話す事が有るんだ。

武男　よし〳〵。

（千々岩上手へ去る。）

（武男草の上へ腰を懸ける時、遠く柴笛の音聞ゆ。）

武男　此處へ來たら可からう、而して用といふのは？

田崎　御前、實に意外な事が出來致しました。

武男　エ……何だか少しも解らんな、能く順序を追うて云ひなさい。

田崎　はい、其お話を致す前に先づ伺ひまするが、御前は唯今此處においでになりました千々岩さんの借財に、保證人の判をお捺しになりましたのですか。

武男　千々岩の？　借金の證人？　馬鹿云へ、そんな事が有るものか。

田崎　（頷き）　無論然樣であらつしやいませう。少額なら知らぬ事、三千圓の證書に御捺印遊ばすのに此田崎に一應の御談の無い筈は御座いません。然るに一昨日の事で、根室粂造なる者が突然お邸へ參り當家御主人の御保證を信じて千々岩安彦氏へ三千圓を用立てた處、契約期限を過ても千々岩氏が債務を果して下さらん。しかも突然何れへか轉宅なすつて、參謀本部へ行けば何時も職務上旅行したとて面會が出來ん。で是非無く此方へ出た次第ゆゑ、御當家に於て即刻債務を果していたゞきたいと云ふ談判で御座います。

武男　是は驚いた、千々岩が金を借りたか借りんか知らないが、吾輩は保證に立つなぞと、那樣事は斷じて無い。嘘だ。

田崎　イヤ嘘位では濟みません。

武男　（激して）　何故濟まんか。

田崎　御前の印が御座います、歴然とした。

武男　益々怪しからんぢやないか。知らん者が印を捺す道理が……若し有つたら贋判だ、私印僞造だ。

田崎　御意の通りで御座います。

武男　第一千々岩が、あゝ千々岩が詐欺をやつたのか。

田崎　あの方は容易ならん事を爲さいましたので、私も大方事情を推察致して、實に當惑致しました。

武男　で、お前は確かに其證書を見たか。

田崎　はい、證書は然るべき手續を踏みました物、其他千々岩氏より根室への書面、何れも疑ふ處は御座いません。

（武男憤懣に堪へず、黙考しつゝ上手下手と歩く。田崎はその跡を追ひながら。）

田崎　御前、如何致したもので御座いませうか。先方へは御歸邸迄待つやうに申聞けましたが、なか／＼承知致しません。萬一今日中に支拂致さねば裁判の手續を致すといふので。

武男　訴訟されたら川島の恥辱に成るのか。
田崎　無論で御座います。又其私印偽造の事を申立てました日には、千々岩さんは刑法の罪人で御座います。
武男　其は酷ぢやないか。
田崎　では御座いますが、千々岩様を罪人になすつては貴方が御隠居様へお済みに成りますまい。實はな、御隠居様も此事をお聞に成つて、殊の外御心配で、手紙や電報では事が足りんから、お前兎に角三千圓の金を持つて伊香保へ行き、能く武男と相談して呉れと云ふ仰で、就ては今日中といふ請求では御座いますし、根室といふ者を連れて此處へ參りましたので……
（ト折鞄より三千圓の小切手を出して武男に渡す。）
武男　（沈思して後）田崎其金貸に會はう、宿に居るのか。
田崎　いや、彼處に待たして御座います。然しお逢ひ下すつて何う遊ばすので？
武男　僕の隨意だ、呼んでくれ。
（田崎、木立に入り金貸根室を連來る。）
田崎　御前！　此仁で御座います。
武男　（無愛想に）君が千々岩に金を貸したと云ふんだね。
根室　左樣で御座いますよ、實は彼の千々岩さんにも困り切りますので、此期限はもう先日で切れて居りますにも關らず……
武男　那樣事は聞かんでも好い。證書を見せ給へ、其吾輩の印のある……
根室　（鞄より證書を出し）是で御座います、保證人は貴方樣！
武男　よし。
（ト證書を見て、切手を渡し。）
其で義務は濟んだんだね。
根室　（狼狽しながら）三千圓！　十五銀行！　はい是で濟みましたので。
（武男は懐に證書を收め。）
武男　では歸つて呉れ給へ、もう用は無からう。
根室　はい何で御座います。（田崎に向ひ）何うも種々御手數を懸けまして、私は是でお暇を致しまする。
田崎　御隨意になさい。
（根室叩頭して去る。）
田崎　誠に穩な御計らひで、是で事無く濟みました。御隱

居樣も嘸御滿足で御座いませう。

武男　（武男振返り。）田崎、お前は宿へ行つて悠然休息して、明日歸つたらよからう。僕は千々岩が用が有るといふから一寸話を爲て行く。

田崎　はい、然し千々岩樣にお逢ひになつて若しや……

武男　心配して呉れるな、僕に任して置け。

田崎　では御先へ參りまする。（田崎下手へ去る、入違ひに千々岩、山木兵造と連立ち出來り。）

山木　是は若旦那！

安彦　武男君、今散歩して居るうち偶然山木君の一行に逢つてね、丁度好い折だつたから山木君だけ引張つて來たよ。

武男　……

安彦　處で早速君に御願する件にかゝるがね、實は僕大いに困る事が起つて金が必要なんだ、其が又焦眉の急でね、君の歸京を待つて悠り話す意だつたが、何うも其時間が無い、で此處迄態々やつて來たといふ次第なんだが。

武男　用といふのは金を貸せといふ事か。

安彦　眞に面目無いが然うなんだ。他の者には言へないんで、兄弟同樣にしてゐる君だから折入つて賴む。就てはね、僕にしては、少しく大金でも有るから、幸ひ今逢つた山木君を證人に賴んで、何うでも君に都合をしていただきたいんだ、武男君、僕が必死の場合だから何うか承諾して呉れんか、金高は三千圓。

武男　三千圓？（ト暫と千々岩を見て）よし、承知した。

安彦　承諾して呉れたか、それは難有い。（山木に）君武男君が承知してくれたから、先刻の件を君からもね。

山木　宜敷う御座います、然う成れば私も決して否やは申しません、宿へ戻つて早速判を。

安彦　（山木に）難有う。（ト證書を出して武男に）是へ、山木君の判を捺して貰ふから、處で金は……丁度田崎が來てゐるやうだから、君から一寸話して貰つて東京へ歸つたら直にでも。

武男　金は此處に持つて居る。

安彦　此處に……三千圓此處に？

武男　持つてゐる。（懐中より先刻の證書を出して）では三千圓確に今渡す。

安彦　（手に取りて）ヤ、この證書は、この證書は……

武男　罪が無いといふのか。男らしく罪に伏し給へ。

安彦　……

武男　千々岩、モウ吾輩は何も云はん、親戚のよしみに、決して私書僞造の告訴も起さぬ、三千圓は僕の手から拂つたから、高利貸の督促が參謀本部へ行く樣な事もあるまい。

安彦　(冷汗を拭ひつゝ)イヤ君、君に然う云はれると實に面目無いがね、實は進退ならぬ……

武男　何が進退ならぬのか、德義ばかりか法律の罪人に成つて迄、高利を借る必要が何處にあるか。

安彦　まあ然う云はずに聞いてくれ給へ。實はさし迫つた金が入る、借る處は無し、君が居て呉れると一も二も無く相談を爲るのだつたが、生憎航海中だつたので、叔母さんには何うも云ひ惡いだらうぢやないか、と云つて急場の事だし、濟まん、……實に濟まんと思ひながら先月は少々當が有つたからして其金を返してから、僕は潔く告白せうと思つて、ソレでつい……

武男　馬鹿を云ひ給へ、潔く告白せうと思つたものが、何故默つて、僞つて、別に三千圓借りようとするのだ。

山木　(見兼ねて中に入り)何うぞ若旦那、マア／＼、お靜に……何か詳しい譯は解りませんが、高が二千や三千の金で、貴方がた御親類の間が……マア／＼此處は一つ御勘辨下すつて、それは千々岩さんが惡い、惡いですが、こんな事が表沙汰に成ると千々岩さんの身が立ちませんで。

武男　だから三千圓は拂つた、訴訟は起さんと云つてゐるぢやないか。

山木　其は其として此處の處も。

武男　山木、君の事ぢや無いから控へて居たまへ――いゝか千々岩、吾輩最う何にも爲ん、然し今日限り絶交だ。

安彦　絶交――。フム別に悲しくも無いが……

武男　然うか、絶交されても構はんが、金は出して貰ふといふのか、腰ぬけ奴!

安彦　ナニッ。

武男　何とは何か。(ト忿然として立向ふ)

山木　(驚きて)マア／＼此處は私に免じて。

(ト武男を抑へる。)

武男　千々岩、もう何もいふまいと思つたがナ、一言だけ云つてやる、吾輩も君とは子供の時から一所に育つて、君を兄と思つてゐた、今後も互に力に成らう、及ぶだけ

盡さうと切に思つてゐたのだが、然し君は其忠實な吾輩を賣つた、吾輩を賣つたんだぞ。今だからいふがな、先達ても友人が來て、千々岩といふ者は實に怪しからん、此頃では時々參謀本部……否こんな事は僕の口からは云へんが、大分金錢を浪費して居る。陰で不正な事業に手を出して居る、怪しい者と出入をして居る、實に怪しからん、軍人の風上にも置けん奴だから、あんな者とは義絶をしろといはれたんだ……けれども僕はそんな奴とは知らん……貴樣を信じて居つたから、イヤ千々岩に限つてそんな事はない、夫れは人が中傷をするんだ……と僕は自分の名譽にかけて貴樣を辯護し保證してやつたんだ……
……然るに僕にさへかういふ事をするんだもの……今に至つて思ひ當つた！　オイ千々岩、最後に云つて置く、軍人の名を汚すな。恥を知れ、恥を知れ、金丈けは君にやるから。

（ト云捨てゝ下手に去る。）

山木　（見送りて）ハヽヽヽ、相變らずのお坊ちやんですナ、然し絶交料の三千圓は、こいつは好い儲物だ。

（千々岩無言にて證書を引裂口惜しき思入。）

（此時上手山の上よりお澄お豐出で來り）

お豐　お父さん、武男さんは何うなすつて？

山木　えゝ又武男さんか、夫れ處ぢやないよ。

（ト此もやう。）

――拍子幕――

二幕目

川島邸座敷

日本造、奥幽しき十二疊の一室、正面上手寄に床の間。これに並びて佛壇あり。上手障子の外は廊下にて庭園の一部を見晴らし、下手に折曲げて襖を立切る。季節は秋の初。

床を後にして紫檀の卓を据ゑ、浪子や、衰弱の體にてこれに凭り書籍を繙く。傍に老婢お幾氣遣はしげに覗きゐる。

（琴六段前唄の合方にて。）

幕明く

（小間使お清立出で、）

お清　アノ唯今病院の富岡樣へお使を出しましたら、直に上るといふ御返事で御座いました。

浪子　ア、夫れは御苦勞でした。

（お清は下手の襖を明けて退場す。お幾は少し席を進め。）

お幾　御樣、此お座敷は日當りも好し、誠に晴々といたします。氣が晴れると申せば、過日、伊香保の時ははんたうに好い保養をいたしましたね。

浪子　然うね、今でも思出しますよ。

お幾　あれからお歸りに成ると間も無く御病氣ですもの……

浪子　久しいわねえ。妾は自分ながら齒痒くて一層やうが無いわ、夫れに昨日から間斷無しに咳が出て……

お幾　其は矢張時候のせゐで御座いますよ、然し病氣は何によらず隱して置なんぞ持ちますよりも、空咳でも出ました方が好いので。

浪子　幾はまるでお醫者樣のやうだね。

お幾　ホヽヽ、何でも存じて居りますよ。それにお孃樣……御樣、貴方のお生れ遊ばした時から今迄一日でもお傍を離れた事の無い幾で御座いますもの、自分の事よりか貴方の事は能く存じて居ります。

浪子　然うねエ、それにつけても爺やはほんたうに達者で羨ましい。妾も此方へ來てから斯うも彼うと氣ばかりあせるけれ共、身體が弱くつてはねえ。

お幾　御丈夫で御座います。長い間の御苦勞が、自然お身體にも障りますのです、お八歳の時からお母樣にお別れ遊ばして、今の赤坂の奥樣はまるで御氣性の變つたお方でいらつしやいますから、それはお察し申して居ります。いくら奥樣が御意地惡が深くつても、矢張氣難かしい所迄はお目が屆きませんからね。此方樣へいらつしやる時でもお母樣は御自分が華美がお好きなくせに。（胸迫りて）あゝ先奥樣がいらしつたらばと、幾は蔭で泣きました。

浪子　もうそんな事は言つておくれでない、私は片岡の浪ではありませんから、（寂しく微笑み）川島武男の妻に樂しいわ。

お幾　これは仰有らないでもほんたうにお幸福でございます。此方の旦那樣は珍らしいお和しい方ですから。けれ共其旦那樣もお留守勝で……奥樣、嘸辛う御座いませう。

（浪子フト咳入る、お幾驚きて介抱する所へ、武男の伯母慶子（六十歳位）上手障子を啓けて入來る。）

慶子　浪どん氣分は何うですな。

浪子　（席を讓りて）今日は大分宜敷いやうで御座います、唯咳が少し……

慶子　（持病のレウマチスに惱める樣にて蒲團の上に坐し）咳なぞ出るに障はすみな毒しちやいけませんぞ、病人は養生が仕事、何でも早う養生してな。

浪子　いつも寢んでばかり居りまして、誠に申譯が御座いません。

慶子　ソ、そいつが他人行儀、（鷹揚なる態度にて）ナア私は大嫌ひぢや、惡いたら惡いで今言つたやうに休んでゆるりと休息するが可し、又床につくといふでなくば氣を引しめてちつと奉公人の指圖でも爲るがようごわす、武男の嫁ぢやて、何にも武男の世話計りがお役ぢやごわせん。それから聞けば武が轉地養生しろと云うたとかな。

浪子　はい、然うも仰しやいましたのですけれど……

慶子　轉地養生もねもんぢや、（ト苦々しげに）病ぢやと云ふに體動かして見なさい、餘計惡うなる、病氣はぢいと寢ておると癒るもんぢや。武は年が若かでな、醫者を變へるの、やれ轉地をするのと騷ぎ申す、私達が若い時分は、腹が痛かてゝ寢る事無く、產後だて十日と寢た事アありません、世間が開けて來ると皆が弱うなり申すでなアハ、、、。

お幾　（聞兼て）然うは仰しやいますが、ソレは御隱居樣。

慶子　えゝ、お前に言ふのぢやありません。（浪子に）誰どん私は少とお前に言ひつける事が有るが。

浪子　はい、何の御用でございます。

慶子　此幾を實家へ歸して貰ひたいのぢや。

（浪子お幾共に驚く。）

浪子　幾に何ういふ粗相がございましたのか存じませんが、惡い所は私から幾重にも御詫を申上げます。何うぞお免し遊ばして下さいまし。

慶子　勘辨なりません。今聞いとりや何ぢや、幾は主人の蔭口を言ひをる。それも若いものなら未だしも、年をとつて人の取締りをせうともいふ者が・主人の蔭口とは何事です。

浪子　それは……

慶子　赤坂のお邸ではそいで濟むか知れんが、川島ぢや承知なりません。直に暇をお出しなさい。

浪子　誠に申譯がございません。（とハラ〳〵してお幾に）お前も能お詫を爲て……

お幾　御隱居樣・年甲斐もございません、全く私の不所存でございます。以後は愼しみますから……何うぞ此度だけは……

慶子　お前に誰が言へと申すのぢやありません。浪どん私の命令を用ひなさらんか、何うでも出さんと言ひなはるか。

浪子　いゝえ然樣な譯では御座いません。（と窮して）ではお母樣、せめて武男でも御歸りまで。

慶子　武男が何を知つた事か、家の事は私のかゝりぢや。第一片岡のやうな大家なら知らん事、嫁に乳母まで添へて貰うてはとんだ迷惑な、何事によらず大家の方は違うたもんぢや。フ、今に武男が五器碗下げるやうにならにや好いが。

（浪子悄然として俯き、お幾は泣く。）

（此時家扶田崎（紋附羽織袴）入來り、下座に着き。）

田崎　奥さん富岡さんがおいでになりました。

浪子　然うですか、少時お待ちを……

田崎　病室の方で御待受なさいますから、然樣御承知を。

慶子　お醫者樣かの、オ、田崎お前に計はせる事がある、此幾を今日から暇を出しますでな。

田崎　えゝ、それは如何樣な儀でございまするか。

慶子　何うでも宜敷い、家風に合はんで出します。

田崎　はい、然し其には又御前の思召もございませうと存じまするが、お話も致さずに計ひまして、後にお叱が出ますやうでは却つて宜敷からん儀かと存じまするが。

慶子　武男が何と申さうと、幾は私が出します。お前私に逆らひなはるか。

田崎　（迷惑して）決して然樣な譯では御座いませんが。

浪子　（詮方無く）田崎さん、私も承知致して居りますから何うぞ幾はお歸しなすつて下さいまし。

お幾　（狼狽して）奥樣……

浪子　歸つてお呉れ、ね。お前が悪いから最早お詫の爲やうも無い。

お幾　はい――

浪子　けれど直に赤坂へは歸れまいから、加藤の叔母樣の所へ行つて實家への取なしは萬事お頼み申すが可い、（慶子に）お母樣、幾は加藤の方へ遣しますがそれで宜敷う御座いませうか。

慶子　それは私の知つた事ではありません、御勝手ぢや。

浪子　早くおいでよ。

お幾　（泣きながら）それではお暇をいたゞきます、お隱居樣御機嫌宜敷う、奥樣……

（疊に取着きて泣伏すを、田崎介抱して連去る。慶子

と浪子とは思ひ思ひに少時無言の後。）

慶子　武男は大分遲い事ッチやが、今日は何處ぞへ廻ると言ひましたかな。

（浪子答へんとして咳入る。）

え、何處ぞへ廻るのかな。

浪子　（辛うして）はい赤坂へ立寄るかも……

慶子　赤坂へ？　又赤坂へ行きをつたのかい……え、然う申しましたかな。

（浪子烈しく咳入り苦悶する。）

慶子　浪どん、浪どん。（トさすがに少しく驚き）誰も居ぬか、松、松。

（女中お松走り來る。）

慶子　富岡さんを早う！

（女中走り去ると間も無く富岡醫師導かれて奥より出來り直に病人を介抱する。）

（浪子少しく人心地つきて。）

浪子　ア、もう落着きました。

富岡　兎に角此所にいらつしてはいけません、御病室の方へ。

（浪子立たんとして慶子に氣を兼ねる中、突然喀血するをはんけちにて抑へる。醫師何心なく覗込みて、）

富岡　ア、御喀血！

（皆々驚く、浪子惘然として倒れんとするを、富岡、召使を急して病室に運び去る。慶子は此體を見て狼狽して隱居所へ歸り行く。）

（其あとへ山木兵造、娘お豐を連れ入來る。女中お松蒲團を敷きて。）

お松　只今御隱居樣へ申上げますから、少時お待ちを願ひます。

（上手隱居所の方へ行く。）

お豐　（父兵造の袂を引き）お父樣、武男さんはお留守なんですつてね。

兵造　（煙草入れ拔き取りながら）又武男さんか、お前にも困つたものだ、お父さんはな、お前の爲めにどんなに苦勞してゐるか知れやしない。今日は御留守に無理にもお願ひ申すつもりなんだが、其代りお前も一生懸命うまくやつて呉れなくつてはお父樣も泣いちまふぜ。

お豐　それや乾度、武男さんの氣に入つて見せるわ。

兵造　武男さん斗りぢや無い。第一御隱居の氣に入るやうに爲なけりやなあ。（四邊に氣を配りながら）此家の御

隱居といふのが又名代のやかまし家なんだから、家でも能く言つて聞かせた通り如才無くやるんだぞ。

お豐　ようございますよ、わたしちやんと……方寸にあるわ。

兵造　方寸だ？　生意氣な事を云ふな。

（慶子入來る。）

兵造　（お豐に目くばせして）是は御隱居様。

慶子　お丶山木さん、待たせました。

兵造　何う仕りまして。

お豐　（手を仕へ）御隱居様、今日は……

慶子　オヤ、お豐さんか、能く來なすつた。お父様と一所は珍らしいナ

兵造　實は御隱居様、早速ですが今日は此のお豐の事に就きまして、折入つてお願ひに出ました。

慶子　お豐さんの事で……ホウ何ですか。

兵造　外の事でもございません、豐もナ、今年は最早十九にも成りますので、徐々好い口でもありましたら緣づけなければ成らないのでございますが。

お豐　（祕と兵造の袂を引く）

兵造　（お豐に）いゝよ解つてゐるよ。（慶子に）所が御隱居様、此娘も今迄手許で斗り育てまして一向世間の味を知らんものですから、イヤ我儘放題で……

慶子　然うでも無い、中々好い娘さんにお成りぢや。

兵造　恐れ入ります。就きましては、かやうの事を願ひまして甚御迷惑ではございませうが、如何なものでございませう、一ツ御隱居様の御手許にお置き下さいまして、行儀作法を見習はして戴く譯には參りますまいか。

慶子　（大に得意の體にて）然うかな、山木さん是は好い所へ氣が着かれた。今の女は學問のと其様な事ばかり云ふが、お化粧したり夫の傍へ寄る事ばかり知つて、行儀作法はまるでお留守ぢや、わたしは昔者のせゐかも知らんが、那樣女は大嫌ぢや。

兵造　全く仰の通りでございます。豐にも一通り學問遊藝は仕込みましたが、何分其方の修行をさせたいと存じまして、かういふ事は御隱居様の外に願ふ方はございませんから、今日は娘を連れてお賴みに出たやうな次第で。

慶子　解りました、然し山木さん、貴方は其つもりでもお豐さんが、辛抱出來ますかの？

兵造　へい、それは豐も自分から進んで斯うして參つた位で。

お豐　何うぞ御隱居樣、宜敷くお願ひ申し上ます。私は此方にさへ居れますのなら。

（トひそかにお豐をつゝく。）

兵造　（慌てゝ制し）ヘイ、此通で御座います。

慶子　イヤ、感心なものぢや、わたしは乾度頼まれませう、それに幸……何ですよ、浪どんが近頃病氣しての。

兵造　然樣ださうで、さぞ御心配でございませう。

慶子　武が轉地養生にやるというて居るから、家も無人に成つて困る所ぢや、直に引取りませう。

兵造　早速の御承引で有難うございます、お豐能くお禮を申しな。

お豐　御隱居樣、有難う存じます。

兵造　時に、奥樣の御病氣にもお困りで御座いますナ。

慶子　ヤ、誠に當惑しますよ、何しろ肺病と申してはノウ。

兵造　肺病は實に恐ろしい病で、それに自分斗りなら宜敷うございますが、彼の病は人に傳染しますからナ、餘計難儀でございますよ。

慶子　わしも其事で心配しますのぢや。

（ト思案する。）

兵造　御隱居樣、それから私はもう一ツお願ひが有りますので。

慶子　フーム。

兵造　先日も一寸と申し上げて置きました千々岩さんの事ですが。

慶子　ア、安彦の事なら何うか捨てゝ置いて下さい、彼の話は承知成らん。

兵造　然う仰しやるのは御尤もでございます、千々岩さんが全く悪いのですから、けれど又千々岩さんの方にも餘儀無い譯がございましたので、申さば九死一生と云ふ。

慶子　それは先度も貴方が取なしで承知しました。わたしぢやて察しもする、又たつた一人の甥でござる、何も好んで遠ざけたくもありませんが、其所には武男への義理も有るでナ。

兵造　重々御無理はございません。然し千々岩さんも外に御親類と云つては無し、心からとは云ひながら、たつた一人の伯母樣にお目にかゝる事の出來ないのは實に情無いとナ、實際です、今度は心から後悔して、世を果敢なんでおいでなさいます。

慶子　安彦がナ、フーム、後悔は當りまへぢやが、那樣弱い事云ふなぞは、軍人にも似合はん。

兵造　イヤ其程弱い事を云はれるのは、よく／＼の事でせう。私も全く見兼ねまして、マア今度の所だけは、一ツ御隱居樣にお縋り申して以前の鞘に納めると、固くお約束して來たやうなわけです。

慶子　（考へて）いろ／＼貴方にも御心配を懸けました。其程云うて下さるなら、わたしは貴方に免じて會つてやつてもえゝが……

兵造　お會ひ下さいますか。

慶子　唯武男に此事が知れると濟まんで、武の居らん時に來いと云うて下さい。

兵造　武男さんのお留守の時……では今日は如何でございませう。

慶子　今日なら都合がよい、と云うて安彦が間に合ふまい。

兵造　實は打明けて申しますが、今日千々岩さんをお連れ申して來ました。

慶子　今此所へナ？
（意外の體。）

兵造　お話を濟ます間、玄關に待つて居られます。

慶子　然うですかい、ソレぢや結句早う呼入れた方がよか。
（ト女中お元を呼ぶ。お元入來る。）

慶子　玄關に千々岩が居るさうぢや から此所へ通してくれ。
（お元心得て入る。）

兵造　御隱居樣、千々岩樣もいろ／＼お話もございませうから、私共は其間お庭でも拜見して參ります。

慶子　それぢや然うして下さい。

兵造　お豐にもお邸の勝手を教へて置きませんと、早速御用に差支へますから、では御免を……

お豐　御隱居さま一寸行つて參ります。
（兵造お豐去る。）
（入違ひに千々岩安彦（軍服のまゝ）悄然として入來り座に着く。）

慶子　オ、安さんか、しばらくぢやつた。

安彦　伯母さん、何とも申譯無い不始末を致しました。私は斯うしてノメ／＼と貴方の前へ出られた義理ではございません。

慶子　否々、其事は最う何にも言はんが可い。お前さへ後悔して今後氣を着けてさへ呉れゝば、それでわしも云ふ事は有りません。

安彦　（汗を拭きながら）其お慈悲深いお言葉を聽くにつ

けても、私は實に恥入ります。

慶子　マア、其事はお互に是ぎりぢや。時に安さん、何か變つた話でも有りますかな。

安彦　別に……ア、然う云へば山木から聞きましたが、浪子さんは大分お惡いさうで、叔母さんも案んだ御心配ですな。

慶子　其事さ。二月も三月も病ひ通しで金は使ふ、心配は爲る、一向埒もあきませんぢや。のう安さん、かういふ時分にや頼もしか親類でもあつて相談するこつちやが、武は彼の通り子供。

安彦　其處です、叔母さん。今も申した通り私もかうしてノコ〳〵上られる譯ぢや無いのですが、叔母さんに對しても又武男君に對しても此まゝ默つて見て居られないですからね。

慶子　フム、フム。

安彦　謂はゞ川島家の一大事ですからな、叔母さん此肺病といふやつばかりは恐ろしいもんですね、貴方もかういふ例は幾何もお聞に成つたでせう、妻の病氣が夫に傳染して一家總倒れになるのはよく有る例です。

慶子　然う〳〵。

安彦　ですから私も武男君の上が心配でなりません。叔母さんから少し御注意なさらんと大事になりますよ。

慶子　（頻りに頷きつゝ）然れば、わしもそれが恐ろしいので、此間から氣を揉んでゐます。安さん、今日も亦浪が血を吐きました。

安彦　エ、喀血？　其はいよ〳〵大事だ。喀血するやうでは最う……ですが武男君は何ういふ考へですかな。

慶子　彼がナ、又馬鹿な奴で、醫者が何うのやれ看護婦が何うのと、恐ろしい事はソッチ退けで妻の傍に附きりぢや、にが〳〵しい。

安彦　でも叔母さん、夫婦に仲の好過ぎるといふ事は無いですもの。まして浪子さんが病氣であつて見ると、武男君もいよ〳〵然う有るべきぢやありませんか。

慶子　それぢやて、妻が病氣すつから、親に不孝をすつ法は無いもんぢや。

安彦　（慨然として）いや實に困つた事ですな。折角武男君もいゝ細君が出來て、叔母さんもやつと御安心なさると、直に斯樣な事に成つて了ふ。然し川島家の存亡は今ですね。

慶子　それや今に傳染るといふやうた事でも有つては。

安彦　所で浪さんの實家からは、何か挨拶が有りましたでせうな。
慶子　挨拶？　フン、挨拶、あの横柄な繼母が、フン少とばかり上産を持つての、言譯ばかりの挨拶ぢや、加藤のうちから二三度來たがの。
安彦　ア、こんな時には實家からちと氣を利かすものですが、病人の娘を押付けて、よく平氣で居られるですね。然し利己主義が流行の世の中ですからね。
慶子　然うとも！
安彦　其はいゝですが、只心配なのは武男君の健康です。若しもの事が有つたら、それこそ川島家破滅です。かういふ中にも何時傳染しないとも限りませんから。
慶子　さうぢや、武男がもし肺病にでもなつたら此家は斷絶しますな。
安彦　と云つて、まさか叔母さんが夫婦の間に墻をお結びなさる譯にも行きません。
慶子　さうですわい。
安彦　でも、此儘になつては川島家の一大事に成るし……
慶子　然うともな。
（ト沈思する。）

（千々岩、徐に樣子を窺ひて。）
安彦　叔母さん、此所は大に考ふべき所ですナア。子供の云ふやうにするばかりが親の職分ぢや無し、時々は子供を泣かすが慈悲に成る事も有る。それに若い者は一旦思ひ込んだやうでも、少したつと案外氣の變るものですからね、私だつて自分に覺えが有るです。
慶子　お前の云ふ通りぢや。
安彦　少し位の可愛想や氣の毒は、家の大事に換へられませんからね。
（慶子頷く。）
ソレに萬一子供でも出來なさると、それこそ到底……
慶子　大きになあ。安さん、わしや心を固めました、家と人ぢや何うも換へられん。わしは武男に思切つて相談する、何うかの？
安彦　イヤ、私は是以上何とも申上げる事は出來ません。但し物の重い輕いを申せば、昔から今に至る迄變りはないと信じます。
慶子　わしは最う決心しました。武男に……
（ト云ふ時女中お元入來り。）
お元　御隱居樣、只今旦那樣がお歸りになりました。

安彦　武男君が？　それは困つた。今此所で武男君に會つちや工合が惡いですな。
慶子　兎に角お前は隱居所へ行つてゐなさるが可からう。
安彦　然うしませう。
（千々岩は上手の一室に退く。）
慶子　（お元に）お前は武男にナ、わしが此所で待つて居るから、一寸來いと言うてくれ。それから千々岩の來てゐる事は默つてゐなさいよ。
お元　かしこまりました。
（隱居は上手へ、お元は下手へ入る。）
（ピアノ讃美歌の音聞ゆ、少時して武男心痛の體にて入來り、お元付いて出る。）
武男　大分惡いのか。
お元　はい富岡さんがお付き〻りでございます。
（武男は病室へ行かんとするをお元は氣を揉んで止るうち、慶子出來る。）
慶子　お〻、お歸りかな。
（武男座に着きて、）
武男　只今歸りました御用ださうですが、何ういふ事で。
慶子　ア、それはの、今日ナア、お前浪が血を吐きましたぢや、肺病も血を吐くやうではモウ駄目ですわい。
武男　……
慶子　武どん、それにの。お醫者の話ぢやつたが、浪どんの母樣も矢張肺病で亡くなつてぢやないかの。
武男　……
慶子　此の病氣は親から子に傳はつておぢやないかい。
武男　ハア、ですが浪のは感冒から引起したのですから、何有！　用心次第です。傳染の遺傳のと云ふですが、實際然う云ふ程でも無いですよ、現に浪のお父樣もアンナ健康な方です、浪の妹――ハア駒さんです――彼女も肺病のハの字も無い、人間は醫者のいふ程弱いものぢやありませんハ、、、。
慶子　イ〻エ笑ひ事ぢやありません。病氣の中でも此病氣は一番恐ろしいもんでな。武どんお前も知つとる筈ぢや、アノ知事の東郷な、アノ一家はお前樣のが傳染つて皆死絶えたぢやないか、那樣な話は未だ幾らもある……實はの、わたしも此間から相談したい〳〵と思つてをり申したが……浪ぢやがの……
武男　はあ。
慶子　浪を引取つて貰つちやどうぢやらうの。

武男（訝しげに）　引取る？　どう引取るですか。

慶子　實家によ。

武男　實家で養生さすのですか。

慶子　養生もしやうがの、兎に角引取つて……

武男　それはね、今日も赤坂に行つたら一寸話が出ましたが、浪は轉地させるが好い、就いては片岡の逗子の別莊彼處が好からうと……

慶子　武どんお前分らん風を爲るのかい。わたしの云ふのはナ、浪を……實家に戻すのぢや。

武男　戻す？　戻すとは離縁ですな。（ト吃驚する）

慶子　コレ、聲が高いぢやないか。（落着いて）。然うぢや、まあ離縁よ。

武男　離縁……　何故ですか。

慶子　先刻から言ふとほり病氣が病氣ぢやからの。

武男　肺病だから……　離縁するとおつしやるですな、浪を離縁すると!!

慶子　さうよ、餘り不意だからお前も吃驚するな尤であるがの、わたしはもうこれまで幾晩も考へた上の話ぢや。されば もう浪にはわたしも別に不足はなし、お前も氣に入つとつ事ぢやが、何をいふても。

（と武男が急込むのを制し。）

まあ聞きなさい、肺結核でよう成つた人はまあ一人も無い、お醫者が然う申すぢやて。よし又浪が格別惡う無いにした所が、其うちにやきつとお前に傳染すつな受合ぢや。ナア武どん、お前に傳染る、子供が出來る、其子にも傳染る、皆肺病になつて死んで見なさい、お父さまの丹精で華族とまで成つた此川島家も、お前の代で潰れなッちまひますぞ。それは最う浪やも可哀想、お前もなかなかきつか、けれど浪が可哀想ぢやてお前の身體にや代へられん。よッく分別して、こゝは一つ思切つてたもらんとなりませんぞ。

武男　お母樣、私はそんな事は出來ないんです。

慶子　何故？

武男　お母樣、今そんな事をしたら、浪は死にます。

慶子　そりや死ぬかも知れん。ぢやが武どん、わたしはお前の命が惜しい、川島家が惜しいのぢや。

武男　解りました。然し其程私を大事になすつて下さるなら、何うか私の心を汲んで下さい、私には何うしてもそんな事は出來ないです。浪はまだ慣れないから、それは色々行屆かぬ所もありませうが、然しお母樣を大事にし

て、私にも能く盡してくれる……その罪も何もない彼女を病氣だからつて離縁する！　そりやどうしても私にや出來ないです。お母樣肺病だつて癒らん事はありますまい。もし又癒らずに……何うしても死ぬなら、お母樣何うか浪を私の妻で死なしてやつて下さい。肺病が危險なら往來も絕つです、用心もするです、それはお母樣の御安心なさる樣にしますから、離縁といふ事だけはお見合せを願ひたい。

慶子　武男、お前は浪の事ばツかい云ふがの、ぢや自分は死んでも構はんか、川島家は潰してもえゝのかい。

武男　身體、それも大事でせうが、然し那樣な不人情な、不義理な事をして長生きしたつて何うしますか。人情に背いて、義理を缺いて、決して家の爲めにいゝ事は有りません。決して川島の名譽でも光榮でも無いです。私は何うでも離別は出來ません、斷じて出來ません。

慶子　（激して）ソ、そう急込まんでも、靜かに考へて見なさい。お前は未だ年が若かで世の中を知ンなさらんがの、能く云ふわ、それ小の蟲を殺して大の蟲を助けろと……浪は小の蟲、お前……川島家の大の蟲ぢや。それは先方も氣の毒、浪も可哀想ぢやが、病氣すツが惡いぢやなつか、何と思はれたて川島家が斷絕するよか未だえゝぢやなツか。ナア、それに不義理の不人情のと云ひたはるが、こんな事は世間にいくらもあります。

武男　世間……とおつしやるが、世間が惡い事をするから自分も惡い事を爲て好いと云ふ法はありません。病氣の爲めに離縁するなんぞは、それは昔の事です、もし又其が今の世間の法なら。今の世間はぶち破してもいゝ、イヤ打破さにやならんです。

慶子　又ソンナ理窟はツか言ひをる。お前は何故然う解らんな、第一又こんな病氣をした時はの、嫁の實家から引取りに來てえゝ筈ぢや、先方から云はんから、此方で云ひ出すが何の惡か事、恥しい事があるもんか。

武男　そんな……お母樣……そんな事が有りますか。片岡の家だつて折角嫁にやつた者が病氣にかゝつたからつて戾されて好い氣持がしますか。浪だつて……御承知の通り繼母の前へ何の面さげて歸られますか。ひよつと是が逆樣で、私が肺病だつたら何うです。而して浪の實家から肺病は險呑だからつて浪を取戾しに來たら何うです、お母樣貴方は好い心持がしますか。

慶子　いゝえ、其は違ふ、男と女とは又違ふぢやなツか。

武男　同じ事です、人情から云つて同じ事です。今聞けば浪は喀血したさうですか、其場合にそんな思切つた事を爲た日には、猗……猗無、無理に血を吐かすやうなものです。浪は死んでしまひます、屹度死ぬです。他人にだつてみす／＼そんな殘酷な事は出來んのに、お母樣は私に浪を殺せ……とおつしやる!!

（武男熱涙にむせぶ。）

（慶子立上つて、佛壇より一個の位牌を下して、武男の前に押すゑ。）

慶子　武男、お前はな、女親ぢやからつて私を何とも思はんな、サ、お父樣の前で今一度云うて見なさい、サ、云うて見なさい、御先祖代々の御位牌も見ておいでぢや、サ今一度云うて見なさい、不孝者奴が。

（ト武男を睨め、煙管にて烈しく火鉢の縁を叩く。）

武男　（怫然として）何故不孝です？

慶子　何故もあつもんか、妻の肩ばかり持つて親の云ふ事は聞かん奴、不孝者ぢやなツか、親が育てた身體を粗末にして、御先祖代々の家を潰す奴は不孝者ぢやなツか、不孝者！　武男、お前は大不孝者ぢや！

武男　然し人情……

慶子　まだ義理人情を云ツか。お前は親にむかつて人情は無ツか、親よか妻が大事なツか、何か云うと妻、妻、妻ばかい云ふ。親は何うすツか、何うしても浪ばツかい云ふ、不孝者奴が、勘當すツぞ！

武男　お母樣、ソレは餘りです。

慶子　何にが餘いだ。

武男　私は決してそんな粗略な心は……決して持つてゐないです。お母樣には其心が屆きませんか。

慶子　それならわしが云ふ事を何故きかぬ、エ、何故浪を離縁せんか。

武男　然しそれは……

慶子　然しもねもんぢや。妻が大事か、家が大事か、サ武男、何故男らしう返事のせんか、どうぢや。

（ト煙管にて疊を叩く。）

（此時お元、次の間に立淀む、慶子心着きて）

慶子　誰ぢや、其所にゐるのは？

お元　私でございます。

慶子　何ぢや。

お元　アノ電報が參りました。

武男　電報？

（急ぎ受取り見る間に）

慶子　あつちへ行つとれ。

（お元おど〳〵して入る。）

何所から電報が來申したか。

武男　横須賀から即刻歸れといふのです。

（と電報用紙を差置き。）

武男　兎に角お母様、出發が急になつて是から直ぐに艦へ歸らにやならんです。多分一月位經つと歸つて來られるだらうと思ひますから、其迄は何うか誰にも此の事は仰しやらずに居て下さい。

慶子　何も考へる事は無か、今此所で返事しなさい。

武男　いや兎に角私が歸つて來る迄。お母様、何うか待つて下さい。ね待つて下さいますか。

慶子　（不精無精に）待つは待つが……

武男　はい、諄いやうですがお願ひします。

慶子　（默つて領く）

武男　では御機嫌よろしう、行つて參ります。

慶子　足が悪いで、送つちや行きません、病室へ行つたら長居せんやうにな。

武男　はい。

（武男出て行く。）

（入違ひに、千々岩上手障子を開け、慶子と顏を見合せ。）

安彦　涙をふるつて馬謖を斬る、あゝ人の親も又辛いですな。

慶子　好い、武男が何云はうと、私は私の考へでやります。

（六段前唄の合方にて。）

――拍子幕――

三幕目

逗子海岸

平舞臺、上手寄りに屋根傾き格子戸破れ、幾年の風雨に曝れて黒みを帯びたる丹塗の不動堂、其下手に老松一株、幹太くして根上れるが、蒼鬱として屋根を覆ふ。下手は風に細りたる磯馴松一株、其渚に一艘の漁舟繋ぎあり。上の方は一面に老松生茂りたり。奥は一面に靜けき海原、空には中秋十五夜の月澄めり。岸邊を洗ふ波音にて幕明く。

（武男（海軍少尉の服に外套を着たる）と浪子（琉球

飛白の着付、同じ羽織に白きショールを纏へる）の兩人緣に腰掛け乳母お幾松の根本に蹲り居る。）

お幾　旦那樣、能い眺では御座いませんか。

武男　然うだねえ、この景色は到底尋常畫家などの頭からは割り出せんね。

浪子　雪や花の眺めも宜しう御座いますが、取り分け月が能いと思ひますの、斯うして月を見て居りますと氣が淸淸しますもの。

お幾　左樣で御座いますよ。それに今夜は風はなし、浪は靜かで御座いますし。モウ昨夜の事を思ひ出すと恐ろしう御座います。

武男　昨夜？　如何かしたのか。

お幾　何しろあの大嵐で御座いますもの、別莊はあの通りの吹通しで御座いますから、風は酷う御座いますし、雨はざんざ降りで、もう／＼奥樣と、爺やと三人で貴郎、怖くつて／＼、お念佛で夜明しを致しましたよ、ホヽヽヽ。

浪子　全く淋しかつたんですもの、貴郎が居らしつて下さると心丈夫で御座いますけれど、……モウ妾怖くはないわ……乳母。

（無邪氣に若々しくお幾の顏を見る。）

お幾　マア奥樣の現金でいらつしやいますこと。

浪子　あんな晚に船に乘つて居る人の心地はどんなでせうねエ、妾其人達の事を思つて案じましたわ。

武男　（極めて快活に）平氣だナ。昨夜は其樣に酷かつたか、ちつとも知らなかつた、よく眠つて居たんだな。然し幾許酷くつても內地では高が知れたものさ。遠洋航海に行くとネ、南支那海あたりでは二日も三日も續く事があるよ。何しろ四千何百噸といふ軍艦が木の葉の如く波に飜弄される、山程な浪はどん／＼甲板を打越して、艦がぎし／＼鳴る、そりや面白い樣だよ……といふのは負け惜みだ、實は餘り善い心地はしないさ、ハヽヽヽ。

お幾　ヘエー、怖う御座いますこと、そんなのが三日も四日も續きますと、身體が疲れまして、立居も自由に出來なくなるでせう？

（此間に武男はポケットより紙卷煙草を出して、マッチを擦らんとす、お幾は浪子の病軀に障るを恐れて目顏で止める、武男心付きて煙草とマッチをポケットに納む。）

武男　ウム、うつかりして居つたよ。

浪子　貴郎召し上つて下さいな。（込上る咳嗽を耐へる）

武男　何有！　飲みたくはないさ。來る前日と、歸つた翌日には暴飲をするといふ憲法を制定して居るから。
浪子　でも御退屈なさるといけませんから、妾いゝのよ。
武男　實際飲みたくないのさ。其……つまり習慣性がついて居るからつい手が行つて煙草を取つて、口にあてがふことになるのだ。僕が惡いんぢやない、つまり手が惡いんだネ、些とも退屈はせんよ。月はよし、花はよし、月と花とを兩手に眺めて居るんだもの、退屈はせんさ。
お幾　然樣で御座いますとも、けれど旦那樣、月は何で御座いますが、花と仰有いますと（四邊を見廻す）
武男　花か、其花が好いから……退屈しないのさ。
お幾　私には其花が。
武男　花と月とを左右に眺めて居るぢやないか、判らん奴だな。ソラ、花が咲いて居る。（と浪子の方を知らせて）然樣ぢやないか。
お幾　あゝ然樣で御座います……月花を左右に、成程然樣で御座いますとも、ホヽヽ、。
浪子　花といへば貴郎、別莊に生けてありました遲咲の櫻は、乳母が折つて來てくれましたのよ。でも昨夜の嵐で散つて終ひましたの、妾櫻位散際のよい花はないと思ひますわ。あゝ蓮月の歌に斯ういふのが有りましたよ、『羨まし心の儘によく咲きて、すが／＼しくも散る櫻かな』よく詠んであるわねえ。
武男　すが／＼しくも散る櫻かな、／＼、すが／＼しくも――フム能く讀んであるね。櫻は美麗に咲いてパッと散る所に味がある。だから武士に譬へたものだ。すが／＼しくも散る櫻か、確かに蓮月は巧いね、歌詠みなどゝいふものは巧い事をいふよ。（浪子を見て氣を變へ）いや否けない！　一寸巧いやうだがよく／＼考へて見ると拙いな。歌だの詩だのといふものは時代精神に適合して居らんければいかんよ、元來日本人はさかんに散るのを賞翫するが、それは潔白で宜いさ、しかし過ぎるは宜しくないな、戰でも早く討死する方が負だよ。此點については大に大和魂なるものを改良をして、今少し剛情に、執拗さ、氣永な方を奬勵したいと思ふね、人ならば何時までも死なずに生通し、花ならば散らないで咲ッぱなしといふ方がいゝ。此點については蓮月は拙いよ。一つ向うに立つからには、僕も詠むかね、浪さん笑つちやいかんよ、乳母も笑つちやいかんぞアハヽヽヽ。（と思案し）『しつこく／＼（繰返して）人は云へども八重櫻盛り

長きは樂しかりけり」これでなくてはいかんよ、どうだ梨本跣足だらう？

お幾　まあ、面白いお歌で御座いますこと、奥様これならば御秀逸で御座いますよ。

武男　（微笑みて）乳母の折紙か、これや彌々秀逸と極つたぞ。

浪子　お上手で御座いますわね、ア、（と輝く眼ざしにて武男を見て）櫻で思ひ出したの！

武男　何を？

浪子　モウ……一年よ。

武男　（頷いて）早いものだ、モウ一年になるね。

浪子　あの時の事を思ひ出すと可笑いのよ、能く記憶えてますよ。彼時馬車に乘つて出ると家内の者が送つて來ますから、何とか云ひたかつたけれども如何しても口に出ませんでしたもの。おほゝゝそれから溜池橋まで來ると最早日が暮れて、十五夜でせう、まんまるな月が出てよ。夫れから山王の彼の坂を上ると恰ど櫻の花盛りで、馬車の窓から、ハラ／＼とまるで吹雪の樣に降り込んで來ましてね。ほゝゝ膝に花片がとまつてましたのを、最う下りるといふ時氣が付いて、伯母がとつて呉れましたつけ。

武男　早いもんさ、直ぐ銀婚式になつちまふよ。然し彼時の浪さんの澄し方といつたら、ハ、ハ、、どうして彼樣澄まされるかな、思ひ出しても可笑いよ。

浪子　貴郎こそ若殿樣のやうに、きちんと澄していらつしたわ。

武男　浪さんこそお姫樣のやうだつた。

浪子　手がふる／＼て盃が持てなかつたわ、ほゝゝ。

お幾　大層お仲がおよろしい事でございますね。

浪子　乳母や妾病氣のやうには見えないだらう?!

お幾　えゝ、お見えになりませんとも、ねえ旦那樣。

武男　さうだ／＼少しも病氣らしくはない、夫りや其筈さドクトルが付いて居るんだから。

お幾　ドクトルと申しますと？

武男　分らん奴だな。ソレ（と自分を指して）川島武男といふ大博士が付いて居るのぢやないか。

お幾　旦那樣がドクトル樣……オホ、、、然樣で御座いましたねえ、オホ、、、奥樣には何よりのお藥でございます。

（時の鐘幽かに八時を報ず。武男は立ち上り時計を月

光にすかし見て。）

武男　ア、最早歸らんけりやならん。幾、船で歸るから、船頭にさういつて呉れ。

お幾　ハイ。

浪子　モウお歸りなさるの？

武男　さうだ、時間が遅れるといかんからな。

浪子　別莊に寄らないで……

武男　今日は此儘歸らう。

浪子　然う。（不意なげに云つて）乳母や何う爲よう？

お幾　何でございます？

浪子　あの貴方、此頃靴下を編んで置きましたの、惡いんですけれども、持つて行つて下すつて？

武男　浪さんが編んで呉れたのかい、浪さんが編んで呉れた靴下なら、足に穿くのは勿體ないから頭に頂くさハツ、、、、。

浪子　（お幾に向ひ）あの奥の座敷の袋棚に入れて有るから持つて來ておくれ。

武男　間違はないやうにだよ、折角浪さんの親切を無にしないやうに……

お幾　ハイ直ぐ持つて參ります。

（お幾は下手に入る。）

（漣の音に和して、二絃琴の明笛と合奏の音洋々として聞ゆ。）

浪子　（浪子は恍惚と立ち上りて、）貴方、又合奏が始つてよ。

武男　誰かの別莊だと云つたつけね。

浪子　自宅の先にある……（と低き石壇を踏み外す）

武男　どうした。（抱止める）

浪子　（其まゝ見上げて）仲の好い御夫婦よ。

武男　此方も負けぬ氣になつて大きに演らう、浪さんはヴアイオリンが巧いから、僕は尺八でも習つて來るからね、今度は大にやるさ、何有他に負けるものか。

（浪子は何を思ひ出してか、縁に腰を下し沈鬱ぐ。）

武男　（其肩に手をかけ）どうしたのか、惡いんぢやないか。

浪子　私がこんな病氣になつて、嘸阿母さんが厭に思つてお居でゝせう。

（武男は顏を曇らせしが、殊に元氣を裝うて。）

武男　何たつてそんな事を思ひ出したのだ。オ、さう〳〵阿母さんからお傳言のあつたのをすつかり忘れて居つ

た。阿母さんは浪さんに會ひたいとさ、暫く會はないから會ひに行きたいが何しろあのお身體だから、浪さんによろしく申して吳れと仰有つたよ。浪さんつまらん事を考へないで何事も忘れて遊ぶさ。遊ぶと云へば伊香保の野遊、愉快だつたね、今年もやらうかな、阿母さんが花見がしたいから浪さんと乳母やを連れて一所に出掛けたいと仰有つたが、花見も東京は不可よ、吉野にでも出掛るかな、遠征をやるんだね。

浪子　早く阿母さんのお伴をして花見に行く樣になりたう御座いますわ……　貴方！　癒るでせうか？

武男　何が？

浪子　妾の病氣が！

武男　癒るよ、何をつまらん事をいふのか、僕が癒して見せる。

浪子　もしか此儘になりはしないかと思ひますの、赤坂の先の阿母さんも此病氣で亡くなりましたし……

武男　困るね、そんな事を思ひ出しては不可よ。赤坂の阿母さんは、然樣であつたかも知れんけれども、浪さんは年は若いし、まだ初期なんだから何有！　直るよ、ソラ內の親戚の大河原を御覽、彼は全く右の肺が無いのだ、けれどもあの通り健全ぢやないか。病氣は氣からといふ俚諺の通り、自分で癒すといふ氣にならなくては不可、癒らんでどうするものか、浪さんが癒らんといふのは僕を愛してくれて居ないんだ、僕を愛して居つてくれるなら一日も早く全快して樂しい家庭を造つて見たいと思ふ筈ぢやないか、僕が癒さうと思ふ一念でも屹度癒して見せるよ、癒さんで置くもんか！

（合奏の音歇んで、只浪の音のみ靜かに聞ゆ。）

（浪子は屹度顏を上げて。）

浪子　癒りますわ、きッと癒つて見せますわ。だけど人間は何故死ぬのでせう、千年も萬年も生きたいわ、死ぬなら二人で……ね貴郎。

（と手を取る。）

武男　浪さんが死んだら、僕も生きては居らんよ。

浪子　え、本當！　（と取縋る）

（笛の音憐れに、松風につれて響きを傳ふ。）

浪子　嬉しいわ。だけども貴郎には阿母さんがあるし、お勤めはおありなさるし、貴郎がさう思つて下すつても思ふ儘にはなりますまい。さうなれば妾、先に行つて待たなければならないの、妾、死んでも貴郎の妻ですわ。私

が死んだらば、時々は思ひ出して下さるでせう、ねえ貴郎……

（云來る時、涙は滂沱として痩せたる浪子の頰に流る。）

（武男は涙を拂ひて。）

武男　そんな話は、モウ止さう〳〵、ねエ、浪さん早く癒つて、二人で長生して金婚式の末まで添ひ遂げるさ、ハヽヽヽ。

（お幾、船頭茂作を伴ひ出來りて、袱紗に包みし靴下を浪子に渡し。）

お幾　奥樣、是で御座いますか。

浪子　（受取りて）貴郎、本當に惡いので御座いますよ。

武男　どれ見せてくれ、ア、これは上等だ。乳母やくれぐれも浪さんを頼むぞ、病氣は看護が大事だからね。實際僕はお前一人が力なのだから、運動を適度にさせて、もし肯かなかつたら僕に成替つて大に叱つてやつてくれ、浪さんいゝかい。

浪子　ハイ、貴郎今度は何時歸つて下さるの？

武男　マア半年位はかゝるだらう、イヤ其内出來得る限り早く歸つて來るよ。

浪子　長いわねえ。

武男　直ぐだよ、何の長い事はあるものか、今度歸る時には浪さんが健全になつて出迎ひに來るさ。乾度だよ。浪さんが早く癒つてくれんとなあ。（母の言葉を思ひ出して悄然とせしが、氣を取直して）乾度癒つて居つてくれ、僕はそれを樂しみにして歸つて來るのだよ。

浪子　はい、乾度癒つて、お待ち申しますわ。

武男　夫れから忘れて居つた、尤も大切な事だつけ。僕浪さんに土產を持つて來て居つたんだ、夫れ丁度いゝだらう。（と衣囊より寶石入の指環を取出して浪子の指に嵌め。其瘦せたるに驚きて）ア、殘念な事をして了つた、間違つて持つて來たよ。

浪子　是でいゝのよ、これ乳母や。（とお幾に見せる）

（武男は外套を着て。）

武男　では乳母や頼むよ、浪さんいゝかい。

（心を勵まして船に乘らんとす。）

浪子　ア、貴方、（追縋りて）早く歸つて頂戴よ。

武男　いゝよ、直ぐだよ。（舟に乘る）

（船は渚を離る、浪子は下手の松に倚りて、）

浪子　貴方、早く歸つて頂戴な！

（と延び上りて手巾を振る。）

（船中の武男は帽を振つて之に應ふ。）
（心なき船頭は靜かに艪を採り乍ら歌ふ「お前正宗、わしや錆刀」）

浪子 （聲を搾つて）早く歸つて頂戴な。（手巾を振る）
（船はやがて堂の後ろに隱れ、松風の音に和して船唄の聲のみ微かに殘る。）
「お前切れても、私や切れぬ」）

――幕――

四幕目

片岡邸後園

中央に西洋館ありて、其の周圍樹木蓊鬱たる背景、前は一面の芝生にて、種々の秋の西洋草花咲き匂ふ。上手下手共程よき處に大きなる盆栽を排列し、上手寄り樹木の下に圓卓ありて、其の下に鐵脚の椅子三四脚を置く。

片岡中將の愛兒毅一（八歳）忍び〳〵に出來り、前後を見廻して卓の下にかくれ。

毅一 もういゝよ。
（妹（道子）出來り、方々索ねてつひに毅一を見つけ出し。）
道子 兄さん見つかつた。
毅一 ぢや、僕今度は鬼だね。
（と卓の下から這出し。）
さあ道ちやんかくれる番だよ。
道子 あつちへ行つて頂戴、見てゐちやいやよ。
毅一 早くしないと僕よすよ。
（と見返る。）
道子 あら見ちやいや！
毅一 道ちやんはあんな事許り言ふんだもの、僕だつていやになる。
道子 もう少しよ。
（ト道子木の蔭にかくれる。）
（毅一覗きながら。）
毅一 もう可いかい。
道子 （小聲）もう可いよ。
毅一 （すぐ見つけて）ソラ見つかつた！
道子 ずるいわ兄さん、見てゐたんだもの。
毅一 嘘つき！ いつ僕見てゐた。

道子　今ちやんと見たわ。

毅一　道ちやんこそ、見つかると彼樣な事言つて、ずるだ！

道子　いゝえ兄さんがずるよ。

毅一　ナニ、女のくせに、ずる助！

（ト毅一道子を突き倒す、道子泣く。）

（姉駒子（十五六）上手より走來り。）

駒子　道ちやんどうしたの？

道子　（泣きながら）兄さんが……

駒子　毅一さんは弱い者いぢめを爲たんですか、本當にいけない子だよ。

毅一　女のくせに生意氣だもの、姉さんはいつでも道ちやんの加勢ばかりする、僕はお父樣に然ういふから可いや。

駒子　ようございますよ。ねえ道ちやん、此方はお母樣にいつけるから。

毅一　ずるやい／＼。（ト上手に走り入る）

（駒子道子を慰撫して下手に入る。）

（陸軍中將片岡毅（五十餘、軍服）外より歸りたる儘にて、植木屋を指圖しつゝ出來る。やがて植木屋去りし後中將は中央の椅子に腰懸け、懷より書物を出し默讀する。）

（少時ありて、上手より毅一、下手より道子出來り互に領き合ひて忍び足に父の左右に近寄り、）

毅一
道子　父樣！！

（ト膝に取つく。）

片岡　おう、來たか、而して今日の小試驗は何うぢやつた？出來たか。

毅一　僕アね、僕アね、お父樣、僕は算術は甲！

片岡　さうか。

道子　あたしね。お父樣、今日は繪取りがよく出來たつて、先生にほめられてよ。

（ト袂の中より幼稚園の製作物を出して見せる。）

片岡　おう、是は立派な出來だぞ。

毅一　おとうさま、それからね、習字と讀書が乙で、あとは皆丙なの、僕水上に負けちやつた。

片岡　ハ、ヽ、ヽ、負けたら今度は大勝利を得るやうに勉強するんぢや、今日は修身の話は何ぢやつた？

毅一　今日は楠正行の話、僕ア正行大好きなんだ。お父樣、正行とナポレオンと何方が偉いの？

片岡　どちらも偉い！

毅一　僕あね、お父様、正行が大好きだけれど、海軍が猶すき。お父様が陸軍だから、僕あ海軍になるんだ。
片岡　ハ、、、川島の兄さんの弟子になるか。
毅一　だつて川島の兄さんは少尉だもの、僕中將になるんだ。
片岡　なぜ大將にならんか。
毅一　だつてお父様も中將だからさ、中尉は少尉よか豪いんですね。お父様。
片岡　少尉でも、中將でも、勉強すッ者豪いんぢや。
道子　あたしね、お父様、おとう樣てばよう、おとう樣、（と膝を動かしつゝ）今日はね面白いお話を聞いてよ。あの兎と龜のお話、云つて見ませうか、或るとこに一疋の兎と龜が居りました。
（中將夫人繁子（三十八九丈高き夫人）出來る。）
あらおかあさまがいらつしてよ。
繁子　（中將に）お歸り遊ばせ。（子供に）又お父様に甘えてゐるね。
片岡　今學校の成績を聞いてゐた處ぢや。
繁子　（子供達に）お前達は運動しておいでなさい。
（子供達騷ぎながら去る。）

繁子　（繁子は中將に。）怎麼に申しましても、貴方は矢張甘くなさいますよ。
片岡　何、然うでも無いが、子供は矢張り可愛がつた方が可い。
繁子　でも貴方、嚴父、慈母と俗にも申しますのに、貴方が可愛がつて許りおやりなさるから本當に逆樣に成つてしまつて、わたくしは始終叱り通し、憎れ役はわたくし一人ですわ。
片岡　マア然う單兵急に責めんでも好い、ハ、、、、。
繁子　（腰をかけ）ア、それから唯今浪子から此手紙が參りました。
（懷より今着したる封書を出し渡す。）
（中將開封して默讀したる後。）
片岡　ウム、逗子へ行つてから大分好いさうぢや、それに武男も近々に歸るといふ事ぢや。
（ト夫人に渡す。）
（夫人も一讀して。）
繁子　武男さんが歸つておいでゝしたら、浪子も嘸喜ぶ事でございませう。
（此時駒子出來りて。）

駒子　お祖母様、飯田町の伯母様がいらつしてよ。
繁子　加藤さんの？　然う（中將に）ではわたくしは應接間へ参りますから、貴方お着更でもなすつて……
片岡　いや、着更ゆるも面倒ぢや、此處で會はう……
繁子　然うですか。（駒子に）では此方へ御案内をね。
（駒子前行き、加藤夫人清子を連來り、直に去る。）
清子　御免遊ばせ！
片岡　さあ、何うぞ（椅子をすゝめ）近頃は非常に御無沙汰を致しました。御主人は相變らず急しいでせうなあ。
清子　まるで植木屋で鋏を放しませんよ。はゝゝゝ菊が大分咲きましたから、何うぞお褒めにいらつして下さいましと、其傳言を呉々も申聞けました、ホヽヽヽ。
（繁子に向ひ。）
何うぞ武ちやんや道ちやんをお連れなすつて……
（信玄袋の中より、瓶詰の菓子を取出し。）
是はお二人におあげになつて下さいまし。未だ學校ですか、見えませんね。
繁子　いゝえ彼方で遊んで居ります。
清子　（紙包を出し）然うですか、それから是は駒ちやんに！

繁子　態々に……お氣の毒さまでございますわね、浪も嘸喜ぶ事でせう。
（女中お春出來り。）
お春　アノ奥様、赤十字社の方がお目にかゝりたいと仰しやいまして。
繁子　アヽ然う、一寸お待たせ申してお置き。
（お春心得て去る。）
では、わたくし一寸會つて参りますから、何うぞ御ゆつくり遊ばして……失禮を致します。
清子　どうぞお構ひ無く。
（繁子一禮して入る。）
片岡　奥さん、毎度御心配ばかり懸けてをつたが、浪も此の頃は大分好う成つたやうで。今手紙が來ましたから、貴方も喜んでやつて下さい。
清子　然様で御座いますつてね、私共へも浪さんから手紙が参りましたよ……實は今日わたくしの伺ひましたのは浪さんの事ですが。
片岡　浪がどうかしましたか。
清子　はい、飛んだことで。
片岡　はゝあ何う言ふ事ですな。

清子　實はね、昨日川島の隱居が珍らしく私共へ參りまして……

片岡　フム〳〵。

清子　浪さんがあつちへ行つた時、一度禮に來たばかり、其の後は使もよこさないやうな人が、自分で出て參りましたから、……何かと思つて會ひますとね。

（ト口籠る。）

（中將は頻に煙を燻ゆらす。）

然うすると貴方お聞きなさいまし。浪さんの病氣が病氣だから、片岡家へ引取つて貰ふやうに私に計らつて吳れと申すのですよ。

片岡　……（屹度加藤夫人を見る）

清子　私は驚いて返事も出來ませんでした。それからいろいろ聞いて見ましたが、別に他に理由は無いので、唯危險な傳染る病だから、萬一武男にでも傳染るやうな事があつては川島の家が絕える、其故實家へ引取つて吳れと、から申すばかりで。

片岡　やあ、其は貴方も御迷惑でしたらう。

清子　迷惑どころか、私は腹が立つて〳〵。然し實の娘のやうに思ふ浪さんの一生の浮沈だと考へましたが、先方は自分の言ふだけ言つて、それを片岡家へ傳へれば媒妁の役は濟むと言はない計りではございませんか。私もよくよくでしたから斯う申してやりました。私共は片岡川島御兩家の緣を結ぶ爲にこそ御盡力を致しましたが、其樣な非義非道な離緣の御相談に乘る事は平にお斷りを致しますと、キツパリ云つてやつたのですよ。

片岡　（瞑りたる目を開き）然うでしたか、浪が肺病ぢやで、離緣をしたいと斯ういふのですな。

清子　はい、誠に不人情極る話で御座います。

片岡　武男は關り知らんでせうな。

清子　武男さんは留守の事ですから、それに平常の樣子を見ても決してそんな事に同意する筈は御座いません。處でね、川島の隱居は手前共で拒絕られましたから、もしか直に此方へ何とか申して參りはしないでせうか、私は其を考へましたから一寸前以てお知らせに上りました。

片岡　いつも御親切に……有難う。

清子　何ういたしまして、マア飛んでも無い事に成りましたね、夫れにつけても武男さんが早く歸つて來れば好いのですが。

（卓上にある手紙を見て。）

ア、浪さんは何にも知らずに居るでせう。

（中將默々として物言はず。）

（此處へ侍女お春、大形の名刺を持ち出來り。）

お春　旦那樣、此方がお見えに成りました。

片岡　（名刺を受取り）山木兵造……知らん名ぢやな。

清子　山木と申すのは、アノ御用商人で、川島へ出入を爲るものではございませんか。

片岡　ア、御用商人の。（頷きしが）會ふ必要が無いから斷つて了へ。

お春　はい

（行かうとする。）

（清子は呼止め。）

清子　ちよつと、（片岡に）山木なら、もしや川島の事で參つたのではございますまいか。

片岡　或はさうかも知れませんな。では兎に角會うて見よう（お春に）此處へ通せ。

（お春去る。）

清子　私は彼方で、御用の濟む迄お待ち申して居ります。

片岡　然うですな。猶其事に就いては御相談も致したいで、何うぞ御ゆるり……

清子　御免遊ばせ。

（清子入る。中將立つて見送り、フト振返れば今しも案內されて入來りたる山木と顏を見合す、山木は謹いて頓首する。）

片岡　貴方が山木さんか、サアおかけなさい。

（椅子に歩み寄る。）

山木　これは初めまして、手前は山木兵造と申す不調法者で、何分今後共御贔屓を……

片岡　今日御出で下すつた御用は何ですか。

山木　えゝ早速でございますが、今日は川島家の御名代で罷出ましたので、

片岡　はあ。

山木　實は川島の御隱居が自身御いでになる所でございますが、まあ私が罷出ました次第で。

片岡　成程。

山木　實は其（頻りに額の汗を拭ひつゝ）加藤樣からお咄を願ひたいと存じましたんでございますが……少々都合もございまして——私が罷出ました次第で。

片岡　其は解りました、で御用は？

山木　其用と申しますのは、甚だ申兼ましたが、其實は川

貴の奧樣——浪子樣……

片岡　はア。

山木　其若奧樣でございますが、何うも斯樣な事は實以て申上にくい御噺でございますが、御承知の通りあの御病氣につきましては、手前共川島でも、餘程心配を致しまして、近頃では、少しはお快い方ではございますが——まあおめでたうございますが……

片岡　（無言にて聽きゐる）

山木　手前共から斯樣な事は誠に申上られぬのではございますが、甚だ勝手がましい申條ではございますが、實は御病氣でございますし——御承知の通り、川島の方でも家名と申しましても別にございません……其如何にも自分勝手な噺ではございますが、御病氣が御病氣で、其萬一傳染——まあそんな事も滅多にございますまいが、然し其何方かと申しますと、矢張其、其恐れも無いではございませんで、其萬一武男——川島の主人に異變でもございますと、まあ川島の家も斷絶と申す譯で、イ、エ其斷絶致してもよろしいやうなものでございますが、何分にも其、實以て何うも其、誠に濟みませんが其、其處の所を其、御病氣が御病氣……

（一句、一句、額の汗を拭く。）

片岡　よろしい、解りました。つまり浪の病氣が厭ぢやから、引取つて與れいと言はるゝのぢやな、よろしい、解りました。

山木　（太息吐いて）然やうでございます、實以て申上にくい事でございますが其、何うか其處の所を惡しからず……

片岡　で、武男さんはもう歸られたですかな。

山木　イヤ、（狼狽して）イヤ未だ歸りませんでござい升が、勿論是は承知の上の事でございまして、何うか惡からず……

片岡　よろしい。

（と頷きて、）

山木さん！

山木　はッ。

片岡　貴方子を持つておいでかな？

山木　はッ、伜が一人に、娘が一人でございまして、何分御引立を……

片岡　山木さん、子といふ奴は可愛い者ぢや。

山木　はッ。（得も云はれぬ感に打たれて、ぬかづく）

片岡　イヤ、よろしい、承知しました。川島の御隱居に然う云つて下さい！　浪は今日限り引取るから、御安心なさるやうに――お使御苦勞ぢやつた。

（と言捨て、中將は衝と上手に入る。山木は面を揚げて、其の後姿を見送り、ホット息を吐きて首筋、腋下等の汗を拭ふ。）

（ピアノの音聞えて、）

――幕――

五幕目

其一　逗子別莊

瀟洒たる六疊敷の座敷、土緣飛石を置き、上手椽込、其奥に此室へ通ふ廊下あり。下手は四ツ目垣の外に秋草の花咲く。總て小高き岡の上の模樣、垣越の背景は逗子の海より遠く富士足柄の山々を煙波の上に望む。此處に病を養ふ浪子は、昨日東京より訪來れし從妹千鶴子（十七八歲、加藤子爵の令孃）と心靜かに秋の一日を暮らしつ。今しも千鶴子は病人の髮を結終りたる所。二絃琴の合方にて幕開く。

千鶴子はピンを浪子の頭髮に插さんとして。

千鶴子　何時見ても此のピンは奇麗だわ。本當に兄さんはよくなさるのねエ、内の兄さんなんかは、外交官の妻になるには語學が達者でなくちや可けないつて、佛語を勉強するが好いの、獨逸語が英語が必要だのツて、私を責めてばかり居るから困るわ。

浪子（華やかに笑ひ）ホヽヽ、お千鶴さんが、丸髷に結つたのが早く見たいわ……島田も惜しいけれども……。

千鶴子　まあ嫌……（笑を隱す）

（浪子は鏡臺を片付けて、）

浪子　あゝ好い心持よ。

千鶴子　どうしても思ふやうに行かない！（と手を拱作ら）あ、それから萩原さんね、ソラ妾より一年前に卒業なすつた。

浪子　アノ松平さんへ嫁らしつた方でせう？

千鶴子　は、彼方ね、昨日離緣になつたんですつて。

浪子　まあ、どうして？

千鶴子　其れがね、お舅姑のお氣には入つたけれ共、松平さんが嫌つてね。

浪子　お子様はありはしなかつたの？

千鶴子　一人あつたわ。でもね、松平さんが嫌つて、此頃はお妾を置いたり、亂暴ばかりなさるものですからね、萩原さんのお父さんが大變怒つてね、たうとう引取つてお了ひなすつたんですつて！

浪子　マア、お可哀想ね。

千鶴子　腹が立つわね。逆樣だとまだ好いのだけれ共、お舅姑の氣に入つても良人に嫌はれて其樣な事になつては本當に辛いでせうね。

浪子（愁然として）夫に嫌はれても辛いでせうが、姑の氣に入らないのも……ねえ、千鶴さん！　同じ學校へ行つて、同じ教場で同じ本を讀んでも、皆ちり〴〵になつて如何なるか分らないものですが、お千鶴さん、貴方とは何時迄も仲好く、是からはお互に力になりませうねエ（と思入つて云ふ）

千鶴子　然うね。

浪子（氣をかへて）斯うして居ると、私色々な事を考へるの、ほゝゝゝ笑つちや嫌よ。是から何年かたつてね、何處か外國と戰爭が起るでせう、日本が勝つでせう、そうするとね、千鶴さんとこの兄さんが外務大臣で先方へ乘込んで媾和の談判をなさるでせう、それから武男が艦隊の司令長官で、何十艘といふ軍艦を向うの港に列べてね。

千鶴子　それから赤坂の伯父さんが軍司令官で、宅の阿爺が貴族院で何億萬圓の軍事費を議決させて……

浪子　其樣すると、妾は千鶴さんと赤十字の旗を樹てゝ出かけるわ。

千鶴子　でも貴方身體が弱くては出來ないわ。ほゝゝゝ

浪子　おほゝゝゝ。

（二人賑かに笑ふ中、浪子は咳嗽を發して右の胸を押へる。）

千鶴子　胸がいたむの？

浪子　時々咳をすると、右胸に響いて仕樣がないのよ。お千鶴さん、あのお藥を！

千鶴子　ハア。

（ト丸盆に載せたる水藥を取り效々しく浪子に飲ます。）

（乳母のお幾入り來り。）

お幾　奥樣、加藤樣の奥樣がお見えになりました。

千鶴子　阿母さまが（立上る）

（此時、加藤夫人蒲子入り來る。）

浪子　アラ伯母さん（と立つ）

清子　いゝからさうしておいでなさい。

（ト座に着く。）

千鶴子　阿母さま、よく入らしつたのね。

清子　浪さん塩梅は如何です、別に變つた事もありませんか。

浪子　はア快方ですの、それよりも伯母さん如何なすつたの、大變にお顔色が悪うございますが。

清子　妾かい、何ね、少し頭痛がするのですよ、汽車に搖られた故なんでせう（一寸と頭を押へて）武男さんから便がありましたか。

浪子　一昨日手紙が参りまして、最う近々の中に歸ると書いてございました。

清子　然う？　時に、（と懐中時計を見て）おや最う二時ですね。

浪子　伯母さん何故でございますの？　今日は恰度千鶴さんも來てゐらつしやるから、御寛りなさい。

（お幾茶を運び來る。）

浪子　ばあや、伯母さまにね。

お幾　は、一寸、何か見てまゐりませう。

（ト立つを清子は止めて。）

清子　乳母やお止、今日は緩りして行けないんだから、浪さん……妾貴方を迎に來たのですよ。

浪子　エ！　お迎ひ？（驚く）

千鶴子　阿母さま、どうして？

清子　（左あらぬ體にて浪子に）お父様が病氣の事で醫者と少し相談もあるから一寸來る樣にッてね、番町の方でも承知なんだから。

浪子　相談ッて何でせう？

清子　病氣の件ですよ、それにお父様も久しく會はないからッて、會ひたいと仰有るの。

浪子　さうですか、其にしても今夜はお泊り遊ばせな。

清子　いゝえね、彼方でも……醫者も待つてゐるし、妾も用の都合が有るから、直ぐ今度の汽車で歸りたいと思ふの。

お幾　今度の汽車で……

千鶴子　餘り急ですわねえ。

清子　浪さんのお父さんがお待兼なんだからさ、乳母やそれがいゝわね。

お幾　左樣で御座います。（無意識に答へる）

清子　何しろ片岡さんも、あゝいふ性急な方ですから。
浪子　もう直く参りませう、ねえ乳母や。
お幾　夫ではさう遊ばしませ。
（清子は浪子がいそ〳〵する様子を見やりて、不覚涙を催し俛首る。）
浪子　では直に……伯母さま何を考へていらッしやるの？
清子　何でもないんですよ、ではお着替へをなさい。
浪子　是で好うございますわ。ねえ乳母や。
お幾　旦那の御様お同道にて、御機嫌におなりなすつてから、あんな陽気な事ばかりおつしやるので御座いますよ、ホヽヽヽ。
浪子　では羽織丈けでも着替へて行きませう。乳母や持つて来ておくれ。夫から伯母さん、直きに帰るのですから、看護婦は連れて行かなくッても宜いでせう？
清子　然うね。でも連れて行く方がいゝでせうよ。
千鶴子　連れていらつしやる方がいゝわ。
浪子　さうしませうか、乳母や、では鈴木さんに用意をして下さいと申しておくれ。
お幾　はい。
清子　夫からお俥をネ。

お幾　承知致しました。
（お幾は入る。）
千鶴子　妾、羽織を取つて来てあげませう。
清子　さうしておあげなさい。
（と云ふ時、看護婦鈴木出来りて、清子に会釈し。）
鈴木　奥様、東京へ行らつしやりますのださうで、アノお羽織を！
（と出すを、千鶴子は受取りて浪子に被せる、乳母お幾は庭口より出来り。）
お幾　では俥を申付けてまゐります。
（と枝折戸を越えんとして躓き、庭下駄の鼻緒を切る。）
千鶴子　どうして……
お幾　いえ、なんでも御座いません。
（何事もなげに云放して気がゝりの体、清子は眉を顰む。）

――道具廻る――

其二　片岡家玄関

宏壮なる西洋造りの玄関

上下に片岡家の定紋付の覆をなしたる箪笥長持等並べあり。

片岡の家扶玄關前に立ち、人足頭に祝儀を渡しゐる。

家扶　これは奥樣よりのお心付だ頂いて置け。

人夫甲　難有う御座います、オー皆、お禮をいひな。

皆々　難有う御座います。

家扶　夫から、この荷物を皆奥へ運んで貰はんきやならんが、勝手でお茶が出るさうおやから、皆一服して夫から運んでくれ。

人夫乙　如何だい次手に運んで了はうぢやねえか。

人夫丙　然うしよう〱。（皆荷物に手をかける）

家扶　マアいゝサ。どうせ足を洗つてゞなくちや可かんから、一服してからでよからう。

人夫甲　おや、さうさせて頂かう。

（一同挨拶して下手へ入る。）

（片岡夫人繁子奥より出來りて。）

繁子　荷物は皆請取りましたか。

家扶　ハイ目錄と引合せまして。

繁子　然う、御苦勞でした、では直ぐに奥へ入れるやうに。

家扶　ハイ、只今申付て置きました。

（家扶下手へ退く。）

（やがて毅一道子奥より出來り、兩方より母に縋りて。）

道子　未だ姉さんは歸らないの。

繁子　そんなに急くものではありませんよ。

毅一　姉さんが歸るといゝなア。僕本當に嬉しいや。

（家扶再び出來りて、何か繁子に囁き玄關に入る。）

（此時浪子、清子、千鶴子、看護婦連立ち向うより出來る。）

（浪子花道七三迄來るとき、毅一、道子の兩人走り寄りて、）

毅一　姉さん！

道子　姉さん！

浪子　オ、毅ちやん、道ちやん……

（兩人を擁して本舞臺に來る。）

繁子　（立迎へて）浪さん、お歸りなさい。

浪子　唯今。（と丁寧に會釋する）

毅一　姉さん、モウどこへも行かないのでせう。

浪子　え、わたし、又すぐに歸るのよ。

道子　だつて姉さんのお荷物がみんな歸つてゐるもの！

浪子　えッ。
（浪子は初めて玄關傍に並びたる我荷物を見つけて、驚愕の極、將に卒倒せんとす。清子は之を支へて。）
清子　浪さんしつかりしなけりやいけませんよ。
浪子　伯母さん！
（と清子に縋り、身を震はして泣き入る。）
（此時、父中將玄關に出來り、憐れなる娘を見るや、情迫れる聲にて。）
片岡　浪……
（浪子は走り寄りて。）
浪子　おとうさん。（と涙の目もて父の顔を見戍る）
片岡　浪、能く歸つた、お父さんは、お前の歸るを待つて居つたぞ。
（浪子は父の膝にすがつて泣く。）

――幕――

六　幕　目

其一　山科停車場（夢）

京に近き山科の停車場、上の方は霞める和州の山々を遠景として、近き處々に小さき岡、竹林などの間に茶畑を見たる景色。中央やゝ上手よりに柵ありて二ヶ所の出入口を設く。
其奥は線路を距てゝペンキ塗の板圍下手迄續く。
稲荷祭りの太鼓の音にて幕明く。
傳平　（大聲にて）モシ〳〵、今度の汽車は何時に出ますね。
驛夫　姫路行は十二時、上りは十二時二十五分です。
傳平　ハア、私は是から歸途にお伊勢樣に參るだが、何れへ乘るだえ。
驛夫甲　馬場迄行つて乘換です、十二時二十五分です。
傳平　（構內の時計を見て）今十一時半だ、まだ大分待たにやなんねえ。お杉何うするナ。
お杉　一時間も待つんかね。
傳平　然うよ。お前もくたびれたらうから、大儀だけんど此處で待つか。
お杉　何うしべえ。
傳平　何うしべえッて外に法も無かんべえ。
お杉　わし今來る時に、彼處の茶屋にうまさうな團子が有つたつけ、アレ五六本喰べて見たい。

傳平　團子だ、お前食ふならおれも附合ふべえ。（驛夫に）ぢやあ一時間たつたら又來べえ。

（驛夫は答へず。夫婦は花道の方へ睦じく連立ち歩みつゝ。）

傳平　けれどなあお杉、お前と一所に斯うして方々見物して歩くのは何とも云へ無え好い心持だア。

お杉　旅は道連れといふけンど、夫婦連なら唐へでも天竺へでも行けるだア。

傳平　然うともな、何處へだつて、本當に樂しみな旅だぞ。

（高座に話し行く。）

（是とすれ違ひに片岡中將（洋服、握太の洋杖を持つ）浪子（紋つきの二枚襲、水色絹の傘を翳す）お幾（小形の信玄袋を携ふ）宿屋の番頭（鞄、毛布など持つ）出來る。浪子は百姓夫婦の高話を聞き、我身に思比べて手巾に涙を抑へしが、泣かじとすれば咳嗽頻に出づるをお幾介抱する。漸く少し靜まりしを見て。）

片岡　餘り歩過ぎたので、體にさはつたか喃。

浪子　いゝえ、最う宜しうございます。

片岡　然うか。しかし今日は實に好い天氣ぢや、遠く夏霞のかゝつた和州の山、彼の麥の上に宇治川を行く白い帆が見ゆる。

浪子　好い景色で御座います事。

（ト其方に心無く百姓夫婦の行方を見送る。）

お幾　然し今日は珍らしくお歩ひで、好い運動に成りました。お嬢樣最う停車場へ着きましたよ。

（此時一行舞臺へ來る。）

片岡（番頭に）オイ其鞄は小荷物に預けてくれ。

番頭　へイ畏まりました。では毛布は此處へ敷いて參ります。

（ベンチの好き處に敷き鞄を持ち中に入る。中將は其上に腰をおろし。）

片岡　浪、くたびれたらうで休め、幾も休むが可いぞ。（此時出來りたる驛夫に）馬場行の汽車は十二時何分でごわすな。

驛夫乙　二十五分でございます。

片岡　ハ、ア、（と懐中時計を見て）約一時間の餘裕が有る、ちと早過たわい。

お幾　それでは悠り御休息が出來ます。

片岡（悠然と葉卷に火をつけ）然し年の經つのは早いもんぢや。浪お前は覺えてをるかい、お前のちひさかつた

頭、よくお父さんに負さつて、ポン／＼お父様の橫鬢を蹴つたりしをつたが、さうぢや、アレはお前が五つ六つの頃ぢやつた、のう幾。

お幾　オホヽヽヽ然樣で御座いましたよ。殿樣がおんぶ遊はしますと、小さいお孃樣がよくおむづかり遊ばしたんでございますね、唯今もどんなにお羨しがつていらつしやるか分りませんでございますよ。

（浪子淋しげに微笑む）

片岡　駒か、駒にはどつさり土產でも持つて行くぢや、のう浪、駒子が千鶴さんが羨ましがつて居るぢやらう。一度此方に來たがつて居つたのぢやから。

お幾　然樣でございますよ。あちらのお孃樣がおいで遊ばしたら、どんなにお賑かでございませう。本當に私などがこんな珍らしい見物をさして戴きまして……

（トいふ時、番頭小荷物切符を持來り。）

番頭　へイ預けて參りました。

片岡　御苦勞ぢやつた。

番頭　それでは最う御用はございませんか。

（お幾祝儀を渡す、番頭去る。）

お幾　アの旦那樣何で御座いますか、宇治川と申しますのが螢の名所で、アノ駒澤が深雪に逢ひました所でございますね。

片岡　ハヽヽヽ幾は中々學者ぢやの。イヤ世の中の移り變りは甚いものぢや。（浪子に）お父さんなんぞが若かつた時分は、大阪から京へ上るといふと何時もアノ三十石で、鮓のごと詰められたものぢや、イヤそれよかお父樣がの、二十の年ぢやつた、大西鄕と有村——海江田とが月照さんを大阪迄連出した後で、大事な用が出來てお父さんが行く事に成つた。さあ後追かけたが、餘り急いで一文無しぢや、たうとう頰冠りをして跣足で——夜ぢやつたが、伏見から大阪迄川堤を走つた事があつたのぢやハヽヽヽ。

お幾　オホヽヽ旦那樣が頰冠りをしてお駈け遊ばしたら、是は可笑しうございましたらう、ねえお孃樣。

片岡　イヤ、其の時は可笑しい處ぢや無かつた……然し乃公も幾度か危い處を過ぎて來て、今ではこんな氣樂な旅行もする。考へて見れば夢の如しぢや。ア、此方へ來てから二週間に成るのう。（と偶と浪子の樣子を見て）浪お前又氣が鬱ぐか。、

浪子　イヽエ。

片岡　然し斯うしてをるのも待遠しい、近所でも歩かうかな。

お幾　大分御休息遊ばしましたから、其も宜敷うございませう。

（驛夫甲出來る。）

驛夫甲　神戸行がもう直き參ります。

片岡　わしは馬場の方へ行くのぢや。

驛夫甲　ではまだ大分間があります。

（驛夫去る。）

片岡　下りの汽車が來ると又騷がしいで、戸外の陽氣な處へ出よう。

（ト立上り二人を連れて構外に出去る。）

（引違へて反對の方より海軍少尉川島武男、同　大石悦太、同　桃井健次、打連れて入來る。）

大石　おい／＼斯う急いぢやたまらん、稀に陸へ上ると吾輩息切が爲て困る。

桃井　弱い奴だなあ、河童が陸へ上つたんぢやあるまいし。

大石　然しお互に河童だぜ。（ト武男を見て）オイ川島いやに茫乎してるぢやないか、皿の水がなくなつたか。

桃井　けれど、吾々も或は是が陸の歩をさめに成るかも知れんナア。

大石　然う思ふと踏む土にも何と無く跡を殘して行きたいやうに思ふ。

桃井　殘し過ぎて此汽車に乘後れると事だぞ。

（ト二人笑ふ。驛夫鈴を鳴らす。此時武男何か注目に見たる體にて來ると二三步か離れる。）

大石　オイ川島何だ。

武男　別に。（よもやと思ひて止る。）

（此時乘客多勢入來り、神戸行きの凄じき音して停車場に着く。驛夫「山科、山科」と呼ぶ。鈴又烈しく鳴る、桃井慌しく切符を買來り。）

桃井　オイ切符！　何を見てゐるんだ。

（二人は武男を引張りて入る。人の昇降する物音。やがて車掌は笛を吹鳴し汽車出んとする一刹那、浪子心も空に下手より駈來り。）

浪子　ま、良人！

（搖き出たる汽車の窓より武男も驚きて顏を出し。）

武男　オ、浪さん！

（浪子狂氣の如く柵に縋りて伸上る「浪さん／＼」と呼ぶ聲のみ汽車の響の間に聞ゆ。お幾後より駈來り。）

お幾　お危う御座いますよ、お嬢様。
　（中將も汽車の方を見送る。）
武男　（聲ばかり微に）浪さん――
浪子　貴方――
　（ト身を揉む途端、手巾を口に當てゝ喀血するを、中將、お幾驚き介抱する途端。）
　（舞臺暗黑と成りて一轉す。）

其二　佐世保海軍病院

白き壁もて圍まれし一室。中央に寢臺、其枕頭の小さき卓にて藥壜を置き大形の壜にコスモスの花を活け、下手に扉ありて斜に奧へ廊下を見せたり。
美しき秋晴の朝、負傷の爲入院せる川島武男は、今目覺めて自ら窓帷を引けば、朝の華なる光床を照らせり。
武男床上に坐して夢を思ひ嘆息する事久し。此時友なる大石悦太郎扉を啓いて入來り。

大石　川島、モウ起てゐるか。
武男　（心着きて）ア、大石か、能く來て呉れた。
大石　昨日入港したものだからな、早速やつて來た、（ト其姿を見て）思つたより速に恢復したな、其樣子ぢや最う大丈夫だぞ。
武男　（腕を撫して）未だ幾分か痛みあるが、なアに最う癒つたも同樣さ、こんな石炭酸臭い處に何時迄も寢てゐるのはいやだから昨日も庭へ出たんだがね、軍醫に見つかつて小言をくつたよ。
大石　餘り輕卒な事を爲るな、十分榮養して早く歸つて來いよ。
武男　たゞ速に戰地に歸らん事をのみ思つてゐるんだ。然しなあ大石、垂死心無果、幾縁意復生ずで、塵芥より輕んじた命は不思議に永らへたが、熱も苦痛も去り、食慾が舊に復すると共に又いろんな事を思出すなア。今も……君の夢を見たぞ。
大石　夢に俺を？　然うぢや無からう！　君の夢に入るものは、外に一人有る筈だアハヽヽ、
武男　病の床に夢は多い。いつか出發前、君と桃井と三人で山科停車場から汽車に乘つた事が有つたナ、アノ時の光景を偶然今夢に見た。
大石　彼の時？　夫ぢやいよ／\敵艦見ゆぢやハヽヽヽ、時に市川はモウ退院したさうだな、一人になつて淋しいから餘計思ふ事多しだらう。まあもう少しだ、早く全快

したまへ、ソレを頭に結つてゐるよ（ト蛋を捨てゝ）時に吾輩一寸町まで用足しに行くから是で失敬する。

武男　まあいゝぢや無いか、久しぶりで今日は悠り話して行け、彼の時の話も為ようぢやないか。

大石　歸りには是非寄るよ、然うで無いと氣が落着かんから、ソレに一週間位は碇泊するらしいからね、是からは毎日遊びに來る。

武男　然うか、ぢや歸りに來て呉れ、待つてゐるぞ。

大石　よし〱。

（大石出去る。）

（武男猶坐して沈思する時、看護婦入來り。）

櫻井　田崎さんと仰しやる方がお見舞にいらつしやいました。

武男　田崎……ですか。

櫻井　はい、東京から參つたと申上げて呉れと仰しやるので、

武男　（頷きて）然うですか、此方へ通して下さい。

（看護婦去る。）

（やがて家扶田崎恐る〱入來り。）

田崎　御前。

武男　ア、田崎か、久し振りだつたね。

田崎　はい、久しぶりでお顔を拜しまして、おなつかしうございます。

武男　東京の方はどうか、お母樣もお變りは無いか。

田崎　相變らず御壯健で、えゝ御前が名譽の御負傷を遊ばしたといふ報知がございまして以來、一方ならん御心配で、來るには及ばんとの御手紙ではございましたが、何でも行つて御容體を見て來いとナ、斯樣仰せられますので。

武男　其樣な御心配には及ばん、此通りモウ九分通り本復したから。

田崎　其の御容體を拜見しまして、私も大安心を仕りました。處で御前、是は御隱居樣の呉々御申含め遊ばした事でございますが、御全快遊ばした上は、是非一度御歸京に成りますやうに。

（と心着きて見舞物を出しなどする。）

武男　（眉を顰め）其事は此間手紙でも申上げた通り、折角のお望みだが、乃公は歸らんと決心した。癒つたら直に艦へ行く。

田崎　いや、それは奥樣の儀につきまして御立腹の段は御

尤もでございます。私如きも然り御隱居樣のお計ひが過ぎは致さんかと、實は存じてをりますのですが、然し又御隱居樣にも强ち御無理ならん處もございますので、御家の爲又御前の御爲……

武男　其は解つてゐるよ。だから俺も一時は非常に憤慨したが、今日では其方面は……親に對して不孝だッたと後悔してをる、田崎、大抵は能く體質を新にするといふが、成程紙一枚を隔てゝ、死といふものに觸れてゐる戰に出たと言ふ經驗は、總ての記憶を新にして了つたよ。それや後の事は殘念だと思ふ、心外だと思ふ。然し今では浪さんは何んだか世に無い人のやうに思はれてね。

田崎（伏目になり乍ら）はい……

武男　乃公はもう、少しもお母樣の爲すつた事を憤りやせん、然し……兎に角今度は歸らんつもりだ。

田崎　重々御尤でございます、然し何れにしてもお歸りになる事ですから。

武男　ソレは無論さ、だから永久に歸らんとは言はん、戰死でもせぬ以上は（と言ひて心着き）おい手紙にも書いてやつたが、千々岩が旅順で戰死した時、乃公は偶然邂逅したよ。

田崎　然樣だそうで、千々岩樣も實にお氣の毒な事を致しました。然し御前！　是程御心配になる御隱居樣のお心をお察し遊ばしたら……是非どうぞ御歸邸を……

武男　お母樣の心を察しろといふなら、ナゼ、おれの心を察しては吳れんのだ。

田崎　はい、（當惑して）それに唯お歸りを願ふ許りでございませんので、御隱居樣から何にか御相談が。

武男　それは昨日着いたお手紙で拜見した。山木の娘の事だらう？　其だから猶歸りたくない、（少時して）遠方を見舞に來てくれたお前に、花をもたせて歸さんのは氣の毒だが、是だけは爲方がない。只おれが此通り全快に近づいてゐるといふ事をお土產にしてくれ。（と言ひ了つてやゝ疲れたる體）お前もう宿はとつたか。

田崎　いや、只今着きました許りで、

武男　では早速宿を見つけて、今日は悠り休息するがよからう。

田崎　有難う存じます。

武男　乃公も休息する。

田崎　では後刻改めて伺ひまする。

武男　明日で可いよ、明日で！

田崎　はい、其では是で御免を蒙ります。

（田崎出で行く。）

（武男は茫然として意外な面めしが、やがて毛布を引被きて打臥す。）

（看護婦梅田入來り。）

梅田　お荷物が屆きました……お孃ですか。

武男　（頭を擡げ）荷物が……何處からですか。

梅田　東京、葉山よりとして御座います。

武男　葉山？　知らんなあ、人違ひぢやないか。

梅田　いゝえ、たしかに貴方のお名前でございます。

武男　然し吾輩は那樣名を覺えてをらん、たしかに川島武夫宛で來たのなら……其處で開けて呉れ給へ。

梅田　かしこまりました。

（看護婦油紙を取去れば紫の色出づ。其を解けば、ネルの單衣、縮緬の袷、白縮緬の兵兒帶、白足袋、襦袢、眞綿の胴布團など出で、箱の中よりは梨、パナ、など武男の好める果物出づ。）

梅田　まあ、澤山に……御覽なさいまし。

（武男不審に堪へず。起上りて其品々を熟視せしが。）

武男　中に手紙でも入つては居ないですか。

梅田　（探して）否え、手紙は何處にもございません。

武男　無い？　不思議だね（下考へて）おや其油紙を、

（看護婦油紙を渡す。武男其に見入りて忽ち悟る處あり。）

武男　あゝ浪さんだ！

（何見たし看護婦は驚きて？）

梅田　ハア？

武男　イ、ヤ。

（送り來りし衣を手に取りて潸然として泣く。）

（遠く微かに喇叭の音して。）

――幕――

七　幕　目

片岡浪子臨終

八疊の奥座敷、上手は硝子障子越に庭園を望む。床の間の方は屏風を立廻し、下手襖にて間切る。上手ベツトの上には浪子昏々として眠る。お幾及看護婦傍に侍す。

下手一間を衝立にて劃り、丸卓を中に三四脚の椅子を

傍へ、加藤夫人悄然として坐してゐる。醫師富岡、今しも注射を終りたる樣にて徐に病床よりはなるゝ體にて歎息く。

清子　（醫師に）一寸……
（醫師無言にて立寄る。清子と醫師は極めて低聲にて二三語交ふる事あり。）

清子　あゝ然うですか。
（ト落膽の有樣。）
（此時片岡中將（和服着流し）不安の體にて入來る。）

片岡　（一寸浪子の方を覗きて富岡に）何うですな。

富岡　（低聲にて）誠にお氣の毒には存じますが、最早……今晩十二時頃か、遲くて明日の曉迄。

片岡　とても今日かのう。
（ト獨語して、）
あゝ彼方の部屋で休息して下さい。幾……
（お幾心得て富岡を導き去る。）

清子　（中將に）壽命だから致方もありません。ねえ貴方、彼の通り譫語にも言續けてゐるのですから、世間體は何うあらうとも一度逢はせてやりたく、暇乞もさせたいのですけれどもねえ。

片岡　（吐息のやうに）フーム。

清子　然し何といふ情無い事でせう、彼の人は今臺灣に着いたばかり、おまけに軍艦にのつてゐるのですから。

片岡　仕方ごわせん。

清子　何といふ因果でせう、私可哀さうで成りませんわ。
（といふ時浪子かすかに咳入る、清子驚いて振返り、中將も浪子の方に氣をつける。看護婦、浪子の云ふ事を聽き取りたる體にて、清子の方に來り。）

看護婦　奧樣、お呼びで御座います。

清子　私ですか。
（と枕頭に立寄る。）

浪子　（少しはつきりと）伯母さまは。

清子　はいよ來ましたよ、少しは眠れましたか。

浪子　（微かに）少しばかり……

清子　然う、それはよかつた。（と耳を寄せ）あゝ然うかい。（看護婦に）ちよつと彼方へ行つてゐて下さい。

看護婦　畏りました。
（看護婦去る。）
（中將は遠くより見詰める。）

浪子　伯母さま、私もう死にますよ。

清子　何ですねえ、那樣な氣の弱い事を言つちやいけません。

浪子　モウ一度、お目にかゝりたいのですけれどね……

清子　……

浪子　（浪子は枕の下より手紙を取出し。）私が亡くなつた後で、これを——屆けて……

清子　（泣きながら）あゝ屆けるよ、きつと武男さんに手渡ししますよ。

浪子　それから此の指環はね——お嫁に行つた時もらつたのですの、伯母樣、これは私持つて行きますよ。

清子　（胸迫りつゝ）あゝ——（中將暗涙を呑む。）（やゝありて浪子。）

浪子　どうして居らつしやるでせう。

清子　武男さんは臺灣でね、矢張りお前の事を思つてゐなさるだらう。近い處なら何うにでもして……お父樣も然う仰やつておいでだけれどね……然し浪さんの心盡しは乾度私が傳へるし、手紙も確に屆けますよ。

浪子　ありがたう、あゝ辛い〳〵、もう、もう私女なんかに生れはしませんよ。

清子　（ト云ひながら苦しみ、清子の手にすがり血を吐く。）（慌てゝ）ちよつと呼んで下さいまし、誰か……

片岡　幾！　（お幾看護婦と共に走り來る。）看護婦は居らんか。

清子　あの、先生にすぐ……（看護婦は走り入る。）（繁子、千鶴子、駒子、毅一、道子等皆々此室へ入來る。）

浪子　（譫言のやうに）アゝ歸りませう〳〵、ねえ貴方、お母樣參りますよ……（醫師、中將に目くばせする。）（中將進みて病人の手を取る。）（皆々寢臺の周圍に集りて、病人を見戍る。）

片岡　浪、コレ浪、氣がついたか、お父さんぢやぞ。皆も此處に來て居る。（浪子は取られたる左手に右を添へて、眦と父の面を見詰め。）

浪子　お父さま、お大事……お母さま、御免遊はして……（繁子は泣きながら、立寄り病人の涙をぬぐふ。）（清子、千鶴子、駒子、毅一、道子等は轟々「浪さん」

　「姉さん」と呼ぶ）

浪子　（微に）伯母さま、千鶴さん、駒ちゃん、然様なら―
　姥や……

　（お幾泣きながら。）

お幾　お、お、お孃樣、姥も御一緒に……（と嗚咽）

　（皆々お幾を宥めて次へ立たす。）

片岡　浪、何も云ひ遺す事は無いか・確り氣を持て。

清子　浪さん、何も私が受合つたから、安心してお母樣の
　處においでよ。

　（父の腕に倚りて、浪子は永の眠に入る。）

　（皆々聲を立てゝ泣く。）

――幕――

大詰

青山墓地

樹々の梢は半黄ばみて、一入淋しき青山の墓地。古碑墓標數多き中に、鐵柵を繞らしたる一段高き塋域、正面には苔蒸せる石塔あいて、其前に『浪子の墓』と記せる木標新らしく建てられたり。墓前の花哀に凋みて、香煙縷の如し。墓地の掃除人、箒木を持ちて通り去る、鴉唖々と鳴いて落葉二三片。

川島武男左腕に黒布を卷き右手に白菊を提げ悄然として出來る。

此時墓地の後より、海軍士官の未亡人、海軍服を着たる七歳ばかりの子を連れて出來り、武男と行違ふ。

子供　お母さま、彼の小父さんも、矢張お父さまと同じ海軍だね。

未亡人　あゝ……

（未亡人は涙を手巾に押へて見返り、武男と顏見合せ默禮して行く。）

（武男は見送りて佇む事少時。漸く墓前に來りて、白菊を手向け只涙に咽ぶ。やゝあつて内ポケットより浪子の遺書を取り出し、半ば口の内に讀む。手は戰き聲は震ふ。）『最早最後も遠からず覺え候まゝ、一筆殘しあげ參らせ候。今生にては御目もじの節もなきことゝ存じ居候ところ、天の御憐れみにて先日は不慮の御目もじ申しあげ嬉しく〳〵、併し汽車内のことゝて何も心に任せ申さず誠に〳〵殘多く存上まゐらせ候かしこ』）

武男　あゝ――（と眼を閉ぢ）其當時を追懐して、再び讀み行く）

（「儘ならぬ世に候へば何も不運と存じ誰も恨み申さず此まゝに身は土と朽ち果て候とも魂は永く御側に附き添ひ……」）

（涙滂沱として禁めあへず、手紙を額に押當てゝ咽ぶ。）

（此時上手より片岡の令息毅一出來りて。）

毅一　お父樣誰か來てゐますよ。

（と武男を見て。）

ア、川島の兄さん！　お父樣川島の兄さんだ！

（武男は手紙を持てるまゝ立上れば、片岡中將は目前に立てり、思はず二三歩退いて頭を下ぐ。）

（中將はツと歩を進めて、武男の手を握り。）

片岡　武男さん、私も辛かつた！

（少時して武男の肩をたゝき。）

武男さん、浪は死んでも私はやつぱり貴方の爺ぢや、確かり頼んますぞ。

（父子堅く握手す。）

片岡　前途遼遠ぢや、何も男兒の心膽を煉るのぢや……あゝ久振り、武男さん……一所に行つてゆる／＼話さうぢやないか。

――幕――

無花果（五幕）

中村吉藏原作

登場人物

神學士　鳩宮庸之助
夫人　エミヤ
岸野お澤
鳩宮父　修造
鳩宮母　お節
田島保衞
同夫人　柳子
お巻
植木監督
今井看守長
中岡蘇平
石谷刑事
押丁　刈谷源三
小間使　お銀
外に、女監取締、看守長、刑事二人、男囚二人女囚一、二、三、四、五、六、七、八、九
外大勢
乞食、ちび六、上州
男の信者四人、女の信者三人、抱車夫二人、
軍人、茶屋の娘、女學生など

序幕

堀切菖蒲園の場

本舞臺上手寄りに二間の間中の二重草土手の蹴込、此上には大きな床几など据ゑ付け、茶亭の道具よろしく。二重舞臺は花道迄一面に花菖蒲の盛り、此中へ縱横の

八ツ橋を架け、後は同じ菖蒲の書割、總て堀切菖蒲園の體。

幕あく。

（と、床几には軍人の仕出し、茶亭の娘など茶を出して居る。ト、下手より女學生等出で來り喋々しながら上手へ入る。）

（と、此時洋行歸りの神學士鳩宮庸之助、フロックコートを着け、同じく洋裝の夫人エミヤを伴ひ、花道より出で來る。）

庸之助　どうだね、エミヤ、アメリカでは斯う云ふ景色は見られないね。

エミヤ　私、本國に居る時から、誠にビユーテキフル・シーンに富んだ良い所と聞きましたが、見ると聞くより優つて居ります。これ何ありますか？

庸之助　ム、これか、その花菖蒲と云ふ花だが二ケ月前だと丁度櫻の真盛りだ、それをお前に見せたかつたね。

エミヤ　櫻！　チエリーありますか！

庸之助　いつも云ふ通りチエリーを日本では櫻と稱して居るが米國のとは性質が違つて居るね、その櫻が我國では敷島の大和心——と云つても解らないが所謂ジヤパニーズスピリットを代表するものとしてあるので、例へば米國などで美人をローズとか、純潔の美徳をリリーに譬へる樣なものでね。

エミヤ　この花菖蒲、何にたとへますか？

庸之助　まア、花菖蒲を譬へたものはない樣だが、それに似た花で燕子花と云ふ花があるので、兄弟でも何でも克く似た物を何と菖蒲か燕子花などと形容して居るよ。

エミヤ　あなた、此間から尋ねて居る姉樣、菖蒲に燕子花の樣、好く似て居ますか。

庸之助　（微笑）そりや兄弟だからよく似て居るさ。……さうして非常に情の深い人だよ。

エミヤ　その姉さん、お父樣、お母樣に一日も早く逢ひ度いと思ひます。私嬉しく思ひます。

庸之助　（感激的に）エミヤ、よく云つてくれたね、神と夫に身を捧げて居ると云ひながら、世界中で最も女權の高い米國婦人として男尊女卑の甚だしい日本の家庭に入つて行くにはどんな困難が起るかも知れない——殊に差當りコックとサアバントを雇ふと云ふのも留めて、馴れない手で庖廚の事までやらうと云ふお前の優しい志には誰だつて同情せずには居られるものか、私はお前の樣

な良妻を得たのを神に感謝するよ。

エミヤ　それ私も同じ事あります。貴方の様なやさしい良人持つこと、それ神のめぐみあります。

庸之助　然し日本に歸つて來ると直ぐに番町の會堂を牧する事になつたので、ツイに外出も出來なかつたが、今日と云ふ今日、かうして半日の閑を得て夫婦手を取つて郊外を散歩するとは、こんな愉快な事はないね。

エミヤ　夫、父樣、母樣、姉樣も皆一緒であつたら、尚嬉しい事ありませう。

庸之助　まア、それも遠からず邂り合ふ折があるだらうよ。

（と、兩人手を取つて上手の橋に登つて退場。）

（向うより、田島保衛、同夫人柳子、父修造、母お節、小間使、お銀、抱車夫、三藏、金助附添ひ出で來る。）

お節　お柳や、私は十何年ぶりで堀切へ來たが相變らず、結構な事ねえ。

お柳　本當ですね。お父樣も氣が晴々としたでせう。

修造　ム、斯うして親子夫婦が揃つて散歩に出られるのも皆、保衛さんの御蔭だ、おろそかに思つちやいかんぞ。

保衛　なんですね、お父樣、その位の事は當り前でさアね。

お銀　丁度あそこにいゝ所がございます。

お柳　さうね、そんなら彼處で休んで行きませう。

保衛　ウム、よからう、オイ三藏。

三藏　ヘイ〳〵よろしうございます。

（と、車夫二人捨臺詞にてかけ行く。床几に毛布を敷き皆よろしく二重に並び、茶屋の娘を出す。）

保衛　茲は丁度、園中を見晴していゝ、柳やお父さんやお母さんにお酒を上げたら。

お柳　でも、あなた、お歸りに何處かへ御寄りになるでせう。

保衛　いや、それはそれ、これはこれだ、菖蒲を見ながら一杯やるのも又別だよ。

修造　あゝ、そりやお格別ぢやて。

お節　何んですねえ、お父さん、酒と云へば何時でも先に立つて。

修造　イヤさう云ふお前も隨分いける口ぢやないか。

保衛　ハヽヽ、まアともかく一ツ獻じませう。

（と、杯をさす。一座が、はしやいで來る。此時以前の庸之助、エミヤ出で來り。）

エミヤ　あなた、大層廣いですね。

庸之助　ム、、もつと奥へ行つて見ませう……

（と、二重を下り下手八ツ橋の方へ行く。此時。）

お柳　（ふと、氣附きし思入にて）ア、モシ、違つたらお詫び申しますが、貴方はあの、庸之助さんぢやありませんか。

庸之助　エ、。（と、立戻り両人顔を見合せ）

お柳　オ、やつぱり庸さんですねえ。

庸之助　オ、姉さんですか。

お柳　お父さん、お母さん、庸さんが來ましたよ。

修造　ニ、庸之助か。

お節　オ、お前まア、よく無事でゐてくれたねえ。

（と、早くも涙で慄へ聲になる。）

庸之助　オ、お父さん、お母さんも、どうも意外な所で。

（と、双方嬉し泪にくれる。）

保衛　まアこれは意外な所でお目にかゝるもんだ、庸之助君、其後はしばらく――

庸之助　オ、君は田島君、どうして父や母と？

修造　成程、庸之助とは友達だつたかなア、イヤこれは實に奇遇だ。

お節　庸之助や、まアお聞きよ、今では保衛さんはお柳の旦那なんですよ。

庸之助　そ、そんなら姉さんは田島君に。

お柳　いゝえ、私ばかりでなく、お父さんもお母さんも旦那のお世話になつて居るんだよ。

庸之助　ハアさうですか、――私が意氣地がない許りにどうも飛んだお世話になります、今後とも何卒。

保衛　イヤ僕も同様、以後、僕の兄弟同様に願ひます。

（庸之助、ヱミヤを引合はせ。）

庸之助　お父さん、お母さん、田島さんにも紹介いたします。これは私が今度アメリカから連れて來た妻でして、これの父には、一方ならぬ世話になりましたのですから何卒私同様に願ひます。

お節　ヘエーそんならお前さんは此の異人さんを。

（と、呆れ顔。ヱミヤ握手せんとする。皆々手を引く。）

庸之助　姉さん、貴方もどうか兄弟同様に。

お柳　ハアどうかね。

お節　ハイ何卒ね。

（と、上手より中間藤平出で來り。）

藤平　やア田島さん、爰に居られましたのか、先程からあちらでお待ち申して居りましたよ。

保衛　イヤどうもお待ち遠う、今不圖、爰で妻の弟に逢つ

たもんだから。
蘇平　ナニ奥さんの弟さんに……ヤア鳩宮君、そんならあの、君があの奥さんの……
庸之助　オヽ中岡君、そんなら君も田島君を知つてるかね。
蘇平　ヤア、ヱミヤ夫人も御一緒ですか、此頃非常に御懇意に預つて居る奥さんが君の姉さんだとは知りませんでしたよ。何んですか今日はお揃ひで御散歩ですか。
ヱミヤ　中岡さん、妾ね今日夫のお父さん、お母さん嫂さんに逢ひました。大層嬉しうございます。
蘇平　イヤ御尤もです。貴方も嘸御満足でせう（とお柳に向ひ）私もあちらに居た時分は此のヱミヤ夫人のお父様や庸之助君には色々御芳情に預りまして、此間御歸朝になつてからも、兄弟同様に御交際を申して居りますので。
お柳　ハイ、左様でございますか、何卒よろしく。
蘇平　時に鳩宮君、丁度伺はうと思つて居りましたが、幸ひ爰で御目にかゝりましたので御話しいたして置きますが、此間も申した通り僕は田島さんの銀行の外交係りに使つて頂く事になつたのです。就ては君の希望して居られた監獄署の教誨師の方も典獄まで云ひ込んで置いたから明日にも沙汰が來るかも知れないから何卒その積りでゐてくれ給へ。
庸之助　イヤそれは色々有難う、然し君は牧師を止めるのかね。
蘇平　イヤそれも君の様に神學士の學位でも持つて居るのなら又格別だが、僕のやうなものは牧師ぢや食つて行かれないから止むを得ん次第でね。ハヽヽヽ。
庸之助　さうか、それは實に殘念だなア。
蘇平　イヤ、さう云はれると面目もない。
お節　どうして何處へ――（と叱りながら）庸や、お前一體十年の間何處に何をして居たのだね。
庸之助　ハイ御存じの通り岸野の家を放逐されまして一時はもう無茶苦茶になつて仕舞つたんですが、たうとう氣紛れからアメリカへ渡りました。然し何を云つても無一物の貧乏書生で皿洗をしたり、又靴磨をやつたり、種々樣々の苦勞をしましたが、これも親兄弟の罰と思ひますので、何處までも忍耐してやつて居ます內、宗教の方面に志す事になりました。これの父の牧師に親身も及ばぬお世話になり、エール大學へ迄入れて貰ひ、神學士の稱號を受ける身となりましたが、其上かうして先生の令孃ヱミヤと結婚して二人連れで日本へ歸つて來ました譯で

す。何しろ十年居なかつたので、餘程樣子が變つて居りました。貴方々の御行方を探しましたが、更に知れませんで、そればかり氣にかけて居る内、今日圖らずもお目にかゝる事が出來たのも、皆神の惠みでございます。

保衞　(少し輕蔑の顏色で) ぢやア君は牧師なんだね、フーン七八年も苦學して牧師か。

蘇平　イヤどうして、鵜宮君は僕等の樣な平凡牧師と違つて、とにかくエール大學を卒業して神學士の學位まで得られた信仰家ですから。

保衞　こんな事を聞くのは失禮かも知れんが、一體月給の處はどれ位になるんです。

庸之助　月給？ ……月給と云つて別に、つまり月給のために働くのではないのですからね。

保衞　成程其位の心掛でなければ、中々ミツションとしてやつて行く事は出來ませんからなア。併し折角、外國で十年も學んで來て、その新智識を實際に活用しなくちやア所謂、寶の持ち腐れぢやアあるまいかな。

蘇平　イヤ、それは實に仰せの通りで現に私共の樣な者でさへ、相當の給料で御採用して頂けるのですから、基督の御守なんか馬鹿らしくつて、ヤツちや居られませんて。

庸之助　肉の事を思ふものは死也ぢやないか？

(と、たしなめる樣に云ふ。)

蘇平　(苦笑) そこが僕の地金なんだらう。

お柳　そんなら庸さんは、まア、耶蘇なの？ アノいやだね。

お節　エツ、何、お前耶蘇だつて、何んと云ふこつた。第一保衞さんのお顏にもかゝはるよ。フンさうするとあの異人さんも耶蘇の方なんだね、それを女房だなんて、よくもまア、呆れ返ツて物が云へないよ。

お柳　ほんとに耶蘇なんて縁起でもない、とんだ心得違ひの人だね。

お節　本當に十年ぶりで無事な顏を見て、やれ嬉しやと思へば又こんな厭な事ばかり、お前は何處まで親に苦勞をかけるんだらうねえ。保衞さん、何かいゝ工風はありませんかねえ。

保衞　左樣、庸之助君さへ牧師の方を止める氣なら、今丁度、銀行の方に外國係りの缺員が有るのですから先づ八九十圓、賞與を入れて百四五十圓位の收入は屹度ある樣にしてあげ樣が、どうです、さう云ふ事にしたら。

庸之助　イヤ、折角の事ですが、それは、お斷りします。

お節　何、爾かわる？　どの口でそんな事が云へるんだね。第一保衛さんが折角あれ程、親切に云つて下さるのを失禮千萬ぢやありませんか、……人を馬鹿にして日本人の皆に毛唐人の宗旨の切支丹なんぞになるなんて、何たる情ない事だらうねえ。

佐造　本當に姉さんの云ふ通りだ、庸之助、一體耶蘇などと云ふものを何んと心得て、そんな氣違ひじみた事をする氣になつたんだ、怪しからん奴だ！

お御　ねえ庸さん、後生だからそんな宗旨をやめて折角、旦那が親切に仰有る事を聞いて下さい。さうすりや、お父さんや、お母さんが、どの位、安心なさるか知れやしないし、旦那だつて縁につながる方だもの、この上とも惡い樣に、お計らひなさる氣遣はありませんよ。

庸之助　イヤ一概にさう云はれると私も實に困るんです。一體牧師と云ふものは、つまり人の靈を救ふのが役目で極く尊い職分なんです。月給が少いからつて月給で人の價値は定まるものぢやないのですから、どうぞそんな御心配は御無用に願ひます……（トヒミヤの方を見て）貴方々は毛唐人だなんて仰有いますが日本人だつて毛唐人だつて目色、毛色こそ變れ、神の目から見れば矢張り同じ人間ですから人情に變りありません、況して今日、そんな事を云ふと人に笑はれます。

保衛　まア〱、理窟を云へばそんなものですがね。

お節　イエ〱なか〱そんな位では濟まされません、庸之助や、お前はそんな暢氣な事を云つておいでだが、あのね、そら、お前と關係のあつた岸野のお嬢さんねえ。

庸之助　エ、お澤さんがどうかしましたか？

（と、庸之助は苦しいこなし。）

お節　それでも心にかゝるかして氣を揉んでるよ、まアお聞きよ、お前があつちへ行つた後で他所から貰つた婿を嫌つてたうとう自分の手にかけて殺して仕舞つてね、今では監獄で苦役中だとさ。

庸之助　（驚愕の色）エ、そんならお澤さんが、そんな罪を？

お御　それに未だ驚く事がありますよ。監獄に居る內にお澤さんがお前の胤を姙み落したと云ふ噂だが、思ひ出してもお可哀想でならないんですよ。

庸之助　エ、そりや意外な事になつたもんですねえ。

（と、顔色蒼白となる。）

蔭平　へエ、そんなら姉宮君にも、洋行前にそんな艶聞が

あつたんですか、して見ると聖人君子も此の道ばかりは例外ですな。（と笑ふ）

エミヤ　（夫の顏色惡しきを見て）貴方大變顏の色惡いあります。どうかしましたか。

庸之助　（煩悶して）オ、エミヤ、斯う云ふ結果にならうとは、今の今迄夢にも知らなかつたが、以前、處女の神聖を汚した罪が懺悔では消えて居ない。イヤ罪が罪を產んだと云ふ事だ、どうせう……エミヤ、お前の夫を救つてくれ！

エミヤ　（よくのみ込めぬ作ら）ハイ私、必ず救ひます。

庸之助　あゝ悔い改めても罪は消えないものかしら。

エミヤ　イヽエ、大丈夫、懺悔に罪ありません、罪ありません。

庸之助　オヽ、エミヤ！

（と、兩人はたゞ握手してぢつと思入れ。）

お節　どうしたんだらうねエ、柳や、丸で氣狂の沙汰だねえ。

お柳　本當に情ない事ですねえ。

保衛　オイ、君、さう考へては仕方がない、どうです酒でも一杯やつて氣を晴らしては。

庸之助　イヤ折角ですが僕は禁酒です。

お柳　それもやつぱり耶蘇の風なんでせう。

保衛　これ、餘計な事を云ふな。

（と、暫く庸之助思入れあつて。）

庸之助　お父さん、お母さん、今日はからず、お目にかゝりまして此上の喜びは御座いません、色々お話も申上げますが何れ、改めて御伺ひ申上げます。今日はこれで御免を蒙ります。

お節　そんならお前はこれから直ぐ歸ると云ふのかい？

修造　今は何んにも云はんが、今夜にも尋ねて來るがいゝ色々相談もあるし旁々、五番町七番地、保衛さんの宅まで出かけて來てくれ！

庸之助　ハイ必ず伺ひます。そんなら今日は是れで失禮いたします。

保衛　サアどうか御隨意に。

お柳　庸さん、待つて居りますよ。

庸之助　イヤどうも失禮しました。

エミヤ　サイナラ／＼

庸之助　さようならと云つて居りますよ。

お節　（悒々しさうに）左樣なら。（と、二人は向うへ這

入る。皆々見送る）ほんたうに保衛さん、どうしたらいいでせうねえ、妾は情なくて／＼。

保衛　マア今更後之れ云つたッて仕方がありませんね。

お節　イエさうは行きません。これも矢張り毛唐人がついて居るからです。第一混血児でも出来てごらんなさい。妾共見つともなくて世間へ顔出しも出來やしません。

蘇平　イヤそれもいゝです。二十世紀の今日ですからね。

修造　イヤあんまりよくもありません。私共も老人のせゐか、ハイカラ主義は大嫌ひです。

お抑　モシ／＼お父さん、何んですねえ。中岡さんの前で失禮ぢやありませんか。

修造　ハ、、これは、どうも失禮を申しました。

蘇平　イヤ決して……して見ると私もハイカラ組の一人ですかなハ、、、、。

保衛　君などは銀行中第一のハイカラだね。

蘇平　イヤこれは誠に恐縮ですハ、、。

（保衛も一緒に笑ふ。）

お節　もし、笑ひ事ぢやありませんよ。あの毛唐人が家へでも入つて來たら、いびり出してやります。

保衛　まアそんな事を云はずに機嫌を直して水神の八百松へでも行つて一杯やりませう。

蘇平　それは賛成／＼。

保衛　まア待ち給へ。一緒に行かうよ。

お節　お酒どころぢやありません。本當に庸之助は親不孝な奴ですよ。

（と、行きかゝるのを修造制し。）

修造　まア／＼いゝぢやないか、いゝ加減にしろ。

お節　それでもあんまり。

蘇平　田島さんの車夫さん。お歸りだ／＼。

――幕――

二幕目

第一場　監獄署内教誨室の場

舞臺は左右へ打廻し白壁にて正面硝子窓二ヶ所あり。上手常足の九尺生板羽目にて、蹴込以上に卓臺を据ゑコップ、水さしを備へ、此の後の壁にキリストの額かかる。上手は西洋戸にて出入あり。

（と、舞臺に囚人五人づゝ掛る。床に椅子數脚、女囚大勢腰かけて居る。女監取締は白壁際に立ちかゝり居る。ニコライの鐘にて開幕。）

女監　お前達は靜かにしなくちやいけないよ。（と、云ひ〳〵這入る。女囚の一人耶蘇の掛額を見に行き。）

一　おい、皆ごらん、昨日迄阿彌陀樣だつたが、今日は違ふよ、

二　ありや耶蘇だよ。

一　耶蘇なら、ハリツケぢやないか。

三　さうさ、御らんなねえ、十文字を手に持つてるよ。

二　私共は日本人だから矢張り阿彌陀の方がいゝねえ。

三　なに、耶蘇の方はハイカラでいゝよ。

四　どつちにしたつて皆善い加減な拵へ事を云つて聞かすばかりで、少しも此方等の御腹の足しになりやしないさ。

六　本當だよ。いくら有難い事を聞かされたつて、こんな所へ來てるんぢや、第一生きてゐるのか、死んでるのか分りやしないんだからね。

一　それもさうさね。

五　お前さん達は未だ娑婆へ出れば仕度い事も出來やう、又喫ひたいものも喫はれやうツてもんだが、まアお聞きよ、わたしや情ない終身なんだからねえ。まア罪亡しに話をしようが、此間お湯屋を覗くと男湯の方に脱いであつた印半纏を一枚ちよろまかして、まげて來たんだよ。さうして家へ歸つて見ると、宿六めがこの寒いのに裸で火鉢にあたツて居るぢやないか、お前どうしたのだい稼ぎにも行かずにこの寒空に何をぼんやり考へて居やアがるんだいと突慳貪に聞くと、湯屋で半纏を取られたと云ふのさそれから、あたいもよく考へて見ると、今の印半纏は宿六のさ。さアそれから大喧嘩になつてね。さん〳〵打たれたよ。私も知つた事ぢやなし、癇癪に障つたから宿六の睾丸をギユーと握つてやつたら、それがねえ。（と泣いて）この世のお別れで、たうとうかう云ふ身になつたのさ。

七　罪がないねえ。私は二十歳も年上の亭主野郎が鼻について仕方がないから、可愛い若い男に云ひ附けて寢息を窺つて締めさせたんだよ。それが、たうとう暴れちまつて喫ひ込んだと云ふ譯合さ。同じ事なら、こんな凄いのでなけやア幅が利かないやね。

六　それを自慢にするとは、お前も恐ろしい悪人だよ。
七　あたり前さ、何んだつて善人がこんな所へ來て、赤いおべゞを着るものかねえ。
八　そりや云はなくつても分つてるよ、皆、身分相應に悪い事をしたればこそ、この監獄へ來たのは知れた事だ。
七　おや／＼妙な事を云やアがつたな。
八　何が妙だい。
七　さうぢやないか、身分相應に悪い事をしたればこそとは、何んだか癪に障る文句ぢやねえか。
八　それだ／＼悪い事をしたればこそ、皆赤い着物を着るのぢやないか。
（と、両人云ひ募るを皆々止めようとするのを猶も聞入れぬに。）
一　おい／＼お互に物を云ひ募つた所で仕方がない、お止しよ、私等もかうなつちや早く満期になるのを樂しみに指折り數へて待つ許りさ。終身の捲添なんか眞ツ平だからね。
二　さうともさ、……おい、お澤さん、どうしたのさ、相變らず考へ込んで許り居てさ。
三　いくら考へたつてどうともなるものかね。
お澤　えゝ、だつて私の氣になるのは娘の事さ、永らく看守長さんの處でお世話になつて居たのだが、聞けば此頃そこを逃げ出して行方知れずになつたとやら、本當に今頃はどうして居るかと思ふと、氣が氣ぢやありませんよ。
九　まアさうかい、そりや本當に察してるよ。
一　何んだい、お前までが一緒になつてさア。くよ／＼さんすなえ、親が無くとも子は育ッ、何を云つても苦役中思ふお方にや逢はれない、これも犯した罪の科」かう云ふ唄もあるぢやないか。
（と、お澤泣く。茲へ女監取締出で來り、後より看守長ついて來る。）
女監　氣を付けい！
（女囚皆々起立する。）
女監　番號！
（と、女囚皆々番號調べあつて、看守長前へ出で。）
看守長　そこで皆んなに紹介をするが、今こゝへお出でになるのは今度、米國から歸朝になつた神學士で、今回當監の教誨師になられた方だから皆よく静肅にして御教誨を受けなさい！
（と、上手より蜷宮庸之助フロック姿にて出で來る。）

女囚に一禮する。）

女監　禮！

（と、女囚皆々禮をする。庸之助二重へ上り、椅子へ腰をかける。看守長は。）

看守長　そこで今、お前達に云つた通、この方が、今日から當監の教誨を擔當せられる事になつたから、よくお話を伺つて一日も早く改心せんけりやならんのぢや、直れ。

（と、椅子にかける。女監取締もこれにて椅子に着す庸之助は水さしよりコップへ水を注ぎ一口飲んで。）

庸之助　お祈りをあげます。（ト手を額にあてゝ）天にまします我等の父よ、今私が御名に依つて、この罪囚に與ふる教誨の上に貴方の御力が加はり、彼等を罪惡の中より救ふ事を得さしめ給へ、又彼等が諸々の罪惡を許し給へ！　アーメン（と皆に向ひ）さて皆さん、私は只今看守長の御紹介下すつた通り今度此處の監獄の教誨師を依頼されました。そして男囚方と女囚方の一部を受持つ事になつた次第でありますが、なるべく皆さんの御分りになる樣に、極く手近なお話をしまして別に六ケ敷い事は申しません積りで居ります……キリストの仰有つた御言葉に「柔和なる者は幸なり、その人は地を嗣ぐ事を得べければなり、心の清き者は幸なり。その人は神を見る事を得べければなり」とあります。ですから心は清く持たなければなりません、心を清く正しくして居れば神の姿が見えます。皆さん方は、その尊い心を持ちながら、イヤ人間は皆、めい／＼に神の尊い姿を心に抱いて居る者でありながら、自分で、自分の値打を知らないで居るのです。つまり人間は元々神樣の形に似て造られたもので神樣は即ち造物者であります。此の世界、天を造り地を造り、日輪やお月樣や又水や火、總てありとあらゆる萬物を、お造りになつた全智全能の御方であります。ですから從つて、何もかも御存じで又何處も彼處もお見透しになるのであります。さう思へば決して惡い事は出來ませんが、人間と云ふものは、とかく誤ちをし易い者です始めの中に直せば直るものを、度重ねて遂ひには悔い改める事が出來なくなる――例へば、ちよろ／＼とした流れの水が、終りには大海へ落ちるのと同じです、又、風邪を引いたからと云つて、醫者にもかゝらず重病になつてから漸く醫者の手當をしても、もう取り返しがつきません、（と、お澤と顔を見合せて驚き言語も杜絶える）…それですから、皆さんが、この尊い神樣の姿に似て造ら

れた方々でありながら、清い正しい神樣の眞似をしないで却つて罪を犯したり。惡い事をしたり、とどの果てがこんな暗い所へ這入つて來なさるとは實に甚だしい心得違ひと云はねばなりません……とは云ふものゝ、皆さん許りが悪いのであるとは思ひません中には大いに同情すべき方もあるでせう、最愛の夫に捨てられて、それが動機となり、知らず／＼罪を犯すとか又思ひ思うた仲を割れ、それが爲に斯う云ふ事になつたのもありませう……

（と、此以前よりお澤は泣き止まず、このセリフの切りにてワツと聲をあげて泣き伏す。）

一　あれ、お澤さん、なにを泣くの？

二　どうしたの。

（と、ガヤ／＼云ふを看守長は抑へて）

看守長　これ、靜かにせんければいかんと云ふに。

庸之助　どうぞ叱らん樣にして下さい、私の教誨が分りましたのでせう。

（と、降りて來て女囚の前に立塞がり。）

庸之助　もし貴女、それ程までに私の教誨がお分りになりましたか。

お澤　はい、私これで死んでも思ひ殘す事はございません

（と、泣く。庸之助も涙をかくして。）

庸之助　おゝそれ程迄に、よく仰有つて下さいました。私も滿足です。おさ……（と、云ひかける。）

お澤　はい。

（と、泣く。庸之助、あたりの人に氣を兼ねて憂ひを隱し。）

庸之助　いや、女囚方の爲めに猶お祈りをあげます。

（と、裏向になつて、額に手を當てる。）

（幕あきの鐘にて）　キザミ乍ら——幕——

第二場　鳩宮宅孤兒收容所の場

本舞臺、玄關を下手の奧にある心。上手より常足三間の屋體。平舞臺に樹木の茂りを見せ、總て、牧師鳩宮庸之助住居の體。

（茲に乞食小僧ちび六、上州の二人メンコを持ち居る救世軍の鳴物にて幕あく。）

ちび六　おい／＼待ちねえ／＼又鬼婆が何か云つてやがるぜ。

上州　本當にあんな強突張りのガリ〳〵亡者もねえもんだなア。

ちび六　いめいましい畜生ぢやねえか、さつきも神樣のやうな慈悲深い奥樣をいぢめ出す算段をしてやがつたよ。おらア癪に障つてならねえ。何か一つ仇を打つてやらうか。

上州　ウム、いゝ事がある。婆が部室に居ねえ内に何か紙へ書いて張りつけといてやらうよ。

ちび六　それよりは、此の白墨で、あの壁へ書いてやらう。

上州　それがいゝ〳〵。

（と、兩人白墨を出して板壁へ書きかけると、下手よりお節出で來り。）

お節　おや〳〵この乞食共は又何か惡戲をして居やがるね

ちび六　いえ、何も惡戲をしやしねえや、なア上州。

上州　本當だ、今勉强して居るんだい。

お節　まア何と云ふ口のきゝやうだ。仕樣ない乞食め！何んだつて、又、あの毛唐人は物好きに、こんな奴を引きずり込んで高い米を喰はして置くんだらう。

ちび六　御隱居さんは、さう云ふけど、奥樣は今に、アメリカから、澤山お金を取よせて孤兒院を立てゝ、世の中の溢れな乞食の子供を救つてやると云ふ事よ。

上州　それだから、おれ等も今の中、學問を勉强して外の宿なし共の手本にならなけやアならないツつて色々面白い本なんぞ買つてくれるんだもの、本當に奥樣程いゝ人はありやしねえ。

お節　まア、ツベコベとあの毛唐人の肩を持つて、とかく私にたてをつきやがる、今に見ろ、その儘ぢや置かんぞこれも矢張り、あいつの入智慧なんだらう、今日歸つて來たらどうするか見やがれ！

ちび六　だつて御隱居さん、そりや無理だよ、奥樣がたてをつけなんて云ふもんか、あの方があれ程優しくしてなさるのがお前さんに分らねえのかな。

上州　それだから年寄なんてものは、僻み根性ばかり強くて若い者には合はねえてこんだ、なア御隱居さん、後生だから奥さんをいぢめるのはやめて下さいよ。

お節　あゝやかましい。餓鬼のくせに餘計な指圖がましい事なんぞ云やがると直ぐ叩き出して了ふぞ！

上州　そりやア、いけねえや、何も此處の金を使ふのぢやあるまいし、奥樣が自分の着物や飾り物を賣つて養つてくれてるんだものな。

ちび六　有難い奥樣だよ、己れと上州とで九段で御貰ひを

して居るのを奥さんが此處へ連れて來て、こんなにいゝ着物を着せて、それから名前もちび六は可笑しいからッて、何んとか云つて名をつけて下すつたんだからな。

上州　おい〳〵手前の名を忘れる奴があるもんか、己れなんか、ちやんと覺えて居るぜ。

ちび六　そんなら何んて云ふんだ。

上州　お前はマタイよ。

ちび六　そしてお前のは。

上州　己れの名前はヨハネよ。

ちび六　隱居さんなんか知られえが、これは昔の偉い人の名前なんだぜ。

お節　えゝ、そんな毛唐人の名なんか聞いても耳が汚れるよ。餘計な口を利かないで云ひ付けた內職でもするがいい！

上州　へイ〳〵畏りました。おいマタイ、あつちへ行かう。

ちび六　さうだ〳〵こんな處に居ると、又鬼に喰はれるからなア。

お節　何んだたと！

上州　なアに、こつちの事だ！（と、兩人下手へ入る）

お節　本當にいま〳〵しい餓鬼共だ。

修造　（奧より出で來り）婆さん、騷々しい、又何をガミガミ云つてなさる！

お節　喰ひ潰しの乞食の餓鬼が手に負へない惡戯で年寄を馬鹿にしくさつてねえ、貴方。

修造　まア〳〵あんな子供を相手にしたつて大人氣ない。一寸話がある。こゝへお坐りなさい。

お節　これも皆、あの毛唐の嫁がさせるのだと思ふと、私は腹が立つて〳〵。

（と口惜淚を拭き〳〵二重に上り側に坐り。）

修造　實はお柳の事だが、保衞さんは何が氣に入らぬのか此節娘にあて散らして妾宅へ出かけては十日も二十日も歸らず、一週間に三日と家で寢た事はないと云ふのだから困つたもんだよ。お柳は根が勝氣なだけに口へは出して云はぬが、其心配で氣鬱性になつてるらしい。あれも新橋から落籍されて奧樣となつた當座は、目の無い程可愛がられて塵も据ゑぬ様に大切にされたもんだが、段々年は取る、子供は出來ないし、外に妾が三人と云ふのだから、並大抵の苦勞ぢやあるまい。（と鼻聲になる）

お節　そりやお前さん、お柳の兄弟にあの外聞の惡い毛唐

なんかゞ出來たんですもの、大きにその所緣もありませうよ。私達二人を引取つて世話して下さつた、あの親切な保衞さんが義理につながる兄弟だと思へばこそ、庸之助を高月給で銀行の方へ世話をしようと云つて下さるのでせう。それを庸之助は毛唐にすつかり、ほうけ込んで强情にキリシタンバテレンの說敎屋を止めず、私達は居辛くつて此處へ一緒に住ふ事になつたのですが、折角の親切を無にされた保衞さんの身になれば、腹も立ちませうよ、お柳にだつて、つらく當るのもあたり前ですよ。

修造　お前の樣にさう愚痴を云つたつて仕方がない。何とか保衞さんが氣持を直してもと〳〵通りお柳を可愛がつて下さるやうにしたいもんだ。

お節　そこですよ。いくら保衞さんが、お氣の好い人だとて、嫁が毛唐で、キリシタンバテレンの說敎屋を兄弟に持つた家内だと思ふと、親の私でさへいやで〳〵堪らないんだもの、保衞さんがお柳にいゝ氣持をなさる譯があるもんですかね――

修造　一概にさうでもないさ、それ程、物の道理の分らない保衞さんでもないからな。

お節　さう云ふお前さんこそ物の道理が分らないんですよそれに此頃は、またあの毛唐め、無暗に乞食なんか拾ひあげて來て高い米の價で飼つてるんだもの、お庇で其日の生計にも差支へるなんて呆れて物が云へない。お柳の爲ばかりでなく、庸之助のため、私達のため、どうしてもお父さんあの嫁を離緣させて庸之助にもヤソをやめさして下さい。

修造　婆さん、昔の私なら庸之助の不埒は決して捨てゝおかん。まかり間違へば、打斬つても了ふのだが、今は時勢が違ふからさう云ふ事は出來んが、あの嫁のために內も外も治りが附かんとなりや、氣の毒だが、こりや庸之助に離緣する樣云ひ出さなけりや、なるまいかな。

お節　だからお前さん、庸之助にキッパリ離緣をせいと言ひ渡して下さいよ。

修造　それがさ、かうやつて一緒に住つて見ると、目色毛色こそ變れ、氣質は優しい嫁だ、自分等が來てからは家が狹くて臺所や座敷の隅に小さくなつて居ろ、いぢらしい姿を見るにつけても、つひ言ひ出し惡くてなア。

お節　何んですよ、お前さんまでが毛唐に卷き込まれて仕舞つてさ、えゝ腹が立つて仕樣がない。本當にお父さんしつかりしておくれよ。

修造　何にも巻かれてる譯ではないが、エミヤだつて遙々知らぬ他國へ來て此節では家内が大勢の爲に、持つて來た着物や指輪や飾り物まで賣り拂つて生計の助をして居るのを見ると何んだか餘り可哀想で。

お節　何んですよつたら、武士の果てだと口癖に云つて居るお前さんにも似合はないぢやないか、一體あの庸之助さへ私達の云ふ事を聞いて保衞さんの御世話で銀行の方へ出てさへくれゝば、高い月給が取れて樂な生計が出來るものを、あの毛唐女がついて居る許りに勝手に好き好んで貧乏をして居るんですよ。第一家を乞食の巣にして居るんですからねえ。生計がやり切れなくなる筈ですよもう／＼片時もあの毛唐と一緒に居るのは厭です。キッパリ離緣する樣にして下さい。

修造　ウム、それは私にしてもよく分つてはゐるがね。

お節　それに若し、此の儘にして居る内に、三毛猫のやうな眼付をした孫でも生れた日には、家の恥、親の恥、親族の恥です。みんなが世間へ顏向けが出來ませんよ、離緣が面倒なら一層、いびり出して追返すのですよ。

修造　イヤ、いびり出すより倅に得心させる方が宜しいよ婆さん、お前からも庸之助によく話をなさい。私はお柳の事が氣にかゝる。これから田島の方へ出かけて保衞さんの機嫌を見て、能く賴む事にするからな。（と立上り）それでは往つて來ますよ。（と去る）

お節　あゝいやだ／＼何の因果で此の年になつてこんな苦勞をさせられるのだらう。

（そこへ庸之助考へ乍ら、出で來る。）

庸之助　おゝ母さん、只今歸りました。

お節　おゝ庸之助、お歸りか、本當にどんなに待つたか知れやしないよ。

庸之助　何か御用でもありましたか。

お節　なんだねえ、空々しい、御用でもありましたかもないもんだよ。一體お前はまア、あの毛唐と何時まで添つて居る心算かへ。

庸之助　これは又、突然妙なお尋ねです。何かあれが、お氣に障つたことでも――

お節　何かどころか、する事なす事、みんな私達の氣に入らないのはお前にも分つてる筈ぢやないか、第一、この不如意の中で物數寄にも子供なんか何人も引摺り込んで世間體も外聞も惡いし、その上經濟にもどの位、響くか知れやしないよ。肝腎のお前が好い氣になつて、鼻毛を

伸ばしてちや困るぢやないか、お父さんもお柳もそれ許り心配をして居るのだから、どうか彼奴を早く叩き出して了つて耶蘇を止めて田島さんの銀行へでも出ておくれな。

庸之助　(當惑の色)　どうもお母さん、そんな事を仰有つては困るぢやありませんか、貴方々が、たゞ眼色毛色の變つて居る處計り目に付けて、そこがお氣に入らんからとて、何も彼もが缺點に見えるのです。此の間もお話した通り、あれには私が乞食同様の境涯にまで成り下つたのを救はれた恩義があり、その上神の前で神聖な結婚をした者を謂はれなく、離縁すると云ふのは理に於ても勿論人情上、どうも忍ばれない事ですから何卒御目長く見て下さい。庸之助が一生の御願みです。

お節　二言目には、あれの父に恩があるとか、女に義理があるとか、何處までのろいか知れやしない。それ程お前お義理や恩を思ふ程なら、十年の間親や姉が世話になつた保衛さんの恩義を少しは思ふがいゝぢやないか。

庸之助　なにも田島さんに義理を缺く事はないぢやありませんか、まアどうか、そんな事を云はんで置いて下さい。

お節　(勃然とした顏色)　いや、まアどうとも勝手にするがいゝや、親兄弟より毛唐人の女房が可愛いんだらうからね。

庸之助　お母さん、そんな事を云つて下さつては困るぢやありませんか。

お節　もう、いゝツて事さ、どれ毛唐人にでもからかはれない内に奥へ引込みませう。

(と、庭下駄を穿きかへて下手へ入る。)

庸之助　親とは云ひながら、どうしてあゝ分らんのだらう。あんなでもなかつたが、年を取ると、あゝなるものかしら、まア服でも着替へようか。

(と、奥へ入る。下手よりエミヤ、肉、野菜の入りし手籠を持ちて出で來る。後よりお澤の娘、お巻、ぼろぼろの服にてついて來る。)

お巻　耶蘇の異人さん、何かやつて下さい。

エミヤ　あなた乞食ありますか、よろしい妾と一緒にお出でなさい。

お巻　さう、何かくれるのかい。

エミヤ　おゝ食物あげる、着物も着せる、とも角來るよろしい。

(と、お巻エミヤについて來り。)

お巻　小母さん、爰に待つて居るの？
エミヤ　内へ這入るよろしい。
お巻　這入つても叱られやしないの？
エミヤ　えゝ、通る、妾よろしいあります。さアお上んなさい。（と手を引いて連れて上る）
お巻　小母さん、早く何かおくれな、妾おなかゞすいて堪らないから。
エミヤ　えゝ、そんなら一緒に勝手へ來る、よろしい。
（と、奥へ連れて這入る。下手より上州、ちび六出で來り下手の西洋家屋の羽目へ女の顔と、鬼の面を書く。「エミヤサマ」「オニババアヤイ」と白墨にて書き逃げて這入る。庸之助、奥より出で來る。）
庸之助　エミヤは何處へ行つたのかしらん。
（と、坐す。奥よりエミヤ出で來り。）
エミヤ　あなた、お歸りなさい。
庸之助　あ、エミヤ何處へ行つた。
エミヤ　はい、私買物に行きました。
庸之助　ウム、買物に行くもいゝが、お前も常ではない體だから大事にしてくれなけりや困るよ。
エミヤ　ありがたう、それについて、あなた今また一人連れて來ました。
庸之助　おゝ孤兒か、さうして女か男か。
エミヤ　はアあの、女であります。
庸之助　そりや丁度いゝ事だ、お前も追々立ち働きも大儀になるだらうし、かた〴〵メードサアバントとして、使つてやるんだね。
エミヤ　妾、そのつもりであります。どうか母さんの御氣に入ればよいと思ひます。
庸之助　いや、お母さんと云へばお前も、さぞあの通りのやかましやで辛からうが、これも日本のホームの習慣と思つて、どうか辛抱しておくれ。
エミヤ　私、そんなこと、そんな意で云つたのではありません。日本、お母さん大事ある事あります。妾もあなたの妻になれば矢張り日本人あります。日本の習慣に從ふ事元より覺悟あります。行屆かぬ所、遠慮なく云つて下さい。
庸之助　お、エミヤよく云つてくれた、それでこそ庸之助の最愛の妻だ。
（と、手を取つて思入り、エミヤうれしきこなし。）
エミヤ　優しい言葉きく、私どんな難儀も、いとひません。

（と、此時お巻奥より出で來り。）

お巻　小母さん、ありがたう。

エミヤ　おゝ、もう食事濟みましたの、あの、あなた今の話これにあります。

庸之助　おゝ、成程、乞食にしては好い子柄だ。おい、お前達、お出で――

お巻　いえ、私お腹が一杯になつたから歸るの。

エミヤ　いえ、あなた歸るに及びません、今から此處の家居るよろしい。

お巻　そんなら始終此處の家に置いてくれるの。

庸之助　ふむ、いかにも此處の家に置いてやるが、ついては少し聞きたい事があるから、此處へ坐るがよい。

エミヤ　此處の家の旦那様、よく御挨拶するよろしい。

お巻　小父さん、ありがたう。

庸之助　ふむ、なか／＼利口さうだ、さうして御前の名前は？

お巻　あたいの名前は、お巻ちやんと云ふの。

エミヤ　お巻ちやん？

庸之助　さうか、いゝ名前だなア、そしてお前どうして乞食になどなつたのだ。

お巻　あたい／＼牢の中で生れたの。

庸之助　牢の中！（と、思はず胸打たれし顔色）

エミヤ　牢の中、なにあります。

庸之助　牢の中とは監獄――プリゾンの事だ。

エミヤ　えゝ？　プリゾン？　まアどうして。

お巻　あたいのお母ちやんはね、いゝ家の娘だつて云ふたがね、若い時分に家に居た書生と私通して、お腹が大きくなつたの、そこへ又外から婿さんが來て夫婦になつたの、そいつが嫌な男でね、餘り邪慳にするもんだからおかアも癇癪起こして殺して仕舞つたんだとさ。

庸之助（怯然とした眼色）そんなら、お前が――

（と、つく／＼見る。）

エミヤ　まア、そんなことありますか。

お巻　それで牢屋へ入れられて居る内、あたいを産んだんだねえ。それからあたい、看守長の内で奉公して居たんだけどあんまり邪慳にされるから、あたい飛出したの。

エミヤ　まア、可哀想にね。

庸之助　ふむ。

（と、思はず、お巻の手を取り引寄せて見て、急に振りはなして。）

庸之助　なる程よく似て居る。さうだ。
エミヤ　あなた、知つて居ますか。
庸之助　(周章てながら)なに……その今日監獄で教誨の折、この子の母の懺悔を聞いたよ。
お巻　そんなら小父さんは、お母さんを知つて居るの？
庸之助　ウム、逢つて知つてるよ……知つて居ますよ。(とエミヤを見て)エミヤ、これも人間の罪の塊りだ。
エミヤ　私、これから可愛がつてやります。
(と、櫛にて髪を梳かしてなどやる。この時、お節出で來り西洋屋臺を見て)
お節　おや／＼又變な惡戯書がしてあるよ。女の顏と鬼の面が書いてあつて、エミヤサマ、マリヤサマ、アーメンオニババアヤイ、これは私の事だよ、本當にあの惡戯乞食奴、もう堪忍ならない。これも又あの毛唐人の指金だどうしたら腹が癒えよう。(と上手の家臺に居る三人を見て)まア呆れちまふよ、晝間でも何でもお構ひなし、寄ると障ると直ぐに傍に許り、くッついてるんだからね、一體何んだい、その小汚い娘は！
庸之助　お母さん、今日からこれを下女替りに置きますから、どうぞ目をかけてやつて下さい。
お節　なんだい、又乞食を引ッ張り込んで本當に碌な事ア一ツも出來やしない、まアこれをごらん！(と下手へ指さして)これは大方、お前達の入智慧なんだらう。
エミヤ　まア、そんな事を私歸つたら皆を叱つてやります。
お節　それとも、お前御存じですかい。
エミヤ　知りません、私見て來ます。
お節　なんだい、お前知らないのが見に行つてどうします。
(と、エミヤ緣側にあるバケツを取上げ。)
エミヤ　私、これで消します。
お節　何だッお前消す？　今更消すには及びません、お前が指圖したのだらう。
エミヤ　いえ、私知りません。
お節　いえ、お前が承知で書かしたのだ。
エミヤ　いゝえ。
お節　しぶとい毛唐奴！　お前が書かしたに違ひない。
(と、段々に云ひつのる。この時前から上州、ちび六物蔭で聞いて居たが、いきなり。)
ちび六　鬼婆やい！
(と、お節を突きとばして下手へ逃げる。)
お節　この餓鬼奴！

（と、追ひかけんとする。思案にくれて居た庸之助。）

庸之助　お母さん、まアお母さん。

（と、呼ぶ。エミヤは、お節を止める。）

庸之助　お母さん、大人氣ないではありませんか、お母さん！

（矢張り救世軍の鳴物にて。）

――幕――

三　幕　目

牛込教會の場

舞臺は會堂の内部と外部戸口の一部、正面に講壇あり。壁には降誕のクリスト掛額、其他二三面、横手にオルガン。絹蓋の大ランプ（青色）中央壇上には明日を迎ふるクリスマス・ツリーを飾る。十二月二十四日降誕祭の前夜の事。夜いたく更けたり。十一時頃、窓外に降りしきる雪を見る。折々けたゝましき木枯の音。

（と、白鬚の生えた植木監督は鳩宮牧師を訪ね來つて夜の更けたるに驚き、辭し去らんとして外套など着し居る模樣にて幕あく。）

庸之助　（椅子より立たずに）ですが……

植木　ハ、、まだやつて居ますね、「我が來るは義人を招かんが爲めに在らず、罪ある人を招いて悔改させんがため」なので、つまりキリスト敎の救はたゞ悔改めに依つてのみ得られる譯なんです。懺悔して赦されない罪はない。何も迷ふところがないぢやありませんか。

庸之助　（俯向きつゝ）ですが――（と拳にて卓をコツコツ）

植木　（襟巻を巻きながら少し戻つて來て）鳩宮さん、一體どうしたんです。そりやアメリカへ行かれる前の君には或は暗い一面もあつたかも知れない、併し君はエミヤさんのお父さんに會つたのが動機で、飜然悔悟して神樣の前にも人間の前にも立派な信仰の人になられたのぢやありませんか、今更そんな事に迷ひ出しては困りますね
ハ、、、。

庸之助　でもその悔悟した瘢が何時迄も消えないで殘つて居た場合にですね！（と俯向いたまゝ）子供の時に蒙求か何かで讀んだ事がありますが、人の犯した罪は柱に

打つた釘のやうなもので、假へ釘は拔いてもその古痕は殘つてそれが私を苦しめる樣な場合には……

植木　どうも困りますね、君の樣でもない。柱の釘は懺悔の力で拔き取つて仕舞つたら、それでいゝ譯なんだ、古痕の跡がつかうが、殘らうが、それはつまり人間の目に見えるだけなので神樣の方ではもう綺麗に帳消しになツて居るんだからね。（鳩宮はホツト溜息）ハ、、、、とんだ釋迦に說法だッたね、とにかく君、さう神經過敏になつては不可ませんよ。神選び給ふ前に自ら選ぶ事能はざるかさ。ちつと自信を持つんだね、ヱミヤさんの信仰の力を借りて勇氣をつけるんだね。

庸之助　え？　ヱミヤの力を？（と惱ましげに顏を上ぐ）

植木　あゝ　夜が更けた、では奧さんによろしく、メリークリスマスを迎へ給へ、さやうなら。（と握手）

庸之助　ですが、ビショップ……

植木　安らかに眠り給へ、左樣なら。

（と、去る。植木出て行きながら「おゝひどい雪だ、こりや積りますよ――」などと云ふ聲戸外に遠く聞こえる風の音一しきり。）

（庸之助ぢつと佇む。反對の側の扉よりお卷入り來る。外國風の白く長いエプロン。）

お卷　先生！（後より）お休みなさいませんかつて。

庸之助　（吃驚）おゝ、お卷か、私は會堂で少し考へて居たい、皆は先にお休みと云つておくれ。

お卷　はい、（と入りかゝる）

庸之助　あゝ、ちよつとお卷！（お卷不審さうに立留る）お卷の顏を見て、思ひ入れ）用ではなかつた、行つて寢るんだ。（お卷うじ／＼して居る）だが、氣を付けて奧さんに可愛がられるやうにするんだよ。

お卷　奧さんて？　あの異人さんですか、フーン。

（と、鼻であしらふ。鳩宮手まねで行けと云ふ。お卷出て行く。風の音。風雪の氣色。鳩宮、椅子にどうと腰かけて沈思。支那そば賣りの笛の音遠ざかり行く。鳩宮悶々の情。ツト立上りて傍らなるデスクの上の大形の聖書を開き讀みかけるが、頭が痛む樣に手で抑へて居る。母屋の方から、ヱミヤの讚美歌を歌ふ聲が聞こえて來る。）

庸之助　あれはヱミヤが未だ寢ないで、私を待つて居るのだらう、あゝ濟まない――

（と、沈思、此時、表に氣魂しき犬の聲。母屋の方か

らば讃美歌又も聞ゆ。庸之助ツカ／＼と窓際に至り、耳を澄ましてホッと溜息。急に電燈を消し、蠟燭の火を點じフラ／＼と聖壇の下に跪きて默禱する。）

（此より稍よき所にて、お澤、脱獄囚の衣、破むしろを纏りて庭口の方より忍び入る。犬の遠吠。風の音。）

お澤　（戸の隙間から）庸さん、庸さん、庸さん、／＼。

（庸之助、顏を上げしが風の音と疑ふ心持、又默禱。）

お澤　庸さん、私です、庸さん、／＼！

（風の音。庸之助、燈りを持ちて不審さうに戸外を窺ふ雪の中にうづくまるものあり、ギヨッとして燈りを落す——闇——。）

お澤　庸さん！

（と、縋りつく。庸之助無言にて引はなす。お澤又起き上りて縋り付く。）

庸之助　（引はづして、ぢつと見つめ）お澤さんぢやないか！（息のつまつた樣な聲）

お澤　私を見て何故逃げるんです、私だ／＼私です。

（と、獸の如く飛びかゝらうとする。）

庸之助　（後退りして）何、何、何、どうして出て來たんだね。

お澤　逃げて來ました！

庸之助　（ヂリ／＼と睨み合ひつゝ）私は牧師だぞ、神、神樣の（と聖壇を叩きつゝ）教會を預る牧師だぞ！

お澤　（その眼を離さずヂリ／＼と）牧師でも何でも構はない、私の庸さん、私の庸さんに逢ひに來たのです。

庸之助　身の程を……身の程を知れ！　神、神樣の恐ろしい事を知らないか、恥を知れ！

お澤　矢ッ張り庸さんだ、懷しい庸さんだ。

庸之助　私には妻もある。神聖な務めもある。元の——元の庸之助ではない！

お澤　妻があつても、務めがあつても構やしない。矢張り庸さんだ！　懷しい庸さんだ。

庸之助　あく迄、つきまとふ氣か！

お澤　死んで倒れるまで。

庸之助　むゝ。

（讃美歌の聲、母屋より聞こえて來る。）

庸之助　（手を打振りて）行つてくれ！　私に見ない振りをして居る——早く歸ッて下さい！

お澤　（怨めし相に）歸れとは何處へ？　監獄へですか！

（此頃より お澤、聖壇へ上る梯にすがり付いて寒さに

ガタ〳〵ふるへる。)

庸之助　あなたの置かれた處、……あなたの罪の消える所へ歸るのです！

お澤　私の罪の消える所、無い、……何處にも、何處にもありません。(寒さに凍えて口もきけず)

庸之助　ど、どうした！

お澤　……(打ふるふ)

庸之助　どうしたんです。お澤さん。(と五六歩よろ)

お澤　……。

(庸之助、電栓をひねる。周圍カッと明白。)

庸之助　(抱く樣に)どう、どうしたんです、お澤さん。

お澤　(うつとりと男の顏を見上げて子供の甘へる樣に)あのね、庸さん、私、貴方に逢ひたくッて、逢ひたくッてもう我慢が出來なくなつたから、逃げて來ましたの、看守に追ひかけられて、あの高塀を乘り越えて逃げて來たの、(と云ひかけ)あゝゝ私！(と顏をかくす)

庸之助　あの嚴めしい獄舍を拔けて來たのは私に罪を重ねさせるためか、私に恨みを云ふためなのか。

お澤　十年の間を牢舍に居て、風につけ雨につけ考へ出す晩にはれ、……けれども斯うして貴方の顏を見ては何とも云へない。たゞ庸さんの側にさへ居れば、何日までゞもかうして居さへすれば……

庸之助　さ、それが何日迄居られる體と思ひます。明日にも今夜にも、イヤたつた今にも其筋の目にかゝつたら貴方の體はどうなると思ふ？

お澤　(耳を塞いで)もう〳〵そんな事は例へ五分でも十分でも、かうして居られるだけ居ればそれで本望、私の思ふのは、たつた今の事だけなの、……明日も明後日も私には無い。あゝ〳〵寒い、凍え死にさうだ！

(庸之助、ワク〳〵する思入あり。とゞ無意識にそこにあるガウンを投げて着せる。)

お澤　庸さん、私死ぬ……死ぬ。このまゝで來て、やつと庸さんに逢ひながら……私は凍えて死ぬのかしらん、あゝこのまゝ死ぬのはイヤだ！　庸さん、どうかして下さい。

庸之助　(たゞ思案にあぐんでハラ〳〵して居る)

お澤　あゝ、寒い、――庸さん、手をかして、――抱いて下さい。

庸之助　(近づきかけて)併し、何んだか恐ろしい！

(と、祈禱する。)

お澤　助けて下さい！　體を暖めて下さい。――見殺しに

する氣なんですか！
（庸之助、これにて電氣を消し、衝立を入口に立て、奥の様子を窺ひ、火鉢に炭を繼ぎ、更に奥より土瓶を持ち來り、湯をお澤に飲ませ、此間に蠟燭に火を點ず。そして思ひ切つて、側に寄り、様々に介抱すれば。漸くお澤は元氣づき庸之助のひざに縋りつき）

お澤　庸さん、ありがたうよ、漸つと人心地がつきました。

庸之助　大丈夫かな……いゝかな。

お澤　（太息）えゝもういゝのよ、だが庸さん、私の身には隨分辛い苦しい十年でしたよ――私はね庸さん、人殺しをしましたよ。世間から惡魔と云はれました。（無意識に膝の上より何か、摑んで投げる眞似）冷たい監房の隅に凭れて夜毎々々に泣きました。それからたうとう牢も破りましたのよ。（と同じ眞似）ホヽヽ、皆夢だつた長い苦しい夢だつた。（と同じ眞似）だけどいゝ。もういゝ、庸さんは私に逢つて下すつた、私もうこんな嬉しい事はない。（と同じ眞似）私、どうしたらいゝだらう、何だか又、氣が遠く、……夢の様に――あゝ、私どうしたんだらう、庸さん、手を抑へてよ、私の手を。（庸之助は仕方なく握る）おゝ、これ庸さんの手だ！（としつかりと縋りつき）あゝ嬉しい〳〵。

庸之助　（覺えずその手を見て）おゝ、この手の傷が痛むだらう。

お澤　牢を脱走する時の傷なの、なアに……これ位の事なんか――庸さん、ようく顔を見せて下さいよ。

（讃美歌の聲、母家の方より又も聞ゆ。）

庸之助　（お澤をつきはなして）あれをお聞き、あれは私の妻の――エミヤが罪ある夫に聞かせようとして歌ふ讃美歌だ――「憂ひの雨は夜の間に晴れて、つきぬ喜び朝日と輝かん――」……と云ふ文句だ。罪の中に居る者は罪を重ねる事より外に喜びを持たないが、罪を離れて考へる時は、喜びの朝日は、つい、そこに戸の外に待つて居るのだよ。例へ此の世は罪の闇に埋もれても明日は明るい日の出があるのだ。明るい人になつてくれ、たのむ！

お澤　そんなむづかしい事を云つても私は牢破りの體ですよ。明日も明後日も私にはありません。

庸之助　そこだ、考へるのはそこだよ。私が日の出と云ふのは單に今夜の明日と云ふ意味ではない。お前の暗い過去を一晩の夜と見て、神様の前に召し出された悔い改め

の日を明日と思へと云ふのだ！

お澤　では、私、どうしろと云ふのですね。

庸之助　外に仕方はない、人の世の罪は人の裁きを受けて潔い身體になつておくれ、頼む――

お澤　無理です！　無理です！　それは無理です、私はこれから歸れば、破獄の罪で罪状が一層重くなる許りですよ。この傷を受けた時に、切られて死んでも仕方のない身體ですよ。それ程の恐ろしい目をして來たのは、只、あなたに逢ひたい許りなんだ。それだのに貴方は私に愛想をつかしたんだね、私が厭になつたんだね――歸れなら歸ります！　歸るとも／＼その代りには私は此處から縄付になつて、お前さんも一緒に抱き込んで行くからさう思ひなさい！　はい、私は、いかにも牢破りだ、牢を破つた上に私は人殺しだ！　人殺しの牢破りだ！（と興奮して狂的に叫ぶ）

庸之助　あゝこれ、そんな――そんな（と後より抱き止めて）お前は氣でも狂つたのか、私は何も體面を恐れて云ふのではない。一緒に來いなら牢へも入らう。然し人間は自分で犯した罪の恐ろしさを自分で責める事を知らなけやならん。その罪の救ひ――

お澤（遮る樣に）さつきから、罪、罪、罪と云ふが、では、私は良人を殺したから罪人なんですか。（と皮肉に云ふ）

庸之助　例へどんな事情があつても、人を殺すのは、神樣の前に許されない罪なんだ。

お澤（すゝるさうに微笑）唯、殺したからなのね。

庸之助　何？

お澤　では良人を殺さずに從順に仕へて居たら私は善人なのですか？　あれ程堅く誓つた貴方の事を忘れて了つて良人と名のつく人と睦じく暮らしたら私は善人と云はれるのですか！

庸之助　む。

お澤　あの時、良人は……イヤあの男は、私に恐ろしい墮胎をしろと迫りました。もしその時あの男の言葉に從つたら、夫殺しは遁れたかも知れませんが、矢張り恐ろしい罪人にならなきやならなかつたのです！　一ツを助ければ一ツは死ぬ。……何方にしても私は罪人になると定まつて居ました。庸さん、私の身にもなつて見て下さい　私は勿論、學問もない、神樣も知らないけれど、庸さん私は、只、あなたに對する戀の誠だけは貫いて來たのです。戀の誠を貫きたい爲めに法律の罪人になつたのです

今更、私は貴女の妻にならうとは云ひません、例へ名は何んでも、庸さん、可哀想だと思つて、どうか私に歸れなんて云はないで置いて下さい。（と泣く）

庸之助（ヨロ／＼として床板に手をつき）澤さん、濟まない、お前さんの眞心はよく判つたが、然しまア考へてごらん　私は宗教家として牧師として云ふのぢやない。人として云ふのだが、凡そ人間、罪を天に享けて世界に生れ、社會の中に生きて居れば、その犯した罪についても、神と人とそれから世間の三ッから裁きを受けなければ、罪がすつかり消えるのではないのだよ。私自身で云へば、私は神様の前で、あらゆる懺悔をして悔い改めて新しい人になつたつもりで勇み喜んで歸つて來たが、さて私の罪はそれだけで消えて居たらうか――？　私の爲めに證人の罪を犯したお前は牢屋の中で苦しんで居る。二人の間に生れた子は路頭に迷うて居る。神様の前には新しく淨められた私でも人の裁きはまだ濟んで居なかつたのだ、お前も丁度、それと同じだ。なる程、お前は國の法律に問はれて世の裁きは受けて居た。然し未だ、神の裁きと人の裁きを受けて居ないのだ。お前は牢屋の中で苦しむ事だけを苦痛の種に云ふが、神の裁きと、人の裁きは、それよりも更に一層きびしいものだよ。その裁きを受けない内は眞に心から淨められた人とは云ふ事は出來ないのだ。

お澤　その神様の裁きと云ふのは？（と庸之助を見る）

庸之助　神様の目の前に身をひれ伏して罪の穢れを洗ふ事だ。

お澤　人の裁きと云ふのは？

庸之助　眞に正しき人と云ふのは、法律などと云ふ公の手で裁かれる前に先づ自分の罪を責め裁かなければならない――懺悔だ！　心から自分の罪を悔ゆる事だ

お澤　でも私は――

庸之助　まアお待ち、私に答へるよりは默つて自分自身の心に答へて下さい。澤さん、ようく胸に手を置いて、考へてごらん。夜半、人が寝靜まつて監房の窓に月影などが差し込んだ時など、お前は自分の手にかけて殺した人の顔を思ひ出す事はないかね。その恐ろしい幻を夢に見てビツクリして冷たい汗に戰きふるへる晩はないかね――

お澤　ありません――そんな事があるものですか！

（と、打消す様に否定する）

庸之助　澤さん。私に僞る必要はないよ。私は理窟も何ん

にも云ふのではないが、人間は皆、生きよう、死ぬまい死ぬまいとして苦しむのだよ。その人間をお前は手にかけて殺したのだ。例へ、悪人にもしろ、たゞしからぬ人にしろ、やつぱり同じ神様の手に作られた人間なのだ。それをお前は殺したのだ。その人の一念の恐ろしさを思はないか、その罪を悔む心にはなれないか。

お澤　（恐怖の色）貴方は私を脅かして了ふのですね。

庸之助　澤さん、今も云ふ通りお前は法律の裁きは受けては居るが、未だ自分の犯した罪を悔んでは居ない――神様の裁きを受けて居ないのだよ。（と眸を拭いてやる）

お澤　（太息）何んだか知らないが、私と貴方の間は、何んだか、斯う近寄れない垣でも出來たやうな氣がして私は悲しい。私の思は届いて貴方に一旦はかうして逢つたのは嬉しいけれどね――あの、あの娘は何處に居るでせうねえ？　私とあなたの間に出來た娘は……

庸之助　（思はず）お巻のことか！

お澤　まア貴方、あの子の名をどうして御存じなの？

（と、聞かれて庸之助は愕然としたが、意を決して。）

庸之助　うむ。あの子は私の家に居るよ。

お澤　えゝ、お巻が、――そんなら一目でも會はして――會つて行きたい、さぞ、大きくなつて居るでせうねえ。

庸之助　お前の若い時の姿に、そつくりだ。

お澤　あゝ、會ひたい！……是非逢はせて下さい――罪も汚れもなかつた昔の私が一目見たい。庸さん、逢はして一目……それでなけや私は此處にかうして待つて居ますよ。逢はして……

庸之助　ぢや、お巻に逢つたら、お前監獄へ歸る氣なのか自首して出る氣か？

お澤　どうなりと、仰有る通りにします。貴方に會つたその上、お巻に會へば、私はそれこそ思ひ殘す事もない。貴方も娘も、世間も諦めて了つて、きつと監獄へ歸りますから、どうか會はして下さいまし。

庸之助　あゝ、定めし逢ひたからうな。

お澤　牢屋の中で産んだきり、どんな娘になつて居るのか夢に見ようとしても顔も知らない、お巻なんです。

（庸之助、ツト立つて行かうとする。お澤の何か云はうとするのを抑へて。）

庸之助　きつと、歸つておくれよ！

（と、廊下を去る。お澤ぢつと思案。獨りで、そつと廊下の戸口へ行く。やがて庸之助、お巻を連れて戸口

より出で來り。）

庸之助　お澤さん、――此の娘だよ！

お澤　あゝ、お卷！

（と、緊と抱きしめる。）

――靜かに幕――

四　幕　目

鳩宮邸二人拘引の場

本舞臺一面平舞臺。上下折廻しの家體。上手襖の出入り。下手は給心に障子の出這入り、下手正面は藏壁。上手一間の押入三尺の鼠壁、その下は一間の障子の出入。長火鉢に鐵瓶をかけ、正面に重ね箪笥。鏡臺、置時計。座蒲團など取りちらしある。

幕あく。

（と、懷姙のこなしにて日本服裝をしたる夫人エミヤ箒、采配を持ち、掃除をして居る。そこへ奥より老母お節出で來り。）

お節　おい／＼エミヤ、お前の樣にさう無暗に叩いては障子も何も壞つたもんぢやないよ。硝子戸とは違ふんだからねえ。

エミヤ　これでよくありますか？

お節　おい／＼遊び事ぢやないんだよ。人を馬鹿にしてるそんな眞似をしてなんで、埃りが拂へるもんかね、じれッたい！　かしてごらん！

エミヤ　かうすれば、よろしいありますか？

お節　何んだか、可笑しな手つきだこと！　まるで毛唐人の轉手古舞みたいだよ。もういゝ加減に掃き出してお仕舞ひ！　お前の指圖で一日潰れて仕舞ふよ。馬鹿々々しい！

エミヤ　私、まだ日本ホーム慣れないので、貴女心配かける、誠にすみません。

お節　それだから、早く慣れるやうに心掛けるがいゝ。あれさ、箒を持つて立つてちやいけない。さアかうして掃くんだよ。

（と、エミヤの持つて居る箒を邪慳に引奪る。エミヤそのはずみに倒れる。）

エミヤ　あツ――（と腹をおさへるこなし）

お節　おや、まあ堪忍しておくれよ。――可哀想に、どれ、妾が起こして上げよう。

（と、酷く手を引つぱる。奥より修造出で來り。）

修造　これさ、お節、又嫁いびりか！　いゝかげんにするがいゝ。

お節　お前さん、餘計な處へ飛出して、要らぬお世話をお燒きでない。嫁の仕附をするのは私の役目ですよ。

修造　仕附をするもいゝが、少しは、いたはつてやるがいゝ。

石谷刑事　（玄關から）賴まう。

修造　おや、誰れか來たやうだ、お節！　行つて來な！

お節　おや、私がお取次かね。

修造　エミヤは用をしかけて居るぢやないか。

お節　はい／＼御指圖の通り、花嫁さまの御女中役をいたしませうよ（と行きかけて）おや、大そう焦げ臭いぢやないか。

エミヤ　ほんに御飯が――

お節　それごらん、これだから世話が燒き切れやしないぢやないか！

エミヤ　濟みません、――只今、火を引いて來ます。

（と、エミヤ奥へ入る。よき程にて下手より石谷刑事出で來り。）

石谷　失敬ですが、貴方が鳩宮修造さんですか？

修造　はい、私が修造ですが、貴方は何方です。

石谷　はい、實は少し伺ひ度い事があつて參りましたが、手前は斯う云ふものです。（と名刺を出す）

修造　特務巡査、石谷半之助……はア、さうですか、そして。

お節　へえー、お巡りさんですか、今日は。（と會釋）

修造　そして、どんな御用がありますか。

石谷　甚だ突然な、お話ですが、貴方は、岸野澤なる者を御存じですか？

修造　えゝ、岸野澤と仰有ると――

石谷　御子息の庸之助さんと御關係があつて、それが爲に良人殺しの大罪を犯し、無期徒刑囚になつて居る岸野澤です。

修造　へえー　して、それがどうかしましたか。

石谷　實は、こちらにでも立廻つて來たのを情の爲めにかくまつてゞも置かれるやうな事があると、却つて双方の不利益ですから、さう云ふ事のないやうに願ひたいと

修造　存じまして、それで伺つたのです。
　只今のお話では、その岸野澤なるものが、脱監でもしましたか。

石谷　さうです、一昨夜脱監しました。

修造（驚いた顔）へえ、それで庸之助に嫌疑が、かゝつたんですかな。

石谷　いや、嫌疑のなんのと、やかましく云ふ譯ぢやありませんが、畢竟その者が良人殺しの大罪を犯したのも、つまり御子息を慕つた結果でして、殊に庸之助君との間に出來た子供を獄中で産み落した事もありますから、無論、彼女に未練は充分ある者と認めても差支ないのです。すると、彼れが破獄後、頼つて行く處は、先づ御當家と第一に目を付けるのは、まア順序ですからな。

修造　いかさま、それも一應御尤もですが、不肖ながらも今ではキリストの牧師で、現に監獄の囑託を受けて教誨師まで務めて居ります身分ですから、例へ昔の關係が、どうだつたにもせよ、破獄の罪人をかくまふなどと云ふ事があらう筈はありません！

（調子が少し酷しくなる。）

石谷　いや、貴方はさう仰有るが、我々職務の眼から見れば、却つて、その牧師なり、教誨師なりでおあんなさるだけに、もしやと思ふ考へも起るのです！

お節　だつて、それは、ちと變挺ぢやア御座いませんか。假初にも人に惡い事をするな、親には孝行しろ、國には御奉公しろと敎へる者が、どうしてそんな、疑ひを受けるのです！

石谷　さアそこです。たとへの彼の岸野澤の如き、法律上からは勿論重罪犯であるが、その犯罪の動機と云ふ者が人情上如何にも可哀想で關係者の目から見ると、決してさほどの重罪を科する者ではないと云つた樣な理由が無いとも限りません、殊に庸之助君が[illegible]の折、澤に變つた擧動のあつたと云ふ事も係りの看守、又は同囚からも聞いて居ますし、庸之助君の方でも無論、澤を認めて居らるゝに違ひないと、斯う云ふ樣な譯で、今日伺つたんですが、全くそんな事がないと仰有れば、それまでの話、どうか惡しからず思召し下さい。

修造　いや分りました。どうも御職務柄御苦勞さまで――

石谷　いや、どうもいたしまして、誠に失禮いたしました。

お節　今、申しました通り、倅に限つて、決してそんな事のないのは私達が、きつと保證いたしますから、御上役

の方にも貴方から、よろしく仰有つて下さい。

石谷　はい、承知いたしました。いや大きに御邪魔を——

（と、石谷は下手に去る。）

お節　（太息）然しお父さん、今の様な事を聞くと、何んだか不安心だねえ。

修造　なアに、まさかそんな事もありやしまいよ。

（と、此時、上手よりお柳新聞を持つて出で來り。）

お柳　お父さん、お母さん、とんだ事が出來ましたねえ。

修造　お丶、お柳か！

お柳　はい、私も新聞に、お澤さんが牢破りをした事が出て居るので何んだか氣にかゝつてならないから、出かけて來たんですよ。庸之助は何處かへ？

お節　さうかへ、もう新聞に出たのかへ、實は庸之助も何日にないこと、昨夜から歸つて來ないし、私も案じて居たところなのさ。

お柳　さうですか、——何處へ行つたんでせうね。

お節　何處へツて嫁があの通りだから無理もないのさ。

修造　お節、又してもエミヤの事を、かれこれ云ふのか、嫁いびりもいゝかげんにして置くものだよ。

お節　おや、またお父さんが毛唐人の肩を持つんだよ。チヤンチヤラ可笑しい！

修造　なに、肩を持つと云ふぢやないが、あんまり酷いと傍に居て見かねるからね、勿論、慣れない內は私も蟲が好かなかつたから、庸之助にも色々云つて、離緣もすゝめて見たが、段々馴れて見ると、彼女も、なか〳〵感心な心掛の者で、一生懸命孝行をしてくれるし、お前が、あれ程、箸のあげおろしにまで、こきおろしても不足らしい顏も見せず氣に入らうと勤めて居るのを見て、白狀するが、私は何んだか我が折れて仕舞つたんだよ。

お柳　私も、お父さまの、お話にも聞き、又それとなく樣子を見る所、悋氣など云ふものは、微塵もない、あんな親切なお嫁は、滅多にありやしませんよ、それを、いぢめるなんて、お母さん、嫁冥利がつきますよ。

お節　おや、お前さん達は、何時の間にか裏切をして大層エミヤのひいきをするのね、まアいやな事だ、誰れがあんな毛唐人の世話になんかなるものか、——それに引代へて可哀想なのは岸野のお孃さん、よく〳〵悴の事を思つてくれゝばこそ人殺しをしたり、懲役にやられたりして、散々苦勞をなさるんだ。それを思ふと私や氣の毒で今にも尋ねて見えたら、何、構やしない、かくまつて上

げようとまで思つて居るのだよ。
修造　これ、戯談にもそんな事を云ふもんぢやない。探偵にでも聞かれたらどうするつもりだ。
お節　なアに命にかけて伜を思ふ程の女なら一緒に縛られたつて私は悔いはしない！
お柳　まアお母さん、縁起でもない。さうしてお父さん、エミヤさんはまだ急には産みさうもありませんか。
修造　うむ、まだそんな様子もないが、何しろ臨月なのだから餘り身體を使はぬ様に大抵の用は無理にもお巻にさせるやうにして居るのさ。
お柳　さうですか、私も一寸エミヤさんを見舞つて來ませう。
お節　（苦々しき顔）およしよ、お柳、あんな毛唐人なんか苦しまうが、死なうが、構ふ事があるものかね。
修造　お前はそんなに嫌ふけど、今に初孫でも産んで見なさい。
お節　へエ孫なんていやな事だ。妾は日本人ですからねえ髪の赤い、目の色の變つた孫なんか持ちませんよ。それよりあの、お巻の方がどの位、可愛いか知れやしない。
お柳　お巻と云へば、さつきから見えない様ですが、何處かへ行つたのですか。
お節　先刻、庸之助が此先から、誰れかあの娘の親類の者に逢つたとやらで、俥で迎ひに寄越したが取り返されでもしやしないかしら？
修造　何んとも知れんが大そう、遅い事だのう。
（と、此時奥よりエミヤ出で來り。）
エミヤ　お姉さま、お出で遊ばせ。
お柳　おゝ、エミヤさん、今、貴方のお部屋へ、お見舞に行かうと思つて居た所なの、身體の工合に何も變りありませんか。
エミヤ　はい、御親切にありがたう。別に變りもありません。
お柳　それはまア何よりですねえ。
お節　こりや女毛唐人さん、お柳が、わざ／＼番町から出かけて來たのに、お茶でも入れて來る事か、何んだ今時分、お出で遊ばせもないもんだ。本當に氣が利かないにも程がある——
修造　これさ、又そんな、はしたない事を——
お節　だつてお前さん、あんまり間抜けだからさ。
お柳　まア、お母さん、およしなさいよ。

エミヤ　どうも遅くなつて濟みません、今珈琲をかけて置きましたので。

お節　なに、コーヒーだつて？　そんな臭い物は見るのも大嫌ひなんだよ。

エミヤ　さうでありますか、つい氣がつきませんで、只今お茶を――

お節　へえ、今から湯を沸かすに又一時間もかゝるだらう。

エミヤ　いえ、お湯もよく沸いて居ます。

お節　無駄口は、いゝから、さつさとおし！

エミヤ　はい――　（とおとなしく奥へ入る）

お柳　まアあんなおとなしい人が、どうしてお母さんにはそんなに憎いんでせうねえ。

お節　何んだか知らないが、私はあれの顏を見たばかしでも、胸が悪くなつてくるんだよ。

修造　お前が、さう辛く當る程、私は又氣の毒で／＼仕様がない。

お柳　本當に困つたもんですねえ。

（と、奥よりエミヤ珈琲と菓子を持つて来る。）

エミヤ　たんと待たせて濟みません。

お節　あたり前さ、これからもある事だが、用をするならもつとハキ／＼しなさい！

エミヤ　はい、これから氣をつけます。

（と、茶をいれ、湯呑と茶碗つぎ出して三人の前に置く。）

お柳　身重な方に、とんだ御厄介をかけて濟みません。

エミヤ　いえ、用事をする方が却つてよいと産婆が申します。

（と、此内、お節不興氣に湯呑を取上げ呑みかけてからカッと云つて布巾を取つて唾をその中へ吐き出す。）

お柳　（驚いて）　おや、お母さん、どうなすつたの？

エミヤ　（心配さうに）　何か入つて居た事ありますか？

お節　（腹立たしげに）　何か入つて居たかもないもんだ。妾の湯呑に石油なんか入れておいてさ。白ばつくれてるとは何んだい！

エミヤ　えゝ！　石油が、そんな筈は、ないあります。

お節　筈がないツて？　しやれた事を、お云ひでない！　毛唐のくせに生意氣な姑に仇をしようなんて本當に呆れ返つたもんだよ。

修造　これ又、そんな無理を云ふ！

お節　何が無理ですよ。さア今日は私が承知しない！

お柳　何んですよ、お母さん困りますねえ、エミヤさん早く、おあやまんなさいよ。

エミヤ　（おとなしく）お母さん、私が不調法あります。どうぞ許して下さい。

お節　いゝえ、いけません、第一、そんな筈がないの、あるのと、人が拵へ物でもしたやうに聞えるぢやないか、さアこれを、嗅いでごらん！

（と、茶碗を取つて立ちかゝる。）

修造　（それを留め）これさ、見つともないと云ふに、よしなさい！

お柳　お母さん、エミヤさんもあれ程、あやまつて居るぢやありませんか！

お節　いゝえ、まアお放しなさい！　放して下さいよ！　じれツたい！　さアエミヤ、これを嗅いでごらん！

（と、留められながら湯呑を叩き付けると、それが飛んでエミヤに當る。）

エミヤ　あツ。

お柳　あれ、まアひどい事を！

修造　（叱りつけて）氣ちがひ！　何を亂暴な事をするのか！

お節　はい、どうせ私は氣違です。あれ位の事ぢや、この腹が癒えないから、まだどんな事をするか分りやしませんよ。

修造　可哀想に、怪我でもしやしなかつたか？　血が出て居るぢやないか！　まア危い！　お柳あつち、連れて行つて介抱してやんな。

お柳　本當にエミヤさん、こちらへ來て下さい、さぞ、痛むでせう。

エミヤ　はい、ありがたう、それ程でもありません。

お柳　まア、ともかくあちらへ參りませう。

エミヤ　はい――お母さん、誠に惡くありました。

（と、額をおさへたまゝ、お柳に連れられて奥へ入る。）

修造　（氣色ばんで）お節、あれ程云つても聞き分けのない今の樣な無理難題を云ひかけるのみか、女たてらにあんな亂暴な眞似をするとは怪しからん、とう／＼怪我をさせて了つたぢやないか！　お前は少しも氣の毒とは思はんのか！

お節　なに氣の毒な事があるものですか、謂はゞ自業自得ですよ。

修造　自業自得とは此方の事だ！　此頃、保衛さんが交延

ひや藝者買ひをするだけでもお柳があれ程、氣揣く思つてるのに、若し彼れが先方で保衞さんにあんな仕打をされたとしたら、お前はどう云ふ氣持がする、娘の事を思つたら、少しは嫁にも、やさしくしてやるがよからう。

お節　はい〳〵、恐れ入りました。たんと嫁のひいきをなさるがよい！

修造　ひいきするもせんもない！　向後決して今の樣な眞似は私が許さん、いや、させんからさう思ふがいゝ！

（と、此時、下手より庸之助出で來り。）

庸之助　只今歸りました。（何となく重い口調で、顏は蒼白である）

修造　おゝ昨夜は何處へ行つたのだ。

庸之助　はい、退ッ引ならぬ用事があつて、友人の處へ參つたので遲くなつて泊りました。どうも御心配をかけましたね。

お節　なに、大して心配もしないが、あのお卷はどうした。

庸之助　はい、お卷ですか、僕は出先きで不圖、あの娘の親類と云ふのに出合ひまして色々話の末、ともかく逢ひたいと云ふ事なので、あゝして迎ひによこしましたが、向ふでは大そう悦んで、又差あげるまでも二三日、逗留させてくれと、强つての頼みもありましたので、一旦預けて參りました。

お節　まアさうかい、してその親類と云ふのは、素性はどんな者なんだい？

庸之助　（曖昧な口調で）別にどうと云ふ事もありませんが、御心配には及びません。

お節　お卷を泊めたきり、猫ばゞを極めやうッて云ふのぢやあるまいね。

庸之助　なアに、それは大丈夫です。きつと私が連れて來ます。

お節　そんなら、まア安心だ、どう云ふものか私達は始めて此處へ來た時から、あの娘が可愛くつて〳〵ねえお父さん――

修造　（頷いて）むゝ。何んだか他人の樣な氣がしないで我身ながら、可笑しい程、本當の孫を持つた樣に思へてならないんだよ。

庸之助　さうですか、不思議なもんです。（と思ひ沈む）

修造　えゝ？

庸之助　いゝえ、是れもやつぱり何かの緣でせう。

（と、此の時、下手奥にて。）

お卷　お父ちやん／＼（と聲がする。皆聞耳を立てる）
お節　おや、あの聲は？
修造　おゝ、お卷のやうだ！
（と、此時、お卷下手より走り出で庸之助の側へよる。）
庸之助　おゝ、お卷、どうした！
お卷　お父さん、お母さんが來ましたよ。
（庸之助ギヨツとして。）
庸之助　なに、お母さんが來た？
お卷　何か、急に用事が出來たツて
お節　なに、此の娘の母御が來たつて云ふのかえ、まア、
こつちへお通し申すがいゝ。
庸之助　（アタフタとして）いえ、私が出て逢ひます。
（と、立たうとする時、下手よりお澤出で來り。）
お澤　あなた、大變です！　ヅキが廻りました！
庸之助　なに、ヅキが！
（と、驚く。父母に思入して何も云ふなと云ふこなし。
とお節が前に出て。）
お節　ぢや、あなたがこの娘の母御でいらつしやいますか
これは初めて御目にかゝります。私はこれに居ります庸
之助の母で――

お澤　はい。
お節　この度は又不思議な事で娘御を私の方で引取りまし
てね。
お卷　お婆さん、これは私の本當のお母さんで、内の先生
は本當のお父さんなのよ。
（と、これにて兩親はびつくりして。）
修造　なに、庸之助が實の父とは、そんならもしや、お前
さんは。
お澤　お聞き及びでも御座いませうが、妾は岸野の澤でご
ざいます。
お節　えゝ、あなたが岸野の？　まア――そんなら、やつ
ぱり之れは本當の孫だつたのですねえ。
庸之助　（決心の顏色で）いえ、此の上は何事もかくしま
せん、お父さん、お母さん、これが全く私とお澤の間の
子でございます。
お柳　（出で來り）まア貴女が岸野の澤子さんですか、始
めまして、私は庸之助の姉でお柳――この娘は庸之助の
胤ですツてねえ、何にも彼も不思議な御緣ですわね。
（と、涙を拭く。）
修造　むゝ。そんなら、あなたは、あの破獄をして――

お澤　はい、實は計らず監獄の教誨室で御目にかゝつてから昔戀しくて矢も楯もたまらず、女の身で大それた破獄なぞして逢ひに來ましたが、もう、どうやら其筋の手が廻つた樣ですから、御用にならない前に貴方にも一度御目にかゝつて、くれ〴〵もこの子の事をお願ひして置きたいと存じまして身の程を顧みず、押して伺ひましたのでございます。

お節　（涙をおさへて）まア、それは、ようこそ――貴方も御氣の毒な――不束な悴の爲めに色々御苦勞なさいましたねえ、道理こそ私もお從が可愛くて〳〵本當の孫のやうに思へてなりませんでしたよ。これも蟲が知らせたので御座いませうねえ、あなた。

修造　いや全くです。此の上は猶更お從の事は、おたのみなさるまでもなく、庸之助なり、私なりが必ず面倒を見ますから貴方も決して御心配なく潔く自首して下さい。

お柳　折角、御目にかゝり乍ら果敢ない御縁ですわねえ。

お澤　はい、いたし方も御座いません、いろ〳〵と御親切の御言葉、ありがたう御座います。そんなら、あなた、何分よろしく――

庸之助　おや、直ぐにこれから警察へ。

お澤　はい、お名殘り惜しいが、もうこれがお別れで。（と、皆々ちつと涙にくれる。此時、下手より以前の石谷刑事先に立ち、部下二人出で來り。）

石谷　お澤、庸之助、神妙にせい！（と、皆々びつくりして斥く。お澤は一人身をつき出し。）

お澤　はい、誠に御苦勞樣でございます。併し庸之助さんを御拘引とは何かの御間違ひでせう。

石谷　默れ、そちの知つた事ではない！

お澤　でもございませうが、鳩宮さんは少しも關係のない事ですから。

石谷　えゝ！　默らんか、これ繩を！　（と指圖をする）

部下　神妙にせい！（と、お澤に繩をかける）

石谷　（令狀を出し示し）鳩宮さん、貴方は囚徒逃走教唆及罪人隱匿の被告人として引致します。神妙になさい。

修造　えゝ？　そんなら悴もですか。

庸之助　はい、元より覺悟の上で御座います。直ぐに御同道を。

お節　えゝ、お前もお役人樣と一緒に？

お柳　きつと何かの間違でせうよ。

庸之助　お父さん、お母さん、姉さん、不孝不悌の罪は許して下さい。

お節　さア、情ない事になつたのだねえ。

（と、泣伏す。修造もお柳もホロリとする。）

石谷　さア立て！

庸之助　はい――

お澤　庸さん、眞に濟まない事をいたしました。

（と、兩人は悄々立上り行きかゝる。）

お卷　お母さん、お父さんも私を置いてきぼりは、いやよ。

（と、寄りすがる。庸之助顔を反けて押しやる。お卷よろ〳〵として修造の方へ蹌けるを抱きしめて。）

修造　おゝ、己れだ！

お卷　お父さん、お母さん。

（と、兩人思はず振返つて立戻らうとするを刑事おさへて引立てる。）

庸之助　では、御免下さい。（と會釋）

お澤　お卷、おとなしくね。

（と、刑事に護られて下手へ入る。）

お卷　あれ、お婆さん、お父さんとお母さんを留めて下さいよう。

お節　二人は、もう行つたのか。（と、フラ〳〵と立上る）

修造　これ、お節、しつかりせんぢやいかん。

お卷　お父さん、お母さん――

お節　おゝこれが、こんなに慕ふんですもの。

修造　えゝ！　もう仕方がないと云ふに！

（と、無理に引据ゑ、坐らせる。此時、奥より赤子の泣聲。）

お柳　おや、産れました！　産れましたよ！

（と、あわてゝ馳け入る。）

お節　赤子の泣聲だ！

修造　むゝ。産れたと見える。チョイと行つて見よう。

（と立ちかゝる。）

お節　およしなさい！　（と止める）

修造　え、それでも孫に違ひない、あゝ、悲しさと、嬉しさとが一時にやつて來た。泣いてよいやら、笑つてよいやら、譯が分らなくなつたわい！

――幕――

大詰

戸山ヶ原外役

幕あく。

午後三時頃。春。櫻。

（と、男の信者四人、女の信者三人、思ひ〳〵の扮裝にて遠足歸りの心。皆々草臥れたり。）

男一 （捨石に腰かけ）あゝ、くたびれた、こゝまで來れば大丈夫だ。

男二 新宿から電車だね、一休みして行かう、然し女連の足の達者なのには驚いたね、少しお休みなすつたら、どうです？

女一 妾共が強いのぢやないわ、貴方々が弱過ぎるんですよ。僅か三里か四里の遠足に閉口垂れるやうでは主の十字架を負うて人生の長旅をする資格はありませんね。

男一 ハヽ、相變らず口が惡い、時に監督はどうしたらう。

女二 射的場を廻つてお出での樣ですから、もう見えるでせう。

男二 （遠く呼子の笛。）何だらう、運動會かな。

男一 四人だよ、懲役人だよ、監守學校とか建てるんだつて今、あそこで外役してたよ。

女二 懲役人て云へば、鳩宮牧師は、どうなすつたでせう、もう出獄される位ぢやないの。

女三 あら未だよ、三年もの刑期ですから、來年の春でなきや出られやしないわ。

男一 だが、どうするだらう。一旦赭い着物を着た人が例へ法律刑罪が濟んだと云つて、再び牧師になる事が出來るだらうか。

女一 いやなこと、車夫になつたつて人が相手になんてしやしないわよ。乞食になつたツて私、鐚一文だつてやりはしない意りよ。

男二 ひどく憤慨しますね、でも悔悟すればいゝぢやありませんか、一切の罪人を赦すのは我々の教への本領ぢやありませんか。

女二 でも、ユダを御らんなさい、ヱスを賣つたユダはどうです。キリストに裏切つた罪は悔いてもやはり首吊つて死なゝきや、ならなかつたぢやありませんか。

男三　ユダを例にするのは可哀想ですよ、法律上の罪を犯して悔い改めた者の事を云つて居るのです。
男一　だが、法律上の罪を犯すと云ふ事がだよ、ユダがエスを賣つたと同じ事になりやしないだらうかね。
男二　そんな馬鹿な事があるものか、そんな事を云つた日にや、救はれる者は一人もなくなるぢやないか。
女一　救はれるか、どうかぢやありませんよ。牧師になつて人を救へる事が出來るか、どうかと云つて居るんぢやありませんか。
男二　なれるとも、牧師にだつて神樣にだつてなれるとも我々の敎へには理窟ぢやない、愛の一字だ、これに生きて居るんだ。
（此時、植木監督下手より來る。）
植木　（男二の肩を叩いて）どうしたんです、ひどく興奮して居るぢやありませんか。
男二　いや、此處に實際問題が起つたんですよ。鳩宮牧師ですね、あの人が眞にその罪を悔い改めて敎會へ歸つて來たら我々は再びあの人を牧師として頂く事が出來るかどうかと云ふ問題なのです。
植木　ハ、、、どうして、それが。
女二　どうしてと云つて、鳩宮さんは刑餘の人ぢやありませんか、法律にさへ問はれた罪人ぢやありませんか。
植木　エス樣は何と仰有つた、「悔い改めて赦されざる罪あるなし」と云はれてるぢやありませんか、鳩宮さんは悔い改めて居られる。それでいゝではありませんか。
女一　だつてねえ皆さん、鳩宮さんは不信者でさへ、恥とする柿色の着物まで着た人ではありませんか。
女二　それを神聖な敎會の牧師とするなんてねえ。
男一　本當です、キリスト敎の權威にかゝはる事ですねえ。
（三人、このねえに可笑味ありたし）
植木　成程、不幸にして鳩宮は我々の肉眼に映ずる柿色の衣をその肉體の上にまとひました。併し貴方々の心は、それより早く目に見えぬ柿色の着物を着て居るかも分らないではありませんか、皆さん、貴方々は路加傳第十三章第三節を見てらつしやるでせう、もし兄弟汝に罪を犯さばこれを譴めよ、彼もし悔いなば許せ、もし一日に七度罪を犯しても一日に七度、爾に祈り、我悔を思はば許すべしとあるではありませんか、貴方々は七度どころか、一度も人の罪を赦す事の出來ない、むしろ憐れむべき人達です。人間は弱い者で、なか〳〵罪惡の側から遁

れ出る事の出來ませんものです。

女三　牧師、判りました〳〵、全く私共が悪うございました。今日の祈禱會は鳩宮牧師のために祈る事にいたしませう、皆さん、どうです。

乙　賛成します。

丙　贊成です。

甲　では、そろ〳〵出かけよう、植木さん。

植木　私は、待合せる人がありますから、一ト足、お先きへ。

甲　さうですか、では失禮をいたします。

（と、一同上手へ去る。植木は跡を見送つて居る。）

（ラッパの音。）

（エミヤ、嬰兒を抱きて上手より出で、植木を見て。）

エミヤ　おゝ植木さん。

植木　（ふりかへり）おゝエミヤさん、實はあなたがお出でだらうと思うて待つて居つたのです。

エミヤ　ありがたう、鳩宮のこと、おきゝでしたか？

植木　聞きました。一時は私も非常に驚いて何かの間違ひだらうと思ひましたが、併し事情を聞いて見ると、實に御氣の毒な話で、それも前後の行きがかりで人情に負けて了つたのでせう、私も鳩宮を悪いとは思つて居りません。

エミヤ　あなた、そんなに仰有つて下さると、私、この上嬉しい事はありません。あれも貴方へ面目ないと申します。それを苦にして居るのであります。

植木　さうですか、それは、どうも氣の毒です。いづれ手紙を上げる事にしませう。今日は、お留守へも御見舞に上りまして。

エミヤ　いえ、御見舞下さる事ありません、それは、すまない事あります。

植木　いえ、どうしまして、教會の信者方も大分、何たかだと申して居る樣ですし、實は、それを取りしづめ旁々參らうと思ひましたので――

エミヤ　まことにありがたうございます。

植木　鳩宮君が、御留守中は貴女が、代つて教會を牧して頂きたいのです。

エミヤ　私、私はそんな事、出來ません、信仰の力、弱いありますから。

植木　そんな御辭退には及びません、貴女が御承知下さればば教會の信者方が一同幸福です。

エミヤ　はい、ありがたい御言葉でありますけれど。
植木　會のためですから、當分おやり下さい。
エミヤ　はい、では力限り致して見ます。どうぞ貴方お助け下さる樣に願ひます。
植木　よろしい、御承諾下されば、私も及ばずながら、力を添へませう、さうして御一家の經濟向も隨分御困難であらうと察して居りますが、丁度、駿河臺の女學校の方から會話の教師に缺員があると云うて來て居ります。貴女、その方をおやりなすつてはどうです。
エミヤ　どうもありがたう。私も、さう云ふ相談貴方にしたいと思つて居ました。
植木　さうでしたか、さうして下さると、私の方も非常に好都合です。
（此の時、囚人二人にて石をかつぎ入り來る。櫻の根本に置く。）
エミヤ　おゝ、コンヴイクト！
（と、襟の番、四號を氣付ける事などあり。）
（押丁刈谷巡査入り來る。）
刈谷　いけない〱こんな處に入つて來ちやいけない。柵の外へみんな出るんだ。
（と、日本人には、大抵に云つて、外國人には極めて丁寧に云ふ處などに、可笑しみありたし。監督、信者などは、だん〱と下手に退く。エミヤ殘る。刈谷手まねにて行けと云ふ。）
エミヤ（英語にて）私はこの子に、このチエリー――櫻の花を見せたいと思ふんですが、――いけませんか。
（と、櫻と兒を指す。）
刈谷（大いに呑み込めし風）エス、エス、オーエス、サクラ紙、チリ紙、オーエス。（と、一歩づゝ追下る）
エミヤ（英語にて）此邊、散歩してはいけないんですか公園ではないんですか？
刈谷　エス、エス、オーライ、サクラ紙、チリ紙、よろしい〱エス〱。
（此の時、庸之助他の囚人と共に石をかつぎ來る。）
庸之助　おゝ――
エミヤ（英語にて）おゝ、貴方、エミヤです、私です。
刈谷（呑み込みし風）エス〱オーエス、オーエス！
（と近寄る。）
エミヤ（後退りしつゝ、嬰兒を高くさゝげて英語）あなたの子ですよ。あなたの小さな靈ですよ――見て下さい

見て――

刈谷　エス／＼オーエス、サクラ紙――

（可笑しみよろしくありて、下手へ追ひて入る。庸之助は石をかついだまゝ、足ずりして見送る。後肩の囚徒もボンヤリ庸之助にひかれて立つ。その間に、他の囚徒の一組は石をかつぎ來りて、歸りながら庸之助につきあたる。）

庸之助　あゝ、己れの罪は赦されてゐない、（と悲痛なる獨言）お前の罪は許されて居ない！

囚徒一　何、お前の罪は許されて居ない？　畜生、緣起でもない事を吐しやがるな。（と突倒す）

囚徒二　あ、これ何をするんだ！　（と仲裁）

囚徒一　畜生。――全體その生ッちろい面附から氣に喰はねえんだ！　（と笠を引きめくる）

庸之助（倒れたまゝ）許してくれえ、エミヤ、己れは自分で自分の罪を裁く！　あゝ死にたい！

囚徒一　何を吐しやがるんだ。

（と、踏んだり、蹴つたりする。他の囚徒二人、捨臺詞にて、なだめる。そして荒れ廻る囚人を上手へつれ込む。）

刈谷（下手にて）あゝ、喧嘩しちやいかん、喧嘩するんぢやない！

（と、駈け來り、庸之助の倒れてゐるのには心付かずして上手へ入る。）

（遠く汽車の音。）

庸之助　おゝ、汽車だ！　さうだ！　（と決心）エミヤ！赦してくれ！　己れはお前に合はす顏がない！

（と、飛び込まんとす。と、下手より『アラース』と呼ぶ聲と共に聖書の一冊を、前に投げたる者あり。エミヤなり。庸之助、「えッ」とたじろぐ處へエミヤ駈け來る。）

エミヤ　あなた、何故死にます。（と摑む）

庸之助（ふり放して）私の身體のある內は、私の罪は消えない、赦してくれ！

エミヤ　その身體消える。罪消えますか？　（又摑む）

庸之助　僕は血の洗禮を受けるんだ！　自分の血で以て汚れを洗ふんだ！

エミヤ（何やら考へて冷靜になり）よろしい、お死になさい！

（汽車の音近づく。）

（エミヤ、目のハンケチをかざして後から素知らぬ顔にて、Sleep, Sleep, Sleep を歌ふ。或は日本の子守唄の方、哀れ深からん。庸之助たじ／＼になりて倒る。騒然として汽車通り過ぐ。押丁、後より看守長が駈け来る。）

刈谷　大變だ――囚人の自殺だ、――自殺だ――

今井　ど、どうしたんだ！

刈谷　今、この囚人が自殺しようとしたのを私の懇意のこの――エス／＼オーライ――この異人が助けてくれたんです！

今井　他の囚徒が動揺するといけない。お前はあちらへ行つて監督なさい。

（押丁敬禮して入る。）

今井　マダム、私、英語話せません、日本言葉申します。危い所をよく助けて下さいました。心からお禮を申します。だが、報告の必要がありますから、一應今の經過だけ伺つておきたいのですが、貴方はこの囚徒を御存じなのですか？（と手帖を出す）

エミヤ　はい、私、鳩宮の妻あります。

今井　さうだらうと思つた。（と氣を變へて）成程、鳩宮さんの妻、さうですか、では、この囚徒とは御知合ひやありませんね、たゞ偶然、通り合せて助けて下さつたのですね。

エミヤ　いゝえ、あの鳩宮の妻あります。

今井　マダム、あなたは未だ日本の制度をよく御存じないと見えますな。日本の囚人はその關係者と面會するには一定の六ケしい手續を經なければなりません。無關係の外國貴婦人でせう、さうでせう？

エミヤ　でも、私、噓云ひたくありません。

今井　ハ、、困りましたね、日本では囚徒の名を總て番號で呼びます。この囚徒は百十四號、一九五四と呼びます。ですから、私共でも一々帳面を調べなければ本姓を知りません、分りましたか？　貴女は鳩宮夫人、この囚徒は一九五四號、無關係の人でせう、分りましたか？　ね、ね、ね。

エミヤ　（漸く分つて）あゝさうですか、ありがたうございます。

今井　おい、千九百五十四號、お前は獄内に於ても、改悛の情著しく獄則を守つて、模範囚人とされて居る男なのに、どうして突然自殺などを企てたのだ？

庸之助　身の罪に責められたのです。（とかしこまる）
今井　身の罪は分つて居る、罪があるから囚人ともなつたのだ、然しお前も妻子があるだらう、その妻子の歎きを思はないか！
庸之助　その妻子を思ふ故に自ら殺さうとしたのです。此の破廉恥、不德の墮落者たる私を良人と呼び、父と呼ばせる事がどう考へても忍びない事なのでした。貞良なだけ、無垢なだけ、私は妻に對して恥入つたのです！
今井　はア、さう云ふものかな、けれども妻子の身になつたら果たしてお前の心を悦ぶだらうかね、マダム、私には女の心と云ふものは分らんが、妻や子になつて見たら又別の考へもあるでせうねえ。
エミヤ　妻の前に恥らいし罪にまけたのです。罪を悔ゆるに強くなれ、エス樣は仰有いました。弱い心、一番いけません。
庸之助　然し己れは刑餘の身體だ、例へ出獄しても誰れも己れを相手にする者はあるまい！
エミヤ　誰相手にしなくとも、妻あります。妻ついて居ります。
庸之助　己れが居てさへ乏しい暮しであつた、今頃はどうして暮して居るか、食ふ者、着るもの、そんなものにも事を缺いて居やしまいか？
エミヤ　三度喰べるもの、二度しかない時もあつたでせうけれ共、その時、夫を戀しい思ふ心――愛――心の糧になります。世界に一ばん尊いもの愛より外ありません。その愛を食物にして、衣物にして侘びしく生き居ます。あゝ毎晩坊やと、侘びしく唄つて眠る子守唄、監獄の窓へ聞かしたい。
庸之助　舅、姑、違つた風習――今頃はどうして、どんな迫害を受けて居るか、それを思ふと、己れは濟まない、病氣にでもなつてくれなければいゝと思ふ――
エミヤ　病氣？――ホヽ、そんな事ない。違ふ。奧樣の體、自分のものでない。旦那さん牢から出て來る時、見せる大事の體、大事〱にして待つて居ます、花嫁さん、婚禮を待つやうな心、身體大事に〱して待つて居ます。
庸之助　でも己れの刑期は、まだ一年もあるのだ。
エミヤ　一年何んでもない、三年、五年何んでもない。長い日一日々々と澤山過ぎる程、良人の體の罪、だん〱洗はれるのです。それにお父樣、お母樣みな信者になり

ました。キリストの御名の下に集りました。

庸之助　おゝエミヤ！

エミヤ　旦那さん！（と互に抱合はんとす）

今井　これ。（と靴で制してポケットに手帖を入れ）とにかく要領だけは得ました。私の報告の書きやうで今日の自殺のために罰を受けるやうな事もあるまいし、又情狀に依つては、假出獄の特典がないものでもない。マダムとにかくありがたう御座いました。萬一の事があれば私の過失になる所でしたよ。おい一九五四號、夫人に禮を申さないか！

（庸之助、オヅ〳〵と頭を下げる。）

今井　馬鹿、外國人に對するには外國人の禮に從はなければならない。外國人の挨拶は握手だ。握手をするんだ。

（と、故意に荒々しく、つきやる。兩人握手）序にその坊ちやんにも、お禮を云ふんだぞ！　坊ちやんに拾はれた生命ぢやないかハヽヽ。

（庸之助、子供を見て感慨。此の時　下手よりお節を先にお柳出で來り。）

お柳／お節　おゝ、庸之助！

庸之助　やア、お母さん、姉さん、私は此の淺猿しい姿をお目にかけて面目もありません。

お節　庸や、その面目ないと云ふのは私の事です。今までは、エミヤにも辛く當つて、親の因果が子に報ゆると、私の横しまな非道がお前に廻つて來た事と、私は、つくづく悟りました。どうか勘忍しておくれ！

お柳　庸さん、お母さんも、エミヤさんが赤ン坊を産んでから、こんな優しい心になりましたから、どうか安心して下さい、さうしてお澤さんは監獄で、たうとう病死をなさいましたと云ふ事です。

庸之助　えゝ？　澤が！

エミヤ　私、大變、氣の毒に思ひました。

お節　これ程、やさしい心の嫁を今まで憎んだ私は、本當に鬼の樣だつたねえ。私もヤソの御弟子になりましたよ。

（庸之助、嬉し泣く。この時、救世軍の連中に、ヨハネ馬太も共に出で來り。）

ヨハネ／マタイ　おゝ、奥さん！

（と側に寄る。そして庸之助を見て。）

ヨハネ／マタイ　おゝ、先生！　どうなすつたんです！

庸之助　ヨハネにマタイか、君達は、主の爲めに命をかけて戰ふ立派な兵士になれた、私の意志の弱いために、監獄の獄卒となつてしまつた！

ヨハネ　譯は知りませんが、先生に惡い事がある筈はありません！

マタイ　二人で今日から神に祈ります。きつと先生をこの不淨からお救ひ申します！

エミヤ　おゝ、神の子！

（と、庸之助よろ〳〵とするを、今井は。）

今井　おい、百十四號、お前は、未だあちらに用もある。

（と、ヨハネ、マタイを下手に去らせる。兩人は涙ぐんで下手へ去る。庸之助一同にそれとなく會釋して今井に引立てられて、上手に這入る。エミヤ、お節、柳子、橋を伸上り見る時、修造驅け來り、同じく上手を見て）

修造　おゝ、庸か。

（エミヤ、修造の手を取り上手へ指さし。）

エミヤ　お父さん、旦那さんが……（と、一同落涙）お父さん、お母さん、旦那さん、罪消えますやう、神樣へお祈り上げませう！

修造　どうぞ。さうしておくれ！

（と、これにてエミヤ、眞ん中へ立ち、修造、お節、お柳の三人はエミヤを取り圍み、跪きて祈る。エミヤ天を仰いで默禱。救世軍の一隊は、讃美歌を歌ふ。）

（この模樣よろしく――）

――幕――

ある日の三藏（二場）

（琵琶歌の一節）

大倉　桃郎原作

序　幕

三藏の家

下手よき處に、木戸口がある殆ど掘立小屋同然の小さな家。
家の前には緣側があつて障子がハタと閉されて居る。
家の上手に井戸あり。
秋たけなはなる頃。
小鳥の聲に幕あく。

（と、修學旅行のなりをした中學生三人登場。）

學生一　おい、少し待つてくれたまへよ！

學生二　何か用か。

學生一　僕、喉が渇いて堪らないんだ、どつかで水を飲んで行かうぢやないか。

學生三　さうだ、水を飲まう。

（と、あたりを見て三藏の家の井戸に氣付き。）

學生三　あすこに井戸がある。あの水をもらはう。

學生一　さうだ、あれをのまう。

（と、云つて居る處へ百姓一人登場。）

學生一　ねえ、君、僕等は水がのみたいんだがね、あの水をもらつてもいゝだらうね。

學生三　いゝだらう？

百姓　いゝだらうつて、お前さん達はあの井戸の水を飲む氣かね。

學生一　あゝ、あの水は飲んぢやいけないのかい？

學生三　毒でもあるのかい？

百姓　毒はねーけど、なアに歸つてゝ飲まつしやるなら私は、はア、かまはねーだけどね。

學生一　どうしたんだい？　何故のんではいけないんだいえ？

百姓　そんならお前さん達は、此處の家は誰れの家だか知

らねえだね！
學生一　知らないよ。だつて僕達は修學旅行で、今日東京からやつて來たんだもの。
百姓　あ、さうかね。遠足に來なすつたんだね。そんなら知つてる譯はねーだよ。……なアにね、此の村の者は、誰れ一人として此處の井戸の水は愚か、此處の家のものとつきあふ者は一人もねーだよ。
學生一　どうして？
百姓　どうしてッて？　此處の家は三藏の家だよ。
學生三　三藏ッて何んだい？
百姓　三藏はねー私等と同じ人間でねーだよ。
學生一　同じ人間でない？　變ぢやないか、誰れだッて人間に變りはないぢやないか。
百姓　處がな。實はね、此處の家は前科者だよ。
學生二　前科者？
百姓　えゝ、ですから村の者は誰れ一人此處の家とつきあふ者はないんです……
學生三　さうか、そんなら出かけよう。まだ井戸は方々にあるだらう。そんな家の水なんぞ、のむなア止めようぢやないか。
學生二　さうだ〳〵早く行かう。
學生三　さア君行かうよ。
學生一　待ち給へ、何故君達は此處の家の水を飲まないと云ふのだ？
學生三　だつて此處は前科者の家だつて云ふぢやないか。
學生一　それだから、どうしたと云ふんだ。前科者が何故いけないんだ？　僕はそんな事は大きらひだ。前科者だらうが何だらうが吾々と同じ人間に違ひないんだ。たとへ形式は何であらうと、心さへ人間らしいものであれば僕は何だつてかまはないと信じるよ。吾々がね、そんな事を云つて居るから世の中は益々惡くなつて行くのだ。何にも知らない田舍の人間ならとにかく、吾々からそんな舊い考へで居たら、これからの社會はやつぱり元のままで理由なく贅澤する者が威張つて理由なくしひたげられる人間の救はれる道はなくなつて仕舞ふんぢやないか……分つたか、分つたか。水を飲んで行かう、己れは水ばかりぢやない。此處の主人に會つて親しい話もして行きたいと思つてるんだ！
（と、井戸の側に來て水を汲み上げ。）
學生一　あゝ、うまい！　さア君達ものめ！　君ものめ！

學生一　（と、すゝめる。）

學生一　飲まないのか？

（他の學生はためらふ。此の時家の中にて。）

三藏の聲　のみたくない奴は、のむな！

（と、障子をあけて顔を出す。百姓は逃げ出す。）

學生一　あゝ君は此處の御主人ですか？　僕達は東京から來たもんです。無斷で水を貰ひましたよ。ありがたう。そして色々と此處の話を聞きました。然し僕丈は永久に君の友達だと云ふ事丈は信じて居て下さい！　さよなら。

（と、手をさしのべる。）

三藏　己れの手を握らうと云ふのか？

學生一　さよなら。

（と、握手する。三藏思ひにふけりながら握手する。他の學生も握手する。）

學生一　あゝ、いゝ事をした。僕達は本當にいゝ事をしたと思ふよ！

（と、退場。三藏しばらく希望にかゞやいたやうな顔をして見送つて居たが、やがて「相手は子供だ！」と失望してぱつたり障子をしめる。と。しばらくして軍服を着けたる柳田中尉いさまし氣に登場。）

柳田　おい／＼荒井は居らんか！　荒井の家は此處か？荒井！　荒井！

（と、呼ぶ。三藏そつと障子をあけて見て、なつかしさに思はず走りよる。）

柳田　おゝ、荒井、居つたか！

三藏　中尉どの！　しばらくで御座いました！

柳田　おゝ、久しぶりぢやつたな。貴樣丈夫か？

三藏　はい、中尉どのも御變りはありませんか？

柳田　うん、相變らず頑丈ぢや……

三藏　さア、どうぞお上り下さいまし。相變らず、汚い處で御座います……

柳田　いゝや、そんな遠慮は入るもんか、お互に戰爭に行つて居た時は幾日も／＼露營の床に抱き合うて寐た仲ぢやないか。あの時分、己れは未だ少尉。己れの心の中の苦しみも樂しみも、本當に知つてくれたのは、從卒の貴樣だけぢやつた。貴樣はどう思ふとるか知らんが、此の己れは貴樣の事は全く他人とは思はんよ。遠く離れて居つても、何かに、つけて思ひ出すのは貴樣の事ぢや。……（と、ホロリとして）まア丈夫でよかつたな！　丈夫で居ればこそ、かうして會へるのぢや……荒井、貴樣

どうした？——

三藏　中尉どの……（兩人しんみりとする）

柳田　荒井、貴樣、涙なんぞ出してどうしたんぢや！

三藏　中尉どの世の中の奴等は、皆、藏だと思つて居ても、中尉どのにお目にかゝると、人間らしい氣持になつてはりつめた心も自然と弱つてまゐります。三藏の心は厚い氷ではりつめて居ります。朝日に會つて解けるやうに……

……永年の間、考へても見なかつた事が、いろ〳〵と思ひ出されてなりません。

柳田　己れも貴樣に會ふと、色々と子供の事なんぞ思ひ出されて、軍人らしくない心になつて仕舞ふのぢや。どうした緣がつながれて居るのか、己れは親兄弟に別れるよりも、貴樣に別れるのが悲しいのぢや。荒井、笑ふなよ。己れはな、今死にに行く身の上で、せはしい時間をくり合せて、貴樣に暇乞に來たんぢやぞ！

三藏　では中尉どのは……？

柳田　おゝ、今度又シベリアへ出征する事になつた、私は此の身を以て國を守る決心で、所詮は生きて歸る心は毛頭持つて居らんのだ。なア荒井、或はこれが一生一度の長い別れにならんとも限らん。貴樣は達者で暮らして居ろよ！

三藏　それで、何時御出發でございますか？

柳田　あす出發ぢや。

三藏　明日？　……中尉どの、どうぞ此の私を御連れ下さい。

柳田　何？

三藏　御承知の通り私は、罪を犯した人間として、今日まで世の中からいぢめ拔かれ、人一倍の仕事をしても、普通の人間の扱ひも受けられず、たま〳〵私の本當の力を認めて下さる方があつても前科者だと云ふ事が知れますと、その日から直ぐ追拂はれなければならないやうな眼に合つて、今では全く自分の食べ物は自分の手で取らなければならない程、此の村からも迫害されて居ります。それ許りでなく、いくら私が正しい心を持つて居ても貧乏な暮しをして居る爲に、村で物が無くなれば、直ぐに私を疑つて、とやかうと云ふのです。そんな時には、カツとなつて又元のあばれ者になつて村も人も燒き盡してもやらうかと思ひますが、中尉どのゝ御言葉を考へ出してぢつと我慢して居るんです。私に取つては中尉どのは善惡共に見透して下さる神樣も同然でございます。今御

別れしては私は望みの星を見失つた旅人の樣に、どちらをたよりに歩いていゝか分りません。折角人間らしくなつた者が又元のやうになりましては自らばかりでなく妹の里野にも可哀想な目を見せなければなりません！　中尉どの！　どうぞ私をシベリアへ御連れなすつて、御側に置いて下さい。御願ひでございます。

柳田　荒井、貴樣もさう思ふか、己れも出來る事なら貴樣を連れて行つて朝夕の世話にもなりたい。然しなア軍隊の事は吾々の思ふ樣にもならんのぢや！　まア今度丈はあきらめてくれ、例へ戰に行つても行かいでも、國家に盡す方法はいくらもあるのぢやからなア。

三藏　中尉どの、此の荒井三藏は、凡ての人からいぢめられ、爪はじきされても國家を思ふ心は、片時半時も忘れた事はありません。出來る丈の力を持つて、つくしたいと願つても世の中は私を容れてはくれないのです。

柳田　荒井、もう云ふな。己れは武骨な軍人ぢや、お前の心の中の苦しさはよう分つて居るが、それは己れの力ではどうにもならないんだ。然しなアどうにもならないからと云つて、自棄になつてお前が元の樣な氣狂のやうな人間になつて世の中を呪ひ、人を憎んで行つたならば、世の中の人もお前の爲に恐ろしい目に會はなければならず、お前も又重い罪を受けなくてはならないんだ。己れの先[illegible]かな世の中ちうものは、丁度煉瓦造りの家のやうなもでのいくつも／＼積み重ねて社會と云ふものを形造るのぢや。その一ツ／＼の煉瓦が氣に入らぬと云うて、勝手な事をしたらばどんな立派な家でも見る間に潰れて仕舞はなければならないのぢや。と云うたが、己れはその通りぢやと思ふよ。そりや己れにも不平はあるぞ！　イヤな事もあるぞ、然し己れは己れの分に安んじてぢつと我慢して居ろのぢや。荒井、貴樣もどうだ、ぢつと我慢してこらへてくれよ。それでなくとも、いろ／＼の忌はしい思想が無考へな人間の胸にいろ／＼なイヤな種を下ろさうとして居る時代だ。おまへのまはりの人間はおまへにつらくとも、お前は自分の國を恨む事は出來んのぢや。生きて再び歸るかどうか分らない己れが、只一ツの置土産は、此の事ぢや。此の事が分つてくれゝば、己れは安心して行く事が出來る。荒井、分つてくれたか。

三藏　分りました。いろ／＼御心配をかけました！　中尉どの、私はあなたの爲に、どんな不平をも、口惜しさも我慢して居ります！　どうぞ御無事で、おかへりの程を

願ひます。

柳田　分つてくれたか！　それで己れも來た丈の甲斐があつた。今度の出征は此の地方一帶のものが行く事になつて居るから、今にも貴樣の體もさうなるかも知れん。二人の間に緣があれば、又會ふ事が出來るのぢや。體を大切にしろよ！

三藏　中尉どの、御達者で、……あゝ私は御供したい。その勇ましい御姿を見ると、かうしては居られなくなりました。

柳田　私とても別れたくはないぞ。

（と、柳田は懷中から金を出して。）

柳田　さアほんの少しだが、これを置いて行くぞ！

三藏　これは何でございます！

柳田　己れの志ぢや。取つて置け！

三藏　しかし――

柳田　入らんけりやよせ！

三藏　中尉どの、ありがたく頂戴いたします

（二人互に別れを惜しんで柳田は退場。三藏は一人殘つて迫害されて居る社會に生きて居るよりも中尉と一緒に行きたいと云ふ心で、ちつと考へて居る所へ、三藏の妹里野、とぼ〳〵として登場。二人ばつたり會ふ。）

三藏　おゝ里野か。

里野　兄さん！

三藏　あい、殘念な事をしたな。もう一足早く來ればあの柳田中尉どのに御目にかゝれたのだつた――それともお前、道で御目にかゝらなかつたか？

里野　兄さん、柳田さんが御見えになつたのでございますか。

三藏　さうだ――ほんの今だ、――中尉どのもお前の事はあんなに色々と心配して下さつたのだ――それになア今度又中尉どのは御出征なさるので、わざ〳〵此の兄さんに會ひに來て下すつたんだぞ！

里野　兄さん、私も御目にかゝりたうございました。

三藏　さうだらう――まだ遠くへも御出にはなるまいが、ほんの一足ちがひで御目にかゝれないと云ふのも運と云ふものだらう――まアいゝ。然し今日は何しに來た！　家は皆、變りはないか？

里野　えゝ――

三藏　貞次さんは、お前にやさしくしてくれるか。

里野　えゝ……

三藏　さうか、それは何よりだ！　お前に取つては貞次さんが只一ツの賴りなのだ。己れはなア、たつた一人の杖とも思ふ中尉どのと御別れしなくてはならなくなつて、さつきからぼんやりして居たんだ。前科者と云ふ兄を持つお前は、俺と同樣にあらゆる人からいぢめ拔かれて暗い一生を送つて居るのだ。己れはかうして、お前に會ふのが嬉しいよ。どんなにいら立つた時でも、お前の顏を見ると己れは、凡ての事を我慢しようと思ふのだよ！

里野――

里野　兄さんもほんとに、此頃は我が折れましたね。

三藏　うん、それも皆、中尉どのの御かげだよ。

（と、自分で食膳を出して食べ初める。）

里野　兄さん、久しぶりで私が居るのですから、何か好きなものでもこしらへろと云つて下さいよ。

三藏　あゝ、さうだつたな。年百年中自分一人より外にたのむものゝない兄さんは人の情なんぞ受けない方が、却つていゝのかも知れないよ。

里野　兄さん、それがあなたの我と云ふものですわ。

（二人、しんみりと物語る。）

三藏　なア里野、久しく見ない內にお前少しやつれた樣だな。相變らず姑さんは辛く當るのかい――

里野　兄さん、もうそんな事は、聞かないで下さい！

三藏　聞かないで下さいッて、己れに取つてはお前の幸福が一番氣になるのだ。なア里野、己れは男だ。どんな苦しい悲しい事も、ぢつと我慢しても居れるが女のお前は決してさうは行かないのだよ。

里野　兄さん……（と、泣く）

三藏　どうしたんだ？　何を泣くんだ？　己れに叱言を云はれたので、それで悲しくなつたのか、里野己れが惡かつた！　久しぶりで會つたのにこんな事を云ふのぢやなかつた。さア泣かないでくれ〳〵賴む！　もういゝかげんに氣持を直してくれないか！

里野　兄さん、私は叱られても叱られないでも泣かなければならない女になりました！

三藏　えゝ？

里野　兄さん！　私、武田の家を追ひ出されて仕舞ひました！

三藏　なに、追ひ出された？　そんなら何か貞次さんも承知の上でお前を捨てたと云ふのか！　そして、それはど

う云ふ譯だ。お前に何かわるい事でもあるのか！

里野　いゝえ……

三藏　何か、しくじりでもしたと云ふのか！

里野　いゝえ。

三藏　そんなら一體何だ！　里野お前は何故かへつて來た貞次さんがお前を嫁に貰ふ時、己れに例へどんな事があつてもお前は捨てないと云ふ堅い／＼約束があるのだ。それを今になつて返すなんて――よし！

（と決心して出かけようとする。）

里野　兄さん、あなた何處へ行くんです？

三藏　貞次さんに會ひに行くのだ！

里野　兄さん、行つても駄目です。貞次さんは居らつしやらないのですわ。

三藏　なに、貞次さんは居ない？　そんなら誰れがお前をかへしたのだ？　お前は貞次さんの妻ぢやないか。そんな分らない奴があるものか！　里野、こゝん所でおれ達が敗けては己れ達は一生浮ぶ事は出來ないのだぞ！　心配するな。待つて居ろ！　（と出ようとする）

里野　兄さん、待つて下さい。今あなたがそんな事をしては却つて貞次さんが困ります。どうぞ我慢して下さい！

三藏　そんならお前は人の爲に自分を殺してもいゝと云ふのか！

里野　兄さん、兄さん、こらへられない苦しい事も、ぢつと我慢しなければならないのが世の中だと思ひます。兄さん、一番悲しい此の妾はぢつとこらへて居るのです！兄さん、どうぞこらへて下さい！

三藏　里野、お前は何故そんなに弱い女になつたのだ！

里野　ねー兄さん、私達の身の上は、元々暗い悲しい者でした。それが例へ半年でも一年でもうれしい暮しをして居たのは考へて見れば夢だつたのです――兄さん！　今夢がさめはてゝ、皆、元に戻つたのですよ。

（と、わつと泣く。三藏も男泣きに泣く。そこへ村役場の小使登場。三藏に紙片を渡して去る。）

三藏　おゝ、（紙片を讀んで）　里野、召集令だ！　己れは直ぐに戰爭に行かなくてはならないのだ！

里野　えゝ？

三藏　己れは永い間の願が叶つて、再び中尉どのゝ御供をする事が出來るのだが……里野、兄弟揃つて生きて居てさへ二人は世の中からいぢめられて居るものだ。ましてお前は今武田の家から離縁になつた……あゝ兄さんはど

うすればいゝのだ！
里野　兄さん、私は兄さんの妹です。たとへどんなにいぢめられても……兄さん、兄さんは安心してどうぞ御國の爲に働いて下さい！
（と、涙をおさへて、兄をはげます。所へ武田家の使の者、車にのせた里野の荷物を從へて登場。）
使の者　御めん下さい！　御荷物を御受取り下さい！
（と、車を曳きこむ。）
三藏　（ちつと見て）かへつてよく云つてくれ！　妹もたしかに受取つた！　荷物もたしかに受取つた！　そしてな此の兄は國家の爲に出征しなければならないのだ。同じ事なら何故里野を生かして返した。今の此の已れに取つては冷たくなつた妹を返へしてくれる方がどんなにうれしいか分らないのだぞ！
使の者　御尤もでございます。けれど私は何分使の者で御座いますから……
三藏　惡魔の使だ！　えゝ……已れはもう涙も出なくなつた。里野、荷物が來たぞ！
（里野は思はず荷物の側に行き。）
里野　兄さん！
（と、荷物にかじりつき泣きくづれる。使の者は、いいしほに逃げる樣に歸る。三藏はちつと里野を見て居る。やがてたまりかねて里野をいたはりに行く。里野は、ふと顔をあげて。）
里野　あゝ、貞次さん！
（と云ふ。三藏思はずびつくりする。里野ます〳〵心が狂つて、いろ〳〵の事を口走りその邊をうろ〳〵する。三藏は介抱しつゝ。）
三藏　里野、無理もない！　が、落ちついてくれ！　兄さんだ！　兄さんだ！　里野！　兄さんが分らないのか！
（と、ちつと顔を出す。）
里野　あゝ、貞次さん。
三藏　あゝ、世の中の奴等が、たうとうたつた一人の妹を氣狂ひにしやがつた！
（と、里野をかき抱いて泣く。）

―― 道具一轉 ――

第二場

社の前

舞臺よき所に、注連を張りたる大きなる神木あり。上手下手に杉の木立。奥深く社の一部見ゆ御神木の上手に燈籠、よき所に御手洗あり。道具止まると、村の青年團の人々二三登場。

反對の側より武田貞次人を探すさまにて登場。

貞次　ちよつとお尋ねしますが、皆さんは荒井三藏の妹を御存じありませんか。是非會はなければならない事があつて來たんですが、どうしても居る所が分らないので困つて居るんです……御存じありませんか――

村人一　さアねー、あすこの家とは村でも餘り交際しないからどうして居るか分りませんよ。（と村人退場）

貞次　さうですか、今でもやつぱりそんな風なのですか、……それぢや自分で探すより他に仕方がない――

（と行かうとする所へ、令嬢球子登場）

球子　貞次さん、あなたは無斷で家を御出になつてこんな所に何をして居らつしやるんです？

貞次　僕は少したづねる人があつて此處へ來て居ますが、さう云ふあなたは何しにこんな所へ來たのです。

球子　それはお聞きになる迄もない事ぢやありませんの、私に取つてはあなたは、どうしても忘れる事の出來ない男性の一人なのですよ。今日までは、よし罪を犯した人にしろ、里野と云ふあなたには妻がある以上は、いかに私があふれる樣な愛情を以てしても、どうする事も出來ませんでした。それが今、あなたは、あの女と別れたのですから、此の場合に私はあなたを自分のものにしなければならないと思ふのです。それにあなたは、又こんな所にうろ〳〵して、又あの娘を呼び戻さうとなさるのですね。

貞次　あなたは何を云はれるのです。たとへ何であらうとも、里野は相許した私の妻です。それに對してあなたがとやかう云ふ事は少しも無いぢやありませんか。

球子　いゝえ、あります。ありますとも！　現代の女性は自己に生きなくてはなりません。と同時に一般人類の爲にも考へなくてはなりません！　あなたも高等の教育まで受けられた御方なのですから、人類改善の上から見ても優越した男女の結婚こそ意義のあるものですが、いか

に劣情の爲に盲目になつたとは云へ、求めて前科者の異性を妻にするなんて事が、到底考へられ可き事ではありません。あなたが自覺せずにそれを行つたとしたら、私は反省を促さなければなりません！　又自覺して居るものとしたら、人類の敵として私はあなたにせまらなければなりません。いづれにしても私はあなたを私のものにしなければならないのです。貞次さん、私はあくまでも冷たく生きたいと願ひながら、あなたに對しては遂に平凡な女になつて仕舞ふのですわ。私センチメンタルな氣持に支配されて居るのです。貞次さん、私の心の中も考へて見て下さい！（と貞次のそばへ寄る）

貞次　かね〴〵あなたの御心持は分つて居ますが、私の力でどうする事も出來ません。私は私のつとめがあります。では失敬します！

（と球子をふりはなして貞次は退場、球子はその後を追ふ。所へ村長を先に立てゝ、村の重立つた人二三登場。）

村長　さあ、時はもう迫つては居るが、ともかく重大な問題であるから一同の決議に依つて行はなくてはならないのだ。此の村から今度出征する軍人の中にあの荒井三藏が居ると云ふのが大問題なのだ。荒井以下他の人々に對しては村役場は勿論、青年團ならびに村の有力者と共に出來る限りの盛大な事をして停車場迄見送るのは從來の例であるが、出征軍人一同を送ると云ふ事になると、自然荒井三藏も、その中に這入る事になる。いかに何でも吾吾が彼等前科者風情の爲に見送りをすると云ふ事は、祖先の靈に對して申譯ないと思ふのだが、青年團の意見はどうなのだ？

青年團代表　勿論困る事なのです！

村長　村會の決議はどうなのです！

村會議員　云ふまでもない事です。イヤ議員の中には第一此の村に住はして置くと云ふ事すら非常な恥辱だと云つて涙を流して憤慨して居る者もある位で、村會としては無論、荒井を送るなどは出來ません！

村長　いや、誰れの考へも變らないものだ、が然し、困つた事には同じ出征軍人である丈に、どんな事をしても同じ列車で出發する。自然、吾々が彼れをも見送ると云ふ事になるのだが……

青年團代表　さア、そこです！　それにも一ツ困る事は出征軍人の名を書いた旗を立てゝ行くのですが、彼の名前

の段丈がないとなると……

村會議員　そんな氣がねは入らん。元々あれを人間と思ふのがイカンのだからね。

青年團代表　然し、いかに彼を人間と思はないとしてもそれは事實に於て人間であれば、それ丈の取扱をしなければならないのですから……

村會議員　しかし……

村長　まア議論は止めて下さい。ともかく目下に迫つた問題で、此處で議論をしてもどうにもならない事になるのですから——。

（と、云つて居る處へ村の子供二人登場。「氣狂が來た！　氣狂が來た！」とはやし立てる。あとから氣の狂つた里野しどけなき風態をしてうろ／＼と登場。村の人々等に對して「貞次さん、貞次さん」と云ひながら取縋る。一人一人氣味惡さうに退場。里野一人になつて居る所へ球子登場。里野それにもからまつて追ひすがる。球子恐る／＼退場。里野は又一人になると社に向つてべつたりと坐り涙ながらに祈る）

里野　神樣、あなたは何故私の大切な貞次さんをかくしてお仕舞ひになりました。貞次さんは私の大切な大切な夫です！　それを何故かくしました！　神樣、かう云ふのがお氣に入らなければ私お願ひいたします。どうぞ御返へし下さいまし。私ねー貞次さんとお別れしてはもう生きて居る事も出來ません。御願ひでございます、さア御返しなすつて下さい。それとも何處かへ御かくしなのなら——そのかくしてある處を御教へ下さい——此の通り手を合せて御願いたします。神樣、神樣、私は今まで神樣に何か惡い事をいたしましたか、何もしやしないぢやありませんか。神樣私を可哀想だと思つて助けて下さいまし。あら神樣はイヤ／＼をなすつて居らつしやる。そんなら私に死んで仕舞へと仰有るんですか？　神樣！　ああ、何故そんな顏をなさるのです！

（といふ／＼とかきくどき、涙にくれて、その場に倒れ伏して仕舞ふ。そこへ出征の用意をした三藏登場。里野を見て。）

三藏　里野、お前一體何處を歩いて居たんだ。さア兄さんだ。早く家へ歸つておくれ！　兄さんだよ、里野……お前又泣いて居るんだな。

里野　あゝ貞次さん、……（とぢつと顏を見て）違ふ／＼もし、御願ですから貞次さんに會はして下さい。

三藏　里野、己れは兄さんだよ。お前、兄さんが分らない
　のか？
里野　分るわよ。
三藏　分る？　分るならよく聞いてくれ、兄さんはね、お
國の爲にこれから遠い／＼所へ行かなければならないの
だよ。お前も前科者の妹と云はれて、世の中からは、い
ぢめ拔かれ、もう己れは涙も涸れて居る筈だが、そんな
になつたお前一人を殘して行くのは己れにはどうしても
出來ないのだ。兄さんが賴む。一生一度の別れなのだ。
どうぞ、もう一度正氣になつて兄さんと別れの言葉を取
交はしておくれ！　おい、里野、此の己れをよく御らん！
よく見ておくれ。天にも地にもたつた一人しかないお前
の兄さんなのだよ！
里野　あゝ、神さまだと思つたら何處かの知らない人だ。
お前か、私の貞次さんを盜んだのは――
三藏　あゝ、どうしても分らないのか！
里野　さア貞次さんを返して下さい。
三藏　あゝ、里野、里野、どうぞ氣を鎭めて、此の己れの
顏をよく見てくれ！
里野　あゝ泣いちやいけません。泣いちやいや。泣くとね

そら神樣が貞次さんをかくして、もう出してくれません
よ。
三藏　里野、己れはな國家の爲に働く者だ！　命を的に盡
す者だ！　それだのにたつた一人の妹を安心して預けて
行ける一人の人もない程に、己れの一家はみんなから呪
はれて居るんだ。己れ一人は國の爲に命を捨てゝも、そ
の國のものは、みんなして己れ達を恨むのだ！　己れは
自分の仇の爲に死なゝければならないのか、己れの心を
誰が知つてくれるのだ。己れの苦しみを誰れが分つてく
れるのだ！　里野、廣い世間にお前一人ぢやないか、お
い、お願ひだ！　後生だ！　兄さんと云つてくれ！　そ
うして、きげんよく別れさしてくれ！　よ、よ、
　――と種々に里野を正氣に戾らせようとするが、里野は
　逃げる樣に退場。入れ違ひに柳田中尉登場。）
柳田　おゝ荒井、そこに居つたか。
三藏　はア……中尉どの、御供が出來るやうになりました。
柳田　事情は殘らず聞いたぞ！　今も村の奴等を叱り廻は
して來た。荒井、村の奴等はな、從來の事を凡て忘れて
お前を立派な軍人として花々しく出征を遂つてくれる事
になつたぞ！　心さへさう思うて居れば、そんな形式は

どうでもよいと云ふのが、お前と己れの主義であつたが、やつぱり人間ぢや、荒井、お前に對する己れの心持も買つてくれ、そしてきげんよく一緒に發たう！

（と、云ふ處へ以前の村長等登場。）

村長　柳田さんの仰有る通りに作りました。荒井、村全體が、かうしてお前を送るやうになつたのも、皆、柳田中尉の御蔭なんだぞ！

（と「荒井三藏の出征を送る」と書いた旗を見せる。三藏ぢつと旗を見て思はず、つか〳〵と進み出て旗を取るとびり〳〵と引裂く。）

村長　何をする？

三藏　中尉どの、私はこんな旗も入りません！　見送りも入りません！　私の腕には中尉どのと妹の他にはたつた一人の人間もないのです。今になつて此の三藏を見送るなら何故、今まで何故己れをいぢめたのだ！　何故村では己れに物を賣らなかつた！　何故己れを村から逐ひ出さうとした？　何故大切な妹を氣狂にした！　あ、己れは凡ての人間が仇だ！　人間が憎い！　世の中が憎い！　何もかも目茶苦茶にしてもあきたらない程憎いと思ふが己れは今その憎らしい世の中の爲に、己れの命を捨てに行くのだ！　仇の爲に死んでやるのだぞ！　さあ、もつと憎め！　最後迄呪へ！　妹も呪へ！　にくみ拔いていぢめ拔いて何故己れ達二人を殺して仕舞はないのだ！　今になつて表面丈で人間らしく扱はれてもな、此の荒井三藏の骨まで、沁みたうらめしさはどうする事も出來ないんだぞ！　何故野良犬でも逐ふ樣に叩き出さないのだ旗を立てたり、樂隊をしたり、どんなに花々しく送られても己れは嬉しいと思へると云ふのか！　氣の狂つた妹は、だれ一人あづかり手もなく、己れの留守を、どうするかと思へば、己れは泣かずには居られないんだ。さア皆引取つてくれ！　歸つてくれ！　己れは、たツた一人で出征する。さア皆行つてくれ！

柳田　荒井、貴樣の心持はよく分るが……然し……

三藏　中尉どの、私は今日迄只の一度も御命令に反いた事はございません。荒井三藏が最後の御願ひでございます。どうぞ、只一人で心のまゝにさして戴きます！

（此の時、里野又フラ〳〵と登場。三藏見るより里野を抱き。）

三藏　中尉どの――妹はこんなになつて仕舞ひました！

（柳田、里野の肩に手をやる。）

里野　貞次さんに會はして下さい！（と泣く）

三藏　中尉どの……

柳田　あゝ、何と云ふ事だ！　社會の生んだ罪なのだ！　誰れか此の里野をあづかつて荒井三藏を救つてやるものはないか！

（と、云ふ處へ貞次つか／＼と進み出て。）

貞次　三藏君、今更になつてと云はれるかも知れませんが凡ては僕の知らない事でした。たとへどんな事にならうとも僕の心持だけはあなたにも里野にも分つてもらへる事が出來ると信じて居ましたが、里野は遂にこんなになつて仕舞ひました。然し里野はあくまでも私の妻です。私は自分の命をさゝげても必ず里野を元通りにして待つて居る決心です。どうか／＼凡ての事を許していさぎよく安心して國家の爲に働いて下さい……三藏君、僕はあなたに許されようと思ふのぢやありません。只、僕の信ずるまゝを行つて、それに依つて許されたいと願ふのです。三藏君、里野は一生僕の妻です！　あなたは私の兄さんですよ！

柳田　武田君は、あゝ云ふのだ。荒井、私からも頼む。凡てを委せて心持よく出發してくれ！

（そこへ球子登場。）

貞次　球子さん、御らんの通りの事情です。私はあくまでも哀れな里野の夫として一生を捧げる意りで居ります。たつた一人の兄さんは、さびしい心で出征される場合只一人の妹は、その兄さんを見送る事が出來ない迄に心が狂つて仕舞ひました。それも皆、我々の罪です！　世の中の罪です。僕は、僕たつた一人丈でもかうした間違つた世の中を改善して行つていづれも平等に太陽の愛のめぐみを受けさせたいと思ひます。球子さん、あなたも一人の同志になツて此の世の中を救ふ氣はありませんか？

球子　よく分りました。妾今迄の考へが間違つて居ました。貞次さん、及ばずながら私も里野さんを姉さんと思つてきつと／＼元の正氣に戻して上げようと思ひますわ！

貞次　三藏さん、吾々の赤誠は、きつと／＼美しい世の中を形造ります。一日も早くどうぞ無事で戻つて下さい。

柳田　荒井、お前も、もう安心して出發が出來るぢやらう

三藏　貞次さん、何にも云ひません。只、御頼みします！

貞次　承知しました。（里野の側へ寄り）里野、里野、私だよ、貞次だよ、お前は一生私の妻だ！　安心しておくれ！　安心しておくれ！　そして大切なお別れだ。兄

さんにお暇乞をしてあげておくれ！

里野　あゝ貞次さん――

貞次　おゝ、さうだ、此の手にすつかり縋つて居て一生離れずに居ておくれ！　さア兄さんを見ておあげ！　兄さんだよ！（と三蔵を指す）

里野（ちつと見て）あゝ兄さん！

三蔵　里野、分つてくれたか！（と両人抱き合ひ）安心して待ツて居ろよ。さア中尉どのだ！

里野　あゝ柳田さん！

柳田　分つてくれたか？

里野　御きげんよう……

三蔵　さようなら……

（各々希望に充ちた喜びと、離別の悲しみとで、ちつと互の顔を見る。里野はよろ〳〵として球子に抱かれる。此の模様よろしく――。）

――幕――

夏小袖（十三場）

尾崎紅葉

一寸の間　娘おそめ　店の者和七

和七　お嬢様、あなた大相鬱ぎの蟲で、どうなさいました、待人不來といふやうな姿でございますね、どうかなさいましたか、もし。

（と袖を牽けども、お染は知らぬ顏で、ぢつと考へてゐる。）

和七　分りました、あなたは私とかういふ譯におなんなすつたのを、つまらない眞似をしたと、今更悔んでいらつしやるのですね、どうせ左樣でございませう、私風情のやうなものは、お否におなんなさるのも御尤でございます。

そめ　あれ和七や、さういふ譯ぢやないのだよ。

和七　えゝ、どうせさういふ譯ぢやございますまいよ。

（と拗てくるりと後向になる）

そめ　あれさ、そんなに怒らなくつてもいゝぢやないか、そんな譯ぢやないつていふのに。

和七　そんなら、どんな譯なのでございます。

そめ　あのね、私はね、お前をね、かういふね、譯にね、なつたのはね、

和七　どうも「ね」ばかり多くつて、さつぱり譯が分りませんね。

そめ　それ御覽、お前だつて「ね」を附けるぢやないか。

和七　此「ね」は入用の「ね」で、貴孃のやうな不要の「ね」とは違ふのでございます。

そめ　お前の「ね」はえらうございますよ。

和七　まあそんな事をおつしやらずと、後をお話しなさいまし。

そめ　あのね、お前とかういふ譯になつたのは嬉しいけれどね、いくらお迭ひに思合つても、とても夫婦にはなれまいと思つてね、それが私は苦勞でならないよ。

和七　へえ、それは一體どういふ譯でございます

そめ　父樣はあの通りだし、親類は無し、それよりまだ苦勞になるのは、お前の變心。

和七　變心？　誰が、私が？　何時變心をいたしまし

た、いゝえさ、何時の何日に變心をいたしましたよ、お嬢樣それを聞きませう。はい、其譯を聞きませうかい、
　私はどんな事があらうとも、貴嬢の事ばかりは、死んでも忘れません、生れかはつても忘れはいたしません、七生までも忘れません、その位にまで念つてゐるものを、何を證據に變心なんて、多度そんな事をおつしやいまし。

そめ　口ぢやいくら立派な事をおいひでも。

和七　どういたしました。

そめ　ちやあんと知れるよ。

和七　どうして知れます。

そめ　ちやあんと知れるよ。

和七　唯「ちやあんと知れる」では通りません、かういふ仕打があつたとか、こんな素振があつたとか、確な處をおつしやつて下さい。

そめ　さうさ、あんな仕打もあつたし、あんな素振もあつたし、あんな事だの、あんな事だの、あるとも〱。

和七　獨で承知してばかりいらつしやらずと、はつきりと分るやうにおつしやいまし。

そめ　いはなくつても私には分つてゐるよ。

和七　おつしやれますまい、おつしやれる理がない、まあそんな事をおつしやつて、多度私をおいぢめなさるのが宜しいのでございます。嘸好お慰みになりませう、私は馬鹿でございますから。

そめ　和七、和七つてば。

和七　私は馬鹿といふ名でございます。

そめ　そんな事をいはないで、和七い。

和七　和七は今朝ほど出まして、留守でございます。

そめ　もうそんな事をいはずに、返事をしておくれよう。

和七　和七は昨夜から出て未だ歸りません、何だかお嬢樣に嫌はれたとかいつて、それを苦に病でをりましたが、あゝいふ氣の小さい男のことでございますから、惡くすると、身でも投げたかも知れません、可哀さうな事をしましたよ。

そめ　緣起の惡い、もうそんな事をおいひでないよ。

和七　いはせる人があるから申します。

（と慳貪にいふ、お染はづつと寄て、和七の中指と食指を握つて。）

そめ　私が惡かつたから堪忍しておくれ。（と曳たり、振たり）

和七　私は何も貴嬢に、堪忍してくれと、あやまられま

す覺はございません。私は奉公人、あなたは御主人樣、その御主樣の貴孃が、陽ようと漢かうと、どうしようと御勝手次第、何もそんなにお詫をなさることはございません。

そめ　そんな事をいはないで、眞個に堪忍しておくれつてば、今私のいつた事は皆虚言で、お前が變心をしないのは、ようく知つてゐるよ、戯談にいつたのだから、どうぞ堪忍しておくれつてば、よう和七。

和七　夫ぢやあ、今おつしやつたのは御戯談でございますか。

そめ　あゝ。（と氣毒さうな顔）

和七　あなたも……。（とお染の膝をぐつと抓る。）

そめ　あいたゝ。

和七　好加減になさいまし、惡い洒落をなさる、私は眞に受けました。

そめ　覺えがあるからさ。

和七　そこらで口說はやめにして、ちと身に染みたお話をしようぢやございませんか。

そめ　それぢやね身に染みた話をするが、お前私が可愛いとおもふなら、辛からうけれど、後生だから父樣の御機嫌を取て、何でも彼でも和七和七といはれるやうに、御氣入になつておくれでなくつちやいけないよ。

和七　へえ、それはもう萬々呑込むで、お氣に背はないやうに、御意に入るやうにと、精々働いてやつてをる積りでございます。

そめ　それから又、兄樣にも取入てね、可愛がられるやうにしておくれよ、父樣は老年の事だから、お前との譯なんぞに氣の附く氣遣ひは無いけれど、あゝいふ兄樣の事だからね、お前がお氣入でさへあれば、私達の味方になつておくれに違ひないから、兄樣にも父樣にも、双方へも甘く取入つて……。

和七　それは困りますね、旦那樣と若旦那とは、まるで氣性が違つていらつしやるのですから、片方のお氣に入れば、片方の御氣に入らず、彼方立てれば此方が立たぬで、兩方立てる譯には參りませんね、ですから、銘々に受持を極めて、私は父樣掛を勤めますから貴孃は一つ兄樣掛といふのをお引請なすつて下さいまし、宜しうございますか、うまい折を見て、兄樣へ貴孃の思はくをほのめかして、亭主に持つなら店の和七のやうな男を、といつ

たやうな調子に、
そめ　そんな事を私が……。

内證話

若旦那　徳之助
妹　おそめ

徳之助　お染少しお前に話したい事があるのだ。
そめ　何でございます。
徳之助　極りが悪いな、今度にしようか。
そめ　おつしやいなね、人じらしな。
徳之助　思切つていはうかな。何だか極りが悪い、私のいふ間お前眼を瞑つておいで。
そめ　否な。
徳之助　後生だからよ。
そめ　かうですか。（と眼を瞑る）
徳之助　否だぜ、薄眼で見たりなんぞして、次手に下をお向き。
そめ　かうですか。
徳之助　今度は上眼をつかふね、それぢや眼を瞑つて下を向いて、後面をお向き。
そめ　かうですか。
徳之助　さうだ／＼、今日は髱がよく出たが、襟がちつと下つたやうだ。
そめ　お世話を焼かないで、早くおつしやいな。
徳之助　何といふきたない足袋だらう。
そめ　ようございますよ。
徳之助　お前は飛んだ坊主頭だ。
そめ　もう私は否。（と立懸ける）
徳之助　あやまつた／＼、これからは眞面目だよ、さあ眞面目となると極りが悪い。
そめ　兄様も男らしくもない、さつさとおつしやいなね。
徳之助　賢も不肖もおしなべて、愚癡になるのが此道の常だよ、野暮めが。
そめ　話といふのはそんな事なの。
徳之助　これは冒頭だ、實はお染、私には惚れた女がある。
そめ　えゝ。
徳之助　吃驚したか。
そめ　いゝえ。
徳之助　感心だ。頼もしい奴だ、話せるわえ。
そめ　さうして、惚れたがどうしたのでございます。
徳之助　どうもかうもするものかな。其先はお定まりの、女房に持ちたいといふ寸法だが、就ては、父様が承知を

してくれなければ、どうすることも出來ないけれど、御存じおかるゝ通りのわからずやだから、私がかういふ女を女房に持ちたい、なんぞをいはうもんなら、途方もねえ、ぐらゐで逐拂はれるのは知れてゐる、處でお前も同胞といふのは私一人、其一人の大事の兄樣を助けると思つて、どうかね、父樣を旨くくるめて、私の願ひの成ふやうにね、お染樣々々とこの通り拜むよ、後生だからね、おい、其代り又お前が、かういふ人といふ男があつた時には、この恩報に、私が結ぶの神になつてあげるから。

そめ　きつと成つて下さるか。

德之助　おや！

そめ　兄樣、きつと、あなた、なつて下さるか。

德之助　おや！　お前心當りがあるのか。

そめ　少しばかり。

德之助　ある？　へえ、さうだらう、どうも私が惚れた女があるといつた時に、びくともしなかつたのは、ちつと度胸がよすぎると思つたよ、誰だい、相手は。

そめ　いゝ人。

德之助　のろけなさんな誰だよ眞箇に。

そめ　私はまあ後から申しますから、兄樣先へおつしやい、

德之助　誰樣？　さぞ可愛らしい方でせうね。

德之助　難有い。

（と額をぴしや〳〵たゝいて。）

德之助　羞かしながら、ちよいと物語らうかね、實は通りの、それ寫眞屋の横町の、角から三軒目に、餘り綺麗でない格子造の二階家があると思召せ、家内二人で、二人とも女子だと思召せ、若いのと老年と思召せ、老年が伯母樣で、若いのが娘だ、其娘の美しさといつたら、憚り多いけれどお前のやうな……。

そめ　はい、私はお多福。

德之助　いゝえさ、お前のやうな譯にはいかないけれど、隨分美しいのだ、これさ機嫌を直して聞いてくれといふのに。

そめ　私はどうせお多福。

德之助　さう拗ねずにさ。それはお前も容色は好いさ。

そめ　もの字附で、まことに難有うございます。

德之助　困るなあ、どうも、おやあ、お前は言ふまでも無くか。

そめ　今度は「おやあ」になりましたね。

德之助　好加減にしねえか、そんな事をいふなら頼まねえ、

その代り我も頼まれまい。
そめ　あれ御免なさい、兄様その娘はどんなに美しいのですよう。
德之助　へん、急に胡麻を摺りやがる。もう美しい處は端打つて、其母樣といふのが人仕事をして、親子細々と暮してゐるのだが、其女がさ、母樣を優しくするの、深切にするのつて、難有涙がこぼれて見ちやゐられやしない、先此通孝行でよ、閑雅でよ、容色が好つてよ、針は利く、手は書く、書は讀む、茶をやる、花を活ける、三味線がいけて、按摩が巧者で、香物漬けるのが上手で、ちよいと料理の眞似もする、どうだい、申分の無い女ぢやあつたもんぢやないか、え丶、お染どうだい、我は其深切に惚れたね、其情愛の渥い處に惚れましたね、男と生れた效にも古い臺辭だが、あ丶いふ女子を女房に持てさ、あ丶難有い、持ちたい〳〵。
（と變な聲をする。）
そめ　そりやあ一體誰の事？
德之助　裁縫の師匠の家の八重樣よ。
そめ　まあさう。
德之助　好容だらう。
そめ　お目出たう。
德之助　まだ早え、所が聞いてくれ、二人の間に、約束はちやあんと、もう出來てるのだから嬉しいぢやないか。
そめ　お目出たう。
德之助　え丶お染、その八重樣の曰くさ、あなたの樣な方と夫婦になるなら本望です、とはいふもののさ、私は其日暮しの貧乏人、あなたは大家の若旦那、とても、此緣は纏まらない、てね、お染、八重樣がね、お染、涙ぐむでね、お染、おれの膝へ顏をこすりつけて、フ丶、其涙をおれの衣服で拭いてくれた、稍ありてやう〳〵面をあげさ、さうは念つてゐるもの丶、もしも添はれなかつたら、と、ぢつと思入が多分あつて、私は生きてはゐません、とかういふぢやないか、それは私だつて其通り……。
そめ　もう澤山、頭痛がして來た。
德之助　でもござりませうが、もう少々。
そめ　否々、私はもう參りますよ。
德之助　待ちなよ、それぢや簡單に後を話すから、これから先が肝心の用なんだね、今いふ通り、二人の間は話が着いてゐるし、母親だつて、二つ返事は知れてゐる、先方は萬々善いのだけれど悪いのは此方の親父だ、あ丶い

ふ強慾の代物だから、私の嫁には、跛者でも隻眼でも癩病の血統でも、轆轤首でも、そんな事に文句はいひつこ無しの、唯それ〇次第で、當人は少々足りないかはりに持參が二萬圓なんていふのを心懸けてゐるのだから、八重樣は駄目な話だ、なるほど私は大家の若旦那には相違ない、けれど、父親が我張て弗函の番をしてゐる間は、月々少額の小遣の外は、五錢の白銅一つだつて自由にはならない身の上だから、今こゝで親父に、ならぬと威張られて見ると、金錢がなければ先方だつてもくれはせず、さうかといつて、これほど思つて居る女を、他人に奪られるのは殘念だ、また八重樣だつて、私と添はれない事なら、生きてゐる效がないから死でしまふといふ、まあこれほどの仲なんだ、どうだいお前の料簡で、父樣が承知しようか。

そめ　さうですね、私も其事で是樣を賴まうとおもつてるのですけれど。

德之助　お染、度胸をすゑて駈落と洒落ようか。

そめ　駈落ですか。

德之助　お前も思ふ男があるといふなら、一緒の駈落、二組の道行、こいつは新しくつて、きつと好ぜ、第一お互ひに道中が心丈夫だ、それから一つ長屋の隣同士か何かで、大仲好で暮さうぢやないか。

そめ　さうねえ。

德之助　それにつけても、先立つものは金子だが、こいつ又一苦勞だ

そめ　母樣が生きてゐたらと、思はない日はありませんよ。

德之助　父親の聲がする、來た〱、それぢやお染晩にはつくり、えへん〱。

無理暇　主人　五郎右衛門
　　　　店のもの　佐助

五郎衛　出て行け〱、おのれのやうな奴は一刻も家に置く事はならねえ。

佐助　出て行けなら出ても參りますが、何咎あつて出されるのでございます。

五郎衛　口巧者なことをいふな、氣に食はねえから出すのだ。

佐助　それぢや私に咎は無いのでございますね、咎が無けりや出される因縁はございません、長い年月には、お互ひに氣に食はないぐらゐな事の、ちつとやそつとは有内でございます、どうぞまあ、此度の處は御勘辨なすつて、

五郎衛　ならねえ。
佐助　それは旦那因業といふものでございます。
五郎衛　因業だ？　因業いふのと、不味もの食ふのは、先祖からの家風だ。
佐助　御家風とあれば仕方はございません、出て參りますが、若旦那に御用を頼まれてをりますから一寸お目に懸かつてからお暇を戴きます。
五郎衛　德之助に用があるなら戸外で待つがいゝ、家に置くことはならねえ、一體おのれは蟲の好かねえ奴だ、否な眼色をして我の顔を見たり、其處等を見廻したり、物でも落ちてゐたら引攫つて行かうと思やがつて。
佐助　へ、落としておく風かい。
五郎衛　何だと。
佐助　あなたが人に何を取らせるものでございます。大根葉さへ土藏の中へ干して、鍵は腰へぶらさげて、夜晝不寢番ぢやございませんか。
五郎衛　おのれ其まで知てゐやがる、だから眼色に否な處があるといふのだ、人相でいふと、おのれの眼は盜眼といふのだ。
佐助　難有てえ、旦那の頭は南瓜か。

五郎衛　盜眼といふのは……な。
佐助　葛かけに限るかツ、相手は芝海老で。
五郎衛　血逆りて筋あり、神定まらず、盜を好み、不實の商賣又は博奕の類に心を迷はせ、果は非業の死を遂げるとしてある。
佐助　さうなつた日にや泣くものがありやす。
五郎衛　手を見せろ見せろ長くはねえか。
佐助　爪を見せろ、長くはねえかといつてもらひてえ。
五郎衛　何だと、おのれの樣な奴は、おれが庭へ金を埋けておくまで知つて吹聽する奴だ、油斷のならねえ。
佐助　へえ、旦那は庭へお金を藏してお置きなさるのでございますか、不用心な事でございますね。
五郎衛　何も金なんぞを藏した覺えはないけれど、そんな事でもあるやうに、しやべり散らすのは、おのれのやうな奴だといつたばかりなんだ、白癡めが。
佐助　へえ左樣でございますか。
五郎衛　えゝ、もう文句をいふにや及ばねえ、さつさと出て行け。
佐助　出るなとおつしやつても出て參ります。
五郎衛　これ待て。

佐助　待てとおつしやつても出て參ります。
五郎衛　用があるから待てといふのに。
佐助　用があるなら戸外へお出なさいかッ。
五郎衛　この業突張め、待たねえか。
佐助　何をなさるんです。
五郎衛　用があるから待て、おのれは何か持て出やしねえか。
佐助　何を持て出ました。
五郎衛　手を見せろ。
佐助　へえ御覽なさい。
五郎衛　汚ねえ手だ。
佐助　上を見做ふ下で、先月の初湯に入つたばかりだ。
五郎衛　懷中を見せろ。
佐助　御念の入つた事だ、それ御覽じろ、えゝ擽つてえ、其は臍だ〳〵。
五郎衛　大きな臍だ、臍も大きいが、馬鹿に張た硬え腹だ、どうも此飯が入るとおもつたら、皆おのれの仕業だな、腹八分目といつて、少し容加減が體の爲だといふのに、命知らずの馬鹿めが、喰やあがつたことわ、これ、まるで張立の太鼓のやうだ。

（と下腹をぐい〳〵指頭で壓せば、佐助は好心地さうに、げえいと大きな噯氣を出して。）
佐助　挽切麥だから直に減ります。
五郎衛　體の爲をおもへばこそ、消化のいゝものを喰はせてやるのだ、主人の情を仇におもふ、おのれは位程罰あたりだ。
佐助　腹はあたつてもいゝから、饂飩とビフテキを煩ふほど食つて見たい。
五郎衛　其喰つて見たいが高じて人の物が欲しくなるのだ。袂を見せろ。
佐助　あい袂。
五郎衛　それ在つたぞ、いはねえ事ぢやねえ、えゝ、こりや南京豆の殼だ。
佐助　殼なら一つくれだらう。
五郎衛　何だと。
佐助　吝嗇爺め、好加減に殪るがいゝ。
五郎衛　何だ、何といつた。
佐助　へえ、吝嗇爺め好加減に殪るがいゝと。
五郎衛　いつたか、そりや誰の事だ。
佐助　吝嗇爺の事だ。

五郎衛　吝嗇爺とは誰の事だ。
佐助　吝嗇爺の事でございます。
五郎衛　分らねえ奴だ。その吝嗇爺とは誰を指したのだと聞くのだ。
佐助　別段誰を指したといふ事もございません。唯から漠然と。
五郎衛　嘘をつけ、我の事だ。
佐助　おや、あなたは吝嗇爺でいらつしやいましたか、それはどうも、つい〳〵お見外れ申しまして。
五郎衛　黙れ、此奴が彼いへばかういふ、仕様のねえ悪たれ野郎だ。用はねえからさつさと、出て失やがれ。
佐助　何だ。用は無えから出て失せろだ。（と張臂で詰寄る、五郎右衛門氣味悪く退歩する處な。）
佐助　この老耄め。（と横面を撲はせると、五郎右衛門も奮然となりて佐助に組附き、揉合ふ中に黄楊木の義歯を落す、慌てゝ拾はむとするを、佐助うんと踏砕いて逃出す。）

緣談（上）

五郎右衛門　徳之助　おそめ

五郎衛　やれ〳〵、あの佐助めをやう〳〵の思ひで逐拂つたが、どうも好かねえ野郎だつた、まことに此金持といふ奴は、片時も安心のならぬ、氣骨の折れる役だぞ、之を思ふと、世中に金の無い奴は氣楽なものであらうて、いや其處で昨日請取つた三千圓は、裏庭の桐木の根に埋けておいたが、どうも氣になつてならぬ。（と獨語をいひ〳〵来ると、土藏前に徳之助とお染がこそ〳〵話をしてゐる。）
五郎衛　や仕舞うた、誰も居ぬと思つたら、二人め、こりや聞いたかも知れぬわい。こら、其處で何をしてゐるのだ。
徳之助　おや父様。
五郎衛　お前達は疾から其處に居たのか。
そめ　いゝや、唯今。
五郎衛　何か我のいつて居た言を聞いたか。
そめ　いゝえ。
徳之助　何も。

五郎衛　いや聞いたに違ひない。
徳之助　いゝえ決して。
そめ　何も聞きはいたしません。
五郎衛　否聞いた〳〵、聞いたなら聞いたでいゝが、我の今獨言をいつてゐたのは、あれは餘所の人の事だ。ある人が三千圓ほど金を拵へて、賭場に篭つてゐるさうだが、羨ましい身分だといつてゐたのだ、我の事だとは思ふまいぞ。
徳之助　はい。
五郎衛　お染もさうだぞ。
そめ　はい。
五郎衛　一體お前達は、我が千圓も持つてゐると想ふか。
徳之助　一向存じません。
五郎衛　千圓も持つてゐたらさぞ好からうの。
徳之助　同じ持つなら最少し欲しうございますな。
五郎衛　慾張つた事をいふな、金といふ奴は怖いもので、餘り持つてゐると、金祟といつての、身にきつと祟が來るものだ、さう澤山欲しいとは思はぬがいゝ。
徳之助　此上に不足はあるまいと、世間では我家の事をさう申してをります。
五郎衛　馬鹿をいへ、不足は無いなどとは滅相な事だ、誰がそんな事をいつた、皆迹形もない嘘だ、子とはいふものゝお前達は、おれの讐敵も同然なものだ。
徳之助　そりや何故でございます。
五郎衛　お前達が無暗と錢を遣ひ散らすものだから、何でも五郎右衛門の家には金がうんと在るに違ひないといふわ、それをまた惡漢が聞きつけて我の體は黄金でゝも出來てゐる事と想つて、忍び込むで殺しに來ないともいへない、して見りやお前達はおれの讐敵ぢやないか。
徳之助　でも私は人目に附くほど費ひました覺えはございません。
五郎衛　白痴め、手前の衣物を見ろ、一圓か二圓で出來たものぢやあるまい、衣物といふものは、寒暑を凌げば、それで事は足りたものだ、物の本を見ると、上代には木葉を綴つて身を蔽ふとしてある、之が貴人がかうしたものだ、それから末々は赤裸もあれば、少し身分のあるものが草を結んで褌にした、葉は何を笑ふのだ、眞の事だ、其を考へると、我々がかうして織つた衣服を身に着けるといふのは分に過ぎた、勿體も無い事だ、上代なれば我々は赤裸の仲間だ、年に三枚も四枚も拵へてどうし

ようといふ氣だ、少しは實利といふことを考へて見ろ、染もさうだぞ、何一つ働きも無い癖に、人間尋常の贅澤ばかりしたがつて、上代は皆木葉の衣だ。

德之助　もう分りました。

五郎衛　分つたら以來は氣を付けろ、それから外にちつと二人に談したい事がある。

（此時同胞目語をする。）

五郎衛　何だ、目語なんぞをして、どうする料簡だ。

德之助　ちつとお願ひ申したい事がございまして、お互に先へ話せと、その合圖をいたしたのでございます。

五郎衛　うむ、話したい事といふのは何だ。

德之助　緣談で。

五郎衛　いや不思議だ、我の方も緣談だが。

そめ　えゝ！

五郎衛　えゝとは何だ、えゝといふのは驚いた時か、呆れた時か、より外には出ない言葉だ、何故えゝだ？

（と苦い顏をしてお染をじろり。）

五郎衛　まづ德之助から話をするが、お前はあの末松のお八重といふ娘を知つてゐるか。

德之助　よく存じてをります。

五郎衛　さうかお前はあの娘をどう思ふ。

德之助　可愛らしい、子でございますな。

五郎衛　氣質はどうだ。

德之助　內氣な、おとなしい。

五郎衛　うむ、あゝいふ子は惡ないなう。

德之助　結構ですな。

五郎衛　あゝいふ娘を女房に持つたら仕合だな。

德之助　それは、もう。

五郎衛　第一約しくつて、賢くて。

德之助　大人しくつて、行渉つてゝ。

五郎衛　亭主になるものは大仕合せだ。

德之助　それは、もう。

五郎衛　けれどもな、此處に一つ難といふのは、彼處の家には金といふものが無いからの、女房よりは其方が、寶は望みくらゐのものだけれど。

德之助　金々とおつしやるけれど、當人が氣質がよくつて、顏色が申分ないといふのですから、其でまづ辛抱をするのでございますね。

五郎衛　そんなやうなものゝ、又此女房をもらふといふ奴は、誠に持參金が樂みでの。

徳之助　そんな事をおつしやらずと、彼にお極めなさいまし。

五郎衛　お前に異存がなければ、彼に極めようかの。

徳之助　難有い。

（と小さな聲でいふと、後からお染が跡を探る。）

五郎衛　もらはうかの、徳之助。

徳之助　至極結構でございます。

五郎衛　ちつと年齢が不釣合たからの。

徳之助　どういたしまして、丁度似合はしい水の出花同士で。

五郎衛　さういはれると我は羞しい。

（と五郎右衛門額を横にして頭を撫でる、徳之助は合點のゆかぬ顔をして。）

徳之助　でも、あなた、先方が十八で此方が二十四。

五郎衛　當事もない世辭をいふな、我は今年もう六十三になるのだ。

徳之助　それはあなた、舅は六十が七十、百でも百六でも、構つた事はございません。

そめ　それぢや、あのお八重をもらはうとおつしやるのは。

五郎衛　誰だとおもふ。

徳之助　あの私では無いのでございますか。

五郎衛　我だよ、我の事だよ。

徳之助　ひえゝ。

そめ　あの父親が？

五郎衛　おいよ

徳之助　あゝお染。

そめ　兄様。

徳之助　情ない事になつたなあ。

五郎衛　何だ、情無いとは？　不吉な事をいやあがる。

緣談（中）

五郎右衛門　おそめ　和七

五郎衛　徳之助には、心當りの寡婦があるから、其をもらつてやることに極めたが、お前には瀧造様が似合はしいと思ふが、どうだ。

そめ　あの瀧造様？

五郎衛　さうよ、金満家だぜ、子供は無し、年齢だつてまだ五十にはならず、ま彼位な器量人も寡ないもんだ、信州から出て来る時には、財布の底に二百しきや無かつたのが、土方から取附いて、今ぢや五萬の聲が懸る身代

だ、仕上げたものさ。
そめ　父様、私はお嫁なんぞにゆくのは否でございます。
五郎衛　お染や、私はお嫁にやるのが大好でございます。
そめ　どうぞ父様、あの人の所へ嫁くのばかりは堪忍して下さい。
五郎衛　どうぞお染や、あの人の所へ嫁くのは今晩にして下さい。
そめ　今晩？
五郎衛　今晩。
そめ　私は否でございます。
五郎衛　それは否でございます。
そめ　否。
五郎衛　否。
そめ　そんな無理壓附な事をなさらずとも、宜しいぢやございませんか。
五郎衛　どんな無理壓附な事をしても、宜しいぢやございませんか。
そめ　強つて嫁けとおつしやるなら、私は、死んでしまひます。
五郎衛　死ぬにや及ばない、嫁けばそれで事が濟むのだ、一體子たるものが親人に對して、そんな我儘をいへたものか考へて見ろ。
そめ　親たるものが子に對して、そんな無理な事をいへたものか考へてごらんなさい。
五郎衛　馬鹿が、こんないゝ口を否といふ奴があるものか、誰に聞かせたつて、皆これは結構な縁だといふわ。
そめ　そんな事をいふものは、皆沒分曉漢でございます。
五郎衛　おゝ和七が來る、彼に聽かせて、何方が是か、裁判さして見よう。
そめ　それが宜しうございます。
五郎衛　もし和七が是といつたら、承知するか。
そめ　和七さへ是と申したら、きつと承知をいたします、和七のいふことなら私は何でも聞きます。
五郎衛　面白い、和七や、今我と染と少し言合つてゐるのだが、お前はまあ何方が正と念ふ。
和七　それはもう旦那様が正しいのに極つてをります。
五郎衛　お前は此處で何を言合つてゐたか、知つてゐるか。
和七　それは一向存じませんが、旦那様の正しいには極つてをります。
五郎衛　む、實はな、今晩染をあの瀧造様のところへ嫁に

やらうといふのに、否だといつて我意を捏ねるのだ、なるほど染のいふのが道理か、但しは我が道理か、どうだ何と思ふ。

和七　どうも……其は……まことに……成程。

五郎衞　我が道理か。

和七　さやうでございますな。

五郎衞　染の方が理があるか。

和七　なるほど。

五郎衞　成程では分らぬ、何方か是とか、非とか、確とした所をいへ、確とした所を。

そめ　和七、お前いゝかい、乾度だよ。

和七　萬々飲込むでをります。

五郎衞　どうだ、和七。

和七　へい、其は何でございますな、あなたのおつしやいます所も御道理なり、またお孃樣のおつしやる所も御無理ではないやうに考へられます。

五郎衞　何故兩方が道理だ、瀧造樣なら此上もない結構な婿ぢやないか、考へて見やつしやれ、第一、紳士だ、金持だ、器量人だ、子供は無し、年齢は更けてはゐず、何と結構ぢやあるまいか。

和七　なるほど一々御尤で、どういたして、そんな、結構な口が又とあるものではございません、これと申すも旦那樣の御交際がよろしくつていらつしやるから、かういふ御緣談もあるといふものでございます。

五郎衞　お前は理窟が分つてゐるよ、若いのに頼もしい。

和七　へゝゝゝ、どうも恐入ります、えゝお言葉ではございますが、今お話で今お返事といふのは餘り早急で、それではお孃樣の御分別をあそばす間が無いといふやうな譯で、何か御無理のやうに聞えまして可笑くございませんから、どうぞ少しの間御猶豫を。

五郎衞　否々、それはなるまい、少しの間でも猶豫をして、破談にでもなつたら大事だ、實は瀧造樣と支度金千圓といふ約束をしたのだから、御意の變らぬ内に、早く返事をしなければならない。

和七　あの支度金を千圓おとりなさるので。

五郎衞　左樣さ、こんな結構な口は又とはあるまいがな。

和七　へえ、何御不足も無い御身上でいらつしやりながら、支度金とは。

五郎衞　どうしたと。

和七　結構な事でございます、今晩まで御猶豫をなさいま

すなら、お孃樣の御得心あそばす方もございますけれど、唯今とおつしやつては。

五郎衛　何、方がある。

和七　御座いますと申しまするのは、お孃樣の思召には、緣人といふのは人間一生涯の大事で。一度添つてからは、否になつたからと申して、つい一寸別れるといふやうな譯には參らぬものでございますから、念には念を入れて、それはもう此上は無い結構な御緣談ではございますけれど、末の末まで十分に御考へあそばして……。

五郎衛　支度金の千圓は彈むだよ。

和七　御身の御運定めといふ、曠の仕事でございますから、隨分よく〳〵御思案を遊ばしませんと、後々に紛擾が持あがつて、どうもかうも成らないやうな始末になるものでございます。

五郎衛　千圓とは彈むだよ。

和七　え丶もう是非がございません、唯一粒のお孃樣より、金錢の方が愛しいといふ親御樣だから、私は何も申しますまい。

五郎衛　千圓とは馬鹿に彈むだやつさ。

（和七はお染の顏を見て。）

和七　まあ〳〵御心配なさいますなよ。

そめ　和七、私は死んでしまふ。

（と泣聲になる。）

五郎衛　おや裏で犬が吠える、こりや誰か桐の……、一寸見て來にやなるまい。

（と五郎右衛門はきよと〳〵出て行く。）

緣談（下）　和七　おそめ

そめ　和七お前は實が無いよ、なぜもつと一生懸命になつて、彼處へ嫁かないやうに、さういつておくれでないのだい、お前は實がないよ。

和七　あなたはさうおつしやるけれど、實があるの無いのつて、あの父樣ですもの、和七の手に乘るこつちやございません、此通り額から油汗をたらして、一心不亂で辯じたのですけれど、萬事支度金の千圓で立切て私のいふ事なんぞは少しも耳へ入れないのですもの、どうにも仕樣がありやしません、さうかというて、愁ひ反對へ廻つて、氣に障るやうな事でもいつて御覽なさい、尙さら仕樣がございません、少し方寸に在る事がございますから、あなたまあ、父樣のいふ事を唯と聞いておきなさい

よ、方寸にありますから。
そめ　ほんとに方寸にあるかい。
和七　ありますから大丈夫。
そめ　乾度かい、方寸に無いときかないよ。
和七　在りますよ。
そめ　でもお前今晩嫁けといふのだよ、いゝかい、どんな方寸だか、安心するやうに聞かしておくれな。
和七　今晩いざといふ眞際に、あなた卒倒ておしまひなさい。
そめ　卒倒るつて、あの目を眩すのかい、否だねえ。
和七　否だねつたつて、あなた一大事の場合でさあね、思入れ目をお眩しなさい。
そめ　私は未だ一度も眩した事がないから、もし眩しそくなつて、父様に見附かつたら大變だね。
和七　眩はした事が無いつて誰か平常稽古をしておくものがあるものですか、うんとか何とかいつて引くりかへつて手足を突張て、齒を切しめて、何となく死だ眞似をなさいな。
そめ　どんな風に？
和七　どんな風につて、困りますね。

そめ　一寸して見せておくれな。
和七　一寸たつて、絶息の振附は困りますね。
そめ　爲て見せておくれよ、形だけでいゝから。
和七　困りましたねえ、ぢやまあ一寸眞似をしてお目にかけますから、一度ですつかり覺えて下さい、度々は私もあやまります。
そめ　あゝ一度で覺えるから、よく見てゐるよ。
和七　よう御座いますか、卒に撲と、かう仆れて、あ、痛！

（と顔を顰める。）

そめ　そこで顔を顰めるのだね。
和七　えゝお洒落なさんな、あゝ痛、ほんとに脊骨を打ちました。
そめ　痛めはしないかい。
和七　まあよう御座いますから、先を御覽なさい、かう仆れてから、手足を硬く突張て、うゝんと、此神鳴が身上です、さも苦しさうに齒をくひしばつて、眼を白黒からいふ鹽梅に。
そめ　あゝ否だ、氣味が惡い、和七もういゝよ。
和七　もういゝよぢや御座いません、これが一番難しいの

ですから、もう一度、それからいふ塩梅に。

そめ　その眼色だけは堪忍しておくれな。

和七　あなた死ぬのに外見も色氣もあるものぢやございません。

そめ　さうしてお醫者樣が來たら、直に虚死といふ事が分つて、しまふだらう。

和七　それは此方にちやんと仕掛がしてあるのですから大丈夫なものです、それぢやもう直に、胸が痛いといふやうな、絶息の徵候に取掛らなくつちやいけませんよ。

五郎衞　やれ／＼難有い、例の處へ人でも來たかと思つたら、誰も來たのではなかつた。

和七　旦那樣お嬢樣は今晩いらつしやるやうに御得心をなさいまして、子として親の目鏡で持てといふ夫に好惡をするのは勿體ない事で、まして千圓の持參金とは、此上も無い結構な事だ、と大層お喜びでございます。

五郎衞　うむ、利口ものだ、賢こい奴だ、お前にも色々御苦勞だつたの。

和七　どう仕つりまして、然しまあ御目出たうございます。

（とわざとお染に中てゝいふ。）

そめ　そんな事をおいひなら私は……。

和七　まあ／＼お目出たい／＼。

（とお染を宥める。）

五郎衞　いや目出たいとも／＼。

和七　あなたもこれで御安心でございます。

工　面　　徳之助
　　　　　佐助

徳之助　佐助、お前何處をうろついてるのだ、先刻からどんなに探したか知れやしない。

佐助　うろついてるとは情無い、若旦那、私は酷い目に遭ひました、突然旦的が暇を出すといふぢやありませんか、何も越度の無いものが、暇を出される譯は御座いませんやね、然し、そんな理窟をいつたからつて、分かる奴ぢやありませんから、少々惡體をついて出て參りましたが、どうも窮りました。

徳之助　それは窮つたな、然しお前の身は我がどうともするから、心配をするな、其はさうと、一件はどんな塩梅だ、私の方にも大事が持上がつて、恐入つたよ。

佐助　何でございます。

徳之助　驚くなよ、彼女に惚れてるものが又一人現れたのだ。

佐助　何の事です、美人なら愛人のあるのは知れた話ぢやございませんか、何百人か何千人あつたつて、びくともする事ちやございません、佐助といふものが附いてゐます。

徳之助　何だ宿無しの癖に、佐助といふものが凄まじい、それがよ、もつと尋常ならぬものが惚れてゐるのだ。

佐助　化物ですか。

徳之助　まあ其に似たものだ。

佐助　はてね、誰でせう？

徳之助　驚くまいぜ、親父だ！

佐助　何處の親仁？

徳之助　我家の親父よ。

佐助　我家の、あの、若旦那御冗談をおつしやい。

徳之助　冗談でないから我も驚くのだ。

佐助　眞實ですか。

徳之助　情無いことには眞實だ。

佐助　呆れたもんだ、彼くたばり損ひが、一體どういふ料簡でせう、色狂だな。

徳之助　大方そんな事でゝもあらうよ、我を呼附けて、彼を女房に持たうとおもふが、どうだと來た時には、ぎやふんとして氣が遠くなつたよ。

佐助　其處で、私が先口だ、とあなた一本參らしておやんなすつたか。

徳之助　いゝえ。

佐助　いけませんね、何故です。

徳之助　其處でそんな事をいつた日には、なほ此方の大事の障礙になると思つたから、何も知らない顔で、それは結構な事でご出し拔いて、一策回らさうといふ肚だが、あの樣子はどんなだつた。

佐助　金兵衞といふものが中へ入つて周旋するのですが、話しました所が、承知をしたと。

徳之助　ぢやあ、三千圓はいよ／＼借りられるね。

佐助　其はもう慥に借りられます、ですがね、借主は誰たか、其を聞かなければ、先方も安心をしませんで。

徳之助　これは左樣だらう、その貸主は何といふ男だ。

佐助　其は未だ話しませんでしたが、出來る事は請合だと申します、所で其貸方に、あなたがお會ひなすつて、此方の身分を聽いた上で、金を渡さうといふのですが、あなたが一言父樣の名をおつしやれば、話はすぐに纏ります。

德之助　それは難有い、いろ／＼御苦勞だつた。

佐助　それから、金兵衛が、かういふ振合だからと申して、利の所を話しました。

德之助　な、

佐助　利は一割五分でございますが。

德之助　な。

佐助　實は其貸方も今手許に三千圓は無いので、ちと高うございますが、二割の利で他から借りるのださうでございますから、其利は此方で持つてもらひたいと申します。

德之助　そんな金貸があるかい。

佐助　餘り類はございませんな。

德之助　そりやまあ、どんな高利を借りた所が、どうせ親父に尻を拭かせるのだから、可いやうなものゝ、餘り醜いな。

佐助　さすがに親子の情でな。

德之助　洒落なさんな。

佐助　醜いやうではございますが、あゝいふ因業ですから、懲罰の爲にいゝかも知れません。

德之助　懲罰ぐらゐで濟めばいゝが、五錢の白銅が一つ見えなくつても、血眼で暴れまはるのだから、これぢや氣でも違つて首を縊るかも知れない。

佐助　さう行きやお誂へ、あの身上は若旦那の所有、一番番頭が佐助樣。

德之助　馬鹿なことをいふな。

佐助　と行きや豪的だが、あの慾深だもの、未練があつて死ねるものか、御心配はいりません、若旦那、思切つてお借りなさいまし。

德之助　さうして、貸方の手許にあるといふ金は若干ばかりだ。

佐助　千五百圓は手許にありますが、あと千五百圓は二割の口でございます。

德之助　それぢや千五百圓が一割五分で、半分は二割此方持の又一割五分か。

佐助　左樣々々其外にもう少々文句がございます、五分の口の千五百圓の中、五百圓は品物で取つてくれといふので。

德之助　何だと。

佐助　其品は此に認めてございます。

（と書付を出して見せる。）

德之助　何々、えゝ、一ポンプ一臺、一專賣特許精米器械

一臺、一二人乘人力車三輛、一上等櫻炭五十俵、一蒔繪重箱一組、一刺身皿十人前、一鮓屋床店道具一式附、何の事だ、馬鹿々々しい、何處まで行つても、こんな瓦落多ばかりぢやないか、駈落するものが、こんな、物をどうしようといふのだ、まるで判じものだ。

（と書付をたゝきつける。）

佐助　〆て百三十七品、これで五百圓は高うございますか。

徳之助　高くたつて、安くつたつて、古道具屋を始るのぢやない、駈落をするのだ、無代もらつたつて、こんな物がどうなるものか、誰が道具を借りようといつた、金子が欲しいのだ、金子を借りようといふのだ、いかに人の弱身につけこむといつても、冥利といふものがあつたものだ、一割五分の利なら過ぎてるのに、半分は三割五分だといやあがる、其上に抵當流れの瓦落多なんぞを推附けやがつて、それで又五分の利を取る氣が凄ましい、不法な事をしやあがる、其貸方は何處の何といふ奴だ、盜人め、畜生め、さあ我が敵手だ、刺違へて死ぬ。

佐助　若旦那、どういふもんでございます、そんな事を此處でおつしやつたつて仕樣はございません。

徳之助　仕樣が無くつても、餘り太い事をしやあがる。

佐助　太い事をするとおつしやつても、まだ金を借りた譯ではないのですから、そんなに御立腹なさることはございません。

徳之助　借りなくつても太い奴だ。

佐助　それは太くつても細くつても、先方の勝手でございます。

徳之助　勝手とは何だ。

佐助　そんなにおつしやつたつて、私の知つた事ではございません。今此處で御不承をなさいませんと外に都合をする所はございませんが宜しうございますか。

徳之助　金も何も入るものか。

佐助　金が無ければ、お八重樣と夫婦にはなれませんよ。

徳之助　お八重も何も。

佐助　入りませんか、若旦那。

徳之助　それは入るよ。

高利

五郎右衛門
金兵衛
徳之助
佐助

金兵衛　旦那樣、一つ口があるのでございますが、これはさる大家の若旦那で、急に入用だといつて大變急いでを

るのでございますから、例の話を持ちかけました所が、どうやら唯といひさうな樣子でございます。

五郎衞　ふうむ、確かい、身分の所はどんなもので、何處の何といふものだ。

金兵衞　何處の誰とまでは未だ名乘りませんが、其番頭から言込むで參つたので、その者の申すには、いづれ主人が直にお目にかゝつてお話を申しまする、名前を申せば、乾度二ッ返事で承諾をなさるに相違ない、と大層えらがつてをりましたが、實際餘程しつかりした身代ださうで、殊に親は疾に亡なつて、今の親父も、半年も經てば、お目出度なるのださうでございます。

五郎衞　確實なものなら貸しても好いの。

＊　＊　＊

佐助　おや、金兵衞が旦と話をしてゐる。

德之助　あれかい、金兵衞といふのは、奸惡い面をしてゐるなあ。

佐助　旦那と比べると、いづれ劣らぬ鬼閻魔、凄いのが揃ひましたね。

金兵衞　おやこれは、どうして此處へ、旦那、あれが借主の番頭樣で。

五郎衞　番頭樣がお出だと。

金兵衞　あなた此方へ、此方が彼件の……。

五郎衞　何だ、うぬは佐助ぢやねえか。

德之助　父樣！　あなたは太い事をなさる。

（此中金兵衞と佐助は逃げる。）

五郎衞　何だ手前か。三千圓なんぞといふ大枚の金を借りようといふのは。

德之助　あなたですか、五百圓は古道具で渡して、三割五分といふ高利を取らうといふのは。

五郎衞　高利だ、その高利を借りて、さ何處から返さうといふのだ、今金兵衞から聞けば、半年も經てば親父が死ぬと、途方もねえ事を待つてゐやあがる。誰が死ぬものか。

德之助　死なゝいなら死なゝいでもようございますが。

五郎衞　此奴が〳〵、そりや誰にいふ言葉だ。

德之助　あなた、父樣、高利貸とは何事です。

五郎衞　これ德之助、高利借とは何事だ。

德之助　實はあなたが、こんな非道な事を成さると知つたから、わざと借主となつて、手證を捉へて意見をしようとおもつたので。

五郎衞　何の生意氣な、我も手前が金を借りたがつてゐると聞いたから、業惡の爲に……。

徳之助　いけません、あなたの高利貸は誰でも知つてをります。

五郎衞　おのれの高利借こそ誰でも知つてる。

お饒舌

店のもの　佐助
口入婆　お勘
五郎右衞門

佐助　いやはや飛でもねえお茶番だつた、高利貸出會つて見れば親父なりか、若旦那もあれには一番面くらつたらうが、流石の親仁が魂消たらう。

おかん　おや佐助樣、久しぶりだね。

佐助　いやお婆樣、いつも達者だね、おめえ何しに此處へ來たのだ。

おかん　何ちつと頼まれた事があつてね、旦那にお目にかかりに來たのさ。

佐助　へえ、どんな事を。

おかん　少し儲かる話さ、お禮がもらへるといふやうな筋でね。

佐助　禮か？　此家の旦からか。

おかん　さうさ。

佐助　へゝゝゝよしねえ、骨折損た、おめえの黒人にも似合はねえ、野暮なものだぜ、こゝの旦が何をしたからつて、禮の眞似もする風かい、赤本の話ぢやねえが、錢を入れりや馬糞の出るばかりだ。

おかん　さうでないて事さ、お前なんぞはまだ若いからいかねえ、どんな握屋でも、其は又相應に、仕向具合でどうともなるものだ、切放れのいゝ人でも、懐合のむかしくないのは、いびり效が無いが、いくらしまり屋でも、此處のゝやうに性目の確なのは樂みといふものだ。

佐助　口のやうな譯に行きやお慰みだが、雷樣が鳴つても放さねえといふのは、ほんに此處の旦の事た、さういふ事ならやつて見るが好いが、後で馬鹿を見なさんな。

おかん　御意見は難有てえが、此方にも少し山があるのだから、何でもかでも一つ遣つて見る氣さ、首尾好くいつたら一杯奢らうよ。

佐助　いや御免だ、そんな祠からは得て火が焚るものだ、もし旨く行つたら、我の方から一杯振舞はう、請合しくじることだ。

おかん　けちを附けなさんな、緣起でもねえ、まだ口開前

だわな。
作助　口開前で樂みなものよ、蓋を開けたら蛙ぢやねえか。
おかん　まだそれほど臍ぐつてはゐねえよ。
作助　どうだか知れたもんぢやねえ、近日借りにいくぜ。
おかん　うめえ口だ、はゝゝゝゝ。
作助　そんなら、あばよ。
おかん　はい左樣なら。
おかん　おや、これは旦那樣、御機嫌よろしう、いつもまあまあお達者な事で、ほんとにお目に懸りますたんびに、お若くおなり遊ばしますよ。
五郎衛　さうでもあるまい。
おかん　いゝえ、あなた、ほんの事でございますよ、さう申しては鶴のやうでございますが、どうお見上げ申しても、四十、左樣さね、二三でゝもいらつしやいますか。
五郎衛　もういかねえ、六十一だよ。
おかん　お六十一、結構ぢやございませんか、殿方は六十を越してからが花だと申します、これからが、あなた盛でございます。
五郎衛　さうでないよ、せめてもう二十年若けりやなう。
おかん　あなた、飛でもない事を、何が二十年若けりやゐでございますよ、旦那樣は確に百歳まで請合といふ、御恰幅でおあんなさいますから、お樂みでございます。
五郎衛　さう見えるかの。
おかん　見えるばかりではございませんよ、爭はれないものぢやございませんか、御相にちやあんと表れてをりますよ。
五郎衛　相に表れてゐる？
おかん　其お額の太い文の間に、ちよい／＼と縱に微かい文のあるのが、長命の相なのでございますよ。
五郎衛　これが何かい、長命の相だと？
おかん　左樣でございますよ、滅多にかういふ御相の方はないものでございますよ、お手を一寸それ、あなた、まあまあどうも、これが百まで御長命の文で、此文が拇指の脇から、それ、如此すうつとかう引いて、此處へ繫つて、かう又すうつとそれ、おや／＼、之は百と二十生きる相でございますよ。
五郎衛　眞個かい、そりや難有い、百二十まで生きりや十分だ、時に彼話はどういふ鹽梅だ。
おかん　御心配は御無用になさいましよ、從來何十年私が口をきゝました事に、纏らなかつた例はあなた、唯の一

度もありはいたしません、人樣が逆つて觸らなかつたお笑談でも、此婆が中へ入りさへいたせば、あなた、不思議に纏まるぢやあございませんか。

五郎衛　なるほどね。

おかん　先方は大承知で、此方の御都合次第で、何時でも宜しいと申すのでございますよ。

五郎衛　而して荷物はどれほどあるえ。

おかん　荷物よりも、あなた、持參金がございますよ。

五郎衛　持參金がある？　耳よりの事だ。

（ト眼色を變へて乘出す。）

おかん　年五百圓の利がね、あなた、入るんださうでございますよ。

五郎衛　其持參金がな、すると、一割の利と見て五千圓、五分と見て一萬圓。なるほどな。

おかん　それがね、あなたどういふ譯で、五百圓だと申しますのに年で其でございますから、月割にいたしますと、四十圓餘でございます、なぜ月四十圓餘だと申しますのに、其娘と申すのが、親の躾が嚴しいものでございますから、誠に育ちがよろしうございましてね、三度の食事はお菜といふもの入らずで、おまけに少食でございますから、これが月に致せば二圓から違ひます、芝居が嫌ひで、これが二三圓は違ひますよ、それから髮は獨で結ひまして、入湯が嫌ひで、これで五十錢は違ひます、まことに倹しい子で、衣類は好まず、頭飾はねだらず、これが月に割つて四五圓は違ひます。御酒は飲かず煙草は呑まず、お菓子は嫌ひ、お茶は嫌ひ、物見遊山は嫌ひこれが、どんな事を致しても、五六圓違ひます。其に御化粧が嫌ひでございますから、鬢附、白粉、白粉下、香水、油、石鹸の類が入りませんから、これで一圓は違ひます。其に縫手巾の縁縫を上手にいたして、月に五圓は稼ぐさうでございます、それから、臺所の用をいたして御飯炊をしますから、これで四圓は違ひますし、お菜の代用をいたしますから、之れが十圓の違ひ、お子供衆が出來ればお守もいたしますから、之が五圓の違ひで、何やかや合切勘定を遊ばしたら、月五十圓は大丈夫でございますよ、でございますから、年にいたして五百圓の利でおほせの通り、元金に致しましたら、一割と見て五千圓。

五郎衛　何だ、現金の話かとおもつたら、馬鹿々々しい、夢で金を拾つたやうなものだ、まあ其は五百圓でいゝとして、外にちつと心配なのは、どうも我とは餘り年齢が

遊び過ぎるからの、若い奴は兎角年寄を嫌つて、末始終納まらぬやうな事はあるまいかと、其がどうも苦勞でなう。

おかん　其處で、まだ申上げる事があるのでございますよ、その娘は至つて若いものが嫌ひで、年寄は行屆いて、深切で、よいと常住申して、大の年寄好なのでございますよ

五郎衛　はてね。

おかん　其にまだ申上げたいのは、どういふものか、若い綺麗な男を見ますと、胸がむか／＼して、頭痛がいたして嘔氣がして來るほど、蟲が好かないのださうで、品の好い年寄の、可成年齢を取つたほど好きで、六十歳以下では、どうもまだ十分に好かないのださうで、此間も縁談があつたのださうでございましたが、其方は五十六とやらで、見合の時眼鏡を掛けてゐなかつたのが、氣に入らないといふので、たうとう破談にしたさうでございますよ。

五郎衛　はてね、年寄が好きとは殊勝な。

おかん　それにあなた、此間も行つて見ますと、あなた、下着でも、襦袢の半襟でも、羽織の裏でも、皆翁の面の模様のあるものばかりで、戸外へ出るのに杖を突いて見たいなんてね、そんな事を申して、母親に叱られてをるのでございますよ。

五郎衛　はてね、變つた、面白い、我なども老人が大好だから、女であつたら、亭主には老人を持つさ、年寄の事だ。

おかん　さうでございますともね、あなた、そりやあもう人間は年寄の事でございますよ、矢張この菓物のやうなものでも、十分實が入らなければ、味といふものは出るものではございませんよ。

五郎衛　そこの理窟だて、若い奴らが盛りだの血氣だのといつても、我の目から見ると、いやはや他愛のないものだ。

おかん　さうでございますともね。

五郎衛　扨それで、格別話す事もなしとして、それから日を取極める一條だが、其は私の方にも都合があるから、いづれお前までいはうから、其節はまた頼むよ、どうも御苦勞だつた、ゆつくり相談をしたいけれど、今日はこれから寄合があるので、出掛けなければならないから、これで御免を蒙るよ、色々どうも御苦勞だつたね、いづ

れ又。
おかん　旦那樣あの何でございますか。
五郎衞　今日は忙しいから、此次に又。
おかん　それでは私が誠に。
五郎衞　此次に〳〵。
（と奥へ立て行く、お勘は茫然置去を食つて。）
おかん　えゝ笑かしやあがらあ、助兵衞爺の癖に。

結納

花嫁お八重
おかん
徳之助
おそめ
五郎右衞門

お八重　お勘さん私はそんな老人は否ですよ。
おかん　あなたは慾をお知なさらないから困りますよ、六十一といふ老爺ですもの、此先何時まで生きるものですか、長くて精々一年か、二年、うまく行きや半年經つか經たない内に、ぽつくり往生をしてさへしまへば、形が附くのぢやございませんか、さうすれば一萬とか二萬とかいふ金を攫つて彼處を出て、どんなにでも若い、好きな婿樣をおもらひなさいましなね、ほんの少しの辛抱ですから、夢を見るのだと思つて、我慢をなさいましよ。
お八重　それだつて、人の死ぬのを待つといふのは、酷な話ぢやありませんか、私はそんな思ひをして、お金持になりたくはありませんから、此縁談は破談にして下さい。
おかん　今更そんな事をおつしやつちや困りますよ、おや、それ、車が來ましたよ、あれ、はいいらつしやいまし、さあ、もういけませんよ、お出でなすつた。
お八重　あれ、私はどうしようね。
五郎衞　お勘樣や、これが何かい、御縁女？　はい、さうかい、はい、はい、私は灰吹屋の五郎右衞門で、此度は不思議な御縁で、はい、どうぞ幾久敷、はあ、どうもお美しい、私には過ぎものだ、お勘さんや、御縁女は先刻から下ばかり向いて、氣分でも惡いのではないかい。
おかん　いゝえ何、お若いお方でございますから、お恥しいので、おほゝゝほゝゝゝ。
五郎衞　徳之助とお染が來たやうだ。
おかん　おやいらつしやいましたよ。
徳之助　父樣大層遲くなりました。
五郎衞　おう悴、此方が御縁女だ、御挨拶を申しな。

徳之助　これは始めまして……。

お八重　始めまして……おや、あなたは！

（と吃驚、徳之助は目で制して。）

徳之助　お目には懸かりましたが、しみ〴〵御挨拶もいたしませんで、私は五郎右衛門悴徳之助と申すもので、此度は不思議な御縁で、何分幾久敷。

（お染も同じやうに挨拶する、縁女はついと座を立つて、お勘を小蔭に招き。）

お八重　お勘さん、大變な事になりましたよ、今來た息子さんは、私は疾から識つてる方なの。

おかん　識つておいでなら、なほいゝぢやあございませんか。

お八重　あら、識つてゐるのですよ、少し事情があつて。

おかん　出來てるのですか。

（と冴い眼をしてお八重の顔を見れば、櫻色になつて下を向く。）

おかん　おやまあ、困りましたねえ。

お八重　私は歸りますよ。

おかん　まあ貴孃、今あなたの姿が消えてしまつちや、私が中へ入つて當惑しまさあね、後生ですからもう一度お座敷へ行つてお坐んなすつて下さいましよ、私がまあどうともしますから。

お八重　私は面目無くつて……歸りますよ。

（と泣顔になるのを、無理に座敷へ推込む。）

徳之助　あなた、父親の指環の金剛石のやうな、大きいのを御覽になつた事がございますか。

五郎衛　これ、べら〳〵と餘計な事をしやべるな。

お八重　いゝえ未だ、大層結構なのでございますこと。

徳之助　父樣一寸其を御覽にお入れなさい、（と無理に取つて）御覽なさいまし。

お八重　まあお見事な。

徳之助　一寸はめて御覽なさいまし、おや丁度宜しうございますね、貴孃がおはめなさると、一層引立つて見えます。

お八重　飛んだ事を。

徳之助　それは甚だ輕少ではございますが、親父からあなたへ御結納の驗までに進上いたします。

五郎衛　これ〳〵何だ。

徳之助　幾久しく御受納下さいますやうに。

五郎衛　飛んでもない。
お八重　どういたしまして。
（と返さうとする。）
德之助　どうぞお納め下さいまし、どうぞ御遠慮なく。
五郎衛　途方も無い。
德之助　あなたがお受け下さいませんといつて、あの通り親父が不機嫌でございますから。
五郎衛　飛んでもない、おのれは。
德之助　どうぞ其はお納め下さいまし。
（と眼で知らせる。）
お八重　それではお預り申しておきます。
五郎衛　いづれどうぞお返し下さいまし、へゝゝゝゝ。
德之助　返すなどといふことは、此席で、忌詞でございます。
五郎衛　默つてゐろ。
久藏　へえ、旦那樣は此方でございますか、久藏でございます。
五郎衛　久藏か、何ぞ用か。
久藏　唯今お客樣がお出になりまして。
五郎衛　間抜め、今我の取込むでるのを知つてゐるぢやねえか、何故斷らねえのだ。
久藏　何だか金談があるとおつしやいますから。
五郎衛　左樣か／＼、そんならさうと、早くいへばいゝに、小言を食ふのが好な奴だ、急用で人が參りましたから、一寸はい御免を蒙つて、直に參ります。
（と緣女に會釋して。）
五郎衛　德之助行つて來る、いや貴樣や、お見送には及はない。
（と門に出てからお染を呼び。）
五郎衛　指環を氣を着けておくんなよ。
德之助　八重樣餘りだね。
（ぽんと煙草の吹殼をはたく。）
おかん　それはね若旦那、全く物の行違ひで。
德之助　お前に何も聞かうとはいはねえ、おい、八重樣、我を踏附にするにも節があつたもんだ、あれほど堅く約束をしておきながら、否になつたなら離れるのもいゝや、新出來の好いた男の所へ嫁くのも、惡いとはいはねえ、人もあらうに、現在親父の所へ來てくれなくつてもいゝぢやねえか、それも切つて望みなら言草はいふめえ、其代り今までの約束は、唯で反故にやさせねえよ、離れ

るなら離れるやうに、綺麗に形をつけてもらはうか、さあ、どうして吳れるんだ。

おその　兄様まあ、そんなに暴々しい事をおつしやんなよ、お八重様どういふ事情なのでございます。

（お八重は手巾で涙を拭きながら。）

お八重　決して變心なんぞをいたした譯では無いのでございます。母が貴孃、私へ相談もしずに、お約束をいたしてしまつたものですから、今更否とも申されず、此家までは參りましたものゝ、いよ〳〵と事が極まれば、私は生きてはをりません覺悟で。

おかん　若旦那お聞きなさいまし、お可哀さうぢやございませんか、眞にまあ、おいとしい、おうおう、死ぬといふ覺悟で、若旦那へ申譯に、おや左樣でございましたかい、でもまあ、此處でかうやつて、お逢ひなすつたのが盡きない御緣と申すものでございますよ。

お八重　さういふ私の心も知らずに、今のやうにおつしやると、私は口惜つて口惜つて。

おかん　おう〳〵、さうで御座いませうとも、さう事が分りさへしたら、若旦那だつて、いつまでお腹を立てゝいらつしやるもんですか、ねえ若旦那、お互に惚過ぎるから喧嘩も起る、又つい其なりに解易く、さあ〳〵仲直りといたしませう。

おその　あなた、どうぞ御機嫌を直して、兄様も機嫌を直して下さいよ。

德之助　何だか知れたもんぢやありやあしねえ。

お八重　まだあんな事を……。

おかん　おや又ですかい、好い加減になさいました、此處には寡婦ばかりでございますよ。

おその　兄様何ですね、貴孃もう御料簡なさいまし。

お八重　どうも貴孃には面目もございません。

おその　いゝえ私も兄から貴孃のお噂を聞きまして、よく存じてをるのでございます、此間愚父が貴孃をといふ話をいたしたので、兄も私も吃驚いたしてしまひまして、毎日氣ばかり揉むでをりましたのでございます。

お八重　難有う存じます、色々御心配を懸けまして、此後とも何卒お力におなりあそばして下さいまし、お勘さん、何とか好い智慧を出して下さいなね。

おかん　好い智慧だつて、私も呆れてしまつて、智慧も工夫も急には出やあしませんわね、若旦那がかう、といふ事を存じてをりましたら、旦那樣へお世話なんぞを申す

のではなかつたのでございましたけれど、ほんに一向存じませんものでしたから、つい／＼こんな事になつてしまひまして、何ともかとも申譯がございません、若旦那、どうぞまあ、何事も年齢に免じて御勘辨下さいまし、お八重様、まことにどうも濟まない事をいたしました、何も悪氣があつて、いたした、わけでは無いのでございますから。

徳之助　いゝやな、過ぎた事は仕方がない、それよりは、此處を一つ振替へて、八重様を此方の物にする工夫はあるまいかな。

おかん　さうでございますね、かうつと、おゝ有りますよ、私の近所のものに、四十ばかりの後家がございますが、士族の零落でね、眞に上品な女でございますから、これを大商人の後家様に仕立てて、旦那様に惚れて、是非一緒になりたい、持参金が二萬圓で、地所が七ケ所、家作が何軒といふやうな事を吹いて、お話をいたしたら、あゝいふ慾の、おや御免下さいましよ、いひ附けてをるものですから、つひ口が辷りまして、あゝいふお方ですから、此方の話は否になつて、其をとおつしやるに違ひございません、其内に此方を急いで、お取極め遊ばして、萬々好い處まで、其後家様の口を約ておきますから、これはどうでございます、可なり面白いぢやございませんか、ねえ貴下。

徳之助　なるほど此奴は妙だ。あの親父なら一杯食ひさうだ。

おそめ　きつと食べますよ。

お八重　それぢや、私の方は貴下の父様がお談じなすつたのですから、貴下どうか旨くおつしやつて破談になすつて下さいましな。

徳之助　おつと、それは心得てゐるよ。

鞘當（上）　五郎右衛門　徳之助

五郎衛　徳之助どうだ、彼女は人柄な、飛んだ様子の好い娘ぢやないか。

徳之助　左様でございますかね。

五郎衛　何だ、左様でございますかねとは、此間は好いといつて大層譽めたぢやないか。

徳之助　此間は好いと思ひましたが、今日よく／＼見ましたら、一向好い事はございませんな、あんなものはおよしなすつた方が宜しいかと思ひます、父様は御存じござ

いますまいが、彼女は疵物でございますよ。
五郎衛　疵物だ？　そりやどうも以ての外な。
德之助　髷にお氣が付きませんか、あの高島田は附髷で、地は赤兀の丸薬罐、そいつを黒油で塗かくしの、それが又馬鹿に巧く粧へてあるから、一寸分らないので、之を見付けたのがお染でございます、さういはれて見ると、なるほど、胡亂な頭髪でした。
五郎衛　疵はそれだけか。
德之助　まだ御入用ですか、あとは左様さ、左の脚が一寸五分ばかり短い處に、お氣は付かれますまい。
五郎衛　それだけか。
德之助　未だ許多でもあります、薬罐も跛者も我慢が出來るとして、こゝに一つ、どうでも辛抱の出來かねる大疵がございます。吭の左側に、これ位な梅干を貼てゐますから、はて變つた處で頭痛のする女だ、吭の渇かないお呪か知らんとおもつて、よく／＼見るとこれが大疵だ、引釣！　梅干の吹出した痕です、彼女は私窩子をやるに違ひありません、如何でございます、流石のあなたも私窩子は驚きましたらう、灰吹屋の五郎右衛門が私窩子を内へ入れたとあつては先祖のお位牌へ濟みますまい、私も私窩子の母様はあやまります、渡邊綱は鬼を叔母様に持つたことがあるが、鬼の母様は類無しで、餘り珍し過ぎます。
五郎衛　いや、其處までは氣が付かなかつたが、そんな事實であつて、見れば、灰吹屋の家名に關る事だから。
德之助　御尤。
五郎衛　破談にして。
德之助　御尤。
五郎衛　折角約束したものだから、お前の嫁にもらふのは、どうだ。
德之助　私だつて嬉しい事はございませんが、父様が下さるといふものを、否だなんぞと申しては不孝にあたりますから。
五郎衛　いや然し、お前の嫁にしても暖簾を汚すに異は無いから、之はいつそ破談にしよう、なんぼ親だといつて我子の嫁に鬼を持たせては、義理が濟まない、さつぱりと破談にしよう。
德之助　いえ何、父様結構で、私のやうな不肖なものには、私窩子の嫁が相當してをります。
五郎衛　いや、そんな女を持たせては、親の義理が濟まな

い。

徳之助　今日に限つて親の義理を、そんなに振廻さなくつても、團子買つたら串やらうの平楽の格で、どうぞ私の緒におもらひなすつて下さい。

五郎衛　お前は知るまいけれど、彼女は疵物だ、高島田は附髷で、地は金薬罐だ。

徳之助　存じてをります。

五郎衛　左の脚が一寸五分短い。

徳之助　存じてをります。

五郎衛　それから未だ、梅干が頭痛をする。

徳之助　咽で頭痛をするのでせう。

五郎衛　さうだ／＼、それから梅干が引釣になつた。

徳之助　毛蟲が蝶になつて、親父が高利貸になつた。

五郎衛　黙らつしやい、知るまいとおもつても、皆知つてゐるぞ。

徳之助　何でございます？

五郎衛　何も絲瓜もあるものか、手前は彼女に惚れてゐやがるのだ。

徳之助　さう知れましたら、何もかも打明けて申してしまひます、なるほど私は彼女に惚れてをるので、彼女も亦私に惚れてをるので、所謂相惚の中でございます、假りながら、父様より私の方が先口でございます、嘘だと思召すなら、先の女にお聞きなすつて御覧なさいまし。

五郎衛　黙らしやい、親の前で怪しからぬ言を吐す奴だ、惚れてゐるもゐないも、入つた話ぢやねえ、我が女房に極めたものに、指でもさすと承知しねえぞ。

徳之助　父様が何とおつしやつても、私が先口でございます、當人も亦命を賭けて私の女房にならうといふくらゐな中でございますから、彼はもう私の女房も同様で、其を設ひ親であらうが、鬼であらうが、横取をするといへば唯は置きませんから、さう思つて下さい。

五郎衛　これ何だ、好い加減にしやべれ、親を鬼と同一にする奴があるか。

徳之助　息子の嫁を横取するやうな料簡の親なら、鬼と大した相違はありません。

五郎衛　横取々々と他聞の悪い言をいふな、何も横取をした覺えはないぞ。おのれこそ誰に斷つて、彼を嬶にしたのだ。

徳之助　御末孫様の當人が承知で

五郎衛　當人の議ぢや無いぞよ、其縁りの中は親の計物だ、

其親の承知がなければ、斷り無しに人の物を盗むも同然だ、嫁取とはおのれの事だ。

德之助　親ばかりが承知したつて、どうなるものですか、何より肝心なのは、當人の心で、親が〳〵と、御大層におつしやるけれど、あなたは親をおもらひなさるのですか。

五郎衞　口の減らねえ事を吐かしやあがる、何が何といつてもな、親には勝てねえものに極つてゐる、彼女だつて、親にいはれたからこそ得心して、我の所へ來る氣があるから、昨日も見舞ひに來たのぢやねえか、否なものなら昨日來る事は無い筈だ、それでちやあんと譯が解つてゐる、彼女は親孝行な者だ、親の言葉を背かずに、あゝやつて、なう、彼處へ嫁に行け、唯といつて、孝行なものだ、子たるものは、あゝあるのが當然だのに、おのれの樣に、何かといふと面白半分に親の反對へ廻る奴が、此世の中に又とあるものか。

德之助　あなたの樣な父親も亦多度は無いものですから、似たもの親子で、丁度好いのでございます。

五郎衞　おのれのやうな奴に似られて堪るものか。

德之助　其はお互ひ樣で、此方でも堪りませんからな。

五郎衞　何といつても、彼女は我の女房にするのだ、お前は好い母樣を以て仕合せものだ。

德之助　へゝ何とあなたがおつしやつたつて、私の女房にして御覽に入れます、父樣あなたは、好い嫁をお持ちなすつて、結構なことでございます。

五郎衞　何だ、生意氣な、彼は我の女房だよ。

德之助　御常談ものですね、私のに極つてをります。

五郎衞　我のだよ。

德之助　私のですよ。

五郎衞　我のだといふのに。

德之助　私のですよ、私の、〳〵〳〵〳〵。

五郎衞　我の〳〵〳〵〳〵〳〵。

勘當（下）

下男 權平
五郎右衞門
德之助

權平　旦那樣、若旦那樣、どういふものでございます。お靜になさいまし、隣へ聞えても、見ともなうございますわな。

五郎衞　權平か、まあ聞いてくれ、悴めがの、我の家内にしようといふ女をの、自分の女房だといつての、親に向

つて種々な雜言をいふぢやねえか、そんな理窟があるものか、無いものか、考へて見てくれ。

權平　其はどうも、飛でもない事でございます、若旦那がよろしくございません。

權平　若旦那どういふものでございます、どうも父樣に惡口なんぞをおつしやるのは、貴下がよろしうございません。

德之助　其がよ權平、親父が無理だらうぢやないか。おれの約束した女を横取して、女房に持つといつてぢや〳〵張るのだ、考へて見な、あのちつとはもう娑婆氣を離れて、天氣の好い日はお寺へでも參つて、極樂の捷道でも聽くやうに心掛けるがいゝやな、馬鹿々々しい、おへねえ助兵衛親仁だ。

權平　御尤でございます。

權平　旦那樣、只今若旦那樣の御料簡をお聞き申しました所が、貴下の思召していらつしやるほど、無理な言をおつしやつてはいらつしやいませんで、色々口答をしたのは惡かつた、あれは全く蟲の居所が惡かつた爲に、つい心にもないことをいつて、今更誠に面目ない、これからは父親を大事にして、どんな事でもおほせは背きませんから、どうか今までの事を水に流して、可愛がつて下さい。年寄つた親に苦勞を懸けては濟ないと、な、こんなにおつしやるものでございますから、どうぞまあ御勘辨をなさいまして、今日の所は何分にも。

五郎衛　それはな、あれがさう下手に、おとなしく出れば、何も敵同士といふぢやなし、親子の睦しいのは、何より結構な事だから、我だつて何をいつまで腹に念つてゐるものか、彼女を念切つて、我の家内にする事に就て故障をいはないといふことなら、我も勘辨して、此後とも可愛がつてやらうから、よくさういひ聞かしてくれ。

權平　御尤で。

權平　若旦那樣、只今色々旦那樣の御料簡を伺ひました處が、貴下の思召していらつしやるほど、父樣だつて何も譯も解らない事をおつしやつていらつしやるのではございません、どんな事でも、お前の願ふ通り聞いてやらうから、以來はどうか優くして、親子睦じくしたい、とこんなにおつしやるのでございますから、貴下もそれで御

勘辨なすつて、父様は父様のやうに、大事に遊ばさなくちやいけませんよ。

徳之助　そりやあ。父様が彼女を私の嫁にしてくれるといふことなら、其上の願ひは無いのだから、以来は生れ替つたやうに孝行な人間になつて、夫婦して大事にするわな、權平、親父は本當に我の願ひは何なりとも聞いてやるといつたか。

權平　えゝ、おつしやいましたとも。

權平　旦那様、それぢや御機嫌をお直しなさいまして、若旦那様、此方へお出なすつて、謝罪をなさいまし。

五郎衞　どうも權平いろ／＼世話になつたなう、待ちな。

（と懐中へ手を入れる。權平は若干金に有り付事と手をむず／＼さして待つてゐると古手拭の洟布を出して、ちんとかみ。）

五郎衞　之を一つ洗つてくれ。

徳之助　父様、どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。

五郎衞　何の謝る事はない。おれも悪かつた。

徳之助　どういたしまして、皆私の不心得からでございます。

五郎衞　さういはれて見ると面目が無い、柳の枝に雪折は無し、何と思ふものかな。

徳之助　それぢや御勘辨なすつて下さいますか。

五郎衞　勘辨とも／＼、大勘辨だ。

徳之助　それはどうも早速に難有うございます、やれ／＼、こんな嬉しいことは無い、すんでの事に命をも捨てる所であつた。

五郎衞　どうしたと。

徳之助　あの女と添へないものなら、私は生命をも捨てると申したのでございます。

五郎衞　ふうむ。

徳之助　所をお蔭様で、まあ彼女を女房に持てますので。

五郎衞　ふうむ。

徳之助　私はこんな嬉しい事はございません。

五郎衞　その彼女といふのは誰の事だ。

徳之助　父親常談ばかりおつしやいまし、焦れぬいたお八重の事でございます。

五郎衞　何だ、お八重？　あの我の見合をしたお八重か。

徳之助　そのお八重で。

五郎衛　ふざけた事をいふな誰があのお八重をやるといつた。

徳之助　これはどうも、只今思切つて、私の嫁に下さるとおつしやつたぢやございませんか。

五郎衛　途方も無い、誰がそんな事をいつた。

徳之助　おや、可笑いな、でも今添はしてやると。

五郎衛　手前こそ思切つて、父様に譲るといつたぢやないか。

徳之助　途方も無い、誰がそんな事を。

五郎衛　おや變だわえ。

徳之助　全く變だよ。

五郎衛　變も何も無え、お八重はおとなしく父様に譲つてしまへ。

徳之助　あなたこそ綺麗に息子へお譲りなさいまし、その年齢で女房の沙汰でもございますまい。

五郎衛　そんな指圖を手前に受けるほど耄碌はしねえ。

徳之助　耄碌し過ぎて、息子がえらい迷惑をする。

五郎衛　何だと、おのれの樣な不孝ものは、我家には置かれねえ、子とは思はねえから、さうおもへ。

徳之助　親とも思はないから、合事でよいさの。

（と拳を打つ眞似をして、五郎右衛門の鼻頭へ鐵砲を出す。）

五郎衛　何をしやがる。

徳之助　よう色男の八重樣泣かせ、にう。

（と妙な手摸をして逃げて行く。）

掘　出　し　一　同　總　出

佐助　若旦那。

徳之助　佐助かい、何處にゐるのだ、真闇な晩ぢやないか。

（遠寺の鐘がボーンと鳴る。）

徳之助　えゝ薄氣味が悪い。

佐助　かういふ晩でなけりやあ、仕事は出來ません。

徳之助　泥坊じみた事をいふなよ。

佐助　でも泥坊ぢやあございませんか。

徳之助　なるほど左樣だつた、どうした、在つたか。

佐助　一寸お手をお出しなさい。

（と徳之助の手を執つて、曳ずつてゐる麻風呂敷の中へ突込ませる。）

徳之助　いや、あるわ〳〵。

（とむやみに攪旋はして。）

德之助　畜生！　好い音がしやあがる。
佐助　金貨の音は、又格別ですね。
德之助　天子樣と平民ほど違ふからな。
佐助　私にもちつと弄らして下さい。
德之助　弄るのは好いが、指の股なんぞへ挾みつこなしだよ。
佐助　闇夜だから知れやしませんね。
德之助　怪しい事をいふなよ、おい、三千圓あるかい。
佐助　勘定はして見ませんが、ありませう。
德之助　ありませうで濟して、指の股の手品は否だぜ。
佐助　大丈夫ですよ。
德之助　やつぱり彼桐の根方にあつたかい。
佐助　五尺ばかり下に、水瓶が埋けてありましてね、其中にずつしり。
德之助　底にまだ遺つてはしないか。お前はいつでも茶碗に二粒ぐらゐ飯粒を遺すのが疾だから。
佐助　麥飯と金貨とは、大分氣の持方が違ひます。
德之助　はゝゝゝゝゝゝ御苦勞だつた、褒美はしつかりやるぜ。
佐助　何分お願ひ申します。

（垣の外にて犬が頻りに吠える。）
德之助　馬鹿に吠えやがる、畜生め、泥坊なみに扱やがるな。
（佐助小石を拾つて二つ三つ打着ける。）
佐助　親指が目を覺ますといけませんから、早く參りませう、少し手をおかしなすつて。
德之助　爭はれないものだ、麥飯はかういふ時にいけねえ。
佐助　それは、御同樣です。何と無く下腹に應が無いから恐れる、大變々々、提灯が見えます。
德之助　親父だ〳〵、見巡に來たのだ。
佐助　親父？　大變だ、若旦那、其方は下水です。

五郎衞　奪られた〳〵、泥坊、大泥坊、桐の根が掘つてある！　瓶が虚になつてる、德之助！　和七！　權平！　あゝ、奪られた〳〵。
（とじだんだを踏むで泣出す。物置の陰から德之助ぬつと出て。）
德之助　父樣、何でございます。
五郎衞　奪られてしまつた。
德之助　何を奪られたのでございます。

五郎衛　大事の〳〵三千圓。
德之助　三千圓？　大層澤山にどうも、そんなに持つていらしつたのですか。
五郎衛　まあ持つてゐたのだ。
德之助　はてな、此間は千圓も無いとおつしやつた癖に。
五郎衛　二三日前に、ふいと出來たのだ、實は人の預物だ、預物だから大事だと、此桐の根に埋けておいたのを、奪られてしまつちやア、我はもう生きてはゐられない、德之助、我は死んでしまふ。
德之助　その三千圓は命にも換へられないとおつしやいますか。
五郎衛　あゝ命にも換へられない、大事の〳〵金だ、我はもう死んでしまふ。
德之助　もし其金があなたの手へ還りましたらどうなさいます。
五郎衛　えゝ、我の手に還る、還つたら嬉しい。
德之助　嬉しいばかりぢやいけません。お八重を私の嫁にして、お染を店の和七におやんなさいますか。
五郎衛　お八重でもお染でも、金の入らない物なら、何でも遣る。

德之助　一命をも捨てようといふほど、大事の金であつて見れば、これはさうありさうな事でございます、あなたが屹度お八重を私の嫁にして、お染を和七に添はせるとおつしやるなら、私が働きで三千圓の在所を見附けませう。
五郎衛　三千圓の在所を？　賴む、賴む、此通り。
（と大地に兩手をついて、ぺた〳〵お辭儀をする。）
德之助　さういふ事なら、どうかして見附けませうから、一札お認めなさい。
五郎衛　一札でも二札でも。
德之助　それぢや奥へいつて。
五郎衛　はい〳〵、何分願ひ上げまする。

德之助　染も和七もよくお聞き、權平は證人だ。
權平　へえ〳〵。
德之助　今話した通り、父樣が桐木の根に埋けておいて、盜まれた三千圓を私が明日中に探出せば、褒美として、お八重を私の嫁に下さる、それからお染を和七に添はせるといふのだが、後日違變のないやうに、父樣が證文を入れようといふのだ。

權平 へえ成程おもしろうございますな。
五郎衛 權平何がおもしろい。
權平 御免下さいまし。
そめ 兄樣、あんたそんな事を請合つて、いゝですか。
和七 若旦那、ようございますか。
德之助 心得てるよ、方寸だよ、それから、まだ一つ父樣お願ひがございます、先日暇をお出しになつた佐助な、あれが改心したと申しますから、どうか勘辨をして、おやんなさいまして。
五郎衛 三千圓さへ出れば、何でも好いてことさ。
德之助 それぢや、その樣にお認め下さい。

證

一此方大事の三千圓、裏庭の桐の根方四尺下に埋置候事實正也、然る所、今晚盜難にあひ、一方ならず力を落し、既に命をも捨むと存候處貴殿明日中に右金子別條無く、此方の手に戻可申約束致候に於ては萬一約束通りの首尾に相成候はゞ、右禮として、八重事は其方の嫁につかはし、娘染事は和七に添はせ、且又佐助の歸參許しつかはすべく、

權平 其處へ一寸、權平の給金倍に致しとらすべく、とお書入れ下さるやうに願ひます。
五郎衛 いゝとも〳〵、且又權平の給金倍に致しつかはすべく、後日の爲一札如件
德之助 宜しうございます。(と證文を懷に入れて、外面の方を向いて、大聲に。)
德之助 佐助〳〵。
佐助 へい、皆樣お目出たう存じます。(と彼風呂敷包を解いて、金貨を山のやうに積上げる。)
五郎衛 やあ、あつた〳〵、無事でゐたか。(と飛蒐つて、金貨を掻込む。)
德之助 目出たい。
そめ 目出たい。
和七 目出たい。
佐助 目出たい。
權平 目出たい。(と一同囃ぎ出せば、五郎右衛門も釣りこまれ、金貨の上に腹這になつて、白髮頭を振立て〳〵。)
五郎衛 目出たい〳〵。

(廿五年八月)

金色夜叉（五幕七場）

尾崎紅葉原作

第一幕

寮の廣間

向ヶ岡高等學校のある寮の廣間。粗雜な木造の一室で正面に窓がいくつもあつて、その外校庭の冬木立ち見る。室の一隅にストーヴ、眞中に大きな角火鉢、その他床几樣の腰かけ、ボロ椅子、テーブルなど雜然と置きならべあり、腰高き破目板の上の壁間には、あるひは野球部のはり札、庭球部、柔道部、角力部、辯論部等の掲示がいろ〳〵にはり付けられ、文藝部のそれのみがまゝ子のやうに暗い所に貼つてある。一月中旬の午頃のこと。

幕あく。

（と第一部、二部、三部、それ〳〵の學生が、いづれも、一高獨特の洋装で、集まつて居る。（時代にかなはない點はあるが、演出上、現代人にうなづかる、程度のものである事を必要とする）帽子のあるもの、無いもの、冬と云ふに、霜降りの夏服を着るものなど、無邪氣な主とした學生の氣分が、遺憾なく漂つて居る。）寮歌が芝居の伴奏になつてよき時々に聞えて來る。）

（ガヤ〳〵と云ふ人聲、やがて、二人の學生が何事か論じながら、這入つて來る。そのまはりに多くの學生、それ等は甲乙二人の學生の論爭に、それ〳〵贊否の言葉を叫んで居る。）

甲　馬鹿云へ、勝つてる己れが金を拂ふと云ふ法があるか…………。

乙　貴樣の勝は不當な勝だ！　契約違反だ。

（贊否の聲が、かまびすしい。）

（室の中に居た蒲田鐵彌が、いきなり立上つて。）

蒲田　やかましい、靜かにしろ！　一體怎したんだ？

甲　こいつが、約束をそむいたんだ！

乙　貴樣こそ、約束をそむいたんだ！

甲　馬鹿云へ！

乙　何が馬鹿だ！

蒲田　（一しきり又論じる。）静かに、静かに！　原因は何だ、爭ひの元は何だ？

乙　二人で、そばの喰ひつこをしたのだ。

甲　それで負けた者が拂ふと云ふ契約にして、即ち己れが勝つたんだ。

乙　貴樣は己れをペテンにかけたんだよ。

甲　ペテンとは何だ？

蒲田　よし〳〵！　それなら今己れが判決を下してやる。今法廷を開くからしばらく待て…………さあ、皆手傳へ！

（と、テーブルや椅子を動かして、正面に法廷の形をつくり、まんなかに蒲田が判事の格で坐る。）

蒲田　誰れか陪席判事になれ、一部の學生でなければいかんぞ！

丙　よし、己れがなる。

（と、丙と今一人、二人がその兩側に坐る。）

蒲田　書記は居ないか？　誰れか書記になれ。

（誰も書記になりてが無い。所へ、小使が此の室に這入つて來る。）

蒲田　小使、お前こゝに坐れ！

小使　ヘッ？　（と不審な顔をする）

蒲田　何でもいゝ。お前は書記だ！　さあ坐れ！　今重大な公判がはじまるんだ。

（小使笑ひ乍ら坐る。）

蒲田　二人ともそこへ立て！　――それから、二人の爲に辯護の勞を取りたいものは分れて立つてくれ！

（二三の學生、甲乙に分れて立つ。）

蒲田　エヘン！　諸君、こゝは神聖なる法廷である。いつもの討論會とはちがふから、傍聽はつとめて靜肅にしなければならん。…………一體怎したと云ふんだ。

陪席一　蒲田、それぢやあ法廷の形にならないよ。

蒲田　陪席は默つて居てくれ！

陪席二　默つて居られないよ。先づ初めに二人の身分調べから前科の有無…………

蒲田　さうだ〳〵、忘れた〳〵！　よし！　おやあ、やりなほすぞ！　…………お前の身分は…………

甲　第一高等學校學生…………

蒲田　前に何かわるい事をした事はないか。

甲　夜中に塀をのりこして出たのが二度ばかり見つかりま

した。

蒲田　怪しからん………（乙に）お前は。

乙　賄の奴をぶんなぐつた事があります。

蒲田　そりあ己れもやつた事がある……微罪は、あへて咎めん！

（傍聴笑ふ。）

蒲田　静かにしないか……………それで、事件は一體怎云ふ事だ。

甲　はじめ二人で、そばとうどんの優劣について激論を戦はしたのです。彼れはうどんをそばに優るものとなし、僕はそばを主張したのだ。

乙　それから、僕はうどんならば、自分の坐つて居るせい丈喰べると云ふと、彼はそばなら己れも喰べると云つたんです！

蒲田　そこで二人は、かけをしたのか。

甲　さうです！

蒲田　トバクだな。

（「ノー／＼」と傍聴云ふ。）

蒲田　静かに！　それから怎うした。

甲　よし、そんなら行かう、喰へなかつたものが代金を支拂ふと云ふ事にして、藪へ行つたんです。

蒲田　藪はうまいなア……。

乙　私は裁判長を忌避します。

（傍聴さわぐ。）

蒲田　静かにと云ふのに！　騒ぐと退場を命じるぞ！

乙　それで私はうどんを彼はそばを喰つたのです。

蒲田　二人とも喰へまいが？

甲　いゝや喰べました！

蒲田　喰へたか？　よく喰ふなア…………

乙　所が遂に二人共勝負なしと云ふことになると、彼は今まで胡坐をかいて居たのを、端然と坐りなほして、更にせいろを五枚平げたのです。

蒲田　成程！

甲　かるが故に私の勝を主張するのに、何の不思議がありませう！　よろしく御判決を願ひます。

蒲田　分つた！　裁判長は今すぐに即決をして申渡す！　二人ともよく聞け！　かゝる事理明晰なる事件を一々法廷に持ち出すと云ふ事は、徒らにお上に御手數を煩はすと云ふのだ！　今後をかたく慎まんければはならん！　そこで判決だが、勿論此の問題について爭ふ餘地はない

これはそばの勝だ！　支拂ひは當然うどんの方の負擔とする。訴訟費用は別に入らん。

乙の辯護士A　裁判長！　私はその判決に不服です！　いかんとなれば、最初二人がお互にあぐらをかいて契約を結んだとすれば、即ちその時の狀態に出つて初めて契約が成立したと云ふ事で、甲が、更に坐り直したと云ふ事は、法律上いかなる解釋をほどこすべきでせうか……

甲の辯護士B　然らば何故に最初に「あぐら」をかいたせい丈と云ふ文字を使はなかつたのか、單に坐つたせい丈と云ふ意味はあぐらであらうが、端坐であらうが、各自の隨意にあると信じます。事そも／＼カケと云ふ事、即ち勝負と云ふ事が主眼である以上、乙の取つた態度は決して法律にふれる所はありません。

（傍聽よろこぶ。）

蒲田　成程……分つた！　然らば即決する……

傍聽一　又即決か………イカン／＼。此の裁判長は、どうもヨタで不可ん！　さつきから一ッとして法律上の心得があると思はれない。

（傍聽ヒャ／＼と云ふ。）

傍聽一　そこで我輩が乙の辯護に立つ！　問題は坐ると、胡坐にあるやうだが、そも／＼端坐と云ふことは、吾々學生にはかつてあり得ない生活狀態である事を考へなければならない！　試みに此の寮内の學生を見よ！　自修室と云はず、いづれの場所に於ても、かつて一度でも足をかさねて、端坐して居た者を一人でも見た事があるか！　外國人の坐ると云ふ事は、特に床の上にとない以上は、椅子にかける事であると同樣に、吾々學生の坐ると云ふ意味は、即ち堂々たる大胡坐である。甲の辯護人が特に胡坐と云はないと云つて、抗議するのは、それは一種の詭辯であつて、學生生活を知らざるものゝ言である。現に此の我輩は一瞬時たりともキチンと坐る事は出來ないのだ。坐らんとすれば即ちたちどころに、あほむけ樣に倒れて仕舞ふ！　これ即ち我々學生の名譽であり、誇りであると信ずる………

（傍聽ヒャ／＼の聲をあげる。）

蒲田　一應は尤もの議論である！　然し、人間として、端然と坐れない樣な行儀のわるい事は、決して名譽と云ふことは出來ない。

（「ノーノー」と云ふ。）

蒲田　わしは武士の子だ！　學生であつても、坐る事が出

來るのだ！

乙の辯護人B　然らば、試みにそこに五分間坐つて戴きたい。

（「ヒヤ〳〵」と叫ぶ。）

小使　そうだ。大きな事を云はずに、坐つて御らんなさい！

（「坐れ〳〵」と叫ぶ。）

（蒲田何糞と云はぬばかりに臺の上に坐つて、すぐにしびれがきれて苦しくなる。）

（一同笑ふ。）

蒲田　分つた！　然らば體驗に由つて此の裁判に判決を下す。兩人共勝負なしだ！　即ち二人とも喰ふ丈のものは充分喰つたのだ、それ以上の分は喰つた者が拂へ！　猶此の問題は一同に多大の迷惑をかけて居る。來月分の書留が來た場合は、二人して關係者一同に數を御馳走する義務があるぞ…………

（一同「ヒヤ〳〵」と笑ふ。）

蒲田　これで此の神聖なる法廷を閉ぢる…………

（一同和氣靄然とする。）

（所へ、「イヤだ〳〵、イヤだと云つてるんだ！」と云ひ乍ら一人の學生が逃げ込んで來る。そのあとから、聽診器を持つた學生が追つて來る。）

甲　おい怎うしたんだ。

丁　なあに、こいつが、己れを診察させろと云ふんだよ。

甲　診察させたつていゝぢやないか。

丁　冗談だらう、こいつは己れをモルモットだと思つてやがるんだ。新しい注射液の試驗をさせろと云ふんだ……だから己らあ三部の奴はキラヒだ！　藪醫者め！……

乙　ハヽヽ、試驗するならあいつがいゝぜ！　あの小使が…………

小使　冗談云つちやいけねー己らあ女房子があるんだよ…………

（ト逃げ出す。所へ、風早庫之助が這入つて來る。）

風早　おい〳〵理科の奴は居ないか……

戊　何だ？　何か用か？

風早　おゝ……一體、ダイヤモンドは何だ？

戊　だしぬけに何だい？

風早　イヤ、ダイヤモンドは何から出來てるんだ？

戊　炭素さ…………

風早　炭素か？　そんなら炭素からダイヤモンドは出來る

んだな。

戊　出來るよ。

風早　ちよつと大きい奴を十個ばかり拵へてくれよ！

蒲田　怎うするんだ。

風早　なあに、此の間のカルタ會に集まつた女共にくれてやるのだよ——己らあ、あの晩位、績にさはつた事は無いよ、初めの中は吾々學生が女連れの唯一の對照になつて、モテ過ぎる程もてた所が、あのダイヤモンドが光つてから、女連れの視線は揃つてあのブルジョアの指に集まつちやつたんだ！——恐ろしい誘惑さ！　現代の女性は、男子の人格を見ないで、只富を見る……………非常に悪い傾向だと思ふから、みんなに大きなダイヤモンドを與へて覺醒さしてやらうと思ふのさ！　彼ブルジョアの富山——富山つて奴だな。

蒲田　さうだ、富山唯繼とか云ふんだ。

風早　さうだ、富山は金錢の力を以てダイヤモンドを買ふが、吾々は科學の力を以てダイヤモンドを作るんだ……おい鳥渡拵へてくれよ！

戊　拵へろつたつて、そう早く出来やしないよ。

風早　何時出來る？

戊　何時ッて理論では出來るのだ……

風早　實驗でも出來るだらう？

戊　出來る。

風早　そんなら、やつてくれよ……おい友達の仲で恩にきせるなよ、イヤに勿體ふりやがつて…………

戊　出來る、……出來た事がある……然し、大きいのなんぞ出來ないよ。

風早　どの位のが出來る？

戊　さうさな、實驗の結果は、痕跡位は出來るんだな。

風早　痕跡？　……おい〱痕跡ぢや指輪にならないぢやないか。

戊　さうさ！

風早　ぢや何故出來ると云つた？　何故ダイヤモンドは炭素だと云つたよ。お前はウソつきだな。（と胸を取る）

戊　己れが云つたんぢやないよ。

風早　誰れが云つたんだ！

戊　世界の科學が云つたんだよ！

風早　さうか、科學なんてくだらないもんだなア………………痕跡か…………ハ、ゝ、蒲田の財布と同じやうなもんだな…………いつだつて金の痕跡もありやしない。

蒲田　馬鹿
（一同笑ふ。）
（所へ、間貫一、洋服に朴齒の下駄をはいてやつて來る。）
蒲田　おゝ間、荒尾の病氣は怎だ
貫一　さあ、どうかなア。
蒲田　今日見舞ひに行つたんぢや無いのか。
貫一　うん、かへりに寄らうと思つてるんだ……
風早　何だか、ぼんやりしてるぢや無いか、怎うした？
甲　皇后が少し御病氣なんだな……。
アルフレッド大帝……國家の事が案じられるのかな。
乙　皇后ッて？
甲　宮さんが少しわるいんだな。
乙　風邪か？
貫一　さあ………
乙　貴樣知らんのか。
貫一　うん、僕の留守に熱海へ轉地に行つちまつてから、何とも云つて來ないんだ。
蒲田　誰れと？　一人ぢやあるまい。
風早　伯母さんとだな？…………さうだ！　さうだらう

蒲田　何だ、イヤに感心するぢや無いか。
風早　感心する譯があるんだ！……間、已れは貴樣に聞き度い事があるんだが、僞らずに答へろよ。
貫一　だしぬけに何だい？
風早　お前、あの宮さんとは將來結婚する意志はあるんだな……
蒲田　風早はくだらん奴だなア、そりや貴樣、二人は子供の時から許婚の仲だと云ふ事は公知の事實ぢやないか。
風早　此の問題は、淺薄な蒲田先生には分らないんだよ。なア間、これは單に已れ一人の考へに過ぎないかも知れないが、宮さんの病氣は恐らく、轉地を要する程の病氣であるか怎か分らんと思つてるんだが……
貫一　病氣だよ、病氣でないものが、熱海へ行く必要は無いぢやないか。
風早　それなら、一應君に斷つて行くべきぢやないか……
蒲田　そりあ君、一家の內情は君が考へるやうなもんぢやないよ。斷ると云へば他人行儀ぢやないか。鴫澤家と間との間はそんな單純な關係ぢやないよ。
風早　まあ默ッてゝくれ！　已れがダイヤモンド製造の必要を感じて居るのも、結局は此のデリケートな問題を解

決しようと思へばこそなんだ！　そこで、己れは間に、お前は宮さんと結婚する意志があるかと訊くんだ！　本當に結婚してくれよ！　いゝか！　君と宮さんとの間柄は、吾々友人の全部が祝福し禮讃し、將來二人の幸福の爲にあらゆる祈りをさゝげて居るんだよ！　イヤな言葉だが萬一……萬々一だよ、二人が別れるやうな事があると、君一個の問題でなく、吾々友人一同の失望ともなり、恥辱ともなるつて事を深く考へてもらひたいんだ………己れは女は嫌ひだ！　然し宮さんだけは大好きだ！　それは君の妻だと思ふからなんだよ！　妻の行動一切の責任は夫にあると思ふ。その點で間、君はしつかり此所で考へなくちやあいかんのだぜ！

貫一　何を考へるんだ？

風早　つまり、その、君の意志をしつかり皆の前に表白してもらひたいんだ。

貫一　怎う表白すればいゝんだ？

風早　だから、お前が、宮さんと結婚すると云ふ事を、皆に誓ふんだよ。

蒲田　風早は馬鹿だなア貴樣は、そんな事が怎なるんだ？

風早　默つてゝくれと云つてるんだ！　間、怎だよ！

貫一　何だか變だなア……宮は僕の妻だよ！

風早　よしツ！　皆聞いたなア、そんなら又云ふが、萬々一、宮さんが他人の妻となるやうな事があつたら君は吾吾の前に何とする？

貫一　風早君！　失敬な事を云ふな！　冗談は冗談としてそれでいゝ。然し、さつきから君の云ふ事は一體何を意味するんだ！　吾々は學生だよ！　假に僕の境遇が、たまたま君達に比べて複雜なもんだとしても、僕の事は僕がする、僕一家は僕の一家だ！　人の家庭の問題についてぐづ〱云ふ前に、君は自分のノートの整理でもしたらいゝぢやないか。僕は失敬する！

蒲田　さう怒るなよ！

貫一　怒るよ！

風早　怒れ〱！

貫一　怒らなくつて………

風早　己れは好意で云つてるんだ！

貫一　何が好意だ！

風早　何だと………

（二人いきまく、一同「よせ〱」と止めて二人をひきわける。風早、ひきわけられながら、何か低聲にし

――きりにその好意の意味を説明して居る。）

甲　さあ、もういゝ、己れは、そばを喰ひ過ぎて腹が、はつた！　寮歌やらう！

（一同しばらく歌を合唱する。貫一は妙に淋しいやうな心持になる。）

甲　間、風早があやまるさうだ！かんべんしてやれよな。

貫一　いゝよ！

甲　笑つてやれよ！　己れはね、どつちのひいきもしないが、風早の好意もよく分つたよ！　風早庫之助はね、つまり先達のカルタ會以來人生觀が動搖したんだ！　そらダイヤモンドの一件があつたらう。富山の指にはめたダイヤモンドが、數千圓のものだつて宣傳が擴がると、あすこの席に集まつた若い女連の興味がみんなそれに集まつた。そして富と云ふものゝ前に羨望の眼を瞠つて居るのを淺猿しく思つた結果、一般の女性に對して不安になつたと云ふんだよ！　それに又、あすこへ集つた婦人の中にもそりあかなりのシヤンも居たが、あのブルジョアの眼は來るから、かへるまで宮さんの上にそゝがれたと云ふ事や、その後も、度々富山が、宮さんの身分や家庭の事を聞きに來たつて云ふのが、癪なんだ相だ！――あのカルタ會は、風早の伯母さんの家だからね――

乙　あゝさうか。ちつとも知らなかつた、此間は御馳走さま。

丁　よろしく云つてくれな。

貫一　さうか、僕も知らなかつた！　そりあ失敬したたア……此間はサンキュー。

風早　ハ、、、きげんを直してくれたか！　失敬したよ！　そんな譯でね、昨夜伯母に會ふと、あのブルが熱海に別莊を持つて居て、そこへ避寒に行つてるつて話を聞いたもんだから、今君のペトロスが、同じ熱海へ行つたと云ふので、變に考へたんだよ………己れの頭がにごつてるんだね、………吾々は、そんな暗い事を考へちやいけないんだ！　間、かんべんしてくれよな。

（貫一、ぢつと考へこむ。）

（しばらく沈默。）

（貫一、つか／＼と出ようとする。）

蒲田　間、何處へ行くんだ？

貫一　荒尾の處へ行つて來よう…………

蒲田　荒尾に相談する必要はない、君は今すぐに熱海へ行け！

貫一　え？

蒲田　すぐ行つて來い！　宮さんはナ、吾々就の高等學校に席を置いて、およそ間の友人である學生の全部に取つてのスターなんだ！　吾々は宮さんの眞面目なファンなんだ！　宮さんは、間の妻である以外、他の男性に指一本さゝせる事は、吾々一同が許さない所だ！　皆さう思はないか。

（一同よろこんで賛成する。）

蒲田　間、君は、クラスの中でも、最も明晰な頭腦の持主だから、吾々の氣持がこんなに育つて來る前に、恐らく君は何ものかの暗示をとつくの昔にうけて居はしまいかと思ふ――もし左樣なら、うちあけてくれないか！　いやそんな事の前に、ともかく宮さんが君の妻である事實を吾々の前にはつきり見せてくれ給へ！　萬一の杞憂が實現して、もし宮さんの心が他へ動くやうな事でもあると、君一人の恥ではない、吾々一同の恥辱なのだ！　君達二人の幸福は即ち吾々の幸福だつて事を忘れてくれるなよ！　分つたか！

貫一　いろ／＼とありがたう！　僕は確信を持つて居る！　決して諸君の面へ泥をぬるやうな事はしないつもりだ！　安心してくれ給へ！　………その中には、熱海から歸つて來ると信じて居るし、ともかく一應は荒尾に會うて相談もした上で、明日にでも行くとしよう………

蒲田　明日と云はずに、今日行け！　今すぐ行け！

風早　そんな事云つたつて、間には間の都合もあるだらうぢやないか、それに旅費の問題だつて………

蒲田　だから風早、貴樣は馬鹿だと云ふんだ、此場にのぞんで旅費なんて問題ぢやない！

風早　そんなら貴樣出すのか？

蒲田　馬鹿！　己れは金なんぞ持つてるもんか…………誰れか出せ！　誰れも持つてないか………

乙　さつき迄持つてたけれど、そば屋で使つちまつた…

蒲田　何の爲にそばなんぞ喰やがるんだ！

（所へ、遊佐良橘が這入つて來る。）

風早　あゝ遊佐、君は音無しいから、金を持つてるだらう？

遊佐　いくら？

風早　いくらでもいゝ…………あるつたけ出せ！

遊佐　何だね？

蒲田　何でもいゝよ、男らしく出せよ！

（と、半ば強談に遊佐の蟇口を取つて中をしらべる。）

蒲田　これだけありやい、………遊佐は大金を持つてやがるなア………畜生。

遊佐　本を買ふ金なんだ。

風早　本なんて何時だつて買へるぢやないか…………

遊佐　然し…………

蒲田　ケチ／＼するナ………さあ間、これを持つて行つて來い！

（と無理に間に握らせる。）

遊佐　がま口だけくれ給へ！

蒲田　重大な場合だ、そんな事務的な事はあとまはしだ！

貫一　ありがたう！　それぢやあ行かう！

蒲田　うん、行つてくれ。

貫一　結果は決して心配する事は無いが、ともかく諸君の好意に對して、安心してもらへる樣な電報を打つぞ！

風早　うん、待つてる。

貫一　おや失敬………

（と、行きかける。）

甲　おい／＼間、その下駄で行くのか。

蒲田　そうだ。そんな恰好で行つてふられるといかん。おい、誰れか靴を貸してやれ！　遊佐お前何文だ？

遊佐　十文だ！

蒲田　間は？

貫一　同じだ！

蒲田　ぢやあ、遊佐ぬげ！

甲　ハ、、、まるで追ひはぎだ…………

（遊佐の靴を間にはかしてやる）

（所へ、表から己がマントを着てかけ込んで來る。）

己　あゝ、寒い、雪が降つて來よつた。

蒲田　雪だ？

（と、窓の外に大粒の雪が降つて來る。）

（乙がつか／＼と出て、だまつて己のマントを取つて。）

乙　間、これ着て行け！

（と、マントを着せてやる。）

（間は、だまつて、感謝しつゝ室を出る。己はあつけに取られる。）

（他の寮で、寮歌の合唱がきこえる。）

（一同雪のふる窓から、間の行くのを見送る。）

――幕――

二　幕　目

第一場　熱海ホテルの庭

正面に雪をいたゞいた山を見た廣庭。所々に花をつけた梅の古木數本。庭のまん中に數脚の籐椅子、それに對して卓がある。

波の岸を打つ音が遠く、鶯の聲がしきりにする。

幕あく。

（こゝ、宮とそれに對して宮の母の隆が椅子に腰かけて居る。）

隆　ねー宮さん、決心がついたかね？

宮　決心ッて………？

隆　此處へ來てもう五日にもなるんだからね、何とかきめて歸るとしないぢやあ、お父さまも御不自由だからね。

宮　母さんは怎思ふの？

隆　私は、はじめつから、こんないゝおはなしは無いと思つてるのさ………第一富山さんはお金はくさる程おありだし、それに御姑さんは無し、お前とたつた二人つきりなんだからね………向う樣から云へば、どんな華族樣からでも貰へる御身分なのに、たつてお前がほしいと向うからあんなに云ひ出して來るなんて事は、誰れに云はせたつて、世の中にそんなにあるはなしぢやありませんよ！

宮　さうかしら……？

隆　さうだともさ！　人間はね、運を取り逃がしたら二度と再び來やしないんだから、今度のはなしはお前の一生一度の事だと思はなきや駄目ですよ。

宮　困つたわねー母さん………

隆　何がさ？

宮　母さん一體怎すればいゝと思ふの？

隆　だから、そりあお前の決心一ッだつて云つてるぢやないか。富山さんに行くなら行く、イヤならイヤさ――先方への御返事だつてさう延ばしちやいけないからねー

宮　母さん、私怎でもいゝわ。

隆　怎でもいゝつて事がありますかね。それあお前すてばちになつた時の言葉ぢや無いか、お前の一生の運の定まる事だよ。

宮　もし母さんだつたら怎なさるの？

隆　私なら喜んで嫁くさ。
宮　母さん、もう東京へ歸りませうよ！　私自分一人ぢやなんだか分らなくなりましたから…………
隆　そんな事云つて、東京ぢや御父さんから貫一さんに云つてゝ下さるんだし、もし貫一さんの心も決まつて居るだらうし、そこへ、ひよつこりかへつて行つて、何しに此處へ來たんだか分らないやうぢやあ、兩方へをかしなものが出來てしまふぢや無いか………　…
宮　でも私…………
隆　じれつたい人だね、それぢやお前さんは、富山へ行くのはイヤなのかへ？
宮　…………………
隆　怎なんだよ？
宮　私本當に困るわ。
（此の時、ボーイに案内されて、富山唯繼が這入つて來る。）
富山　今、御部室の方へ伺つたら…………こちらに居らしつたんですね…………
隆　はあ…………
富山　あのお部室は、おさむかありませんか…………寒いつたつて温泉場だから、そこが湯治のありがたみですけれど、日が當りますかあのお部室は…………？　もつといゝ部屋へおうつりになりませんか…………
隆　いゝえ、もう、あれでも勿體ない位で御座います……
富山　（ボーイに）ねー、あの海の見える、バルコニーのついた部屋があるぢやないか？
ボーイ　御座います。
富山　空いてるのか？
ボーイ　はア。
富山　あすこには、たしかあの部屋だけの御風呂がある筈だ。
ボーイ　はア御座います。
富山　それぢやあ、すぐあすこへお移し申してくれ！
隆　いゝえもう、結構でございます。
富山　なアに、保養に來て、氣がねをしちやあ何にもなりませんよ！　金ですむ事なんですから御ゆつくり思ひ切つて遊んで入らしつて下さい…………ぢやいゝな（ボーイに）
ボーイ　はア、あの知事樣の御泊りになるお部屋で御座いますな？

富山　知事？　そんな事は何でもいゝぢやないか…………お前ぢや分らん…… ……。支配人に云へ、トミヤマが云つたと…………

ボーイ　はア………（と退場する）

富山　本當なら、私の別莊へお泊り下さるといゝんですけれど……たゞ物は東京から取りよせて居りまして、富山は、お母さんに御つくしし度いと思ふ事は、何一ッ出來ない事は無いやうに出來るのですが…………イヤ、やがて、さうなれる事と樂しんでは居りますが、…………何しろ、兩親はなし、うるさい親類は一人もなし、まことに氣樂な生活ですが、さて、實業界の一流の中に數へられる身分になりますと、他に何の慾もない…………只自分の目上の方に孝行をつくしたいと思ふだけですな、…………

隆　結構な御心がけで御座いますわ。

（ボーイ紅茶を持つて登場。その後から支配人登場。）

支配人　只今ボーイから伺ひました！　早速お部室をかへる事にいたしました！

富山　さう！　（と深くうなづいて）よろしい！

支配人　はア。

富山　御婦人のお客、殊に、お年よりに對しては、一層御取りあつかひを注意せんと、いかんよ。

支配人　はア…………

富山　よし！

（支配人、ボーイ退場。）

隆　こんなにしていたゞきましては…………東京へ歸つて叱られるかも分りません。

富山　イヤ飛んでもない事、東京でも勿論ですが、此の熱海では一層何一ッ思ふ事の成らない事はありません。どうか御自分のお家に居らつしやると思つて下さい！　何しろ熱海の土地の大半は私の所有になつてますから…………

（此のはなしの間に宮はいつか木立の蔭の方に歩いて行く。）

富山　宮さんの御決心はつきましたか…………。

隆　はあ…………何でございますか、毎日同じ事ばかり申して居りまして…………。

富山　ハ、、お若いからな…………。

隆　御返事し度い事は山々なので御座いませうけれど、御はなし申し上げましたやうな約束が御座いますので、そ

の方の事をいろ〳〵考へて居るんぢや無いかと思ひますけど……っ

富山　そりあ簡單ぢやありませんか、學生さんでせうまだ？……そんな事は私の方で何とも解決のつく問題でたとへば外國へ留學さしてやつて、その上に五萬でも十萬でも、當人の財產を與へてやればいゝぢやありませんか……ねーお母さん、私が宮さんをいたゞくとなれば、宮さん一人をいたゞくのぢやない、それに引きつづく鳴澤家は勿論、あらゆる一切の事をみんな圓滿に處理して行く決心は充分あるんですから………そんな事は一切男の私にお任せ願へないでせうかね。

隆　私には、よく御心持は分りすぎる程なんで御座いますが…………。

（宮が又やつて來る。）

富山　ねー宮さん、今お母さんからも伺ひましたがね。若い御婦人のあなたが、いろ〳〵の事を御考へになる必要はちつともないと思ふんですよ。あなたは、只、あなた丈の幸福を考へて下さればいゝんです。あとの事は一切男の私がおひきうけして、何一ッあなたの胸を痛めるやうな事はしない。イヤしないばかりでなく、聞かせないと云ふやうにしたらいけませんか？　世の中の事はね、當事者間では怎も工合のわるい事も、第三者が這入ると案外スラ〳〵行くもので、先方の身分も立ち、いゝ心持になれるやうにして、あなたもその事については何一ッ考へなくつてすむ——そうなりやあ、いゝんでせう？　又その位の事の出來ないやうぢや男の資格がありませんからねッ！　第一やさしい婦人の胸に重い負擔を背負はせる事は男の恥ですよ！　あなたは只此處に居らつしやる、此のまんまの氣持で東京のことも何もかも一切忘れて頂れませんか、そしてうるさい事は全部私が處理する……………あなたは何にも知らん顏でいゝ…………。

隆　結構なおはなしぢや無いか…………。

宮　さうね——　（と半ばはうなづき、又考へる）

富山　ハヽヽ、梅園の方へ散歩しませんか…………行きませう、梅がきれいですよ。

隆　お前お供したら…………。

富山　さあ、入らッしやい。

（と、立ち上つてうながす。所へ、間貫一が、つかつかと這入つて來る。一同驚く。富山、そつとその場

な外して去る。)

隆　まあ貫一さん、お前さん怎して來たの？

貫一　只、來たくなツたから來ました！

隆　お父さんから何かお話がありましたか？

貫一　いゝえ、何にも…………。

(隆と宮、顏を見合せる。)

隆　さうかい……お前さん、御はんは？

貫一　汽車の辨當を喰ひました！

(しばらく沈默。)

(宮つか／＼と貫一のそばへよつて肩のはなびらを取る。貫一キットなる。)

宮　花がついてたから取つたのよ。

貫一　ありがたう…………。

(貫一は、落花情あれば、流水豈心なからんやと云ふやうな心持で立つ。)

――暗轉――

二幕目

第一場　熱海の海岸

根上り松。大きな岩、岸にあげた船。正面に月光をあびた海がある。沖に遠く初島が黒く見え、その邊に漁火が點々と明滅する。海岸は大きなゴロタ石でしきつめられ、大小いろ／＼の松が生えて居る。

從來の型通りに、はじめ舞臺に人かげなく、しばらくして漁夫二三人行き過ぎる。

遠く船うたがきこえる。

唄　〽七日うらんで三日は泣いて、月の十日は雨がふる

(しばらくして、貫一と宮が連れ立つて出て來る。)

宮　ねー貫一さん、もうそろ／＼かへりませうよ…………

貫一　そんなにかへりたがらないでもいゝぢやないか。

宮　だツて隨分遲いわ。

貫一　宮さん、お前と僕と二人丈で夜遲く歩いて居て誰れか何とか云ふ人があるのかい？

宮　そんな事は無いけど…………。

貫一　なけりあいゝぢやないか！　カルタ會のかへりは、ありや何時だと思つて居るんだい？　夜中の三時だつたぜ…………宮さんもうあの時のやうな氣持はとつくの昔

に忘れちやつたんだらうね。

宮　そんなことは無いわ。

貫一　クラス會のかへりに――さうだ、あれも夜中の二時頃だつたが、僕がお前にボンボンを買つて來た事を覺えて居るかい……宮さんは炬燵の間で、ちやんと起きて待つてゝくれたね。

宮　………

貫一　あの晩、二人で、いろいろと將來の事を話し合つてる中に鷄が鳴いて、驚いて床の中へ這入つた事を忘れたかい！……僕はずッとあの時の氣持を忘れずに居るよ。そして、一生涯あゝした氣持で居なければならない。それを忘れるやうな事があつては駄目だと思つてるんだ！　本當に二人丈の世界、二人丈で無ければ醉へない氣持、それは二人の胸に一生深くきざみつけて置くべき事だと信じて居るんだが……宮さん、お前は僕が今こんな事を云ふのが可笑しいだらうね！

宮　怎して………！

貫一　僕は、小父さんと小母さんと、宮さんの三人に、はかられて居るとも知らないで此の六日間、いつもの通り毎日學校へ通つて居たんだからね……何にも知らないものは本當に可愛想だと、僕はさつき小母さんのはなしを聞いてつくづく左樣思つたんだぜ！　宮さん。君は平氣かい！

宮　何が！

貫一　何が！………君は病氣でも何でもなかつたんぢやないか。

宮　いゝえ、病氣よ！

貫一　何處がわるかつたんだ！　病氣と稱して小母さんが此處へ連れて來て、君を說き、一方留守宅では小父さんから僕に諦めさせると云ふ段取りになつて居たんぢやないか………さすがに小父さんは男だよ！　五日の間僕に何一ツ云はずに、いつもの通り毎朝眼白に餌をやつて居らしつた！　怎しても云ひ出せなかつたんだ！　さつき小母さんから聞けば、僕が宮さんを諦めれば、洋行さしてやると云ふ條件だ………いかに僕が乞食士族の孤兒でも………自分の女房を賣つた金で洋行しようとは思はんよ！――病氣と云つて此處へ來たのは、富山に會ふ爲なんだらう。

宮　そりや、あんまりだわ。

貫一　何があんまりだ！

宮　邪推が過ぎるわ！　私が來たのを知つて、富山さんがあとから訪ねて來たんぢやないの。
貫一　何の爲めに訪ねて來たんだ！
宮　…………
貫一　それ見ろ！　返辭が出來ないぢやないか…………宮さんお前それで惡い事をしたと思つて居ないのか！
宮　私はちつともわるいと思つて居ません。
貫一　いゝと思つてるのか！　僕に内證で男に會ふ………君は姦通したやうなもんだよ。
宮　（思はず貫一の顏を見て泣く）
貫一　何を泣くんだ
宮　あんまりひどい事を…………
貫一　何が酷い！　ひどいと云ふ事を君は知つてるのか、それなら欺かれた僕は一體怎すればいゝんだ。
宮　私、あなたを欺いた覺えはありません。
貫一　欺かないものが夫に内證で他の男と會へるか、二人の夫が持てるかよ！
宮　貫一さん、そんなら何時私がそんな事をして！
貫一　操をやぶれば姦通ぢやないか。
宮　だから何時私が操をやぶつて…………
貫一　馬鹿！　いくら僕が馬鹿でも、自分の妻が操を破るのを傍について見て居られるか…………夫を出しぬいて他所の男と湯治に來て居て、姦通しないと云ふ證據が何處にある。
宮　貫一さん…………あなたに今左樣云はれると、私本當にすまない事をしました！　わるい事をしました！　自分の心では、何でもない事のやうに思ツてした事も、聞いて見ると、本當にいけない事だと氣がつきました！　貫一さん、あなたに云はずに此所へ來た事だけは、すみませんでした。母さんや、お父さんが、みんなまかせろ、お前は只親の云ふなりになつて居ればいゝツて仰有つたもんだから、私はあなたに、こんなイヤな氣持を持たせようとは夢にも思つて居ませんでした！　けど、私は自分の大切な事も知つてます。あなたの事も考へてます！　貫一さん、どうか私を信じて下さい！　私決してあなたの前に出られないやうな事は、何一ツしてやしないんですから…………その事は、私、貫一さん丈には信じて貰へると思つて居ます！　もしあなたも信じられなくなれば私もう生きてる事は出來ませんわ！
貫一　（やゝ心が靜つて來て）宮さん、僕は信じ度いよ！

宮　私も信じられたい！

貫一　信じて居る！　信じて居るから僕は怒るんだ！

宮　それもよく分りますわ！

貫一　分るかい！

宮　分るわ！

貫一　それなら君の決心を聞かしてくれないか！

宮　決心つて！

貫一　僕をすてゝ、富山の處へ嫁く氣なのか怎か……

宮　まだ、そんな決心なんかして居ないわ。

貫一　僕は此の問題は決心も何もない事だと思つて居るんだ！　君の體は已にもう決定して居るんだから、君の心さへ動搖しなければ、もうそれでいゝ事なんだ。決心と云ふ事は二ッの途にふみ迷つたものゝ云ふ事で、迷つて居ない人間の心の動きは要するに一時的の誘惑なんだ。だから誘惑さへきり拂へば君は元の君なんだ……それとも君は、僕を取らうか、富山を取らうかと考へて迷つて居るのかい！

宮　………………

貫一　どつちを取らうと自分は自由だ！　自分の體は自分の考へ一ッだと思つて居るのかい！

宮　そんなむづかしい事は分らないわ。

貫一　分らない事があるものか。今君が假に富山を取れば僕にそむくのだよ。僕を棄てなければ富山へは行かれないんだよ。然し僕を取る事は富山には何等の罪にもならないんだよ。……云はゞ富山は二人の間に偶然飛び込んで來た惡魔なんだからね――そりあ富山には金はある、然し金以外にあいつに何があるんだ。僕は世界中の誰れにも負けない君に對する愛を持つて居るんだ！　鴫澤の家にも數萬の資產がある。四五年後には僕は法學士になる……そして二人に大きな愛がある……僕は君に取つて何一つ不足なものは無いと思ふがね――

宮　私そんな不足なんか云やしないわ。

貫一　不足がなければ、心が動く譯がないぢや無いか。

宮　私、心なんか動いてやしないわ――ねー貫一さん、もうそんなに責めないで頂戴な！　私もうむづかしい事はわからないから、私、何でも貫一さんのいゝやうに成るわ！　私、もうみんなあなたにお任せするわ！　いろんな氣がねばつかしゝて……疑られたり、さげすまれたり……あゝ、私は馬鹿だわ！（泣く）

貫一　宮さん、泣かないでもいゝよ。みんな僕に任せたま

へ！君の心一つで考へ切れない事は、みんな僕が責任を負はう！　僕は鴫澤の家には永年御厄介になつた恩があるから、我まゝも云へないが、君は一人娘なんだから、イヤならイヤと立派に云へる人なんだ！　だから君の考へ一つで僕から小父さんにも小母さんにも云はう。そして又富山の方も僕からキッパリ斷らう。それで君は何にも知らないで居ればいゝぢや無いか。

宮　さうね？………だけど、さう行くかしら。

貫一　何が？

宮　だつて私困るわ？

貫一　困る事は無いぢやないか。

宮　そりあ貫一さんは男だから………

貫一　もういゝぢやないか、お前の心が僕を棄てないと云ふなら、それ丈でもういゝぢやないか…………

宮　えゝ………私あなたを棄てるなんて…………

貫一　もう、そんな話はよさう。

宮　止しませう――

貫一　（ほつと息をついて）あゝ、疲れた。

宮　あんまりむきになつて怒るからよ。

貫一　あゝ、だけど君がわるいよ。

宮　さうよ！私がわるいわよ…………かんべんして下さいね。

貫一　（二人松の根に腰を下ろしてより添ふ。）宮さん、皆も心配して居るんだぜ。

宮　皆つて！

貫一　學校の奴等さ、

宮　さう………！

貫一　あゝ、風早も蒲田も親切な男だよ。はじめね！、風早が、あんまりいろんな事を云ふんで僕けんくわをしちやつたんだよ。あとで聞いてすまないと思つたんだ！君は知るまいけどね、僕が來たのは、學校の者が皆でよこしてくれたんだ。宮さんは學校の奴等のスターだとさ。それで、みんなは忠實なファンなんだ相だ。だから君と僕との間に、もしもの事でもあれば學校全體の恥だなんておだてやがつて………蒲田が遊佐君の金をまきあげてそれが旅費さ！　下駄で行つてふられちやいけないつてこの靴も遊佐君のをはかせてくれた………マントも途中が寒からうツて……（と貫一は胸が迫つて來る）僕はみなに對しても決していゝかげんな事は出來ないと思つたよ！宮さん、此の氣持に感激しなければ駄目だよ！……

あゝ、すんだ〳〵！　あゝ愉快だ！　僕は歌がうたひたいやうだ！

（と、極めて明るい顏になつて、そこらを歩く。）

（宮は少しも感激しない。何事だか考へて居る。）

宮　（しばらくして）貫一さん、もう行きませう……

貫一　僕はいつまでも此處に居たい！　一生此のまゝの氣持で居たい！

宮　でも、あんまり遲くなるし……

貫一　（はれやかに）行かう……

（と、二人ならんで歩く。）

貫一　宮さん、僕等二人の間に記念すべき日が三つになつたね、カルタ會のかへり、ボン〳〵のおみやげ……熱海の夜……今夜が一番重大で一番苦しい思ひ出だつた！――然し、人間は幾多の試練に逢はなければならないんだ。もまれ、もまれて、段々二人の間は、しつかり結ぼれて行くのだね――何を考へてるんだい！　もう何も考へる事は無いぢやないか。

宮　えゝ…………

貫一　何かあるのかい！

宮　貫一さん、私きゝたい事があるわ。

貫一　何だい！

宮　怒つちやいやよ…………

貫一　怒らない。

宮　あのね、もしよ？　もし私が、富山の所へかたづくとしたら、その時、貫一さんは怎するの…………

貫一　（怒り心頭に發して）何！…………宮！　貴樣はやつぱり己れをすてる氣なんだな？　貴樣には何にも分らないんだな！　心のくさつた女！　姦婦！

（と、宮を蹴る。）

貫一　あゝ、もうイヤだ！　あゝもうみんな駄目だ！　宮二人が怎して一緒に居るのも今夜限りだ。僕がお前に口をきくのも今夜かぎりだ！　一月の十七日、宮、今夜の事を、ようく覺えて置け！　來年の今月今夜、此の貫一は何處で此の月を見るのか……再來年の今月今夜、十年後の今月今夜、己れは一生を通じて今夜の事は忘れないぞ！　忘れるものか！　來年になつたら、キット己れの涙で月をくもらして見せるから、月がくもつたら、此の貫一は、どこかの果で、今夜のやうに貴樣をうらんで泣いて居ると思へよ！

宮　貫一さん、そんな悲しい事を云はないで…………

貫一　（と、取りすがる。）放せ！　己れはお前の心變りの爲めに、一生を氣狂ひになつて暮らすんだ！　學問もイヤだ！　此の恨みは生きながらの惡魔になつて、貴様のやうな畜生の肉をくらつてやる覺悟だ！　富山の令夫人！　奥さん！　顏をあげて、もう一度眞人間で居る間の貫一の顏をよく見て置け！　小父さんや、小母さんの御恩は忘れられないが、お前からよろしく御禮を申上げてくれ！　そして、大馬鹿者の貫一は、一月十七日、熱海の濱から氣狂になつて居なくなつたと云つてくれ！

宮　貫一さん、待つて下さい、いろ／＼云ひ度い事があります。話があるから今夜は一緒にかへつて下さい！　御願ひします！

貫一　話があるなら此處で聞かう——

宮　此處ではイヤです——後生ですから、歸つて下さい。私は……私は……。

貫一　えゝ、放せ！　放さんとひどいぞ——

宮　貫一さん、私はどんなひどい事をされてもいゝ……云ひ度い事があります……。

貫一　えゝ、うるさい！

（と、つき放す。宮、怪我をする。貫一ハツとする。）

宮　私は、どうなつてもかまはない！　貫一さん、もう止めないから一言だけ聞いて下さい！　云ひのこした事があるのよ……

（と、取りすがるのを、貫一、ふりはらつて退場する。宮、再び起き上つて、貫一をさがす。）

宮　（叫ぶやうに）貫一さん…… ……

（と、空しく呼ぶ。）

（波の音しづかに。）

——幕——

三幕目

第一場　鰐淵の家

いづれは、貸金のかたにまき上げたと思はれる金貸鰐淵には不似合な家の座敷を平舞臺に飾る。正面に美しい庭を見る。

上手廊下づたひに倉庫の一部が見える。室の中には片すみに事務用の机、手だんす、小型の金庫などがある。鴨居には、いろ／＼の證書の期日が一目瞭然するやう

に書いたものが貼つてある。

幕あく。

（鰐淵直行が、外出の着物を着かへて居る。そばに、赤樫滿枝と、女中おなほとがいろ〳〵の手傳ひをして居る。）

おなほ　旦那さま、今朝又あのイヤなおばあさんが旦那樣にお目にかゝり度いッて何遍もまゐつて居るんで御座いますが………

直行　追ひかへして仕舞へ！

おなほ　いくらさう申しても歸らないんで御座いますけど………

直行　仕方が無ければ交番に云ふんだ――ありあ氣狂ひだ。

おなほ　でも可愛想でございますわね、あんな年になつて、たよりにする息子は死んで仕舞つたんだ相ですから………

滿枝　あゝ、家を取られて、首をくゝつたものゝ親なんですか。

直行　さうだ！　借りた金が返へせなけりや抵當を取られるナア當り前ぢやないか、それをさも〳〵己れが殺したやうに云つてやがるんだ――世の中のいくぢのない奴はみんな死ぬがいゝんだ――金さへ持つてりや何にも怖い事も恐ろしい事もありやしない………。

滿枝　本當に――お金の力では、イヤがるものでも手込めにする事も出來ますからね――

直行　もうそんな昔の事を云ふなよ！　今ぢやお前だつて立派な金融業ぢやないか………　世間ぢやお前の事を美人クリームと云ふさうだよ。

滿枝　誰れがそんな女にしたんです。

直行　あやまつたよ………そのはなしは又聞かう……。

（と、行かうとする）

おなほ　怎いたしませう、又まゐりましたら――私何だか氣味がわるう御座いまして………あんなのが火でもつけるんぢや御座いますまいか――。

直行　大丈夫だよ……日本にやあ法律がある、そんな事が出來るもんか……もし來たら聞に云へ……あれは、何でもさばきをつけるよ……聞の強氣にや己れも舌を捲く位だ、あんな手代は又とないよ。

滿枝　聞さんが強氣ですツて？………あんな弱氣な人が

あるもんですか。

直行　お前から見ればさうかも知れない。

（と、笑ひ作ら、直行は出て行く。）

（滿枝とおなほがそこらを片づけて居る所へ、奥の方から貫一がかへつて來る。）

滿枝　あら、おかへりなさい。間さん暑かつたでせう……あゝおなほ、タオルをつめたくしぼつておいで……。

（おなほ退場。）

滿枝　さあ／＼お羽織をおぬぎなさい。

（と、後へまはつて羽織をぬがす。）

貫一　よ御座んす。自分で脱げますから――

滿枝　なんですね、その位の事をさして下すつたつていゝぢやありませんか。

貫一　させなくつたつていゝんでせう。

（と、すぐ事務の机に向ふ。おなほタオルを持つて來る。）

滿枝　間さん、お顏でもおふきなすつたら――いゝ心持ですよ。

貫一　あなたおふきなすつたら…………

滿枝　妾は、家に居たんですから、ちつとも暑かありませんわ…………さあ、お拭き遊ばせよ…………あら、おなほ、こりや私のタオルぢやないか…………間さん、白粉のにほひが殘つてるかも知れませんわ――それでもよござんすか。

貫一　かまひません…………ありがたう。

（と、色氣もそつけもなく、もろ肌をぬいで汗をふき、最後にそのタオルを頭からかぶつて、直ぐそろばんをはじく。）

滿枝　（がつかりしたやうに見て）間さん、少し、お休みになつたら怎です？

貫一　え、！　休みたいと思ふんですけど、此の仕事が無くつては、僕は一日も喰べて行けない體ですから……

滿枝　そんな事はありませんわ、鰐淵だつて、あなたの事はそりや此の上なく大切に思つて居るんですし……あなただつて御自分の手で隨分お金も廻していらつしやるんだし――そんなにまでなさらないだつていゝぢやありませんか。

貫一　然し、私は、一錢でも多くの金を貯めたい、拵へたいと云ふ一心で此の商賣に這入つたんですから……。

滿枝　そんなにお金を殘して怎なさるの？　好きな奥さん

でもおもらひになるんですか。

貫一　女房は持ちません。

滿枝　怎して？

貫一　女房は飯を喰ひますから……。

滿枝　まあ……それぢやあ、その女房が御はんを喰べない女だつたら怎なさる。

貫一　そんな人間はありますまい。

滿枝　ですから、自分で飯料を持つて行つて、只あなたのお側に居たいつて女があつたら怎なさるの？

貫一　飯料だけ貰つときませう。

滿枝　間さん……（と、きつぱり云ふ）

貫一　何です？

滿枝　あなたは怎してそんなに冷い事を仰有るんでせう。あなたはきつと、女を仇だと思召すやうな悲しい御經驗があるんぢやないんですか――然しねー間さん、世の中にはあなたを棄てる女もあれば、あなたを思つて思つて思ひぬいて、あなたに棄てられる女もあるつて事を御考へ下さいましね……私も、元は何にも知らない娘でしたが、お金の爲に、大切な一生を踏み躙られて、急にお金の力が恐ろしくなつて、女の誇も、恥も外聞も忘れて、女のくせに大金持になつてやらうと決心したのです。私がもつと怎にかした女だつたら、その時もう死んで仕舞つて居たんでせうが、お金が殘りはじめると、それが又面白くなつて、今では本當の高利貸になりました。朝起きるから、寐るまで、お金の事ばかりを考へて、外の世間は何にも氣になりませんでしたけど、あなたにお目にかゝつてから、私はつひぞ考へた事も無い、いろ〳〵の事を考へさせられるやうになりました。だから、人の心と云ふものは、年のたつにつれて、いろ〳〵に變つて行くもんだとしみ〴〵考へるんで御座います。きつとあなたの昔の女の方も、今ではどんなに後悔してらつしやるか分りますまい――いゝかげんに許しておあげあそばして、あなたはあなたの、新しい生涯にお這入りになつたらいゝぢやありませんか。

貫一　許しません！　死んでも許しません！　それが許せる位なら、此の私は、こんな境遇に一日だつて居られやしないんだ！　きつと見返してやるんだ！　金の力で見返してやるんだ……　……それが私の一生の目的です！

滿枝　まあ大變な御執心ですこと、そんなにまで思はれたら、女の身として此の上の幸福はありませんわ！……で

も少しは氣をまぎらすこともなさらないぢやあ、本當にお體にさはりますよ・

貫一　まぎらす所ですか、一瞬だつて忘れたくないから、私は自分で自分を鞭打つて居るんです。間貫一のよろこびは、約束手形に紙幣束です。それがあらゆる歡樂にまして私をよろこばせるんだ。右の手に證文を握つて、左の手に利息の金をつかんで、そのまゝウーンと死んだら此の貫一は我事了れりです！　それまでは、金だ！　金だ！（と、又事務にかゝる）

滿枝　間さん、あなたにいゝものを見せてあげませうか。

貫一　…………

滿枝　あなたが見ずに居られないものを…………

（と、滿枝手さげの中から、一枚の手形を出して、貫一のそばに來て見せる。）

貫一　――八千圓……振出人は、荒尾讓介……

滿枝　期日は今日です……間さん、あなたはびつくりなすつたでせう……

（貫一、思はず座敷のまん中へ來て滿枝のそばに坐る。）

貫一　荒尾讓介……怎してあの男がそんな大金を借りたでせう……

滿枝　大恩人の選擧費用なんですよ。

貫一　あゝさうか……そして、荒尾は怎して居ます！　やつぱり愛知縣の參事官で居ますかしら……

滿枝　さあ、その地位を失ふのも、つながるのも、此の手形一枚の力ですわ。

貫一　よしッ……その金は僕が拂ひませう……八千圓、今此處でお返へしします！　私にその手形を返へして下さい！

（と、慌てながら、現金を胴巻から取出して、滿枝の前にならべる。）

貫一　さあ、受取つて下さい！　荒尾にそんな苦勞があらうとは、夢にも私は知らなかつた…………然し、貸主があなたであつた事は、荒尾の爲にも私の爲にも、本當に神の助けと云ふものだ！　さあ、赤樫さん受取つて下さい。

滿枝　私、此のお金は荒尾さんからいたゞきますわ。私、あなたから返へしていたゞく譯がありません！

貫一　然し、荒尾は僕の舊友です。昔は兄弟も啻ならざる親友でした。それが苦しんでゐるのを私は默つては居ら

れません！　手形は私がいたゞきます！
滿枝　イヤです！
貫一　何故イヤです！　金さへ戻れば、それでいゝぢやありませんか。
滿枝　間さん、手形の所持人は私ですよ。イヤも應も私の考へ一ツぢやありませんか。
貫一　それぢやあ、あなたは、その手形で荒尾を苦しめてやらうとするんですか。
滿枝　さうです！　金の力で、大の男を泣かしてやるのが私の興味でもあり、目的でもあるんですわ！
貫一　そりや不可ん！　私は親友として見て居られません！　そんな人間らしくない事は出來ません！
滿枝　間さん、荒尾さんとは、その後、度々お會ひなんですか？
貫一　いゝえ、もう十年以上も會ひません！　會ひ度いとは思ひますが、私には會へません！　又會つてもくれますまい！
滿枝　十年も會はないお友達の苦しみは、だまつて見て居られないと仰有るんですか。
貫一　さうです！　荒尾は、社會に立つて立派に働ける人材です！　それが僅かの金に苦しんで居る事は、國家の爲に惜しむべき事です！
滿枝　それでは、昔のお友達の難儀は救つてやり度いと仰有るんですね。
貫一　當り前です！
滿枝　十年も會はずに居ても………
貫一　勿論です！
滿枝　間さん、そんなら毎日、朝晩顔を合はして居るものの苦しみは、怎してやらうとなさるんですの？
貫一　えゝ？
滿枝　長い間、私は苦しみ通して居ます。それを救はうとはなさらないんですの？
貫一　冗談はよして下さい！　ともかくせまつた問題です――私が支拂ふと云つて氣に入らなければ、御願ひです！　どうかその手形を一萬圓で私におゆづり下さい。
滿枝　御ゆづりしませう！
貫一　一萬圓で………
（と、うれしさうに又金を出さうとする。）
滿枝　一萬圓ではイヤです。
貫一　では一萬五千圓――

満枝　イヤです。

貫一　それぢやあ赤樫さん！　いくらです？

満枝　あなたの眞心で買つて下さい！

貫一　眞心――ッて……？

満枝　間さん！　私を愛して下さい！

（と、貫一のそばへよる。貫一驚く。）

満枝　私、あなたのお心さへ伺へば、こんな手形の十枚や二十枚は、見て居る前で破ります。間さん、私あなたの御心次第で、……自分の持つて居るものを、殘らずあなたに捧げてもちつとも惜しいとは思ひません！　私、長い間思つて居ました！　御願ひですから、あなたの御力で私を平凡な只の女にして下さいまし……間さん、あなた、そんなにやさしい手をして居らしつて、何故そんな冷い御心なのです！

（と、間の手を握る。）

貫一　（むら〳〵として）恥知らず！　それが女の正體なんだ！　己れは、そのにくらしい女の正體を見せられて生きながらの夜叉になつてやる氣になつたのだぞ！　君には鰐淵と云ふ立派な夫があるぢやないか！　姦婦だ！　世界の女はみんなそれなんだ！

（と、つか〳〵と立ち上つて奥へ行かうとする。）

満枝　間さん、覺えてゐらつしやい！

貫一　何？

（満枝、貫一を追はんとする時、おなほ出て。）

おなほ　御客さまで御座います。

（と、云ふのにつゞいて、遊佐・風早、蒲田の三人が室に這入つて來る。）

満枝　入らつしやいまし、――何の御用で御座いますか。

蒲田　イヤ、直接僕の用ではないが、此處に居る遊佐君の手形の書かへの事について、少し相談があるもんだから三人でやつて來ました！

満枝　それでは、只今手代が御面會いたしますから……しばらく御待ち下さい。

（と、奥へ這入る。と、しばらくして貫一が出て來る。一同しばらく顏を見合はせる。）

蒲田　（思出したやうに）よう……君は、間君ぢやないか。

風早　えゝ？　（と間を見て）おゝ、間君だ！　久しく會はない上に、まるで樣子がちがつたので全然別人の感があるね……遊佐、間君だよ……

蒲田　こりや奇緣だ！　イヤその後はしばらく……

貫一　しばらくでした。皆さん御變りもなくつて結構です

（と、互に會釋する）

蒲田　君は此處の御手代さんかね？

貫一　はア、一切の事をやつてます。

蒲田　そんな噂も聞かんぢやなかつたが、隨分思ひ切つた商賣を初められたもんだね……よく君に出來ましたね。

貫一　とても眞人間に出來る商賣ぢやありませんね。

風早　眞人間でないはひどいね。然し、僕等舊友に會つてる時だけは眞人間で居てもらひたいねハ、、、。

蒲田　どうです、儲かりますか。

貫一　儲かります！

風早　それッてば、學校時代に浮名の高かつたあの美人とは御一緒かね、何とか云つたね……。

蒲田　宮さん――

風早　さう、宮さん……………怎しました！　鬼の女房に天女だけれど、今ぢや日なしでも貸してるかね。

貫一　昔の御はなしは御免蒙つて、遊佐さんの書替をしませう。金利と印を持つて來ましたか。

蒲田　その事に就いてね、少し君に、はなしがあるんだ。

貫一　おはなしは後にして、手續だけはやりませう。ともかく期日だから…………（と事務にかゝる）

風早　あゝ、間君、鳥渡待つてくれ給へ。

貫一　待てと仰有ると――？

風早　その手形の事について御話がしたい――と云ふのが君の方も商賣だから、決して迷惑はかけやしないんだから、少しかんべんしてもらひ度いんだがね。

貫一　かんべんと云ひますと？

風早　つまり、君の方に損のかゝらん程度で負けてもらひたいのですよ。元來君も知つての通り、此の借金については、元々遊佐君が自分で使つたと云ふのでなく、全く弟の爲の金なんだし、それは元金千五百圓に對して、すでに何囘かに元金以上の利息も支拂つてあると聞くし、音なしい遊佐が、毎日此の事で苦しんで居るのを吾々友人が見て居られないんだ。そこで、それなら一ツ何とかはなしをしてやらうと云ふので我々兩人が一緒に來た譯だが、勿論、相手が君であらうとは夢にも知らなかつたんだし――云つて見れば吾々の誠意が屆いたとも云へるやうなもんで、僕はさつき君の顔を見て非常によろこんだんだ！　吾々舊友が頭を下げて御願ひするから、此處の所を一ツ、今までの事は今まで、此後元金の千五百圓

を何等かの方法で返へすとして、此後の利息はゆるしてもらひたいんだがね――さうすると、つまり君の方は倍額の金を遊佐から取つた事になるんで、決して損だとは思はないから、一ッさう願ひたいもんだがね……怎でせう。

貫一　まるでおはなしにならない！――とにかく、これへ御判を願ひませう。利息の方も現金の御持合せはあるまいから百五十圓は書き込んで置きましたから……

（と、手形をつき付ける。遊佐は一人俯つて居る。）

蒲田　待ち給へと云ふに！　さつきから風早が口を酸くして頼んでるぢやないか。鰐淵からひが門に立つたんぢやない、人に對するには、人の禮がある、然るべきあいさつをしたまへ！

貫一　おはなしが、おはなしだから、然るべき御あいさつの仕樣が無い！

蒲田　默れ！　貴樣の頭では錢勘定ばかりして居るので、人の云ふ事が分らないのだな、然るべきあいさつと云ふのは、友人に對する態度が無禮だとたしなめるのだ。高利貸たら高利貸のやうに、身の程をつゝしんで神妙にして居ろ！　一枚の證文を鼻にかけて、吾々舊友を侮蔑した此の有樣を荒尾讓介に見せてやりたい！――貴樣のやうな畜生に生れ代つた奴をな、荒尾はやつぱり昔の間貫一だと思つて、此間も吾々クラス會に來た時に、貴樣の安否を苦にしてたな、實の弟を失うたよりも、貴樣を失つた方が悲しいと云つてふさいで居つたぞ！　その一言に對しても少しは良心のねむりを醒ませ！　友人の風早庫之助と蒲田鐵彌が中へ這入る以上は決して君に迷惑はかけんから今日は然るべき返事をしろ！

貫一　とにかく遊佐さん、手形に御印を願ひませう……、あなたは、毎々御承知なんだから、あなたが、數を御承知の上で金をお使ひになつたんだから、あなたが、數をたのんでズルイ事をされちや困りますよ！

蒲田　厄病神が戸まどひしたやうに、手形々々とうるさい奴だ！　己れが始末をしてやる！　（と手形を破る）

貫一　何をなさる。

蒲田　始末をしたんだ。

貫一　遊佐さん、ぢや手形の書替をなさらないんですか。

遊佐　イヤさう云ふ譯ぢやあない……。

蒲田　イヤさう云ふ譯だ！

貫一　（色を和げて）手形の始末はそれでついたとして、

あなた方も折角仲へ這入つて下すつたのなら、最少し男らしい扱ひをして下さいな。私如き畜生とちがつて、あなた方は立派な法學士だ。

蒲田　おゝ、法學士ならどうした！

貫一　名實が相當せんと云ふんです。

蒲田　もう一度云つて見ろ！

貫一　えゝえ、何遍でも云ひますよ、法學士たら法學士らしい所業をなさい！

蒲田　（いきなり貫一の胸倉をつかんで）間、貴樣は……取つて投げてやりたいと思ふ程、にくい奴だが、恁して顔を合はせると、白い二本筋の帽子をかぶつて、ストーヴの前に膝をならべた姿が眼について、あゝ音無しい間をと、力ぬけがして仕舞ふ。間これが人情と云ふものだぞ！

風早　蒲田の云ふ通りだ、僕も誓つて迷惑はかけんから、君の友人の誼を思つてきいてくれ給へ！

貫一　友人は友人、貸した金は貸した金です！　自から別問題――

蒲田　もつと云へ！　云つたら貴樣の息の音が止まるぞ！　さあ間、どうだ！

貫一　間は息の音は止められても、出す音は、かはりませんよ。間は金力には屈しても腕力には屈するもんか――惜いと思ふなら、元利揃へた紙幣束で擲ちなさい！

蒲田　金貨は怎だ。

貫一　金貨、結構です！

（蒲田、むら〳〵として、思ふさま間をなぐる。貫一倒れる。蒲田は散々に間をなぐつた揚句、一種云ふべからざる感情に打たれてポロ〳〵涙をこぼす。）

蒲田　間！　痛いか！

貫一　痛い！

蒲田　間、許してくれろ！　己れがわるかつた！　一時の感情に驅られてとんだ事をしたが、君は決して己れが考へるやうな人間ぢや無い筈だ！　金は己れが還へす！　利息も己れが拂ふ……遊佐と風早と僕と三人で分擔してきつと返へす！　だからもう、そのことは打ち切らう！　只一ツ考へて見れくれ！　學校に居た頃、たしか雪が降つて居る時だつたと覺えて居るが、遊佐が本を買ふのだと云ふ虎の子のやうな金をがま口ぐるみふんだくつて、君を熱海へ立たしてやつた事があるナ……。

風早　さう〳〵、あの時は、たしか靴も遊佐のを、はいて

行つたんだ、……あの時分は面白かつたナア……。

蒲田　さうだ、面白かつた！　あの時分の面白さを間君は少しも考へ出さうとは思はんのか？――それだから今度の借りを怎麼と云ふのぢや無いよ！　只あの時分の我々は、慾もない全く無邪氣な間柄だつた！　お互に世間に出て、境遇に由つて人々の氣持は變つてゆくが、一度あの頃の思ひ出にふけると、心は夢路をたどるやうに、知らず〳〵涙が流れて來るんだ！　僕等は、たとへいくつになつても、その氣持が持てる所に、生命があると思ふんだ！　それが我々の人間性なのだ――ナア、商賣は商賣、時々はお互に馬鹿になつて、昔の事を談し合はうぢや無いか……間、君もクラス會に出ろよ！　皆來るぞ！

風早　荒尾はお前に會つたら、それこそ泣いて喜ぶぞ！　蒲田、丁度いゝ……これからみんなで例の江知勝へ行かうぢやないか――あすこで飯を喰はう。

蒲田　さうだ！　そこで己らあ泣かしてもらはう……。

風早　さあ間君、行かう――。

蒲田　まだ怒つてるのか？　口惜しかつたら己れをぶてよ！　いくらでもぶつてくれ！　己れはお前にぶたれ度いやうな氣持だ！

遊佐　間君、いろ〳〵失敬した、僕は決して無誠意な男ではないから、きつと金の方は解決するから、許してくれ給へよ！

蒲田　さあ行かう……。

（と、自分等は帽子を取つて出かける支度をして貫一をうながす。）

（貫一は、さつきから泣きたくつてたまらないのを、ぢつと無理な我慢をして坐つて居る。）

（一同はしきりに促がす。貫一は、ふところの、蟇口の中から少しばかりの金を出して三人の前に置く。）

蒲田　こりあ何だ？

貫一　高等學校時代、遊佐君から拜借した現金と、蟇口代……これは、靴代です――

（と、にくさげに云ふ。一同沈默。）

蒲田　間、貴樣は！――

貫一　金利は今、銀行利子で計算しませう……。

（と、手にそろばんを持つ。蒲田、いきなりその金を取つて、貫一に投げつける。）

貫一　何をする！

蒲田　貴樣はいよ〳〵人間ぢやないな……。

貫一　君達も人間なら、借りた金は恁して返せ！

蒲田　何を！

（と、蒲田がいきなりいきまくのを、風早と遊佐が愛想をつかして押止める。）

——暗轉——

三　幕　目

第二場　市ケ谷見附の暗

兩方に高い石垣、大木の松、極めて暗い市ケ谷見附の夜更。）

（貫一と滿枝とが連れ立つて歩いて來る。滿枝ともすれば貫一のそばに寄り添ふ。）

貫一　すみませんが、もう少し離れて歩いてくれませんか。

滿枝　だつて私何だか、薄氣味がわるくつて仕方が無いんですもの……。

貫一　私もあなたに側へよられると、本當に氣味がわるいんですから。

滿枝　間さん——あなたは……。

（と、一層近づいて來る時、物かげから、四五人の男があらはれ、）

男　手前は鰐淵の手代だな。

貫一　君は誰だ……。

（と、云はせも果てず、いきなり棒を以て、貫一に打つてかゝり、散々になぐりたふして、いづれへか姿をかくす。滿枝、倒れて居る貫一のそばにより介抱するも、貫一無念の齒を喰ひしばつて立上らうとするけれども、立上れない。ドカッと腰を落して顔をあげると、額から、血が流れる。）

滿枝　誰れか來て下さい——人殺し……。

（と、呼ぶ。貫一蟲の息になる。）

——幕——

四　幕　目

芝公園の木蔭

背景に、老杉亭々と立ちならぶ芝公園内の木蔭。草原の前には、車道があつて、だら〳〵登りの木立の奥には朱で塗つた建物の一部が見える。上から杉のつり枝。

その茂つた葉ごしに烈日の光が點々と地上にさして居る。

幕あく。

（と、はじめ見物には見えないが、荒尾讓介が木蔭の切り株に腰かけて、しきりに洋書をひもといて居る。芝居の進行に都合よき頃にその姿を現はす。）

（一人の行商が、疲れ果てた樣に草の上に休んで居る。そばに肩から下ろした四角な荷物が置いてある。それは風呂敷に包んだ小さいつゞらで、中には安物の縞模樣ある食器の皿が這入つて居る。）

（脚絆、草鞋、洋傘などに、いかにも人の世の旅につかれた樣が見える。）

（しばらくして、上手の方から、荷をかついだ甘酒屋がやつて來て、行商のすぐそばに荷を下ろす。甘酒屋は煙草をのみはじめる。と、行商も眼をさまして煙草の火をかりる。二人顏をやゝしばらく見合せて互に驚き、殆んど同時に「オヽ」と云ふ聲をあげる。）

甘酒屋　庄さんぢやないかね――

行商　倉さんぢやないか……。

甘酒屋　やつぱりさうだ、……己れも怎も見たやうだと思つたら……庄さん怎したい？　恐ろしいかはりやうだね……。

行商　うん――でも達者だつたかい？

甘酒屋　お前も丈夫だつたかい？

行商　何年になるなア、別れてから……もう七八年……そんな事つちやきかねーかな……。

甘酒屋　十年になるよ。

行商　十年か……時の經つなア早いもんだね――

甘酒屋　それで家の者は、皆丈夫かね？

行商　それがね、いろんな事が續きやがつて、今ぢや身よりにも頼りにも、たつた己れ一人になつちやつたよ――倉さんは怎だ。

甘酒屋　己れもその通りよ！　そんな事を考へると、つくづく世の中がイヤになるよ……お前は何をして居るんだ。

行商　名古屋で安もの〻皿を仕込んでね、それを旅から旅と賣つて歩いてるんだ――倉さんは……？

甘酒屋　見る通りよ、甘酒屋だ。とても江戸ッ兒にや出來る商賣ぢやねーよ……でもこんな事をしてたから會へた

んだな――なつかしいなア。
行商　なつかしい！　こんな身の上になると、古い友達に會ふのが何よりうれしいが、又考へると情なくもなるよ。
甘酒屋　誰れかに逢つたかい。
行商　誰れにも逢はねー。
甘酒屋　さうか、……いくつになつたい？
行商　倉さんと同い年ぢやないか、お前はいくつになつた。
甘酒屋　もういけねー。
行商　そんな事はねー、己らあ、これからだと思つてるんだ！
（甘酒屋、あついのを茶碗に汲んで、行商にすゝめる。）
甘酒屋　のまねーか。
行商　あ……。
甘酒屋　のんでくんねーよ。
行商　だつて商賣物をもらつちや、わるいやな。
甘酒屋　そんな事があるもんかな、商賣ものだつて、元の事を考へりや只みていなもんだよ……のんでくんねーよ。
行商　ありがたう……。
甘酒屋　こんな稼業をしてたつて、江戸ッ兒だよ、ちつともきたねー事なんざしちやありやしねーんだよ。
行商　誰れもきたねーなんて云やしねーぢやねーか。
甘酒屋　ぢや飲んでくんねー。
行商　ありがたう……ぢやいたゞくよ、（とのんで）あゝうめい！
甘酒屋　もう一杯怎だ？
行商　もう澤山だ。
甘酒屋　怎してよ？　きらひか。
行商　大好きだ。
甘酒屋　そんならもつとやつてくんねーよ。
行商　倉さん、己らあ釜一杯でも、もらひていよ。
甘酒屋　うん！
行商　だけど、己らあ、もう胸が一杯にたつちやつて飲めねーんだよ。（と、ホロリとする）
（甘酒屋も涙をこぼす。）
行商　倉さん、お前これから何處かへつきあつてくんねーな。
甘酒屋　何でさ？
行商　だつてお前、久しぶりで逢つたんだ。それにお前の

商賣物を只もらつて、そのまゝにやあ別れられねーぢやねーか。

甘酒屋　そんな義理にや及ばねーよ。行くつたつて此邊は何にもねー所だ、……そんな暇をかいて無駄錢を使ふより商賣をした方がいゝよ――又逢へる事もあらあな……

行商　でもよ……。

甘酒屋　いゝつて事よ、お前今、これからだつて云つたぢやねーか……お互に稼ぐ事つた。

行商　さうだー（と、考へて荷物の中から一枚の皿を出して、いきなりポンと地になげうつ。甘酒屋驚く。）

行商　これで負けといてくんねー。

（二人しばらく顏を見合せて眼に一杯涙をためる。）

行商　さよなら……。

甘酒屋　體だけはいとひねーよ。

行商　あゝ、お前もな……。

（此の時、木蔭から、荒尾がつか／＼と出て、默つて二人の前に一枚の紙幣を出す。二人怪訝な顏をする。）

荒尾　輕少だが。僕の志ぢや！　僕は君達二人の友情に泣かされた。世の中はまだ／＼失望するに及ばんものぢや！　これで二人して心持よく酒をくんでくれ給へ！

（二人、ありがたく押しいたゞいて並んで去る。）

（荒尾、ぢつと見送る。）

（荒尾やがて、吟聲する。）

「瓢空しく、夜は靜かにして高樓に上り、酒を買ひ、簾を卷き月を邀へて醉ひ、醉中劍を拂へば光月を射る……往々悲歌して獨涙滞す……我四方に遊んで意を得ず、陽狂して藥を施す成都の市……」

（此の時下手から、一輛の人力車、宮をのせてはしり出る。醉歩あやふげな荒尾は、さくろ間もなくつき飛ばされて地上に倒れる。と以前の皿のかけらで顏に傷をうける。車行きすぎようとする。）

荒尾　待て！……こら待て！

宮（車上から）お待ち、お待ち……あなた、どうぞ御かんべん遊ばして……。

荒尾（車夫に）貴樣はよく無いぞ！　そさうをしたら何故詫びて行かん。だまつて逃げようとしたから呼びとめ

たんちや！
車夫　どうも相濟みません！
荒尾　貴樣の不心得から主人に恥をかゝす……以後を氣をつけろ！
車夫　へい。
荒尾　もうよい！　行け！
（車夫介抱して荒尾を抱き起して下駄をはかせる。荒尾そのまゝ行かうとする。）
宮　（ちつと荒尾を見て）あの、御人違で御座いましたら御免あそばして……あなたは、あの、荒尾さんでは入らつしやいませんでせうか……荒尾さんで入らつしやいましたか。
荒尾　私、荒尾です。
宮　間貫一を御承知の？
荒尾　おゝ間は舊友でした……あなたは？
宮　私は鴫澤の宮で御座います。
荒尾　何、鴫澤の……宮と仰有る……
宮　はい、あの間貫一の居りました宅の……。
荒尾　（思はず眼を瞠つて）おゝ宮さん！
宮　御久しぶりで御座いました！（と、絶えて久しい荒尾の、あまりと云へば變り果てた風體を見て、涙もろく）
荒尾　（ちつと宮を見て）あなたも變りましたな。
宮　あなた、あの、御みあしが御痛みで御座いませう。
（と、手早く、ハンケチで傷を結ばうとする。荒尾それをしりぞけて腰の手拭を取らうとしてよろめく。）
宮　あれ、御危う御座います。
荒尾　なアに大丈夫……時に間は怎して居ます？
宮　その事につきまして、いろ〳〵申上げたい事が御座いますから、……何處かその邊まで御一緒に……。
荒尾　イヤ僕もなか〳〵用いある體ぢやから、話があるなら、此處で聞きませう。
宮　はい、でも……。
荒尾　ハヽヽ、富山の令夫人が、貧乏書生と立ち話に、外聞がわるいかな……。
宮　まあ、そんな……（と車夫に）お前は先へかへつておくれ！
車夫　はい、かしこまりました。（と車をひいて去る）
荒尾　時に、間は怎しました、無事ですか。
宮　はい……。

荒尾　イヤ決して無事ぢや無い筈ですぞ！

宮　はい、みんな私が悪いので御座います……私はそれでどんなに後悔して居りますか、わからない程で御座います！（と泣く）

荒尾　あなたが後悔した！　そりやその筈ぢや！　さうやつて、あなたが泣いて云はれる所を見ると、まんざら嘘ぢやあるまい。

宮　私は、晝も夜もその事ばかり考へて、毎日泣き暮らして居るので御座います！　一時の迷とは申しながら、私何だつて富山の處へなど行く氣になりましたか、自分でも分らないので御座います。荒尾さん！　私は本當に心の底から悔い改めたので御座います。どうぞあなたも昔の宮だと思召して、どうぞ一言間さんにおわびをなすつて下さいまし。間さんもあなたの御言葉なら、きつと聞いて下さいますでせうから……私は、あの方に許していたゞかなければ死んでも死に切れないので御座います。考へれば考へる程、自分の愚かゞ此の身をせめたてゝ、立つても居ても居られません。悲しいいやら、なさけないやら、荒尾さん、私はもう此頃氣が狂ひさうで御座います。

荒尾　あなたの心持は、よく分りました、然し私のはなしもきいて下さい。先年間が影をかくした時に、僕に殘した手紙がある。僕はその手紙を見て、ふるへて腹が立つた。すぐにあんたに會つて、是非これは思ひ返へすやうに忠告して、それで肯かれなければ、その時はもう人間のあつかひはして居られん、腹の癒ゆるまで打つて打つて打ちのめして、一生結婚の出來ん片輪ものにしてくれようと、すでにその時は立ち上つたですよ！　然し、間が言をつくして云うても貴方は肯かんと云ふ！　僕の言を容れべき筈がない。又間を棄てた以上は、あんたは富山への賣物ぢや！　賣物に疵をつけては濟まんと思うてそりあ矢も楯もたまらん胸を押へて仕舞うたんぢや。宮さん僕は、あんたはさう云ふ人間ぢやないと信じて居た。然し、あれ程、愛し合つて居た間さへ、欺かれたのだから、僕が欺かれるのは無理はない。僕は僕として、あんたをうらむばかりぢや慊らん、間に代つてあんたを、怨むですよ！　いゝや、うらむ、恨む、七生までもきつと恨む！（宮泣く）　間の一生を誤らしたのは、あんたぢや！　僅か一婦人の爲に一生の大切をすてゝ、墮落の淵に身を沈めたのは、間も不心得ぢや。然し間の不心得は

間として別に責むべきぢや。然し間がどんなに不心得であらうと、あなたの罪は依然として、あなたの罪ぢや！　ましてあなたの無考へから、間が墮落して仕舞うたのであつて見れば、あなたは女の操を破つたばかりでなく、併せて夫をさし殺したも同然ですぞ！　（宮額をあげる）さうは、思ひませんか、然し、あなたの悔悟されたのはいゝ。これは人間として悔悟せなければならん事だ！　が、殘念ながら、今日に及んでの悔悟はすでに遲い。憖なつた以上は、最早、神の力も及ぶ事ではない。お氣の毒と云ひたいが、凡ては自ら成せる罪のむくいで、素より殃あるべき事ぢやらうと思ふ！　（宮泣く）然し、よう悔悟なすつた。間が許さんでも、又僕が許さんでも、あなたは自ら許されたのぢや。自らにでも許されたのは誰れにも許されんより、はるかに勝つて居る。で、あなたは僕に間に詫びてくれ、取りなしてくれと云ふお賴みぢやが、それは僕はせん！　イヤせんのぢやない！　出來んのぢや！　僕が間であつたとしても、斷じてあなたの罪は許さんのだから――憖して舊友の敵に逢うて、指一つさゝずに別れる……それがあなたに對する荒尾讓介の寸志ぢやと思うて下さい！　イヤ久しぶりで折角御目にかゝつて、イヤな事ばかり云ひました。ぢや御きげん克う！　僕は失敬します！

宮　それでは、此の上どんなに御願しても、御詫びはなすつては下さらないので御座いますか……。

荒尾　さうです！

宮　そして、あなたも許しては下さいませんのですか。

荒尾　さうです！　（と、行きかける）

宮　しばらくどうぞ……それではもう、私は貫一さんに御わびしていたゞく事も、あなたに許していたゞく事ももう御願ひはいたしますまい……只、只一目でも貫一さんに會はして下さいまし。私は貫一さんの前で自分のわるかつた事を思ふ存分あやまりたいので御座います。いくらあやまつても、貫一さんは許しては下さりますまいけれど、私はもうそれで充分なので御座います！――どうぞ御一緒に御連れなすつて下さい！　あなたが連れて行つて下されば、貫一さんはきつと會つて下さいますから御目にかゝつた上で、あなたと貫一さんとで、せめてせめて責め拔いた上で、私は貫一さんに殺されたいので御座います！

荒尾　うん！　面白い！　間に會うて殺されたい！　宮さ

ん、さうなけりやならん事ぢや！　然し今のあなたは富山と云ふ夫のある身ぢや、めつたな事は出來んですぞ！

宮　そんな事はかまひません。

荒尾　いかん〳〵！　それがあんたのイカン處ぢや。間に會うて殺されたいと云ふ悔悟はいゝが、それではあんたは間あるを知つて、富山あるを忘れたのぢや！　かつては最愛の間にそむき、今は又夫にそむく……。

宮　荒尾さん、そんな事はかまひません！

荒尾　いゝや、いかん！

宮　かまひません！

荒尾　そりやいかん！

宮　荒尾さん、私の體は、もうとうからすてゝ居るので御座います！

荒尾　さう云ふ無考へな人に僕は與する事は出來ん。あなたが、そんな淺薄な料簡ぢやから、最初に間を棄てたのぢや！　不埒です！　人の妻たる者が、夫にそむいて、それでかまはん！　宮さん、あんたは何事です！

宮　それでは、私は一體怎したらよろしいので御座いませう？　どうぞ助けると思召して御教へなすつて下さい。

荒尾　僕が教へんでも、あなた自ら考へて御らんなさい。

宮　荒尾さん、私、三年も四年も前から、私は一日だつてその事を考へない日は御座いません。その爲に段々體もわるくなりまして、もう一層のこと死んだ方だと思ひますが、生きて居る内に、只一目でも貫一さんに會ひ度いと思ひまして、それで死なれないので御座います。

荒尾　まあ、よく考へて御らんなさい。

宮　荒尾さん、それはあんまりで御座います！　私はこんなに悔悟して居るのぢや御座いませんか……どうぞ昔の宮だと思召して……。

荒尾　昔の宮さん……あの頃のあなたは、美しい心の人ぢやつた！　將來親友の妻ぢやと思うたので、僕は散々我まゝを云はしてもらひましたな。下宿すまひの僕は、着物のほころびは皆、あなたに御願した……毎日のやうに御馳走にもなつた！　わしもよう喰うたが……間の奴もよう喰うた……ハ、、、。（と、荒尾涙ながらに笑ふ）

荒尾　イヤ失敬しました！

宮　それでは、又御目にかゝりませう……あなたの只今の御すまひは……。

荒尾　僕のすまひ、まあ、云はん方がいゝ！　あまが子なれば宿も定めずハ、、、。

宮　あれ、御危ふ御座います！　あなた大層めし上つて入らつしやるやうで御座いますが、どうぞ御體を御大切に。

荒尾　あまり飲むなと云うて下さるか……ありがたう御忠告は忝けなくうけます！　さやうなら。

宮　そして、その後の貫一さんには……。

荒尾　會ひません。會ひ度いと思つては居ますが……その中に訪ねて見ませう。

宮　それに、あなたは、大學の方も御卒業になつたと承つて居りましたが……。

荒尾　こんな形で居るのをびつくりなすつたか……イヤ自分でも驚いて居ます！　つい先達までは、愛知縣に居ましたが、人間て奴は鳥渡間違ふと、誠に面倒なものになる――僕なども今日では生甲斐のある方ぢや無いが、此のまゝ朽ち果てるのも殘念でなハ、、、。（と歩み出す）

宮　荒尾さん、私は怎したらよろしいので御座いませうね

――

荒尾　覺悟一ツです

宮　覺悟と申しますと……。

荒尾　讀んで字の如しぢや――。（と、袂を拂ひ、鐵鞭をついて飄然と去る。）

（宮、あとを見送つて立ちすくんで泣く。）

――靜かに　幕――

間貫一の宅

庭に面したる、さゝやかなる一室。

下手は玄關に通じ、上手襖の奥は茶の間に通ずる心、

庭にはいろ／＼の樹木數本あり、緑の葉をつけて居る。

室の中には、眞ン中に卓ありて、客と相對するやうになり、縁側に向つて小さい机ありて、貫一が、そこで事務を取るやうになつて居る。鰐淵と同じ高利貸の家ではあるが、舞臺面が全く違つた感じである事を必要とする。

幕あく。

（と、しばらく舞臺空虚。）

（やゝ、あつて貫一思ひに沈んださまで庭から出て卓る。貫一、しばらく緑蔭の間を、さまよふやうに歩きまはり、やがて、奥に向つて。）

貫一　おたつ、おたつ……ばあや。（と呼ぶ）

奥の聲　はい／＼。

おたつ　（と、老婆おたつが出て來る。）おや、旦那さま、いつの間に、おかへりでございました。
貫一　今、かへつた。
おたつ　どちらへお出で遊ばしました？
貫一　只、あてもなく、ぶら／＼と歩いて見た。
おたつ　それでも、さうして外を歩いてゐらつしやると、幾分か御氣分も、はれ／＼と致すでございませう？　やつぱり御氣分が、さえ／＼しないのは、お家の中にばつかり居らつしやるからでございますよ。
貫一　何だか知らないがね、歩いても足が、かうガク／＼するやうな氣がして、青い木の葉を、ぢつと見つめて居ると、イラ／＼と眼まひがするやうな氣がするんだ――それに、胸もわるい……。
おたつ　陽氣の故でございますよ。若い方には此の夏のはじめは、とかく、おつむりがはつきりしない相でございますよ。
貫一　躰が弱つてるんだね。
おたつ　あんまり、お仕事が多過ぎますからでございませう。
貫一　うん――何だか、妙に世の中が、つまらない……留守に何事もなかつたかい？
おたつ　はア、あの、お客さまが見えました。
貫一　誰れだ？
おたつ　學校時代の、お友達だとか云ふ御方でございました。
貫一　學校の友達？
おたつ　はい。
貫一　どんな風だつた？
おたつ　何でも四十恰好の、ひげの生えたお方で……壯士のやうな様子でございました。
貫一　それで……？
おたつ　御留守だと申上げましたら、又あとで來ると仰有いました。
貫一　さうか……。
おたつ　それから、あの御手紙がまゐつて居ります……（と、手紙を二三通渡して）あの御はんは、いかゞ致しませう。
貫一　あゝ、今ほしくないよ。
おたつ　さやうでございますか。

貫一　（貫一、手紙を一つ〳〵見て最後に宮の手紙を見る。）又、よこした！　鴫澤宮……あゝ、見たくもない！

（と、一度投げ、又手に取り、又投げと云ふ風に悶え苦しんで、しまひに取上げて巻きほどく。）

貫一　えゝ、今更悔悟したからつて……畜生！

（と、手紙を大地にたゝきつけようとすると、巻紙がほどけて貫一の體にまきつく。）

（それを、ふりほどくやうにして、遂にくちや〳〵にして丸めて投げすてゝ、樹に背をよせて頭を抱へて立ちつくす。ところへ、おたつ登場。）

おたつ　旦那さま、さつきの御方が見えましたが……。

貫一　通してくれ！

おたつ　はい。（と去る）

（貫一は、座敷に上つて客を迎へる。と間もなく、下手から荒尾讓介が這入つて來る。）

貫一　おゝ、荒尾君！　（と驚く）

荒尾　間！……………久しぶりぢやな。

貫一　まアま、此方へ入つてくれ給へ。

荒尾　（閾際に立つたまゝ、）イヤ、入るもいゝが、間、何より先に聞きたいのは、君は今日でも僕を、親友と思うて居るか、どうか、（貫一の考へ込むのを見て）考へる迄もなからう。親友と思うて居るなら、居る、さうなけりや、ないと云ふ迄で、是か、否の一つぢや。

貫一　そりや昔は親友であつた。

荒尾　然う。

貫一　今ぢや、さうぢやあるまい。

荒尾　何故にな。

貫一　其の後、何年も逢はずに居つたのだから、今では親友と云ふ事は出來まい。

荒尾　なに、前にも一向親友では、ありやせんぢやないか。學士になるか、高利貸になるかと云ふ一身の浮沈の場合に、何等の相談もせんのみか、それなり失踪して仕舞うたのは何處の親友なのか。（と、坐つて）君の戀人は君に背いたぢやらうが、君の友人は決して君に背かん筈ぢや。その友を何故、君は棄てたのか。その通り棄てられた僕ぢやけれど、かうして又訪ねて來たのは、未だ君を實は棄てんのぢやと思ひ給へ。然し僕が棄てゝも、棄てんでも、そんな事に君は痛痒を感じるぢやなからうけれど、僕は僕で、友人の德義として、今日まで親友と思ふて居つた君を棄つるには、是が一生の別れになるのぢや

から、その餞別として一言、云はんけりやならん。間、君は何の爲に、金をこしらへるのぢや。大いなる樂しみとして居た、彼の戀人を奪はれた爲に、其に替へる者として金と云ふ考を起したのか、それもよからう、いゝとしておく。けれどもぢや、それを獲る爲に強奪同樣な不義不正の事を働く必要があるか。如何に金が總ての力であるか知らんけれど、人たる者は惡事を行つて居つて一刻でも安樂に居らるゝものではないのぢや。それとも君は怡然として、樂しんで居るのか、長閑な日に花の盛りを眺めるやうな氣持で催促に行つたり、差押をしたりして居るか。どうかい間、恐らくぢや、さう云ふ氣持の事は、この幾年間に一日でもありはせんのぢやらう。君の顏色を見い！　全で罪人ぢやぞ！　獄中に居る者の面ぢや、（と、目をしばたゝき）間、何で僕が泣くか、君は知つて居るか、今の間ぢや解らんぢやらう。幾ら金をこしらへた所で、君はその分では到底慰めらるゝ事はありはせん。病があるからと云うて、毒を飲んで、その病が治るぢやらうか。君は恰も藥を飲む事を知らんやうなものぢやぞ。僕の友人であつた間は、そんな、たはけぢやなかつた。して見りや發狂したのぢや。一婦人の爲に發狂したのぢや。一婦人の爲に發狂した、その根性を、彼の友人として僕は恥ぢざるを得んのぢや。間、君は盜人と云はれたぞ！　罪人と云はれたぞ！　狂人と云はれたぞ！　少しは腹を立てい！　腹を立てゝ、僕を打つとも蹴るともして見い！

貫一　腹は立たん。

荒尾　腹は立たん？　それぢや君は自身に盜人とも、罪人とも……。

貫一　狂人とも思つて居る。一婦人の爲に發狂したのは、君に對して實に面目ないけれど、旣に狂人になつて仕舞つたのだから、どうも今更しやうがない。折角ぢやあるけれど、この儘、棄てゝおいてくれ給へ！

荒尾　さうか、それぢや、君は、不正な金で慰められて居るのか。

貫一　未だ、慰められては居らん。

荒尾　いつ、慰めらるゝのか。

貫一　解らん。

荒尾　さうして君は、細君を娶うたか。

貫一　娶はん。

荒尾　何故娶はんのか、かうして家を構へて居るのに、獨

身ぢや不都合ぢやらうに。

貫一　さうでもないさ。

荒尾　君は今では、彼の事をどう思つて居るな。

貫一　彼とは宮の事かね、那は畜生さ。

荒尾　然し君も今日では畜生ぢやが、高利貸などは、人の心を持つちや居らん、人の心が無けりや畜生ぢや。

貫一　さう云ふけれど、世間は大方、畜生ぢやないか。

荒尾　僕も畜生かな。

貫一　…………。

荒尾　聞、君は、あの女が畜生であるのに激して、やはり畜生になつたのぢやな。若し彼が畜生であつたのを、改心して、人間に成つたとしたら、同時に君も畜生を罷めにやならんぢやな。

貫一　あれが人間になる！　馬鹿な事だ！　詐つて人の誠を受けて、さうしてそれを賣るやうな殘忍な奴が、何で再び人間に成り得るものか。

荒尾　何故、なり得んのか、彼は今では、大いに悔悟して居るぞ、君に對して罪を悔いて居るぞ。

（貫一は嗤笑ふ。）

荒尾　彼もさうして悔悟して居るのぢやから、君も悔悟するが、よからう。悔悟する時ぢやらうと思ふ。

貫一　あれは、あれで勝手に悔悟するのだらう、僕の知つた事ではない。畜生も少しは思ひ知つたと見える。それもよからう。

荒尾　僕は先頃計らず彼に逢うたのぢや。彼は眞實悔悟して獨り苦しんで居る。則ち彼は自ら罰せられて居るのぢやから、彼が悔悟してからに、その樣に思うて居ると聞いたら、君は、それを以て大いに慰められはせんかな。君がこの幾年間に得た金、それは幾らか知らんけれど、その尠からん金よりは、彼が遂に悔悟したと聞いた一言の方が、遙かに大いなる力を以て、君の心を慰むるであらうと思ふのぢやが、どうか。

貫一　それは僕が慰められるよりは、宮が苦しまんければならん爲の悔悟だらう。宮が前非を悟つた爲に、僕が失つた者を再び得られる譯ぢやない。今日になつて彼が悔悟した、それでも好く悔悟したと、云ひたいけれど、これは固よりさうあるべき事なのだ。始めに、あんな不心得をしなかつたら、悔悟する事はなかつたらうに――不心得であつた！　非常な不心得であつた！

荒尾　僕は彼の事は云はんのぢや！　又彼が悔悟した爲に

君の失うたものが再び得らるゝ譯でないから、それぢや慰められんと云ふなら、それでいゝのぢや。要するに、君は、その失うたものが取り返されたら、いゝのぢやらう。さうして、その目的を以つて、君は金をこしらへて居るのぢやらう。なア、さうすりや、その金さへ得られたら、好んで不正な營業をする必要はあるまいが、不正な手段は用ひんでも、富む道は幾らでもあるぢやらう。君に云ふのも、な、その目的を變へよではない、たゞ、手段を改めよぢや。路は違へても、同じ高嶺の月を見るのぢやが。

貫一　忝けないけれど、僕の迷は未だ覺めんのだから、間は發狂して居るものと思つて、一切、かまひつけずにおいてくれ給へ。

荒尾　さうか、どうあつても僕の言葉は用ひられんのぢやな。

貫一　許してくれ給へ。

荒尾　何を許すのぢや！　貴樣は俺を棄てたのではないか。俺も貴樣を棄てたのぢや！　許すも許さんもあるものか。

貫一　今日限り、棄てゝ別れるに就ては、僕も一つ聞きたい事がある。それは君の今の身の上だが、どうしたのかね。

荒尾　見たら分るだらう。

貫一　見たばかりで分るものか。

荒尾　貧乏して居るのよ。

貫一　それは分つて居るぢやないか。

荒尾　それだけぢや。

貫一　それだけの事があるものか、何で官途をやめて、さうしてそんなに貧乏して居るのか、樣子がありさうぢやないか。

荒尾　話した處で狂人には解らんのよ。

貫一　分つても分らんでもいゝから、まア話すだけは話してくれ給へ。

荒尾　それを聞いてどうする。あゝ貴樣は何か、金でも貸さうと云ふのか、有難迷惑ぢやよ、赤貧洗ふが如く窮して居つても、心は怡然として樂しんで居るのぢや。

貫一　それだから猶、どうして、さう窮して、それを又樂しんで居るのか、それには何か事情があるのだらうからそれを聞かしてくれ給へと云ふのだ。

荒尾　（冷笑して）貴樣如き無血蟲が、そんな事を聞いた

とて何が解るものか、人間らしい事を云ふな！

貫一　さうまで辱しめられても、言葉を返すことの出來ん程、僕の體は弱れてしまつたのだ……。

荒尾　固よりぢや――

貫一　かう、腐つて仕舞つた僕の體は今更仕方がない。けれ共、君は立派に學位も取つて、參事官の椅子にも居た人、國家の爲に有用の器である事は決して僕の疑はん所だ。で、僕は常に君の出世を豫想し、君を思ふ念の胸中を去つた事はありはせんよ。今日まで君の外には一人の友人もないのだ。いつぞや君が愛知へ赴任すると聞いた時は、嬉しくもあり、懷しくもあり、久し振で君に逢つて喜びも云ひたいと思つたけれど、どうも逢はれん僕の體だから、陰ながらでも、君の出世の姿を見たいと、新橋のステーションへ行つて、君の立派になつたのを見た時は、何も彼も忘れて僕は只嬉し涙が出た。君の出世を見てそれ程嬉しかつた僕が、今日君の、そんなに落魄して居るのを見る心持はどんなであるか、察し給へ。自分の身を顧みずに、かう云ふ事を君に向つて云ふべきではない。であるから、是は間が云ふのではない。君の親友のある者が君の身を惜しんで、忠告するのだと聞いてくれ給へ。どう云ふ事情か君が話してくれんから、知らんけれ共、君の體は充分自重して、社會に立つて壯なる働きをして欲しいのだ。君はさうして窮迫して居るやうだけれ共、決して世間から棄てられるやうな君でない事を僕は信ずるのだから、一個人として身を愛し給へと謂ふのではなく、國家の爲に、自重し給へと願ふのだ。君の親友のある者は、君が、その才を用ひる爲に社會に出ようとするならば、及ぶ限りの助力をする精神であるのだ。

荒尾　うゝ、君は、それぢや何か、僕のかうして零落して居るのを見て、氣の毒と思ふのか。

貫一　君が云ふ程の畜生でもない。

荒尾　そこぢや！　間、世間に貴樣のやうな高利貸がある爲に、あつぱれ用ひらるべき人材の多くがぢや、名を傷つけ、身を誤られて、社會の外に放逐されて空しく朽つるのぢやぞ。今日の人材を滅す者は曰く色、曰く高利貸ぢやらう。この通り零落れて居る僕が氣の毒と思ふたら君の爲に窘されて居る人材の多くを一層不憫と思うてやれ、僕もかうして窮迫して居る際ぢやから、憂を分つ親友の一人は誠に欲しいのぢや。昔の間貫一のやうな友人があつたらばと思はん事もない。その友人が僕の身を

思うてくれて、社會へ打つて出て壯んに働け、一臂の力を貸さうと云ふのであつたら、僕は如何に嬉しからう。世間に最も喜ふ可きものは友、最も惜むべきものは高利貸ぢや。如何に高利貸の惜む可きかを知つて居るだけ、僕は益々友を念ふのぢや、その昔の友が高利貸――その惜む可き高利貸！　我又何をか云はんやぢや。

貫一　段々の君の忠告、僕は有難い。猶自身にも篤と考へて此の腐れた體が元の通り潔白な者になり得られるなら、それに越した幸はないのだ、君もまた自愛してくれ給へ。僕は君には棄てられても、君の大いに用ひられるのを見たいのだ。又必ず大いに用ひられなければならん其の人が、さうして不遇で居るのは、殘念であるよりは、僕は悲しい。そんなに念つても居るのだから、一遍君の處も訪ねさしてくれ給へ、何處に今居るのかね。

荒尾　まア、高利貸などは來て貰はん方がいゝ。

貫一　その日は友人として訪ねるのだ。

荒尾　高利貸に友人は持たんものな。

（此の時、滿枝が襖を開けて、しどけなく出て來る。貫一はその不躾に驚く。荒尾は全く驚いて狼狽する。）

（滿枝は貫一に挨拶してから、荒尾には殊更丁寧に禮をする。）

荒尾　これは不思議な處で……成程、間とは御懇意かな。

貫一　君は、どうして此方を知つて居る。

荒尾　そりや少し識つて居るのだ。然し長居はお邪魔ぢやらう。大きに失敬した。

滿枝　荒尾さん、かう云ふ處で申上げますのも如何でございますけれど。

荒尾　あゝ、そりや此處で聞く事ぢやない。

滿枝　けれど、いつも御不在ばかりで、お話がつきかねると申して弱り切つて居りますのでございますから、それに此の前でございましたが、あの者が伺ひました節、何か御無禮な事を申し上げましたとかで、大層な御立腹でお刀をお抜き遊ばし斬つて、て仕舞ふとか云ふ事がございましたさうで。

荒尾　あつた、實際、あいつ、叩ッ斬つて仕舞はうと思つたが、あれでも犬猫ぢやあるまいし、斬捨にもなるまい。

滿枝　まあ、怖い事ぢやございませんか、私などは滅多に伺ふ譯に參りませんでございますね。

荒尾　僕が美人を斬るか、その目で僕が殺さるゝか、どら歸つて刀でも拔いて置かう。

貫一　荒尾君、切めてどうか飯でも食べて行つてくれ給へ。丁度、もう時刻だから……。

荒尾　折角ぢやが、盜泉の水は飮まんて――

滿枝　まあ、あなた、私御給仕を勸めます。さあ、お下にゐらしつて――

荒尾　全で御夫婦のやうぢやね、是は好一對ぢや。

滿枝　その、おつもりでどうぞ、お席にゐらしつて。

荒尾　（立上つて、貫一をグツと睨み）間！　貴樣は……（その聲に両人振仰ぐ）ハツハツ物言へば、脣寒しぢや！

（と、出て行く。貫一は思案に沈みつゝ、送りに立つ滿枝、そのあとを追ふ。）

――幕――

五幕目

鰐淵の燒跡

高利貸、鰐淵直行の家は、彼をうらむ老婆の放火に由つて、さしも豪壯な一と構へも跡方もなく燒け失せて主人鰐淵は火に包まれて燒死して仕舞つた。

舞臺は、その夜の正に明けようとするしのゝめの事である。

舞臺の眞中に燒け殘つた大型の金庫が一つ丈あつて、あとは皆、まつ黒な燒棒杭の堆積で所々には、また火の氣が殘つて、風の吹く度に鬼火のやうな、焔を上げて居る。

上手の奥にさゝやかなテントを張つてそこに主人の死體が置いてある心。

ポンプのサイレンの音。半鐘などがきこえて幕があく。

（舞臺はまだ暗い。その中を消防夫や、警官等が、何も云はずに、右に左に立ち働いて居る。）

（しばらくして消防夫と警部との對話。）

消防夫　旦那、それでも大事にならずにいゝあんばいでした。

警部　御苦勞だつた、――此の風に火が擴がつたら怎しようかと思つたよ。御苦勞だつた。

消防夫　なアに……私共はそれが役目ですから……然しね……旦那にくまれちや損で御座んすね――此處の家は怎でもいゝとにかくまはりさへ燒かなきやいゝつてんでね、

いくら云つても誰れも此處の家へホースの先を向ける者がねーんで御座んす——いくら私がどなつても駄目なんでさあ。

警部 ウム………。

消防夫 高利貸つて事は皆の頭に、どんなに憎しみが喰ひ込んでるか分らねーんですね……で主人の死骸は見つかりましたか……。

警部 うん、見つかつた！

消防夫 何處にありました。

警部 金庫のそばにあつた！

消防夫 金庫のそばにねッ？

（と、考へる。暗の中をいろ〳〵の提灯が行き交ふ。）

消防夫 で旦那、つけ火でせうね——

警部 さあ、原因は取調中なんだ。

消防夫 つけ火ですとも、それでなくつて、こんなに火のまはりの早いわけはねーんでさあ……來て見ると、もう家中火ですからね——

（纏を持つた者を先に、それ〳〵の道具を持つた消防夫が十數人やつて來る。）

纏持 頭、こゝに居たのか。

消防夫 あゝ、御苦勞たつたな……三次の奴がふみぬきをしたつてが怎だ——

三次 こんな事は何でもねー。

（所へ、私服の刑事、巡査など、急いで登場。）

刑事 犯人が今、自首して出ました。

警部 さうか、物取りか。

刑事 いゝえ、七十ばかりのばあさんです。

警部 ホー？

刑事 何でも伜が鰐淵の爲に狂ひ死に死んだのを怨んで、火をつけたのださうです。

警部 女のくせに大膽な奴だな。

刑事 餘程、深い恨があつたんでせう。これで仇は打つた、死んで伜の處へ行けると涙をこぼして喜んで居ました！ わるびれない音無しい態度で、どうぞなる丈、重い罪に願ひますつて云つた時にやあ……皆鳥渡、度膽をぬかれましたよ。

消防夫 そんな事だらうと思つたんだ！

纏持 高利貸の野郎いゝ氣味だ！

警部 これ〳〵。（と、たしなめる）

（一見クリスチヤンと見える鰐淵の息子の直道がしづ

かに出て來る。)

直道　皆さん、今日はまことに御さわがせをいたしまして相すみません。私は鰐淵の悴の直道と申すものです。皆さんの御盡力は御禮の言葉は御座いません。

警部　あゝ、さうですか、……御宅でも、實に飛んだ事で御座いました！

直道　ありがたうございます。父の非業の死は、肉親として此の上の悲しい事は御座いませんが、私としては、今日の火事が、他家へ少しも御迷惑をかけずに、私の家丈ですんだと云ふ事を此の上なく感謝して居ります。感謝ばかりでなく、少しでも父の生前の所業に對して、社會に申譯の一部が出來たやうに考へて居る次第です！……御職務とは云ひながら、皆さん方の御働きは、直道何と云つて御禮をしていゝか分りません。ありがたう御座いました！

警部　放火の犯人が自首してまゐつた相です。

直道　それも只今、皆さんの御はなしで承知しました。法を犯した罪は許すべからざるもので御座いますが、鰐淵一族の私から、出來得る限り御寛大な御處置を取つていたゞきますやうに切に御願ひいたします。父の此度の最期は世の中の、同業者に對して一ッの警鐘で御座いませう！　私は一日も早く高利貸などが、此の世から無くなつて行く事を希ひます。生前にも度々、父を諫きましたが……遂に父は眼ざめる事が出來ませんでした。神さまの御めぐみに浴する事が出來ませんでした。父の死は神の攝理——神さまの御試みにあつたので御座います！當然すぎる程、當然の事と思ひますが、眞實の子として……私は、あの姿を見まして、可愛想でなりません！

(と、泣く)

警部　御同情に堪へません。

直道　ありがたう御座います——

警部　では、又後程伺ひます。

直道　御苦勞さまで御座います。

(警部を先に一同去る。)

(しばらくして、つな引きの車に乘つて、間貫一——かつて市ヶ谷見附の遭難の傷がまだ癒えずに、長く病院生活をして居たが、急報に依つて、いまだ繃帯の取れない體で、かけつける。)

(その後から、滿枝もつき從ふ。)

(貫一、直道のそばに來てだまつて立つ。)

直道　おゝ、間さん。
貫一　大變な事で御座いました。……御主人は……？
直道　あのテントの中に居ります！
（貫一と滿枝、いそいでテントのそばにより、しばらくして驚きの面持で登場。然し少しも涙はない。）
直道　間さん、父は御らんの通りの姿になりました！
貫一　……………。
直道　間さん……あなたは私の父のあの姿に對して心の底から泣いてやつて下さいましたか……。
貫一　…………。
直道　赤樫さんですか…　父はあなたに一方ならぬ御懇情を願つたやうに存じて居ります。――あの父の死に對して惜しいと思つて下さつたか？
滿枝　………。
直道　父は燒け死にました！　それも此の金庫のそばに倒れて居りました。永年つとめてくれた女中は逃げ去りました。父の死に對して悲しむものは、肉親の子の私一人。あらゆる跡始末をして――私すらまだ一本の香花をたむける暇もありません！　人間の死は凡てのものを洗ひ淨め、人々はその死に對して香をたき、花をたむけてくれるのが世の中の美しさですのに、私の父の死に對しては誰れ一人これを悲しみ、とむらつてやらうと云ふ人はありません！　父の資產は千萬に近いものと聞きましたが、金は、只、だまつて金庫の中にねむつて居ります。只、黃金の力、金の威力をのみ信じて居た千萬圓の長者の死の姿は怎でせう。もし肉親の私が居らなかつたらば、恐らく父のむくろは野良犬の餌食になつたかも分りません！　間さん、眼ざめて下さい。此の教訓に出つて、飜然として下さらなければ、やがては、あなた方の御身の上にも、わざはひが降りかゝりますよ。父の死の姿は、卽ち、間さんあなたの姿と考へて下さい！――父の殘した遺產全部は、當然此の私の上に來るものですが、私は神さまの道に仕へる身で、一錢の金も入りません！　此の金庫の中には、現金と證書とが全部這入つて居ります！　その他、土地、家屋、いろ〳〵のものがありませうが、私は今此處で、全部をあげて、間さんあなたに差上げます！　どうぞ、すべてをあなたのものになすつて下さい！　そして願はくば、不淨の財を有用にお使ひ下すつて、悲しい死を遂げた、亡父の冥福を祈つてやつて戴きたう御座います！　神さまの御言葉にも、金持が天國に

行かうと希ふ事は、ラクダが針の穴を通るより猶至難な事と仰有つてあります！　間さん！　私の心持が分つて下さいましたか……。

貫一　（心の中では直道の云ふ事がよく理解出來るが、こんな事で自分の初一念が動搖してたまるものかと思ふと同時に、舊恨がむら／＼と思ひ出され）それぢやあ、此の財產の全部を私に下さると云ふんですか……。

直道　さうです、金庫の鍵はこゝにあります！（と、鍵を渡して）どうぞ、此の鍵を天國への鍵として御使ひ下さい！

貫一　ありがたうございます！　私はよろこんで全部をいたゞきます！　あゝありがたい！　これで私の目的の一部は達する事が出來るのだ！　みんなでは、千五六百萬の金になる……千五百萬圓の所有者……もう元の間貫一ではないぞ！　すぐに二千萬にして見せる、三千萬……五千萬……一オクの金を日本中で、誰れと誰れとが持つて居るのだ。

直道　間さん…………。

貫一　御心配は入りません、私は更に大きな高利貸をはじめます！　會社だつて銀行だつて、吾々の力がなければ一日だつて立つて行くものぢやありません！　あゝ愉快だ……先づ此の燒け殘りの材木を賣つて……さうだ、御主人の遺骸の處分はあなたの方で御願しませう。勿論費用は、そちらで持つていたゞくんですよ。

直道　（ぢつと考へて）委細承知しました。

貫一　それから、あなたも、相當の金利さへ出して下さるなら明日にも教會を建てゝあげますぜ！

滿枝　（たまりかねたやうに）間さん！

貫一　あなたはもう何等關係のない人だ！　此處は私の家だ！　今度無斷で一歩でも此の土地を踏む事は許さんぞ。

（直道、父の靈を拜して、そのまゝ、靜かに立ち去る。貫一、金庫の鍵を持つて金庫を少しあけて、そつと中をのぞいて喜ぶ。所へ、宮の父が慌たゞしくやつて來て滿枝に名刺を渡し。）

鴫澤　あの間貫一さんは御無事ですか。

滿枝　はい。

鴫澤　さうでしたか。（と安心して）どうか會ひ度いと云つて下さい。

（滿枝、名刺を取次ぐ。）

貫一　（名刺を見て新しい怒りを感じて）　こんな奴は知らん……かへして仕舞へ！

滿枝　（滿枝、又鳴澤のそばへ來て。）御存じないさうで御座います。

鳴澤　知らない……そんな事は御座いません。只一目でいいからと云つて下さいまし……。

（滿枝又、そのやうに取次ぐ。）

貫一　知らんと云つたら知らんのだ！　追ひかへして仕舞へばいゝのだ！

（と、これをきいて、鳴澤は思はず走りよつて。）

鳴澤　貫一さん……私だよ、宮の父だよ！

（と、早や老人の淚になる。貫一、顏を反ける。）

鳴澤　火事場で大變な怪我をして病院にかつがれたと云ふ知らせを聞いて、早速病院の方へ行つて見ると、それは大變なまちがひで、あなたの怪我は、ずつと前の事と云ふので、ともかく安否をたづねに此處へ來ました！　貫一さん、私は何と云はれても仕方がない！　妻は昨年死にました！　その時にも生前に一度、貫一さんに御わびを云つて死に度いと幾度となく云つたが、それも遂に叶はずに死にました！　宮は勿論のこと、鳴澤一家は、貫一さんに對して本當に御詫びの言葉はない！　私も老年になつて、しみじみ自分の愚かさを思つて、毎日苦しんで居ます！　心がとけないのは仕方がない……只、御願ですから、一路傍の人としてでもいゝ、貫一さん、私に顏だけを見せて下さい！

貫一　己れに會ひたければ、金を借りに來い！　一圓日歩の天引きなら、何時何時でも會つてやる！　――間貫一は立派な高利貸だ！　自分の娘を金で賣つて、相手の男を氣狂にした殘忍非道なやり方は、間貫一には出來ないぞ！　その腕で高利を貸せ！　職に困つて喰へないと云ふなら、お前の腕だけを買つてやらう。手代に使つてやらう！　間貫一には一切、昔は無いと思つてくれ！　己れの生命は、金ばかりだ、見ろ！　此の金庫の中には千五百萬の金がある……これはみんな己れのものだ！　富山唯繼にいくらある！……　連れて來い！　引つぱつて來い！　金の光を拜ましてやるから……己れは鳴澤一家に裏切られた爲にナ、生きながらの、夜叉になつて、友達にすてられ、世間から、にくまれ、やうやうの事で最後の目的に達したのだ！　その御禮だけは云つてやるぞ！　娘を賣つて何を得た！　三度の食事と夏冬の着る

ものか……それに後悔の涙だらう……己れは金を得た！ 富を得た！ さあ、此の金庫の中を拜め！

（と、力に任せて、兩手で金庫の大扉を引きひらくと中から金貨、銀貨、紙幣の山が、貫一を押し倒すやうになだれ落ちる。）

（病後の疲れと、興奮とで、貫一は思はず陸と尻餅をついて倒れ、しばらく喪心して仕舞ふ。）

（處へ、宮が狂氣のやうに、かけよつて來て、ハツと驚き、奥から茶碗に入れた水を持つて來て、貫一にのませ介抱する。）

（貫一、やう／＼正氣づいて、介抱するものを誰れとも知らず、本能的に感謝の手を合せるやうにして、片手を出す。宮、その手に、茶碗を握らせる。）

貫一　ありがたう……。

（と、ぢつと宮の顏を見て、いきなり茶碗をなげすてて。）

貫一　あゝ、己れは、かたきの水に生き返つたのか！ 畜生！ 畜生！ けがらはしい！……あゝ誰れか水をくれ水を……。

（と、叫ぶと、此度はコツプに水を入れて満枝が、ささげる。貫一又、ぢつと見て、その水を投げすてる。）

宮　（反對の側にひざまづいて）貫一さん、おわびに來ました！ 私は、永年の間、苦しみに苦しんで、今日の日を待つて居ました！ 貫一さん、私は許していたゞかうとは思ひません、許していたゞけるとも思ひません！ 只、私は死ぬる覺悟でまゐりました——命を捨てる氣で居ります！——私は先達荒尾さんにお目にかゝつて、いろいろと叱られました！ その時、私の取るべき道は只一つ、覺悟あるばかりだと仰有いました！ その御言葉が怎しても分りませんでしたが、やう／＼の事で、氣がつきました。私は、もうとつくの昔に、富山の家を出ました。私の體は私のものです！ 死んでお詫びをしようかと存じましたが、もう一度御目にかゝつて思ふ存分おわびをして、あなたの御手で殺して戴きたいと思つてまゐりました！ 貫一さん、私をにくんで下さい！ せめて下さい！ せめて／＼責め殺して下さいまし！ 御願でございます！

（と、泣き伏す。鴫澤も宮の心と同じで、地上に坐つて兩手をついてわびる。）

貫一　馬鹿！ 畜生！ 何の面下げて此處へ來た！ 大馬

鹿者の貫一はナ、貴樣の爲に大切な一生を棒にふつて仕舞つたのだ！ 宮、一月十七日の事を忘れたか！ 泣け泣け！ いくらでも泣け！ 體中の涙を殘らず流して泣きつくせ！ 此貫一はな、貴樣のやうな安價な涙は流せないぞ！ 泣くに泣かれない苦しい悲しい胸を抱いて此の十年の永い間、己れは一滴の涙をこぼす事さへ出來なかつたのだ！ 貴樣の涙が洪水になつて、己れの體を流さうとも、此の貫一の凍りついた心をとかすことは出來ないのだ！ 己れは生きながら凍りついた人間になつたのだ！ さうした男には誰れがした！……あゝもう顏を見るのもイヤだ！ 歸れ！ 歸れ！……歸らないと叩き出すぞ！

宮　歸りません、怎されても歸りません！

貫一　歸らないか！

（と、手あたり次第に足元の金貨をなげつける。）

宮　かへりません！

貫一　よしッ、そら金貨だ！ 紙幣だ！ 黄金の雨だ！ 宮、宮、金で操を賣つた女！ 畜生！ 金を拾へ！

（と、手あたり次第に投げつける。）

宮　貫一さん、殺して下さい！

（と、つめよる。）

貫一　死ね！ 死ね！ 自分で死ね！ 一月十七日の夜を貴樣は今思ひ知るのだ！ 貫一の苦しい胸を今貴樣は思ひ知るのだ！……貴樣も一たん棄てた男なら、死ぬまでも棄て通せ！ さあ、歸れ！ 用はない！ 歸れと云ふに！ 此處は己れの家だ！

宮　殺して下さい！

貫一　うるさい！

（宮、貫一に寄りすがるのをふりはらつて姿をかくす。滿枝、その間に這入つて、宮をしりぞける。）

宮　お前は何だ！

滿枝　私は間さんの妻ですよ。

宮　えゝ？（と驚く）

滿枝　おかへりなさい！

宮　かへりません！

滿枝　間さんは、もうあんたに何の御用もないんです！ おかへりなさい！

宮　あなたこそ、おかへりなさい！

滿枝　何ですと。

宮　惡魔め！

滿枝　（と、いきなり懷中から短刀を出す。）
　私が殺してやる。
（と、二人刀を持つていろ／＼に爭ふ。鴫澤たまらなくなつて、滿枝を抱きとめて、奥へ去る。）
（宮は、疲れ果てゝ、ばつたりと倒れる。）
（夜が少しづゝ明けて來る。）
（しばらくして鴫澤が出て來て、宮のそばに寄り。）

鴫澤　宮、いくら願つても貫一さんの怒りは解けないのだよ！　此の上は神さまの御力にすがるより他に道はない……今日はいろ／＼と御用もあらうし、貫一さんは取りのぼせても居られるのだ！　又願ひに來よう……吾々が居てはナ、かへつて病後の貫一さんを苦しめるのだ！　さあ行かう……今日は行かう……決して諦める事はない――此の上は御父さんが命を捨てゝも、きつとおわびをして見せるからな……　さあ行かう……。
（と、宮をうながす。宮ふら／＼と立上つて。）

宮　（自分の父に）貫一さん……。（と取縋る）

鴫澤　え？（と驚く）

宮　貫一さん……熱海の濱へ行きませう……昔の熱海へ。
（と、氣が狂つて來る。）

鴫澤　宮、しつかりしろ、お父さんだよ　今は大切な時だよ！　宮、しつかりしろ！（と、おろ／＼する）

宮　貫一さん、あなた、泣かないと云つて居ながら……そんなに淚が流れるぢや無いの……アハ、、。（と笑ふ）

鴫澤　宮、しつかりしてくれ
（と、いろ／＼に介抱する所へ、貫一が出て來る。）

鴫澤　貫一さん、宮は、たうとうこんなになつて仕舞ひましたよ
（貫一、發狂した宮をぢつと見る。）

鴫澤　貫一さん、宮はこんなになつて仕舞ひました！　あなたの心はとけますまいが、私から御願します！　宮を許したと、云つてやつて下さい！　その一言で、安心して死なしてやり度うございます！（と泣いて賴む）

貫一　（心の中で、いぢらしい宮の姿を見てたまらなくなる。許し度い氣持は充分ある。然し、そんなセンチメンタルな事に負けては、なるものかと、冷い一面が働き出して）赤の他人が怎ならうと、間貫一は間貫一です！　こんな事に負ける位なら、荒尾の胸にもすがられたのだ！　蒲田君！　風早君……己れは、友情のあたゝかさに包まれても、心の傷は癒える筈だつた！　間貫一の命は金

だ

……さうだ！　金だ！　金だ！　黄金の光だ！

（と、堆高い金の中に兩手をさしのべて、つかめる丈の金を胸につかみ上げる。）

（そんな事をして居ても、貫一は泣きたくつてたまらない心持。宮はあらぬ事を口走る。）

（雀の聲。）

（夜が全くあけはなたれて來る。）

――幕――

婦系圖（一齣）

泉鏡花

湯島の境内

（冴え返る春の寒さに降る雨も、暮れていつしか雪となり、
（假聲使、兩名、登場。）
（上野の鐘の音も氷る細き流れの幾曲、すゑは田川に入谷村、
（其の假聲使、料理屋の門に立ち隨意に假色を使つて歸る。）
（廓へ近き畦道も、右か左か白妙に、
（此の間に早瀨主税、お蔦と〻もに假聲使と行逢ひつつ、登場。）
（往來のなきを幸に、人目を忍び佇みて、
（假聲使の退場する時、早瀨お蔦と立留る。）

お蔦　貴方……貴方。

早瀨　あゝ。（と驚いたやうに返事する）

お蔦　いゝ、月だわね。

早瀨　然うかい。

お蔦　御覽なさいな、此の景色を。

早瀨　あゝ、成程。

お蔦　可厭だ、はじめて氣が付いたやうに、貴方、何うかして居るんだわ。

早瀨　何うかもして居ようよ。月は晴れても心は暗闇だ。

お蔦　えゝ、そりや、世間も暗闇でも構ひませんわ。何うせ日蔭の身體ですもの。……

早瀨　お蔦。（とあらたまる）

お蔦　あい。

早瀨　濟まないな、今更ながら。

お蔦　水臭い、貴方は。……初手から覺悟ぢやありませんか、ねえ。內證だつて夫婦ですもの。私、苦勞が樂みよ。月も雪もありやしません。（四邊を眴す）一寸お花見をして行きませうよ。……誰も居ない。腰を掛けて、よ
（と肩に輕く手を掛ける）

（慥に爰と見覺えの門の扉に立寄れば、

（早瀬に引かれてあとすさりに、一脚のベンチに憩ふ）

お蔦　（並んで掛けて、嬉しさうに膝に手を置く）感心でせう。私も素人に成つたわね。

（風に鳴子の音高く、

（時に、よう／＼と醉にて二三人、ハタ／＼と拍手の音。）

お蔦　（肩を離す）でも不思議ぢやありませんか。

早瀬　何、月夜がかい。

お蔦　まあ、いくら二人が内證だつて、世帯を持てば、雨が漏つても月が射すわ。月夜に不思議はないけれど、恁うして一所におまゐりに來た事なのよ。

早瀬　然うさな、不思議と云へば不思議だよ、世の中の事は分らないものだからな。

お蔦　急に雪でも降らなけりや可い。

早瀬　（懸念して）え、何故だ。

お蔦　だつて、つひぞ一所に連れて出てくれた事が無かつたぢやありませんか。珍しいんだもの。

早瀬　……

お蔦　ねえ、貴方、私矢張り、亡く成つた親の情が貴方に乘憑つたんだらうと然う思ひますわ。……恁うして月夜に成つたけれど、今日お午過ぎには暗く曇つて、おつけ晴れて出られない身體には丁度可い空合ひでしたから、貴方の留守に、お母さんのお墓まゐりをしたんですよ。……飯田町へ行つてから、はじめてなんですもの。身がかたまつて、生命がけの願が叶つて、容子の可い男を持つた、お蔦はあやかりものだつて、然う云つてね、お母さんがお墓の中から、貴方によろしく申しましたよ。邪險なやうで、可愛がつて、はふり放しで、行屆いて。

早瀬　お蔦。

お蔦　でも、偶には一所に連れて出て下さいまし。夫婦に成ると氣拔がして、意地も張もなく成つて、たゞ附着いて在たがつて、困つた田舍嫁でございます。江戸は本郷も珍しくつて見物がしたくつて成りません。——然うお母さんがことづけをしたわ。……何だか此の二三日、鬱込んで在らつしやるから貴方の氏神様もおんなじ、天神様へおまゐりをなさいまし、私も一所にツて、迚も不可いと思つて強請つたら、恁して連れて來てくれたんですもの。草葉の蔭でもどんなに喜んで居るか知れません

よ。
早瀬　堪忍しな。嘘にも譽められたり、嬉しがられたりしたのは、私は昨日、一昨日までだ、と思つて居るんだ。
(歎息す)
お蔦　何だねえ、氣の弱い。掏賊の手傳ひをしたッて、新聞に出されて、……自分でお役所を辭職した事なんでせう。私が云ふと、月給が取れなく成つたのを氣にするやうで口惜いから、何にも口へは出さなかつたけれど、貴方、此の間から鬱いで居るのは其の事でせう。可いぢやありませんか。蹈んだり蹴たりされるのを見ちや、掏賊だつて助けまいものでもない、其處が男よ。えゝ、私だつて柳橋に居りや助けるわ。それが惡けりや世間樣、勝手になさいな。またお役所の事なんか、お墓のお母さんも然う云ひました。蔦がどんな苦勞でも樂みにしますから、お世帶向は決して御心配なさいますなつて、――云つてましたよ。
早瀬　難有い、俺ら嬉しいぜ。
お蔦　女房に禮を云ふ人がありますか。眞個に何うかして居るんだよ。
早瀬　馬鹿な。お前のお母さんに禮を云ふのよ。しかし世帶の事なんか、些とも心配して居るんぢやない。
お蔦　ぢや何を鬱ぐんですよ。
早瀬　何と云ふ事はない、が、月を見な、時々雲が懸るだらう。星ほどにも無い人間だ。ふつと時闇にも成らうぢやないか。……いや、家内安全の祈禱は身勝手、御不沙汰の御機嫌うかゞひにおまゐりしながら、愚痴を云つてちや境内で相濟まない。……さあ、そろ〳〵歸らう。
(立ちかける)
お蔦　(引添ひつゝ)あゝ、一寸、待つて下さいな。
早瀬　何だ。
お蔦　あの、私は巳年で、豫て、辨天樣が信心なんです。……此處まで來て御不沙汰をしては氣が濟まないから、石段の下までも行つて拜んで來たいんですから、貴方、一寸の間よ、待つて居て下さいな。
早瀬　あゝ、行くが可い、次手、と云つては失禮だが、お前不忍まで行つては何うだ。一所に行かうよ。
お蔦　まあ、珍しい。貴方の方で一所なんて、不思議だわね。(顏を見る)でも、惡い方へ不思議なんぢや無いから私は嬉しい。ですがね、辨天樣は一所は惡いの。それだしね、私貴方に内證々々で、一寸買つて來たいものが

ありますから。
早瀬　お心まかせになさるが可い。
お蔦　いやに優しいわね。よしませうか、私、……よさうか知ら。
早瀬　何故、他の事とは違ふ、信心ごとを止しちや不可ない。
お蔦　でも、貴方が寂しさうだもの。何だか災難でもかゝるんぢやないかと思つて、私氣に成つて仕やうが無い。
早瀬　詰らん事を。災難なんか張倒す。
お蔦　おゝ、出來した、宿のおまへさん。
早瀬　お茶屋ぢや無い。場所がらを知らないかい。
お蔦　嬉しい、久しぶりで叱られた。だけれど、聲に力がないねえ。（とまた案ずる）
早瀬　早く行つて來ないかよ。
お蔦　あいよ。然う／＼、鬱陶しいからつて、貴方が脫いだ外套をこゝに置きますよ。夜露がかゝる、着た方が可いわ。

（氣轉きかして奧と口。）

お蔦　（柏手うつ）天神樣、天神樣。
早瀬　何だ、ぶしつけな。
お蔦　（それには答へず）やどをお賴み申上げます。
早瀬　（ほろりと泣く）
お蔦　（行きかけつゝ）貴方、見て居て下さいな、石段を下りるまで、私一人ぢや可恐いんですもの。
早瀬　それ見ろ、弱蟲。人の事を云ふ癖に。何だ、下谷上野の一人あるきが出來ない娘ぢやないぢやないか。
お蔦　そりや褄を取つてりや、鬼が來ても可いけれども、今ぢや按摩も可恐いんだもの。
早瀬　可し、大きな目を開いて見て居て遣る。大丈夫だ、早く行きなよ。
お蔦　あい。

（互に心合鍵に、

（早瀬見送る。――お蔦行く。――）

……………

（はれて逢はれぬ戀仲に、人の心を奧の間より、し

らせ嬉しく三千歳が、

お蔦　(此のうたいつぱいに、お蔦急ぎあしに引返す。)

(早瀬、腕を拱きものおもひに沈む。)

お蔦　(うしろより) 貴方、今歸つてよ。兄さん。

早瀬　あゝ。

お蔦　私は……此方よ。

早瀬　おゝ早かつたな。

お蔦　否、お待遠さま。……私、何だか、案じられて氣が急いて、貴方、一寸顏を見せて頂戴。(背ける顏を目にて縋る) あゝ (嬉しさうに) 久しぶりで逢つたやうよ。(さし覗く) 何うしたの。矢張り屈託さうな顏をして。――彼うやつて一所に來たのは嬉しいけれど、しつけない事をして、――天神樣のお傍はよし、こゝを離れて途中で又、魔がさすと不可ません。急いで電車で歸りませう。

早瀬　お前、せい〳〵云つて、些と休むが可い。

お蔦　最う澤山。

早瀬　おまゐりをして來たかい。

お蔦　えゝ、仲町の角から、(輕く合掌す) 手を合せて。

早瀬　何と云つてさ。

お蔦　まあ、そんな事。

早瀬　聞きたいんだよ。

お蔦　えゝ、話すわ。貴方に御兩親はありません。其の御兩親とも、お主とも思ひます。貴方の大事なお師匠さま、眞砂町の先生、奧樣、お二方を第一に、御機嫌よう、お達者なやう。そして、可愛いお孃さんが、決して〳〵河野なんかと御縁組なさいませんやう。

早瀬　それから。

お蔦　それから?

早瀬　それから、……

お蔦　だつて、あとは分つてるぢやありませんかね。はゝゝゝ。

早瀬　(ともに寂しく笑ふ) はゝゝ、で、何を買つて來たんだい、買ひものは。

お蔦　(無邪氣に莞爾々々しつゝ) いゝもの、……でも、お前さんには氣に入らないもの、それでも、氣に入らせないぢやおかないもの、嬉しいもの、憎いもの、一寸極りの悪いもの。

早瀬　何だよ、何だよ。

お蔦　あゝ、惡かつた。……坊やはお土產を待つて居たんだよ。そんなら、何か買つて上げりや可かつた。……堪忍おしよ。いゝ兒だねえ。

早瀨　可いから、何を買つたんだよ。

お蔦　見せませうか、叱らない？

早瀨　………

お蔦　叱つたつて、もう買つたんだから構はない、（風呂敷より紙つゝみを出す）髢形よ、圓髷の。仲町に評判な內があるんですわ。

早瀨　髢形を、お蔦。（思はず其つゝみに手を掛く）俺の位牌でも買や可いのに。

お蔦　まあ、お位牌は丁と飾つて、貴方のおふた親に、お氣に入らないかも知れないけれど、私や、私ばかりは嫁の氣で、屆かぬながら、朝晩おもりをして居ますわ。

早瀨　樹から落ちた俺の身體だ。……優しい嫁の孝行で、はじめて戒名が出來たくらゐだ。俺は勘當されたツて。……何をお前、兩親がお前に不足があるのか。――位牌と云ふのは俺の位牌だ。――

お蔦　えゝ。

早瀨　お蔦、もう俺や死んだ氣に成つて、お前に話したい事がある。

お蔦（聞くと齊しく慌しく兩手にて兩方の耳を蔽ふ）

早瀨　一寸、もう一度掛けてくれ。

お蔦（ものも言はず、頭をふる）

早瀨　よ。（と胸に手を當て、おさうとして、火に觸れたゐが如く、ツト手を引く）死ぬ氣に成つて、と聞いたばかりで、動悸は何うだ、震へて居る。稻妻を浴びせたやうに……可哀相に……チヨツ一層二人で巡禮でも。……いや／＼先生に誓つた上は。――えゝ、俺は困つた。何うしよう。（倒るゝが如くベンチにうつむく）

お蔦（見て、優しく擦寄る）聞かして下さい、聞かして下さい、私や心配で身體がすくむ。（と忙しく）早く聞かして下さいな。（と靜に云ふ）

早瀨　俺が死んだと思つて聞けよ。

お蔦　可厭。（烈しく再び耳を壓ふ）何を聞くのか知らないけれど、貴下此二三日の樣子ぢや雷樣より私は可恐いよ。

早瀨（肩に手を置く）やあ、眞個に、わな／＼震へて。

お蔦　えゝ、たとひ弱くツて震へても、貴方の身替りに死ねとでも云ふんなら、喜んで聞いてあげます。貴方が死

んだつもりだなんて、私や死ぬまで聞きませんよ。

早瀬　おゝ、お前も殺さん、俺も死なない、が聞いてくれ。

お蔦　そんなら、……でも、可恐いから、口を瞑いで。

早瀬　お蔦。

お蔦　…………

早瀬　俺と此ッ切別れるんだ。

お蔦　えゝ。

早瀬　思切つて別れてくれ。

お蔦　早瀬さん。

早瀬　…………

お蔦　串戯ぢや、――貴方、無さゝうねえ。

早瀬　洒落や串戯で、こ、こんな事が。俺は夢に成れと思つて居る。

へ跡には二人さし合も、涙拭うて三千歳が、恨めしさうに顔を見て、

お蔦　眞個なのねえ。

早瀬　俺があやまる、頭を下げるよ。

お蔦　切れるの別れるのッて、そんな事は、藝者の時に云ふものよ。……私にや死ねと云つて下さい。蔦には枯れろとおつしやいましな。

早瀬　お蔦、お蔦、俺は決して薄情ぢやない。

（ツンとしてそがひに成る。）

お蔦　えゝ、薄情とは思ひません。

早瀬　誓つてお前を厭きはしない。

お蔦　えゝ、厭かれて堪るもんですか。

早瀬　此方を向いて、まあ、聞きなよ。他に何にも塞ぐ事はない、此の二三日、顔の色を怪まれる、屈託は此の事だ。今も言はう、此の時言はう、口へ出さうと思つても、朝、目を覺せば俺より前に、臺所でおかゝを搔く音、夜寝る時は俺よりあとに、あかりの下で針仕事。心配さうに煙管を支いて、考へると見ればお菜の獻立、味噌漉で豆腐を買ふ後姿を見るにつけ、位牌の前へお茶湯して、合せう手を見るにつけ、咽喉を切つても、胸を裂いても、唇を破つても、分れてくれとは言へなかつた。先刻も先刻、今も今、優しいこと、嬉しいこと、可愛いことを聞くにつけ、云はう〳〵と胸を衝くのは、罪も報いも無いものを背後からだまし打に、岩か玄能で其の身體を打碎くやうな思ひがして、俺は冷汗に血が交つた。な、こ

んな思をするんだもの、よくせきな事だと斷念めて、きれると承知をしてくんな。……お前に、そんなに拗ねられては、俺は活きてる空はない。

お蔦　ですから、死ねとおつしやいよ。切れろ、別れろ、と云ふから可厭なの。死ねなら、あい、と云ひますわ。私や生命は惜くはない。

早瀬　さあ、其の生命に、俺の生命を、二つ合せても足りないほどな、大事な方を知つてるか。お前が神佛を念ずるにも、先づ第一に拜むと云つた、其の言葉が噓でなければ、言はずとも分るだらう。其のお方のいひつけなんだ。

お蔦　（消ゆるが如く崩折れる）えゝ、それぢや、貴方の心でなく、別れろ、とおつしやるのは、眞砂町の先生の。（と茫然とす）

早瀬　己は死ぬにも死なれない。（身を悶ゆ）

お蔦　（はつと泣いて、早瀬に縋る）

〽一日逢はねば、千日の思ひにわたしや煩うて、針
や藥のしるしさへ、泣の涙に紙濡らし、
枕を結ぶ夢さめて、いとど思ひのますかゞみ。

（此の間に、早瀬、ベンチを立つ、お蔦縋るやうにあとにつき、雙方涙の目に月を仰ぎながら徐にベンチを一周す。お蔦さきに腰を落し、立てる早瀬の袂を控ゆ。）

お蔦　あきらめられない、もう一度、泣いてお膝に縋つても、是非も爲やうのないものでせうか。

早瀬　實は柏家の奧座敷で、胸に匕首を刺されるやうな、御意見を被つた。小芳さんも、蒼く成つて涙を流して、とりなしてくんなすつたが、たとひ泣いても縋つても、こがれ死をしても構はん、おれの命令だ、とおつしやつてな、二の句は續かん、小芳さんも、俺も疊へ倒れたよ。

お蔦　（やゝ氣色ばむ）まあ、死んでも構はないと、あの、えゝ、死ぬまいと思ひなすつて、……小芳さんの生命を懸けた、わけしりで居て、水臭い、藝者の眞を御存じない！　私死にます、柳橋の蔦吉は男に焦れて死んで見せるわ。

早瀬　これ、飛んでもない、お前は、血相變へて、勿體ない、意地で先生に楯を突く氣か。俺がさせない。待て、落着いて聞けと云ふに！――死んでも構はないとおつしやつたのは、先生だけれど、……お前と切れる、女を棄

てます、と誓つたのは、此の俺だが、何うする。
お蔦　貴方を何うするつて、そんな無理なことばッかり、情があるなら、實があるなら、先生の然うおつしやつた時、何故推返して出來ないまでも、私の心を、先生におつしやつて見ては下さいません。
早瀨　血を吐く思ひで俺も云つた。小芳さんも、傍で聞く俺が極りの悪いほど、お前の心を取次いでくれたけれど、——四の五の云ふな、一も二もない——俺を棄てるか、婦を棄てるか、さあ、何うだ——と胸つきつけて言はれたには、何とも返す言葉がなかつた。今以て、いや、盡未來際、俺は何とも、他に言ふべき言葉を知らん。
お蔦　(間)あゝ、分りました。それで、あの、其の時に、お前さん、女を棄てます、と云つたんだわね。
早瀨　堪忍してくれ、濟まない、が、確に誓つた。
お蔦　よく、おつしやつた、男ですわ。女房の私も嬉しい。早瀨さん、男は……それで立ちました。
早瀨　立つも立たぬも、お前一つだ。ぢや肯分けてくれるんだね。
お蔦　肯分けないで何うしませう。
早瀨　それぢや分れてくれるんだな。
お蔦　ですけれど……矢張り私の早瀨さん、それだから尙ほ未練が出るぢやありませんか。
早瀨　又、そんな無理を言ふ。
お蔦　どッちが、無理だと思ふんですよ。
早瀨　ぢやお前、私がこれだけ事を分けて頼むのに、肯入れちやくれんのかい。
お蔦　否。
早瀨　それぢや一言、淸く別れると云つてくんなよ。
お蔦　…………
早瀨　えゝ、お蔦。(あせる)
お蔦　いひますよ。(きれ〳〵に且つ涙)別れる切れると云ふ前に、夫婦で、も一度顏が見たい。(胸に縋つて、顏を見合す)

(見る度ごとに面瘦せて、どうせながらへ居られねば、殺して行つてくださんせ、

お蔦　見納めかねえ——それぢや、お別れ申します。
早瀨　(涙を拂ひ、氣を替ゆ)さあ、此處に金子がある、……下すつたんだ、受取つて置いておくれ。(渡す)

お蔦 （取ると齊しく）手切れかい、失禮な。（と擲たむとして、腕の萎えたる狀）あの、先生が下すつたんですか。

早瀬 まだ借金も殘つて居よう、當座の小遣ひにもするやうに、とお心づけ下すつたんだ。

お蔦 （しな／＼と押頂く）恁うした時の氣が亂れて、勿體ない事をしようとした、そんなら私、故と頂いて置きますよ。（と帶に納めて、落したる猪形の包に目を注ぐ。おつと泣きつゝ拾取つて砂を拂ふ）も、荷に成つて何故か重い。打棄つて行きたいけれど、それでは拗ねるに當るから。

早瀬 で、お前は何うする。

お蔦 私より貴方は……然うね、お源坊が實體に働きますから、當分我慢が出來ませう。私……もう、やがて、船の胡瓜も出るし、お前さんの好きなお香々をおいしくして食べさせて讃められようと思つたけれど、……あゝ何を言ふのも愚癡らしい。あの、それよりか、お前さんは私にばかり我まゝを云ふ癖に、遠慮深くつて女中にも用はいひつけ得ないんだもの。……これからはね、思ふやうに用をさして、不自由をなさいますな。……寢冷をしては不可ませんよ。私、山百合を買つて來て、早く咲くのを見ようと思つて、莟を吹いて、ふくらまして居たんですよ。水を遣つて下さいな……それから。

早瀬 （うつむいて頷いてのみ居る、堪りかねて）俺も世帶を持つちや居ないよ。お前にわかれて、何の洒落に。

お蔦 まあ、何うして。

早瀬 それでなくツてさへ、掏賊の同類だ、あひずりだと、新聞で囃されて、其處らに、のめ／＼居られるものか。長屋は藻ぬけて、靜岡へ駈落だ。少し考へた事もあるし、當分引込んで居ようと思ふ。

お蔦 遠いわねえ。靜岡ツて箱根のもツと前ですか。貴方が此處に待つて居て、石段を下りたばかりでさへ、氣が急いて成らなかつたに、また何時、お目にかゝれるやら。（と膝にうつむく）

早瀬 お蔦、お前は、それだから案じられる。忘れても一人でなんぞ、江戸の土を離れるな。靜岡は箱根より遠いかは心細い。……あゝ、親はなし、兄弟はなし、伯父叔母と云ふものもなし、俺ばつかりをたよりにしたのに、せめて、從兄妹が一人ありや、俺は、こんな思ひはしやしない！……よう、お蔦、そしてお前は當分何うするつもりだ。

お蔦　（額を上ぐ）貴方こそ、水がはり、たべものに氣をつけて下さいよ。私の事はそんなに案じないが可うござんす。小兒の時から髮を結ふのが好きで、商賣をやめてから、御存じの通り、銀杏返しなら人の手はかりませんし、お瀬の島田の眞似もします。慰みに、お酌さんの桃割なんか、お世辭にも譽められました。めの字のかみさんが幸ひ髮結をして居ますから、八丁堀へ世話に成つて、梳手に使つてもらひますわ。

早瀬　すき手にかい。

お蔦　えゝ、修業をして。……貴方よりさきへ死ぬまで、人さんの髮を結ませう。私は尼に成つた氣で、（風呂敷を髮に姉さんかぶりす）圓髷に結つて見せたかつたけれど、一層此の方が似合ふでせう。

早瀬　（其のかぶりものを、引手繰つてつゝと立つ）さあ一所に歸らう。

お蔦　（外套を羽織らせながら）あの……今夜は内へ歸つても可いの。

早瀬　よく、肯分けた、お蔦、それぢや、すぐに、とぼとぼと八丁堀へ行く氣だつたか。

お蔦　えゝ、然うよ。……ぢや、もう一度、雀に餌が遣れるのね、よく馴染んで、欞子窓の中まで來て、可愛いッたらないんですもの。……此まゝで別れるのは辛かつたわ。

早瀬　何にも言はん。さあ、せめて、かへりに、好きな我儘を云つておくれ。

お蔦　（猶豫ひつゝ）手を曳いて。

〽いへど此方は水鳥の浮寢の床の水離れ、よしあし原をたちかぬれば、

（此の間に早瀬手を取る、お蔦振返る。早瀬もともに、ふりかへり伏拜む。）

（さて行かんとして、お蔦衝と一方に身を離す。）

早瀬　何處へ行く。

お蔦　一人々々兩側へ、別れたあとの心持を、しみ〳〵思つて歩行いて見ますわ。

早瀬　（頷く。舞臺を左右へ）

お蔦　でも、もう我慢がし切れなくなつて。私もしか倒れたら、駈けつけて下さいよ。

早瀬　（頷く）

お蔦　切通しを歸るんだわね、おもひを切つて遁すんでなく、身體を裂いて分れるやうな。

早瀬　（頷く。……お蔦しなく／＼と行きかゝり、胸のいたみをおさへて立留る、早瀬ハツと向合ふ。兩方おもてを見合はす。……）

（實に寒山のかなしみも、かくやとばかりふる雪に、積る……

（幕外へ。）

（思ひぞ殘しける。

（男は足早に、女は靜に。）

――幕――

南地心中（二齣）

泉鏡花

鳥笛

場所

大阪。天王寺境内

時

大銀杏の青葉の頃

人物

多一（猿廻し）
お美津（餅屋の娘）
鬼坊主塵山（高利貸）
五助といふ猿
伊吾、六平（ともに太鼓もち）
お珊（寵妾）
駕籠かき
腰元

（始め、其の銀杏の下に、五助猿のみ、うしろむきにて居る。）

（お美津、煮〆ものを入れたる重箱を提げていそ〳〵出づ、と其の袖に掴むを撫でゝ見廻して。）

お美津　まあ、多一さんも可い氣やな、五ッちやんばかり殘いて、何處へ行きなはつたやら……今も犬の聲を聞いた。可愛げに追まはされて怪我などさしたら何うする氣やな。

（敷莫蓙の上の太鼓を見て、一寸頂き、トトン、トトンと敲く。五助猿手振て踊る。）

お美津（笑ながら手を上げて）あら、然うやない。多一さんを呼びまんの。

（猿チヨコンと坐る。其の頸を手でおさへて、トトントトンと鳴らす。）

多一　誰やい、誰やい、又お寺の小僧めか惡戲するかい。

（細く煙の立つ線香を手にして、小走りに樹蔭に歸る）

や、お美津さん來てか。

お美津　多一さん、何處へ行たえ。

多一　一寸、本堂まで拜みにな。

お美津　おゝ貴下、お母さんの囘向やな、而してお手向け

の線香買うて來やはつたか。何處へおあげなさんすえ。

多一　私に供へさしておくれやす。其銀杏の樹の空洞をなあ、差當りお佛壇、其根際へ立てゝ置かうと思うてな。

（と云ふ内、お美津、線香を受取つて木根に供へる。美しい後姿の、白い頸脚を見ながら、其の優しさの身に沁みて早や涙ぐみ腕の處で目を擦つて。）

多一　お美津さん、そして、和女よう私の母さんの命日を覺えてやな。

お美津　何にも知らん私やかて、貴方のおかゝさん、おとうさんの精進日は覺えて居るえ。然もな、今日は祥月命日、多一さんは男ぐらしの一人、さぞかし、佛様へおもりもの〵世話も成らんやろ。此方でがんもどきなど焚かぬかとな、お爺さんが、恁う云うておくれやす。みつばやら、慈姑やら、蓮根をうでゝ、ちよき／＼切つて、昆布だし取つて、椎茸で味つけた。精一杯味ようたくつもりやけれど、私では齒痒いとてな、お爺さんが、昔は道樂に庖丁も持つた云うて、襷がけて料理方しやはつた。お初をば、あひやけで窮屈なやろけれど、内の御佛壇へ供へてな、お茶の御飯と一所にお重に入れて、恁うやつて、貴方のお午に持つて來たえ。先のやうに、毎日、日の暮方内へ寄つてくれはつたら、お爺さんと三人で一所に食べると嬉しいけれどな、此の節は、三日おき、四日おき、七日なつても、來やはらん。私は早う逢ひたうてな。今日もな、向うの方から、此の銀杏の梢が見えると、爪立つて駈けて來た。五ッちやんばかりで居やはらん。其處らの店で、お午飯をば最う濟ましやはつたかと、精が拔けたへえ。何が氣に障つて來やはらんと、お爺さんも案じてな、私もな。店に立ちながら、もう見えるか來やはるかと、日の暮れ方とは知つて居ても、それでも朝から待遠ほでな。

多一　あゝ、お美津さん、あやまる、拜む。これ見ともない。大道中で男をば泣かせて下さるな。先刻から一言一言堪へても堪へても、樹の蔭ながら大粒が、ほたり／＼と頬へ落ちる。これ何神様の罰が當つて、お美津さん、お爺さんに心持を惡くせう。此の銀杏の梢を離れてな、お日様が高津の前へお入りなさると、歸途を知つて五助が丁と背中へ乘る。

（仕方をすると、五助猿、ひらりと負さる。）

此悪戯め。（と振り落し）おもみは背中へかゝるけれど

も、足は輕く宙へ浮いて、目を塞いでも、ひとりでにお美津さんが餅を賣る逢坂の辻まで夢中で行くけれどもな和女の親を、恁う云うては濟まんけれど、何やろと、料理店のあとを野原にして、行方知れずなんなさつた親父さんの殘いた借金の山を、和女が其のかよわい體一つに負うてな、お爺さんと二人苦勞するのや。人交り、恐怖しい、をぢさんが、雷樣の太鼓のやうな印判やら、かぜの神の袋のやうな鞄を提げて、賣溜の錢さへ毎日のやうに攫へて行く。町の角からな、お美津さん。和女の顏と一所に、其の樣子を覗くと、利足のたしさへ手傳の出來ぬ私が、何の面さげで、氣を責めて、足が竦んで立停つて、すご／＼と木賃へ戻る。私が心にもなつてお見や。

お美津　え丶其では家へ入らんと、いつも近所まで來やはるか。

多一　行かいでなるかい。

お美津　眞個に。

多一　其も二尺と三尺づ丶、毎日よ、遠くからも樣子が知れる。最う此處に凭う坐つて居てもな、金貸にせたげられて、食つなぎの穀の代の外は、小遣もない迄攫はれて、和女とお爺さんが、起請の祟ではなけれども、烏金で血を吐いて苦んで居やはる姿が、遠目金で覗くやうに見えるもの。私が稼いで密と和女の帶に挾む、お寶ばかりは、金貸の目を免れて、それ偶にはお爺さんの寢酒の一合にも成るによつて、石を粉に刻んでも、樂にしたいと働くけれど、此の頃の、まんの惡さ、二貫と三貫さへ纏つた稼がない。今の先まではな、母さんの線香買ふ錢さへ稼らなんだ。處が、今日は命日の、佛樣のお慈悲やら、朝の間に發奮んだ客が立續き、五厘と思へば白かつたり、二錢と見るのが光つたり、石磨が廻つて、昔話の金子が湧く程ざくり／＼。（と財布をぶちまけ筵の上へ錢を竝べて）此れ見や、財布にやかて二兩。遣果した忠兵衞の二分ぢやない。儲かつた、儲かつた。これで花簪を和女に一本、御爺さんに五合や。今夜こそ久しぶりに飢ゑた餅、盆も正月も一息に頬張つて、和女に茶を汲んで貰はうと思ひ込んで居た處。いや、此も効性のない私より、然うして精進までしてくれる和女へ母さんの禮心で、私まで儲かつたものであろ。お線香を買うて歸つて、此處に貴女の居る姿を見たら、私や今の間に諸侯に成つた氣がする。五汁三菜、猿廻しには勿體ないやうにもあるが、どれ、見るだけなと、ちやつと、見たい。

お美津　多一さん、今のを聞いてな。私、苦勞も心配も皆忘れて了うた。杯も添へて來た。お酒のあき瓶にな、茶を入れて持つて來たよつて、此處で、一寸なと食べておくれやす。誰も人は見て居やせぬえ。

多一　あゝ、眞個にな、不思議と今日は青葉ばかり、此の眞日中が寂然として、奥山にでも居るやうな、遠慮はないな。はじめようや。箸が二膳ついてあるな。

お美津　どないかした事やつたら、一所に食べたい思うたよつて。（と顔をかくす）

多一　尤も、尤も。お持たせは其方でも、志は此方がする。母さんの祥月命日、和女がお客や。

お美津　知らんえ。

多一　そんなら私が客の分かえ。さあ、膝に手をちやんとついてよばれませう。

（といふ時、五助猿ちやんと竝んで坐る。）

お相客は五助どん、お相伴をいたします。

お美津　知らんえ。

多一　又これもお氣に入らぬ。がそんなら何うする。

お美津　貴方、二人ともお客やないものを。

多一　分つた。夫れでは和女の分は私がよそふ。私の分は貴女がよそふ、な。

お美津　何うなとしたが、可うござんす。

多一　あや、うまさうで、此は堪らん。（重箱の慈姑をしてやる）

お美津　あれ、綺麗に詰めて置くものを。

多一　島田さへ寢て解ける。さし向ひに見得なし、見得なし。

（兩人で木皿に取る。又慈姑を挾んで、）

それころ／＼。

（五助に遣る。猿頰張る。）

さあ、お美津さん食べぬかい。

お美津　大事ないかえ。

多一　何が。

お美津　叱られはせぬやろか。

多一　誰に？

お美津　あなたに。（線香の煙を指さす）

多一　（ほろりとして銀杏の根に片手をつき）もし、今日ばかりは迷うて出て、此の人を見て下されまし。私より貴女が抱いて遣りたう御座りませうな。さあ、お美津さん、一所に食べよう。

お美津　あい。(と莞爾と手を支へて)そんならお母さん、頂きます。

多一　恁うした處は、はじめてやな。

お美津　眞個になあ。

多一　此の嬉しいにつけて、胸に支へることがある。はじめて一所に御飯を食べるに、其が大道やと思ふと、何うやら和女を、何時に成つてもお家さんに据ゑられぬやうで氣がゝりな。此が世を忍ぶ猿廻しで、一つ舞臺が廻ると、槍を立てゝお駕籠の迎が來たら嬉しからうが。親の代から此の猿曳。樹から落ちた人間や、和女に極りが惡いしなあ。

お美津　又あんな事を言ひなさんす。恁うして多一さんと居られたら、餠屋の店も欲しうない。ほんに、此なり青竹を伐つて來て、柱にしたら、何うやろな。

多一　そして人の入らぬやうに、注連でも周圍に張つて置くか。いや、然うすると、あゝ鶴龜、人身御供のやうな形や。

お美津　二人で死ぬなら。

多一　えゝ。

お美津　人身御供でも大事ないけれどな、もしや、それが七夕樣で、年に一度より逢へなんだら、私や死んでしまふえ。

(多一の膝に縋る。五助猿、きやあとなく。僧形異體の高利貸、鬼坊主塵山、鐵棒の如き杖をつき、風袋の如き鞄を提げ、法體法衣にして、のさばり出づ。)

塵山　コリヤ何うぢやい。餠屋の看板に羽が生えて、雲にも乘らずに、異な處へ飛んでけつかる。猿廻しの小丁稚と、銀杏の下に蹲んだ形は額の繪が拔け出た體ぢや。やい、いや、お美津、可い加減に巫山戲さらさんと、面から裾まで金網で封じ込むぞ。疾とゝ歸りをれやい。

お美津　あれ、御隱居樣。今直きに歸ります。

塵山　直に歸るではない。私が資本で賣らせる餠ぢや。南京まじりに、黒砂糖、何が味で人が買ふ? 片時でも汝が居らぬと、餡は殘らず蠅になる。私が取前は空になる。來がけに寄つて檢べて來た。賣溜はかけらもないわい。さあ、失せをれ。汝が髮の毛、百萬條、拔いても拐つても取らにや置かぬ。ちやと立てい。地體、借金で縛つた身體。無理に私が肩腰を揉らせうが、口を利すではなけれども、御當節ぢや、其は爲ぬ。約束なれど女郎にも爲

ぬ、稽古にも賣らぬかはりには、片時も店の番は休ませぬ。さあ、來い、やい、來い、巫山戯た女郎か。

多一　もし一寸、お美津さんの店頭で影を見ます御坊樣。

塵山　むゝ影を拜むか。其の每に赫耀として輝くぢやらうな。

多一　はい。

塵山　金の光りぢや。猿曳風情が目を潰すな。退つて拜め。

多一　此處に少々持合せがございます。これを差上げますよつて、最う些と、お美津を貸し下されませ。

塵山　兎や角言はず、先づ遣せ。

（引さらつて、大鞄へたくし込む。お美津さしうつむく。）

塵山　雜と、二兩か。

多一　はい、花簪と五合。……（とうつかりと云ふ）

塵山　何を譫言を吐す。可し、料簡のならぬ所だが、今までの纏頭代だと思うて遣る。女郎、さあ立たう。

多一　えゝ、矢張りお連れ歸りなされますか。

塵山　顋を敲くな。知れた事だ。

多一　そりや酷うございます。御坊樣、足りませぬか。

塵山　素丁稚め、鬼塵山を知りをらぬか。こればかり何になる。

（此内五助猿遣ひ廻り、銀杏の根の銅貨を銜へて來て、お美津に渡す。）

お美津　おう。

（と取つて、顏に片袖。多一と見合せ、涙ながら打背きて、掌に据ゑて塵山に差出す。）

塵山　何だ、一錢。（と投げさうにして、鞄の口へ、ポンと入れる）

これ猿め、後藤の目貫でも銜へて來い。

（五助猿の頭を打つ。きやつと云つて多一に縋る。多一しつかり抱く。お美津泣伏す。多一涙聲にて。）

多一　もし、食べかけましたお美津の御飯が濟みますまで、私もお茶漬にして、さら〳〵と了ひますよつてな、其れまでお見免し下さりませ。

塵山　たはけも可い加減に盡せ。蓮如上人時分でも、大道中で飯事は成らんわい、來せう。

（お美津の帶際を取つて引立てる。）

お美津　（よろ〳〵として）多一さんそんならえ。（ト聲がうるむ）

多一　御坊樣。（引立行く後に縋つて）此上はお錢のかはりに、猿を一つ舞はせます。大事の藝でござりますが。猿がまゐりて、此方の御知行、御壽命まさると祝ひます。お美津を一寸戻して下さりまし、もし。（と法衣の袖を引く）

塵山　七面倒だ。五重の塔へ投放し上げるぞ。

（突飛して、お美津の振返る足許を、どんと胴突に突く。）

鬼塵山を忘れたか、乳房の眞中に穴をあけて、亡者のやうに引擔ぐぞ。（と追つ立つて行く）

（多一すご〳〵と歸り、竝べたる木皿を見て悄れ返り、銀杏の幹にもたれながら、手拭を目に當てる。五助猿も目をこする。屹と思直した體にて）

多一　いや、働け〳〵、何でも働け。

（慌しげに其の手拭で向う顱卷、急いで飯をかつ込んで、胸に支へ、むせかへる、五助猿、其の背中をたゝく。此の處へ帮間兩人。伊吾、六平。はた〳〵と駈出し、ばつたり留まつて、兩人、おなじやうに汗を拭ひながら、ハツと顏を見合せる。）

伊吾　南無三寶、鬼塵山に行逢うた。

六平　偉い事かな、もう些とで捉る處。

伊吾　や、きみは額の汗を拭くか。

六平　きこう、腋の下かいな。

伊吾　此方や、冷汗だけに借が多い。此のたら〳〵とした工合が、澤山氣味の可いものではない。きみは額へ搔いたゞけ、然したる事はないさうな。羨しい。

六平　いや〳〵、然でない。腋の下のたら〳〵汗、冷いはまだな事。此の額へクワツと出て、宛然一太刀浴びた形ぢや。鬼塵の利足ではないが、お互に目が出る、目が出る。

（といふ折から、多一向う顱卷にて、トヽントヽンと勢よく太鼓を敲く、吃驚して兩人一齊にストンと尻餅。）

伊吾　わあ。

六平　ひやあ。

伊吾　何ぢや、猿曳か。

六平　豪う、おどしくさつたな。やい〳〵。

（多一委細構はず。）

多一　さあ〳〵廻るは、トヽトン、トヽトン、廻つた、廻つた。トヽトン、トヽトン、小田原外郎口車。さあ、ト

トトン、トトトン、淀の河瀬の水車　お引　トトトン、トトン、

（此内に幇間兩人、立離れて、多一にうしろ向きに立ち、何か頻に手眞似で囁く。）

（五助猿。そろ〳〵と後脚であるいて寄り、伊吾の袖を、ぐいと引く。）

（わつと怯えてべたりと尻餅。六平、これに驚き、同じくストン。五助猿、ちやと莫蓙へ歸つて、トンボを切る。多一兩人の姿を見て、キョトンとして太鼓を止める。）

六平　偉い事ちや。

伊吾　何ないにする。

六平　命ばかりは助けて呉れ。

伊吾　しかし、吃驚三度の數が合うたわ。

六平　次手にも一つの役をのがれたいな。

伊吾　處で……猿曳――相談ぢや。

六平　何と、一口のるまいかな。

多一　へい、なんでござります。差當つて、無性やたらに金子が欲しうござります。御相談に乘りましたら、なんぼにかなりませぬか。

伊吾　分つてある。何でも相談と持懸ければ、いたぶられるに、こりや極つたものぢや。いや、若いもの、拔らぬわえ。

六平　けどな、骨折賃の出しまへが大いと、其方の難が又可恐い。澤山はならぬぞ。

伊吾　見得外聞は云はぬわい。これ、恥を言はんと理が聞えん。早い話が來る道で、鬼廛と云ふ、高利貸に捉らうとして怯えた二人ぢや。

六平　ために、太鼓の音にけてんして、腰を拔いたは見ての通り、豪い事云ふまいぞ。

多一　はい、花簪一本と酒五合買へますれば、一寸の間なら、死んでも大事ござりませぬ。

（と云ふ。兩人顏を見合せ、目を拭ひ、眉につばをつけなどして。）

伊吾　あんた、そりや。ハナカンとかゴンとか云ふ、お錢の符丁かいな。

多一　餅は一盆づゝ、附木の札が附いて居ります。符丁も何もござりませぬ。（と上の空なり）

六平　あゝ、切餅一ツか。まさかに十五兩ではあるまい。二貫と五百くれいぢやな。

多一　名は、美津と申します。

伊吾　はあ、切餅三ツ、七十五錢か。花簪に五合と……成程、其處らが値段ぢやな。

六平　恁うつと、十兩一分三月縛りの利丈はある。些と、可恐くも、存ずるが。

伊吾　まあ、可えわ。百年目ぢや、千日前、木登をする危さには替へられぬ。出しますわ、あんた。扨て相談ぢやが、何と其の猿に木登りは出來ような。

六平　きこう、可い加減な事問ひなされ、木登りの出來ん猿と云ふが何處にある。

伊吾　然うやかて、樹から落ちた猿と云ふことがあるやないかい。

六平　夫れにしてから、登つたに相違ないがな。

伊吾　理合ぢやな。されば木登りは出來ると極めて、こゝに笛が一ツ。(と懷中から)こりや鳥の聲、ピヨ〳〵と鳴く笛ぢや。猿曳さん。あんた藝を仕込んだ其の猿に此の笛持たいて、其處な銀杏の樹へ登らせるぢや。よい時に手眞似で暗號して。ピピピーと吹かせる事には成らんかい。

多一　(引寄せて、つむりを撫で)　銀杏の樹へ、これを上げて、鳥の笛を吹かせますか。

六平　それ〳〵、然うぢや。成るまいかな。

多一　えゝ、お易い事でござります。

伊吾　知つてぢやろ。船場一の大金持、丸官さんの妾に、お珊さま、と云ふ御寮人が、太閤樣の淀の方ぢや、旦那にもまして我まゝでな。當節の自動車などは、血の道に障るとあつて、今日あたり駕籠で乘り出し。先づ其は可いが、此の境內で、晝間時鳥を聞かうとある。女大名、信長公を極め込んで、六平さん、それ何とか云うた。

六平　うゝ、覺えありま山。鳴かずんば鳴かして見せう時鳥。と眉毛がキリ、としたと思へ。

伊吾　お妾を莞爾とさせる爲には、三千里さきへ茘枝を取りに、早馬の策の、尖から狼火を揚げる。旦那のデレ方、此方ども二人で、內意ぢや。

六平　氣休めで可し、汝たち前へ廻つて、天王寺のあの、銀杏の樹の頂邊へ木登りして、鳥笛を吹いて、お珊樣にきかせい。二人のうち屹と申つけたぞ。可厭だと云へば、向後出入お差止め、と參られたわ。昔から幇間の御難と聞えた、慈姑の鶉吞。白玉の油揚。はさみ蟲のわさび醬油、それよりも、雲へ越す、銀杏の梢は可恐い。

伊吾　南無、此の大難救はせ給へ、と神佛を念じたれば、フト思ひついた今の相談。

六平　早速承知をしてくれて、何とも以て難有い。

伊吾　何分頼んだ。

多一　（此の時鳥笛を取つてピーと吹き）あんた、此の音が時鳥と聞えますか。

伊吾　其處はな、何とでも言拔ける。別して其れより、神佛の助けと思ふは。

六平　今も二人で言うた事。あんたの顔ぢや。

多一　可い加減な事おつしやれ。猿曳やよつて、猿に肖たかて、時鳥に肖た顔と云ふは、人間にはござりませぬ。

伊吾　何の〳〵。あんたの顔が、猿や時鳥に肖た言はうものなら、それこそ……なあ。

六平　お珊樣の、あの美しい齒で嚙殺される。御寮人樣が何とも以て御品質な、俳優にな。

伊吾　吃驚する程、よう肖てぢや。其を見せたら立處に癇積も納まるでな。

多一　え丶、なぶるなら、もう聞きませぬ。

六平　いや、なぶるでないが。腹立つなら最う云ふまい。何分頼む。

伊吾　あれ〳〵、御寮人の駕籠が見える。

六平　それ、頼むぞ。

多一　花簪一本。お酒五合。よろしうござりますな。

伊吾　切餅三ッ、七貫五百、合點で居る。（と胸をた丶く）

（多一、手にしたる笛を投げると、五助猿、これを拾ふ。多一眞似すると、猿、笛を銜へる。居ずまひをしやんと直し、多一ぢつと心を入れ、目くばせして。）

多一　お美津に働け。しつかりだ。ハツ。

（と一ツ氣合をかけ樹を仰いで、策にて一つ筵を打つ。五助猿、笛を銜へたまゝ。する〳〵と昇つて木隱る。銀杏の葉高く動く。）

伊吾　喝采。

六平　喝采々々。

（兩人思はず手を拍つ。）

（駕籠舁四人。左右に島田髷白丈長の腰元二人、附添ひて、盛裝したるお珊。乘つて出づ。伊吾、六平駈出して、出迎へ、やがて其駕籠を舁据ゑる。）

伊吾　（つくばいて）御寮人樣、些とお出ましに成りませぬか。

（腰元一人駕籠わきに跪居て、お珊の意を次ぐ。）

腰元　もしな、御寮人樣はな。
六平　はつ。
腰元　時鳥を聞かぬうちは、垂も上げるな。とおつしやるよ。
伊吾　いやもう、鳥の方でもお待受てやら、先刻から鳴いて居ります、それ。
六平　な。（と耳を傾けるやうにして、多一に合圖する）（多一、屹と梢を仰いで、仕方する。――笛の音響く。）
伊吾　扨も、聲かな。
六平　時鳥々々。
腰元　申な。（と呼ぶ）
伊吾　は。
腰元一　御寮人樣がな。今鳴いた鳥は、あれは何や、とおつしやるよ。
六平　はつ。
腰元二　御寮人樣がな、今鳴いた鳥は、あれは何や、とおつしやるよ。
伊吾　えゝ時鳥、時鳥にござります。
腰元一　もしな。
六平　はつ〳〵。

腰元一　御寮人樣がな、今鳴いた鳥は、あれは何や、とおつしやるよ。
六平　えゝ時鳥、時鳥にござります。
腰元一　もしな。
伊吾　はつ〳〵、〳〵。
腰元二　御寮人樣がな、今鳴いた鳥は、あれは何やとおつしやるよ。
伊吾　えゝ、ほとゝ〳〵。
腰元　もしな。
六平　へい〳〵。（伊吾と附着いて小さくなる）
腰元一　今啼いた鳥は、あれは何やとおつしやるよ。
多一　一寸……（幇間二人を見て）只今鳴きましたは、呼子鳥とおつしやりまし。
（これを聞くと、兩人、一度に膝をたゝき、つか〳〵と駕籠に擦寄つて、）
伊吾　御寮人樣、貴女。
六平　蘆之助に肖た如な猿曳が。
伊吾　今鳴きましたは、呼子鳥や、と申しまする。
お瑠　分りました。氣に入つた。（と云ふ。駕籠の垂をあげる、と、顏に扇子を當てゝ

居る直す雪駄に、裾うつくしく片褄出づる時、其扇子に片頬かくる。すつと立出でさまに、しなやかに胸を摺つて、ツト立つと、袖ずれに扇ばつたり落ちる。うつかりと、しばらく、多一の顔を熟と視めて、）

あゝ、美しいぼんちやな。貴方、私は、恥かしい、人のおもちやの姿やよつてな。浮山逢ひもあるまいが、畜生に世話に成るより、些とは儀え、旦那に頼んで乾度出世させてあげますは、すぐにおいでなさいまし。一所に私と、一所に。

（と云ひ〳〵進みて、驚き呆るゝ多一の手を取る。）

もしか旦那が肯かなんだらな、此の手をしつかり放さずにな、——放さずにな。——

（堅くしめて恍惚する。）

——幕——

公孫樹下

場所　逢坂の辻。——餅屋の店

人物

お美津（餅屋の娘）

傳五郎（お美津の祖父）

鬼塵山（高利貸）

丸田官藏（船場の豪商）

多一（丸官の手代。もと猿廻し）

お珊（丸官のおもひもの）

（五助猿きやア〳〵と鳴く。）

（逢阪の辻、餅屋が小店の前なる撞木の上に此の猿一ツのみ、他に人影なし。）

（暫くして腰障子をあけて、お美津の祖父傳五郎、すくみたる伸を打ち、いぢけたる欠伸をする。）

傳五郎　あゝ眠つた事かな。お美津が留守は店が隙、餅もとんと賣れぬによつて、ついうと〳〵とやつてのけた、……夢見て泣くやら笑ふやら、とんと身體を餅に搗いたが、此の餅には餡子つけても黄粉まぶいても買手はないやて……孫の小遣にもならぬかい。

（ぐつたり縁臺に腰を懸ける。縁臺は小さきを一ツ置く。）

（此の處へ、僧形異體の高利貸、鬼坊主塵山片手に大革鞄をさげ、片手に鐵棒をドウと突き、お美津を追立

て出で來る。)

塵山　やい、のろいわ、ちよこ〳〵と刻まずに、大跨に急ぎをれ。

（お美津新つかひに取つて袖を壓へる、此の袂に、高津邊の蛇屋の蛇入れてあり。）

お美津　まあ私はな、胸が痛うなるほど急いで居ますえ。

（片手で胸を壓へる、其の時撞木にて猿が鳴く。）

傳五郎　おゝ娘が歸つた鳴聲ぢや。

（背後に追つて來る塵山を見る。）

ほい、こりやむごらしい。

（緣臺にぐたりとなる。）

お美津　お爺さん、今戻りました。あれ、鹽梅が悪いかい。

傳五郎　いや何でもない。これは……御隱居、御一所でございますか。

塵山　一所も後生もあつたものか。途中で見懸けたによつて引攫んで戻つた……商賣に精入れず、のら〳〵と出てうせる……爺い、汝も汝ぢや、猿と一所に繋いでも置かずに、勝手に何處へ出してやる。

傳五郎　他と違ひまする、おまゐりぢや、信心どこでござりまするでの。

塵山　措けやい、何の信心ぢや知れるかい。

傳五郎　商賣繁昌と拜みまする、其の信心でござりまするが。

塵山　其の信心ぢやつたらな、駒下駄へらして歩行かずと、店の番をしてけつかれ。又ぢや、わざ〳〵出向いて、堂社に手を合さずと、日に二度三度顏を見せる、此の法體の佛を拜んで、寐起の世話に附添うてな、其の手で肩腰をさすらうなら、何の苦界もあるまいに……心からぢや、これ、やい！　今し方も船場のな、丸官が角店の裏口を拜む處を、追立てゝ連れて來た。

（お美津一寸障子にかくれて、其の時、紙袋の蛇を疊の隅に置く。）

塵山　那麼信心したければ、澤山せい。嘸御利益で商賣は繁昌ぢやろ。どりや〳〵、例の通り賣上げを検べてくれう。

（つか〳〵と入り賣溜の笊を覗く。）

そりや見され、餘所の信心の利益はあつても、此の佛の罰が當つて、狀はない、些とも賣れぬが、まづ一ツ。

（目笊を倒に革鞄の口をパクリと大きく、打ちまけながら。）

爺い、此では濟むまいか。くどいほど言うて聞かす、此のお美津が店に立つて客を呼ばいで、誰が來て餅を買う？……汝や居眠りでもしやせぬか、寐ぼけ面洗ひをれ。やい、出い。

（お美津を店先へ邪慳に引立つる）

さあ喚け、半日なまけた埋合せぢや、これえ……呼ばれえ、餅買うてな、と鳴かぬかい。

お美津　あい〳〵、呼ぶけれどな、一寸待つておくれやす。

塵山　何を待てぢやい、もうこれ日もたんと明るうない。さあ呼ばぬかい。呼ばぬと、汝が尻蹈んで音を上げさせるぞ。

お美津　はい。

傳五郎　もし御隱居樣、かはいげに、息せいて歸つてから、まだ湯を一ツ飲みませぬ。一息なと息つかせてやつて下さりませぬか。

塵山　聲を吐かせ。何ぢや、歸つてから湯を飲まぬ、途中づから茶をくらつたか、茶の子飲んだか知れるかい、巾着見せろ。

お美津　あれ。

（塵山引摑んであけて見て、がま口を放り出す。）

塵山　それ見をれ、小娘が、小袋の、小遣をつかひをる。油斷のならぬ事ばかりぢや。汝等湯のかはりに顔を干すぞ。やい、呼べ、呼ばぬかい……一見屋の格子から泣聲を出させぬ、此の佛のお慈悲を思うて精出して、客を呼べ、それともお美津や。……

（ニヤリとして）

心を入れなほいて、此の佛をさすつてくれぬか。爺やいそちら向け。……俺の方でさすらうか。

お美津　可厭らしい、おいておくれやす。

（とつんとする。塵山クヮツと目を剝く。）

塵山　さあ、呼ばれい、呼ばぬと、おのれ、たゞは置かぬぞ、佛の罰ぢや、もつと出ろ、もつと出ろ。

（舞臺の端近く鐵棒の尖で突き出して）

やい、呼びをらぬか。

（お美津哀れに聲を上げて）

お美津　――お寄りやす、餅お買ひやす、お土産買うてお くれやす。――

（五助猿きやア〳〵と鳴く。）

傳五郎　あゝ、夢になれ、夢になれ……こりや、地獄ぢや。

塵山　さて、取立てが又忙しい。阿魔、なまけるな、爺い、

おのれにも言ひ附けた。
（のそり〳〵引込みながら、尻目にじろ〳〵。）

お美津　――お寄りやす、お買ひやす、お土産買うておくれやす。――
（傳五郎。よろりと立ち、塵山を彼方に睨む。）

傳五郎　えゝ、これを見て生命が惜いか。刺青にも恥しい、おれも男だ、眞裸、八貫屋の傳五郎、も一度息杖持つてぬかい。
（齒噛をなし、えい、と取つて、兩手に緣臺を引上げむとして、一所にのめる。）
ウム。――
（苦しむ。）
（お美津かけ寄る。塵山つか〳〵と戻つて睨む。よき程より、多一出で、塵山に氣をかれ、こがくれ居る。此の時出ようとしてためらふ。お美津は塵山に睨まれて、おど〳〵、傳五郎の肩を叩きながら、）

お美津　――お寄りやす、餅をお買やす、お土産買うておくれやす。――

塵山　忘れるな、汝が料簡一ツぢやわい。
（大跨に歸る。）

お美津　――お寄りやす、……餅お買ひやす……お土産買うて……
（涙に絕え〳〵となつて、傳五郎の肩に泣伏す。多一馳せ出で、緣臺の端にて、）

多一　お寄りやす、餅お買ひやす、お土産買うておくれやす。
（うるみ聲にて口惜しさうに、見えぬ塵山のあとを見ながら言ふ、五助猿駈け寄つて袂にからむ。其の頭を撫づる時お美津顏を上げて多一を見る。多一目配せ、猿を追ひ遣ると、猿、撞木の蔭に入る。其の時ツゝと寄つてお美津と竝び――浮り片手づゝ、しつかり取り合ひ、二人片手づゝ兩方、傳五郎の左右の肩を叩きながら、一所に聲を合す。）

兩人　――お土産買うておくれやす。――
（傳五郎切なげに。）

傳五郎　お美津。――
（と呼ぶ。）

お美津　あい、お爺さん、たんと惡いかい。
（顏を胸へ宛てゝ顏を覗く。其の手を取り、また肩越しに、多一の手を、ひしと取る。）

傳五郎　心持はもう可いが、お美津、多一どん、恁うして早く死水が取つて貰ひたい。

（と泣く。背中と膝とに、二人とも泣き伏す。多一心付き、わざと笑顔になる。）

多一　あゝ、餘り胸が充滿で、思つた事も忘れて居ました。お爺さん、お金子が此處に二十圓計りございます。

（懐中から紙入を。）

何に使はうではなし、此方の世帶の手傳ひにと思ひますが、もう些と纏りませんと、些も極りの着かん事を存じて居りますから、しばらくは密としまうて置く、つもりではござりましたけれど、唯今のやうな樣子を見ますと、聲を出して泣くものよりは、何にも言はぬ此の胸が、裂けるやうで、辛抱がなりかねます。あの、一寸延びれば尺延びるとか言ひます通り、此だけなりと、鬼坊主へお遣しなされまし。五日や七日は、お爺さん、あんたが手足を伸いておやすみでも、お美津さんがお手玉とつて遊んでも、冥土の使が、可恐しい、鐵棒ついて見廻はりに來ますまい。どうぞ、然うなすつて下さりまし。

傳五郎　何にも言はぬ多一どん。

（涙を拭ひ押頂き。）

此をのめ〳〵と請取つては、お美津を餌にでもする樣で、心には濟まぬが、の。今更湯をば水にする他人行儀な中ではない、志　頂いた。主が情は駕籠を舁くより、鐘より重いけれど、お庇で肩が拔けた樣に輕うなつた。後とも言はんで、此の足で一走りぢや。這奴、塵山の横面へ此の金子を叩き付けう！……いや、婿どのが手柄の寶ぢや、恭しく遣はすぢやて。

お美津　お爺さん一寸。

（わが袂を握つて。）

あの、……

（と多一に。）

あんた、澤山のお金子でござんすな。つい、此間も十圓の上、其の今日も又……何うしてそれを持つておいでなさいますえ。

多一　何うして持つてと言うて、それは私のに違ひはないもの。

お美津　それはな、あんたのに違ひはないけれどな。

（熟と顏を見る。）、

多一　違ひはないけれど〻言うて、お美津さん何の事や。

お美津　何うしてお金子をお儲けやしたえ。

多一　儲けると言うて、まだ追ひまはしの奉公中、自分で商賣のしやうはない、金子は御主人から貰ひました。

お美津　丸宮の旦那さんかえ。

多一　旦那は大勢の奉公人、依怙贔屓に、私に計り小遣は下さらぬ。が、御寮人様がお心づけ。――多一や內證で――とおつしやつてな。

お美津　多一さん、內證でとおつしやつて……あの綺麗な、な。

多一　あの。

お美津　あの、美しい、以前は南新地で評判の藝妓さんの、御寮人、お珊様が、多一さん、內證でとおつしやつてか。

（多一少時無言。）

多一　は、は、……何やと思や、譯もないこと、お爺さん、憂慮はありません。早くおつかひなさるがいゝ。

お美津　旦那さんに內證のお金子を、堅氣な奉公する人が、御寮人様に貰うても可い事か。――五ちやん、お前はどう思ふえ。

（後向きにツンとして故と猿に訊く傳五郎笑ひ出し。）

傳五郎　猿に相談、猿利口ぢや、丁ど可いわ。やい／＼、お美津、爺の前で見たうもない、岡焼もち遠慮せい。秋刀魚は鰌と違ふ、故に長い。鴨々は悋氣を言はず、かるが故に深い中ぢやとの、膝栗毛にあると言うて、芝居うらの講釋場で聞いて覺えた。氣は廣う持つたが可い。昔の武士ぢや、今の軍人と違うて、商人は利勘が先きぢや。下さるものは取つておけさの諺通り。分けてあの御寮人様は、御自分がお見立てゝ、世話なされた多一どんぢや。蔭になり、日向になり、お心付下さるは、こりや當り前、何も不思議な事はない。義理がすまぬは私が方で、多一どん、此の金子の出し手には、濟まぬ事も遠慮もない。先づ一走り屆けて來う、あとで喧嘩を、……必ず人に見られるな。

（つか／＼行きかけて、やア、と後しざりに戻る。）

多一どん／＼、あれへ見えたは――丸宮様ぢや。

多一　えゝ、旦那様が……さあ大切な事を――私と言へば――うつかり忘れるにも程のあつた。お留守中に用が出來て、お出先の茶屋へ駈つけたれど、今し方藝妓どもお連れなされて、逢阪の此處へ、紅葉見の醉ざましにお出まし、と聞いたについて、又走りまうて來たものを。

（むかうを見て。）

成程、大勢、綺麗なのが。……おゝ、御寮人様も御一所

に……

お美津　ほんに孔雀の中の、また天人、御寮人様は水際が立つて見えるなあ、多一さん。

（多一默つて一寸つむりをかく。）

傳五郎　あの御同勢が、此處へお休みにならうも知れぬ。お美津一人ぢや手が足りまい、どれ、裏の井戸端へ行つて、茶碗の洗ひ方なとしようかな。

（手桶を提げて小家の外圍について入る。）

お美津　あんた御寮人様がおいでやよつて、嘸、嬉しからうな。あゝ、羨ましい、えゝ、口惜しい。

（手拭を丸げて投げる。多一は改りたる體。且つ慌しげに、）

多一　お美津、お美津といふになあ。これ一寸、意地の悪い、いろ〳〵樣子もある事で、御寮人様には、あんたと私が眞の兄妹や言うてある。御寮人様も、些ともそれを疑うて居なさらぬ處を、かれこれがあつては、えらい濟まぬ事ばかりに、なるよつて、これ頼む。そんな事言はんと置いて、——そしてな、……此處に立つて待つて居ては工合が悪い。あとから駈け着けた分にして、御機嫌を見て旦那に用を言ふつもり。あれ、もう見える。私は一先づ裏口へ入るによつて、もしかお休みなさつたら、あんた、もてなしをよう頼んだ、え、可いかい、これ。

（お美津不承々々に頷く。多一は姿をかはして入る。と猿すがつてからむ、抱いて行く。）

（お美津一人立ち、其方を見込む。）

お休みやす……

（呼び懸けて、すれた樣子。ツと店へ入つて、餅を賣る棚の蔭に、うしろ向く。）

（此の折から、丸田官藏、大生酔。眼の血走る酒亂の形相、年増の藝者二人、若いのが二人、仲居一人、花やかに連立つたる、其の若い妓二人は、後しざりに一人と手を組み、手車の眞似す。其の中へ入りて、丸官手を振る事泳ぐが如く、大聲にて喚きながらよろめき出づ。）

丸官　誰の〳〵手車ア——誰の〳〵手車ア——とけつかるわい。汝等これ、鈍太郎どのゝ手車ア、丸官様の手車ア——と囃さんかい。

（お珊は一行より少し遲れて靜に出づ。）

やい、囃せと言ふに。

（と強く言つて、）

誰の〳〵手車ア。

藝妓達　鈍太郎どのゝ手車ア。

丸官　誰の〳〵手車ア。

藝妓達　丸官樣の手車ア

丸官　わはゝゝゝゝ。

（と身體中ゆすり笑ひをして、どつかと床几に倒れ込み、いきなり大の字。）

こりや、とんと、己が家の下雪隱といふ掘立小屋だ。壁を突拔いても此の人數は休まれぬ、お珊は此處へ來い。

（と床几を指す。）

（お珊立どまる。）

仲居　御寮人樣あれへ、

（と小腰を屈めて言ふ。）

（お珊は無言にて丸官の枕頭へ斜に懸ける。）

（丸官、直ぐに其の膝に肱をかけながら、）

丸官　汝等は皆、一足前へ去んで複佐で待てい。此の處、豐臣太閤、さし向ひでおはしましたい。むら〳〵と目に邪魔ぢや、行きくされ。

藝妓達　お珊さま、お先へ。

仲居　おゆるりと。

（皆々もみぢの立樹に木隱れ行く。）

丸官　あの娘、茶をくれ。

お美津　はい〳〵。

（と片だすきにて盆に持て運ぶ。）

（お珊は會釋して顏を見る。）

（丸官、茶を一息に飲み、吐き出して、）

丸官　熱いわい、火傷をさすか。信長公に獻ずる茶は、初手は生ぬると極つたものだ。汝も出世の出來ない奴だわ。

（と茶碗を投げる。）

（お美津ハッとする。）

丸官　やあ、可怖がる事はない。よい娘だ、此處へ來て足をさすれ、大きにだるいわ。船場の丸官の足だ、黃金の延棒だと思うてさすれ。さすらぬかい。

（お美津ためらひながら、やがて下に居てすなほにさする。多一、小腰を屈めて出で、土に手をつくやうにして、）

多一　旦那樣。

丸官　やゝ、多一だな、わりや。

多一　はい、お使ひに參りましてござります。

丸官　何の使ひぢや、もつと、近くへ來い。

（床几に引寄せ、多一の低聲にて口上言ふを――）

ふ、ふ、ふ、ふん、

（と鼻で聞いて、）

こうれ、旦那のな、旦那の、此處に居るのが何ないして知れた。……ふ、ふ、ふん、ふん……えゝ愚圖々々吐すから醉うた頭がむしやくしやするわ。お珊、ちやと膝枕をさせぬかい。

（腰かけたるお珊の下搔の褄を、下締なりにぐつと掴んで、引摺り寄せると、冷いやうな水淺黄の縮緬の扱帶はらりと亂れて、友染の長襦袢すらりと成る。其の膝へ、丸官石頭を、ぐわつしと乘せ、萌黄色の靴足袋を、ぬい、と蹴て伸ばすと、足を擦り居たるお美津はたと轉ぶ。）

やあ、多一、そんな用事よりは、うぬが惚れた女を、こないされた處は、どないな氣がするのや。

（と、ふんぞつて言ふ。多一ふるへながら。）

多一　早くお茶を……な、それ、ぬるまにして。

（と目くばせして、お美津を店の内へ立たせる。）

（お珊は、俤の蜘蛛に遣はるゝ如く、なよ／＼として丸官の自由になる。丸官、無慙に解けかゝりたるお珊の下締を、手に搦んでひれくりながら、）

丸官　不義ものゝ白い胸を搔ッさばいて、蒼い腸を引ずり出いたやうな、此の狀を何と思ふ。うむ、多一、やい、多一。

（と言ひ／＼、ぐい／＼扱帶を引出しつゝ、ごう／＼鼾たかく。お珊は面を背け、黃金の煙管にて煙草を燻らす。）

（多一、默つてさし俯く。其の肩わなゝく。傳五郎出でゝ、こがくれながら、憂慮しげに此方を覗ふ。）

（丸官暫くありて、伸をして、お珊の膝に半ば起き。）

丸官　口中粘ついて、あゝ、かなはん。水菓子ないか。うう、其處に柿がある。餅屋の阿魔、皮剝けい。

（とお美津に言つて、多一をじろり。然も輕侮したる體にて、）

汝や何しとる。

多一　はい、旦那樣お目覺遊ばしまする迄、お返事をお待ち申しましてございます。

丸官　何ぢや、返事を待つた。間拔け。……汝が今し方の口上は何と言うた……心齋橋の糠甚が勘定を取りに來たで、何ない計らひませうと吐いた筈だ。な、旦那の耳が

違うたか。

多一　仰せられます通り、心斎橋の糠甚様御自身おいでゝございますによつて、如何計ひませうか、思召しの程を伺うて參れと、喜兵衛どんが申されますので、急いで出ましたのでございます。

丸官　默れ……やい、つべこべと、われが間拔けだ。分らんか。これ勘定欲しい、と取りに來た金子なら拂うて與らすは知れた事だ。何吐す！……たかゞ三百や五百の金子、うんもすんもあるものかい。紙幣の束で鼻かんで、糠甚の頰げたへ敲つけろ、と番頭に然う吐かせ。

多一　はい、はい。

（と手を支く。）

丸官　早う去ね、こない場所へ、のこ〳〵と生白い面出しくさつて、早う去ね、去ねやい。

多一　はい、それでは五百圓、仕拂ひますでございます。

（丸官、默つて頷く。）

多一　御免遊ばしまし。

（と行きかける。）

丸官　多一、多一、多一、待てい。

多一　はつ。

（と引返して又手を支く。）

（丸官、お珊の膝を腹這ひに乘出す。）

丸官　えい、……と其何ぢや……心斎橋の糠原甚兵衛、糠甚が金子くれい、五百圓拂うてくれいと、使が來て居て待つぢやな。

多一　はい、先刻からお待ちなされてゞございます。

丸官　ふむ……いや向うから來たら催促や、催促ぢやい。これ、誰だと思ふ、丸官だ。……此の丸官はな、催促されて金子出いた覺えはごあらん、へゝん。

（お珊の顏を見て。）

寄越せ。

（とお美津が此の折から剝いて立ち寄る、其の袂を引手繰り、丸噛りにポリ〳〵と食ふ。）

（お珊は初めて褄を合せる。）

（多一うつむき居る。）

（丸官更に險しき顏して、じろりと多一を睨めつけて）

丸官　何しとる。汝や其處に何しとる、これ。

多一　えゝ、それでございますれば、番頭さんに、其の通り申しますでございます。

（立つて行きかける。）

丸官　丁稚々々、素丁稚。
（と又呼ぶ、多一立停る。）
やい、白丁稚……へゝん。
（とお珊の顏をじろり。）
丁稚、待て。
（多一引返して三度手を支く。）
丸官　これ、汝や、おはい〳〵で、用をすまいた顏色で、人間並に、足ばかりで立つて行くが、歸つたら番頭に何と言うて返事する氣や。何だ？……拂ふな、と俺が言ひつけたから、其通り申します、申ますが聞いて呆れるわい。これ、條理のない金子は取りにや來ん、取りに來た金子は拂はにやならん。これ、拂ふべき金子を拂はいで、主人の一分が立つと思ふか、五百圓や七百圓の、
（大聲になり）
端金で、
（と底力を入れる。）
噛、端金を、あゝも惩うもあるものかい。俺が拂ふなと言うたかて拂へ。さつさと一束にして絲甚に突附けろ……歸れ、大白癡。其の位な事が分らんか。
（傳五郎、見かねて氣を揉み詰め、又肩を抱へて撞となる。）
（多一、此の中にもハツと驚き、手眞似でお美津を其方へやりつゝ。）
多一　鈍な私でもよう分りましてございます、はい、畏りました。
（と立ちかける。）
（お美津、此の時傳五郎の肩を擦つて泣く。）
丸官　待ちをれ、分つたと言うたな……分つたか。
多一　分りました。
丸官　何、分つた、偉い！　出來す、ふゝん、分つたら言うて見い、歸つて何と返事をする。
多一　…………
丸官　しやべらんか、しやべれ、一應は聞いて置く。丸田官藏、丸官、後學のために承りたい、ふん。
（鼻を仰向け、耳を多一に突き着けて、あり合せたお珊の黃金煙管を握つて、立續けに吹かす。其の吸口にてお珊の頰のあたりを、ぐい〳〵と邪險につゝいて、）
これ、どんな氣がする。
（と、ニヤリと笑ふ、お珊うつむく。）
（多一おど〳〵しながら）

多一　あの、番頭さんに……あの、

丸官　判然言へ、ちやんと口上を以て吐かせ。うん？

多一　番頭さんに金子をば、其の、あの、

丸官　番頭に〳〵、金子を、金子。

多一　あの、其の拂ひますやうに……

丸官　何だ、金子を拂へだ、だ、默れ……沙汰過ぎた青二才。

（おそろしき顏になり。）

誰か、……

（と吠えるやうな聲して。）

誰が拂へと言うた。誰が、これ、五百圓は大金だぞ。丸官。たかを聞いてさへぶる〳〵する。これ、この通りふるへるわい。

（胴肩を一ッに搖り上げて。）

大膽ものめが。土性骨の太い奴や。主人の物だとたかを括つて、大枚の金子を糠とも糟とも思ひくさらん。汝や、天王寺の銀杏の樹の下に筵敷いて、猿を廻いた、乞食の時を忘れたか、

（多一泣きながら。）

多一　御免なさいまし。

（はつと退いて突伏す。）

丸官　あやまるに及ばん、よく考へて、此處は一ッ何と計ふべきか、其處へ喫ひ着いて分別して返答せい。石になるまで、――汝や動くな。

（くるりと柿を引手繰つて、かつ〳〵と喫ふ。）

（多一身悶えしてゐざり出づ。）

多一　旦那樣〳〵。

丸官　早いな、汝のやうな下根な奴には、三年掛らうと思うた分別が今の間に着いたは偉い。俺を呼ぶからには工夫がついたな、先づ褒美をやる、そりや、頂け。

（柿のたねを多一の顏へ叩き付ける。多一身も世もあられぬ狀して震へながら。）

多一　御寮人樣。

（と言ふ。お珊ちつと視る。）

もし、何うしましたら宜しいのでございませう。

（そつと袂に縋る。）

丸官　猿曳きめ！　汝や主人の見る前で、俺の妾の膝を抱いたな！……………畜生！

（喚くや否や、伸懸つて、雁首高く、多一の額を打つ。）

（お美津、はつと泣き伏す。）

（傳五郎其のお美津の手を取つて、とぼ〳〵と床几の前へ出で、蹲る。）

傳五郎　はい、御免なさりまし、これは餅屋の爺にござります。申上げまして又何かお氣に障らうも知れませぬが、其の多一どんは、此なるお美津と前々から堅い約束がござりましてな、はい、爺が見極めて居ります。なか〳〵餘所心のあるやうな若い衆ではござりませぬ。お内樣へ奉公大事に、狗の子ほども目鼻があく樣になりましたれば、一日半時も早う夫婦にして遣りたいと、そればかりを樂みに活きて居ります。どのやうな仕損じ致いたかは存じませぬが、七十になります爺に面じて、御料簡下さりまして、猶この上とも、御不便をお懸け下されまするやう、もし、拜みます。旦那樣、此の通りでござります。

（と頭を下げる。）

（お珊思はず聲を懸け、）

お珊　兄妹を夫婦にするとは、あゝ、汚らはしい。ほんの當座の紛らかしにも、そんな畜生のやうな事、言ふものぢやござんせぬ。

（と袖を拂ふ。）

傳五郎　へゝゝゝ、若いものが、朋輩衆へも極りの惡さに、夫婦とはよう申さぬのでござりませう。猿が鵺になる法もあれ、滅相な兄妹ではござりませぬ。

（お珊、ものをも言はず、我が手を引きしめて胸を抱く。）

（丸官心とけて高笑ひ。）

丸官　はゝゝ、約束した女の外に、何にもさらす働きのある丁稚でない。やい、それで分つた。番頭の用事を得たり賢しで、此處の娘に逢ひに來たのぢや。今日の朱葉見は、初手お珊ばかり出る處、中途から俺が連れ立つた──それを知らずに、多一めが、あひゞきになと、申合せてうせたと思うた。うむ、療治代は小遣。追つて、しこたまくれて遣らう。あゝ、氣が盡きた、お珊早う榎佐で飲み直さう。

（むつくりと起きて立つて出る。）

お珊　あゝ、つむりが痛さうな。

（額を抑へたまゝ俯伏し居る多一を見る。）

お珊　旦那、あんたのしそこなひ、私が一寸介抱する。

（懷紙を疵にあて、扱帶を解いてしつかり捲く。）

丸官　これ、でれ〳〵と何するのや。

（お珊は柿を剝きたるお美津の小庖丁を、ツと取つ

て。)

お珊　介抱したが悪かつたら、何うなりとしておくれやす。

(と突きつける。)

(丸官一足さがる。)

さあ、お殺しやす。

(丸官又一足さがる。)

(多一顔を上げて、お珊と見合せる。)

覺悟はした。

(と逆手に取つて屹と見る。)

(藝妓連、ばら〳〵出づ。)

藝妓連　お遲うござんすな、お迎ひに。

(お珊、ハタと小庖丁を落す。)

丸官　可いわ。殺すのも追つての事ぢや、可いから、來い。

(お珊の手を引く。一同入る。)

(傳五郎、ほつと息。)

傳五郎　精と先づ市が榮えた。連れには重寶な年寄ぢやが、解けた緣には邪魔なもの。さあ、塵山が許へ出懸けましよ。

(又金子を頂く。)

お美津　ころばんやうにな。

傳五郎　多一どんの身替りに、轉んで怪我なりとしたいわい。

(繃帶したる額を見て首垂れ行く。)

(多一ほろりとする。)

多一　おゝ、五助、澤山可愛がつて貰ふやら、艶がいゝな。

(頭を撫でつゝ。)

それ〳〵お土産。

(と猿に柿をやり。)

お土産。

お美津　五ッちやん嬉しかろな、多一さんのお土産……

多一　お土産……お土産……お土産買うておくれやす、餅お買ひやす。……お美津さん、つらかろう。

お美津　多一さん、あんたもつらうござんせうな。

(目と目を見合せ涙ぐむ。と、五助其の土産の柿を頂いたまゝ、飯べず、下に落し、のし懸るやうに縋り〳〵、多一の額を繃帶の上からさする。)

多一　おゝ。

(と言つて、抱きしめる。)

お美津　はつ。

(と泣き伏す。)

多一（五助の手を引いた儘、其のお美津の脊を撫でつゝ、
片隅なる件の紙袋に目を着ける。）

多一　お美津さん、あんた、蛇屋の蛇買うたかい。

お美津　え。
（顔を上げ、輝る色する。）

多一　隠さずと大事ない、私も買うた。
（袂にさげて居て、先刻傳五郎の肩をさする時、縁臺にさし置いた風呂敷の包をとつて上げる。同じ一包の紙袋。）
これ見ておくれ……一時も早う出世して、あんた達二人に苦勞させまいと、精一杯禁厭はしたけれど、勝手に店があけられぬ。……高津の蛇穴へ夜さり持つて行く事が出來ぬによつて、他人に頼まれるものではなし、あんたに一ッ相談や。よい次手と思うて持つては來たが、途中やつと氣が付けば、あんたは古今の蛇嫌ひぢや。こりやもう氣ぶりにも見せられぬと、考へなほして居たところ。今さららしう、何の爲の願懸けぢやなぞと、あらためて聞きはせぬ。……よう、あんた、其の袋持たれたなあ。

お美津　蛇をいらう女子やと、氣に懸けて下さいますなえ。日増に思ひ迫つたよつて……目も塞がずにうけて來た。多一さん、あんたと一所になれるのやつたら、蛇の穴でも、蝮の巣も……

多一　火水の中とて……私も同一ぢや。五助や、私等の手を曳いて、奥山へなと、

お美津　野末へなと。

多一　連れて行つてくれぬかい。

お美津　やゝはんが出來たらば、同じ名をつけような。

多一　おゝ、大分、其處らにちら／＼と灯が點いた。

お美津　内も灯をともさうな。

多一　いや、もう些と暗い方が、人に顏が見えいで、可い。

お美津　どんな人より、御主人に見えると惡いな。

多一　當前、身の上や。

お美津　御主人より……御寮人樣になあ。

多一　又お美津さん、それを言ふ。

お美津　あんた、御寮人樣は……美しいな。

多一　や、何で人の風説をする。……お美津。あれ／＼、御寮人樣が引き返して——向うから。

お美津　そしたら店の戸をしめて、中から鍵を懸けようかえ。

多一　串戲やない、眞個や。それ腰元の勝に、もみぢの枝

さげさせて……やア衣の綾、帯の光、あの褄捌きは御寮人様。あゝ、ひよんな處へ。兄妹でないのが知れた上、こゝに居る處を見られては、えゝ、飛んでもない、こりや何うする。

お美津　私が居ては悪いやろ、此處は私の内でござんす。些とも私は恐うないのえ。

多一　奉公の身ぢや、堪忍せい。えゝもう其處へ。それ、こりや動くと尚ほ見える……もう一間奥がない事か、お美津何うしよう……えゝ、鈍な。空の長持も持たぬ家やな。飯櫃の蓋なとあけぬか。鼠になつても隠れたい。猿の形が羨しい南無三寶、目の前へ天降つた。

（慌てゝ縁の下へ身をもぐる。）

（お美津、素知らぬ顔して舞臺の端近に出でゝ、）

お美津　――お寄りやす、餅お買ひやす、お土産買うておくれやす。――

（お珊はゝ笑みながら、）

お珊　一寸又寄せてもらひに來ました。餅を買ひませうな、お土産買ひませう。

（店頭へ立つ。）

（お美津、氣を呑まれた顔色にて顔を見る。）

お珊　あのな、別に挨拶はせぬけれど、最う貴女とはお知己、先刻は連が連やによつて、よう言葉も交はさいで、殘り惜しう思ひました。今度はゆつくり話をしような。

（とすまして言ふ。）

（お美津、今の其のゆつくりに、心おかれてゝ、）

お美津　御寮人さん、申譯がござんせんが、あの、私は精出いて、商ひせんとならんよつて、ゆつくりお話も聞かれませぬ。御許しやす。……あゝ、――お寄りやす餅お買ひやす、お土産買うておくれやす。――

（と氣もそゞろに呼ぶ。）

お珊　必ず商ひの邪魔はせぬ、休まして貰ひます。

（店の一間へ入りさうにす。）

（お美津おど／＼して、）

お美津　これへ、お懸けやす。

（縁臺を取つて寄せる。）

お珊　あまり端近や。ほゝゝ、これは貴女の方で言ふ事やなあ。

（つか／＼入つて、腰を懸ける。）

お美津　あれ、御寮人様、這麼しゆみた店やよつて、敷かせます座蒲團もござんせぬ。お腰が痛うござんせうに、

縁臺の方がましやよつて、此處へ懸けておくれやす。

お珊　何のあんた、此の床は算盤責、膝へ石を抱かされうと、可愛い、……いゝや、かはつた人の見て居る前で、厭な旦那の石頭で、膝枕をされました。筋も骨も碎けるやうな苦しさ、つらさ、術なさにくらぶれば、冷たい板も羽蒲團、眞綿より柔かい。恁うして茶店の店先で、女が膚を見られるやうな、恥しい、口惜しい、無念な思ひをさせられても、凝と私は辛抱した、凝と堪へた。誰の爲と言ふでもない、自分が果敢ない姿つとめのせゐなれば、自業自得と斷念めるが、あんた見て知つてゞあらう、察してくれたが可うござんす。

（多一其の時、緣の下より手を出し、お珊の足を取つて押し頂く。とお珊、はつと、勿體ない、と言ふ思ひ入れにて。）

お珊　一ツ飮んで、胸が切ない、おゝ、辛度。

（足を揃へた儘、斜に横坐りに兩膝先へ、腰を捻つて、疊に上つて、疲れたる風情に、がつくり手を支く。と、其の手、蛇を入れたる袋に障る。凝と見て、屹となる。）

お美津　御寮人さん、私や、むごい、辛い情ない事を見てなあ、那麼悲しい思ひをするほどなら、それなりに死んだが増と思ふよつて、あんたの、其の、お心を察して居る間もござんせんえ。

お珊　あゝ、可愛らしい、美しい姐さんが、那麼愛想盡しな不人情、言ふものぢやござんせぬ。

お美津　はい、どうせ私は不人情、人でなし。――あんたのやうな、なあ、五ッちやん。

（猿に近々と顏を寄せて。）

五ッちやんも獸やよつて御寮人さんの心は知らんやろ。私も知らんえ。

お珊　無理はない、お美津さん、氣に障つたらお許しやす。あんたの名もちやんと知つて居る……少し考へがあつたよつて、多一さんのあゝした處を、故と默つて見て居つた。

お美津　よう名を覺えておくれやした。私は美津でござんすけれど、多一さんとやら、言ふ人は、御寮人さんの可愛いお方、私には知らぬ他人でござんす。

お珊　其のあんたの他人をな、改めて介抱もし、お詫も屹とするつもり。お美津さん、堪忍しておくれやす。……仲直りの酒とも言へぬ、湯なと一ツ、あんたの手からお

くれやすな。

お美津　湯はまだ沸かぬ、冷たうござんす。

お珊　水なりと欲しいなあ。

（と凛々しい聲。）

今此處へ手をついたら、對の袋の中が動いた、びく／＼と、二ッ動いた。

お美津　えゝ。

お珊　もう、これが身體へ響いて、血が騒ぐ、身が動く。

（と丁と膝もて床を打つて。）

筋が引きつる、胸が震ふ、動悸が打つ。先刻に變らぬ思ひがする……水なと飲ませておくれやす。

お美津　手桶にござんす、めし上がれ。

お珊　いゝえ、お美津さんの手からでないと、此の胸の苦しさが休まらぬ……あんた。多一さんは醫者にも懸ける。私が附添つて介抱する。其の上に、お詫には、二千圓が三千圓でも大事ない、店の餅を皆買はう　商賣を休んで、なかよう話をおしやすな。

お美津　私や、貴女に、あやかりたい、お羨しうござんす。餘所の人の介抱が、したければなさいます。附添ひたければ、お附添ひ。一ッ五錢どりの餡餅、それをば二千圓、三千圓、五千圓にもお買ひなさんす。……那麼御寮人さんを知己にお持ちやして、あの、餘所の人は、嘸々々定めし／＼嬉しかろ。……あゝ、情ない。私はな、附添ひたくも、介抱したくも……世間をかねて口も利かれぬ。口惜しいな。二千圓三千圓五千圓の餡餅を、一錢二錢賣るために、お絲さんの肩もよう叩かずに鵙より哀しい聲で泣く。……しかない、果敢ない、働きのない、此身は畜生に劣つてもな、女の一念これお見やす……お醫者さんのお使ひも出來ぬかはり、せめて何處かの人さんと、同じ痛いめして見せる。

（小庖丁を拾つて取り上げ、袖を開いた雪なす小腕、二の腕へ切尖で、一文字にさつと血を引く。手拭とつて、しかと押へ、口に片端くはへながら。）

あなたが餘り羨しい。仕方や形には出來いでも、眞實ばかりは負けはせぬえ。餅を買うておくれやすなら、極めた値の、端錢で買うておくれやす。……一厘二厘の儲けを溜めても、大事な人に、煙草位は買ふのでござんす。眞個に、御大家の御寮人さんの美しさに見惚れずと、餅屋の娘は、商ひに精を出そ。

（つか／＼と端へ出で、此の時自信のある聲にて、）

――お寄りやす、餅お買ひやす、お土産買うておくれやす。――

（多一たまり兼ねて、縁の下よりわなゝきつゝ出で、）

多一　お美津！

（と呼んで、）

生命はいらぬ、殺してくれ。

（直に、はたとお珊の前に手を支へる。と、五助猿、竝んで同じく手を支く。）

もし、御寮人様、お助け下さいまし。

（と切なる聲。）

（お珊凝と見て笑を含み、）

お珊　多一さん、殺しもせぬ、が、助けもせぬえ。

多一　然やつたら、私のからだは、どないな事になりますやろ。

（とあまりの事に、多一、きよとんとしてぞ居たりける。）

（お珊は無言にて、それまで傍にぢつと手を支へ控へたる、腰元の耳に口して打囁く。）

腰元　はい。

（急ぎ足にて駈け行く。）

お珊　お美津さん、もう何にも言はずとな、此處へ來て。

……………

（精一杯、言つてのけたあとなれば、弱き娘の氣ぬけのしたる樣なるを、傍に寄らせ、改めて多一に向ひ、）

あんた、殺しもせず、助けもせず、何ないすると言ひなさんす。

多一　へい……

（とまだうつかりして居る。）

お珊　そしたらばな、宙へふら〳〵と釣つてあげるわ。

（と又微笑む。）

多一　へい、宙へふは〳〵と上りますか。然やと、幽靈になりますか。

お珊　確乎おしやす。多一さんが幽靈になんなはると、お美津さんが化けて出なんす……おゝ、こは。

（と顏をかくす。）

（腰元先に立ち、駕籠舁附添ひ、駕籠を二挺釣つて出づ。）

お珊　さあ多一さん、お美津さんも、宙へ上げるが不承知かい。何にも言はずと私の寮へ送られやす。

（お美津、多一顏を見合せためらふ。）

お珊　不承知かい、南地の珊が生命に懸けて、屹と二人を添はせるえ。

（多一、お美津に目くばせして乗れといふ。）

お美津　貴方、行つても大事ないかい。

多一　豫ねての約束、私と一所ぢや、火水の中も。

お美津　あ丶、眞個にな。

（駕籠に雙方乘ると、五助猿、お珊に呼び懸る。お珊身をかはす。）

多一　五助。

お美津　五ッちやん、おいで。

（と制して駕籠にて呼ぶ。五助猿走りつく。二人ぢつと見る。此の間駕籠ためらふ。傳五郎ひよろりと出で、仰天す。）

傳五郎　わい、又夢か。何か夢やら婆婆やら分らぬ。

（目脂を取つて頬にみひらく。）

お珊　お爺さん、私が待女郎、媒妁人もして、お二人さんを祝言させます。一寸貸しておくれやす。

傳五郎　此や夢かいな、婆婆かいな。

お珊　お見やす、輿入の駕籠が揃うた。

傳五郎　やあ、お美津、多一どん、めでたいわ。大阪一番南地の伊達者、お珊御寮が請合うた、夢でも嘘ない。

（勇んでお美津の駕籠わきへ。——此の間、お珊は、人知れず蛇の袋二ッを取つて、思入あり。兩方の袂に一ッづ丶入るる時顏色凄く、凝と駕籠を見る。）

傳五郎　こりや若いもの息杖かせ。孫が一世一代の祝言と聞いて腰が立つた。花婿祝うて一肩入れるぞ。

多一　あ丶、滅相な、勿體ない。舅、兩親、一ッに合せたお爺さん、駕籠をかつがせてなりますか。

傳五郎　む丶、商人、分別あるな。可いわ、夫婦に分けへだてはないけれど、血を分けた孫娘、私が身體も同じこと、一番、お美津を脊負つて立て。

お美津　あれ、お爺さん、勿體ない。

傳五郎　えい、えい、亭主の口眞似するわ。やい、われが、お莨盆髷時分、雨足あげて、此爺に猿おんぶで、ほい駕籠見たこと忘れたか。

お美津　知らん——

（と兩袖で顏をかくす。）

駕籠舁一　お爺、あぶない、あぶない。

同　二　あぶない／＼。

傳五郎　やあ、今時分の若い奴、百貫座の傳五郎忘れたか。

這麼時の役に立たいで、何の爲に駕籠屋に生れた。やつとまかせの、どつこいな。
（と肩を入れる。）
（お珊腰元の持つたる、もみぢの枝を兩人の駕籠に差して。）
お珊　後にえ。
（と見送る。駕籠入る時、鬼塵山、どた／＼と出づ。）
塵山　十兩や十五兩で、身拔けさせる奴等でない。娘は娘、金子は金子。お定りの顏を見に來たれば、おのれ等、おのれ、何處へ失せる。晝強盗のやじり切り、貸し金で縛つた身體を、足腰もあがゝさうか。
（と追ひ縋らむとす。）
（お珊、入身に進つて、すらりと立ち。）
お珊　砂が立つ、騷々しい。琵琶の湖、埋まるほども貸したかえ。
塵山　何だと。
お珊　其の革鞄ぢや小さからう、入れもの丶口をおあけ。
（と紙入を取つて俯向けると、塵山、吃驚して大革鞄で受ける。金貨きらめき出づ。）
塵山　わあ、金貨だ／＼。
（絶叫す。）
（お珊。紙入ごと抛り込み。）
お珊　足りぬかい。
（簪を拔き、珊瑚の根懸けを打込む。其の時、お珊の黒髪亂れる。）
塵山　古渡り八ツ、翡翠の簪。
（と言ひ／＼、くた／＼と革鞄に重みの懸る體にて尻餅を搗く。お珊の黒髮亂るゝ途端に、背景の大阪城あらはれ出づ。猿猴びつく。お珊屹と見る。と猿すくむ。城の櫓に、虹かゝつて、樹立を彩る、もみぢの錦、お珊の衣に照映ゆる。お珊眦を城に向けて、一枚もみぢをかざしながら――）
お珊　おゝ、姉さんのやうに思ふ、太閤さんの淀君の、お城に虹が懸つたな。

生さぬ仲（六幕十一場）

柳川　春葉原作

序幕　第一場　東洋漁業會社事務室
　　　第二場　築地淸岡球江の家
二幕目第一場　大森渥美俊策の家
　　　第二場　同じく奥庭
三幕目　　　　氏家子爵邸園遊會
四幕目第一場　淨華院境内渥美侘住居
　　　第二場　赤澤宅奧庭
五幕目　　　　目黒附近大藪
大詰　第一場　淸岡邸洋室
　　　第二場　同家門前
　　　第三場　元の洋室

序幕

第一場　東洋漁業會社事務室

舞臺東洋漁業會社樓上の一室。上手に社長の椅子、卓子、下手に事務員等の卓子椅子數個を配置し、此の中間に大なる衝立の境界を設け、書架、帳簿、ストーヴ等其他の室内の調度よろしく。向側に足場を組みペンキ半塗りて中止したる樣を示す。好き場所に漁具の模形大海洋の大額を掲げ室内總體に取散しある。河向より建前の木やりの聲勇ましく聞こえ、時計の音をあしらひ幕あく。

（と、社員平田、乙、丙其他數人椅子にかゝり思ひ思ひのこなし。）

平田　此の部室もひどく荒れ果てたものだが新社長が來た當座は凡て前代の遺風を一掃して革新の氣が潑剌で、壁は塗り替へる、家具は新調すると大變な勢だつたが、例の十九萬圓の件からどうもフイとは情ない次第だねえ。まア一時中止とあるが、さてどうなるのかなア。

乙　一時中止が永久中止と來るのかも知れないて、何しろ前社長の大穴のあとだからね、前途心細い譯合さね。

丙　それだと云ふに川向うの淺野の別莊ぢや戰爭でウンと儲けたので新御殿の増築とか、毎日建前の木やりぢや、どうもたまらないねえ。

丁　（此時社員丁荒々しく下手より來る。）

畜生、馬鹿にしてやがる！

平田　オイ／＼どうしたんだ。又種が切れてお生憎樣かいそばやみたいに——

丁　ところが洋食屋の奴チキンでも鯛フライでもありますが、貴方の處は勘定を拂はないから持つて行けません。五十人前でも百人前でも現金なら直ぐに御屆けいたしますツて云ふが早いか、電話を切つちまやがるぢやないか。

乙　まアさう憤慨するな。此方が拂はないから悪いんだ。然しさう方々から拒絶を食ふ樣ぢや、ちよいと恐れるね、これから晝はヌキかな。

丙　あゝあ、形勢日々に不利かね、何だか急に腹が減つて來た。

丁　然し諸君、我々が斯う情ない思ひをするのも、つまる所社長が無能だからだ。どうだ、擧つて退社しようぢやないか！

平田　ム、そりや退社もいゝが、然し外に目的があるのかい？

丁　別にないさ。然し此の儘居たら我々は餓死するより仕方が無いぢやないか。

乙　現に今それが現はれて來たんだ。先月からの月給だつてあんな譯で半拂で泣いたし、此分ぢや月末へ行つても一文も貰へないかも知れないぞ！

丙　どうせ無收入なら、毎日電車賃を損してこんな所へ來て居る暇に就職口の奔走でもした方が利口だ！

丁　さうだとも／＼。さア諸君、今日限り潔く辭職をしよう。

一同　大贊成々々。

（と一同激昂してそこら邊にあたり散らして捨臺詞にて下手へ這入らうとする。此時正面の扉を開けて社長渥美俊策出で來りて）

渥美　諸君は何處へ行かれるのですか。

一同　社長が來た／＼。

丁　（皆々戻り來る。中の丁が。）

社長、私共は今日限り連袂辭職をいたします。

渥美　何、連袂辭職？

平田　さうです。給料は不渡だし、世間には不信用だし、明日の運命も分らない樣な會社に居た處が何の利益もないからです。

乙　そればかりでなく、私には妻もあれば子供もあります、この儘で行つたら自分許りでなく、妻子の命さへ失くして仕舞はなければなりません。

丙　社長が來られたを幸ひ、我々一同改めて辭職を御通告いたします。

一同　連袂辭職を通告いたします。

（と異口同音に云つて渥美に迫る。渥美、ぢつと思ひ入あつて皆々を制し。）

渥美　まア諸君、一寸待つてくれ給へ〳〵。

丁　社長、貴方は今更となつて吾々の意志を束縛なさるのですか？

渥美　私は決してそんな事はしない。どうしても諸君が退社をなさると云ふなら（と暗涙にのみ）無理に御引止めはいたしません。——が其の代り一言私の云ふ事を聞いて下さい。

（そこへ巻野大藏突然下手より入り來る。）

巻野　やア遂々弱發したね。物、平らかならずんば、必ず鳴る。これ自然の理かねハヽヽヽ（渥美、キッと巻野を睨む）だが、諸君、社長もあれ程云はれるのだ。まア、とも角靜まつてお話を聞いておあげなさい。

（と、一面に渥美を保護の色。表面は親切らしい事を云つて目配せなどして皆々を止める。）

平田　おや承はりませう。早く仰有い！

（渥美やゝこなしあつて。）

渥美　諸君、私は衷心から申上ます、會社は今大なる負債の爲に非常に苦境に陷つて居ります。それが爲に諸君に一方ならぬ御迷惑をかけつゝある。私も一時は途方に暮れました。會社は勿論自分の生涯も之を以て葬られるのではないかと悲觀もしました。然し私も勇氣を振ひ興したのです。絶望の底から死物狂の勇氣を摑んで來たのです。とにかく私はやつて見ます。倒れて後やむ覺悟を以てやる決心で居ります。人間は非常な苦境になつた場合、又危急の場合には、自分にも信じられない程の不思議な力が出て來るもの、又思ひまうけぬ救ひも出て來るものです。その不思議な力と意外な救ひとを頼つて私は、も一度この漁業會社を盛んなものにして見せます。然しその

覺悟も努力も諸君が居なくなつて仕舞つては、どうなりませうか。兩腕とも頼ろ諸君を失つて一體私はどうなるでせう。私のお願と云ふのは此處にあるのです。眞に無理な御願です。然し渥美俊策を助けると思つて、今暫くの間、會社の爲に働いて戴きたいのです。どうですか私の申しました心持がお分りですか？

（と、涙を流さん許りに云ふ。社員等は互に顔見合せて何事か囁く。と、巻野は渥美を見て。）

巻野　や、社長の苦衷に就ては大いに同情いたします。が只今お話をなすつた意外の救ひ手と云ふのは赤澤前社長が箱根へ金策に行つた件で御座いませうが、其の赤澤さんなら、もうとつくに東京へ歸つて來て居ります。

渥美　え赤澤さんが歸つてゐる？

巻野　さ樣、然も十何萬圓と云ふ金を握つて兜町邊へ入り込んで大活動をやつてると云ふ噂があるのです。

渥美　巻野君。それは事實の話に相違ないでせうな。

巻野　貴方をからかつて何の益がありますか。確かに昨日兜町で見たといふ人があります。

渥美　ム……

（と餘りの事に呆れ果てゝ、我耳を疑ふ如く二三歩退く。やがて社員の私語をそれと氣付き。）

渥美　諸君、一寸失禮をします。直ぐ歸りますから――

（と、ツカ〳〵と出て行かうとする時、職工二三人バラバラと入り來り渥美の前に立ちはだかり。）

職工一　社長さん、一寸待つておくんなさい。

渥美　ム、何か用か知らぬが、君達の用件なら落合君に云つてくれ給へ、私は今急用で外出するから――

職工二　處が、その落合さんぢや用が足りませんから社長さんにお話に來たんです。他でも御座いませんが、落合さんに預けた金を返して下さい。

渥美　金を返せ？

職工三　皆が手間賃の中から割いて現金で預けて置いた金です。今日中に入用なんですから直ぐ頂かしておくんなさい。（と願書を示す。）

渥美　よろしい解つたよ。けれど之は一應落合君に――。

職工一　（遮りて。）おッと社長さん〳〵俺達は何もあの金を落合さんなんか信じて預けたんぢや御座いませんよ。此の證書に押してある東洋漁業會社と云ふ印を信じてお預けしたんです。お前さんは社長でありながら、この印を知らねえと云ひなさるのけえ。

職工二　べらんめえ、此方等は其日稼ぎの職工だ。その大事な金に因縁つけられて堪るものか、社長さん、一體どうしておくんなさるんだ！

（と口々に罵る。渥美は當惑して。）

渥美　イヤ何も因縁をつけると云ふ譯ではない。この印が押してある以上、確かに會社に預かつてあるに違ひない。が今、生憎、六十圓と云ふ持合せがないのだから、さうだ俺が手紙を書くから御苦勞でも邸へ行つてくれ、ね、さうしてくれ給へ！

職工三　ようがす。ぢや、さうしやせう。

（渥美は手早く手紙を認めて。）

渥美　之を持つて邸へ行つて奥様から受取つてくれ給へ。

職工　畏りました。ぢや、之れさへ持つて行けば六十圓は渡しておくんなさるんだね。

（と職工等はその手紙を持つて下手へ出て行く。渥美又帽子を取つて立上る。此の以前より巻野は社員皆々へ何事かさゝやき居りしが、ツと前へ出て。）

巻野　社長、私もお願ひがあります。

渥美　え。（と立止る）

巻野　私は今日限り斷然辭職させて頂きます。私も諸君と同じく見込のない會社に、キウ／＼何日迄も奉公はして居られませんからねえ。

渥美　（憤然として）そりや丁度好都合でした。君には元から居て欲しくはなかつたのだから。唯、赤澤さん時代から勤めて居たのだからその古參の人を無理に止めさせるのもどうかと今日迄控へて居た迄なのだ。

巻野　それがせめてもの御情けと仰有るのですか、とんだお情に預かつたものだ。然し早速に御承知でありがたうございます。これでやつと氣が晴れ／＼した。

渥美　何か――

巻野　イヤなに、嫌はれても罵られても城を枕に討死しようと思つた事もありましたが、向上發展をして居る、僕にはさうまで盲目にはなれませんでしてねえ。これから一旗、揚げる計畫をたてたのです。諸君、ぢや君達の十人や二十人引受けるのは朝飯前だから何時でも御相談があつたら出かけて來給へ！　失敬！

（とあく迄渥美を嘲弄して下手へ立去る。此時社員落合東助稍々興奮せし様子にて前社長赤澤亮輔を正面入口より無理やりに連れ來る。）

落合　赤澤さん、私に仰有つた口で親しく社長にお話をな

すつて頂きませう。

赤澤　さア、それが誠に面目なくてどうも……はや渥美さん……（と渥美を見てドギリとする。）

落合　社長、赤澤さんは一週間も前から東京へ歸つて居られるのみか、烏森の待合に遊んで居られると知らしてくれた者がありましたから迎へに行つて來ました。

渥美　ム……

（と足許に蹲る赤澤の樣子を見て返す詞もなく、思はずその儘、椅子へかゝり、キツと相手を怨めし氣に睨み据ゑる。赤澤は額の汗をふきつゝ。）

赤澤　渥美さん、委細はさつき落合君迄自白に及んだのですが、今度は眞に君に對して顏を合す事も出來ん誠に申譯の無い事をやらかして――。

（と、やつとそれだけ云つて低頭。）

落合　もう、かうなつては仕方がない。凡てを申上げて仕舞ひますが、赤澤さんは社長から御依賴になつた金子を調達しながら、兜町へ入り浸り、どうやら非常に失敗なすつたらしいです。

渥美　何、非常な失敗を？　赤澤さん、あなたは會社の爲に大切な金をそんな事に流用して、流用なすつたのですか、それは本當ですか？（とつめ寄る。）

赤澤　全く心の迷ひでごわした。金は證文通り借入れたが舊債の爲とは云ひながら右から左へ消して仕舞ふのは勿體ないと思つて二三日それを働かせたら運よく行けば右も左も只一打ちで舊債は元より此の新しい二十萬圓足らずの負債も一時にかたのつく譯を……三年經つか五年經つてもどうか分らない重荷を僅か三日か五日で濟ませるとしたら其利益たるや實に莫大なものと……さう思つたのが抑々間違の種でごわした。尤もそれには確かな見込もついて居たのです。私も永年の經驗から自信もありましたので、無二無三に兜町へ切り込んだ處、寢耳に水の獨逸の革命突發から續いて休戰條約成立の大番狂はせに買煽つて居た戰時株の大暴落に遂々無慘の失敗をして今は一萬と纏つた金も持つては居らんのです。

（と思ひ入あつて冷汗を拭いて云ふ。渥美は聞き終つて吐息をつき。）

渥美　あゝ、貴方は、とんでもない事をしてくれましたね。

赤澤　穴でもあつたら這入りたい位に思ふです。

落合　穴へ這入るよりも、あなたみたいな人は暗い所へ叩き込んで――この罪の償をさせにゃならんのだ！

渥美（と、赤澤の手を取り引立てる。）まア君、待ち給へ！　そんな事をした處で却つて内輪の恥を外に現はす樣なものだ。何にもならない事だ！（と落合から取り放し）　赤澤さん、僕は只一言貴方に聞きます。一體此の始末はどうなさるのです！

赤澤　さ、それは云ふ迄もない事で如何な工面をしてももう一度調達しなければならんのです……が……

渥美　そして、その調達が出來ると仰有るのですか。

赤澤　はい……（と目を白黒して額の汗をふく）

渥美　御承知でもあらうが、今會社は外には債主を初め折山などに包圍攻擊を受けて居るし、内には、あゝして社員の諸君に會社の前途に就て心配をかけて居る場合です貴方は最も急を要する分だけでも調達の見込がありますか？

赤澤　イヤ見込の有無にかゝはらず何とかしなければならぬと思つて居ます。

渥美　思つた丈では何にもなりません。

赤澤　然し君、それより外に云ふ事がないぢやないか。何も私は君一人に之を負はさうと默つて見ては居らんです。

落合　赤澤さん、そんなに責任を重んずる貴方なら、さつきの有樣は何事です。待合の二階で酒を飲んで居るなぞでは何處から金が降つて來るんですか。

赤澤　……

落合　社長、矢はりこんな人は法律の制裁でも加へてやらんけりや埒は明きません。

（と再び引立にかゝるを渥美は制し。）

渥美　落合君々々赤澤さんの話は僕がするから、君は先刻から此處に居られる諸君の……ヤア（此の前より隅の方で評議區々となりたる社員等は何時か大半歸りて三人のみ殘るに心付き大いに驚きしが氣を替へて）諸君は今も云ふ通り會社の前途を心配して居られるのだから君から彼方へお連れ申してよく我々の意のある所をお話しして下さい。

平田　社長、同僚の大半は貴方を見捨てゝ去りましたが、吾々は先刻からの事情を目擊してあなたの不幸な境遇に同情いたしました。

西　此の上は假令最後の一人となる迄もお盡しいたします。

渥美　おゝ、（と二人の手を取つて握手す）　渥美俊策、諸君の御好意は死すとも忘却はいたしません。（と涙を拭

く。）

落合　精神一到何事かならざらんやで、諸君心を一ツにして努力しませう、まだお話がある。彼方の室まで來て下さい。

（と落合は赤澤を睨みつけて、社員と共に上手内へ入る。渥美は見送りホッとして、直ちに赤澤に寄り。）

渥美　赤澤さん、あなたは默つて見て居ないと仰有つた以上は引受けて必ず會社に迷惑はかけぬと誓ふのですね。

赤澤　それは……　私も其つもりでは居りますが。

渥美　又其んな事を仰有る、そんな誠意のない事では駄目ですぞ！

赤澤　けれ共、誓へと云ふなら誓もしますが、何事も運命でごわすからなア。

渥美　何！

赤澤　あなたの爲によかれと思つてした事が惡い結果を見る樣になつて運の惡い時は仕方のないもので――。

渥美　（遮つて）もうよろしいそれだけ伺へば、もう澤山です。

赤澤　え？

渥美　あく迄も自分の非を蔽はんとするあなたの劣等な心を私は憎む。赤澤さん、今日限り絶交したから、さう思つて貰ひますぞ！

（と云ひ放つて上手の椅子の方へ寄る。赤澤は驚いて）

赤澤　あゝ、渥美さん、そりやあんまり……

（此時正面より母堂岸代、妻まさ子、岸代は俊策に、まさ子は赤澤に取りついて。）

岸代　俊策どうです、私が云はん事ぢやありますまい。

まさ子　お父さん、あなたは何と云ふ情無い事をして下さつたのです。

（と、泣く。兩人は面目なき體、よろしくあつて。）

赤澤　まさ、堪忍してくれ〱。

渥美　母樣、御用でもおありになれば使でも下されば直ぐ歸りますもの、會社へなぞ出かけて來て外聞の惡い事を云つて下さらん樣に――

岸代　私に外聞の惡い事をすると云ふお前こそ恥さらしの眞似をしたのです、あそこの惡黨に欺されて祖父樣から讓られた家の財産を會社などに注ぎ込んで――まだそれ丈ぢやない。何十萬圓と云ふ借金まで負はされて二進も三進もならないとは、あゝ口惜しいどうしよう〱。

渥美　お母さん、云つてる傍から何です。世の中の事業に

手を出す以上は此の位の事はある事ぢやありませんか。大業にさわいで下さるな。

岸代　まアお前は氣でも狂つたのぢやあるまいね。

渥美　これからが眞劍なんですよ。今までは身についた財產なんぞがあつたから身動きが出來なかつたが、もう之れからは生地の人間なんです。失敗に依つて得來つた思慮とこの手腕と頭腦に依つて新しいものを造るのです。三度臂を折らなきや良醫にはなれぬと云ふのは今度の事です。だから心配せずに――默つて、默つて私のする事を見ておいでなさいハヽヽヽ。

岸代　これが默つて見て居られますか。さうだまささん、お前さんも御自分の親が之れだけの事をしたのだからそれに依つて相當な覺悟はありませうね。義理を知つた者ならかうして見ては居られますまい。

まさ子　ハイそれは、もう親の犯した罪は子が背負ふのは當り前の事でございますから何んとしてお詫びをいたしましたらよろしいか、お母樣御存分になすつて下さいまし。

渥美　まさ、何を馬鹿な事を云ふのだ。お母樣、まさには何も罪はないのです。

岸代　けれどお前赤澤さんが――

渥美　赤澤さんは赤澤さん、それはまさの知つた事ぢやありません。可哀想に弱い者を、さう責めてやらないで下さい。

まさ子　お父樣、どうかして旦那樣の御身の立つ樣にして上げて下さい。そしてお母樣の御氣の鎭まるやうに、それでないと妾はもう生きてあなたにお目にかゝれません。

赤澤　え、飛んでもない。そ、そんな短氣な眞似をしてくれては俺はいよ〳〵世間へ顏向けの出來ぬ人間になつて仕舞ふぢやないか。

まさ子　では妾のお願みをお父樣、聞いて下さいますか。

赤澤　む。それは無論聞かんけりやならん事ぢやないか。

まさ子　受合はないと仰有るのですか。

赤澤　まア渥美さんも云ふ通りお前には何の罪もないのぢやから――

まさ子　いゝえ、お父樣！　私もう覺悟をいたしました！

（と泣き入つて立上る、赤澤は慌てゝ止める。此の時日下部正也ツカ〳〵と入り來り。）

日下部　奥さん、短氣な事をしちやいけません、あなたの

務めは、もつと／＼大きい筈ですぞ！

渥美　お、日下部君。

日下部　おい、喜べ、喜べ、壁も塗れる。根つぎも出來る。福の神が會社へ舞ひ込んだのだ！　十九萬圓の金が己れの手で出來る事になつたぞ！

渥美　え、十九萬圓が君の手で出來る……

日下部　先方ぢや大いに君を信じて僕の申込を承知してくれたのだ。早速逢ひに行かう！

搾代　日下部さん、それは本當の事でございますか？

日下部　御心配なさるな。この場合誰れが嘘を云ひませう。

渥美　日下部君、君の友情の厚いのには何とも謝するに詞がない。僕は君に由つて救はれたよ。

（と立上る。道具替りのしらせ。）

日下部　今日の失敗は他日成功の基礎となるのだハヽヽ。

（と笑ふ。渥美も喜ばしげに笑ふ。他の者も安心の體よろしくあつて、以前の木遣りの聲勇ましく。）

―― 道具一轉 ――

第二場　築地清岡球江の家

平舞臺日本風の座敷に椅子、卓を配し、上手下手に光琳風の畫を描きし金屏風たて廻し床の間に院展風の大幅な掛け前に花瓶の大盆栽をプドー板の上に乘せ、下手の欄間に大額、背後の廊下に飾り付大金籠に座蒲團、火鉢、煙草盆其他の家具いろ／＼ある。ピアノの音。インコの鳴聲にて道具納まる。

（と、着飾りたる小間使二人鳥籠の前に立ち鳥の唄ふ唄を聞いて居る。）

インコ　「申し／＼龜よ龜さんよ」（と唄ふ）

○　まアうまいわね。まるで人間の通りだわ。ぢや今度は本當にあげるから（と持ちたる食物を見せ乍ら）　豆腐屋さんの眞似をしてごらん。トーフトーフーツてさー。

インコ　「豆腐、生揚、がんもどき今日は午の日でござい」

△　ちよつと／＼今度こそ間違ひなくきつと妾があげるからワン／＼の眞似をしてごらん、ワン／＼ツてさ――

インコ　「ワン／＼ワン……」

○　今度は奥さんの眞似をして、女中を呼ぶ――

△　鳶の眞似をしてよ。

○　自動車の眞似をよ。

兩人　アハヽヽヽ。

インコ　（怒つて）馬鹿々々馬鹿ヤア――

○　おや、こいつ人間樣をつかまへて馬鹿だなんて失敬な奴だわ。

（と△○兩人鳥籠を叩いて戯れる。此時、下手より清岡球江、卷野大藏歸り來る。球江此の體を見て立腹。）

球江　お前達は私の大切な坊やをどうしようと云ふのです

兩人　ハツ、イエ、どうもしたのではございません。つい其の手が一寸さはりましたゞけで、つい――。

球江　一寸障つた位で籠があんなにゆれて、太郎ちやんがあんなに毛を立てゝ怒つて居る譯はありません。此の鳥は私が雛から育てゝ秘藏してるのは兄さんもよく知つてるぢやありませんか。淋しい私を慰めてくれるのは世界に太郎ちやん一人切りです。奉公人風情のくせに大切な坊やをいぢめるならもう邸には置けませんから、直ぐと出て行つておくれ！

卷野　オイ／＼何と云つてもお前達が惡いよ。今後は決して今の樣な粗相をしませんからとよく太郎君に謝罪したまへ！

（△○兩人は籠に向ひ低頭する。）

球江　太郎ちやん、妾が謝罪るからかんにんしておくれよ。さア機嫌直しにいゝお土産をあげようね。お前達は用がないから、之れを持つて彼方へ行つておいで！

（と、オペラバッグの中より西洋菓子を出してインコに與へる。卷野は馬鹿らしいと云ふこなし。小間使は驚いて這入る。球江は機嫌を直すと椅子につく。）

球江　まアくたびれたこと。日本は道路が惡いから自動車でもくたびれる事ね――オヤ兄樣、今日は大層改つて形をつくつてどうしたの？

卷野　さア、そこで相談が少しあつて來たんだがね。實は今日漁業會社をやめちまつたのさ。前社長に大穴を背負はされて居るんだもの今にあの會社は、……澤美なんて奴は夜逃げをするのが相場と極つて居るから機を見て獨立の旗をあげようと思つてね。

球江　あ、ちよつと／＼。それぢや其會社に星川の名で以て妾に金を出さしたのは、お前さん、人を欺したのですね。

卷野　え、イヤ、さうぢやないのだ。澤美などの手に置いちや潰れるのは目前だけれど、此方が捲き上げてやるとなると、赤澤の手に渡して、十九萬圓の代價の會社の不

動産全部を登記しちまつてあるんだもの、經營難は決してないさ。だから私はお前に此上も少し補助を仰いで漁業會社を乘取らうと云ふ寸法さ。どうだ一肌脱いでくれるだらうね。

球江　オヤ〳〵隨分蟲のいゝ話ね、まアそれはそれとして兄さん、渥美さんの家の人は大勢なんですかね。

卷野　いや、隱居に細君に子供が一人さ（球江の面差少し動く）處でその細君と云ふのが、赤澤の娘だが頗る美人でね。

球江　さうして子供は。

卷野　その子供が繼子でね――滋と云ふ腕白盛りなんだ。噂に聞くと渥美は以前、非常に放蕩をやつたもんださうで其頃、藝者かなんかと深くなつて、たうとう今の滋と云ふ子供が生れたんだ。處が、どう云ふ譯か、その女は自分の生んだ子供と、あのお人好しの渥美とをおいてけぼりにして突然行方不明になつたと云ふ三十三間堂なら今時分柳になつて居るだらうが、二十世紀の今日柳でもあるまいから、大方左褄と來て御神燈になつてぶら下つてでも居るだらうてハヽヽヽ。オイ處で今の一件はどうなんだい、球江さん、オイ球江さんてば――

（球江は何故か沈むこなし。暫くして顏を上げ。）

球江　兄さん、私今何を考へて居たか知つて居ますか。

卷野　新規に買入れる別莊の事か、さもなけりやあの會社の事だらう。

球江　へん、あなたぢやあるまいし――。

（ツト身を返し、座敷の飾鏡に立ち、我姿を撮して見つめる。卷野呆氣に取られる。此時小間使下手より出て。）

○　奧樣、御客樣でいらつしやいます。

球江　（名刺を見て）お目にかゝりますと云つてお通し申しておくれ！

○　かしこまりました。（と元へ入る）

球江　兄さん、今のお話は後でゆつくりしますから、とに角こちらへ來て下さい。

卷野　よろしい。客來とあるからには其間に一口御馳走になるとしようかね。

（と兩人捨臺詞にて上手へ入る。處へ女中の案内にて日下部と渥美入り來る。女中は紅茶をすゝめる。）

○　只今直ぐに奧樣が御目にかゝります。

（と小間使は這入る。日下部、渥美は四邊を見廻し。）

渥美　なか〳〵贅澤なもんだね。

日下部　但し遠慮なく云へば俗氣紛々たるもので金をその儘、陳列したものさ。一向趣味がないね。

渥美　はゝア趣味とはどんなものかね。

日下部　小面倒な質問を始めたね、どんなものと云つて見せる譯には行かんが、まア俺の古洋服のやうなものさ。所謂、つゞれの錦と云ふかなハ、、、。

渥美　ハ、、、さうして見ると趣味必ずしも美なるものぢやないね。が自分はつぎはぎの古洋服に甘んじて居ても友の爲には何十萬圓と云ふ大金を調達しようと云ふ義俠ある君の心の内には深く〳〵感謝するよ！

日下部　多情多感の君には、さう有難く見えるかも知れんが、ナニ之も僕の趣味さ。イヤ人生の趣味さハ、、、。

（此の時上手より女中△出る。）

△　日下部さん、恐れ入りますが、奧樣が一寸御顏を――

日下部　はア。（と立上り）君あの件に就ての話だらう。一寸失敬するよ。

（と、女中に連れられて這入る。渥美は卓上の寫眞アツクなどを眺め居る。よき程に球江以前より一層粧をこらして手箱を持ち、何氣なき體にて出て來る。）

球江　どうも渥美さん、お待たせをいたしました。

渥美　（何氣なく顏を合せて）やア……

（と餘りの以外に椅子をはなれて二三歩退く　球江はいよ〳〵沈着いて。）

球江　渥美さん、かうしてお目にかゝるとは本當に意外でございましたわねえ。

渥美　……こゝが貴女の住居ですか。

球江　さやうでございます。

渥美　實に意外だ。死んで地獄に落ちようとも、かうと知つたら、こんな所へ來るのではなかつた！

球江　妾もあなたにお目にかゝりましたので、何だか昔の別の世界に生れ變つた樣な氣がいたします。やはり何かの御縁でございませう。

渥美　縁？　そんなものは十年前に切れて居るのだ。こんな馬鹿な事はない。とにかく私はこんな所に一秒も居る事は出來ません。

（と立去らんとする。球江は吃驚して立塞り。）

球江　お待ちなさいまし、お待ち下さいまし。

渥美　何か御用事があるのですか。

球江　用はあなたの方にある筈です。

渥美　なに。(さてはと身を震はしつゝ)日下部は、あなたと知合ですか。

球江　はい、よく存じて居ります。日下部さんは、私と貴方との昔の關係を知らずに御紹介をなすつたのでせう。先刻あなたのお話を聞いた時には、妾は實に驚きましたが、然し之れもつきぬ御縁と思つて名前だけ包んでお目にかゝつたのです。まアそのお話から先にしませう。さうするのが日下部さんに對するお互の義務です。とにかくお掛けなさつて下さいまし。

(と椅子をさし卓の前に進む。渥美はヂリ/\と後になり兩人の位置は反對となる。)

球江　渥美さん、私たちお話は止めると云ふのは何故でせう。妾だつて以前はあなたと日下部さん以上の深い間柄ぢやございませんか。

渥美　何を！(と拳を握り興奮を抑へて)球江さん、それは云はん方がいゝだらう。今日はお互に路傍の人だ。

球江　私、さうは思はれませんのでございます。何もそんなに情ない事を仰有らなくてもいゝぢやございませんか。表面はともかく、私は滋の母ですよ。

渥美　生意氣な事を云ふな！(と一喝して卓の前に進み)貴様、何の口でそんな、そんな事を……この惡魔！(球江タヂ/\になる)貴様は自分のなし來つた事を忘れたのか。面目ないと思はんのか！

球江　いゝえ、忘れません。

渥美　それなら何故歸つて來た。何故日本の地を踏んだ。よくものめ/\と己れの面前に現はれたな。それに何！滋の母だ？　怪しからん事を云ふな！

球江　(渥美に縋つて)あなた、許して下さい。妾が惡うございました。

渥美　許すも許さんもあるものか、あたり前の事だ！

(と渥美は憤然として手を振る。球江は倒れて片手をつき、其儘斜に相手を見上げて。)

球江　あの時の仕打は全く私が惡うございました。仰有る通り私は貴方の前に出られた義理ぢやありません。そりやもう人非人と云はれても惡魔と申されても詮方ないと諦めては居るんですが、妾は斯うしてお目にかゝつた以上は叱られようと、どうともあなたの御存分になすつて決して怨みとは思ひません。

(渥美は此方の椅子によつて苦しき息をつく。球江は身を起てし足許に跪き。)

球江　妾、今度死ぬ命を助かつて歸つて來ましたのも實は貴方の御許しを得たいと思つたからです。で、どうかして一度晴れてお目にかゝりたいと苦心の結果、日下部さんのお話を幸、此處迄あなたをお招き申したのです。これだけの心づくしを少しは憐れと思つて下さつて、妾の願を聞いて下さいまし。

渥美　お氣の毒だがお斷り申します。

球江　何故でございます。

渥美　返答の限りではない。自分のした事をよく考へて見るがいゝ。馬鹿らしい。

球江　いえ、考へて考へて考へ拔いた上で、かうしておわびをして居るのです。どんな罪も懺悔に依つて消えると云ふぢやありませんか。

渥美　馬鹿、己れは神樣ぢやない！

球江　けれども私の爲には貴方は神樣です。貴方に縋つて罪の許しを乞ふより外には安心の道がありませんもの。

渥美　成程、毛色の變つた亭主には死に別れ、榮耀は仕盡しても無聊に苦しんだ果は、そんな氣も起るものだ。信心も德の餘り、鰯の頭でも拜んで居るがいゝさ。は、、は。

球江　では、どうしても聞いては下さらないのですか。

渥美　お互の年が十年前に歸る時が來たら、その時は聞いてやらう。

球江　では是非がございません。切めてあなたのお友達としてお互に潔い交際をさせて下さいまし。

渥美　不義の友は私には入らないのだ！

球江　それも出來なければ、差當つてあなたの御難儀を救ふ事だけでも御許し下さいまし。

渥美　たとへ、負債の爲に首を取られようとも、貴女などの金は絕對に借りない。いや、要りません！

球江　では、どうおわびをしても。

渥美　私と、あなたは敵だ、敵だ。倶に天を戴かざるの敵なのだ！

（と、ツカ〳〵と下手へ行く。球江は今は之れ迄と、以前の手箱を取つて。）

球江　渥美さん！

渥美　もう御用はないでせう。

球江　あるから呼んだのです。妾は貴方に通告する事があるんです。

渥美　通告？　何だ通告とは！

球江　この公正證書を御存じでせうね。

（と、手箱の中より證書を取出して卓上へ置き、キッと云ふ。渥美はそれを見て驚く。）

渥美　これは！

球江　あなたに對する貸金十九萬圓の權利は妾の手にあるのです。妾は星川源八に代つて債權讓渡後の通告をいたします。この貸借の片が付きません限り、妾はあなたの事業、資產、名譽の上に少し許り權利を持つて居ます。御承知でも御座いませうが、來月の二十日が期限ですよ。

渥美　それがどうしたのだ。其の二十日迄に金を返したらいゝんぢやないか。

球江　無論ですが、あなたに返せますか。

渥美　失敬な事を云ふな！（と拳を握つて息をはずませしが氣を替へて）私も男だ。誓つて迷惑はかけん！

球江　その男の、やせ我慢を立てる爲に、親御や、可愛い人を路頭に迷はせても平氣で居られますか、それだけぢや濟みませんわよ。延いては渥美家の名譽も、あなたの體面も投げ打つて仕舞はなければならなくつても構はないんですか？

渥美　失敬な事を云ふな！　呪詛だ！　恐ろしい惡魔の呪詛だ。抵抗する力が足りなければ、餌食になる許りだ！

球江　さア、そこです。慈の母と云ふ名に免じてお前の罪は許してやると優しく云つて下されば妾は卽座に此の證文は引裂いて見せます。貴方が若し昔の愛の十分の一百分の一、いゝえ千分の一でも妾に與へて下さるならば妾お金で出來る事でしたら、どんな要求でも應じます。渥美さん、何とか御返事は無いものでせうか。

渥美　（決然として）期限が來たら金は返します。これが返事だ。分つたか！

――木の頭　幕――

二　幕　目

大森渥美俊策の宅

舞臺常足の二重、本廂本緣下手下げて二間の附屋體。この正面丸窓のある上手の座敷は一間の床の間、三尺の違ひ棚。上手緣の突當り戶の出入。座敷には屛風、火鉢、書棚其他の家具よろしく。平舞臺庭先には振よき松の立木、四つ目垣石燈籠、飛石抔の配置。渥美俊策の宅奥座敷の體。合方にて幕あく。

（と玆に渥美の妻まさ子裁縫をして居る。緣先に一子滋は學校歸りの扮裝にて腰かけて肩より鞄を外し、帽子を取つて手の平にて額の汗を拭き、本にて體を煽ぎ居る。）

滋　あゝ暑い――

まさ子　まアいやな子だこと。綿入の重ね衣をする十一月の末だと云ふのに本を扇つかひなんかする人がありますか。又馳けつくらをして來たんでせう。又此の間の樣に溝へ落ちない樣になさい。

滋　馳けつくらぢやないよ。伊藤の奴め、僕の顏が軍人みたいだから髯を生やしてやるつて墨を持つて追ひ廻すんだもの。

まさ子　オヤ／＼軍人さんが今度は大鼠になりましたねホヽヽ。

滋　いゝよ後で米に拭いて貰ふから、おばアさんは――

まさ子　お寺詣りにいらつしやいましたよ。

滋　ぢや、僕今日は此處で遊んで居てもいゝね。

まさ子　よござんすとも、母さんも此頃は滋さんが御隱居所に許り居るから、かうして沁み／＼お話するのが、何より樂しみですわ。

滋　僕だつて嬉しいや、ねえ母さん、おばアさんは何故あんなに意地惡なの。

まさ子　え、おばアさんは少しも意地惡ぢやないのですよ。私が、傍に居ながら、お前を溝へ落としたり、風邪を引かしたりするから、つまりお母さんがわるいからなの。

滋　だつてね、お母さん、おばアさんはね、お母さんの傍へあんまり行つちやいけないツて云ふんだよ。

まさ子　滋さん、もうそんな事を云ふのはお止しなさい。おばアさんの蔭言なんか、お父樣の耳へ入れると、あなた又叱られますよ。ね、いゝ子だからね。

滋　（平氣で何かいぢくりつゝ）ねえ、母さん、お父さんはちつとも家に居ないんだね。

まさ子　やつぱり會社の御用がお忙しいからなのよ。

滋　會社は夜まであるの？

まさ子　（答に窮しつゝ）それは夜だつて晝だつてお忙しければ――

滋　母樣、家のお父樣は社長なんだつてね、社長は校長さんと同じだね。

まさ子　さうですよ。

滋　だから僕云つてやつたんだけれど、伊藤の奴はさうぢ

やないツて云ふんだもの、毎日泊つて來るのは小使だツて——

まさ子　ホヽ、伊藤さんは知らないんですよ。だが何んと云つても構はないでお置きなさい。

滋　でもそんな事をするのは小使ばかりだつて社長さんは夜泊つてなんか來ないツて云ふんだもの。（と泣く）

まさ子　いゝよ。捨てゝ置きなさい。それよりおやつを上げませう。お前の好きなワツプルです。之れを食べて御機嫌を直して頂戴ねホヽヽ。

（と菓子を與へる。滋やゝ機嫌を直す、此時女中出で來り。）

お米　奧樣、芝の奧樣がお見えになりました。

まさ子　え、赤澤の母樣が——

（女中席を設けて還入る。間もなく赤澤の妻、お貞が話しながら出て來る。）

お貞　まささん、今日は——滋さんもおいでかい。

滋　芝のおばアさんいらつしやい。

お貞　はい／＼滋さん、今日はいゝお土産を持つて來ました。さア勉強をよくしますから御褒美ですよ。（と、雜記帳、鉛筆、空氣銃などを出す。滋喜びて禮を云ふ。まさお茶を入れる。お貞よろしく思ひ入あつて）今日は御隱居は？

まさ子　お墓詣りによ。本當に母さん、よく來て下さつたわ。

お貞　ホヽ、海山越えて來やしまいし。

まさ子　でも逢ひたかつたわ。お父樣は時々來て下さるけれど母樣は年に二度か、三度なんですもの。

お貞　何んだね、子供の樣に（としみ／＼顏を見て）お前さん大層顏色がよくないが、どうかしたの。

まさ子　いゝえ、別に——。

お貞　お前もいろ／＼。

（と云ひかけし時、滋が突然。）

滋　ねえ、芝のおばア樣は何故、頭が白くないの。

お貞　今に白髮になるのさ。

滋　でも家のおばアさんは眞ッ白だよ。

まさ子　時々面白い事を考へ出すのねホヽヽ。

お貞　ホヽヽ。

（そこへ上手の檐戸を開けて母堂岸代歸り來り。）

岸代　おや、大層賑かですことねえ。（と廊下に立つて居る）

まさ子　あら、おかへりでございますか、ちつとも存じませんで――。

岸代　ホヽヽヽ。歸りが早過ぎましたかの、滋や、學校から歸つたら何故隱居所へ來ないんです。おばアさんは迎へに來たのですよ。

（と、捨臺詞にて滋の傍へ來る。まさ子叶胸をつく。お貞は愛想よく）

お貞　お留守に、とんだお邪魔に出まして――。

岸代　おや、赤澤さんの……これはどうもお見外れしまして失禮しました。

お貞　どうも御無沙汰ばかりいたしまして――。

岸代　いえ、お互樣に、しかしお宅では皆さんがお達者で何よりの事です。體だけは丈夫にせんと――。

お貞　御隱居さまもいつも御達者で結構でございます。

岸代　えゝ、でも年寄の達者なのは、どうかお傍で迷惑でね。あなたは氣を惡くなさるかも知れんが、伜が會社とかを初めましてからは面倒な事許りで今日も御先祖の前へお詫びを申して來ました。先づ第一が俊策の惡口、あれが馬鹿なばかりに人の甘口に乘せられてお讓りの身代を棒にふる樣な事をしたりして欺した奴は憎いが、欺される者は大馬鹿、その大馬鹿を生んだ私は御先祖樣へお詫びをして後を何やらかやら數の多い愚痴を並べて、歸りは氣が清々しましたよホヽヽヽ。

お貞　今日はお詣りにいらしたさうですね。

岸代　えゝ、外へ出ると良い氣持でね、嫌な事は見聞きせず出來るなら乞食をしてもいゝから年中、外で暮らしたらとも思ひますよ。

（係りの言葉に、お貞はムッとした樣子。まさ子は見かねて仲に入り。）

まさ子　あの、お茶を一つ――

岸代　これはありがたう。だが、大分お湯がぬるいやうですが……。

まさ子　あら、左樣でございますか、ツイ。

岸代　いえ、外で暮らせば生水も飲みます。かうしてお茶の香りのあるのが、頂ければ勿體ない位さ。

（座は益々白ける。滋は貰つた雜記帳へいたづら書をして居たが。）

滋　おばアさん、これは此のおばアさんに頂いたの？　それから之れも、之れも。（と以前のものを取出して）おばアさんは何かお土産を買つて來てくれたの？

岸代　私は貧乏人だから芝のおばアさんには叶はないが、お前の好きな、お伽の本を買つて來て上げましたよ。
滋　やア、いゝなア。
岸代　面白いでせう。そりや、おばアさんは、芝のおばアさんの樣にお金持ぢやないから、いゝものは買へませんがね。
（お貞此の時堪へかねた樣に何か云はんとするを、まさ子は制して。）
まさ子　母さん、あの簪が――（と目配せする。）
お貞　ホヽヽ、いゝ御本ですことねえ。
（滋、突然空氣銃にて岸代を不意に打つ。）
岸代　これ何をするんだよ、この子は。（と上手へ立つ）
滋　ワーイ萬歲！　ハヽヽヽ。
（皆々仕方なしに笑ふ。）
岸代　年寄は何だつて口の下から人樣のお邪魔をして憎まれるのでございますよホヽヽ。滋もお前そんないたづらを人前でしては、いやがられますよ。仕たきや私の所へ來て肚一杯お暴れなさい。
滋　ウン。僕おとなしくして居ますから、こゝにもつと居たいよ。
岸代　こゝはお前の遊び場所ぢやありませんよ。わかりませんか。
（岸代は捨臺詞にて滋を引立て棲戸の內へ入る。まさ子本意なき體。お貞は娘の心根を察して、そつと淚を拭いてキツとなる。）
お貞　まさ子さん、お前いつその事一つ考へて見てごらん。どう？
まさ子　え？
お貞　何年一緒に居ようが別れる時節が來れば仕樣がない、俊策さんも氣難しい人だと云ふが、それは別物、あのお姑さんと云ひ、赤澤のわるい事もありますけれど、今の有樣は何事です。一つ〳〵難癖をつけてお前や私を丸で敵同志でもあるかのやうに――親がきめます。お前さへ覺悟を極めてくれゝば、後の少し位の不義理は――
まさ子　母さん、私そんな事は夢にも考へて居りません。お母樣も今日のやうな事は滅多にないんですもの、何日もよく氣をつけて下さつて――。
お貞　では、どんなに苦勞しても構はないとお云ひなのかい？
まさ子　どうぞ、此の事は私の心に任せて置いて下さいま

し。

お貞　是非とはすゝめられませんかね。

まさ子　母様、あなたが芝の家へゐらした時は姑さんもあれば妾と云ふ子供もあつたんですわねえ。

お貞　え、さうですとも――

まさ子　それでも家は何のいさくさもなく大變幸福でしたつて、でもお母さんは隨分苦勞をなすつた事とお察しますわ。

お貞　何のお前――

まさ子　今始めてぢやないんですけれど、私いつも自分の身の上を思ふ度にお母さんの事を考へますの、不思議な位、似てますわね。

お貞　そりや形だけはね。私はお前の樣にさう苦勞はしませんでしたよ。

まさ子　いゝえ、私お母様から立派な手本を見せて戴いたんですわ。こんな位何でもありません。私がこつちへ來る時も再緣でもあるのに子供のあるなんぞへはやられないとお母様が強つて仰有つたのも知つて居ます。それを聞く程勿體なく、私も姑や子供のある家へ行ける樣にと神樣へ祈つて居りました。苦しい事のある時には、あの時お母様もと思ひ出しては今日まで堪へて來たんです。この後だつて母さんが私の眞實の母さんで居て下さる限りは妾も茂の母で居なければなりません。それが私の一生のお願ひですわ。

お貞　まさ子！（と手を取つて涙止めどなく）よく……よく云つて下さつた。それ程健氣な心にと私は育てはしなかつた。もう〳〵私は何も云ひません。育ての親より十倍も百倍も立ち優つたお前に、悪い智慧をつけては却つて罰があたります。どうぞ立派な心掛で渥美の妻や母として居ておくれ。それでこそ妾もお亡りなさつたお前のお母様に顏が立ちます。（と手を取り合つて泣く〳〵）それぢや私はこれでお暇します。お前身體だけは大事にしておくれよ。

まさ子　あ、もうおかへりですか。

（此の時、人の來る氣勢。）

お貞　おや、誰か、御隱居だと又何のかのと面倒だから失禮しますよ。

（と下手へ急ぎ足にて這入る。まさ子次の間まで送り來りし時、椽戸をあけてお米慌たゞしく出で來り。）

お米　奥樣、只今あの妙な風態の男が三四人許りこんな物

な持ちまして貴女樣にお目にかゝりたいなんて參りましたが、どういたしませう。

（と一通の手紙を渡す。）

まさ子　おや、これは旦那樣からの――そして入らしたのは何人？　どんな方？

お米　何だか職工の樣な姿をした人達で立ちはだかつてお金を受取らない內は一寸も動かないなんて大聲を出して居ります。

まさ子　えゝ、お母樣にそんな事知れやしないかしら。

お米　いえ、御隱居さまは只今、坊樣が御本を讀んで入らしつやるのを一生懸命聞いて入らつしやいますから御存じはないやうです……。

まさ子　（ホッとして）人目に立たないやう、此處へ切戶からお通ししておくれ。

お米　はい、かしこまりました。

（と元の口へ這入る。まさ子は考へに沈んで庭へ降り立つ。程もなく、前幕の職工四人連れられて來る。お米注意して二重へ上り上手に這入る。）

職工一　突然に上つて濟みませんが何しろ旦那がお手紙にも書いてあるやうな譯でまゐつたのでございます。

まさ子　いえ、皆さまこそ御遠方を――

職工二　奧さん、實は、もうとつくにお貰ひ申しに上る意りでしたが、落合さんに泣きつかれて今日迄べん〳〵待つて居たんでござんすよ。

職工三　處が、いつ迄經つても埒が明きさうもないので、今日社長に會つたやうな譯なんでございます。

まさ子　はい、御催促は御尤もでございますが、實は私共も只今ちよつと手詰つて居りますので眞に申譯ございませんが、こゝも少しの間――

職工四　おッと、とゝと、御新造さん、その暫くと云ふ奴が氣に喰はねえんですよ。あつちへ行つても暫く、こつちへ來ても暫く、まアそんな事は云はねーで、今日は是非とも――。

まさ子　さアそれがありますれば、こんな御無理を申上げませず、又申上げる譯も御座いませんが、何分にも。

職工一　ちよつと待つた。金が可愛さに人が下から出りや寄つてたかつて貧乏人を嬲り者にしやがらア、そつちがそんな料簡なら、此方にも考へがあるんだ。

まさ子　あの、どうかそんな大きな聲をなさらずに――。

（と奧へ氣をかねる。）

職工二　何を、でけえのは地膨だ！　何を吐しやがるんでえ。手前達の云ふ事を、眞に受けて居た日にや、此方等はひぼしになつちまふんだよ。

まさ子　もし、あなた。

職工三　四の五のと面倒臭え、これだけの家體骨をして居りや六十や七十の金は出來ねー筈はねーや。踏ん込んで道具でも何でも持つて行けや！

職工四　さうよ／＼空涙なんかで欺されやしねえぞ！

職工一　何、邪魔しやがるんでえ。やつつけろい！

（と進るまさ子を突き放してバラ／＼と上りかける。此時、氏家子爵の夫人靜子下手に樣子を立聞きし居りしがツカ／＼と出て。）

靜子　待つて下さい。私が話を付けますから

（この聲に一同は躊躇をする。）

靜子　今、ちよつと伺つたのよ。私が話をつけるから、姉さん御安心なさいましよ。

職工二　おウ、お前さん藪から棒に大丈夫なのかい？

靜子　姉さん、これでどうにかなさいな。

まさ子　まアお前さん――。

職工一　（手早く靜子の手より指輪を取りて）やア大したもんだな。これなら此方の金はおろか、三百圓でも五百圓でもならア。

まさ子　まア飛んでもない。そんな事はいけません。靜さん、折角だけれども、かう云ふものは――（と戻す）

職工二　もし奧さん、高慢な事を云つたが、どうしたんだ、早いとこ話をつけねえな。

靜子　では私は、かう云ふものですから、明日の朝迄待つて頂戴。こゝで出來なけりや邸へいらつしやい。間違ひなく拂ひますから――。

職工三　やア、子爵家の奧樣だ！

職工四　ようございます。奧さんがさうして責任を持つて下さるならお任せして明日の朝まで待ちませう。萬一の時は、お邸へ頂きに行きますぜ。

靜子　そんな手數は決してかけませんよ。

職工一　ぢや、今日はこの儘歸りますから。

（と、いづれも捨臺詞にて歸る。）

まさ子　靜さん、私お蔭で助つたものゝ、あなたはあんなに受合つていゝの。

靜子　ホヽヽ、何んですね、高の知れた六十や七十のお金

どうにでもなるぢやありませんか、幸、私今日この指輪をはめて來ましたから、之れを一時融通して置きますから誰れにでも確かな人に抵當に入れて明日の急場を遁れて下さい。二三日中に私の手許で現金をこしらへて受け出しに來ますわ。姉さん、どうぞさうして頂戴。

まさ子　あなたは私の爲にそれ程迄に――

靜子　いえ、姉妹の爲と云ふよりも薄々聞いて居ります父さんが此處の家へ犯した罪の萬分の一も償へればこんな嬉しい事はありませんわ。

まさ子　でもその指輪と云ふのは、豫て聞いて居る、氏家の大切な三つ揃ひの品とか云ふんでせう。

靜子　えゝ、子爵と綾子さんと私との三人なんです。

また子　靜さんの厚い御志に縋つて急場を逃れたいのは山々ですけれど、こんな貴重なものをもしも貸して後で困る樣な事でも出來ては？

靜子　それは大丈夫なのよ。子爵が指輪を調べる譯はなしそれに三四日したら戻して仕舞ふのですもの、滅多に氣遣はありません。何ぼ由緒の品物でも指に嵌つて居ただけでは、やはり指輪ですが、姉の爲め、父の爲めと思へば何でもありませんわ。お役に立てゝ下さい。

（と思ひ入ありて云ふ。此時下手より卷野大藏ツカツカと出て來る。）

卷野　奧樣、此處にお出でゞしたか、おゝ、氏家の奧樣も。

まさ子　あ、卷野さん。

卷野　奧樣、此處へもしや會社の職工が來やしませんでしたか。

まさ子　はい、只今四人許りまゐりました。

卷野　やはり來ましたか。してどうしました。亂暴でも働きやしませんでしたか。御迷惑の樣な事はありませんでしたか、奴等きつと誰かに煽動されて、暴らしにやつて來たと聞きましたもんですから若しや間違ひでもあつてはと思つてやつて參りましたが――。

まさ子　御親切樣にありがたう存じます。實は少し八釜しい事を云ひかけましたが折よく靜さんが仲に入つてくれましたので、難題も無事に解決しました。

卷野　氏家の奧さんが、それは何よりの事です。

靜子　姉さん、今迄待つても氏家が見えない所を見ると、寄らずに歸つたのかも知れませんから、私はもうお暇いたしますわ。御隱居によろしくどうぞ。卷野さん、どうぞ御ゆツくり。失禮をいたします。

（と、捨臺詞にて下手へ入る。）

巻野　（見送りて）靜子さんは何時見ても御器量ばかりか御心迄もお美しい方ですね。

まさ子　全く姉甲斐のない私の樣なものを親切にしてくれますと、どんなにか嬉しうございます。

巻野　さうでございますとも、容易な事では其のまゝ歸る筈のない職工をおとなしく引返させたのは、そこに靜子さんが姉樣思ひの御苦心をなすつたか、私にも分ります。それに引かへ日頃社長の恩顧を受けて居る職工の癖に今日のやうに不穩な態度に出ると云ふ彼等は又、憎む可き奴です。私が社に居る人間でしたら、決して只では置かないんだがね。

まさ子　え、では巻野さんは會社をお退きなすつたので。

巻野　オヤ奧樣は社長からお聞き及びではなかつたのですか。

まさ子　主人は會社の事は一向に話しませんので……。

巻野　成程あの際の事でしたからなア……然しそんな私の事なんかどうでもよいとしてともかく赤澤さんなり渥美さんなり種々御厄介になつた人間です。かゝる御災難を見ては全く御氣の毒でなりません。（と段々しなれて見せ）奧さん、決して恩を賣る譯ではありませんが、別してあなたに對しては赤澤さんとの關係上から云つても猶更粗略には思つて居りません。（と一段と聲を曇らせて）今度の件に就てあなたは定めし特別の苦勞をなすツて居らつしやるでせう。御主人には打明けられず、さりとて里へも氣を兼ねると云ふ樣な——（まさ子はつい引入れられてホロリとする）奧樣、これはあまり立入つたお話ですが、誰れにでもある事です。何かの場合に必要な事は何事に依らず私に役に立ちます事ならどうか仰有つて下さい。及ばず乍らきつと御用をつとめますから。

（と言葉巧みに云ひ終つてハンケチにて涙を拭く。まさ子は遂に巻野にまるめられ。）

まさ子　巻野さん——。

巻野　は、何か仰有いましたか。

まさ子　いえ、あの……。

巻野　何か、御用でございますか。

まさ子　いえ、あなたの御親切は心に沁みて有難うございます。

巻野　心に沁みて、……私は心の奧から奧樣のさうした御境遇がいたはしうございます。

まさ子　巻野さん、私、御言葉に甘えて、チトお頼みがあるんですが、いかゞでせう。

巻野　何事です。私で出來ます事なら、なんなりと。

まさ子　甚だ御迷惑と存じますが、妾少々差迫つて入用なのでございます。が之れを抵當として四五日お金を拜借さして戴きたいのですが――。

（巻野は自惚甲斐なき頼みに失望の體。）

巻野　あゝ。お指輪でお金、何程御入用なんですか。

まさ子　六十圓ばかり――。

巻野　六十圓……。（ヂロりと見やり）奥様これはあなたの大切な品でございませう。

まさ子　はい、命に代へても、なくせない大事の品でございます。

巻野　あの命に代へても大事の品、ハイ分りました。さう云ふ品物を御手放しなさるのは私を信じて下さるからです。しつかりとお預りいたします。

（巻野は指輪と共にまさ子の手を握つてこなし。やがて紙入より紙幣を出して。）

巻野　奥さま、どうぞお改め下さい。

まさ子　御恩は死んでも忘れません。

（巻野は指輪を押し戴き一寸接吻して指にはめる。）

（此時執達吏長谷川、金貸折山金藏出で來り。）

折山　主人が留守なら奥様に取次げば分るのだ。

女中　それにしても伺つて見なければいけません。

折山　用の多い體だ。そんな悠長な――。

（巻野はそれと察して。）

巻野　や、御客來の樣で私はこれで失禮いたします。

（と下手へ入る。執達吏、金貸、女中と爭ひ乍ら出てまさ子と出合頭。）

まさ子　米や、このお方はどなたですか。

長谷川　あなたは渥美さんの奥さんですか。

まさ子　はい渥美の妻です。

長谷川　自分は折山金藏の代理人で、漁業會社に對する債務について當家の財産全部を差押へに來たのです。これへ御印を願ひます。

折山　私は折山です。奥さん、早く御印を押して下さい。

まさ子　何分にも主人が留守でございますから――。

長谷川　イヤ御家族の方の代印でも構ひません。よろしい、では書狀は預けて行きます。奥さん、あなたお立合の許に強制執行をいたします。

（まさ子は捺印をまごつく。執達吏は押へにかゝる。まさ子は驚いて。）

まさ子　あなたは何をするのです。

長谷川　職務執行の妨害をするのですか。

まさ子　いゝえ、主人の不在中、宅のものに手をつけられては私、申譯がありません。

折山　今になつてそんな事を仰有つたつて通るもんぢやない。奥さん、それとも強つて困ると仰有るなら任意辨償と云ふ奴で今押へますか。それも渥美さんが居なけりや尙のこと出來まい。尤も今が今競爭入札をすると云ふ譯ぢやないのですから差押への妨害はなさらん方がよろしうございますよ。

まさ子　いゝえ、何と仰有つてもそれは暫くお待ち下さいませ。宅には年寄も居ります。子供も居ります。その前でかう云ふ事は見せたくありません。又何とかお話のいたしやうもございます。どうかお願ひでございます。お願ひでございます。

長谷川　不可ません／＼。貴女がいくらお願ひになつても公の職務をおろそかにする事は出來ません。

（折山と執達吏は道具に封印をつける。此の以前より滋は出で來り此の時岸代を伴ひ來る）

滋　おばアさん、お母さんが大變だよ。

岸代　まアとんでもない、まささん何てお前さんは意氣地のない應對をするのだ。お前達は女ばかりだとて好い加減な作り事をして金でも浚つて行かうと云ふのだらう私の息のある間は何一ツ手籠めにさせるものか。

（とから勢をつける）

折山　何とでも勝手な事を云ふがいゝ。長谷川さん、どしどしやつて下さい。あつちにも座敷があるんです。

（と兩人は岸代を倒して奥へ這入り。まさ子は倒れし母を起して。）

まさ子　母樣、危うございます。

岸代　これも皆お前からだ！

（とまさ子を拂ひのけて上手に這入る。滋はあたりを見やりて。）

滋　母さん、どうしたの、あんな紙を貼つて。

（と泣く。奥には岸代の罵る聲。まさ子は慌てゝ奥へ這入る。そこへ主人渥美出で來る。）

渥美　オイ誰れも居ないのか。まさ子はどうした！　米、オイ／＼。

(此時まさ子出で來り心付き。)

まさ子　あ、お歸り遊ばせ。

渥美　己れが外から歸つて來たのに氣のつかんと云ふ奴があるか！　何して居たんだ！　日が暮れたのに電燈もつけず！

まさ子　はい、誠に心付かない事ばかりいたしました。

(と電燈を燈し、ホツと吐息。)

渥美　なんで溜息をついて居る。己れが歸つて來たのが、そんなに氣に入らんのか。

まさ子　飛んでもない。そ、そんな事が——。

渥美　おや今のは何の溜息なんだ。一體お前の顔色が少し惡いぞ！　氣を付けろ！

まさ子　申譯がございません。

渥美　外に居れば癪に障る事ばかり、家へ歸れば又これだ。あゝあ——。

まさ子　あなた早速ですが、申上る事がございますので。

渥美　どうせお前の申上る事に碌な事はない。それより早く着替でも持つて來いよ。

まさ子　ハイ——。

(と思はず立つて下手の方を見やりホロリと泣く。)

渥美　おい。早く出せと云ふのに。

まさ子　ハイ——。

渥美　己れの云ふ事が氣に入らんのか、えい、勝手にしろ。

(とまさ子を突き退けて奥に入らんとす。此時折山、長谷川出で來りそれと見て、)

折山　イヤ渥美君か、君は隨分誠意がなさ過ぎるぢやないか。今更云つたつて仕方がないが、ともかく差押をしたからね。

(と云ひ捨てゝ書類を投げ付け二人は下手に這入る。)

(渥美は呆然として暫く。まさ子は俯向いたまゝ。)

渥美　さうか！　(と大きな吐息をついて以前よりは物やさしく)　まさ子、寢床を出してくれ。寢床位は殘つてるだらう。

まさ子　はい——。

渥美　では書齋に床を敷いて、それから晩方から北風が吹く。母さんや滋に寒くならない樣にしてあげておくれ。

まさ子　あなた、お母さんにお會ひになりませんか。

渥美　顔が合はせられると思ふのか。

(ツト立ちて上手に行く。まさ子もついて行く。此時岸代は滋を伴ひ下手より來る。)

岸代　やつと兒共を歸して仕舞つた。もう此方へ來てもいいよ。あゝ長生をすれば苦しい目を見る許り、先祖に申譯ありません。おわびします。
（と四邊を見て位牌を懐中より出し、こなしいろ／＼ある滋は目をこすりて。）
滋　おばアさん、あつちへ行つて寢ようよ。僕眠くなつちやつた！
（そこへまさ子出て來る。岸代は慌てゝ位牌をかくす。）
岸代　オヤお前さんか、私は又さつきの人達かと思つて驚いたよ。
まさ子　あの人達はもうとつくに歸つて仕舞ひました。
岸代　やれ／＼ありがたい。これも皆如來さまのおかげだナムアミダブツ／＼助かりました。私共はともかく、あなた様に憂目を見せまいと願つて居りました。さア滋もこゝへ來てお辭儀をなさい。
滋　お母さんもしなくちやいやだ。
岸代　お母さんは他所の人、お前さんは此の家の血統を引くものです、あれ程云つて聞かせても分らないのかい。
（とキツと云ふ。滋も是非なく廚子の前に手をついて拜む。まさ子は泣く。）
（風の音、木魚にて――。）

――道具一轉する――

第二場　渥美家の奥庭

舞臺上手に書齋見ゆ。下手に庭木よろしく。よき所に折戸四ツ目垣、石燈籠などよろしく。
（上手よりまさ子思案に沈み作ら、出で來り井戸の傍りにある立木の處にて立止り考へ込む。と、内より渥美静かに來り四邊を見てまさ子に氣付き、兩人顔見合ふ。）
渥美　まさ子か！
まさ子　あ、あなた……。
渥美　どうしてお前こんな處に居るのだ。まさか飛んでもない考へでも起したのぢやなからうね。
まさ子　妾よりもあなた、どうして……。
渥美　馬鹿な、ハ、、己れが自殺でもすると思つたのか。
まさ子　……。
渥美　いくら己れが馬鹿でもそんな無分別な心は起さん

よ。まさ子！　お前、そんな事は夢にも考へてくれるなよ。己れが許さんよ。そんな考へを起すと、己れは妻とは思はんぞ！

まさ子　それでも私はあなたに迷惑をかけた赤澤の娘でございますわ。

渥美　そ、それがどうしたと云ふのだ。赤澤の娘であらうが何であらうが、お前は渥美俊策の妻なんだぞ。

まさ子　それは、あなたが仰有るのですか、本當でございますか。いゝえ嘘です！　嘘です！　赤澤の娘の私は、そんなお言葉を頂ける筈はありません。

渥美　まあ、何故お前はそんな事を云ふのだ。名譽を捨て財産を捨てた己れはお前と云ふ妻があり、母があり、子があるだけがせめてもの誇りだと思つて居るのだ。お前は誰れが何と云はうと己れの妻だ。己れの大切な家族だ。財産だ。世間から見放されてもお前だけは己れを見放しはしないだらうなア。

まさ子　あなた！

渥美　おゝ……。

（と兩人互に犇と抱く。時の鐘。風の音。）

（流しの淨瑠璃。三味線にて。）

（此の時よろしく――。）

――幕――

三幕目

氏家子爵邸園遊會

本舞臺上手盆栽の設け、下手四ツ目垣紅葉の林向うに通して奥深き花壇を設け石燈籠など、氏家子爵邸。菊花壇、合方謠曲を聞かして幕あく。

（と、盛裝したる多くの令孃、貴婦人、貴族ハイカラの紳士花壇の前を行き交ふ。此の時上手より清岡球江盛裝して巻野大藏燕尾服、シルクハツトの形、執事小間使などに案内されて出で來り、中央の大理石の前にとまり。）

執事　只今、お孃樣がお見えになります故、暫く御休息下さいます樣――。

（小間使はコーヒーを勸めて、執事と共に入る。巻野は向うを見て。）

巻野　球江さん、どうだい、來る人も來る人も皆、目も覺

めるやうな滿艦飾だ。これぢや菊見に招待されたのぢやなくて美人の展覽會に來たやうなものだね。
球江　全くね、まるで婦人雜誌の口繪が拔け出して廻り燈籠をして居るやうだわ。プーツまアいやだわ、それに引き代へて兄さん何て恰好なの。
卷野　何かさ、今日は華族樣とお近づきになるんだよ、燕尾服を着用に及んだのが、どうしてそんなに可笑しいんだ。近き將來に社長になる卷野大藏氏だぜ、似合ふだらうがね――。
球江　さう、よく似合つてね、菊見の招待より南極探檢にでも出かけるとよかつたのにさ。
卷野　へエー。
球江　遠くから見ると人間ばなれがしてペンギン鳥そつくりだわよホヽヽヽ。
卷野　失敬な。（と腹立の眞似をする。）
球江　あらイヤだ、ズボンのボタンをおかけなさい。
卷野　や、これは恐縮！
（此間に絕えず令孃貴婦人紳士など往來する。）
卷野　然し本當を云ふとこんな服は全くコリ／＼だよ。休憩中これ位はいゝだらうな。
（と帽子を取り手袋を脫し、卷莨をくゆらす。球江ふと大藏の指輪に氣付き。）
球江　おや、兄さん、あなたその指輪はどうしたの？
卷野　これかい？　どうだ凄いもんだらう。
球江　にせ物でせう？
卷野　冗談ぢやないぜ、人樣の前で人造ダイヤなんかを振廻す卷野さんぢやないよ。嫁に行つたお三と一緒にされちや叶はないね、附いてる人が泣きますぜ、指輪の主が泣くよ。
球江　おや、ぢや兄さんのぢやないの。
卷野　兄さんのぢやないが、兄さんのものになつたのさ。そこには曰く因緣故事來歷があつての事さハヽヽ、どうだい此の光は夜目凄いぜハヽヽ。
（と指をふり廻して接吻する。球江その手を押へてぢつと見て囁き。）
球江　まア大した彫刻ね、金の高彫で梅の花、石と云ひ何て立派なんでせう。
（と何事か心にうなづく。卷野は愈々得意になり。）
卷野　どうだい、本物だらう。いくら兄さんだつて、不見轉藝者の尻許り追ひかけて居るもんかね。

球江　兄さんは本當に此の指輪の持主と深い關係があるの？　何だかねえ――。

巻野　さうさ。（と腮をなでゝニヤ／＼する）

球江　本當に、何だか危いわよ、こんな指輪をやつたりするには大變な事よ。事實を仰有いよ。でないと返しませんよ。

巻野　じよ、冗談云つちやいけないよ。夫は命に代へても亡くせない品なんだよ。仕方がない、ぢや打明けるがね、實は名前を云へばお前も知つて居る或る婦人に秘密に金を貸した抵當に預かつたんだよ。尤も大丈夫受戻せる氣遣ひはない品物さ。何れにしろ、今年は南瓜の當り年だねえ。

球江　兄さん、私に讓つて頂戴な。

巻野　ブル／＼いかんよ、そりや。

球江　いくらでも望み通り出しますよ、お金は。

巻野　處が兄さんに取つちや萬金に替へられないのだから駄目だよ。

球江　萬金に替へられないのなら三萬圓でどうでせう。

巻野　え！（と驚き）なか／＼。

球江　ぢや五萬圓――。

巻野　本當に五萬圓、イヤ／＼御免蒙らう。いくら兄妹の仲でもそれだけは駄目、駄目！

球江　では之れ程云つてもなの、さう、そつちがさう云ふ料簡なら妾にも考へがあるわ。もう妹、賴む。はお斷りですよ。よござんすか。

（と指輪を卓の上へ投げ出して科あり。）

巻野　あ、球江さん／＼そんなに腹を立てなくてもいゝぢやないか。僕だつて徹頭徹尾、讓らないと云ふのぢやないよ。だけどその、困つたなア。

（と頻りに球江に媚びる事よろしくある。）

球江　ではかうして下さい。妾の方も思ひ切つて七萬圓。それでもおいやなの。

巻野　よし、やつちまへ！

球江　ぢや私、たしかに買ひましたよ。

巻野　處で球江さん、その內金として少し許り貸して……燕尾服の社長さん、ポケットが頗る淋しいんだから。

球江　あら此の間の三百圓はもう使つて仕舞つたの、お前さんのお金だからいゝけれど餘りクダラナイ遊びはお止しなさいよ。ぢや出先だから千圓ばかり……。

（とオペラバツクの中より金を出して渡す。巻野は僕

中にして。)

巻野　やア向うから子爵の夫人と令嬢が來た。女が三人寄つて又長話が始まるんだらう。僕は少し花壇を見物して來るから歸る時に知らしておくれよ。

(巻野はこなしあつて下手へ入る。上手より靜子と綾子出で來る。)

綾子　いゝ事よ〳〵妾、知らないわ。姉様からお話しなさいな。

靜子　でも私困りますから――。

球江　おゝ、先刻から失禮を、――いつ拜見しても氣の晴晴するお庭でございますことね。殊に今日の様なお天氣には菊の花の色も香も一段高く誠によろしうございますわホヽヽヽ。

綾子　だけれど奥さま、私口惜しくて〳〵仕様がないのよ。こんな侮辱を受けた事はないんですもの、それもこれも皆、どこかの中傷よ。

(と、靜子をにらんで云ふ。球江は笑にまぎらして。)

球江　ホヽヽ、又、綾子さんのお株が始まりましたね。今日はどんなお腹立の事がありましても私がお預りいたしませう、ねえ奥さまホヽヽヽ。

綾子　お姉様、何故默つて居らつしやるの、早く今のお話をなすつたらいゝぢやないの。

靜子　はい、あの、すみませんけれど、あなたから、どうぞ。

綾子　私は存じません事よ。云ひ出したのはあなたでせう。

(と横を向いてツン〳〵する。靜子は是非なく)

靜子　清閑様、私、眞に面目ないお使に上りましたのでございます、と申しますのは少し餘儀ない用事の爲に折角お招き申しながらお目にかゝる事が出來ないと申しますので……。

球江　あの私にお會ひ下さいませんて。(こなし氣をかへて)いえ、今日さう云ふ事でございましたら殿様にお目にかゝれませんでも明日の誕生祝においで下さいますればもう滿足でございます。

靜子　それがあの、あしたの御招待にも御伺ひ出來ませんやうな譯で――。

球江　では、あしたおいで下さる事も、――でも奥様、先週此方へお伺ひいたしました節は尤もお目にはかゝりませんが、何とか繰合せて入らつしやる様に伺つて歸りましたのです。

静子　はい、それが急に遁れぬ用事が出來ましたので、よく私からお詫び申上る樣に云ひ付かりました。

球江　まア困りましたわねえ。明日のお客樣は、皆氏家樣の御紹介で初對面の方々ですから、私、氏家樣の御引合せを願はう事と思つて居りましたのに、あのほんの十分か十五分でもお出でを願ひますことは――。

静子　それが眞に申譯ございませんので……。

球江　困りましたわねえ。私は氏家樣が、どなたより頼りなんですから、でも氏家樣の御親戚の谷口樣や、辻樣は入らして下さるでせう。

静子　それが、そのお二方も……やはり……。

球江　あらお二方も――では貴族院の方は。

静子　やはり、その方々も――綾子樣どうぞあなたから譯をお話しなさつて。

綾子　私存じませんよ。私が發起人でお引受けしたのに今更、清岡さんにそんなお話は出來ません。

球江　では櫻木クラブの方々は。

静子　清岡さん、何とも申譯ございません。

球江　（キッとなり）奧樣、それでは明日のお客樣は一人も入らつしやらないのぢやありませんか。

静子　はい。

球江　（ヂリ／＼と進み）奧樣、あなたは私に恥をかゝせようと申合せをなさいましたね。（と云ひしが、氣を取直して）奧樣、未練らしい樣ですが、もう一度伺ひますが明日のお客樣は申合せて一人も來ては下さらないのですね。

静子　はい。

球江　何の目的でさうまで恥をお與へになるのかそれをお伺ひいたしますわ。

静子　いえ、決してそんな恥など――

綾子　姉さんも卑怯ね、何故今、兄さんが仰有つた通りハツキリ云はないの、清岡の奧樣、あのもう私、貴女と今迄のやうに仲よくしては不可ないんですツて、今日限り絶交しなけりやいけないんですツて。

静子　綾子さん、そんなことを――。

綾子　いゝえ、今更かくす事はないぢやないの、貴女も現に先刻さうする樣に私に忠告をなさつたでせう。

静子　それは兄樣の云付でしたから仕方なくなのです。

綾子　仕方なくだか、喜んでだか分るものですか。

球江　綾子さん、どうか正直に仰有つて下さいまし。何故

綾子　私はさうまであなた方に嫌はれるんですか。

綾子　ねえ奥様、貴女の今は今としても、以前の生涯が分らないからですッて。

球江　え、私の以前の生涯？

綾子　そんな後暗い方と交際しては（と止める靜子をつきのけて）いゝえ、いゝんですよ、蔭で云ふのも面と向つて云ふのも同じ事ぢやないの……貴族社會の恥になるからですッて――。

球江　と申しますと私が外國人の妻だつたからですか。

綾子　いゝえ、それはどうでもいゝ事ですけれ共、その外國の方と結婚する前のあなたの生涯ですッて。

球江　え？　何んですッて。

靜子　（堪りかねて）御めん下さいまし。失禮いたします。

綾子　（その袖を抑へて）お待ちなさい。姉様、明日はともかく、今日は此方からお招きしたお客様を打捨てゝ行くと云ふ事がありますか。萬事がこれですから清岡さん、私本當に腹が立つてならない事ばかりなんですわ。折角お友達になつたと思つたら、――いえ、兄がこんな事を急に云ひ出すのも何處かで焚きつける人がありますのよ。

球江　外國人の妻になる前の――後暗い生涯？（唇をかんで）さうしてそれは誰方の口から氏家様のお耳へ？

靜子　ごめん下さいまし。

綾子　お待ちなさいッてば、清岡さん、私只一言だけ申します。大森の渥美さんの奥さまのまさ子さんは、この靜子さまとは御姉妹なのですわ。私それだから口惜しいのです。

球江　え？

靜子　失禮いたします。（と上手へ逃げ去る）

綾子　姉さん〱。（と止めんとして能はず上手を見送る。球江はさてはと云ふこなし。身を震はして復讐の念起る。）

球江　さう云ふ事なら綾子さん、私諦めましたわ。けれど誰が仲へ水をさして離れさせようとも、私指輪のある内は貴女と一緒に居る意りで居られます。（と、以前の指輪を示す。綾子は一目見て驚き）

綾子　奥様、此の指輪はどうしてお手許に。

球江　貴女が大切になさる指輪によく似て居りますから私もお對にしようと思つて買ひ取りましたの。

綾子　清岡さん、あなた、誰方から此れをお求めになりま

したの？

球江　ある貴婦人からお金の抵當に取つたと云ふ人から妾が無理に讓り受けたのですわ。その間には色々をかしなお話もある樣ですわ。私の過去を色々と問題にして騷ぐ貴婦人の仲間にも、かうした祕密を持つて居らつしやる方もあるんですわねえ。

綾子　兄樣が私を迎へに來ましたわ。

球江　さうですか、おや一寸あちら迄、この事でお話しをして置きますから――。

（と兩人囁き合ひて下手へ入る。上手より氏家と靜子來る。）

氏家　お客樣も大分歸つた樣だね。淸岡の姿も見えぬが歸つたかね。

靜子　さうの樣でございます。

氏家　あなた、さつきの事を妹に通じてよく淸岡に斷らしてくれたらうね。

靜子　はい、お云ひ付の通りいたしました。

氏家　定めし、あや子の事だから理窟を云つて貴女を困らしたらうね。

靜子　そんな事はございません。快く御得心なさつて、淸岡樣へ明日のお斷りをなさいました。

氏家　ハ、、、近頃にない事だ。元來已れには理窟を云ふ女と蓄音機は大きらひだハッ、、、。

靜子　まアお口の惡い。

氏家　しかし、その綾子はどうしたらう。

（此時下手より綾子ツカ〳〵と出る。）

綾子　蓄音機と理窟を云ふ大嫌ひな女は茲に居りますよ。

靜子　あら綾子さん――。

氏家　ハ、、ウッカリ又理窟の材料を與へて仕舞つたな。お前、球江に明日の事を全部斷つてくれたかい。

綾子　えゝもうお斷りになりましたわ。然し兄さん、私が球江さんと交際するのがどうして家名を汚す事になるのですか？　そんな事を云ふのなら、それよりも甚だしい不名譽な事をして入らつしやる方があつたら兄さんはどうなさいます！

氏家　分らんね、突然にそんな謎のやうな事を云つても。

綾子　私も始めは分りませんでしたが、事實なのですわ。

氏家　いよ〳〵理窟の本領を現はしたな。邸の中で誰か不名譽な事をしたと云ふのだね、まア若しあつたとしたらお前位のものだらうハ、、、。

綾子　何んですツて、兄さん、いくら妹だからツて侮辱なさるにも程がありますわ。

静子　あなた、もうさう惡口を仰有つては綾子さんにお氣の毒ですわ。綾子さん、兄さんは少しお酒に醉つて居りますので、どうかね。

（静子双方の中で氣をもむ。）

綾子　お氣をつけ遊ばせ。兄さん、氏家の家族の中であなたと私と、も一人しか持つて居ない大切な指輪を抵當に、お金を借りた人がありますよ。しかもその抵當は取り戻す事も出來ないので、今では私のある友達の手に渡つて居ります。妾は現にその指輪が他人の指にはまツて居るのを見ましたのです。そんな事は不名譽ぢやないのですかしら。

（と、ジロリと静子を見る。静子はこれを聞き、非常に狼狽する。氏家は更に信ぜず。却つて綾子をたしなめ。）

氏家　綾さん、お前どうしたと云ふのだ。少し考へたらよからう。

綾子　兄さんこそお考へになつたらいゝと思ひます。

氏家　綾子、反抗もいゝ。場合に依つては意見の一つも止むを得ん。然し人間は如何なる時でも取亂すのは實に見惡いものだぞ！　それが一番、自身を傷つけるものだ。お前は何か誤解をして居るのだ。然し誰れかゞ中傷したのだよ。信ずる價値はみぢんもない事だよハヽヽヽ。

綾子　それぢや兄さん、立派な證據があつても、妹は信じられないと仰有るの？

氏家　證據？

綾子　はい、そこにお居での姉様の指輪が或る人の手に渡つて居るのですわ。買ひ取られて居るのですわ。

静子　あツ、

（と極度に狼狽する。綾子は聲をはげまして。）

綾子　兄さん、私は決して理由なく姉様の罪を鳴らすのではありませんのよ。家のため、あなたの爲め、不名譽を見るに忍びずですわ。それにつきましては私にも決心があります。萬一その事が間違つて居りました時は、私はどんな責もお受けいたします。けれ共それも兄様のおぼしめし次第……各自の所有物だからどうしようと構はないと仰有るなら妾だつて何も云へませんわ。その代り私の事にも決して干渉をなさらない樣にお願ひいたしますわ。

氏家　綾子！　お前それは正氣なのか。
綾子　えゝ、正氣ですとも。
氏家　今云つた事は誓つて責を負ふと云ふんだね。
綾子　えゝえ、申しました。
氏家　よろしい。さう云ふ事を私の耳へ入れるなら、その覺悟がなけりやならん。靜さん、お前もさつきから聞いて居た通り、綾子は何か誤解をして居るのだらうが、この儘、打捨つておく事は出來ないからそこに持つて居るのなら出して見せておくれ。
靜子　はい。
氏家　どうしたのかね。
靜子　あの、こゝには。
氏家　部屋に置いてあると云ふのかね。
靜子　はい、あの――。
（綾子は怯げに、ぢつと靜子の悶えを見やる。靜子は決心して。）
靜子　申譯ございません――。
氏家　靜さん、何が申譯ないのだ。默つて居ちや分らんぢやないか。靜さんどうしたと云ふのか。
靜子　私、申上げられないのでございます。
氏家　では綾子の云ふ事が事實で、お前は金に困つてあの品を手放したのだね。
靜子　私、そんな事をした覺はございません。
氏家　では、どうして云へないのだ。え、どうして辯解が出來ないのだ？　今までは全く間違ひとのみ信じて居たが綾子の云ふ通りお前は私の日頃の言葉を破つて家寶の一ツを他人に與へて更に悔む處はないのだね。
靜子　決してそんなこと――。
氏家　さアそんならちやんと云へさうなもんぢやないか。三人が取交した大切な指輪と云ふ事はお前も承知の筈だ。靜子！　決心して返事をなさい。
（靜子は泣崩れる。そこへ日下部正也が一瓢を肩にして出で來る。）
日下部　奥樣、あなたは要らん遠慮をなさらんで、何故指輪の行方を仰有らん、あなたが云はんけりや僕が云ひませうか。
靜子　はい。
綾子　さう／＼日下部さんなら知つていらつしやるかも知れないわ。貴方とは大變懇意になすつていらつしやるから、驚いちまひますわねえ。

日下部　奥様の指輪は實は僕が拜借したのですよ。

氏家　え、君か。

綾子　違ひます／＼。兄様、それは嘘です／＼。

日下部　關係のないあなたは口を入れんで下さい。此の問題は僕と子爵との間の問題です。子爵、僕はさう云ふ貴重な品とは知らずに餘り彫刻が面白いと思ひましたから今彫りかけて居る彫刻の參考に仕ようと思つて過日奥さまの手から無理にお借り申したので決して何處へもやりはせんです。確かに僕の宅にお預りしてあります。

氏家　おや、靜子は君に指輪を貸したのですか。

綾子　兄様、日下部さんの云ふ事は跡方もない事です。私は確かに淸……。

日下部　綾子さん、あなたは確かに見たか知らんが、僕はたしかに預つて居る。類似の品は世の中に無いとは云へますまい。で綾子さん、靜子さんは兄様の奥様、貴女には義理の姉様ですぞ。その姉様に取つて容易ならん事を兄様の耳へ入れるのは一應姉様にお質しになつた上でせうね。まさか輕卒な事を云つて姉様の御迷惑になる様な事を淑女とも云はれる方が故意にする様な事はないでせうなア。

綾子　いゝえ、私は姉様に對してさう好意は持ちません。私に取つて姉様よりは氏家の名譽が大切です。

日下部　無論お家の名譽は大切であればこそ輕卒な事をなさつたり仰有るなと申すのです。それぢや私の手から指輪を子爵にお返ししたら貴女はどうしますか？

綾子　えツ。

日下部　子爵夫人の名譽をあく迄も傷付けるあなたは卽ち氏家子爵の名譽を傷付ける人となるのですぞ！

綾子　………。

日下部　綾子さん、失敬かも知らんが、物云へば脣寒し秋の風ぢや。滅多な事は仰有らん方がお爲ですよ。

氏家　では日下部君、僕にその指輪は見せて貰へるだらうねえ。

日下部　謝罪かた／＼きつと明日持參いたします。（とキツパリ云つて叩頭する。――木頭――綾子はいまいましきしぐさ。）

綾子　どうとも勝手になさい。私は失禮します。（と、上手へ入る。）

日下部　ハ、、、、。（日下部は大きく笑つて綾子を見送る。靜子そつと手

な合せて拜む。氏家は安堵の體。樂の音。）

――よろしく幕――

四　幕　目

第一場　淨華院境内渥美侘住居

舞臺常足二重。上手一間の屋體、中央三間のあばら家。破れ朽ち襖。よき所に佛壇。隣りて押入より此方に破れ障子二枚の開閉臺所に通ふ。舞臺前に木垣。よき所に枯木一株。下手を隔てゝ田圃。向うにこんもりとした森を見せ、星の如き灯影二つばかり見ゆ。二重に破れし硯、骨の取れし大古机の上に五分芯のランプ紙の笠をかけ、其他世帶道具三つ四つ並べ、渥美俊策の隠れ家の體。合方にて幕あく。

（と、二重にまさ子、やつれたる姿にて煮物をして居る。門口には法界屋の二人月琴、胡弓を鳴らして居る。滋は袋へ玉子を入れしを持ち立ちかゝり居る。

　唄へ落ちぶれて袖に涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らるゝ――。

（まさ子、ちつと立ちて聞き居りしが思はずハラ／＼と泣き銅貨一個を取つて與へる。法界屋禮を云ひて向うへ去る。滋は此時、家に這入りて物思はしげにまさ子を見て。）

滋　母樣、ホーカイ節より軍歌の方がいゝね。

まさ子　あ、滋さん、そこに居たの、どうしたんですね。母さんは先刻から待つて居たんですよ。お湯へも行かなければならないしね。

滋　これは勝彌さん所の鷄が生んだのだつて荒物屋のをばさんが云つたの。

（と袋を出す。まさ子捨臺詞にて受取り此方へ來り右の玉子を割つて煮物にかゝる。）

滋　それから母樣、勝彌さんとこの鳥は一日に三つづつ卵を生むんだつてね、家にも居るといゝなア。

まさ子　さうすると荒物屋迄使にやられなくつていゝの。

滋　さうぢやないの。皆で食べられるからさ。一つはおばアさんそれからお父さんとお母さん――。

まさ子　滋さんのが無いぢやありませんか。

滋　僕は要らないの、お父さんのでいゝや。お父樣は大抵留守だもの――。

（まさ子、ハツとしたこなし。滋は素早くその顏を見。）

滋　母樣。何泣いてるの、又おばアさんが怒つたの？

まさ子　まア此の兒は何と云ふ事を云ふのです。大變にえぶる炭があつたもんだから、つい涙が出たのよ。

（と笑に紛らしてそつと袖で涙を拭く。）

滋　けれど、おばア樣はよく怒るんですね。僕母樣が可哀想だ。おばア樣はどうして怒るんでせう。

まさ子　働かないと誰れでも怒られます。お前もその意りでよく勉強をなさいよ。

滋　勉強するとも、僕勉強して大學校へ行くんだ。いゝでせう。

まさ子　さう／＼早く滋さんが大學へ行かれる樣になつたらおばア樣がどんなにお喜びなさるでせう。

滋　それから僕洋行するの、岡さんのお父樣はアメリカへ行つてるんだツて、僕アメリカでも何處でも構はないから洋行するの。いゝなア天洋丸は大きな舟でねえ。洋服を着てさ。

まさ子　ホヽヽ、オヤ／＼すつかり御支度が出來ましたのね。

滋　母樣、僕が洋行する時は、母樣だけは連れてツて上げるよ。

まさ子　さうですか、早くさう云ふ風になつて下さい、待つて居ますよ。

滋　あら又泣くの、どうして泣くのさ、母樣――。

まさ子　うれしいからさ。

滋　そんならいゝけど、母樣が泣いて居ると、僕も泣きたくなつちまわア。

まさ子　親子だものね。（ト、ギツト引寄せて抱き）お前のやうな子を持つた母樣は、本當に幸福者ですよ。

（そこへ老母岸代湯歸りの體にて出で來り。）

岸代　どうもお待ちどほ樣、全くいゝお湯で心持がいゝもんだからすつかり長湯をして仕舞ひました。

まさ子　ホヽヽいえ未だ私の方の用事も片つきませんのですから。

岸代　もうその位にしてお置きなさい。後は私がやりますから。さア滋や、おダチンをあげるよ。

（此にてまさ子煮物を片付けランプへ灯を點す。色々あつて臺所より風呂敷手拭を持ち來り。）

まさ子　では母樣ちよつとやらせていたゞきます。

岸代　あいよ。用事はないのだから今日の樣な寒い日には

ゆつくり温つておいでなさい。
まさ子　有難うございます。ぢや滋さん、行つて來ませう。
（と滋を連れ捨臺詞にて下手へ行く。岸代は四邊を片付ける。此時下手より彼の巻野後をふり返りつゝ出で來る。）
巻野　御隱居さん、それではお伺ひしても、ようございますか。
岸代　お湯へ出してやりましたから三十分位はゆつくりお話が出來ませう　さアどうぞ――。
（巻野は捨臺詞にて二重へ上り。）
巻野　しかし只今は、どうも失禮をいたしました。
岸代　して私に逢ひたいと云ふのは誰方でございますか。
巻野　名前は前以て知らせずに連れて行つてくれと頼まれたのですが、獨り貴女の利益ばかりぢやない。渥美さんの爲に非常な幸福が湧いて來る、端緒になるかも知れんのです。實は私も頼まれた時は餘り意外でしたが、とに角悪い事ぢやないのですから、慌てゝお知らせに參つたのです。これはその人から特に貴女に差上げてくれと頼まれたものです。
（と立派なる小形の銀貨入れに金貨二百圓を入れしのと、上等の襟巻を出す。）
岸代　え、こんな結構なものを私に下さる。どうも私には分りません。
巻野　ですから今直に分る樣にしてあげます。其の前に一寸伺つて置きたいのは貴女は此の先、渥美家の運命はどうなると思召します。
岸代　はい、俊策や嫁の話では未だ、あの會社があるさうですから、あの會社さへ他へ讓るとなれば、家中の生活は立つて行けると思ひます。もう此の上落ちぶれる事はなからうかと思ひます。
巻野　さア會社が俊策さんのものならそれは仰有る通りですが然し私がいつか、赤澤があの會社を二重抵當に入れてあると云ふのをお話ししたのを御記憶でせう。
岸代　その爲に實は、こんなうき目を見て居るのです。身代殘らず差出したので、その片はついて居るんぢやございませんか。
（と知らず／＼巻野にくつてかゝる。）
巻野　はア、一方は濟みましたが、一方はその儘殘つて居ります。十九萬圓の借金は依然として渥美さんの肩にかかつて居る。然も期限はもう過ぎて居るのです。今日に

も明日にもいつでもあの會社は取上げられるのですよ。
岸代　え、ではあの會社も――（岸代は手に持つて居た銀貨入れを落す。金貨がこぼれる）巻野さん、これは何ですか。（と再び呆れる）
巻野　それはあなたに進上したのです。
岸代　え、私にこれを、い丶えこんなものを誰方様にも戴く譯がありません。もう／＼氣味の悪い様なものはお返しいたします。
巻野　何を仰有るのですか。それもこれも、皆貴方を思つて居る者がくれたのです。
（岸代は、それを返さうとする。此時下手より球江出で來りて、ツカ／＼と内に入り、二重に上る。）
球江　母様おなつかしうございます。
岸代　え？
球江　定めしお見忘れの事でございませう。私でございます。球江でございます。
岸代　球江と仰有ると。お丶、お前さんは！
（岸代はそれと氣付き大に驚く。巻野は此の以前より庭に下りて門口を伺ふ。トヾ柴折戸に鍵をかける。球江はハラ／＼と泣いて）
球江　十年ぶりでお目にかゝります。滋の母でございます。滋の――滋の――今更、お目にかゝれた義理ではございませんが、どうぞ當時の事はお許し下さいませ。
岸代　では、お前さんはお變りなく――妾は丸で夢のやうですよ。
巻野　御隠居、私が進つて戴きたいと云ふのは、此の球江の事です。さうして球江は私の妹です。
岸代　まア、あなたの。
巻野　私も球江と渥美さんとの昔の關係を今日迄知らなかつたのですが、種々と聞いて見ると、實に意外で奇縁には驚きました。それで、その話を聞くにつけ、今更妹の不心得を叱りもしましたが、然し最早過ぎた事、死生は弁めずと云ひますから、御腹立の處は私に免じて御勘辨下さる樣、お願ひいたします。
（球江は泣入る。岸代しぐさあつて）
岸代　はい／＼仰有る通り何も彼も皆夢と諦めます。球江さん、お前さんも變りましたね、けれ共、いつも御壯健で何より、お目で度う存じます。
球江　はい。その壯健がお恥しうございます。
巻野　さて、そこで改めてお話しいたしますが、只今申し

ました會社の負債のつまり渥美さんの借金ですが、それは最初他人が貸したので、妹が仔細あつて、さうと知らずに其の權利を買受けましたも奇縁だが、實は甚だ好ましくない成行になつて居ると云ふのは、證書面の期限も切れた事故、會社に對して差押へをしなければならなくなつたのです。

岸代　え、差押へ——あの差押へを——

巻野　しかし妹は、どんな事があつても、さう云ふ事をする氣はないのです。けれども貸は貸ですから其處は一つお察しを願つて、かう申すと誠に現金なお話ですが、それを圓滿に解決する方法として、妹のお願を聞いてやつて戴きたいと思ふのですが——。

球江　母樣、私をもう一度滋の母と呼ばして頂く譯には參りませんでせうか。

巻野　さア、それが出來れば第一は大切な姑、第二は以前の本夫殊に可愛い我子に對して不人情な事も出來ず、けれ共、之が飜つて許されんとすると此方がいか程義理を立てた所で貴方の方で敵の樣に思つて居るんぢや何にもなりますまい……よしからねえ。

球江　母樣、此のお願ひが叶ひますれば、先に用立てた十九萬圓も捨てゝ仕舞ひます。猶お話の都合に依つては自分の財産全部を滋に讓り昔の罪を償ふ決心でございます どうぞ母樣、私の切ない胸の裡をお察し下さいまし。

（と岸代にすがりて泣く。岸代は突然醉ひたるが如くになりて。）

岸代　球さん、貴女の實意は私によく分りました。いかにも滋の母と呼ばせませう、と云ひたいのは山々ですが巻野さんからも大抵お聞きでせうが、實に世の中は、まゝにならないものでしてね！

巻野　いえ御隱居、それは世の中が儘にならないのぢやなくてあなたが儘にしないからぢやありませんか。

岸代　でもそれは無理です。どう私が仕樣と思つても第一伜が、いえ伜の方は裏の威光でどうにもなりますが、あの剛情な、まさ子が迚も私の思ふ樣にはなりません。

巻野　あ、それはあなたが一を知つて二を知らんと云ふものです。まさ子さんの方ぢや、もう、とつくに當家に見限りをつけて離縁を取る運動をして居ますよハヽヽヽ。

岸代　え？　では、あのまさが——離縁の……

巻野　球江と昔の渥美さんとの關係を知らず、現に赤澤さんなんざア、此の十九萬圓の解決がついたら、直ぐと引

頭ろと云つて居ます。又新君だつて大森の内へ嫁樣を取りに行つて何遍も云ひ出し兼て歸つたんですからねえ。

岸代　まア赤澤夫婦がそんな事を。

巻野　まだ、それ許りぢやありません。本人のまさ子さんが當家の爲だと不名譽な眞似をして居られるのをちやんと知つて居るのです。

岸代　まア返す〴〵も呆れた事です。そして、それはどんな事です。

巻野　外でもない、氏家の奥樣から借りた指輪を以て僕に百圓の金を貸してくれと云ふのです。私もその時はそんな品と知らず、近來の境遇に同情の餘り金子を用立てた處、後で妹に指輪の出所を聞いてびつくりした樣な譯です。まさ子さんが蔭でさう云ふ不徳義な事をするのは、心窃かに離緣を望んで居られる證據です。假りに夫を大切に、家をも大切と思つたら女の身で大それたさうした事は出來る譯ではありません。これでもあなたは世の中が、まゝにならないと云はれるのですか。

岸代　巻野さん、それが本當なら、私にも考へがあります。誰れが何と云つても、まさ子は家には置きません。

巻野　本當か嘘か事實が證據。球江あれを、御隱居に御らんに入れなさい。

球江　母樣、これで御座いますのよ。

（と指輪を取つて渡す。岸代はいよ〳〵驚き）

岸代　かね〴〵話に聞いた三つ揃ひの指輪の一つ、――私は決心をしました。まさは離緣してしまひますとも。

（と、キツと云ふ。球江と巻野は、顔見合せて二ヤリと笑ふ。此時、下手より滋が歸つて來る。）

滋　おばアさま、只今。

（ハツと客を見てはにかみ、岸代の側へ來る。岸代は指輪を巻野へ返す。）

球江　お、お前は滋！

巻野　これ！

滋　未だ、お母樣は歸らないの。

巻野　滋君、しばらく、相變らず活潑ですね。

滋　おばア樣、あそこに居る人、だアれ？

岸代　お家の大切なお客樣、御挨拶をなさい！

滋　小母さん、いらつしやいまし。

巻野　坊樣は成程、よく似てるな。これこそ瓜二つだ。

球江　さアいゝ物をあげます。此處へ入らつしやい。

滋　なアに、小母さま。

球江　あなたは學校へ入らつしやる樣だからこれをあげませう。

（滋は、はにかみ乍ら來る。球江は引寄せて金ペンを與へる。滋は餘念なく喜び。）

滋　ありがたう、おばア樣此のお客樣に鉛筆を貰つたよ。金のペンだよ。

球江　滋さんは私を覺えて居ますか。

滋　え？

球江　滋さん、私を忘れましたか。

滋　僕知りません。

球江　貴方には本當の母樣があつたさうですが、どうしました。

滋　僕そのお話をすると叱られます。

球江　いゝえ、此處にはお話をしても叱る人はありません。ね、云つて頂戴。

滋　巻野さんはおしやべりだね。小母さんにあんな事を話しちやつて仕樣がないなア。

巻野　君、いゝものを貰つたのだらう小母さんに、母樣の話をしてあげなさい。

球江　あなた、本當のお母樣に逢ひたくはありませんか。

滋　えゝ、逢ひたくありません。

球江　えツ――ではどうして。

滋　どうしてツて僕のお母さんは惡い人なんですもの、そりや怖い人なんだもの、それでね不實だつて？

岸代　これ、お客樣の前で何を云ふのです。もうそのお話はおやめなさい！

滋　だつて小母さんが惡魔の母樣の話をしろと云ふんですもの、僕、今のお母さんが居るから、惡魔のお母樣なんか要らないんですよ。小母さん――。

（球江は餘りの事に泣き伏す。）

巻野　滋君、もうその話はよさう／＼。

滋　小母さんは、どうして泣くの。

球江　お話を聞いてあなたが餘りお可哀想ですからさ……

（此の時下手より渥美俊策、酒に醉ひたる體にて車に乘り門口にて降りる。）

渥美　母さん、ちよつと此處をあけて下さい。

岸代　おゝ俊策かい、はい／＼今あけますよ。

（と驚きつゝ一方に球江と巻野の下駄を取つて早く裏から逃げてくれとのこなし。球江は滋に名殘を惜しみつゝ、殘念さうにする。巻野は急き立てゝ、岸代と三

人正面障子の中へ這入る。）
（此間に俊策はわざ〳〵よろめき乍ら覺束なき手つきにて車夫に賃金を渡す。車夫去る。滋入口をあける。渥美は內へ入る。）

滋　父樣、おかへりなさい。

渥美　水を一杯おくれ。

滋　はい。
（とコップに水を入れて出す。俊策その顏をキッと見る。滋は、恐れてオド〳〵する。）

渥美　何をさう貴樣はビク〳〵するのだ。己れはお前の親だぞ！　お前は親を嫌ふのか。

滋　だつて父樣は怖い顏をするんだもの。

渥美　なに。

滋　お父樣、日下部の小父さんと逢つて怒つて許り居るんだもの。

渥美　己れが怒つてばかり居る？　あ、さうか、お前に罪はない。お前の顏がいくら彼奴に似て居ても仕方がない、お父さんが惡かつた。堪忍しておくれ、堪忍して――
（とホロリとして）さうしてお母さんは何處へ行つた？

滋　お使に行きました。

渥美　おばア樣は。

滋　お客樣とあつちへ。

渥美　お客樣とあつちへ？　――どこ？
（此時岸代慌たゞしく出で來り。）

岸代　俊策おかへりなさい。私はお前のかへりを待つて居たんだよ。何思ひがけないお客樣が來ての。それはさうと滋、お前眠くはないか。

滋　僕、寢たいよ。

岸代　それぢや、お寢みなさい。お父さん、滋は明日學校が早いからもう寢ませて戴きます。

滋　お父樣、おばア樣、お先へ。
（と目をこすり乍ら上手の屋體の中に入る。岸代ホッとして机に凭れてだらしなく眠る渥美に向ひ。）

岸代　俊策や、俊策、今のお客樣の事に就てお前に少し話があります。目を覺まして下さい。

渥美　何か知らんが面倒臭い事はあしたにして下さい。

岸代　あしたなんて云つて居られない事です。大變な事なんだよ。

渥美　あなたの大變は分つて居ます。まさか私だつて借金取を鶯の聲だと思つてやしない。かうして居る裡にも色

色運動はして居るのです。母さん今になつておわびしても何にもならず、家に對してした事も貴女への不心得も實に申譯がありません。この通りおわびいたします。

（と半ば侘び、半ば醒めたるこなし、岸代もつい誘はれて。）

岸代　何のお前、改つてそんな事は云はないでも、私だつて知つて居ます。今話と云ふのは、そんな借金取の事ぢやありません。實はまさ子の事ですよ。

渥美　まさ子のこと？　ハ、、、又母さんは始まつた。もう止して下さい〳〵。

（と父親に凭れるのを引起して。）

岸代　さア私も止しにしたいのですが容易ならん話なんです。どう間違つたものか、まさ子は他人様の大切な指輪をお借りして斷りもなく賣つてしまつたのだよ。

渥美　エッ……馬鹿な、そんな事があるもんですか！　ハ、、、。

岸代　私もさうは思ひましたが、先方から懸合に來るとすると本當に違ひありません。

渥美　だが母様、考へてもごらんなさい。第一今日渥美の家の者に、どんな指輪か知らんが貸してくれる人がありますか。又萬一あるとしても、まさ子はそんな事の出來る女ぢやありません。よく云へば律儀者、惡く云へば働きのない奴、そんな事があるもんですか。そりやかけ合に來た者が何かと間違へて居るんですよ。まア御安心なさい。

岸代　あゝ云へば、かう云ふ。おや氏家様の岡崎様の懸合に來たのも間違ひだとお云ひなのか。

渥美　え、氏家の家令が――

岸代　さうです。妹の靜子さんの指輪を借りてそれを賣つたのですよ。

渥美　まさが靜子さんの指輪を賣つた？（と容を正し）母様、きつと岡崎がさう云ふかけ合に來たんですね。

岸代　はい、き、來ましたとも。

渥美　では何故僕に逢はしてくれないのです。いやしくもそれだけの大事件に就いて、かけ合に來る者を私にも逢はせず裏口から歸すと云ふのは何事ですか。

岸代　さア、それは――あの……。

渥美　今出た許りでせうから遠くへは行くまい。帳場の車で呼返して來て頂きませう。

岸代　そりや、お前――。

渥美　あなたが御迷惑なら私が行つて來ます！

岸代　でも、お前――。

渥美　母樣、繼母の繼子いぢめと、姑の嫁いびりは、餘り見よいものぢやありませんよハ、、、。

（岸代は行かれては大變と止める。渥美はかう笑つて机にもたれる。）

岸代　それ程人を疑ふなら勝手におしなさい！

（此以前より珠江と、卷野は裏口を廻つて下手に來り立聞く。此時内うより郵便脚夫走り來る。兩人下手へ入る。）

脚夫　渥美さん、郵便！

（と封書を投込み下手へ去る。渥美はその手紙を取上げて。）

渥美　氏家靜子より、渥美まさ子樣、御内見……

（岸代立ち聞きぢつと渥美を見る。渥美はもしやと岸代を見る。岸代わざとそ知らぬ顏をする。ハツと封を切り手紙を讀み行き、段々と驚く。岸代はそつと窺ふ。讀了つて投てはと惘きつゝ、フト岸代の居るに氣付き、手紙をかくす。岸代は嘲つて。）

岸代　俊策、お前は私の云つた事を嘘だと云ひなすつたがま、嘘なら嘘として置きませう。が、一言、云ひますが、手前の妻は律儀者でございますとは、お上では通らないんですよ、いゝかね、ホ、、、。

（とツイと上手へ這入る。渥美は情なきこなし。此時まさ子、いそ／＼と下手より歸り來る。）

まさ子　母樣、只今――どうもおそくなりまして、おや、あなたもお歸りなさいましたのですか、母樣、歸りに買物をして居りましたものですから、ツイ――貴方はいつお歸りになりましたの、おや、さう／＼未だ御飯前なのでせう。只今すぐと支度いたしますわ。

（といろ／＼と云へば俊策は素知らぬ顏をして居る。まさ子手持無沙汰の體。と買物の包を持ちて立上り、臺所に行かうとする。渥美は顏をあげて。）

渥美　おい、まさ子！

まさ子　あの御用でございますか。

渥美　用があるから呼んだのだ。ちよつとこゝへおいで。

まさ子　はい。

渥美　來いと云つたら、もつと來たらどうだ。

（まさ子、オヅ／＼と進む。）

渥美　まさ子、お前は己れの妻だつたな。

まき子　はい。

渥美　さうか、その妻である以上、己れに決して隠し立てはしないだらうなア。

まき子　はい、それは申上る迄もありません。

渥美　よし、お前は靜子さんから指輪を借りたと云ふ事だが、事實ぢやあるまいな。

まき子　はい――。

渥美　借りたのか、それとも借りないのか。

まき子　……

渥美　どつちなのだ！

まき子　はい、借りましたのですが――。

渥美　さうか、そしてその指輪は何の爲めに、どうして借りたのか、はつきりと返答をしてくれ！

まき子　ですが、只ほんの内輪の事でございますから。

渥美　何！　まア此の手紙を見ろ！　（と手紙を投げやる。まき子は愕きのこなし）　これが内輪だと云ふのか。其指輪は清岡珠江と云ふ憎むべき女の手に渡つてそれがために氏家は元より渥美俊策がどんなに迷惑して居るか貴樣まだ知らんのか。

まき子　申譯がございません。

渥美　貴樣は何と云ふ情ない事をしてくれたのだ、其の手紙が立派に證據立てゝ居るぢやないか。靜子さんは何にも云はんにしろ、そんな不屆きなやり方をして義理ある妹に濟むと思ふか。妹婿たる氏家に濟むと思ふか。義理を破り人情を捨て他の家名と我が家の名を傷付ける言語に絶した不埒者奴！

まき子　何と仰有られても申譯のいたし樣はございません皆私の心が至らないからでございますが、これには――。

渥美　默れ！　辯解をせんと云ふ口の下からその辯解は何だ。そんな必要はない！

まき子　私、自分の咎を免れようと思つて云ふのではありません。只一言。

渥美　ウルサイ。それは切迫つまつた事情もあつたのは分つては居る。家の爲め名譽を重んじてしてくれたのも分つては居る。併し貴樣の其親切、結果に於てどうなつた。僅かの金に面目を全うしても渥美の家内は貧すれば盜みもする、詐欺もする。妹のもの迄奪つたと云はれては世間にそれが何の名譽だ。貴樣は、此の清岡と云ふ奴を何だと思つて居るのだ！

まき子　私一向に存じません。

渥美　貴樣の知らないものか、どうして淸岡の手に入つて居るのだ！

まさ子　實は私、卷野さんの親切なお言葉につい――

渥美　なに、卷野に――。

まさ子　それも、此の手紙にあるやうな賣るの何のと云ふそんな事はありません。一時借用したお金の抵當にお預けしたのでございます、それを此方達が自分にさう云ふ事をするのは餘り……。

渥美　よい〳〵何れにしろ五十歩百歩だ（とまさ子の激するのを抑へて）貴樣は卷野に欺かれたのだ、淸岡は卷野の妹なのだぞ！　さうした恐ろしい魂膽を以て會社へ金を貸し、――執念深い惡魔だ！　まさ！　此の渥美の家には憎むべき惡魔がついて居るのだ！　其奴が餌として覘いて居るのは己れとお前だ。獏と云ふ獸は惡い夢を食ふと云ふが、其奴は我々の樂しい夢を食ふのだ。男子の意地を捨て樂しい夢を捨てゝ、その惡魔に降伏する位ならこの逆境を切拔けるのは譯もない事だが、然し己れは例へ働き得ざるになる迄もあんな奴の厄介にはならないぞ！　その爲にかうして奔走して居るものを、如何に知らんからと云つてお前の手から、かうして失敗を…

あゝ何と云ふ情ない事になつたのだ。

（と涙と共に、上手の卅代を當てるこなしある。まさ子はいよ〳〵面目なく）

まさ子　もう何も申上げません。此の不都合の申譯は私覺悟をいたしました。

渥美　馬鹿、そんな事で言譯が立つと思ふか！　覺悟の申譯のと生意氣な事を云ふな！（兩人泣く）

まさ子　ではどういたしましたらよろしいのでせう。せめてそれだけでもお敎へ下さいまし。あなた、お願ひでございます。

渥美　敎へてやらう。只罪業が滅しないと思へ！　さうして或る時迄苦しむのだ！

（と云ふ時、下手より會社員、落合、中折帽に外套にて出で來る）

落合　おゝ社長おかへりですか、例の事に就てお迎へに上りました。

渥美　え、例の事ッて北海道から書面でも來たのかね。

落合　書面處ぢやないのです。長沼自身が上京して我々の來るのを待つて居ると云ふ吉報が舞ひ込んだのです！

渥美　長沼が來た！　さうか、さうか、救はれた。〳〵。

落合　勿論です。實業界の義俠者たる彼の上京は、きつといゝ事に相違ありません。八時迄に來てくれとの事ですから早速お供いたしませう。

渥美　行く〳〵。まさ子。羽織を――。

まさ子　はい――。

（と出さんとして上手行李に手をかけ、ちつとこなし。竊かに泣く。渥美は心急きつゝ。）

渥美　これまさ子、何をぐづ〳〵して居るんだ。早くせんか早く……。

まさ子　はい。

（何も行李に凭れて泣く。さてはと渥美も思はず泣く。門口にて落合それと察して。）

落合　社長、相手は地方の紳士です。却つて身裝は飾らん方がいゝです。それに時間ももう――。

渥美　然し落合君、この見すぼらしい姿でもかまはんかね。

落合　何、かまふものですか。身裝なんか――。

渥美　ハヽヽ、さうだつたね。

落合　ハヽヽ、さうですとも。

渥美　まさ子、喜べ！　今の話で行くから、後を頼むぞ、君お待遠さま――。

（と兩人下手へ入る。まさ子は後を片付ける。以前の一室より岸代出る。）

岸代　まささん、委しい事は聞きました。どうも成行だからお諦めなさい。

まさ子　お母樣にも申譯ございません。

岸代　お前さんの心持はよく知つて居ます。が俊策があんなに云ふのにお前さんの肩を持つて主人の顏を潰す事も出來ません故、それで默つて居たのです。その內には又どうにかお話がつくでせう。何も當座の辛抱だと思つて短氣な事をしなさるなよ。

まさ子　ありがたう存じます。

岸代　たゞ里へ對して面目ないのは、お前さんの着替をあの騷ぎでなくした事だが、我々とてもいつ迄もこの有樣でも居りませんから、後から變りの品でも送ります。

まさ子　え、では私は實家へ戾りますので。

岸代　おやまア、お前さんはその意りではなかつたのかい今、お前さん覺悟をしたと伜に云うたぢやありませんかこんな事を仕出かして、まさか此の儘濟まして居る譯には行くまい。

まさ子　お母樣どうぞ御勘辨遊ばして下さいまし。恥も道

も知らない女と思召すでございませうが、どうぞ、そればかりは——母様、お願ひでございます。

岸代　いゝえ、いけません。倅だつてあの通り罪業の消える迄苦しみと云つたぢやありませんか、迷惑をかけた此の家を出て罪亡しをなさい。もうお前さんは家の嫁ではありません。

まさ子　えッ。

岸代　さア出て下さい〱。

まさ子　まア母様、もし母様私の樣な者を嫁と思つて置いて戴けませんでしたら、せめて下女としても。

岸代　いけません。嫁でさへ置けないものが、赤の他人の下女は猶更の事です。

まさ子　それでは、お臺所へ來る犬猫と思召して——其代り私死んでも身の明しは立てます。それ迄は此の家を出たくはありません——お母樣。

岸代　お前さん年寄一人だと思つて、そんな圖々しい事を云ひなさるのか。お前が出て行かなければ私が出して上げよう（とツカ〱と引立てる）さアお立ちなさい。お前さんが寃罪だと云ひなすつても妾は信じませんよ。他の身代を賣轉す樣な人の子が妹の指輪を金にする位、決して不思議ぢやありませんよ、、、出なさらんか……

（と激しくまさ子を突く。まさ子椽側より落ちる。岸代きつとなる。まさ子はそのまゝ。）

まさ子　では、どうしてもお許しが叶ひませんなら……せめて一目滋さんに逢はせて下さい。

岸代　未だそんな未練なことを……。

（兩人再び爭ひて岸代とゞ、まさ子を戸外に突出してハタと戸を閉める）

岸代　此の敷居から一足でも家へ這入つたら出來る話も出來なくなりますぞ！

（此以前滋は一寸上手の障子をあけハッと驚きて締める。まさ子は戸外に泣き崩れる。岸代は二重へ戻り、以前の手紙を拾ひ、奥へ入る。まさ子暫くそのまゝなりしが、やがて氣を取り直して、キッと走り入る。）

（滋此の時出でて門の鍵を外して。）

滋　母樣々々々々。

（まさ子の姿の見えざるよりワーッと泣き出す。下手より牛肉の包を持ちて日下部正也出で來り此の體を見て。）

日下部　や、滋さんぢやないか。又お父樣に惡戯して叱ら

れたか。仕様がないなア。もう泣かんでもいゝ。今日は僕がお詫びをしてあげるから何だい腕白大將のくせに泣くなんてあるもんかハヽヽヽ。

滋　僕、お父樣に叱られたんぢやないよ。母樣が〳〵。

日下部　母樣が、どつちにしても君が悪いよ。だから叱られるんだ。いゝから此方へ來給へ！（と連れ入らんとす）

滋　小父さん、違ふんだ。悪い事も何もしないのに、おばア樣がお母樣を追出したんだ。

日下部　なに母樣を追出した？　そ、そりや何時の事だ。

滋　たつた今だ。僕お父樣は居ないしお母樣のお詫びをしてあげやうと思つたら、おばア樣が聞いてくれないの。僕もお母樣と一緒に行かうと思つて竊つと裏から廻つて來たらもう母樣は何處かへ行つて仕舞つたんだもの、父樣は毎日々々お留守だし、母樣は居なくなつちまつたし僕おばアさんと、たつた二人きりで、淋しいんだもの。

日下部　とう〳〵鬼婆奴！　そんな事をしたのか、よしッ安心したまへ！　小父さんが母樣を探して來てやらう。

（ト向うへ行かんとする。滋は袂にすがる。）

滋　小父さん、僕も一緒に連れてッておくれ。

日下部　君は寒いから、炬燵に當つて待つて居たまへ！

滋　僕、母樣が居なくなつたのに炬燵になんて當つて居ちや親不孝になるよ。僕心配だもの、小父さん、連れて行つてよう。ねえ、寒い事なんかないから、よう。お母樣が可哀想だもの――。

日下部　よく云つて上げた。えらい！　君のその優しい心を聞いたら母樣はそれで滿足するだらう！（と思はず男泣きに泣く）　よしそれ程迄に母樣の事を心配するなら行かう。然し場合が場合だから、一遍お祖母さんに斷つて行かう。さ一遍家へ入らう。

滋　僕、内へ這入るとおばアさんがいけないと云ふから、茲の所にかくれて居るよ。

日下部　成程、それもさうだ。よし、では待つておいでよ（と中へ入り）御隱居々々、何處です！　日下部ですよどうかして居るんですか？

（と正面の襖をあけて入る。此の時、巻野そつと下手より出て。）

巻野　滋さんぢやないか。

滋　や、巻野さん。何處へ行くの。

巻野　僕かね、僕は君の所へ行くのさ。君をお母樣の處へ

連れて行かうと思つて迎へに來たのさ。さア一緒に行かう〳〵。

滋　でも日下部の小父さんに默つて行つちや惡いから今直ぐ出て來るから待つてくれ給へ。

巻野　日下部なんぞ、何したツて構ふものか。母樣は待つて居るんぢやないかね。

（と急き立てる事ありて、無理に手を取り向うへ這入る。）

（此時日下部捨臺詞にて奥より出で來り。）

日下部　さアおばア樣のお許しが出たらこれから僕が活動寫眞を見せて――オヤ。

（日下部は門へ來て滋の姿の見えざるより不審を抱きフト地面を見る。と、以前巻野がハンケチを出して滋の涙を拭いてやる時、指輪の箱を取落してある。日下部之れを拾ひ上げてサックを拂つて見る。中の指輪を取出して星明りに透て。）

日下部　おゝ問題の指輪だ！　ウム、之で己れが靜子さんに返せる譯だ有難い〳〵。

（と喜ぶこなしにて急ぎ足にて向うへ跡を追ふ。）

――道具廻る――

第二場　赤澤宅奥庭

舞臺中央に一間半位の茶室造り。庭に丸窓の設けあり此處へ打廻して雨戸を閉せし體。上手植込にて覆ひ平舞臺一面石燈籠果石など下草のあしらひ。凡て赤澤庭内の體。

風の音、本釣の音にて道具納まる。

（と、丸窓の内にて以前より赤澤妻お貞と氏家の妻靜子の姿あり〳〵と映る。）

お貞　それでは先方は、どうあつても、その指輪は返す事は出來ないと云ふのだね。

靜子　えゝ、さうなんですの。

お貞　それで、それが返らないとなると、どうだと云ふの。

靜子　妾、今夜はそれに就て相談に來たんです。

（此時九時の時計聞こえる。まさ子、下手より出で來り石燈籠の傍に立つて内の話を聞く。）

靜子　こんな事を云ひ出したら、きつと吃驚なさるでせうけれど、妾もよく〳〵辛抱出來ないから母さん云つても

いゝませう。

お貞　まア何によらず相談なら聞きませう。

靜子　外でもないんです。私離縁にして下さいまし。

（とワッと泣く。まさ子驚いて立上り、思入あつて話を聞く。笛をあしらふ。）

お貞　靜さん、お前氣でも狂つてやしまいね。

靜子　決して……氣でも狂つたらこんな事は思ひますまい思つても云ひますまい。

お貞　ぢや良家さんがさうしろと仰有るのかい。

靜子　いゝえ。

お貞　さうするとお前の料簡で――

靜子　指輪一つなくした位でと思召すかは知れませんがね其の一つが今では私の體よりも大切なのですわ。一々委しい事は云ひませんが、妾を敵の樣に憎む人も居りますし、又良人の身を持てば之れ許りも、まげる事の出來ない意地もあるので――と云つて家名の爲め、良人のため自分の罪を云ひ解かうとすれば、姉樣の事を云はなければなりません。妾だつて嫁としては夫に從はなければ、女の道は立ちませんとは知つて居ます。けれど、只一人あの氣の毒な姉さんを見殺しにして迄、女の道を立てたくはありません。そんな事をして子爵夫人と呼ばれたつて何の名譽になるものですか。母樣ゆるして下さい。貴族の家に嫁いだのが譽と思つて居て下さる父樣や、あなたに失望をさせてこんな不孝な事はないのですけれど、良人には顧みられず、敵の樣な人達に朝に晩に白眼で睨まれて――妾あの中には、とても生きては居られませんのよ――。

お貞　さぞねえ、そりやもう――。

靜子　妾自分で罪を引受けます、其代り三年前の妾だと思つてもう一度此の家の娘にして下さいまし。ね、母樣いいでせう。妾だつてかうやつて歸つて來たくはないのですけれども、ね母樣、いゝでせう。

お貞　いけません。

靜子　え、何が――。

お貞　そんな、そんな不料簡の者は家へ入れる事は出來ません。

靜子　何故、母樣――。

お貞　去られて來たならとも角、そんな我儘は許しません。

靜子　では、どうすればいゝのでせう。母樣は妾に死ねと仰有るの？

お貞　靜さん、それ程姉を思ふなら何故死ぬ迄も辛抱するとは云つてくれません。

靜子　姉様、それが姉様に何の義理立てになるのです。

お貞　お、お前さんと云ふ人は、――妹と云へば年ばかりか智慧も情もやはり劣つて居るのねえ。お前さんがそんな事をしたと云つて、まささんが無事で居られますか。

靜子　何故ですの。

お貞　よく考へて見ておくれ。靜さん、その苦勞はお前ばかりぢやありませんよ。可哀想に、まささんは、それよりも十倍も二十倍も辛い思をして居るのにお前は氣が附かないの。大きな聲では云へないが、渥美さんの身代を潰したのは誰の所爲だと思つて居ます。

靜子　それは知つて居ます。

お貞　それでは、もう一つ訊きます。家も何もかもありとあらゆる財産を取られて、然も只さへ氣難しい姑と癇癪の強い夫と、なさぬ仲の子供を控へて、ある効ひもない侘しい暮しをして居る、まささんは、只の一度もそれが辛いと云ひましたか。苦しからうと、出て來たからうけれ共、命よりも親よりも大切な義理を思ひつめて、未だにぢつと辛抱して居るのは渥美の爲にも赤澤の爲にもあの子は死に身になつて居るのだよ。あの子の事を思ふと私は可哀想で／＼妾は蔭で拜んで居ます。

まさ子　まア勿體ない――

（と思はず、小聲にて手を合せて敷石にひれ伏して泣く聲を忍ぶ。）

お貞　お前さんの苦勞なぞ、それから見れば、何ともないそれだのに、姉のための女の道だのと云ふ丈は、まゝいいとしても、夫を棚にとつて身を退くなど――生んだ私が悪いのか義理知らずの、意氣地なしのお前さんは何と云ふ馬鹿に育つたんだらう。姉さんの手前も面目ないぢやないか。

（と聲をあげて泣く。靜子はその手に縋りて。）

靜子　母様、私が悪うございましたわ。辛抱します。きつと辛抱いたします。

お貞　靜子、それがお前、義理と云ふものだよ。

靜子　分りました。二度と再びこんな事は云ひません。その義理の爲なら死んでも見ませう。

お貞　さうしておくれ。それでこそ、姉妹だよ。お前の覺悟を見るにつけても、あの子は今頃、何をして居るだらうねえ。

（まさ子は袂をかみしめて抜足にて來り。）
まさ子　お母さん、靜さん、もうお目にはかゝりません。
（と泣き伏す。）
靜子　あら姉さんが――お母さん……
お貞　ホンにあの子の聲の樣でしたね。
（と兩人立つて丸窓の障子をあけて、庭を見る。まさ子も立上り、足早に向うへ這入る。兩人はすかし見て今度は横手の障子を明け、二人庭へ出る。そして四邊を探し向うを見て互にさゝやく。）
（之を獨吟の三の句本鐘にて――）

――幕――

五　幕　目

目黒附近の大藪

舞臺一面の大竹藪。上手に火の番小屋。曝しに蹄鐵物置あり。煤ほれた火の番小屋の油障子より灯影見ゆ。藪の中に通路あり。後にライトの月光をかける仕掛あり。
二月下旬。遠く村鍛冶の槌音にて幕あく。

（と、蹄鐵工源作カンテラの火で馬の蹄を切り居る。其傍に馬士彌十、工場歸りの職工、新聞配達、田舍娘三人、米屋に酒屋の御用聞など仕事を見て居る。赤澤亮輔地べたにベタリと坐りて時々土に手をついてブツブツ何か云つて居る。場末と云ふ感じ。竹藪の向うを野良唄にて通る者あり。此の唄の過ぎると見物人の大ぜいは沈默の緊張と云ふ氣持ありたし。）
作男一　作や、作でねえか、野郎又道玄坂突ッ入るだな。
源作　（御用聞に）どいた！　邪魔ツ氣だ！
御用聞　何だい。（と引込む）
源作　いつまで道草食つてるだ。早く歸らねえと、カスを食ふぜ。おい宇吉や、火が廻つたら蹄鐵を持つて來ろよ。
（と上手に向ひて呼ぶ。通行人五六人去る。）
宇吉の聲　おゝよ。
源作　だけど、何んだつて今時分かねなんぞ外したゞね。人さわがせな。馬だつて可哀想だな。
彌十　うゝん、何さ。己らア墓地下の繩で一杯カブトをやつて居ると、あの家でカツプ一つ買ふから三軒茶屋まで落馬車に乘せてくれと云ふだよ。どうせ世多ヶ谷まで歸る道だで交番の前だけコモかぶせて小さくなつてる約束

で馬車に乘せて來たゞよ。

（此間に小僧宇吉燒けた蹄鐵を持つて來る。）

宇吉　どいた〳〵。

源作　うん、それで。

彌十　でな、道玄坂の中程まで來ると、向うから洋服着た若い人が來た。すると此の醉ぱらひの小父さん急に氣違ひの樣に狂ひ出して顏を見てくれるな、見遁してくれと大きな聲で知らずに通る人に却て此方から知らせるやうなもんだ。

源作　はア何んだつてな。

彌十　それ許りなら未だいゝが、側にあつた薪ざつぽうを持つていきなり馬の尻をピン〳〵喰はしたもんだ。馬はびつくりして坂を馳け上る拍子に石に躓いて靴を外したと云ふ譯だ。本當に呆れた氣違ひを乘せたもんだ。手綱につかまつた己れまで此の通り泥だらけだ！

赤澤　（フラ〳〵しながら）何でもよい！　俺の顏を見てくれるな。――それが慈悲ぢや、情ぢや。

（源作は仕事を終り、赤澤の傍に來て。）

源作　おい、父さん又歸つて來なすつたな。

赤澤　歸ると云ふのは家のある人の事だ。赤澤は家もない羽拔鳥の宿なしだ。顏を見てくれるな。恨むぞ！　見たいのが慈悲ぢや、情と云ふものだ。

彌十　又やつてるだ。親方お前さん知つてるだか。

源作　なに知つてると云ふ程でもないが、己らア夜は此處の火の番預かつて居るだが、四五日前の夜更によ、ガタガタ震へて轉げ込んで來たゞから可哀想だと思つて一晩泊めてやつたらそれからくせになつて毎晩來るだ。朝つまみ出す樣にして追ひ出すと、晩になると又フラ〳〵と歸つて來る。追ひ出しても〳〵まるで捨て猫の樣に歸つて來るので己らア困つてるだ。

赤澤　顏を見るな、見遁してくれ、それが慈悲ぢや、情と云ふものだ。

小僧　ハヽ、又やつてやがら――。

彌十　見ると氣狂でもなささうだ。何んだらうなア。

（下手より落合東助バタ〳〵と馳け出る。）

落合　おゝ赤澤さん、此處でしたか、イキナリ荷馬車の上で馬の尻を叩いてかけ出したもんでびつくりしました。どうしたと云ふのです。まア何と云ふお姿です。さアお立ちなさい、赤澤さん――。

赤澤　顏を見るな、見遁がしてくれ、それが慈悲ぢや、情

と云ふものだ。

落合　仕方がないなア（と通行人に向ひ）おい／＼そんなにそこに立つて見て居るもんぢやない。――見せ物ぢやないぞ。

（通行人は去る。）

源作　お前さん知つて居るんかね、ヤレ／＼よかつた。四五日此方、ひどく御ヒイキにされてるので困つた所だ。どうか引取つて行つておくんなさい。

落合　イヤそれはどうもお禮は改めてしませう。――赤澤さん、私ですよ、落合ですよ、落合がお分りにはなりませんか。

赤澤　分つてます。分つてます――分つてますから――かうして隠れて居るんだ。顔を見るな見逃してくれ、それが慈悲ぢや、情と云ふものだ。

源作　ハヽ、頭はかりそんな所へ入れたッて身體が丸見えぢやねーか。

落合　赤澤さん、あなたは渥美社長に面目ないと云ふのでさうして居られるのでせうか、貴方が一旦罪を悔んでさう逃して居られるものを責める様な渥美さんぢやありません。貴方の行方が分らないので渥美さんはどんなに心配して居るか知れないんですよっとにかくお歸りなさい。さ、一緒に行きませう。

赤澤　えゝ歸らない／＼犯した罪の十九萬圓で、耳を揃へて渥美の前へ出す迄は私は死んでも歸らない。情ぢや、慈悲ぢや、どうか見逃して下さい――。

源作　十九萬圓だとよ、馬鹿に大きく出やがつたぜ。

彌十　玩具のサツだつて十九萬圓と云や、安くは買へめえぜなア。

赤澤　いや／＼／＼例へ死んでものめつても十九萬圓の金は掴んで見せる。娘の難儀、婿の苦勞――その金を掴まない内は赤澤亮輔は生きて再び人に顔を見せられない。見逃して下さい。情ぢや、慈悲ぢや。

落合　困りましたなア。赤澤さんそれぢやあなた、可愛い娘さんや渥美社長に心配を餘計かけると云ふものです。その姿はどうしたんです。惡い事は云はない。一緒に渥美さんの家までお出でなさい。此の雜木林を越すと直ぐですから――。

赤澤　えゝ、では渥美は大森を越したのですか。此の近くに居るのですか。

落合　淨華院と云ふ直ぐ坂下の寺ですよ。

赤澤　えゝ、知らなかつた。それは知らなかつた。面目ない面目ない見遁して下され！　慈悲ぢや〳〵情ぢや！
（と藁の中へ頭を突込む。）

源作　やア、又ムグラを極め込みやがつた！

彌十　ぽんと返つて女郎に化けろやハゝ。

落合　こりや僕一人の力ではいけない。（源作に）君、氣の毒ですが、少しの間かうして置いてはくれませんか。實はその——（といくらか金を出す）

源作　ようごわすとも、別に悪い事をする譯でもないから火の番小屋の用心になつていゝ位のものです。ようがすお預り申しやす！

落合　直ぐ來ますから、どうかよろしくお願ひします。
（と落合は急ぎ去る。）

赤澤　どうか見のがして下され！　慈悲ぢや！情ぢや！

源作　まだブツ〳〵云つてるぜ。彌十いつ迄ぼんやり立つて居るんだ。これから世多ヶ谷まで二里あるぜ。今から居眠りは早かんべい。やア。

彌十　はア、此の通り提灯は持つて居りやす。

源作　ハゝ、夢を見てやがら、此處は交番ぢやねえよ。——ドー俺も困つて内職の火の番か、今夜も又冷え込みさうだなア。

彌十　（馬を引出して）ドー〳〵今夜はフスマをはずんでやるぜ。しつかり歩いてくれよ、ドー〳〵。
（と、兩人去る。彌十の馬子唄遠く——。）

　唄へかゝよ今來たか、鈴かけた——馬に情けもくんで
　おけ——

（向うよりまさ子悄々と出で來り、此の唄一杯に聞惚にかゝる。ものに躓きよろめく途端に竹につかまる。）

まさ子　（竹の雫か）——（とウツトリ月を見て）月も冴えた、いゝ月だこと……（馬子唄斷續する）捨た古草鞋も振り返ると云ふものを——あゝ滋さんはどうして居るんだらう。今頃は何の夢にウナされて居る事か。生さぬ仲でもあるのに——（袖に肩に降る月の）——此處は死所に彷徨ふとは思ふまい。
（と思はず戸にもたれて泣く。うと〳〵と眠り居りし赤澤は目を覺ましてブツ〳〵云ふ。）

赤澤　どなたか知らんが、見遁してくだされ——顏を見ぬ

のが慈悲ぢや、情ぢや――。

まさ子　え、どなた。――何ですか、(とそこに動く黒いものを見て) えッ。

赤澤　顏を見ぬのが慈悲ぢや人の情ぢや――。

まさ子　もし、どなたか知りませんか、お加減でも惡くてゐらつしやるのですか。

赤澤　十九萬圓、あゝ金が欲しい――十九萬圓ぢや――。

まさ子　え、十九萬圓――(と顏をぢつと見る)

赤澤　あゝ娘にすまない。渥美に申譯がない。あゝ金がほしい――金がほしい。

まさ子　渥美――十九萬圓――(と傍に寄る)

赤澤　罪を悔んで此程、死なうと願つても……何時迄こんな事をさせて置くのぢや――(と起上り)　この上は盗をしろと云ふのか、世を呪つて生きろと云ふのか。(と行く)

(まさ子默つて赤澤に縋る。赤澤は放す。まさ子又縋りつく。)

まさ子　お父樣――。

(赤澤それには答へず振り放す。兩人行かうやらじと爭ありてこの立廻り模樣に此の場の心持を見せたし。

と赤澤の足にすがりつきて。)

まさ子　お父樣、私の顏を見てどうしてお逃げなさるのです。ど、どうして――。

赤澤　何事も金だ。盗んでも十九萬圓は、きつとお前達に返す。見遁してくれ〳〵。(ともがく)

まさ子　えゝ情ない。お金の爲に――お金の爲に、今死なうとして居る私の姿がお目には入りませんのか――。

赤澤　…………。

まさ子　お父樣、お父樣、何故、娘かと、娘かとは云つて下さいません。ようお父樣、何故――何故(泣く)

赤澤　ま、まさ子か!

まさ子　お父樣――(手を取合つて泣く)

赤澤　それにしてもその姿は、お前はどうかしたのか、今時分――。

まさ子　お父樣、私、私もう歸る家がない身になりました。

赤澤　家がない。もしや〳〵お前は渥美を去られたのではあるまいなア。

まさ子　お父樣――

赤澤　お前には父があるのだ。この私が居るのに出すと云つても何故、父が來る迄はと云はなかつた!

まさ子　お父樣、私、さうなります迄には、出來るだけの我慢をしたのですわ。

赤澤　えッ、已れ、（と齒がみにして）よしッ。

（と行かんとする。）

まさ子　あれ、お父樣、どこへ――。

赤澤　渥美へ行く！　渥美が無理だ！　身の過失を思へばこそ、かう迄僻んで自分を辱しめて居る赤澤だ。更に苦しめ恥入れとは、そりやひどい／＼、家を捨て、妻子を捨てゝ此の落魄の體になつたも、どうかして娘に苦勞をかけまいと思へばこそ、どうかして失くした金を償ひ彼籏に返さうと苦しんで居るのが分らんのか、畜生！　已れが行く！　放せ！　えい、放せ！

（とまさ子を突き退けて石に躓き倒れる。起上らんとする手にすがりて。）

まさ子　お父樣、そのお恨みは私の耳にさへ身ビイキだ。假令悔いても悔んでも犯した罪はあなたの過失。私の緣につながる渥美の家を沒落させたのは誰にあるのでせう。娘可愛いあなたより、家を大事の姑の心も汲んであげなければなりません。貴方が短氣な事をして下さつては、良人迄も怒らして歸れる家にも歸れなくなつて仕舞ひます！

赤澤　それでもまさ子、お前は良人が戀しいのか。

まさ子　………お父樣、姑の心にさからひましても、未だ夫に去られたと云ふ譯ではありません。

赤澤　（何やら心に決して）まさ子、お前はも一度、では渥美の家へ歸らうと云ふのか。

まさ子　えゝ。

赤澤　まさ子、私は改めてお前に賴みがある――

まさ子　お賴みとは――。

赤澤　お前の心では夫を賴み、姑の心を直した上で又渥美の家へ歸る氣かも知れんが、此處でこのお父さんが、お前に一生の賴みがある。どうか今日限り渥美の家をお前から云ひ出して去られてくれないか。

まさ子　え？

赤澤　まさ子、お前は今何と云つた。たとへ悔んでも悔いても犯した罪は消えぬと云つたぞ、渥美の家を私の過失で潰してはすまぬ、私が立たん。人の道が立たんと此の姿になつて迄さまようても出來ぬ金、今となつての申譯はお前が立派にあの家を出て貰ふより外にはない。

まさ子　お父樣、それはどう云ふ譯でございますか。

赤澤　今日迄お前には隱しては來たが滋の母ぢや、滋を生んだ誠の母が今は何百萬と云ふ財產を持つて歸つて來て居るのぢや、まさ子、な、分つたか、お前の決心一つで渥美の家は必ず立つのだぞ！　な！

まさ子　もしお父樣、滋さんの母が日本に歸つて居るのでございますツて、そして、それは何時の事でございますか、夫は一口も私には話しません――。

赤澤　馬鹿、苦勞にやつれたお前にそんな話を俊策さんはする譯はあるまい。實はな、今年の春ぢや。

まさ子　おゝ、それで思ひ當つた。さつき仰有つたお母樣のお言葉の端――えゝ、かうしては居られません。

赤澤　まゝ待つてくれ、お前は渥美へ歸る氣か。

まさ子　それを聞いては歸り惡い所でも歸ります。放して下さい〳〵。

赤澤　これ〳〵さう氣を立てゝは――氣を立てゝくれるなまさ子、平常のお前の樣でもない、どうしたのぢや。

まさ子　お父樣、無理です〳〵六年この方渥美へ嫁いで辛い出來ない辛抱をしたのも皆、良人を思へばこそです優しい良人の情一つに生きて來たのです。いえ〳〵俊策はそんな人ぢやない、皆母樣の心からだと思ひます。放して〳〵。

赤澤　そりやお前の云ふ通りだが、お前は良人の事ばかり考へて、渥美の家を大事とは思はんのか。

まさ子　え。

赤澤　舊い家柄と他に知られた渥美の家を今の零落に沈めたのはお前の父だぞ――此の赤澤だぞ――例へ會社を大きくしたい爲とは云へ、渥美一家を路頭に迷はせたのは私ぢや、この私ぢや、お前の緣があればこそ、俊策さんは私に愚痴一つ云はんのだ。俺は辛い、それが辛い、お前さへ離れたら渥美の家はきつと立つのだ。まさ子無理でもあらうが――俺が無理だよ、それは分つて居る。無理だとも――どうか此の罪を償はしてくれ、私の苦しみを救うてくれ、賴む、この通り賴みます。

（まさ子、ベタ〳〵と崩れて泣く。バサ〳〵と竹藪の中で小鳥の聲。稍々長き間。）

まさ子　ではお父樣、私は良人の家へは歸れない身なのでございますか。

赤澤　何事も私が惡い、私の罪だ。此の通りあやまる。賴む。賴む。父の罪を償はしてくれ！

まさ子　はい――。

渥美　（此時、渥美後簾出て來る。）誰だ〳〵そこに居るのは、（と近よりて）おゝ赤澤さんぢやありませんか、赤澤さん。

赤澤　見遁して下され、顏を見ぬのが慈悲ぢや、情ぢや。（と逃げんとする）

渥美　そこまで身を恥ぢる心は、精らしいが、赤澤さん、あなたは何故もつと強くはなれないのです（とまさ子をすかして）誰だ、そこに居るのは。

赤澤　誰でもない、犬か猫だ。大方梟に襲はれた寐鳥でせう。夜が更けては露が毒だ。とにかく、あそこの小屋へ。（と無理矢理に小屋に入れ）

渥美　（中へ押入れられながら）おゝ、そこに居るのは、まさ子ぢやないか。

赤澤　いや、まさ子ぢやない。あなたの知らない人だ。（と無理に渥美を小屋の中へ入れる、まさ子の體に月光がさゝる。赤澤は蹲る。梟の鳴聲聞ゆ。長き間。まさ子は竹藪を縫つて火の番小屋の片蔭に寄る。）

渥美　おゝ、やつぱりまさ子だ！

赤澤　いや、違ひます〳〵。（と止めてまさ子に）今云つた事を忘れたか、此處で口をきいては何にもならないのだぞ。

まさ子　いゝえ、私改めてあなたの口からお暇を頂きたうございます。

渥美　なんだと！（と出ようとする）

まさ子　あ、もし顏を見合せては何にも申されません。其處でお聞きなすつて下さい。

渥美　何だと、改まつて、どうしたと云ふのだ。誰が何と云はうと、家には滋が居る。お前は私の妻だぞ！

まさ子　はい――はい――（と胸に抱いて泣く）滋さんの爲を思つても私二度と渥美の家へ歸る心はございません。六年の間の事は、皆んな夢でした。立派にお暇を下さいまし。

赤澤　おゝ娘、よく云つてくれた！（渥美は不審氣にぢつと赤澤を見る。）

まさ子　あなたは私に苦勞をかけまいとして、お隱しなされるか知れませんが、滋さんの實の母御――球江さんの事を何故私に明かしては下さいませんのです、何故私に云つて下さいません。それは餘りと云ふものです。水臭い――腹が立ちます〳〵。

（此の間に渥美は、ぢつと思ひ入あつて、ツト立ち、

赤澤の手を取つて起し胸を捉へ、ぢつと顔を見る。)

渥美　赤澤さん——。

(赤澤は逃げんともがく。渥美は何もぢつと見る。)

まさ子　あゝもし父様をどうなさるのです。

渥美　その恨みはお前一人の口から出たのではあるまい。お前の云ふ言葉の裏には、切ない赤澤さんの心の底が見える様だ。いやお前の心の底も分るやうだ。さア恨みも聞かう、頼みも聞かう。

まさ子　えゝ、心の裏も底もない球江さんと云ふ人まであるあなたに、これまで欺されて居た自分のおろかを悔む許り、あなたも何故キッパリと暇をやるとは仰有つて下さいません。

赤澤　何事も會社のため、渥美の家の爲ぢや、どうか渥美さん、まさ子を離別して球江さんを呼戻して下され、頼みます／＼

渥美　なに、あの球江を——赤澤さん、ではまさ子に苦勞を忍ばせても、あなたは自分の苦勞を償はうとなさるのだな——。

まさ子　罪も報も、もうありません、一生をと私が頼むには餘り水臭いあなたの心——私、そ、それが口惜しいのでございます。

渥美　よし、分つた、行け、行け、行きたきや、何處へでも行くがいゝ！

まさ子　では／＼お頼みを肯いて下さいますか、ありがたうございます。

赤澤　おゝ娘——私——私は何にも云はん。この通りぢや、この通りぢや！

まさ子　ではあなた、御機嫌よう、滋さんの事はどうぞ、どうぞお願ひいたします。

（と竹藪へ行きかゝる。）

渥美　まさ子！

まさ子　えゝ。

渥美　お前は只一言、云ひ殘す事を忘れはせんか、私は赤澤の娘故、父の罪を償ふ爲め心にもない愛想づかしを云ひましたとは何故一言云はないのだ！

まさ子　えッ。

渥美　心の痛みを秘して底の苦勞を打明けない怨みを云ふならお前より私の方から云はねばならん。お前には何故この後策の心が解らないのだ。どうして解つてはくれないのだ。

まさ子　はーい。

澄美　己れの顔をよく見てくれよ、金に死んでも情に生きるこの己れの涙が分らないのか！　まさ子！

まさ子　あなた！（と抱きつく）

（木頭）

澄美　まさ子、お前は己れの妻だ。この俠案の大事な、無くてはならん妻なのだ！

（赤深は拜む。）

まさ子　あなた！

（月又出る——。）

——幕——

大詰

第一場　清岡球江の洋室

舞臺華美を極めし洋室。上手段梯子。上に一室ありて下手に煖爐あり。洋畫額三面を揭げたり平舞臺に絨氈を敷く。安樂椅子、テーブル長椅子等の配置よろしく清岡邸の洋室ピアノ其他のあしらひにて幕あく。

（と球江は滋を膝に乘せてお伽噺を見て居る體。女中お千代、運轉手石原、令嬢夫人外女中、書生大勢見物の體なり。やがてガチ／＼山のお伽噺をはる。）

狸　あゝら、こざかしや、おこがましや、おとぎ芝居の大立物、たん／＼狸の腹八にや向ふものなら返り打ち、それへなほつてかんねんしろ——

兎　何をこしやくな。どたぬき奴、兎が智慧のどろ舟で一ぱい水を飲ました上は、はらをさすつて降參しろ！

（之れより兩人立廻りあつて狸は兎に追はれて上手へ入る。）

（滋は餘興の済みしを見て球江の膝より脱して下手へ駆け出さんとする。女中など滋を取圍む。）

千代　坊ちやん、どうなさるのです。

滋　僕、今日こそ歸るんだのに何故止めるんだい？

石原　いけません、飛んでもない。そんな事をしてはいけません。

滋　いやだ、僕はお家へ歸るんだい！

千代　坊ちやんのお家は此處ぢやありませんか、さ、おとなしくしてゐらつしやい。

滋　いやだ／＼。

球江　まア滋さん、そんな事を云ふもんぢやありません。

まだこれから面白いお芝居が澤山あるんです。

滋　僕、お芝居なんか、もういやだ。

球江　ぢや機嫌直しにいゝものを上げませうね。一寸今のものを茲へ持つて來ておくれ。

（上手より小間使二人燒き料理品に、洋菓子を銀盆の上に乘せて持ち來る。）

球江　さア滋さんの好きなチキンのお料理鯛のフライもあります。さめない内にお食べなさい。母様もお相伴をしますからね。

滋　僕——もう澤山です。

球江　澤山な事があるものかね、今日は朝からまた御飯も食べないと云ふぢやないか。おー美味しい今日のスープ、およし、チキンを切つてあげておくれ、滋さん昨日チキンとシチウをお前おかはりをしたわね。ホヽヽまア頰が落ちさうよ、一寸母様のをあげませう。

（小間使二人は捨臺詞にて種々世辭を云ひて勸むれど應ぜず球江は自分のを取つて出す。）

球江　さアおいしいの、お口をアーンとおあきなさい。

滋　僕ぢやどうしてもお家へ歸れないの。

球江　何を云ふのです。お前の家は茲ぢやありませんか。

滋　でも母様——（云ひかけてこなし）父様も母様も居ないんですもの。（と聲を忍び泣く）

球江　その父様も、おばア様も來る事になつて居ます。

滋　ぢや、アノ母様は——

球江　母様はお前の傍に居るぢやありませんか。

滋　え、傍に（四邊を見廻して）母様は何處に居ます。僕の母様は何處に——母様！

（と見廻す。球江ヂツと樣子を見て居たりしが、此の時二人の姿背後の大姿見に映る。球江はにつこりして）

球江　あちらをごらんなさい。お前さんによく似た母様が居るでせう。

滋　（指さした方を見て）何が似るものか。

球江　鏡の方をごらんなさい。（と引寄せて映し）似て居るでせう。分りませんか、分つたでせう。滋さんあなたの本當のお母さんは妾と云つてる事が分つたでせう。ホヽヽ生み落した許りで此の七年と云ふもの、片時傍に居なかつたのだから、今妾の口から子と呼んでも、お前の胸には響かないかも知れないが、十年經つても二十年經つてもお前には妾の血が通つて居る。滋さん、あな

たの本當のお母さんは、この妾なのよ。

滋　いゝえ、僕のお母様は内に居ます。皆が待つて居るから歸ります。

（とバラ〳〵と行きかゝる。球江はキツと捉へて。）

球江　ぢや、これ程云つてもお前さんは私の云ふ事を聞かないのですね。

（と思はず憤りに任せて上手へ突やる。滋よろ〳〵とよろけて長椅子に頭を打つけんとするを球江驚いて抱く。巻野後向に最前より何知らぬ氣にして居たりしが、此時振り返りて。）

巻野　どうですね、坊ちやん、仲々よく云ふ事を聞くでせう。

（球江唇をかむ。此時、星川源八下手よりツカ〳〵と入り來り。）

星川　おゝ奥様も此方で――丁度いゝ。巻野さんやはり事實ですよ。それが甚だくさいのです。ちらと聞きや、社長の親戚に當る氏家氏ではないかと云ふのですが、詳しい事は明日の朝迄には探つて參ります。

巻野　（ツカ〳〵と來て）そら御らん。此方が愚圖々々して居る内に向うぢや戰鬪準備が出來て仕舞つた。渥美は氏家子爵の後援で再擧の旗を揭げるとさ。

球江　あ、うるさい。兄さん、私今少し考へ事をして居るんですよ。

巻野　お前の方に少し考へ事があるか知れんが、兄さんは今大きな心配が湧いて來たんだ。折角乘取りかけた會社は元の渥美の手へ逆戻り、巻野大藏の一世一代、社長の椅子もオヂヤンになりさうなんだよ。

球江　だからそれが、どうしたと云ふのよ。

巻野　どうもかうもない。兄さんに十九萬圓の證書を讓つて貰ひたいのさ。あれさへあれば、こつちも立派に仕事が出來るのさ。然しそれは只、貰ふ譯ぢやない。お前に約束した通り、金より命より大切なお前の生んだ子供を首尾よく奪つて來てやつた手數料なんだよ。

球江　けれど兄さん此の子は未だ私を親と思つて居てくれませんよ。

巻野　しかしその尻をこつちへ持つて來てくれちやチト迷惑だね。己れはお前に頼まれた事は命がけで立派にやり終せて居るんだぜ。

球江　そりや私も知つて居ます。知つて居ますからあんな證書の一枚や二枚何時でもあげますが親は子供の事を忘

れないのに十年前の生み親を子供の方ぢや覺えて居ないのですもの。

（最前より星川は巻野に何事かさゝやく。）

巻野　よし、それぢや球江、其の子の口から立派に母さんと名乘るやうにしてやらう。

球江　え、滋が心から私を母と云つてくれますッて、兄さん、本當ですか。

巻野　その代り今云つた十九萬圓の證書をきつと後で兄さんに吳れるだらうね。

球江　えゝ、きつとあげますわ。

巻野　滋、ちよつと小父さんの庭へおいで。

滋　僕どうかお内へ歸して下さい。

巻野　えい、おいでッたら何故來ないんだ！

（と手荒く引立てる。）

球江　あら、兄さん、そんな手荒な。

星川　奧様、私も傍に居る事ですからそんな事はさせやしませんよハヽヽ。

巻野　然し打つ杖はなでる手で可愛い兒の爲にや、ちつと位の灸をすゑるのも親の慈悲さハヽヽヽ。

星川　坊ちやん、さアいらつしやい〳〵。

巻野　えい、親父によく似た剛情な餓鬼だ！

（巻野は癇癪を起して襟髮をつかみ引ずる。滋泣き出す。球江は心配して立掛るを、星川止め慰める。巻野はうるさいかまはず引立てゝ上手へ這入る。球江之にてウキスキーを飲む。星川は續いて上手へ這入る。上手奧にて。）

滋　いやだ〳〵痛い〳〵いやだ〳〵。

星川　坊ちやん、いくらいやだとかこはいとか云つても奧様のお腹から生れたのに違ひないんですから奧様程あなたを可愛がる人はないんですよ。

滋　母様ぢやない、小母様は母様ぢやない。

巻野　未だ、これでも泣くか、さア泣けるなら泣いて見ろ。

（と、逃げ廻る音。打つ、蹴る、慰める聲、泣く聲など騒然たり。球江思ひ餘つて止め行かんとし又思ひ返して折檻を待たうと云ふ心になり、又たまりかねて此間酒に思ひをやる事よろしく、よき程に女中千代出づ。）

千代　奧様、只今お客様がお見えになりました。

球江　誰だい？

千代　渥美の家内だと仰有る――、

球江　え、渥美の、そして、ど、どんな女だい？
千代　左様でございます。二十五六の汚い形ですが御器量の美しい上品な方でございます。
球江　そんな人は追ひ返してお仕舞ひ！　主人が少々加減が悪くて臥つて居りますからッて。
千代　はい。（と行きかける）
球江　千代々々お待ち。断わらないでもいゝよ。折角来たのだから逢つてやります。玆へお通し――。
（女中下手へ入る。間もなくお千代の案内にてまさ子出で来る。）
千代　奥様、お客様をお連れ申しました。
球江　お前はあッちへお出で。
千代　はい。（と女中去る）
まさ子　突然にお伺ひいたしまして。
球江　さう御丁寧では恐れ入ります。私お尋ねの清岡球江でございます。
まさ子　私は渥美の家内でございます。
（と両人ちつと顔を見合せて気味合ふ。）
まさ子　お初にお目にかゝります。今日は又不意に出ましてさぞ御驚き遊ばしました事と存じます。

球江　いゝえ、ようこそ、雪は降りますし、丁度退屈して居る所で、さぞ外はお寒い事でせう――本當によくいらつしやいました。私なんぞは人様より一倍寒がりやですから、かう云ふ日には一足も出られません。時に私に御用と仰有いますのは。
まさ子　外の事でもございません。私共の主が此方様に御厄介になつて居りますさうで。
球江　はア、居りますよ。
まさ子　左様でございますか。（と強い笑を浮べ）　それはまア定めし御迷惑の事でございませう。
球江　いゝえ、少しも迷惑ではございません。
まさ子　御承知かは存じませんが、渥美も近頃は何やかと取込續きで、宅に居ります事も、少なうございますし、それに私も暫く餘所へ參つて居ります故、ツイ子供の事にも、なほざりに致します様な次第でございます。その爲め自然此方様の御世話にまでなりましたのでせう。眞に面目次第もございません。
球江　どういたしまして、その御禮は私の方から申上る事でございますよ。あなたにはこれ迄永い間、色々と御面倒をかけましたさうで、申上るまでもなく私の素性も大

方は御存じでございませうが、仔細あつてあれを生み落しますと、直ぐ外國へ參りまして、あなた、當年の春何年ぶりかで日本へ戻つたのですよ。それも他に用向はございませんので、唯あの子に逢ひたい許りが目的なのですよ。子を思ふ親の心を何卒御察し下さいまし。

まさ子　はい――。

球江　かう申しますと、あなたは嘸、勝手な事ばかり申すと思召すでせうが、此年月世話をさせて置いて餘り蟲のいゝ事を云ふと御考へになるでせう。それは御無理とは存じませんのですから貴女に對する御禮、今までの御心盡しに報ゆる事は私何でもいたします。實は折があつたら此のお話を致さうと思つて居りました處、丁度あなたからお訪ね下さいまして都合がよろしうございました。

（まさ子は充分に聞き終つて頭を上げ。）

まさ子　お話は一應伺ひました。それでは私の今日出ました用向をどうかお聞き下さいまし。

球江　はアどうぞ――。

まさ子　滋を戻して戴きたいのでございます。

球江　滋を誰から、誰へ戻すと仰有るのです。

まさ子　あなたの御手から妾へお戻しが願ひたいのです。

球江　何を仰有るのです。奥様、渥美の奥様、貴女、今私が申した事がお分りにはならないのでございますか。私は滋の母ですよ。

まさ子　いゝえ、滋の母は私でございます。

球江　ホヽヽヽ、大方そんな事でもお云ひなさると思つて――成程あなたも母で入らつしやいませう。渥美の妻とおなりなすつた以上は、あく迄名義だけでも母でしたらうけれ共、親子の關係はそんな名義や理窟で心から結び付けられるものではありません。奥様、親子の間には大事な大事な血が通つて居るのですよ。七年見ずに居ようが一生逢はずに居ようが、此の血の色は變りません。ハイ例へ神樣の力だらうがこれ許りは取消す事は出來ないんですからねえ。

まさ子　さう仰有るなら私も申します。あなたは、あなた許りの子と仰有るのですか。あの子には渥美俊策と云ふ立派な父が居ります。（と競争的に云ふ）

球江　おだまりなさい。あなたは七年の間の恩をたてに取つて私の子供を取らうと云ふのですね。一度手許へ取戻した以上は何が來ようが、妾の生きて居る間は、もう決して放しません。さアお歸りなさい！

まさ子　歸りません！

球江　なんですッて！

（此時、滋上手よりバラ〳〵と出づ。）

滋　あゝ母さん――（とまさ子に縋る）

球江　まアどうしてお前はこんな所へ。

滋　いゝんだよ〳〵。

まさ子　あなた、どうぞお放しなすつて下さいまし。

球江　何をするんです。

（と力一杯に突やる。まさ子椅子に躓き倒れる。）

滋　母樣！（とすがる）

まさ子　滋さん。（と犇と抱き）逢ひたかつた！

滋　僕だつて逢ひたかつたよ。

（球江は此の樣を見てヨロ〳〵と椅子に倒れる。）

滋　母樣、何故早く來てくれなかつたの。

まさ子　母さんは、ちつとも知らなかつたんだよ。今日はお前が來てくれるか、明日は歸つてくれるかと毎日待つて居たんだよ。けれども、それは私が惡かつたね。

滋　僕ね日下部さんの小父さんと一緒にね母樣の處へ行かうと思つて居たら卷野さんが此處へ連れて來て仕舞つたの。茲は僕の家だなんて、けれ共母樣が居なけりや僕こんな所へ居たかないんだよ。母樣もこれから此處に居るの？

まさ子　いゝえ。

滋　おや僕を連れてッてくれるの。

まさ子　（球江に）あなた、私は連れて戻ります。

球江　いけません。（向き直り）そんな事は斷じていけません。滋、お前は何と云ふ馬鹿だらう。其の人はお前には母さんでもなんでもないんだよ。お前は、たつた一人の母樣を捨てゝ、そんな人の所へ行く事はありません。其の人は餘所の小母さんだよ。

滋　噓だい、僕の母さんだよ。自分こそ餘所の小母さんだつ

まさ子　名前は付けよう。理窟は云ひよう。あなたも私も此の上は何も云ふ事はございません。どうぞ、此の子の心に任せて下さいまし。どちらへ、つきますか。

球江　卑怯な事を云ひなさるな。八歳やそこらの子供の意志が何のあてになりますか。たとへ、その子はどう云はうと、其の子の體には私の血が流れて居るのです。誰の自由にさせるものですか。

まさ子　奥樣、あなた、その血統より尊いものを、御存じでいらつしやいますか。

球江　そんなものがありますか。
まさ子　奥様、血より肉より尊い情の力と云ふものをあなたは御存じないのですか。
球江　おだまり〳〵。妾は親です。天にも地にも僞りない私はその子の親です。（とベルを押す）誰か來ておくれ誰か來て！
（巻野と星川入り來る。）
巻野　どうしたんだ〳〵。や、あなたはまさ子さん！
球江　滋を取られる。滋をどうかあつちへ連れてッておくれ——
巻野　さア來い、滋來い。（と拉致せんとす）
まさ子　あれ、待つて、お待ちなさつて。
巻野　えい邪魔だ。星川早くその子供をあつちへ。
星川　君、來たまへ！
（とまさ子を遮る。）
（此時、書生と女中出で來る。）
まさ子　奥様、どうか滋を返して下さい。笑はれても打たれても私はこのまゝ歸りません。
（と追はんとするを巻野抑へる。）
まさ子　奥様、扶持で育つた里親でも仇にその子は返しません。末の事はどうなつても構ひません。せめて滋が十五になりますまで——
巻野　えい、いつ迄ブツ〳〵云つてるんだ。歸れ〳〵！
（球江はうつむいて居る。巻野は書生を指揮してまさ子を下手へ押入れる。）
（舞臺ひつそりとなる。球江はぢつと窓の雪を眺める。折々竹より落つる雪の音。此時女中千代上手より慌ただしく出で來り。）
千代　奥様、大變でございます。
球江　え、滋がどうかしたのかい？
千代　いえ、坊樣は大丈夫でございますが、此間からお斷りした日下部樣がいつの間にか玄關から。
球江　日下部さんが、仕樣がないねえ。少し云はないで居ると直ぐそれだから困る——。
日下部　（蔭にて）奥さん〳〵。奥樣は何處にお出でになるか。
球江　（聲に驚いて）まアもう此方へ、仕方がない。ぢや一寸——（と千代に何事かさゝやき）決して滋を出さない樣にして貰つておくれ。
千代　はい——。

（と、上手へ這入る。入違ひに日下部運轉手と爭ひながら出で來り。）

日下部　おゝ奧さん、此處においでゞしたか。それ、チヤンと居られるものをお留守だなんて、いゝ加減な事許り云つて居る奴だ。

運轉手　いえ、今さつき御外出――

球江　日下部さん、只今私歸りました處なのですよ。貴方には過日から度々お尋ねを受けましたが、いつも失禮をして居りました。

日下部　幾度、無駄足をしてもお留守なんだから仕方がないですよ。僕は何の爲にかうしてお訪ねするか大方御存じでせう。

球江　全つきり知らないとも申されませんね、御用件は何れあなたがたの利益になる事で私に不利益になる事でせう。

日下部　いやさうぢやない。僕はあなたの爲に忠實な友として盡しに來たのです。

球江　私にどう云ふ事を盡して下さるの？

日下部　淸岡さん、あなたは今あなた御自身の處置について最も愼重に分別しなければならない時が來たのですよ。

球江　何んですツて。

日下部　丁度、腹の空いた者が、その空腹を滿す爲には他人の庭に出來た木の實たらうが、他の畑の芋、大根に限らず片端から奪つて食ふ樣に、あなたは他を顧る餘裕がなかつた。さて、さうして腹のはつたあなたは今度は何か別にしなければならない、即ち奪つたものゝ精算を拂はなければならない時が來たんです。

球江　（モヂ〳〵して居りしが）日下部さん〳〵。

日下部　お待ちなさい〳〵、まだ結論には達しません、然し淸岡さん、僕はあなたがひもじい時に、行つた總ての事に就ては決してそれを責めません。寧ろ此の日下部はあなたに向つて密かに同情の淚を注いで居つた。

（とホロリとする。球江もこなしあつて。）

球江　ホ、、、それは日下部さん、ありがたう。あなたからどんな御同情を受けて居るのか知りませんが、私は誰の力も借りず、味方も持たず自分一人の腕のみ頼つてこれ迄乘り切つて來た事を誇つて居りますのよ。ホ、、、私は惡かつたかも知れません、鬼の樣に惡魔の樣に――けれ共、とにもかくにも私は勝ちました。私は勝利者な

のですわ。

日下部　然し珠江さん、あなたの樣な情ない勝利者は昔からないだらうと思ふ。試みに聞きますが、それで滿足して居ますか、あなたのその勝利には何の光、何の榮があるだらう。清岡さん、あなたが征服したと云ふ渥美はあなたの前に跪きましたか、貴女の奪つた滋は、あなたの恩になつきましたか？

珠江　……私、私、私そんな事は構ひません、只、私は。

日下部　何故構はんのです、若しそれが得られないとすればあなたの勝ち得たと云ふのは何の價値もないぢやありませんか。そして一體殘るものは何です、何だと思ひます。

珠江　おゝ云つて見て下さい。私の爲に御遠慮なく云つて見て下さい。

日下部　曰く失望！

珠江　えツ。

日下部　清岡さん、道なき森にさまよふ人は自分の聲の谺でさへ力とすると云ひます。敵と云はず、味方と云はず心から貴女に同情して、泣いて心から貴女を責める樣な忠實な友をあなたは慾しいとは思ひませんか。

珠江　成程、私もそれは慾しい樣には思ひますけれど、私はあなたを味方とは考へません。

日下部　無論、僕も味方はしません。そりや頼まれても御免を蒙る。あなたが、その味方を慾するなら、貴女は先づ金貨や紙幣を少し許り撒いてごらんなさい、あなたの味方は何十人でも何百人でも集つて來るだらう。然し僕をして云はしむれば其の多くの味方よりも唯一人の眞面目な敵の方があなたの爲にどれだけ役に立つか知れん、よく氣を付けてごらんなさい。日下部の口から出る言葉は、あなたの心の反響だ。あなたが戰鬪を慾するなら僕の舌は劍となるし、あなたが平和を望むなら吾輩の言は音樂だ。清岡さんあなたは今、自分の將來を恐れて居るでせう。イヤさうだ、確かにさうだ。否と云ひますか。では聞きますが、あなたは、之れから渥美をどうする意りです。滋をどうしようと云ふのですか。

珠江　…………。

（と熱に冒されし如く激しき眩暈を起す。）

日下部　珠江さん、あなたは、さうして偶然とは云へ、一旦夫と云ふ人の家を滅ぼした。夫の愛を得たい、取戻したかつたからぢやらう。又、それ以上、滋と云ふ者まで

事もあらうに、連れ出したりなどしなさつた。子供の愛を戻さうとしたかつたからぢやらう。そこで、その二つの愛は完全に得られましたかな。

球江　………。

日下部　さ、そこぢや、それぢやあなたはあなた自身の墓穴を掘る様なものぢやないか、戦へば戦ふ程、勝つのではなくて負ける事になるのぢや、段々と望みは遠くなつて仕舞ふのぢやないか。

球江　え。

日下部　いや、あなたは永久に勝利を得る見込があるけれど、永久に目的を達する見込はない、あなたの將來は、永久に失望だ！　暗黒だ！

球江　よして下さい。私はそんな事を聞きたくはありません。思ひたくはありません。

日下部　いや、あなたは思つて居るのだ。これはあなたの業なのだ。

球江　歸つて下さい。歸つて下さい、直ぐに歸つて下さい。

日下部　御命令なら歸りもしませうが、念の爲め云つて置きます。目に見える僕は追拂へても目に見えない良心は常にあなたにまつはつて居るのですぞ！

球江　あゝ、私はどうしたのだらう、今日に限つて私は息が止りさうになつて、日下部さん、やつぱりそこに居て下さい。そして私は、どうしたらいゝのか、教へて下さい！

日下部　教へて？

（と歸りかけし足を止め無言、球江煩悶のこなし。）

球江　何故默つて居るのです。日下部さん、あなたは忠實な友だと仰有つたぢやありませんか。

日下部　さうです。

球江　話して下さい。何とでも妾は、もう默つてはゐられない。

日下部　あなたは教へられる人ぢやない。

球江　（袖を捉へ）では、どうすればいゝのです。

日下部　靜かに考へればいゝのです！

（と袖を拂ひ、下手へ立去る。球江よろ／＼とおつとこなし。やがて決心したものゝ如く上手へ入る。去りかけし日下部は扉の蔭にて球江の様子を見てそつと後を追ふ。）

―― 道具木なしに廻る ――

第二場　滿岡邸門前

平舞臺。立派なる洋館の前。中央に鐵の門がある。その向うは洋館の玄關の體。雪盛んに降つて居る。道具止る。

（と、まさ子雪に埋れて倒れながら。）

まさ子　滋さん〳〵。

（と、連呼する。向うより渥美俊策と赤澤亮輔雪をけたてゝ走り來る。）

渥美　おゝまさ子ぢやないか。

まさ子　あ、あなた、お父樣、滋が〳〵。

渥美　なに、滋がどうした。居たか。

まさ子　滋が――。

（と門内をさす。渥美と赤澤門内へ驅入らんとする時球江は滋の懷中へ手紙を入れつゝ門外へつきやる。滋バラ〳〵と走り來る。）

滋　あ、お父樣。

渥美　お、滋か、どうして來た、よく逃げて來たなア。

滋　僕逃げて來たのぢやない。

渥美　逃げたのぢやない――。

滋　僕、僕――（と云ひかけ思ひ入あつて手紙を見せる）これを見て下さい。

渥美　何だ、誰がよこしたのだ。「愛の力は強く候へ共、掟の斧はそれをも斷ち切り候。私は今神のものを神に返す心もてあなたのものをあなたにお返し申候――」ウーン。

（此時、門内にて「滿岡さん、何をするんです。何を、何と云ふ事をするんです」と云ふ聲、よろしくこなし。と間もなく邸内にて銃聲一つ又一つ響く。）

（一同驚いてまさ子を扶けつゝ邸内へ驅け入る。）

――再び木なしにて道具廻る――

再び元の洋室

道具とまる。

（と、渥美、赤澤、まさ子、滋バラ〳〵と出で來る。上手より日下部ピストルを持つて出て來る。）

渥美　おゝ日下部君、どうしたのだ！

日下部　あ、渥美君、いゝ所へ來た、今球江さんは、この

ピストルで自殺をしようとせられたのだ。

渥美　え。

日下部　渥美君、やはり可哀想な女だや。金があつても地位があつても勝てないものは勝てないと諦めて今迄のお詫びにと又自分の將來を考へて自殺をしようとしたのだ。

渥美　…………。

日下部　まさ子さん、あなたも、どうか濤岡球江の今迄の所業は許してやつて戴きたいのです。

まさ子　私は、もう迚も此の子には會へないと思つて居たのですもの。許すも許さないもありません。私却つてお禮を申し上げたい位でございます。

渥美　滋、小さいお前を迷はす譯ではないが、今改めてお前に云ふ事がある。私はたしかにお前のお父樣だが、お前を生んだ母は茲の濤岡球江、又お前を育てゝ下さつた母は此處に居る、このまさ子。これが本當の事なのだよ分つたか。

滋　おや、やつぱり小母さまから生れたんですか。

渥美　さうだ。

滋　おや、僕お母樣が二人あるのですね。

渥美　さうだ。

滋　何故、僕はお母樣が二人あるの、餘所の子は、皆お母樣は一人だよ——僕ばかり……。

（一同顏を見合す。）

渥美　それは、このお父樣が悪いからだ、ハ、、、。な、それもう分つたな、ハ、ハ、、、、。（と淋しく笑ふ）

（此時、球江ツカ／＼と出て來る。）

球江　いゝえ、その悪いのは私でございます、私が悪いのでございます。

滋　お父樣／＼。僕はね本當に小母樣から生れたんならね、小母樣とも一緒に居たいの、どうぞ小母樣も家へ來て頂つて下さいな。

（渥美は當惑する。球江は涙を拭ひ。）

球江　あ、皆樣、私は只今の皆樣のお言葉で、もう此の世に思ひ殘す事はございません。此の儘死んでも滿足です。私は今の生んだと云ふお言葉を餞別にして之れから、又遠い／＼旅に出かけます。滋さん、之は私の旅立の置き土産ですよ。

（と、球江は包んだものを渡す。滋は渥美に見せる。人々見る。）

日下部　會社の負債十九萬圓と清岡家動産全部を滋に讓ると云ふ公正證書だ！

珠江　滋さん、これが永いお別れです。もうお目にかゝれないのかも知れないのですから、もう一度、ようく顏を見せて下さいな——。

（此の件よろしく。）

——大團圓——

喜劇 女天下（一幕三場）

益田太郎冠者

登場者

岩山鐵之丞
妻　かね
春木定次郎（銀行員 法學士）
妾　百世
魚屋八五郎
妻　お昌
岩山宅召使
春木宅召使

第一場　魚屋八五郎住宅の場

上手寄りに二重屋臺、八五郎長屋住居の道具を飾り、中央の柱に小形の八角時計を掛け、前に長火鉢を置く、下手奥は臺所、同じく前は土間、下手に格子戸あり、外に共同水道栓、近隣の長屋、路地口等を見せたる書割
幕明けば八五郎の妻お昌は夫の歸りの遅きに立腹の體にて獨酌中下手路地口より魚屋八五郎盤臺を擔ぎ急ぎ登場し戸口の處にて。

八五郎　オー今歸つたよ……オイ今歸つたと言ふに……お昌、……オイお昌……アレ……今歸つたと言ふに……お昌ツたら！

お昌　（暫時無言にて八五郎を見詰め突然大聲に　喧しいやい！

八五郎　アー吃驚した。

お昌　門口でオシヤウ〱ツて此處の家にや坊さんなんか居ないよ。

八五郎　ダツテお前の名がお昌ツてんだからお昌と言ふに何が喧しいんでえ。

お昌　何んだね、棒でも飲込んだ人間ぢや有るまいし其處につツぱりかへつてゝ、グヅ〱寢言なんぞ言はずにサツサとお這入りツてば。

八五郎　ソリヤ自分の家だもの這入らなくつてよ。

お昌　バケツに水があるから能く足を洗つてお上り。

八五郎　當り前よ、誰が家の中へ土足で這入る奴があるも

んか。

（と八五郎は足を洗つて座に着き。）

八五郎　サア亭主が家へ歸つたと言ふに何故挨拶を仕ねえんだ。

お昌　何んだツて？

八五郎　何んだツてた何んでえ、何んぼ魚屋の女房でも亭主が歸りやお歸りなさい位は言つたつて宜いぢやねえか。

お昌　ヘン、亭主らしく爲れたきや亭主らしい事を爲るが宜いや、家に女房の待つてるのも忘れやがつて何處を今頃迄のたくツてたんだよ、何時だと思ふんだね、馬鹿馬鹿しい。

八五郎　コ、此奴ア呆れたな……蛇ぢやあるめえしのたくるとは呆れたな……成程今は八時頃だから不斷から見りや二時間許り歸りが後れたには違えねえが、何ものたくツたり遊んだり仕て來たんぢやねえんだ。實ア此間甚太の野郎に買物を賴まれてツイ夫れなりに成つてたから今日は夫れを持つて行つてやると、丁度其時甚太が酒を飲んでて俺にも一杯飲まねえかと言ふから、俺ア酒は嫌えだと言ふとそんなら飯を食つて行きねえと言ふんだ。折角色々言つて吳れるのに酒も嫌だ飯も嫌だと言ふ譯にもいかねえから、夫れぢや飲だけ御馳走に成らうつて一杯食つたにや食つたが、俺ア飯せえ食やア用はねえ、ヘイ左樣ならと言ふ譯にも行かねえから一つ二つ商賣の話を仕て歸つて來たんだな。夫れに何んでえ、歸つて來るか來ねえ內にポン〳〵ポン〳〵頭ごなしに怒鳴り付けなくツたつて宜いぢやねえか。

お昌　ヘン、馬鹿にお仕でないよ、本當に。……人に屆物があるなら、一旦家へ歸つてから出直してお出で、お前の家にはね、妾と言ふ親切な女房が今歸るか今歸るかと八時迄お飯も食べずに待つてるのをお忘れでないよ。……何んだね人を散々待たして置いて歸つて來りやいきなり挨拶をしろだなんて、何處を押しやア其麼音が出るんだよ。

八五郎　ソリや飯を食はずに待つてたなア氣の毒だけれども何も遊んで來た譯ぢやなし商賣の歸りによ……。

お昌　喧しいツたら！　商賣だか何んだか知らないがね、朝から晩迄一人で留守番をして居る身にも成つて御覽、あんまり賑かなもんぢやないよ。

八五郎　コ、コリヤ呆れたなア、女房が留守をするのが淋

しいつて、ソ、其麼判られえ奴が有るけえ。
お昌　何方が判らないんだ、お前の方が餘ッ程判らないぢやないか。何處の國に一人や半分で賑がつるて人があるもんかね、本當に呆れかいろ〱のミピヨコ〱だよ。
八五郎　デモ俺だつて何も商買や蟲のせゐで商賣を仕て居るんぢやねえぜ、宜いか。一と粒幾らと言ふ汗をたらしながら朝は暗え內から起きて盤臺を擔いで河岸へ行つて夫れから一日グル〱廻つてよ……。
お昌　オイ〱鳥渡お待ち……何んだつて？　朝は暗い內から起きて河岸へ行くつて？……ヘン、口はゞつたい事をお言ひでないよ、朝暗い內から起きるのはお前一人かえ？……ヘン面白くもない、茶ン茶羅をかしいや。假名で書くとチヤンチヤラ、をかしいツてんだよ。何んだね物々しさうに朝は暗い內から何うの斯うのと……暗い內に起きるのは妾だつて同じだよ。……ソリヤお前さんは河岸へ行つて一日グル〱廻るから紛れても居るだらうがね、家にムシヤクシヤして居る妾の氣にも成つて御覽。
八五郎　彼ア言やア斯う言ふと……待つてろ、今見せてやるから。
（と傍に片付けたる盤臺の內より財布を取出し女房の前に突付け。）
八五郎　サア見て呉れ……ヘン憚んながら此中にやア十三圓五十錢と言ふ大金が這入つてるんだ。
お昌　十三圓五十錢？　夫れが何う仕たんだね。
八五郎　ド、何う仕たつて、篦棒め、只貰つて來た金ぢやねえんだ。
お昌　當り前ぢやないか、只貰つて來たんならお前はと食だらう？　妾アと食の女房なんか眞平だよ。
八五郎　ダカラ貰つて來たんぢやねえ、一日天秤を擔いで儲けて來たと言ふんぢやねえか。
お昌　夫れが何う仕たんだね、魚屋が天秤を擔いでお巫女が御幣を擔いで惠比須様が釣竿を擔ぐな昔から極つてるぢやないか。何んだね十三圓五十錢位、御大層にお言ひでないよ。
八五郎　何うも是りや呆れたな……成程十三圓五十錢は人に依つたら大金でもねえだらうが、考へても見ねえ。俺ア多寡が棒手振だよ、宜いか？　ソリヤ世の中にや一から六迄有るから中にや髭をはやして鳥渡一つ頭をひねりや何萬圓とお取んなさる立派な旦那方や、兜町や蠣殼町で鳥渡手を振つて何百萬圓儲ける人たちも有るだらう

か、俺アお前も知つての通り學問はなし智慧はなしするから、雨が降らうが風が吹かうが斯うやつて毎日盤臺を擔いで商賣を仕て居るんぢやねえか。其麼商賣をして居てよ、一日何圓と言ふ儲を見るにや並大抵の事ぢや有りやしねえぜ。

お昌　馬鹿をお溢しでない、馬鹿を、……お前さんに學問や智慧のないのは皆様先刻御承知だよ。何んだね二た言目には儲けた、儲けたつて、當り前ぢやないか。

八五郎　何が當り前だ。

お昌　當り前だらうぢやないか、朝河岸へ行つて安くお魚を仕入れて夫れを高く賣つて來るんだもの、夫れで損すりやお天道様が晩に出らアオタンチン奴。

八五郎　オタンチン？　ド、何うも呆れたな……ソ、然うお前の様に俺が一と言言ふと十言も喋られちや何んにも言ふ事が出來ねえぢやねえか。

お昌　言へなきや默つてお出でな。

八五郎　コ、是ぢや閉いた口が塞がらねえや。

お昌　塞がらなけりや有けッ放しにして置くが宜いやね。

八五郎　畜生……ヤイ人を馬鹿に爲るにも程があるぢやねえか、箆棒め。是が何んか俺に道樂でも有ると言ふぢやなし、お前も知つての通り第一酒は飲まず、煙草は吸はず、博奕は嫌えだし、遊びにや行かずよ。……

お昌　當り前の事をお言ひでないよ。

八五郎　夫りやマア當り前かも知れねえが、其麼事が世の中にや多いや、處が夫れを爲ろぢやなしよ、一生懸命稼いぢや金を溜るのを樂しみにして居るんぢやねえか。夫れにお前だつて然うだ、鳥渡外へ行くにも襟垢の附かねえ小ザッパリした物を着られるなア一體誰のお蔭だと思ふんでえ、面白くもねえ。自慢ぢやねえがお互に三百圓宛も生命保險をつけたり、銀行に二百四五十圓も金が預けられる様に成つたなア憚んながら誰が仕たんだと思つてやがるんだ、箆棒め。

お昌　（ジリ／＼と眼を釣上げ）何んだつて？　今言つた事をモウ一遍言つて御覽。イヤに洒落た事を言つたね、銀行に二百四、五十圓お金が溜つたのは誰のお蔭だつて口に税が掛らないからつて冗談も休み休みお言ひ。サアお前さんが下手な絲瓜の様にオッに絡んだ文句を言ふなら妾だつて言ひたい事が有るんだ。一體全體お前さんが河岸で八さんとか阿兄とか言はれる様に成つたのは夫れこそ誰のお蔭だと思つてるんだよ。何んだね、二百や三

百のお金が、夫れだけ溜りや三井や岩崎から養子でも貰つて富士の山を買つて庭の築山にでも爲る氣かよ、生チヤンな事をお言ひでないッ！　夫れよりかね、斯うやつて暑くなく寒くなく何うやら斯うやら暮して行けるなア抑々誰のお蔭だと思ふんだ……ネー。お前さんの樣な氣の拔けた古いサイダー見た樣な人でも、家の阿父さんが正直だとか稼人だとか言つて元手を貸して與れたればこそ八さんだとか何んだとか言はれて少しは顏も知られるやうに成つたんぢやないか。其阿父さんの恩も忘れやがつて、自分の腕一つで拵へた樣な氣に成つて御大層な事をお言ひでないッ！

（八五郎は急に四邊を憚りながら。）

八五郎　（小聲に）コレサ、マア……其麼事を言ふなつてばよ。

お昌　然うぢやないか、家の阿父さんが無かつたらお前さんの樣な人はね、今頃ア曲りッ角で電車の線路に油でも塗つてるのが關の山だ。

八五郎　判つたよ／＼。マアサ、然う大聲で怒鳴るなッて事よ。

お昌　是が妾の地聲なんだよ!!

八五郎　然うだらうけれどもよ、何うも二た言目にやアお前の阿父さんが金を貸して與れた事を言はれると、俺一人なら構はねえが何を言ふにも隣は他人樣だ……

お昌　當り前だアね、長屋に住んでりや壁一と重隣が他人樣なんだア今日此頃始まりやしないよ。其代り先方から見りや此方だつて他人樣ぢやないか。

八五郎　マア／＼理窟は夫れに違えねえが、然う大きな聲をして人樣に聞えると極りが惡いぢやねえか。

お昌　ダッテ宜いぢやないか、確に貸したから貸したと言ふんぢやないか、夫れ共お前さん借りた覺がないとでも言ふのかえ。

八五郎　ダカラよ、借りたには違えねえけれども其麼事を近所隣に聞かせられちや俺の顏に關る事ッたから……ネー俺が謝るから……此通りだ、惡かつた、此通りだ。

（と平身低頭する。）

お昌　お前さんが謝るなら何もポン／＼言ひたかないけれども、厭に恩に被せたりなんか爲るから阿父さんの事も言ひたく成るぢやないか。

八五郎　全く俺が惡かつたよ、遲く歸つたのが惡いんだ、是から氣をつけるよ。ナニ一日稼いで歸つて來る時にや

お前の笑顔でも見てえと思つてる矢先にポンポーンと來たんで、俺も蟲の居處が悪かつたと見えてムカツとしたもんだからツイ色々言つたんだよ。何うも濟まねえ。堪忍して呉んねえ、此通りだ。

お昌　然う判つて呉れりや宜いけれども、一體お前さんが妾に向つて其麼事が言へた義理ぢやないんだからね。

八五郎　マ、全く然うだ、然し何卒近所隣へ聞かす事だけは止めて呉れねえと俺も外聞が悪いからな。

お昌　ソリヤ妾だつて自分の亭主の瑕のない事を今更世間に聞かせたかないがね……

八五郎　（小聲になり獨白）　何うも驚いた、遣切れねえや。

お昌　（大聲に）　何んだつて？

八五郎　イエ何んでもねえんだが……ネーお昌……お昌。

お昌　又始まつたよ、何んだね。

八五郎　（モヂ／＼仕ながら）　俺ア……鳥渡……行つて來てえんだが……。

お昌　又何處かへ行くのかえ。

八五郎　ナニ鳥渡湯に行つて來てえが、ド、何うだらう。

お昌　お湯に行くのに相談する奴があるもんかね、行きたきやサツサと行つてお出でな。

八五郎　デヤ鳥渡行つて來るよ。

お昌　オイ／＼お待ちつたら。

（と長火鉢の抽斗より五錢の白銅を取出し八五郎の前に投げ）

お昌　サア是を持つといで、夫れから女は洗ふ處が多いから仕方がないが、男のお湯は三十分で澤山だよ、サツサと行つてサツサと歸つといで。

八五郎　デヤ三十分で歸つて來るから少し待つてゝ呉れ。

お昌　後れると何うするか見やアがれ。

（八五郎は薄氣味悪き思入にて外へ出る。）

お昌　戸を締めといで！

八五郎　イ、今締めるよ。

（と門口を締めてホツと一と息する。）

八五郎　（獨白）　何んだらう家の嬶は、俺が歸るが早いか門口からギアン／＼、ギヤーンと來て、擧句の果が「八さんとか阿兄とか言はれるなア誰のお蔭だア」と浴せ掛けやがる。是が並の女房なら頭の一つも喫はすんだが、何を言ふにも彼奴の親爺にや色々世話にも成つてる事ツたし、マア／＼成たけ世間に這麼事ア聞かせ度ねえと思やこそジーツと我慢を仕て居るんだが、是ぢやそウ到底

遣切れねえや……が然し友達の中にや誰一人彼の女に意見なんか出來る樣な奴ア居ず……誰か一番お賴え申して……占めた！　有る、有る、お出入先の春木さん。然うだ、彼の方アお年は若えが大學を卒業なすつて何んとか學士とか言ふ學問のある方だし、銀行でも中々偉えんださうだから、一番此譯をお話して學問の力で家の嬶に女と言ふものは其麼もんぢやねえと意見を仕て頂いたら少しは藥になろうかも知れねえな……。然うだ、今頃アお宅だらうから鳥渡行つて見よう。

（此時お昌は突然戸口を明け。）

お昌　何をグヅ〳〵して居るんだよッ！

八五郎　（吃驚して）イ、今行くところだアな。

（と八五郎の春木方に出掛ける模樣にて道具廻る。）

第一場　春木定次郎住宅の場

平舞臺、西洋室、上手奥、正面及び下手奥に出入口、但し正面中央は硝子戸にて廊下を越して庭園見ゆ、上手にストーヴ、正面に一二ケ所硝子窓、室內に並椅子、安樂椅子並に長椅子（時候に依り虎、白熊等の毛皮を掛ける事）ピアノ等を配置し中央の長方形の卓子には華やかなる卓子掛を掛け、上に銀の花盆に咲亂れたる時候の西洋花を挿したるを置く、壁に油繪（內一つは夫人の父にて某銀行の頭取、燕尾服姿に勳四等の勳章）マンテルピースの置時計、大理石の半身像、鉢植の植木、其他和洋美術品を處狹しと飾りたる銀行員には不相應なる美々敷西洋室、電燈は光目映く四邊を照す。

今しも春木新夫人百世（年齡二十三四歲、米國ボストン某女子大學校出身、服裝は純粹洋式）ピアノを彈奏中の模樣にて道具極る。

夫の歸宅を待佗びて不興の彈奏なれば心も心ならず、ワグネルもベートーベンも粉微塵となる內、ピアノに不調律なる箇所あるを發見し遂に滅茶々々に叩きたる後殘酷にピアノを閉ぢて立上り置時計を眺め。

百世　（口の內にて）Half past eight（八時半）

と呟きながら不興氣に上手の安樂椅子に掛け焦込みたる思入にて卓上の英字新聞を取上げ一二分默讀しては時々時計を眺め又々立上りて正面入口より外を見廻し手荒く閉ぢて室內を見當なく歩き廻り呟きつゝ再び元の椅子に坐し卓上の編物籠より毛糸を取出して自烈た

さうに編物を始める。

召使　(此時上手入口より召使登場す。)旦那樣がお歸りに成りました。

(夫人は知らぬ顔に編物を續ける。)

召使　奧樣、只今旦那樣がお歸りに成りました……奧樣只今旦那樣が……。

百世　(突然大聲に)知つて居ます!

(召使は驚き手持不沙汰にとつおいつ爲る内同じく上手入口より主人春木定次郎(年齡三十四五歲、當世風の若紳士、モーニング、白チヨツキ、竪縞のヅボン)外より一二度戶を叩き恐々入來り帽子、手袋等を渡せば召使受取りて奧に入る。)

春木　(卓子の下手に來り立ちたる儘)今歸りました。

(夫人は見向きもせず無言。)

春木　今歸りました。

(夫人猶無言。)

春木　只今歸りました。

(夫人は見上げもせず印計りに默禮する。)

春木　(着席して煙草を喫ひながら)何うか仕たのですか?

百世　イーエ。

(とハンケチにて目を拭ふ。)

春木　何處か體でも惡いのですか?

百世　少し頭痛が……

春木　(又始まつたかと言ふ思入にて)時候の變目には用心せんと可けませんよ。

百世　御親切樣。

春木　……別に御親切樣な事は有りますまい、夫として妻の體を案じるのは普通人情の然らしむる處ですからね、何も然う改まつて禮を言はんでも宜いでは有りませんか。

百世　妻として夫の身を案じるのも普通人情の然らしむる處で御座いませう。

(此時召使茶を持來る。)

春木　(召使に向ひ)其處に置いてお出で、用事があつたら呼びますから。(百世に向ひ)そりや妻として夫の身を案じるに不思議はないですが、別段僕はお前さんに案じられる樣な事はありませんよ、夫れ共何か僕の體に就いて心配な事でも有りましたか?

百世　(Certainly

春木　へー？

百世　御座いましたとも。

青木　ハアー、何か心配でした？

（百世夫人は又も無言に成り時々ハンケチにて目を拭ふ。）

春木　――……ネ何か心配でした？　言つて御覧なさい！可かんですね……默つて居つては何が何んだか判りませんね……ネー……マア其編物は後にして……何うも然う沈默して居つてはお前さんの心中を察する事は出來んですからね……ネー、言ひたい事が有るなら夫婦間に遠慮は有りませんからモツト活潑に言つて貰ひたいですね。

百世　Look at your watch!

青木　何んですか？

百世　Look at your watch!（時計を御覧なさい）

青木　……アー、イエス、アイ、アンダースタンド、バツト……イツト、イス……ウーン……イツト、イス、エーキヤツト……ぢやない……ウーン……イツト、イス、アー……

百世　oh, drop your イツト、イス、イツト、イス、I tell you, "Look at your watch"; W, A, T, C, H. WATCH! 時計！（イツト、イス、イツト、イスを止めにして時計を御覧なさい）

春木　アー時計、成程、ウヲツチ、時計、アハヽヽ、オフコース……イエス、アイ、ハブ、マイ、ウヲツチ……ウーン……ゴールド、ウヲツチ、ベリ、デイア。（アー時計は持つて居ます、金時計、中々高い）

百世　I dont care whether it is of gold or not, but If you have a watch on you, I wish you will be good enough to tell me the time.（金でも何でも構ひませんが時計をお持ちなら何卒時間を仰有つて下さい）

春木　イエス……オー、イエス、イツト、イス、ベリ、フアンニー、然うぢやない……アー、プリース、エキスキユース、ミー、バツト……バツト……アイ……ノー、ノー……ユー、サツポース……ウーン……ネーお話中ですが何うも英語で返事をすると時間計りかゝりますから日本語で言つて下さいな、勿論意味は判つてるんですがね。

百世　貴郎は今何時だか御存じですか？

春木　アー成程……然うですか……（時計を見て）今は

八時半鳥渡過ぎですが……時間が心配なのですか？

百世　貴郎は不斷銀行から何時にお歸りに成ります？

春木　ハハア夫れが心配なのですか……成程僕は不斷用の無い時は五時頃に銀行から歸りますが、今日は鳥渡餘所へ廻つたもんですから二三時間後れたのです。然し夫れが爲めに不快な顔をするのは少し神經過敏ではありませんか。

百世　夫れでも毎日五時頃にお歸りに成るのに今日に限つて這麼に後れたのですもの、夫れも電話か何かでお知らせが有れば兎も角、何時迄お待ちしてもお歸りがありませんから、若し途中で電車か何かでお怪我でも有りはしないかと思ひますわ。

春木　冗談言つては可けません、未だ何んぼ何んでも電車に轢かれる樣な年ぢやなし其麼心配はありませんが、今日は實は突然取引先から晩餐を上げたいから花月へ來て呉れと言ふので御馳走に成つて來た爲めに後れたのです。

（百世夫人はヂツト春木を見詰め。）

百世　夫れで貴郎お出でに成つたのですか？

春木　ダツテ取引先からの招待ですから行つたのです。

百世　お出でに成るなら成るつて何故私にお知らせなさらないのです。

春木　デモ銀行の退ける時に直ぐ是からと言ふのですもの、家内に一應斷つてからでなくては參られませんとも言へんですから止むを得ず直ぐ行つて了つたのです。

百世　Is that so?

春木　へー？

百世　左樣で御座いますか、夫れはお樂しみで御座いましたらう。

春木　イヤ別にお樂しみと言ふ譯はないのですが是も商賣上止むを得ん事だし又紳士の交際上致方がないのです。

百世　デモ花月と申しますと Japanese Restaurant でせう

春木　レスト……レスト……

百世　日本の料理店で御座いませう？

春木　アー然うです、日本の料理店です。

百世　日本の料理店なら藝妓も來ましたらう。

春木　ソリや來ましたアね、御主人がお取持に招んだのですから來ましたよ。

百世　若いのも來ましたらう。

春木　……若いのも……居た樣ですね。

百世　ダカラ御愉快で御座いましたらう。

春木　イヤ然う言ふ事を言はれては困りますよ、何も僕が招んだ譯ではなし、主人が接待の爲めに招いたのですから、止むを得んでは有りませんか。又例へば僕が藝妓を嫌ひだと言つて、吾輩は藝妓を好みませんから歸りますとも言へんぢや有りませんか。

百世　デも貴郎は藝妓と何かお話を爲さいましたらう。

春木　ソリヤ先は商賣ですもの、「入らつしやいまし」位は言ひますから、僕の方でも「イヤ」位な挨拶は仕にや成りません、夫れに何も敵同士が集まつた譯ではなし、藝妓に出逢ふたんびに恐い顏をして睨ッこをせんでも宜いですからね。

百世　然しお酌をお爲せなさいましたでせう。

春木　何うも然う言ふ事を言うては可かんな、世の中には啞の藝妓や聾なし藝妓許り居りやしまいし客に招かれて話も仕ない、酌もせんと言ふ事はないです。夫りや多い中には祝儀だけ貰つて御膳の掃除をして臆面もなく歸る者も有るさうですが、先づ普通藝妓の商賣は、座敷の取持やら酌をするやら、唄ふやら舞ふやらする爲めに招かれるのですから、僕等がお客に成つて居ながら、お前達は話も仕ては可かん、酌も仕ては成らんとは言へませんからね。

百世　ホラ御覽遊ばせ、お話を爲すつたりお酌をお爲せなさるから自然お歸りも後れますのです、貴郎が藝妓抔の參る樣な所へお出でに成るからお惡いのです。是からは精養軒とか帝國ホテルへ入らつしやいまし。然うして、食る物だけ食つてサッサとお歸りに成れば這麼に遲く成る樣な事は無くなりませう。

春木　是は實に恐縮するですね、マア考へても御覽なさい。主人は我々に花月へ來て呉れと言ふのに、家内が心配を致しますから私は帝國ホテルへ參りますと言つて、主人は竹川町で日本料理を食べて客は山下町で洋食を別々に食べる譯にも行かんぢやありませんか。何處へ招かうが招かれようが、紳士として交際上萬止むを得んでせう。夫りやお前さんは永年米國で教育を受けて、日本の社會狀態に暗いから其麼事を言ふけれども、未だ／＼今日の日本で紳士としては待合にも行かねばならんし、藝妓も招ばねば成らん世の中ですから、社會に立つ以上は實に止むを得んのです。

百世　へー日本では待合や料理屋で藝妓を招ばなければ紳士には成れませんか？

春木　イヤ強ち成れんと言ふ譯ではないが習慣上……。

百世　賤しい職業の女を前に置かなければ社會と交際が出來ないのですか。

春木　イヤ出來んと言ふ譯でもないが、夫れが我國の風俗習慣に成つて居るのだから、實に外國人に對しても恥しい、が何んぼお前さんが米國仕込だからと言つて其麼無理な判らん常識に外れた事を言うては僕は實に恐縮するです。

（此時魚屋八五郎正面硝子戸の外より覗き見て當家にても始まり居るに驚き窓下に身を潜めて春木夫婦の話を聞く。）

百世　（暫時無言にて春木を見詰むる内持前のヒステリー漸く現れ來り）ハイ、何うせ妾の申す事は無理でせう、エー何うせ妾は判りますまい、常識に外れて居りませう……。妾は藝妓の樣に貴郎の御機嫌を取る事は出來ませんから早くからお歸り爲すつても面白くは御座いますまい。

春木　イヤ決して然う言ふ譯ではないのですが、只交際上止むを得んと言ふのです。

百世　イーエ何うか藝妓抔を御覽に成つた後では妾の樣な變チキリンな顔は御覽に成りたく御座いますまい……何うせ妾は亞米利加育で御座いますから日本には向きますまい。

（と泣き始める。）

春木　其麼判らん馬鹿な事を言つては可けませんよ。

（百世夫人はキッと春木の顔を睨んで立上り。）

百世　ナニ馬鹿？……Yes! call me Baka, fool, idiot, mab or anything you like, but I'll call you a heartless brute!（ハイ、馬鹿と仰有い、間抜、氣違、何んとでも仰有い、妾は貴郎を心なしの猛獸と呼びます。）

春木　イエス、サンキウ……ぢやない……弱つたな……マア然う腹を立てゝは可けませんが……。

百世　日本の婦人は亭主から馬鹿と言はれても笑つて居らねば成らないのですか、エー妾は馬鹿です、本當に馬鹿です、全く馬鹿です。貴郎の樣な男を亭主と呼ぶ女ですから馬鹿です。其馬鹿を承知でお貰ひ爲すつた貴郎は何んです。

春木　私も馬鹿です……イヤ、ソノ、決してお前が失禮、貴女が馬鹿だと言ふのぢやない……。然う怒つては可かんです。怒らんでも話は出來ますから怒つては可かんで

す。只紳士として交際上萬止むを得んと言ふに過ぎんのですから。

百世　貴郎は二言目には紳士々々と仰有るが貴郎が今日紳士にお成りになつたのは一體誰のお蔭だと思ふのです。貴郎が未だ本鄕の下宿屋から大學に通つて居らしつて、半年も下宿代が溜つて困つてお出でになつたのを家のお父樣がお聞きに成つて、下宿代から學資迄出して下すつた爲めに大學も卒業が出來たんぢや有りませんか。

春木　イヤ然う言ふ事を言はれては……。

百世　イーエ夫れに違ひ御座いません。夫れからお父樣が那麼者でもお前の氣に入るなら貰つて遣つても宜いと仰有つたのを、妾が承知をして上げたればこそ一緒に成れたのでは有りませんか。本來なら妾は貴郎の樣な人物を夫に持つ必要は無かつたのです。

春木　イヤ御尤です。然し夫れと是とは違ふぢやありませんか。

百世　イーエ違ひません。今日貴郎がヤレ紳士だ、ヤレ交際だと言はれる樣な身に成つたのも、又這麼分に過ぎた家に暮らせるのも、皆お父樣のお助が無ければ出來ないのでせう。其御恩をお忘れなすつて、御自分一人で紳士にでも成つた樣に朝から晩迄タッタ一人で待つて居る妾を慰めようとも爲さらずに、遲く歸つた上に妾の事を馬鹿だとか、判らないとか言つて虐待なさるとは餘りです。

春木　イヤ決して虐待なんか爲る譯ではないですが、只紳士として………。

百世　oh! I'e done with your shinshi! A shinshi is one who loves his wife and respects her and not a slave of painted Geishas!

（モウ紳士々々と仰有るな、紳士と言ふ者は自分の妻を愛し敬ふ者です、白粉を塗つた藝者達の奴隷では有りません。）アー妾は自分の亭主の爲めに侮辱されました、ラヴの無いのが判りました。貴郎は只地位名望の爲めに結婚なすつた。妾は貴郎の恐しい慾望の犧牲と成つたのです、妾は馬鹿です。妾は馬鹿です。アー口惜しい。妾一と思に死んで了ひます。

（と恨の眼に涙を溢らし狂氣の如くハンケチを喰破り新聞を引裂き高聲を上げて泣狂へば春木は周章てゝ近寄り介抱せんとするに益々附上り亭主の頭に上靴、毛糸、クッション、卓上の花其他を手當り次第に投付け投付け夜叉の如く荒狂ふ。）

春木　是は可かんな。……モシ、危ない……然う怒つては可かんです。……助けて下さい……失禮しました……。危ない。

百世　貴郎の様な殘酷な恩知らずの方にお話するのは嫌です。妾は一生を誤りました、口惜しい……。

（と兩手にて自身の頭を掻り遂に床の上に泣倒れる。此時以前の召使上手入口より果物皿に時候の水菓子を山盛りにして出で來るを春木心付き。）

春木　（召使に向ひ）馬鹿、々々、々々、々々！　彼方へ行つてろ！

（召使は不意を打たれて果物を振落しながら急ぎ元の口に這入る。）

春木　モシ……何うかお願だから止めて下さい……………。召使や何かの前が見つともないですから………ネー奥さん、モシ、吾輩實に恐縮するですから。……ネー僕が惡かつたのです。此通り春木全く恐縮をします。以後は必ず注意して再び貴女に御心配を掛けませんから、此通り、〳〵。

（と夫人の前に平身低頭する。）

百世　貴郎は二た言目には恐縮、〳〵とお言ひですが、今日朝も茶飲茶碗をお毀しなすつた時恐縮、〳〵と仰有つたぢや有りませんか。紳士と言ふ者は其麼に日に二度も三度も恐縮を爲るものですかッ！

春木　イヤ今度のは絶對的眞誠の恐縮、此通り……誠心誠意、春木定次郎絶對的恐縮を爲るのです。全く吾輩の不心得から起つた事で何ん共申譯ありません。決してお父様の御恩を忘れたと言ふ譯ではないのですが、只交際上必要だらうと思つてツイ出掛けたのです。然し能く考へて見ると成程交際抔は餘り必要は有りません。夫れに何んぼ此國の習慣でも、藝妓の出る様な席へ行くのが惡いのです。僕は以來斷然交際を廢して毎日銀行から自動車で歸つて貴女に御心配を掛けんやうに仕ます。ナーニ、タクシーの二圓や三圓は何んでもありません。ネッ判りましたか？　判りましたか？

（是にて夫人のヒステリー段々靜まる。）

百世　夫れでは乾度早く歸つて來て下さるか。

春木　勿論です。オフコースです。……貴女だつて又少しは察して下さるが宜いぢやありませんか、何も吾輩が好んで出掛ける譯ではなし、又義理で招かれて旨くもない茶屋小屋の料理を食ひながら可笑しくないのに笑つたり

するのは決して面白いものではないのです。夫れよりか一時も早く自分の家に歸つて、生涯苦樂を共にすべき貴女と一緒に笑ひながら晩餐でも食べる方が何の位愉快だか知れませんや。且夫れが吾々のアイディアル即ち理想とする處でさア、ネー？　夫れを吾輩の心得違からツイ貴女に御心配を掛けたり感情を害したり實に恐縮千萬です。今後は屹と愼みますから今日の處は滿腔の誠意を以て謝罪します、此通りです。判りましたか？　赦して下さい？　堪忍して下さい？　アー赦して下さるか？……
…アー感謝します。

（夫人は澁々ながら默頭く。）

（春木は卓上の茶を取つて勸めながら。）

春木　さア少しお茶でも飲んで落付かにや可ません。召上れ……お茶は嫌ですか？　デハ水を持つて來ませうか嫌ですか？　夫れならサイダーにしませうか？

百世　何んにも嫌ッ！

春木　アー嫌ですか、デハ何んにも上げませんから怒らんで機嫌を直して下さい、ネ？　サア私のハンケチで拭いて上げませう、お顏を出して下さい。オヤオヤ折角のお化粧を……アー構はない、〱、大丈夫です、這麼に泣かせたりして本當に私は悪いですね。ソーラ、モウ直りました。夫れからお鼻をチンと――モウ一つチンと……然うです、サア椅子へお掛けなさい、起して上げませうね、……ヨツ、ドツコイシヨ、中々重いですね。

（と夫人を持上げて椅子に掛けさす。）

百世　マイ、シユース！

春春　何んです？

百春　（焦烈たさうに）マイ、シユース、靴！

春木　アー靴、シユース、イエス、シユース、知つて居ます、只今。

（ト春木は飛散つたる自分の上靴を取違へて持來り。）

春木　サア穿かせて上げませう。

（百世は鳥渡穿きて急に蹴返し。）

百世　是ぢやなーい！

春木　アー然うですか。是ではないと……アー成程、有りました、怒つちや可けませんよ、ツイ私が粗相で自分のと間違へたのですから。

（と百世の靴を取揃へ。）

春木　サア有りました、足を出して下さい、サンキユー…此靴は中々堅いですね。ヨウ、ウーン。

（と力を込めて穿かせろ。）

百世　痛い！

春木　アー痛いのですか、失禮しました、決して惡意で行つた譯ではないのですから……。

百世　左の靴！

春木　アー成程是は右でした、何んだか少しマゴ〲したので鳥渡右左が判らなく成りました。サア左……今度は右……アー嵌つた、サア是で宜いでせう？

（と丁寧に穿かせ室内を片付けて。）

春木　アー驚いた……僕は此頃心臓が惡く成つたと見えて直に胸がドキ〲しますから少しお手柔に願ひたい。

（百世夫人は眼も鼻も赤く腫上りたる儘泣吃逆中頻に引裂きたる着物を氣にする。）

春木　着物なんか氣にせんでも宜いです、明日三越へ一緒に行つて何か買ひませう。兎に角今夜の處は氣を落着けて下さい……ウーン……ダガ此際甚だ申兼た次第ですが僕は鳥渡是から……行つて來たい處が有りますが何うでせう。

（夫人又々キリ〲と目尻を上げ。）

百世　（大聲に）何處へ行くのです？

木　ド、何處と言つてホラ……貴女も知つて居る、ハマ濱町の岩山さんね、彼の方のお宅迄鳥渡……。

百世　何仕に入らつしやるのです。

春木　ナ、何仕にと言つて、實はお父樣からお申附の用事がありましてね。ジ、自分の用なら無論今夜は行きませんが、お父樣の御用ですから早く仕て置かんと都合が惡いので、實は歸る前に鳥渡廻つて來ようかと思つたのですが、貴女が待つてお出でだらうと思つて其儘歸つて來たのですから、イ、今から鳥渡行つて來たいのです。

百世　お永く成るなら明朝に爲さい。

春木　イエ、ホンの鳥渡です。

百世　夫れでは三十分でお歸りなさい。

春木　何分と「ブン」迄限らんでも宜いぢや有りませんか。

百世　夫れなら明朝に爲さいッ！

春木　宜しい〲、屹度三十分で歸ります。

百世　デハ行つて入らつしやい、妾は頭痛が爲るからモウ寢ます。早く歸つて揉んで頂戴！

春木　畏りました。

（夫人は立つて下手奥の入口に向ふ。）

春木　アー寢間へ行くなら誰か呼びませうか。

百世　ノーセンキウ、然しワイフの寢る時には禮を爲さい。

（と左手を伸ばせば春木は恐々夫人の手を取り。）

春木　此手を…………？

百世　エ、キッス！

（春木は四邊を見廻し夫人の手の甲に恭々しく接吻する夫人は天を仰ぎ歎息して。）

百世　アー妾は何んだつて日本なんかに生れたんだらう。

（春木をヂッと見詰め）Oh, you monkey！（猿奴！）

（春木の鼻先に天へも響けと戸を締めて入る、春木は驚きて二三歩飛下り氣の抜けし如く茫然として立つ。）

（此時正面入口より魚屋八五郎恐々入來り四邊を憚りながら小聲にて。）

八五郎　旦那……旦那……。

（春木は見向きもせず頭を上げ。）

春木　アッ！　誰か僕を呼ぶ様な氣が爲る……。

八五郎　旦那。

春木　アー變な聲が聞える……アー僕は逐々頭が狂つたのか……。

（と兩手にて頭を押へる、此内八五郎は段々傍に近寄り。）

八五郎　旦那。

（春木は漸く心付き。）

春木　誰だ。

八五郎　エー魚屋の八五郎で御座います。

春木　オー出入の魚屋か。

八五郎　へー、何ん共お察し申します。

春木　何がお察し申しますだ。

八五郎　へー……エへ、、アノ絶對的專制の恐縮とか言ふ……彼奴をお察し申しますんで、へー。

春木　貴様何處で聞いて居た。

八五郎　へー、お部屋の外で見たり聞いたり致しました。

春木　可かんな、立聞なんか仕ちや可かんよ。

八五郎　旦那は毎朝車で御出勤の時は反身かなんかで髭を捻りながら大層威勢が好う御座んすが、アノ恐縮だ恐縮だと仰有る時や、奧さんの手を舐める時はあんまり好い恰好ぢや有りませんね。

春木　何うも彼れを見ては益々可かんな……。全體貴様は何仕に來たんだ。

八五郎　ナニネ、外の事でもねえんですが、實は俺の家で

も同じなんで、何しろ今夜用達をして二時間許り後れて歸るとイキナリ門口でボンボーンと來て、擧句の果が自分の親爺が少し許り金を貸して與れた事を言ひ出しやがつて、俺に恩を被せるんで。……夫れも今日此頃の事ならまだしもですが、少し氣に入らねえ事が有ると直ぐ始まるんで、俺アモウ精も根も盡き果つちまひましたから、一番旦那にでも願つて學問の力でウンと意見を仕て頂いたらと思つて伺つて見ると旦那の方でも始まつてるんで、ヘー……。

春木　イヤまだ／＼貴樣の方はポン／＼言ふから宜いが、僕の方は始めはジリ／＼眞綿で首を締められる樣で、夫れから英語交りのヒステリーと來るんだから實際堪らんよ。

八五郎　全くお察し申します。が旦那は是から何處へお出掛けなさるんです。

春木　貴樣も聞いて居たらうが、濱町に岩山さんと言ふ舊幕の方があるんだ。

八五郎　ヘー／＼俺も永年お出入で……。

春木　然うか、彼の方はお年寄ではあるが中々活潑なお人で理窟も能く判る方だから、實は先生にお願ひ申して少し家内に意見を仕て頂かうと思つて居るんだ。

八五郎　成程な、彼の方なら重みもありますからねえ……旦那、物は相談だ、何うでせう一つ俺も連れて行つて下せえませんか。

春木　貴樣をか？　冗談言つちや可かん。

八五郎　デモ誰だつて困る味は同じでさア、夫れにお出入の事でもあり、只一緒に連れて行つて下さりや俺は俺で又お願へ申しますから其麼事を言はずにお供をさせて下せえな、お慈悲ですから。

春木　然うか。……同病相憐むと言ふからなア……。宜し、一緒に來い、連れて行つてやらう。

八五郎　左樣ですか、有難う御座います。ヂヤ直ぐとお供を致しませう。

春木　ダガノ、八五郎。

八五郎　ヘー？

春木　男は染々酷いなア。

（と兩人ホロリとして出掛ける模樣にて道具廻る。）

第三場　岩山鐵之丞隱宅の場

平舞臺一面濱町岩山鐵之丞隱宅の居間、長押に鎗を掛

け上手床の間には家康公に縁故ある軸、同じく傍に大小、鎧櫃等を置き凡て武骨なる昔風の飾附宜敷あつて上手机の前に岩山鐵之丞（七十歳前後）古風の眼鏡を掛け讀書中の模様にて道具極る。

外に按摩の笛聞ゆ。

此時下手の襖より召使登場す。

召使　旦那様、只今春木様と魚屋の八五郎が見えまして鳥渡旦那様にお目に懸りたいと申されますが如何致しませう。

岩山　ナニ春木さんと魚屋の八五郎？　何んだか妙な取合せだが、奥さんに用が有るのではないかな。

召使　イエ奥様は今晩お招待でお留守だと申しましたら奥様ではない旦那様に是非お目通ししてお話したい事があるが、夫れも時間に限が有るから至急お目に懸りたいと仰有います。

岩山　ハハア妙だな。夜中突然罷越して然も面會する時間に限が有るとは。……マア宜いからお通し申せ。

召使　ハイ。

（召使再び奥に行きかゝる。）

岩山　アノコレ〳〵、春木さんだけお通し申して八五郎は暫時次に待たせて置け。

召使　イエ御一緒にお目に懸らねば成らないのださうで御座います。

岩山　ナニ一緒でなければ可かん？　益々變だな……。マア先方の望なれば何うでも宜い、早く御案内を仕なさい。

召使　ハイ。

（ト召使奥に入る。）

岩山　春木さんと八五郎……夜中突然の面會……ハテナ…ヨモヤ天下を取らうとする謀叛人の有つた譯でもあるまいに、何んにしても不思議千萬だな。

（此時奥にて。）

召使　何卒此方へ。

（と下手の襖より春木竝に八五郎案内されて入來る。）

岩山　（大聲に）イヤ是は〳〵春木さんに魚屋の八五郎……能うこそ……マア、ヅーッと是へ、〳〵。

（兩人モヂ〳〵する。）

岩山　サア〳〵御遠慮には及ばん。手前も御無禮をして褥を脱りません、サア〳〵お構ひなく。

（兩人ピョコ〳〵挨拶する。）

岩山　ハイ〳〵、暫くお目に懸りません、何時もお變りも

なく、ハイ〳〵。

春木　夜中御休息の處をお邪魔を致しまして相濟みません。

岩山　イヤ手前は隱居の身で朝から晩迄休息許りだて、アハ、、。時に只今取次の者から承れば、何かお急ぎの御用で八五郎と同席でお話が有るさうだが、老人の事で氣短た、サア早速其お話を承らう。

春木　ハイ。

（ト兩人頭を搔いて躊躇する。）

岩山　是はしたり何うなすつた、何か餘程お話にくい事の樣だな。八五郎お前は甚麼話があるのだ。

八五郎　へー、誠に相濟みません。

岩山　謝るには及ばんから話なさい。……ハハア判つた。お前が春木さんのお宅へ納めた魚の事で何か悶着でも起つたのだな。

春木　イヤ魚の事ではないので。……人間の事でお願に出ました。……ハイ。

岩山　人間の事？　誰ぞ何か致したのかな。

春木　實は頗る申上にくいのですが。……私今晩突然銀行の取引先から新橋の花月に招かれましたので。

岩山　成程、新橋の花月と言ふと料理屋だな、夫れは御愉快だつたらう。手前杯も若い時分には每晩の樣に出掛けたものだが、每夜々々自宅に歸つて同じ部屋で同じ物を食ふのと違つて、綺麗な座敷で變つた物を食べると酒も一入旨く飲めますて、夫れが何う仕たと言ふのかな。

春木　處が主人が饗應の爲めに藝妓を招きましたので…。

岩山　藝妓を……夫れは益々御愉快だつたらう。世の中に何が結構と言つて藝妓位結構なものはない。先づ考へても御覽じろ、藝妓にでも出ようと言ふのだから、第一姿色が好くつて世辭を言つて三味線を彈いて歌を唄つて踊を踊ると言ふ女だもの。病人か仙人の外は男子として喜ばぬ者はない、彼れで金さへ取らなきや神樣も同樣だ。夫れが何う仕たと言ふのかな。

春木　夫れで實は歸りが不斷より二三時間後れました譯で……。

岩山　ナニ、タツタ二三時間？　イヤハヤ當今のお若い方は堅いと言ふのか感じが鈍いと言ふのか、茶屋へ行つて藝妓を招んでタツタ二三時間遊んで歸る位なら始めから行かん方がましだて。手前杯が貴公の年輩には二た晩や三晩は愚か一と月に一度歸るか歸らん位のもので、或時

杯は餘り歸宅を致さなかつた爲めに留守中に轉宅をされたな。自分の家を搜すのにホト〱困却した事が有つて、夫れが何う仕たと言はつしやるのかな。

春木　夫れがソノー、歸宅を致しますと家內が酷く立腹を致しまして、何故藝妓杯の出入る樣な場所へ行くのか、然う言ふ處へ行けばこそ自然歸宅の時間も後れるし、從つて終日留守をして居る女の身には一層の淋しさを感じるのを察しないかと申しますので……。

岩山　ナニ貴公の奧方が左樣の事を申されるのか。

春木　ハイ。

岩山　夫れから何んと答へられた。

春木　私も女の狹い心からと思ひまして、今日我國の風俗として紳士の交際上止むを得んと言ふ事を縷々說明致しましたが、御承知の通り彼女の父には私學生時代から世話に成りました事を楯に取りまして、今日紳士に成つたのは誰のお蔭かと言つて遂には死んで了ふと泣狂ひますので……實は夫れも一度や二度の事なれば兎も角ですが、近頃は段々病勢が募りまして、此儘捨置きましては到底圓滿な家庭どころか遂には何を爲るか知れん程危險性を帶びて參りましたから、私をお助け下さると思召して、一度御老人から能く御說諭を願ひたいと存じまして突然上りましたので、ハイ。

岩山　フーン成程……ソコデ八五郎、貴樣は何しに來た。

八五郎　俺も實は同じなんで。

岩山　ナニ貴樣も花月へ行つたのか。

八五郎　イエ花月なんかへは行きませんが、今夜用達をして矢ッ張り二時間許り後れて歸ると門口からボンボンボン〱頭ごなしに怒鳴りやがるんで、餘り遣切れませんから春木の旦那へお願へ申さうと思つて伺つて見るとモウ旦那の方でも恐縮が始まつてるんで……デ、マア出來る事ならお次手に俺の方も一番お願へ申してえと思ひまして。……何ん共相濟みません。

岩山　フーン、デワ貴樣の家內も同樣だと言ふのか。

八五郎　へー、矢ッ張り「ヂフテリー」とか言ふ此頃流行る女の病氣だと見えるんで。

（岩山は兩人の話を聞き何か思案の末二人をキッと見詰め。）

岩山　春木さん、八五郎、モソッと前へお進みなさい。イヤサ、ズント前へお進み下さい。

（兩人は岩山老人の恐しき顏色に竦む。）

岩山　御兩人に手前少々伺ひたい儀が有るがお答へ下さるかな？

春木　へー。

八五郎　へー。

岩山　然らばお尋ねするが、貴公等二人は鼻や口から萬遍なく息が通ふかな？

春木　（キヨト／＼仕ながら八五郎に向ひ小聲にて）　八五郎お前……息が通ふか？

（八五郎も突飛なる老人の問に驚き口と鼻より一二度息を通はせ見て。）

八五郎　（春木に向ひ同じく小聲にて）　萬遍なく出たり入つたりします。

春木　（岩山に向ひ）　息を爲るには別段苦しくは御座いません、ハイ。

岩山　フーン、然らば今手前の喋つて居る日本語が判るかな？

春木　日本語が？　無論判ります。

岩山　八五郎貴様は判るか？

八五郎　餘り込入つた事は何うだか知れませんが、少し位は判るだらうと思ふんで、へー。

岩山　日本語が判る……デワ南京人や米利堅人ではないのだな？　矢張り日本人だの？　然らば今一つ承りたいが、兩人共牝か牡か、イヤサ男か女かと言ふに。

春木　（漸く岩山の眞意に心付き）　イヤ是は春木殆ど恐縮致します、左様な御質問には實に御返答の言葉も御座いません。

岩山　一體全體貴公等二人は抑々何を食べて生きて居られるのか。パンやビフテキ計り食べて居るのか夫れ共日本の米を食つて居るのか。日本に生れ日本の米を食ひ日本の言葉を使ふ上はお互に日本人らしくお話を仕よう、何んの事だ馬鹿々々しい。夜中突然人に面會を求めて、何を言ふかと思へば女房が威張つて困りますから何卒お助け下さいなぞと、能くも其麼寢言が言へたものだ、兩人共恥と言ふものを知らんか。男子として恥を知らん者は我日本六十餘州には居らん筈だ。一體此頃の若い者にはイヤに癪に障る奴等が殖えて來て何かに付けて腹が立つて困る。サア今晩は丁度好い折だによつて岩山鐵之丞の申す事を骨身に染みて聞きなさい。エー何をビク／＼爲るのかッ！　申すも畏き事ながら德川家十五代御繁昌の末、世は王政復古と相成つた以來我國が歐米の文明に則

つたと言ふのは、卽ち我短を捨てゝ彼の長を取つたのに過ぎんのだ。夫れをも知らず當今の御人等は一も西洋二も西洋と、遂には歟、芝居迄唐人を眞似て黄色い聲や判らぬ臺詞を言へば入が有るなぞとは實以て沙汰の限と言はねば成らぬ。承れば西洋では男女同權とか女尊男卑とか申して女の靴迄男が結ぶさうだが、彼等は彼等で勝手にさせて置くが宜い、日本には日本の風俗習慣が有る。又我國の女の心得としては嫁しては夫、舅姑に仕へ、又老いては子に從へとも言ひ、佛法では女は三界に家なしとか、外面如菩薩內心如夜叉と言つて其邪心を戒め、識者は女子と小人は養ひ難しとも言うたではないか。サ、斯程迄立派な敎訓の有るにも拘らず、貴公等が座蒲團の樣に女房の尻に敷かれる迄西洋人を眞似たくば、樣子だけ、ハイカラでなく今少し鼻を尖らかして目の玉を靑く塗つて髮の毛を赤く染めなさい。夫れが嫌なら一應理窟を說き聞かせて、グツ〳〵申さば腕力に訴へ、夫れでも聽かずば男子の意氣地だ、一刀兩斷の下に切捨てなさい。判つたかッ!!!

（此時奥より車夫の聲にて「お歸りーツ!」と夫人かれ子の歸宅を知らせば岩山鐵之丞は急にブル〳〵ツと戰慄へ上り態度忽ち一變して座蒲團を正座に置直しキヨト〳〵立つて襖越しに奥を覗き春木に近寄り小聲にて。）

岩山　ト、とは言ふものゝだね、ガン、元來女と言ふものは、イタ、イタ、至つて氣の小さいものですから、ジユ、ジユ、充分勞はつて遣らんと可けませんよ。

（と正面の襖を押明け平蜘蛛の如く入口に平伏して待つ內肥滿せる老夫人かれ子（六十七八歲）白髮混りの丸髷姿、信玄袋を片手にヌツと入來り遠慮なく中央の席に着く。）

かれ　ハイ只今。

岩山　（平身低頭して）お歸りなさいまし。

かれ　（春木、魚屋の兩人を見て）オヤ〳〵誰だと思つたら、春木さんに八五郎かえ、珍しいお連だね、何か御用でお出でなすつたのかね?

春木　（汗を拭きながら）イヤ是は奥さんで御座いますか好い處へお歸り下さいました、春木定次郞只今穴が有つたら這入りたい處で御座いました。

かれ　オヤ〳〵甚麼事を爲すつた。

春木　實は私の家內が親の威光を肩に着まして餘り我儘を

申しますので先生に御意見を願ひに出ました處が、先生の仰有るにはお前等は日本人か、我國の教訓には女と言ふものは嫁しては夫、舅姑に仕へ老いては子に從へとも言ひ、佛法では女は三界に家なしとか外面如菩薩內心如夜叉と言ふではないか、理窟を言つて判らなければ腕力に訴へ猶判らなければ、一刀兩斷の下に切捨てゝ了へーツ！ と非常なお小言で、春木定次郎殆ど恐縮を致したのです。

岩山　イヤ春木さん、ソ、夫れでは岩山大變に迷惑を致しますよ、ソ、ソ、夫れは何かの間違で、ワタ、ワタ、私の申すのはね……。

かれ　お默んなさいッ！

岩山　へー。

かれ　八五郎お前は何仕に來たのだえ。

八五郎　實は俺の處でも嬶の奴が餘り威張るんで遣切れませんから、お次手に小言を言つて頂きてえと思つて參りましたんで……。

（かれ子老夫人は上手に竦み居る岩山をキッと見詰め。）

かれ　モシお前さん。

岩山　へー。

かれ　お前さんは二人に其麼生意氣な事を言ひましたか？

岩山　イエ、ソ、ソ、夫れはソノ……。

かれ　イーエ、言つたに違ひ有りません、妾が留守だと言ひ兼ねません。此頃少し手緩く爲ると直ぐ附上つて好い氣にお成んなさる、今日はウンと仕置を仕て上げますから待つてお出でなさい。（春木等に向ひ）お前さん達もお前達だ。昔の本や何かの事なら少しは知つて居るかも知れませんがね、其外の事を這麼判らない人に聞いたつて何んにも成りや仕ません。是は昔から至つてボンヤリ者ですが、なまじ小才の有る者より却つて安心だらうと言つて親達が貰つて吳れた案山子同樣の者で、亭主と言へば言ふやうなものゝ詰り金花糖の鯛の樣にガンガラ堂の人間ですから、判らない事が有つたら妾にお言ひなさい。夫れに春木さんだつて然うです。お前さんは奧さんのお父さんに散々お世話にお成んなすつた癖に、其恩を忘れて、今更奧さんに心配を掛けると言ふ法が有りますか。八五郎、お前もお前だ、お得意廻りを爲る間々には時々家へ歸つて食事時には御膳の支度位お仕なさい。男と言ふ者は何んぞと言ふと直に威張りたがるけれども、世の

中に女と言ふ者が有ればこそお前なんぞも生れたんだらう、生意氣なッ、サア仕置に掛るから二人ともトットとお歸んなさい！（岩山に向ひ）鐵之丞！

岩山　ヘー……。

かれ　此方をお向きッ！

（とかれ子夫人は岩山の胸倉を取る。）

岩山　ド、何卒御勘辨を……お二人さん、お助け下さい！

（と此騒動に驚き春木、八五郎の兩人は周章てゝ我先に迯出でんとする時下手奥より召使を押除けながら百世夫人、お昌兩人夜叉の如く成つて入來る。）

召使　マア其麼亂暴な事を仕ては困ります、何卒少しお待ち下さい。

百世　Oh you get out! Where is my damned Sadajiro? お退きッたら、お退きッ！

お昌　皆亭主野郎の來て居る事は知つてるんだから迎に來たんだよ。悪く止めだて仕やアがると踏殺してやるから然う思つといで。（召使を突倒して）アー居た居た、此野郎！

百世　貴郎は此處に何を仕て居るのです。

かれ　アー丁度好い處へお出でなすつた。サア皆行つてお了ひなさい。

百世　All right!

お昌　サア覺えてやがれ、出來そこない奴！

（と各々亭主をしたゝか投付ける模樣にて。）

――幕――

「昭和三年五月訂正」

アラビア古典劇『呪』（一幕）

益田太郎冠者

時　代

八世紀頃

場　所

シリア國ダマスカス宮殿

登場者

序詞役の豫言者
宮殿の主
モハメッド教々主の姫　ファティマ Fatima
侍従長の娘（侍女の一人）　ミスカー Miskah
侍女頭　ジャミラー Jamilah
侍　女　ソマイヤ Somayya
同　アミナー Aminah
同　モルヂアナ Morgiana
同　アスマ Asma
同　サフィエ Safie
同　ピルーゼ Pirouze
其他侍女、奴隷、大勢
魔　女　ダッバ Dhabba
侍　従　長　アムルー Amru
武　官　長　アブダラー Abdallah
武　官　カーレッド Khaled
其他武官、仕置人、従者、大勢

幕明くば、上手及び下手に椰子、中央に三日月と星一つを描きたる大緞帳の前に序詞役の老豫言者一人安坐す。音楽の止まるを待つて靜かに立上り。

豫言者　サラーム、サラーム。（亞剌比亞の挨拶の言葉）

（と觀客に一禮したる後。）

豫言者　今より一時の間諸人の前に描出さるゝは、千歳の昔シリアの國ダマスカスの都なるモハメッド教の教主、全亞剌比亞の司、哈利發の皇女ファティマ姫の宮殿に血汐を流す恐しい一と幕の物語ぢや、姫は己の高き位に心誇り遂には道ならぬ戀の競の紛糾より、魔神は時を得顔に其慘たらしい力を現すのぢや。此奇しき物語の一と幕に眼を注ぐ人々よ。昔も今も吾等淺ましき人間の心には様々の邪心が潜むものぞ。そして其數多き邪心の一つに

でも打負くる時は、其處が惡魔・魔神の附入つて吾等を亡ぼす處なのぢや。アー恐しきは邪の心ぞ。吾等は吾等の心もて神の愛に依賴み、諸々の試探に克たん。アラーの神より外に神なし。ロー、イラー、イル、アラー。（モハメツド教の最も重き祈の言葉）

（と天を仰ぎ禮拜する時場內の燈火を一時に消し音樂に掛る。再び點火すれば舞臺はファティマ姫の宮殿の模樣と變り奥深く夕日差込む透彫の大戶を見せ、前には廊下、二三段下りて平舞臺に水風呂を設く。舞臺の前方上手には三尺程高き玉座を置き、上に虎の皮の敷物括り枕形及び方形のクッション數個を備ふ。玉座の上手前に亞剌比亞式の卓子に陶器の德利等を飾り場內能き處に香臺數個を置く、天井より眞鍮製透彫の燈籠三四個を吊す、玉座の階段及び平舞臺此處彼處に絨氈を敷き方形のクッションを配置す。）

（平舞臺一面に大理石形の敷物を敷詰める事。建築は總て壯嚴にして凄味ある古代亞剌比亞の大宮殿と知るべし。）

（今しも大勢の侍女は平舞臺及び下手の壁より差出でたる大理石の緣杯に憩ふ內一人の侍女は薄衣を身に纏ひ水風呂の傍に立つ。）

（孔雀及び白色の鳩數羽を放ち得れば倘妙なり。）

（點火後音樂の止む迄暫時不言不動の儘畫面となる。暫くして音樂止めば水風呂の傍に立ちたる侍女は奴隸に足を拭はせ下手に入る。）

モルヂアナ　喃ピルーゼよ、其方は日頃から物識と聞くが、昨日も彼の恐しい奇蹟を何んの兆徵と思ふぞ。

ピルーゼ　さればモルヂアナよ、眞晝間に太陽は其光を失うて、時ならぬ怪しい星が四つ五つ影を現したは審判の日の近づいた兆徵でがなあらうか。今思うても恐しさに五體は震へ息も止る樣ぢや。

アスマ　イヤ〳〵ピルーゼよ、彼れは審判の日の近づいた兆徵ではあるまい。嘗或時村の長老より聞いたには、其昔教主モアウキア一世がアラーの神の豫言者モハメツドの用ひ給ひし杖と、教を說かれし演壇とをメディナの寺院より此ダマスカスに移し運ばうとした折、神の御怒に觸れて眞晝間に太陽は隱れ星影の現れたといふ事ぢや。昨日の奇蹟も必ず何かな神の御心に逆うた爲めでがなあらう。如何なる天罰の降るやら恐しい事ではないか。

サフィエ　コレ〳〵、其話なら其方等に密に語る事がある。

皆々　語る事とは何事ぢや。

サフィエ　されば妾は餘りの恐しさに堪へ兼ねて、昨日夕闇幕此宮殿を抜出いて、其方達も聞知つてゞあらう、魔女のダツバが住家の洞穴を訪れて其謂を問うて來た。

皆々　（驚きて）イエツヒ！（叫聲）

モルヂアナ　其方彼の恐しい魔女のダツバを訪れたか？

ヒルーゼ　シテ魔女は何んと言うた？

サフィエ　魔女のダツバは妾が獻物を持つて恐る／＼門に立つたを見るが早いか、妾の言葉を聞かぬ内に、其方は奇蹟の謂を問ひに來たかと言うた。

アスマ　ナニ、ダツバは其方の訪を言當てたか？

サフィエ　妾の胸の内を見え透く樣に言當てた。そして思出いても氣味の悪い彼の嗄れ聲で「時が來た、わしが洞穴から出る時が來た、宮殿の奥深く生血を流す時が來た」と言ひながら嬉しさうに微笑んだ時の恐しさ……

モルヂアナ　ナニ宮殿の奥深く生血を流す時が來た？　シテ其血汐は誰の血汐ぢや。

サフィエ　それは知らぬ。唯誰かゞ命を失ふ時が來たのぢや。

皆々　アワツハ！（叫聲）アラーの神よ、吾等を救はせ給へ！

（此時上手奥より侍女頭ジヤミラー登場す。）

ジヤミラー　其方達何を騒いでぢや。若し姫君の御耳に入れば、此頃御氣色勝れぬ折柄又御叱を受けますぞよ。ちと御嗜みなされい。

（一同默禮す、此時下手奥より侍女ソマイヤ登場しジヤミラーに向ひ一禮す。）

ジヤミラー　オー、ソマイヤよ、待兼ねました。（一同に向ひ）用事が有れば呼出しませう、暫く次の間に御控へなされい。

（一同又々敬禮して下手奥に入る。）

ジヤミラー　ソマイヤよ、カーレツド殿の在所は知れたか。

ソマイヤ　ジヤミラー殿よ、カーレツド殿の在所も、御前樣の戀の玉章を引裂かれた譯も……。

ジヤミラー　シーツ！。

ソマイヤ　御前樣の戀の玉章を引裂かれた譯も、今日といふ今日判りました。

ジヤミラー　そりや何うして判つたか？

ソマイヤ　妾は仰によりアミナーと二人で邑の隅々迄尋ね廻る内市の傍でカーレツド殿の姿を見附けました。而も

頭からヴエールを目深に被つた若き女子を見え隠れに打連れて。

ジャミラー　ナニ若き女子を？　何處へ向つておや。

ソマイヤ　邑の門の方に人目を忍んで行く様子故、アミナーに其跡を附けさせ、妾は一人先に戻りました。

ジャミラー　フーン、密に送りし妾が玉章を引裂き、姫君の初戀の御言葉にさへ耳を傾けぬのは、扨は他に心を寄する者の有りし爲めか、豫てから妾の口添に依つて武官に迄取立てられた恩義を忘れ、能うも妾に赤恥をかゝせたな。地獄の底の大カーレッドよ、此ジャミラーを唯の女子と思うてか。姫君の初戀を餌にして末は其方と妾と此國を思ふ儘にせん謀もモウ水の泡ぢや。さらば此ジャミラーを敵に廻して其報を待て。

ソマイヤ　此上の御申付を待ちます。

ジャミラー　思ふ仔細もあれば其方は急いで魔女のダッパを呼んで御座れ

ソマイヤ　ナニ、彼の魔女のダッパを？

ジャミラー　然うぢや、恐しい事をするには恐しい者の力が要る、見咎められぬ様に早う。

ソマイヤ　ハツ……。

（と躊躇ふ。）

ジャミラー　誰やら足音がする、早う／＼。……エー其方も命が惜しうないのか。

（ソマイヤは一禮して急ぎ下手に去る。）

（此時上手奥より侍從長アムルー登場す。）

アムルー　ジャミラー殿よ、姫君の出御で御座る程に、御出迎へに皆の者を急いで御呼びなされい。

ジャミラー　畏りました。

（と下手に向ひ。）

ジャミラー　姫君の出御で御座ります、急いで御出迎へなされませ。

（と是にて音樂に掛り下手より武官、侍女數名登場して居並ぶと同時に上手奥より武官、侍女、奴隷其他大勢を從へファテイマ姫登場し上手の玉座につく。）

出迎の者一同（敬禮しつゝ）サラーム。

アムルー　聰明叡智の姫君よ、御座を移させられて御心地も少しは勝れ給ひしか、一同に代り伺上げまする

（姫は五月蠅氣に面を背け答へず。）

アムルー　姫君よ、御心地は如何で御座りまするか、一同に代り伺上げまする。……聰明叡智の姫君よ、一同に代

り何上げまする、御心地は……

姫　諄い！

アムルー　ハッ！

姫　人の心地が勝れるか勝れぬかは其顔で判らうものを其方は其年で未だ知らぬのか。

アルムー　ハッ、（獨白）如何にも此顔では未だ御心地は勝れ給はぬわえ。されば何をがな御心の慰めに……オオ然うぢや。（姫に向ひ敬禮しつゝ）賢明なる姫君よ、閉されたる胸の扉を開くには酒に勝れし鍵は御座りませぬ。今日も今日とて新領土埃及國より獻上になりましたる美酒一獻、其薔薇より赤き御脣に濕させ給はゞ必ず御心も浮立つて、春の野邊に小鳥の歌を聞く如き……。

姫　エー諄い、誰が酒を飮まうと言うた。假令埃及であらうが印度であらうが妾は酒は嫌ひぢや。

アムルー　ハッ、賢明なる姫君よ、此愚なる者を赦させ給へ。

ジヤミラー　侍從長殿よ、姫君の御心勝れぬ時は却つて、御氣任せになさる方が宜しくは御座りませぬか。

アムルー　イヤ／＼それでは吾等附添人の務が足らぬと言ふものぢや。皆も智慧袋の底を拂く迄智慧を絞り出いて近頃勝れぬ姫君の御心地の癒らせらるゝ樣工風なされい。……扨彼の埃及の美酒も其甲斐がなくば……アーモウ是りや、智慧袋の底に來たか。……アッ出た、出た！智慧が出た！　姫君よ、侍女に命じ樂を奏で舞を舞はせ御覽ぜられたなら少しは御心の慰めともなりませう程に……姫君よ、侍女に樂を奏で舞を舞はせ御覽ぜられたなら……。

姫　エー勝手にせい！

アムルー　ハッ！　ジヤミラー殿よ、侍女等に命じて姫君が御氣に入りの彼の薔薇の舞を早う舞はせられい。

ジヤミラー　侍從長殿の仰畏りました。

（と一禮して下手奧に向ひ。）

ジヤミラー　薔薇の舞の御所望に御座りまする、急いで御始めなされい。

と音樂に掛れば下手奧の口より侍女數名舞ひながら登場し姫の玉座に薔薇を投掛けヴエールを持つて舞ふ。ファティマ姫は侍女の舞を見向きもせず不興の顔は煩悶となり樂の音にも堪へやらぬ面持にて侍從長に向ひ。

姫　アムルー、舞を止めさせい！

アムルー　ハツ！（舞姫に向ひ）コレ〳〵モウ舞を止めい。誰が其様に長う舞へと言つた心の利かぬ人々ぢや。サア〳〵早う次の間に下つて御座れい。

（舞姫は姫に向ひ敬禮して下手に去る。）

姫　コレ、ジヤミラー、先程其方に申付けた侍女のソマイヤとアミナー兩人は未だ戻らぬか。

ジヤミラー　姫君よ、兩人の内ソマイヤ一人戻りました。

姫　ナニ、戻つた？　シテ、カーレツドの在所は知れたか。

ジヤミラー　妾の口より言上致すも心苦しう御座りますれど、カーレツドは或若き女子を打連れて、市の傍より邑の門の方に向ひし姿を見たさうに御座りまする。

（姫は己の席より立下りつゝ。）

姫　ナニ若き女子を打連れて？　シテ其女子は誰ぢや。

ジヤミラー　ヴヱールに面を包みましたれば何者とも判りませぬ。

姫　唯判らぬと言うて其儘打捨て置いたのか。

ジヤミラー　イエ〳〵、ソマイヤは直様引返しアミナーは尚跡を附けて參りました。

姫　（獨白）カーレツドには此頃病と言うて出仕もせで、妾の心も知らぬ顔に修たらしう惱せて置きながら、何者とも知れぬ女性を伴ひ、眞晝間に人足繁き邑中を花に戯るゝ胡蝶の樣に彷徨ふとは。……（口の内にて）ウーン憎さも憎し……。

（と思はずジヤミラーと顔を見合せ。）

姫　武官長！

アブダラー　ハツ！

姫　其方は妾に何んと言譯をする。

アブダラー　姫君よ、申譯の言葉は御座りませぬ。此上は如何なる御處刑をも厭ひませぬ。

姫　ウン好い覺悟ぢや、亞剌比亞の武士たる者は左もあらう。處刑は後より申渡す程に、士卒を引連れてアミナーの跡に續け！

アブダラー　姫君の仰委細承知致しました。

（と姫に一禮して輩下に命令せんとする時下手より慌しく侍女アミナー立歸る。）

アミナー　オー、ジヤミラー殿よ、只今戻りました。

ジヤミラー　オー、アミナーよ、戻られたか。（姫に向ひ）姫君よ、侍女アミナーが戻りました。

姫　ナニ、アミナーが戻つた？（アブダラーに向ひ）コレ武官長、暫く待て。（ジヤミラーに向ひ）ジヤミラー、

其方からカーレッドの樣子を問うて見い。

ジヤミラー　畏りました（侍女アミナーに向ひ）ソマイヤから委細は聞いたが、其方カーレッド殿の行先を突止めましたか。

アミナー　カーレッド殿には何者とも知れぬ若き女子と邑の門より抜出いて、流れ緩かなバラダの河邊より小舟に打乗つて舟遊山中に御座りました。

姫　ナニ船遊山？……アムルー是へ出い。

アムルー　ハツ。

姫　其方は妾に何んと言うた、武官カーレッドは近頃病の爲めに出仕致し兼ぬると言うたではないか。

アムルー　姫君よ、仰の如く武官長の上申通り言上致しました。

姫　默れ！　其方は今アミナーの話を聞いても己に罪が無いと言ふのか。

アムルー　アー慮深き姫君よ、此老いたる者を赦させ給へ。

姫　イヽヤ赦さぬ。主に向つて誤つた報告をしたは武官長も同罪ぢや。養ひ人の顔を見て唸り、餌を與へる其手に噛付く猛獸ハイーナに等しきカーレッドを此儘打捨置いては妾の威厳に拘る、共々行て其女子諸共召捕つて参れ。

アムルー　姫君よ、此老いたる足の續く限り捜し廻り、男女諸共召捕つて吾等の罪の贖ひに姫君の御前に捧げますれば、暫くの間吾等に猶豫を與へさせ給へ。

姫　エーくど〱しい、早う行け！

（是にて侍從長、武官長其他男子一同下手に急ぎ退場す此内姫は煩悶に堪へやらぬ風情にて上手の白席に身を投げるが如く凭掛り坐す。）

ジヤミラー（アミナーに向ひ）アミナーよ、其方は其女子の顔を見なんだか。

アミナー　ジヤミラー殿よ、女子も人目を忍ぶ身とて一と際ヴエールを深う被りましたれば、其顔は見兼ねましたれど、女性の妾さへ恍惚と見惚れる程、美しい後姿の何處やらに見覺の有る樣にも思はれました。

ジヤミラー　ナニ、見覺が有る樣な……フーン……して、カーレッド殿とは睦じげに語合うて居たか。

アミナー　人目繁き邑中では物をも言はず離れ〱に行かれましたが、邑の門を出た後は妾の木影に身を隠したも知らいで、岩にせかれた流の水の又一つになる樣に互に身を寄添うて、腕組交せながらさも睦じげに語合うてバラダの河邊に向はれました。

姫　（此内姫は立上り近寄りつゝ。）ナニ、カーレッドが其女性と腕組交して睦じげに語合うて居たか。

姫　アノ睦じげに語合うて……。

（アミナーは無言の儘敬禮する。）

ジャミラー　姫君よ、幾百萬のモハメッド教徒が御名を聞いてすら跪く姫君の初戀さへ喜び受けぬのは、カーレッドの心を奪うた此女子の業で御座りまする。戀に眩む男の眼には盲目犬に投與へた麵麭も同樣に、御位の光も見えぬものと存じまする。

姫　アミナー其先を語つて聞かせい。

アミナー　畏りました、河邊に茂る森の木影に何時しか用意された小舟に先づ武官カーレッド自身打乘つて、少し恐れ躊躇うた其女子の手を取つて勞りながら引入れました。

姫　ナニ勞りながら引入れたか。……シテそれから先は？

アミナー　若き二人の戀人を乘せた小舟は波斯の國に名高きテイグリス河に浮んだ白百合の樣に、岸を離れて靜かに〳〵流れ始めました。そして何時しか舟が遙か向うの岸の木影に流着く頃に女性は爪琴を取出いて、妙なる絃の調を河水に響かせる内そよ吹く風にヴエールも取られて、さも心ありげな黒髪は傍の男の肩に掛りました。

姫　シテ其時カーレッドは……

アミナー　樂の音に醉うた樣に只恍惚として、左手を伸いて其女子を……。

姫　エーモウ聞きともない止めい！　溝の芥に等しき二人の戀物語、聞いて居るさへ耳の汚れぢや……。

（ジャミラーはアミナーを急ぎ次室へ押下げる。）

姫　妾の初戀を與へやつたカーレッドを、此兩の手から拐取つた、其女子が憎い！

ジャミラー　姫君よ、卑しき女子の間にも戀の憎しみは深きものを、まして全亞剌比亞の司、モハメッド教の教主を御父君に持たせ給ふ御身にありながら、使はれ人の男子さへ御心の儘にならで、素性も知れぬ下賤の女子に奪取られ給ふ御心の程、御悼しう存じまする

姫　フアテイマの名を恐れぬ家の子、神の教主の一門を辱めた女子が憎い！

ジャミラー　其憎い女子を召捕つて何んとなされますぞ。

姫　言ふ迄もない、命を取るのぢや。

ジャミラー　如何樣に遊ばして。

姫　如何樣でもない、唯命を取るのぢや。

ジヤミラー　是は又教主御一門の御名を汚した重罪人には餘り御寛大な御處刑と存じまする。

姫　ナニ命を取つても刑が輕いと言ふのか。

ジヤミラー　されば、人一人を殺したる罪人も、三人四人を殺したる罪人も同じ死罪を受けましては、其科の重き輕きに準ひませぬ。別けて教主の御位に眠せし者を僅兩の手の指を折數ふる間の苦しみにて命を絶えさすは、餘り御寛大な御處刑と存じまする。

姫　フーン、それも道理ぢや、さらば何の樣にして命を取らうぞ。

ジヤミラー　御心のゆく迄兩人の心を苦しめて〱、今日迄人の聞知らぬ又後の世迄も言傳へらるゝ程の手段にて、兩人が命を姫君の御前で絶たせられたなら……。

姫　兩人と言へば……カーレッドの命もか？

ジヤミラー　（獨白的に）人の厚き志を嘲つた傲慢無禮の小犬カーレッド。（姫に向ひ）勿論同罪と存じまする。

姫　フーン……シタが今日迄人の聞知らぬ、又後の世迄も言傳へらるゝ手段とは、其方何んぞ思案があるか。

ジヤミラー　別に是と申す思案も御座りませねど、斯うも有らうかと存じて、先刻侍女ソマイヤを當時此ダマスカスに泣く子も聲を密むと言はるゝ、名高き魔女のダツバの許に遣はしましたれば、程なく連參る事と存じまする。

（姫を始め居並ぶ侍女一同顏見合せて打驚く。）

姫　ナニ魔女のダツバを此宮殿に呼寄せたと言ふのか。

ジヤミラー　非常の場合には非常の手段をとるより致方御座りませぬ。ダツバなれば必ず姫君の御心に叶ふ思案も御座りませう程に、暫く御待ち下さりませ。

姫　……ウン、斯くなる上は夫れも一興ぢや。

（と自席に戻る。）

（此時下手より以前の侍女ソマイヤ急ぎ登場しジヤミラーに向ひ一禮し小聲にて慌しく。）

ソマイヤ　ジヤミラー殿よ、只今魔女のダツバを召連れました。

ジヤミラー　ナニ魔女を連れて戻られたか。夫れにしても其方は何を其樣に恐れ戰慄いてぢや。

ソマイヤ　ジヤミラー殿よ、世にダツバ程恐しい者は御座りませぬ。妾の姿を彼の女の洞穴の門口で見ると其儘、未だ何事も聞かぬ内に魔女は兩手を叩いて、「愈々時が來た、わしが洞穴から出る時が來た、宮殿の奧深く生血を

滅す時が來た」と打笑ひ、妾は恐しさの餘り其儘心を失うたに、今耳許で起きよ〳〵と呼ばれた聲に目を開けば、はや宮殿の一室に魔女は妾を抱起いて居りました。

ジヤミラー　ウーン、魔女とは能うも言うたものぢや。姫君も御待兼ねぢや、早う是へ召連れて御座れ。

ソマイヤ　ヒエーッ！　彼の恐しい魔女を姫君の御前に？

ジヤミラー　何事も承知ぢや、早う〳〵。

ソマイヤ　ハアー。

（と躊躇ふ。）

ジヤミラー　エー早う御呼びなされい。

ソマイヤ　ハッ！

（と叫びつゝ恐れ兩手にて面を掩ふ。）

姫　（半ば恐れながら）其處に來たは何者ぢや。

魔女　姫よ、わしは山のダッパぢや、宮殿から迎の來る此日を待兼ねて居た。定まる運命はわしが魔力を見せる時を與れたわい。ウヒ、、、。

ジヤミラー　（口の內にて）見るからに恐しい顏形。

魔女　ジヤミラーよ。

ジヤミラー　（打驚き小聲にて）アワッハ！　妾の名を知つて居る。

魔女　（打笑みながら）其方の目にもわしの顏形が恐しう見えるか。人は目に映るものゝ外見えぬものぢやが、わしは幾枚の綾衣を通して人の心の奧底迄も見える。（急に小聲になり）其方の衣はわしのより美しいが、包んだ心は魔女の仲間入りが出來さうぢやわい。ウヒ、、、。

姫　ダッパよ、これへ進め。

（ダッパは姫に近づく。）

姫　其方を今日山より呼寄せたも外ではないが……。

魔女　アー無駄ぢや〳〵、姫よ、人間は人の言葉を聞かねば何事も判らぬものぢやが、神通力を持つた此ダッパは、一々話を聞かいでも姫の望はモウ疾に知つて居る。人の怒には樣々あれども戀の爭に負けた者の怒は又格別ぢや。そして其處が魔女や惡魔の力の見せ處ぢや。ウヒ、、、。

姫　（小聲にて獨白）ナニ妾の望を知つて居るか。

魔女　思ふ男が心に從はぬも憎いさうぢやが、其男の心を奪うた女子は又一入憎いげな。まして姫は亞剌比亞中の女子が羨み尊む教主の姫ぢやもの、其腹立も無理はない。又其女子の顏を見れば驚と怒で姫の總身が燒爛れる樣な時が來るのぢや。

姫　ナニ、ダッバは其女子が何者かを知つて居るのか。
魔女　知つては居るが其名を明す事は時の力に任せて、わしは唯其女子の命を取つて上げう。
姫　シテ其方には何か思案があるか。
魔女　(打笑みながら) 人の生血を流さすのがわしの務ぢやもの、思案がなうて何うあらう。ウヒ、、、。人間の命を絶つに幾百通りの手段もあるが、外ならぬ姫の賴ぢや、今日は呪の人形を見せて上げうか。
姫　呪の人形とは……。
(魔女は獨り點頭きつゝ持ちたる包より一塊の粘土を取出し。)
魔女　姫よ、是を見しやい。幾萬年となく魔女から魔女に永久に傳はる印度の粘土ぢや。今わしが此粘土で人形を作りながら、わしが守神のアヒーの神に祈る程に、姫を始め宮殿の女子共は皆人形の前に跪いて、心を一つにして其憎いと思ふ女子を呪はつしやれ。そして其呪の聞屆けられた奇しき兆徴を見た後で、(懷中より怪しき短劍を取出し) 是を見しやい、此短劍で其人形の胸を突けば、假令呪はれた女子が幾千萬里離れて居ようと、其人形と同じ處の傷口から、止め度なく生血は流れて見る〳〵命は絶えるのぢや。
姫　(獨白) 世には恐しい手段もあるものぢや、(ダッバに向ひ) コレ、ダッバよ、其アヒーとやら言ふ神は必ず呪を聞屆け給ふか。
魔女　神に向つて疑は持たぬものぢや。別けてアヒーの神は人の生血を好み給ふ印度におはす恐しい蛇體の神ぢや程に、人の命を絶つ呪は必ず聞屆けられう。
ジヤミラー　ダッバよ、其呪はれた女子は命も絶たれうが、男の命は何んとするのぢや。
(ダッバは暫しジヤミラーの顏を見詰め氣味惡き嘲の笑を浮べつゝ。)
魔女　ウフ、、、、其方が問ふのも無理はないが、それ程迄に男が憎いか、何事も運命は定まつてある、安心してわしに任さつしやれ。
姫　さらば時移らぬ内に早う其恐しい人形を作つて與りやれ。吾等も共々呪はう程に。
魔女　アー愈々時が來た。此ダマスカスの宮殿の奥深く人の生血を流す時が來た。さらば姫始め宮殿の女子共よ。人形の前に跪いて呪はつしやれ。アー、アヒーの神に人の命を捧る時が來た。ウヒ、、、。

（と是にて凄味の音樂に掛り魔女は香臺の上に人形を作始める、前には姫を中心に左右に侍女一同弓形に後向に居並び呪に掛れば宮殿の燈火は漸次に其光を失ひ正面透彫の大戸より蒼白き月光差込む。）

魔女　アヒー、アヒー、アヒーの神よ！

皆々　アヒー、アヒー、アヒーの神よ！

魔女　印度の國はヒマラヤ山の幾千丈深き谷間の洞に祭り奉る我守神アヒーの神よ！

皆々　アヒー、アヒー、アヒーの神よ！

魔女　雲を己の車となし風の翼に乘り歩き雷を使者となし焔の出づる火を僕となし給ふ萬能の神アヒーよ！

皆々　アヒー、アヒー、アヒーの神よ！

魔女　汝は大能の御腕を持ち給ふ。汝の手は強く、汝の右の手は高し。願はくは吾等が祈を御前に至らせ汝の耳を吾等が號呼の聲に傾け給へ。

皆々　アヒー、アヒー、アヒーの神よ！

魔女　今われ汝の御前に此人形を作り吾等の憎しみのかゝりし者に擬へ其胸元を突かん。願はくは其者の命を立所に絕つて吾等をして其胸元より泉の如く湧出づる生血を汝の獻物と爲さしめ給へ。

皆々　バラキルデー。（亞剌比亞語にて賛成の意味）

魔女　汝吾等が懇求の聲を聞き給へば吾等心を盡して汝を讃稱へ、牛、馬、羊、山羊を屠りて其生血と臟腑・脂、二個の腎と其肝を祭壇に供へまつらん。

皆々　バラキルデー。

魔女　アヒーは大いなり、奇しき作爲をなし給ふ。諸々の神に勝りて恐るべきものなり。

皆々　バラキルデー。

魔女　アヒーよ、汝の御前に跪き汝に依頼める吾等の祈を聞き給へ。

魔女
皆々 ｝アヒー、アヒー、アヒーの神よ！

（と一同にて呪ふ内音樂を段々と強め且つ月光の射したる儘中途より漸次に強く雷鳴を聞かす、呪の終に當り突然人形の下より妖火燃上り同時に宮殿の燈火元に復し雷鳴音樂共に止む、姫及び侍女々は恐しさに耳を掩うて床に打伏す。）

魔女　アー兆徵があつた、呪が聞屆けられた兆徵があつた。アヒーの神を讃めまつれ！

（姫は立上りながら。）

姫　ナー、今人形の下より燃上つた妖火に吾等が顔を閑國けられた兆徴ぢやと言ふのか。

（一同静かに立上り元の位置に復す。）

魔女　姫よ、喜はつしやれ、此ダツパの守神は惠深い神ぢや。彼の焔の燒えたからは姫の願が聞屆けられたのぢや。人の生血を捧ぐる時の來たのはわしも心嬉しい。ウヒ、、、、。

（と懷中より以前の短劍を取出し姫に渡しながら。）

魔女　サア是ぢや・是で思を晴らさつしやれ。そして恐しい魔神の力を見しやい。

姫　今此刃で人形の胸を突けば呪はれた女子の命は必ず絶えると言ふのか？

魔女　モウ人形は呪うてある、誰が突かうと貴き功力に相違はない。

姫　さらば魔神の力を借りて妾が一と突きに……。

魔女　（姫を押止め）アーイヤ〳〵待たつしやれ、姫が怨を晴らすには未だ此ダツパが敎へる事がある。

（と姫に近づき何やらん小聲にて話す、姫は凄き笑を浮べつゝ。）

姫　フーン、流石に魔女は恐しい智慧を出すものぢや。さらば暫時待たう。

魔女　待つには及ばぬ、今二人共宮殿の入口迄捕はれて來た。

姫　ナニ捕はれて來た？

（一同顏見合せて打驚く。）

魔女　皆には見えぬか？　アー人間は淺ましいものぢや。ウフ、、、。

（此時下手入口より侍從長アムルー及び武官長アブダラー慌しく登場す。）

アムルー　（姫に敬禮しながら）姫君よ！　此老の足の暇取れし事を赦させ給へ。

アブダラー　（同じく敬禮して）姫君の御言葉に依り武官カーレツドと怪しき女性一人召捕つて戻りました。

（姫とジヤミラーは顏を見合せてニツタリと打笑む。）

ジヤミラー　姫君は御待兼ねで御座りますす程に、急いで御前に御召出しなさりませ。

（と侍從長は一二歩下り控へる內武官長は下手に向ひ片手を上げて合圖すれば武官カーレツド及びヴエールを目深に被りたる女性は大勢の士卒に取圍まれ靜かに登場す。）

（此内姫は元の座に復し魔女ダツバは玉座の上手に蹲る。）

アムルー　姫君よ！　兩人共召連れました。

姫　カーレッツド、前へ出い。

（カーレッツドは堅き決心の面持にて二三歩前へ進み姫に向ひ敬禮しつゝ。）

カーレッツド　サラーム。

姫　カーレッツド、其方は近頃病に罹り出仕もならで引籠り居ると武官長より屆出でたが、其病は何うぢや？

カーレッツド　姫君よ、未だ何故か心地勝れず勤さへ怠り勝ちに過せし罪を赦し給へ。

姫　默れカーレッツド、勤さへ怠り勝ちの重き病の者が何とて邑を拔出いて、何者とも知れぬ女性を引連れバラダの河に棹す事が出來ようぞ。臣の身として主を欺くは重き罪たる事を知らぬのかッ！

カーレッツド　姫君よ！　我が不束の爲めに尊き御身の御氣色を損ねたる事を赦し給へ。

ジャミラー　カーレッツド殿よ、左程姫君の御怒を恐れ給はば何とて一日も早う出仕召されぬぞ、勤より彼のヴェール着た女子の戀が大切ぢやと思うてか。

（カーレッツドはジャミラーの顏をヂッと見詰め。）

カーレッツド　ジャミラー殿よ、人々の物言はぬを幸に濫合さらの差出口は御控へなされい。近頃宮殿に足を入れぬも譯あつての事、又晴れやらぬ我心を慰めうとバラダの河に棹したも覺悟あつての事ぢや。亞剌比亞の武士たる者は何人の御諚たり共邪な事には從ひませぬ。

姫　エー無用の諍止めい。主の妾を欺き置いて覺悟あつての事とは何んたる無禮ぢや。覺悟あらば猶面白い。追つて處刑を申附くる程に控へて居い。（侍從長に向ひ）アムルー、此貴き宮殿に入り、妾の面前をも恐れずヴェールも脫らぬ其處な賤しき女子は何者ぢや。掩ひし衣を取去つて妾の前に引出せ！

アムルー　姫君の御諚畏りました。

（と女性に近づき。）

アムルー　ヤイコレ賤の女、此處を何處と思うておぢや。亞剌比亞國に隱れないファテイマ姫樣の御前ぢや。被りしヴェールを脫つて跪け。

（女性は無言の儘頭を振る。）

アムルー　ナニ脫らぬと言ふのか。

カーレッツド　アムルー殿よ、其女子のヴェールだけは……

アムルー　エー默らつしやれ、假令何事が有らうとも、姬君の御前にヴエールを被りし儘打捨て置く事はならぬ。ヤイ女、如何に賤しき身とて高貴の御方に對する禮儀を心得ぬか。サア早う脫れ。其ヴエールを脫れ！

カーレツド　アムルー殿よ、其女子のヴエールを脫つては……。

アムルー　エー血迷うたかカーレツド。控へて御座れ。

（魔女のダツバは獨り密に打笑ふ。）

アムルー　武官長、早うヴエールを脫らつしやれ。

アブダラー　ハツ！　やい女、サア、ヴエールを脫れ。エー脫らぬかツ！

（と力に任せて奪取ればアムルーは女性の顏を見て。）

アムルー　アワツハ！　是りやわしが娘のミスカーぢや！

皆々　ミスカー殿か?!

（と一同愕然として色を失へばミスカーは面を上げ得ず兩手にて顏を掩ふ、魔女は皆々を指差して嘲り笑ふ）

（姬はミスカーを見て恐しき忿怒の色を現し。）

姬　（獨白）妾生落ちて此年迄戀てふものを知らなんだに、一と度カーレツドが亞剌比亞武士の雄々しき姿を見て後は、我身の位も打忘れて慕うたに、主としては欺かれ女子としては拭へぬ恥を受けたるのも、惡魔の娘、汝の子ミスカーの仕業か……ウーン憎き犬奴！

（と口惜しげにミスカーを見詰めつゝ纏ひし飾衣を引裂く。）

ジヤミラー　姬君よ、今日ミスカーが亡き母の墓詣うでに一日の御暇を願出でしを疑ひもせで、妾の口より姬君を欺き奉りし重き罪を赦し給へ。（ミスカーに向ひ）ミスカー殿よ、其方の母御の亡體は何時バラダの河邊に葬られた。墓詣うでするに若き男と小舟に棹すは此亞剌比亞の習慣か。姬君が御心を寄せられたカーレツド殿を惑はすのみか、僞り事をもて主君を欺き奉るとは神の御罰も恐しうは思はぬのか。

（ミスカーは始終無言の儘振震へる。）

カーレツド　イヤ、ジヤミラー殿よ、此ミスカー殿が主君を欺き奉つたも皆此身の罪ぢや程に、言ふ事のあらば何んなりとも此カーレツドに言はつしやれ。其代り又其方の事も高聲揚げて言上の後潔く罪を受けう。

姬　控へいカーレツド、罪人の身を以て差出口をこがましい、物言はずと控へて居れ。（アムルーに向ひ）アムルー！

アムルー　ハツ！（と戰慄きながら二三歩進む。）

姫　汝老耄はしたりとも事の善惡は未だ判らう。カーレッドよりの僞りの報告と言ひ、現在の娘ミスカーが此大罪は何事ぢや！

アムルー（王座の前に跪き）アー惠深き姫君よ、尊き姫に仕へまつる身をも打忘れ、主君を欺き親を詐りし罪の子ミスカーに寛大の御心を垂れ給へ。

（と共に打伏して憐みを乞ふ。）

姫　默れアムルー、ミスカーがカーレッドに心を寄せしは今日起りし事にても有ろまい。さるを親の身として知らぬ顏に打捨て置いたは定めし汝もミスカーと心を一つにして、カーレッドを婿料にせう底意有つての事であらう。能うも〲兩人共妾の戀を妨げ居つたな。

アムルー　アー、アラーの神も照覽あれ、姫君の御心の程も又忌はしい娘が胸の秘事も聞知りしは今が始めて……

姫　エー赤兒さへ詐られぬ老の言譯モウ聞きともない。親子共命は無いぞ！

アムルー　アワツハ！　姫君の御怒は道理なれども、アラーの神の爲めに憎き者に惠を與へ、此老いたる僕の血汐を以て我が獨り子の末若き血汐に代へさせ給へ。憐愍と恩惠に滿つる姫君よ、傾ける日影の如く萎れたる草の如き此憐れなる老が最後の懇求の聲を聞き給へ。幾百萬の教徒は永久に御名を崇め奉らん。

姫　エー病犬の呻き聲聞くも穢らはしい！　踠き騷がず神妙に神の御罰を待て！

アムルー　アー神よ！　我が愛し子の命を救ひ給へ。

（と泣伏す。）

（ミスカーは父の傍に駈寄り。）

ミスカー　父君よ、人の子の務をも打忘れ齡さへ限られたる父君に此歎を與へし身の科を赦し給へ。今日の當り神罰の天降る時此罪深き妾に憎しみの御言葉さへ掛けられいで、老の血汐を姫に捧げて迄も此身を庇ひ給ふとは、如何に御親の情ぢやとて勿體なうて涙の外は言葉も出ぬ。

（と父に縋り泣伏す。）

ミスカー　姫君よ、數多き科人を造りしも皆此身の心一つから出でたる業、別けてカーレッドが務を怠り又姫君の御心に逆うたも此ミスカーが賴を容れたればこそ。されば唯一人の罪人ミスカーに御心のゆく迄重き處刑を與へ

給ひて、罪なきカーレツドと老いたる父を赦させ給へ。

姫　エー兩人の喚き聲醜しい。武官長、アムルー親子を召捕れい！

アブダラー　ハツ！

（と武官長を始め數人の從者は親子の兩手を取り引分けて少しく下らせる。）

姫　カーレツド是へ進め！

カーレツド　ハア！

（と一禮して玉座に近付けば姫は魔女より受取りし以前の短劍をカーレツドに渡しながら。）

姫　カーレツド、其方が處刑の一つとして申渡す、サア此短劍にて妾が憎しみの掛りし者の胸元を突け！

カーレツド　ナニ此短劍にてミスカーの胸元を……。

姫　イヤ、ミスカーを突けとは言はぬ、其處に立てたる人形の胸を突け。

カーレツド　此人形の……

姫　其人形こそ此處に控うる名高き魔女のダツバが設備へた恐しい呪の人形ぢや。今其短劍にて胸元を突けばミスカーの胸よりも紅の血汐は止度なく迸出で、立所に息の根は止まり呼べど答へぬ冷やかな軀となるのぢや。

カーレツド　アワツハ！　彼の恐しい魔女ダツバが呪の人形か。

（と驚き二三歩蹣跚き下る。）

アムルー　オー萬能の神アラーよ、迫り來る恐しき死の手より我娘を救ひ給へ。

（と捕はれたる儘天を仰ぎ號泣す。）

ジヤミラー　カーレツド殿よ、其方が自身の手にて戀人の命を絶つも樣々の怨の報い來たのであらう、早う突かつしやれ。呪の力を見よう程に。

カーレツド　假令如何なる重き處刑を受けうとも、何とて斯く慘たらしい手段にて心迄誓ひし戀人の命が絶たれうぞ。百萬の敵も恐れぬカーレツドも、我を慕ふ弱き女子に刃を立てる力は無い。

ジヤミラー　亞剌比亞武士の口から聞きともない其戲言、姫君の上意ぢや。早う其人形を御突きなされい！

カーレツド　……ウーン。

（姫は急に玉座より下りてツカ〳〵とカーレツドの傍に進み。）

姫　ヤイ、カーレツド、是程言ふに突かぬのは、其方や妾の命に逆ひ謀叛人の汚名を着たいか、神の聖名を汚す邪

宗の者と呼ばれたいか。

皆々　（小聲にて）邪宗！

（カーレッドは姫に一歩々々詰寄られながら。）

カーレッド　（空を見詰め口の内にて）謀叛人……邪宗…

姫　エー主の命に從はぬはモハメッド教の掟かッ！

（カーレッドは思はず短劍を取落し姫の御前に跪きて天を仰ぎ。）

カーレッド　貴きアラーの神よ、吾を赦し給へ！

（姫は無言の儘武官長に命じ短劍を取上げさせカーレッドの手を取つて引起しつゝ再び渡しながら。）

姫　サア早う突け！　其代り若し其方が潔う突いたなら、其方の命は助けう程に。

ミスカー　ナニ、カーレッドが妾を殺さば彼の命を助け給ふか。（天を仰ぎ）アー神よ、妾心を盡して神の豫言者モハメッドを讃め稱へまつる。（カーレッドに向ひ）カーレッドよ、妾の命の無き事は固より覺悟はして居たれど、賤しき奴隷の仕置人に命じ給はで其方の手にて命を絶たせ給ふとは、主の恩惠、神の愛と言ふものぢや。死んで行く女子の身には戀慕ふ男の刃に掛る程嬉しいものはない、人形ならぬ此妾の胸を刺して其方に捧げた血汐の色を見て喜りやれ。

アムルー　エー、ミスカーよ、其方は戀に心も狂うたか。何故にカーレッドを思切つて命乞をして給らぬ。連添ふ妻を失うて未だ涙さへ乾かぬ此老いたる父を苦しめても、已が戀の生贄にならうと言ふのか。

ミスカー　アー父君よ、此罪の子ミスカーを赦し給へ。道理の力さへ勝てぬのが戀の習ぢや。戀せぬ者の眼から見れば物狂はしうも見えようが妾も若き女子ぢや程に戀の競に勝たして給れ。

姫　エー物騷がしい、控へい！　コレ、ミスカー、神にも等しき妾に對して戀の競とは何んたる暴言ぢや。戀の競に勝てるか勝てぬか今目の當り見せう程に、無禮人の暴言はいで控へて居い。（カーレッドに向ひ語りつゝ一歩一歩と玉座に近く引寄せながら）喃カーレッドよ、其方も亞剌比亞の武士ぢや程に、勝戰の譽に引換へて負戰の恥たる事も知つてゞあらう、女子の身として戀の競に打負くる程の恥はない。ファテイマの位さへ忘れて斯程に慕ふ主たる妾に負戰の恥を與ふる氣か。喃カーレッドよ。見るさへ凛々しい亞剌比亞武士のカーレッドよ。アラーの神の御前に誓ひミスカーを見捨てゝ妾に勝戰の譽を與

へい。（誘惑氣に）さすれば其方は言ふ迄もない、仕儀に因つては……ミスカーの命も助けて與れう程に、サア何んとぢやカーレッドよ、我モハメッド教主が他宗に向つて貴きコーランの經文と恐しき劍とを選ばせる樣に妾も其方に戀と劍を選ばすのぢや。戀を取るか、劍を取るか。其方が心一つでミスカーが生死も定まる場合ぢや。

ミスカー　ナニ姬君の御心に從へば妾が命を……イヤ〳〵イヤ、カーレッドよ、假令姬君の仰なり共それ計りは赦して給れ。それ計りは赦して給れ、戀の空虛となつて生けうより其方が情の刃に死にたい。

姬　エー吠えるなミスカー、口を鎖いて勝負を見い！

ミスカー　アー神よ！　カーレッドの心を迷より救出し給へ。

姬　喃カーレッドよ、斯く迄其方を慕ふ妾が憎いか、位も忘れ名も忘れて其方が足元に初戀を捧げた此身を愛しとは思はぬか。此腕を見よ。未だ肉落ちたとも見えまい。此胸を見よ。骨現るゝとも見えまい。此腕も此胸も皆其方の物ぢや。

（とカーレッドを玉座の段に引寄せ。）

姬　何んとぢやカーレッドよ、其方も知つての通り父君教主には御代を繼ぐ可き皇子がない。それ故其方が若し一言誓うて與れたなら、妾は必ず其方が頭の上にモハメッド教の教主、國の司の冠を置いて見せう。

ミスカー　アー、カーレッド！

（と思はずカーレッドに駈寄らんとするを傍の武官兩人捉へ、腕を持つて。）

武官兩人　エー御控へなされい！

（と強く引戾す。）

ミスカー　アイタヽヽ、カーレッドよ、そりや皆惑ぢや。よもや其方は教主の冠と二人が戀を秤に掛ける程つれない心ではあるまい。山程の寶も輝く譽も人の力で得られうが、二人が貴い戀はモウ二度とは來ぬ。カーレッドよ、早う此儘殺して給れ。妾とても主の御怒、親の歎を覺悟して命捨てゝ迄もと其方が前に身も心も投出いた女子ぢやないか。其方が妾の耳許に囁いた彼の約束事は皆僞か。身動きもならぬ樣された儘其方が惑はされるのを見ては居られぬ。アーいつそ此物見ゆる眼が憎い、聞ゆる耳が怨めしい。カーレッドよ！　カーレッドよ！早う殺して！……早う殺して！

（と兩手を捉はれし儘泣叫ぶ。）

姬　カーレッドよ、心狂はしい者の戯言に耳を貸さいで妾が言葉を能う聞きやれ。其方も教主の御位の力は知つてであらう。海邊の砂よりも數多きモハメッド教徒は其御名を聞いてさへ大地に平伏すのぢや。北は遠きオクサスの流、南はペルシアの波打ち際、東は印度の境より西はモロッコの果迄も、三日月の旗印が靡く處は皆其方の物となるのぢや。何んと合點がいたか。

ミスカー（益々狂氣の如く）アー神よ！　此試探より彼を救出し給へ！　カーレッドよ、妾が両の眼から滲み出る此血汐の色が其方には見えぬのか。女子の胸に一度より湧かぬ情の心を蹂躙つても其方は譽が欲しいのか。妾に命を與へ置いて生きながら其方を呪ふ怨の鬼にせうとするのか。エー躊躇はいで何故物言はぬのぢや。カーレッドよ！　生かすが戀か！　殺すが戀か！　其方を慕ふ此ミスカーの最後の聲を聞いて呉りやれ！

カーレッド（夢心地にて）生かすが戀か……殺すが戀か。

（急にミスカーを見返り決心して短劍を姬の手に殘せし儘立上り。）

カーレッド　姬君よ！　神の御前に僞言を言はぬモハメッド教徒たる此カーレッドの一言を聞給へ。一つより持たぬ情の心をミスカーに與へし戀の梁に等しき此胸には、幾千萬の姬君が御言葉も池に投げし礫程の響きさへ御座りませぬ。

姬　ナニ斯程迄情を込めし妾が言葉も、其方にとつては池中に投ぜし礫の響にも及ばぬと言ふのか。

カーレッド　御心に添ひ奉らぬ此身の罪を赦させ給へ。

ミスカー　アー神よ！　妾永久に神を讃め稱へまつる。カーレッドよ、妾は嬉しい、嬉しい、其方は矢ッ張り妾のものぢや！　アハ、、、、！

姬　……（突然立上り）天が下妾の心の儘ならぬものなきに、さりとては憎き犬奴等……ウーン……カーレッド！主の妾が今改めて其方に命ずる。此短劍にて人形を突きミスカーの息の根を止めい。其方には又重き科の處刑として、戀に戰慄くミスカーの手先を人知れず握緊めた、其穢れし腕を切落いてやらう程に、汝に焦がるゝ戀人の跡を追へッ！

ミスカー　ナニ、カーレッドの命をも……アー姬君よ、妾の命さへ絶たばカーレッドの罪を赦し給ふと宣うたに。

姬　默れ、呪はれたる雌犬奴！　其方やモハメッド教徒の身にありながら、聖書「コーラン」の貴き教を知らぬの

か。人、人の物を盗みし時其腕を絶つべしとは神の御言葉ぢや。即ちカーレッドは主の妾を欺く上に再び歸らぬ妾の初戀を盗みし罪人ぢや。腕を絶たれて命を捨つるは神の御罰、國の掟ぢや！

ミスカー　（絶望の思入れにて）アー！

姫　武官長！　此短劍にてカーレッドに人形を突かせ、宮殿の床に血汐の流るゝ時侍女に命じて死の舞を舞はせい。

アブダラー　ハア。

（と姫は玉座より短劍を武官長に渡す、武官長はカーレッドに近寄り短劍を突付け。）

アブダラー　姫君の上意ぢや、サア早う突け！

カーレッド　……

ミスカー　アー惨たらしい呪の死の手に二人が命は捕はれたか！

姫　エー皆の者、カーレッドの手を捉へて早う其人形を突かせい！

（と姫の言葉に他の武官等はカーレッドに近寄り無理に短劍を持たせつゝ。）

武官一同　サア突け！

（と一歩々々人形に近く引寄すれば並居る侍女等は思はず兩手にて顏を掩ふ。）

カーレッド　忌はしい邪神の力を借りて我戀人の命を絶てとは。

ミスカー　イ、ヤ命を捨つるは豫ての覺悟ぢや。今更躊躇ふ事はない。事定まる上は一と思に突刺して、妾が笑うて死ぬるを見て給れ。戀する者は死は恐れぬ！

姫　エー待遠な、早う突かせい！

武官一同　ハア！

（と再びカーレッドを引寄せ短劍の刃先殆ど人形の胸に觸れんとする時。）

カーレッド　神よ！　赦し給へ！

（と滿身の力を籠めて武官等を押除け姫を突かんとすれば姫は身を交しカーレッドの腕を握り。）

姫　こりやカーレッド、其方や妾を突く氣か！　能うも妾に刃向うたな、サア此五體に刃が刺されるものなら刺して見い。抑も妾を何人と心得てぢや。此フアテイマの血管には全智萬能の神アラーの豫言者、教祖モハメッドの貴き血汐が流れて居るのぢや！

（皆々跪き姫に兩手を伸べて。）

皆々　アラーの神より外に神なし、ロー、イラー、イル、アラー。

姫　苟且にも教主の一門に刃を向けし悪逆無道の邪宗の犬奴……ウーン下り居れツ。

（とカーレッドの腕を突放せばモハメッドの御名に立竦みたるカーレッドは思はず後方に蹣跚くはずみに持ちたる刃の切先は人形の胸先に刺さる。）

（今しも頭を項垂れ居たるミスカーは急に面を上げ。）

ミスカー　アーツ！

（と一と聲叫ぶと同時に胸元より紅の血汐滲出し。）

ミスカー　（口の内にて）カーレッドよ！……カーレッドよ！……

（と呼續けつゝ遂に落命す、姫始め一同は恐しき魔神の力に打驚き茫然としてミスカーを見詰むる内カーレッドは姫の面に浮べる會心の笑に心付き怨の形相恐しく人形より短劍を抜くよと見えしが飛鳥の如く姫に近寄り唯一と突きに刺通し返す刃にて自刃する。）

（最前より喜ばしげに打笑み居たる魔女は兩手を叩き小躍りしつゝ。）

魔女　アヒーよ！……アヒーよ！　血汐が流れた！　イヒ……イヒ……イヒ、、、、。

（と飛廻る。）

（此時音樂に掛り上手及び下手奥より黒衣を被りたる侍女數名靜かに死の舞を舞ひつゝ登場す。）

（宮殿の燈火は再び次第に光を失ひ遠雷頻に聞ゆ。）

——幕——

目黒巷談（四幕九場）

廣津柳浪

序幕

其一　松葉屋新座敷開の場

目黒の不動前の茶屋松葉屋の庭内に新築の離座敷落成につき、今日牡丹の開園をかねて座敷開をなす事となりたり。

舞臺の上手前に、小座敷二間續の離座敷あり、其裏手より下手へ掛け、一面の牡丹の花壇、座敷の傍ら及び下手に茅出しの楓、檜葉等をあしらひ、其外風情ある庭の趣致なり。

離座敷の前少し下手に、赤の毛氈を掛けたる床几一つを置きあり。床几には八字髯黒紋付の紳士大村既に酒に酔たる體、柳橋の藝者千代治と二人腰を掛けて居り、花壇の前には、洋装（書甲）と袴着（書乙）の書生二人、商人體の男（甲、乙）二人、何れも牡丹を觀て居り、下手楓の木の下には、茶屋の女中お梅・お竹佇んで居る。此體にて幕開く。

千代　何時來たッて、此處の庭を見ると清々しますわ。加之に好い離家は出來たし、本當に一日遊んで居たいわねえ。

大村　遊んで居たいなら、此儘居る事にしても可い。

千代　だッて、今日は不可いわ。嶋本さんと小東さんを大崎屋に待たしといて、貴方と私と、此處に御神輿を据ゑちやア悪いわ。

大村　なに悪い事があるものか。向は向で、邪魔を拂つた氣で居るかも知れないさ。寧そ此處で遊んで行くか。

千代　私いやよ。其様義理の悪い事をするのは。

大村　お前は義理が悪いなら、勝手に大崎屋へ歸るとするさ。乃公は一人でだッて、後に殘りたい位なもんだ。

千代　おやッ。怪しいわ。一人で殘りたいんですッて。

（千代治は大村が醉眼を据ゑて、頻りに下手を見て居るので。）

千代　まア、貴方何したッて云ふのよ。其様に彼方ばかし見てえてさ。

大村　えッ、なアに、お前の嫌ッた事ぢやアない。

千代　今日は何だか怪しいわねえ、大村さん何かなさりやアしなくッて。

（大村は返事もしないで何ほ下手な凝視めて居る。千代治は幸と其と覺つて。）

千代　あらッ、解ッてよ。おほゝゝゝ。

大村　何だ、吃驚するぢやアないか。突如に大きな聲なんぞをして。

千代　だッて、可笑しいんですもの。

大村　何が可笑しい。

千代　何がッて。おほゝゝゝ。貴方は何だよ。乾度此家のお妻さんを待つてるんだよ、もう來るか〱ッてんで。ね、御手の筋でせう。

大村　はゝは、殘念ながら、其お手の筋なるものかね。

千代　まア呆れた。だけども、無理もないわ。柳橋にお居での時から、柳橋小町ッて云はれたお妻さんだもの。

書甲　目黒に歸つては、目黒小町なるものかね。

（牡丹を觀て居た書生が、何日か大村等の傍近くに來て居て、出抜に斯う云つたので、千代治はいけすかないと云つた風で横を向きながら、大村を促し。）

千代　貴方やア、さアお立ちなさいッてば。

（書生乙は大村へ向ひ。）

書乙　おい先生、君の艶福羨むべしですな。美人を擁して牡丹を觀る、人生の歡樂極まれりだ。

（大村が書生の相手になつて口を出さうとするのを、千代治は無理に引立て、床几を放れる。書生甲千代治へ近付きながら。）

書甲　おい君、美人の君、名を知らんから、僕は美人の君と呼ぶんだ。おい、美人の君。

（千代治は大村を小脇に取りながら。）

千代　姉さん、烏渡。

（女中のお梅千代治の傍に來る。）

お梅　お呼びなさいまして。

千代　お妻さんに宜敷ッてね、此次には緩々お邪魔に來ますッてね、頼みましたよ。

お梅　まア御宜敷いぢやありませんか。

千代　今日は連を待たして居るんですから。

（千代治は帳場と女中とへの祝儀の紙包をお梅に與へて。）

千代　ぽつちりよ。

お梅　姐さん、どうも濟みません。旦那、難有う御座ます。
(お梅はお竹を呼び、とも〳〵禮を云ふ。千代治は大村を引立て〳〵上手に裏門のある心にて退場。書生甲乙ドッカリと床几へ腰を卸し、顔を見合せ。)
書甲　熊野、我黨は詰らんなア。
書乙　然り、實に詰らん〳〵。今朝から下宿を出たのに、もう何時だと思ふ。去年の無錢旅行の時より辛い位だ。
書甲　同感々々、餘り眼の方を優待したもんだから、腹の蟲が大きに不平を訴へて、喉元まで突貫して來たよ。
書乙　代りに眼の玉が退却だ、あゝ詰らん。
書甲　何處か安値な兵站部はないかなあ。
書乙　兎ても無いな。
書甲　婆艦隊ぢやないが後へも前へも行かれないよ　是りやあ。
書乙　何家かで中立違反をしちやあ呉れんかなあ。
(共に思案投首の體。)
(前程より牡丹を見居たる商人甲乙、此時座敷の後より出來り、牡丹を賞めながら、書生の前に來掛り。)
商甲　喜八さん、表座敷の方で、一杯遣りますかね。
商乙　其事〳〵。ぐつとよしだの二階、ではない姉さん、彼方に空いて居る座敷があるかね。
お竹　へい、お二方だけなら、何うにか都合を致しませう。
商甲　そいつは難有い。
商乙　諸事姉さんに限りやす、樣子がよくつて親切で。
お竹　どうもうまいお口ですこと。
商乙　ヘン是でちら〳〵殺しやす。
商甲　襟の亂をポツ〳〵と。
商乙　兎角汚ない方に持ち廻りたがるやつさ。
商甲　代りに姉さんが綺麗な方に連れて行きます。
(お竹案內して商人甲乙下手へ退場。書生吉田、熊野商人等を見送つて、あゝと歎息する。)
(下手より上品なる白髮の老人、何れも孫らしい十六七歲の束髮袴着の女學生と、七八歲の海軍服の男の子とを連れて登場。)
(書生二人は女學生を見て生返つた樣に目を睜つて見て居る。)
(女學生と男の子とは、早くも牡丹の花壇を見付けて。)
男子　姉さん御覽よ、綺麗だね。

女生　さうねえ、御祖父さん、彼所へ行つて見ても可くツて。
老人　可いとも。
（女學生と男の子は手を惹合ひ花壇の方へ急いで行く同時に書生は床几を放れる。お梅、老人に向ひ。）
お梅　入らツしやいまし、お掛けなさいまし。
老人　あの奥の、不動樣の御山の見える座敷が、空いて居ようかの――。
お梅　はい、丁度空いたとこで御座います。
老人　さうかい。それは難有い。食事を爲たいでな、何か見計らつて持つて來る樣にな。
お梅　畏りました。御案内を致しませう。
（老人の一連はお梅の案内にて、牡丹を見ながら離座敷の裏から退場。書生甲乙も囁きながら後を追うて退場。）
（請負師間大五郎、三十四五歲。醫者塚本賢亮、四十歲前後（鼻下に髯あり）松葉屋のお妻、三十歲前後、何れも好の打扮にて下手より登場。）
大五　おゝ、庭の手入も悉皆出來上つたね。
お妻　今朝まで掛つて、何にか斯うにか、間に合つたんで御在ますよ。
大五　まア何にしても目出度いや。
お妻　それと云ふのも、旦那始め、皆樣の御蔭で御在ますわ。
賢亮　おゝ、花壇が大層見事だ。間の大將、何です、あの牡丹は。
大五　牡丹は後廻しツて事にして、先づ新座敷に落着きやすかね。
賢亮　大きに、それがようがせう。
お妻　旦那、何卒此方に。先生、さア上つて頂戴。
（お妻は大五郎と賢亮を、離座敷の上手の間に案内し座蒲團なぞ進めて、自分はまた下におり。）
お妻　まア一人も居ないんだよ、お梅もお竹も何處へ行ツてるんだらうねえ……旦那、鳥渡御免被りますよ、御煙草盆を持つて參りますから。
賢亮　おツと待つたり。莨盆なら、其床几の上ので結構。
お妻　お火が無いと不可ませんから。
賢亮　おつと、火がない生活ぢや助からないが、慥かにあるみの鼻眼鏡横目でちらと、にらんで置いた。
お妻　よう〳〵強藥の二つ彈丸。

賢亮　なにさ、是が新發明の機關砲式だ。
大五　そんなダースものはきかんはうがいゝね。
賢亮　よッ大將、頗る斬新とおいでなすつた、隅にやあ置けない。
大五　アハヽヽ、おやあ眞中へ出て赤旗でも振るかね。
お妻　はい、お赤いの。
（お妻は莨盆を持つて來て。）
お妻　全く好い火ですわ。先生は本當に目はしがお利きなさるわ。
大五　眼も利きやあ氣も利きやす、何たつて脈より病人の顏付を見て藥を盛らうてえ大先生だもの。
お妻　戀の病にやもつてこいね。
賢亮　御用があつたら、いつでも勤めるよ。
お妻　は何卒。いづれまた若く成つたらね。
賢亮　へえー、其上若く成る氣かい。全體お妻さんの星は何だつけね。
お妻　私、梅ぼしよ。
賢亮　串談ぢやない、幾歳だね、全くの所は。
お妻　もういゝ婆アですよ。
賢亮　え、お前が婆さんだッて。あゝ勿體ない婆さんがあつたものだ。拙なんぞも、何卒逆に年を取つて、せめて晋さん位の爺さんに成りたいものさね。
（此少し前より、昨日までは目黒村の豪家、今日は尾羽打枯した上原晋太郎、二十四五歳、羽織着流の窶れた打扮、裏門より入つて來た心にて、上手檜葉の植込の蔭に偸聽して居る。）
大五　お妻さん、晋さん見たいな男があるとこを見るてえと、年なんぞ苦にする事アねえぜ。
賢亮　大きにさね、お妻さん、何歳違ふかね。
お妻　何方とですか。
賢亮　晋さんとさ。
お妻　上原の若旦那とですか。
賢亮　お前の情人とさ。
お妻　まア。
（晋太郎はぞく〳〵と嬉しい介。）
大五　三歳も違ふかい。
お妻　何ですか知ら。旦那は知つてらッしやる癖に。
賢亮　僕に云はせりやア、五ッと云ひたい所だが、六歳と來りやア、圖星だらう。
お妻　そんなものかも知れませんよ。

(晋太郎は賢亮がお妻と自分との年の相違を多く云つたのを腹の立つ介で、此時擒えず一歩前へ踏出して。)

晋太　何ナ、二、六歳違ふ。二ツしきやア違はないのに。藪め。藪醫者めッ。

(大五郎は早くも怪しんで。)

大五　お妻さん、何人か居るやうだぜ。

お妻　さうね、何方か何か仰有つた樣でしたね。

(お妻は立つて、上手を差覗いて、晋太郎と顔を見合せる。晋太郎は左も懐愛しさうにお妻の顔に見惚れて他愛もない笑を含む。お妻は大五郎等を見返つて。)

お妻　若旦那が居らッしやいますよ。

大五　晋さんが來たッて。

(大五郎は賢亮の顔を見て、目顔で呼入れよと指揮をする。賢亮は片手を突いて差覗いて。)

賢亮　いようツ、晋さん、さア何卒此方へ。間の大將もお居でゞ、丁度可い處でした。さア、御遠慮なしに、ずうッと此方へ。

お妻　若旦那、今日は乾度入らッしやると思つて、お待ち申して居たんですよ。

(晋太郎は此間に、隣家の前、お妻の傍近く來たけれども、大五郎と賢亮とが居るのも忘れたかの體で、唯お妻の顔を見つめて、嬉しき介。)

晋太　さう、私を待つてお呉れだつて。本當に待つてゝ呉れたの。

お妻　本當ですとも。若旦那に虚言なんか云やアしませんわ。

(ト晋太郎は嬉しさにお妻の顔から眼を放し得ぬ介、大五郎と賢亮は顔を見合せては冷笑して居たが。)

賢亮　いようツ、もてますな。

(晋太郎は吃驚して、大五郎と賢亮が其處に居た事を思出してきまりが悪いと云ふ介。)

晋太　間さん、今日は。賢亮さん、久濶會ひませんでしたね。

(大五郎は鷹揚に會釋して。)

大五　昨日にも來てお呉んなさる筈だから、先刻まで宅で待つて居やしたが、此處で會つたなア、丁度能かつた。まア上つちやア何だね。

賢亮　晋さん、此處が能いでせう。

(ト賢亮が席を讓らうとするのを、晋太郎は押止め。)

晋太　いえ、私はまだ外に。

お妻　若旦那、御上んなさいよ。

（ト お妻は座蒲團を進める。晋太郎は其を敷いて腰を掛ける。）

お妻　旦那、直きに御酒になさいますでせう。まア、お茶も上げなくつてさ。おほゝ。

大五　勿論さね。下物は好加減に見繕つて呉れるが可いよ。

お妻　はい。

（ト お妻は晋太郎に對ひ、）

お妻　若旦那も御一緒でせうね。

晋太　え、私。私は未だ。あの何ですから、後で後方の方が可いよ。

お妻　おやア、其積にしませうね。

賢亮　お妻さんと水不入で……晋さん、羨ましい御寸法でげすな。

晋太　な何、其樣譯ぢやアありません。

大五　其樣譯でねえなんて、晋さん、隱す中でもあるまいぜ。此處で一緒にのむが可いさ。

晋太　間さんに其樣事を云はれると、何だか何も面目なくツて。

（ト 晋太郎恥かしさうに垂頭く。大五郎と賢亮は顔見合せて冷笑ふ。）

お妻　私の留守に、お二人で若旦那を意責めないで頂戴よ。若旦那直ぐにまゐりますよ。

（ト お妻は愛想らしく斯云ひながら、晋太郎に笑顔を見せて、下手へ退場。）

大五　呆れたもんだ。

（ト 大五郎は晋太郎が浮腰になつてお妻の後姿に見惚れて居るのを凝乎と見て。）

大五　晋さん、おい晋さん。

（ト 大聲にて呼ぶ。晋太郎は吃驚して我にかへり。）

晋太　私をお呼びなすつたんですか。

大五　呼んだかもねえもんだ。

晋太　何か用でもあるんですか。

大五　なに、用でもあるかだツて。

（ト 大五郎は煙管もて唾壺を割れよと叩いて。）

大五　晋さん、用があるかたア何てえ云草なんだ。ちやア何だね、晋さんは私に用は無えと云ふんだね。

晋太　あッ其事ですか。其事なら、私は今お宅に伺つて、松葉屋へお行でなすつたと聞いたから、後を追つて來た位ですよ。お前さんに用があるの無いのどこぢやありま

せん。ソレ彼用と、彼用と、差當つた二つの用が、私の胸に、斯う閊へて居まさア。

大五　彼の用と彼用と、二つの用が閊へて居るツて。はアてね。一つの用は解つてゐるが、今一つの用ツて云ふなア、晋さん、何樣用だね。

晋太　えゝ、其用ツて云ふのは。

大五　其用ツて云ふなア。

晋太　さう〳〵は、餘り厚面皮くツて。

（ト晋太郎はもぢ〳〵して云ひ得ぬ介）

大五　まア、其用は何でも可いが、先日から延期〳〵ツて三日延べ、五日延べ、もう彼此半月足らず、お前さんの云ひなさる通りに、延期て置いた、あの安樂寺前の地所の一件は、ありやア何形を付けてお呉んなさる氣かね。

晋太　さツ、其事ですがね。私も種々、心配はして見たんですが、お前さんも知つてお居での通り、コレ此通りの今の身の上ですから。

大五　おい晋さん、今日も亦十八番の待つてくれろかね。

晋太　そ其樣ことを、私の口から云へた義理ぢやア無いんですが。

大五　義理でねえと知つて居るなら。

晋太　さツ、其處を何卒、親父の時からの馴染甲斐に、ねえ閒さん、後生ですから今一度。

大五　そりやア不可ねえ、佛の顔でせえ三度ツて云ふよ。

晋太　それは左樣でも。

大五　今度と云ふ今度は、金輪際承知が出來ねえよ。

（ト大五郎は魚膠もなく云切る。晋太郎は當惑の介、賢亮は大五郎と顔を見合せて首肯き。）

賢亮　晋さん、其事に就いては、お前さんの御依頼だから、私から閒さんにお頼み申して、此前の時と其前の時と、二度まで延期を爲て貰つてあるのだから、今日は私に對しても、何とか始末をつけて戴きたいものですな。

（晋太郎は術なき介にて。）

晋太　先生に左樣仰有られると、私は穴へでも入らなきやアなりませんや。

賢亮　お前さんだツて、此目黒で上原さんと云へば、蔭でさへ樣付にされた舊家の旦那樣だ。其上原の晋さんが、唯出來ないとばかりでは、閒さんだツて承知が出來にくいのは、無理も無い所ですよ。晋さん、古川に水斷えずとやらで、抵當物に何か出す物がありさうなものですな。

（晋太郎は凝乎と考へて居たが。）

晋太　さア、其物があれば、私だッて、今日此梧葉屋の座敷開に、此樣に尾羽打枯らした扮粧ぢやア來ませんや。此までの義理にも、店から女中へ、祝儀も遣りたし、成らう事なら、お妻の名で、仕着を出して遣りたかつたのに、それも出來ないほどの此樣でせう。先生、コレ此の私の扮粧を見て下さい。お妻も嘸ぞ肩身が狹からうと思つて、斯してる内だつて、氣が氣ぢやありませんや。

（ト晋太郎、漸次聲が曇つて、終に涙を拭く介。賢亮は態とらしく頻りに首肯き。）

賢亮　さうお聞き申すと、實にお氣の毒だ。晋さん何です。何か一つ、間さんが承知して下さりさうな物を、林でも可からうし、畑地でも可からうし、何かありさうなもんですな。

晋太　さア、其林も、田地も畑地も、宅地までも、悉皆間さんの物に成つて了つて、今ぢやもう、手付かずの私の物と云ふのは、唯たあの家一つしきやアありませんや。

賢亮　何ですかい、彼お宅を一時書入れて、せめては半額も入金、と云ふ事になすつて、間さんに延期を頼んで見ると云ふのは。

晋太　えッ、彼家までも。

（ト晋太郎は垂頭きながら、此ばかりはと思ふ體で、輕く頭を振つて居る。）

賢亮　晋さん、彼家さへ書入れる氣なら、私から間さんに賴んで、此所の凌、其外に、二十なり、三十なり、お前さんの手に入る樣に何にか取計つて見る積だが、晋さんさう爲た方が、能くは無いですか。

（晋太郎は尙ほ默つて居る。）

賢亮　晋さん、今二十と三十の金があれば、店にも女中にも、祝儀は出せようし、暫時は又心配なしに、お妻さんの顏が見られて、えッ晋さん、お妻さんも喜べば、お前さんも亦肩身が廣い。ねッ晋さん、餘り惡くも無い話ですぜ。

（晋太郎は稍心が動きかゝつたこなし。）

賢亮　晋さん、先刻お前さんの顏が見えない前に、お妻さんが染々お前さんの事を云つて居たですよ。

晋太　な、なに、お妻が私の事を。せ、先生、な何て云つてました。

（ト晋太郎は、はや夢心地で賢亮の顏を見ながら體を乘出す。）

賢亮　何と云つてたつて、えゝと其の、晋さんが元の御身

分でお居でなすつたらツて、艶かな彼顔に玉の涕がほろほろ〳〵。

晋太　えツ、お妻が、私の爲に泣いてまで、あゝ濟まないなア。

（ト涙を拭く。大五郎も態とらしく溜息を吐いて。）

大五　おい、塚本先生、女ツて奴ア、あの涙含んだ處が、どうもいへないもんだてね。

賢亮　全くです。眼のふちを斯ういろどつて、所謂その、海棠の雨になやめる風情とあつてな。

（晋太郎は何の分別も無くなつた樣子で。）

晋太　せ先生、あの家を、書入れませう。

賢亮　えツ、お宅を。

晋太　その代には、その今の、三十圓なり五十圓なり、それさへ私の手に入る事なら、もう家だツて、えゝ構ふ事たアありませんや。

（ト晋太郎はお妻の爲ならと、心も上の空。賢亮は頻りに首肯き。）

賢亮　さうなさりやア、此處の凌ぎはつく、お妻さんは喜ぶ、所謂一擧兩得と云ふものですな。さう事が極れば、間さんだツて、ねえ大將、お聞きなさる通りですが、如何なものでせうかな、拙者の顏もお立て下さる事に願ひたいですが。

（ト大五郎は迷惑らしい樣子で考へて居たが。）

大五　いや、ようがす。先生の顏を立てやせうよ。

賢亮　えツ、私の顏を立てゝ下さる。晋さん、喜び給へ。間の大將が承知して下さると云ふ事だ。

（晋太郎は大いに喜び。）

晋太　間さん、難有う御座います。先生、何れお禮は致しますよ。さツ、何卒その、五十圓を、さツ早く渡して下さい。

（ト心の急くこなし。大五郎は落付拂つて。）

大五　晋さん、何時も云ふ事だが、金は證書と引替へだよ。

晋太　えツ、其はもう、素より承知です。

大五　ぢやア、先生、御苦勞だが、お前さんの手で、鳥渡一筆お頼み申したいね。印紙は私の處にあつた筈だ。

賢亮　承知しました。

（ト賢亮證書を認める。大五郎は折鞄から印紙を出す。晋太郎は上の空で下手に心を焦れて居る。其中に賢亮證書を認め終り、大五郎から印紙を受取り證書に貼つて、晋太郎の前に置き。）

賢亮　晋さん、此に實印を捺すのです。
（ト晋太郎は證書を能くも見ず、實印を出して、云はるゝまゝにベタ〳〵と捺して賢亮へ返し。）
晋太　先生。さア今の五十圓を。
（ト一層氣の急くこなし。大五郎は證書を鞄に藏めて兌換券を數へて、賢亮へ渡し、賢亮から晋太郎へ渡す。晋太郎は兌換券を受取るより早く、直ぐに下手へ行かうとする。大五郎は呼止めて。）
大五　おい〳〵、晋さん、數を改めないでも可いのかい。
（晋太郎は、兌換券を數へて其一圓券二十枚なるを見るより。）
晋太　えッ、こりやア僅つた二十圓しきやア無い。
大五　二十圓で惡きやア、返すが可いよ。前の地面の半金が四百圓に、利息が八十圓、あの家を五百圓の抵當に取りやア、殘金が丁度二十圓になるんだよ。
晋太　えゝ、僅ッた二十圓ばかし。
（ト晋太郎は兌換券を大五郎へ返さうとして、返しかねる體。）
賢亮　晋さん、彼お宅を五百圓なら、安い方でもない樣ですな。それとも私の顏を潰す氣なら、其二十圓を間さんに返しなさるが可いさ。地面は流れるか。美しいのは泣くか。それも可いですな。
大五　晋さん、返すなら、さア早く返して貰はうかね。
（晋太郎は仕方が無いと云ふ思入。）
晋太　間さん、彼家ばかりは流さない積りだから、こゝ此でも結構です。
（ト晋太郎は足も空に退場。途端にお妻は外の座敷を廻つて來た心で、下手花壇の横より新座敷へ來掛る。大五郎と賢亮は巧く行つたと云ふこなしで。）
大五　晋の野郎の馬鹿さ加減にも、呆れ返らア。
（此時お妻は座敷の横手に來てふと耳に入る二人の話に、覺えず足を立めて止聞して居る。二人は斯とも知らず。）
賢亮　所が、馬鹿でなかつた日にやア、えッ大將、僅つた二十圓で、一月の中に、あの大屋體がお前さんの物に成りッこは無いからね。
大五　此方の爲には、御方便に出來て居る奴かね。
賢亮　御方便次手に、僕の方にも、今此處で御方便に預りたいね。
大五　へん、相變らず拔目が無えなア。

（ト大五郎鞄の中から、いくらかの兌換券を紙に包んで與へる。賢亮は大仰に押戴いて。）

賢亮　チエ、忝ねえと云ひたい處だ。久振で今夜はお出掛けなさるかな。

大五　其面で態々品川くんだりまで、振られに行くたア、隨分物好な藪先生さね。

賢亮　藪にも功の者ありも古いが、面で女を買ふおやねえも古いか。

大五　しッ。

（ト大五郎は突然手を上げて賢亮を制する。賢亮が體を伸して覗く途端に、お妻座敷の前に出る。大五郎と賢亮は吃驚して顏を見合せ、三人鳥渡氣味合の體。お妻は尙ほ酒肴の來り居らざるに驚いた介で。）

お妻　おやッ、まだお膳がまゐらないんですか。

賢亮　まだ參りませんかとは、お妻さんの詞にも心得ないぜ。ぜんは急げとたとへにもあるぢやないか。

お妻　何も濟みません。籠合つてたんで、他の御座敷と間違へたんでせうよ。旦那、何も濟みませんでしたね。唯今。

（トお妻が下手へ行かうとした時、女中のお梅とお竹が膳、下物などを持ち登場。お妻は見るより。）

お妻　お前達は何を爲て居たんだよ。間さんの旦那の御座敷に、いまだにお膳も出て居ないぢやないかね。御贔屓になすつて下さるからッて、餘り失禮過るよ。本當に氣を付けなくつちやアいけないよ。旦那、何も濟みませんでしたね。

お梅　籠合つてまして、つい遲なはりまして、何も濟みません。

お竹　それに泥醉のお客さまがありましたのでつい、先生勘忍して頂戴よ。

（トお妻も手傳つて、膳を据ゑ、猪口を進めなぞする。大五郎と賢亮は猪口を擧げて。）

大五　まア前の事ア何でも可や。お妻さん、酌を頼まうぜ。

お妻　はい。

（トお妻は大五郎へ酌をする。賢亮はお梅に酒を注がせながら。）

賢亮　其代りにはお妻の君、このところより外へはやらじと。

大五　古くッて不可ねえ。いよ〳〵、藪井竹庵老だ。

お妻　先生がゐらつしやるんですもの、外へなんぞ參るも

んですか。はいお酌。

賢亮　まア一つ献じよう。

お妻　いえさ、おーさへ／＼ですよも、目黒くさいわね。

（ト各々種々捨臺辭ある。お梅は下手を見て、頓狂な聲で。）

お梅　あらッ親方が、姐さん、白金の親方が入らしつてよ。

お妻　さう、源次親方かい。

（鐵道工夫の取締白金に住める阪本源次、年季三十二三、好の打扮。源次子分鐵道工夫の伊太郎、二十三四。脊中に丸に鐵の字を白く抜いた法被を被つた好の打扮花道より登場。）

（お妻は直ぐに大五郎の座敷を離れて、いそ／＼と源次を迎へ。）

お妻　親方、好く來て下すつたわねえ。先刻ッから、何樣に待つてたか知れないんですよ。

源次　早く來ようと思つたが、つい抜けられない用があつたんでね。

お妻　でも、能く來て下すつたわねえ。おや、伊太さん、お入でなさい。

伊太　お妻さん。御目出たう。

お妻　難有う。お蔭さまでね。

お梅　親方、入らッしやい。

お竹　伊太さん、お入でなさい。

（トお梅もお竹も大五郎等を殘して源次等の傍に來る。大五郎と賢亮は早くも不快を感じた體。お妻は源次と伊太郎を、大五郎賢亮等の隣の座敷に案内する、其前にお梅が隔の唐紙を閉切る。）

源次　陽氣と賑かの樣だネ。

お妻　仕合とね、天氣都合は能う御座んすし、午時ッからは手が廻らない位でしたわ。此でも今少時前から、いくらか樂に成つたんですよ。

源次　何にしても結構だね。今日は伊太公に、思入御馳走を爲て遣りてえんだ。伊太、何か下物を望むが可いや。

お妻　伊太さんは何が好きだい。

伊太　なアに、下物なんざ何でも可いんだ。

源次　飲みせえすりやア可いッて云ふんだらう。お妻さん、何か見繕つて遣つて與んな。

お妻　ぢやア、さうッて事にして、親方のも私に委して下さるわね。

源次　可い樣に賴まア。これはぽッちりだが一同へ分けて

遣つて呉んねえ。
(ト源次、一同への祝儀包をお妻へ與へる。お妻は受けて。)
お妻　何も濟みません事ねえ。お梅、お竹、親方から御祝儀を下すつたよ。お禮をお云ひ。
お梅／お竹　親方さん、難有う御在ます。
お梅　伊太さん、親方さんへ宜敷願ひますよ。
(トお妻、お梅、お竹、祝儀の禮を述べる。お妻はお梅お竹に對ひ。)
お妻　大急で可いかい。それからね、店の人達へ、後で親方にお禮をお云ひッて云ふんだよ。
(これにてお梅お竹退場。)
伊太　親方、私しやア、牡丹てえ奴に、しみ〲お目に掛つた事がねえから、鳥渡行つて來やすぜ。
源次　なに牡丹を知らねえ。見ッともねえ事を云ふぢやアねえか。見て來ねえ。
伊太　知らねえこたアねえけれど、鳥渡お馴染になりてえんだ。姐さん、親方を賴みやすぜ。
お妻　伊太さん、行つてお居でなさい。

(ト伊太郎花壇の方へ行き、彼方此方を見ながら座敷の後に入る。お梅膳を持つて登場。)
お梅　親方どうも、遲なはりました。
(トお妻お梅源次へ膳を進める。)
源次　何して遲い處ぢやアねえや。滅法早くして呉れて難有え。お梅坊、お前が氣を利かして呉れたんだな。
お梅　親方の事ですとね、一同が寄合ふんですもの、ねえ姐さん。
(お妻、源次に酌をしながら。)
お妻　全くお梅が御云の通りですよ。親方が一日だッてお見えでないと、家中親方の噂ばかし爲て、日を暮らす位ですよ。
源次　さうかい。虚構にしても左樣云はれりや好心地だ。お妻さん、一杯呑んねえ。
お妻　はい。
(ト源次、お妻へ猪口を差す、お梅酌を爲る。)
(此内隣座敷の大五郎と賢亮は、源次が好遇さるゝのに業を煮やし、不平のこなし色々あり、此時賢亮溜りかねて、掌を鳴らす。)
お梅　お呼びなさいまして。

（と大五郎等が座敷の前に來る。）

賢亮　何だ、お呼びなさいましたかだと。呼んだから來たんだらう。

お梅　はい、何か御用で。

賢亮　用が無いのに呼ぶ奴があるか。

お梅　ですから、伺つたんで御座いますわ。

賢亮　先刻命けた銚子の代は如何したんだ。おい、之を見ろ。

（ト賢亮徳利を振つて見せて。）

賢亮　馬鹿にしやがると、承知しないぜ。

お梅　どうも濟みません、つい籠合つて居たもんですから。

賢亮　何だと、籠合つて居た。虚構を云ふなよ。餘所の座敷にやア、二人も三人もいちや／＼して居やがつて、籠合つて居ましたッて云ふ事があるか。

お梅　つい、あの、何だもんですから、どうも濟みません。

賢亮　何だもんですからとは何だ。土地の者だと思つて、馬鹿にするなよ。

（ト賢亮頭に怒立てるのを、大五郎は制しながら。）

大五　先生止しねえよ。人足と同一に見られねえだけが、まだしも目付もんだ。そろ／＼出掛ける事にすりやア、いさくさはねえや。

お梅　あらッ旦那、何卒其様事を仰有らないで。

（トお梅當惑してうろ／＼する。お妻は源次に目顔で少し待つて居て下さいと頼んで、隣座敷の前に來て。）

お妻　旦那も先生も、何卒ねえ、行屆かなかつたのは、全く私が悪いんですから、何卒勘忍して頂戴な、ねッ後生ですから。

（トお妻二人へ謝しながら。）

お妻　お梅や、早くお銚子を持つてお出で。

お梅　はい、唯今。

（トお梅は急いで下手に退場。）

お妻　先生、後生ですから、何卒ねえ、お坐んなすつて。

（トお妻は立掛けて居た賢亮を和める、賢亮は詮方が無いと云ふ介にて坐り。）

賢亮　お妻さんにも似合はないぢやアないか、何をしにお前の處に來るか位は。

大五　先生、もう可いや。

（ト大五郎は先刻立聞された事があるので、多少お妻へ氣を置くと云ふ心で、強い事も云ひ得ぬこなしにて。）

大五　お妻さん、心配しねえが可いよ。先生は何も多飲ふと不可えんでね。悪い癖さ。
賢亮　おい大將、多飲はうにも、銚子が唯た一本。
大五　いゝッて事さ、私に委しとくが可いぢやないか。
お妻　旦那の樣に云つて下さると、倚々濟みませんね。
（お梅下手より登場、銚子を持ちながら急足にて大五郎等の座敷に來る。）
お妻　お梅、此方にお付き申して居なくッちやア不可いよ。
（トお妻は大五郎と賢亮とに酌を爲て遣り、直ぐに源次の方へ來たのをお梅が後から尾いて來て。）
お梅　姐さん、鳥渡お顏をお貸しなすつて。
お妻　私に用がおありなの。
お梅　えゝ鳥渡。
お妻　用があるんなら、此處でお云ひなね。親方の前なら何をお云ひだッて大丈夫だわ。
お梅　ですけども。
お妻　私が可いッてッたら、云ふが可いぢやないかね。
お梅　上原の若旦那が、是非姐さんを連れて來いッて、先刻からプリ〳〵して居らッしやるんですよ。
お妻　若旦那にも困るわねえ。
（トお妻は眉を寄せながら。）
お妻　後で行くからね、お前は間の旦那の方に行つてゝおくれ。
（お梅は大五郎等の方へ行く。）
（源次はお妻の困つたらしい顏を見て。）
源次　お妻さん、其若旦那てえのが、大層凝つて來るッてこッだね。
お妻　實に困ッ了んですよ。
源次　餘り困る方でも無からうぜ、世間の噂を聞いた所ぢやア。
お妻　世間の噂には、私と若旦那と、深い縁情でもある樣な事を云つてるさうですが、私の方ぢやア、ねえ親方、何とも思つてるんぢや無いんですよ。
源次　全くかね。
お妻　親方に隱す私ぢやアありませんよ。
源次　さうかねえ。それだと、其若旦那てえなア、隨分可愛さうな譯なんだね。
（お妻は思入があつて。）
お妻　可愛さうな事は、全く可愛さうな人ですよ。ですけどもね、私を何樣に思つて下すつても、弟見たいな若旦

郎は、何だか蟲が好かないし、私が斯だと思ふ人は、彼方で相手に爲て下さらないし。

（ト お妻、源次の顔を鳥渡見て。）

お妻　せめてはねえ親方、御猪口でも戴かして下さるが可いわ。

（ト お妻、源次の前の猪口を引奪つて一息に飮む。途端に賢亮大分醉が廻つたこなしにて隣座敷から柱につかまつて覗かうとする。）

お梅　あらッ、先生、其樣事をなすッちやアいけませんよ。あらッ、先生、いけませんて云ふのに、あらッ。

（ト お梅が止めても、賢亮聞入れず、體をあらはに出して覗く。源次は賢亮を見て煙管を逆に持つて屹度なる。お妻は氣を揉むこなし。處へ、伊太郎牡丹を見て歸つて來た心で出來り、斯くと見るより、つか〳〵と駈寄り。）

伊太　野郎、なによ爲やがるんでい。巫山戯た眞似を爲やアがるない。

賢亮　何だ人足めッ、失敬な事をいふな。

伊太　糞を喰らへ餓つ鬚め、大口を利きやアがると毆り仆すぞ。

賢亮　毆り仆すと、さあ毆り仆せ。

（ト 賢亮飛下りて伊太郎と打合ひ、取組合ふ。お妻、お梅、止めようとしても手がつけられず。）

お妻　伊太さん、お止しよ。親方、止めて下さいよ。

お梅　旦那、止めて下さいよ。あらッ、先生、お止しなさいッてば。

（此内、大五郎も源次も座敷から下りて、兩方から賢亮と伊太郎の間に割つて入り漸く二人を引放す、賢亮と伊太郎は尚ほ飛掛らうとするのを、大五郎と源次が支へて。）

大五　先生、お前さんが惡いんだ……まア可いッてこと。

源次　伊太、詰らねえ眞似をするなよ。

お妻　伊太さん、後生だから、我慢してお呉れよ……先生もね、何卒、御勘辨なすつて下さい。

（ト お妻も双方を和める。賢亮も伊太郎も幸と鎭まる。大五郎は源次に對ひ。）

大五　もし、白金の親方、御挨拶を致すのは初めてゞすが、何卒ねえ、酒の上の出來事だと、胸を擦つてお呉んなせいな。

源次　間の旦那、申後れたなア、御勘辨を願ひやすが、旦

那の方で、水に流してお呉んなさりやア、私の方でも幸えでさア。

お妻　闇の旦那、源次親方、何も難有う御在ます。

大五　白金の親方、お互に跡に遺恨を殘さねえ樣に、仲直に一座をして、わッと一ッ騒ぎやせうかね。

源次　さうしやせうよ。

お妻　さうなすつて下さると、私も嬉しう御在ますわ。

（此處に店の男女一同登場源次に前の祝儀の禮を云はうとするのを、源次は押止め。）

源次　おい、一同待つて呉んねえ。

（ト大五郎に對ひ。）

源次　闇の旦那、御手を拜借しやして、今の喧嘩の仲直と松葉屋の座敷開の祝をかねて、鳥渡しめ樣ぢやアありませんか。

大五　それが可うがせう。

源次　ぢやア、一同も手を貸して呉んねえな。

（ト一同手を拍つて、三度しめる。）

――幕――

同く返し　馬頭觀音前の場

舞臺は目黒村の一部、一面に奥深き茅草藪を見たる小路の心。藪の中よりも一條の小路、上手奥より斜に舞臺中程につきあり。小路の入口に馬頭觀世音立たせたまふ。

幕開くと、晋太郎の從妹にて許嫁なるお米、十七八歳、好の打扮にて花道より出來り、物思はしげなる樣子にて、花道附際まで來たりし頃上手より、上原の僕伍八、二十八九歳、好の打扮、晋太郎の弟松次郎、四五歳、病氣の體なるを脊負ひ出來る。これも深き思に沈みたる體にて、摺違ひて行過ぎようとする。松次郎、お米を認めて、

松次　新家の姉ちやん。

（ト聲を掛ける。これにて、お米も伍八も立止り振返りて、其と認め、互に歩寄りながら。）

お米　おや、松ちやん、何處へお行でなの。

松次　坊やお醫者ちやまへ行くの。

お米　さう私松ちやん處へ行くのよ。阿母ちやんはお在宅なの。

（トお米は松次郎と伍八へ掛けて問ふ。伍八は丁寧に會釋をなし。）

伍八　御隱居さまお宅に居さッしやるでがすよ。

お米　さう。

（トお米は晋太郎の事も問ひたいけれど問ひ得ぬ介にて。）

お米　伍八どん、お醫者さまへお行でだッて、何人か病人が出來たの。

伍八　へい、御病人は坊さまでがすよ。

（ト此時はもう伍八の背に大儀さうに頭を附て居る松次郎を、お米は驚きながら差覗き。）

お米　えツ、松ちやんが病氣だッて。松ちやん、何お爲なの。

伍八　なにね、今朝ッから、えらく咳嗽さッしやるでね。

（ト伍八は振返つて、無理にも松次郎の額を見ようと云ふ介にて。）

伍八　坊さん、苦しい事ねえかね。

お米　何だか苦しさうね。

（トお米も差覗いて。）

お米　松ちやん、苦しいかい。おゝ、いや／＼をお爲だね。ぢやア、そんなでも無いの。伍八どん、咳嗽が出るッて云ふのに、お醫者に連れてかないで、來て貰へば可いのに。

伍八　私も左樣思つたで、御隱居さまは、今日一日樣子を見べい云はつしやつたでがすが、なに左樣でねえ、一日だッて可愛い坊さまを、お醫者に掛けねえ法は無え。賢亮先生呼ばつて來べい思つて、私三度も呼ばりに行つたでがすよ。

お米　まア御苦勞だッたねえ。三度も呼びに行つても、來て下さらないのかねえ。

伍八　來て呉れるにも呉れねえにも、今朝ッから宅に居ねえッて云ふだからね、はア詮樣がねえだ。

お米　それだと、今お行でだッても。

伍八　今行つて居ねえでも、明日までには歸つて來べいから、私坊さまと坐込んで遣りますだ。

お米　まア、伍八どんは、何時でも面白い事ばッかし。

（トお米笑ふ。伍八も催ほされて笑つたが。）

伍八　お米さま、御隱居さま御一人だから、嘸ぞ淋しかんべい、早く行つて上げさッしやるが可え。私、ちよッくら行つて來ますだ。

（ト伍八行き掛ける。お米はあわてゝ。）

お米　伍八どん。

伍八　呼ばツしやツたかね。

（ト伍八立歸る。お米はきまりが悪さうに。）

お米　叔母さんがあの、唯た一人で。

伍八　だから、淋しかんべいよ。

お米　さうね。

（トお米は覺えず太息を吐いて。）

お米　伍八どん、あの、晋さんは、あの今日も留守なの。

伍八　小旦那かね。

（ト伍八も覺えずしをれて。）

伍八　小旦那には、私はア、呆れて了つただ。朝、飯かツこむか、ぷいと出掛けて、夜だツてはア、私寢る時分までも歸らねえだよ。

お米　夜お歸りでなきやア、何處かへお泊りなの。

伍八　なにね、歸らねえ事は無えけんど、何時歸らツしやるか、朝見るてえと、寢床引被ぶつて、高鼾かいてるだよ。

お米　何して彼樣にお成りなのか、ねえ伍八どん。

（トお米は胸が一杯になつた介にて垂頭く。伍八も掌を當て水鼻を啜りながら。）

伍八　お米さま、小旦那が何して彼樣に成つたツて、お前さまが聞ツしやる胸の内を考へると、私らはア、お前さまに氣の毒でなんねえ。歷としたお前さまを、あの松葉屋の阿魔ツちよに見替へた罰たけでだツて。

お米　あれツ、伍八どん、其樣事をお云ひでは、晋さんに悪いよ。私なんぞは、そりやね、何せ、器量は悪いし、野暮な田舎者だし、新橋とやらでも評判の藝者衆、此目黒でも目黒小町と云はれてお居での、あのお妻さんに見替へられたツて、それはもう當然だしね、晋さんを怨む氣は無いけれど。

伍八　さうでねえ、思入れ怨を云つて遣るが可えだに、お前さまが餘り温和し過ぎるで、小旦那が可え事にして、放蕩つくすだよ。

お米　いえ、なに、私の事なんか、何でも云いけれどね、叔母さんが、心配ばかし爲てお居でだから、見る都度に、漸次と窶れて、頃日は顏色なんぞも……伍八どん、私は其が悲しいよ。

（トお米はそツと涙を拭く。伍八は續けさまに水鼻を啜つて。）

伍八　尤もだ、お米さま尤もだ。あゝあ、上、中、下と三つに分れた目黒村を、一つに引括めても、一と云つて、

二が無えと云はれた、上原様の御隱居だに、これ伍八、明日の物があろべいか、今夜の物は何しべいかと、私に相談しろ都度に、御隱居も泣かッしやれば、私も一緒に泣きますだ。

（ト伍八は腕にて涙を拭く、お米も一入悲しき思入れ。）

お米　私もね、叔母さんの不自由な事を知つてるから、何にかしたいと思つて、いろ／＼氣を揉んでるの。だけども、私には何しようッて力はないし、相談したいと思ふ阿母さんは、伍八どんも知つてる通り、自分さへ能きやア可いつて人だしね、私は唯思ふばかしで、何する事も出來ないから、叔母さんへ御氣の毒でならないよ。

伍八　お前さまの御親切は、御隱居も喜んで居さッしやります。隨分多くある親類だけんど、誰一人見舞つて呉れろ人もねえに、お米だけが來て呉れるで、そればかりが樂みだッてね、お前さまの事べい云つて御座らッしやるだ。

お米　叔母さんが私の事を、其樣に思つてお呉れだのに、私は手助も出來ないから、何だか極が惡くッて、門を入るのも辛いと思ふよ。

伍八　なアに、お前さま、其樣事思ふ御隱居でねえよ。早く行つて上げさッしやれ、何樣に嬉しがるか知んねえよ。

お米　ぢやア、私、叔母さん處へ行つて見るよ。

伍八　さうして上げさッしやい。

お米　ぢやア、伍八どん、行つてお居でよ。

伍八　お米さま、直きに歸つて來ますだ。

お米　待つて居るよ。

（トお米は伍八の背の松次郎を覗いて。）

お米　おや寐てお居でかい。

（トお米は伍八と分れて行掛けたが。）

お米　あの、伍八どん、もしもね、晋さんを御見掛けだッたら。

伍八　無理にも引張つて歸りますだ。

お米　頼みますよ。

（トお米は上手へ伍八は下手へ別れようとした時、お米は藪中の小路に晋太郎を認めて。）

お米　おゝ、晋さんか。

伍八　えッ、小旦那が。

お米　御覽よ、伍八どん。

（トお米伍八と共に屹度竹藪の中を見る。晋太郎微醺

を帯びたこなしにて、お妻に送られて藪中の小路を辿り來る樣子。お米伍八は下手藪蔭に身を寄せて窺つて居る。)

お妻　若旦那、私もう、此處で御暇しますわ。

(トお妻藪中にて暇を告げる、晉太郎は倚ほ別れともない介。)

晉太　まだ可いぢやないかね。

お妻　私はね、何處までだツて、御供をしたいんですが、まだお客さまがありますもの。

晉太　へえ、さうかい、外にお客があるから、私を送るのは可厭。

(ト晉太郎はむツとした介にて。)

晉太　どうせ左樣でせう。もう可い、もう送らなくツたツて可い。お妻さん、お歸り、早くお歸り、お歸り〳〵。

(ト晉太郎は腹の立つ介にて、藪から出て來る。お妻は持餘した體にて、晉太郎の後から出口まで來て。)

お妻　あら待つて頂戴よ、若旦那。

晉太　もう送つて呉れないだツて可い。誰が送つて貰ふものか。

お妻　まアお待ちなさいツてば。

(ト晉太郎實はお妻に止めて貰ふ積で、つか〳〵と上手へ行く。お妻は其儘見て居る。晉太郎はもう止めるか〳〵と思ひながら、お妻が止めないので、歩が漸次鈍ぶる心にて、終に立止り、鳥渡お妻を見返る。お妻は手招をしながら、こなしにて此處まで來いと云ふ。晉太郎はすねる介。お米は嫉妬の心にて氣を揉み、伍八は呆れる介。)

お妻　若旦那、鳥渡此處まで居らツしやいよ。私が惡かつたんだから、謝罪ますわ。だから此處まで……なぜ其樣に、私に氣を揉ませたいだらうねえ。

(トお妻は凝乎と晉太郎を見る。)

晉太　なに、私が氣を揉ませるツて。何時私が、お前に氣を揉ませた事があります。

(ト晉太郎は漸次お妻の方へ來ながら。)

晉太　あゝ解つた。今日の座敷開に、私の行方が遲かッたし、御祝儀を出すのが後れたし。

お妻　あらツ、其樣事ぢやアありませんよ。

晉太　え、左樣でない。なに左樣でない事があるものかね。私とお前とは、今でこそ、お前に心願があると云ふから、唯兄妹見たいにして居ても、來年は夫婦になる約束だし、

それを一同が知つてるのに、私の行きやうが遅かつたし、お前の見得に成るほどの事も出來なかつたし、嘸ぞ肩身が狭かつたらう、氣が揉めたらうさ。お妻さん、勘忍してお呉れよ。

（ト此内晋太郎はお妻の傍に來る。お妻は挨拶に困る介にて。）

お妻　唐や女中へなら、彼だけ爲て下さつたんですから、私の肩身が狭い所ぢやありませんよ。

晋太　なに左様でないよ。私は何様にでも爲たいがね、明日もあれば明後日もあるから、其積りでね、まだ些は殘してあるんだよ。

（ト紙入を取出し。）

晋太　まだ此中に、十圓ばかしあるんだから、寧そ彼時、一緒に遣ツ了やア可かツたツけ。

お妻　そんな事を爲て下すツちやあ、却つて私が困りますわ。

晋太　なに左様でないよ。おゝ左様だ。お妻さん、之をお前に上げるから、宅へ持つてツて、一同に分けて遣つてお呉れ。

（ト晋太郎は紙入をお妻へ渡さうとする、お妻は其を却けて。）

お妻　そんなに爲て下さらないだつて、先刻のだけで澤山ですわ。

晋太　なに、さうでないよ。

お妻　いゝえ、あれでもう澤山ですから。

晋太　さうでないよ。

（ト晋太郎紙入を渡さうとする、お妻は取じと爭ふ。先程から晋太郎の様子に、呆れもし腹も立ち辛と耐へて居た伍八、此時つか〳〵晋太郎の傍に行く。お米も其後に引添ふ。）

伍八　コレ小旦那、馬鹿つくすでねえよ。おらがに寄越しなさろ。

（ト伍八は、晋太郎の紙入を引奪くろ。晋太郎もお妻も始めて、伍八お米を見て共に驚く。晋太郎はお妻の手前面目ない介にて。）

晋太　えゝ、何をするのだ、おれの紙入を。伍八貴様は、えゝ返しやアがれ。

（ト晋太郎は伍八に食つて掛る。伍八はお米を小楯に取る。お妻は晋太郎を止める。）

伍八　何をするも無えだ。お前さまこそ、なに馬鹿つくす

だよ。おらア彼處から見て居たが、お前さま今其阿魔ちよに、何云つてただよ。此紙入遣んべいから、宅に歸つて、店の奴等に打撒いて呉んろッて、能くまア彼樣な馬鹿げた口が利けただよ。

晋太　なに、馬鹿げた口だと。貴樣こそ、主人の乃公に、能くも其樣口を利きやがつたな。

伍八　おらア利くだよ、何樣口でも利くだよ。御主人さまの御前さまにだッて、おらア利くべき口なら利きますだよ。お前さまが馬鹿つくすだもの、おらアまだ〳〵、云ひてえ事が、こゝ此胸に、えゝ口惜いぞッ。

（ト伍八は紙入を持ちたる片手にて口惜しさうに胸を掻毟る。）

（お米は涙含んだ儘垂頭く。お妻は尚ほ急込む晋太郎を止めながら。）

お妻　若旦那、其樣にお怒んなさらないで、機嫌を直して頂戴な。彼方だッて、若旦那の爲を思ッて、彼樣にお云ひなさるんですからね、若旦那が惡くお思ひなさる事はないんですよ。さッ機嫌を直して、御一緒にお歸んなさいよ。ね、さうなさいよ。ねえ貴女、さうなすつた方が能う御座んすわねえ。

（トお妻はお米に對つて云ふ。お米は頭を上げてお妻に顏を見合せたが、此女故だ憎い女だと思ふけれど、何も云得ぬ介にて、また垂頭く。晋太郎にはお妻の前にて、伍八に何かと云はれたのが、きまりが惡いのと腹が立つのとで、尚ほ鎭まらず。）

晋太　お妻さん、お前は其樣に云ふがね、伍八め、主人の乃公に對つて、今の樣な。

お妻　もう可いにして頂戴ッて云ふのに。若旦那は、私が頼んでも、聞いちやア下さらないんですか。

晋太　きッ聞かないッて云やアしないぢやないか。

（ト晋太郎稍や氣勢が挫ける。）

お妻　ぢやア、聞いて下さるんだわねえ。え、聞いて下さる。能く聞いて下すつたわねえ、さう伺つて、私も安心しましたわ。ぢやアね、もう何にも仰有らないで、お宅へ歸つて頂戴よ。ねッ、能う御座んすか。

（ト晋太郎が爲樣事なげに首背いたので、お妻は喜びながら伍八に對ひ。）

お妻　あのお前さん、若旦那のお供をなすつて、早く御歸んなさいよ。

（ト伍八も此古狐めがと云ふ介にて横を向く。お妻は

お米に對ひ。）
お妻　貴女、もし貴女、若旦那が機嫌をお直しでしたから、御一緒にお行でなさるが能う御座んすよ。
（お米も垂頭いた儘返辭をせぬ。晋太郎は伍八とお米を憎くさうに睨んで。）
晋太　おい、米ちやん、伍八、お妻さんが彼樣に云つてるのに、耳がないのか、おい伍八。
お妻　あらツ、また怒るんですか。
晋太　なに、怒つてるんぢやないが。
お妻　おやア、もう何にも仰有らないで、ね、能う御座んすか。私はお暇してよ。
晋太　えツ、歸るんだつて。
（ト晋太郎は俄かにしよげる。お妻はお米と伍八に對ひ。）
お妻　あの、左樣なら、御免なさいよ。若旦那、左樣なら。
（トお妻は晋太郎等三人へ暇を告げ竹藪の小路を歸り行く。晋太郎は殘惜しげに、つか／＼と竹藪の入口へ行き、お妻の後姿に見惚れながら。）
晋太　お妻さん、明日また行くよ。
（トお妻は振返つて。）

お妻　もう暫時、辛抱なさいよ。
（ト云捨てゝ、藪の中を上手に退場。晋太郎はお妻に見惚れながら歩む心にて上手へゆき、其姿が見えなくなつても、尚ほ他愛なく藪の中に見惚れて居る。お米と伍八とは晋太郎の樣子に、互に顏を見合せ、お米は涙を拭き、伍八は頭を振りながら太息を吐く。其内晋太郎は僅かに我に復つた介にて、お米と伍八を見返り俄かに懐裡や袂を探して見て、つか／＼と伍八の傍に來る。お米は隔てゝ。）
お米　晋さん、久濶ですね。
晋太　えツ、久濶、さう／＼、何時逢つたツきりだツけかね。
お米　さうねえ、私ももう、忘れるほどですね。
晋太　なに、其樣でも無いんだが、米ちやんの家と私の家と、餘り離れてるもんだから、つい逢へなかつたんだよ。
お米　さうかも知れないのね。だけども、叔母さんには・私毎日、晋さんのお家でお目に掛つてるけどもね、晋さんは、何時行つたツて、あの、何處とかへばかしお行でだツて、ねえ伍八どん。
（トお米の語に、晋太郎流石にきまり惡き介。伍八は

伍八　（松次郎を揺上げながら。）お米さまが云ひなさる通だよ。コレ小旦那、お前さまは知んねえけんど、お米さまは一日だつて、お袋さまを訪ねて来さッしやらねえ事はねえだよ。それだのにお前さまはまた、一日だつて宅に居さッしやる事ねえだから。

晋太　伍八、解つてるよ、もう云はないだつて解つてるよ。

伍八　何だッて、云はねえだッて解つてるだ。所が、解んねえだよ。お前さまの性根玉、おらがにはハア、何考へたッて解んねえだよ。

晋太　解らなきやア其で可いよ。そんな事は何でも可いから、伍八、其紙入を返して呉んな。

伍八　いんにやア、返す事なんねえだ。

（ト伍八は紙入を懐へ入れようとする、晋太郎はまた急込み。）

晋太　伍八、お前は返さないのかい。

伍八　左様でがすよ。

晋太　其紙入は私の紙入ぢやないか。

伍八　お前さまの紙入だッて、馬鹿つくす爲の紙入だもの、おらは持つて歸つて、お袋さまに土産にしますだ。

晋太　えッ、阿母さんに。

伍八　さうだとも。

（ト晋太郎は母の手に入れば、我自由にならず、お楽へ逢ふ頼も無いと、口惜しげに考へて居たが、屹度伍八を見て。）

晋太　伍八、お前は何しても返さないかい。

伍八　お前さま欲しきやア、お袋さまから貰はッしやるがえゝ。

晋太　伍八。

（ト晋太郎は呼掛けると共に、伍八へ飛掛らうとする。お米、晋太郎を支へる。晋太郎お米を突放す。お米伍八へ倒れ掛る。伍八も危なく倒れようとした騒動に、伍八の脊の松次郎驚き覺めて泣出す。晋太郎も松次郎が泣出したので、覺えず躊躇ふ。お米は涙ながら松次郎に抱付いて。）

お米　松ちやん、嘸ぞ吃驚お爲だらうね。まア、きい／＼お悪いんだのにねえ。だけども、なにも可怖い事は無いんだよ。松ちやんの兄ちやんだよ。松ちやんの兄ちやんだよ。

（松次郎は僅かに大儀さうに頭を擡げて、晋太郎を見

て。)

松次　兄やア、兄やア。

(ト松次郎に呼ばれて、晋太郎も松次郎の病氣が氣に掛る介にて、伍八の傍に立寄り差覗き。)

晋太　松坊、どうした。え。きい／＼が惡いッて、何處が惡いの。

(ト晋太郎は、もうぐッたり突伏した松次郎の頭に手を當て。)

晋太　おゝ、これはえらい熱だ。

(伍八は乾度晋太郎を見て。)

伍八　小旦那、坊さまの其熱が、お前さまにも分るだね。其熱が解るなら、御兄弟の情合だけは、まだしも忘れて居さッしやらねえだ。コレ小旦那、お前さまの性根玉の、置所が惡いでね。此坊さまを見さッせい。其大熱だに、良え醫者さまに掛けてえにも、其工面さへ出來ねえのは何人の所爲だと思はッしやるかね、お袋樣の云はッしやるには、此樣情ねえ境界になつたのは、天命と諦める外はねえ。松坊は可愛相だけんど、此子の運が惡いからだと、私は諦めて居るだから、もうお醫者にも掛けねえッて、あのお袋さまが熱い涙を、ほろ／＼ほろ／＼零しなさつたゞ。

(ト伍八は腕に顔を摺付けて泣く。お米も顔に袖を當てゝ泣く。晋太郎も烏渡顔を背向けたが。)

晋太　阿母さんは愚癡ッぽいから、其樣事を云ふんだよ。なアに、賢亮さんなら、何時だつて呼べもするし、藥禮だつて、今日が今日遣るにも及ばないし、伍八、何故賢亮さんに見せないんだよ。

伍八　お前さまが云はつしやらねえでも、下手ッ糞でも診樣事が無えでね、今賢亮さまへ行く所だよ。

晋太　それなら、早く行くが可いよ。

伍八　それは行きますだ。だけれどね、小旦那、私が今云つたことを、お前さまは何聞かッしやッたかね。

晋太　阿母さんが餘り愚癡ッぽいんだよ。彼樣に愚癡ッぽくッても、困ッ了はア、ねえ米ちやん。

(お米は晋太郎の語が餘り無情に聞こえたので、涙の眼に情なさそうに晋太郎を見上げたが、何も云はないで、直ぐにまた袖を額へ當て泣く。伍八も情なさに涙に暮れて居る。)

(此時間大五郎登場。藪中の小路より來掛り、晋太郎等三人を見るより、四五本重合つて生えた竹の根方に

身を潜める。）

（伍八は軈て涙を拂つて。）

伍八　小旦那、あのお袋さまを、お前さまが云はつしやる、其愚痴ッぽいお袋さまには、誰が爲ましたゞ。今の境界は天命だで諦らめる、松坊さまは運が悪りいで、もうお醫者にも掛けねえッて云はッしやッた、お袋さまの心の中は、コレ小旦那、何樣に辛かんべいか。おらは其時、泣いて、泣いても泣足らねえだつたに、お前さまは、他事ほどにも思はッしてらねえだね、昔からしがねえ生活をさッしやッた、のなら、仕方もねえけんど、目黒きつての分限者、上原樣の御隱居さまだもの、諦らめていにも諦らめられねえのが當然だに、それを諦らめたッて云はッしやる、あの心の中の苦しみが、小旦那、お前さまには見えねえかね、あの窶れさッしやつた顏色が、お前さまの眼には見えねえかね。

お米　晋さん、全くですよ、叔母さんの顏を見るとね、私もう、何時だッて、胸が一杯になつて、お氣の毒で〳〵、本當に、かッ悲しくなるんですよ。

（ト お米は聲を出して泣く。伍八も涙に聲が亂れながら。）

伍八　それと云ふのが、小旦那、お前さまが彼古狐に誑かされしやッたばッかりだ。

（ト晋太郎はお妻を古狐と云はれて腹の立つ介）

伍八　あの古狐め、田地田畑吸取やがッて、畜生ッ、畜生ッ。あの畜生めが、上原樣の家邸を野原にしても飽足りねえで、後には晋太郎さまッて云ふ小旦那の、被笑草を生やす氣だんべい。えゝ、胴畜生めッ。

（ト伍八は拳を握つて口惜しがる介。晋太郎はもう耐らなくなつた介にて。）

晋太　コレッ、伍八、何だと、お妻が古狐だッて。失敬な何を云ふんだ。お妻はなア、貴樣なんぞに、其樣事を云はれる樣な女ぢやないのだ。それに何だと、上原の邸跡に、晋太郎ッて云ふ被笑草が生るッてよくも其樣失敬な事を、伍八、能くも云つたな。むゝ解つた。貴樣は、そッ其の、紙入が欲いから、それで其樣事を云つて、私を怒らして、返さない算段をするんだな。おゝさうだ、さうだ……。其樣に欲い紙入なら、中の金ごと呉れて遣らア。

（伍八もむつとして。）

伍八　なに云はッしやるだ、何云ふだよ。おらは其樣さも

しい氣は持たねえけんど、朝夕の心配に、氣を勞らして居さつしやるお袋さまに、せめては、半月なり、一月なり、樂させてえ思ふだから、お前さまに意見もしたけんどなア……なアに、此樣金、なに欲しかんべえ。返すだよ、持つて行かつせえ、さア返すだよ。

（ト伍八は懷から紙入を取出し、晋太郎へ突付る。晋太郎は紙入を引奪り、懷中へ入れ、胸を合せて確と押へて。）

晋太　不用い金なら、おれが藏つて置く。もと〳〵おれの金だから、だれに遣る事アありやアしない。えゝ、馬鹿な奴を相手にして、あゝ、氣がムシヤクシヤすらア。さうだ、椛葉屋に行つて飮直して遣らう。

（ト晋太郎は藪中の小路へ駈込うとする、お米追縋り取付いて。）

お米　晋さん、其樣事をおしだと、惡いでせう。

晋太　米ちやん、お前の知つた事ぢやアないよ。

お米　だツても、それでは餘り……。

晋太　邪魔お爲でないよ。

（ト晋太郎、お米に取られた袖を、沒義道に振放す。お米倚されて倒れる、晋太郎は藪中の小路に走入つたが、屹度伍八を見返り。）

晋太　伍八、覺えて居ろ。

（ト云捨てゝ、晋太郎は藪中深く走り入り退場。倒れたお米は漸く起上り、怨めしさうに晋太郎を見送る。伍八も茫然として見送つて居たが。）

伍八　お米さま、小旦那はア、もう駄目だよ。

お米　伍八どん、何したら可いだらうね。

（トお米は泣く。）

伍八　何するツて、お袋樣に相談するより詮樣がねえだよ。斯しますべい。私坊さまの藥べい貰つて、直きに歸るだからね、お前さまは、前に行つて待つて居なさるが可えよ。

お米　ぢやア、さうするからね、お前早く歸つてお呉れよ。

（ト伍八は下手へ急いで退場。お米は上手へ行かうとして、倚ほ藪中に氣の殘る心にて躊躇ひ、終に思切つて行き掛ける。途端に大五郎小路より出來り、酒に醉ひたる介。）

大五　おい、お米さん、鳥渡お待ち、おい、お米さん。

（ト大五郎、お米を呼止め、お米が見返る間に、お米の前に廻つて遮る。お米は可厭奴に逢つたと云ふこな

しにて。）

お米　私、いま急ぐんですから。

（ト駈抜けようとするのを、大五郎は又遮り。）

大五　お前さんの急ぐ事も、其用事も知つてるんだから、其で止たんだぜ。

お米　何だか知りませんが、何卒通してお呉んなさい。

大五　通さないたア云はないがね、晋さんなんぞへ、心中立するなア詰らなからうよ。

お米　何でも能う御座んすから。

（トまた駈抜けようとするのをまた止める。）

大五　お妻なんて悪婆に魅かれてる晋さんだよ。詰らねえから止すが可いよ。

（トお米は無言にて駈抜けようとして、また遮ぎられ、段々下手へ来る。）

大五　お米さん、お前、もう阿母さんから聞いてるだらう。え聞いた筈だよ。おいらのお神さんに欲しいともつて、疾から話が為てあるんだ。阿母さんは承知だつて云ふから、お前だツて諾否はねえ筈だが、此處で逢つたのが幸だ。乃公のお神さんに成る氣か、ならない氣か、鳥渡返辭を聞きてえんだ。お米さん、お前否ぢやアねえんだらう。え、何だね、唯た一言で可いんだ。成る氣か、成らねえ氣か、お米さん、おい、返辭をして呉れたつて可いぢやアないか。

（ト大五郎益々迫る、お米は無言にて、其虚を窺ひ、今しも其虚を得たので、つと上手へ駈抜る。大五郎が逃がさじと、お米の帶へ手を掛ける、お米は振返りさま、双手に力を籠めて突放し、一散に上手へ退場。大五郎は馬頭觀世音へ倒れ掛らうとして、危なく踏止つて、殘念さうに逃行くお米を見送る。

――幕――

二幕目

其一　上原晋太郎宅の場

舞臺は廻り縁附きの座敷より庭の體。上手に離れ座敷あり。前より下手は庭の拵へ也。室内は調度など更になく、わびしき有樣なり。

幕開くと晋太郎の母お霜、四十四五歳（絹物の古くよごれたる袷を着る）古き黒塗の火鉢の傍に、身體の加減が悪いといふ體にて坐り、其傍に松次郎薄蒲團に

くるまつて寝て居る。塚本賢亮、手鞄を膝の横に置き、今しもお霜を診察し了つたといふこゝろにて、聴診器を藏ひかけて居る、下手に伍八かしこまつて心配さうに打守る。

お霜　難有う御座います、伍八お手洗を上げてお呉れ。先生いかゞで御座いませうか。

（賢亮は伍八が不器用な手附をして持つて來た金盥にて手を洗ひながら。）

賢亮　左樣、少し熱はある樣ですが、なに大した事は無いでせう。

伍八　寢付かつしやる樣な事はありましねえかね。

賢亮　イヤ、そんな事も有るまいよ。なに〳〵ほんの一時の事だから、心配する程の事も無からう。

お霜　夫で安心致しました。昨晩なぞは大分苦しう御在ましたので、臥せる樣な事がありはしまいかと、心配したので御座いますよ。

（賢亮は巻煙草を出して吸ひ付ける。新家の娘お米登場。）

お米　叔母さん今日は、おや先生。

（ト挨拶する。）

賢亮　これは、お米さん、お變りもないかな。

お米　お蔭樣で別に……。

賢亮　阿母樣もお壯健で。

お米　はい、つい〳〵御不沙汰ばかし致して居ります。

賢亮　いや〳〵手前からこそ。

伍八　醫者樣にやアはア、成るだけ不沙汰の方が宜えだね。

賢亮　是りや一言もない、アハヽヽヽ。

お米　叔母樣また、惡いさうですねえ。

お霜　昨夜なんぞは、また胸が痛くツてね。

お米　熱でも餘つ程高いんですか。

賢亮　三十七度七分、脈搏八十一、高熱の方でもないですな。

お米　何うして左う弱いんでせうねえ。

（お米は心配さうにお霜の面を見る。）

賢亮　なに、或は流行感冒の氣味かも知れないですが、熱は低いから夫程氣遣ひな事は無いです。

お米　左樣で御座いますかねえ。

伍八　お袋樣の惡いてえと、おらはがん〳〵頭が痛えだ。

（お霜とお米に嬉しき樣子。）

賢亮　いや、伍八どんの主思ひは、實に感心しますな。

お霜　伍八が此樣にして吳れますので、どれほど氣丈夫だかしれませんよ。
お米　全くですね、叔母さん。
伍八　今おやアもう、お袋さまばかりだから、心配でなりましねえ。
賢亮　粉藥を進げますが、少し飮み惡くいかも知れないですから、砂糖でも交ぜてな。
お霜　難有う存じます。
（お米は後前を見て、晋太郎の影の見えぬを、物足らぬ樣な面付、少し聲を低くして、お霜に對ひ。）
お米　叔母さん、義兄さんは。
お霜　今日も朝から見えないのだよ。
お米　まア、さうですか。
（トお米も手持不沙汰なり。）
賢亮　何處へか、出掛けられたですかな。
お霜　はい、いえ相變らずで御座いましてね。
（お米は溜息つき、お霜の窶れた顏色を氣にする樣子にて。）
お米　叔母樣、大變に顏色が惡くなつた事。
お霜　さうかねえ。
お米　いろ〱心配お爲だからですよ。
伍八　弱らつしやるも無理はありましねえ、おらでせえくさ〱するだもの。
賢亮　いや、直きに御全快です。
（お霜は仕方がないと云ふ思入。）
お霜　いえ、最う持病も同樣だからね。
お米　だつて、私、見て居ても辛んですもの。
お霜　なあにね、此方もう打遣つて置くほか仕方がないんだから、心配してお吳でないよ。
お米　それでもねえ。
（トお米は尙ほ氣遣はしさう、お霜はふと聞耳立てて。）
お霜　伍八や、何方かお入來の樣だよ。玄關へ行つて見てお吳れ。
伍八　ほんに、聲しる樣だ。
（ト伍八退場。）
お米　義兄さんがお歸りぢやないか知ら。
お霜　でも何だか大勢の樣だよ。
賢亮　私はそろ〱お暇しますかな。
お霜　まア、お宜しいでせう。

(此時どや〳〵と、間大五郎、(好みの打扮)山本藤吉恩田吉次(二人共間の子分)入來る。跡より伍八續いて登場。何れもよき處に住ふ。)

お霜　おや、間さん、おいでなさいまし。

(間は鳥渡會釋。お米の居るのを見て、少し都合が惡いと云ふ心地にて、賢亮にも鳥渡默禮。)

大五　まだお小さいのが惡るいんですかい。

お霜　いえ、私が惡いので、どうも困り切ります。

大五　晉さんが見えない樣だが、御留守ですかい。

(お霜は答辭に窮した體で。)

お霜　はい、鳥渡出まして。

大五　そいつは、困つたなあ。

(お米と伍八とは大五郎が何を云ひ出すかと、心配さうに見守つて居る。)

賢亮　間さん、大分斯う、夏めいて來ましたな。

大五　左樣さ。

賢亮　新綠の眺といふやつは、花にも劣らぬ風情ですな。

(大五郎は答へるも面倒らしい顏付。お霜は賢亮に氣の毒さうに。)

お霜　左樣で御座いますね。

大五　(大五郎は苦り切つたる樣子にてお霜に對ひ。)晉さんは、直ぐにや歸んなさらねえですかい。

(お霜はいよ〳〵當惑さうに。)

お霜　はい、最う歸るだらうとは思ひますが。

大五　晉さんが居なくても、どうも仕方がねえ、お霜さん、御氣の毒だが、今日は此家邸を受取に來たんですぜ。

お霜　え。

(トお霜と伍八は術なき面付。お米は、吃驚する。賢亮は態と意外だと云ふ顏付。)

大五　お霜さん、斯うなるなア、疾から解り切つてるんだ。

お霜　そ、夫はもう、左うで御座いますけれど。

大五　僕だつてね、藪から棒に、こんな事は云ふんぢやアねえ、待てる丈けは待つて上げた積りだ。

お霜　御尤で御座います、夫につきましては、只今、お願ひ申します積りで……。

(お霜は喉が詰つて、物も云ひ得ぬ體。)

大五　左樣ですかい。何を云ひなさるんだか知らねえが、今度といふ今度こそは、最う肯かれませんや。待つと云つても、大抵方圖があるだらうぢやアないかね。

お霜　は、はい、其は御尤さまですが。

お米　（ト何と云つてよいのか困つた體。）叔母さん、義兄さんも御不在ですしね、其事をお話し申してね。
（ト小聲で云ふ。大五郎はお米の口から晉太郎の事を云つて、お霜を庇護ふやうにするのが、殊の外氣に障る顏色で、苦々しく見遣る。）

お霜　晉太郎も、不在の事で御座いますから。

大五　晉さんの不在の事ア。先刻から承知して居まさあ。始終お茶屋に潛浸になつて、滅多に自宅にや居ねえ人だねえ、お米さん。

お米　最うお歸りでせうねえ、叔母さん。

大五　晉さんが居ようが居なからうが、話の筋は變らねえんだ。
（お霜お米伍八當惑のこなし。大五郎の子分吉次。）

吉次　旦那、手取早く遣付けた方が、世話なしで宜うがすぜ。
（ト伍八吃驚したこなしにて。）

伍八　まア待つて呉らッせえ。何云ッたつても、小旦那がはア、戸主だからのう。
（大五郎は伍八の語は耳へも入れず、お霜に對ひ。）

大五　ヘン、立派なお戸主さまだ、自己の身始末も出來ねえで、他人に尻を拭かせるたア、立派なお戸主さまさ。お霜さん、お前さんも宜い息子さんを持つて、お幸福だね。
（ト大五郎はわざとお米に掛けて云ふ。お霜は悔しいといふ思入、お米はあるにもあられぬ介。伍八も晉太郎の歸らぬのに氣をもむこなし。）

お霜　モウあんな役去者で御座いますから、人さまに御迷惑ばかり掛けまして……。
（トお霜面目なきこなし。賢亮わざと見かねたと云ふ思入にて。）

賢亮　間さん、御當家の御事情も止むを得ん事で、いかにもお氣の毒ですから、こゝは一つ大腹中の間さんだ、晉太郎さんが歸られるまで、猶豫して下さる譯には參りますまいかな。

大五　塚本さん、お話だがね、晉さんが歸つたッて、矢張待つて呉れに極つて居まさア。斯う云つちやア何だが、晉さんに五百圓はおろか五十圓もむづかしうがさア。それもね、裁判に持出さねえ中なら、話合の付かねえ事もなかつたんだがね、もう裁判が確定して了つた今になつ

ちやア、一寸逃の仲裁なんざ聞いちやア居られねえや。

賢亮　いや、貴方の方に無理はないですが、併しまた一方を考へると何も御氣の毒で。

大五　塚本さん、僕やお前さんにも言分があるんだよ。

賢亮　ヘッ拙者にッ。

（ト聞の語調かはる、賢亮ひやりとした介。）

大五　おい先生、お前さんだつて、滿更對岸の喧嘩の氣ぢやア居られめえぜ。

賢亮　ム、。

（ト賢亮當惑のこなし。）

大五　此家の事で、晋さんに口添へしたなあ、塚本さんお前さんぢやねえか。

賢亮　それは左樣です、併し、その、實は、其の……。

大五　實は其が何したんだ。お前さんだつて幾許か責任が付いてるんぢやねえか。

賢亮　そんな積りぢやなかつたんですが。

大五　何だ積りでねえ、串戲云ッちや不可ねえぜ。半分はお前さんを信用して居たんだ。

賢亮　夫は何うも、實に。

大五　この家の處置が附きやア、僕やお前さんの方にもかかる氣んだ。

賢亮　是は何うも、大した事に成りましたなあ。何分何うか、お手柔かに願ひたいので。

（ト頭を掻く。）

大五　塚本さんの方は、まア後にして、おい吉公、手前達二人で手傳つて日の暮ねえ内に、當家の人に片付けて貰ふが可いや。

吉次　左うしやせう。

藤吉　是でも些つたア、がらくたが有りやすからね。

吉次　おい手傳はうぜ。

藤吉　ヨシ來た。

（ト吉次藤吉は立掛る。先程よりこの有樣にきよときよとして居た伍八は、此時兩手を揚げて押止めて。）

伍八　まゝ、待つて呉らつせえ、待つて呉らつせえ。

（トおづ〳〵と大五郎の方ににじり寄つて。）

伍八　聞の旦那さま、お願えで御座えますが、こゝの處は何うかはあ、待つてお貰へ申してえで御座えやすだ。

（ト叩頭する。）

大五　伍八どん、折角だが、今更仕方がねえや。そんな事を云ふ手間で、片付物でもした方が宜いぜ。

伍八　旦那さま、おらが一生のお願えだ、まゝ肯いて下せえよ、今追つ立てられたッてはア、行く先もありましねえだ。

大五　そんな事を、おいらに云つたッて仕樣がねえや。お前達の脊中にやア法律ッて云ふ火が着いて追立てるんだから、出て行くより外はあるめえぜ。

（伍八は暗涙を含みて、少時無言。軈てまた大五郎に對ひ叩頭して。）

伍八　旦那さま、あれ見て下せえよ、坊つ樣は寢て御座るだし、お袋樣も病氣で弱つて御座るだから、落着く目的もねえに、追つ立てられて、何う成りますだよ。

（ト手拭で涙を拭く。）

大五　さうだな、そりや氣の毒だ。氣の毒なゝあ百も承知だが、何も仕方がねえ。他の行先の心配まで仕ちやあ居られねえよ。

伍八　そ、其處でがす。お願えといふなあ其處でがすよ。無理と知りつゝお願え申すも、斯う申しちやあ何だけれど、お前樣の身代なら、十日や二十日待ッて呉れさッしやつても、家に不自由さッしやる事はねえ筈だ。僕等が方はさうでねえ、この家を離れて見さッせえ、路頭に迷はねえぢやアなりましねえだ。

大五　其の怨言なら、晋さんに云ふが可からうぜ。

伍八　そゝさうかも知んねえけんど、間の旦那さま、おら晋太郎樣の爲めに、お前さまにお詫びをするぢやねえでがすよ。勿體無えけんど、亡くならしやつた大旦那に成り代つて、お前さまに、お頼み申しますだ。

（ト聲を顫はし泣きながら云ふ。）

大五　おい、日が永えたッて、暮れる日だ、便々と泣事を聞いちやア居られねえ。

伍八　大旦那の好誼も、お前さま、もう忘れたゞね。

大五　なんだと。

伍八　大旦那さまの好誼を、忘れてるだよ、お前は。

（ト伍八、拳を握る、お霜止めて。）

お霜　コレ伍八、最う何にも云つてお呉れでない。間さんのお云ひなさる通り家邸をお渡し申さうよ。

お米　あれッ、叔母さん。

（トお霜大儀さうに立ちかゝり、ひよろ／＼となる、お米支へる。）

伍八　お袋さま、お前さまは思切の能え事云はッしやるけんど。

お霜　だッてもう、此が一日や半日延びたつて。

伍八　そッ其もさうだけんど。

お霜　もう諦めて、お前は松坊を。

伍八　坊さまを負へなら負ふけれど、餘り忌々しいだから。

お霜　伍八、お前、私の云ふ事を聞かないのね。

（ト伍八も今は詮方なく。しぶ／＼と大五郎等の前を通り上手へ行く。お霜お米兩人松次郎を伍八へ脊負はせる。松次郎目をさます。）

松次　睡いんだよう。

お米　おゝ可哀想ね。

（ト お米松次郎を介抱する。）

松次　寢んねするんだよう、いやだよう。

（お霜お米泣く。）

伍八　坊さま、好兒だでね、少時の間だからおらが脊中で寢んねして御座らつせえ。いまにゆつくら寢かして、樂にして上げますだ。坊樣偉えだ、偉え、偉え大將樣になるだものね。

松次　いやだ／＼、寢んねするよう。

伍八　無理は無えだ。いやだつぺえよ。

（ト伍八は漸く松次郎を賺す。お米はお霜がまとめた風呂敷包を抱へ立つ。）

お霜　間さん、お約束通り慥かにお引渡し申します。

大五　がらくた物は、物置に投込んで置いて遣るが可いや。

お霜　先生、其内お目にかゝります。

賢亮　いや、是は、先づ御機嫌克う。折角御大切に……。

（伍八は怨めし氣に大五郎賢亮、其他二人を見廻はしお霜お米に續いて退場。大五郎と賢亮は旨くいつたと云ふ思入。）

其二　上原家門外の場

上原家門外の體、舞臺中央に屋根附の門左右塗塀、塀外に立木あり。門の屋根塀などに、所々破損の跡見え、坐ろに昔名高かりし豪家の俤を偲ばしむ。

幕開くと、伍八、松次郎を脊負ひ前に立ち、つゞいてお米風呂敷包を抱へ、お霜を介抱しながら、門内より登場。

伍八　お袋さま、何處へ行つたら可かつぺいねえ。

（ト伍八當惑の介にてお霜に問ふ。お霜も何處と云ふ目的もなき介にて。）

お霜　さうさね、私も今、其を考へて居るのだがね、全く

親類が無いと云ふのでないし、何處へでも頼めない事はないかね、さうしたなら、晋太郎が尚々肩身が狹からうし、成らう事なら、何處か遠い所へでも行つて了ひたいよ。

お米　叔母樣が其樣事をお云ひなさると、私は實に悲しいよ。

お霜　此限逢へないと云ふのではないし、左う氣をもんでお呉れでないよ。

お米　せめて義兄さんが居て下すつたら、何うにか仕ようがあるでせうのにねえ。

伍八　あゝあ、何處を歩いて御座るだか。

お霜　歸ッたら、嘸吃驚おしだらうね。

伍八　御先代さまも、嘸ぞ口惜かんべい。この家宅までも、人手に渡すだもの。

お霜　夫を思ふと、儂は最う。

（ト袖を面に押當てゝ泣く。）

伍八　小旦那も惡りいけんど、松葉屋の阿魔ッちよが爲る事だ。えゝ何して遣んべい。あゝあの胴畜生めッ。

（伍八は齒を噛んで怒る。）

お米　義兄さんもあんまりだね。

（お米は、晋太郎を怨む思入。）

（夕鴉が鳴き連れて行く、伍八仰いで見て。）

伍八　おゝ、鴉も塒に歸るだに。

お霜　儂達は何處へ行つたら可いだらうねえ。

（ト悄然となる。間の子分吉次、門を閉めに來た心にて門内から差覗き。）

吉次　やア、奴等ア、まだ、寛談ついて居やがるんだな。足元の明るい中に、首でも縊りに行きやがれッ。

（ト吉次手荒く門を閉める。お霜、お米、伍八、口惜がる思入。門を締めた音にて、松次郎眼を覺し。）

松次　お家に歸らうよう、お家に歸らうよう。

伍八　おゝ、今歸りますだ。コレ坊樣、お前さまは偉えからね、早晩あの家を取り返すだよ。

（トお霜も伍八も見返つて泣く。お米も涙に呉れて居たが、お霜に對ひ。）

お米　叔母さん、まア何にしても、私の宅まで御出でなさいな。

お霜　難有う。だがねえ、伍八。

伍八　今夜は私が懇意しる、あの三五郎が家に泊めて貰ひますだ。

お霜　御氣の毒だねえ。
伍八　さア御座らつせい。
お米　叔母さん、私も送りますよ。
（お米はお霜の手を取りて、段々下手へ行く。伍八も振り返へり／＼三人終に退場。其跡にて賢亮耳門より登場。間めッ旨い事をしたと云ふ心にて、門を振返り直ぐに花道附際まで來た時、花道より松葉屋の歸途といふ心にて晋太郎登場。）
（晋太郎と賢亮は花道附際に行きあふ。）
賢亮　おゝ晋さん。
晋太　先生、何處へお行でなさいました。
賢亮　えッ、何處へ、何處へ、どこぢやないよ。晋さん、何したもんだね。
晋太　何うしたつて、何がです。
賢亮　何がですぢやないよ。晋さんの樣に暢氣でも困るね。君が居なかつたので、僕まで大いに苦しめられたよ。
晋太　へえ、左うですかね。
賢亮　左うですかねは驚いたね。全體君は、是から何處へ行くんだ。
晋太　はゝゝ、先生、是でも家がありますさあ。
賢亮　ところが無いね。あゝ飛んだ事さ。
晋太　何を云つて居るんです。
賢亮　君こそ何を云つてるんだ。君の家は無いんだよ、既う。
晋太　はゝゝゝ先生、串戯も大概にして下さい。
賢亮　左う暢氣だから、斯ういふ事に成るのだ、實に歎かはしい事さ、君の家は既に他手に渡つたよ。
晋太　えッ。
（ト半信半疑。）
賢亮　君は疑つてる樣だが、事實が證明してるからね、それッ彼通さ。
晋太　眞箇ですか、先生。
賢亮　まだ疑がつてるのかね、まあ行つて見ろが宜いさ。
（ト賢亮足早に下手へ退場。晋太郎は俄に色を變へたが、何は半信半疑の體にて、つか／＼と門前に行き、耳門を開けんとして開かざるにぞ初めて打驚き、大門の扉を押せどもまた開かず、俄かにうろ／＼し出して）
晋太　伍八、伍八、開けてお呉れよ。おい、開けるんだよ。伍八、開けるんだッて云ふのに。開けないのか。開けるんだ、開けるんだ。

藤吉　（ト夢中に成つて叩く。）
誰だい、騒々しいやい。
（ト耳門を開けて藤吉首を出し、晋太郎が矢庭に入らうとするのを突き戻して。）

藤吉　吃驚すらい、こん畜生、火の玉の様な野郎だな、突然にころげ込まうとしやがつて。

晋太　おツ、お前は何だ、退いてお呉れ。お退き。えゝ退かないか。
（ト晋太郎また入らうとする、藤吉は又突戻して。）

藤吉　無理に入りやがると、野郎とッちめるぞ。

晋太　し、失敬なッ。おれを何だと思ふんだ、こゝの主人だぞ。

藤吉　ふざけるない。此家の主人が聞いて呆れらア。こゝは間の旦那の家だい。

晋太　えッ、間が、大五郎がッ、むゝ。
（ト晋太郎口惜しき思入にて。）

晋太　上原晋太郎が、晋太郎が用がある、大五郎を呼べ、間を呼べッ。

藤吉　やかましいやい。あの婆も河童野郎も、疾に出て失しやアがつたんだ。がらくた物が欲しけりやあ、背戸から田圃におッぽり出して置いたから、さつさと持つてうしやがれッ。

晋太　むゝッ。
（トまた門内へ入らうとする。）

藤吉　えゝしつゝこい野郎だなあ。
（ト力任せに胸を突き、荒らかにくゞり戸を締め切る。晋太郎はよろめいて見事に仆れ、切石で膝頭を突き破つた思入、門を睨んで無念の形相。）

―― 道具廻る ――

其三　上原新家背戸の場

舞臺中程より下手田舍屋の物置より裏口（縄暖簾を掛く）を見せ、物置の傍に井戸、上手より奥へ掛け見晴の田圃。上原新家、お米母お篶住居背戸の體。幕開くと直ぐにお篶、五十歳前後、好の打扮にて縄暖簾の内より登場。お米が其邊に見えぬかと云ふ心にて、四邊を見廻し、晷を仰いで。

お篶　もう日が暮れるのに、何處をほッつき歩いて居やがるだらう。
（ト井戸端に行き、田圃の方を見て。）

お爲　晋の野郎の處ばかし行きやアがツて……歸つたら、思入　油をとつて遣んねえぢやア。

（ト物置に用のある心にて入つて了ふ。）

（上手より百姓娘二人お兼、お高、何れも十八九、野良歸りの心にて、お兼は鍬を擔げ、お高は目籠を脊負ひ、好の打扮にて登場。今まで互に談話を爲て居た心にて。）

お兼　あれツ、虚構ばツかり。私だツて勘さん見たいな彼樣人を、いやな事だよ。

お高　だツて、一同が左樣云つてるんだもの。勘さんの方でもお兼さんを。

（ト打たうとする、お高逃る心にて身をかはして。）

お高　だツて、お兼さんは美女だツて、勘さんも勝さんも賞めてるもの。

お兼　お止しツてば、お高さん。

（トお兼、此處はお米の宅の背戸と云ふ心にて家の方を見ながら。）

お兼　美女ツて云ふのは、此處のお米さんの事さ。

お高　お米さんは別だもの。だけども、上原樣の小旦那が彼樣だから、可愛相だね。

お兼　全くだね。それに何だツて云ふよ、お米さんはもう小旦那のお神さまにや爲ないんだツて。

お高　まア何してなの。

お兼　何してツて。あのね。

（トお兼は聞かれては悪いと裏口を見て、誰も居ないから話しても可いと云ふ介にて。）

お兼　お米さんの阿母さんね、あのお爲婆さんが、もう晋さんには遣らないツて云ふとさ。

お高　だツて許嫁だのに。

お兼　許嫁だつて、上原さまの身代が悪くなつたからだツて。

お高　まア酷い婆さんだ。

お兼　お米さんが上原さまに出入しても怒るとさ。

お高　薄情な婆さんだね。

お兼　お米さんを遣る氣で、お金のある人を探してるツて云ふよ。

お高　まア驚いた。お米さんは泣いてるだらうよ。

お兼　だから世間で、鬼婆ツて云ふんだよ。

お高　全く鬼婆だもの。鬼婆ツて怒鳴ツて遣りたいよ。

お兼　怒鳴れるなら、怒鳴つて見な。

（トお爲二人の談話を聞き腹の立つ介にて物置より出來る。お兼とお高は吃驚りして、下手よき處まで逃げる。）

お爲　逃げたッて、面ア知つてるだ。お兼もお高も、晩に出掛けて行くから、忘れねえが可い。

（トお爲が怒鳴る語の一句〳〵に、お兼とお高は可怖しげに顏を見合せては後退りして居たが、終に一散に逃げて下手に退場。）

（お爲は尙ほ腹立しげに沸々口小言を云ひながら、井戶端に行き水を汲んで手を洗つて居る。）

（お米は上原の叔母等の立退を、三五郞の家まで送つて歸つて來た心にて、花道より登場。花道中程まで悄然とし垂頭いて來たが、無意識に足が止つたほどの心にて立止り、叔母や松次郞の上を懷ふ樣子にて揚幕の方を見て、淚を拭く介などありて、軈て花道附際に來る。お爲は井戶端からお米を認め。）

お爲　やツと歸つて來やがつた。

（ト怒の聲を高くして。）

お爲　お米、お米。

（此にてお米はお爲の顏を見て、早く本家の大變を知らせればならぬと思ふ心が俄かに動いた體にて。）

お米　阿母さん本家が、たゝ大變だよ。

（ト云ひながら母の傍に驅寄り。）

お米　阿母さん、晉さんの家を、聞に、とゝ奪られて了つたよ。

（ト泣く。お爲はお米の泣くのが腹の立つと云ふ思入にて。）

お爲　晉の家なんざ、何なつたつて可いぢやないか。

お米　だツて、だツて。

（ト悲しさに聲が反跳んで、云ひたい事が云へない介にて泣く。）

お爲　ピイ〳〵ピイ〳〵、何を其樣に泣くんだ。何が悲しいんだ。晉の事べい云やアがつて、阿母さんの事なんか、思つても居ねえんだらう。何か云ふと、二言目には晉の事だ。晉が何だ、放蕩ばかし盡しやアがつて、阿母さんなんざ、彼奴の面を見るのも可厭だ、聲を聞いても慄然とするよ。何だツて又本家に、彼樣馬鹿野郞が生れやがつたらう。考へても腹が立つよ。目黒の上原ツて云へば、昔しツから聞こえた大身代だよ。それを彼の野呂作の晉めが。

お米　阿母さん、晋さんの讒訴なんか何時だツて云へるよ。今其樣事を云はないだツて、本家の叔母さんだの、松ちやんだのゝ事を考へてお遣りが可いよ。叔母さんが松ちやんと今夜の居所にも困つてお居でだから、阿母さんにだつて、親類たしね、出來ない迄も力になつてお上げよ。二日でも三日でも可から、家に引取つて。
お爲　馬鹿な事をお云ひ。本家にはね、假令野呂作だツて、晋太郎ツて云ふ男が附いてるんだよ。宅を見るが可い、阿母さんとお前と、女ばかしの力で、辛と取續いてるんぢやアないか。他の世話なんぞ燒けやしないよ。
お米　ぢやア、何したつて不可いの。
お爲　此貧乏世帶で、人の世話なんか眞平だ。
お米　ぢやア、我家が貧乏いから不可いツて云ふの。
お爲　さうさ。
お米　我家を貧乏くしたのは、誰なの。
（トお米は母の無情に激して、つい母へ突掛る心が起つた樣子。）
お爲　何だツて。
お米　我家を貧乏くしたのは、阿母さんぢやないか。
お爲　えツ、何だツて、此子は飛んでもない事を云ふよ。
お米　だツて、世間では、みんなが左樣云つてるよ。お米さんの阿母さんの心掛が惡いから、
お爲　え、虚構を云ふと承知しないよ。
お米　だつて。
お爲　えゝ、だまらねえか。親に其樣口を利きやがつて。
（トお爲怒つてお米の手を取り、家内へ連れて行かうとする。）
お米　いたいぢやないか、阿母さん。
（トお米はお爲の手を振拂ふ。お爲また手を捕らうとする、お米爭ひ、お爲下手、お米上手に入代る。途端に晋太郎田圃傳に來た心にて、上手奥より登場。お爲お米の爭ひ居るを見るより止る積りにて、足早になつた時、早くもお爲が認めて。）
お爲　野呂作が來やアがつた。
お米　えゝ晋さんか。
（トお米は振返つて、晋太郎を見るより駈寄りたいと思ひながら、流石に母に氣をかねる心にて、凝乎と見て居る。）
（晋太郎はお爲とお米とが爭を止めて、此方を見戍つて居るので、急に面目なくなり、頭は垂り、歩は鈍

り、進まうとして進みかぬる介にて近寄る。)
(晋太郎が近寄るに連れて、お爲は漸次に横を向いて、態と取付端なく仕向ける介。)
(お米は溜らなくなつて聲を掛る。)

お米　晋さん、晋さんの家の事を知つて居て。
(晋太郎は一入面目なき介にて。)

晋太　もう、米ちやんも知つてるのかい。

お米　知つてるのかツてね、私あの時叔母さんの見舞に行つてたんだもの。

晋太　そツ、そうか。米ちやんも居たのか。それでは、米ちやんは知つてるだらう。

お米　えツ、何をなの。

晋太　何をと云つて、私の。
(ト云ひにくいこなしにて、)

晋太　私の、阿母さんや、松坊が何處へ行つたか、米ちやんが其時居たつて云ふなら、何處へお行でだツたか、知つてお居でだらうね。
(此時お爲は晋太郎の方を向いて、お米が答へようとする間に、)

お爲　晋さん、おいで。

晋太　ヘツ、叔母さん、御無沙汰を致しました。

お爲　何いたしまして、私の方からこそ、御無沙汰ばかしさ。晋さんも丈夫の樣だし、皆さんも御變りがないだらうね。

晋太　ヘツ。
(トばかりで、晋太郎は術なき介にて少時は何にも云ひ得ず。)

晋太　叔母さん、どうも面目がありません。
(晋太郎面目なきこなし、お爲は態と遠恍けて。)

お爲　晋さん、何だねえ、出拔に、面目ないなんて。

晋太　叔母さんはまだ、御存じぢやアないんですか。

お爲　私が知らないかツて、何樣事なの。
(晋太郎は面目なくて自分の口から云はれぬ介、お米は母の仕向を僻りだと思ふ思入にて。)

お米　阿母さん、知つてお居でぢやないか。

お爲　えツ、私が知つてるツて。さうかねえ、何樣な事だらうね。

お米　阿母さんは知つてる癖に。ほら、私が歸つた時話した事、晋さんの家を、あの間に奪られた事なの。

お爲　えツ。

お爲　（ト御出らしく吃驚したこなしにて。）私はまた、お前が戯言を云つてるんだと思つたよ。

お米　戯言に云へる事ですか、其樣事が。

お爲　ぢやア、まつたくなのかい。まア、驚くぢやアないかね、え〻晋さん。

晋太　どうも、叔母さんにも面目がありません。

（ト顔も上げ得ない介。）

お爲　晋さん、お前家まで無くなして了つて、阿母さんや松坊を何處へお遣りだッたかい。

晋太　そッそッ其事です。私が居ない時でしたから、ど〻何處へ行つたんだか、多分新家の叔母さんの處だと思つて。

お爲　私の處にはお居でぢやアないよ、また來られた義理でもないからねえ。

お米　阿母さん、そんな事を云ふもんぢやないよ。

お爲　默つてお居で、お前なんぞが、口を出す幕ぢやアないよ。

（トお爲は覺えず氣色ばむ。晋太郎を、乾度見据ゑて。）

お爲　晋さん、まアお前と云ふ人には、實に呆れて物が云へないよ。何處の世界に、茶屋酒に現を拔かして、親や弟を見え失する人があるだらう。本當にまア、何と云ふ人だらう、お前と云ふ人は。

（トお爲はじり〳〵と晋太郎の傍に寄り。）

お爲　おい、晋太郎、上原と云へば何だよ、權現さま時代からの舊家だッて云ふし、目黒瀧谷大崎きつての財産家だッて云はれたんだよ。其上原を位牌の置き所もない樣に、能くもお前は爲てお呉れだね。お前、彼の家には何だよ、御先祖さまの御神體を、御稻荷樣にして、庭の隅に祭つてあるんだよ。お前は能もまア、御先祖の御稻荷さま〻で、他人へ渡してお了ひだつたね。

お米　阿母さん、もう可いぢやないかね、過ぎた事なんか云はないだッて。

お爲　また口を出すよ、引込んで居な。

晋太　米ちやん、私が悪いんだから。

お爲　斷らないだッて、悪い事は知れてるよ。それもね、商賣の手違たとか、見込んだ投機が外れたんだとか云ふのなら、まア詮方がないが、能くまア惜氣もなく、松葉屋の古狐に注込めたものさ。古狐に注込むお金は借りられても、親類を貢ぐお金は借りられないと見えて、能く

お米　も、私へ辛く當つてお呉れだつたね。阿母さん、もうお止しよ。阿母さんは始終、晋さんに迷惑を掛けてた癖に。
お篶　小うるせえ孩兒だ、默つて居なツ。
晋太　叔母さん、何卒もう何です、どうせ私が悪いんですから。
お篶　へん、悪いと云ヤア、御先祖に濟む氣かい。
晋太　それは何ですけれど、もう私は覺悟を極めてるんですから。
お篶　へえ、覺悟を極めてるツて。お前の覺悟なら、どうせ碌な覺悟ぢやアなからうさ。
晋太　さうでせう。何せねえ。米ちやん、左樣なら。
（ト晋太郎下手へ行かうとする。お米氣遣はしげに。）
お米　あれ、晋さん。
お篶　晋太郎、待ちな。
晋太　何です。
（ト晋太郎立止つて振返る。）
お篶　お米はもう、お前とは緣が斷れたんだよ。
（晋太郎屹度なる。）
お米　晋さん、うそだよ。

お篶　お米は間さんに遣る約束だから。
晋太　えツ、間に。
（ト口惜しきこなしにてたち〳〵となる。）
お篶　途中で逢つたつて、指も差す事はならないよ。
晋太　承知です。
お米　晋さん、いやだよ。私や何時までも晋さんの。
お篶　何を云ふんだ。
お米　お神さんだよ。
（トお米、晋太郎の傍へ行かうとする。お篶支へる。）
晋太　米ちやん、もう逢はないよ。
（ト晋太郎下手へ駈出す、お米はあるにもあられぬ思にて。）
お米　晋さアん、叔母さんと松ちやんはね。
（晋太郎また振返る。）
お米　叔母さんと松ちやんは三五郎の家だよ。
（晋太郎は屹度首肯き下手へ駈込む。お米はお篶に支へられたまゝ、袖を顔へ當てゝ泣き伏す。お篶は氣味よさゝうに下手を見送る。）

――幕――

三幕目

目黒不動瀧の場

舞臺は目黒不動境内。正面中央より上手へ斜に石段を見せ、石段の中程左側に大樹立てり。下手は瀧壺、籠堂。上手は女坂の書割、其上一面の山、樹木鬱蒼として、淋しき夜景なり。

幕開くと、上手より晋太郎お米、今迄参詣人を避け居たる心にて登場。

お米　晋さん、是から何うするつもりなの。

（ト お米、晋太郎の心配らしく俯向き居る顔を覗き込む。）

晋太　何うと云つて、先刻から云つてるやうに、僕は最う仕様がないんだ。

お米　そんな事を云つてちやア、叔母さんや松ちやんが、仕様がないでせうよ。

晋太　夫りやあ左うだけれど、米ちやんと彼處で逢ふまでに、いろ〳〵考へて見たんだがね、どうも好い工夫が付かないから、困つてるんだ。

お米　ほんとうに困るのね、何うしたら宜いんだらう。

晋太　外に相談する人もないんだし、松葉屋に行つて見やうと思つたけれど、（後獨白の様に）家を取られたなんて、極りが悪るくつて、そんな事は云つて行けやしないし。

（お米呆れもし嫉ましくもあるといふ心にて、ぢつと晋太郎を見て。）

お米　晋さんは、お妻さんでなきやあ、外に相談する人は無いの。

晋太　お妻でなきやあ、誰に相談したら宜いだらう。

お米　儂には、判らないけども、晋さんが克うく考へて見たら宜いでせう。

晋太　お妻でなきやあ、米ちやん許の叔母さんだけれど……。

（ト兩人しばらく無言。お米思入あり て。）

お米　晋さん、やつぱし晋さんの阿母様に逢つて相談した方が宜いわ。

晋太　だつて私は、何うしたつても、阿母様には逢へないよ。先刻米ちやん家から歸りに、三五郎の家の傍まで行つて見たけれど、何うしたつて逢へないもの。

お米　儂が一緒に行つたら可いでせう。

晋太　夫でも可いけれどね、まアお待ちよ、お妻に逢つてからでも宜いだらう。

（お米はまだ其様事など云ふ思入。）

お米　儂の云ふ事だつて、偶にやあ肯いて與れたつて宜いわ。

晋太　だから、行かないと云つてやしないよ。

お米　だつて、お妻さんに逢つてからで無きやあ、行かないつてお云ひぢやないか。

晋太　逢つてからだつて宜いだらう。

お米　晋さんはお妻さんの事ばつかし。

（ト　お米はくやしき介。晋太郎や丶不平の體にて。）

晋太　米ちやんも、お妻の事を悪るく思つてるんだね。皆ながなぜそんなに、お妻の事を悪るく云ふんだらう。米ちやん、お妻は悪るい女ぢやないよ。

お米　晋さんは、お妻さんと、來年は同棲にお成りだつて云ふ事だから、お妻さんより外に好い人はないんでせう。

晋太　誰がそんな事を云つたんだよ。

お米　自分が云つた癖に。

晋太　い丶加減な事を云つてるよ。私が何時そんな事を。

お米　あら云つた癖に。ほらあの、馬頭様の藪の處で、お妻さんと二人でお話しだつたのを、儂伍八と二人で聞てたよ。

（晋太郎ぐつと詰る。お米は夫見たことかといふ介。）

（花道より阪本源次、松葉屋に來て居た心にて、不動堂へ参詣の爲め登場。）

（お米は人の足音を聞き、晋太郎を促し上手の方へ徘徊する心にて退場。）

（源次石段の下まで來り、上を見上げて。）

源太　今夜はいやに蒸しやがるなあ。

（ト石段を上り行き、やがて其姿の見えずなりたる時、花道よりお妻登場、花道の中程まで來りし頃、あとより伍八、お妻をつけて來し心にて、片手に鎌を持つて登場。お妻は本舞臺の方を見て。）

お妻　親方は最うお山にお上りだつたと見えるよ。

（ト云ひながら歩み、石段の少し手前まで來し時、伍八つか〱と跳び寄り、突然に斬り付け、闇に混びた誤り空を切る。お妻は只ならぬ氣勢を感じて覺えず身を避す、伍八お妻の足音を目當にまた鎌を振り上げて。）

伍八　この阿魔つちよめッ。
（ト斬り付ける。）
お妻　アレッ、何をするんだよッ。
（ト飛び退く。）
伍八　汝殺して了ふだッ。
お妻　えッ、私を殺す……。
伍八　お〻殺さねえでか。
お妻　誰なの……亂暴だよ……私を殺すなんて……人違ひをしちやいけないよ……。
（ト逃げ廻りながら云ふ、伍八追掛けながら。）
伍八　人違えで無えだ。この松葉屋の阿魔つちよめッ。
お妻　まア私を殺すつて……アレーッ誰か來てお呉れよ。
（ト伍八追ひ廻し、お妻逃げ廻り、宜しく立廻りあろ。此の間上手より晋太郎怪しみながら出來り、お妻の聲を聞くと共に、つか／＼と駈け寄る。お妻は石段を五六段駈上る、伍八も追うて上りかゝるを晋太郎背後より抱き留める。此時月さし昇りて四邊を照らす。
晋太郎お妻を見上げて。）
晋太　お妻さんぢやないか。

お妻　お〻若旦那ですか。その人が私を殺すつていふんですよ。
（トお妻は晋太郎の來りしに稍心強く成りし介。）
（晋太郎は伍八が振り放さうともがくを猶抱止める。）
お米　晋さん、退いてないと怪我をおしだよ。
（トお米晋太郎を氣遣ひてハラ／＼する介。）
（源次は坂を下りかけて、下の動靜をうかゞふ。）
晋太　伍八、なぜそんな亂暴をするんだ。
伍八　この阿魔つちよ、殺さねえぢや置かねえだ。小旦那なぜ止めなさるだ。お前樣を欺くらかいて、邸宅まで失くさした古狐でねえかよ。お前樣も手傳つて殺すが宜えだ。
お妻　まあ、お宅まで間さんに奪られたんですか。
（トお妻驚く介。）
晋太　面目ないが、今夜から最う、寝る家も亡くなつたんだよ。
お妻　あら、間さんも實に酷い事をする人だよ。
伍八　間に罪をかづけて、汝べえ逃げようたつて、だめな事だ。
お妻　お前さんがそんな無理をお云ひだつてね、私にやあ

其樣覺えはないんだよ。
伍八　嘘べえ吐くな。夫婦約束を餌にしやがつて、小旦那をつり込んで居たでねえか。
お妻　夫の事なら、私の知つた事ぢやないんだよ。若旦那が閒さんと賢亮さんとに煽動られて、御自分ばかり、さう極めてお在でなすつたんだよ。
晉太　え、お妻さん、何を云ふんだよ。お前そんな氣だつたのか。
お妻　若旦那、こんな事を云つちやあ濟まないんですが、實は若旦那を、別に何とも思つて居たんぢやアないんですよ。
晉太　えゝツ。
（ト晉太郎驚き、伍八を抱止めて居た手を放し茫然となる。伍八も意外の介にて覺えずたぢ／＼と成る。お米も驚く介。）
お妻　若旦那、ようく考へて御覽なさいなね。閒さんにお取られなすつたお金と、私の許でお遣ひなすつたお金の高をお比較べなすつたら、私の方は百分一にも足りますまいよ。私が一度だツて、若旦那に無理なお金を遣はせた事がありますか。若旦那に無駄なお金を出させまいと思つて、私や始終止めてたんですよ。それと云ふのも、若旦那が閒さんに酷い目に逢つて居らッしやるのを、お氣の毒だと思つたからですよ。私だつて稼業ですもの、若旦那からお金を取らうと思やア、何樣にでも取れたんですよ。私が其樣事を爲たか爲ないか、考へて下すつたら、お解りなさるでせう。
（トお妻は伍八に對ひ。）
お妻　伍八さん、私は今云つた通り、若旦那を誑かして居たんぢやないからね、私を怨むのは止して下さいよ。今になつて、此樣事を云つたつて詮樣がないけれども、私が早く、若旦那を御斷申した方が可かつたんだよ。だけども、客商賣を爲て居て見ると、まさか左樣も行かないし……伍八さん、此事ばかしは、私が惡かつたんだから、若旦那にもお前さんにも、今此處で謝罪ますからね、何卒、私を怨まないで下さいよ。
（トお妻眞實見えて云ふ。晉太郎は初めて夢の覺めたるが如く、お米に對しても、面目なき介。お米は此にて晉太郎が本心に立歸るべき機を得たかと喜び、伍八も今更手出のならざる介。此内源次漸次に石段を下來り。）

源次　もし、上原さんの若旦那・私や彼處で聞いて居やしたがね、お前さんが全く、彼聞ッて野郎の欺瞞に掛つて居なすつたんだ。

（晋太郎も今は全く自分の非を悟つた思入にて。）

晋太　はい、私が全く、間の欺瞞に掛つて居たんです。今、お妻さんから話を聞いたので、私や全く夢が覺めたのです。

お妻　若旦那、私を怨んで下すちやアいやですよ。

晋太　な何に、お前さんを怨むものですか。私やお前さんにも面目ないよ。

お妻　あらッ、私こそ濟みませんよ。お米さん、あなたも嘸ぞ私が憎かつたでせうねえ、何卒勘忍して頂戴よ。

お米　いゝえ、怨んでなんか居やしませんよ。私は此で晋さんが本心に成つてお呉れかと、實に嬉しう御座います。

源次　もし、伍八さんとやら、お前も女なんぞを相手にしねえで、若旦那の力になつて、上原さんの身代を取返へす工風を爲なすつた方が可かアないかね。

伍八　はい、私も左樣思はねえぢやねえけんど、お前さま、今ぢやもう、差掛つて、御隱居さま置くべい小屋もねえでがすよ。

源次　そいつは何しろ御困りだらう。斯うしちやア何だね、私しや多寡が鐵道の人足だから、碌な御世話は出來ねえが、晋さんも阿母さんも、擧家私の家へ御居でなせえな。

お妻　私だッて、若旦那の御世話になつてるんですから、私の家にお置申したつて能う御座んすよ。

源次　お妻さん、お前が左樣思ふも道理だがね、お前の家やア客商賣だし、阿母さんも氣窮だらうし、何も乃公の方が可い樣だぜ。

お妻　それもさうですね、ぢやア、親方お頼み申しますよ。

源次　晋さん、伍八さん、左樣しなすつちやア何ですかい。

晋太　は、はい、難有うは御座いますが、見ず知らずのお前さんに、餘り厚顏しくつて。

お妻　若旦那、此親方の氣心は、私が能うく知つてるんですから、御遠慮なさる事はありませんよ。伍八さん、お前さんも左樣お爲の方が可いでせうよ。

（此前より伍八、源次お妻等の義俠に感激し、暗涙を催ほして居たが。）

伍八　お妻さん、私はア、お前さまに、えらく御無禮致しましただア。私謝罪るだから、何卒料簡して呉れさッせ

えよ。

お妻　なアにお前さん、譯さへ分りやア、それで可いんですよ。お前さん、料簡も何もありやアしませんよ。

源次　晋さん、伍八どん、聞ッて奴ア、質の能くねえ野郎だから、早晩見て居なせえ、乃公が首根ッ子を取捕めえて、晋さん、お前さんの復讐を、屹度してあげやさア。

お妻　私もね、彼人達の奸策を聞いた事もあるんですから、若旦那、今に復讐をして上げますよ。

晋太 伍八　親方、お妻さん、何卒可い樣にお頼み申します。

源次　それぢやア、そろ〳〵行きやせうか。

お妻　お米さん、御一緒に行かうぢやありませんか。

（ト一同立上る。）

——幕——

大詰

其一　間新宅門外の場

舞臺はすべて、間新宅の裏門外にて、上手寄りに門あり、生垣など結び廻し、手廣き構へにて、今日は婚禮と轉宅祝とを兼ねたる宴會の催しあると云ふ噂なり。

幕開くと、上手より近邊の百姓、鍬を擔げ來かゝり、下手より料理屋の出前持、出前の籠を擔ひて登場。兩人行き逢ひ、

百姓　喜八どん大した出前の樣だが、何家さ持つて行くだね。

喜八　今夜は間さんとこで、お目出度があるんだ。

百姓　おやあ、いよ〳〵お內儀さま來るだね。

喜八　そんな話だ。

百姓　あの人も運の宜え人だ、上原樣の屋敷さア手附かずで奪つて、おまけに小旦那と許嫁のお米さんまで引張込だゝア。

喜八　何だか知ねえが、世間ぢや、あんまり好かあ云つて居ねえ樣だ。

百姓　好く云はねえなあ當然だよ。彼樣に酷え事ばかりしるだもの、この先いゝ事はあんめえよ。

喜八　其處を考へると、お互に正直に稼ぐ事た。

百姓　左うだ〳〵、正直の頭にや神やどるてえだから。

喜八　まあ、せつせと稼ぎなせえ。

百姓　そのつもりで、早ら歸つて、草鞋でも作るべえか。

喜八　おいらも遲くならねえ内に、行くとしべえよ。

（ト百姓は下手へ出前持は裏門へ入る。花道より坂本源次（羽織着流し）聞より招かれた心にて登場。花道中程迄來ると、跡より松葉屋のお妻、好みの打扮にて登場し、源次の後姿を見て。）

お妻　おゝあすこに親方がお行での樣よ。

（ト足早に追付き。）

お妻　親方。

源次　おゝ、お妻さんか、お前手傳にしちやあ滅法遲いぢやねえか。

お妻　だつて、餘まり氣も進まないんだもの。

（ト兩人話しながら舞臺の中程に來る。）

源次　今日は大分客が來る樣子かね。

お妻　それ程大勢でもないでせうよ。親方の外に二人か三人、村の人を招ぶ位なもんでせうよ。轉居祝だゝア云ふけれど、婚禮を兼ねて居るんですからね。

源次　お米も可哀想さなア、あのお袋にも隨分掛合つちやあ見たんだが、強突張め、遂々こんな事にしてしまやアがつたんだ。

（ト、鳥渡思入、お妻も同じく。）

お妻　晋さんも、口ぢやあ諦念めたやうな事を云つてお在だが、心の中ぢやあ嘸悔しからうねえ。

源次　そんな宴席にわざ〳〵乃公を呼びやがるんだな。

お妻　それもね、親方が晋さん始め皆さんを引取つて、世話をしてお在でだから、態つと面當に呼ぶんだよ。

源次　胸氣な野郎ぢやねえか。

（ト源次はいま〳〵しいといふ思入。）

お妻　だから、今夜は思入れ云つてお遣んなさいよ。

源次　むゝ。

（ト源次首肯く。）

お妻　私も思ふさま云つて遣らないぢやあ。

源次　それが可いや、うんと面の皮を引剝いて遣んねえ。

（下手から伍八、晋太郎を搜す心にて、うろ〳〵見廻しながら登場。）

伍八　おゝ親方樣で御座えますかね。

源次　伍八どんか。何うして來たんだ。

お妻　伍八さん、暫くでしたねえ。

（トお妻も伍八が會釋したので、鳥渡首を下げる。）

伍八　小旦那が何處へ行つたゞか、お前さまが出さつしやると間もなく、見えなくなりやしただ。

源次　え、香さんか。
お妻　若旦那が、何うなすつたんだらうね。
(ト源次とお妻口を揃へるやうに云ひながら考へる介。)
伍八　お袋様太く心配さつしやつて、おらに鳥渡見て來うと云はつしやつたで。
お妻　其れに、ほかの時とは違ふしね。
(源次は腕を組んで何か思案の介、此時裏門を開けて、閒の女中お花登場。お花はお妻を見て、)
お花　おや、おつまさん、來て下すつたんですか。
(お妻は呼ばれて、折が惡いといふ思入にて。)
お妻　お花さんかね、つい遲く成つてね。
お花　わたし今、迎ひに行かうとした處なんですよ。
お妻　まあ左う、何うも濟みません。早く上らうと思つたんですが、外せないお客様があつたもんですからね。
(ト源次に向つて。)
お妻　ぢやあ親方、一と足お先に參りますよ。伍八さん左樣なら。
(お妻はお花と共に上手へ入る。)
伍八　親方、小旦那も口惜しかんべえから、報仇しべえ思つて、此家へ來さつしやりや仕めえかね。
源次　まさかに、左樣事もあるめえが、年が若けえからなア。
(ト源次氣にかゝる介。)
伍八　何うか、間違の無え樣にしてえだねえ。
源次　まあ兎も角も、お前は其足でもう一遍、其處いらを見廻つて來ちやあ何うだね。
伍八　左うしますべえ。萬一の事でも有つちや成んねえからの。
(伍八は下手へ引返へさうとして、裏門から上手の方を見廻して。)
伍八　親方、見違えるやうに成つたゞねえ。
源次　むゝ、金にあかして、すつかり手入を仕やがつたんだな。
(ト源次も忌々しいといふ介。)
伍八　眞正直な小旦那を瞞くらかしやアがつて、泥坊野郎め。
(ト拳を握る。)
源次　まあ仕方が無えや。伍八どん、乃公も手を代へ品を代へて、動きの取れねえ證據を押へて、とつちめて遣て

えたあ思つてるが、上手に法律の目をくゞつて居やがるから、尋常ぢやあ手出しが出來ねえんだ。

伍八　悪るい奴に逢つちやかたはねえだね。

源次　だがのう伍八どん、乃公も白金の源次だ、乗りかゝつた船ならどんな激浪でも乗切つて見せらあ。此方の生命せえ拋り出しやあ、何でもねえんだ。いざてえ時の用意はして來て居らア。伍八どん、氣を揉まねえで待つて居ねえよ。

伍八　親方様、お前様ばつかりが、僕らたのみだ。

源次　よし、お前も其つもりで、最う一度其邊捜して見るが可いぜ。ところでと、……むゝ斯うしやう、何うしても晋さんが見えねえやうだつたら、間の家まで歸つて來て、乃公に耳打をして呉れるがいゝや。

伍八　左うしますべえ。ぢやあ最う一遍、見て來ますべえよ。

（ト伍八は下手へ退場。源次は跡を見送つて鳥渡思入、直ぐ上手へ退場。）

（目黒不動にて時の鐘をつき出す、とぼ〳〵暮となる。）

（花道より上原晋太郎登場。うろ〳〵しながら鎌塞よき處に來り。）

晋太　おゝ立派にしやがつたなあ……米ちやんまで手込にしやがつて。

（ト晋太郎口惜しき介あり、裏門を這入らうとして入り兼ね、猶うろ〳〵して、遂に生垣の隙間より忍び入るこゝろにて退場。上手から吉次藤吉、提灯を持つて登場。花嫁のお米を迎ひに行かうとして）

吉次　最う日が暮れるてえのに、滅法遅い輿入ぢやあ無えか。

藤吉　なあにお前・花嫁様のお輿入は、暮六つが世間の定法だあな。

吉次　大きに左うだ。旦那だつて、なにも此様に急き立てねえだつていゝぢやねえか。

藤吉　それがよ、的にやあお前、木頭が喰ひ込でゐるんだから、途中でどろんじられちや成らねえてんだ。

吉次　其でわざ〳〵お迎えか。

（ト兩人花道の附際まで行き向うを見て。）

藤吉　おゝ、前方からやつて來たぜ。

吉次　おゝ左うだ〳〵。なにも案じる事アありやアしねえ。

（ト二人は向うを見てゐる。揚幕より前に提灯を持つ

た男つゞいて塚本賢亮、媒介者のこゝろにて先に立ち、お米高髷にて嫁入衣裳、待女﨟の心にて女一人附添ひ、次にお爲、其他見送りの男數人續いて登場。)

藤吉　先生、只今お着きで御座えやしたか。

吉次　お迎へに參りやした。

賢亮　や、是は〱、御苦勞だつた。丁度時刻を見斗らつて出たんだが、何しろ斯うお練りといふ譯でな、存外手間が取れたよ。

お爲　どうも御苦勞樣でしたね。

吉次　へゝ何う致しやして。

藤吉　私や一足お前に、旦那へお知らせ申しやせうよ。

(ト藤吉は引返へし退場。お米は、間の裏門が見えるので、急にまた悲しくなつた思入にて俯向く。賢亮そろそろと歩み、吉次は入代つて、列の跡に附く。上手から伍八晋太郎を捜しあぐんだこゝろにて登場。舞臺の中程まで來り、ばつたり先立ちの提灯に逢ひ、鳥渡身を避はし、直ぐ其跡の賢亮に顔を合はせて、一足退りきつとなる　賢亮は知らぬ顔にて少し横を向き行き過ぎる。其あと、伍八は次のお米と顔見合せなさけなき思入。お米も同じ思ひ入にて、鳥渡會釋をしたが、横を向き手巾にて顔を隱くして泣く介。待女﨟は怪訝な顔付をし、お米共に行過ぐ。伍八はお爲を見て、口惜しき思入にて意氣込む、お爲はつんと澄まして行くを、伍八は見送る。終りの吉次故と伍八に突き當りねめつけながら行過ぎる。行列と少し離れるまで伍八は口惜しげに見送つて居たが。今しも行列は上手に退場。吉次つゞいて退場せんとせし時、伍八聲をかけながらつか〱と進み寄る。)

伍八　これ、鳥渡待つて吳らつせえ、鳥渡待つて吳らつせえ。

(吉次不愛想に振り返へり。)

吉次　呼だなあおいらかい。

伍八　お前樣だよ、ま、待つて吳らつせえ。

(ト伍八漸く近づく。)

伍八　お前樣は、間さんのお家のお人で御座えましたツけのう。

吉次　其が何うしたんだ。

伍八　憚りだけんどね、ちよつくらお頼み申してえ事があるだがね。

吉次　用があるなら早く云ひねえ。

伍八　お前さまのとこさア、白金の源次親方が御座らッしやる筈だで、帰りだけんど、ちよつくら呼んで呉らつせえよ。

吉次　そんなお使は、おらア眞平だ。

(ト吉次はすげなく行かうとする、伍八その袂を押へて。)

伍八　そんな事云ふもんで無えよ。ちよつくら親方に左う云つて呉らつせえよ、お頼みだから。

吉次　御免だよ。おらアまだお前の使をする程耄碌は仕ねえんだ。

伍八　そんげな事を云はねえで、おら此通りたのむだから。

(ト伍八片手は吉次の袂を取り、片手に拜みながら頼むこなし。)

吉次　小うるせえ土百姓だなア、放さねえかッ。

(吉次は捕られた袂を振り切り、また取り付かうとする伍八を鋭く突き放して、足早に上手へ退場。)

(伍八よろ〳〵となり踏止つて、憤怒の思入れ、すぐまた氣を變へて。)

伍八　これさ、待つて呉らつせえ。お、おたのみだに、待つて呉らつせえ。

(ト手を揚げ、吉次を追うて、同じく上手へ退場。)

—— 道具廻る ——

其二　間新宅宴會の場

舞臺は二幕目第一場の上原の母屋を其儘用ひ、凡ての手入をなし飾り附けなど立派になり、下手の庭に植込石燈籠程よく配置し、見變へるばかりの造りとなりたり。

幕開くと座敷の中は既に配膳終り、上手に源次、中程に大五郎夫より段々端近に五左衛門、與兵衛等住ひ、お妻取り持の心にて座の中央に、女中お鶴お花程よく住ふ。

大五　皆さん何にも有りやせんが、今日はゆつくり召食つてお呉んなせえ。

(ト大五郎挨拶する、客一同會釋をする。)

五左　いや何うも、今日はお目出たう御座えやして。

與兵　僕等まで太え御馳走樣に成りやすだ。

源次　間の旦那、今日はお芽出たう御座えやす。

大五　難有う御座えやす。お口に適ふやうなものも無えんですが、まあ膝でも崩してゆつくり飲つてお呉んなせえ。

源次　難有う御座えやす。

（この間、お妻は源次と大五郎へ酌をし、女中は其他へ酌をして廻る事よろしくある。また大五郎より源次始め一同へ盃を獻す、返杯等あるべし。）

（大五郎の子分藤吉次の間から首を出し。）

藤吉　旦那お迎に行つて參りやした。

大五　や、何うした。

藤吉　最うお着きになりやすよ。

大五　左うか、御苦勞だつた。

（藤吉退場。代つて塚本賢亮、お米の母お鶴登場。お米は離座敷にて身仕舞をさせ婚禮の式は別席にて擧ぐる筈なり。）

大五　先生、今日は御苦勞樣で御座います。

（賢亮は源次の次、お鶴は賢亮の次に住ふ。）

賢亮　何う致しまして。

（ト賢亮一座へ挨拶。）

お鶴　皆さん御免下さいまし。

（トお鶴も挨拶よろしくある。）

（女中は賢亮お鶴に膳を据ゑる。）

大五　白金の親方、何うしたもんだね、お前さんが左う几帳面にして居なすつちやあ、自餘の方が窮屈がつて可けねえ。何うか膝でも崩して、ぐん／＼やつてお吳んなせえな。

源次　先刻から戴いて居りやさア。

お妻　親方、おすごしなさいなねえ。

（トお妻は源次に酌をして其傍に坐る。）

（大五郎は不圖聞耳立て、）

大五　何だか騷々しい樣だが、何をしてやがるんだな。

（ト奥の方を見返る。奥から吉次の聲で）

吉次　なんだ／＼こん畜生、土足でこんな處迄入つて來やがつて。

（ト吉次藤吉は伍八を支へながら登場。一座いろめく。）

大五　おい、手前達は何うしたんだい。お客樣の前に、不躾ぢやあねえか。

吉次　へえ、旦那何うも濟みやせんがね、この野郎が、いくら止めたつて、ぐつ／＼上り込んで來やがるんでね。

藤吉　何てつたつて歸らねえんでさあ。

大五　なに。

（ト大五郎、伍八を見て、むつとした介。）

大五　汝は伍八ぢやあねえか、何しに來た。
（伍八は最う眼の色を變へて、少し逆上せ氣味にて。）
伍八　なあに宜えだよ、來たつて宜えだよ。
（トづか／＼と出て座の中央や、下手よき處に住ふ。）
吉次　やい／＼こん畜生、肥料臭え闘體をしやがつて、何てえ眞似をしやがるんでい。
伍八　お前ら默つてるが宜えだ、お前等出る幕で無えだ。
藤吉　畜生ッ、ふざけやがると、摑み出すぞッ。
大五　待て藤吉、お客樣の前だ、靜かにしろい。
（藤吉、吉次は默して後に退る。伍八は大五郎に對つて。）
伍八　大五郎樣、今日はお芽出てえだね。
（大五郎は苦り切つて無言つて見詰めて居る。）
（伍八はお爲に對つて。）
伍八　新家のお袋樣、今晩はハアおめでてえ事だねえ。
（お爲は横を向く。）
（此い時晋太郎、生垣より這入つて母屋の樣子を窺つて居たが今しも伍八の聲を聞き付けて、下手植込の中より座敷をのぞく。大五郎は居丈高に成つて。）
大五　伍八、全體汝は何しに來たんだ。用があるなら聞て遣るが、馳走の殘物でも欲いのなら、勝手の方に廻るが宜いや。
伍八　アハヽヽ。お前樣ぢやねえだ、殘り物なんざ入らねえだ。
大五　夫ぢやア、何の用があつて來たんだ。
伍八　用は無えだ。
大五　なにッ。
伍八　用は無えだよ。
大五　用は無えと。
伍八　用無えだッて、宜えでねえか。おらが御主人の家におらが歸つて來るに、用あるも無えも宜えでねえか。
大五　なに、貴樣の家だと。あゝ貴樣は逆上たな、可哀想に最う正氣が無えと見えるな。
伍八　あに、おらが正氣で無えだッて。正氣は無えかも知んねえが、お前見た樣な盜賊氣も無えだよ。
大五　なんだと。
（ト大五郎は赫となる介。）
伍八　お前の樣にのう、恩も何も忘れて了うて、正直な人を欺くらかいて、家まで掠奪るやうな太え魂性つ骨はおらがは持つて居ねえだよ。

大五　伍八、欺して家を取つたゝア、な、何だ。

伍八　取つたから取つた云ふだ　藪醫者と二人で宜え加減な事を云やがツて、小旦那欺くらかいて、證文さ判押さしたでねえか。

（ト賢亮にも掛けて云ふ。）

賢亮　怪しからん事を云ふ。まるで騙だな、貴様は。

大五　塚本さん、まあ、宜うがさあ。野ら作の晋の野郎に宜い加減な事を聞きやがつて、有る事無え事云ふんでさあ。おい伍八、汝は何にも知るめえが、あの證文を書く前に、乃公が何の位止めたか知れねえんだ。ねえ塚本さん、お前さんも知つて居なさらあ。只た一軒しきやあ殘つて居ねえ家までも書入れるたあ、あんまり向不見だ。それだけは止しなせえつて、塚本さんと代り〴〵止めたんだが、金せえ見りやあ家も何にも見さかひの無え人なんだ。乃公も仕方が無えから、晋さんの云ふ通りに書かしたんだが、氣の毒で無え事もなかつたのさ。

（ト大五郎は客に聞かせる心にて云ふ。）

賢亮　其通りです。あの時は中間に介つて、僕も實に當惑したですよ。

伍太　夫りや嘘だ、えゝツ、嘘だ〳〵ツ。

（ト晋太郎覺えず植込より出來り、緣先より大五郎をきつと見上る。）

（大五郎始め源次賢亮、お爲お妻等一同打驚く、伍八も意外だといふ思入。）

伍八　小旦那、そんな處に居さつしやる事無えだ。お前樣の家だもの、なに遠慮する事無えだよ。是へ來さつせえよ。來さつせえよ。

（晋太郎は上つて大五郎の前近く坐る。）

晋太　は、聞さん、だ大五郎さん、お前ッ、きツ貴樣はッ。

（ト氣ばかりあせつて口が利けぬ介。大五郎は嘲笑つて。）

大五　晋太郎か、なんだ盜人じみた眞似をしやがつて、用があるなら、何故表から這入つて來ねえ。情ねえ根性に成つたなあ。

晋太　きツ貴樣こそツ、泥坊だ、どツ泥坊だ、ぬツぬツ盜人だツ。

大五　なんだと。おれが盜人だと。馬鹿な事を云ふな。

晋太　け、賢亮と二人で、私を欺して、あ、あの證文を、あの證文は、私が書きやあしない。

大五　うそを吐けえツ。

（ト激しく冠せて云ふ。）

（此時、源次の傍のお妻は、我知らず立たうとする。源次袖を取つて押さへ、目顔で、止せと留める。お妻は吸物椀の蓋を取つて酒を注いで一息に飲む）

賢亮　晉太郎さん、何うしたもんだ、外の場合とは違ひますぞ。座興にしても聞捨られんですな。貴様はこの目出度い席を汚がす爲めに、言掛をするのだね。

（ト賢亮もやゝ座を進み出る。）

晉太　なんだお前さんまで、あの時私をお前さんが、勸めたぢやないか。

（ト晉太郎は怒りに舌も縺れ、はら〳〵と涙を滾す。）

賢亮　怪しからん事を、お默んなさい。

（お爲もにじり出て。）

お爲　これ、晉太郎、何だね、お前は。失禮な事を云はないで、早くお歸んなさい。間さんにお詫をしてお歸りッ。

（お爲は叔母だといふを笠に着て晉太郎をたしなめる。）

晉太　おゝ、新家の叔母さん。

（と晉太郎はくやしき介。）

晉太　叔母さん、米ちやんも、おツお目出度う御座います。

お爲　難有う。お前も喜んでお呉れよ。

（お米は此前より離座敷を出、座敷の緣側より晉太郎を覗きいろ〳〵介あり。）

晉太　むゝ……。

（ト晉太郎は口惜しさに最う物も云へず、拳を握りほろほろと涙を滾す。）

（お妻は、この内時々我を忘れて口を出さうとしては、源次に引留められ、癇癪押へに椀の蓋で酒を注いでは飲で居る。）

大五　新家の阿母さん、お前さんの甥公さんだが、困つたもんですねえ、何うしたもんでせう。

お爲　皆さんのお邪魔をして、何うも濟みませんねえ。ほんたうに仕やうのない奴だ、皆さん何卒撮み出して下さい。

大五　ぢやあ、左うしやすかね。おい吉、藤吉と二人で、連れてくが宜いや。

吉次　ようがす。藤公手を貸しな。

藤吉　よしきた。

（ト吉次藤吉は、立ちかゝり晉太郎の手を取つて。）

吉次
藤吉　さあ、うしやアがれ。
（ト晋太郎は立つまいとする、吉次藤吉は無理に引立てる。）
伍八　お前等は小旦那を何うしる氣だ。
（ト伍八も立ちかゝる。）
源次　おい、晋さん、最う歸んなすつた方が好うがさア。
晋太　親方、わ、私は、く、く口惜しい、
（ト晋太郎袖を額に當て泣く。）
源次　おい、お妻さん。
（ト目顔で指圖する介。お妻は立て晋太郎の傍へ來て。）
お妻　若旦那、誰が聞たつて、判つてますからね、最うお歸んなすつた方がよござんすよ。
（ト働はりながら伍八に向ひ。）
お妻　伍八さん、若旦那をお連れ申したら宜いでせうよ。さ、若旦那、伍八さんと一緒にお歸んなさいよ。
晋太　えゝ、お妻さん、歸るよ、歸る事は歸るけれども。
（ト源次の顏を見る。源次は目顏にて呑込ませて。）
源次　私に任せてお歸んなさるが、宜うがさあ。伍八どん早く行くがいゝぜ。
伍八　小旦那、くやしいけんど、參りますべえ。
（ト伍八、晋太郎をすゝめて庭に下り立つ。晋太郎は行き兼ねるを伍八すゝめる。お米伸び上つて見送る。）
お縞　なにを、ぐづ／＼して居るんだらうねえ、あのお前さん達、早く撮み出して下さいよ。
（晋太郎むつとした介で座敷へ引返さうとする。伍八押止め無理に引立て退場。）
（お妻は、二人の退場と共に座敷の中央に、酒に醉つた介にて坐る。吉次と藤吉は次の間へ退場。）
（お米は晋太郎の退場と見ると心もそゞろに、兩の袂を前に抱へ褄を引上げ、晋太郎の跡を追ふ心にて、庭を上手へ退場。）
大五　いやどうも、飛んだ事で、折角の興をさましやしたつけ。今銚子を代へやすから。新規蒔直して爰に願ひやせう。
（一座目禮する。一時退場して居た女中また登場、酌をして廻る、五左衛門は盃を手に取りながら。）
五左　上原の小旦那も困りもんでがすの。
大五　左様さ。

與兵　變れば變るもんだ。

(卜立去つた跡を見込で思入。)

賢亮　何う見ても上原の總領とは思へませんなあ。實に何うも、あの風體といつたら、全然ゆすり騙の體ですなあ。

大五　人間もあゝ成つちやあ、御仕舞ですよ。

お爲　私もあんなものを婿に持つて、どんなに肩身がせまいかしれませんよ。

賢亮　實にお察し申すです。

大五　そんな話なんざよしにして、酒の方を最うちつと流行らせやう。

(卜お妻を見て。)

大五　おいお妻さん、何うしたもんだね。

(お妻は、醉が出てうつとりとした處を大五郎に呼ばれて、氣が付いたといふ介にて。)

お妻　え、何ですつて。

大五　何ですちやねえよ、お前が取持つて呉れねえぢやあ、薩張り酒が流行らねえぢやアねえかね。

お妻　何を、私が取り持つんですつて。

(卜お妻は故と合點のゆかぬ介。)

大五　おい、何をいつてるんだ。お客樣のお取り持ちが、お前の役だらうぢやアねえかね。

お妻　お客樣のお取り持ちですつて。ヘン、何處のお客樣なの。ちやんちやら可笑いや、人を。

(卜空嘯くこなし。)

(大五郎は突然にお妻の樣子が變つたので、不審に思ふ介にて。)

大五　お妻さん、お前が左う早く醉つて呉れちやア困るぢやないか。

お妻　酒に醉いやあ何うしたつて云ふの。お酒を飲みやあ醉ひもしようさ。ヘン、誰がこんな水つぽい酒なんかに醉ふものかね。

(大五郎は、むつとしたが直ぐまた打解たけ介にて。)

大五　面白え、醉はなきやあ、醉つて見ちや何うだ。おい是がよからうぜ。

(卜大五郎、吸物碗の蓋を取つて献す。)

(お妻はちろりと見て、せゝら笑ひ。)

お妻　お前さんも御串談もんだね、そんな物でなら、最う疾うに召しあがつたのさ。私を醉はしたきや、是に注ぐがいゝよ。

(卜手近の盃洗を取り、水を膳にこぼし、大五郎の前

に突出し。)
お妻　おい姐さん、お憚だが、なみ〳〵とついでお呉れ。
(女中は膽を潰して注ぎ兼る。大五郎はむつとして。)
大五　お妻、お前夫で見事飲む氣か。
お妻　是で飲みやあ何うしやうツていふの。
大五　あんまり我儘が過ぎやうぜ。
お妻　なに、我儘だつて、なにが我儘なんだよ。
(ト膝を揖ゑて大五郎に突かゝる。大五郎は默つて居る。)
お妻　ちよいとお花さん、こんな水つぽい酒ぢやあ酔へないからねえ。松葉屋に人をやつて、生一本の正宗を二挺でも、三挺でも、菰冠ごとよこせつて云つてお呉れ。
(大五郎最う堪忍ならぬといふ介にて。)
大五　お妻ツ、默つて居りやあ附け上りやあがつて、其口は何だ。
(賢亮は見かねた介にて。)
賢亮　おいお妻さん、お前其上酔つちやあ仕様が無いだらう。
お妻　お前さんなんぞが餘計なお世話さ。
賢亮　餘計なお世話とは何だ、我輩に對して失禮千萬な。
(ト賢亮反身に成つてお妻を見揖ゑる。)
お妻　失禮だもないもんだ、詐欺師の共謀者のくせに。
賢亮　詐欺師とは誰の事だ。
お妻　其處に居る間さんさ。
(賢亮愕然とする。大五郎色を變へる。)
お妻　其顔は何だよ。まあ揃ひも揃つて、詐欺師面を能くもお並べだねえ。ほゝほ。爭はれないものさね、お前さん達のその顔を私が見りやあね、ちやあんと詐欺師と書いてあるんだよ。まあをかしな顔さねえ。おほゝゝゝ。
(源次は苦笑ひをする。さすがのお爲も、度膽を抜かれた介。大五郎わざと落付いて。)
大五　お妻、汝も氣が違やあがつたな。
お妻　ヘン、人を氣違ひ扱ひにして、自己の悪事を、ごまかさうたつて、左うはいかないよ。
大五　悪事とは何だ。
お妻　お前も忘れつぽいねえ、私ん家の座敷開きの時の事をお忘れなの。
大五　何んだと。
お妻　何だもないもんだ。私に聞かれて、二人共面くらやがつた癖に。

お篤　まあ驚いた、何て口だらう。其口をうまく使つて、本家の身代をはだかにしたんだね。

お妻　おやお婆さん、おつな事をお云ひだね。娘を詐欺師に押付ける様な人に、よくそんな口が利けたわねえ。

（お篤はぐつと詰る。）

お篤　白金の親分、聞て下さいよ、嬰兒の手を捻るやうな真似をして、晋さんの家を捲上げて了つたんですよ。

源次　夫りやあ左うだらう。先刻からの事を見ても判つてらあ。間さん、お前も随分たちの悪りい悪黨だねえ。

大五　おい源次、たちの悪りい悪黨たあ何だ。

源次　たちが悪りいぢやねえか。法律の手品を使つて、晋さんを奈落に突落しやがつたぢやアねえか。

大五　しやら臭えやい。法律にせえ觸れなきやあ、何が悪事なんだ。

源次　間ッ。

（ト鋭く云つて、源次は手早く羽織の紐をほどき、うしろにかなぐり捨て。）

源次　法律でとつちめられねえ奴あ、おいらがとつちめて遣らあ。覺悟をしろッ。

（ト源次懐中から短刀を出し鞘を拂つて　をどりかゝり、大五郎が驚いて身を避はさうとする處を、肩先に一刀浴びせる。大五郎は肩口を押さへて縁から庭に飛び下りる、つゞいて源次も飛び下り、立廻り宜しくあつて、逃ろを逐ひかけ裏手の方へと二人退場。この内女中は驚いて奥へ逃げる。五左衛門も與兵衛も腰をぬかさぬばかりに驚き、うろたへて奥へ退場。お篤もつゞいて退場。賢亮は大五郎を助け、源次を支へるこゝろで、庭へ下りかけるをお妻、うしろから引止める。賢亮はお妻を突き倒して庭に下りる。お妻起上つて逐ひかける。）

（この模様にて道具廻る。）

其三　間新宅奥庭の場

舞臺は間新宅奥庭續きにて、上手に榎の大樹、其他立木よろしく、大樹の下に小さき稲荷の祠あり。中央は遙かに森を望み下手竹藪よろしくあり。稲荷祠の前に、晋太郎お米既に情死せし體にて倒れて居る。

幕開くと、上手奥祠の後より伍八、源次子分伊太郎、登場。

伍八　伊太郎さん、お前おれに離れねえで來さつせえよ。
伊太　滅法闇えぢえねえか。伍八どん猪んでもねえ方に引張ツてツちや不可ねえぜ。
伍八　僕等にこの庭の道間違えツこ無えだから、わしらに放れねえで來さつせえ。
伊太　よしきた。
伍八　小旦那にも困るだ、また途中で見えなくなツたゞ。
伊太　乾度此家へ引返したに違えねえ。おいらにしたツてそんな目に逢やあ、其儘歸れねえなあ當然だ。
伍八　親方が居さつしやるだから、大丈夫だけんど、間違えあツちや成んねえから、伊太さん早く行くべえよ。
伊太　親方も居りやあおいらも附いてらあ、安心して居ねえ。
（兩人探り〳〵稻荷の傍まで來る、此時月森の木の間に昇り、梢を洩れ清光祠の上を照らす。）
伍八　おゝ、御先祖樣のお稻荷樣の前に來たゞ。
（ト伍八目禮する。）
伊太　伍八どん、何だか其處に居る樣だぜ。
（ト伊太郎、晋太郎とお米の死骸を透かしみて怪しむ介。）
伍八　え、何か居るだね。
伊太　それ、そこのお稻荷樣の前に居るぢやねえか。
伍八　え、誰か寐てるだよ。
（ト伍八死骸を見て、驚く介。）
伍八　ひやあツ、これ小旦那だ。
伊太　え、晋さんだつて、おツ、一人はお米さんだ。
（ト兩人仰天の介。）
（下手より大五郎傷を負ひながら源次に追はれて登場。つゞいて源次、匕首を振り上げ大五郎の跡を逐うて登場。伍八は晋太郎お米を介抱の介。伊太郎は、物音を聞き付け、下手を見て乾度身構へする。）
源次　大五郎、此場に成つても逃げる氣か、惡黨にも似合はねえ野郎だツ。
大五　汝みたいな溝浚に吳れるやうな命ぢやねえや。
源次　吳れねえだつて取つて遣らあ。
（ト立廻つてよろしく止る。）
伊太　やツ、親方だ。親方しつかりしねえ、伊太が來たぜ。
源次　おゝ、伊太か。汝は此處は構はねえで、彼方へ行つて、お妻に怪我をさせねえやうにしろ。
伊太　合點だツ。

源次　（ト伊太郎一散に下手へ退場。）
源次　さあ大五郎、覺悟をしろッ。
（ト源次また匕首を振り冠る。）
伍八　親方様、小旦那とお米様が、死で居さつしやります
だよ。
（ト伍八晋太郎を抱きながら聲をかける。）
源次　なにッ、晋さんとお米さんが死だか。
伍八　これ見さつせえまし。
（ト伍八死骸に顔を付けて泣く。）
源次　左う聞きやあこの野郎、いよ／＼活かしちやあ置か
れねえ。
（ト立廻る。）
（下手より賢亮を逐うて、伊太郎、續いてお妻登場。）
お妻　親方。
（トお妻源次に加勢の心にて、大五郎に小石を掴んで
投付ける。）
源次　お妻、晋さんとお米さんが死だつていふから、お前
は彼處に行くがいゝや。
お妻　えゝッ、若旦那も、お米さんも。
（トお妻仰天の介。すぐ祠の傍へ駈け寄つて伍八と共
に介抱する。源次は遂に大五郎を斬り倒す。途端に賢
亮伊太郎と立廻るはずみに源次の傍へよろ／＼きながら
寄り來る、源次は一刀に抉る、賢亮倒れる。お爲此前
より裏手の方を氣遣はしさうに、うろ／＼し居たが、
この體に驚き怖れて片影に隱るゝ。源次、伊太郎直ぐ
死骸の傍に寄り集まる。）
源次　晋さんも早まつた事を仕て呉れたぢやあ無えか。お
いらが生命を拋り出して、大五郎を殺した處を、見せて
遣りたかつたに、殘念な事をして了つたなあ。
お妻　若旦那もお可愛さうだが、お米さんも氣の毒な事に
成つたぢやないかねえ。
伍八　親方様だつてお妻さんだつて、此樣に心配して呉れ
さつしやつたに、小旦那が死了ふちや何にも成んねえだ
お袋樣が聞しやッたら、嘸吃驚さッしやる事だらう。お
らもはア、がつかりしたゞあ。
（ト源次お妻殘念の介。伍八泣く。）
（此内隱れ居たるお爲、お米の死を聞て驚き出で來り、
お米の死骸に取付き。）
お爲　お米、堪忍してお呉れ。私がわ、惡るかつたから、
ねお米、堪忍してお呉れよう。

伍八　新家のお袋様、とんでも無え事に成つたゞねえ。
お爲　伍八、お前にも面目ないよ、皆さんにも、合はせる面が有りません。
（源次身づくろひして。）
源次　お妻さん、おいらあ是から自首して出るから、跡の處は、お前と伍八どんと、相談してやつて吳んねえ。
お妻　親方は覺悟の上だらうがね、何うにか仕樣は無いものかねえ。
源次　人を殺して、そんな未練な眞似は出來えや。
伊太　親方、私を代りに遣つてお吳んなせえな。
伍八　親方樣、わしらが行きますだよ。
源次　お前等の親切は嬉しいが、伍八どん、お前にやあ、まだ晉さんの阿母樣や松ちやんが居るぢやねえか。伊太汝にやあ子分の事を賴むから、おいらの跡を立てゝ吳んねえ。ぢやあ、おいらあ最う行くとしよう。
（ト源次行かうとする。お妻殘り惜し氣に引留めようとする。伍八、伊太郎、お爲、共に別を惜しむ介よろしくあり。）

—— 幕 ——

戀ごころ（六幕八場）

長田　幹彦原作

主要人物

菊地爲三郎
番頭　平吉
妻　おみね
娘　美代子
大館謙吉
妻　豐子
娘　春子
角田榮次郎
妻　松子
長男　實
次男　泰
藝妓　喜久治
武内欽次郎
若い者　長吉
志村林一
君塚壯吉
妻　お種
其他道具屋、商會人、看守、小間使、車夫、
老婢、會社員など

序幕

柏木菊地爲三郎の留守宅

庭より見たる菊地家、緣側の雨戸は閉されてあり。庭には朝顏など。時々微風。鷄の聲。

幕あく。

（と、戸袋の最も近き雨戸を一枚くりあけて、此の家の娘の美代子が小用の歸りと思しく、手水鉢の水を手に注ぎかけて居るが見ゆ。）

美代子　（手を洗ひつゝ朝顏を見て獨白）　まア隨分咲いた一、二、三、四……七ツ……八ツ……九ツ……。

おみね　（美代子の母親。姿は見えず）　美代さん、もう何時です。

美代子　あら、母樣お目覺め……戸を明けませうか。

（と、戸を繰る。）

（家の内部見ゆ。二間程の平家。一間に蚊帳を吊す。）

おみね　（蚊帳より出て）　めざましは鳴つたのかね。

美代子　さア私、聞きませんでしたわ。

おみね　（めざましを見て）　おや、もう六時……なら鳴つた筈だがね――どうしたんだらう……鳴つて氣の附かない筈はないんだけれどねえ。（蚊帳を疊みにかゝる）

美代子　（戸を明け終り寢衣を着替へにかゝつて居る、急に其手を休めて、クス〳〵と笑ひ出す）

おみね　オヤ、何が可笑しいんだい。

美代子　（未だ笑ふ）

おみね　氣味が悪い子だよ、この子は。

美代子　だつて鳴らない筈だわ。

おみね　何が。

美代子　昨夜、かけて置くのを忘れたんですもの。

おみね　おや、さうかい。

美代子　えゝ、お父樣の話で夢中になつて仕舞つて、私かけるのを忘れたんですの。

おみね　馬鹿だね、お前は。

美代子　だつて嬉しかつたんですもの。

おみね　嬉しかつたツて、お前は……　（と笑ふ）

美代子　でも嬉しいんですもの。

おみね　ホヽヽ

美代子　何だか私、夢の樣な氣がしますわ……お母樣、私お疊みます……けれどもお母さん、本當にお父樣は歸つて被來るんでせうか。

おみね　（茶の間で煙草を喫む）　被來るんでせうかツてお前、歸つて被來るんぢやないか

美代子　だつて、そりや東京へ歸つて來て被來るんで、家へは未だ歸つて被來らないぢやありませんか、何だツて

そんな宿屋になんかいらッしやるんでせうか。

おみね　そりやお前、今度出來る會社の用の事で、どうしたッて便利な處でなきや、第一出入りが厄介だもの……。

美代子　そりや、さうでせうけれど、やはり私は、先へ家へ歸つて來て下すつた方が、ようござんしたわ。第一この間から東京に被來りながら私達に知らして下さらないと云ふ法はないわ。

おみね　オヤ〳〵大變な權幕だね。これぢやお父様は折角お歸りになつても又九州へ行つてお仕舞ひになるかも知れないよ。

美代子　あら、そんなこと……でも、ねえ母様、たうとう歸つて被來したのね。（感傷的な眼）

おみね　たうとうね……それでこそ待つて居た甲斐があると云ふものだ。（と落涙する）

（間。物賣の聲。）

美代子　（氣を引立てゝ）早く掃除をして仕舞ひませうね。せめて家の中でも、綺麗にして置かなきや……。

おみね　本當にね、まア私はどうしたと云ふんだらうねえ。起きるなり、こんな處へ坐り込んぢやッて、御飯の支度もしないで……（と立上る）

（表口にて「小母さん！　小母さん！」と呼ぶ聲。）

美代子　あら。

おみね　何だい。

美代子　春子ちやんの聲ぢやないかしら。

（と、再び呼ぶ聲がする。）

美代子　あ、やつぱりさうだ――　（と去る）

（おみねも不審さうに玄關の方へ行く。春子が立つて居る。）

美代子　まア春子ちやん、暫く來なかつたわね。（と手を取つて何かに心附く）あら、こゝどうしたの？　姉様が又……。

春子　（首肯く）

おみね　まアどうしたッて云ふんだらうね。又豐子が苛めたんぢやないかい。

美代子　さア。（と春子の顏を見る。春子俯向く）さうなのね。

おみね　本當に豐子も仕様のない子だね。この可愛い春子ちやんの一體何處が憎くッてあんなに苛めるんだらうねえ。

美代子　繼子ッてそんなに憎いもんでせうか。

おみね　（春子泣く。）泣かなくても、いゝよ。おばアさんが豐子をウンと叱つて上げるからね。本當に大館さんに對したツて申譯がないぢやないか。

美代子　全くね。義兄さんはあんなに好い方なのに、何故姉さんはあゝなんでせう。

おみね　久し振りで、お父樣が歸つて被來ると云ふに豐子がこれぢや、私、本當に申譯がないよ。

美代子　え……あ、いゝえ。春子ちやんのお父樣ぢやないの、私のお父樣、春子ちやんは知らないわね。春子ちやんのおぢいさまよ。今度ね、九州ツて處から、久し振りで歸つて被來したの。

春子　私も早くお父樣が歸つて被來るといゝわ。（と泣く）

美代子（目をうろませつ）母樣、春ちやんは、御飯は未だでせう。

おみね　あゝ、さうだね。ぢや春子ちやん、今朝はおばアさんのお家で御飯を喰べておいで……今直ぐにするからね——本當に豐子にも困つたもんだね。（と呟きつゝ臺所へ這入る）

美代子（續いて臺所へ這入り。手拭を姐さん冠りにして箒はたきを持つて出て來る）春子ちやん、先へ此方を掃除しちやうから、少しあつちへ行つてゝ、頂戴な。

（と、春子は外の部屋へ行く。美代子は掃除、春子は傍にある手文庫に目を附ける。此の手文庫は、以前から此家の此の部屋の他の調度と不調和なる色を保ち居たるなり。）

春子　叔母さん、あれ、あれ、なアに。

美代子　あれ、あれは手文庫よ。

春子　何が這入つて居るの。

美代子　櫛だの笄だの。

春子　叔母さんの。

美代子　え、いゝえ……いゝえ。さうなの、ねえ、お母樣もう此の櫛や笄は賣らなくてもいゝんでせう。

おみねの聲　あゝ、もうお父樣が歸つて被來りやね、借金の片だつて附けて下さるだらう——又今が今取りに來たツて、どうとも辯解は立つし、そりや、やはりお前がお嫁に行く時のに除つて置くよ。

美代子（羞恥の表情）

おみね　とに角、これで漸々私も息がつけるよ。晦日々々の辯解だつて並大抵の苦勞ぢやなかつたからね、何が毒

だつてお金の無い苦勞程、身に應へて毒なものはありやしないからね——豐子が私達に大きな顏をするのも、一つは晦日を助けて貰つて居る爲ばかりさ。だが親子の間なら、その位は當然ぢやないか——なんの仲でも金錢は他人だつて云ふけど、豐子みたいのは、ちよいと無いね——證文を入れさせない許りの口調なんだもの。なアにもういゝよ。お父樣が歸つて來さへすりや、あんな子なんかに鐚一文厄介になんかなるもんか。ねえ。

（春子は新聞などをながめる。美代子は掃除を終り覗き込むこと。）

おみね　（語り續ける）　其處へ行くと、松子の方が未だ感心だよ、どうにかしたらと思つても、此方も苦しい世帶を張つて居るところだから思ふばかりで、何一ッする事が出來ないで氣の毒だつて正直に愚痴をこぼして來るからね、松子の方へは早速に手紙を出して、お父樣の歸つて被來つた事を聞かして喜ばしてやらうね。ねえ、美代子さん、お前あとで福島へ手紙を出しておくれ。

美代子　（何心なく新聞を覗き込んで何かの記事を讀み思はず低く叫ぶ）

おみね　お前もう掃除は濟んだのかい……美代さん、其處に居ないのかい、美代さん〳〵……どうか、おしかい？（臺所の障子をあける。襷がけの姿）　其處に居たんならハイとか何とか返事をしたらどうだい。ひとに許り口を利かせて、新聞なんか後で讀めるぢやないか、顏でも洗つて仕舞つたら、どうだい。（と腹立ち聲）

美代子　（返事なし）

おみね　美代さん、返事をおしな。

美代子　（何も無言）

おみね　（部屋に入つて來て）　美代さん、お前は、どうかおしかい？

美代子　母樣。（震へ聲）

おみね　何だい、大きな聲をして、吃驚するぢやないか。

美代子　母樣、大變よ。

おみね　大變て、何が大變なのさ。

美代子　大變ですよ。これを、ごらんなさいな。

おみね　何か出て居るのかい？　眞逆大舘の乘つてる船が沈沒したんぢやあるまいね。

美代子　こゝよ〳〵、此處をよく讀んでごらんなさい。

おみね　え。大詐欺師捕はる。何だい美代さん、それがどうしたのさ。

美代子　だから、それが、それが大變なのよ、お父様ぢやないの。それが、お母様――

おみね　え、お父様！　何を云ふんだねお前は――お止しよ縁起でもない。（と云ひ作ら讀んで愕く）

美代子　母様、大變でせう。

おみね　こんな事は無い。こんな馬鹿な事があるものか。私は現に昨日お目にかゝつて來たんだもの。

美代子　でも母様、此處にかう書いてあるぢやありませんか。其筋の巧妙なる調査は連累者をして毫も事の發覺を覺らしめず、終に昨夜一網打盡に檢擧されたり。

おみね（血相を變へて）美代子、ぢや、お前はお父様が詐欺をしたとお云ひなのかい。

美代子　あら――母様、でもそこに、さう書いてあるんですもの……。

おみね　書いてあるからと云つて……子として自分の口から親を詐欺師だなんて云つて濟みますか。

美代子（氣を呑まれて）母様、ごめんなさい。

おみね　物には間違と云ふものがあります。え、間違ですとも――そんな新聞など、信用がなるもんですか。

美代子　本當に間違でせうか。間違つて居るんでせうか。え、母様。

おみね（無言。恐ろしさを避けんとするが如き心持）

（美代子は、突然聲を上げて泣く。春子も何か知らず釣込まれて泣く。）

おみね　美代さん。（と嗜める）

（おみねは新聞を凝視する。――間――法華經の[illegible]の音。處へ表に「御免」と訪ふ聲。誰も取附かず。再び三度、美代子涙を拂つて玄關へ出る。）

美代子（蔭の聲）あら。（引返して來て）母様、武内さんよ。

おみね（救はれた様な様子）あゝ丁度いゝ。オヤお前御案内しないのかい。

美代子（羞恥）あら、私どうしたんでせう。

（と引返す途端に武内欽次郎出で來る。）

武内（某造船會社の事務員、眉目秀麗なる青年）勝手に上つて來ました。他所のお宅も自分の家も見境のない行儀知らずでハヽヽヽ。（空虚な笑聲）

（と、おみねが笑はうとしたが、聲が出ない。）

武内（取つてつけた様な様子）お早うございます。

おみね　お早うございます。

（間。白々しい沈默。）

武内　（幾度か逡巡しつゝ最後に思ひ切り）　奥様――

（と、呼びかける。）

おみね　（不安を待ちまうけたる如く）　ハイ。

武内　新聞、――ごらんになりましたか。

おみね　ハイ。

武内　どうも、飛んだ事が出來上りました。

おみね　では、全く事實なのでございますか。

武内　事實かと仰有ると？

おみね　間違では無いんでございますね。

武内　間違であつてくれゝば、いゝと思つて居ります。

おみね　それぢや、いよ〳〵本當の事なんですね。（美代子おみねの顏を見る）何だつて、こんな恐ろしい氣になつてくれたんで、ございませうね。

武内　いや、恐らく御主人は――私の思ふのに他の連中に乘せられなすつたのだらうと思ひます。御主人の實業界に於ける過去の御經歴は、こんな……その、殊には都合の好い役廻りになるものでございますから、私は確かにさうだと斷言いたします。

おみね　さうでございませうか。さうであつて、くれゝば、まだしも――私には餘りの事で何だか、サッパリ譯が分らなくなつて仕舞ひました。

武内　御無理はありません。美代子さんも御驚きなすつたでせう。

美代子　えゝ。……

武内　私も何から申上げてよろしいか、見當が附きませんが、差當つての問題は此の事の善後策を講ずる事にあるだらうと思ひます。

おみね　直ぐお言葉に甘えた樣でございますけど、武内さん、今迄踏み耐へて居りましたものゝ、良人がかう云ふ事になりましては、この後どうして能いのやら本當に途方に暮れて居るのでございます。御迷惑でも此の後何分よろしくお願ひ申します。

武内　仰有る迄もございません。私の今日あるのは、皆御主人の御高庇なのですから、私としても出來るだけの事をお盡しいたしたいと存じて居ります。其處です問題はこの御家の始末……それよりも未だ急な事がある。今日或は長崎屋――御存じでございますね、御主人が泊つておいでになりました、あの宿屋、その番頭が此方へ伺ふかも知れません。

おみね　何しに來るのでございませう。
武內　宿泊料の請求に來るのだと思ひます。私が今留つて來ました時に、さう云ふ口吻を洩らして居りましたから自動車代を立替へただけでも、百何十圓ある樣な事を申して居りました。
おみね　百何十圓――まア、そんなお金がどうして私達に都合が出來ませう。私の方で拂はなければならないのでございませうか。（とオロ〳〵聲）
（美代子は情なさゝうに下を向く。）
武內　私は、かう云ふ場合の知識がゼロですが、此の事に就ては總て辯護士にお願ひになつたら如何でございませう。其の方が面倒が無くていゝだらうと存じます。
おみね　それでも辯護士を頼めば、やはりそれだけのお金を取られるんでございませう。
美代子　（情なさゝうに）母樣。
おみね　だつて今の場合、一番それが肝腎の事ぢやないか。
武內　（聞くに堪へず）イヤ辯護士を頼む、頼まないは第二の問題として、どう云ふ方法を取るのが捷徑か、私の友人に辯護士がありますから、早速電話でゝも問ひ合せて見ませう。
おみね　左樣ですか。では恐れ入りますが、さう云ふ事に美代さん、お前御一緒に行つて表の酒屋で電話を借りて、（と二錢渡す。）
武內　イエ、よろしうございます。其處で自動電話をかけて來ます。かう云ふ事は他人に聞かれるのも妙なものですから、美代子さん、どうかおかまひなく。一寸行つて來ます。（と這入る）
おみね　本當に御深切な方だね。
美代子　本當に武內さんは、いゝ方ね。
おみね　お前にお婿樣を貰ふ時には、あゝ云ふ深切な方をね。
美代子　あら、イヤなお母樣――
（そこへ、長崎屋の番頭平吉、藝妓喜久治を伴ひ訪れ來る。）
蔭の聲　御免下さい。
美代子　（立つて行く）どなた樣でございます。
蔭の聲　手前は神田の長崎屋と云ふ家から參りました者でございます。
美代子　（入り來る）神田の長崎屋と云ふ家からですッて藝妓らしい女を連れて來ましたよ。

おみれ　え、藝者？（と不安の中に物思ひ）
美代子　あげてもいゝんですか。
蔭の聲　奥樣、手前でございます。昨日は失禮をいたしました、御免下さいまし……。
（と這入つて來る。長崎屋なる旅館の番頭、長蟲と綽名な呼ばるゝ平吉。一癖あり氣な面構へ。見るからに不快なり。續いて藝妓喜久治。博多邊の藝妓。さのみ名妓ならず。大阪辯にて容貌稍々貧弱なり。）
平吉　昨日は何のおかまひもいたしませんで失禮いたしました。どうも分り難い所でございますな。電車を降りてからお宅の番地を探し當てる迄一苦勞をして仕舞ひましたよ。（美代子に）お孃樣でございますか。手前は今度お父樣に御贔屓になりました長崎屋の番頭平吉と申しますもので……何分共によろしく――。
おみれ（耐りかねて）宿賃のお拂ひでしたら、今辯護士を頼みに行つて居りますから。
平吉（眼をギヨロつかせて）辯護士？……ハテな、奥樣何を仰有るのかしら……まアそんな事はどうでもいゝ。姐さん、お前さんの用を先へ片付けて仕舞つたら、どうですえ。私は殊に寄ると話が、チヨイと混み入つて來さうだから、辯護士なんて云はれますとね。ヘイ。
（と底氣味惡く笑ふ。）
喜久治（オロ／＼して）奥樣だツか。始めてお目にかゝります。妾は博多の相券の喜久治と申しまして、お宅の旦那さんに彼方で御贔屓になりましてん、よろしうお願ひ申します。
平吉　上方者は氣が長えなア姐さん無駄を云はねえで、早く用向を話したらどうだい、後連が控へて居るんだ。
喜久治　濟んまへん。奥さん、私は實は折入つてお頼みがあつて參じましたんね。こないなこと、お頼みするのんえらう云ひ難い事でおまつけど、あんたはんより外に話を聞いて貰ふ人さんが、おまへんよつて、てつぽの皮で今日、こないに寄せて貰ひましたんね。濟んまへんけど私に少しお金を貸して頂けまへんやろか。（とモジ／＼云ふ）
平吉　手取早く私が辯じて仕舞ひませう。早え話が奥樣、この人はお宅の旦那がお馴染で、玉祝儀をつけて此方へ連れてお出でなすつんたんでさ。處が旦那は、あゝ云ふ事になる。玉祝儀の出所が無え、博多へは歸られねえ、東京に居るにや錢が要ると云ふんで思案にあぐんだ末が

此方樣へ伺つて話をしたら……。

おみね　まア待つて下さい。それで私に其のお金を拂へと仰有るんですか。まアどうして、そんな事が云へるんでせう、良人と、どう云ふ御馴染か、なにか知りませんが、私共では一向にお近づきの無い方なんですからね。お金を貸せの引取れのと……宅では良人と貴方がお樂しみの最中三度の御飯も滿足に頂かずにお蔓をスキにして一週間も暮らした事があるんですよ！

美代子　母樣。

おみね　だつて美代子、餘り對者を馬鹿にしてるぢやないか、よくノメ／＼とそんな事を云つて來られたもんだ。

平吉　奧樣、さう御立腹ぢや困りますね。だから御相談だと申して居るぢや御座いませんか。いえ何も唯今直ぐ現金で頂戴しようの何のと云ふのぢや御座いません。お前の處の勘定は、こちらで認めたと云ふ御印だけを頂戴すりやそれでもうイザコザは無えんでござんすから。

おみね　その印だつて押していゝものか、惡いものか、ねえ美代子……

平吉　奧樣、私は何も強請や、かたりに來て居るんぢや無えんですぜ、お宅の旦那たア譯が違ふんですからねえ。私のは正當に頂くものを頂きに來て居るんですからね、まアそんな事は、どうでもいゝ。一つ拂ふとか拂はねえとかキッパリとした返事を伺ひたいもんですな。その上で私の方も覺悟がありますからね。

（武内歸り來る。）

武内　只今歸りました。

おみね　あゝ武内さん、いゝ所へ來て下さいました。實はその長崎屋の番頭さんなんでございますがね。

武内　イヤ樣子は今、表でチラと立聞きしました。私の思つた通りでした。奧樣、差出た樣でございますが、此の場の拂は私にお任せ下さいませんか。今、辯護士と相談した事もございますから。

おみね　はア、どうぞね。

武内　此の御婦人は？

おみね　（忌々しさうに）宅の馴染ださうでございます。金を貸してくれと云つて來たんですよ。

喜久治　いゝえ、奧樣は、えらう怒つておいでやすけど、私は此の番頭さんの云ひはるやうな事をお願に伺つたのやおまへんね。えらい、云ひ難うおまッけど、私の方があんじよう濟みますものなら、大阪迄の汽車賃を貸して

もらへんやろかと思うて何ひに上りましたんね、こない な事があると思うたら餘分のお金を用意して來るのやつたけど、今更ら、それも云うてあかんこつちやし、主人の許へは云うてやれず、東京には親類はなし、これがほんまに木から落ちた猿同然、ほんまに難儀してまんね大阪は生れ故郷だすよつて、親類もおますさかい、そこへ體を落ちつけて、どないかし様と思ひましたけれどな何云うたかつて先立つものは、お金だつしやろ、そのお金が融通つきまへんね。と云うてお金が無いちうて何時までも東京に居たかて埒のあかんこつちやし、一日東京に居れば、それだけ身動きの出來ん事になりますよつてな私等それが恐ろしいさかい、少しでも動ける間に動いた方が賢やと思ひますで、大阪迄の汽車賃をどないかしてもらえんやろかと思ひまして、それで上りましたんね。

武内　あゝ、さうですか、よろしい。汽車賃と云はず、どうにか、貴女の身の始末のつくやうに私が何とかいたしませう。

喜久治　えゝ、ほんまだッか。

武内　今日は午後から會社に居ります。（名刺を渡して）此處ですから今日にでも明日にでもお訪ね下さい。どうともお取計ひいたしませう。

喜久治　有難うさんでおます。ほんまに助かります。これだす。（拜む眞似）

おみね　商賣人はイヤだね。直ぐ芝居をしたがる……

武内　（耳に入らぬふり）ではあなたは、お歸りになつた方がいゝでせう。

喜久治　え、えらう勝手だすけど、お先へ去なしてもらひまッさ。奧様おほけにお邪魔いたしました。どなたも、おほけに……（去る）

おみね　圖々しいねえ。よく平氣で歸つて行けたもんだ。此處を誰の家だと思つて居るんだらう。

美代子（聞き辛く、武内の前をも恥づかしく）母樣、そんな事を仰有るもんぢやありませんわ。

平吉　處で旦那、私の方は、どう片を付けておくんなさるんです。

武内　お待たせいたしました、それは今、電話で依頼してあるから、神田三崎町三ノ十二の都築辯護士を打合せた上の事としてもらひたい。一切都築辯護士の方へ掛合つて貰ふ事にして、今日はこれで歸つて貰はう。何時まで居ても無駄な話だ。

平吉　私は辯護士なんかに御懇意のある、偉え旦那にお話しをしに來たんぢやございません。此方の菊地の奧樣にお話があつて來たんでござんすよ。ねえ奧樣、奧さん。今さ、何んとか片をつけて頂かうぢやございませんか。今も云ふ通り、現金がおあんなさらなきア無理に頂かうたア云ひません。この書いたものに印を押して頂きや、頂戴するのは別に日を限つて此方へ伺ふなり、又他に方法もあらうと云ふもんでございますから、さう云ふことにして今日はお別れしようぢやござんせんか。ねえ、奧さん。

武内　イヤ奧樣、もう何も仰有る必要はありません。勝手な事を云はせてお置きなさい。間違つた事を云ひ出したら巡査に引渡すまでの事ですから。

平吉　ぢや旦那、此方ぢや、どうしても此の勘定は拂つちや下さらないんですかい。

武内　何度訊いても同じ事ぢやないか、法律上から云つても此方ぢや鐚一文お前の處へ支拂ふ義務は無いんだ。菊地さんがお前の處へ宿を取られた時には、お前の方では菊地さんと云ふものを信じてお泊めしたんぢやないか。その勘定が不拂ひになつたからと云つて、何の關係もない御家族の方が、それを支拂はなけりやならん義務が何處にある。それも情誼の上からなら又別だが、お前の樣にそんな無法な態度で脅迫がましい事を云つて來りやいやでも此方だつて法律をたてに取らなけりやならん。諦めて、さつさと歸つたらよからう。

平吉　ヘッ、何のかのと云ふと法律ですかい、好い加減にして下せえ。可笑しくもねえ。ねえ旦那、私や、そんなんで驚くんぢやありやせんぜ。念の爲にお斷りをして置きやすが、私の方ぢや辯護士なんか相手にやしませんからね、何處迄も奧さんとの對談なんですからね。奧さん、どうか、そのおつもりでいらして下さい。こりや大きにお邪魔いたしました。

（と荒々しく立去る。）

（間。蔭にて車のベル。續いて人の訪ふ聲。）

おみね　（立つて行く）あら、豐子かい。

豐子　まアお父さんはどうなすつたと云ふんです。新聞を見て愕りしたんです。私達の名譽迄踏み躪られて仕舞つたぢやありませんか。（と云ひつゝ這入り來る）

おみね　さうガミ〳〵お云ひでない。靜かに云つたツて分るぢやないか、お客樣もお居でなのに。（と不平の體）

豐子 (武內に氣附き急に樣子づくりて) あなた、ごめん下さいまし。

(と通る。美代子座布團を出す。)

美代子 入らつしやいまし。

豐子 はい。

おみれ あのね、豐子さん。此方は武內さんと仰有つて前にお父樣の仕事を助けて下さつた方なのだがね、此頃でもそれは/\いろ/\御厄介になつて居るんだよ。それに今度のお父樣の事でも大變御心配下さつて、今も私達ではどうする事も出來ない事を立派に捌いて下さつた所なんだよ。

豐子 あゝ、さうですか。(と母へは冷淡)

おみれ 武內さん、これが總領の豐子でございます。

武內 あゝ、さ樣でしたか。何時もお話は伺つて居ります。初めてお目にかゝりますが、武內欽次郎と申します。お父樣には一ト方ならぬ御世話を受けたものです。何分よろしく――。

豐子 私こそ、母や妹が色々御世話になりますさうで、ありがたう存じます。何分こちらも女許りでございますので今度のやうな事になりますと、私は色々思ひましても外へ參つて居ります體ですから思ふ樣には參りませず、他人樣にいろ/\御世話をかけまして申譯ございません。本當に父は困つた事をしてくれました。

武內 イヤお察しします。併し御主人は他の人達の企みに引張り込まれた爲に餘儀なく、あんな事になつたに相違ありません。それを思ふと全くお氣の毒でなりません。が、差當つてはお二人が此處を引拂ふのが得策だと考へますが、奧樣の考は如何でございます。何時までかうしておいでになると、何かと面倒でもありますし……。

豐子 こゝを仕舞ふと申すことは、私もこんな事のない前から始終申して居りましたので、もう美代子も年頃です。此の女を緣附けて、母はそれに掛るのが何よりだと申しましても、母はあてにもならない父をあてにいたして居りました。

武內 (冠せて決斷的に) これは寧ろ大館さんのお世話を願ふのが最上策ではありますまいか。甚だ僭越な事ですが、大館さんのお世話なら女の方お二人位のお世話はそれ程の難事でも無からうかと存ぜられますが。

豐子 それは……あの何ですが、何分大館が今航海中なので留守にさうした事をしますのは。

武内　實に、おッつけがましい……失禮ではございますが大館さんの御人格はいろ／＼の方面から伺つて居ります。この突發した事件にその危急を救はれる事を大館さんは決してお咎めにはなるまいと信じます。又さうしておあげなさらないと、お二人は全くお困りでせう。大館の奥様、私からもお願ひいたします。御無理かも知れませんが枉げて御承知を願ひたいのです。

豐子　本當に男らしい……まア何と云ふ頼母しいホ、、、——あなたのやうなお口前では、どんな者でもコロリと參つてしまひますわ。

武内　は？

豐子　いえ、動かされずには居られないと申しますの。

武内　では、御承知下さいますか。

豐子　はア、あなたのお言葉に從ひますわ。

武内　ありがたうございます、それで私も安心する事が出來ました、菊地の奥様、頗る專斷でございましたが、お聞きの通りの譯です。大館さんの方へお出でになるのは一番安全の道と考へますが如何でございませうか。

おみね　え、、ありがたう存じますが。

豐子　母様、御迷惑なら、お勸めはいたしませんよ。

おみね　誰も迷惑だと云つてやしないぢやないか。私達二人がかつて行つちやお前さんも奉公人の手前厄介が殖からうと思つてね。

豐子　そんなら、ようござんすけど、いや／＼來て頂いたんぢや私の方でもお世話をする譯合がありませんからね。

おみね　そんな事があつて堪るものかね、自分の娘なり姉の家へ行くんぢやないか。

武内　では私はこれから會社へ出かけなければなりませんから、これで失禮いたします。

豐子　あら、さうでございますか、どうも失禮いたしました。本當にありがたう存じました。此の後共よろしく御願ひいたします。どうかこれを御縁に母や妹が居りませんでも私の方へ、お遊びに——。

武内　是非伺ひませう。

豐子　是非お待ちして居りますわ。あなた、お帽子……。

（と渡す。）

武内　では、失禮します。（去る。豐子見送つて行く）

豐子　（蔭の聲）ではご免下さいまし、本當にお待ち申して居ります。（引返し來る）母様、おや私も歸りますか

られ。家へ被來るなら、被來るやうに、ちやんとして來て下さいね、奉公人の手前だつて餘りみつともない事は出來ませんからね。ようござんすか、頼みましたよ。

（と去る。間。）

美代子　母樣、姉さんは何故あゝなんでせうねえ。

（おみれは答へず。沈默。間。）

男の聲　御免下さい。

美代子　どなた。

男の聲　お内儀さんはお宅ですか。

美代子　（母を見る）

おみれ　（手を振る）

美代子　あの、留守でございますが。

男の聲　お留守、で何時頃お歸りになるか、お分りになりませんでせうか。

美代子　えゝ、あの誰方ですか。

男の聲　手前は昨日櫛笄を賣つて戴くお約束をした道具屋でございます。

おみれ　（出て行く）あゝ、あなたでしたか。

男の聲　おや、お出でなすつたんですか。

おみれ　實はその鳥渡。――あなたどつたら、かまはなかつたんです。まアお上んなさい。

男の聲　左樣でございますか、へ、では御免下さい。（と入つて來る）昨日はどうも、えゝ百五十圓持つて參りましたが、お賣り拂ひ下さいますか。

おみれ　美代さん、賣つて了はうか。

美代子　えゝ――。

（と云つたまゝ緣側に出て朝顏を見る。微風。）

おみれ　（涙を拭ひ）ぢや、やはり引取つて貰ひませう。それからね、道具類も總て賣つて仕舞ひたいんですが貴方の方で引取つて貰へないでせうか。

道具屋　さやうでございますな、手前は主に、から云ふ櫛とか笄とか、さう云ふものを手掛けて居りますので、お勝手道具などは、――へエ……いえ、なに、よろしうございます。さう云ふ事でございましたら、手前の知合がございますから、お急ぎでしたら今日にも早速伺はせる事にいたしませう。

おみれ　さうですか。ぢや濟みませんけど、なるべく値をよく買つてくれる人にね。（と淋しく笑ふ）

道具屋　承知いたしました、では百五十圓、お受取り下さいまし。

おみね　では、あの、これを。

道具屋　おや、早速お道具の方は伺はせる事にいたします。ごめん下さいまし。

（と去る。間。）

おみね　美代さん、〳〵。

美代子　え――。（朝顔を見たまゝ返事する、涙）

おみね　（哀れに見えて）ご飯にしようかね。

美代子　えゝ。

（此時平吉が庭よりノソ〳〵と出て來る。）

平吉　へゝゝこれから御飯でございますか。

美代子　あ母様。

（と顔色を變へる。おみねは紙幣を入れた懐中を押へて蒼白となる。）

平吉　へゝゝなんてい驚きやうをなさるんです。泥坊でも入りやしめえし、表から伺はうと思つたんですが、どうやらお客様のやうでござんしたから裏の方へ廻つて參りましたんで、へゝゝごめんなさいまし。（と腰かける）

おみね　お前さん、一體何しに來たんです。

平吉　お忘れなすつちや困りますね、御勘定を頂きに來たんでさア。

おみね　そんなら辯護士の方へ行つてくれつて先刻あれ程云つたぢやありませんか。

平吉　だから私も辯護士なんか相手にしないと、あれ程云つたぢやありませんか。ねえ奥さん、これが金が無いんぢやなし、ちやんと百五十圓と云ふお金を持つて被在るぢやござんせんか、私も此處まで電車賃を使つてやつて來たんだ。眞逆手ブラでも歸れねえ、御勘定の内入りにその百五十圓だけ頂いて歸りませうか。

おみね　でも、これは。

平吉　（ソロ〳〵上る）いくらお隱しなすつても私の見込んだんぢや逃がしつこはありやしません。痛え目を見ねえ内にお出しなすつた方が上策でせうぜ。

おみね　美代さん、誰か呼んでおくれ。

平吉　阿魔、動きやがると承知しねえぞ。

おみね　あれ、誰か來て下さい！

平吉　畜生、遁すもんか。

（と爭ふ。終に蹴倒して逃げる。おみねは氣を失ふ。）

美代子　（後を追はんとして母が氣になり取縋り聲をかぎりに呼ぶ）母様！

(ヨイトマケのかけ聲が聞える。)

——幕——

二幕目　東京監獄面會人控室

東京牛込市ヶ谷富久町なる東京監獄の面會人控所。一面の土間。中央に三方を板羽目に見切り薄縁を敷きたる溜あり。

幕あく。

(と、溜には四五人の男達が輪になつて煙草をふかして居る。其の隅に一人の老人が首を縮めて突伏しながら、絶えず念佛を唱へて居る。上り框の端の方に美代子とおみねが小さくなつて腰かけて居る。反對の端の方にも堅氣の細君らしい女、赤ン坊を背負つた長屋の女房風の女が女の子を連れて、土間の隅に赤ン坊をあやしながら往つたり來たりして居る。嬰兒の泣き聲。)

女房　おゝ、よし／＼泣くんぢやないよ。今にお父ちやんに會はしてあげるからね、坊やはいゝ子だね、いゝ兒だ——坊やはいゝ子だ、ねんねしよう……。

(と子守唄を低く唄ふ。がその聲音に、慄るやうな淋しさがある。)

女の子　母ちやん、お父ちやんに未だ會へないの。

女房　もうぢきだよ、順番が來たら直ぐだからね。

女の子　母ちやん、お父ちやん、此處で何してんの。

女房　……(答へず)

女の子　あたいお父ちやんに會ひたいなア。

男の甲　罪だね、こんな處へ子供を連れて來るのは。見る方も見られる方も後で思ひ出す種となつて、迚も耐つたもんぢやねえと思ふがな。

男の乙　お內儀さん、お前さんの亭主が這入つて居るのかい。

女房　え、はい——。

男の甲　二人の間の子供だね。

女房　はい、——それが可哀想でございましてね、本當に親孝行に出來てる子で、毎日のやうにお父さんの顏が見たい／＼と申しますので、今日連れて參つたんですよ。

男の丙　だが、そいつはお內儀さん、却つて見せねえ方が爲ですぜ。

男の丁　まだ何とも決まつて居ねえのかい。

女房　決まつた所で未だ三年も經たなきや歸りません。そ

の間に子供だつて、何時病氣をして死なゝいとも限りませんし、私だつて二人の子供を背負つて、もう喰べて行かれやしません。

男の甲　まア、泣いたつて仕方がねえや、みんな親父の料簡が悪いからよ、女房ッ子のある身でこんな所へ入るやうな奴は、どうせ先の見込もあるまい。今の内に何とか思案を變へるんだねえ。

女房（默つて男の甲を見る）

男の甲（もぢよつと見る）

（「十一番」と呼ぶ聲。男達は、もう來たと總立ちになつて出て行く。靜かな間。老人の念佛の聲のみ聞ゆ。美代子は男達の後を見送り番號札を見て。）

美代子　母樣、こんどよ。

細君らしい女　あなたも御面會でいらつしやいますか。

美代子　はい。（赧くなる）

細君らしい女　こんな所へ來るのは、本當に辛うございますわね、あなた方は初めてゞいらつしやいますか。

美代子　……えゝ。

おみね（引取りて）初めてなんでございます。

細君らしい女　あたしはこれで二度目なんでございますが何だか氣後れがいたしましてねえ、あの御親戚でゝもいらつしやるんですか。

おみね　はい。

細君らしい女　まアよくお出かけなさいましたわね。人間もこんな所へ入れられる樣になつちや全く駄目でございますわね。ツイ悪い事をする氣でなくとも知らず〳〵に引張り込まれる事が無いとも限りませんからね、私の主人などもその方でね、どうしてこんな所へ連れ込まれるやうな事をしたか、まるで夢のやうでございます。

おみね　お氣の毒でございますね。私の方もやつぱりその口なんですのよ……。（と心の底から出た樣な溜息）

老人　ナムアミダブツ〳〵。

（「十二番」と呼ぶ聲。）

美代子　母樣、あたし達よ。

おみね　では、ごめん下さいまし。（と立上る）

（老人の「ナムアミダブツ」の聲。）

――道具廻る――

第二場　同監獄接見所

一面の土間。板羽目、中央正面には小さい窓があつて

厚い板戸やうなものが降りて居る。前に腕木あり。道具納まる。

（と、看守が先に美代子とおみねが扉をあけて這入つて來る。）

看守（椅子に腰を下ろし願箋を手にしながら）あなたは。

おみね　菊地みね。

看守　あなたは。

美代子　あの美代子。

看守　何美代子です。

美代子　菊地美代子でございます。

看守　住所は。

おみね　府下淀橋町柏木百三十一番地。

看守　用件は、家事上かね。

おみね　はい、一身上の相談でございます。

看守　よろしい、接見の時間は五分間だからね。なるたけ餘談に渉らないやうに……。

（と云つて後の綱を引く。カラ／＼と云ふ音がして戸が上ると菊地爲三郎の姿が現はれる。爲三郎の背後に看守が居る。）

菊地　あゝ、美代子。

美代子　お父様。

（と微かに聲を立てたなり、どうと地上に倒れる。）

看守（抱き起して）しつかりせんけりやいかん。おい、それぢや折角面會に來た甲斐がないぢやないか。

おみね（オロ／＼して）美代さん、しつかりしておくれ。美代さん、氣が附いたかい。美代さん。

美代子　どうもありがたう存じます。もう大丈夫でございます。

看守　世話を燒かしちやいかんぢやないか。

菊地　美代子、どうした、かんにんしてくれ、無理はない。お前の驚くのは無理はない。みな私が悪いのだ。濟まんかんにんして呉れ。

看守　さう泣いて居ちや仕方がない。面會人の用件は家政整理上と家族の者の一身上に就ての相談とあるんだ、分つたか。

菊地　へい／＼。（と丁寧にお辭儀する）

看守　お内儀さん、早く濟まさんと時間がない。

菊地　美代子、おみね濟まん。今度の事に就ては私は今更お前達に何とも合はす顔がない、が、たゞこれ丈の事は

信じて居てくれ。私は決して恐ろしい惡心で此の罪を犯したのではない。ある者に乘せられて此の不始末を見るやうになつたのだ。それは決して不正の榮達を望んだのではない、お前達に安心を與へてやりたかつた許りだ。それぱかりだつたのだ。

おみね　はい……（美代子泣く）

菊地　併しそれが私慾でないからと云つて犯した罪に對して責を避けようと云ふのではない。私は自分の罪に對する刑罰には潔く服する覺悟だ。武内が保釋の運動をすると云ふ厚志を斷つたのも、自分の罪は自分で購はなければならんと覺悟して居たからだ。武内は相變らず訪ねて來てくれるか、あれは末賴母しい男だ。おみね、お前も目をかけてやつてくれ。

看守　おい〳〵そんな話はいゝ加減にして置かんと際限がないぢやないか。

菊地　ヘイ〳〵待つて居てくれ、直き歸る……少し胸が………。

美代子　胸が痛いんですか、心臟でもお惡いんぢやないんですか。

看守　おい〳〵早く用件に移らないか。

（と思はず後の綱を引きにかゝる。）

美代子（慌てゝ）お願ひでございます。もう暫くでございます。どうぞ、あの。

看守　ぢや、早くしなさい。（と手を引いて目を外らす）

菊地　ありがたうございます〳〵。それでおみね、今はどうして居る？

おみね　はい、あの豐子の家に厄介になつて居ります。

菊地　大館さんは御無事かな、美代子、豐子はあゝ云ふ女だ。辛からうが辛抱しろ、體を大切にするんだぞ、親父がこんな醜態になつたからと云つて必ず惡い風に染つてくれるな。無分別な事をするな、いゝか。お父さんは此處に居ても、始終お前の事を思つて居るんだぞ、忘れてくれるな、おみね、お前も氣をつけてやつてくれ、相談する事があつたら武内に賴め、いゝか體を丈夫にするんだぞ、病氣になつてくれるな、美代子、もつと、顏を見せてくれ、美代子！

看守（躊躇して居たが、綱に手をかける）時間だ！

（戸が降りる。）

おみね　あ、あなた。

美代子　お父樣、お體を大切になすつて、お早くお歸りを

待つて居ります。お父様。

菊理の聲　美代子……。

——暗轉——

第三場　大館家の庭園

洋風の庭園。小高き所に四阿。噴水。ベンチなど。夕方より夜にかけて、舞臺明るくなる。

(と、四阿に豊子が本を讀み耽つて居る。噴水の傍に春子が池に浮ぶ睡蓮の花を弄つて遊んで居る。水の音鐸の聲。豊子は、ホツトして顔をあげ四邊を見廻す。火熱つた顔を袂の先で輕く煽ぐ、春子に氣附く。)

豊子　春子、お前は、さつきから此處に居たのかい。

春子　え、いゝえ。

豊子　(その顔の愛らしさに微笑み)春子、此處へおいでおいでッたら、お肯きでないと怒りますよ。

(春子、四阿の方へ行く。豊子突然、春子を抱きしめる。)

春子　(びつくりして)母様。

豊子　何だい。何だよう。

(春子觀念したらしく首垂れて居る。)

豊子　何故、だまつて仕舞つたのさ。何か云ひたいんだらう、お云ひ、私は何でも肯いてあげるから。

(春子は臆病らしく益々默り込む。)

豊子　春子！　(鋭く叫ぶ)

春子　(怯へたやうに)御免なさい。

豊子　お前は何故謝るのさ。私は何も叱つてやしないぢやないか。

春子　ごめんなさい。

豊子　叱つてるんぢやないッたらね——春子、お前は何故さうなんだらうねえ。私はお前を憎んでなんか居やしないんだよ。お前が可愛いのさ。お前の體が可愛くて可愛くて——。

(と殆んど狂的に抱きしめる。春子は悲しげな顔をする。)

豊子　何だい。その顔は、何故泣くのさ、泣き蟲！

(と突放す。春子シク〳〵泣き出す。)

豊子　勝手に泣いておいで、お前は自分で僻んで繼子いぢめをされると思つて居るんだ。私がお前を可愛がる心持がお前には解らないんだね。人間には抓りたい程人を可

愛がりたい思のする事のあるのをお前には解らないんだ
ぢれつたいねえ。（と抓る）

春子　痛い、母様、ごめんなさい。

豐子　生きた人間を人形のやうに育てようつて云ふ、そんな無理な事があるものか。人形だつたら手足を、もいだつて血が通つてないから痛くはないけれど人間には此の通り血も通つてりや、神經も通つて居るんだ。

（と春子の腕を撚ぢ上げる。）

春子　ごめんなさい〳〵。

豐子　（撚ぢあげたまゝで）春子、お前ね、お父様の處へ行つて、私には、この豐子には針で突いても直ぐ滲れ出す燃えるやうな眞紅な血が通つて居ますツてさう云つておくれ、さう云つといでよ！

（と突放す。春子は泣く。豐子はそれを少時見て居たが、ヒステリックに歯をかみしめながら、春子の左右の腕を摑んで振る。）

春子　（思はず大聲をあげて）ごめんなさい〳〵。

豐子　お前に云つても仕方がない。

（植込のトンネルを抜けて老婢のお市出て來る。）

お市　あら、奥様。大きな聲を立てさせたら旦那様に聞えますよ。

豐子　（微笑して）聞こえる方が有難いんだよ、さうしたら少しは生きた人間の扱ひ方が解るだらう、さ、春子もつと怒鳴つてごらん、さ、怒鳴らないかよう、さ、どうだい、これでも默つて居るのかい、これでもかい！

（春子は默つて痛さを堪へる。眼からは涙。）

お市　（傍へ寄つて）まア隨分強情なお子さんですね、奥様、もつと痛い目を見せてあげなけりや、その剛情は直りませんよ、繼子ツてものは何故かう、意地くねの曲つたものでございませうね。

豐子　婆や、お前感違ひをしちや困るよ。私は何も世間一般ザラにある繼子苛めをしてるんぢやないんだよ。春子が憎いんでもなけりや、春子の躾をしようと云ふんぢやない、此の子の體をおもちやにして居ると、何とも云へない、いゝ氣持になつて、つい酷い目に遇はせるんだよ。

お市　さうですね。少し私にや變挺古ですね、さう仰有りや世間の繼子苛めは亭主の居ない留守に酷い目に遇はせるのに、奥様のは旦那がお歸りになつてから酷くなつていらつしやいましたね。

豐下　大舘が悪いからさ。大舘さへ私の思ふ通りにしてくれたら。

お市　親の因果が子に報ひと云ふ譯ですね。だが、まだ私の腑に落ちませんね。これだけ奥樣の好き勝手にさせて芝居でござれ。――そ、そんな恐ろしい顔をするもんぢやございませんよ。誰に知れるもんですか、この事を知つて居るのは……大丈夫でございますよ、お嬢さんなんかに何が分るもんですか。ね、さうでございませう。何一つあなたに御不自由をおさせなさらない旦那に、まだ御不足がおあんなさるんですか。

豐子　あるともさ。それが一番肝腎の事ぢやないか。
（と、ニタ〳〵笑ふ。）

お市　へエー。（と觧しかねる心）

豐子　お前、何か用でもあるのかい。

お市　いゝえ。菊本の長公が參りました。

豐子　（迷惑さうに）番附でも持つて來たんだらう。受取つてお置きな。

お市　さうぢやございません。奥樣に是非お目にかゝりたいと申しましてねえ、何だか一寸芝居茶屋の出方とは思はれない洒落た服裝をして參りました。

豐子　私は別に會ふ用もないんだからね、さう云つて歸しておくれ。
（車夫の力松が芝居茶屋菊本の出方長吉を案內して來る。）

力松　さアあすこに被在るぜ、奥樣、長さんを連れて參りました。（と手柄顔）

お市　あら力さん。私が今お取次をして居る處ぢやないか。

力松　いけねえのかい。

お市　奥樣は今日は御用はないと仰有るんだよ。

力松　さうか、おう長さん、出直した。おらア又芝居の方のこつたから、奥樣にも御用があると思つたから氣を利かした意りなんだが、チョイ〳〵幕ぐらゐ見せて貰ふお禮にチョイ〳〵長さんにお世辭を使つたんだが、こいつは氣の利かねえ幕を出しちやつた、ねえ長さん、今日は御用はねえと。

長吉　奥樣の方に御用は、おあんなさらなくても、私の方に用がありますので。

力松　さうか、おう、長さんの方に用があるんだと。

お市　今、それを申上げてる處だよ。

豐子　（今迄背を向けて居たが）うるさいねえ、何の用な

んだい。

長吉　へ、、、どうも御立腹で恐れ入ります。どうもお久しぶりで。

お市　お孃様、あちらへ參りませう。

（春子は母の氣をかねて去らうとす。）

お市　參りませうと云ふのに。強情だねえ。

（と邪慳に手を引張る。）

豐子　姐や、酷い事をするもんぢやないよ。

お市　へエー。（と合點の行かぬ顏附）

豐子　春子、あちらへ行つておいで。

力松　長さん、此處の用が濟んだら歸りに寄んねえ、茶ぐれえは入れるぜ。

長吉　有難うござんす。是非お寄り申します。

（お市、春子、力松は去る。）

長吉　（揉み手をしつゝ傍へ進み）奧樣、その後は、暫くお顏も拜見いたしませんが、お變りもございませんで。

豐子　（素氣なく）ありがたう。

長吉　あまり近頃はお見えなさらないものですから親方も大變に御心配なさいましてね、昨日も稽古場へ呼ばれまして來月は是非お出でを願ふやうに、お前一度伺つて來いと、かう云ふ譯で今日伺ひましたやうな工合式で……

（と四邊を見廻して豐子の襟足を撫でゝ突く。）

豐子　何をするんだい。

長吉　何を見て居るんです。お見せなさいよ、見せたつていゝぢやありませんか。

豐子　何をするのさ、あれ〳〵。

長吉　（本を取る）見せたつて減るもんぢやねえぢやござんせんか、何です、こりや恐れ入つた、こんなものを見て被在したんですか……珍本ですねえ。

豐子　鳥渡、お前困るぢやないか、旦那が船から上陸つて來て被在るんだよ、少しは氣を附けてくれないと困つて仕舞ふぢやないか。

長吉　（本を見つゝ不作法に）だつて偶々一日位はようござんせう、此の頃は暫く、御飯食べと云ふ寸法も無えんだから、その内に一日ねえ、いゝでせう。

（小間使おてい出で來る。長吉狼狽して態度を改む。）

長吉　是非どうか、御見物を……へい。

おてい　あの武內さんが被來いました。

豐子　（急にイソ〳〵し出す）えゝ、武內さん……旦那樣は……。

おてい　お部屋で和田樣と碁を打つて被在います。
豊子　美代さんは？
おてい　未だお歸りになりません。
豊子　さうかい、ぢや此處へお連れ申しておくれ。この邊の方が却つて氣が晴れ〳〵して、いゝかも知れない。
（おてい去る。）
長吉　私はお暇するんでございますか。
豊子　さゝ、さうしておくれ。
代吉　ひでい事になるもんだな、少し拜借していんですけどね。
豊子　此處には錢を持つて居ないもの……。
（と指輪を拔いて渡す。）
長吉　これは――
豊子　一寸融通して置けばいゝぢやないか。
長吉　だが、まさか、これで叩き放しぢやございますまいね。
（おてい、武内を案内して來て去る。）
長吉　この御本も頂いてよろしうございますか。（豊子の答へぬ間に）へえ、どうもありがたう存じます。
（と丁寧に辭儀をして去る。）

豊子　（そは〳〵して）まア武内さん、よくお出かけ下さいました、此方へ被來いまし。さア、どうぞ、こちらへ。
武内　（四阿へ入る）先日は上りまして大變に失禮をいたしました。その節は又色々と御馳走になりまして。
豊子　いえ、何のおかまひも致しませんで、却つて私の方こそ失禮をいたしました、本當によく被來つて下さいましたねえ、大館も大變にあなたが氣に入つたとホヽヽヽ失禮ですわねえ、そんな事を申して居るのですよ。
武内　（心にも留めず）美代子さんや、奧さんは。
豊子　監獄へ父に面會に參りました、誰に逢はないものでもないから、そんな汚らはしい所へ行つてくれるなと色色留めたんでございますけど、美代子がどうしても會ひたいと承知しないんでございます。女の身で物好きですわねえ――。
武内　御親子の情としてさもある可き事です。よくお出かけになられましたなア、存じて居りましたら私もお供するんでしたが。
豊子　（言を轉へし歡心を得んと）私も會ひに行きたかつたのは山々なんですけれど、大館の姓名が出るやうな事がありましてはねえ、それでツイ見合はせたやうな譯な

ですけれど、あなたが行つて下さるんでしたら、大丈夫ですわ。こんど一度、ゆつくりお連れ下さいましな。

武内　あなたのやうに仰有ると、まるで遊びにでも行くやうですな。

豐子　まアそんなに私が暢氣に見えますか。

武内　(云ひ憚るやうに) 暢氣と申すのではございませんが、奥樣ほどに捌けていらつしやる方が……。

豐子　(冠せて) 私が、どういたしましたの。

武内　世間の噂なのですから……。

豐子　(一寸不安の體) どうせ我儘な私の事ですから、いろ／＼な噂もされませうが、又何か失策でもしましたかしらん。(と態と無邪氣に云ふ)

武内　いえ、失策と云ふのではないのですが…… 實は……春子さんの事で……。

豐子　繼子苛めと云ふ譯ですか。

武内　では、事實でございますか。

豐子　えゝ、事實でございます。

武内　え。

豐子　併し只今では、その心持も變つて居るのです。これはあなたは理解して下さる事と思ひますわ、眞面目に聞いて下さる?

武内　伺ひませう。

豐子　あたし、初め春子を憎んだ心持は、私がいくら、なつく樣に優しくして見ても、子供の方から隔てを措くやうにするのでそれは酷い目に逢はせました。さうして抓つたり打つたりして居る裡に私は春子の肉體から享ける一種の快感を覺えるやうになりましたの。あの子の生々とした若い血の盛られて居る體は、私に抑へ切れない愛情を起させて仕舞つたんです。だから此の頃はあの子が可愛くつて堪らないから息の根の止まる程、抱いてやつたり、力一杯抓つたりしてやるんです。その可愛がる私の心をあの子は知らずに怖がるんで、繼子苛めと云ふんでせう。

武内　さう伺ふと、繼子苛めと云ふのではないでせう。が然し、さう云ふ愛情は子供には理解されまいと存じます。

豐子　さうでせうかねえ、ですけれど武内さん、何につけても此方の思ふ心が先へ通じないと云ふものは、じれつたいものでございますわねえ。

(と云ひ／＼、武内の傍へ寄る。武内は起つ。又その傍へ寄つて。)

豊子　あゝ怖かつた、（と息をはずませる）
武内　何です。
豊子　人魂かと思つた。
武内　えゝ。
豊子　お星樣が飛んだんでした。（と寄り添ふ）
武内　あの長崎屋の番頭ですな、あれは昨日捕縛されました。
豊子　さうでございましたか。
武内　處でその折、強奪した金は殘らず使つて仕舞つたと云ふ當人の自白です。
豊子　しかし濟んだ事は致し方がございません。それよりあなた、突然ですけれど何か美代子の事で母とお約束なすつた事があるんぢやございませんの。
武内　約束したこと。……イヤ私は奥樣と何もお約束をした覺えはございませんが、一體それはどう云ふ譯でございます。
豊子　（嫣然）それは、あの外でもないんですけれど、あたし、ひよツとしたら母があの美代子を貴方に貰つて頂かうと思つて居るんぢやないかと思つたものですから。
（と躙るが如く意味あり氣に云ふ。）
武内　（思はず顔を染めて）いや、そんな……そんな事はないでせう、私は未だそんなお話は一度も伺つた事はございません。
豊子　ホヽヽ、武内さん、いくらお祕しなさつても駄目ですわ。私あなたと美代子との間に默契まで成り立つて居るのをよく存じて居りますのよ。もう結婚のお約束も當人同志で出來て居るんでせう。
武内　御冗談許り仰有います、私はそんな馬鹿な、馬鹿な事があるものですかハヽヽ。
（と笑つて打消すが嬉しさう。）
豊子　（いよ〳〵嫉妬を露骨に見せて）まアあんなシラを切つて本當にあなたは憎らしい方ですねえ。
（と又傍へ寄る。小間使のお春來る。この體を見て立ちすくむ。）
豊子　（離れて）何だい、何をぼんやりそんな所に立つて居るのさ。
お春　あの孃はんが戻りやはりました。
豊子　誰が？
お春　孃はん、お孃さまだす。
豊子　え、美代子が――。

武内　お歸りになりましたか、では早速伺ひに參りませう失禮いたします。（と、去る）

豐子　（見送りて）旦那樣は未だ碁を打つて被在るのかい（と忌々しさうに云ふ）

お春　へえ。

豐子　島波、用があるからッてお呼び申しておくれ。

お春　へえ。

豐子　何をぼんやりして居るんだよ、早くお呼びしておいでと云ふのに。

お春　あきまへんで、何を云うたかてフン／＼返事するばかりで立ちはらしまへん。

豐子　（ぢれ／＼）行つて來りやいゝんだよ。

お春　へえ――。

（と去る。豐子物思に耽る。春子の唱歌。大舘欣吾出で來る。）

大舘　（柔和な善人らしい容貌を有つ。色黒く肥滿せり、碁に夢中になつて碁を打つ手眞似）あすこで切つたら、さうだ、あすこで切りやよかつたんだ。後悔先に立たずだ。

豐子　あなた、何を云つて被在るんです。

大舘　豐子か、忌々しい目にあつたんだ。三番立て投げ、到頭一目增されて仕舞つたよ、あの邊であれを繋いで置けば白が――やはり、いけたかつたかな。

豐子　貴方、困つた事が出來たんですよ。

大舘　俺も困つたよ、あの一目に何故氣が附かなかつたらうか。

豐子　あなた、碁の勝負なんかどうでもよろしいぢやございませんか、私の話を聞いて下さいましと云ふのに。

大舘　聞いてるよ／＼。（と、うはの空）

豐子　只今、あの武内さんが見えたんでございます。

大舘　武内が來たか、彼も却々才人だ、前途大に有望――あすこであの三目を取つた時は形勢大いに有望だつたんだがな。

豐子　あなた聞いて下さるんですか。

大舘　聞いてるよ／＼。

豐子　解つて被在るんですか、間違ひのない裡に美代子を他へ預けた方がよろしいと思ふんでございます。

大舘　どう云ふ理由で。

豐子　間違が出來ると困りますから。

大舘　どうして、何が間違ふんだ。

豐子　あの武内さんが美代子に思召しがあるらしいんでご

さいます。

大館　結構だね。

豐子　え。

大館　俺は双手をあげて贊成するよ。美代さんと武内とならお天下に之れ程の良緣は又とあるまい、異議なく大贊成だ。

豐子　違ひますよ、そりや武内さんだつて先きのある方なんでせう、けれども美代子の良人にするに就ては、も少し人物を見なければなりますまい。

大館　それは勿論だが武内なら大丈夫だ。

豐子　その大丈夫が信賴にならないのでございますよ、大丈夫々々々と安心して居る裡に當人同志が未だ何の取極めもしないのに勝手なことをしたらどうなさいます。武内さんは、さかりのついた犬みたいな。

大館　豐子！　お前は何故さう云ふ汚い言葉を使ふのだ。もう少し外に云ひ樣がないでもなからうに。

豐子　でも、その通りでございますもの、現に今でもごらんなさい。貴方に御挨拶もせずに美代子の所へ行つて居るではございませんか。

大館　美代さんは歸つて來たのか。

豐子　え丶、今歸つて來たさうでございます。

大館　監獄の樣子はどうだつたかな、お父さんもお氣の毒なもんだ。それでどうしてお前は美代さんを預けやうなどと云ふんだ。

豐子　今の間に美代子を松子の所へ預けようと思ひます。

大館　福島のか。

豐子　さうでございます。

大館　しかし福島のやうな遠くへやるのは可哀想ぢやないか。

豐子　でも美代には姉の家でございますわ。この家に厄介になつて居るのと少しも變りはありませんわ。それに私にしましても、母と妹と二人まであなたの御世話になつて居るのは心苦しうございますもの。

大館　それは、くだらない遠慮と云ふもんぢやないか。私の爲にも阿母さんなり妹だ。心苦しい事は少しもない。それに美代さんには春子も非常に、なついて居るやうだから春子の爲めにも美代さんには居て貰ふ方が好都合だと思ふがな。

豐子　そりや、どうせね、先の奧樣の子ですもの、大事になさらなきやなりますまい。え丶厭でお別れなさつたん

ぢやない、奧樣に惡い病氣があつたんで倚かぬお別れをなすつたんですから、嘸、春子はお可愛うございませう。春子の爲には私の云ふ事なんか聞いて下さらないのも無理はございません。美代子はどうなつても關ひません、春子の子守に置いときます！

（と寧ろ芝居がゝりの嫉妬を見せる）

大館　（あきれ果てゝ）つまり美代さんを福島へやればいいんだな。

豐子　無理にとはお願ひしません。

大館　家庭の事はお前に任せてあるのだ。お前の勝手にするがいゝ。私は和田さんと碁を打つてるからな。（立上る）

豐子　次手の事にあなたから美代子にさう申して下さいましな。

大館　俺に云へとは少し殘酷過ぎるぢやないか。

豐子　私が云ひますと、母が美代子を邪魔にして居るやうに思ひますから。

大館　よし。

（小間使お春が出て來る。）

お春　旦那はん、和田さんが最前から待ち兼ねて居やはります。

豐子　お春、それより此處へ母樣と美代子を呼んで來ておくれ、旦那樣が御用があると云つて……。

お春　へえ、でも今武內さんはお話してはりますぜ。

豐子　呼んどいでと云つたら！

お春　へえ。（去る）

豐子　口返答ばかりして本當に生意氣な女だよ、間拔けな癖に……。

大館　豐子、お前、俺が賴むが、奉公人の前だけは口のきき方を愼しんでくれんか、私の體面にも關する。少し注意をして貰はんと困るよ。

（おみねと美代子來る。）

おみね　大館さん、お呼びになつたのですか、何か御用でもございましたか。

豐子　美代子、お前他處から歸つて來たら歸つて來たで姉さんの所へ挨拶に來たつてよささうなもんだがね。

美代子　濟みません、歸つて來て御挨拶に行かうと思ひましたらそこへ武內さんが被來したもんですから。

豐子　フン、武內さんが來たから私の處へ來られないのかい、小娘に紙袋、油斷がならないとはよく云つたものだ。

美代子　これから氣をつけます。ごめんなさい。

大舘　（耳に入れないふりをして）そしてお父樣の御容子は？

おみね　（涙を泛べつゝ）情ない姿になりまして、胸が潰れるやうな思をして參りました。

大舘　美代さん。よくお父樣にお話をして來たかね。

美代子　はい。

大舘　お父樣は、何と云はれたね。

美代子　體を大切にしろ、自分が、こんなになつたからと云つて惡い風に染るな、ぢき歸る、義兄さんにもよろしく云つてくれ……それに――。

大舘　（早くも目をしばたゝき）そして――。

おみね　自分は決して惡い心で罪を犯したのではない。或る者に乘せられて此の不始末を見るやうになつた。それも私達に安心を與へたい爲だつた、それだけだと申して居りました。

（大舘泣く。）

豐子　あのね、母樣、今大舘と相談したんですけれど、當分美代子を福島の松子の處へ預ける事にしました。

おみね　えゝ。

（美代子も驚く。）

豐子　此の事は大舘も贊成ですから、どうぞ、そのおつもりで。

おみね　そりや又どうした譯……私と二人、一緒ぢやいけないと云ふのかい？

豐子　いゝえ、いけないと云ふ譯ぢやないけど、私さうした方がよくはないかと思ふんですの、それに今度のやうな事は一家の者が皆で責任を分擔しなければなるまいと存じます。大舘は關はないと申すんですけれど、それぢや松子が何とか思やしないかと思ひますわ。松子はもう此の間から度々手紙をよこして大變に美代子の事を心配して居てくれるんですからねえ。

おみね　それは私の處へ來た手紙にも知れて居ますけれどねえ豐さん、大舘さんの前では云ひ難い事だけど私や出來る事なら、どうぞして美代子と一緒に居たいと思ふんだけれどねえ。無理を云ふやうだけれど、私も年を取つたし、何だか始終心細くて仕方がないんだから……今美代子と別々になつて仕舞ふと、私は本當に心細くなるんだからね――。

大舘　豐子、お前の心配して居る事は杞憂に過ぎんだらうお母樣もあゝ仰有るんだ、美代子さんは、やつぱり家へ

置いた方がいゝだらう。

豐子　母樣、大館は此の通り何も云ひませんけれど、母樣と美代子と二人までこの家にかゝつて居られては奉公人の手前私が肩身が狭くてならないぢやありませんか。そこを考へて下さつたら母樣だつて少し位の心細さは辛抱して下さらなきや困りますわ。

おみね　それはお前の云ふ通りだが、武内さんの意見も聞いた上の事にしておくれでないか。今日もお父樣が一身上の事は武内さんに相談しろと仰有つたんだからね。

豐子　ぢや、母樣の勝手になさいましな。私の方ぢやこれだけ色々心配して居るのに、母樣の方ぢや現在の娘の私より他人の武内さんを信頼して被在るんですからね。萬事武内さんに任したらいゝでせう。あなた、本當に濟みませんでした。あちらへ參りませう。

美代子　姉さん、待つて下さいまし。母樣、わたし、福島へ行きますわ。

おみね　それぢやお前松子の處へ行くのかへ。

美代子　母樣が私を庇つて下さるのは嬉しうございますけど、その爲に姉樣と母樣とが仲違ひになるやうな事があつては濟みませんもの。私に働きがあればどうにでもなりますけれどね。姉さん達の厄介にならなければ暮らして行けないんですもの、我儘を云つては濟みませんわ。姉さん、あたし松子姉さんの處へ參りますから母樣の事だけはお願ひいたします。

大館　美代さん、では行つてくれるか、私としては辛い事だが、家庭の事は總て豐子に任せてあるんだからね。悪しからず思つて下さい。さて、行くと極つても急な事はない。當分のお名殘りに方々を見物して、それからゆつくりと發ッさ。私も一日位はお供をしよう。唯々困るのは春子の事だが……。（と去る）

（小間使おていが來る。）

おてい　お孃さま、武内樣がお待ちになつてゐらつしやいます。

豐子　（美代子やおみねに口を聞かせず）武内さんなら美代子の事に就て私がお目にかゝりたいからと云つて、私の部室の方へ御案内して置いておくれ。

（おてい去る。豐子も去る。間。蟬の聲。）

おみね　到頭一軒の家の者が散々になつて行くんだね、あゝ情ない事だ。

美代子　母樣、私どんな辛抱でもしますから母樣も姉さん

の御機嫌を惡くなさらないやうにね。私、福島へ行つても決して母樣の事は忘れやしませんわ。願はない事ですけれど、御病氣なんかの時には直ぐお手紙をね……いゝえ電報でも知らして下さいね。あたし、きつと歸りますわ。ね、母樣――。

おみね　さう云つてくれる程、私はお前を松子の處へやりたくないよ。たつた今お父樣に氣をつけてやれと云はれて來た聲が未だ耳に殘つて居るのに、もうこんな事になつて仕舞つたんだからねえ。

美代子　でも母樣、私、福島へ行くと、きつと幸福が待つて居てくれると思ひますわ。松子姉さんはあんな思ひやり深い方なんですもの。

おみね　さうだらうかねえ。さうであつてくれゝばいゝんだけれどね。松子の內も何だか暮しが苦しさうだしね。

美代子　それだけに同情が深いんですわ。大丈夫よ、きつと幸福ですわ。

（と無理に力づける樣に云ふ、春子が來る。）

春子　叔母樣、他所へ行つちやいやよ。（泣きながら）他所へ行つちや、いやよ。いやよ。折角家へ來て下さつたのに遠くへ行つて仕舞つちやいやだわ。何時までも居て頂戴よ、他所へ行かないでね。

美代子　春子ちやん。あんたお父樣に聞いたのね。そんなら私何にも云はないけれど、私はどうしても福島と云ふ處へ行かなきやならないんですから、ね、春子ちやんがいくら泣いても留めてくれても行かなきやならないんだから、もう泣かずに居て頂戴な。春子ちやんに泣かれると叔母さんまで泣きたくなつて來るから、泣かないで頂戴。よう泣かないで頂戴。泣かないで頂戴と云ふのに――。

春子　いやよ、私、いやよ。

美代子　そんな分らない事を云ふもんぢやありませんわ。母樣、どうかして頂戴よ。

春子　いやよ／＼。

おみね　春子ちやん、いゝ兒だから、そんなに叔母さんを困らせないでね。叔母さんを困らせると、叔母さんは終には春子ちやんが嫌になるのよ。

春子　いやよ／＼叔母さん、他所へ行つちや、いやよ。

美代子　春子ちやん、それぢや本當に叔母さんが困つて仕舞ふぢやないの。

（力松來り、鼻唄、この光景を見て變な顏をして立止

る。美代子横を向く。力松素知らぬ顔で庭を掃除し始める。)

――幕――

三　幕　目

福島紡績會社々宅

福島市の紡績會社の社宅。同じ樣なる長屋。二軒。臺所と臺所と接して立つ。一軒の家は臺所のみ見ゆ。二軒の家は庭より行き通ひ得。家の全體見ゆるを角田、(即ち美代子の姉聟)榮次郎の家とし、臺所のみ見ゆるを角田の同僚・君塚壯吉の家とす。夜。蟲の聲。

幕あく。

(と、角田の妻、美代子の姉の松子が書附、通帳を前に算盤を彈いて居る。容易に勘定が合はないので焦れて居る樣子。君塚の妻のお種が庭先へ踏臺を出して涼んで居る。松子はどうしても勘定が合はないのでやけになつて算盤をガチヤ〳〵やる。その物音にお種は垣根越しに隣家を覗く。)

お種　今晩は。

松子　おや、まアお話しなさいましな。

お種　えゝありがたうございます。本當にいつ迄もお暑いぢやございませんか……あしたのお支度ですか。

松子　晦日の支度と云へば人聞きは、ようございますけどね、あなた、足りない勘定の云ひ譯の支度ですもの、本當に快々して仕舞ひますわ。

お種　御冗談ばかり。

松子　實際でございますよ。入るものは決つて居るのに出るものは毎月増える一方なんでございますもの。全く切つてやり切れやしません。殘したいとは思ひませんけど一度でようございますから出るだけのものが、入つて來る生活がして見たいと思ひますわ。

お種　お宅樣がそんなに仰有るやうぢや、手前共のやうな近頃會社へ入れて頂いたやうな安月給取りは何と申してよいか分りませんですわ。

松子　でも、お宅なんざ未だお若いんですし、お二人きりなんですもの、どうにだつて暮して行かうと思へば暮らして行かれるお暮しぢやございませんか。私共なんざもう何年となく此の會社に勤めて居りますのが、此の始末

なんですもの。それに二人の子供まであつて、これが未だ先が長いんでございますからね。これから先を思ひますと本當に心細くて仕方がございません。

お種　旦那樣は、未だおかへりになりませんの。

松子　月給日だと申すのに未だ歸つて來ません。どうせ何處かで引ツかゝつて居るんでございませうよ。お宅樣は。

お種　今、晩酌をすまして、本を讀んで居ります。

松子　おや、お宅樣もあがるんでございますか。

お種　飲むと云ふ程でもございませんが、一合上戶とでも申すんでございませうね。飲めば直ぐ好い氣持になりまして好きな本でも讀みながら、寢て仕舞ふのがおきまりでございます。

松子　結構なお酒でございますね、宅でも少し見習つてくれるとよろしいんですけれど、飲むと云ふとなると必つと外で飲んで參りますので――。

お種　そんなに召上るんでございますか。

松子　もとは好きぢやなかつたんで御座いますが、私の皺が增えて、あの人の白髮が多くなるに連れて、お酒の方が上つて參りましてね、皺と白髮とお酒の取替でございます。

お種　御冗談ばッかりホヽヽ。

松子　せめて宅でゞも飲んで吳れると未だしもなんですけれど、きつと今云ひました通り、外で飲んで參りますので月に五六度と申しても十圓や二十圓は直ぐ飛んで仕舞ひます。そりや稼いでくれるんですから、たまに氣保養も仕方がないと思つて居ますが、入るものが極つて居るのに出ることがさう多くては如何に私が切りつめても世帶の繰廻しやうがございません。本當に安月給取の家內程、みじめなものはございませんわね。

（犬の聲。「叱ツ〳〵」と追ふ聲、やがて玄關に賑かな聲がする。「こら旦那樣のお歸りだぞ！　何故お出迎ひをしないか！　ウオイ」と怒鳴りながら志村出て來る。）

志村　よう、奧樣お揃ひで被在いますな。家內はどうしました。嬶は、山の神は――。

松子　志村さん、あなた又家をお間違へになりましたね。あなたのお宅は一軒おいて隣りぢやございませんか。

志村　えゝやア失敬々々また間違へた。どうも不自由なものだな。角田の奧樣、僕が思ふのに社宅なんてものは豚の面と同じやうなものですな。表つきは何處を見ても變らないんだから、つい間違へるんです。人間の顏のやう

に少しは雑作を取變へて置くといゝんだ。尤も我々のやうに喰つて寢るだけが生活の總てだとすれば豚と相距る遠からずだ。社宅もつまりは豚小屋か。

お種　まアひどい事を仰有るんですね。

志村　やア失敬々々、お宅だけは別です。お宅は豚は豚でも上等のハムです。萬事が綺麗ことでね、ホワイトソースにサラダと來て、如何にも新家庭的だが、我々豚カツ生活と來てはもう總てが脂こく、にちや〳〵して居て到底さつぱりしません。奥様、御注意までに申上げますが子供は、おこしらへなさいますな。安月給取りに子供は食合せが惡いですからな。鰻に梅干、これ以上ですからな。子供が出來たが最後、あなたの生活は忽ちトンカツと墮落して仕舞ひますぞ。

松子　志村さん。あなた、宅と御一緒ぢやなかつたんですか。

志村　イーヤ、角田君は未だですか、しめたな！

松子　何です。

志村　イヤ何でもありません。たゞ、その、今日、月給日に歸りの遲いのは僕ばかりかと思つたら、角田君も歸りがないと聞いて、いさゝか、意を安んじたのですよ。世界の亭主が悉く善良なる、嬶孝行なる、子煩惱なる、毎月の拂ひに最も忠實なる亭主であつて、僕一人が劣等なる亭主だと云ふ事になると、勢ひ悲觀せざるを得ませんが、一人でもその仲間があると聞けば、ざまア見ろと云ふ氣持にもなりますからね。そこで思はず、しめたのです。

松子　何故早く歸つておあげにならないんです。お宅ぢや奥樣が心配して被在るぢやありませんか。今日は月給日ですよ。

志村　だから、月給日だから歸らんです。嬶が心配して待つて居るのは僕を待つて居るんぢやありません。月給です。月給の袋を渡されるのを待つて居るのです。それも袋のまゝ、一文も手を附けずにある奴をです、一文でも手が附けてあつたが最後、忽ち大動亂ですからなアハヽヽ。嬶なんてものは何時も晦日の爲に亭主を待つて居るのです。晦日がなかつたら必ず亭主を虐待して居ます。晦日がある爲に、亭主の出入りに、行つていらつしやい、おかへり遊ばせのと、お世辭の一つも云ふのです。晦日に月給の袋のまゝ届けてやれば、亭主が歸らなからうが平氣です。亭主がどれだけ外に借金をして居ようと、苦しんで居やうと、晦日に事足りれば幸福そのものゝやうな

顔をして居ます。こんな／＼夫婦の生活と云ふものがありますか。贅ッ、だから僕は謀叛を企てたのです。晦日に對する反逆を企てゝ飲んぢやつたんです。愉快ですなハ、、、萬歲だハ、、、

お種　呆れた方ですね、皆飲んでおしまひになつたんですか。

志村　勿論、一文もありません。サバ／＼したものです。

お種　まア何故少しでも持つてお歸りにならないんです。

志村　持つて歸ると云ふのは、それで足りる場合です。一文も手をかけずに持つて歸つても足りぬもんなら、寧ろ持つて歸らずに足りる所で足りるだけ使つた方が金の値打がありますからな、一種の能率增進ですよ。

(松子は憂鬱になつて來る。)

お種　奧さん。どうかなさいましたか。

松子　いえ……。

(君塚の家より「お種／＼」と呼ぶ。)

お種　あ、呼んで居ますから失禮いたします。どうもお邪魔いたしました。(と去る)

志村　ハムサラダもトンカツになつちやお仕舞ひだ。まアまア今の中を樂しんで置くがいゝ。奧さん、水を一杯頂戴します。

(と臺所に入り水を飲む。考へる。蟲の聲。松子は機械的に算盤をはじいてから又考へ込む。淚。志村もいよ／＼考へる。その内に居眠りする。外に靴の音。誰やら家に這入りたる氣勢。)

松子　あなたですか。

角田　ウム……。

(と蔭にて返事をして出て來る。洋服のまゝ臺所へ行く。志村の居るに驚く。)

角田　何だい。君かい。

志村　(目を覺まし)　おゝ歸つて來たのか。

角田　君は、どうしたんだ。

志村　醉拂つてまた家を間違へて仕舞つたんだ。なんだ體を拭くのか。

(志村は茶の間に上る。角田、體を拭く。)

松子　あなた、月給は。

角田　受取つた。

松子　持つて來て下さつたんですか。

角田　ウム。

松子　使つていらしたんですか。

角田　…………。

松子　みんな使つていらしたんですか。

角田　…………。

松子　どうなさつたんでございます。

角田　さつきから返事をして居るのが分らないのか。

松子　小さな聲でなすつてたつて聞こえやしませんわ。使つて被在したんですか。

角田　……イヤ。

松子　持つて歸つて下すつたんですか。

角田　ウム。

松子　あなた。

角田　持つて歸つたと云つとるぢやないか。

松子　どうもありがたうございます。ぢや早速ですけど御勘定をお願ひしますわ。

角田　（茶の間に來て）なんだい、お客樣の前で。明日にでも出來る事ぢやないか。

志村　イヤ僕にはお構ひなく、困つたな。

松子　志村さんが、あゝ仰有るんですから……早く勘定をして仕舞はないと、私、重荷を背負つて居るやうで、苦勞で仕樣がございません。

角田　松子。

松子　はい。

角田　お前もう少し愉快な家庭の滋味と云ふものを考へる事は出來ないか。とに角此處は一軒の家なのだ。親子夫婦が樂しい水入らずの家庭が作れる家なのだ。俺が安心して落着ける家と云ふのは此處より外にはないのだ。

松子　それはよく存じて居ります。

角田　知つて居たらも少し家の中を愉快に溫かにする事は出來ないか。今の家の中は、全で沙漠の中に住んで居るやうだ。憩ふ樹の蔭もなければ、咽喉を濕す水もない。お前はどうして家の中を落着きもなく、砂埃だらけにして置くのだ。

松子　でも夕方の掃除はしますわ。それよりも早くあなた晦日の御勘定を、今月洋服屋の拂ひが胸に閊へて居るんですもの。

角田　さう云ふやうにお前は解らないのだ。俺の云ふ埃は風で吹き込んで來るんぢやない。晦日の拂と云ふ砂埃に家の中がザラ〳〵として、落着いて坐つて居る事が出來ない事を云ふのだ。

志村　何處の家でも同じ事だ。

角田　勿論今の俺の收入で生活して行く事の苦しさ位は俺にだつてよく分つて居るよ。それに對してはお前にも濟まんと思つて居る。が、俺はお前一人を苦しませやうとは思はない。苦しみは共に苦しみたい。それが夫婦の實際だと思つて居る。所がお前はお前一人で苦しんで居るんだ。さうして一人で不愉快な日を送つて居る。揚句の果に此の家を何の潤もない。乾枯らびた、ミイラの住むやうな家にして仕舞つて居る。これぢや迚も堪らんぢやないか。

松子　でも每月どうしても足りないんですもの。

角田　さうだ、足りない事も解つて居る。その足りない苦しみを共に分けあつて行くのが夫婦だ。物質上の苦しさに精神上の樂しさを無視して居るのだ。

志村　實際だ。それで家庭は死骸のやうに冷たくなつて行くんだ……併し困つたな。

角田　現に今、俺が歸つて來た時の如きがそれだ。如何に每日の事に屈托して居るからとは云へ、出迎への挨拶もせんと云ふ事があかる、一事が萬事で每日の事のために夫婦間に當然に行はる可き禮儀さへ無視されて居るのだこんな情ない話は無いぢやないか。

志村　情ない話だ。然し弱つたなア。

角田　飯はどうしたんだい。

松子　お上りになるんですか、お上りになるんなら、直ぐ支度をします。けれ共あなた上つていらしたんでせう。

角田　食つて來た。

松子　なら、お聞きになる事は無いぢやありませんか。

角田　そこが問題なのだ。お前は俺が外で喰つて來るものと思つて支度をしない。俺は家へ歸つて來ても不愉快だから外で喰つて來る。それぢや、そこには夫婦もあるまい。家庭もあるまい。每日の爲にお互が他人のやうな心持で暮して居るのだ。每日と云ふものに、これ程暴威を振はせると云ふのは實に殘念な話ぢやないか。

志村　尼港虐殺問題より以上だ、とかく此の每日だの、藪蚊だのは傍でブン〳〵云つて煩いものさ、然し弱つたな。

松子　ぢや、どうしたらよろしいのでございます。

角田　每日におびやかされないやうにするんだ。家の中をもつと溫く愉快にする事だ。

松子　でも、どうしても足りないんですもの、困りますわ。

角田　お前は何故さう解らないんだらう。

松子　だつてあなた——。

角田　もういゝ、いくら云つてもお前には解らないんだ。
松子　解るやうに云つて下さりや解りますわ。
角田　解りやせん、お前の心は昨日ですつかり蝕つて居るんだ。
松子　あなた、何ぼ何でもそんなに仰有らなくたつて、いいぢやありませんか。あなたが足りるやうにして下さりや私だつてあなたの氣持を惡くさせたかありません。
角田　もういゝ。解つた。
（と立上り奥の部屋に入る。松子恨めしげに見送る。角田月給の袋を持つて來て無言にて渡す。松子封の切つてあるのを見て。）
松子　お出しになつたんですか。
角田　出した。
松子　いくらです。
角田　勘定すりや分る。
（松子は勘定を始める。處へ長男の實と次男の泰とが泣いて入つて來る。）
實　母樣、源ちやんが僕を打つたア。
角田　煩い。靜かにしないか。
實　だつて源ちやんが僕の頭を打つたんだもの。
角田　貴樣が惡いからだ。
實　僕、何も惡い事しやしない。
角田　惡い事をしないものが、どうして打たれた。
實　どうしてたツて打つたんだもの。
角田　源ちやんと云ふのは何處の子だ。
實　志村の家の源ちやんだア。
志村　（吃驚して）僕の家がどうかしたか。
角田　何でもないよ、君んとこの子供と喧嘩をして來たのさ。なアに此奴が惡いんだ。
志村　ねえ君、小父さんとこの小母さんね、家に居たかい。
實　居たよ。
志村　何をして居た。
實　泣いてたよ。
志村　泣いてた。困つたなア。
角田　どうしたんだ、君。
志村　スツテンテンなんだ。昨夜、夜明しでこれをやらうつてんでね、その資本に今月のを抵當に入れて順川からちよいと借りたんだが、押へられちやつたんだよ。
角田　全部ぢやあるまい。
志村　だが、半分にも足りない金を持つて歸つても仕方が

ないからね、やけになつて飲んぢやつたんだよ。
角田　で、そいつの方は。
志村　無論オケラさ……止しやよかつたよ。酔つた勢で胡麻化して歸らうと思つた奴が、家を間違へて仕舞つてね、どうにも、かうにも實に弱つたよ。
松子　あなた、これは十五圓足りませんね。
角田　うん、足りない。
松子　足りないで濟む事なんですか。あなた、これぢや先月の倍以上足りませんよ。
角田　倍以上足らん、そんな馬鹿な事があるものか。
松子　馬鹿な事があるかッて足りないんですもの。
角田　それはお前の經濟の取り樣がどうかして居るんだ。俺の豫算では、そんな不足は無い筈だ。大體お前は經濟の取り樣が少し下手だよ。
松子　あなたは二言目には經濟の取りやうが下手だと仰有いますが、もう私には此れ以上約めやうがないんですから――牛乳だつて廢して仕舞ひましたよ。お魚だつて毎日取りやしません。それでも要るものなら買はなきやなりませんからねえ。
角田　それは勿論さうだが、お前のは要るものを買はないで要らないものを買つて居るのだ。現に此の間もさうぢやないか、玉子屋の婆が來た時に、玉子を十も買ひ込んだらう。あれなんか不經濟の證據ぢやないか、一遍に十も買つてどうするつもりだ。
松子　だつて、あなたが何時も、一つ〳〵買ふより、かためて買つた方が經濟だと仰有つたぢやありませんか。
角田　馬鹿、貴樣はその通り馬鹿だ。時と場合を考へて見ろよ。土用中に玉子を十も買つて腐つたらどうするつもりだ！
松子　でもあれは一つも腐りやしませんでしたよ。
角田　その代り、十の卵が二度か、三度で失くなつてしまつたらう。俺達のやうな貧弱な月給取の家庭で六錢も七錢もする卵を無暗に買ひ込むのが不經濟と云ふのだ。
松子　いゝえ、無暗になんか買やしませんわ。
角田　大體お前は物の値打と云ふ事を知らない。一昨日でも見ろ、冷飯が未だ二三杯も殘つて居る飯櫃へ水を入れるから、粥にでもするかと思へば、そのまゝ下水へ流して平氣で居る。お前のする事は、悉く無駄ぢやないか。
松子　だつて、あなたが何時も腐敗したものは喰べるなと

子供達にも喧しく云つて被在るぢやありませんか、何にしても今月は十七八圓足りませんわ。

角田　そんな馬鹿な事があるか、算盤を貸して見ろ。

（と、算盤を取つて計算を初める。子供等は不圖志村の居眠りをして居るのを見て）

實　やア小父さんが居眠りしてらア、可笑しいなア。

泰　可笑しいなア。

志村　や、これはどうも、實に眠い。併し弱つたな。ウ、ム〳〵困つたな、どうも眠い。角田君そこを一寸貸してくれ給へ。一寢入りして頭腦を冷靜にしないと良い智慧が出て來ない。何しろ睡り難くて弱つたな。

（と角田の寢室へ入る。）

實　やアい他所の家へ來て寢てらア。

泰　可笑しいなア。

實　本當に可笑しいやアわーい〳〵だ。

角田　煩い！　お前の會計はいくらだ。

松子　百圓餘りですわ。

角田　餘りと云ふ勘定があるか。ハツキリとした數字を云つて見ろ。

松子　だつて、何度やつても細かい所が違ふんですもの。百一圓か二圓の間違ひですわ。

角田　それだ、さう云ふ風に違ふのだ。俺の〆めは九十二圓五十三錢だ。ざつとお前のと十圓から違ふぢやないか。

松子　いえ、そんな事はありませんわ。十錢か二十錢なら違ふツて事もありませうけど、十圓も違ふなんて、そんな事があるもんですか。私が置いて見せませう、あなた見て居て下さい。え、八圓六十三錢、五圓三十九錢、

角田　それ〳〵もう違つて居る。八に五足すの十三、六に三足すの九、三に九足すの十二、十をあげてその九を拂つて桁をあげて――。

松子　あなたのやうに仰有られちや分らなくなつて仕舞ひますわ。私は算盤は不得手なんですから、默つて見てゐらして下さい。

角田　おい、實、四に一足していくらだ。

實　五だよ。

角田　なア、處がお母樣の勘定では四に一足すの十だとさ。

實　そんな事があるものか、母樣は算盤を知らないのかい。馬鹿だなア。

泰　馬鹿だなア。

松子　あなた、私が何時四に一足すの十と置きましたか。

角田　今置いたぢやないか。円に一足すの五として上の五玉を下ろすのを忘れて十を上げたらう、それでもう既に五圓違つてる！

實｝
泰｝可笑しいなア〳〵

松子　えゝ、私は馬鹿ですから何にも知りません。何にしたつて足りないのは同じ事ぢやありませんか。

角田　とにかく、この實の靴の如きが無駄の一例だ。何しろ無駄を約めればそれ程足りない事はないよ。我々安月給取りの子供に十五圓もする靴を穿かせる親が何處にあるものか七八圓位ので澤山ぢやないか。

實　イヤダ〳〵十五圓のでなきや、いやだい。

角田　煩い。默つて居ないか、松子、俺はお前に決して無理をしろと云ふのぢやないぞ、無駄を省いてくれと云つて居るのだ。全體お前はお父さんの全盛時代に生れて金の値打を知らずに育つたんだから無理もないが、多寡が學校通ひの實の靴に十五圓もかけられては實際の所、やり切れんからなア。

松子　だつて世間の手前まさか、中古の靴も。

角田　ぢや何かお前は一家の經濟よりも世間の體裁の方が大事だと云ふのか。

松子　さうあなたのやうに仰有られるんぢや私としても此の家の經濟はやつて行かれませんわ。子供の世話はしなければならず、私の手一つで何もかもしなければならないんですもの、經濟だつて無駄も出て來ますわ、美代子でも早く來てさへ異れますりや何方かゞ手が拔けますからね。さうしたらあなたの仰有るやうな家庭の滋味と云ふものが、出て來るかも知れませんがね。

角田　それは、俺も思はないでもないのだ。どうだい、美代子さんが來たら、此の家庭の改造の第一歩として美代子さんに臺所一切やつて貰つたら。俺としても甚だ意氣地のない話だし、折角やつて來る美代子さんをさう云ふ小事に使ふと云ふのは、お前に對しても濟まん譯だとは思ふが、それを機會に家の改造が出來たらこんな結構な事はないと思ふがなア。

松子　さうあなたが云つて下さりや私も大變氣が樂と云ふものですわ。今でさへ此の通り足りないのに此の上、美代子まで御厄介になつちやあなたの責任は大變だと思つて實は心苦しかつたんですけれども、さう云ふあなたのお心持でしたら美代子には氣の毒も何もありません、私

早速臺所を任せますわ。

角田　併し美代子さんに出來るだらうか。

松子　勿論出來ますとも、あの子は、父があゝなつてからの子ですから、貧乏の暮しには慣れて居ますし、浮世の苦勞は充分に知つて居ますから、紙一枚だつて無駄には使ひますまい。本當にあなた、さうして下さいますか。

角田　俺は別に異議はないが、さうなつたらお前はどうする。手持不沙汰で困るぢやないか。

松子　いゝえ、あなた、子供と云ふ大役があるんですものそれで澤山。まアお給金なしの乳母と云ふ格ですわね。

角田　すると、美代子さんが、この家の主婦となる譯だね。

松子　えゝ、あなたと丁度似合の御夫婦ですわ。

（一同笑ふ。）

（幌に強く雨の當る音。又暗くなつて行く。）

美代子　御免下さいまし。

松子　はい、どなた。まアお前美代さんぢやないか。

美代子　姉樣。

松子　まア美代さん。あなた、美代子が參りましたよ。まアよく來たね、さアお上り――。

角田　どうした、突然に來るなんて荷物を此方へ貸した。よし〳〵。

（角田は行李を受け取る。美代子奥へ入る。）

松子　まア美代さん、本當によく來たね。來るとは知つてたけれど、まさか今日とは思はなかつたよ、本當によく來ておくれだつたね。

角田　雨で困つたらう。電報でも打つてくれりや停車場まで迎へに行つたものを。

松子　本當に突然に來るなんて隨分お前も人が悪いね、併しまア御機嫌よう。

美代子　義兄樣も姉樣もお久しぶりでございました。何時もお變りがなく何よりでございます。

松子　お前も變りがなくて何よりだつたね。

美代子　今度は又色々と御親切に仰有つて下さいまして有難う存じました。母樣もくれ〴〵も仰有いました。

松子　母樣も相變らずお達者かい。

美代子　えゝ、ですけれどね今度の事でね。

松子　今度の事は一體どうしたんだい。手紙ばかりで詳しい事は分らないが、お前監獄に行つてお父樣に會つて來たと云ふぢやないか。

美代子　え。

松子　どんなだつたい。
美代子　――備なうございましたわ。
松子　さうだらうねえ。（兩人泣く。）
角田　來る匆々姉妹でメソ〳〵して居られちや困るな。そんな話は何時でも出來るぢやないか。もつと景氣のいゝ話でもしたらどうだ。
松子　さうですね、あゝあの話でもしませう。美代子お前來た匆々だけれどね、明日から此處の奥樣になるんだよ。
美代子　えゝ。
角田　あなたが來る前に二人で相談をして美代さんが此の家の主婦となつて、一家の經濟をやつて貰ふ事に話を極めたんだよ。
美代子　だつて姉さんが被在るぢやありませんか。
松子　私は離緣になつちやつたのさ、でもね、漸くお詫びが叶つて子供の乳母さんに置いて貰ふ事になつたのさ。
美代子　まア何を云つて被在るの。
松子　あなた、あんた顏をしてますよホヽヽヽ。
角田　ハヽハヽ。
美代子　いやですわ、姉さんも義兄樣も何をおからかひになつて被在るんですの。
志村　（突然叫ぶ）此處は一體何處だ。俺はもう歸る、車をさう云つてくれ。（と云ひながら出て來る）おや、角田君。あ、君の家か。
松子　志村さん、何を寢呆けた事を云つて被在るんです。
志村　料理屋に居るんだと思つたら、君の家だつたのか。
松子　あなた、いくつにおなりになつたのです。少ししつかりなさいましな。
志村　おや、奥さん、あなたこそ、どうなすつたんです。さつき迄は不景氣の銅問屋のやうな顏をして居たのに急に機嫌がよくなつたぢや、ありませんか。
松子　だつてごらんなさいな。（と美代子を指す）
志村　誰方です。
松子　分りませんか。
志村　分りませんなア。
松子　誰かに似てるでせう。
志村　誰でせう。
松子　よく氣を附けてごらんなさいな。
志村　分りませんよ。
松子　妹ですよ、私に似て居るでせう。お分りにならない

んですか。

志村　そりや無理だよ。

松子　どうしてゞす。

志村　此方は、この通り美人ぢやありませんか、あなたの妹さんだつたら、もつと貧弱な筈だ。

松子　まア失禮な事を仰有るもんぢやありませんよ。

志村　だが、實際ですよ、奥樣の妹さんにしては美人過ぎる、どうしても塵埃箱に鶴ですね。

松子　本當に失禮な事ばかり。

志村　そこで、昨日問題は、どう解決がつきました。

松子　それなんですよ、今も美代子が譯が分らない顔をして居る所なんですがね、これからね、美代子に臺所の事を一切やつて貰ふ事になつたんです。

美代子　あら、姉樣。

松子　つまり、美代子が此の家の主婦になるんです。

美代子　姉さん、私そんな事出來やしませんわ。

角田　辭退されては困るよ、折角綺麗な細君が貰へて、私が喜んで居る所ぢやないか。

美代子　あら義兄さん、イヤですわ。

志村　それで奥さんは、どうなるんです。

松子　私は子供の乳母になるんです。

志村　成程、紙治の、おさんですな、子供の乳母か、飯焚きか、面倒ながら眞實の、面倒ながら眞實の、妹持つたと……（と語りかける）

松子　志村さん、よして下さい、糠味噌が腐りますよ。

角田　それも今度は美代子さんの係りだ。

美代子　知りませんわ。

角田
松子　ハヽヽヽ。

（美代子は一人テレる。）

志村　君の方は、うまく納つたから笑つて居られるが、俺の方は困つたよ、全く弱つたよ。

（角田と松子は何も高笑ひ　君塚のお種が水を汲みに來て密かに覗く。雨の音。）

—— 幕 ——

四幕目

其後の角田の家

場面は前幕と同じ。夕刻。紡績の汽笛にて開幕。

（松子が茶の間に蒲團をかけて寢て居る。壁に角田の浴衣。庭の梧桐の蔭に美代子が感傷的な眼で手紙を讀んで居る。隣家の君塚の家では、お種が臺所仕事の最中お種何か捨てゝ庭へ出る。美代子を見る。）

お種　おや、何をして被在います。

美代子　えゝ、東京の母から參りました……。

お種　お母さんから、それはまアようございますね。あなた東京へお歸りになりたうございませうね。

美代子　え……。

お種　姉さんは、どうかなさいましたの。

美代子　加減が惡いと申しまして今日は一日臥つて居りますの、昨夜は本當に相濟みませんでした。

お種　いゝえ、あなた、そんな事を……あなたは、さぞお辛いでせうねえ。

美代子　いゝえ、それ程でも御座いませんわ。姉も心の奧は好い人なんでございますけれど、やはり生活の……何や彼や思ふやうになりませんものですから、ツイあゝした事も出來て來るんだらうと思つて居ります。たゞ御近所へお氣の毒で本當に申譯がありません。

お種　なアに、あなた、毎度の事――いえ毎度良人とも、お噂して居るんでございますよ、あなたの御辛抱が大變だらうツてね、假令姉さんが親身でも一家の主人に當る者が義理ある人ぢやね、さう〳〵身内の肩ばかり持つても居られませんからね。

美代子　義兄さんは、よく分つたお方なんですから、これで私も何にしても居られます。けれど……いゝえ、やはり思ふやうにならない苦しさから出て居るんでございますわ。

お種　それにしても昨夜は大變だつたでせう、私が家の中で聞いて居ても終には聞いて居られなくなつた位ですもの。

美代子　そんな騷ぎがあつたんでございますか。

お種　あら、あなたは……。

美代子　私、迚も聞いて居られなくなりましたので、戸外へ出て仕舞ひましたものですから。

お種　さうですか、そりや好い事をなさいました。もうそれに限りますよ。何と云つたツて、夫婦喧嘩は犬も食はないと申しますからね。

（松子、寢返りを打つ。お種心附いて默り臺所へ入る。美代子、松子の傍に行き。）

美代子　姉さん、お加減は如何です、未だ工合が悪ければお薬でも取つて來ませうか、姉さん、起きて被在るんぢやないんですか。

（返事なし。そこへ角田が歸つて來る。）

美代子　お歸りなさいまし。

角田　松子は、どうしたんです。

美代子　今朝義兄さんが、お出かけになつてから氣分が悪いと云つて、お晝に一度お起きになつたきり、一日寢て被在います。

角田　フン……。

（と松子を尻目にかけ自分の部室へ入る。）

美代子　あの、直ぐ御飯にいたしませうか。

角田　イヤ湯へ行つて來てからにします。

（美代子、奥に入り石鹸、手拭を持ち來る。）

角田　浴衣は、その方ですか。

美代子　あら、どうも濟みません。

（美代子、浴衣を持ち角田の部屋に入る。松子ムクムクと起きて様子を窺ふ。）

美代子　手拭と石鹸は、そこにございます。

（松子慌てゝ、寢る。角田出て來る途端に松子の姿を見る。美代子は洋服の始末をなし、角田は何か云はんとしてそのまゝ出て行く。）

美代子　（松子の傍へ行き）姉さん、起きて被在いませんか。義兄さんが歸つて被來したんですけれど、御飯の支度はどうしませう。直ぐお歸りになりますけど……姉さん、お起きになるのが大儀でしたら私が何か間に合せに作つて置きませうか、え、姉さん——。

松子　蒼蠅い！　今考へて居る所ぢやないか。

（美代子は温和しく其儘、臺所に入る。手桶を下げて水汲みに行く。松子は起きて角田の居間に入り何か探す。君塚臺所へ入り來る。）

君塚　おい——。

お種　あら、お歸んなさい、今日は少し遅うございましたわね。

君塚　さうかな、そんな事は無い筈だがな。

お種　でも、お隣りはお歸りになりましたよ。

君塚　角田か。

お種　えゝ、騒がしますよ。

君塚　靜かぢやないか。

お種　でも、今しがた迄騒ぎが聞えて居たんですが。

君塚　でも何も聞こえないぢやないか、氣味が惡い程靜かだね、慘として聲なし、てな趣があるよ。低氣壓襲來の兆候歷然たりだ。今夜あたりは暴風雨襲來かな。

お種　あなた、聞こえますよ。

君塚　聞こえても構はんよ。少しお手柔かにやつて貰はんと、終には此方が神經衰弱になつちまふよ。蔭口が知れる位の氣不味さで此の苦しみが助かるなら、寧ろ大聲を出したいね。昨夜の喧嘩なんかさながら地獄へ墮ちた亡者の苦痛を訴へられて居るやうなもんだからね。

お種　だけど、本當に少しは愼しんで貰ひたうございますわね。

君塚　以て他山の石となすかね、お前もあんなにならないやうに氣を附けろよ。

お種　まさか、何ぼ何でも、いやな方ねえ。

君塚　處で腹がペコ〳〵なんだ、飯は？

お種　濟みません、もう少しなんです、お湯へ行つて來ませんか。

君塚　湯か、止さう、卒倒すると困るから。

お種　まアそんなに空いて居るんですか、會社で何か召上ればいゝのに。

君塚　それは分つて居るがね、腹を膨らして仕舞つちや折角のお前の料理が不味くなるからねえ。

お種　お世辭がいゝのね。

君塚　どうだ、實に善良なる亭主だらう。

（お種は笑ふ。）

君塚　こんないゝ亭主を持つたお前は感謝すべき價値は充分あるぞ、禮を云へ、禮を。

お種　ありがたうございます。

君塚　よし、處でと體だけでも拭いとかうか。

お種　さうなさいまし。

（と、兩人奧へ去る。美代子手提を提げて歸つて來ると同時に實と秦が戶外から飛込んで來る。實は手に手紙を持つ。）

（君塚とお種は後の芝居の間に出て來て、君塚體を拭き初めること。）

實　叔母さん、いゝものをやらうか。

美代子　なに。

實　これ。（と手紙を見せる）

美代子　あら手紙、叔母さんとこへ來たの・お母様からね頂戴。

實　いやだよ、唯で誰がやるものか。

美代子　そんな事を云はないで頂戴、叔母さんの處へ來た手紙ぢやありませんか、頂戴ッたら。

實・泰　いやだようアカンベー。

美代子　よう、實さん、いゝ兒だから頂戴、後生、お願ひ。

實　いやだつたら。

美代子　そんな事を云はないで、實さんは、いゝ兒でせう。

實　おや、ふゝから地面へ手をついて三度お辭儀をしたら、さうしたらやる。

美代子　そんな無理な事を云はないでさ。何か、きつと急な用の手紙でせうから、叔母さんは早く見たいんですからね。

美代子　おや、もう、よござんす、要りません。

（泰、美代子の後から突飛ばす。）

實　要らなきや、破いて捨てちまはう。

（と破らうとする。美代子慌てゝ、其の手を抑へる。）

美代子　そんな事をするもんぢやない事よ。後生だから頂戴ね。

實　いやだ〳〵。

（と、逃げようとする。美代子は、ふと差出人に氣附いて。）

美代子　あら武内さん。

（と云ひながら、實を追ひにかゝる。泰はその邪魔をする。）

お種　美代子さん、どうなさつたんです。

美代子　實さんが悪戯をして仕樣がないんです――さア捕へた。

實　叔母さん、取つちや、イヤだ〳〵。

（美代子は素早く手紙を取る。）

美代子　だつて叔母さんのとこへ來た手紙ぢやありませんか。

實　叔母さん、どうしても返さないか、そんなら、かうしてやる。（と手桶を引くり返す。機みに美代子の裾を濡らす）やアイ、いゝ氣味だ。

お種　まア。

君塚　どうしたんだ。

お種　ごらんなさい。

君塚　又いたづらか、仕方のない默々ッ兒だな。

實　何だつて、いゝようだ。

泰　いゝようだ。
お種　あれですもの。
（君塚は無言にて體を拭く。お種は臺所に、美代子は恨めしげに子供を眺めて裾をふく。）
實　ベソをかいてらア。
泰　泣蟲やアい。
（美代子は叉手桶を下げて出て行く。お種、君塚は入る。美代子再び汲んで來たのを、實と泰それを流すこと二三度ある。と囃し立てゝ逃げて行く。美代子は涙も出でず呆然とする。）
松子　（出て來て）美代さん、何にしてるの。
美代子　あの、實さんが……。
松子　美代子！
美代子　はい。
松子　もう、いゝ！
（と荒々しく夕飯の支度をする。晩鴉。夕陽は次第に薄れて行く。）
美代子　ねえ、姉樣、夕飯のお支度は私がやりますから、何でも仰有つて下さいましな。
松子　………。
美代子　姉さん、御氣分が悪いのに、そんな無理をなすつちや、いけません。私がいたしますから――。
松子　煩さいね、私がするからお前なんか、彼方へ行つておいで！
美代子　はい。
（と涙ぐみつゝ、仕方なしに庭を掃く。晩鴉。巡禮の鈴。松子は始終、美代子の樣子に氣を配つて居る。間。夕陽全く沈む。）
松子　一つも水も汲んでありやしない。
美代子　姉さん、私が汲んで來ます。
松子　いゝよ、お前には物を頼まないから。
美代子　でも姉さん。
松子　頼まないと云つたらねえ。
（と、手荒に桶を提げて出て行く。美代子泣く。巡禮歌。そこへ角田歸つて來る。電燈點す。）
角田　美代さん、あなた、そこで何してるの。
美代子　お歸んなさいまし。少しも氣が附きませんでした。お手拭は此方へ。
角田　美代さん、又あんた松子に何か云はれたんぢやないかね。

美代子　…………。

角田　實際こんな事では仕樣がない。あなたの前だが、あの松子には困つて仕舞ふよ。どうしてあゝ物事が分らんのかなア。

美代子　あの、私、そんな事ではないんですの。

角田　いや、そんなに祕さんでもいゝです。あんたのその樣子で大概私にや何を云はれたか分つとるのだ。實際あんたは氣の毒だね、私は何んだかあんたに濟まないやうな氣がしてならないんだ。

美代子　えゝ、ですけれども、私本當に姉さんに、そんな事を……そんな事ぢやないんでございますから、それに姉さんは今日は御氣分が惡いんで、自然何んだと思ひますからもう何も仰有らないで……。

角田　イヤ夫婦喧嘩のあつた明る日の氣分の惡いのは、あれの十八番ですからな――だが私は、もう現在の樣な狀態で生活して行く事は出來んのだ。かうなるのもつまり私の意氣地がないからで、せめて、も少し收入でも餘計ありや、決してあんた方にも、こんなイヤな思はさせんのだが、それを思ふと私は實に我ながら腹が立つてね。昨夜の事なんぞも、あんたが傍で聞いて居たんだから、分るだらうが、實に言語道斷だと思ふんだ。假にもあんたと私の關係を疑ふなぞとは、全く淺猿しい話ぢやないか。私は昨夜ばかりは、もう腹が立つて〳〵ならんので貴女が出かけた後、到頭あいつを撲つてやつたんですよ。

（松子は襖の蔭で立聞きする。）

美代子　まア、そんな。

角田　だが、實際不愉快でね、町へ行つて目茶苦茶に醉拂つて歸つて來たんです。お蔭で今日一日頭が痛んでハ、ヽヽ。然し實際彼奴の料簡は僻み切つてるんだからね、今も私が湯へ行く前に、あなたと部屋で話をして居たのを、あれは寢たフリをして聞耳を立てゝ居たんだが、實に情ないぢやありませんか。

美代子　姉さんが、そんなに私を疑つてるんですか。

（と泣く。）

角田　（松子に氣附き）おい、そんな處で何をして居るんだ。

（美代子はドキとする。）

松子　何もしてやしません、水を汲みに行つたんです。

角田　さつさと這入つたら、よからう、此の家には立聞きせんけりやならんやうな祕密は一つも無い筈だ。

松子　立聞きなんかしやしません。お話のお邪魔になると思つて差控へて居たんです。

角田　馬鹿、貴様の旋毛はどうすれば、さうまで曲つて居るんだ、そんな餘計な氣を廻す手間で家の中でも片付けたらどうだ。一體此の態は何だ。これが人間の住む家か散らかすにも程がある。實際これぢや豚小屋だ。

松子　だつて子供が散らかすんですもの、仕方がないぢやありませんか、それに働くのは私一人ですもの、子供の方まで手が廻りやしません。美代子、お前何をしてるんだい、お前をお孃樣扱ひにしようツて、こつちへ呼んだんぢやないよ、座敷位、片付けたつていゝぢやないか。突立つて許り居るのが能ぢやないよ。

美代子　濟みません、ついボンヤリして居たものですから。

松子　フン、ボンヤリするだらうさ。

角田　なに。

松子　あなたに云つてやしませんよ。

美代子　義兄さん。

（と兩人同時に云ふ。角田は美代子を氣の毒氣に見て自分の部屋に入る。松子は臺所の仕事、玄關に實と泰の聲。）

泰　あたいが先へ入るんだい。

實　僕が先だい。

泰　あたいだつたら。

實　なにするんだい。

（と打つ音。泰の泣き聲。實飛込んで來る。）

實　勝つたい。

泰　兄ちやん、馬鹿！

實　お前の方が馬鹿だ。

泰　兄ちやんが馬鹿だアい。

實　なに。

（と散らかつて居る雜誌を投げる。兩人投げ會ひ、とど美代子の片附けようとして居る玩具を投げようとする。）

美代子　あれ、實さん、不可ませんよ、そんなものを投げたりしちや、今片付けて居るんですからね。

實　あゝいけないよ、叔母さん、僕之れから玩具で遊ぶんぢやないか。

美代子　ですけれど、もう御飯ですからね、一遍きれいに片附けさして頂戴ね、それで御飯が濟んだら、あとで出してあげますから。

實　いやだ〳〵。
美代子　そんなに分らない事を云ふもんぢやありません
よ。早く片付けたいとお父樣に叱られますからね。
實　いゝやい、お父樣なんか怖かないやい。
美代子　困るわ、實さん、いゝ兒だからお止しなさいね。
實　やアい、ざま見ろ、いくら片付けたつても駄目だぞ。
（と兩人にて玩具を蹴つたり終には美代子を蹴つたり
髮を引つぱつたりする。）
美代子　實さん、何をするの、お止しなさいッてば。
（と拂ふ拍子に實の眼へ手が當る。）
實　母樣々々叔母さんが僕を打つたア、痛いよう。
美代子　實さん、ごめんなさい、どうかして、どうもしな
いぢやないの、ごめんなさいね、ごめんなさい。
實　痛いよう、叔母さんが僕の眼を打つたよう、母樣。
（角田憤然として出で來る。）
角田　騷々しい、だまらないか！
（實、泣きやまず、泰は呆れて居る。角田は實を抱へ
て庭先へ突出すやうにして頬を打つ。）
角田　コラ、默らんか。
松子　（進つて）何をなさるんです。そんな酷い目に……
實、泣くんぢやないよ、此方へお出で――。
角田　此奴は默つて見て居りや、何處まで附上るか分りや
せん、少し痛い目を見せてやらんとしめしがつかん。さ
未だ泣くか、もつと泣いて見ろ。
（と續け樣に打つ。）
松子　あなた、そんな亂暴な事をして怪我でもしたらどう
します。もうお止しなさい――實、お父さんは、叔母さ
んの肩ばかり持つていらつしやるんだから、叔母さんの
傍へ行くんぢやないよ。
美代子　實さん、ごめんなさい、叔母さんが惡かつたんだ
から、此方へ被來い、御飯にしますから、ね。
實　いやだ〳〵。
美代子　そんな事を云はないで――。
實　いやだ〳〵。
角田　叔母さんが御飯を食べろと云つたら何故食べない、
さう云ふ奴だ！
（と又叱り打つ。）
松子　（再び進り）あなた、隨分な事をなさいますのね。も
し怪我でもしたら取返しがつかないぢやありませんか。
角田　怪我をする位が何だ、本當に性懲りもない奴だ！

俺は、もうこんなやくざな兒を生んだのが世間へ對して恥づかしくてならんのだ。學校の成績は悪いし、家へ歸れば喧嘩ばかりするし、今にどうせ碌な奴になれないに極つとる。それもこれも、みんな平生のお前の教育が悪いからなんだぞ！

松子　どうせ、さうでございませうよ、何かと云ふと私の所爲にばかりしておしまひなさる！　どうせ私は馬鹿ですから子供の教育もなにも出來ませんとも、ですからそんなに御有るなら私を離縁して下さつたらいゝぢやありませんか。

角田　離縁して貰ひたいんなら、何時でも離縁してやる。どうなりともお前の自由にしろ！　離縁々々と云や、俺が驚くかと思つて、そんな事を云つたツて俺は、少しも驚きやしないぞ！　馬鹿！

松子　へえ、左樣でございますか、あなたも私を離縁なすつてお氣に入りの美代子でも後釜にお据ゑなすつたらいいでせう。

角田　なに。

美代子　(聞き兼ねて)　實さん、泰さん、あつちへ被來い、お父樣のお部室で御飯にしませう。

角田　どうか、さうして下さい。かう云ふ女は子供に聞かしていゝ話も悪い話も區別が出來ないんですから。

松子　フン。そりや、どうせ私は無教育な女ですからね。子供にどんな話をしていゝか、そんな事は分りません。けれどもね、悪い話をして聞かすものより、その悪い事を實地に見せるものゝ方が、どれだけ圖々しいか位は知つて居ます。

角田　なに、一體お前はどうしたと云ふのだ。

松子　いくら、大きな聲で胡麻化したつて私は、ちやんと何もかも知つてるんですからね、あなた見た樣な、ひどい事をなさる方は、何處にあります。

角田　俺が一體どうしたと云ふんだ。

松子　あなた、昨夜はどうなすつたんです。

角田　松子、お前それは正氣で云ふのか、念の爲に聞いて置かう、俺も今夜は覺悟がある。

美代子　あれ、兄樣。

松子　私は氣狂ぢやないんですからね、これでも確かな事を云つてる意りです。えゝ確かなもんですとも。美代子さんお前もお前ぢやないか、お父樣があんなになつておしまひなすつたお蔭で、お前迄墮落して、どんな不品行な

事をしても恥づかしいとは思はないやうになつて仕舞つて居るんだ。恥知らず！　恩知らず！

美代子　姉さん！

松子　何だい、私は、お前のやうな恥知らずに姉さんなんて呼ばれる覺はないよ。

美代子　姉さん、そりや、あんまりでございます。あんまりな仰有りやうです、私、決して姉樣がお疑りになつてるやうな事は、した覺はありません。昨夜私は、たつた一人で町へ行つたんです。それに／＼そんな事を仰有るのはあんまりです／＼。

（と、泣き伏す。實が茶碗を持つたまゝ出て樣子を見て又歸つて行く。）

松子　いくら、泣いて見せたつて駄目だよ、私は此の事を東京の阿母樣や姉樣の所へ、さう云つてあげて、キッパリお前と姉妹の緣を切つて貰ひます。私はもうお前のやうな人は妹とは思はないんだからね、口を利くのも穢らはしい、ほんとに顏を見ても腹が立つて來る――。

角田　こら、貴樣は未だ云ふのか、もういゝ加減にしたらどうだ、默つて聞いて居りや、いゝ氣になつて、もう一言云つて見ろ、その儘にして置かないぞ。

松子　えゝ、云ひますとも、私は今日は飽くまで云ひます。何と云はれたつて云ふだけの事は云ひます。

（と角田は突然松子を撲る。）

美代子　あれ、兄樣。

角田　止めるな、美代子さん、今夜こそ思ふ存分懲らしてやるのだ。（と尚も撲る）

松子　お打ちなさい、さ、打たれたつて殺されたつて私は云ふだけの事は云ふんだ、畜生！

角田　未だ云ふのか。

美代子　兄さん、亂暴をなさらないで、姉さん逃げて下さいまし。

松子　逃げない、逃げるもんか、かうなつたのも皆、お前の爲ぢやないか、恩知らず、義理知らず。

（と美代子を引倒して打つ。）

角田　こら、何をする。

美代子　兄さん、かんにんして上げて下さい。姉樣、貴方へ行つて――。

角田　美代さん、離すんだ、殺しても飽き足らない奴だ。

松子　殺しなさい、さ、殺されゝば本望だ。

角田　よし、殺してやる！（と猛然と立上る）

美代子　あ、誰か來て下さい。

（此時今迄呆氣に取られて居た子供は一度に泣き出す君塚夫婦は、以前より樣子を窺つて居たが、手出しが出來ず尻込みばかりして居る。角田は子供の聲に勢を阻まれて漸く我に返り。）

角田　美代さん、大丈夫だ〳〵。こんな奴は殺すまでもない、松子、貴樣みたやうな奴は、今夜限り離緣してやるから何處へでも出て行くがいゝ、馬鹿。

（と、そのまゝ戶外に出て行く。美代子はホツと一息子供等も泣きやむ。君塚も汗を拭く。）

美代子　姉樣、兄さんは何處かへ出ていらつしやいました。何時までこんな事をして居ては又御機嫌を惡くしますから姉樣も機嫌を直して今夜は、もう何も仰有らずにお休みなさいましね、後は私が巧くしますから。

松子　知らない、お前なんぞの世話になりやしないよ、人を馬鹿にして……角田が殺してくれなきや、私は自分で死ぬからいゝ。（と立上る）

美代子　姉さん、何處へいらつしやるんです。

實　母樣、行つちや、いやだよ。

（と留めるを振り拂ひ、庭傳ひに驅け去る。美代子も後を追ふ。）

美代子の聲　あら、姉樣、誰か來て下さい。

（君塚夫婦慌てゝ聲の方に驅けて行く。軈て君塚夫婦美代子、其他同じ社宅に住む者二三名松子を扶けて戾り來る。松子わざと大袈裟に泣き狂ふ。子供は泣きやんで社員の顏を珍らしげに見る。）

君塚　本當に危なかつた。奧樣冗談ぢやありませんよ、あんな處へ飛込んで、どうなさるおつもりです。命が玉なしぢやありませんか。

美代子　ありがたうございました。皆樣が來て下さらなければ私一人の力では迚も助ける事は出來なかつたんでございます。お蔭樣で命拾ひをいたしました。もう大丈夫でございます。姉も今夜は取逆上て居りますから明日改めてお禮に伺ひます。

君塚　御禮にや及びませんが、餘りかう云ふ騷ぎは、繰返さんやうにお願ひします。

お種　あなた。

美代子　いつも〳〵眞に申譯ございません。

君塚　今夜は奧樣も興奮して被在るやうだから、この儘にしておあげなさい。もう今夜は何も云はない方が、よ

ござんすよ。角田君は、

美代子　何處へか出て參りました。

君塚　こんな騒ぎを仕出かして置いてね、あなた一人でお氣の毒ですね、お察ししますよ。

美代子　いゝえ。

君塚　では皆さん、引取る事にしませう。おやすみなさい。

美代子　どうもありがたう存じました。

（一同去る。風が出て來る。）

美代子　姉樣、もうお寢みなさいまし、今夜はもう何も仰有らないで下さい、お願ひしますから。實さんも泰さんもおやすみなさい、叔母さんが床を敷いてあげますから。さ、姉樣。

（松子はしぶ〳〵床に就く。美代子は二人の子供を寢かす。そこらを片付け、角田の床も敷き臺所に出て洗物を濟まし元の座に戻る。松子も子供も熟睡、その寢顏を見て居る内に涙。蟲の聲。針箱を出して實の着物の綻を縫ひ初める。不圖懷中に氣附き手紙を出して讀む。）

美代子　武内さん――。

（と手紙を頰に押當てる。軈て開いた手紙をそのまゝちつと考へ込む。按摩の笛。と戸外に醉拂つた志村の聲。）

志村　角田君。居るか！　おい、志村だ。飮みに行うか。

（と云ひつゝ入つて來る氣勢。美代子急に庭先より走り去る。志村入つて來る。）

志村　角田君々々々、留守か。

（と、其儘出て行く。風の音、按摩の笛。）

――幕――

五幕目

大舘家テレース

大舘家に附屬したる洋館のテレース、ヴエランダを隔てゝ左右に通じ、テレースには階段あり庭に通ず。幕あく。

（と、美代子テレースの椅子に腰掛け物思ひの體。泰子が通りかゝる。）

泰子　叔母さん、何をしていらつしやるの。

美代子　ちよつと考へ事。

春子　さう。（と悲しさうな眼をして）あのね、叔母さん、私、須磨のお母さんの處へやられて仕舞ふつて、ほんと。

美代子　え〻？　誰がそんな事を云つて。

春子　婢やが、お父樣が他處へいらしたのは、その爲ですつて――。

美代子　そんな事があるものですか、お父樣の御旅行は會社の御用ですもの、それに今日か明日には歸つていらつしやるんぢやありませんか。

春子　え〻、でも婢やが、さう云つたのよ、祖母樣は私が嫌ひだから須磨の母樣の處へやつて仕舞ふんだつて、私須磨の母樣の處へ行くのはい〻けれど、又叔母さんと一緒に居られなくなるんですもの、つまらないわ。

美代子　婢やは何も知りやしないんですよ。知らずにそんな事を云つて居るんです。ですから春子さんは安心していらつしやい。そんな事はありやしませんよ。

春子　さうねえ、叔母さん、叔母さんは今度こそ、何時までも私と一緒に居て下さるのね。

美代子　え〻。

春子　いつまでも〱よ。

美代子　え〻。

春子　きつとよ。

美代子　きつとですよ。

春子　ぢや、指切り。

（と兩人指切りをする。）

春子　叔母さん。

（と嬉しさうに美代子の袂に顏を埋める。おみね出て來る。）

おみね　おや、春子ちやん、何を叔母さんに甘つたれて居るんです。

春子　私ね、おばア樣、いつ迄も叔母樣と御一緒に居るお約束をしたの。

おみね　それはい〻事をしましたね、美代さん、豐子は。

美代子　お客樣ですツて。

おみね　おや、又かい、かなり長いお客樣だね、誰だらう。

美代子　（もぢ〱して）ねえ母樣、何は此の頃どうして被在るんです、何は……。

おみね　誰さ。

美代子　あの何よ、武内さん。

おみね　（感じ鈍く）あ〻武内さんかえ、お前の留守には

よく私を見舞つて下さつたけれども、此頃は一寸もお見えなさらないやうだよ。

（春子は聞くともなしに聞いて居る。美代子は輕い失望を感じる。）

おみね　あのね、美代さん、これは此處だけの話だけれどね、あの武内さんと春子の事について私は大變困つてる事があるんだよ。

美代子　え。

おみね　こんな事は私の口から云ふのも嫌だけれど、春子は武内さんと變だと思ふんだよ。お前も一頃の事は知つておいでだらうが、此頃ぢや武内さんの事と云ふとまるで夢中なんだからねえ。

美代子　だつて母樣、姉樣だつて大館樣と云ふ立派な方もおあんなさるのに、武内さんと、そんな。

おみね　それが、さうぢやないよ、武内さんは、あゝ云ふ方だからね、私は若しかしたらと思ふのさ。親の私が斯んな事を疑ふと云ふのは本當に情ない事だけれども、默つて見逃ごせる事ぢやないからねえ。

美代子　（いよ〳〵苦しげに）でも母樣、武内さんはあゝ云ふ確かりした方ですから、そんな間違の起る氣遣はあるまいと思ひますわ、えゝ大丈夫ですわ、そんな事はありやしませんわ。（と我心を試すやうに云ふ）

おみね　いゝえ、それは何とも云へないよ、あの人だつていくら確かりして居ても何と云つても未だ年が若いんだもの、滅多な事はないにしても人の口の端に上るだけでもいやだね、私はそれを考へると本當に命が縮まるやうな氣がするんだよ。

（と沈む。美代子悲しげに歎息。）

春子　あのう、おばア樣、おばア樣の云つていらつしやる武内さんと云ふのは、叔母さんの好きな武内さんでせう。

美代子　まア、何を云ふの、春子ちやん　（と顔を赧らめる）

春子　そんなら今日來て被在つてよ。

美代子　えゝ。

春子　さつきから、お母樣のお部室にいらつしやつてるのは確かにさうだと思ふわ。私、そつと見て來てあげませうか。（と行きかける）

美代子　まア春子ちやん。

春子　いゝわ、行つて來るわ。（と去る）

おみれ　美代さん。

美代子　えゝ。

おみれ　私の云つた通りだらう、武内さんが見えたんなら、お前も歸つて居る事だし、何とか云つて寄越しさうなものぢやないか、私はどうも、さうぢやないかと思はれるんだよ。

（美代子は一杯涙をためて下を向く。菊江が水菓子を持つてヴェランダを通る。春子逃げて來る。）

春子　（美代子に取縋つて）叔母さん、どうしませう。

美代子　どうしたのよ、春子さん。

春子　母樣のお部室を覗かうとしたら嬶やに目付かつて仕舞つたの、私、お母樣に抓られるわ、叔母さん、どうしませう、あゝ被來つた。

美代子　ようござんす、叔母さんが謝りますから、春子さんは私の傍に被在い。

（豐子と嬶のお市が來る。）

お市　そこに被在います。確かに巾を覗いて被在つたに相違ございません。

豐子　いゝよ、分つて居るから、彼方へお出で

お市　本當に油斷も隙もならない方ですね。（と去る）

豐子　美代子、お母樣も、そこに被在つて下さい、私あなた方に云ひたい事がありますから。（と、底氣味惡く落着いて云ふ）母樣、あなたの前ですけれど、私はつくづく美代子の大膽さに呆れ返つて仕舞ひましたよ、お前にもお分りだらう、福島の松子の所から手紙が來たんだよ。

美代子　えゝ。

豐子　母樣、この手紙を讀んでごらんなさいまし、私は全く驚いて仕舞つた。お前と云ふ人は何處まで圖々しく出來て居るんだらう、歸つて來た時、私に云つた事はありや皆嘘なんぢやないか、角田さんも、いゝ年をして一體何の事だらうね。

（と、おみれに渡す。おみれは讀む。美代子は何も云ふまいと決心したかの如く、固く唇をかみしめて居る。）

おみれ　まア豐子、待つておくれ、お前のやうにさう云つたツて松子の手紙ばかりぢや本當とも云はれないぢやないか。

豐子　ぢや、母樣は松子の手紙が殘らず嘘だと仰有るんですか。

おみれ　そんな事が出來るか、出來ないか考へたつて知れ

ろぢやないか、又松子も松子さ、八年も九年も一緒になつて居て自分の夫を信用する事が出來ないのかね、こんな事を云つて來る松子の心が私は、本當に情ないと思ふよ。（美代子は嬉し涙）

豐子　母樣は、美代子が贔屓だから、そんな事を仰有るんです。松子だつてこんな事を云つて來るには、よく／＼の事があるからです。よしんば、それが松子の誤解にしろ、誤解されるだけの過失がお前にあつたからです。外の事ならとにかく、切つても切れない、自分の姉婿と妙な噂を立てられるなんて、眞人間なら死んだつて出來る事ぢやない。心の腐つたお前は平氣で居られるかも知れないけれど、私は、たとひ他人の事でも腹が立つ――。

おみね　まアお前のやうに、さう云はないだつて、それぢや、美代子獨りが惡者になつちまふぢやないか。

豐子　母樣は美代子に丸められて居るから駄目なんです。それで母樣、改めてお斷りしますけれど、かう云ふ事になつて來ると、私は美代子を家に置いとく譯には參りませんからねえ。

おみね　豐子さん、それぢや、お前あんまり美代子が可哀さうぢやないか、美代子獨りに出て行けと云つたッて、出て行きやうがないぢやないか、それはお前無理と云ふものだよ。

豐子　私の云ふ事が無理だと思つたら、母樣の御自由になすつて下さいまし。美代子は此の家に置いとく譯には參りません。

おみね　そんな事を云つたら私も出て行かなきや、ならないぢやないか。

豐子　それが母樣の思召しでしたら、美代子と一緒に出ていらして下さい。

おみね　お前、親に出て行けと云ふのかい。

豐子　母樣が出て行きたいと仰有るなら出て被在して下さい、別にお止めは致しませんから。

おみね　（激怒）あゝ出て行きますとも、出て行きますよ。賴まれたッて誰がこんな所に居るものか。

豐子　（靜かに）私の方ぢや、賴んで阿母樣に居て頂くんぢやないんですからね。

美代子　（體をふるはせて）姉さん。

（と、鋭く叫ぶ。武內が來る。美代子その姿を見て、はしたなく罵れもせず、言葉を吞んで耐らなくなつて泣き出す。春子も泣いて居る。）

豊子 （武内は意外な光景に佇んで仕舞ふ。）何かと云ふと泣きさへすりや、いゝかと思つて、馬鹿々々しい、とんとお役に立たない涙をこぼして居るよりも、これから先の身の振り方でも考へたら、いゝだらう。お前なんか、いつその事藝妓にでもなつちまつた方が優しだらう。（武内に氣附き）あら武内さん。どうなすつたんです。

武内 私は、もうお暇をします。然し美代子さん。どうなさつたのです。

豊子 どうもしやしないんです。内輪の事で揉める事があつたものですからね、あなたの御存じのない事ですよ。お暇なんぞと仰有らずに、も少し遊んで被在いましよ。さあなた、あちらへ參りませう。

武内 ですが、私は少し美代子さんに話したい事がございますから。

豊子 そんな事を仰有らずに、さア參りませう。

（と馴々しく武内に寄り添ひつゝ去る。）

美代子 （涙ぐんで見送つて居たが、急に母に縋り）母様口惜しい―― （と泣き倒れる） 私、男でしたら、姉さんに口を利かせないやうにしてやるんです。けれども、女に生れたばかりに、口惜い〳〵。（と慟哭する）

おみね わ、わかつて居るよ〳〵。

美代子 私、福島の兄さんの事、こればかりは誰が何と云つても何も知らない事なんです、覺えのない事なんですから。又こんな事がありましたら、のめ〳〵東京へなんか歸つて來やしません。

おみね いゝよ、知つてるよ、私だつて、お前がそんな事をする人か、人でないか、よく承知してるよ、だから、そんな口惜しがるんぢやないよ、工合でも惡くしたら仕樣がないぢやないか。

美代子 （甘えるやうにシク〳〵泣き） 母様、ほんとに此の家を出て下さる。

おみね （ドキとする）

美代子 お願ひですわ、私どんなにでもしてきつとお母様に不自由はさせませんわ。今の侮辱を思ふと、私、どうしても此の家に居られないやうな氣がします。母様、お願ひですから私と一緒に此の家を出て下さいましな。

おみね （稍當惑して） そりや、豊子も出て行けと云つた私も出て行くと云つたが、兩方とも一時の腹立ちまぎれだからね、それを根に持つて出て行くと云ふのは、どう

だかと思ふよ。先立つものは、お金だからね。外へ出て喰べるものも喰べないで苦しい目をした方が氣が樂か、少し位、氣不味い思ひをしても我慢して喰べる心配のない所に居る方が得か、よく考へなければならない事だからね。

美代子　（情なさゝうに）　母樣、私母樣とお別れするのがイヤなのです。と云つて此の家に居るのは死ぬより辛うございます。死ぬ苦しみにたとへたら、どんな事でもやつて行けない事はないと思ひます。私もう外聞も何も關ひません。どんな賤しい事でも、どんな辛い事でも致しますから私と一緒に此家を出て下さいましな。さうしてお父樣のお歸りになる日を待ちませう。私達はお父樣の事を忘れ過ぎて居ました。お父樣だつて歸つて被來して直ぐ此の家に厄介になられやしないでせう。お父樣の寢床をこしらへる爲に、此の家を出て下さいましな。

（と頭を下げる。春子は默つて聞いて居る。）

おみれ　さうだねえ。

美代子　勝手なやうですけれど、かうなつたら私、一時間でも早く此家を出たいと思ひます。家が無ければ二階借りをしてもいゝぢやありませんか。

おみれ　ぢや武内さんも來てゐなさる事だから、一度相談して見たらどうだい。

美代子　母樣、もうあたし武内さんには一生お目にかゝるまいと思ひます。

おみれ　何故だい、だつて武内さんはお前――。

美代子　（聞くのが辛さうに遮り）　お父樣が、あゝ云ふ所に居らして、云はゞ日蔭の身なんですもの、武内さんの御名譽を傷付けたくはありません。私あきらめました。

おみれ　え。

美代子　母樣さへ、どうにかして樂をさせておあげする事が出來れば、私は外に望みはございません。母樣本當にいつ迄も傍へお置き下さいましね。

おみれ　美代子。（手を取る）

美代子　私、何にも云ひません。

（春子シク／＼泣く。）

美代子　春子さん、折角春子さんとは指切りのお約束までしましたけれど、又叔母さんは春子さんとは一緒に居られなくなりましたわ。

春子　あたし、もういゝわ。

美代子　えゝ。

春子　叔母さんと一緒に居られなくつてもいゝわ。私と一緒に居れば叔母さんは、母樣に叱られるんですもの。

美代子　まア春子さん。

（と抱きしめて泣く。おみれも涙。お市來る。）

お市　お孃さん未だこんな所に居らしたんですか、いつまでも叔母さんの傍に居ると、又お母樣に叱られますよ。少しは御自分の部室でお遊びなさい。

春子　（離れて）おや、行く時は知らせて頂戴ね。

美代子　えゝ。

春子　さやうなら。

お市　何が左樣ならですよ、被來い。

（と連れて去る。兩人は吐息。間。武内來る。）

武内　あゝ美代子さん。

おみれ　美代さん、武内さんが。

（と、暗に數はれてと勸める。）

美代子　（武内を見もやらず）母樣、參りませう。

おみれ　お前、武内さんが。

美代子　私、伺ふ事はございませんもの。

（と涙を呑んで庭傳ひに去る。）

武内　奧樣、美代子さんは、どうなすつたのです。

おみれ　はい、あの、いえ――

（と後を追つて去る。）

（武内危しげなる顏附。豐子、菊江と共に來る。）

豐子　（菊江に）では何か冷い飮料を持つて來ておくれ、私の部室にドムがあるから、持つて來ておくれ。

（菊江は去る。）

豐子　まア何をして被在いますの。

武内　奧さん、私は本當にお暇をします。

豐子　（それには答へず、突然）あの、美代子の事でございますか。

武内　えゝ。（と腰を落す）

豐子　（それを見て笑ひ出す）ホ、、、美代子の事と云ふと直ぐそれだ、あなたも隨分現金な方ですねえ。

（武内苦笑して立上らうとする。おていポンチの類のものを持ち來る。）

豐子　あ、あなた冷いものが參りました。これを召上つていらつしやる時間ぐらゐ何でもございますまい、あなた。

（武内腰をかける。）

武内　（豐子の向き直るのを待ち構へたやうに）美代子さんは別にどうもなすつたんぢやございますまい。

豐子　美代子の事と云ふと、きつと、あなたはさう熱心におなりになるんですのね、あの恩知らずの女をどうして御贔屓になさるんでせう。

武内　恩知らず？　美代子さんが。

豐子　え、、あんな恩知らずッてありませんわ。今も家を出て別になると云ひ出すぢやございませんか。

武内　美代子さんが別居なさる！

豐子　美代子ばかりぢやありません、母樣までさうなんですもの、あなたの前ですけれどもね、美代子も此頃は、ひどく心が荒んで參りましてね、福島に居る間に、破廉恥極まる墮落をして仕舞つたんですのよ。

武内　墮落？

豐子　（武内を見ずに）　え、、それは口にするのも恥づかしい墮落をして仕舞ひましてね、迚も私なんかの手に合はなくなつて仕舞つたんでございますもの――。

（と、チラリと武内を見る。武内テレて頭をかく。おていドムの壜とグラスを銀盆に乘せて持ち來る。）

おてい　奧樣、これでございますか。

豐子　あゝ、そこへ置いといておくれ、それから、そこを締めて――。

武内　イヤ私は直ぐお暇するんですから。

豐子　何もあなた、そんなにまで警戒なさらなくても大丈夫でございますよホ、、、それよりあなた、一盃いかゞ（と注ぎながら）　あなた、此のドムがお嫌ひ、さ、召上れよ。

武内　ありがたうございますが、大分醉つて居りますからお斷りいたします、本當に失禮いたします、伯母の病氣も氣にかゝりますから、本當に失禮をいたします。

豐子　まア、あなた後生ですから、も少し遊んでいらして下さいましな、私無理を申しても今日だけは、あなたをお引留めしたいんですの。（と、武内の前にあるコップを取つて）ねえ、あなた、あなたが召上らないなら私頂きますわ、こんなに、うまいお酒が、どうしてお嫌ひなんでせう。

武内　何と仰有つても私は頂きません。

豐子　けれど、美代子は本當に幸福ですよ、蓼喰ふ蟲も好き／＼と云ひますけど、角田と云ひ、あなたと云ひ、あんな性根の女をどうしてさうお好きなんでせうねえ。美代子は、きつと男好きのする所があるんだよ。

武内　（強ひて冷靜に）　いや、いづれにもせよ、私の窮地

御一家に對する心持に變りはないんでございますから、私は自分のしなければならない事をさへすれば、それでよろしいのですから、どうぞ、そのおつもりで、何事も惡くお取りにならないやうにお願ひいたします。

豐子　では私はどうなるんでございます。私も菊地の家の娘でございますが――。

武内　あなたは大館家の奧樣で、菊地の家とは、とくに緣が切れてると始終、仰有つてるぢやありませんか。

豐子　そんな皮肉な事を仰有るもんぢやありませんわ、武内さん、偶には――武内さん、さうぢやありませんか。

（武内は石像の如くに突立つて憤怒の唇をガタ／＼させて居る。）

武内　奧樣、いゝ加減になすつて下さい、私を何だと思つてゐらつしやるんです。何と云ふ恥知らずだ。あなたは立派な人妻ですぞ、いかに夫が留守勝ちで、男の愛撫に飢えて居るとは云へ、餘りと云へば餘りな無節操な、人間としてあるまじき事だ！

豐子　何とでも仰有い、何もかも思ひ捨てゝ居る私です。何を犧牲にしても惜しいとは思ひません。思ふ男と一日でも半日でも思ひ通りの日が暮らせればそれで私は本望なんです。

武内　恥をお知りなさい、私は手が慄へて居るんだ、相手があなたでなければ、横面を打ちのめしてやりたいんだ！　あの淑な女らしい美代子さんを罵つたのは今の今ぢやありませんか、その舌の根の乾かない內に、此の猥らな所業は何事です。恐らく娼婦も敢へてしない所業でせう。私があなたに近附いて居た事を、あなたは、さう云ふ卑しい心に解して居たのですか、私があなたに接近したのは、あなたの性格を呑み込んで、菊地の奧さんとの感情の障害を取り除かうとした爲ですぞ！　耳が汚れる。猥りがましい事を云つて下さるな！

豐子　（その膝に取縋りて）武内さん、もう何も仰有らないで、今日一日だけ私の云ふ事を、お聞き下さい、私の一生のお願ひでございます。

武内　（再びその手を拂ひ）奧さん、私は男です、曲つた事は大嫌ひなのです。

（と立去らうとして硝子の扉を開けようとする。）

豐子　（椅子から半分摺り落ちて武内の上衣の裾を摑みながら）あなた、ちよつと待つて、一寸待つて下さい！

（武內邪險に振り切つて今度は庭へ下りようとする）武

内さん、そんならそれで、よろしうございます。あなたが、さう云ふお心なら、私は此れから、いつまでも私の思が叶ふまで執念深く絡まります。美代子をあなたから引放すまでは、どんな事をしてもあなたの傍から離れません。あなたもそのおつもりで、蛇に見込まれたと思つて、觀念なすつて下さい。

武内　勝手になすつて下さい。

（と、去る。豐子口惜しげに見送る。お市が、これより前に二人の樣子を見て居たが、此の時聲をかける。）

お市　奧樣。

豐子　あゝ、お前――。

お市　大テレの型ですね。

豐子　見て居たのかい。

お市　器量が惡いぢやありませんか、しつかりなすつて下さいな。

豐子　（忌々しさうに）

お市　あんな若僧に跳ねつけられるやうぢや、奧樣も、もう末ですね。

豐子　うるさい！

お市　オホヽヽヽ、お頭が曲つてしまひましたね。

豐子　何とでもお云ひ。

お市　オホヽヽヽ。

（小間使のお春が來る。）

お春　奧樣、旦那のおかへりだす。

豐子　（心付き）何だつて！

お春　（目を丸くして）旦那さんのお歸りだす。

豐子　それが、どうしたと云ふんだい。

お春　（愈々目を丸くして）お知らせに來ましてん。

豐子　そんな事は、一々知らせなくつたつて解つてるよ。

お春　へえ。（と去る）

お市　何もあの子が知つた事ぢやありますまい、八ツ當りは可哀想ぢやありませんか……どれ私も引下りませうかね。

豐子　お前、あたしの傍に居ておくれ。

お市　へえ。

豐子　介抱しておくれ、いゝかい。

（と何か考へる。心に背いてテーブルに突伏す。）

大舘　（出て來る）豐子、どうしたのだ。

豐子　あゝ、あなた、あゝ苦しい――。

大舘　又強い酒を飲み過ぎたな。

豐子　(その肱に縋り)　あなた口惜しい、仇を取つて下さい！
大館　(落着を失はず)　何、何がどうした。
豐子　私は口惜しい、あなたのお留守を窺つて、武内が私を口說きに來たのです、こんな恥づかしい目に逢はされて、あの男は色魔です！
大館　豐子、お前、何を云ふのだ、今まで弟のやうに可愛がつて居た武内ぢやないか、私の方の會社に使つてくれと私に運動までさせた武内ぢやないか。
豐子　私の可愛がりやうが、度が過ぎたのです。それであの男はいゝ氣になつて、私の袖を引くやうになつたのです。云へば私の恥と今日まで私は默つて居ましたが、今日と云ふ今日我慢がしきれなくなつたので、散々恥をかかせて逐ひ歸して仕舞つたのです。此のお酒も武内が飲ませたのです。醉はせて私を手籠めにしようとしたのです！
お市　本當に飛んだ事でございましたねえ。
大館　お市、お前は彼方へ行つてゝおくれ。
お市　はい、奥樣ようございますか。
大館　よろしいから、あちらへ行つておくれ。
お市　困つた事が出來ました。(と去る)
大館　豐子、お前の云つてる事に間違はあるまいな、嘘はあるまいなア。
豐子　嘘や、冗談にこんな事が云へると思つていらつしやるんですか。
大館　しかし武内がそんな所業をするとは、どうしても私には受取れんがなア。
豐子　あなたが歸つて被來したと聞いて、合はせる顔がないので帽子も何も置き放しにして庭から逃げて行つたのが何よりの證據ぢやありませんか。
大館　(稍々疑惑の眼)
豐子　(すかさず)　私が惡かつたんです、あなたの名譽や私の恥辱を思つて、早くはねつければよかつたものを、いゝかげんにあしらつて置いたものですから、あの色魔が圖に乘つて來たんです。今ぢや女中達まで私を疑つて居ます、女中ばかりか春子まで私の部室を覗きに來ます。こんな口惜しい恥づかしい殘念な事はありません、あなた、私は口惜しい〳〵。
(と、ヒステリツクに泣く。春子は庭から父の姿を見てシク〳〵泣きながらやつて來たが、春子と云ふ言葉

を耳にしてテレースの下に身を潜めて向うを見て泣いて居る。）

大館　（苦悶の樣子）　しかし……（とふと春子に氣附き）春子、お前は、そこで何をしてるの。

春子　お父樣、おばア樣と叔母樣が居なくなつて仕舞ひました。

大館　なに、母樣と美代さんが、豐子一體どうしたと云ふのだ、意外な事ばかり聞かせる！

豐子　あなた、美代子は、私が出しました。

大館　何故、どうしてだ？

豐子　美代子は私の眼を掠めて、武内と私通して居りました。

大館　又武内か。

豐子　云ふさへ口の汚れですけれど、片手で私の手を取らうとしながら、片手で美代子の手を握つて居たのです。美代子は心から武内に迷はされて居たのです。

大館　ふむ。

豐子　しかも、美代子は福島に居る間に松子の夫と大變な醜聞を流して來たんです、これは松子から來た手紙です。

（大館は全く驚く。）

豐子　私は決して嘘は申上げて居りません。松子から來た手紙を御覧になれば、直ぐ解ります。私は本當にあなたに申譯ありません。折角お世話して下さる妹が、あなたの名まで汚すやうなふしだらな事を仕出かしまして姉として面目なく、私あなたにお會はせする顏がございませんのよ。

大館　併し美代さんとしても、母樣は一體、どうなさつたのだ。まさか母樣まで家から出したのぢやあまいるなア？

豐子　自分から出て行つて仕舞つたのですわ。

大館　（稍々色を變へて）　お前はそれを、何故お止めせんのだ！　美代子がさう云ふ、過ちをし出かした以上、捨てゝ置いたら尚、將來危險が增す道理ぢやないか、私にも篤と相談があつて然るべきだ。よしんば、お母樣が出て行かれようとしても何故、强つてお引止めしなかつたのだ！

豐子　私、親の自由は束縛する事が出來ませんでした。母は美代子が贔屓なんでございます。

大館　しかし私が承知して、私の家へ預かつた母樣なり、美代子さんなりを、私の承諾を待たずに家を出すと云ふ

やうな沒義道な事は見合せて貰ひたかつた。

豐子　沒義道ですツて？　では私があなたの名譽や體面を重んじてした事が惡かつたんでございますか、一家の主婦として家庭の出來事を處理して行つた事がいけなかつたんでございますか。

大館　さうは云はん、私はさうは云はんつもりだ。

豐子　いゝえ、さうです、あなたは私の云ふ事は嘘だと思つて被在るんでせう、それに違ひありません、なればこそ春子が私の部室を覗きに來たりするのです。えゝ、皆皆で私を疑つて居るんです。誰一人私の味方になつてくれる者は無いんです。こんなつまらない事はない、イッその事思ひ切つて死んで仕舞ひたい。（と泣きわめく）

大館　春子お前は本當に母様の部室を覗きに行つたのか、何故そんな事をする、どうしてそんな事をしました。

春子　私叔母さんの代りに武内さんを見に行つたのです。

豐子　美代子は自分で嫉妬を起して、それで春子を覗きに寄越したりしたのです。それに春子が美代子の手先になつて私を敵のやうに思つて居るんですからねえ。

大館　そんな事はあるまい、お前は母様が好きだな、ね、好きだね。

大館　（春子肯く。）好きな母様なら、これからそんな事をするんぢやないぞ！　いゝか分つたか、母様に謝るんだよ、さ。

春子　母様ごめんなさい。

豐子　いゝえ、知りません。此の家の中に私の味方になつてくれる者は一人もないんです。私は私で自分勝手な事をしますから、あなたもさう思つていらして下さい。

春子　母様ごめんなさい。

豐子　知らないよ。（と突き飛ばして去る）

春子　（泣いて）おばア様、叔母様。（父の傍に來て）お父さま、ごめんなさい。

大館　お前、お父さんに、さう謝つてくれるか。――よくお母さんに謝つたな、いゝ子だ。酷いお父様と思ふかも知らんが、お前に恨ませて、さうして此のお父さんが家庭の事に就て何にも云はなければ、この大館の家は無事に納つて行くのだ。それと云ふのも此のお父さんは、よく眠る間が慾しいからだ。一年の四分の三以上海の上に居て偶々體を休める港に歸つて、その寛いで樂しむ我が家が、この有樣だ、事勿れ主義を取つて居るのは、少しでもお父様は平和が欲しいからなのだ。堪忍してくれよ。

今度はお父樣がお前に謝る。子供に解らない事を子供に云つて聞かせるから分らない親父だ――が、お前のお父樣だ。お前を捨てやしません。考へます、少しの間だ、許してくれ、さ、春子、お約束だ、今日はお父樣にしつかりと抱きついておくれよ！

春子　お父樣！

（と縋りつく。俄かの雷鳴。驟雨。大館驚いて春子を庇ふ。）

――幕――

大詰

東京驛階上ホテル

東京驛の廣廊下。正面に貴金屬類の陳列棚。下手に食堂の入口、上手に喫煙室の入口。食堂の入口には鏡の衝立ありて内部は見えず。下手エレベーターの昇降口。上手に喫煙室と廊下を隔てゝ酒場及球場あり。廊下には卓、ソファなどを置く。球のかち合ふ音。電車の響。サイレン。プラツトホームの和土に響く下駄の齒音。發車のベルの音など雜然たる内に。

幕あく。

（と、豐子旅支度にて人待顏。そこへエレベーターにて長吉が來る。）

長吉　たうとう出ちやいましたねえ。

豐子　出ちやいましたねえぢやないよ、お前何と云つて約束したんだ。

長吉　何と云つてツて、六時二十分の國府津行に間に合ふ樣、東京驛の二階の食堂へ來いと云つてやつたんですがねえ。

豐子　お蔭でよく間に合ひましたよ、汽車は出て仕舞つたしね。

長吉　厭味はヌキに願ひませう。だがこりや何か出られない事が出來たんですぜ。

豐子　さうなりや、お前さんはしめだらう

長吉　何故です。

豐子　あの子が來なけりや二人だけの世界が出せると思つて、お前さん、わざとからくりをやつたんぢやないかい。

長吉　プーッさう疑ひ深くちや困るなア、ちやんと六時二十分と云つてやつたんですよ、ことに依ると七時と云つ

たかな。

豐子　それ、ごらんな。

長吉　だが今の時間に間に合はなかつたとすると、きつと來るかどうか、あてになりませんぜ！

豐子　來るよ、お前がちやんとさう云つてあるものなら來るよ。來られないものなら使でも寄越すとか、何とかして斷つて來らアね、斷りのない所を見ると、どうしても來るつもりか、それともお前のからくりか何方かに違ひないから、お前さんの料簡を試す爲にも私は何處までも待つて居るよ。

長吉　仕方がねえなア、云つた事はたしかなんですよ。

豐子　時間の點が受合へないんだらう。

長吉　弱つたね、大丈夫ですよ。

豐子　だから何時までも待つて居ると云ふんだよ。

長吉　此處で待つて居るんですかい、食堂と云ふ約束ですぜ。

豐子　お前さんとさしぢや冴えないからねえ。

長吉　どうも安く扱はれるもんだね、仕方がねえ、洋食三皿か四皿にありつくんだ、我慢しちまへ。

豐子　食ひ意地が張つてるねえ。

長吉　次手の事にブランデーを二三杯ね。

豐子　醉つちやいやだよ、醉ふとお前さんは、執拗いんだから。

長吉　大丈夫、今日は何處までもお供なんだ。

豐子　さう云ふ所は殊勝らしいね、ぢや奢つてあげようかね。（と食堂に入る）

（長吉や〻、やけらしく續く。電車の音、おみねと美代子が來る。）

おみね　此處にも見えないぢやないか。

美代子　でも此處と云ふお手紙でしたわ。

おみね　まさか前の汽車で發つてお仕舞ひになつたんぢやあるまいね。

美代子　七時三十分の急行で立つとしてありましたわ。今に被來るでせう。お待ちして居ませう。（と兩人腰を下ろす）春子ちやんも、たうとう須磨へやられて仕舞ふんですのね。

おみね　その方が却つてあの子の幸福だよ、大館さんが又船に乘つてお仕舞ひになつたら、今度こそあの子は一人ぼッちだからねえ。

美代子　姉さんは此頃どうして被在るんでせう。

おみね　懲役一杯にして居らアね、大館さんもいゝ方だけど、何故無下に、あゝ巻かれてお居でたらうね、私は本當に不愉快くて仕方がないんだよ。

（食堂から四五人の客が出て來る。）

客の甲　おや、まア行つて來たまへ、成功を祈つてるよ。

客の乙　ありがたう。

客の丙　少し早いけど、プラットホームへ出て居ませう。

（と、エレベーターにて去る。）

おみね　大丈夫だらうかね、大館さんは――そろ／＼お客が中へ行くぢやないか。

美代子　今の人は七時のですよ、義兄さんは七時半ですもの、まだ間がありますわ。

おみね　でも餘り遲いぢやないか、あの手紙では食堂で御飯を食べながらとしてあつたぢやないか。

美代子　さうですわね、一遍電話をかけて見ませうか。

おみね　さうさね、さうして見ておくれでないか。

美代子　ぢや母様、此處で待つてらして下さい、私ちよつと行つて來ますわ。

（バーから出て行く客。食堂に入る客。喫煙室より出て行く客など。間。電車のベル。美代子顏色を變へて戻つて來る。）

美代子　母様、大變ですよ、姉さんが家出をなさつたんですツて。

おみね　え、豐子が。

美代子　姉さんは昨夜から歸つて來ないんですツて、變だと思つて家の中を調べて見たらお金なんかを大分持出したらしいんですツて。それに指輪や帶や、金目のものが失くなつて居る所を見ると、もう家へは歸らないつもりで出たらしいと義兄さんは云つて被在るんですよ。

おみね　まアどうしたと云ふことだね、お金を持出すなんて何處まで賤しい子だらうね。

美代子　義兄さんは大變武内さんを疑つて被在るらしいんですよ。

おみね　武内さんを、――豐子は武内さんと一緒かねえ。

美代子　（流石に辛く）どうですか。でも義兄さんはさうだと思つて被在るらしいんです。それでも未だ許してやれるだけは許してやると言つて被在いましたけど、とに角七時半の汽車には間に合はないかも知れないが、姉さんが家出なすつたとして見ると何のこと、春子さんは須磨へ預けなければならないし、どうしても今夜中には發

たゝきやならないから、其處に待つて居てくれと仰有つてゞした。

おみね　情ない事が出來たもんだね、お父様はお留守だと云ふのに、若しも離縁にでもなつたらどうするつもりなんだらう。あんな子でも、そんな事になれば可哀想ではあるし、私はかうしちやゐられない、お前此處で待ッてゝおくれ。

美代子　母様、何處へいらつしやるの。

おみね　おッ母さんは改札口の處で見張つて居ようと思ふのさ、お金を持ち出した處を見るときつと遠くへ行くつもりだらうからね、上野から行くか、何處から逃げるかそりや分らないけれど、若も此處で見付かつたら、どんなにでもして改心させて眞人間にしてやりたいからね。いくら憎い子でも、親として我が子の離縁になるのを默つて見過しは出來ないぢやないか。

美代子　全くですわねえ、私もひよッとしたら義兄さんが此處へ被來つた時に、姉さんが被來つて、今までの罪を詫びて下さるやうな事があつたらと思ひます。母様私も行きますわ。

おみね　いゝえ、お前は此處に居ておくれ。今に大館さんが被來つた時に二人共居なかつたら困るし、それに鶴子にかゝつて居たと云や、大館さんだつて、いゝ氣持はなさらないに極つて居る。本當を云へば此方から離縁を取るのが本來なんだが、勝手と云はれるか知らないが、人情としちや、さうは出來ないからね。私一人で行つてるよ、大館さんが被來つたら厠へ行つたとか、何んとか云つといておくれ、賴んだよ。

美代子　(此の間に何か考へて居たが、ふと)ですけれど母様、あたしも姉様が改心して下さる事を願つて居りますけれど、姉さんが改心なさつたからと云つて、私達が姉様の罪を認めずに、義兄さんの處へ連れて行く事が出來るでせうか、私、それは恥を知らない事だと思ひますわ。

おみね　え。

美代子　姉様には充分罪がおあんなさいます、それを認めるからには、よしんば、姉様が改心なさつたからと云つて、元々通りに大館家へ這入れるとは思はれませんわ。姉様に改心して戴く事は義兄様に對する私達のお詫びなり、務めですけれども、姉様を元の鞘へ納めようとするのは私達の恥知らずではないでせうか。

おみれ　では、どうしたらいゝと云ふんだい。

美代子　（云ふ可き事は知つて居るが、それを云ふのが悲しくなつて）それは私には分りませんわ。

（と云つて聲を忍んで泣く。重苦しい沈默。汽車の走り來る音。やがて停車の音。驛夫の聲。）

（武内が友人の出立を見送りに來たと覺しく、四五人連れでエレベータで昇つて來る。談笑しつゝバーの方へ行かんとして美代子と眼を合はす。）

武内　おゝ。

友人A　どうしただ、行かう。（とバーへ入る）

美代子　（その姿を見送つて居たが、氣を更へて）母樣、やつぱり階下へ行きませう。

おみれ　え――。

美代子　何と云つても姉樣は姉樣です。墮落へ急いでいらつしやる方をお引止めするのが私達の務めですわ。未然に防げる過失は防がねばなりません。階下に居れば、義兄さんの被來るのも見えますわ。階下で義兄さんをお待ちしませう。

おみれ　だが、若しや武内さんが豐子の居所を知つて居なさるかも知れない。武内さんに聞いて見ようぢやないか。

美代子　では母樣、一人でお訊きなすつて下さい、武内さんが今度の姉さんの事に關係して被在るとすると、私、武内さんから淺猿しい墮落のお話を伺ふのは辛うございますもの。

おみれ　（美代子の心を察し）美代さん。

（と、同情の涙。）

美代子　ですから母樣、階下へ參りませう。

（と立上る。武内がバーから出て來る。美代子の立上つたのを見てツカ／＼と來る。）

武内　美代子さん、奧樣、お久しぶりでしたな。誰方かお見送りですか、あなたは隨分ひどい方ですね。

（と、冗談らしく云ふ。）

おみれ　（仕方なく）おや、何故でございます。

武内　何故だとお聞きなさるんですか。これは恐れ入りましたな、考へてごらんなさい、よしんばどんな御事情があつて大館さんの家を、お出になつたか存じませんが、とにかく、及ばずながら、あれ迄御相談相手になつて來た私に何處に居るから位の、お便りは下さつてもよろしいぢやございませんか、美代子さん、あなたもお怨みしますよ――。（美代子答へず）

おみれ　武内さん、あなたは、どうして此處へ被來いました。
武内　友人の見送りにやつて來ましたが、あなた方は。
おみれ　（詰問的に）豐子とは御一緒ぢやないのでございますか。
武内　（不愉快に）いゝえ今御覽の通り友人許りの連れです。（思ひ返して）奥樣がどうかなさいましたか。
（おみれ、美代子に云はうか云ふまいかと目で訊く。美代子答へず。）
おみれ　武内さん、豐子は家出をしましたんですよ。
武内　えゝ、奥樣が家出！　それは一體どうした事です。
おみれ　あなたは御存じなんぢやありませんか、圖々しい眞似も大概になさいましな。
武内　何ですと、奥樣！
おみれ　あなたも隨分お變りになりましたわねえ。
武内　奥樣、あなたは何か誤解なすつて被在るんぢやありませんか。
おみれ　誤解ですか、どうですか、大館さんは豐子とあなたと一緒だと見て居ますよ。
武内　えゝ。

（バーから友人のAが出て來る。）
友人A　おい何ぼ酒が飲めないからッて、そんな所で立話は罪が深いな、行くんだ。
武内　待つてくれ給へ、僕は此處に用があるんだから。
友人A　用はあるだらうさ、用はあるだらうが畔田の發つのを見送つてからでもいゝぢやないか、これで暫く逢へない間柄ぢやないか、送つてやれよ、友人に對して不信の君でもあるまい、御用の中を恐れ入りますが、ちよつと武内君を拜借します。
おみれ　さア〳〵御遠慮なく……。
友人A　これでいゝだらう、畔田が發つてから、ゆつくり話をしろよ。
（他の連中が出て來る。）
友人A　さ、行かう。
武内　一寸待つてくれ、奥樣、只今のお言葉に對して私は是非お目にかゝらなければなりません。唯今の事は必ず何かの誤解であらうと存ぜられます。どうか御迷惑でも是非此處でお待ちを願ひます。
友人A　どうか待つてやつて下さい、お願ひいたします。
（一同は去る。）

美代子　母樣、私、武内さんは何も御存じないんだと思ひますわ。

おみれ　そりや、お前はね、だけど人間の心は魔がさし易いもんだからね、眞面目な顏をして居てもあてにはならないもんだよ。

（美代子は辛さうな顏。外人が來て、美代子の顏をヂロリ〳〵見ながら球場へ入る。）

美代子　母樣、此處に居ると人に見られますから、階下へ行きませう。

おみれ　でも武内さんが待つてゝくれと仰有つたぢやないか。

美代子　ですから私、猶更いやですわ。私武内さんにお目にかゝるのが、辛いんですもの――。

おみれ　それもさうだね、もしかしたら豐子が來ないとも限るまい。階下へ行つて居ようか。

（と降りて行く。）

長吉　（蔭の聲）ぢや一ッ容子を見て參ります。（と出て來る）厄介なお孃樣のお守りは、やり切れたもんぢやねえ。

（エレベーターの處へ行く。階下から昇つて來る心で少時そこに待つ。そこへ大館と春子が階下から昇つて來る。外に客らしい男二人。長吉降りて行く。）

春子　（見廻して）お父樣、叔母樣はいらつしやらないわ。

大館　今に來られるよ。

春子　須磨へ行けば、お父樣は直ぐ船に乘つてお仕舞ひでせう。お父樣はいつでも少しきや一緒に居て下さらないんですもの、外の家では何處でも、お父樣とお母樣が居るのに家ばかりはお父樣もお母樣も一緒に居られないんですもの、私つまらないわ。

（そこへ食堂より老人夫婦を伜が介抱して出て來る。）

伜　ぢや、お父さん頼みましたよ、扇のが五六本と、吹竹とが足りませんが、直ぐ送つて下さいよ、お母さん、お父さんはお酒に醉つて居ますから、忘れるといけませんから頼みますよ。

母　あゝ承知しました。

父　むゝ、よし〳〵。

伜　ぢや、お父樣氣を付けて行つて下さいよ。

（と父を介抱しながらエレベーターにて降りて行く。又食堂から若紳士夫婦が子供を連れて出で來る。）

小兒　お父樣、お母樣早く行きませうよ。

（と兩親の手を引つぱり睦じげに入る。大館はこれ等を見送つて思はず涙。）

大館　あゝ、お父樣は無慈悲な親だつた。お前は兩親を持つて居ながら、揃つた兩親の愛情を知らない。何の事はない、不具な家庭に育つて……可哀想にお前は此の永い間それが爲に、複雜な悲しい經驗ばかりをして居たのだ。お父樣は始めて親子の關係について知る事が出來た、もうお前は須磨へはやらない、お父樣と一緒に船へ乘つておくれ。その代りお父樣は今度の航海を最後として、これからは陸の人となつてお前と二人でお母樣を尋ねよう。お前のお母樣と、お前を、さしはさんで、お互に近くに居て暮しませう。お前は一緒にお父さんと船に乘らないか。

春子　お父樣、直ぐ行きませうよ。

大館　おゝさうか、行かう〳〵。

（と泣き笑ひをする。）

おみれ　おゝ大館さん。

春子　あ、叔母さん。

おみれ　大館さん、飛んだ事を仕出かしまして何とも申譯もございません。

大館　（制して）あゝお母樣、何も仰有らないで下さい。豐子の家出の事に就ては私は誰方からも何も伺ふまいと心に決めて居ります。

おみれ　（不安らしく）と、仰有いますと。

大館　豐子の事は豐子の自由に任せて置かうと思ひます。

おみれ　御離縁でございますか。

大館　いや、離縁はいたしません。私がさうする事は豐子を罪に落す事です。が、豐子は自分から離縁を請求するでせう、豐子はさうした女です。（おみれは落膽の樣）あしからず思召しを願ひます。

（間。發車信號、ベル、汽笛の音など。）

おみれ　さうして豐子の行先は知れましてございますか。

大館　分りません、然し今更行先を突止めた所で何にもなりますまい。

おみれ　（モヂ〳〵して）あの大館さん、今此處に武内が居たのでございますが――。

大館　いや、お母さん私は飛んでもない誤解をして居りました、少しの間でもあの穩健な武内君を疑つた私は何と云ふ淺墓な男でしたらう、私は豐子を過信して居ました。武内君は潔白です、あなた方に迄、武内君に對して惡感

を擱かせたことは深くお詫びいたします。

美代子　義兄様、では武内さんは、やつぱりいゝ方だつたのでございますか――母様――。

おみれ　さうして、その相手と云ふのは何者でございませうか。

大舘　いや、それは申しますまい、何事も仰有らんで。

おみれ　まア本當に何と云ふ子でございませうねえ、そんな馬鹿な眞似をして、此の先どうするつもりなんですか。あの子は大體が、カッとし易い性質でございますからね、短氣な事でも仕出來しましてはね――いゝえ、死ぬ自分は勝手ですけれども、あなたのお名前が出るやうな事がありましては、全くどうしたらよろしいか、私は實際の所今から途方に暮れて居ります。

大舘　（苦笑して）生きる樂しみを充分に知つて居る女です。であればこそ、家出と云ふやうな思ひ切つた事をしたのです。その點は大丈夫です。御安心なすつた方がよろしいでせう。

（おみれは却つて恥づかしき科。美代子も赤面して下を向く。武内が勢込んで昇つて來る。）

武内　（非常に興奮して）おゝ大館さん、丁度いゝ所でお目にかゝりました。私は只今菊地の奥さんから聞き捨てならん事を耳にいたしました。

大舘　武内君、少しでも君の潔白に對して疑をかけた私は如何樣にもお詫びはする。が總ては氷解したのです。菊地の奥樣の仰有つた事は私の責任です。お母様を咎めずにゐて下さい。

おみれ　申譯ない事を武内さん申しました。お腹も立ちませうが、どうかお許しなさつて下さい、年甲斐もない極りの惡い思をしてこの通りお詫びいたします。

美代子　武内さん、どうぞね。

武内　（拍子拔して）イヤお解り下されば何よりです。美代子さん、あなたもお解り下さいましたか。

美代子　はい――。

春子　叔母さま、私、須磨のお祖母様の處へ行かなくなりましたよ。

おみれ　おや、本當ですか。

大舘　その事に就て私の話を聞いて下さい。武内君もこれから家庭を作られる人だ。まア私の下らない、ざつと話を御飯でも食べながら、お話ししませう。さア御案内しませう。

（と、一同を案内して食堂に入る。長吉昇つて來て食堂へ入る。）

長吉の聲　奥樣々々、おい、ボーイさん、此處に居らした女の方を知らないか、えゝ、喫煙室？

（豐子が喫煙室から出て來る。物思ひの體。長吉出て來る。）

長吉　奥樣、どうも困つた事になつちやつたんです。家にや居ねえんですがね、心當りのあるだけ出先きを聞き合せたんですがね、何だか、から私が邪魔をして居るやうで心苦しいやうな譯なんです。どうしませう、も一遍探して來ませうか。

豐子　もゝいゝよ。

長吉　へえ。

豐子　私は家へ歸らうかしら。

長吉　何ですッて

豐子　何處へ行つたッて仕方がないんだからねえ。

長吉　イヤですぜ、眞心がついて來たんですか！　一晩でも家を明けたものが野面でも家へ歸れや出來ますめえ。

豐子　大丈夫だよ、大館は腹の廣い人だから。

長吉　惚氣ですかい、しかし奥樣位、旦那を召上つてる方はありませんぜ、ちよいと。

豐子　あゝ、何だか、ひどく淋しくなつて來た。

長吉　お酒が足りねえんぢやねえんですかい、そこのバーでドムとかてのをどうです、えゝ、さお立ちなさい。

（豐子立上つて二足三足行きかゝつて不圖止まる。）

長吉　どうなすつたんです。ハキハキなせえな。

（汽車の近寄る音。）

春子　（出で來り）叔母樣、御らんなさい、汽車が着いてよ。

（豐子心付く。大館など一同出て來る。）

豐子　（悔悟をしようとする心持になつて）あなた。

大館　（その意を解し）豐子！

（一同豐子を見る。）

おみね　おゝ豐子、お前はまア。

豐子　（それには答へず大館に）あなた。

大館　（決然として）豐子、お前は今更になつて、そんな姿をして私の眼の前に來られた義理ぢやあるまいと思ふがなア、お前にはもう、良人はないのか。

豐子　あなた、それは。

おみね　（寄つて）豐子、お前はまア何と云ふ性根になつ

てくれたらう、思ひがけなく此處で逢つたのが丁度幸ひだ、私はどうしてもお前に云つて聞かせたい事がある。此處へ、お出で、此方へお出で。

（と、豐子の手を取らうとする。）

豐子　（カッとして心が變り邪險に振拂つて）母様、放して下さい。私はもうあなたなんかに逢ひたくはないんです。もう何も聞く事もなければ云はれる事もない。放して下さい。どうせ私は罪人なんです。お父様の犯した淺猿しい罪はこの私の血まで汚してしまつた。型にはまつた今までの女では到底生きて行かれない私なんです。あたしはもう捨鉢になつて仕舞ひました。どうせ、かうなりや行く處まで行かなけりや止まらない私です！　これから長々と生きたつて、どうせ二十年か三十年です。どうなるものか、私はもうお別れします。

美代子　姉さん、姉さん。

豐子　（振拂ひ）　煩い、お放しッたら！　泥人形のやうなお前に手を觸られても私はゾッとする。お放しッたら。

（と、其儘入る。）

おみね　（同時に）　豐子！

大館　（後見送り）　いや、もう駄目だ。（と憮然として）私達の正しい力では到底あの豐子を救ふ事は出來んのです。あれが豐子の末路だ…………。

（一同深き思ひに沈む――雜音のざわめき。）

――幕――

眞珠夫人（六幕八場）

菊池寛原作

序幕 第一場 唐澤光一の書齋
　　第二場 唐澤光德の居間
二幕目 莊田家の一室
三幕目 圖案協會アトリヱ
四幕目 荒川の月見
五幕目 葉山の別莊
大詰 第一場 瑠璃子の寢室
　　第二場 海岸のテレース

登場人物

唐澤光德
唐澤光一
唐澤瑠璃子
杉野子爵
杉野直也
木下
莊田勝平
莊田勝彥
莊田美奈子
留吉 唐澤家下男
とし 同 小間使
お里 同 乳母
お秋、お千代、お仲トキ 莊田家召使
鴨下文造 同 執事
北小路秀麿 伯爵
堀健吉 海軍中尉
青木淳、田村繁、野崎貞夫 青年
宮部善吉 骨董屋
德川忠、相馬正行、松平俊明、大久保道實 公
達座男優
大御門政子 女優
甲（飯田）乙（保坂）丙（鈴木）丁（井澤）月見の來客
近藤忠夫 醫師
喜太郎 別莊番

宮田伸　圖案協會支配人
白井滲汀、月村杢來・山田春吉・吉村誠一、
石崎甚右衞門　畫家
島田金次郎　協會事務員
花村澄子、三村百合子・岩間喜美子、山口愛子
中田露子　オペラ女優
井上正義　淺草座表方
張、支那そばや
栗屋道明、老僧
了奕、小僧
看板を持つて來る男　二名

序幕

唐澤光一の書齋

唐澤家の離亭とも云ふべき一室。下手渡り廊下を通つて母屋に通じ、上手屋臺に續いた低い生垣の木戸を通つて裏庭に出る。家の造りは、かつては極めて數寄をこらしたものであつたが、その後住み荒されて一向に手入れの行き届いて居ないと云ふ風で、室の中は美術家としての光一が無雜作に住んで居るので、極めて亂雜な所はあるが、かりそめに窓にかけたカーテンの色や、何の氣もなく緣側に置いてある籐椅子とか花瓶とかに、いかにも一見畫家の好みらしい床しい美しさが窺はれる。庭も同じく自然のまゝに色々の秋草が生えて居るが、取りつくろはぬ中にいき／＼した感じがして、生垣の根方なぞに咲き亂れた小菊や、雁來紅や白赤いろ／＼のコスモスの花など賑かな色彩の中に秋だと云ふ氣分が漂つて居る。いづれともなく、木犀の香がする朝、秋の空は高く晴れ渡つて、百舌鳥の聲がつんざく樣にきこえる。

幕あく。

（しばらくすると、下僕の留吉が庭を掃きに來て、物靜かに落葉をはき淸める。所へ、生垣の木戸から、唐澤光一が小薩張した袷に、黑のソフトハットを冠つて手に袂のまゝのいが栗を持つて這入つて來る。）

留吉　おかへりなさいまし。
光一　うん、留守に誰れも來なかつたか。
留吉　誰方もお出になりませんでした。

光一　お父さまは？

留吉　早くからお出かけでございます。

光一　お留守か……瑠璃子は？

留吉　若旦那樣は何處へ行つて入らつしやいましたゞね。

光一　己れかい？　お母さまのお墓へ行つて來たよ。久しく手が入れてないもんだから、大分汚れてた、近い內に一度掃除に行つてくれよ。

留吉　はい、かしこまりました。

光一　まだ石碑も建てずに墓標もあのまんまだ、何とかしたいなア。留吉。

留吉　はい……。

光一　然し墓地の朝はいゝ氣持だね。ほんたうに淸淨な氣持がするねー空が、からりと晴れて本當に空氣が澄んで居る、木立の枝の間を、焚火の煙がすーッと糸のやうに棚引いて居る。何處ともなしに、木犀の香りがして來る。力一杯の聲で百舌鳥が鳴く墓と墓との間に、誰れが植ゑたともなしに、コスモスの花などが咲いて居る、苔の生えた小徑を歩いて居ると、いかにも心の淸らかなお墓まゐりの人に出會す。己れはね、人間の住んで居る世界で墓地程、美しい所はないと思ふね。

留吉　栗を取つてお出になつたゞね。

光一　うん、栗だ！　かへりにたゝき落して來た。己れは栗を見ると、子供の時分の事をまざ／＼と思ひ出すよ、――栗が思ひ出の種か、秋が物を思はせるのか――なア留吉、昔はお互に樂しかつたナッ。（間を措いて）己れは今お母樣のお墓でいろ／＼の御はなしをして來たよ。丈夫で入らつしやる時分には澤山想に思つた事もお別れすると何や彼や不自由のたんびに思ひ出す。己れはまだいゝが瑠璃子なんざあ、どんなにかお母さまが、戀しいんだらうと思ふよ。（ぢつと愁に沈む）

留吉　（しばらくして）若旦那さま。つかん事を伺ふだが、お嬢樣が、あの船成金の莊田樣へお輿入れになると云ふのは本當の事で御座いますだか？

光一　怎うしてさ？

留吉　いゝえ、昨晩も、莊田樣の自動車の運轉手がそんな噂をして居りましたゞ。初めの中は私も何をいゝかげんな事をぬかすだと思つて居りましたが、いろんな事を云ふでなア。

光一　いろんな事とは？

留吉　それが、業腹な事ばかりなんで御座います。御嬢樣

が輿入になるについてはな、先方でこちら樣の御借財をみんなきれいに拂つてくれる上に、十萬とかの御支度金が出るなんて事をぬかすだよ。それだけならまだしも、勿論、少し酒にも醉つて居りましたゞが、昔も今も家がつぶされさうになると、娘を賣れば大抵、片がつくだとふ。華族だらうが、何だらうが、金さへあれば、急にでもなる、今時は金の世の中だ、お前なんぞも貧乏華族の家で庭掃きなんぞして居ねーで、成金の別莊番にでも使つて貰へなんて、私もあんまり癪に障つたゞから、御前さまはお國の爲に皆、お金を失くされたゞ、云はゞ殿さまの御道樂だ。その代り、殿樣が總理大臣にでも御成りになつて見ろ！　その時になつてお前達は家の殿樣の有難味が分るんだと申しますとな、總理大臣は愚か、草履大臣もむづかしい、何をしようたツて金が無くつちや仕方がね、いくら威張つたつて、家の旦那が一言云やアお前の邸なんざあ粉になつちやふだ。唐澤家はもう、旦那樣の手に握られてる樣なものだと申しますだ。若旦那さま、一體そんな馬鹿な事がある譯のもんで御座いませうか、私も馬鹿々々しくツて、本當に腹も立ちましねえでしたよ——。（と横をむいて涙をふく）

光一　留吉、お前の云ふ事は、みんな本當の事なんだよ。
留吉　え？（と驚く）
光一　莊田の家では、わざ〳〵そんな事を云ひふらさして居るんだらう。彼奴は金さへあれば、何でも出來ると信じて年にも恥ぢず、家の瑠璃子を嫁にする爲に、出來るだけの手段を講じて居るんだ。然し如何に金の力が強いと云つて、人間の心まで買ひ取る事は出來ないからね。妹にしてからが、どんな事が起こらうと、あんな男の妻にならうとは思ふまいし、僕としても、たとひ此の家が滅びようとも、妹の體を賣るやうな事は斷じてさせない意りで居るんだ。借金は返せばいゝのだ。まさかに證文に娘を抵當にするとは書いちやあるまいから、ハヽヽヽ。
（と、淋しく笑ふ。）
（處へ、瑠璃子が母屋の方から靜かに出て來る。）
瑠璃子　あら、お兄さま、いつおかへり遊ばしましたの？　妾ね、さつきお父さまがお留守になると直ぐまゐりましたら、丁度お兄さまが御出かけになつた後で御座いましたの、ぢや、いつもの樣に、その花の側へ立ちませう。
（瑠璃子、兄のモデルになる爲に、庭に下りて秋草の咲き亂れて居るあたりに立つ。光一と留吉その後姿た

見て、氣の毒と云ふ心持で首うなだれる。）

瑠璃子　御兄さま、これでよろしう御座いますか。（と形を作る）あらお兄さま、御支度をあそばせよ、又お父さまがお歸り遊ばすと、お兄樣の御仕事が出來なくなつて仕舞ひますから。

光一　瑠璃さん、今日は止さう。

瑠璃子　何故でございますの？

光一　已れは今お母さまのお墓まゐりをして來て、大變いい氣持だが、お前の心はモデルになれるやうな靜かなものでは無い筈ぢやないか。お前がそして、僕の藝術の爲に毎日モデルになつてくれるのはありがたいが、いつも云ふ樣に、僕は物の形や、姿を描くのぢやない。物の魂を摑まうとして居るんだ。今描きかけの繪もお前の美しい姿を寫さうと云ふのぢやない。何物にも汚れない、美しい處女の心を描かうとするのだ。今のお前を描くとしたら、何も知らない一人の乙女には背負切れない苦悶とでも題した畫になつて仕舞ふだらう――今日はいゝ、今も留吉と話して居た所だ。こんな日には、皆してふさぐがいゝんだ。その方が、却つて幸福だらう――人間はいくら付燒双をしたつて、悲しい事は悲しいんだからね。

瑠璃子　（兄の言葉に、たまらなくなつて）お兄さま、ほんとに怎したらよろしいのでございませうね。

（と、吐息をつく。そこへ奥から唐澤光德がイラ／＼しながら、出て來る。三人共丁寧に出迎へる。）

光一　お父樣、一體あの方の事は怎云ふ風になりました？

光德　莊田は初め人を介して、瑠璃子をあの馬鹿息子の嫁にくれいと申出た。私は一言の元に、私の娘は人間並の夫を持たしたいと云うてやると、此度は、息子の嫁にと云うたのは誤りで、實は莊田自身の嫁に貰ひたい、もし承知してくれゝば物質上のいろ／＼の條件を申出たが私は四十五六にもなつて將してそれは正氣の沙汰かと罵倒してやつて唐澤は金の爲に娘は賣らんと云つてやると、あくまで卑しい彼は、俺の債權全部を買ひ取つてその上で私を苦しめ、手も足も出んやうにして置いて、自分の卑しい慾望を遂げようとするのぢや。

光一　お父樣、先方はあゝした人格の下劣な奴で、たとひ此度の難關を切り拔けたにしてからが、又他の方法で新しくやつて來るのは分り切つてゐます。人を人とも思はない程、惡辣な人間に對して、たつた一人で正義の戰をしていらつしやるお父樣の御心持を考へると僕はたまらな

くなるんです。ねーお父様、もういゝかげんに、いまはしいものを全部御すてになつて、親子三人氣もちよく靜な生活を營んで戴く譯にはまゐりますまいか。そりやあお父さまの御氣性としては、此のまゝ引込んでお仕舞ひになるのは、どんなにお辛いかわかりますまいが、世の中の事は戰に勝つばかりが幸福ではないと思ひます。三人で靜かな生活に這入つて、長閑に一生を送つて戴きたいと僕はいつも思つて居るのです。又、先方とても唐澤一家を破滅させるのが目的ではなく、困らして置いて瑠璃子を貰はうと云ふのですから一層勝手にしろと仰有る方が必ずお父さまのお心は休まる事と思ひますが……。

光徳　イヤ私の家を破滅させるのも目的の一つに數へて居る奴が居るんぢや――。

光一　それは誰れです？

光徳　杉野ぢや！

瑠璃子　えゝ？

光徳　彼は實に蟲けらにも劣つた奴なのぢや。お前も知つての通り、唐澤家の先代は御維新の際、勤王の志を持つて居ながら、薩長の風濤に賣られて朝敵の汚名を被て、悶々の内に亡くなられた、その御臨終の床に、「どうぞ敵を打つてくれ！」と仰有つた御言葉を忘れずに、私は三十年貴族院に藩閥政府と戰ひつくし、ありとあらゆる私財を投じても政界の覺醒を計つて來たのぢや！　その苦心は並大抵の事ではなかつた。ある時は生命を的に戰つた事もある、ある時は文字通りに寢食を忘れて居た事もある、世間では或は私の事を政治狂と云ふかも知れない、政爭の爲に妻を忘れ、家を忘れ、貞操無二のお前等のお母さんを苦しめ殺したと云ふかも知らんが、私の心になつて見れば、又涙なきにあらずと思うてくれるものもあるのぢや。その苦悶の中の長い三十年の間、常に私の後にまはつてあらゆる惡策を弄して私を苦しめたのはあの杉野ぢや！　政敵と云ふべく、あまりに淺薄な彼ではあるが、私の體に喰ひ入つて仇をなすものは彼ぢや。杉野の目的は只、營利にある、利己にある、その前には國家もなく、人もなく、恐れ多くも國體をも忘れかねない人間ぢや。此度の事も、元々莊田の卑しい慾望から出た事には違ひないが、それに乘じて、いろ／＼の惡策を獻じて私を苦しめ、私を政界から葬ると同時に自分は莊田から大枚の金を得ようとして居るのぢや。私は莊田の事は、一賤民が金力萬能の夢に浮かれて居るものとして

憐みこそすれ、決して憎いとは思はんが、政敵であるならば、私の意見をにくむべきが至當であるのに、家をにくみ、子供をにくみ、私の全部を燒き盡さうと企てゝ居る杉野を思ふと、私は死んでも死に切れんのぢや！ お父さんはな、たとひどんな事があらうと、お前等の體を賣つて生きようとは思はんのぢやから……。

（と、云ひ終つて潸然と涙を落す。）

光一 お父さんの御心持はよく分りました、然し、問題はさし迫つて居るのではありませんか？

光德 さう、數多い債權の內、一部の期限は今日に迫つて居るのぢや！

光一 今日にですか？

光德 さうぢや！

光一 そして、その金高は？

光德 三萬圓ぢや！

光一 三萬圓？

光德 イヤ驚く事はない、私には私の考へがある。誰れも賴むに足らんとしたら、私は私一人の力で戰ふ丈ぢや！

（小間使登場。骨董屋の宮部が、主人に會ひたいと云つて來たと告げる。）

光德 あゝ左樣か、（と嬉しさうに）すぐ會はう、私の居間に通して置け！

（小間使退場。光德その後から去らうとする。）

瑠璃子 お父樣！

光德 何ぢや？

瑠璃子 どうぞ御無理を遊ばさないやうに、私、私お父樣の御爲ならば、どんな事でも、いとひませんから……。

留吉 御前さま、何の事か私共には一向分んねー事で御座いますが、若旦那樣や、お孃樣の仰有るやうに、なアに皆さんさへ、そのお心持なら、私の田舍へ來て戴いてもどんな事をしても、その日〳〵の事位は御心配はかけねーつもりで居りますだから何でも、たつた一人で案じる事はよくねーだよ。一家の事は、皆で心配して、私もなア長い事御厄介になつてるだから、いゝ事の仲間にや、はづされても構はねーが、心配事の仲間外れにされると私恨めしく思ふだよ！

瑠璃子 留吉！ お前の親切は、私ほんとに嬉しいと思ふよ、お父樣も定めて御滿足だらう、お兄樣も御嬉しからう……私一生お前の御心持は忘れないよ。

光德 イヤお前達の心配も、もう何でもなくなるぢやらう

——目下の難關を切り拔けさへしたら、又必ず、何とかいゝ事が來るだらう、天はまだ、此の唐澤を棄てはせんよハヽヽヽ。

（と、作り笑をして去る。三人は思ひ〳〵の心持で泣く。）

（屋敷町を通る秋らしい物賣の聲が邸の外でする。）

（瑠璃子は父の後が氣になるやうな樣子で母屋の方へ去り、留吉はつまらなさうに庭木戸から去る。光一は室の中の机の前に坐つて瞑想に耽る。）

（しばらくして、杉野の息子の直也が息せき切つて庭木戸から急いで這入つて來て。）

直也　あゝ光一君！

（と、云ひ樣、いきなり室の中へ飛び上つて。）

直也　光一君！　本當か？　え！　本當か？　さあ早くその眞相を知らしてくれ給へ！（と、一息に云ふ。）

光一　杉野か。（と四方へ氣を兼ねて）まあ沈着け！

直也　沈着く所の騷ぎぢやない、早く聞かしてくれ！　本當の事を聞かしてくれ！　凡てはもう本當になつたのか？

光一　杉野！　怎したんだ！　いかに大切な場合ではあるか知らないが、そんなに興奮して居ては僕の云ふ事も分りやしまい、まあ落ついてくれ給へ！（となだめる）

直也　許してくれ給へ！　僕に取つては生死に等しい程の問題なのだ！　くはしい話は後にするとして、とにかく事の成行だけを云つて聞かしてくれ給へ！　光一君、瑠璃子さんは莊田の家へ行く事になつたのか？　それともまだ決らずに居るのか、それだけを僕は聞きたいのだ！　え？　行く事になつたのか？

光一（わざ〳〵沈着いて）もし瑠璃子が莊田の家へ行く事になつたら、君は怎しようと云ふのだ？

直也　何？　ぢや、もう決つたんだな？　よしッ。

（と、外へ驅け出ようとする。）

光一　杉野！　君は何處へ行くつもりなのだ！　僕はいつも君のその感情を恐れるのだよ！　君の心はたとへやうのない程、純なものだ、その清水のやうに清い心には僕はいつも尊さを感じては居るが、熱し易い君の心は常に君の行動をあやまらして、成るべき事もならずに仕舞ふのを、僕は此の上なく殘念に思ふのだ！　君の知つての通り、君のお父さんと、僕達の父とは全く氷炭相容れない間柄で君が此處へ出入りする事さへ秘密にして居るのは、その爲に怎んな、恐ろしい事が出來るか分ないのを

恐れるからだ！　丁度盗人かなんぞの樣に、竊かに祕んで來てすらが左樣だ！　まして大聲を上げて、若しも父に聞こえたら、その結果は將して怎なると思ふのだ！

直也　光一君、皆僕が惡い！　惡かつた！　惡かつた！　もう全部云はなくつても分つて居る！　ねッ僕が惡かつたんだから、許してくれ給へ！　い丶だらう？　ねー許してくれ給へ！　ねー君・何故默つて居るんだい？　あやまつたらい丶ぢやないか、ねー惡いと云つて謝つたら許したつてい丶ぢやないか、光一君！　許してくれないんだね、よし、こんなに謝つてるのに許してくれないんならい丶さ！　許さないんだね、君は！

（と、又感情が昂らす。）

光一　杉野！　君は謝ると云つて喰つてか丶るんだね？

直也　だから惡いと云つて謝つてるぢやないか、い丶かげんにし給へ！

光一　（思はず失笑して）何をい丶かげんにするのだ？　杉野、少し沈着いたら怎だ！

直也　沈着いてますよ、僕は！

光一　さうか！　さあ君の顏を見給へ！（と、小さな鏡を渡して）なア杉野、おちついて居ると云ふのは、そんなに青筋をたてるものかね。

（二人は鏡に對して、互の顏を映し合つて、心の中は淋しいが・だまされたやうな笑を漏らし合ふ。）

光一　（や丶暫くして、しつとりとした調子で）なア杉野ロミオとジュリエットは、お互に父が敵同志の家に生れて戀し合ふと云ふ事だけで、それ自身已に悲劇なのだ、君と僕の妹との間だつて、お互の親が知つたなら、子供に對する愛を忘れて、必ず反對の處置に出るのは、分りきつた話なのだ！　その上此度の莊田のはなしは主として君のお父さんが、獻策した事に依つて、僕の父は苦しめられて居ると信じて居るのだから、よし、莊田との話が破れても、妹と君との間は迚も圓滿に行くなどとは、思ひもよらない事なのだぜ！　僕の恐れる處は、そこにあるのだ！　僕は君の人格を信じ、妹の心を知つて居ればこそ、二人の間に幸多かれと祈つて居るが、二人だけの事情を丈、引きはなして考へて見れば、一番不幸に終るべき要素を多く持つて居る境遇なのだと思ふのだ。その點で君も餘程、考へて貰はなくてはならない。瑠璃子も強い決心を持たなければならない許りか、此際の取るべき道は、只一ッ冷靜に深い熟慮をめぐらす事だ。かり

そめにも輕率な事をしてくれるな、無考へな暴擧に出てくれるな。さつき己れにした樣な態度は、己れでこそ理解もすれば、同情もするが、世の中は僅か人一人の事に向つて、それ程、親切なものぢやないぞ！　いゝか！　分つたか？　己れの云ふ苦言も、一つに君の幸福を願へばこそだ！　君と僕は兄弟も啻ならざる間柄だ！　妹は可愛い……どうだ、己れの心持にもなつて見てくれ！

（と、靜かに說く。）

直也　光一君！　許してくれ給へ！　己れは怎して怎、馬鹿なんだらう！　決しい惡い結果を望むのではないが、己れの性格が、自然と惡運命に飛び込んで行くのだ。君がなかつたら、己れはもう怎なるか分らない。己れの親父は君の一家に取つて、恐ろしい災だ。己れはその血を受けついでは居るが、どうぞ己れだけは憎まずに、憐れなものと思つて、鞭撻してくれ給へ！　光一君！　御願するよ！

（直也、光一の手を取つて淚ながらに賴む。と、母屋の方から瑠璃子靜かに登場。直也と顏を合せて互はハツとなる。三人は暫く無言で居るが、直也と瑠璃子とは無言の内に互の胸と胸とで、色々な事を物語る。）

瑠璃子　（何か心に決するらしくつか〳〵と兄の側に進み寄つて）お兄樣、あの犧牲と申しますことは、どんな場合にも美しい事なので御座いませうか？

光一　さあ――（と考へて）犧牲と云つても、いろ〳〵の場合があるが、己れの考へから云へば、人一人が犧牲になると云ふ時には、それにつながる總ての人が救はれなくてはならないのだ、つまり一人の人間の行爲に依つて、他のものが、皆、現在より、よい立場に這入れなくてはならないと思ふのだ。さもない場合には、その犧牲は無意味になる。つまり同じ事でも犬死とでも云ふ事に終るのだ。（と考へて）さうだ！　犧牲の例にいくつもあるが、その中で己れの知つて居る最も美しい例に「ユヂツト」と云ふ傳說がある、昔猶太のベトウリアと云ふ都がホフエルネスと云ふ敵の大將に取り圍まれたが、その男は、ライオンをさへ、手打ちにすると云ふ程の猛將であつたから、ベトウリアは、破壞と、虐殺との運命がせまつたが、已に、力つき刀折れと云ふ場合で、武力を以て如何ともする事が出來なかつたので、都の人々は、只、もう悲しい運命の命ずるまゝに成るより他に道がなかつた、その時、ベトウリア第一の美人であつたユヂツ

トと云ふ乙女は、その身に羅一枚をまとつて、たつた一人敵陣の中へのり込んで行つて、蝮の樣なホロフエルネスに身を任せて、たうとう敵將を刺し殺した。ユデツトは自分の貞操と、生命とを犧牲にして、幾萬の生命と、貞操とを救つたのだが、これこそ本當の美しい犧牲だと思ふのだよ。たつた一人の身を汚して、國を永遠に救つたのだ。かよわい女の力でさへ、こり固まれば、これ丈の事も出來るのだ。己れはいつでも思ふのだが、凡ての人が救はれる犧牲なら、いかなる生活よりも美しいのだ。又、單純な小さい感情からの犧牲程くだらないものはないのだ。單に犧牲ばかりでなく、人間の凡ての行動は、そこに思慮が伴はなければ、どんな事にも本當の値打はないと思ふのだ！ ユデツトの樣な犧牲なら、どんなものよりも美しいのだ！ が、もしユデツトに戀人があつて、ユデツトの美しい行爲の蔭に死よりも辛い涙をこぼして居るとしたら、猶考へなくてはならないのだ。人間は自分の生きる目的をしつかりと定め、いかなる場合にもその目的を忘れてはならないのだ、枝葉の事に囚はれて本來の立場を忘れるのは、正しい行ひと云ふ事は出來ないのだ、人間は一番よく生きなくてはならない、そして、それの出來ないものは自分自身の不幸ばかりでなく世の中の爲にも、惡い事をした事になるのだ！

直也 瑠璃子さん、何を泣くんです？ え？ 僕は氣になります、もしや、あなたは……。

瑠璃子 いゝえ、そんな事はありません！ 只ね、お兄樣の御はなしで、今までつひぞ思ひも寄らない美しい事があるのを知つて、思はず胸が一杯になつたんですわ。

直也 それならば、よござんすけど、あなたの心が弱くなると、凡ての事は皆悲しい事に了つて仕舞ふのですからね。

光一 そんな心配はするだけ無駄だよ！ さつきも云ふ樣に妹だつて馬鹿ではない、よし又、女の心一ツで思ひたやすい樣な事があつても兄としての僕は決して君達二人の不爲のやうにはしないばかりか、男として不正な事を默つて見遁して置く事も出來ないのだ。たとひ、又僕の力が及ばないとしても、いかに運命だつてそんなに悲慘にはさせやしまいしさ……。

瑠璃子 お兄樣……。

（と、兄にすがつて感謝する。此時、庭の方から留吉が急いで出て。）

留吉　あゝ若旦那様、御前さまが今、此處へ見えるだよっ
杉野樣が居なさらねー方がいゝだ。
光一　さうだ！　恁云ふ場合だ、君は早く歸つてくれ給へ。
直也　ぢや、失敬しよう。僕の運命が恁ならうと、凡ては君にお任せするつもりだから――。
光一　よし、必ず僕が引受けてやるから心配しないでくれ給へ！　そして短氣を出すなよ。忘れても感情に走るなよ。
直也　あゝ僕はこれ以上決して君に心配をかけるやうな事はしないから、何卒安心してくれ給へ！　さよなら！
光一　瑠璃さん！　（と、何も云へなくなる。）
瑠璃子　直也さん！
（二人は、ぢつと顏を見合せ別れを惜しんで直也立去る。と奥から光德は心持よげの面持にて登場。三人は居ずまひを直す。）
光德　あゝ、皆喜んでくれ！　唐澤の家は救はれたよ！
光一　さうですか、莊田の方から何か云つてまゐりましたか。
光德　いゝや、莊田の方は依然として強硬ぢやが、いかに強硬でも、最早や何にも恐れる事はなくなつたのぢや。光一、これを見てくれ！
（と、三萬圓の金を出して見せる。一同、びつくりする。）
光德　今、莊田の家へ電話をかけさせたから、すぐに使が來るぢやらうが、とても返へせんと思ふとる私の手から三萬圓を返へしたら、どんなにびつくりするか。私はそれが愉快ぢや、莊田の失望より杉野の面が見てやりたい。私の本當の心持から云へば、此の金を杉野の横面へたゝきつけてやりたいと思ふのぢや！　瑠璃子、よろこんでくれ！
（瑠璃子と留吉よろこぶ。が光一は一人深い考へに沈む。）
光德　光一、お前何故よろこんでくれんのぢや？
光一　お父さん、僕には恁しても喜ぶ事が出來ません！
光德　何故ぢや？
光一　お父樣、私はそのお金の出所を明かにして戴かない以上は、恁しても喜ぶ事が出來ません！　お父さん、そのお金は、恁して御作りになりましたか？　誰れが持つて參りましたか？

光徳　…………（何か云ひ淀む）

光一　お父さま、私から申上げませう、そのお金は、道具屋の宮部が持つて參つたのでせう？

光徳　さうぢや！

光一　そして、怎云ふ理由で持つて參りましたか？

光徳　それは私の秘藏の幅を賣りはらつたのぢや！

光一　お父さん、秘藏の幅と仰有ると何でせう？

光徳　光一、お前は何の爲に私にさう鋭い質問の矢を放つのぢや！　一家の爲に主人が家寶を賣つて金に代へるのに何の不思議があるのぢや！

光一　お父さん、私は畫家です！　金の價値は知りませんが、家寶の中で藝術として立派なものは知つて居ました。今日迄永い間、政治の爲に、一ツ二ツと御賣りになる度に私はいつも淋しい氣持で見て居ましたが、もう私の家には賣るべき品は一つも殘つては居ない筈です。お父さん、一體何が三萬圓の價値が御座いましたか？

光徳　おやから、今日迄賣るに忍びなかつた家寶の一ツを賣つたのぢや。

光一　その家寶と云ふのは、よもや、あの夏珪の畫では御座いますまいな？

光徳　あれぢや。あれを手離したのぢや。

光一　あゝ、やつぱりさうだつたのか？　お父さん、私はさつき宮部が來たと聞いた時に、云ふに云はれぬ不安を感じましたが、やつぱりさうだつたのだ！　お父さん、あなたは、それでお恥ぢになりませんか。

光徳　何故ぢや。

光一　あれは私の家のものではありません、木下が持つて來たのです、私は知つて居ます、お父さん、それでもお恥ぢにはならないのですか？

光徳　光一、お前は親に向つて何たる事を云ふのぢや、あの畫は木下のものには違ひないが、木下が私にあづける時に、何年でもいゝ預かつてくれい、いつまでも私に眺めて居てくれいと云ふ意味で置いて行つたのぢや。云はば、年來の恩義に感じて木下が、私によこしたものと云うても差支ないものぢや、まして木下は私の子分ぢや、家の人間も同然ぢや。よし己れが彼のものをどうしようと、少しも恥ぢる所はないのみならず、私は火急の場合宮部から金の融通をさせるかたに、あの繪を渡したのぢやから、木下が返へしてくれと云へば、いつでも返へしてやれるのぢや、私は一家を救ふ爲に、一時の融通をし

たに過ぎん、不正でも何でもない！

光一　いゝや不正です。不正です！　たとひ、一時の融通でも他人の品を無斷で人手に渡すのは不正です。

光德　そんなら、もし彼が私の一家の破綻を見るに忍びないとして、あの畫を私に奉つたとしたら怎ぢや！

光一　それは木下の自由意志です。こちらから強ひる事は出來ません！　まして先方の意志も訊かず勝手に品物を處分するのはよくない事です。何故一應木下に御相談なさらなかつたのですか。

光德　馬鹿ナ！　問題は火急に迫つて居るのぢや。金を得なければ私の名譽も地位も共に滅んで仕舞ふのぢや！

光一　そこです！　お父さん、それでは人間は自分の地位や名譽を保護するためには、不正な事を敢へてしても、かまはないと云ふのですか？

光德　そんならお前は、私の家が滅んでもかまはんと云ふのか。

光一　不正な事に由つて、一時の安泰を得るよりも、むしろ、潔く亡んでも、心の平和が保つならば、それに越した幸福はないぢやありませんか。お父さん、その金は、おすて下さい。そして、潔く滅びませう。

光德　私は怎しても、こんな些細の事で三十年間の苦心を凡て水泡に歸して仕舞ふ事は出來ん、大義親を滅するとさへ云ふのぢや。一國の政治の前には區々たる不正など顧る暇はない、唐澤光德は、まだ老いん、私はあく迄も奮鬪する！

光一　それでは、怎しても私の申上る事を御用ひにはならないのですか？

光德　一つの國が滅びる時、その國と運命を共にする者を稱して忠義の士と云ふのぢや、國、是を批判する前に默して國運に殉ずる者が本當の男子と云ふものぢや、今や私の家は將に悲運のどん底に居るのぢや、私と共に嘆き私と共に憂ふものが、ほしいのぢや！

光一　お父さん、私は唐澤の家を思ひ、御父さん初め妹の身の上も思へばこそ、潔く亡びようと云ふのです！

光德　私は一家をもり返さうとするのぢや！

光一　此際、亡びると云ふ事が却つて新しく生きる道であつたとしたら――。

光德　もういゝ、〳〵。私の家は私が支配する、唐澤家の運命は、私、私一人の肩に背負つて居ればいゝのぢや。

光一　分りました。然し重ねて申しますが、お父さんのな

された事は、正しい事とは思つては居らつしやいますまいな？

光德　正しい事ぢや！　正しい事ぢや！　私を正しくないと云ふ奴は出て行け！

光一　何うしても僕の云ふ事はお分りにはなりませんか？

光德　分らん！　私は、私一人ぢや！　反對する者は皆出て行け！（と激昂する）

光一　出ませう！　いさぎよくお暇を戴きませう！

留吉　若旦那、そんな事を云はつしやつて……。

光一　いゝや、私は決して怒つてなぞ居るのぢやない。只お父さんの御身の上を案じて居るのだよ。

光德　私の身の上を案じるものなら、私と行動を共にすべきだ！

光一　然し、不正に與する事は……。

光德　ぢやから出て行けばそれでいゝのぢや！　たとひ、親と子でも、心の一致しない者は私の敵ぢや！　お前はお前の道を行け！　私には私の天地があるのぢや！

光一（深く決心して）分りました！　では御暇します、瑠璃子、行かう！

光德　瑠璃子を何故連れて行くのぢや！

光一　お父さんは今迷つて居らつしやるのです！　兄として大切な瑠璃子は御預けして置く事は出來ません！

光德　瑠璃子は私の娘ぢや！　私の苦心の一部は瑠璃子を愛する爲なのぢや、これは瑠璃子はよう知つて居る筈ぢや……なア瑠璃子、お前は私の心はよく知つて居てくれるな！

瑠璃子　あゝ、私どうしたらいゝのでせう。（と泣く）

光德　何も案ずる事はない！　光一は私を棄てゝも、私はお前の爲に、私の體の全部をも捧げる氣ぢや！　私の苦しい心の中を察して、お前だけは、この老人を責めんでくれ！

光一（たまりかねて）お父さん！　私は……。

光德　もういゝ。わたしはもうお前から聞く事はないのぢや！

（とにべもなく云ひ放つて荒々しく奥へ去る。三人その後を見送り、光一は詮方ないと云ふ決心の色を見せて、帽子を手に取り上げて出ようとする。瑠璃子悲しさに堪へかねたやうに。）

瑠璃子　お兄さま——。

（と、呼ぶ。光一ぢつと瑠璃子と顏見合せる。留吉と

三人、いづれも深い溜息をつく。)

——幕——

第二場　光徳の居間

庭に面した座敷。

第一場と同じく昔は堂々たる建築であつたが、かなり住み荒され、廂などは所々板が落ちて居る。正面から奥へかぎの手に折れた正面の縁のつきあたりの鉢前には、芭蕉の葉が青い色を見せて、その奥は庭つゞきに家のまはりを、廻れるやうになつて居る。座敷の中には棚、書架凡てが唐風の物で床の間には大幅の書が掛けて、刀かけには長い拵へつきの刀がかけてある。

幕あく。

(と、奥にて光徳がいらだゝしげに手をたゝく。「さと　さと誰れも居らんか、皆どうしたんぢや」と云ふ聲聞ゆ。再び手をたゝく。)

(暫くして、小間使登場。つゞいて奥より光徳登場。兩人座敷のまん中にてパッタリ行き合ふ。)

光徳　あんなに呼んどるのに聞こえんのか。

小間使　どうも恐れ入りました。(と詫びる)

光徳　さとは何處へ行つた、里は……。

小間使　お里さんは……。

光徳　をらんのか。

小間使　ハイ。

光徳　留吉も居らんのか。

小間使　ハイ。

光徳　無斷で邸を出るのは怪しからん、瑠璃子を呼べ！
　瑠璃子を……。

小間使　ハイ。

(と、退場。暫くして瑠璃子登場)

光徳　瑠璃子、里も留吉もをらんさうぢやが、お前使にでもやつたのか。

瑠璃子　いゝえ、何處へも使になぞ出しは致しません。

光徳　そんなら何處へ行つたのか。

瑠璃子　さア何處へ参りましたか。

光徳　お前も知らんのか、一體召使が主人に無斷で邸を出ると云ふ法はない、お前もよく注意せんといかん。

瑠璃子　どうも恐れ入りました。

(所へ、恐る／＼乳母お里登場。)

瑠璃子　あゝお里、お前まア何處へ行つて居たのだい？

無斷で邸を出るなんて、お前にも似合はないぢやないか。
お里　恐れ入りました
瑠璃子　留吉も一緒なのかい？
お里　いゝえ一緒ではございませんが、只今御門の處で一緒になりました。
（と云ふ處へ留吉庭の方から登場。）
留吉　ハイ何か御用でございましたか。
光德　二人とも主人に無斷で何處へ行つて居た。
（二人顏を見合せて云ひ淀む。）
光德　何處へ行つて居た。（と、鋭く問ひつめる）
瑠璃子　（二人の一層もぢ〳〵するのを見て）本當に何處へ行つて居たのだえ、お父樣はさつきからどんなにお召になつたか、分りやしないのだよ、古くから居るお前達からそんな、ふしだらな事をしては他の者のしめしがつかないではないか、早く本當の事を云つてお父樣にお詫びを申上げておくれ、お里何處へ行つて居たのだよ。
お里　…………。
瑠璃子　留吉、何處へ行つて居たのだえ。
留吉　…………。
瑠璃子　二人共、どうしたんだよ。（とぢれる）

光德　もういゝ、そんな事は聞きたくない、召使までが、私の自由にならんのか。（と行きかける）
瑠璃子　お父樣、（と止める、光德ふりはらつて奥へ去る。）
瑠璃子父を見送つて二人に向ひ）本當にどうしたと云ふのです、お前達はお父樣のお氣にさからつて、それで濟むと思ふのかえ、知つての通り此頃のお父樣は色々の御心配があつて、夜もオチ〳〵げしならない程なのだよ、その上にお前達までが、御心配をかけては、あんまり勿體ないではないか、こんな時にはお兄樣でも居て下さつたらどんなにか力になるんだけれど……ねえ乳母や、お願ひだから私に此の上の心配をかけないでおくれ。
お里　お孃樣、私は何でお孃樣に御心配をかけたい事が御座いませう。
留吉　わしだつて、そんな氣はこれつぱかりもありやしねえだよ、もつと早く歸つて來ようと思つたが、順番で待たされたものだで、つい、こんなになつて仕舞つたゞよ、折角行つたゞから一刻も早く安心していと思つたのが悪かつたゞよ。
瑠璃子　何處へ行つて來たと云ふのよ。
お里　お孃樣、これをごらん下さいまし。

（と、おみくじを帯の間より出す。）

瑠璃子　（おみくじを見て）二十七凶……願ひ事かなへ共おそし、走り人歸らず……。

留吉　お嬢樣、若旦那樣はとてもお歸りにはならねえだよ。

瑠璃子　えッ。

お里　若樣があんな事になりましてから今日はお歸りになるか、お便りでもあるかとお待ち申して居りましたが、今日でもう三日にもなりますので、あんまり心配になりましたので、人がよく當ると申しますから、若樣の事を傳通院へ占を見て貰ひに參つたのでございます。さうすると留さんもまゐつて居たので御座います。

留吉　わし、お里さんの顏を見た時だまつて來たゞから、かくれようと思つたゞ、矢張り同じ心配に違ひないと思つて、わしの方から名乘つて出て實は二人で泣きましただよ。占の表では若旦那樣はお歸りにはならねえだよ。

（と泣く。）

お里　お嬢さま、どうしたらよろしいで御座いませう。

（と泣く。）

瑠璃子　いゝえ、そんな事はないよ、お兄樣はキット歸つてゐらつしやるよ、そんな心配をしない方が好い、お前達が泣いて居る間に、今にも歸つて入らつしやるかも分らないではないか。

お里　でも占の申しますには――。

瑠璃子　まアお待ち、ねえ乳母やア、占なんてものはね、みんな迷信と云ふものだよ、自分の身がどうなるかさへ人間には分らないのだから、まして人の身の上なぞは、決して分るものではないよ、占なぞでクヨ／＼するよりも、みんなしてお兄樣を探し出して歸つて頂けば好いぢやアないか――。

留吉　でも居らつしやる處が皆目知れなけりや、探すあてもつかねえだよ。何處に居らつしやるつて事が分りさへすりや、おらア金の草鞋でもはいてお迎ひに行くだが、雲をつかむ樣な、はなしぢや、只心細くなるばかりだよ。小さい時、只の一ぺんも他人の飯を食つた事もねえ方だで、さぞ不自由してござるだらうと思ふと、わし、我慢にも泣かずに居られねえだよ、お嬢さま、わし若旦那に會ひていだよ。

瑠璃子　私だつてお目にかゝりたいよ。ア……お兄樣は何故、歸つて來ては下さらないのだらうね。

（三人悲嘆にくれる。處へ奥から光徳登場。三人涙を

かくす。）

光徳　お前達は何故そんなに、ふさいで居るのだ、莊田の方の金はもう返へして仕舞つてもう目前に迫つた心配はすつかり失くなつて仕舞つたのぢやないか、私の體の中には新しい力が漲つて居る、これから又大活動をしようと思ふとるのぢや、お前達も喜んでくれなくてはならないぢやないか、お前は又兄さんの事を考へて居るのか、心配するナ、兄様もやがて、目がさめるだらう、其時には私の本當の心の中がわかるのぢや、私は決して光一が憎いのではない、他人の飯を食ふ事は光一に取つて此の上ない修業になる事なんぢや、ぢやから、瑠璃子、お父様は喜んで居るんだ、お前も喜んでくれ、何故晴々しい顏をしないのだ。

瑠璃子　お父様、私はどうも兄様の仰有る事が本當の樣に思はれて仕方が御座いません、さうしてお父さまのなすつた事が皆んないけない事のやうに思はれます。私さう思ひながら、お父様のお顏を見ると、何んだか恐ろしい樣な氣がしてなりません、お父様本當にどちらが正しい事で御座いませうか。

光徳　世間を知らない純粋の兄様や、お前には人の行爲の表だけが見えて其の奥に潜んだ苦しい立場を洞察する力を缺いて居るのぢや、ものには總て表裏がある、お前はお父様のする事を只、默つて信じて居てくれゝば好いのだ、たとひどんな事があらうとも私がお前を愛する心には毛程の僞りもないのぢやから――。

（瑠璃子父の言葉が腑に落ちないと云ふ思入の處へ、木下急いで登場。お里、留吉退場。）

木下　おゝ閣下、お在宅でございましたか、實はお留守ではないかと思つて心配しながら參りましたが、やアこれで安心いたしました。（と汗をふく）

光徳　オ、木下か、いつになく非常に慌てゝ居る樣だが、一體どうしたんぢや。

木下　實は私の一身上に飛んでもない事が起りまして…。

光徳　日頃、沈着なお前がそんなに慌てゝゐるのぢやから恐らく重大な事であらうが、まア落着け！　膝とも談合と云ふからのう、老人の私でも又何かいゝ智慧があるかも知れん、久しぶりぢや、飯でも食ひながらゆつくり聞かうぢやないか、瑠璃子、何か木下の好きなものでも取つてやれ。

木下　（光徳の言葉を抑へて）閣下、今日はそれ處ではご

ざいません、斯うして居る間も氣が氣でない様な始末でございますから、御馳走は又の事に御願ひいたしませう――閣下、實は……。

光徳　まア落着け、瑠璃子、そんなら紅茶でも淹れて來てやれ、木下はたしか、甘いのが好きだつた筈だ、甘くして來てやれ。（瑠璃子退場）

光徳　木下、本當に久し振りぢやつたナ、私はいつかお前にゆつくり會つて話したい事もあるが、今日はお前の話を聞かう、一體どうしたんぢや。

木下　實は、今日はいつぞや御預けして參りました、夏珪の軸を頂戴に參りました。

光徳　何、夏珪の軸ぢや。（と吃驚する）

木下　ハア恐れ入りましたが早速頂戴を願ひたいのでございます。

光徳　（平氣な態うで）　突然あの軸が怎して要るのぢや、お前はあれを置いて行つた時に、何時迄でも好いから預つてくれと云つたぢやないか、又と得難い名畫ぢやから、私も迷惑ぢやと云ふのを無くなつても好いからとまで云つて置いて行つたのぢやから、私はもうお前がくれたのぢやとばかり思ふとつたよ。

木下　閣下……。

光徳　ハッ、、、そりや冗談ぢやが取りに來るなら何故前以つて云つてくれんのぢや。

木下　それが實に意外の事で實は閣下にすらも申上げにくい事情が伏在して居りますのであの畫の有無は私の一身上の浮沈にまで關する様な場合なのでございます、閣下甚だ恐れ入りますが、早速頂戴さして頂きませう

（と、ポケットから風呂敷を出す。）

光徳　まア待て、あの繪の有無がお前の一身に關するとは一體怎したのぢや、金に困つて賣らうとでも云ふのか。

木下　いゝえ、さうでは御座いません。

光徳　そんならどう仕様と云ふんぢや。

木下　閣下、もう何もかも申上げませう、あの繪は私の所有ではないのです。

光徳　何ッ。（と驚く）

木下　しかも私はあれは無斷で持出したのです。

光徳　何、盗み出したのぢや。木下、お前は怎してそんな馬鹿な事をしたのぢや。

木下　此れ以上、申上げる事は何卒御許し下さい。詳しい事情は改めて申上げるとして、とにかく品物を返して頂

きませう。閣下、私の立場は寸刻を爭ふのです、では恐れ入りましたが何卒……。

光徳　木下、何故お前はそんな事をした？　それならそれと何故前以つて私に一言、云はんのぢや。

木下　私に對する御叱言は改めて伺ひますとして、目下の私の窮狀を、お救ひ下さるのがお情けでございます。

光徳　木下、お前の窮狀は察するが、あの繪は暫く待つて貰へまいか。

木下　何故でございます。

光徳　實はあの繪は私の手許に無いのぢや、イヤ何も驚く事はない、暫くの間、待つて貰へば私の方から、きつと屆けてやる、ナア木下それでいゝだらう？

木下　そりや困ります。

光徳　然し長い間待てと云ふのではない、明日になれば返へすのぢや、それでも困ると云ふのなら今晩でも好い、とにかくお前に迷惑をかけんのぢやから、又改めて來てくれ！

木下　然し先方は非常に迫つて居るのです、一刻遲れゝば一刻だけ私の信用も立場もなくなるのです、閣下、どうか私をお助け下さい。

光徳　木下、お前もわからん男ぢや、私は今、手許に無いから又來てくれと云ふのぢや。

木下　それは分つて居ります。

光徳　分つて居るなら何故歸らんのだ。

木下　（キッとなつて）閣下、私は自己の浮沈に關する瀨戸際に立つて居ります。くどい樣で恐れ入りますが、それなら私が先方へ取りに參りませう、では御名刺なり、御手紙なりと頂戴して參りませう。

光徳　イヤ、然し少し遠方ぢやから……。

木下　どんな遠方でもかまひません、どうか御電話でも…。

光徳　くどい！　木下、貴樣は私を信じられんと云ふのか。

木下　それでは私の立場が怎なつても構はんと仰有るのですか。

光徳　そんな事はない、然し木下、お前はあの畫を持つて來た時に何と云つた、何時までゞもいゝから、預かつてくれイと云うたぢやないか、そして無理やりに預けて行つて――。

木下　然し私は他所へおやり下さいとは申上げませんでした。

光徳　貴樣は私に向つて何と云ふ口をきく。私はたしかに

預つて居る、預つて居る以上は私の自由ぢや！
木下　分りました、そんなら先方の御名前だけを伺つて歸りませう、あの畫は何處にございますか、何と云ふ家に御座いますか。
光徳　そんな事を云ふ必要はない！
木下　閣下！　仰有れないのですか？
光徳　默れ！　もう何も云ふ事はない！
木下　そんなら私の、私から申上げませうか、あの畫は宮部の手に渡つたのではありますまいなア。
光徳　（無言の裡に愕然とする）
木下　何卒眞實をお聞かせ下さい、私は昔の御恩は忘れませんが、閣下の爲に縄目の恥を受けるには忍びません。先方は私を訴へようとして居ります。
光徳　先方とは誰れぢや、あの繪の持主は誰れだ！
木下　莊田勝平です。
光徳　莊田か……。
（と、光徳は最早、いかんとも仕がたいと云ふ風に、ガツカリする處へ小間使登場。）
小間使　御前さま、警視總監から御電話でございます。
光徳　何？　警視總監から？　おや？　何だ？　用向を聞け！
小間使　さう申上げたのでございますが、是非とも御前様に御自身電話口に出て戴きたいとの事でございます。
光徳　あゝ、うるさい奴だな。
（と、云ひながら奥へ去る。木下は、しすましたりと云ふ風に金口の煙草などを出して、ゆるやかにその煙を吐いて居る處へ、半ば狂亂のやうになつた光徳は、ころげ込むやうに室に這入つて來て。）
光徳　木下、貴様は、よくも私を罠にかけたな！　あゝ凡て罠だ！　長年の恩義も忘れ果てゝ、一體貴様は私を怎しようと云ふのだ！
木下　一體怎したと云ふのでございます？
光徳　怎も怎もない！　莊田の畫を私が他へ無斷で賣つたと云ふので莊田は横領の訴を私に對して起したと云ふのぢや！　それに對して私の身分を思つて總監はわざと私に向つてその眞相をたしかめたのぢや！
木下　然し、それは――。
光徳　默れ、貴様は人非人ぢや、畜生ぢや、私を罠にかけようとしてあの畫を持つて來たのぢや、最初から、たくらんだ事なのだ、私の周圍は凡て莊田の手に買收され、

味方と信じて居た者は皆敵になつた、その中でお前ばかりは本當に私の片腕ぢやと信じて居たのが私のあやまりぢや、あゝ人間の心が淺猿しい、私はどうすれば好いのだ！

（此の話の中にあまり聲が大きいので、庭の方から下男の留吉がそつと出て二人の樣子を窺つて居る。）

光徳　木下、貴樣は私の膽に繩をかけさして、それで樂しくて樂しいのか？　莊田もにくい！　宮部もにくい！　然し己れは貴樣がにくい！　貴樣の心が殺してもあきたらん樣にくいのぢや！（木下は行きかける）　待て！

木下　御用ですか？

光徳　貴樣は斬つて捨てゝもいゝ奴ぢや！

（と、云ひ樣いきなり床の間の刀掛から刀を取る。）

木下　何をなさる！　氣でも狂はれたのですか？

光徳　何？

木下　閣下、あなたの不正な心が罰にかゝつたのですぞ、あなたさへ正直なら、決して罰にはかゝらないのです！　自ら招かれた罪惡で他人を恨む事はない筈です！　では御暇します！

（と、行きかける。光徳我慢出來ずに斬つてかゝる。木下逃げようとしてあはやと云ふ時留吉出て、光徳を止める。）

光徳　誰れぢや！　邪魔する奴は誰れぢや！

留吉　私です、留吉です！　御前樣まあ待つて下せい、まあ待つて下せい、あんな獸を斬つては刀の汚れになりますぞ！　お邸に野良犬が迷ひ込んだら追ひ出すのは私の役目でがす、場合に依つたら叩き殺すのも私が一人で引受けますだ、御前樣、御手が汚れますだ、御刀が汚れますだ！（と光徳を止め、木下に向ひ）やい木下、貴樣よく物を考へて見ろよ、（と涙をこぼして）貴樣は昔の御恩を忘れたのか！　忘れもしねーだ！　お前が田舍から出て來た時の姿はどうだつた、まるで乞食か何ぞの樣に冬だと云ふのに袷一枚でブル／＼ふるへてやつて來たのを御前樣は氣の毒がつて、とても出來ねー世話までして下すつて、どうやら人間らしくなれたのは皆此處の御家の御蔭でねーか。その時分にやあ、己れとも本當の朋輩でお前が奧庭を掃けば、己らあ、お玄關の前を掃く、お前が使ひに出れば、己れは雜巾がけをして居たよ。その時にした、お前は學問して立派になる人間だと思つて辛い仕事は皆、己れがしてやつて、年若だから、本當の

弟の樣に己らアお前の面倒を見てやつたつもりだ！　その後、お前は學校さ行く樣になつても、己らあ、やつぱり庭掃きだつた！　お前が役所へつとめて、洋服を着て歩く樣になつても留吉は庭掃きだつた！　御前樣が司法大臣になられた時に、お前は秘書官ちう、えらい役について、恐ろしく立派になつた時にも、やつぱり己れは庭掃きだつた、そして旦那樣のお使で、お役所へ行つた時廊下の所にお前が居たので、なつかしいと思つて、ツカツカと側へやつて行くと、えらく番人に叱られて、あの方はお前なぞが、とても口なぞ利けるやうな身分の低い御方ぢやねえ、と云はれた時、何だ子供ッ子がとは思つたが心の中では、己らあお前の出世を喜んで思はずほろほろ／＼泣いたつけよ！（涙を拂つて）その己れはやつぱり今も庭掃きだが、昔の心と變らずに忠義をつくしてるだが、段々出世したお前の心は、段々獸に近くなつて、御恩になつた御前樣に、こんな惡い事をし向ける樣になつたんだな！　出世が何だ！　身分が何だ！　いくら洋服を着て威張つたつてな、お前の心は己れの前にはボロ同然だ！　汚らはしい奴だ！　きたねー奴だ！　なア己らさあ己れの云ふ事が分つたら改心してくれ！　なア己らあこんな事云ひたかねー、頼んで濟むなら己らあ頭も下げるだよ、なア改心してくれよ！

木下　改心とは何だ！　それは、こつちで云ふ事だ、人の物を無斷で賣つてそれで己れを斬るとは何たる氣狂だ！

留吉　それでは、どうあつても御前樣に面目の恥をあたへるとぬかすだか？

木下　自ら招かれた罪の報はいかんとも致し方がないんだ。

留吉　何ッ？（と、いきまく）

光德　（留吉を制して）待て！　木下を斬らうとしたのは私のあやまりだつた！　凡ての罪は己れ一人にあるのだ。己れは光一の言葉が今更の樣に思ひ當る。くづれかゝつた家を助け、瑠璃子を助けようとした事は實は私の力に餘つたのぢや、わなにかゝつた鳥はもがけばもがくだけ醜い姿をあらはすのぢやから、私は法の命ずるまゝに、靜かに罪に服したい、留吉、お前も我慢してくれ、凡て己れの愚が生んだ事ぢや！（と深く決心して端坐す）

（處へ、奥から瑠璃子出て。）

瑠璃子　お父樣、妾もう何もかも諦めて、やう／＼決心がつきました！　私、莊田へ參りませう！

光徳　えゝ？（と驚く）

瑠璃子　私はねー、私を愛して下さる御父樣の御體がこのまゝで濟む樣に又お兄樣の藝術を完成さしてあげたいと思ひます、そして、それが私の體で出來る事なのですから私、凡ての人を救ふために此の身を賣つて皆の犧牲にならうと思ひますわ、さつきも、ふとそんな氣がした時、犧牲と云ふ事をお兄樣に伺ひました。お兄樣から猶太の國のベトゥリヤの町が敵に圍まれて仕舞つた時、貞操と生命とを棄てゝ、敵將を殺したユデットと云ふ乙女のお話を伺ひました、私もそのユヂットになつて唐澤の家を救ひたいと思ひます、お父樣、どうぞ私を莊田へやつて下さい――（と乳母を見て）あゝ乳母や、妾莊田へお嫁に行くよ！　誰れにもまして私の事を案じてくれるお前の心ではもつと〳〵いゝ所へ私をお嫁にやりたいと思ふだらうけれどね、思ふやうにならないのが、世の中だと私、もうつく〴〵さう思つたよ！　私もねー初めの中は自分の願はキッと叶ふと思つて居たけど、本當は人間の願は、みんな叶はないのかも知れやしないのだよ、ねえ乳母や、お前はさぞかし不足だらうけど、そんな家へ自分から進んで行く私の心にもなつてくれて、氣に入るまいけど我慢しておくれよ！　ねーお父樣の事を、お願ひするよ！　それからね、私が居なくなつたらばお父樣にお願して何處に居らつしやるかお兄樣を探し出してお父樣のお側で暮して戴くやうに、お前からよくお願しておくれ！　ねッ、わかつたね！　賴むよ！　留吉、私の心は分つたらうね、決して取りのぼせた事なんぞしないでおくれ！　私は生きて居ながら心は死んだ氣でお嫁に行くんだよ。それも皆、お家の爲になるんだからね、私にもう此の上の心配をかけないで、いつまでも丈夫でお父樣のお世話を賴むよ！

（と、乳母と、留吉との手を兩方の手で握りしめながら云ひきかす。二人涙ながら、うなづく。）

光徳　瑠璃子、已れはもう何も云はれない！（と手箱の中から懷劍を出して）これはな、お前のお母さんが家へ來る時に持つて來た守り刀だ。父と思ひ、母と思つて萬一の場合、お前の體の守りにしてくれ！　思ふ心に僞りはなかつたのぢやが、した事がよくなかつたのぢや！　瑠璃子、どうぞお父さんを恨んでくれ！　憎んでくれ！　已れはそれがせめてもの滿足ぢやよ！

瑠璃子　（たまりかねて）お父さま！

（と、父の胸に縋りついて泣く。光德しつかりと瑠璃子を抱いて上を向いて泣く。木下を除いて一同悲しい思入れにて。）

――幕――

二　幕　目

莊田家の一室

一見成金の邸宅と見える華美を盡したる和洋折衷の廣間。正面障子の外同じく金にあかして造り上げたる庭園の一部が見る。庭に池ありて池の向う色々の奇石を以て積み上げたる山あり。山の上より白糸の如き幾筋かの瀧、瓏々と響きをなして流れ落ち、山の上池の汀には燃ゆるが如き紅葉、綠の間に美しく見ゆ。部室の中には珍しき骨董の類、所せまきまでに置きならべられ、床の間には大幅の書、鴨居には立派なる書の額をあぐ。正面の壁には文展出品畫の如き縁を取りたる大なる新畫をあぐ。部室の中央には丈高き紫檀の大卓を置き、廻りには四五脚の肱かけの籐椅子を置く。部室の隅には時代模様のたれぎぬをたれ、欄間にはステインドグラスをはめたるなど、一ツ〳〵はそれ〴〵の價あれど全體として何等の調和もなき贅澤なる室内裝飾よろしくある。

幕あく。

（と、莊田の息子勝彦、正面から忍ぶ樣に出で來り、四邊を見廻して正面の新畫に向つて墨を塗り初める。一筆二筆と塗つては眺め、又塗り初め、いかにも興味があるらしい樣子をする。）

（暫くして召使の女出で來り、此の態を見て驚く。助けを呼ぶ。大勢の女中出で來り、各々勝彦の暴行を止めようとする。勝彦は墨筆を持つて近寄る女中の顏に墨をつけようとする。女中逃げる。此の科いろ〳〵ある所へ、美奈子出で來り此の有樣を見て吃驚して急ぎ勝彦の傍に寄り、いろ〳〵なだめすかして筆を取り上げる。その時には畫の表はいゝ加減によごれて居る。勝彦が筆を取り上げられたので、女中共安心して側に寄り、皆々勝彦の廻りに立つ。勝彦皆を見て樂しさうに聲高に笑ふ。）

美奈子　どうすれば斯うおろかだらう！（と失望の表情に

て）勝彦さん、貴方どうしてこんな、いたづらをなさるんです！

勝彦　馬鹿ぢやないよ、僕はねえ、少し憤慨してゐる事があるんだ。僕はお父様に對して反感を持つて居るんだよ。

美奈子　兄様、今日はねえ、何よりお目出たい日なんですよ。

勝彦　それだから僕は怒つてるんだよ。

美奈子　どうしてゞす、お目出度い日に怒るなんて、をかしいではありませんか。

勝彦　皆にはお目出度くつても僕にはお目出度くも何ともないんだ。ねえ美奈子、瑠璃さんは始め僕の奥様になる約束だつたんだ。それを、お父様が横取りしたんだ。

美奈子　いゝえ、そんな事はありません

勝彦　さうでなければ何故今日の披露會に僕だけ殘したんだ

美奈子　それはねえ――。

勝彦　知つてらア、お父様は瑠璃子さんを僕に取られるのが怖いからだ。ねえ美奈子、僕は好い男だらう？

美奈子　えゝ、さうですよ。

勝彦　さうか、お前にもやつぱりさう見えるかなア。

勝彦　（女中共笑ふ。）何か可笑しいんだ。お前達も僕の事を綺麗だと云つたぢやないか。

美奈子　ねえ兄様、もう皆様がお歸りになりますから、さアお部屋へ參りませう。

勝彦　いやだ／＼。

（と、駄々をこねて居る處へ、莊田家の執事登場。）

執事　サア／＼、皆様がお歸りになつた。（と女中に向ひ低い聲で）馬鹿は片付けろ。

勝彦　何、馬鹿だ！

執事　いゝえ、もつての外の事で……。

（と胡魔化す。美奈子、勝彦をだまして奥へ連れて這入る。杉野と木下登場）

執事　どうも色々御苦勞に存じます。

杉野　イヤ／＼まア凡て滯りなくすんで結構ぢやつた。程なく花婿、花嫁の御歸館だが、愈々床盃がすまなければ私の役目は未だ濟まんのぢや、然し、あの強情がよく折れたものさね。

木下　左様、矢張り最後の注射が利いたんですな。横領の訴へには流石の唐澤老人も參つたと見えますよ。

杉野　然し、その原動力は矢張り金の力さね。
木下　金力萬能ですかナ。
杉野　勿論さ、今日の唐澤を見給へ、娘の結婚披露の宴會で卒倒するなんて考へりや可哀想だつたよ。
木下　實際さうですな。あの頑固一轍な男爵が、あの席に列したのさへ氣の毒に思ひましたが。こらへきれなくなつて倒れた時には流石に胸が一杯になりましたよ。
杉野　氣の弱い男だねえ――。
木下　然し、私はとにかく、あそこの家で人間になつたのですからな。丁度瑠璃子さんが盃に口を當てようとする時でしたね。
杉野　さう、前から蒼い顏をして居たが、あの時バッタリ倒れたつけ、お互に氣をつけようぜ、人間も落ち目になると怖いもんだよハ、、、。
（處へ、勝平にこ〳〵しながら登場。あとから召使二三人續いて登場。）
杉野　お目出度う――
木下　お目出度うございます。
勝平　全く杉野子爵の御盡力で私は豫ての希望を達する事が出來ました。
杉野　イヤこれで骨折甲斐があつたと云ふものさ、そこで例の成功報酬の問題だがね。
勝平　あげるよ〳〵、そんなに急がないでも。
杉野　然し金錢は他人だからねえ。
勝平　ハ、、、非常に現金ですねえ。
杉野　莊田式と云ふ奴さ、すべて君の感化だよ！
勝平　とにかく之れを納めて置いて下さい。
（と、懐中より小切手を出して渡す。）
杉野　こりや九千圓ぢやないか、千圓足りないよ。
勝平　今、有り合せの小切手ですよ。足りない分は直ぐ上げるからいゝぢやありませんか、理窟を云へばまだ結婚披露をしたと云ふ丈で、夫婦かための盃はまだなのですからね。
杉野　未だ報酬契約を實行するには仕事が完全して居ないと云ふのかね、ハ、、、。
執事　杉野樣の御指圖通りに御手配は致して置きましたが一度御見分がお願ひいたしたいので御座いますが――。
杉野　よろしい、直ぐ行つて見ませう。
（と、杉野、木下退場。勝平ホッとして居る處へ、勝彦急いで登場。）

勝彦　お父様、何故僕のお嫁様を横取りしたんです、お父様瑠璃子様を僕に返して下さい。
勝平　馬鹿ツ、何だつて出て來たんだ、お前は引込んで居ろ。
勝彦　イヤだ、皆い丶着物を着て居るのに僕にだけ着せないからいやだ。
勝平　くだらん事を云うナ、向うへ行け！
（と、突き飛ばす。處へ美奈子、お秋等急いで登場。）
勝平　お秋、勝彦を何故出した、今日は大切な日ぢやないか。
お秋　どうも恐れ入りました。
勝平　こんな時には部屋を釘づけにしても出さない様にしろ。
美奈子　お父様、そんな事を仰有つては兄様が可哀想ですわ。ねえ、お父様、兄様は何の悪氣もなく、皆が喜べば一緒になつて喜んで居らつしやるのですから、私、兄様の氣儘にして置いて上げ度うございます。
勝平　放つて置いたら馬鹿は何をするやら分りやしない、さア向うへ行け！　云ふ事を聞かないと承知しないぞ！（と勝彦を追ひながら、墨を塗られた繪を見て）　こりやどうしたんだ、勝彦、貴様がやつたんだな！
勝彦　さうだ、あんまりまづいから僕が直してやつたんだ。
勝平　馬鹿！　貴様は何たる奴だ！　お秋貴様の不注意から已れは非常な損をした、五千圓で買つた許りのものを！　お秋、當家の規則だ、お前この畫の金を辨償しろ。
美奈子　お父様、そんな事を仰有つたつて五千圓のお金がどうしてお秋に出來ますでせう。女の身で、そんなお金を作る事は身體でも賣るより外の道はないでは御座いませんか。
勝平　そんなら身體でも賣つて返せばい丶んだ。なアお秋お前の身體は、已れが買つてやらう。
（と、好色漢らしくお秋の側に寄る。）
お秋　あれ、旦那様。（と逃げる。）
勝彦　お父様は、晝でも女でも皆、お金で買はうとするんだ。お秋は僕のものだ。だから皆は狒々だと云ふんだ。狒々！　狒々！　狒々の頭が禿げて居らア。
勝平　馬鹿ッ・誰れがそんな事を云つた！
勝彦　お千代が云つたよ、會計も云つた！　さうだ門番のお巡りさんも云つた。（女中共を見て）やア隠れやがつた、お花、隠れるなよ、お前が一番餘計云つたぢやない

か。（勝彦の云ふ眞實に一人〳〵恐縮する）

勝平　何を下らん事を云ふんだ、貴様どうして、さう要らざる事ばかりするのだ！

（と、勝平はてれかくしに勝彦を激しく打つ。お秋たまりかねて走り出て勝彦を父の手より引き離して抱へる樣にして。）

お秋　若樣、何故そんな噓を仰有います。さアお父樣にお詫びをなさいまし、若樣がそんな出鱈目な噓を仰有いますと、利巧な人が飛んだ御迷惑をいたします。秋の大好きな若樣は何時も噓なんぞ仰有つた事は無いぢやございませんか、若樣、さアお詫びをいたしませう。

（と勝彦を父の前に坐らせて頭を下げさせる。）

勝平　（うるさ相に）もういゝ〳〵！　早く向うへ連れて行け！

（美奈子は勝彦を連れて去る。處へ、杉野木下登場。）

杉野　莊田君、支度が調ひましたから向うの席で御待ち下さい――。

（莊田心得て上手に去る。と、莊田家の召使等大勢出て居ならぶ。そこへ瑠璃子、杉野夫人に手を取られて靜かに出て來て皆の出迎へるのに目もくれず、すつと室を通り拔けて上手の室に行く。美奈子、お氣の毒にと云ふ思入れでホロリとする。勝彦、あれは己れの妻だと云ふやうな科ある。皆々それを止める。）

――道具廻る――

上手襖の中は寢室になつて居る一間。室の中には二人の結婚を祝ふ祝ひもの、儀式の品など置きならべある。室内に卓上電話あり。

召使など、三寶に乘せたる盃を持ち出で來り、杉野夫婦の指圖の許に莊田と瑠璃子盃を交す。盃が終ると。

杉野　お目出度くお祝が濟みました事を更めて御喜び申上げます。

杉野夫人　お目出度うございます。

（二人、丁寧に頭を下げる。）

（召使退場。）

（杉野夫婦、莊田に何か目で知らせて、靜かに退場。）

（殘された二人、暫く無言で相對す。）

勝平　瑠璃子さん、これでもう二人の緣は結ばれて今から貴方は莊田家の人になつたのですから、全く打とけて貴

ひ度いものですな、私は貴方に滿足を與へたいと思ふのです、是からは思ふ存分の贅澤をして下さい、莊田の富も日本一なら貴方の贅澤も日本一だと云はせ度い位に思つて居ります。幾らでも使つて下さい、貴方が金を湯水の樣に使つてくれゝば、それだけ私は金を儲ける張合が出て來る譯ですからね。今迄いろ／＼の誤解もありましたらうが、私の本當の心持は勿論あなたを妻としてお迎へしたのです。私が此處の主人であると同樣に貴方も莊田の妻として、充分の權利を揮つて貰ひたいと思つて居るのです。奴隷だなんて考へは、無論私にある筈は無いんです。

瑠璃子　よく分りました。それで私安心いたしましたわ。

（此處へ、上手の寢室の襖をあけて、杉野夫人登場。）

杉野夫人　（手を仕へ、小聲にて）どうぞ――。

（半ば思入れにて用意の調ひし事を傳へ物靜かに去る開けたまゝ去るので中が窺はれる。）

（勝平、瑠璃子の樣子を見て握手でも求めるやうに側に寄る。瑠璃子があまりに端然として居るので。）

勝平　瑠璃さん…… さあ、もつと打とけて下さい。（間を措いて）ねー今からあなたは私の妻だ！

（と側へ寄るのを、瑠璃子、何をするのだと云ふ風な態度に出る。）

勝平　（思入れあつて）あゝ、これは私の手で買ひ取つたお父樣の債權全部です。始めからの御約束通り、これは貴女に上げます。これで唐澤家は誰れに向つても一文の借もなくなつたのです。

（と證文全部を渡す。瑠璃子その證文をぢつと見て、無言の儘に破り捨てる。勝平ぢつとそれを見て。）

勝平　それでもう凡て、いゝ心持に解決した譯ですね。

（と、ぢつと瑠璃子を見る。瑠璃子は、もはや勝平の云ふがまゝにならなければ、退引ならぬと云ふ立場になつて暫く沈默の後。）

瑠璃子　父は大層、この事も案じて居りましたから、一寸知らしてやりたう御座います。

勝平　さう、それがいゝ。先刻もあんな事があつたから、ついでに御樣子も伺つて貴方も本當に安心して下さい。電話はそこにあります。（と卓上電話を持つて來てやる）

瑠璃子　（電話をかける）あゝ、もし／＼雪町の一七四五番、えゝ、あゝもし／＼お前だアれ？　乳母やかえ、私私、瑠璃子、あのね、今みんな滯りなく濟んで、お父樣

の御心配になつて居た物は皆、私が破りましたと申上げておくれ！ いゝかい。お父樣はもう何の御心配もなくなつたのだから――どうぞ御安心遊ばして、お國の爲に御働き下さる樣に、私は御願して居りますツて、ようく申上げておくれ、その代り今から私は……私の身體は……（と、泣きくづれる。勝平が「瑠璃子さん――」と側へ寄つて慰めようとするのを振り拂つて）あゝ、もし／＼、えゝ（驚いて）あゝ／＼……それぢやアね、今、私直ぐ歸るからね、早くお醫者樣をお呼びして手落の無い樣に賴むよ。いゝえ直ぐ私が行くまでお前に賴むよ、いゝえ、かまはないから、直ぐ歸るよ……左樣なら、（と電話をはなれて）只今、又父の樣子が急に悪くなつた相で御座いますから私、心配になつてなりません、恐れ入りましたけれど、これから直ぐに歸らして戴きます――。

（と行きかける。）

勝平　（詮方ないと云ふ思ひ入れして）お父樣の御病氣では致し方がない、然し今日は他の日と違つて……あなたが玄關から歸ると云ふ事は誠に困る。私一人が承知と云ふ事にして裏口から歸つて下さい。今直ぐ自動車を云ひつけるから。

瑠璃子　はい、ありがたうございます――。

勝平　然しねー瑠璃さん……。（と、未練氣につきまとふ。瑠璃子、それを振りはらつて。）

瑠璃子　妾、氣が急いて居りますから、お話はゆるりと伺ひますわ。

（と、行きかける。）

―― 道具元に戻る ――

（暫くすると、奥にて物々しき氣勢して人々の罵る聲、立騒ぐ物音、次第に近づき來り、蔭にて「決して暴行をするのではない！ 父に逢ひに來たんだ！」と云ひながら手にピストルを握つた杉野直也制する人々を押しのけて登場。家のもの大勢つき從ふ。そこへ何事ならんと、杉野、奥より登場。直也と相對す。おしつける樣な沈默が暫く續く。）

直也　お父樣、あなたは恥を御存じですか。

（と、云つてさめ／＼と泣く。）

杉野　直也、貴樣は此處へ何しに來た！ 歸れ！ 歸れ！

此處はお前等の來る場所ではない、歸れ!

直也 いゝえ、歸りません!

杉野 何? 貴樣は親の命令に反くのか!

直也 お父さん、貴方はよく、そんな白々しい事が仰有れますねえ…… お父さん、あなたは僕がこんな所へやつて來たのは、恥をさらしに來たのだと思召していらつしやいませうが、僕はお父さんに反省して戴きたい――戴きたくつて來たんです――ねえ、お父さん、如何にお金が欲しいか知りませんが、あなたが今度、唐澤家に對してなされた事はありや一體何事です、何と云ふ淺猿しい事なのです! 貴方は政黨を苦しめるのだと仰有いますがそれならまだ、幾何でも方法はあらうと思ふのです、私はよく知つて居ます。あなたの目的は決してさうぢやないのです、口に美名を藉りて實は金錢のために盲目になられたなされ方です。私はあなたの不義不正をどんなに憎んでも、あなたと私は親子である事を否定する事は出來ません。たとひ、あなたがどんな事をなさらうと私はあなたの幸福を願ふのです。あなたが惡辣だと聞く度に私は自分の身を切られるより辛く思ふのです。お父さん未だ決して遲くはないのです! ねえお父樣、この機會に反省してどうか人間らしい御心持になつて下さい御願です! あなたの利益の全部を投げ棄てゝ、此度の結婚を取消して下さい! 聞けば今度の結婚は父の難儀を救ひたさ、兄の藝術の完成をさせ度さとで、一人の若い乙女が死んだ氣になつて、自ら敵の中に心も體も投げ出して來たのだと云ふ事です。金にあかして美しい女の肉を求めた男も不倫なら、その中間に立つて、自己の利慾のために、あらゆる人々に血の涙を流さしたあなたの心は全く惡魔です。瑠璃子さんには命とたのむ戀人があつた相です。もし僕がその戀人であつたとしたら、どんな心持がするでせう――ねえ、お父さん、あなたのために苦しめられた人々の呪ひは必ず、あなたの御身の上に報いて來ます。私が一生一度の御願ひです。どうか反省して下さい! お父さん、どうか考へ直して下さい!

(と涙ながらに頼む。此の話の間に出て樣子を聞いて居た勝平は進み出て。)

勝平 直也君!

直也 え? (と驚く)

勝平 君のお父さんは僕の同情者で、君は僕の反對者だ。いつぞやの園遊會で君が僕の金力萬能を罵倒された時、

私はだまつて聞いて居たが、結果は、矢張り私の勝利だつたよ。瑠璃子さんは私の手に落ちたよ、敗軍の將は引ッ込んで居たらどうだ――、それとも金力萬能を罵るか人間の心は境遇に由つて變るものぢや。今になつて口に正義を唱へながら、ピストルを持つて暴れ込むなんざア大いに卑怯なやり方だ！　まるでゴロツキだ！　ゆすりだ！　今日となつては、瑠璃子は私の妻だ！　私の自由だ！　君に指一本も指す力は無い筈だぜ！

（と、せゝら笑ふ。）

直也　何！（と齒を喰ひしばつて口惜しがる）

杉野　さア歸れ！　歸れ！　貴樣には己れの云ふ事が分らんのか！

直也　分りません！　僕は死を決してお父さんの反省を促しに來ました。瑠璃さんを取り戻しに來ました！　さあお父さん！　最後の御返事を聞かして下さい！

（とピストルを擬して、キッとなつて云ふ。杉野いささか恐れをなして退かうとする。勝平、隙をねらつて後から直也のピストルを奪ひ取らうとする。直也放さじと爭ひ二三度もみ合ふ。拍子にどうしたはずみかつんざく樣な砲聲に續いて美奈子が「あッ」と叫んで打ち倒れる。一同其方に驅けつける。）

勝平　巡査を呼べ！　人殺しだ！　警官を！　警官を！

（と口々に叫ぶ。美奈子は倒れながら。）

美奈子　皆、待つて下さい！　警官なんか呼ばないで下さい！　誰れにも罪はありません！　みんな過失です！私の怪我も、ほんのかすり傷なのですから、私さへ我慢したら、誰れにも罪は無い筈です、どうぞ、莊田の家から罪人を出さないで下さい！　今日は莊田の家に取つて何にも代へられないお目出度い日なのですから、どうぞ皆我慢して、このまゝに濟まして下さい。

杉野　直也――貴樣は何たる事をした！　一體己れはどうなると思ふのだ！（と、夢中になつて直也を罵る。）

直也（父の手をのがれてつか／＼と美奈子の前に進み出て）僕の愚かは、たうとう恐ろしい罪を犯しました。過失とは云へ、何ともお詫びの申上げやうもありません。僕は、僕はどうせ、もう此の世の望みも失せた者です。潔く罪に服しませう！

勝平　勿論だ！　無斷で人の家へ暴れ込むだけでも、許せない罪だ！　その上、人を傷けて只で濟むと思つて居たのか！　立派な罪人だ！　縛られるのが當り前だ！　さ

あ早く警官に引渡して仕舞へ！

美奈子　お父様、よくお考へなすつて下さい、私の手に當つた彈丸は本當はお父様の御胸に當る所だつたのかも知れません。一家の一人が罪を作れば、其の報は誰れかゞ受けなければなりません。さう思へば、たとひ私が殺されても少しも恨みはない筈です。お父さん、撃たれた私は恨む所か、此の御方に御詫びを申上げたいとさへ思つて居ります。お父さん、お父さん、どうぞ何事も荒立てないでこのまゝに濟まして下さい！

（と云ひ了つて手の痛みにフラ〳〵とする。）

直也　ゆ、許して下さい……。（と側によつて介抱する。）

美奈子　いゝえ。もう何ともありませんわ。

（二人は、ちつと顔見合せる。）

（直也、感謝の思入れにて。）

――幕――

三　幕　目

圖案協會アトリエ

淺草公園近くに建てられたるバラック式の製作所の内部。上手寄りに框の上、六疊程の疊を敷きたる處あり。眞ん中に爐を切り天井より茶釜をつるす。片隅には簡單なる梯子をかけ二階の宿泊所に通ず。下手大形の扉は協會の事務所室から入口に通ずる心。正面、建物の外廣く、隅田川の流れを見、色々の船右に左に靜かに行き通ふ。建物の内は演劇用の背景。金文字の看板。色々の廣告、毒々しい色彩のペンキ塗の畫看板飾窓用の造花、并にこしらへものなど亂雜に置きならべられそこやこゝにペンキの罐、繪具刷毛パレット脚立梯子などあり。其他出來上りたる廣告用の箱車迄しるべなど片よせあり、壁には繪具だらけのブルーズ、印半纏などかゝり居る。斯うした中にも一隅にテーブルあり周圍に手製らしき椅子二三脚を置き、卓上に燃ゆる様なダリヤの花二三輪さしたる所に、雜役に忙殺されながらも、忘れかねたる藝術家の床しき心がけが偲ばれる。天井より建物一杯の棚をつり其上に、不用の品置きならべられ、二階の部室より直ちに此の棚に出られる心で二三人の畫家、棚の上で小さな仕事を片付けて居る。時は晝近くなれど、電燈の光皎々たり。

幕あく。

（と、畫家の大勢それ〴〵の仕事にかゝり、ある者は爐の傍に憩む。その中に光一獨り畫架にかけたるカンバスに對して、わき目もふらず熱心に筆を走らせて居る。）

白井（光一の傍に寄り。）ヤア大分出來ましたね。

光一　有難う、この分で行くと、どうやら帝展のメ切には間に合ひさうです。それもこれもみんなが僕に同情して斯う云ふ暇を與へてくれるお蔭ですよ。朝から晩まで喜劇の畫看板や、活動のまねきを描かされて居た日には、描かうと云ふ意慾たつて起きやしない。昔から貧士は稍見五と云ひますが藝術家程、同情に生きるものはありません。若しみんなが僕に同情してくれなかつたら、とても此の畫は出來やしないんです。有難う〳〵僕は不愛情だから、うまいお世辭も云へないが、心の中では本當に喜んで居るんですせ！

白井　解つてるよ、誰れたつて斯んな所で一生終らうと思つて繪かきに成つたんぢやないよ。己れが國に居る時分白馬會の展覽會、太平洋畫會、三宅さんの水彩畫……ああの時分のあこがれと來た日には惚れた女も物の數とも思はない位だつたからな。憧れの畫家になつて、佛蘭西から伊太利、華かなオペラやカフェー街の洋行話を聞くと胸の血が湧き立つたが、今ぢや一かどのペンキ屋さんにもなれやーしない。愚痴を言ふ譯ではないが子供はふえる、頭は禿げる、もう畫家も何もありやしない、その中でせめて君だけでも眞面目な畫家になつてくれりや我々の名譽だよ。君なんぞは一人身だから思ふ存分やつてくれ給へ、生活難ほどみじめなものはないよ、先日も山田と話したんだがなア、山田は細君や子供が生きて居るのが不思議だ、動物だつて餌が無くなりや死んで仕舞ふと云つて居たが、をかしい様な悲しい話だ二人で笑つてる内に二人共、目に一杯涙をためて居やアがつた。

（と、笑ふ。話の間、光一は筆を休めて、そつと聞いて居ると、棚の上から山田と云はれた男が、のぞき込む樣に顏を出して。）

山田　オイ〳〵己れの棚卸しばかりするなよ。己れは今此の棚の上に上つたばかりぢやないか、誰れだい、子供にあんまり魚を喰はせないんで子供が金魚を睨いて唾つたのは、

白井　それは吉村の子供だよ。

吉村　（隅で仕事をして居たのを止めて）馬鹿にするナ。生れて二ヶ月しかならない子が金魚を燒いて喰ふもんかい、それより可笑しい話があるんだ、先日ね、田圃へ寫生に行くと、石崎が何處かの子供だか三人許りと歩いて居るんだ。それからねどうしたんだと聞くとね、近所の子供のお供で散歩だと云ふのだ。で、手に大きな袋を持つて居るからそれは何だと聞くと、子供がいなごを取つて遊んで居るんだと云ふんだよ。その時は何も氣が附かなかつたが、此の間一緒に辨當を食ふと、石崎のおかずが海老の佃煮にしては少しをかしいんだ。海老かと聞くと奴まアさうだと云つて、いきなり蓋をするから調べて見るといなごの佃煮なんだ。彼れの散歩は君、子供を使つて食料取りに行くんだよ。題しまして生活の悲劇、いなごの佃煮だねハ、、、、。

（一同調子に乘つて笑ふ。同じ片隅から石崎が出て。）

石崎　いなごを食ふのは僕の國の習慣だよ。金で買へない物だけに中々得難いものだよ。

山田　いづれにしても生活の悲劇だ。

（一同面白さうに笑ふ。）

石崎　（光一の繪を見て）出來たなア。實にいゝなア。

吉村　（畫を見て）第一素敵な美人だ。唐澤君これは君の戀人か？

光一　いゝや、こりや僕の身内の者で僕は此の繪の中に純潔な處女の美しさを描かうとして居るんです。僕が此の繪を完成すれば、此の女も本當に浮ばれるんだ……。

白井　それぢや、この女は死んだのか。

光一　まア死んだやうなものですね。女も生れて思ふ男と添はなければ、まア死んだと同然でさ。

（棚の上で誰れか「ヒヤ〳〵」と云ふ。）

吉村　誰れだ！　上でヒヤ〳〵なんて云ふのは！

（と、棚の上から恐ろしい毛の長い長い顏を出して。）

月村　己れだ、月村だ。

白井　オイ月村、例のやうにアルコールが這入つて居るなら引込んで居てくれ！　お前は醉ふとくどくていけないから。

月村　イヤ今日は正氣だ。唐澤の云ふ事は氣に入つたなア。男でも女でも戀愛の一番美しいものはオール・オア・ナッシングだ！　一緒に成るか死ぬかだ、己れが未だに一人で居るのはそのオール・オア・ナッシングのためだ！

吉村　一つには來てのないと云ふ理由もある。

月村　馬鹿ッ、己れは眞劍に云つて居るんだ。貴樣ごとき淺薄な人間に何がわかる。見ろ！　己れは此の通り泣いて居るんだ！　此の涙は卽ち己れの生命だ！
山田　さうだ、その通り貴樣は泣き上戸だから。
月村　又一人、俗物が現はれたナ。己れの樣な天才は貴樣達の樣な凡俗のために本當の光を消されて了ふのだ。
光一　オイ〳〵そんなに乘り出すと、落ッこちるぜ。
月村　落ちてもいゝ。
石崎　落ちると死ぬぞ。
月村　死んでもいゝ。藝術のためなら死んでもいゝ。凡そ人生と藝術は——。
（と大業に云ひ始めて、フト下の入口の方を見て、いきなり首をすくめて棚の奥へ身をかくす。一同案じ氣に入口の方を見ると支那人の支那そばやが這入つて來る。）
吉村　（をかしさをこらへて）月村の奴、借りがあるんだ。
（と、小聲にさゝやく。一同クス〳〵笑ふ。）
（棚の上から月村は皆に向つて拜む。）
（と、支那人、口から出まかせの嘘を大阪辯にて片ことまじりで述べ立てる。）

支那人　毛の長い人は留守だッか？
吉村　留守だよ。
支那人　あいつ、わるもんやな。
吉村　さうか、わるい奴か。
支那人　わるい奴や、あいつ泥坊や。
白井　何？　月村が泥坊だ。
石崎　まア默つて聞いてゝ見給へよ。（と制し小聲で）何かあいつ盜んだのか。
支那人　そばを盜んだんや。
吉村　お前のそばをか？　だつて可笑しいぢやないか、そばなんか盜んだつて何にもならないぢやないか。
支那人　ちがふ〳〵、そばの喰ひ逃げや、此間なアあいつが來てワンタンを一ツ持つて來てくれとな云ふよつてん直ぐに持て來るとな私が喰ふのやないんよつてな、そこへ置いてけと云ふもんやさかい、私がその棚の上へ置いてやるか、やらん内に、うもそばが無くなッとる。えらいけつたいな事や思うて探すと、あいつ、あすこの棚の上で喰つとるのや、私、なんも知らんふりして、後から金を取りに來ると丼はそこにおましたけど、金は無いのや、早う拂うてと云ふたら、私が喰つたんやないよつてに、

知らんとこないぬかしくさる。いま／＼しい奴ちや、自分で喰ふたんは、皆貸になつとるさかい、もう何ぼでも借りられん思うたもんやで今度は、そば詐欺してけつかる。あんな料簡の奴ちやさかい、もう借りやかてよう拂はんと思ふとるのや――。

石崎　いくら許り借りてろんだね？　百圓もあるのか。

支那人　そんなにもない。

吉村　九十圓か？

支那人　さう思うたらまちがひない。

吉村　百圓も借りるなんて、あいつでなくちや出來ない藝だ！

白井　然し、お前もよく貸したもんだなア。

支那人　わたい、果無しいもんやさかい、いつも損はかしとんのや。

白井　さうだらう、大分長い事、支那そばの車を曳いてる處を見ると、あんまり儲かり相にもないね、然しそりや本當か？

支那人　本眞や――。

白井　さうか、そいつア氣の毒だな、月村がお前に迷惑をかけてるとしたら我々の責任だよ。あいつを呼んでお前の前で責めてやらう。

支那人　そんな事せんかつて。

白井　いゝや、よく無いよ、かまはない。

吉村　よくないとも、一ッ呼んで來るからお前からよく、かけ合つたらいゝだらう。

支那人　又來まつさ。（と逃げようとする）

山田　まア待てよ、お前だつて百圓損をするかしないかの問題ぢやないか、待てよ。

支那人　まアえゝわ。

吉村　よくない、呼んで來てやらう。

支那人　又、ゆるつと來まつさ、鳥渡今日は、せはしないさかい。

石崎　すぐ來るんだよ、それともお前の云ふ事は、うそなのか？

支那人　本眞の事ちやとも。

石崎　そんなら逃げなくつたつていゝわけだ、すぐ來るよ。この棚の上にかくれて居るんだから。

支那人　えゝ。（と驚いて逃げようとする）

（皆々故意に逃がさず。）

吉村　月村、月村！　おい、そばどろばう！　下りて來い

よ！（とどなる）

（月村、二階より下りて來て支那人の前に立つ。）

支那人　（慌てゝ胡麻化すやうに）ワンタンか？

月村　何がワンタンだ！　このシューマイ野郎め！

（と、つかみかゝらうとする。支那人慌てゝ逃げる。一同哄笑する。）

月村　チャンコロ位、油斷のならない奴はない。

山田　然し借りはあるんだらう。

月村　多少はある。

光一　（晴々しい顔をして）多と少との隔りは大變だからね、少は十錢も借りだが、多の方は十圓も百圓もあるからね。

月村　十圓はおろか、あのチャンコロ一圓だつて借りやしない。

光一　して見ると、君の借りも貧弱なものだね。一圓たらずで拜まなければならないのか。

吉村　かみさんになりてのないのも、むべなるかなだ！

（一同和氣靄然として笑ふ。）

白井　さア仕事にかゝらう。

光一　僕も大變怠けました。

白井　（とカンバスを片付けようとする。）君は君の仕事をしてくれ給へ！

山田　本當だ、遠慮なしにやつてくれ給へ！

光一　有難う／＼。

（と一同仕事にかゝらうとする。此の時表の入口から二三枚の繪看板を持たせて淺草座の表方、關東中年の支配人登場。）

支配人　オイ、此の看板は一たい誰れが書いたんだい、今大だめが出て弱つて居るんだよ。

白井　一たい、何處が惡いのです。

表方　どこも此處もないよ。てんで芝居と意氣がまるで違ふんだ。（と看板をさして）此の女は此の爺の娘で此の人のかみさんになるんだ。伜と爺が間違つて書いてあるんだ二枚目がちぐいに書かれゝば、大抵だめが出るよ、それに今度は皆が大反對なのに何んでも座長が二枚目を買つて出た狂言だけに、此の看板は皆で惡戯をしたんだと云ふひがみで、出るの、出ないのつて今朝から大ゴテなんだ、頭取はかすを食ふ、狂言方はおどかされる、イヤハヤさんざんなんだよ、それに又此の看板と來たら、なんて長いあごを書いたのか、まアお前さんだつてをかし

いと思ふだらう。

支配人　少し長い樣だ。

表方　少し處ぢやないよ、鼻より長いんだからなア、とにかく早速どうにかしてくれ給へ。僕が困るから。もうこんな事があると君の處は斷わらなければならん、他からいくらでも云ひ込んで來るんだから値段も安いし、言ふ事は聞くし、その方がどんなに樂だか分りやしない。

支配人　どうも濟みません。

表方　それぢや濟まないよ、次興行からお斷わりだ。

支配人　早速直させますから、今度の所は何とかをさめておいて下さい。（と云ひながらそつと紙包を渡す）

表方（すつかり心得て）まアいゝや、これからはしつかり頼むぜ。此言は云ひたくはねえが色々うるさい奴が居るからね。まアチョイ〳〵と直してよこして下さい。

（と愛想をふりまいて去る。）

支配人　おい冗談ぢやないぜ、淺草をしくじつちや大事な得意場がなくなつて仕舞ふぢやないか、少し商賣に身を入れてやつてくれなくちや困るぜ。（と四邊を見廻して

フト光一の畫を見出し）之れは何だ、何處の注文だ。

光一　それは僕の畫です。

支配人　だから何處の注文だ。

光一　何處の注文でもありません、私の畫です。

支配人　何、自分の畫だ？　こんな道樂をして居るから仕事がうまく行かねえんだ！　此處で喰つて居る以上はこんな仕事は止めて貰はう！　（と畫を持ち去らうとする）

光一　何をなさるんです！

支配人　僕が預かつて置くんだ。

光一　待つて下さい、事情あつて其の畫は僕のその日〳〵の食物をさいて繪具を買つて描いて居るのです。決して仕事には差支へません。何卒暫くの間、寛大にして置いて戴きたいのです。

支配人　大勢の人を使つて君だけにそんな我儘はさせられないんだ。殊に、新參の君に對してそんな馬鹿な事は出來ない、此畫が慾しければ出て行つて貰はう。ナニ、二十か三十の金を出しや、君位の腕の人間はいくらでも雇へるんだ。食ふ丈けでよいと云ふから置いてやつたんぢやないか、出て行つてくれ、店の信用は大事なんだ。人間の代りはいくらでもあるんだよ。

（光一、無念の涙をこぼす。）

白井　支配人、鳥渡待つて下さい。その繪に就ては我々も

責任があるんです。我々は其績を完成さしてやり度いために唐澤君の仕事を皆で分擔してそれ〴〵餘分に働いて居るんです。成程先刻の看板の事はまア此方の失態として仕事の能率さへ違はなかつたら吾々個人の生活は自由にして置いて戴きたいものです。あまり深く立ち入つて貰ひ度くないのです。

支配人　フン、面白い事を云ふね、そんなら何か！　協會の與へたゞけの仕事さへすれば何をしてもいゝと云ふのか、若しみんなが仕事を濟ましてバクチを打つたとしたらどうだ？　それでも立ち入つては困ると云ふのか！

白井　繪をかくのと、バクチとは違ひます。

支配人　かくれてすれば同じ事だ！

吉村　何ッ！（と激昂する）

支配人　とにかく理窟はどうでもいゝ。僕の云ふ事に不服があつたら出て貰はう。

（今迄默つてゐた者達口々に支配人に對する不平を洩して何れも潔く立去らうと云ふ。）

光一　皆さん、待つてくれ給へ。要するに僕の失態でした皆さんの同情に甘えて協會の粟を喰みながら、一人前の仕事も出來ないくせに繪なぞを描いて居たのが、あやまり、僕は今から此處を出て、いづれかで又職を求めませう、皆様の御親切は決して忘れません。どうか皆さんが出るの引くのと云はないで僕一人を出して元の樣に元氣よく働いて……折があつたら僕はきつと皆さんに會ひますから……。

月村　分つた、君の云ふ事はよく分つた、出給へ、こんな處から一刻も早く出給へ！　君の樣な純な人間は、こんな濁つた空氣の中に居るべきでない。僕はね初め皆の力を以てして君をこのまゝ引留めて置かうとしたが、さうするのは却つて君に對する道でない事を知つたのだ。皆怎だ！　僕の云ふ事は正しいだらう！

白井　月村の云ふ通りかも知れない。なまじッか引き止めて却つて唐澤君のためにならなかつたら、吾々の心持は遂に徹底しない事になるんだからなア。

山田　僕もさう思ふ！　が今直ぐに出るとしても、さしむき金にも困るだらうな。

月村　そこだ、さつきから僕もそれを案じて居たが、どうだ、いくら考へたからつて、吾々の力でどうする事も出來ないが、吾々の持つて居る丈けの金を集めて先づ唐澤君へ餞別として、當座の處をどうにかしてもらつて、後

は又考へるとしたらどうだらう——。

吉村　さう、そりや大賛成だ。何しろ先立つものは金だからなア。

山田　どうだらう？

白井　さうだ、さう決めよう——。

石崎　そんなら、これへ一ツ、あるだけを入れて貰はう。

（と、トルコ帽を脱ぐ。）

白井　云ひ出し人だ、月村から先へ入れ給へ。

月村　イヤ僕は後でいゝ。先輩に對して失禮に當るから——
——一番後でいゝよ。

吉村　さうでない。君が第一の發案者なんだから眞面目な場合だ、君からやつてくれ給へ。

月村　然しあんまり恐縮だから——。

白井　恐縮も何もないよ、入れ給へ。それとも一文も無いのか？

月村　失禮な、そんな事はない。

白井　そんなら入れ給へ。

月村　入れるよ、然し實に僕のは諸君に比して九牛の一毛なんだからなア。（尻込みをする）

吉村　一體いくらあるんだ。

月村　だからね……。

石崎　手數をかけないで出し給へ。

月村　出す——出す——唐澤君、許してくれ給へ、僕は遂に七錢しか持つて居ないんだよ。（と帽子の中に入れる）

光一　月村君、有難う、その七錢を僕は七圓にも七十圓にもまして有難く思ふよ、あゝ僕は自分の幸福をどんなに感謝していゝか分らない、諸君、僕は涙を以て諸君の友情に厚く御禮を云ひますよ——。

山田　僕等だつて泣いてるんだよ——。

白井　（帽子の金を集めて）皆で四圓と七十錢、頭數にすると一人一圓にもならないホンの僅かな金高ですが、此金を以て一日でも二日でも凌いで君の藝術の完成を急いでくれ給へ！

（と、光一に金を渡す。光一押し戴いて感謝の意を表しやがて帽子をかぶり、ブルーズを脱ぎ一同に會釋して。）

光一　みんな達者で居て下さい！

月村　丈夫で居てくれ給へ、心丈では誰れにも分らない赤誠を持つてゝも、遂に七錢では、いかんとも致し方が無かつた、どうぞあしからず——。

光一　有難う――色々御厄介になりました――。

（と、支配人に挨拶して畫を受取らうとすると。）

支配人　唐澤君、この畫は此處で仕上げてくれ給へ、こんな事を云ふのも可笑しいが、僕は今日程妙に胸を打たれた事はありません――。僕はどうしても、このまゝ君を此處から出す事は出來ない。今迄の事は皆、水に流して何卒、此畫を此處で仕上げてくれませんか、私からも皆に賴みます、諸君、僕は皆と少しお話がしたい。そろつて事務所へ來て下さい、御願します直ぐに來て下さい。

（と、先に立つて表へ出て行く。その後から光一を除いて全部、事務所の方へ立去る。）

（光一、獨り帽子に入れて貰つた金をぢつと見つめて立つ。）

（入相の鐘が淋しく鳴り響き、製作所の外の河面は、とつぷりと夕闇に包まれ、室の中は電燈いよ〳〵明るくなる。）

（光一、こみ上げて來る涙に泣きじやくり、泣きじやくり、堪へ切れなくなつて面を袖で蔽つて聲を立てゝ泣く。）

（洋服を着たる杉野直也、ぐでん〳〵に醉つぱらつて登場。）

直也　さア皆んな此方へ這入つてくれ給へ、これから此處で大いに飮まう、大いに騷がう、さア早く這入つて來給へ。

（と、表に向つて呼ぶ。表から淺草オペラ座の女優四五人を煙草をのみながら登場。）

直也　お、此處に居たな。（女優の方を見て）百合子さん、此處に居るのは唐澤光一と云ふ僕の兄貴になりそこなつたペンキ屋です、一寸スツキリとした所があるから惚れちやいけませんよ。オイ兄貴のなりそこなひ！　今日は天女が天降つたと云へば大業だが、とにかく女の藝術家として時代の要求に依つて生れたるオペラ座の女優樣達を、お連れ申したのだ。オイ何をふさいで居るのだい、兄貴、何を持つて居るのだい？（と帽子を見て）オヤ珍しいな、金を持つて居るな？　金を持つてゝふさぐ奴がある者か、金さへありや何だつて出來るぢやないか、人の色女だつて何だつて自分の物になる世の中だ。（ト一寸考へて）女の約束なんて本當に脆いものだ。

百合子　あら、あんな事を云つて女が嘘をつく樣になつたのは、最初、男が女を欺したからなんです。男位嘘つき

はありやしない！
澄子　本當だわ、昨日だつてパウリスタへ行かうなんて人を誘つて置きながら、まるツきり嘘なんですもの。
直也　だから雜居屋へお供をしたんぢやないか、雜居屋とパウリスタぢや同一の論にならないからね。とにかく淺草ぢや雜居屋は料理屋だからね。
喜美子　雜居屋は雜居屋だわ。約束したんならパウリスタへ行かなきやずるいわ。
直也　そんならお安い御用だつた。矢張り君達は極めて現實的なんだから「ポークカツワン」シユーて奴でなきや洋食を喰つた氣分にならないと見えるね。
澄子　あら、さうぢやないわ。私只ドーナツが喰べたかつたのよ。
百合子　アラ私も喰べたいわ。七ツばかり。
直也　ハヽ、ぢや歸りに行きませう、オイ兄貴、君も仕事が濟んだら一緒に出かけよう。色彩と音樂、酒と女が無くちや世の中は暗闇だなアペンキ屋。（とよろめきながら光一にかじりつく）　オヤ兄貴、泣いてるんだな。よせよせ泣いてどうなるもんか！　歌『泣いたとて元のおかかが歸りやせぬ』だ。
光一　（ぢつと直也を見て）　杉野、貴樣は一體どうしたんだ！
直也　いけない〳〵。兄貴が涙なんか出しちや、すつかり話がしめツぽくなツちまわア、オイ女優さん、兄貴の機嫌が直るまで川を見ながら歌でも唄つて下さい。
（女優等打連れて正面建物の外へ出る。よき頃から合唱の聲。直也と光一との芝居の間を縫ふ。）
直也　兄貴、云草があるなら聞かうぢやないか、お前が云はなきや己れがお前の聲色をつかつてやらうか。（と聲色になり）　杉野、貴樣は未だボルネオにも行かず、のめのめと日本にうろついて恥の上に恥を重ねようと思ふのか、貴樣それで怪我をさせた美奈子さんに濟むと思ふかハヽヽヽ――成程あやまつたにしろ、己れは美奈子さんを打つた。幸に急所をはづれて片輪にもならずにすんだが、若し美奈子さんの寛大な心持が無かつたら、己れは今頃、暗い牢屋に入れられて居たらう、一ツには美奈子さんに對する義理で己れは生れ替つた氣持でボルネオへ仕事に行かうとした。本當に行かうと思つた、今もその決心に變りはない、行かうと思つて居る。行きたい！　心から行きたい！　けれど兄貴、己れに行かれるだらう

か、（と光一の顏をぢつと見て）己れは行かれないんだ、未練だと云へば未練に違ひない――女々しいと云へばさうかも知れない。己れはあらゆる淫蕩に耽つて自分に愛想をつかす樣になつたら今の苦しみは忘れるだらうと思つて居た。そしてお前にも棄てられよう、嫌はれようと思ひながら、斯うして此處へ來るのはお前が戀しいからだ。會ひたいからだ。せめてもお前の意見でも聞いてただれ拔いた己れの心で泣きたいんだ。己れは醉つて居る。目茶苦茶にならうとして酒を飮むが、飮んでも／＼己れはどうしても何も彼も忘れる事が出來ないんだ―

（とポケットから强い酒を出して飮む。）

光一　杉野、己れはもうお前に叱言を云はうとは思はない。

直也　イヤ言つてくれ、己れはそれが聞きたいんだ。

光一　イヤもう云ふ事は云ひ盡した。君は何も彼も分つて居ながら、どうする事も出來ないんだ。始めの内こそ己れは君を憎んだ。何故己れの云ふ樣に正しい道が踏めないのだと不甲斐なく思つた。けれ共、今になつて見れば叱言を云ふ己れが正しいのか叱言を云はれる君が正しいのか人間の生活は、そんな單純なものではないと思ふよ。然し、只一ツ君に聞きたいのは、君は酒で身も心も持ち崩して居て、それでいゝか知らないが、酒も飮めず、泣けもせず、紅白粉で身をやつして、おつといやな生活を我慢して居る瑠璃子は一體どうすれば、いゝのだらう。聞けば此頃は金にあかして、あらゆる贅澤をつくし、その上に身の邊りに多くの青年を集めて、女王の樣に振舞ふとか、多くの男を翻弄するとか、尙あきたらず、最近では新劇團を起こして自作の脚本を上場するとかの噂を聞く度に何にも知らん人々から羨望の中心になつて居ると思ふと、己れは可哀想でならないのだ。それに對しても君の行爲はあまり、ほめた話ぢやないぞ！　同じ思に泣く二人だ。たまには妹の事も思ひ出してくれ。

直也　もう、そんな話は止してくれ、君の妹は人の神樣だそんなものに未練はない！

光一　何！　未練はない？

直也　あゝ未練なんかあるもんか。

光一　それは僞らない君の心持か？

直也　さうだ！

光一　そりや本當か？

直也　本當だ！

光一　さうか、ではこれに對しても君は恥ぢないんだね。

（と以前の油繪を出して見せ）君に對する切ない愛と自分に對するせめてもの心やり、今だに本當の乙女で居る彼奴の心を描いてやらうと己れは日夜苦心したんだ。杉野よく見てくれ！

直也　（直也、その眞珠夫人の繪を見て思はず、涙をこぼし、光一の胸にすがりついて。）勘辨してくれ、人の心はどんなに僞らうとしたつて決して出來るものではない。今迄君の心を知りながら、わざ／＼いやがらせを云つて居た事を何卒許してくれ給へ！　あゝ己れはどうすればいゝんだ！

光一　君が本當を云ふと、己れまでが悲しくなつて來る、己れにも飮ましてくれ！

（と、直也の瓶を取らうとすると、直也いきなり瓶を投げ棄てる。瓶は割れて强烈な酒は四邊に散亂する。）

直也　（光一の驚くのを抑へて）兄貴、己れ達は醉つて居る場合ぢやない、己れは今こそボルネオへ行かうよ！

光一　えツ。

直也　本當に行かれる時が來たんだ！　己れは喜んで行くぞ！　丈夫で居ろよ！

（と、しつかり手を握る。折から以前の畫家大勢事務所から出で來り。）

吉村　雨降つて地固まるさ、唐澤君、君のおかげで協會は我々の待遇を改めて勞資協調の實をあげる相だよ、藝術家萬歲だ！

白井　吉村の云ふ通りです。協會も覺醒してくれて實に我我に取つて此の上の愉快はありません。それで今夜は大いに御馳走する相ですよ。

月村　こゝに於てか、七錢の効力は實に偉大なりと云ふべしだね。

（一同「ヒヤ／＼」と樂しき笑を洩らす。）

光一　さうなると、この金はそちらへお返へししませう。

白井　イヤそれは我々のホンの志です。ですから充分に繪具でも買つて下さい！

光一　（直也に向って）茲に居られる方々がこの己れに對して御禮の出來ない程の同情を寄せて下すつて斯うして醵金までして此の畫の完成を祝福して下さるんだ。君からも厚く御禮を云つてくれ給へ！

（直也、感謝に堪へないと云ふ面持で皆の前に頭を下げる。）

白井　この方は？

光一　何も彼も云つて仕舞はう、此の方は私の妹でこの男は妹の戀人でした。事情あつて妹は金の爲めに思はぬ結婚をしなければならなくなつて、此の男はこれからボルネオへ仕事に行くんです。どうもまゝにならないのが世の中ですねえ。（と淋しく笑ふ）

白井　それぢや今日は此の方の送別會も兼ねて騷げるだけ騷がうぢやないか！（と皆々喜んで贊成する）

白井　御迷惑でなければ居て下さい。

直也　喜んで末席に居さして戴きます。

（此時、支配人を先に大勢の男、酒肴を持つて登場。皆々の前に置く。一同盃をあげる。）

（やゝ暫くしてから表より一人の男出で來り。）

男　新しい舞臺裝飾の注文をしたい方が見えましたが。

支配人　失禮だが此方へお通し申せ！

男　はい。

（男が去ると、暫くして男が瑠璃子を連れて來る。）

男　このお方です。

（一同の視線が瑠璃子に向ふ。直也、瑠璃子一時にハツと云ふ思入れ。）

直也　貴樣は！……………。

（と、二三歩よろめき出る。光一、それを止める。）

――幕――

四幕目

莊田家の月見の宴

玉川に近き高臺にある莊田の別邸に於ける月見の宴。

廣庭には瑠璃子の趣味に基きて萩、桔梗、女郎花等の秋草を一面に植つけその奧、見渡す限りの薄の原。遠く玉川の河原を見下す。時間は夕方より宵にかけたる出來事にて、月の昇るに從ひ、蜒々たる多摩の清流は一層美しき眺めとなるしかけあるべし。庭には只一本の喬木なく舞臺左右の見切等も在來の植込などを排する事。總て一面の秋野と云ふ感じ、あらはるゝ樣、舞臺匠家の力に待つ事勿論なり。芝居は序幕より一年近く經過したる心。

幕あく。

（と、月見の宴に招かれたる男女いろ／＼の客右に左に行き交ふ。）

客甲　どうだい、すばらしい景氣だね。

客乙　さすが成金だけあつて、豪勢な邸を買ひ込んだものだ。

客丙　まるで玉川が庭の内にある様なもんだからね。

客丁　それにこの秋草はどうだい、すゝき、女郎花、桔梗かるかや、何とも云へない氣分だね。

客甲　全くだ、黄塵萬丈の都會から、かう云ふ所へ來ると全く生き返つた樣な氣持がするよ。

客乙　實際、自然は我々に常に新しい命を與へてくれるんだよ。

客丙　これが所謂、造化の公平無私な所さ。いかに金を積んだつて此の氣分は買へないからね。

客戊　所が君、大違ひさ、此の秋草は金にあかして、わざわざ植ゑたんだぜ、それも單に今夜の月見の宴を開くために植ゑたんだぜ、だから造り花も同樣なものさ、聞いて見給へ、蟲が鳴いて居るだらう。

（一同、耳をすますと、色々の蟲の聲がする。）

客甲　成程、蟲が鳴いて居る。

客戊　あの蟲だつて一匹いくらと云ふ蟲なんだ、なんでも人の話では蟲ばかり百圓からもはなしたさうだ、それが君、みんな奥樣の道樂なんだよ。

客丙　そりやさうかも知れない。瑠璃子夫人の小遣許りでも尠くとも毎月二三萬は、かゝる想だからね。

客乙　あゝあ、萬事金の世の中だ。此頃は人の力でどんどん自然は壞されて行く、名所舊蹟も別莊の中へ取り入れられる、情ない事になつたもんだ。

客丁　愚痴を云ふナ、何の理由もなしに、辨慶橋を取りこはして新しがらうとして居る樣な大將を頂いてた日にやとてもうだつは上りやしない。

（こんな話をして居る所へ今宵の餘興に上演される素人演劇團公達座の連中二三、ロメオとジユリエツト劇に出る扮裝で通り過ぎる。）

客甲　ありや何だ。

客戊　今夜の餘興の芝居だよ。公達座の連中さ。出し物はロメオとジユリエツトださうだ。瑠璃子夫人自ら舞臺監督の任に當ると云ふんだから、すさまじい勢だよ。

客乙　一層自分が出たらいゝぢやないか。

客丙　爵位がないから公達座には出られないんだらう。

客丁　成程な、然し莊田さんも此の世の望みは華族になる事だね。

客甲　元が船成金だ、軍艦の一隻も獻上すりや男爵くらゐ間違ひなしだよ。

客丙　然し、たつた一艘の船が元でこんなになるとは、幸運兒なんだね。

客乙　一艘の船から身代を起こすなんて流行する不見轉が一躍して自前になる樣なものさねハ、、、たつた一艘の船ぢやないか。

客戊　馬鹿な事を云ふなよハ、、、。

（と、一同笑ひ乍ら去る。）

（反對の側より勝平、瑠璃子二三の召使を連れて登場。瑠璃子は自ら考案をこらしたる秋草模樣の衣裳を着し動く度に種々の寶石、さながら置く露の如くに輝く。皆々床几にかける。）

勝平　（女中の恭々しく出す夕刊を見て）相場はどうだな。

瑠璃子　大層お米が下りましたさうですね。

勝平　米なんぞどうならうと、俺の買つた株さへ上れば文句はないんだ。人の難儀なぞを察して居ては、迚も天下の富豪にはなれない。

瑠璃子　でもお米の安いのは大變嬉しうございます。

勝平　瑠璃さんは日頃に似合はず、どうしてそんなケチな事を云ふんだね。

瑠璃子　年を取つた父や、家出をした兄が定めし樂しよからうと思ひまして。

勝平　ぢやから俺は幾何でも補助して上げたいと云つて居るのぢやないか、光一君は行方が知れないから仕方が無いとしても、お父樣はお受けにならないではないか。

瑠璃子　元々私は私の體を元に、父や兄を養ふ爲にお妾に參つたのでは御座いません。貴方が好んで高いお金で私の死骸をお買ひになつたのです。ですから私は貴方に縋つて父や兄を救けて戴かうとは思ひません。もうそんな話は止しませう――（と下女に）あのお芝居のお稽古を致しますからと云つて皆樣を、お呼び申して來ておくれ。

お仲　ハイかしこまりました。（と去る）

勝平　（瑠璃子に夕刊を見せて）二段抜きの大なる死亡廣告を示し）御らんなさい。

瑠璃子　どなたか、お亡くなりなさいましたの。

勝平　日本汽船の專務の細君だよ。長い事惡かつたんだ、然し俺の云ふのは此の大きな廣告の事さ、立派だね、いいねえ、流石に彼奴だと思ふ。思ひ切つて錢をかける。

然し今、あなたが死ねばもつと大きな廣告を出してあげるよ。ウンと立派にしてあげるよ。俺の肩書だけでも可成り大變だからね。何々……莊田勝平妻瑠璃子儀永々病氣の所……男爵莊田勝平――それが私の理想だが、なアに北小路家と美奈子の結婚さへ成り立てば、それも直ぐだ。立派だらう。（と夕刊を見せる）

瑠璃子　然し死んでどんなに立派にして戴いてもつまりませんわね。

勝平　俺だつて今死なれては大きな損だ。もうわづかであなたの頑固な約婚の期限が切れろんだからね。もういゝ加減に、打とけてくれたらどうです

（と、いやらしい素振りをする。）

瑠璃子　あなたは何をなさるんです。私、莊田の家へ參る時、貴方と戰ふ意りで參りました。あなたもそれを承知でお迎へなすつたのですから私が負けるか、あなたが勝つか最後まで默つて見ていらしつたらどうです。

勝平　相變らず強情だねハ、、あんたには本當に未だ男の有難味がわからないから困る。世の中はね、男ばかりでいけず、女はかりでも住んでは行かれないんですよ。

（所へ以前の公達座の連中十人許り登場。）

勝平　いや、皆さん今日は非常に御苦勞様ですな。

A　あゝ御主人ですか、私はAです。奧様には常に非常な御厄介になつて居ります。

B　今日は我々の一座に御同情下すつて試演をさして戴く事になりました。それについて種々便宜を御與へ下すつた事を同人に代りまして厚く御禮を申上げます。

勝平　いや私こそ御禮を云ひますよ。なあに一般の藝人ならどんな餘興でも出來ますがね。たとひ、まづいにしろうまいにしろ、貴族方の素人芝居なぞは、とても金の力ぢや買へませんからなア、ハ、、、。大よそ世界の中で莊田の自由にならないものは公達座の芝居と、瑠璃子の我慢だけでせうなア。

C　然し、奧さんは吾々藝術家に取つては無くてはならない保護者ですよ。

勝平　まあ私の家内の道樂については私は金に糸目はつけん考へで居りますが、一體新しい芝居つて奴は儲かりますかね。

A　さあ、昔から本當の藝術と利益とは、まことに調和のしないものでして――その中でも新しい芝居などは儲かると云ふよりは、むしろ損をするのが至當でせうな。

勝平　一心に仕事をして損をする？（と考へて）私には
その氣持がどうしても分らない。人間は何のために働く
のでせう――？　して見ると、今度大正座とかを借りて
やると云ふ芝居も損ですか？

B　まあ損です。ですから吾々で出來るだけの金を集めて
やるのですね。

勝平　さうすると、その目的は何です？　新しい芝居と云
ふのは損をするのが目的なんですか。

C　困りますな。つまり新しい藝術を一般に宣傳したい爲
なのです。人生には、こんな美しいものがある。こんな
いゝものがある、こんなにもいゝものがあると云ふ事を
敎へ救つてやり度い爲なのです――。

勝平　よく分らんがまア、耶蘇だね、損をして救ふのだか
ら――然し新しい芝居は、もう少し芝居らしくならない
ものですかね。

A　芝居らしくない所に吾々の生命があるのですよ。眼を
むいたり、正面を切つたりする位なら何も我々が立つて
やる必要は更にないのですから……。

B　少し新しい芝居も御らんになりつけるとよく分ります
よ。

勝平　イヤ私も、いつぞや、舞臺意匠とか云ふ切拔燈籠の
展覽會を見せられて、いろ〳〵瑠璃さんに敎へられて居
ますが、いつぞや拜見した皆さんの芝居は失禮ぢやが、
あんまり素人くさい樣に思はれるがなア。

C　イヤ誇大な技巧を弄さない所に我々の生命があるんで
す。吾々のは本當の人生をむき出しにして見せる所に價
値があるんです。

勝平　さうですかなア。然し昔から芝居は早學問とさへ云
つた程で、綺麗なもので面白いもので無くちや駄目だと
思ひますよ。つまり俗に云ふ芝居のやうだつて言葉さへ
ありますからね――、あなた方の云ふ、本當つてものが
いゝんなら窓から往來を見て居ても事は濟む。その方が
結局金が入らずに濟みますからねハ、、、。

（一同は度し難しと云ふ風に哄笑する。暫くして莊田
家の執事登場。）

執事　もうそろ〳〵北小路樣の御見えになる時刻でござい
ますが――。

勝平　あゝさうか。（と時計を見て）さうだ、では御出迎
へをしなくてはなるまい。皆さんどうか今夜は、存分に
腕を揮つて頂きたいものですな。御承知の通り北小路伯

は今夜の正賓で私の家に取つては……重大な御客樣ですからね……（と執事について退場）

瑠璃子　さあ皆さん、御稽古にかゝりませう。

（公達座の芝居の稽古になる。）

A　さあ、そんなら「死よりも貴し」の第一場から稽古にかゝりませう。

（黒奴に扮した男と侍女に扮した王女とが出る。）

黒奴　私が命にかけて思うて居る切ない思では通ぜぬのか。

姫　生命にかけるが誠なら、妾の願も叶へてたもるか。

黒奴　何なりとも。

姫　そんなら云はう。此の國の王は妾の父の仇敵ぢや、妾はその仇を打ちたさに此の城の侍女に身をやつして苦勞に苦勞を重ねても、女の力でよう討てぬ。どうぞ王の首討つてたもれ。もしも王の首打つてたもつたら、そなたの願ひもかなへよう。

黒奴　何、此の國の王の首打てとか？　そなたの爲めに仇敵でも私の爲めには生命の親ぢや。

姫　そんなら討たぬか。

黒奴　…………。

姫　今迄云うたは皆、僞りか！

黒奴（思入あつて）討たう、戀の前には何物もない、王の首討たう。

A　決心の色を現はして靜かに幕になるんですよ。

（と、ベルを鳴らす。芝居はどうしてもきまらぬ。瑠璃子じれる。）

瑠璃子　さあ、そんなら第二場。

（Aベルを鳴らす。）

（黒奴と姫。）

（黒奴、首を持つて姫に渡す。姫よろこぶ。黒奴、姫に近附かうとすると、姫振り拂ふ。）

黒奴　僞りもの！

姫　僞りではない、その證據には私はそなたのために、死ぬ氣ぢや、肌を許さぬその代りに私はそなたに命を捧げて僞りならぬ誠を見せよう。

黒奴　命を捨てる程ならば……。

姫　まア聞いてたもれ、私には一人の戀人がある。女の操と云ふものは生命よりも貴いものぢや。

（と、姫は自刃する。黒奴も死ぬ。）

A　此の時、ライムライトでパーと月光を浴びせてライン

ハルト式の舞臺效果をあげる樣にマネーヂしてありますが。

瑠璃子　だめ〳〵、まるで本當の心持が出て居ないわ。全く私の書いた氣持が出て居ないわ。王女は只、仇を討ちたいと云ふために、即ち私の氣持から云へば、女に對して誤られた世の中の因襲を女の力で打破つて多くの男を覺醒さしてやり度いのですわ。生命をやるからと初めから黑奴に云つたつて、きつと王の首は打ちますまい。男と云ふものは女の貞操は生命よりも貴いと知らずに只女を見れば卑しい慾望を叶へようとするのです。ですから生命をやると云うても叶へてくれない事も、肌を許すとさへ云へば、大概の事をしてくれるのです。これだけ單純な事を自覺しない女も馬鹿ですし、本當の女の貴さを知らない男は猶々の事馬鹿です。女は男の爲に許り存在するものでなしに、女だけにも意味ある生活のある事を知らしてやり度い爲に書いたのです。それを皆さんは少しも理解しないのです。皆さんも女の分らない人達だから、芝居が駄目なのです。つまり私に對する愛が足りないからですわ。

皆々　そんな事は――　（と、競爭的に云ふ）

瑠璃子　いゝえ、男の人はほんの口先ばかりなんだわ。私もう舞臺監督なんか、御免蒙るわ。私もう泣きたくなつてくるわ。

（と、卓の上に突伏す。所へ青年青木登場。）

青木　あゝ奥樣、どうかなすつたんですか。

瑠璃子　あゝ青木さん、あなたは私を本當に愛して居て下さるわね、あなたゞけは私の氣持を本當に理解して下さるわね、今ねお芝居の稽古をして居たんですけれど、どうしても私の氣持を理解して下さらないんですもの。私は皆が私に對する愛が足りないからだと思ふのですわ。妾、自分の氣持が理解されない位、悲しい事はありませんわね……青木さん、あなた一度私の爲めにロメオになつて下さいな、私はジュリエットになりますから。

（と倒れる樣に瑠璃子、青木を引き廻して芝居の稽古になる。青木迷惑さうにつきあひ。）

青木　奥さん、今日はどうかなすつたんですか。

瑠璃子　いゝえ、どうもしやしないんです。只ね、急に淋しくなつたの、私、あなたが來て下すつて本當に嬉しいわよ。（と青木の顏を見て）まあ、あなたの眼は何て美しいのでせう。まるで淸水の樣ですわ。

青木　奥さん、そんなに僕を見つめないで下さい。

（庭の奥の方でピアノの音聞ゆ。）

瑠璃子　（耳をすまして）まあ、あのロシア人が彈いて居るんですわ。皆さん何の曲か分つて？

青木　「雨滴のプレリユード」でせう。

瑠璃子　まあ嬉しい、青木さん、あなたは本當に藝術家なんですわね、あなただけよ本當に私が分つて貰へるのは。

青木　そんな事はありません、然し「雨滴の前曲」はショパンの中でも本當にいゝものです。あゝいゝ心持ですね。

（一同うつとりと音樂を聞く。）

瑠璃子　ねー青木さん、藝術の力に本當に醉つた時には自分の體を、どうしていゝか全く分らなくなりますわね。そんな時こそ、本當に自分を理解してくれる人が欲しくなるのですわね。

青木　さうですね。モーパッサンの小説の中に日の光を浴びて大きなものを感じた女が夫にキッスを求めて斥けられるので、その夫を本當に頼りないものと思ひ出すと云ふのがありますが、人間は自分を知られない程淋しいものはありませんよ。

瑠璃子　さうね……けど、あなたはどうしてさう私の氣持を分つて下さるのでせうか、恐らく私が娘で居たら、きつとあなたは戀人になつたかも知れませんよ。

A　奥さん、芝居の稽古はどうなるんですか？

瑠璃子　まア失禮しました。もういゝぢやありませんか。今になつて何遍くり返した處で、今夜の間に合ひますまい！ それよりピアノでも聞きませう。

（と、ピアノを彈く手眞似をする。）

青木　奥さんはピアノはおやりですか。

瑠璃子　フランス人について、フランス語を習ひかた〳〵稽古しましたの。

青木　フレンチも？

瑠璃子　えゝ、外交官の妻としてあの方の御手傳の出來るやうに、ある日の夢を樂しんで私は出來る丈けの事を學びました。いろ〳〵の國の言葉や、音樂や、けれど今ではもう何も役に立たなくなりました。昔の事は皆忘れた氣で居ても、音樂を聞いたりいたしますと、いろ〳〵の事が思ひ出されて、胸が一杯になつて來ますわ。

（二人、暫く無言で居る。勝平忍ぶ樣に登場。青木、人影に氣が付いて靜かにする。）

勝平　瑠璃さん、今、そこに何をして居た。

瑠璃子　若い男と話をして居りました。

勝平　そんな事をして私に對して濟むと思ふのかね？　たとひ形許りにせよ、あんたは私の妻なのだよ。

瑠璃子　私は、あなたが好きでないと云ふ事も、認めて居て下さいますわねえ。

勝平　それもよく分つて居るが、然しそれはあんたが私以外の男を思つてもいゝと云ふ理由にはならないのだ。

瑠璃子　あなたは私があの方を思つて居ると仰有るのですか？

勝平　…………。

瑠璃子　あら、あなたは嫉妬して居らつしやるのね？　私は今好きな人と一緒に向うを眺めて居たのです。それがあなたに對してどれ丈けわるい事なのでせう？　私は自分の心に恥ぢない事ならば、どんな事をしてもいゝと思ひます。又あなたは許して下さると思ひます。又あなたは許して下さる筈だと思ひます。

勝平　然し――。

瑠璃子　まアお待ち下さい。そんなら私が伺ひますが、あなた始め世の中の男は一人の女から他の女へ心を移す事はないでせうか、男だけには、もつと／＼ひどい事が許されて、女だけを責めるのは正しい事ではないと思ひます。私は自らが責められる前に、あなたも責めたいと思ひますわ。

勝平　責めるがいゝ。私は、私の妻として、お前に命令する事がある。今後一切若い男を邸へ寄せる事は止めてもらはう。

瑠璃子　そんな事は出來ません。私は私の自由を持つて居ります。

勝平　その自由は私が與へたのぢやないか。

瑠璃子　いゝえ、私は生れ落ちるから自分の自由は持つて居りました。

勝平　それを私は禁じて見せる。私は一家の主人だ、一家の者は凡て私の支配の下にあるのぢや。（とぢつと瑠璃子を見て）なアるりさん――私はね、いくらあんたに嫌はれても憎む事は出來ないのだ。私の本當の妻になつてくれないか、さうさへしたら私はあんたに絶對の自由を與へるのだ！

瑠璃子　それはあなたのいつもの癖です。私は、どうしても信じられません。

勝平　いゝや、決してさうでない！

瑠璃子　あなたは一年の間の約婚を立派に承知なさいました。或時は私のために父になつてやるとさへ仰有いました。私は幾度それを信じようとしたか分りません。けれど今になつて考へれば、信じなくつてよかつたのです。私は本當にあなたを信じて仕舞つたら私の體は今のまゝでは居なかつたでせう。私は約束の最後の日が來た時、乙女の體であなたの前に出ればいゝのです、鈎を飲んだ魚は糸をゆるめられると、痛さを忘れて泳ぎます、が最後は、やつぱり釣師の手に死なゝければなりません。私の今の生活は、丁度、鈎を飲んだ魚のやうに痛さを忘れて居るのです。糸はあなたの手にあるのです。

勝平　るりさん、さう怒るものではない、さう云ふ風だとあんたと私は、永久に敵同志になつて仕舞ふぢやないか。

瑠璃子　えゝ死ぬまで敵同志でせう。私は小さい城を守つて居るのです。その城も、もう長い事は持てないのです。

勝平　瑠璃さん、私の心は、ではどうしても分らんのかね。

瑠璃子　えゝ分りません。

勝平　瑠璃さん――。

（と、つか〳〵と側へ寄つて肩に手をかける。）

瑠璃子　（ふりはらつて）よして下さい、私をあはれまないで下さい、あなたは只、私に勝てばいゝんですわ。

（勝平、遂に度すべからずと云ふ風な態度で深いイキをつく。瑠璃子、皮肉な笑を洩らす。處へ執事登場。）

執事　只今、杉野樣の御案内で、北小路樣の御一統樣がお見えになりまして御座います。

勝平　あゝさうか、そんなら早くお通し申してくれ。

執事　はい、かしこまりました。

（執事退場、瑠璃子その後から去らうとする。）

勝平　あゝ、瑠璃さん、あんたは此處に居て下さい。

瑠璃子　でも、御商賣の御用なんでせう。

勝平　さう……（と考へて）商賣と云へば商賣かも知れない。然し、今日のかけ合は重大な事だ、瑠璃さんも少し手傳つてくれたらどうだね。

瑠璃子　あなたは精出して儲けて下さるのがお役目で、私はそれを精出して費ふのが役目なんですもの、使ふものにお金の有難味を知らせると心がいぢけて、顔も姿も汚くなつて仕舞ひますわホヽヽヽ。

勝平　ハヽヽ、私はその駄々ッ子が可愛いよ、あゝ向うへ行つたら、美奈子に直ぐ來るやうに云つて下さい。

（瑠璃子去る。美奈子入違ひに出る。）

（そこへ執事を先頭に、杉野、北小路伯、その息ひ秀麿、家令と云ふ風に五六人の人靜かに登場。）

（秀麿はいかにも淺薄な低能兒らしい樣子で、極めて新しい流行の洋服をつけて、ステツキなどを持つて居る。）

執事　（恭々しく挨拶をなし）　今日はよくお出で下さいました。御前の御出で下さいました事は莊田家に取りましてこの上ない光榮で主人夫婦初め家内一同深く感謝いたして居ります。別にこれと申して、何の風情も御座いませんが、どうぞ御心おきなく、御ゆるりと御遊びの程をくれ〳〵も御願ひ申上げます。杉野樣、今日は又いかにも恐れ入りました儀で、何とも御禮の申上げやうも御座いません。

勝平　（重要な挨拶は全部執事に云はせて只、自分は頭を下げて）イヤハヤもう一向不行屆で御わびの申上げやうも御座いません。御前、こゝに居りますのが、娘の美奈子で御座います。どうぞ御見知り置かれまして……。

（と、美奈子を紹介する。と、美奈子恭々しく挨拶すると、秀麿つか〳〵と進み出て。）

秀麿　この人ですかね、僕のワイフになる人は？

（と頓狂な聲を出す。美奈子びつくりする。）

秀麿　ハヽヽ氣に入つた。美人ですね、多少肉體的でない處もあるが、政略結婚の相手としては、それ以上求めるのはインポッシブルな事でせう。オールライト杉野さんオールライト！　ファザー持參金の高が折合つたら僕は承知だから早速取り極めて貰ひませう。（美奈子に）君少し散步しない？

（杉野等しきりに秀麿の愚かさをかくさうとして袂をひく。）

秀麿　分つた！　分つた！　ぢや僕は少し向うで遊んで來よう。

（と、勝平、美奈子の兩人を殘して一同去る。秀麿美奈子に對して投げキッスなどして去る。）

勝平　美奈子、若殿樣はお前が氣に入つた。……お前等の事を考へてやつて居るのぢやぞ！

美奈子　（たまりかねて）お父樣！

勝平　何ぢや、そんな心配相な顏をしてお前は何か意見でもあるのか？　（間）　どうしたんぢや？

美奈子　お父樣、変別に、お父樣の御氣に逆ふのではございませんが、あまり突然の事だもんで御座いますから。

勝平　突然がどうしたんぢや。凡て緣談など云ふものは突然にきまるものぢや、人間一生の幸福などと云ふものは、考へたつて得られるものぢやない。今度の事だつて偶然の事が元でかうなつたんだ、意見がなければ萬事、お父さんに任しておけばいゝ。

美奈子　でも……

勝平　まだ何か云ふ事があるのか、私はせはしない體だ、早く云つてくれ！（と、美奈子の泣くのを見て）美奈子何を泣くのだ？　何が悲しくつて泣くのぢや？　お前は私の云ふ事が分らないのか？

美奈子　そんな事は御座いませんけれど……

勝平　若殿樣が氣に入らないと云ふのか？

美奈子　………

勝平　美奈子、お前の緣談については誰れが何と云はうと私の意志通りに決めて仕舞ふから、さう思ふがいゝ。

美奈子　でもお父樣。

勝平　もういゝ。私はお前の父だ。私は北小路家へ行くやうにお前に命令するのだ。

（美奈子驚いて止めようとするのを、勝平ふりはらふ樣にして這入る。そこへ瑠璃子登場。）

瑠璃子　みな子さん、そこに一人で何をして居たんです、（と側へ寄つて）あら泣いて居ましたね、何か悲しい事でもあつて？

美奈子　いゝえ、つい心細くなりましたものですから……。

瑠璃子　あなたの小さい胸一つで考へ切れない事があつたら、どんな事でも私に相談して下さいね、女と云ふものは口に出して云ふに云はれない、いろ〳〵の苦勞を持つて居るものです。そして斯うと決心はして居乍らも、問ひつめられると滿足な答へも出來ずに却つて他人から誤解をされたりする事が世の中にはいくらもあります。たとひ、他からどんな、どんな壓迫があらう共、決して短氣を起さずに時節を待つて居て下さい。たとへお父樣の命令でも貴女の心に濟まない事は決して私はさせませんから——

美奈子　お母樣、私、勿體なうございます……もつたいなうございます——もつたいなうございます……

（と、瑠璃子の胸にすがつて泣く。）

瑠璃子　さあお父樣が御出でになりました。もう涙なんぞこぼさずにしつかりした氣持で居て下さいね。

（勝平登場。）

勝平　あゝ美奈子、丁度いゝ、二人の前で、先刻云ひ聞かした事、瑠璃さん、あんたにはまだ云はなかつたが、美奈子の縁談が持上つたのぢや、先方は北小路と云つて、伯爵ぢや、それに先方ではお前の考へ一つで直ぐにも取極めたいと云つて居られたのだから、今夜にも御返事をしないと困るのだ、要するに今度の結婚は家の爲、お前のため、いづれから見ても此の上ない幸福なのだから、勿論お前に於ても異存はあるまいと思ふのぢやが、返事はどうぢや？　默つて居ては分らんぢやないか、泣いて居ては分らんぢやないか（と、じれる）

瑠璃子　それは私から申上げませう！

勝平　瑠璃さんからする？　さうか、聞かう。

瑠璃子　北小路へ參るのはイヤで御座います！

（と、キッパリ云ふ。勝平も美奈子も共に驚く。）

勝平　それでは美奈子は貴女にさう云うたのぢやね？

瑠璃子　いゝえ、私、美奈子さんから何も聞いては居りません。

勝平　そんなら、まだ美奈子の意志は分らんぢやないか。

瑠璃子　いゝえ分つて居ます。北小路家へ參りますのは死んでもいやでございます！

勝平　死んでもイヤぢや？　どうしてぢや！

瑠璃子　そのお答へをする前に私、改めて貴方に伺はなくてはならない事が御座います。さつきからのお話は皆んな貴方の御本心から出た事で御座いますか？

勝平　勿論です。

瑠璃子　それなら一つ伺ひますが、北小路様のやうな、あんな人間並でないお方に美奈子さんをあげるのが、美奈子さんの幸福だと思つて居らつしやるのですか、それが美奈子さんを愛する道で御座いますか、女の身に取つて一番悲しい苦しい事は、心にもない結婚をする事です。たとひ貴方にどれ丈のお得があるか知れませんが、美奈子さんをあんな所へおやりになるのは、この上もない罪だと思ひます。

勝平　美奈子の返事は直接に聞かう、未だ定めかねて困つて居るものを貴女が、それを助長する必要は更にない、私は美奈子の父親として、說くだけの力がある、導く役目がある！

瑠璃子　私も母親として反對するだけの力は持つて居る筈でございます。

勝平　貴女は、あく迄も私に反對しようとするのだ、貴女

は私の自由にならなくても、娘だけは自由にして見せる、私は貴女に弄ばされても、美奈子丈は私のものぢや。

瑠璃子　いゝえ、あなた一人のものでは御座いません。

勝平　何でもいゝ、私は必ず美奈子は北小路へ嫁にやる。

瑠璃子　私は、どんな事があつても反對いたしますわ。

勝平　あなたの身體は、自分自身で護り得ても、他人の身體はどうする事も出來ないのだ、まアやれるならやつてごらんなさい。

瑠璃子　えゝやつて見ます、私は私で美奈子さんは、きつと守ります。

勝平　なにッ。

美奈子　（たまりかねて）あゝもう何も仰有らないで下さい、妾、自分の身體はどうなつても決してかまひは致しませんから……。

瑠璃子　今からそんな弱い心でどうなります。たとへ神様の命令でも大切な自分を殺してはならないのですよ。

勝平　私は議論などはしたくはない。美奈子、お前はお前で考へて置け！

瑠璃子　あなたもお考へなすつて下さい。

勝平　私が何を考へるのぢや。

瑠璃子　人の心はお金では、どうにもならないと云ふ事を！

勝平　何？

瑠璃子　ホヽヽ、又新しい戰が出來ましたわね――

（と、ぢつと勝平を見る。勝平思入れあつて退場。）

美奈子　お母様、色々御心配をかけまして申譯ございません、私が我儘を云ひ張る爲に、若しも御母様の御迷惑になる樣な事が出來ては、私どうしてよろしいか分りません、お母さま、私、何も彼もあきらめて父の申す通りになりますわ。

瑠璃子　美奈子さん、あなたは北小路さんへ行つて、一生幸福に暮らせますか。（間）又あなたが自分を殺すためにお父様の御心が正しい方に向くでせうか、――自分の廻りが皆救はれる犧牲でなければ只一人が泣く丈で何の爲にもならないのですよ、美奈子さん、安心して私にすがッて居て下さい、あなたの一生の幸福は私の責任にさして下さい、どうぞ二人目のユヂットにならないで下さい

（と、しんみりと云ふ。）

美奈子　（感極まつて）お母さま！――

（と、取りすがる。二人抱き合ふ。）
（對岸から盆大の月靜かに登る。）

——幕——

五幕目

葉山の別莊

莊麗なる洋館の一室。
本館と露臺との間は重々しき垂絹で仕切られるやうになつて、露臺の下は上手より下手に廻り得るやうになつて居る。
露臺への上り段は、下手よりに舞臺とは斜につき正面にも上り段あつて欄干の切れ目より室内の全部が見える。
庭は一見海岸の別莊らしい、それ〴〵の植込あり。色濃き常盤木の葉の密生した生垣には白塗の瀟洒なる庭木戸などがあり、そこゝに西洋花の鉢がおいてある。
室は瑠璃子夫人の居間にあてられて、總ての裝飾は絢爛目を欺く許りで美しい卓子、その廻りに椅子、長椅子、窓の垂絹の意匠などにも、極めて近代的色彩が施されて居る。
幕あく。
（藝者、半玉等、花鬪の前で遊んで居る。暫くして瑠璃子登場。藝妓など、それが勝平の夫人と知らずに平氣でいろ〳〵話をする。）
藝妓一　あの、旦那の御支度はもう出來たんでせうか？
瑠璃子　さあ、どうですか、私少しも知りませんけど、あなた方は、どなたですの？
藝妓二　私達ですか？　昨夜ね、こちらの旦那のお供をしてやつて來たんですよ。まあ、馬鹿ッさわぎで、本當に皆昨夜はとろッともしないんですよ。
藝妓三　だから私もう眠くて〳〵さつきもこの花をぢつと見つめたら起きてながら夢を見ちやつたのよ。
藝妓一　誰れの夢を見たの？
藝妓三　分つてるぢやないの？　かの字の夢よ。
藝妓二　あら、よだれが垂れる事よ、ほんとに手ばなしでのろけるなんて、東京へかへつたら、只ぢや濟ませない事よ。
藝妓三　えゝ奢るわよ、ほれた人の夢を見たのは其人が自分の事を思つて居てくれるんだつてね、妾さう思ふとう

れしいわ。何でも奢るわよ。奢らして貰ひたいのよ。

藝妓一　あれだ、かうなつちや手がつけられやしない――

瑠璃子　皆さん、本當に面白さうですわねえ。

藝妓二　面白いんですよ、毎日イヤな人の御機嫌も取らなくちやならない商賣ですからね、少し位暢氣な所がなくちや全くやり切れやしませんわ。

瑠璃子　新橋の方ですか。

藝妓三　えゝ、さうです。

瑠璃子　いろんなお客があるでせうねえ。

藝妓三　えゝ、ありますよ、お座敷の面白い方だと思ふと案外、妙な所へこだわつたり、一寸樣子がオツだと思ふと、ヅウ〳〵だつたり、醉つ拂つて始末が終へなかつたり、そりや十人が十人、この人はと云ふ人は、まア、ありませんわね、けど、お客つてものにやあ、極つてる癖が一ツあるのよ。

瑠璃子　それは、どう云ふ癖なのです？

藝妓三　ケチで助平な事、ホヽヽヽ。（皆笑ふ）

藝妓一　かの字もさうかね？

藝妓三　あの人？　あの人の事は妾にや分らない、醉へば醉ふで好いたらしいし、怒れば怒るで、ぞつとする程嬉しいし、まあ何て云つたらいゝだらう？　妾もうあの人の事ぢや、目茶苦茶になつちやふんだわね――けど、そんな人は千人に一人ですよ、あとのお客はみんな、執拗て、うるさくつて、此處の大將なんか、そりやもう名うてのうるさ形なのよ。お金があるから皆、どうにかするやうなものゝ、ツーさんのお座敷つて云ふと、大がいうんざりするんですよ。

瑠璃子　ツーさんと云ひますと……。

藝妓二　船成金の莊田さん、まさかにさうとは云へませんからね、それに可笑しいのはね、ツーさんの事を御前と云ふと五圓下さるんですよ、そんなに華族樣になりたいのかつて皆をかしがるんですよ。

瑠璃子　まあ面白う御座いますわね。

藝妓一　えゝ、面白いでせう。（そこへ勝平登場）

藝妓二　まあ旦那、何にしてゐらしたの？

勝平　今少しとろ〳〵として居た處さ。なア皆、此處に居るのが己れの奧さん、例の置物同然と云ふ己れの奧さまだよ。

（藝妓等、流石にびつくりして慌てゝる。）

瑠璃子　そんなに四角ばらないで下さい。私もつとお話が

したいんですから。
勝平　何か、おはなしをして居たのかね？
瑠璃子　え丶、今いろ／＼のお客の噂なんぞしていつになくはれ／＼しい氣持になつて居たんですわ。
勝平　何だ、こんな女共とは打とけて己れには、いつもつツけんどんか、少しはやさしくしてくれてもい丶ぢやないか。
（と、肩に手をかける。瑠璃子ふり拂ふ。）
勝平　この通りなんだよ。ハ、、、然し今に己れがこの人形の様な奥様に魂をふき込んで見せるんだ、左甚五郎の様にな、さうなるとお前達には用なしだ……さあ行かう。
（と、勝平を先に藝妓共退場、瑠璃子ぼんやり見送つて居る所へ美奈子出る。二人顔を見合せる。しばらくして勝彦出る。）
勝彦　二人で何をして居るんだね、又お父様の事で心配して居るのかね、僕がその心配を無くする方法を教へてやらうか。
瑠璃子　教へて頂戴……。
勝彦　お父さんを殺せばい丶んだ！
二人　え丶。（と驚く）

美奈子　兄さん、何故そんな事を仰有るんです。
勝彦　ハ、、何故お父さんを殺してはいけないんだね？それも僕はよく知つてらあ、お父様を殺していけない譯はね——殺すと血が出るからなんだよ。
（瑠璃子思入れあつて、花畑の方へ行つて、花を弄んだり水をやつたりする。）
美奈子　お兄様、私、お兄様が羨ましうございますわ。なまじツか人並に生れついて餘計な苦勞をする位なら、あなたの様に何も彼も知らずに居た方がどんなに幸福だか分りません……ね……兄様、あなた、美奈子の心の中がお分りになりますか？
勝彦　分るよ。
美奈子　い丶え、何にもお分りにはならないのです。あなたから見たらどんな人でも、みんな幸福のやうに見えませうけれども、人間は皆、それ／＼の苦勞を持つて居て私でさへ云ふに云はれない苦勞があるんですから、お母様の御心などは、どんなにかお苦しいのかお察しするのさへ出來ません。ね兄様、お母様はネ、生命と迄思召した者をおすて遊ばして死んだ御心で、此の莊田家へ入らした御方なのですよ。それ丈でさへお氣の毒なのに、私

の事をいろ〳〵御案じ下すつて、御體に代へても私の一生の幸福を計つて下さらうとなさるのです。私は自分の幸福を嬉しいと思ふにつけ、思ふ御方の處へもいらつしやれないお母樣を勿體ないと思ふのですわ、兄樣、ね兄樣、二人してお母樣の御恩を御返へししませうね。

勝彦　うん……己れは、お母さんの護衛兵になるからね、お前は斥候になれよ、そして若しお父樣が攻めて來たら己れが打ち殺してやらう、美奈子、斥候はな、かう分らない樣に、はつて行かなくちや駄目だぜ。

美奈子　あゝ兄樣、私あなたがうらやましい、お母樣もあなたの樣に、何もかも分らずに居らしたら、あんな苦勞はなさらないでせう。あゝ思ふ事が叶はないなら、お母樣に何もかも忘れさしてあげたう御座いますわ――

（と、泣く。瑠璃子聞くともなしに二人の話を聞いて居たが、この時つか〳〵と歩みよつて。）

瑠璃子　美奈子さん、私うれしく思ひますよ。

（と、二人手を取つて泣く所へ召使登場。）

召使　奥樣、あの唐澤樣から御人がお見えになりましたが。

瑠璃子　えゝ？　お父樣がかへ？

召使　あの何で御座いますか。田舎の方の樣でございますが――

瑠璃子　誰れだらう、まあ庭からでもお通ししておくれ。

召使　はい。

（と退場。しばらくして、唐澤家下男留吉、靴をはき帽子を冠つて庭口から登場。瑠璃子と顏を合せる。）

瑠璃子　まア留吉かい！　久しぶりだつたね、お父樣はお變りはないかい、お前も達者かい、（と續け樣に云つてさて留吉の顏をじつと見てなつかしさにたまらなくなつて）　留吉、お前よく訪ねて來ておくれだつたね。（と泣く）

（美奈子、勝彦は這入る。）

留吉　（しばらく言葉出ですやがて）　もう一ト月も前からの、御前樣と二人でどうしても一度は行つて云はなくてはならねえが〳〵と云つてる内に、だん〳〵と日が經つてな、お互にあんまりいゝ事でねーだで、われ行け、イヤ御前樣にお願ひしますだ、なんて、押しつけ合つて居る内にどうしてゞも來なけりやなんねえ樣になつて、私はアお前樣の御心を察してやつて來たゞよ。（間を措いて）　いよ〳〵私が來るとなるとな、相手は立派な家だから、これ冠つて、これはいて行けつてね、此帽子と靴は

御前樣のを拜借して來たゞよ。

瑠璃子　さうかい、お父樣も御變りもなさゝうで、結構だね、私、久しぶりでお前に會つて嬉しいよ、本當によく來ておくれだつたね。（としみ〴〵云ふ）

留吉　私、はア今日は餘りよくは來ねーだよ、久しぶりで會つてこんな事云ひたくねーだが、あんたえらく、評判惡いだよ。（留吉云ひにくさうに云つて急に下を向いて淚をふく）貴方の評判のわるい其の事についても、御前樣の云はつしやるには　留吉、あれのあんなになつたのも、元は皆己れから出た事だ、己れの家を助けよう許りにあゝなつたんだ、あれの心を思ふと、己れから叱言は云はれねーが、お前の云ふ事なら肯くだらうからよく云つてくれつて御賴みでがした。私もなア今日來る道にも、逢つたらあゝ云はう、かう云はうといろ〳〵に考へて來たゞが久しぶりで、かうして逢ふと、己らもう嬉しくつて何にも云はれねーだよ、お孃樣、私の顏をよく見て下せいよ。さうしたら何も彼もはつきり分るだからよ、私ア何も外に云ふ事はねーだ。只評判が惡いからな、氣をつけて下せいと云やアいゝだよ。お父樣だつてわしだつて、はア何時もいゝ評判は聞きていだよ！

瑠璃子　留吉、お前の心持は私はよく分つてるよ、お父樣の御心持も私よく分つて居るよ。今迄私のしたことは皆惡い事かも知れないけれど、日の目を見ない牢屋の人でも、皆それ〳〵の樂しみを考へるやうに、私は只、お金の力で果敢ない慰めをして居たんだよ。けれどね、私ももういろ〳〵考へて心にかうと決めた事もあるから、きつと近い內にはお父樣やお前も安心の行くやうになるだらうよ。今の私をお前から見たら、憎らしいか知らないけど、其の憎らしい妾は世の中のどんな人よりも可哀想な女だつて事丈けは信じておくれよ、お前がそれだけ信じてくれゝば、私どんなに恨まれても少しも恨めしくは思はないよ。

留吉　もうみんなよく分りましたゞ。私、何で憎んでいものかね――勿體ねえ事だが可愛いと思やこそ云ふだよ、私もそれさへ知つてくれゝば、もう他に文句は云はねえだよ。

（美奈子、茶菓を運んで來る。）

瑠璃子　美奈子さん、これはね、留吉と云つて私の家の召使です。田舍者の正直物で、東京で私の評判が惡いつてわざ〳〵意見に來たのですよホヽヽヽ。

美奈子　いろ／＼私、お母様に御恩になつてどうぞ、よく御家へ御傳へして下さいね。お母様の御心の内はとてもとても御察し出來ない程のお苦しみがおありなのだから例へどんな評判があらう共、決して信じないで下さいな。

留吉　はい――なアにもうかうして、お目にかゝつて仕舞へば私ア何にも云ふ事はねえでがすよ。

瑠璃子　さア久しぶりで來たのだから、まアゆるりとして遊んで行くとして、まアお菓子でも喰べておくれ。

留吉　はい。

瑠璃子　お前、カステラは大好きだつたぢやないか。

留吉　大好物でがすよ。

瑠璃子　おあがりな。

留吉　はい――。

（勸める方も勸められる方も、胸が一杯になつて、美奈子も釣り込まれて三人顔を見合せながら泣く、しばらくすると、物蔭で何か男の云ひ爭ふ聲がして、瑠璃子の周圍につき纏うて生活する多くの青年の四五人が、庭口から這入つて來る。）

瑠璃子　あゝお客様だ、留吉、お前は向うへ行つて休息しておくれ、美奈子さん、連れて行つてやつて下さい。

（美奈子は留吉を連れて去る。この邊にて。）

――道具廻る――

青年一　奥さん、今日は眞面目にお話をしたい事があつて參りました。

瑠璃子　何時も私は皆さんに對して、眞面目な態度でお話して居りますのに、今日に限つて、眞面目にお話があるなんて何だか私の平素が浮氣のやうで馬鹿にされたやうな氣がしますわ。お話ツて何んですか？

青年二　奥さん、あなたこれを御承知ですか？

（と、プラチナの腕時計を出して卓の上に置く。）

瑠璃子　（一寸見てギックリなり）此時計が、どうかしたのですか。

青年二　實は此時計について青木君が奥さんに折入つてお話があると云ふのです。

瑠璃子　何でも伺ひませう。

青木　奥さん、私は少し興奮してゐますから或は失禮な事を申上げるかも知れません、それは豫め御許しを願ふとして私は奥さんの本當の御心持を伺はして頂きたいと思つて上りました。（間）私は奥さんから、その時計を頂

いた時に、殆んど夢心地になつて世の中に私程幸福な男はないと迄思ひました。そしてあの時の奥さんの御言葉を思ひ出して、私は只泣きました。其後此時計を拜見すると裏に復讐の女神、ネメシスの持つ短劍が彫り付けてありました。婦人の趣味としてはあまりに強烈な男性的な意匠だと思ひましたが、日頃の奥さんの御心持を考へてそこに奥さんの美しさも鋭さもあると思つて、一層敬慕の念を强めましたが、よもや、それが私を飜弄なさる爲の意匠であるとは知りませんでした。私は今日迄あなたの爲に弄ばれて居ました。まるで、生命のない人形のやうに全く貴方にあやつられて居りました。奥さん、私はどうすればいゝのでせう？

瑠璃子　青木さん、あなたは何か考へ違ひをして居らつしやるのぢやありませんか、私があなたにこの時計をあげた事がどうして貴方を弄んだ事になるのでせう？

青木　それでは貴女は今日まで私を弄んでは居らつしやらなかつたのですね？

瑠璃子　勿論ですわ。

青木　そんなら伺ひますが、貴女はこの時計を私に下さる時に何んと云はれました。「私は貴方を愛して居ます、其の愛の印と思つて下さい」と云はれた事をよもやお忘れはあるまいと思はれます。

瑠璃子　云ひました。其通りに違ひありません、けれ共、それがどうして弄んだと云ふ事になるのでせう？

青木　そこです。もし僕以外に此の時計と同じ品を持つて同じ言葉を聞いた男があつたとしたら、あなたは私に對して何と申譯をなさるのです。奥さん、私は今日、此の時計と同じ時計の持主に逢ひました、そして、その男は私も同じものゝ持主であると知らずに、其の時計の事を誇らしく云つて自分丈が世界の男の中の一番幸福な男であると云つた時には、私は同じ幸福を持ちながら、殆んど地獄のどん底に陷入る樣な失望を感じて、私はもう大地に倒れさうになりました。男は海軍大尉でした。名前丈は控へませうが、奥さん、貴女はこれ丈け云つても尚私に對して眞面に會つて居られますか。（と熱烈な調子）

瑠璃子　青木さん、それなら私からも伺ひませう。貴方は今の樣な事を仰有つて、よくまア私の前に、まともに立てますことねえ。

青木　何んですツて。

瑠璃子　いゝえね、私は今まで無邪氣な方として心から貴

方を愛して居ました。時計を上げた時も愛して居ればこそ愛の記念にあげましたのが、私は今のお言葉で貴方の卑しい心持につく〴〵愛想がつきました。ね、皆さん女から云ふ愛の記念と云ふ事は、たつた一人の男に丈しか云へないものでせうか、男の方に誤解はあつても、女の心には少しの疚しさもないのです。ある男とある女とが交はるのは互に愛があればこそで、憎んで居る二人なら、一生たつても交際るものではありますまい。其女が若し其男の人に私は貴方が好きですと云つて、たつた一本の貢をくれたとしても、その女はその男の所有と定つて仕舞ふのでせうか。そんな不自由なものだつたら、男も女も、うつかり話も出來なくなるぢやありませんか、世間では男の人の冗談丈けは許して居ながら、女の言葉は根に葉に持つなんて勝手な事には私、いつも反感があるのです。男でも女でも嘘を云つたら罪でせうが、本當の事を幾度云つても罪にはならないと思ひます。青木さん、私は貴方を愛して居ました。又海軍大尉の方も愛して居ました。他にも愛した人は澤山あります。けれどあなたはじめ男の人が私が愛すと云つた言葉を、戀して居ると考へたのなら、そりや可哀想な程滑稽ですわ。戀は求めて止まないものです。若しも私が戀したら、其戀を遂げるのが私の目的になるのですが、私は貴方を愛したと云つて、貴方に何を求めました？　來て下さいと云ひましたが私を愛して下さいと云ひましたか？　時計をあげたのは勝手です。私の今の身分では、プラチナの時計位は失禮ですけれど、一枚の名刺か、一本の貢位にしか考へられません、私今日迄、此時計を幾人の人におあげしたか自分でも覺えて居ない程です。私から云へば、お近づきになつた印に位なもので、若しも私が戀をしてその戀人へ何か捧げるとしたならば、私は命を捧げますわ。時計くらゐで戀のしるしと思はれたら、私の命はいくつあつても足りませんわ。それが證據には私は、まだ〳〵いくらでも上げる氣です。皆さんも戀しいのならいくらでも上げますわ。まだこんなにあるんですもの。

（と、部室の中から手箱を出して、其の中から同じ腕時計を數多く出し皆の前に撒く。皆々驚く。）

瑠璃子　さア要る丈持つて行つて下さい、あなたにもあげませんでしたね。皆、私の愛の印ですわ。そして、もう其の愛も今日限り、私もう殿方とは御交際はいたしませんわ。誤解も誤解、まるで思ひも寄らない喜劇が起つて

來るんですもの、、、。

（と、心持よげに笑ふ。青年一同呆氣に取られた面持で立つ。）

青木　（嚴しくして）奧さん、あなたは今に、純眞な男の怒りの爲めに、あなたの身體が粉微塵になる時が來ますよ！

瑠璃子　あなたも、自惚のあてが外れても、無暗に怒らないで下さい。

（そこへ、光一つか〱と出て瑠璃子を見る。）

瑠璃子　（兄を見て）あら、兄さん。

（と、思はず舞臺を下りる。青年一同この樣を見て、何れも時計を拾ひ、コソ〱と立ち去る。）

光一　（つか〱と進みよつて）丈夫だつたか！

瑠璃子　（甘えるやうにうなづく）

光一　兄さんは逢ひたかつたよ。然しなア逢ふべき時が來なければ、例へ死んでも會ふまいと誓つた心に反くまいとして、今迄苦しんだよ。世間的に云へばなア、已れはお前を棄ねて、お前の小遣を貰つて喰べて勉強した方が利口なやり口だらうが、それでは氣がすまない。お前もそれでは悲しからうと思つてな云ふに云はれん苦勞をしたが、たうとう會ふ時が來たよ。瑠璃子、お前を描いた己れの繪はたうとう院展に當選したよ。

瑠璃子　えゝ？

光一　己れは家を出てから、看板屋に雇はれて仕事の合間にお前の畫を描いたが、已れは主人に追害され、すでに追出されようとした時に、仲間の者の同情でやう〱に仕上げられたのだ。喜んでくれ、已れは本當に救はれたよ。風の便りにお父樣も今では大分お氣が弱くなられたらしい。理解して下さるか、どうか分らないが、已れは今度の當選を土產にして、お詫びに行かうと思ふが、お前にも苦勞さしたが、已れもやう〱世の中へ出られさうだ。知つての通り繪はお前の純潔な體と心を描いたので題は眞珠夫人としたよ。是非見てくれ、立派なものと思つたがな、何しろ金がないからなア、汚い額緣に入れて出した、見損ふなよ。よく見てくれよ、そして、餘り嬉しがつて、畫の前でなぞ泣くなよ！　いゝか、いゝか！

（瑠璃子嬉しさに泣く。）

光一　それからな瑠璃子、まだ〱お前の喜ぶ事があるぞ直也君の事だが今度なア、いよ〱ボルネオへ行く事になつたよ

瑠璃子　えゝ？　ボルネオへ？

光一　さうだ、直也君も考へれば可哀想よなア、まともに云へば、よく我慢して居るのだ、あれからこつちは、酒ばかり飲んで己れも隨分困らせられたが、やつぱり己れの親友だけあつて、己れの云ふ事をよく聞いてな、此際あらゆる女々しい感情を捨てゝ、晴々しい心でボルネオへ仕事に行く事になつたのだよ、お前としても直也君としても同じく儚い希望にあこがれて、よもやと思ふ事を空想して居たらうが、一度つまづいた二人の生活は二人が結びつくよりも、むしろ互に自分を作り直して行く方が、はるかに美しい、はるかに新しい、いゝ生活が開けるのだ、直也君も氣が付いてもう總ての用意も出來、此次の船で行く事になつた。長い間、酒びたりになつて、殆んど人間らしい顔付をして居なかつたが、此頃は肉もつき、頰に血の氣のさすのを見ると、その事丈けは嬉しいが、諦めたあの男の心の中を思ひ出すと、己らア可哀想で堪らないよ。（と泣く）それについてな、己れの只一つの賴みがある。ボルネオへ行けば何年後に、日本の土地を踏むかさへ分らないのだ。兄としては或は不倫な事を許す事になるかも知れないが、人間の僞らない心から云へば己れは罪とは思はない、どうぞ、一日だけ直也君に會つて心持よく發たしてやつてくれ、兄さんが一生の賴みだ！　いゝだらう！　實は直也君をそこまで連れて來て居るのだ、初めの內こそ辭退したが、やつぱり直也君も會ひたいのだ、お前も會ひたいに違ひない、そしてな、双方で思殘す事のない樣にしてくれ、いゝだらう、連れて來ていゝだらう。（と行きかける）

瑠璃子　（慌てゝ止めて）兄樣、いけません、直也さんには會ひません。

光一　何故？　どうして？

瑠璃子　兄さん、私ね苦勞に苦勞をしつくして、やう〳〵諦めかけて居るのにあゝもう會ひたくない〳〵。何も彼も忘れたう御座いますわ。

光一　瑠璃子、それぢや兄さんはどうすればいゝのだ、そんは事を云はず機嫌を直してくれ、賴む。

瑠璃子　兄さん、もう何も云はないで下さい、そしてもう行つて下さい、私一人で泣かして下さい！

（と云ふ所へ、留吉、無理矢理に直也の手を引つ張つて來る。）

留吉　あゝ、若樣。

光一　留吉か、おゝ瑠璃子、直也君が來た！

瑠璃子　あゝいけません、いけません、あゝどうしたらいいだらう！

（と、云ひ乍ら垂絹を引いて自分と直也との間を遮る。光一も留吉もよき所に立つてぢつと考へる。）

瑠璃子　お兄樣、私、直也さんに御目にかゝれる位なら、こんなに苦勞はいたしません、お兄樣も直也さんも、いろ／＼御苦勞をなさいましたらうけれど、その御苦勞は今から見れば一歩、一歩明るい處へ出て入らつしやる道筋でした。たつた一人取り殘された瑠璃子は春にも會はずして、しぼんで行く花の樣に、このまゝ悲しい一生を了らなければなりません。私も直也さんに、たつた一目でも御目にかゝりたいのですけれど、命まで捧げた方に此處で會つては、人妻としての道が立たなくなつて仕舞ひます。お兄樣、私の心をお察し下さい。

光一　おい已れはもう胸が詰つて何にも云へなくなつた、君、何とか一言云つてやつてくれ給へ！

直也　瑠璃子さん、あなたの心持は僕にはよく分ります。光一君に云はれるまゝに、一生一度の事と思つて此處へ來たのは全く僕の淺薄しい未練でした。苦痛の上に新しい苦痛を與へた僕の愚かさを許して下さい！　瑠璃さん僕は、僕は……體を大切にして下さい！　僕は……僕は……（涙に口が利けなくなる）

（一同暫く沈む。）

留吉　（暫く考へてやがて涙を拂ひ）えゝ、世の中の義理だのへチマだのつて已れにやア、そんなものゝ用はねえんだ！

（と、いきなり行つて垂絹を引きあける。）

（瑠璃子と直也、二人間近く顏を合せる。）

（一同無言の内に。）

——幕——

大詰

其一　瑠璃子の寢室

上手硝子の外緣側に通じ、下手渡廊下を經て、母屋に通ずる。瑠璃子の寢室を、平舞臺に造る。正面に床の間、續いて違ひ棚あり、下手寄りに金屛風、衣桁などあり、總て美しき瑠璃子に相應しかるべき樣、輕薄に流れざる程度の造りをよしとす。

幕あく。

（と、瑠璃子、打寛ぎたる姿にて上手よりに小机に倚り物靜かに香をたく。部屋の隅に艶めかしき友禪の寢具枕等を置き、雪洞にしかけたる電氣、淡き光を放つ、夜いたく更けたる心にて、風荒く波の音、物凄く鳴りひゞく。しばらくして召使登場。）

お秋　あら、奧樣、まだおやすみでは御座いませんでしたか、あの御召物をたゝみませうと思ひまして。

瑠璃子　そんな事は自分でするから、お前はもう行つてやすんでおくれ。

お秋　ありがたう存じます。先程から留吉さんと、いろんなお話をして居ますと、つい目が冴えて仕舞ひまして。

瑠璃子　お前もやつぱり寢られないのかい。

お秋　奧樣もやつぱり、おやすみになれないので御座いますか？

瑠璃子　あゝ、何事も考へずに、靜かにねむりたいと思ふのだがね。

お秋　奧樣お察し申しますわ。（と目をしばたゝく）

瑠璃子　ねえ秋や、世の中の事と云ふものは思ふ樣にならないものだね。

お秋　私なぞは、只もうかうして奧樣やお孃樣に可愛がつて頂いて居りますれば、何の不足もございませんが、それでも時々淋しい事がございますけれど、いろ／＼奧樣の御心持を考へますと、私などが不足を云ふのが、本當に勿體ないと思ひます。

瑠璃子　先刻も私、和尚樣に伺つたが、人間は生れ落ちると、皆それ／＼の苦勞をしなければならないもので、あの立派なお釋迦樣でさへ色々の御苦勞をなされたさうだ。だから人間はみんな、自分の苦勞をしつかり、見つめなければいけないと仰有つたが、自分で自分を見つめるには、私の苦勞はあんまり大きすぎるのだよ。

（と、思はず涙をこぼす。）

（風だん／＼吹き荒れる。）

瑠璃子　何んだか嵐の樣になつて來たね。

お秋　こんな恐ろしい晩は一かたまりになつて何時迄もお話を承りたう存じますわ。

（そこへ美奈子登場。）

美奈子　あら、お母樣、未だおやすみでは御座いませんでしたの？　秋もまだ寢なかつたのかい？

お秋　はい。

瑠璃子　美奈子さんも未だ寢らずに居たんですか。

美奈子　はい、あんまり淋しいもんでございますから。

瑠璃子　此頃は、みんな淋しいのね。

（と、一同しんみりする。そこへ留吉のつそり登場。）

留吉　まだお目ざめかね、山國から出て長い事、東京のお邸に御厄介になつて居たもんだで、折角御厄介になつても波の音が枕について、眠られねえだよ。寝られねえと人間ッて云ふものな、げいもねえ事を考へ出すもんだよ。わし、まじり〳〵して居ると裏口をたゝく人があるで始めは風の音かと思うたが、念の爲め開けて見ると此の坊様が立つてたで、わし、狸が化けて來たゞと思つたゞよ。様子を聞くと和尚様の御使で奥様に會ひに來たと云ふだよ。可哀想に來る道が怖かつたと見えて、歯の根も合はねえ様にガタ〳〵震へて居るだよ。

（とワキの下から十歳ばかりの繪に書いた様な坊主をつまみ出す。）

瑠璃子　あゝ了奕さん、こんなにおそくどうして來たんです。

了奕　和尚様の御使にまゐりました。先刻和尚様が、靜かに御本を讀んでゐらつしやると、床の間に生けてある花が風もないのにホロリと落ちましたさうです。其の花が奥様の御好きな花や、若しも奥様の御身の上に何か災でも起りはしないかと伺つて來いと云ふのでございました。嵐も強うなつてゐるし、夜も更けますさかいどうも恐ろしうてなりません、誰れぞ外の人に頼んで下さいと御願ひしましたのやけど、了奕お前でなけりや、あかんとこない云はれますよつて、長い道を夢中で走つて參りました。

瑠璃子　それはどうも御苦勞様、で御座いました。私の體には何事も災は起りませんでした。どうぞ和尚様によろしく申上げて下さい。ね、こんな晩に本當に御苦勞様でしたわね。

了奕　その代り、歸りには誰ぞお寺の門まで送つて來て下され、私、もう恐ろしうて此處からは一人で出られへん。

（と懐中から師匠の手紙を出して見せる。）

瑠璃子　（手紙を見て）ホ、、、了奕さん、此手紙では了奕さんを使に出すが、どんな事があつても、歸りに人に送らしてくれるなと書いてありますよ。

了奕　そんな事書いてありますか、ほんなら私此處で夜の明ける迄、待たして貰ひまつさ。私どんな事したかつてようかへられん。

留吉　よろしい、私が送つて進ぜよう、和尚さんがなんと云うたつてこんな子供一人かへせるもんかな、さア一緒に行きませう。

お秋　けど、貴方に行かれて仕舞ひますと、全く女ばかりになつて仕舞ふんですけれど――。

瑠璃子　こんな時こそ、旦那樣でも居て下さると力になるんだけれど。

お秋　全くで御座いますわね。

瑠璃子　いくら強がつても女の手一ツではどうにもならない事がある――然しそんな弱い事で、どうなるもんですか、あんな小さい内からでも、あゝした修行をするんだものね――さア私達も寢ませう、そして皆も寢んで下さい。

(お秋、美奈子二人して、瑠璃子のために床を敷く。皆々丁寧に、挨拶して去る。風益々吹きつのる。瑠璃子着物をくつろげて床の上に坐り、ぢつと物思ふ。)

(風の音。雨の音。)

(暫くして家外に自動車のラッパの音。發動機のひゞきけたゝましく聞ゆ。瑠璃子、耳をそば立てる。)

瑠璃子　あゝもしやこんな晩に今、御使ひの云つた樣に何か私の身の上にあるんぢやないだらうか。

(と云ひ知れぬ恐怖に襲はれて又、すつくと立ち上る所へ勝平、ぐでん／＼に酔ひ、渡廊下を渡つて瑠璃子の寢室の戸口に立つ。)

瑠璃子　あらッ。(と愕然とする。)

勝平　瑠璃さん、私が突然歸つて來たので、貴女びッくりしたでせう。

瑠璃子　いゝえ、こんなに嵐がひどいので女ばかりで、實はどうしようかと心配して居りました所でした。本當によく歸つて來て下さいましたわね、私これで、どんなに安心して眠られるでせう。

勝平　(ぢつと瑠璃子を見て)　瑠璃さん、今日までこんなに心持よく俺を出迎へてくれた事は只の一度もありませんでした。瑠璃さん、貴女は今日は餘程どうかして居るね。

瑠璃子　私、今日と云ふ今日男の力の頼もしい事を知りました。本當によく歸つて來て下さいましたわネ、貴方も定めし、御疲れになつたで御座いませう、もう明け方も近くになつて居ますから、何卒あちらでおやすみになつて下さいまし。

勝平　イヤ私は未だ寢やすまない。こんな嵐の中を自動車を飛ばして歸つて來たのは一つには、貴女の體を氣遣つたのもあるが、已れは第一の目的は今朝あんな事を云つて出て行つた事が氣になつて氣になつて早速あなたに會つてあなたの前で素ッ裸體になつた私の心を見せてあやまりたいと思つてやつて來たんです。私は今迄と違つて、すつかり目が醒めて今迄とは、まるで違つた心持の人間になつたのでさあ。

（女中、此の時命じられたるビールにコップ等を持つて來る。）

勝平　もう皆やすましてくれ、已れは隨意に寢るから。（と召使を去らせ、自分で隔ての襖をしめる。瑠璃子にビールを注がせて飲み干しながら）あすでもいゝ事、明後日でもいゝ事だが、かうして急いでやつて來たのは今云つた樣な譯なんでさア。（と間を措いて）俺は今日、東京へ行つて色んな事を考へたんぢやが、一言にして云へば俺は又新しく貴女に、すつかり惚れ込んで仕舞つたのぢや。私は今年四十五になるが、只の一度も女に心を動かした事はなかつた。亡くなつた妻に對しても給金のいらない高等の女中位に思つて居たし、金が自由になる樣になると、どんな女でも酒や煙草と同じやうに我々男子の疲れを慰めるため位に考へてゐましたが、貴女に會つて此方と云ふものは、貴女だけは男のために造られた女でなく、女自身のために造られた女、男の玩弄具に造られたどころか、男を支配するために造られた女だと云ふ事に氣が付いて結婚した當座こそ何の此の小娘がと俺を嫌ふなら嫌つて見よ、今にキッと征服してやるからと思ひましたが、今ではそれも俺の考へが間違つて居たと思ふのです。（と極めて眞面目に云ひながらビールを飲んで）俺は世の中に金錢より貴いものはない、金さへあれば何んでも出來る。郎ち金の力は名門の貴女を妻にした、ざまア見やがれと誇つて居たが、私の云ふ買つたつてのは只、妻と云ふ名丈けで貴女の心も身體も本當に私の物では無かつたのだ、さう氣が附くと今度は金で買ひそこなつた貴女を俺の眞心で買はうと決心したんです。どうです、瑠璃さん、私の心持が分つてくれましたか、つまりその結婚を俺の眞心で清めて、俺の財産も生命も皆貴女の前に投げ出しますから、何卒更めて莊田の妻になつてくれませんか、俺はどうしても貴女が居なくちや、一刻も生きて居られないんだ。瑠璃さん、俺の心持が分

つてくれましたか、何故だまつて居るのです。貴女はどうしても私の貞心を受け入れてはくれないのですか！

瑠璃子　（泥酔した勝平の執拗な態度に、いさゝか恐れた感じながら）あら、そんな事を仰有つて、私、始めから貴女の御心は、よく理解して居ますわ。

勝平　そんなら今迄、敵であつた私を許してくれますか、（間を措いてぢつと瑠璃子を見ながら）本當に私の妻になつてくれますか！

瑠璃子　貴方、何を仰有るのです、私は、貴方の妻ではありませんか。

勝平　あゝ、その笑ひ顔ぢや、その笑顔は俺をなやますと同時に俺を嘲けり罵つて居るのぢや、俺は其笑顔は幾度も見た、そして其皮一ッ下は俺に對する憎惡で一杯になつて居るんだ、其の笑顔は俺をなやまし殺さうとするんだ！

瑠璃子　貴方、もう餘程遲うございます。こんな時間にお話を伺ふのは、私、何んだかいやでございます。

勝平　夫婦が話をするのに、時間にかけかまひはない筈だ、まして今日は俺に取つては重大な話だ、俺はしつかりした返事を聞く迄は一歩も此處を退かんから。

瑠璃子　貴方が此處から退かないと仰有るなら、私から御免を蒙ります。（と立つ）

勝平　行かれるなら行つてごらん！

瑠璃子　えゝ、參ります！

（と、隔ての襖に手をかける。と、どうしても開かない。）

瑠璃子　貴方はもしや――

勝平　出は入りには鍵をかけさせた、此の部屋は俺等二人の天地ぢや、瑠璃さん、外はあの通りの大嵐ぢや、俺はあくまでも貴女の返事を待つんぢや。

瑠璃子　貴方は卑怯です！　女と侮つて卑怯な事をなさいますね。

勝平　何が卑怯だ、俺は之れ以上貴女に馬鹿にされ度くはない。俺は人間として、貴女の理解を求めたのぢや。それが認められなければ俺は獸として迫つて行くより途は無いのぢや。

（とスックと立上りて瑠璃子の前に立つて、いきなり瑠璃子の手を握る。）

瑠璃子　（叫ぶやうに）何をなさるんです！

勝平　何をしようと俺の勝手だ！　妻を生かさうと、殺さ

うと夫の自由だ！

瑠璃子　恥をお知りなさい！　私は妻でも貴女の奴隷ではありません！

勝平　恥も糞もあるものか！　俺はもう獣になつて居るんだ！

（と、狂暴に挑みかゝる。瑠璃子生命を限りに逃げ廻る瑠璃子の助けを呼ぶ悲鳴。吹き荒ぶ嵐の音。荒狂ふ怒濤の響、兩人、格闘しばらくあつて、あはや瑠璃子の進退谷まれる時、一陣の暴風、電線を斷ち切りて、あやめも分かぬ暗黒となる。）

（折から、縁側の硝子戸を打ち破つて現はれた人影あり。それは低能の勝彦である。勝彦は瑠璃子を勝平の手より引きはなし、熱心に勝平に反抗する。）

勝平　誰れだ／＼！　強盗だ、早く誰れか來い！

（と呼ぶ。此間に瑠璃子、縁側に出る。勝平、その後より勝彦つゞいて出る。三人思ひ／＼の心にて入亂爭ふ。）

――道具廻る――

其二　海を見下ろしたるテレース

舞臺は母屋の洋館よりつゞきたる正面に海を見下したるテレース。二三段の低き石段を昇れば三方に欄を繞みたる一面の石疊、欄の下は直ちに波打際の心にて折から波の飛沫上る。テレース階段及手すりは青き蔦一面にからみつく。

道具止らぬ内に。

（瑠璃子、勝彦、勝平の三人出で來り暗の中に入亂れる暫くして鐵砲を持ちたる喜太郎、お秋等、恐る／＼出で來り、様子を窺ふ。勝平は再び三度、瑠璃子に迫る、其都度、勝彦は瑠璃子の爲めに勝平を押しのける。かくする事二三度。とゞ、テレースの正面の欄に瑠璃子危く組伏せられんとする時に、勝平助けを呼ぶ。喜太郎、勝彦に鐵砲を向けんとすると、其瞬間、勝平自分に反抗するのは勝彦であると氣付き、「打つな！」と呼ぶ。勝彦滿身の力をこめて勝平をつく、勝平、不意を打たれて、テレースの欄を越えてモンドリ打つて海に落つ。）

（瑠璃子は勝彦を引摑つて、テレースの下に下り初めて勝平を落したのは勝彦であると知ると驚いて勝平を助けに向ふ。）

（一同の喚聲、家中から大勢の者勝平を助けに向ふ。此時より曉、やう／＼おとろへ、夜やう／＼に明けなんとして、灰白き光いづれともなく漂ふ。）

（「お醫者樣を！　近藤樣を！」などと云ふ聲聞ゆ。）

（暫くして人々は勝平の身體をかつぎ出る。テレースの下に寢床をしつらへて置く。一同熱心に介抱する。）

勝平　（苦悶の中より）　勝彦を呼べ！　美奈子を呼んでくれ！

瑠璃子　只今、直ぐ參ります。

（召使に目で知らせる。召使靜かに去る。と暫くして、美奈子と勝彦、勝平の傍に來る。）

瑠璃子　あなた、美奈子が參りましたよ、（と勝彦に）お父樣がお召しですよ、ずつとお傍に入らつしやい。

美奈子　お父樣、しつかり遊ばして下さい、お父樣、美奈子で御座います！

勝平　（いよ／＼苦し氣に）　あゝ美奈子か、勝彦か、（と兩手に兩人の手を取り）　お父樣は、もう駄目ぢや、瑠璃さん、總て私が悪かつた！　敵の私は憎いぢやらうが、罪のない二人の子供の行末を、どうぞ貴女の手で見てやつて下さい。莊田勝平が最後の言葉は貴女に對する謝罪とお頼みぢや、瑠璃さん、頼みます！

瑠璃子　どうぞ、しつかり遊ばして下さい、二人の事は命に代へても、きつと御世話いたしますから、どうぞ御安心なすつて下さい！

勝平　有難う／＼。俺の感謝の印として莊田家の財産全部は貴女の自由にして、穢れない美しい處女の身を以て何卒幸福な結婚をして下さい！

（と云ひ了ると段々に死期の近づいて來る樣子。醫師登場。勝平を診察して已に如何ともしがたいと云ふ思入れ。家の者、皆そばに寄つて介抱する。）

美奈子　お父樣。

璃瑠子　あなた。

勝平。瑠璃子さん、……幸福に……幸福に……

（と、云ひ乍ら瑠璃子のうなづくのを見て、がつくりと落命する。一同取りすがつて泣く。光一と直也走つて出て來る。）

璃瑠子　兄さん……　（と勝平は旣に死んで仕舞つたと云ふ思入れ。）

光一　（勝平を見て）　莊田さん、莊田さん、あゝ、こんな場合に御目にかゝるとは思はなかつた！　瑠璃子、お前

これから先は、どうする考へだ？

美奈子　お兄様でございますか？（と光一に挨拶して）父は最後迄お母様の幸福を願つてあの御方と結婚なさる様に望んで居りました。お兄様、どうぞさうして御上げ下さいまし――之れが亡くなりました父に取つて此上ない追善だと存じます。御願でございます。

瑠璃子　美奈子さん、私本當に嬉しいと思ひますよ。けれど私は一生一人で居て、貴女と勝彦さんのために母になるのが一番樂しい、いゝ事と思ひます。ねー御兄さん、私は今迄勝ちつゞけて、どんなに今日の日を空想しましたらう――そしてその幸福があらはれると、私はもうどうする事も出來なくなりました。私は家を出る時に、ユヂットの氣で參りましたが、ユヂットは生命を捨てて國を救つたのでした。私も、とうに死ぬ筈なのを色々の未練や、執着で生きて居た私は死ぬより辛い思をしなければならなくなりました。

直也　本當にさうだ！　二人の戀は已に破れたのだ。事情が元に戻つても、心の矢傷は決して治りやしないんだ。瑠璃子さん、僕は今日あなたに會つて再び新しい力を得ました。僕は潔くボルネオへ出かけます！……瑠璃さん、――達者で居て下さい！

瑠璃子　ありがたう御座います。貴方も御機嫌よう。（間）兄さん。これは家を出ます時に、身の守りにしろと云つてお父さまが、下さいましたのですけれど、今はもう私の身體は全く自由になりましたから、お兄様からお父様へお返へしして下さい。（と短刀を出し）それから、これも、もう、私要らなくなりましたわ！

（と、懐中から直也の寫眞を出し兄に渡し、しどけなく兄の胸に泣く。）

光一　（寫眞を見て）直也君の寫眞ぢやないか。

瑠璃子　えゝ、あの時から今迄、私はやはり處女の氣で肌身離さず持つて居ました。が今はもう人の妻、人の母ですもの何も要らなくなりました――

（瑠璃子、込み上げて來る涙をこらへ、勝平の傍に寄つて「貴方！……貴方！」と云ふ。）

（勝平の體は石の如く冷たくなつて居る。）

（海のあなたより夜、靜かに明け渡り、東雲の空に幸福の光、美しくかゞやく――）

――靜かに幕――

坊つちやん（四幕十四場）

夏目漱石原作

第一幕

第一場　教員の控所

粗末なる洋室。左右扉のある出入口、正面に窓、廊下を隔てて向うに教室のある意。（この廊下を小倉の制服を着た生徒が絶えず往來して、時々窓から中を覗くやうな事あり。）壁には時計、授業の時間表と黒板を掲ぐ。室の中央には長き卓幾個と椅子十四五脚あり。教頭の席は端に放して設く。卓の上には粗末な本棚と硯箱が置いてある。喇叭が鳴つて暫時すると、左右の入口からチラリ、ホラリと教員が入つて來る。いづれも和服洋服好みの拵へ。その中主なる人物は、教頭の新井、和服の下へフランネルの赤シャツを着て居る。英語の教師古賀と漢學の教師谷川は和服、畫學の教師吉川は透綾の羽織を着て、扇子をパチつかせて居る。博物の教師伊藤と數學の教師堀田と、體操の教師富田は洋服を着て居る。いづれも、『お早う、お早うムいます。』など、國訛りのある言葉にて言ひ、各自席へ着いて卓上の書物など調べ、扇など使ひ乍ら、觀客に聞えぬ程度に語り合ふもよし。暫くすると入口から、校長の長谷川が新任の秋野を連れて這入つて來る。校長は洋服で薄髭のある、色の黒い目の大きな狸のやうな男である。秋野も洋服で辭令を持つて居る。校長を見て教員一同は一寸會釋する。校長は勿體振つて。

校長　諸君、昨日一寸お話して置いた秋野君を御紹介致します。秋野君は數學の方を擔當される事になつて、東京から赴任されたのであります。何分よろしく……。

（秋野は默つて頭を下げる。校長は教頭の方を向いて。）

校長　こちらは教頭の新井文學士であります。

（秋野は新井の處へ辭令を持つて行つて挨拶する。新井は辭令を見て。）

新井　僕は新井で、以後御別懇に……。

（一寸椅子を離れる。夫れから順々に教員の前へ辭令

を持つて行つて辭儀をする。その中堀田の處へ行くと。）

堀田　やあ、君が秋野君ですか。ちつと遊びに來給へ。あはゝゝゝ。（と笑ふ）

（谷川の前へ行くと。）

谷川　昨日お着きで厶るか。さぞお疲れで……。夫でもう授業をお始めですか。大分御精勵ですな。

（次に吉川の前へ行くと。）

吉川　東京と聞いては嬉しいね。お仲間が出來て……。私もこれで江戸ッ子ですよ。何より結構ですな。

（他はいづれも辭令を見て『はア然うですか。』『何分宜しく。』など言ひ、椅子から放れて會釋する者も有れば、高慢顏をして碌に首を下げない人もある。一順挨拶が濟んだ時、時計が七時を報じ、再び喇叭が鳴つたので、教員は各自に白墨や本を持つて捨臺詞よろしく出て行く。堀田は秋野の傍へ來て。）

堀田　おい君、何處に泊つて居るんだ。ウム、山城屋か、今に行つて相談するよ。

（と一人承知して出て行く。室内は校長と秋野と二人になる。）

校長　まあ君かけ給へ。いづれ改めて教場へ案内して、生徒にも紹介をします。

（秋野は傍の椅子にかける。）

校長　まあ、今日は土曜日ではやく退るし、明日は日曜だから、明後日から課業をはじめてくれ給へ。夫から授業上のことは、數學の主任と能く打合せをして置いてくれ給へ。

秋野　數學の主任は誰ですか。

校長　今君に話をして行つた堀田君ですよ。

秋野　あゝ、あの人ですか。

校長　然うです。夫から教育の精神と云ふ事に就いて、緩りお話をしたいのですが、大體は呑込んでお居での事と思ひますから、煩くは言ひません。生徒の模範となるやう、充分勉強して下さい。一校の師表と仰がれなくては行けないと同時に、學問以外個人の德化を及ぼさなくては、教育者にはなれませんからねえ。

秋野　校長。そんなむづかしい責任があるとすると、わたしは考へなくちやなりませんね。人間は大概似たもんで、腹が立てば喧嘩の一つ位は誰でもするだらうと思ひます。

この樣子ぢや滅多に口も利けない。散歩も出來ない、そんな難しい役なら、こんな處へ來るのぢやなかつた。又そんな豪い人が四十圓の月給で、遙々こんな校舍へ來るものでせうか。到底あなたの仰る通りには出來ません。此辭令はお返し致します。

（辭令を返さうとする。）

校長　君も隨分氣のはやい男だね。これは只私の希望である。あなたが希望通りに出來ないことは能く知つて居ます。心配しなくても好いから、今日はこれで引き取つて下さい。

秋野　然うですか。夫さへ承知して居て下されば好いのです。

（と會釋して退る。）

―― 暗轉 ――

第二場　山城屋の一室

表二階の十五疊敷で古びたれど立派な建築。正面に大きな床の間、その隅にズックの革鞄と毛繻子の洋傘が置いてある。鴨居に日清戰爭の石版畫の額、正面の塗骨の障子を明けると、欄干があつて、漁村が見え又海が見える。下手は廊下になつて居て階子の昇口が見える。折々汽船の汽笛が聞えて來る。やがて女中に案内されて秋野が上つて來る。

女中　お歸りなさいまつせ。お座敷を變へて置きましたぞな。

秋野　夫は有難う。こりや好い座敷だ。見晴しも素的だ。先刻の座敷とは大違ひだ。階子段の下の四疊半と來ちや、むし殺されさうだつたからね。

女中　恰度え丶都合で、先刻お座敷が明いたぢやて。

秋野　嘘を吐くな。この座敷は昨日から明いて居たんだぜ。茶代の利き目は恐ろしいもんだ。

女中　何ぞな。

秋野　何でも好いのだよ。あ丶暑かつた。

（と言ひながら洋服を脱いで、衣桁に懸つて居た浴衣と着かへる。女中は茶など入れて出す。）

女中　今まで學校にお居でやしたか。

秋野　いや學校は早く出たんだが、歸つたつて仕方がないから、少し町を散歩してやらうと思つて、無暗に足の向く方を歩き散らして見たが、面白くなかつた。

女中　縣廳の方へおいでやしたか。

秋野　縣廳も見たが、あの建築は前世紀のものだ。あんな處に居る人間に好い智慧は出つこないよ。夫から兵營も見て來たが、麻布の聯隊から見ると、實に氣の毒になるね。大通りも通つて見たが、道幅が神樂坂の半分位で、町並は迚も比べものにはならなかつた。恁うして見ると二十五萬石の城下だつて、高の知れたもんだ。

女中　東京はそんなに賑やかかなもし。

秋野　當り前だ。こんな處を御城下なんて、威張つて居る人間は可哀想なものだ。

（と言つて大の字に寢る。）

女中　それではお腹がお空きやしたらう。今直にお膳を持つて來ますぞな。

秋野　いや腹ならいいよ。今天麩羅蕎麥を食つて來たから……………

女中　何處で上つておいでやした。

秋野　何でも大町と云ふ處だつた。

女中　おや郵便局の隣りでおあがりやしたか。

秋野　然うだ、然うだ、その通りだ。俺は蕎麥が大好きで蕎麥屋の看板を見ると素通りが出來ないのだ。處が東京を出る時食ひ損なつたので、四五日飢ゑて居た處へ、東京蕎麥と書いた看板が目に入つたから堪らない。薬味の匂ひがプンとしたから、夢中で暖簾の中へ這入つてしまつた。サテ上つて見ると看板ほどでもない。東京と斷る以上は、モウ少し綺麗にしさうなものだが、滅法汚ない。然し蕎麥は旨かつたよ。たうとう、天麩羅蕎麥四杯と平げてしまつた。

女中　そんなにお氣に入りやしたら、毎日でもお出でなされまつせ。學校の直ぐ傍で、都合が好えやけに……。

秋野　フム、あの蕎麥が學校の傍になるかね。

女中　あの角をお曲りやしたら、直く學校の門の處へ出られますぞな。

秋野　あゝ然うか。俺はうろ／＼廻つて歩いて居たから、學校の傍とは氣が附かなかつた。然う云へば隣つこの薄暗い處に生徒らしい奴が三四人居て、こつちをジロジロ見て居たつけ。

女中　そら廣いやうでも狹い處や。二十五萬石の御城下だとつて、高の知れたものぞな。

秋野　ヘン、遣つて居やがる。

（と云つて又大の字形に寢る。この時階子の口から小女が出て。）

小女　秋野樣。堀田先生がお出でやした。

秋野　フム堀田……（と考へて）ウム、山嵐か。こつちへ通してくれ。

（と言つて居る内に、既に堀田が上つて來て。）

堀田　秋野君。先刻は失敬した。あは、、、、。

（と大きな聲で笑ふ。）

秋野　僕こそ碌に御挨拶もしないで、失禮しました。まあどうぞ此方へ……。

堀田　ぢや失敬するよ。

（と座敷へ通り、女中の出す座蒲團の上へあぐらをかく。）

堀田　大そう立派な座敷に居るんだね。こりや縣知事以上だ。餘つぽど費るだらう。

秋野　實は今こゝの座敷へ入つたばかりなのだ。初めは風通しの惡い、階子段の下の薄暗い四疊半へ入れられたので、こりや僕の形が見すぼらしいから、見括つた眞似をしやがつたと思つて、癪に障つたから、茶代を金五圓と奮發したのさ。すると忽ち御覽の通りの有樣さ。

堀田　なあに五圓……。本當か。

（と眼を丸くして驚く。）

秋野　嘘と思ふなら、この女中に聞いて見たまへ。

（と言ふので女中が居たゝまれず、階子の口へ去る。）

秋野　オイ女中、逃げなくても好いよ。

堀田　豪い。流石に君は江戸ッ子だ。大いに我が意を得たり。俺は君が大好きになつた。是から君と特別の交際をしようねえ。

秋野　夫や結構だ。僕もこんな他國へ來て、親友の一人もないのは心細いからね。

堀田　ぢや改めて今日から親友になつて、大いに胸襟を開いて語らうかね。

秋野　遠慮なしにやらうよ。

堀田　好からう。

（と言つて堀田は洋服の上着を脱ぎ、ワイシャツの腕をまくる。）

堀田　さあ恁うなると君に命令したい事があるね。いくら君が江戸ッ子だつて、この十五疊敷にいつまでも納まつて居る譯には行くまい。月給を皆拂つたつて追付きやしないよ。處で俺が好い下宿を周旋してやるから、そこへ移り給へ。

秋野　そんな命令ならいつでも聞くよ。五圓の茶代を奮發

して、直ぐ細君も殘念だが、どうで引越すのだから早いが好い。何分頼むよ。

堀田　よし頼まれた。町外れの岡の中腹にある家で、至極閑靜なんだ。主人は骨董を賣買するイカ銀と云ふ男で、ふだんから心安くして居るから直ぐ話を極てやるよ。

秋野　夫ぢや明日から行つても好いね。

堀田　好いとも、俺が慥かに受合つた。さて是れからが酒でも飲み交して、胸襟を開くと云ふ處だが、敎員が眞つ晝間から酒でも有るまい。

秋野　俺は下戸なんだから、酒の交合は御免だよ。

堀田　ぢや暑いから氷水でも飲まうか。

秋野　夫なら賛成だ。

堀田　オイ女中ウ。

（と手を叩く。小女が上つて來る。）

堀田　オイ氷水を二杯然う言つて來てくれ。ソレ三錢……前勘定だよ。

（と蟇口から三錢の銅貨を出して渡す。）

秋野　夫は俺が拂ふよ。

堀田　いや今日は俺が奢るよ。君は五圓のお客樣だ。その中ウント奢るさ。オイ早く頼むよ。

（小女は三錢の銅貨を持つて去る。）

堀田　なあ秋野。君とこれから長く交際をするに就いて、第一に聽きたいのは、江戸ッ子の癖に、何だつて、こんな所へ來て、敎員なんかするんだい。つまらないぢやないか。

秋野　俺も詰らないと思つて居るが、實際は仕方がないのだ。俺の家は東京でも相當な暮しをして居たんだが、母が死んで六年目の正月、親父が卒中で死んでしまつて、たつた一人の兄はあつたが、俺と違つて狡猾な奴だから十日に一遍位の割に、いつも喧嘩ばかりして居た。そんな風だから親父が死ぬと、兄貴は家財全部を金にしてしまひ、何とか會社の九州の支店へ行くから、これを資本に商賣するなり、學費にして勉強するなり、隨意に使ふが好いと言つて、俺に六百圓くれて、後は一切構はないと云ふので、九州へ行つてしまつたのさ。

堀田　兄弟なんてものはみんなそんな者だよ。氣が合はないとなると、他人より冷淡だからね。

秋野　そこで長年使つて居たお淸と云ふ女中が、俺を坊つちやん、坊ちやんと云つて、實によく世話をしてくれるのだ。そのお淸の家に厄介になつて居て、物理學校に入

つて三年間と云ふものは、まア人並に勉強はしたが、別段質の好い方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利だつたのだ。然し不思議なもので、三年たつたらたうとう卒業してしまつた。自分でも可笑しいと思つたが、苦情を言ふ譯もないから、おとなしく卒業して置いたんだ。すると卒業してから八日目に、校長が呼びに來たから、何の用だらうと思つて出掛けて行つたら四國邊の或る中學校で、數學の教師が要る。月給は四十圓だが、行つたら如何だと言ふ相談だつたから、よし行きませうと即席に返事をして、後先の考へもなく、こんな處へ來てしまつたのだ。

堀田　然うして見ると、君も隨分呑氣な男だね。その點に於いても、君と俺とは氣持が共通して居るよ。俺の話は又繰りするがね。そこでモウ一ツ聞きたいのは、今日學校へ來て、お目見得した感想は如何だつたね。

秋野　別に變つた感想はないが、あの赤シャツは何だい。

堀田　あれか、あれは教頭で新非と言ふ男だが、妙に女のやうなやさしい聲を出すだらう。あれでも江戸ッ子で然も文學士なんだ。赤シャツを着るのは今日が始めてぢやない。年中着て居るのだ。而も此の暑いのにフランネルのシャツだから驚くだらう。彼の説明に據ると、赤い物は身體の藥になるから、衞生の爲にわざ〳〵着るんだとさ。

秋野　ヘン、笑はしやがる。そんなら着物も袴も赤にすれば好いぢやないか。文學士だけに御苦勞な形をしたもんだね。處で俺は二三人の奴にあだ名を附けてやつたよ。

堀田　そりや面白い。然し新任早々から人のあだ名を附ける位ぢや、これから何年の先が思ひやられるねえ。

秋野　大丈夫だよ。これ以上の事はしないからね。

堀田　然して君、誰にあだ名を附けたんだい。

秋野　先づ赤シャツが教頭だらう。夫から『ウラナリ』と言ふのがあるのだ。

堀田　『ウラナリ』と言ふのは何の事だい。

秋野　こりや俺にも能く解らないのだが、家に居たお淸の話に、『ウラナリ』の唐茄子許り食ふと、顏が蒼くふくれると云ふ事だから、あの顏の色の惡い眼鏡をかけて居た人ね。あの人を『ウラナリ』と命名してしまつたのさ。

堀田　誰だらう。俺の後に居た若い人か。

秋野　慥か然うだと思つた。

堀田　あれか。あれは古賀と云ふ英語の教師だ。『ウラナ

り』は好いね。あはゝゝゝ。（と笑ひ）その次は……。

秋野　こりや平凡なんだが、校長が狸さ。

堀田　狸も好いな。

秋野　夫れから『野だ』だ。こりや直ぐ解るだらう。

堀田　野太鼓と云ふのか。透綾の羽織を着て、扇をぱちつかせて居た、藝人染みた男だらう、

秋野　然うだ。

堀田　あれは畫學を受持つて居る吉川と云ふ男で、實際太鼓持のやうな男だ。然しあれでも江戸ッ子だよ。

秋野　あんな嫌な奴が江戸ッ子なら、俺も江戸ッ子には生れたくなくなつたよ。

堀田　その次は誰たい。

秋野　モウ夫ッ切だ。

堀田　嘘を吐け。未だ有るだらう。

秋野　モウ無いよ。

堀田　無い事があるもんか。少くともモウ一人はある。男らしく言つてしまへ。

秋野　だつて無い者は仕方がない。

堀田　屹とないか。

秋野　屹とない。

堀田　屹とか。

秋野　君も隨分くどいね。

（この時小女が氷を二つ盆にのせて持つて出る。）

小女　お待遠でござんした。

（と二人の間へ置いて去る。）

秋野　ぢや御馳走になるよ。

（と洋盃を取らうとする。）

堀田　まあ待つた。これを飲む前にモウ一人だけ言つてしまへ。

秋野　餘ッ程氣になると見えるね。一體夫は誰の事を言ふのだい。

堀田　解つて居るぢやないか。俺のあだ名も附いて居るだらう。

秋野　そんな事はない。君のは未だ附けてないよ。

（と氷水を飲みかける。）

堀田　駄目だ。君は何と言つても不可ない。今ニヤリと笑つたぢやないか。夫が何より證據だ。卑怯な事をするな。絶交だぞ。

秋野　然う怒つちや困るね。

堀田　ぢや白状するか。

秋野　まるで罪人扱ひだね。ぢや言ふがね。君怒つちや困るよ。

堀田　決して怒らない。怒らないと云つたら如何しても怒らない。

秋野　夫ぢや言ふがね。實は君のあだ名も附いて居るんだよ。

堀田　それ見ろ。かくしやがつて……。俺の事を何と言ふのだい。

秋野　怒つちや困るよ。

堀田　怒らないつてば。

秋野　屹とだねえ。

堀田　君も隨分くどいね。

秋野　ぢや言ふがね。君を初めて見た時に、その毬栗頭の工合から、その色の黒い様子がね。叡山の悪僧そのまゝに見えたもんだからね……。

堀田　夫で何と附けたんだい。

秋野　怒つちや嫌だよ。實は『山嵐』と附けたのだ。

堀田　なに……山、嵐。

秋野　夫がさ。君のその威風堂々たる、その男らしい風采によつてさ。

堀田　人を上げたり下げたりするな。然し山嵐は旨いね。こりや好い。あはゝゝゝゝ。

（と大きく笑つて、氷水のコップを持つ。）

秋野　氣に入つたかね。

堀田　大いに氣に入つた。あはゝゝゝゝ。

（と堀田が笑ふので、釣込まれて秋野も笑ふ。兩人氷水を飲みながら、顔を見合せては笑ふ。）

――汽笛の音がして　幕――

第二幕

第一場　校舎の廊下

正面に窓があつて、硝子越しに樹立を透して洋館の一部が見える。好き處に告知板があつて、上下二ヶ所に運動場へ行ける出入口がある。喇叭が鳴るとドヤドヤ階子段を下りる音がして、左右から制服の生徒が大勢出て、出入口から運動場へ下りて行く。最後に秋野が出て、前へ行く生徒に聲をかける。

秋野　おい、一寸君待ち給へ。

生徒一　僕ですか。

生徒二　僕ですか。

生徒三　僕ですか。

（と五人の生徒が秋野の傍へ行く。）

秋野　君等四五人に用があるんだ。一寸待つてくれ。

生徒一　用とは何ぞな。

生徒二　何をお言ひるけれ。

秋野　僕は改めて聞くがね。先刻僕が教場へ這入つて行つた時、黒板一杯に大きな字で天麩羅先生と書いてあつたね。然うして僕の顔を見ると大勢でワツと言つて笑つたね。積にさはつたが、僕は未だ新米だから、おとなしく黒板の字を消してさつさと講義を濟ましてしまつたが、あれは君等の中の誰かゞ悪戯したんだと思ふが、大いに宜しくないね。誰かあんな悪戯をしたか、男らしく言つてしまひ給へ。

生徒一　僕ぢやないぞな。

生徒二　僕は知らんぞい。

生徒三　僕でもないぞな。

秋野　多くの生徒の中だから、君等が書いたのだと言つて責る譯ぢやないが、然し書いた人を知らないとは言はさないぞ。

生徒一　そりや知つて居るぞい。知つて居るが誰だと云ふ譯には行かんがなもし。

生徒二　先生が大町の蕎麦屋へ入つて、天麩羅蕎麦を喰べて居たと云ふので、學校中の評判ぞなもし。

生徒三　それだから先生の事を、皆が天麩羅先生とお言ひるぞなもし。

生徒四　黒板に書かんでも好え事ぢや。又書かれても好え事ぢや。

秋野　夫ぢやモウ一度聴くがね。教員が天麩羅蕎麦を食つちや可笑しいと云ふのかね。

生徒一　可笑しいと云ふ譯はないぞい。然し四杯食ふのはエラ過ぎるぞなもし。

秋野　四杯食はうが五杯食はうが、俺の錢で俺が食ふのに文句があるもんか。だから田舎者は嫌ひだと云ふのだ。一時間歩くと見物する町もない様な狭い處に住んで居て外に何も藝がないから、天麩羅事件を日露戦争のやうに觸れやあがる。無邪氣なら一緒に笑つても好いが、子供の癖に、する事に毒を持つて居やあがる。

生徒五　先生の言ふ事は餘り早うて分らんけれ、モウちつと緩々やつておくれんかなもし。

秋野　俺は江戸ッ子だから、君等に分るやうに緩りとは喋舌れないのだ。全體生徒の癖に失敬ぢやないか。こんな惡戯が如何して面白い。卑怯な冗談だ。君等は卑怯と云ふ意味を知つて居るか。

生徒一　知つて居るぞい。自分がした事を笑はれて怒るのが、卑怯ぢやらうがなもし。

秋野　なに生意氣な……。モウ一度言つて見ろ。

（と言つて怒る。）

生徒一　江戸ッ子は豪いぞなもし。

生徒二　天麩羅先生が怒つたぞ。

生徒三　逃げろ。逃げろ。

（生徒はワイワイ言つて、運動場へ出て行く。）

秋野　失敬な奴だ。

（と怒り切つて居ると、その後の羽目を叩いて、生徒が又ワイワイ囃し立てる。秋野は堪へ切れなくなつて運動場へ出て行く。この姿を見て以前の生徒の中の一人が、他の入口から忍んで出て來て、告知板に『一ツ天麩羅四杯也、但し笑ふ可からず。』と白墨で書いて逃げて行く。やがて始業の喇叭の音がして、運動場の口から生徒が入つて來て、いづれも左右の教室の方へ行く。後から秋野が入つて來て、不圖告知板の文字を見てカッとなり、文字を消して、黒板拭を板の間へ叩き附けて下手へ入る。此時前幕の教員が教室へ行く意で右往左往す。やがて秋野が血相變へて出て來ると、向うから堀田が出て來て行合ふ。）

堀田　秋野如何した。顔色が惡いぞ。

秋野　堀田。俺は癪にさはつて堪らないから、是から下宿へ歸つて、今日は休んでしまふぞ。

堀田　大層怒つて居るな。喧嘩でもしたか。

秋野　生徒が俺を侮辱したのだ。今第三の教室へ行くと、黒板に『天麩羅を食ふと減らず口が利きたくなるものなり』と書いてあつた。その前にも此の告知板に『一ツ天麩羅四杯也、但し笑ふ可からず』と、惡戯書をしやあがつた。その前にも第二の教室で『天麩羅先生』と書きやがつた。これが怒らずに居られるもんか。俺は歸るよ。校長に然う言つてくれ。

（と言つて、ドンドン出て行つてしまふ。）

堀田　何の事だかさつぱり分らない。

（と言つて、後を見送る。）

―― 暗轉 ――

第二場　宿直室

教場の裏手にある寄宿舍の一部で、上手の鴨居に、秋野の洋服とワイシャツが掛けてある。其の傍に寄せて蚊帳を吊り、中に床が敷いてある。中央に粗末な机、前に座布團。机の上には目覺し時計と、盆にのせた湯呑と土瓶、上にはランプがつるしてある。正面の壁に『團子二皿七錢』と新聞紙へ大きく書いて貼紙がしてある。前の場より二三日後の夜。秋野が西洋手拭をブラ下げて入つて來る。

秋野　あゝ好い心持だ。暑い時は湯に限るな。（手拭を鴨居の釘へかけようとして貼紙を見る）何だ是は……おい小使、小使。

（秋野は大聲に呼ぶ。小使が入つて來る。）

小使　先生、お呼びに成りましたか。

秋野　（貼紙を指して）是は誰の惡戯だ。誰がこんな物を張り付けたのだ。

小使　はい。（貼紙を見る）さあ、他に何誰もお出でなさいませんでしたが、先生が此所に居らしつて御存じがないのは可笑しう厶いますな。

秋野　俺は今歸つて來たばかりだ。して見ると又生徒の仕事だな。

小使　ぢやあ矢張り天麩羅の一件ですね。

秋野　なに。

小使　先生は又何處かで團子をお喰りなさいましたね。

秋野　うむ、喰つた。昨日住田の溫泉へ行つた歸りがけに、彼所の遊廓の入口にある團子が大層うまいといふ評判だから、一寸寄つて喰つて來た。

小使　それです。それを又生徒さん方に見附かつたに違ひありません。

秋野　何故團子を喰つちや惡いのだ。天麩羅を喰へば落書をする、團子を喰へば貼紙をする。これぢや全く遣切れない。此處の生徒達は始終俺の身體を見張つてゞも居るのか。呆れた奴等だ。

（秋野は貼紙を引つぱがして破いて丸めてしまふ。）

秋野　して見ると、ざくろ口の札も矢張り奴等の仕業だな。

小使　ざくろ口の札とは、何の事でございます。

秋野　俺は毎日溫泉へ出かけるが、人の居ない時だと、運動の爲に湯の中で必ず泳ぐ。湯壺は十五疊位の廣さだから、中々愉快に泳げるのだ。ところが今日も空いて居た

から、威勢よく下りて行くと、ざくろ口のところに、大きな札へ、墨黒々と『湯の中で泳ぐべからず』と書いて貼り付けてある。湯の中で泳ぐ者はあまり有るまいから、これは俺の爲に特別に新調したものかも知れないと、今日は泳ぐのを斷念して歸つて來たが、考へて見れば彼の札も怪しいものだ。

小使　それぢやあ先生は、學校の御用でお出かけに成つたのではなく、溫泉へ入つて居らしつたのですか。これは驚きましたね。先生は今晚宿直で……。

秋野　そりやあ分つて居る。宿直だから泊る心算で、斯うして慥かに歸つて來たんだ。

小使　でも……。當直の方が無暗にお出步きに成つては不可ませんな。

秋野　何故不可ないのだ。出て步かない方が不可ない位だ。こんな正面に西日の當る暑い部屋の中で、重禁錮同樣につくねんとして居られると思ふか。第一不衞生極まる事だ。

小使　（秋野は坐つて土瓶の茶を注いで呑む。）困りますなあ。途中で校長先生や教頭さんにでもお逢ひに成ると……。

秋野　校長には、たつた今逢つたよ。

小使　えツ。

秋野　古町の停車場まで來て下りると、すぐ擦れちがつたが、校長も汽車で溫泉へ行くらしかつたよ。

小使　何か仰しやいましたらう。

秋野　うむ、言つた。俺の顏を見たから、一寸挨拶をしたら『あなたは今夜は宿直では無かつたのですかねえ』ツて、眞面目くさつて聞いたが、二時間前に、『今夜は初めての宿直ですね。御苦勞樣』ツて、禮を言つたのを忘れたんだらう。校長なんかに成ると、厭に曲りくねつた言葉を用ふものだ。

小使　それで先生は何と仰しやいました。

秋野　『あんまり暑いから一風呂浴びて來ました。』ツて言つたら、『暑い時には散步でもしないと、宿直も骨でせう。』ツて、俺の散步をほめて居たよ。

小使　他には何誰にもお逢ひに成りませんでしたか。

秋野　あとは、竪町の四ツ角で、山嵐に出會したばかりだ。

小使　山あらし……。

秋野　はゝゝゝ、是は君には分るまい。何しろ鼻の先が支へるやうな狹い所なんだから、出て步きさへすりや、

必度誰かしらに逢ふよ。

（秋野はやがてあたりを見廻す。）

秋野　やあ、手廻しよくもう床が敷いてあるな。いよいよ第一回目の宿直か。だがねえ、俺は一體疳性だから、夜具布團なんぞは、自分の物へ樂に寢ないと、どうも寢たやうな心持がしないで困るんだ。それで、子供の時分から、友達の家へも泊つた事は殆んど無かつた位だが……（言ひつゝ蚊帳の中の布團を見る）いやあ酷い布團だな。是で校長や教頭がよく我慢をするな。

小使　いえ、校長先生や教頭さんは、宿直はなさいません。

秋野　何故？　職員全體が代る代る務める宿直が、二人だけ例外とは如何いふ譯だね。

小使　でも、彼のお二人だけは奏任待遇ですからね。

秋野　ふん、面白くもない。月給は澤山取る。時間は少いそれで當然の義務たる宿直まで逃れるなんて、隨分勝手な規則だ。そんな不公平があるものか。

小使　それは、先生お一人で不平を竝べても通りませんよ。

秋野　一人だつて二人だつて、正しい事なら通りさうなものだ。

小使　私もよくは分りませんが、どうせ世間なんてえものは、強い者勝ちで通つて居るんで、長い物には卷かれろと言ひますから……。

秋野　つまり強者の權利だと言ふのだらう。其の位の事は知つて居る。然し、強者の權利と宿直とは別問題だ。校長や教頭が強者だなんて、誰が承知をするもんか。

小使　さう私に議論を吹つかけなすつちや困ります。

（秋野は再びあたりを見る。）

秋野　厭だなあ。だが是も月給のうちに籠もつて居るんだから仕方がない。我慢をして務めるかな。それにしても先刻取り寄せた生徒の賄つて奴には閉口したよ。丼あんな物を喰つて、よくあれ丈に暴れられたもんだ。實に豪傑に違ひないよ。とにかく晩飯は濟んで居るし、他に用事もなしと……。少し早いが寢るかな。暑くつて寢られもしまいけれど、から藪蚊に攻められちややかなはない。先づ蚊帳の中へ入るとしよう。

（秋野は寢卷に着替へる。）

小使　では又御用が有りましたら、呼んで頂きます。

秋野　よし。

小使　先生、お休みなさい。

（小使は下手へ去る。秋野は蚊帳を捲つて赤い毛布を

跳ね退け、トンと尻持を突いて仰向けに寢る。）

秋野　やあ愉快だ。下宿屋の二階と違つて、いくらドシンとやつても苦情を持込まれない處は好いな。

（と言ひながら足を伸したと思ふと、忽ち飛び上る。布團の中から澤山のバッタが飛び出す。）

秋野　やあ、バッタだ。（驚いて大聲に）おい小使、小使早く來てくれ。

（秋野は怒鳴りながら、枕を取つて叩きつける。それから布團の上に坐つて、煤掃きの時のやうにそこら中を無暗にはたく。肩や腰へ飛び付くのを拂ふ。頭や鼻先へ付くのを摑み取つて叩きつける。死物狂ひに成り、やうやう退治て終つたのを、部屋の隅にかけてある箒でサッサと廊下へ掃出す。此の時小使が入つて來る。）

小使　先生、何ですか。

秋野　何ですかもあるものか。バッタを床の中に飼つとく奴が何處の國にある。間拔けめ。

小使　些とも存じませんでした。何か居ましたか。

秋野　存じませんで濟むか。俺が横に成るとすぐ足もとから、一齊に襲撃を初めやがつた。やつと退治た處だから、早く死骸を片附けろ。（箒を抛り出す）それから寄宿生を……。そろそろ來たつて話が分らんから、總代を二三人引張つて來い。

小使　かしこまりました。

（小使は這ふ這ふの體で、新聞紙の上にバッタの死骸を掃き寄せ、箒をかついで下手へ入る。やがて廊下の向うで、小使が寄宿生を呼ぶ聲が聞える。）

秋野　寄宿生の悪戯に極まつて居る。憎い奴等だ、覺えて居ろ。

（寢卷の腕まくりをして、凄じい顏をして待つて居る處へ、小使と共に寄宿生が六人入つてくる。）

小使　秋野先生。總代の方をお連れ申しました。

（生徒は皆默つて入口に立つて居る。）

秋野　こつちへ入れ。お前達の仕業だらう。何でバッタなんか俺の寢床へ入れたんだ。

生徒一　（落付いて）バッタた何ぞな。

秋野　何ぞな？　バッタを知らないのか。よし、知らなきや今見せてやる。（小使に）小使、今のバッタを持つて來い。

小使　バッタはもう掃溜へ捨てゝしまひましたが、お入用なら拾つて來ませうか。

（小使は驅出して行く。秋野と生徒達は默つて睨め合つて居る。間もなく小使が、半紙の上へバッタを十匹ほどのせて持つて來る。）

小使　先生。どうもお氣の毒樣ですが、まつくらで是れだけしか見附かりません。夜が明けましたら、もつと拾つてまゐります。

秋野　馬鹿……。（と言ひながら其の一匹を取り、生徒の目の前へ示す）さあ、バッタは是だ。大きな圖體をして、バッタを知らないたあ何の事だ。

生徒一　あゝ、そりやイナゴぞなもし。

秋野　箆棒め。イナゴもバッタも同じもんだ。第一教師をつかまへて、なもしたあ何だ。菜飯は田樂の時よりほかに喰ふ物ぢやないぞ。

生徒三　なもしと菜飯とは違ふぞなもし。

秋野　又初めた。イナゴでもバッタでも、何で俺の床の中へ入れた。俺がいつ、バッタを入れて呉れと頼んだ。

生徒四　誰も入れやせんがな。

秋野　入れもせんものが、どうして床の中に居るんだ。

生徒五　どうして入つて居たんかなもし。

生徒六　イナゴは温い所が好きぢやけれ、大方ひとりでお這入りたのぢやあろ。

秋野　馬鹿あ言へ。バッタが一人でお這入りに成るなんて、バッタにお這入りに成られて堪るものか。さあ、何でこんな惡戯をしたか、言へ、說明しろ。

生徒四　言へてて、入れんものを、說明の仕樣が無いがな。

秋野　ケチな奴等だ。自分達のした事が言へない位なら、初めからしないが好い。證據さへ擧がらなけりや、圖太く白を切るつもりだな。

生徒四　誰も白なぞ切りやせんがな。

秋野　そりや俺だつて、中學時代にや惡戯もやつた。然し誰がしたと聞かれた時に、尻込みをするやうな、卑怯な事は只の一度もなかつたぞ。仕たものは仕たもので、仕ないものは仕ないもの。嘘を吐いて罰をのがれる位なら、初めから惡戯なんかやるものか。惡戯と罰は附物だ。罰があるから、惡戯も心持よく出來るのだ。惡戯だけで罰は御免蒙るなんて、下劣な根性を持つ奴が卒業すると、金は借りるが返す事は御免を蒙るといふ連中に成るんだ全體貴樣達は中學へ何をする爲に入つたんだ。學校へ入つて、嘘を吐いて、胡魔化して、蔭でコセコセ生意氣な惡戯をして、さうして卒業をすれば、俺は教育を受けた

人間だなぞと、大きな面をして歩くのだらう。もう好い。そんな了簡の腐つた奴を相手に、談判するのも胸糞が惡い。說明も何も要らん。歸つて寢ちまへ。

生徒一　そんならもう、寢ても好いぞな。

（生徒達は捨臺辭で悠々と引き揚げる。）

秋野　ふん、中學へ入つてもあの態か。氣の毒なものだ。

小使　本當にお氣の毒樣でムいましたな。何しろ皆あれですから、先生も少しの間御辛抱をなさいませんと……。

秋野　あんな者の爲に辛抱する？　俺には到底出來ない。あれらを相手に、よく先生が品切れに成らんと思ふが、餘程朴念仁も多いと見えるな。

（小使は寢床を見る。）

小使　おやおや、今の騷ぎで蚊が大分入つたやうです。手燭でも點けて參りませうか。

秋野　手燭で一匹づゝ燒くなんて、そんな面倒な事が出來るものか。

（秋野は蚊帳をはづして長く丸め、部屋の中で竪横十文字にふるひ立てる。鐶が飛んで手の甲を打つ。小使はバッタを捧げたまゝ、呆れて見てゐる。）

秋野　おい、何を見て居るんだ。早く行つて寢ろ。

小使　はい。

―― 暗轉 ――

第三場　夢の場

ぼうつと明く成ると、小ざつぱりした家の緣側が浮き出して來る。其所に、清が笹飴をのせた盆を前に、安樂椅子にかけた秋野を相手に話して居る。

清　坊ちやん。田舍者はしみつたれですから、お茶代を五圓も遣れば、びつくりして眼を廻すに極つて居ますよ。四國なんて、海邊で、針の先ほどしか有りませんから、どうせ碌な處ぢやムんすまい。私は地圖で見せて貰ひました。

秋野　はゝゝゝ。清は、誰かに地圖を見せて貰つたのかい。まさか針の先ほどでも無いが、つまらん處だよ。學校へ行つて驚いたのはね。生徒の中には俺より背が高くて、強さうは奴が居る。時々圖拔けて大きな聲で、先生つて呼ばれるんだがね。こいつにや一番應へたよ。今まで物理學校で、毎日先生先生つて呼びつけて居たのが、自分が呼ばれると成ると、雲泥の相違だ。何だか足の裏がむづむづする。腹の減つた時、丸の內で午砲を聞いた

やうな心持がするね。

清　ほゝゝゝゝ。

秋野　そんな大僧共を四五十人も前へ並べて、講釋をするんだから、白墨を持つて教室へ入る時なんか、敵地へ乘り込むやうな氣持がするよ。いくら江戸ッ子でも、俺は小作りの方だから、高い所へ上つても、一寸押しは利かないし……喧嘩なら相撲取とでもやつて見せるがなあ。だから成るたけ豪さうに大きな聲をして、少し巻舌で、べらんめえ調を用ひてやるんだ。

清　さうさう。それが一番で厶いますとも……田舍なんぞへ行つて、小さく成つて居らしつては、どんなに損だか知れやあしません。

秋野　ところがそれで失敗つちやつたよ。前列に居た一番強さうな奴がいきなり突立ッて先生つて呼ぶんだ。そら來たと思つたが、負けない氣で何だと聞くと、あんまり言葉が早うて判らんけれ、もちつと、ゆるゆるやつてお呉れんかなもし……。

清　まあ坊ちやん。お呉れんかなもしですつて。ほゝゝゝゝゝ。

秋野　まだ面白い話が澤山あるよ。だがまあそれを一つ喰べてごらん。お前が喰べたがつて居たから、越後へ廻つて買つて來た笹飴だよ。（盆の上を指す）

清　坊ちやんが折角御親切に持つて來て下すつたお土産ですから、では御遠慮なしに一つ頂戴いたしますよ。

（清は笹飴を一つ取つてむしや、むしやとやる。秋野は慌て、止める。）

秋野　おい、おい。清、さう笹ぐるみ喰つちや不可ない。笹を取つて喰べるんだよ。おい、清、清だよ。

清　いいえ、坊ちやん。あなた此の笹がおくすりなんで厶いますよ。ほら、こんなに美味しい……。（と、又一つもぐもぐやる）

秋野　え、その笹が藥だつて……。清は可笑しな事を言ふなあ。はゝゝゝゝ。

（秋野は椅子に凭つて、清の頓な笑顔で見てゐる。何處からか、幽に子守唄が聞えてくる。）

―― 暗轉 ――

第四場　元の宿直部屋

ランプはもう消えて居る。廊下のはづれから月がさして、ぼうと明るくなると、蚊帳をはづしてしまつた布

床の上に、秋野が仰臥して居る。やがて二階の方で、ドンドン拍子を取つて、大勢が強く床板を踏み鳴らす音がする。ワツと言ふ鯨波の聲が上る。秋野は枕を飛ばして起上がる。

秋野　やい、静かにしろ。寢られやしねえ。

（枕元の障子を手荒くあける。ト物音は急に静まり返つて、今度は咳一つ聞えない。秋野は目をパチパチやつて、又寢る。暫くすると、今度は廊下の方で、一二三わあと三四十人の聲が、固まつて響く。同時に又床板を踏み鳴らす。秋野は憤然として廊下の向ふへ馳けて行く。忽ち二人の生徒の腕をぐいぐい引張つて連れてくる。二人は狼狽してきよろきよろして居る。）

秋野　さあ、もう勘辨が出來んぞ。氣狂染みた眞似も大概にしろ。

（二人の肩を押へて二三度こづく。）

生徒一　俺、何も知らんがな。

秋野　知らん？　寄宿舎を建てゝ豚でも飼つて置きやあしまいし、貴様達が知らんで、誰があんな騒ぎをやるんだ。宵にあんな悪さをして、本來なら謝らんでも恐れ入つて、静粛に寢て居るべきだのに、よる夜半何といふ騒ぎだ。いくら人間が卑怯に出來て居るつたつて、何處までも知らんでは通さんぞ。正直に言へ、白状をしろ。

（秋野は怒鳴る。此のうちに二人三人と生徒が寄つて來る。二階からも下りて來て大勢になる。）

秋野　何だ。皆眠さうな面をして……。文句があるなら、面でも洗つてから議論に來い。俺も事の理非が明白に分らんうちは、此の儘では濟まさんぞ。是でも元は旗本だ。元は清和源氏で、多田の滿仲の後裔だぞ。江戸ッ子が宿直をして、鼻たらし小僧にからかはれて、手の附けやうが無くつて、仕方がなしに泣寢入をしたと思はれちや、一生の名折だ。さあ、誰でもしつかり返答をしろ。

（生徒の方でもわいわい言ひ争ふが、大勢なので意味が分らぬ。小使が飛んで來て双方をなだめる。）

小使　まあ皆さん静かになすつて下さい。先生もどうかお待ちなすつて下さい。初めての宿直の晩から、こんな騒ぎが起りまして、さぞ御心配で御座いませう。夜が明けましたら、直ぐ私が校長先生の處へお話し申しに行つてまゐります。何にしてもお疲れでせうから、明日は御教授の方をお休みにでも成つて……。

秋野　いや些とも心配はせん。こんな事が毎晩あつても、

命のある限りは心配はせん。勿論教授はやる。一晩位寢なくつて、授業が出來んやうなら、貰つた月給は學校の方へ割戻す。

小使　でも先生のお顏は、大そうはれて居りますよ。

秋野　(顏を押へて) 少し重たい氣もするが、蚊に喰はれた故だ。顏ははれて居ても口は慥に利けるから、授業には差し支へん。ともかくも俺はこれから行つて、事の仔細を校長まで申告して、何とか處分をして貰ふつもりだ。さあ小使、すぐに校長の家まで案內しろ。

(生徒達は流石に顏を見合はせて徐かになる。)

――幕――

第三幕

第一場　海上の釣船

初秋の午後。正面に石と松ばかりの青島が浮いて見える。波靜かな海上には、新井と吉川と秋野とをのせた一艘の細長い船を、船頭がゆつくり漕いで居る。

新井　好い景色だな。

吉川　絕景でげすな。

新井　彼の松を見給へ。幹がまツ直で、上が傘のやうに開いて、ターナーの繪に有りさうだね。

吉川　全くターナーです。どうも彼の曲り工合ツたらありませんね。ターナーそつくりですよ。ねえ教頭、これから彼の島を、ターナー島と名附けようぢやありませんか。

新井　そいつは面白い。ターナー島……我々は是からさう言はうよ。

吉川　あの岩の上に……。どうです、ラフアエルのマドンナを置いちやあ……。好い繪が出來ますぜ。

新井　マドンナの話は止さうぢやないか。

(新井はニヤリと笑ひながら言ふ。)

吉川　なに大丈夫ですよ。(秋野を顧る) どうです秋野君好いでせう。

秋野　好い心持ですね。廣々とした海の上で潮風に吹かれるのは、全く藥です。第一腹が減ります。

吉川　はゝゝゝ。矢張り、花より團子ですかね。

(吉川は意味ありげに、團子の詞に力を入れる。秋野は空を仰ぐ。)

新井　(船頭に) おい、こゝらで好からう。

(船頭は船を止めて錨を卸す。)

新井　幾尋あるかね。
船頭　六尋位ぞな。
新井　さうか。六尋位ぢや、鯛はむづかしいな。（言ひつつ絲を海へなげ入れる。）
秋野　鯛を釣るんですか。それは些と豪膽でせう。
吉川　いや、敎頭の手際ぢやかゝりますよ。それに、なぎですから……。
（吉川も絲を繰出して海へ投げ入れる。）
秋野　釣竿が一本もありませんね。
吉川　いや、沖釣に竿は用ひません。絲だけでげす。（と顋をなでる。）
新井　秋野君、さあ君もやり給へ。絲は有りますか。
秋野　絲は餘るほど有りますが、浮が有りません。
新井　浮が無くつちや釣が出來ないのは素人ですよ。（と仕方を敎へる）斯うしてね。絲が水底についた時分に、船べりの處で、人さし指で呼吸を計るのです。食ふとすぐ手にこたへます……。そら來た。
（新井は得意さうに絲を繰る。秋野と吉川は左右からそれを覗き込む。引き上げて見ると餌が失くなつて居る。）

新井　いやあ、遣られた。
吉川　敎頭、殘念な事をしましたね。今のは慥に大物に違ひなかつたんですが……。どうも、敎頭のお手際でさへ逃げられるんですから、今日は油斷が出來ませんよ。（と秋野の方をちらと見て）然し、逃げられても何ですね。浮と睨めくらをして居る連中よりは增しですね。丁度、歯止めが無くちや自轉車へ乘れないのと同程度ですからね。
（秋野は忌々しさうに、錘と絲を海へ拋り込む。新井は其の樣子を見て、）
新井　秋野君。失敬ですが、君は釣をやつた事がありますか。
秋野　子供の時、小梅の釣堀で、鮒を三匹釣つた事が有るばかりです。
吉川　それぢやあまだ、釣の味はお分りに成りますまい。些と御傳授致しやせうか。
（秋野は答へず、ぐいぐいと絲を手繰る。）
吉川　おや、釣れましたか。いや後世恐るべしだ。
（吉川は冷かす。秋野は一匹の小魚を釣り上げたが、水際で跳れたので潮を浴び、片手でツルリと面を拭ふ。）

針を取らうとしても中々取れないので、苛れつたさうに絲を振つて、魚を胴の間へ叩き付ける。吉川と新井が呆れて見て居るうちに、海水でぢやぶぢやぶ手を洗つて、鼻の先へ持つてゆき、生臭いので厭に成り、絲を、ぐるぐる巻いてしまふ。）

吉川　一番槍はお手柄だが。ゴルキぢやあんまり威張れませんね。

新井　ゴルキといふと、露西亞の文學者見たやうな名ですね。

吉川　さう、さう、まるで露西亞の文學者ですね。おや掛かつたぞ。（上げて見て）やあ、此奴もゴルキだ。

（此のうちに新井も引き上げる。）

新井　僕のもゴルキだ。おや、おや、今日は露西亞文學の大當りだな。

吉川　あなたの手腕でさへゴルキなんですから、我々がゴルキなのは仕方がありません、當り前です。（と又絲を抛り込む）

秋野　（船頭に）君、此の魚はうまいかね。

船頭　駄目や。骨が多くつて、まづくつて、たゞ肥料には出來るぞな。

秋野　肥料？

（秋野は目を丸くする。そして未だ釣つて居る二人の方を、氣の毒さうに見る。やがて詰らなさうに、胴の間へ仰向けに寢轉んでしまふ。新井と吉川はひそひそ、話し合ふ。）

新井　え、どうだかなあ。

吉川　いえ、全くです。何も知らないのですから……。些と罪ですね。

新井　え、……まさか……。

吉川　バッタを……本當ですよ。

新井　又例の堀田が……さうかも知れん。

吉川　何しろ天麩羅を……はゝゝゝ。

新井　それで……煽動したのか……。

吉川　……團子も……。

（聲が低いので意味は分らぬが、時々秋野の注意を引くやうに聲を高める。やがて二人は釣を止める。）

新井　ゴルキばかりぢや詰らない。止さう。

吉川　一休みとしませう。（自分も絲を仕舞ひながら）ところで、今夜はマドンナにお逢ひですか。

新井　馬鹿を言つちや不可ない。餘りマドンナを言ふと聞

違ひに成る。

吉川　えへゝゝゝ。大丈夫でげすよ。聞いたつて分りやしません。（振りかへると秋野の大きな目に氣が附く）やあ、此奴は降參だ。（と頭をかく）

新井　（照れかくしに）秋野君。君は餘り釣は好きでないと見えますね。

秋野　えゝ、斯うして、寢て居て空を見て居る方が好いです。

新井　まあ、此方へ來て、少し話し給へ。（琥珀のパイプで煙草をふかしながら）然しね君。學校でも今度君が來たんで、校長も大いに信頼して居るし、生徒も皆喜んで居るから、奮發して遣つてくれ給へ。

秋野　餘り喜んでも居ないでせう。

新井　いや、お世辭ぢやない。全く喜んで居るんです。ねえ吉川君。

吉川　喜んで居るどころぢやない。大騒ぎです。（と厭に笑ふ。）

新井　だがねえ君。注意せんと險呑ですよ。（聲をひそめる）

秋野　どうせ險呑です。寄宿舎生全體を謝らせるか、僕が辭職するか、どつちかで、險呑は覺悟の前です。

新井　さう言つちや取付き處もないが、實は僕も教頭として、君の爲を思ふから言ふので、惡く取つちや困る。それでね。生徒は君が來たのを大變歡迎して居るんだが、そこには種々の事情があつてね。君も腹の立つ事もあるだらうが、此處が我慢だと思つて、辛抱して吳れ給へ。決して君の爲に成らんやうな事はしないから……。

秋野　種々な事情たあ、どんな事情です。

新井　それが少々、混み入つてるんだが、まあ段々に分りますよ。

吉川　こりや、一朝一夕にや到底分りません。然し段々に分ります。今僕が話さないでも、自然と分つて來るんです。

秋野　はゝゝゝゝ、君の詞はいつも教頭と同じ事で、別の意味は有りませんね。

（秋野は吉川を冷笑する。吉川は厭な顏をして、船頭の居る艫の方へ立つて行く。）

秋野　（新井に）とにかく、そんな面倒な事情なら、聞かなくつても好いんですが、あなたの方から話し出したから伺ふんです。

新井　そりや尤もだ。此方から口を切つて、後を附けない

のは無責任ですね。それぢや是れだけの事を言つて置きませう。あなたは失禮ながら、まだ學校を卒業したばかりで、教師は初めての經驗でせう。ところが學校といふものは、種々な情實のあるもので、さう書生流に淡泊には行かないですからね。

秋野　淡泊に行かなけりや、どんな風に行くんです。

新井　さあ……。君はさう率直だから、まだ經驗に乏しいと言ふんですがね。

秋野　經驗には乏しいはずです。履歴書にも書いときましたが、二十三年、四ケ月ですから……。

新井　さあ……。そこで思はぬ邊から、乘ぜられる事があるんです。

秋野　正直にしてさへ居れば、誰が乘じたつて怖くはないです。

新井　無論怖くはない。怖くはないが、乘ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、氣を附けないと不可ないと言ふんです。

秋野　僕の前任者が、誰に乘ぜられたんです。

新井　誰と指す事は、其の人の名譽に關係するから言へない、又判然と證據のない事だから、言ふと此方の落度になる。兎に角、折角君が來たもんだから、此所で失敗しちや、僕等も君を呼んだ甲斐が無い。どうか氣を附けてくれ給へ。

秋野　氣を附けろつたつて、是より氣の附けやうはありません。悪い事をしなけりや好いんでせう。

新井　ほゝゝゝゝ。（優しく笑ふ）無論悪い事をしなけりや好いんですが、自分だけ悪い事をしなくつても、人の悪いのが分らなくつちや、矢張り酷い目に逢ふでせう。世の中には、磊落なやうに見えても、淡泊なやうに見えても、たとへば、親切に下宿の世話なんかして呉れても、油斷の出來ないのが有りますからね。

秋野　あゝ左様ですか。やつと分りました。（憤然と）なあに、僕が邪魔なら、廻りくどい事をしないでも、むかに、是々で君が邪魔だから辭職をしてくれと言や好いんです。物は相談づくで何うでも成るんです。明日でも一應談判をした上で、僕は潔く辭職をします。

新井　談判？　君は一體誰と談判するつもりなんです。

秋野　無論、堀田君とです。今迄の話は、皆堀田君の事でせう。

新井　君、そんな無法な事をして呉れちや困る。僕は堀田

君に就いて、別段君に何も明言をした覺えは無いのだから……。君が若しも明日、堀田君に對して亂暴でも働いてくれると僕が非常に迷惑をする。君も亦、學校に騷動を起すつもりで來たんぢや無からう。

秋野　當り前です。月給を貰つたり、騷動を起したりしちや、學校の方でも困るでせう。

新井　それだから、今日の話は、君の參考だけに止めておいて、決して口外をして呉れちや困る。

秋野　あなたがそんなに迷惑をなさるなら、明日の談判は止めませう。

新井　さうして貰へば有難いが、君、大丈夫かい。

秋野　憚りながら僕も江戸ッ子です。受合つた事を裏へ廻つて反古にするやうな、さもしい了簡は持つて居ません。

新井　いやそれで僕も安心が出來る。處でもう一つ、これは序だから話しておきますが、君が來てくれてから、前任者の時代よりも大分成績が好いので、學校の方でも、もう少し都合さへつけば、待遇の事も、多少は何うにか成らうと思ふんですがね。其のつもりで一つ勉强して下さい。

秋野　勉强ッて、今より勉强は出來ません。

新井　今の位で充分です。それで、幸ひ今度、轉任者が一人出來ますから……。尤も校長に相談して見ないと、無論受合へない事ですが……。其の俸給から、少しは融通が出來るかも知れないから、それで都合を附けるやうに、一つ校長に話して見ようと思ふんですがね。

秋野　俸給なんか何うでも好いんです。勿論上がれば上がつた方が好いですがね。それで誰が轉任するんですか。

新井　もうぢき發表に成るから、話しても差支へないでせう。實は古賀です。

秋野　古賀君は、此處の人ぢやありませんか。

新井　此の土地の人ですが、少し都合があつて……。半分は當人の希望です。

秋野　何處へ行かれるんです。

新井　日向の延岡で……、土地が土地だから、一級上がつて行く事に成りました。

秋野　大變な處へ出かけるんですね。馴つきの好い此處でさへ、僕なぞは、一月經つか經たないうちに、里心が出る位で……、延岡といつたら山の中も山の中、猿と人とが半々に住んで居さうな處ださうぢやありませんか。古賀君も、案外氣の知れない男ですね。それで、誰か代り

が來るんですか。

新井　代りも大抵極まつて居るんです。其の代りの工合で、君の待遇上の都合も附くんです。

秋野　結構ですね。然し、無理に上がらないでもかまひません。

新井　ともかくも、校長に話すつもりです。それで、校長も同意見らしいが、遣つては君に、もつと働いて頂かなくては成らんやうに成るかも知れませんから、どうか其のつもりで、覺悟して遣つて貰ひたいですね。

秋野　今より時間でも増すんですか。

新井　いゝや。時間は今より減るかも知れませんが……。

秋野　時間が減つて、もつと働くんですか。妙だな。

新井　一寸聞くと妙だが……、判然とは言ひにくいが……まあ、つまり、君にもつと重大な責任を持つて貰ふかも知れないと言ふ意味なんです。

（新井はニヤニヤ笑ひながら詞をにごす。何時の間にか後へ來てゐる吉川に心づく。）

新井　あゝ、吉川君、大分寒くなつたね。そろそろ歸らう。

吉川　全く寒く成りました。何と言つても秋ですからね。

新井　あ、見給へ、濱の方は靄でセピヤ色に成つた。高柏寺の五重の塔が、森の上にぽッと見える。好い景色だな。

（新井は今迄の話は忘れたやうに、濱の方を指す。）

吉川　なあるほど、こりや奇絶ですね。時間があると寫生をするんだが、惜しいですね。此の絶景を見捨てゝ行くのは……。

（船頭は錨を拔く。秋野は吸ひかけの卷莨を水面へ拋りつける。）

―― 幕 ――

第二場　教員控所

家具調度前幕と同様、時計が六時三十分に成つて居て、小使が掃除して居る。秋野が這入つて來て、自分の席に着く。

小使　今日は大層お早うムいますね。

秋野　少し譯があるんだ。

小使　道理でお早い事で……。今しがた片附いたばかりでムいます。

秋野　君は綺麗好きだから、掃除が行屆いて居て、氣持が好いよ。

小使　褒めて頂くと後が怖くなりますよ。

秋野　野だと一緒にしちや閉るよ。

小使　野だと言ふのは……。

秋野　なあに、こつちの事だよ。

（この中吉賀が來る。川村が來る、伊藤、谷川、富田が入つて來る。吉川と新井その他教員等が來て、いづれも『お早う』『お早うございます』と挨拶して、各自の卓に着く。新井に對しては皆々丁寧に挨拶する。やがて新井は秋野の傍へ來て。）

新井　やあ昨日は失敬……。迷惑でしたらう。

秋野　いや迷惑ぢやありません。お蔭で腹が減りました。

（新井は低聲になつて。）

新井　ねえ君、昨日歸りがけに船の中で話した事は、秘密にしてくれ給へ。未だ誰にも話しやしまいね。

秋野　未だ誰にも話さないが、實は他の事で、是から堀田と談判する積りで、いつもより餘つぽど早く來ました。

新井　成るべく穩便に賴むよ。

（この內七八人の教員が這入つて來て、各自の席に着く。最後に遲れて、堀田が來て席につく。）

堀田　今日は僕が一番遲くなつた。おい秋野。今日は君のお蔭で遲刻したんだ。罰金を出し給へ。

（秋野は立つて、握つて居た一錢五厘を堀田の机の上へ置き。）

秋野　是をやるから取つて置け。

堀田　これが罰金か。

秋野　いゝや然うぢやない。この間山城屋の二階で御馳走になつた、氷水の代だ。一錢五厘慥かに返したよ。

堀田　何を言つてるんだ。詰らない冗談をするな。

秋野　冗談ぢやない本統だ。俺は君に氷水を奢られる因緣がないから返すのだ。取らないと云ふ法があるか。

堀田　そんなに一錢五厘が氣になるなら、取つても好いが何故思ひ出した樣に今時分返すんだ。

秋野　今時分でも何でも構はない。奢られるのが嫌だから返すんだ。

（堀田は一寸考へて、秋野の顏を見て居たが。）

堀田　ウムよし、氷水の代は受取るから、下宿を出てくれ給へ。

秋野　一錢五厘受取れば夫で好い。下宿を出ようが出まいが、俺の勝手だ。

堀田　處が勝手に行かないのだ。あの下宿は俺が世話したんだから、如何しようと俺の權利にある。昨日あすこの

亭主が來て、君に出て貰ひたいと云ふから、其譯を聞いたら、亭主の言ふのも尤もだ。だが夫でもそウ一應確める積りで、今朝あすこへ寄つて、詳しい話を聞いて來たんだ。

秋野　亭主が君に何を話したんだか知らないが、然う自分丈で極めたつて仕樣があるもんか。譯があるなら譯を先へ話すが順序だ。テンから亭主の言ふ方が尤もだなんて、失敬千萬な事を言ふな。

堀田　ウム、そんなら言つてやらう。君は亂暴で、あの下宿で持てあまされて居るんだ。いくら下宿の女房だつて、下女たあ違ふぜ。足を出して拭かせるなんて、威張りすぎるぢやないか。

秋野　變な事を言やがる。俺がいつ下宿の女房に足を拭かせた。

堀田　拭かせたか如何か知らないが、兎に角先方ぢや君に困つて居るんだ。下宿料の十圓や十五圓は、掛物を一幅賣りや直ぐ浮いて來ると言つてたぜ。

秋野　夫やイカ銀の事だから、その位の事は當り前だ。そんなら初めから斷りや好いのだ。なぜ置いたんだ。

堀田　なぜ置いたか俺は知らないよ。嫌になつたから出てくれろと言ふに不思議はない。出てやれ。

秋野　當り前だ。そんな所に居てくれと手を合せたつて居るもんか。一體そんな言ひ懸りを云ふやうな所へ周旋する、君からして不埒だ。

堀田　俺が不埒か、君が亂暴か、どつちかだらうよ。

秋野　極つてらあ、君が不埒なんだ。未だ君にや言ひたい不足が澤山あるんだが、口止めされて居るから默つて居るんだ。

堀田　なに不足がある。面白い。不足があるなら言つてしまへ。

秋野　いゝや言はねえ。

堀田　言はなけりや卑怯だぞ。

秋野　何が卑怯だ、山嵐め。

堀田　何だと……。

（と兩人立上る。この以前から教員一同さゝやき合つて、この口論を聽いて居たが、新井が立つて來て仲裁する。）

新井　まあ待ち給へ。そんなにいがみ合ふと、君等の體面にかゝはるよ。好い加減にしたまへ。

堀田　いや議論だけで、お互に職務を知つて居ます。亂暴

な事は決してしやあしません。

秋野　いゝや俺はするかも知れないよ。

新井　解つて居るよ。解つて居るよ。君も靜かにしてくれ給へ。

吉川　喧嘩は相手のあるのが花だよ。

秋野　ヘン、何を言ひやがるんだ。

（と秋野は横を向く。その内に始業の喇叭が鳴るので、皆捨臺詞よろしく、白墨や書冊を持つて教室へ出て行く。最後に秋野が出て行かうとすると、書記の川村が止める。）

川村　一寸君待ち給へ。今日午後に會議のある事を御承知でせう。

秋野　知つて居ます。

川村　今日の會議は君が御本尊なんだから、その積りで居て下さい。

秋野　僕が御本尊と云ふのは、僕に對して無禮を働いた寄宿生の處分に就いてゞすか。

川村　然うです。あのバツタ事件で……。

秋野　會議と言ふのは、生れて初めて出つくはすのだから、様子が解らない。如何いふやうにやるんです。

川村　今日は職員が集つて、各々自説を持出し、夫を校長が纏めて處決する譯です。

秋野　變だねえ。纏めると云ふのは、黒白を決し兼る事柄に就いて言ふべき言葉だ。この場合のやうな、誰が見たつて不都合としか思はれない事件に、會議も何もあるもんか。誰が何と解釋したつて、異説の出よう筈がない。こんな明白な事件は、即座に校長が處分してしまへば好いのだ。隨分決斷のにぶい事だ。

川村　無暗な事を言つては不可ませんよ。第一君の御損ですからね。

秋野　なに損な事があるものか。夫で悪けりや辭職するまでだ。此處ばかり米の出來る處ぢやあるまい。

川村　夫や然うですが……。

秋野　何の事はない。校長と云ふ異名は、煮え切らない愚圖と云ふ事だ。狸に能く然う言つてくれ。

川村　狸と云ふのは……。

秋野　解らねえな。校長の事だよ。

（と言つてドンドン出て行く。川村はあきれて其後を見送る。）

—— 暗轉 ——

第二場　校舍の會議室

校舍の會議室校長室の隣にある細長い部屋で、常に食堂の代理を勤めて居る。卓を幾個も並べて、その周圍に黑革の椅子が二十脚ばかり置いてある。正面に校長、次に新井、夫から吉川が居る。あとは前場の教員一同席に着いて居る。授業が終つた午後三時すぎ。校長は蒟蒻版の書附を讀み、新井は琥珀のパイプを絹のハンケチで磨いて居る。

校長　川村君。これでお揃ひになつたのですか。

川村　全部お揃ひになりました。

校長　では是から會議を開きます。

（と言つて川村に蒟蒻版を渡す。川村はこれを各々に配布する。暫くして校長は立ち上る。）

校長　學校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳の致す處で、何か事件のある度に、自分は能くこれで校長が勤まると、竊に慚愧の念に堪へんのであります。不幸にして今回も、又かゝる騷動を引起したのは、深く諸君に向つて謝罪しなければなりません。然し事一たび起つた以上は仕方がない。どうにか處分しなければならんので、事實は既に諸君の御承知の通りであるからして、善後策に就いて、腹藏のない所を參考の爲にお述べ下さい。

（と言つて腰をおろすと、直ぐ新井が立ち上つて。）

新井　私も寄宿生の亂暴を聞いて、教頭として甚だ不行屆であり、且つ平常の德化が少年に及ばなかつたのを深く慚づるのであります。で恁云ふ事は、何か缺陷があると起るので、事件そのものを見ると、何だか生徒だけが惡いやうであるが、其の眞相を極めると、責任は却つて學校の方にあるかも知れない。だから表面上に現はれた處だけで、嚴重なる制裁を加へるのは、却つて將來の爲に好くないかと思はれます。且つ年少血氣の者であるから、活氣が溢れて、善惡の考へもなく、半ば無意識にこんな惡戲をやる事がないとも限らん。で元來處分法は、校長のお考へにある事だから、私の容喙する限りではないが、どうか其邊を御斟酌下すつて、成るべく寛大な、お取計ひを願ひたいと思ひます。

（と言ひ終ると、直ぐ吉川が起つ。）

吉川　實に今回のバッタ事件……。及び吶喊事件は、吾々

心ある職員をして、竊に吾々の前途に危惧の念を抱かしむるに足る珍事であります。吾々職員たる者は、此際奮つて自らを省み、全校の風紀を振肅しなければなりません。夫で只今校長及び教頭のお述べになつたお說は、實に肯綮に當つた剴切なお考へで、私は徹頭徹尾贊成致します。どうか成るべく寛大の御處分を仰ぎたいと思ひます。

（と言つて腰をおろす。秋野が立ち上つて。）

秋野　私は徹頭徹尾反對です。（間）そんな頓珍漢な處分は大嫌ひです。

（この時一同笑ひ出す。）

秋野　全體生徒が惡いのです。どうしても謝らせなくちや癖になります。退校さしても構ひません。何だ失敬な……、新しく來た教員だと思つて……。

（興奮してあとは言ひ得なくなり。終に着席する。右隣に居た伊藤が立つ。）

伊藤　生徒が惡い事も惡いが、餘り嚴重な罰などをすると却つて反動を起して不可ないでせう。矢ッ張り教頭の仰る通り、寛大の方に私は贊成致します。

（こんどは右隣の谷川が立つて。）

谷川　私も同感であります。

甲　私も教頭のお說がよろしいと思ひます。

乙　私もその穩便說に贊成致します。

丙　異議なし。

丁　僕も異議ありません。

（といづれも教頭の意見に贊成する。この時堀田奮然として立ち上る。）

堀田　私は教頭及び其他諸君のお說には全然不同意であります。と云ふものは、此の事件はどの點から見ても、五十名の寄宿生が新米の教師を輕蔑して、これを飜弄しようとした所爲とより外には認められんのであります。教頭はその原因を教師の人物如何にお求めになるやうでありますが、失禮ながら夫は失言かと思ひます。某氏が宿直にあたられたのは、着後早々の事で、未だ生徒に接せられてから、二十日に滿たぬ頃であります。この短い二十日に於いて、生徒は君の學問人物を評價し得る餘地はないのであります。輕侮さるべき至當な理由があつて、輕侮を受けたのなら、生徒の行爲に斟酌を加へる理由もありませうが、何等の原因もないのに、新米の先生を愚弄するやうな、輕薄な生徒を寛假しては、學校の威信に關する

事と思ひます。教育の精神は單に學問を授ける許りではない。高尚な正直な武士的な元氣を鼓吹すると同時に、野卑な、輕躁な、暴慢な惡風を掃蕩するにあると思ひます。若し反動が恐しいの、騒動が大きくなるのと、姑息の事を言つた日には、此の弊風はいつ矯正出來るか知れません。かゝる弊風を杜絶する爲にこそ、吾々は此學校に職を奉じて居るので、これを見遁す位なら、始めから教師にならん方が好いと思ひます。私は以上の理由で、寄宿生一同を嚴罰に處する上に、當該教師の面前に於いて、公に謝罪の意を表せしむるを、至當の處置と心得ます。

（と言ひ終つて椅子に着く。次いで起つ者がなく、やや座が白ける。堀田が又立上つて）

堀田　只今一寸失念して言ひ落しましたが、當夜の宿直員は、宿直中外出して、温泉に行かれたやうであるが、苟くも自分が一校の留守番を引き受けながら場所もあらうに、温泉へ入湯に行くなどゝ云ふのは、大きな失態である。生徒は生徒として、此の點に就いては、校長から特に、責任者に御注意あらん事を希望します。

（と言ひ終ると直ぐ秋野が立つて。）

秋野　私は正に宿直中に温泉へ行きました。是は全く惡い。謝ります。

（と言つて椅子に着く。一同笑ふ。）

校長　これで皆さんの御意見も大抵解りました。私は堀田君のお說が至當だと思ひます。夫で私は恁云ふ事に致します。寄宿生一同は秋野君に謝罪する事。夫から一週間の禁足を命じます。

堀田　實に公明正大な御處置です。

校長　秋野君。そのお積りで……。

秋野　結構です。

校長　夫れでは會議はこれで止めて、座敷に移りませう。川村君。皆さんにお茶を……。

（川村は立つて行く。小使達が土瓶と茶碗と菓子などを運ぶ。）

校長　モウ一つ言ふ事を忘れましたが、生徒の風儀は教師の感化で正して行かなくてはなりません。その一着手として、教師は成るべく飲食店などに出入しない事にしたい。最も送別會などの節は特別であるが、單獨に餘り上等でない場所へ行くのは慎しみたい。譬へば蕎麥屋とか、團子屋とか云ふやうな處へですな。

秋野　夫ぢや一應伺ひますが、蕎麥屋や團子屋へ這入つちや、中學の教師は勤まらないと云ふのですか。然うなると私のやうな食ひ心棒には、到底出來ッこはないと思ひます。夫なら夫で好いから、初手から蕎麥と團子を嫌ひな者と註文して、雇つたら如何です。だんまりで辭令を下げて置いて、蕎麥は食ふな、團子は食ふなと、罪な御布令を出すのは、私のやうな外に道樂のない者に取つては大なる打撃ですからな。

新井　然う君のやうに言つては不可ませんな。元來中學の教師なぞは、社會の上流に位するものだからして、單に物質的の快樂許り求むべきものでない。その方に耽けるとつい品性に惡い影響を及ぼすやうになる。然し人間だから、何か娯樂がないと、田舍へ來て狹い土地では、到底暮せるものでない。夫で釣に行くとか、文學の本を讀むとか、又は新體詩や俳句を作るとか……。何でも高尚な精神的娯樂を求めなくては不可ない……。

秋野　ぢや伺ひますが、マドンナに逢ふのも、精神的娯樂ですか。

（と言つてあはゝゝゝゝと笑ふ。）

吉川　モウそんな話は止めませう。中止。中止。

（と手を振つて話を止めさせる。）

――幕――

第四幕

第一場　屋敷町の角

昔武家が住んで居たとでも言ふやうな、古風な家並で、いかめしい門や、窓の附いた土塀などがあつて、溝に沿つた町の曲り角になつて居る。近くに停車場がある意で、折々汽笛が聞える。日曜日の午前。車夫は革鞄や柳行李や机を車にのせて曳いて來る。その後から秋野が手洋燈と手荷物を下げて附いて來る。

車夫　先生、一體何處まで行けば好いのだね。

秋野　默つて行けよ。今に解るから……。

車夫　先刻から、今に解る解ると言つて、一向解らないぢやありませんか。

秋野　文句を言ふなよ。つまりイカ銀の下宿を追出されて是から閑靜な下宿を探すと言ふ譯なんだ。

車夫　夫ぢや是から引越すと言ふに、未だ下宿の目當が附いて居ないのだね。

秋野　まあ然うなんだ。つまり然うして歩いて居る内に、下宿とか貸間とか何とか、看板のある家を見附け出すだらう。然うしたらそこが天意にかなつた我が宿と言ふ事になるんだ。

車夫　先生も暢氣だね。私も長年車屋をして居るが、荷物を車に乘せて、家を探して歩くのは今日が初めてだ。

秋野　愚圖々々言ふな。モウ少しの辛抱だ。行つてくれ行つてくれ。

車夫　辛抱甲斐がありや好いがな。

（と車夫は汗を拭き拭き車を曳いて行くと、向うから古賀が和服で、手拭を下げて來る。秋野を見て。）

古賀　秋野君ぢやありませんか。

秋野　やあ古賀君か。溫泉のお歸りか。

古賀　然うです。然しこりや如何したと云ふのです。

秋野　實はね。山嵐の堀田に一杯嵌められて、その結果が、イカ銀の家を飛出すと言ふ始末さ。出た事は出たが、何處へ行くと言ふ的もないので、然るべき下宿を見附けようと思つて、先刻から車屋と一緒に歩いて居るんだが、一向見附らないので困つて居るのさ。

古賀　夫やお困りでせうな。

秋野　君に此處で逢つたのが神の引合せだ。君は土地の人で、先祖代々の邸を控へて居るから、こゝらの事情は能く御存じの筈だ。適當な下宿を一つ世話してくれませんか。

古賀　然うですか。一寸お待ち下さいよ。（と考へて）ああ心當りがあります。此の裏町に萩野と云ふ、老人夫婦で暮して居る人があつて、何日だツけ……屋敷を明けて置いても無駄だから、慥かな人があるなら貸しても好いから、周旋してくれろと頼まれた事がありました。夫から大分日が經つて居ますから、今でも貸すか如何か解りませんが、夫で好ければ聞いて來て上げませう

車夫　萩野さんのお宅なら、庭が廣くて結構だな。

秋野　夫では甚だ恐縮ですが、聞合せて下さいませんか。

古賀　では此處に待つて居て下さい。直に行つて來ますから……。

（と古賀は角を曲つて、奥の方へ行く。）

秋野　モウ大抵見當が附いて來た。一ぷくやつて待つて居よう。

車夫　どうか旨く極つてくれゝば好いな。

（と車夫は下した梶棒へ腰をかける。秋野は駒留石にかけて、莨をふかし始める。）

車夫　古賀さんの若旦那は好い人だね。

秋野　おとなしくつて好い人だ。この土地の舊家だと言ふ事だね。

車夫　然うですよ。然しお氣の毒な事だ。去年あすこのお父さんがお亡くなりになつて、夫からと言ふものは如何言ふものか、急に暮し向が思はしく行かなくつて、此頃ぢや銀行の株も失くしてしまつたと言ふ事だが、つまり古賀さんが、お人が好すぎるからだ。

秋野　相當な資産家の息子だつて事は聞いて知つて居たが別に道樂をする人でもないのに、一年位で、如何してそんなに費つてしまつたんだい。

車夫　夫が話さ。お前さんは學校に居ても未だ新米だから知るまいが、先生方の間にマドンナとあだ名の附いて居る女があるんだ。

秋野　お前は妙な事を知つて居るね。マドンナと云ふ名は俺も知つて居る。然し本物は未だ知らないのだ。ありや藝妓か何かの名かね。

車夫　先生の癖に解らねえ人だ。マドンナと云ふと、唐人の言葉で別嬪さんの事を言ふのさ。ぢや未だ遠山のお孃さんも知るまいねえ。

秋野　知らないね。

車夫　遠山のお孃さんは、こゝらで一番の別嬪さんだ。それで學校の先生方が、遠山のお孃さんの事をマドンナ、マドンナと云ふので、慥か畫學の先生が附けた名ださうだ。

秋野　ぢや野だが附けやがつたんだ。

車夫　いゝえ。吉川先生が附けたんだよ。

秋野　然うか。そのマドンナと云ふのは、如何云ふ女だい。

車夫　どうであだ名の附いて居る女に、昔から碌な者はないよ。鬼神のお松に妲妃のお百だ。あのマドンナは夫ほどでもないが、然し良くねえ女だ。最初は古賀さんの處へお嫁に行く約束が出來て居たのに、如何した事か、敎頭の新井さんが行つて、是非嫁にくれろと掛合をつけたのだ。

秋野　あの赤シヤツがか。

車夫　人を賴んで掛合つて見ると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、直ぐには返事が出來兼て、まア好う考へて見よう……。位の挨拶をしたのだ。すると敎頭さんが手蔓を求めて、遠山さんの家へ出入りするやうになり、たうとうお孃さんを手なづけてしまつた。敎頭さん

も教頭さんだが、お嬢さんもお嬢さんだ。一旦古賀さんへ嫁に行くと承知して置きながら、今更教頭さんに鞍返り打つとは、酷い女でございませう。夫れぢや今日様へ済まないぢやないかね。

秋野　全く済まないね。今日様どころか、明日様にも明後日様にも、いつまで行つたつて済みつこはありやしないよ。

車夫　夫れぢや古賀さんがお氣の毒だと云つて、お友達の堀田さんが、教頭さんの處へ意見をしに行つたら、教頭さんが、私は約束のある者を横取する積りはない。破談になれば貰ふかも知れないが、今の處は遠山家と只交際をして居る許りだ。遠山家と交際するには、別段古賀さんに済まない事もなからうと云ふので、堀田さんも仕方なしに戻つて來たと云ふ話だが、それ以來堀田さんとの折合が悪くなつて、近い内に古賀さんも堀田さんも、酷い目に逢やあしないかと、心配して居る人もありますよ。

秋野　然うか。夫で俺はすつかり解つた事がある。あの赤シヤツめ…。どうも只のシヤツぢやないと思つた。然しお前は能く種々な事を知つて居るね。

車夫　こゝは狹い處だから、何でも分つて居るよ。お前さんも少し氣を附ける方が好いね。（と言つて向ふを見る）やあ來た。來た。教頭さんとマドンナが、おめかしでやつて來た。今日は日曜で住田の温泉行だな。

秋野　見られると面倒だから、知らない振をして横を向いて居よう。

車夫　夫が好いよ。

（と二人は後向になつて蹲む。この時向うから遠山の娘仲子十六七、盛装、女中がついて來る。その後から新井と吉川が少し放れて來る。）

仲子　矢ツぱり歩くと暑いねえ。

女中　私なぞは汗かきですから、少し歩くとたまりませんよ。

吉川　ねえ教頭。少し廻り路だが、この屋敷町を抜けるなどは、道れ名案でせうな。

新井　人通りが少ないから好いと云ふのだらうが、そのかはり人に見られたら、到底ごまかし切れないよ。

吉川　滅多に人に逢ふ氣遣ひなしさ。然し二人とも滑せ我慢のかたまりで、双方そんなに遠慮する必要はないぢやありませんか。

仲子　夫でも先生が御迷惑だと不可ないから、是から温泉

へ行くまで、知らない顔で居ようと思つて……。

新井　汽車へ乘つても、あつちの隅とこつちの隅と云ふ事になるんですな。

吉川　そんな窮窟な事にならない内、人に逢つたら逢つた時の事として、モウ好い加減に一緒になりませうよ。

女中　その方が却つて目に附かないかも知れませんね。

吉川　目に附かない事があるものか。マドンナと言ふ評判の美人と、新井文學士とのお歩ひだ。

新井　モウ停車場だから、少し默つて行かうよ。

（と言ひながら二人の前を行きすがる。この時秋野が突然出て。）

秋野　教頭。

（と呼ばれて新井が見ると、秋野が居るので一寸まごつく。仲子と女中もテレる。）

新井　おゝ秋野君か。誰だと思つた。

吉川　御散歩ですかな。

秋野　教頭。先日お話の有つた增給問題は、改めてお斷り致します。

新井　嫌なら強ひてと云ふのぢやないが、突然こんな處で言ふべき筋合のものぢやあるまい。モウ一度考へて見給へ。

秋野　別に考へる必要はない。斷然お斷り致します。

吉川　大層な權幕だねえ。

秋野　當り前だ。

（と言つて吉川を睨みつける。この時古賀が歸つて來て、仲子を見る。仲子は驚く。新井、秋野、吉川が互に顏を見合つて、無言の思入れ。）

―― 暗轉 ――

第二場　萩野の放れ座敷

荒れては居るが風雅なる庭を前にした、六疊許りの放れ座敷。床の間や押入れがあつて、窓の下の机の上に手ランプが點いて居る。竹緣に蚊遣火鉢などを置く。下手が渡りになつて居て母屋へ通じて居る意。秋野は洋燈の下でお淸から來た手紙を讀んで居たが、讀み終つた時分に、此の家の老婆が膳と飯櫃を運んで來る。蟲の音がする。

老婆　待焦れて居た手紙が東京から來て、さぞ嬉しからうな。奧さんはまめで居るかな。

秋野　奧さんぢやないよ。長らく使つて居たお淸と云ふ女

中から來たんだよ。奥さんは未だ無いんだよ。

老婆　唾を吐いても駄目ぞな。お嫁がおありなさるに極つとらい。私はモウちやんと睨らんどるぞなもし。

秋野　夫や酒眼だね、然し本當にないのだよ。もし嘘だと思つたら、此の手紙を讀んで見てくれ。俺の事を坊ツちやん坊ツちやん、と書いてあるぢやないか。坊ちやんも今散々泣いた處だよ。

老婆　ぢや後で緩り讀まして貰ふかね。サア晩飯を持つて來たから、早く喰べるが好えぞな。

秋野　そりや有りがたう。

（と膳に向つて菜を見る。）

秋野　お婆あさん、又芋かい。

老婆　芋が好きだとお言ひぢやて、芋を煮て來たぞなもし。

秋野　芋が好きだと言つたには違ひないが、昨日も芋、一昨日も芋で、今夜も芋だ。然う立て續けに食はされちや。

老婆　古賀君を笑ふ處か、俺が芋のウラナリになつてしまふよ。そりや悪かつたな。夫ぢや他の物と替へて來ようかなもし。

秋野　いや夫には及ばないよ。俺にはちやんと用意がしてあるんだ。

（と言ひながら机の引出しから、生卵を二個出して茶碗の縁で叩いて割る。）

秋野　俺は子供の中から生卵が大好きで、然うやつて飯へかけて喰べりや、何も要らないんだ。

老婆　そりや氣の毒な事をしたな。

（と言ひながら給仕をする。秋野は飯を食ひながら。）

秋野　ねえお婆さん。この家を世話をしてくれた古賀君はいよいよ、日向へ行くさうだね。

老婆　本當にお氣の毒ぢやなもし。

秋呼　お氣の毒だつて、好んで行くなら仕方がないぢやないか。

老婆　好んで行くつて、誰がぞなもし。

秋野　誰がぞなもしつて、當人がさ。古賀先生が物數寄に行くんぢやないか。

老婆　そりやあんた、大違ひの勘五郎ぞなもし。

秋野　勘五郎かね。だつて赤シャツから聞いたんだよ。それが勘五郎なら、赤シャツは嘘つきの法螺右衛門だ。

老婆　教頭さんが然うお言ひるのは尤もぢやが、古賀さんのお往きともないのも尤もぞなもし。

秋野　そんなら兩方尤なんだね。お婆さんは公平で好い。

老婆　今朝古賀のお母さんが見えて、段々お話をしたがなもし。あすこのお父さんがお亡くなりてから、大層お困りおやけれ。お母さんが校長さんにお頼みて、モウ四年も勤めて居るものぢやけれ、どうぞ毎月頂く物を、今少しふやしてお呉れんかて言うたら、校長さんが、ようまあ考へて見ろとかうとお言ひたげな。夫でお母さんは安心して、今に増給の御沙汰があるぞ、今月か、來月かと首を長くして待つてお居でた處へ、校長さんが一寸來てくれと、古賀さんにお言ひるけれ、行つて見ると、氣の毒だが學校は金が足りんけれ、月給を上げる譯に行かん。然し延岡になら明いた口があつて、その方なら毎月五圓餘分に取れるから、お望み通りで好からうと思つて、其手續にしたから行くが好えと言はれたげな。

秋野　おやあ、相談ぢやない。命令ぢやないか。

老婆　さうよ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元の儘でも好えから、こつちに居りたい……、邸もあるし、母もあるからとお頼みたけれども、モウさう極めた後で、古賀さんの代りは出來て居るけれ、仕方がないと校長がお言ひたげな。

秋野　へん。人を馬鹿にしてらあ、面白くもない。ぢや古賀さんは行く氣はないんだね。道理で變だと思つた。五圓位上つたつて、あんな山の中へ猿のお相手をしに行く唐變木は先づないからね。

老婆　唐變木つて……なんぞなもし。

秋野　何でも好いでさあ、全く赤シャツの策略だ。まるで欺し打だ。それで俺の月給を上げるなんて……。斷つて好い事をした。

老婆　先生は月給がお上りになるのかなもし。

秋野　上げてやるつて云ふから、斷つてしまつたのさ。

老婆　何でお斷りするのぞなもし。上げてやらうとお言ひたら、有難うと受けてお置きなさいや。

秋野　いゝや嫌だ。轉任したくない者を無理に轉任させて、その男の月給の上ん前を刎ねるなんて、そんな不人情な事が出來るもんか。あんな赤シャツや野だの樣な奴は、澤庵石をつけて、海の底へ沈めてしまふ方が日本の爲だ。

（と言ひながら飯を喰べてしまふ。この時奥の方から謠が聞えて來る。）

老婆　又お爺さんが始めたよ。

秋野　毎晩あきないで、能くあんなに唸れるもんだ。

（と言つて寝轉ぶ。老婆は膳を持つて去る。暫くして

（堀田が出て來る。）
秋田　秋野……。起きないか。
堀野　（起き上つて）何だ山嵐か。能くこゝへ來られたな。
堀田　來られた義理ぢやないと云ふのか。何とでも言へ。俺が悪かつたから謝りに來たんだ。イカ銀が來て、君が亂暴して困るから、どうか出るやうに話してくれろと頼んだから、眞面目に受けて、君に出てやれと話したんだが、後から聞いて見ると、彼奴は悪い奴で、君に掛物や骨董を賣りつけて、商賣にしようと思つた處が、君が取り合はないで儲けがないもんだから、あんな作り事を拵へて胡麻化したのだ。俺はあの人物を知らなかつたので、君に大變失敬した。勘辨してくれ給へ。
秋野　然う君に言はれると、俺も悪かつたんだ。實は疾うに目がさめて、仲直りに行かうかと思つて居た處だつたよ。
堀田　君も然う云ふ心持で居て呉れたのか。夫ぢや相變らず頼むよ。
秋野　お互ひになあ。實はね。例のバツタ事件は、君が生徒を煽動したんだと、中傷されたもんだから、一圖に然う思つて、大分君にも暴言を吐いたが、あれから會議の時に、當然敵として向うへ廻るべき君が、案に相違して滔々と生徒厳罰論を述べた時には、すつかり俺は感心してしまつた。夫から中傷した奴の罪状も解つて來たので、君に何とか言つて握手してしまはうと思つたんだが、あれ以來君は俺と口を利かない。机の上へ置いた一錢五厘は、未だ机の上に乗つて居る。然もほこりだらけになつて居るが、俺は無論手を出さない。君は決して持つて返らない。この一錢五厘が二人の間の墻壁となつて、終にはあれを見るのが苦勞になつてしまつたよ。
堀田　俺もその通りだつたよ。ぢや二人の爲に祟られた一錢五厘を改めて返すから、受け取れ。
秋野　俺は君に奢られるのが嫌だつたから返したんだが、奢られて居ないと此の場合角が立つから、ぢや貰つて置くよ。
（と秋野は堀田から一錢五厘受取つて蟇口へ入れる。）
堀田　然し君は江戸ツ子丈に、負惜みが強いな。
秋野　君も隨分強情だが、君は何處だつけな。
堀田　俺は會津だ。
秋野　會津ツぽか。どうれで強いと思つた。
堀田　然しお互に誤解が失くなつて、好かつた。

秋野　又氷水でも飲まふかね。

堀田　もう澤山だ。然し君に俺の事を中傷したと云ふのは誰だい。

秋野　言はなくても解つて居るだらう。

堀田　赤シャツだらう。中傷した理由もちやんと知つて居る。俺は近々免職されるかも知れないよ。夫に就いて些か考へがあるんだが、夫よりは先づ古賀君の送別會が、明日の晩花晨亭にある事を知つて居るだらうね。

秋野　それは先刻川村に聞いたよ。

堀田　實に古賀君は氣の毒だね。彼は餘りに好人物過るからね。

秋野　今度の事件は、全く赤シャツがウラナリを遠ざけてマドンナを手に入れる策略なんだらう。

堀田　君にもそんな事が段々と解つて來たと見えるね。彼奴は奸物だからね。

秋野　あんな奴にかゝつちや鐵拳制裁でなくちや駄目だ。

堀田　君も然う思ふかね。

秋野　無論だ。

堀田　夫ぢや少し相談があるんだ。誰も此處へ來やしないね。

秋野　誰が來るもんか。まあ緩りして行くさ。茶でも入れようよ。

（この時雨が降つて來る。奥から謠が聞えてくる。）

――幕――

第三場　花晨亭の大廣間

正面の大きな床の間に、海屋の懸物をかけ、右手に伊萬里の大花瓶へ松が活けてある。其の前に校長、左に新井、右に古賀、いづれも袴羽織で控へてゐる。秋野は洋服で胡座をかいて、下手の柱に靠りかゝつて居る。それと向き合つて堀田、つゞいて漢學の教師、博物の教師などが居流れてゐる。各自の前には膳部が供へてある。

（幕があくと、今校長の開會の辭が濟んだところで、一同が手を叩いて居る。やがて教頭新井が立つ。）

新井　只今長谷川校長が述べられた如く、當校に長年教鞭を取つて居られた、良教師古賀君が去られるといふ事は、學校全體に取り、洵に殘念な事であります。同時に、此の良友を失ふのは、實に自分に取つても大なる不幸と言はねば成りません。學校としてのみならず、個人として

も大に惜しむところでありますが、御一身上の御都合で、切に轉任を御希望に成つたのだから如何とも致し方が無いと思ひます。尚、氏は蒲柳の質であり、其の上、御老母を抱へてお出での事でもありますから、一層健康上の御注意を願ひたい。是を以て御挨拶に代へます。

（此のうちに堀田と秋野は目で何事か知らせ合ふ。やがて新井の挨拶が濟むと堀田が立つ。秋野は待ち設けたやうに手を叩く。一同が見るので一寸照れる。）

堀田　此度、古賀君の轉任に就いては、校長を初め教頭も、非常に殘念がつて居られるが、私は少々反對で、むしろ古賀君が一日も早く、當地を去られるのを希望して居る次第であります。諸君も御承知である如く、日向の延岡と言へば、山又山の僻村で、當地に比べたら物質上の不便は申すまでもない。然し、聞く處によれば、風俗の頗る淳朴な土地で、職員生徒悉く、上代樸直の氣風を帶びて居るさうであります。で、心にもないお世辭を振撒いたり、美しい顏をして、君子を陷れたりするやうな、ハイカラ野郎は一人も無いと信ずるからして、君の如き溫良篤厚の士は、必ず地方一般の歡迎を受けられるに相違ない。斯ういふ考へからして、我輩は大いに古賀君の爲に、此の轉任を祝するのである。終りに臨んで、君が延岡に赴任されたら、其の地の淑女にして、君子の好侶と成るべき資格あるものを擇んで、一日も早く、圓滿なる家庭をかたち作り、彼の不貞無節なるお轉婆を事實に於て慚死せしめん事を希望します。えへん、えへん。

（古賀はやがて徐かに立ち、一同へ叮嚀にお辭儀をする。）

古賀　今般は、私一身上の都合で、九州へまゐる事に成りましたに就きまして、諸先生方が私の爲に、此の盛大なる送別會をお開き下さつたのは、誠に感銘の至りに堪へぬ次第で、殊に只今は、校長、教頭、堀田君の送別の辭を頂戴して、大いに有難く服膺する次第であります。尚私はこれから遠方へまゐりますが、何卒從前通りお見捨なく、諸君の御愛顧のほどを願ひます。

（と又叮嚀に一禮をして席につく。）

校長　就きまして、甚だ失敬ですが、私は是から據ない用事の爲、これで中座を致しますが、諸君はどうぞ寛いで、充分におやり下さい。（と立上り、送り出さうとする人人を制して）いや、それでは却つて困ります。今日のところは何卒其のまゝで……。（と一人下手へ去る）

幹事　では皆さん。どうぞお平に、御自由にお初め下さい。（書記の川村に）君、藝者をすぐ呼んでくれ給へ。

川村　かしこまりました。

（川村は次の間へ聲をかける。これにて藝者が三四人入つてくる。女中達が酒を運ぶ。座敷は急に陽氣になる。と道具は半廻りに成り、廊下を見せる。此の時、堀田と秋野は、互に目くばせをして座敷を抜け、廊下へ出る。）

堀田　（得意らしく秋野の肩を叩く）どうだ、最前の演説はうまかつたらう。

秋野　うむ。だが一ケ所氣に入らない處があつたな。

堀田　ふうん、何處が不贊成だ。

秋野　美しい顏をして人を陷れるやうなハイカラ野郎は、延岡に居ないからと、君は言つたらう。

堀田　うん。

秋野　ハイカラ野郎だけぢや不足だ。

堀田　ぢやあ、何といふので。

秋野　（巻舌で）ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ野郎の、猫ッ冠りの、香具師の、モ、ンガアの、岡ッ引の、わんわん鳴けば犬も同様な奴……、とでも言ふが好い。

堀田　（感心して）いや、俺にはさう舌は廻らない。君は能辯だ。第一單語を大變澤山知つて居る。それで演説が出來ないとは不思議だ。

秋野　なに是は、喧嘩の時に使はうと思つて、用心の爲に取つておく詞さ。演説と成つちや斯うは出ないよ。

堀田　さうかな。然しペラペラ出るぜ。もう一度やつて見給へ。

秋野　何遍でもやるさ。好いか……、ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の……。

（其處へ伊藤がよろ〳〵しながら出て來る。）

伊藤　兩君。そりや酷い……。逃げるなんて……、僕が居るうちは決して逃がさん。さあ呑み給へ。いかさま師……、面白い。いかさま面白い。さあ呑み給へ。（とぐいぐい座敷へ引張り込んで）さあ諸君、いかさま師を引張つて來た。さあ、うんと呑まして呉れ給へ。いかさま師を、うんといふほど醉はしてくれ給へ。おい君、逃げちやいかん。

（伊藤は秋野を壁際へ押しつける。ところへ又一人藝者が入つて來る。新井は急に立つて、其の藝者に一寸

合圖なしながら廊下へ出る。堀田が其の後を追ふ。）
堀田　新井君、何處へ行くのだ。
新井　いや、校長に話すのを忘れた事があるので……、すぐ歸つて來る。
吉川　まあ君。敎頭にかまはずに……。こちらで一つ頂きませう。（と附いて來て堀田の手を引張る）
新井　吉川君、どうか然うしてくれ給へ。それから、後の、例の事も……。
（と新井は吉川に目で知らせる。）
吉川　よろしい。ちやんと心得て居りやす。萬事は拙者の方寸にありで……。
新井　ぢやあ君、本當にたのんだよ。
（新井は急いで階段を下りてゆく。吉川は無理に堀田を座敷へ引戻す。座敷は段々賑やかに成る、なんこを摑む。拳を打つ。酒をあふる。唄ふ。中に古賀は手持無沙汰に一隅にかしこまつて居る。）
いく代　（秋野に）あんた、何ぞ唄ひなはれ。
（と三味線をかゝへる。）
秋野　俺は唄はん。貴樣唄つてみろ。
いく代　そんなら唄ひまほか。近頃こなないのが出來ましたぜ。花月卷、白いリボンのハイカラ頭、乘るは自轉車彈くはバイオリン、半可の英語でねペラ／＼と、アイアムグラッドツーシーユー。
富田　なるほど新しい、英語入りだね。もつと面白い奴はないかね。
小鈴　今度はわたいが唄ひまほ。よう聞いて居なはれや。鐘や太鼓でねえ、迷子の、迷子の、三太郎と、どんどこどんのちやんちきりん、叩いて廻つて逢はれるものならば、私なんぞも鐘や太鼓で、どんどこどんのちやんちきりんと、叩いて逢ひたい人がある。（と一息にうたつて）おゝ辛度。
吉川　おい鈴ちやん。逢ひたい人に逢つたと思つたら、すぐお歸りで、お氣の毒さま見たやうでげす。たま／＼逢ひは逢ひながら……。（と初める）
小鈴　知りまへん、おきなはれ。（と平手で吉川の膝を叩く）
吉川　（恐悅さうに笑ひながら）おやもう止める。その代り、僕が紀伊の國と棚の達磨さんを踊るから、鈴ちやん一つ彈いて頂戴……。（と身がまへる）
堀田　（號令を下すやうな聲で）おい藝者、藝者。俺が劍

舞をやるから、三味線をひけ。

豐次　あら、劍舞の三味線……。（澁面を作る）

（堀田は委細かまはず、眞中へ出る。）

堀田　踏破千山萬岳の烟……。

（秋野は古賀の傍へくる。）

秋野　古賀君、もう歸りませう。

古賀　いや、今日は私の送別會ですから、私が先へ歸つては失禮です。どうぞ御遠慮なく……。

秋野　なに構ふもんですか。送別會なら送別會らしくするが好いです。彼のザマを御らんなさい。氣狂會です。さあ行きませう。

（秋野が古賀を誘つてゐる處へ、吉川が絲を小脇にかい込み、やつて來る）

吉川　日清談判破裂して……、やあ、主人公が歸るとは酷い。これは怪しからん。日清談判だ。歸せないぞ。

（と絲を横にしてさへぎる。）

秋野　何をしやがるんだ。日清談判なら、貴樣はちやんちやんだ。是でも喰へ。（と拳骨で吉川の頭をなぐる）

吉川　おや、是は酷い。お打ちに成つたのは情けない。此の吉川を御打擲とは恐入つた。愈々以て日清談判だ。

（と吉川が又止めにかゝる時、堀田が飛んで來て、後から吉川の頸筋をウンと摑んで引摺り倒す。）

吉川　痛い、痛い。これはどうも亂暴だ。

（吉川の泣聲を後に、秋野と堀田は階段を馳け下りる。）

―― 暗轉 ――

第四場　溫泉町角屋の前

古き溫泉宿の軒には丸ホヤの瓦斯燈が眠さうに點いて居る。町家はいづれも大戸を卸して、店を明けて居る家は一軒もない。曉近く、遠くに遊廓の太鼓が聞える。やがて角屋の格子を明けて、帽子眞深に冠つた新井と吉川が出て來る。

新井　おい大丈夫かい。（とあたりを見廻す）

吉川　大丈夫ですよ。誰も居やしません。

新井　昨夜は隨分醉つたね。

吉川　一件が來てから……。あれから先は何にも知らずに寢てしまひましたよ。

新井　近頃にない醉ひ方だつたよ。

（と云ひながら歩き出すと、後から秋野と堀田が出て、

二人の前へ立塞がる。)

新井　おう吃驚した。君は堀田君と秋野君ぢやないか。今頃こんな處へ來て、少し冗談が過ぎやしないか。

堀田　默れ。教頭の職を持つて居る者が、何で昨夜角屋へ泊つた。

新井　教頭は角屋へ泊つては悪いと云ふ規則がありますか。

秋野　取締上不都合だから、蕎麥屋や團子屋へさへ這入つちや行かんと云ふのに、なぜ藝妓と一緒に宿屋へ泊つた。

新井　藝妓を連れて僕が泊つたと云ふ、證據がありますか。

秋野　ごまかすな。送別會の歸りに打合せをして置いて、藝妓を連れこんだ事を、向うの家に張込んで見て居たんだ。

新井　僕は吉川君と二人で泊つたので、同時に藝妓が來やうが來まいが、僕の知つた事ぢやない。

堀田　馬鹿言へ。そゥ論は無益だ。やつてしまへ。

秋野　よし。

(と云つて、秋野は新井をなぐる。)

新井　あつ痛い。亂暴するな。言論で來い。

堀田　何を言やがる。

(とこんどは堀田が新井を蹴倒す。吉川は新井を助けようとして。)

吉川　腕力に訴へるのは無法だぞ。

(と食つてかゝる。)

秋野　生意氣言ふな。

(と吉川を蹴倒し、袂にあつた玉子を二ツ吉川の顔へ叩きつける。吉川の鼻の先から黄味が流れ出す。)

吉川　助けてくれ……。人殺し……。

(と叫ぶ。)

堀田　えゝやかましい。

(と兩人で新井と吉川を散々に打ち、蹴倒す。二人は大地へ、へたばつて苦しむ。)

堀田　もう澤山か。澤山でなけりや、未だなぐつてやるぞ。

新井　もう澤山だ。

秋野　貴樣は如何だ。

吉川　無論澤山だ。

奥田　貴樣らは奸物だから、恁うやつて天誅を加へるのだ。これに懲りて以來はつゝしめ。いくら言葉巧みに辯解が立つても、正義は免さんぞ。

秋野　俺は江戸ッ子だから、卑怯な事はしねえ。今夜五時

までは下宿に居る。用があつたら巡査でも何でもよこせ。決して逃げかくれはしねえぞ。

堀田　俺も逃げかくれはしないから、警察へ訴へたければ勝手に訴へろ。下宿に居て呼び出しの來るのを待つて居るよ。

秋野　ぢやあぶら〳〵出かけよう。

（と二人は花道へ行き。）

堀田　君が吉川にぶつゝけた、あの目潰しは何だい。

秋野　あれかい。あれは目潰しぢやないんだ。下宿で芋斗り食はせて、營養が取れないから、用意に買つた來た玉子なんだ。

堀田　どうりで吉川の面は黄色かつた。

（と云つて兩人顔見合せ、笑ひながら入る。）

——幕——

第五場　野芹川の渡場

堤の向うが川に成つてゐて、角燈を點けた小船が繫がつて、船頭が一人居る。川に沿つて柳の木二三本あり。澄み切つた中秋の空に、滿月皎々として、水面にその影を落としてゐる。

（秋野が例のズックの革鞄と毛繻子の洋傘を持つて、車に乘つて出る。堤下で車夫が梶棒を下すと、秋野は蟇口から金を出して渡す。車夫は會釋をして入る。）

秋野　おい船頭……、居るかい。

船頭　先刻から待つて居るぞい。

秋野　まだ十時の汽車には間があるから、そんなに急がなくとも好いだらう。

船頭　好えとも……。今夜は月が好えで、緩り漕いで行かうぞいなもし。

秋野　然うだ。好い月だなあ。此方へ來て、初めてこんな好い月を見た。

（と言ひながら、秋野が船へ乘らうとすると、向うから。）

堀田　秋野……、秋野……、待つてくれ。

（と堀田が呼びながら駈けて來る。）

秋野　おゝ、堀田か。能く來て呉れたね。

堀田　實は一寢入してしまつたので……。下宿の女中が起してくれたから好いやうなものゝ、若し起して呉れないと、危く君に逢へない處だつた。

秋野　そりや好かつた。實は俺も君にもう一度逢つて行き

たかつたのだ。それは然うと、警察の方から何とも言つちや來なかつたかい。

堀田　俺の方へは何とも言つちや來なかつたよ。君の方は如何だね。

秋野　俺の方も來ないよ。斯うしてみると、彼奴等も流石に身分を知つて居るね。警察沙汰と成ると、體面に係はるからね。結局は撲られ損の泣寢入だ。

堀田　要するに、學校で俺の辭表を見たんだらう。彼奴等は、俺さへ居なけりや天下泰平なんだ。君は辭表は如何したい。

秋野　俺はあれから家へ歸つて、早速辭表を書かうと思つたんだが、何と書いて好いか分らないから、たゞ、私儀都合有之辭職の上東京へ歸り申候につき左樣御承知被下度候以上と書いて、校長宛に郵便で出して置いたよ。それから君も、愈々明日立つと極めたかい。

堀田　こんな不淨な處には一時間も長く居るのは厭だから、明日朝早く、九州へ立つよ。

秋野　ぢやあ是がお別れだね。

堀田　君は東京へ歸るのだから好いが、俺は九州へ行つて、又知らない處で暫く暮すのだ。

秋野　お互に又何日逢へるか分らないが、せめて手紙の遣り取りだけでもしようね。

堀田　然うして呉れ給へ。賴む。達者で居てくれよ。

秋野　君も身體を大切にして呉れ給へ。ぢやもう行くよ。

堀田　何だか變な心持だな。

（此のうちに秋野は船に乘り移る。堀田は纜を解く。）

堀田　おい秋野。君は東京へ歸るので嬉しいだらうな。

秋野　嬉しいとも……。第一お淸に逢へるし、これからは氣兼なしに、團子や蕎麥が喰へるからな。

堀田　うむ。然うだ。東京へ歸つたらうんと喰へよ。あははゝゝ。

秋野　ぢや左樣なら。

堀田　左樣なら。

（舟は川下へ辷つて行く。堀田は柳の木かげにのび上りながら帽子を打ち振る。）

――幕――

解說

新派臺本集に就いて

從來の歌舞伎劇又は所謂舊劇並びに新派劇に對して新らしい芝居即ち新劇又は現代劇の區別は一言にして云ひつくす事が出來る。それは兩者自らその出發に於て魂の相違を見る事が出來るからである。

ところが、これを歌舞伎劇と新派劇との問題について考へて見ると、明かに此の二ツを區別して兩者の相違を茲に論斷する事が出來ないものがある。それは一ツに、舊派と新派が形式の上に於て時代と現代との相違こそあるが、その內容に於て、魂に於て何等特別の意義を持つて居ないからである。

歌舞伎劇の由來を茲に說くまでもないが、新派劇の發生について簡單にその歷史を考へて見ると、岡山縣の壯士角藤定憲に由つて「大日本藝術矯風會」と云ふものが組織され、明治二十一年十二月十六日大阪市西區越後町の新町座に、自作の小說「吉備の夜嵐」を六幕に脚色して、「豪膽の書生」と改題し、もう一ツ「戰爭餘談上野の曙」と云ふのを上演したに始まると考へられる。此の劇團は、難波新地の一方亭と云ふのに集まつて、六十日間も稽古を積んだものであるが、開演に際して官憲の禁ずる所となつたので、「東雲新聞」の中江篤介氏が一切の責任を負ふと云ふ事になつて、はじめて初日を出す事が出來たと云はれてゐる。

同志は、角藤を座長に、横田金原、神原清三郎、岩尾一、池田吉之助、笠井榮二郎、有原長二、細井實、佐藤武三等、そのいづれもが當時自由民權を叫んだ所謂壯士又はそれに似た生活をした人々で、振つけ其他の相談には、中村宗十郎があづかつた。元來が、さうした政治的色彩の濃厚な團體であつて、その演ずる芝居そのものも、當時の政治問題を中心にしたのであるから、命にかけても芝居がしたい、俳優になり度いと云ふ風な情熱よりも、自己の政治的思想を宣傳する爲の手段であり、時代の劇界を救つてそこに新らしい藝術を育て上げると云ふ風な意氣よりも、むしろ生活の手段であつたと云ふ歷史家もある。

此の芝居は、演技としては見るべきものもなかつたが、珍らしいのと新聞社の聲援の力で非常な大入りであつた。それを見た川上音次郎は、明治廿四年の春泉州堺の卯の日座で「書生芝居」の旗上げ興行をする事になつた。川上は新聞記者、演說使ひと云ふ風な生活から、落語家會呂利新左衞門の弟子になつて、「浮世亭○○」と云ふ名で、時代を

諷した、オッペケペイの歌をうたつて居たものであるが、かつては、中村仲升の弟子として、僅かではあるが舞臺に立つた事もある。

「書生芝居」の狂言は、矢野文雄氏の「經國美談」と「板垣君遭難實記」と云ふ二種で、一座には、青柳捨三郎、金泉丑太郎、藤澤淺次郎などの人々が居た。こんな風に、一方「壯士芝居」と「書生芝居」とは、共に政治的色彩を帶びた狂言を上演して、當時の民衆の心持に投じやうとし、幾多の辛惨をなめて、少しづゝその地盤をきづきつゝある間に、これをまねて、諸方にさうした種類の劇團が生れ出て、幾多の俳優が出現して來た。

「書生芝居」は氣持がいゝ、顔へお白粉をつけない、立ちまはりは本當の柔道の手で投げつける…などゝ云ふ歡びが見物の心持にあつた。それは從來の歌舞伎があまりに様式に流れ、形の上の美、表面の技巧にのみ走つたのにあきたらない民衆の誰でもあつたらうが一ツには團十郎の活歴に由つて蒔かれた種が段々にその芽を出して來たのだと云ふ事を考へなければならないと思ふ。遂に、新派は寫實をその本領とし生命として進むやうになつて、あくまでも寫實、何處までも寫生に由つて、現代を表現しやうとつとめ、これに由つて、時代時代の民衆を惹きつけて、旭日昇天の全盛を見せたものであるが、新派は遂に、その本領とする寫實の極致に到達する事に由つてその凋落を來たしたものと私は考へる。これは演劇は遂に寫實のみでないと云ふ事を立派に證據立てゝ居る事である。

「壯士芝居」に取つて、忘れられない幸運が見舞はれた。それは明治廿七八年の日清戰爭である。實に國家に取つて大變な事である。此の戰爭熱の時代に一擧にして敵の本陣歌舞伎座の舞臺を占領したものは新派であつた。尤も、此の戰爭劇は、直ちに歌舞伎座に出演したものではなく、時代を知るに於て最も聰明な川上音次郎は、明治廿七年八月三十一日、淺草座に「壯絶快絶日清戰爭」と云ふ名題で打つて出た。その時の口上が振つて居る。

謹　告

川上演劇が此回開演の脚本は、苟も國威に相關し候に就ては、演劇中畏くも天皇陛下の尊號を奉稱致候時は看客諸君に於ては中途も無之候得共敬禮の意を被爲表度右豫め御注意申上置き候

附申。我陸海軍軍人に扮する俳優はその威嚴を示す爲總て禮服を相用ゐ候に付自然戰時の事實に相違致し候廉は右の次第と御推知下され度候敬白

と云ふのであつた。此の宣言は實にすばらしい力がある。見物を壓倒するの槪がある。番附を見ると、○の中に朝鮮支那の地圖と、一方の○の中には、北京城の略圖とが書い

てある。そして、朝鮮は日本と同色に塗つてあるなどが、いかに當時の民衆の心持に合致して居るか、北京城の略圖がどんなに人々の心をそゝり立てたか、實に川上と云ふ人の興行的手腕には驚くべきものがある。勿論芝居は大當りであつた。

同年十一月興行には、團十郎菊五郎も、「海陸連勝日章旗（あさひのみはた）」と云ふ戰爭劇を出して居る。凡てが時代である。川上は此勢に乘じて、支那に戰況を視察して十二月市村座に、「川上音次郎戰地見聞日記」を出し、二十八年五月歌舞伎座に、「威海衞陷落」を上演し、高田實の丁汝昌が遂に新派大統領の名を爲さしむる因を作つたなど、川上は實に連戰連勝明治廿九には三崎町に、自ら川上座を建てる迄に至つた。我々は、新派を思ふ時、川上の名を決して忘れる事は出來ないものがある。

英國の芝居が、宗教劇にその端を發し、はじめは、奇蹟（ミラクル）劇を僧侶達の手で演じて居た。云ふまでもなくこれは、布教の手段で、說敎に由つてするよりも、端的に信者の眼に訴へる事によつて、キリストの德を感ぜしめやうとしたおつとめ的のものであつた。しばらくする中に、見物の中に出演を志願するものが多く、遂にその宗教劇は僧侶から、俳優の手にうつッた。お務でする僧侶よりも、志願した信者の方が芝居はうまいにきまつて居る。見物は、劇の精神よりも演技に由つてこれを喜ぶやうになり、俳優の藝はますます進歩して來た。と、此度は、單純な宗教劇では滿足しなくなつて、俳優は複雜な筋を求めるやうになつた。人情劇寫實劇の傾向にうつると、見物は一層にこれを喜んだ。いつかストーリーは宗教を忘れ、ともすれば、これをお寺で演するには、あまりに失禮なものとなつて、芝居は再び僧侶の手に戾されたが、結果は、お寺の芝居がアブもたからないに對し、素人芝居は大入り滿員になつたと云ふ事である。本當の芝居は、そこから始まつて來た。丁度、書生芝居が、そのはじめ主義の爲、宣傳の爲、生活の爲にその旗をひるがへし、そこに幾多舞臺に生きたい心願の俳優の輩出を見、最後に新派劇となつて、技藝の發達がその全盛を極むるに至つたので、俳優中の優秀なるものが、一座の頭目ともなり、時代の寵兒となつて榮華の夢を見るやうになつて來た。

時代の民衆の趣向に投じ、政治思想の宣傳に努め、荒々しい男性的活劇に由つてその一歩をふみ出した新派は、舞臺上の寫實を標榜して、戰爭劇にその地盤をふみかため、續いて藝の力に由つて、その發展を見るに至つた。寫實の極致、舞臺上のリアリズム、これが彼等の全盛の鍵である、同時に凋落の運命であつたと私は思ふ。寫實の極致は、知らず識らずに、その演技が歌舞伎のツボに陷ちて居る事を知

らなかつた。形式上の表現が、彼等の内面の生活に何等の深さをも加へない事に氣づかなかつた。新派の俳優は、内に深く自己を掘り下げて行く事を努めずに、表に形に、自己をあくまでも發展させやうとして居た。その興行政策は常に時流に投じ、時代の趣向に倣はんとのみこれ努めた。戰爭熱が盛んならば戰爭劇、新聞小説の劇化が喜ばれゝば何處までもそれに由つて進んで行つた。興行法としての賢明さは、常に時代を知る事にあるが、芝居そのものは、決して興行法だけで行くものではない。

興行師は、自己の立案の的中を見て、瞬間の喜びを爲すものであるが、決して明日の演劇を慮るものでない。プランの成功はある程度まで永續するかも知れないが、それは單に瞬間の積み重ねであつて、根づよき演劇の成長では斷じてない。見物は常によき演劇を求める。よき演劇とは何であるかと云へば、よき脚本を理解ある優秀の俳優に由つて演出せらるべきもので、脚本を忘れてそこに演劇を思ふ事は砂上に高樓を築くよりも更にあはれなものである。

新派は將してよき戲曲を多く演じたであらうか？

古今東西、名優の出現に由つて劇界はいつも變化進展した。名劇作家の出現に由つて、常に劇界は根本的に革命されて居るではないか。名優も偉い、然し名優只一人現はれても、時代の見物は單にその演技の好もしさに惹かれ樂しむに止まつて、その名優の死に由つて、劇界は再び元のさびしさに返へつて行く。そして、そこに何の進展も見る事が出來ない。名優と共に名劇作家のあらはれが、本當に見物を幸福に導くものである。

新派は果して、本當によい脚本を上演したゞらうか？

明治二十一年にその第一聲を上げた新派は、以來三十有五年間、その全盛期に、佐藤紅綠氏作の創作を上演した他に果して何を上演したと云へるだらうか？　私は新派の上演目錄を編みながら、本當にさびしい心持になつた。小説の脚色は、脚本ではないかと云はれるかも知れない。脚色も勿論立派な作品である。然し、私の云ふ戲曲とは、單にストーリーのみを云ふのではない。劇作は單に一つのストーリーを上演可能の形式で表現しただけのものではない。劇作は、常に内容形式共に現代のそれにあきたらざる藝術家の心の聲がこもらなければそこに何等の意義もない。劇作家の力が、その意圖が、俳優をも見物をも共に導き、一歩向上の途に上らしめるものでなくてはならないのだ。時代に生きる俳優の力に依つて、藝術家が自己の魂を表現する所に本當の脚本の存在がある。

俳優は、指定された脚本の筋を辿つて、自己の持つて居る丈の藝技を表現する丈では何にもならない。脚本と相戰ふ所にその意義がある。脚本と俳優と、兩々相待つて、は

じめてそこに火花が散る、私の求める演出とは即ちそれである。

前に私は、見物が、名優の演技丈に醉ふ時代もあると云つた。然し、それは止むを得ず見て居るのである。邊鄙な土地に美酒を求めるに由なく、地酒に醉ふに等しいもので誰れか甲乙相異る酒に對して、好んでその惡酒を口にするものがあらうか？　よき脚本とよき俳優、それが常に見物の求めてやまないものである事を忘れてはならないのだ。

新派が、歌舞伎劇にあきたらざる時代の見物に見へんとして起つたものであるか怎かは茲に論じたくないが、もしかりにもその意氣があつたとしたら、あまりにその用意が足りなかつた。用意とは何かと云へば彼等は、單にその形骸丈を知つて、脚本の存在を忘れて居たと云ふ事が出來る。形式の革新は寫實となつて現はれ、その寫實の極致は、反對に歌舞伎の埒に陷入る事に由つて自滅を招いて居る。そこに脚本の存在が嚴然としてあつたならば新派はもつともつと異つたものとなつて現代にその足跡を立派に止め得る事が出來たであらう。

新劇を見よ！　從來の演劇に對して、あまりに明かにその立場を異にして居るではないか。即ち彼等は、俳優の演技にのみ待たずして、脚本を演出しやうとして居る。これに對して新派は自己の藝だけに生きやうとつとめて居る。

こんなはなしがある。

地方巡業の時に、舞臺の道具が間に合はない爲に、淺黃幕の外に仕出しを左右から二人出してつなぐ事にした。幕があくと舞臺は一面の淺黃幕で、上手からと下手からと二人の百姓が出て來た。

「イヨー作造どんか、しばらくだつたな

「イヨー與作どんかしばらくだつたな

「時にお前さん所のおつかあは丈夫か？

「ありがたう、丈夫だよ、お前さん所のは怎だ？

「御かげさまで丈夫だよ

「ぢや又會ふべい

「さよなら

と別れて這入らうとすると、うしろの道具はまだ出來ない。二人は、「もう少しつないでくれ」と又舞臺へ押し出された。二人は又舞臺のまん中で會つた。

「イヨウ作造どんか……

とは云つたが、何ぼ下まはりの役者でも前に云つたせりふを再び繰り返へす事は出來なかつた。腋の下から汗がたら／＼と流れ出た。一方も同じやうな心持で、心からなさけないと思つた。そこで

「與作どん怎したど？

と訊いた。
すると、
「ウム、向うへ行つて見たらな、えれい崕で怎にも行かれねーだ
と云つた。すると一方もそれに救はれて
「己らも、向うさ行つたが、えれい藪で怎にも行かれねーだ
と云つたが、あとが出ない。仕方がなしに
「時にお前んとこのおつかあは怎だ？
とやりはじめた。すると、後ろの道具が出來たので、
「早く這人るんだ、何をぐづ／＼してるんだ！
と云はれた。二人は、此度は別れるキッカケをさがさなくてはならなかつた。
「作造どん、己らあ、行けるか行けねえかもう一邊行つて見るだ
と云ふと、一方も
「さうか、己らも崕が下りられるか怎か、もう一邊行つて見べい。
と上下(かみしも)に別れて這入つた。
芝居はこれから本當の大芝居になつて、見物はしばらくすると、仕出しの苦心などはとつくの昔に忘れて居た。
くだらないやうなはなしであるが、私は此所に脚本と云ふものを見出すのだ。舞臺に現はれるいかなる役にもその生活と運命とがあるのだ。突差の場合にあらはれた二人の下まはりは、崕と藪とのはなしをする時に、彼等の頭で考へた仕組即ち脚本を演出して居たのだ。對話のある所、筋のある所に脚本の存在は必然的のものである。田舍まはりの俳優が「口だて」の芝居をする時にも、そこには必ず脚本がある筈だ。脚本とは原稿紙に書かれた文字ではない。劇作家の考へのまとまつたものである、仕組みである。舞臺の上に出這入りがあり、對話があり、筋があり、科がある所に、然して脚本の存在を否定する事が出來やうか？
本當の脚本とは、常に舞臺上の革命を意圖したものでなければならない。一歩も演劇藝術の進展を思はずに居られない作者の考想の表はれたものでなければならない。時流に投じ、巧みにその時代の觀衆の歡ぶ所のものを提供するものは、要するに戯作者の仕事であると云はなければならない。
これは、今新派臺本集を編むに當つて、しみ／＼考へられた私の脚本に對する一愚見である。新派劇に對する小見である。
然し又一方から考へて見れば、芝居程實際に近い藝術は無い、これを演出するに必らず多額の金を要する、多くの人と多くの容間とを要する、そこに詩人が自らの歌をうたふ

やうに、自由もなければ氣樂さもない。常に經濟と絶ち切れない所に通俗的な商人の氣持が加味する爲に、新派が理想の天地に進むる事が出來ないからと云つて、一概にその俳優に罪ありとなし、作者に能なしと斷じて仕舞ふ事は出來ない。劇團の持續を計れば、損失なからしめなければならない、興行師が冒險を恐れて、いつも今日を忘れる事が出來ないと云ふ事になつて來る、要するに、新派劇團全盛期に於ては、日本の劇界にはあまりに魂の糧が少なかつたと思はれる。根柢なき思索の下に、人生をもがき苦しむに似た所もある。小山内氏の自由劇場は實に日本の新劇界に取つて一大警鐘の響きをなし、以來急轉して新劇の烽火は至る所に擧つた。新派も勿論その影響は受けては居たが、この機運に乘じて自己の活動を轉換すべく、新派はあまりに重々しい大きな仕事になつて居た。傳來の舊家が轉業しかねたと云ふ形もあつた。そして、日本の新劇運動は、當然その影響を受けて變轉すべき新派と離れ離れの行動に出て、新劇は新劇として別な道を辿つて進んだ。その並行が今日猶續いて居る。

新派の歩いた道をもう一度ふりかへると、その發生の當初は、自由民權の叫びを上げる手段としての演劇が、戰爭劇にその地盤をうちかたあ、次に新聞小說の脚色の時代となり、それから佐藤紅綠氏の創作時代、續いて又脚色時代そして此度は大合同と云ふ風な興行的計畫時代となり、その分離が凋落の悲運に向つたもので、その後の新派は、要するに全盛期の繰り返へしにすぎないと云ふ感がある。が私として玆に忘れられないものは、小山内氏が伊井氏と共に眞砂座に居られた間に、いろ〳〵に試みられた演出がある。殆んど原作通りの近松研究の連續、島崎藤村氏の「破戒」の上演、夏目漱石氏の「我輩は猫である」の脚色等、結果に於てそれは小山内氏が自由劇場を起す以前の用意であつたかも知れないが、そこから何物も生れ出なかつたのが不思議に思はれる位である。

恁云ひ來ると、新派の人々はいづれも眠つてのみ居たやうに思はれるが決してそんなものではない、各人各個にそれ〳〵の生きる道を考へ、河合氏の「公衆劇團」もあつた、井上氏の「新時代劇協會」も起つた。新進の新劇座もあつたが、いづれも時代を劃するまでに至らずに、いつかその姿を消して仕舞つた。それは、さうした仕事から受ける生活の脅威があつたのではあるまいか、穴勝にそんな苦しみをなさずとも、晏如として笑つて居る同輩の多くを傍に見た爲ではあるまいか。意氣と熱との不足ではあるまいか。これを思へば、新派は全盛の時代に於て、あまりに尨大な生活の樣式を整へた事が、却つてその果を爲す事になつて丁度先祖の財を二代が只これ守ると云ふ風なものであつた

のかも知れない。

新派全盛期に於ては、歌舞伎劇の一團すら新派の狂言を出さなければ見物が來ない時代があつた。その反對に新派が舊物を出さなければ見物の來ない現象も極めて最近の事實である。然らば演劇は見物の好むがまゝに變化して行くべきかと云ふに、私は決してさうでないと思ふ。芝居見物程たしかなものはない、彼等は即ち時代の求めるものを求める人々である。ある人は云つた。

興行師の損は思はくちがひである。又取りかへせる時もあるが、見物に損をさした場合には、再びそれは取りかへせない。

見物は、所定の觀劇料を支拂つて求めるものを求め得なかつたらその損失は永遠に取り戻せない。從つてその劇團に出つて、再び損厘毛をする事は決してない。つまり二度と來ないと云ふ事である。見物は何を求めるか、時代は何を見やうと思つて居るか、そこに劇作家も俳優も興行師も充分考慮を置かなければ、新派は再び救ふべからざるものになつて仕舞ふ。凋落から殆んど絶滅とまで云はれ、やうやく昨年十月から茲に半歳を市村座にたてこもつて、ともかく新派の本城は一歩一歩形づくられる事になつた。私は此際が一番重大な場合であると思ふ。新派の演技は堂に入つて居る。時代は新らしい作品の上演を求めて居ると私は信ずる。新派が多くの新作を上演して行く所に、必らず優秀な作品が生れ、新派の爲に本當の劇作家が現はれて來ると思ふものである。

新派臺本集に就いての解說が遂に走つて徒らな愚論を述べた事を、自分ながら恥かしく思ふ。然し、それは私が新派を愛し、棄てかねる心のあらはれであると考へていたゞきたい。愚論聞くべきものなしとならば井底の蛙の囈と一笑に附されたい。新派に執着するものゝ愚痴萬一聞くべきものあらば望外の幸福である。

新派臺本集を編むに適當な人は、私以外に數多くある。むしろ私などはその資格に於て全く缺くる所多いものである。が、日本戲曲全集の係の人は、これを私に依囑された。私の考へのまゝにこれを行へば、臺本集としてこれを一卷にまとめるにはあまりに多くを棄てなければならない。又その作品の內容形式に於ても、加筆訂正をほどこし度いものが非常に多い。いろ／＼の案もあつたが、出版書肆の考へもあつて、此の一卷は要するに、新派が上演した代表作の一部をならべたものになつて仕舞つた。が、ある事情の下に、佐藤紅緑氏眞山青果氏の作品をのせられなかつた事は、何と云つても悲しい事である。

猶、新派の臺本は、出版されて居るものが殆んどないと

云つてもいゝ。それのみならず、その臺本は上演の度に座付作者に由つて必らず修正增補され、同じ作品でありながら、たとへば、喜多村綠郎氏の臺本と河合武雄氏の臺本とは、此の兩女形の演技の特色を一層濃厚に表現する目的に由つて、全く異つた場面に、それ〴〵の力をこめて書き代へられたものもある。又一方、元來寫實を生命とする演出である爲には、その時代々々の流行、趣味、言語……等にも上演の度に訂正がほどこされて居る。それ等の點で、新派臺本の定本を得ると云ふ事は、全く不可能の事であつた。私はいろ〳〵の先輩に尋ね、いろ〳〵の方面に意見を聞き書肆の希望をも參酌して集める事にした。猶もう一ッ、東京に上演された臺本を用ふる事の出來ない事情があつたので、その殆んど全部は大阪の小織桂一郎氏所藏の臺本に由る事にした。そして、その內容については、なるべく原作のまゝを尊重して、多少の修正をほどこす事とし、その中出版されて居るものは、全部そのまゝに採錄する事にした。臺本の出來た時代にしても、前後甚だ不揃であるが、それはいろ〳〵の事情で不統一になつたものである。私としては、不滿此の上なきものであり、讀者に對しても申わけのないものと心得る。が、これは他日機を見て新派の臺本を集めて見る考へであるので、大方の叱正に待つて、漸次完成を期し度いと念じて居る。

此一卷を以つて、新派の步んだ道の一端でも、解つていたゞく事が出來れば、私の光榮はこれに過ぎるものはない。過去一年に亙つて、幾度か煩瑣の勞を厭はれずに、祕藏の臺本を度々貸して下すつた、喜多村綠郎氏小織桂一郎氏に、私は心からの感謝をさゝげるものである。

昭和四年四月十三日

旗洗莊にて　川村花菱

興行年表について

次に擧げた年表は、新派が起つてから今日まで、東京の大劇場で上演された代表的なものだけを並べて見る事にした。これを作製するにあたつて、大震災の爲にその材料が全部失くなつて居るので、いろ〳〵な方面からそれを集めて貰ふ事に、大變な時間と手數とを要する事になつた。出來上つたものは自分ながら決して滿足なものとは思へない。然し、もし此の年表で、新派が步いた道が、朧氣にも分つていたゞけるとすれば、編者は此の上よろこばしい事は無い。年表を作るに當つて松竹の脇屋氏立花夏野氏の一方ならない苦勞を私は忘れ度くないと思ふ。

新派脚本興行年表

興行年月	劇場	上演種目	出演俳優
明治二十一年十二月十六日	大阪新町座	豪膽の書生 戰爭餘談上野曙	角藤、佐藤
明治二十四年二月	堺卯の日座	經國美談 板垣君遭難實記	川上、金泉、青柳、藤澤
六月二十日より	鳥越中村座	板垣君遭難實記 花柳噂存廢 監獄寫眞鏡 勸善美談兒手柏	青柳、藤澤、川上
七月三十一日より	同　中村座	拾遺後日蓮枝楠 經國美談	川上一座
八月	同　中村座	佐賀暴動記 平野次郎	川上一座
同月十一日より	淺草吾妻座	政黨美談處女操 豐太閤烈封册 名大瀧怨恨短銃	木下(涼藤)、伊井、米坡

明治二十五年 三月八日より	二長町 市村座	鎖港攘夷後日譚 備後の三郎 花宴團一座	川上一座
五月七日より	芝 盛元座	明治才子戀實學 男女祝賀五節句	米坡、伊井、高田、川上
	市村座	ダンナワイケナイ、ワタシワテキズ 惡禪師	川上一座
七月十三日より	市村座	明治裁判辯護譽 大地震美濃實記	伊井、高田、山口
十一月二十三日より	鳥越座	書生の犯罪 安宅義經問答	川上一派
明治二十六年 一月二日より	鳥越座	巨魁來	川上一派
一月三日より	新富町 深野座	明治裁判辯護譽 星月夜見聞實記	山口定雄
五月二十四日より	新富町 深野座	成田利生壯士遁荒行 實錄先代萩 開化の鞘當	山口定雄

六月一日より	淺草吾妻座	義 楠正行	福井、佐藤、秋月、福島
明治二十七年一月一日	新富町深野座	金酒世界廻百圓 大藏卿 壯士の吃又	山口定雄
	駒形淺草座	意外 楠正成	川上、伊井
二月七日	同淺草座	又意外	川上、高田、小織、伊井
四月一日	新市村座	明治天一坊 新作曾我對面	福井
六月七日	淺草吾妻座	怪男兒	角藤、佐藤
七月七日	本鄉春木座	又々意外	川上
八月三十一日	駒形淺草座	日清戰爭	川上、岩尾、藤澤、高田、中野、小織、伊井、深澤、水野、石田、柴田
十二月	市村座	戰地見聞日記	川上、藤澤

明治二十八年 一月三十日	二長町市村座	明治四十二年	川上、久女八
三月十八日	駒形淺草座	大發明 楠	喜多村、伊井、佐藤
五月十七日	木挽町歌舞伎座	威海衛陷落 因果燈籠	川上、高田、中野、小織
七月五日	木挽町歌舞伎座	誤判錄 大江山	川上一座
同月六日	二長町市村座	未來の臺灣 道成寺	伊井、佐藤、水野、九女八
八月十四日	赤坂演伎座	都新聞娘義太夫	山口定雄
十月二十日	本郷春木座	盜賊世界	川上一座
十一月十五日	二長町市村座	二人狂	高田
明治二十九年 一月二日	赤坂演伎座	忍び夫	山口
二月十三日	赤坂市村座	法衣屋お熊 野中至	伊井、山口

三月十日	駒形淺草座	木曾富五郎 野村三千三 日高川	佐藤、水野
六月	○神田三崎町に川上座新築落成す		
八月五日	都座	繪地獄 大海嘯 嗚呼少尉	村田、河合、福井、水野、靜馬
九月二十二日	三崎町川上座	誓使者 噓實心冷熱	川上一座
十月十五日	都座	都新聞大惡僧 本朝二十四孝	山口定雄
十一月三日	駒形淺草座	七人斬 本朝二十四孝	伊井、兒島
明治三十年一月一日	赤坂演伎座	探偵實話山田實玄 吉富巡査 嫗山姥	伊井、兒島
一月五日	駒形淺草座	蒲鉾屋殺し 曾我對面 矢矧日吉丸	水野、福井

一月三十日	三崎町川上座	八十日間世界一週	川上一派
二月十四日	都座	蒲鉾屋殺し 雪月花	山口一派
三月十日	淺草宮戸座	其處が江戸ッ子	伊井
三月十三日	赤坂演伎座	田貞二 野村に武市 勘平裁判	水野、佐藤
四月十日	都座	義勇任俠眞壯士 伊勢物語	靜馬
四月二十五日	赤坂演伎座	波濤高音港入船 活動寫眞	兒島
五月二十一日	川上座	鐵世界	川上一派
六月八日	深川座	捨小舟 蜘蛛拍子舞	兒島、佐藤、水野
六月十八日	市村座	大評判 滑稽地獄廻り	伊井、伊藤仁太郎、河合、中野、山口

七月十一日	新富座	財産箱 日蓮安國論	水野、靜馬、兒島
八月三十一日	市村座	都新聞笠森團子 慾	伊井、河合、山口
十月二十日	三崎町東京座	日蓮大士眞實傳 人情世界噂山口	河合、山口
十月二十三日	赤坂演伎座	俠骨男子	河合、水野
十月二十五日	三崎町川上座	義俠の犯罪 梅田雪濱	靜馬、藤澤
十二月一日	市村座	都新聞評判小僧 七騎落 戀の病	山口、伊井
	市村座	金色夜叉	川上
十二月七日	淺草宮戸座	探偵實話鼬小僧 お笑草辨天娘	河合、佐藤
明治三十一年 一月一日	三崎町川上座	膽才子	川上、柴田、靜馬、藤澤

二月三日	淺草宮戸座	都新聞娘心 文藝倶樂部 三日月	河合、佐藤
二月八日	市村座	松樣美人生埋 和田合戰女舞鶴 滑稽大角力	伊井、山口
三月二十五日	市村座	大起業 金色夜叉	高田、小織、藤澤
四月二日	三崎町東京座	意外の眞寫 惡の報い	島田新平
四月十八日	川上座	畜生腹 可兒大尉	川上
四月二十日	赤坂演伎座	南京松 三國妖婦傳	山口
六月三日	三崎町川上座	孤島の美人 華族との旗本	川上
七月十四日	川上座	幻影 衆議院	川上

七月二十五日	淺草座	賣國奴 貞か不貞か	三上、藤澤、小織
七月二十九日	市村座	競爭社會 水滸傳だんまり	山口、伊井
八月十三日	歌舞伎座	又意外 三恐悦	川上、高田、藤澤、佐藤、 小織、河合、柴田
九月十六日	歌舞伎座	待則甘露 性は善 夏小袖	伊井、高田、小織、河合、 兒島
九月二十五日	新富座	西も東も戀 心の暗 金が仇	河合、兒島、水野
十月一日	三崎町川上座	小指 西南余聞俠兵士	森操
十一月一日	新富町新富座	海の祕密 阿波鳴戸 本朝二十四孝 扇巴	藤澤一派新演劇 又五郎等子供芝居

十一月五日	三崎町川上座	えにし 公知卿 彰義隊	藤澤、柴田
十二月四日	東京座	捨小舟 走馬燈	青木千八郎
十二月十七日	常盤座	蟒お政 妹背山御殿 蜘の精	河合、水野、兒島、九女八
十二月二十七日	淺草座	都新聞近世實話 大黒天	藤澤、伊井
明治三十二年 一月一日	三崎町東京座	浮沈 壽和田酒盛	青木
一月一日	淺草常盤座	惡魔拂 廻る小車	水野、河合、兒島、九女八
一月一日	川上座	不思議 抱腹	柴田
一月二十六日	常盤座	山田實玄 巴御前 文珠の獅子	水野、河合、兒島、九女八

四月九日	淺草常盤座	五寸釘寅吉 / 野村三千三	水野、兒島、河合
四月十四日	赤坂演伎座	大磯明 / 武骨娘	伊井、藤澤
五月十五日	淺草常盤座	蓄生弊害目覺し	水野、河合
五月十七日	川上座	遼東半島	福井、藤澤、深澤、柴田
六月八日	赤坂演伎座	戀の病 / 二人妻	河合、深澤
六月十日	淺草常盤座	近時評判新聞	水野、河合、中野、兒島、森操
七月一日	赤坂演伎座	火中の美人 / 神田つ子 / 段姐妃	山口
七月九日	淺草常盤座	五寸釘寅吉	水野、兒崎、森操
七月十一日	歌舞伎座	月の輪双紙 / 又大評判	伊井、福井、藤澤
七月二十二日	赤坂演伎座	四本指 / 十萬圓（夜の部）	青木、菊地武成
七月二十七日	深川座	清水定吉	深澤

〃	常盤座	鳩山勘次	水野、河合
八月十日	淺草常盤座	村正勘次 女定九郎 喜劇野晒	水野、河合、兒島、中野、森操
八月十二日	赤坂演伎座	佛勘助(晝の部) 浮世地獄	青木、菊地
七月二十五日	淺草淺草座	七十五萬圓也	女壯士劇茅野りん子
八月三十一日	赤坂演伎座	竹婦人 內地雜居	青木
九月十七日	淺草座	鬼と神 又々大評判	伊井、藤澤、福井
九月二十日	赤坂演伎座	村正勘次(晝の部) 夏木立(夜の部)	青木
九月二十九日	淺草常盤座	村正勘次後日の聞書	水野、河合、兒島、中野、森操
十月廿七日	淺草常盤座	金看板	河合、水野、兒島、深澤、中野
十一月二十三日	淺草常盤座	夜の鶴 生野の義擧	河合、兒島、深澤

明治三十三年 一月一日	赤坂演伎座	仇情噂の鬼百合 江戸鹿子	伊井
二月十日	本郷春木座	是兄弟	伊井、福井
四月一日	三崎町川上座	金鶏勲章 隣りの女	藤澤、中野
四月十四日	新富町新富座	鬼坊主黒田水精 玄武門	藤澤、中野
四月十四日	淺草常磐座	女天一	水野、河合
五月九日	淺草常盤座	御前屑屋	水野、河合
五月二十一日	淺草宮戸座	生首正太郎 芽出度夫妻	福井、兒島
五月二十四日	演伎座	膾取(晝の部) 海賊房次郎(夜の部)	伊井
六月九日	淺草常盤座	いさみ おもしろし	水野、龜井、本多、境
六月二十二日	三崎町川上座	坂本龍馬 辰巳巷談	藤澤、中野、山崎

六月二十二日	淺草宮戸座	鼬御殿	福井、兒島
六月三十日	淺草常盤座	男の腕	水野、本多、龜井、[illegible]
七月一日	新富町新富座	戀のピストル	山口
七月十四日	赤坂演伎座	日本軍人（晝の部） 新比翼塚（夜の部）	伊井、福島、藤澤
七月二十八日	新富町新富座	東洋の戰爭 書生大工	山口、深澤、秋月
七月二十九日	淺草常盤座	賢の愚（晝の部） 福德利（夜の部） 夏小袖（夜の部）	水野、兒島
八月三十一日	淺草常盤座	江戸櫻	水野、兒島、本多
九月一日	淺草宮戸座	人の心	佐藤、福井
九月六日	歌舞伎座	明治忠臣藏 皇德及四海 日高川 八重襷	伊井、深澤
十一月一日	淺草宮戸座	鹽原多助 當りやおきん	伊井、深澤、河合

十一月二十九日	淺草宮戸座	當りやおきん 自由廢業	伊井、深澤、金泉、福島、鶴岡
十一月三十日	淺草常盤座	自轉車お玉	水野、兒島、岡本貞
明治三十四年 一月一日	淺草常盤座	こゝろいき	水野、兒島
一月一日	淺草宮戸座	富士山(晝の部) 悪拂魔(夜の部)	伊井、兒島、深澤、松本
一月一日	駒形淺草座	萬黛 雪と墨	福井、中野、石田信夫
一月一日	三崎町改良座	正道邪道 瀧の白糸	原澤、石田、中野
一月二十八日	三崎町改良座	有喜世御殿	青木、石田
一月三十日	淺草常盤座	當り屋おきん	兒島、河合
二月六日	淺草宮戸座	關東名物男一疋 手習子 八重霞	中野、石田、米坂、山崎
四月十四日	淺草常盤座	又闇魔	水野、河合、本多、兒島、龜井、境

七月七日	淺草常盤座	モ一つ閻魔	水野、河合、本多、兒島、龜井、境
七月十四日	久松町明治座	鹽原多助 該撒奇談 小旦那藤三	伊井、深澤、金泉、松平、河合
明治三十五年			
一月一日	中洲眞砂盤	山賊藝妓 夜討曾我	伊井、馬十、河合、福島、璃宗
二月	宮戸座	金色夜叉	中野一座
三月	中洲眞砂座	天網島	伊井、河合
四月	中洲眞砂座	堀川波の鼓	伊井、河合
五月	中洲眞砂座	丹波與作	伊井、河合
六月	中洲眞砂座	戀八卦柱暦	伊井、河合
七月	中洲眞砂座	心中宵庚申	伊井、河合
九月	中洲眞砂座	冥途の飛脚	伊井、河合
十一月	中洲眞砂座	夕霧阿波の鳴渡	伊井、河合

明治三十六年 一月	二長町 市村座	玉匣兩浦島 壽門松 新年梅 夏小袖	伊井、兒島、福島、守住、境
二月	久松町 明治座	オセロ	川上、高田、藤澤、守住
二月	眞砂座	佐倉宗吾 花井お梅	伊井、河井
三月	二長町 市村座	迷ひ子 芝濱革財布	伊井、兒島、河合
四月六日	改良座（舊川上座）燒失		
五月	春木町 本郷座	不如歸	藤澤、佐藤、中野、木下
六月	久松町 明治座	江戸城明渡（高安月郊作） マーチヤントオブベニス（土肥春曙作）	川上、貞奴、高田、藤澤、福井、佐藤、靜間
六月	三崎町 東京座	金色夜叉	高田、藤澤
五月	春木町 本郷座	聖人歟盗賊歟	福井、兒島
七月	春木町 本郷座	己が罪	高田、藤澤、佐藤、守住
十月	駒形 國華座	闇と光『キングリーア』	福井、兒島、中野、柴田、櫻木

十月	宮戸座	江戸城明渡 華嚴の瀧 人情	伊井一座、仁藤仁太郎加入
十月	東京座	短慮の刄 平野國臣 空中飛行機	高田、藤澤
十月	春木町本郷座	狐の裁判 浮かは胡弓	川上一座お伽芝居
十一月二日	春木町本郷座	ハムレット（山岸荷葉 土肥春曙 共譯） 墓地と王宮の場面 （舞臺意匠、山本芳翠）	川上、貞奴、藤澤、中野
明治三十七年 一月	中洲眞砂座	國姓爺合戰 サーベル（小波作）	伊井、村田
二月	中洲眞砂座	乞食の子賊華族の子賊 （晝の部） 豫備兵（風葉作）（夜の部）	伊井、村田、關
五月	歌舞伎座	潜航艇	藤澤、佐藤
五月	本郷座	戰況報告演劇 喜劇催眠術	川上、藤澤、中野

七月	中洲眞砂座	サツフオー	伊井、河合、藤澤
八月	中洲眞砂座	火雨の洞 金の成る木	高田、伊井、河合、藤澤
九月	東京座	不如歸	芝翫、高麗藏、女寅、壽美藏
九月二十二日	春木町本郷座	フランチエスカの悲戀（松居松葉飜案） 高野聖	高田、河合、藤澤、佐澤
十一月	春木町本郷座	想夫憐	高田、河合、藤澤、佐藤
	中洲眞砂座	ロメオとヂユリエツト（小山内薫飜譯）	伊井、水野
	中洲眞砂座	化競丑滿鐘	伊井一座
十二月一日	春木町本郷座	明治忠臣藏 喜劇ハイカラ	高田、河合、藤澤、佐藤
十二月	久松町明治座	坂本龍馬 心中船	水野、河合
明治三十八年 一月	三崎町東京座	乳姉妹	芝翫、女寅、高麗藏

	春木町 本郷座	乳姉妹	河合、藤田
二月	中洲 眞砂座	征露戰塵會我物語 娘節用 結ぶの神	伊井、藤澤、秀調
	中洲 眞砂座	新生涯	伊井、木下、井上
三月	久松町 明治座	王冠（長田秋濤作）	川上、高田、河合
	三崎町 東京座	魔風戀風	芝翫、女寅、高麗藏
五月	春木町 本郷座	新生涯（田口掬汀作）	藤澤、佐藤、木下
	中洲 眞砂座	影法師 上杉謙信	伊井、村田
六月	駒形 國華座	妙な男	水野、龜井、兒島、木下、柴田
	中洲 眞砂座	金色夜叉	伊井、村田、河村
七月	春木町 本郷座	目黒巷談 正氣の狂人	高田、河合、藤澤、佐藤、木下
	新富町 新富座	己が罪	革新派一座
	春木町 本郷座	金色夜叉（小栗風葉脚色）	高田、河合、藤澤、佐藤、木下、小織

	中洲眞砂座	巖窟王	伊井、村田、深澤
八月	三崎町東京座	女夫波	革新派一座
	中洲眞砂座	業平文治	伊井、村田、深澤
九月	中洲眞砂座	極樂村 八重襷	伊井、村田、深澤
十一月	中洲眞砂座	想夫憐	伊井、村田、深澤、木村
	春木町本郷座	少華族（德田秋聲作）	高田、河合、藤澤、佐藤、木下、小織
	春木町本郷座	己が罪	高田、河下、藤澤、佐藤、木下、小織
十二月	三崎町東京座	己が罪 片親（中村吉藏作）	芝翫 高田、河合、藤澤、佐藤、木下、小織
	中洲眞砂座	名人長次 手習兒家	伊井、村田、深澤、木村、
明治三十九年 一月	（此年文藝協會起る） 春木町本郷座	伯爵夫人（田口掬汀作）	高田、河合、藤澤、佐藤、木村周平、木下、深澤

二月	中洲眞砂座	栗田口霑口笛 東鄕大將(柳川春葉作)	伊井、村田、井上、馬十、木村
	久松町明治座	モンナヷンナ 喜劇玉手箱(太郎冠者作)	川上、藤澤、貞奴、柴田、山本
	中洲眞砂座	夏子	伊井、村田、井上、馬十、木村
三月十日	春木町本鄕座	野火(岩崎舜花作)	高田、藤澤、河合、伊井、木村、深澤、木下、佐藤
	中洲眞砂座	母の心(柳川春葉作)	村田、福島、井上
四月	春木町本鄕座	橘英男(楓村居士作)	高田、河合、木下、藤澤、
四月	中洲眞砂座	紀文大盡 ハゲアタマ	伊井、村田、井上、馬十、木村、福島
六月	春木町本鄕座	やどり木(柳川春葉作)	高田、河合、藤澤、喜多村、兒島、佐藤、深澤、木下
	中洲眞砂座	サンフランシスコ(リットン作)(畠山古瓶譯)	伊井、村田、井上、木村、馬十
	春木町本鄕座	捨小舟	高田、河合、藤澤、喜多村、佐藤、深澤、兒島、木下

八月	中洲眞砂座	破戒(島崎藤村作) 博多小女郎浪枕 放心家	伊井、村田、木村、馬十、井上
	中洲眞砂座	子煩惱(伊原靑々園作) サフォー	伊井、村田、木村、馬十
九月八日	木挽町歌舞伎座	玉匣兩浦島(坪內逍遙作) 思案の外(太郎冠者作)	伊井、河合、村田
	三崎町東京座	海水浴 福神の戯	山口定雄一座
	春木町本鄕座	無名氏(森山思軒作)	高田、河合、藤澤、喜多村、深澤、兒島、木下、五味
十月	久松町明治座	祖國(サルドウ作) 新オセロ(太郎冠者作)	川上、藤澤、河合
十一月	春木町本鄕座	俠艶錄(佐藤紅綠作)	高田、河合、藤澤、喜多村、兒島、木村周平、靑木
	中洲眞砂座	鹽原多助 我輩は猫である	伊井、木村、福島、馬十
十二月	春木町本鄕座	又意外 河庄	藤澤、喜多村、河合、高田、深澤、木下

明治四十年 一月	中州眞砂座	かくれ蓑	伊井、福島、木村、馬十
	新富町新富座	通夜物語	伊井、河合
	春木町本郷座	新ハムレット	高田、喜多村、佐藤、五味、深澤、藤澤、兒島、木下
	二長町市村座	妻折笠	鳥居梧樓一座
	新富町新富座	つや物語 寫眞	伊井、河合
	中洲眞砂座	筆子	水野、村田
二月	久松町明治座	無花果(中村吉藏作) びつくり箱(飯田旗軒作)	伊井、河合
	二長町市村座	片男波	鳥居一座
	春木村本郷座	花の夢	高田、喜多村、藤澤、兒島、木下、佐藤、青木、五味
	中洲眞砂座	業企大 辨慶 肉彈	水野、村田
三月	春木町本郷座	雲のひゞき	高田、喜多村、藤澤、兒島、木下、佐藤、青木、五味

四月	新富町 新富座	堀川浪の鼓 瀧の白糸	伊井、河合、井上
	中洲 眞砂座	畜生腹 野村三千三	水野、佐藤、桃木
五月	春木町 本郷座	松風村雨（渡邊霞亭原作 佐藤紅緑脚色）	高田、喜多村、藤澤、兒島、
	新富町 新富座	乳姉妹 つまみ鹽（中村雪溪作）	伊井、河合、井上
	二長町 市村座	夫婦杉	鳥居一座
六月	新富町 新富座	黄薔薇 女天下（太郎冠者作）	伊井、河合、井上、深澤、木村
七月	春木町 本郷座	風流線	喜多村、藤澤、佐藤、兒島、中野、青木
七月十四日	新富町 新富座	熱血（田口掬汀作） 當り的	伊井、河合、井上、深澤、木村
八月	三崎町 東京座	こぶし	延二郎、佐藤、青木
九月	久松町 明治座	かげひなた 鈴ケ森	伊井、河井、福島、深澤、井上、木村、藤井

	春木町本郷座	大農	高田、喜多村、木下、水野、五味、佐藤、大野、藤澤
	中洲眞砂座	辰巳巷談 夏小袖	中野、若水、山崎
十月	春木町本郷座	想夫憐	高田、藤澤、喜多村、木下、佐藤
	新富町新富座	己が罪 正氣の狂人	伊井、河合、木村、深澤、井上
十一月	新富町新富座	女夫波 子は鎹	伊井、河合、井上、深澤、木村
十二月	二長町市村座	狐の番 みだれ笹 古武士	（山口定雄追善劇） 河合、水野、定子、伊井、
十二月五日	新富町新富座	性は善 魁源平躑躅 八重襷	伊井、河合、井上
明治四十一年 一月	三崎町東京座	東風物語（佐藤紅綠作）	藤澤、喜多村、河合、伊井、高田、木下、深澤

	新富町新富座	賓息了 梅忠	村田、井上、木村、芝鶴
二月	三崎町東京座	春の歌（佐藤紅綠作）	喜多村、藤澤、伊井、高田、河合、水野、木下、深澤
三月	新富町新富座	新朝顔日記（青々園作） 河庄 千人針	伊井、喜多村、村田、水野、木村
三月十五日	三崎町東京座	新生涯 戀の病	高田、河合、藤澤、木下
四月	春木町本郷座	不如歸 山上山	伊井、喜多村、村田、水野
五月	三崎町東京座	月魄	高田、河合、秋月、木下、藤澤、深澤
	春木町本郷座	女の望（柳川春葉作） 松一木（山崎紫紅作）	伊井、喜多村、村田、秀調、水野
六月	久松町明治座	みちか夜 婚禮	高田、河合、藤澤、秋月

	新富町新富座	變化傘(小林蹴月作) 黄金大王(蕉雨作)	伊井、喜多村、村田、水野、秀調
七月	三崎町東京座	波がしら	高田、河合、秋月、藤澤
八月	三崎町東京座	觀音岩(川上眉山作)	秋月、木下
	新富町新富座	遺言(土肥春曙作) 木村長門守(澁柿園作) 海潮音(長谷川時雨作) 源冶店 渡邊	伊井、喜多村 村田、秀調、水野
九月	春木町本郷座	日本の戀(田口掬汀作) 啞の旅行	貞奴、深澤、山本、佐藤
十月	三崎町東京座	潮(佐藤紅緑作)	高田、河合、藤澤、秋月、木下
	新富町新富座	想夫憐 婦系圖 巡禮競爭	伊井、喜多村、村田、水野、秀調
十一月	三崎町東京座	絲の糸(青々園作)	高田、河合、藤澤、秋月、木下

	春木町本郷座	怪光(田口掬汀作) 未亡人(中内蝶二作)	伊井、喜多村、村田
十二月	春木町本郷座	想夫憐 女天下	高田、伊井、喜多村、河合、村田、藤澤、水野、木下、深澤
明治四十二年 一月	三崎町東京座	琵琶歌 八重襷	小織、秋月、丸山
	春木町本郷座	雪子夫人 當流鉢の木(山崎紫紅作)	伊井、喜多村、村田、秀調
二月	三崎町東京座	不如帰 子は鎹	小織、秋月、丸山
	春木町本郷座	乳姉妹 隣合	藤澤、秀調、木下
三月	三崎町東京座	金色夜叉 俠艶録	後藤、中村、九女八
	春木町本郷座	陽炎(佐藤紅緑作)	高田、河合、藤澤
四月	春木町本郷座	人の親(佐藤紅緑作) 孔明(山崎紫紅作) 見合(柳川春葉作)	高田、河合、藤澤

月	劇場	狂言	出演
五月	三崎町 東京座	巳が罪 深山の美人	後藤、井上
	新富町 新富座	金色夜叉 鏡引 速成俳優學校	伊井、村田、井上、木村、延太郎
	大阪 角座	不如歸 女天下	喜多村、伊井、井上
六月	久松町 明治座	間諜兵 藝妓と武士	貞奴、深澤、後藤
六月一日	新富町 新富座	逸見貞藏（柳川春葉作） 假面（森鷗外作）	伊井、村田、井上、木村、延太郎
七月	春木町 本郷座	潮（佐藤紅綠作）	高田、河合、藤澤
	有樂町 有樂座	新桂川 二人天才	伊井、村田、井上、木村
八月	有樂町 有樂座	お茶一杯 卍	伊井、村田、井上、木村
九月、	有樂町 有樂座	空中飛行機	伊井、村田、井上、木村
十月	有樂町 有樂座	瀧上玉	伊井、村田、井上、木村

十一月	春木町本郷座	ボンドマン 楠公 座敷開き	川上、伊井、村田、藤澤
十二月	春木町本郷座	想夫憐	高田、伊井、喜多村、河合
明治四十三年 一月	春木町本郷座	オセロ 箱根の正月（中内蝶二作）	川上、貞奴、藤澤、佐藤
三月	春木町本郷座	寄生木 曾我 祇園の夜櫻	伊井、喜多村、佐藤、井上、青木、木村
四月	春木町本郷座	白鷺 新野崎村	伊井、喜多村、佐藤、井上、青木、木村
五月	三崎町東京座	牧師の家（中村春雨作） 親（井出蕉雨作）	新社會劇團
六月	新富町新富座	靈火（小島孤舟作）	河合、高田、喜多村、秋月、小織
	春木町本郷座	御安堵	伊井、佐藤、井上、青木、木村

七月	新富町　新富座	女 女天下 南極探検	河合、伊井、井上、藤澤、木村
九月	春木町　本郷座	琵琶歌	高田、伊井、喜多村
十月	春木町　本郷座	勝利（土肥春曙作） 彼（中村春雨作）	新社會劇團
十一月	春木町　本郷座	高野の義人	高田、河合、喜多村、藤澤、佐藤、伊井
明治四十四年 一月	春木町　本郷座	天風組 成功疑ひなし	川上、貞奴、伊井、藤澤、村田
二月	春木町　本郷座	不如歸 上杉謙信 冥途の飛脚	伊井、喜多村、藤澤、村田
三月	春木町　本郷座	お妻八郎兵衛 金婚式	伊井、喜多村、藤澤、村田
四月	丸の内　帝國劇場	椿姫 最愛の妻	高田、伊井、河合、藤澤、村田

六月	春木町本郷座	竹雨草志	高田、喜多村、藤澤、小織、秋月、靜間、深澤
七月	新富町新富座	渦 ルイズの最後 夫婦相合傘	河合、伊井、村田、井上、深澤
八月	春木町本郷座	暗の都 ひがみ	藤澤、靜間、小織、秋月、山田
九月	新富町新富座	俠艶録 血統(中村春雨作)	伊井、河合、村田
十一月	春木町本郷座	邯鄲城(松居松葉作) お七(岡本綺堂作) 筐	高田、河合、藤澤、井上
明治四十五年 一月	春木町本郷座	孤島の兄弟(松居松葉作) 大久保彦左衛門(山崎紫紅) 馬鹿だね 艶物語 人の親(佐藤紅緑作)	伊井、河合、藤澤、村田、深澤、井上
二月	久松町明治座	娘節用 稽古扇 大變々々々々	伊井、河合、喜多村、村田、井上、深澤

三月	春木町本郷座	縁（小島孤舟作） 意氣地 八重襷	伊井、河合、村田、井上、深澤
四月	春木町本郷座	妻馬（佐藤紅綠作） 佛御前 湖畔の家（小島孤舟作） 深山の美人	高田、村田、深澤、秋月、小織、貞奴、藤澤、伊井
五月	新富町新富座	醫使者 南地心中 金のなる木	河合、伊井、井上、福島、深澤、丸山
七月	久松町明治座	己が罪 夏草物語（小島孤舟作）	伊井、河合 小織、井上
大正元年 八月	淺草宮戸座	友（夜の部） 女園七（同）	柴田、五味、木下、石川、 吉岡、中野
	中洲眞砂座	馬鹿野郎 木やり唄	山崎、久保田、木下鐵、川崎、高梨
	淺草常盤座	明治の鹽原（晝の部） 湖畔の家（同） 性は善（夜の部） 血縁（同）	水野、若水、鳥居、川崎、 吉澤、伊藤、千崎

九月	淺草常盤座	湖畔の家(晝の部) 笹舟(夜の部)	芳三郎、柴田、木下、柴田、 五味、中野
	中洲眞砂座	羽衣草 運と大當り	山崎、久保田、木下錢、川 崎、高梨
	向柳原柳盛座	後のおらんだお蝶 羅漢堂 會社員	森、池田、柳川
	淺草常盤座	觀音巖(晝の部) 奇縁(同) 夜の鶴(夜の部) 明治の初年(同)	水野、若水、鳥居
十月	深川深川座	不如歸 女天下	福島、藤井、丸山、松本、 月岡
十一月	久松町明治座	美術家 報恩美談 願の石 慾	深澤、井上、伊井、村田
大正二年一月	久松町明治座	正直屑屋 妹背山御殿 保險ぎらひ(太郎冠者作)	村田、伊井、木下、井上、 木村

一月	淺草宮戸座	正直屑屋(夜の部) 梅忠	柴田、木下、五味、中野
一月	中洲眞砂座	櫻吹雪 新口村 縋くづし	水野、山崎、久保田、紀久八
二月	有樂町有樂座	思ひ出	文藝協會
二月	淺草宮戸座	吹雪(夜の部) 紙治(同)	柴田、木下、五味、中野
二月	中洲眞砂座	琵琶歌 吹雪	永野、山崎、久保田
二月	向柳原柳盛座	後の話天吉松	森、池田
三月	木挽町歌舞伎座	燒野	高田、藤澤、河合、喜多村、伊井、小織、木下
四月	久松町明治座	不如歸 緋縮緬卯月紅葉 戀の病	井上、木下、深澤、伊井、福島
四月	淺草宮戸座	さくら月夜(夜の部) 三幅對極付床柱(夜の部)	柴田、五味、中野

四月	三崎町三崎座	人の花 鏽作の鎌腹 ビックリ袋	水野一派
四月	中洲眞砂座	文覺勸進帳 金波銀波	山崎、森、木下、若水
五月	久松町明治座	阿部一族 五月鯉 自働くり毛	伊井、深澤、木下、福島、藤井
	中洲眞砂座	花あやめ	森、若水
	向柳原柳盛座	通夜物語 播隨院長兵衞	水野好美一座
	淺草宮戸座	蝶お由(晝の部) 青葉曇(夜の部)	柴田、五味、中野
六月	淺草宮戸座	百鬼夜行(夜の部)	柴相、五味、中野
	新富町新富座	大將の家	秋月、喜多村、高田、村田、藤澤
七月	新富町新富座	想夫憐 池大雅 思惑	村田、藤澤、小織、森

	淺草宮戸座	弘法大次郎 武士の情	柴田、五味、中野
	中洲眞砂座	五人男	森、若水
八月	三崎町三崎座	長恨歌 漣ゝ大當り 潮田又之丞 櫻木稲荷	水野、紀久八
九月	久松町明治座	女一代	伊井、深澤、木下、福島
	三崎町三崎座	女夫蔦 古釣瓶 野村三廿三 新野崎村	水野、紀久八
十月	丸の内帝國劇場	マクベスの稽古 茶を造る家 エレクトラ 女形	公衆劇團
	新富町新富座	生さぬ仲 業平餅	猿之助、又五郎、壽美蔵、松蔦、秀調

年月	劇場	外題	俳優
大正三年	久松町明治座	母の心鏡	伊井、井上、深澤、五味、木下
一月	久松町明治座	東風物語	井上、伊井、木下
	新富座	月魄	藤澤、秋月、小織、伊井、河合、高田、喜多村
二月	久松町明治座	マダムオブ、カメリヤ ちぎり伊勢屋 男見るべからず	伊井、井上、貞奴
三月	新富町新富座	渦巻	伊井、藤澤、高田、喜多村、河合
	二長町市村座	巖窟王 憲兵の娘 三十圓	井上、木下、五味、福島
四月	春木町本郷座	富士の麓 暮の二十一日 名畫	公衆劇團
六月	新富町新富座	かたおもひ	高田、伊井、井上、喜多村、木下、深澤、小織

七月	久松町明治座	ボンドマン	井上
	三崎町東京座	不如歸 桂小五郎	佐藤歲三一派
九月	久松町明治座	婦系圖 敵軍來れり	伊井、河合
十月	春木町本郷座	光の巷	高田、河合、木下。井上、深澤、五味
十一月	久松町明治座	俠艶鉄 第一人者 中直利	喜多村、伊井、井上
大正四年一月	久松町明治座	片思ひ	伊井、木下、秋月、静間
	新富町新富座	實花あだ花	高田、河合、喜多村
三月	春木町本郷座	日本橋	伊井、喜多村、小織
五月	春木町本郷座	目黒巷談 サロメ お國と山三	河合、井上、深澤、貞[illegible]、木下、後藤
六月	新富町新富座	小ゆき 河庄	喜多村、伊井、芝鶴、[illegible]郎、蓮女

九月	新富町新富座	今宮心中 稚兒姿一休禪師 朝霧小唄	河合、伊井、木下
十月	春木町本郷座	不如歸 隣の子	伊井、河合
	久松町明治座	つや物語 子は鎹	河合、伊井
	三崎町東京座	谷底(佐藤紅綠作)	武田
十一月	新富町新富座	瀧の白糸 文七元結 二つの心	喜多村、秋月 川上
十二月	春木町本郷座	綠の糸 文七元結	伊井、河合
大正五年 一月一日	春木町本郷座	友の家 心の闇	伊井、河合、木村
二月	赤坂演技座	疑 河庄	村田一派

三月	久松町明治座	うきよ	伊井、河合、木村
四月	春木町本郷座	勝鬨 夏小袖	河合、伊井、木村
五月	木挽町歌舞伎座	陸奥物語	伊井、河合、木村、福島
七月	春木町本郷座	青海波 夜叉ヶ池	伊井、河合
九月	久松町明治座	秋の夜話	伊井、河合
	春木町本郷座	宗右衛門町の夜 舞鶴巷談	小織、葉
十一月	新富町新富座	貫一と滿枝	伊井、河合
大正六年 一月	新富町新富座	二人靜	伊井、河合、喜多村
二月	木挽町歌舞伎座	生さぬ仲（柳川春葉作）	伊井、河合、喜多村
四月	久松町明治座	娘氣質	河合、喜多村、伊井
六月	木挽町歌舞伎座	誘惑	伊井、喜多村
七月	久松町明治座	女一代 鈴ヶ森	伊井、喜多村

九月	新富町 新富座	霞場 三組盃	伊井、河合、喜多村、東儀、水口
十月	久松町 明治座	アイダ 雲の別れ路	貞奴、伊井、河合、喜多村、東儀
十一月	春木町 本郷座	生さぬ仲 雪の響 深山の美人	井上
十二月	横濱 横濱座	新ハムレット 戀の病 不如歸 貫一	井上
大正七年一月	新富町 新富座	七色珊瑚	伊井、河合、喜多村
三月十四日	淺草 吾妻座	金儲けの器械 不如歸	井上、木下、深澤
	木挽町 歌舞伎座	不如歸 通夜物語	伊井、河合、喜多村
五月	新富座	黒髪物語 新梅暦	伊井、河合、喜多村

	本郷座	二人孤兒 親の慈悲	木下、深澤
六月	木挽町歌舞伎座	うき身 にごり江	河合、喜多村
九月五日	木挽町歌舞伎座	沈鐘 神主の娘 唖の女房もてる男	河合、須磨子
十月	久松町明治座	故郷の山	伊井、河合、喜多村
十一月	新富町新富座	不知火 追剝	井上、木下、深澤、後藤
十二月	久松町明治座	女 太閤と淀君 霜夜鐘十字辻筮	伊井、河合、喜多村
大正八年 一月一日	新富町新富座	女の生命	河合、喜多村、伊井、東儀、水口
一月十四日	春木町本郷座	女の生命	新星劇團
	久松町明治座	路傍の花 地藏教由來	井上、木下、木村、深澤、武田

四月	新富町　新富座	乳姉妹	伊井、河合、喜多村
	横濱　横濱座	女の生命	伊井、河合、喜多村
五月九日	久松町　明治座	酒中日記 藤の咲く頃	井上
六月	新富町　新富座	夜明前	伊井、河合、喜多村
七月五日	久松町　明治座	一本杉 女天下	井上、木下、木村、深澤、 村田
十月	久松町　明治座	焔の舞(眞山青果作)	伊井、河合、喜多村、木口
十一月	新富町　新富座	己が罪 假名屋小梅	河合、喜多村
十二月	横濱　横濱座	己が罪 假名屋小梅	河合、喜多村
大正九年 一月一日	新富町　新富座	春の村 薩摩の紅梅 最愛の妻	河合、喜多村 伊井
二月一日	久松町　明治座	生命の冠 人來鳥(瀬戸英一作)	井上、木下、花柳、岩田、 武田、木村、深澤

三月八日	木挽町歌舞伎座	白鳥の歌	伊井、河合、喜多村
四月十三日	新富町新富座	雲の別れ路 樽屋おせん	伊井、喜多村、村田
五月十三日	久松町明治座	不死鳥 まむし酒	河合、深澤
	横濱横濱座	雲の別れ路 鈴ケ森	伊井、喜多村 村田
七月十四日	久松町明治座	銀籠	伊井、喜多村、村田
九月七日	木挽町歌舞伎座	戀ごろも	伊井、喜多村、村田
十月一日	久松町明治座	美かりし戀 女魔術師	河合、一座
	横濱横濱座	村ごろも	伊井、喜多村
	木挽町歌舞伎座	雪 眞珠夫人	伊井、喜多村
十二月二十七日	横濱横濱座	雪 眞珠夫人	伊井、喜多村

大正十年 一月一日	新富町 新富座	幸福 極樂	伊井、村田、喜多村
二月一日	久松町 明治座	繪姿 紅燈新話	河合、木下、小織、英
三月五日	二長町 市村座	間宮一家 婦系圖 花の夜話	伊井、喜多村、村田、深澤
三月九日	横濱 横濱座	繪姿 紅燈新話	河合、小織、木下
五月一日	横濱 横濱劇場	不如歸 黄楊の櫛 能因法師	伊井、喜多村
	新富町 新富座	鎌倉心中 夢の浮橋 小猿七之助	伊井、河合、小織、木下
六月五日	木挽町 歌舞伎座	思ひ妻	伊井、喜多村、河合、小織、木下

	有楽町　有楽座	長男の權 濁り江 謀反の血 三和村	村田、菊江、東儀、加藤、山田
八月五日	有楽町　有楽座	牧場の兄弟 夜の鳥	新劇座
九月七日	木挽町　歌舞伎座	青春の夢 第一人者 田舎源氏	伊井、河合、喜多村、井上
十月二日	向柳原　中央劇場	婚禮の夜 嬰兒殺し	木下吉之助一派
十一月二日	久松町　明治座	死線を越えて 城 中橋お源	梅島、小堀、河合、喜多村 伊井
大正十一年 二月四日	春木町　本郷座	海の極みまで	伊井、河合、喜多村
四月三日	春木町　本郷座	白蓮紅蓮 ゆく春	伊井、喜多村、井上

五月二十六日	有楽町 有楽座	塵境 雨空 清十郎	（新劇座）花柳、小堀、藤村
六月二日	春木町 本郷座	新譯椿姫 大尉の娘 惡魔の鞭	伊井、河合、喜多村、井上
八月三日	春木町 本郷座	訓導の死 夕顔の巻（瀬戸英一作）	河合、東儀、花柳、藤村、小堀、梅島
十月四日	久松町 明治座	慈善小屋 秋の夜話 二つの世界	伊井、河合、喜多村、福井
十一月	春木町 本郷座	織匠の家 階級 無頼漢	伊井、河合、梅島、花柳、藤村、喜多村
大正十二年 二月五日	春木町 本郷座	二つの道	伊井、河合、喜多村
四月	春木町 本郷座	8—3 清水次郎長	伊井、村田、花柳、藤村
五月	春木町 本郷座	三人の母 續清水次郎長	伊井、河合、喜多村、村田

六月	横濱 横濱座	生さぬ仲	喜多村、大東、藤村、花柳
		清水次郎長	伊井
八月	丸の内 帝國劇場	秘密をめぐる人々	伊井、河合、喜多村
十月	神樂坂 牛込演藝場	大尉の娘	花柳、藤村、松本
		吃又の死	
大正十三年			
三月四日	麻布 南座	彼女の運命(晝の部)	河井、伊井
		清水次郎長(夜の部)	
		淺草寺境内	
	麻布 南座	無花果(晝の部)	河合、伊井
		生靈(夜の部)	
		つや物語	
五月十一日	淺草 常盤座	自來也	河合一座
		假名屋小梅	
	淺草 常盤座	息子	同
		繪姿	
六月一日	淺草 松竹座	魔笛(晝の部)	伊井・喜多村
		婦系圖(夜の部)	
		秋葉の火祭	

月日	劇場	外題	一座
	二長町市村座	恩讐の彼方に ルイズの最後 悲太郎 今戸心中	河合、猿之助
	報知講堂	小しんと焉馬 宵闇 喫煙を禁ず	喜多村研究劇
七月一日	三崎町神田劇場	榛名夜嵐 源兵衞一家 佳小五郎	佐藤、茅野
	淺草公園劇場	當世五人男 妲妃のお百	河合武雄一派
	淺草公園劇場	己が罪 平手造酒 夕顏の巻	河合、山田九州男
十一月	淺草松竹座	楓散る時(晝の部) 洋妾の父 春の雪解 カルメン(夜の部) 清水定吉	河合、井上、伊井

大正十四年一月一日	春木町本郷座	朝日丸 戀慕地獄	伊井、河合、井上
	有楽町邦楽座	三人の母 ユーデット 蔦松葉お葉	河合一派
三月三日	淺草松竹座	彰義隊遺聞(晝の部) 金色夜叉 舞鶴心中(夜の部)	梅島、藤村、花柳、木村、村田
四月三日	春木町本郷座	天竺物語 歸らざりせば 秋葉の火祭	伊井、小堀、英
九月	淺草松竹座	戀妻(晝の部) 淺草寺境內 想思草(夜の部) 貞操 新四谷怪談	河合、梅島

九月五日	有楽町邦楽座	飢渇 死の接吻 作兵衛 西瓜の番人	井上、水谷、村田、栄子
九月十六日	浅草松竹座	戀妻(晝の部) 稲葉往生 秋の夜(夜の部) 愛の地獄	河合、梅島
十二月一日	浅草松竹座	更生(晝の部) 小梅と由兵衛 子は鎹 夕霧(夜の部) 都會の影 清水次郎長	伊井、河合
大正十五年 一月三十一日	浅草公園劇場	一本杉 出雲崎の遊女 假名屋小梅	河合、小堀
二月十五日	浅草公園劇場	馬賊藝者 蝙蝠安	河合、小堀

三月一日	淺草觀音劇場	俠客仁義 眞晝 不如歸	伊井、小織
四月一日	二長町市村座	人間味 女郎兵衞 紅燈新語 都鳥廓白浪	河合、源之助
四月二十九日	淺草觀音劇場	色街小話 兄貴 酒 淸水次郎長	河合、小織
五月十四日	淺草觀音劇場	盜賊戲談 生さぬ仲	伊井、小織
六月三日	淺草松竹座	都會片形 犬 手習子 布晒 黑船	井上、正邦、佐々木、栗島

	淺草松竹座	夏の日の戀 子 三保の松 礫茂左衛門	井上、正邦、佐々木、栗島
七月十日	淺草松竹座	東京の寢る時 殉死 鷺娘 兒故の闇 ある敵討	井上、柳さく子
九月十一日	春木町本郷座	或畫室の主 汐汲 奇蹟 大尉の娘 直助と伊右衛門	井上、小堀、山田、水谷
十月一日	淺草觀音劇場	眞景累ヶ淵 お登代 子は鎹	伊井一派
	淺草觀音劇場	御守殿お辰 證據 よ組の伊三郎	伊井一派

十一月六日	淺草觀音劇場	○○正體 惡靈	伊井一派
	淺草觀音劇場	又意外 相似 歸らざりせば	伊井一派
十二月一日	淺草松竹座	地下室(晝の部) 一本杉 慈悲心鳥 江戸つ子の死(夜の部) 生命の冠 世に出ぬ豪傑	井上、花柳、藤村
昭和二年 二月	春木町本鄕座	平將門 親友 お七	井上、小堀、木村
	丸の內帝國劇場	獅子に喰はれる女	伊井、幸四郎、勘彌、律子(新舊合同團の內)
四月	淺草松竹座	黄楊の櫛(晝の部) 待乳心中(夜の部)	河合、壽三郎、小太夫、八百藏(新舊合同團の內)
五月	丸の內帝國劇場	都島原	伊井、河合、女優

六月十八日	淺草松竹座	地雷火組 三右衞門の賣出し つゆ空 女優宣傳業	（松竹新劇團）
七月	淺草松竹座	白虎隊 佐平功名錄 仇し仇浪 結婚後の生活	（松竹新劇團）
八月一日	京橋新橋演舞場	お艶殺し 隣家の夫婦 寶を釣る男	伊井、河合、喜多村
九月一日	淺草松竹座	大尉の娘 時勢は移る 新牡丹燈籠 仇討人	（松竹新劇團）
九月三日	春木町本郷座	紅蜘蛛奇譚 黒牢丹社 新四谷怪談	河合、喜多村、石川、村田 藤野

	丸の內帝國劇場	月謠荻江一節 動員挿話 國定忠次御用	伊井、松助、勘彌、女優 （新舊合同劇の內）
	淺草松竹座	續地雷火組 わくら葉 仇討二重譚 若き女の死	（松竹新劇團）
十月一日	淺草松竹座	砂繪呪縛 動員挿話 庚申月夜話 花街おぼへ帳	（松竹新劇團）
十月十五日	淺草松竹座	續砂繪呪縛 永遠の偶像 戀の緋鹿子	（松竹新劇團）
十月一日	淺草公園劇場	砂繪呪縛 お艶物語 婦系圖 戀の受難	伊井、河合、喜多村

十一月一日	淺草松竹座	清水一角 亭主 金色夜叉	(松竹新劇團)
	淺草松竹座	落花無情 我が家 勢獅子 舞臺に立つ妻 新門と淺草小僧	(松竹新劇團)
十二月三日	淺草松竹座	阿蘭陀船 俠艷錄 延命院日當	(松竹新劇團)
昭和三年一月一日	淺草松竹座	變咲辨天菊之助 春の夜話 女天下 汐汲	(松竹新劇團)
一月十四日	淺草松竹座	小猿七之助 給料 作兵衛 五色の綾 落人	(松竹新劇團)

二月一日	淺草松竹座	雪のふる夜 次郎吉捕つた 乳に飼はるゝ獸 驟雨 おさだの仇討	(松竹新劇團)
	淺草松竹座	舞臺の人々 金を得た話 息子 心中後日聞書	(松竹新劇團)
三月一日	淺草松竹座	清水次郎長 清作の妻 新歸朝者 行く水の流れ	(松竹新劇團)
	淺草松竹座	睦倉重四郎 不如歸 男達ばやり 執心の鬼	(松竹新劇團)
四月一日	淺草松竹座	嫉妬 捨身の大石 嘲笑 柏屋夏吉	伊井、喜多村

四月十五日	淺草松竹座	勝と負 俠艶錄 スリの家	伊井、喜多村、筑波
五月三日	淺草松竹座	今年竪 眠駱駝物語 谷底 樋口角兵衛	（松竹新劇團）
	二長町市村座	御守殿お辰 強盗 生さぬ仲	伊井、河合、喜多村
	淺草松竹座	陸奥物語 隣りの花 愛憎亂麻	（松竹新劇團）
六月一日	淺草松竹座	塵境 上野戰爭 區劃整理 巷談離釣瓶	（松竹新劇團）

	浅草松竹座	戀ごころも 島蔵と仙太 山芋秘譚 相馬の金さん	（松竹新劇團）
七月一日	久松町明治座	研辰の討れ 驚 怪談小車双紙（瀬戸英一作） かつぽれ	猿之助、友右衛門、喜多村
八月一日	京橋新橋演舞場	無貪清風 妻 原敬 舶來巾着切	伊井、小堀、加藤、嘉久子 菊江
九月一日	春木町本郷座	眞景累ヶ淵	喜多村、花柳、小堀、小太夫
十月一日	春木町本郷座	何が彼女をさうさせたか 兩國の秋 私のパパさん	喜多村、小堀、花柳、水谷
十月一日	二長町市村座	水戸黄門漫遊記 祐天吉松	訥子、小太夫、伊井

十一月一日	二長町市村座	不如歸 江島屋物語	伊井、河合、喜多村、小堀 花柳、水谷
十二月一日	春木町本郷座	昭和忠臣藏	伊井、河合、喜多村、花柳 小堀、水谷
昭和四年 一月一日	二長町市村座	續水戸黄門漫遊記 泡 梅ごよみ	河坂・喜多村、伊井、水谷 花柳、小堀、梅島、訥子
二月一日	二長町市村座	城山落城の日 長閑なる反目 金色夜叉 心中雪夜話	伊井、河合、喜多村、梅島 花柳、小堀、英、水谷
三月一日	二長町市村座	乃木將軍 動物園近く 通夜物語 受難華	伊井・喜多村、花柳、英、 小堀、水谷、梅島
三月三日	四谷山手劇場	農民佐倉宗五郎 蔦松葉のお葉	河合、勘彌 （新舊合同劇の內）

四月一日	二長町 市村座	富岡先生 百三十二番の貸家 公園裏 侠艶録	伊井、喜多村、河合、井上 花柳、英、小堀、梅島
五月一日	二長町 市村座	灰燼 カルメン 婦系図 岡辰押切帳	伊井、喜多村、花柳、小堀 梅島、英、水谷

編輯校訂
責任
吉田甲子太郎
清水義政
佐藤十三郎

日本戯曲全集・第三十八卷
現代篇第六輯・第十三回配本

昭和四年五月七日印刷
昭和四年五月十日發行
（非賣品）

編纂　春陽堂編輯部
發行者　和田利彦
印刷者　島源四郎
製本者　高崎鐵五郎
東京市日本橋區通三丁目八
發行所　春陽堂
電話日本橋　三六五一
　　　　　　七四一一
振替東京　一六一八七八
東京市小石川區諏訪町五六常磐印刷所印刷



